明治二十五年二月十八日初版印刷
明治二十五年二月二十日初版發行
明治三十八年十月十日再版印刷
明治三十八年十月十五日再版發行

百家說林正編上卷

著作權所有

編輯兼發行者　東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地　合資會社吉川弘文館
右代表者　吉川半七

印刷者　東京市京橋區新榮町五丁目三番地　本間季男

印刷所　東京市京橋區新榮町五丁目三番地　東京活版株式會社

發行所　東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地　合資會社吉川弘文館

百家說林上卷 畢

しき筆をとられたれば。小説家もからきていすべし

花田首しるす

難後言終

里につねいふ所のドウシンス。カウシンスなどの俗言のまゝにかきたるものにて。かの梅がえ物語の原文。平假名盛衰記といふ浄るり本よりも。今一段俗なるものなれば。これを雅文に譯さんことは。誠とかたしともかたきわざにて。當時國學先生とよばるる人たちの筆にも。さらに及ぶべきことにはあらずなむ。此外。猶かの五人のうへをいへるにも。辨論すべきことは多かれども。わがあづからざる所なれば。うちおきぬ。さて卷尾の詞に。酒を呑ませねば。醉ひはせぬがとあれども、予が眼より見る時は。たゞ一向の醉狂人にて。かのみづから御免候へたあい〱といへるぞ。げによくあたりてはありける。さておのれさきにかの都の手ぶりを。ある人に見せけるに。いたく驚きて。實に文章におきては。天下に敵なかるへし。たゞし表題を都の手ぶりと名づけられたるは不當なり。美也古は宮所にて。皇朝にては。天子の御座地ならではいはざることなりといはれしは。げにさることゝぞおもはる。この論者などは。かゝる眼目のところにはえこゝろつかず。たゞ疵なきを疵とし。非ならざるを非として。論へるゆゑに。その淺學無識のほどしられて。氣の毒千萬なり。しかれども。かゝるもみないまの江戸の學者たちの風なれば。われはたゞこの論者を慨(ウレタ)むのみにはあらずなむ

戯れにしりうごといふ五もじを句のかみにおきて

しりもせで利口ぶりするうたてさよ
　これぞ世にいふとんだ馬鹿もの

ことしかむな月の末つかた。ふと風のこゝちにてふしけるほど。わが友花園の春香。しりうごといふ三卷の冊子をもてきて見せけるに。卷中吾師翁のことをいたく誹りたる條の。見るにたへざるまゝに。あながちに枕をもたげて。しば〱うちしはぶきつゝ。かくはかいしるせるになむ

阿波國のしれ人

石川門人

師翁のにごりをそゝがんとて。石川門人かく正

きたる詞に何れに滑稽ありや。五老翁のかゝれたるは。長きも短かきも。悉滑稽ならざるはなく。しかも詞雅にして。實にかの親長卿も舌を卷き給ふべき筆力なり。試にかの夜蕎麥賣目。かねうり居。合拔等の詞をよみて見よ。たれかくちをあきて。笑はざるものあるべき。これ則滑稽にあらずして何ぞや。實に此翁の長ぜる所は滑稽にあり。かくあまりに滑稽を好み給へるゆゑにこそ。生涯狂歌師にて終り給ひしなれ。近ごろの學者たちのごとく。自高く居て。專ら名をもとむることを好み給はゞ。いかでか老にいたるまで。たゞ宿屋の飯盛にては居給ふべき。また蠹のすみか物がたり。都の手ぶりなどは。たゞ一時の狂文にて。論ずるにたらずとは何ことぞや。翁こそ實に一時の戯文にて。さしもこゝろをいれられたるものにはあらざめれど。世の倭文章(ヤマトフミ)かゝんことを好めるともからなどのためには。最師とすべく。法とすべき名文にて。天下その倫を得ざる所になむ。但此翁のふかく源氏を好まれしことは。いふもさらなれど。それにつぎては。宇治拾遺物がたりの古き俗語のまゝにかきて。最滑稽なる文を愛せられて。つねに自ものせらるゝ文章などにも。やゝもすれば此物がたりの詞をとり用ひられたり。しみのすみか物がたり。則此文體をうつされたるにて。著聞集以來六百餘年。人のこゝろづかざる所にぞありける。また都の手ぶりは。たゞ今眼のまへにある所のひたぶるの鄙俚猥雜なる事のみにて。雅文にはいとかきとりがたきことゝなるを。かくまで自在に譯(ウツ)されたること。此翁にあらざればあたはざる所にして。其倭文章に卓(スグレ)絶給へること。たゞ此一書を見てもしらるゝをや。かゝれば。世に文章を以て。肘をはり鼻をおごめかす人々も。此翁のためには。鉾先をさけざるはあらずなん。さるを論者一くちにたゞ論ずるにたらずとのみいへるは。可憐。此人文章のことはかつてしらざると見えたり。且北里十二時の文を。山東京傳の著せる青樓晝の世界。錦のうらといへるしやれ本を丸とりにしたるものなりとは。論者はたゞかの糞と味噌とを辨ずることあたはざるのみにあらで。名珠と瓦礫の差別をもしらぬにこそ。かの青樓晝の世界といふしやれ本は。予もはやう一見せしことあるに。これはたゞ吉原廓中の晝のおもむきを。かの

今はいかやうにいふとも。世に證とすべきものなしと思ひて。かゝる傍若無人の妄説は吐き出だせるなるべし。おろゝかなりとやいはん。ねぢけたりとやいはん。予はかゝる片田舍には住みたれども。はやくより翁を信ずることふかければ。かの源註餘滴はさらなり。雅言集覽全部をも。ともに寫し得て藏せれば。うか〱嘴をたゝくことなかれ。のちにかならず臍をかむのくいあるべし。さればおのれは此書などは。つねに座右におきて見ることとなるを。卷中すべて先人未發の卓見多く。かつ他人の説をも。其善惡は評せられたれども。未かつて人の説を自説にして。出だされたることは見えず。實に世に源氏癖の翁と稱せられしもことわりにぞありける。かゝれば今こゝに餘滴中の翁が發明の説をあげて。大に論者を驚かすべくおもへども。さてはあまりにこと長々におよべは。はぶきていはず。然れども。遠からぬほどに。予此書を校正して。翁がとしごろの勞を空しうせじのこゝろ搆へなれば。他日此書の出づるを待ちて見るべし。また狂歌堂眞顏と久しく絶交のことは。此書につきてのことにはあらずかし。そは其門にいたるともがらは。たれもよくしれることなれば。ことさらにはいはず。予も先年狂歌堂をともらひて。何くれとものがたりしけるついで。かの源註のことにおよびけるに。眞顏もふかく此書のいたづらにならんことををしみて。ねがはくは足下補助して。世に公にせよなど。いとねんごろにすゝめられしことさへありけるをや。其事ははやう予が後の東日記にもいさゝかしるしおきたり。またのちに眞顏とともに。二條殿より宗匠號をおくり給はりしことは。實にかの眞顏にまきこまれたるにて。のちに自も悔い給ひしかども。かしこきあたりの仰せごとなれば。すべなかりきとぞ。しかれども。こはいさゝかも學事にあづかることにあらざれば。かの俳諧歌と。狂歌との論におきては。猶著明なるものなり。また此論者。眞顏に何の恩あるにか。しきりに狂歌堂をあげて五老翁をおとしたり。中について最可笑は。今樣職人盡の詞の論なり。眞顏のは言すくなに雅にして滑稽あり。五老翁のはながく〱しくて滑稽なし。これその短なる所なりとのいひざまは。諺にいはゆる糞と味噌とを辨せざるなり。眞顏のか

こは初年の作にて。本意にあらざる事。右のせうそこにてしるべし。此書にいたく本居宣長を非りながら。のちに其門人本居大平に。雅言集覽の序文を賴みたるは。多く賣んことを求めたるにて。甚鄙陋きこゝろなりといへれど。凡書を著すもの。誰かはひろく世に布んことを願はざるものあらん。はた翁もかの禍津日の神の說と。聖人をいたくおとしめたるとの。二つをこそ惜まれたれ。其他言葉の解にいたりては。などかうべなはれざるべき。かつ寐覺のすさびは。わかきほどの作にて。みづからの意にもかなはざること。かのせうそこにも見えたる如くなれば。晩には其說に服せられたるにもあるべし。よしさらずとも。其人の門人に序をこはんに。何の妨げかあるべき。これらは實に無用の論といふべし。又翁の若き時。源氏物語を講釋せられたるに。ひそかに鈴屋大人の玉の小櫛の說を掠(トリ)て。自の說にして釋かれたりとか。そは玉の小櫛のいまだ世に公行(オホヤケ)にならざりし以前のことゝあれば。いとふるきことにて。吾輩はさらに不知所なれども。翁の源氏に心を盡されたるは。たゞ一朝一夕のことにはあらず。實に年來の勞をつみて。つひにかの源註餘滴をさへ著されぬ。されば此翁を難破せんとならば。さるあとかたもなき。三十年前の席上口演の說をとり出でいはずとも。などかくたしかに著述せられし。此源註餘滴を引きて。しか〲の說は玉の小櫛の說なり。かうかうの考は。本居宣長の考なりとやうには論せざる。按ふに此論者は。かの源註餘滴などは。未一たびも見ざるなるべし。もし見たらんには。よもかゝる雲をつかむやうなる。あとなしごとはいひ出でじかし。さるは此源註餘滴は。未全備したるにはあらで。たゞ稿本反古のうらなどにかゝれ。或は湖月抄の頭にかきいれなどせられたるまゝにて。さらに戶外へは出だされざりしものなり。しかのみならず。先年始めのほど五卷ばかりは。なにがしといへる狂歌師。あながちにこひもてゆきて。つひにゆくへしられずなし。それより以下は。かの己丑春の加具土の神の荒びにあひて。雅言集覽の草稿と共に。悉やけうせて。かの家には一卷もあることなければ。此論者いかでか見ることを得べき。然れども。論者はかく此書の。みながらなくなれることをよくしれるゆゑに。

難後言

著者不詳

○六樹園を誹れる小説家に答ふ

此ごろ。志里宇古登とかいふ書をえて讀み見るに。何人のものせるにかゑらざれども。當時江戸に皇朝學をもて聞えたる。平田篤胤。海野幸典子。小山田與清。石川雅望。岸本由豆流。屋代弘賢翁等六人をあげて。おの〳〵其非を辨論したるものなり。右六人のうち。五人は皆當時現在の人なれば。しか〳〵の事はいかにぞやと。試に其非をとがめんも。まけじ魂なる江戸人の癖には。さもともおもはるれども。ひとり六樹園翁は。はやう身まがりて。今は世になき人なれば。かの五人の人々とゝもに誹謗すること。甚いはれなきことならずや。且は其辨論する所。悉。虚談癖説にて。見るにたへざれば。いさゝか六樹園翁が事實をのべて。小説家にこたへんとす。そも〳〵翁の隨筆寐ざめのすさび。近ごろ上木せるには。はやう寫本に見えしことゞもを多く削り去れるよしにいへれど。おのれは此書上木のことかつて聞かず。おそらくは虚説なるべくぞ思はるゝ。さるはおのれ一年此書のことを翁のもとにとひやりしに。答へおこせられけるせうそこあり。今猶もたれは。原文のまゝを左にあぐ

然者先達而中は漫筆御企之由嘸々おもしろき事可有御座と奉察候小子が隨筆御聞及被成御覽被成度よし被仰下候右ははやく筆を採候もの故心得誤り候事もすくなからずその上他人ををこつき候事も交り候故うちこめ置候處いかなる事にか此間若山なる花の屋と申人より拙作の漫筆見候とて申おこせ候何ものが寫しとり候事か不審に存候右の中に本居翁の禍津日神の說を駁し候事なども有之其外心に不叶事有之候故櫃の底にうちこめ置候て其後何方へ持行候か反古にいたし候やゆくへなくなり申候左樣に思召可被下候

かやうにいひおこせられしかば。此書さらに板に可彫やうなしとおもへども。のちにかの嫌忌を省きて。公行せられしにや。予は未其書を見ざれば。猶疑ひなきことあたはず。もし實に板に彫られたりとも。

自叙

鼻を尊んで耳をいやしむは。世俗の通弊。まさに高祖高麗屋の鼻のみなず。口をして鼻の如くならしむるは。賢者の確論。ひとり木の葉天狗。潮ふきの口のみならず。いはぬはいふにまさるといふは。心猿のいましめにして。可惜口に風ひかすは。意馬のつゝしみさる事ながら。思ふ事いはざるは腹ふくる、わざなりと。雙か岡の法師もいへれば。目くら千人滅法界に。瞽子さがしの口まかせ。天に向つて吐く唾ならねば。己が面にかゝるや否。湯火傷をすれば耳へ手がゆき。口をあかねば鼻をつまめど。一言口より出でゝのちは。駟も舌に及はざる事。屁放て尻をすぼめるより。今一段不手際ならんが。成らずば識れと古人のをしへを。オッと合點と聾の早耳。目からぬけたる鼻下思案も。ひそかに目明き千人の有識に耻づと。小説家のあるじみつから題す

稚げなる事はやめて。今すこし實のあるものを。配らる丶がよからんとおもはる。先年阿育王の寶塔の圖を。くばられしときなどは。新春早々故。みな人こ丶ろよからず思ひし事なれば。隨分氣を付けられたが善かるべし。昨年。富久者有智。遠仁者疏德の十字をくばられしなどは。世人囂々と譏るところにて。義において熟せざる句なり。もし富久しき者。みな智あらば。荀子がいはゆる。志意脩則驕富貴。道義重則輕公王也などゝいふ論もなく。魏の河間王や高陽王や。唐の王元寶などは。智の所爲といふべきか。この句を逆にして。智ある者は久しく富むとよまば。端木賜が貨殖。范蠡が踪をかくせる。みな智者の富なるにかなふべし。玄かもかの摺物を。ふくさ唐紙へすられしは。平生唐紙へものを書かぬときめられたる見識とは相違のことなり。以來は百家體別なりと。予がいひしを思ひて。初學のものに。眞蹟本をならはせらる丶ことは止められたがよし。道語にも無名の名は我を養ふの宅。無貨の貨は我を養ふの福といへば。無用の年玉くばりや。黃金をむさぼる事などは。心をつけてあらためらるべし。もし强ひて止む事なくば。予たちまち靈をほどこして。足下の書物は芋でないから。石芋に爲るまいが。紙屑にして烟筒の脂でも通させんと。忽然として見えずなりぬ。輪池翁茫然として。さては今のは弘法か。今弘法なら小田原へでも歸つたか。石臼の目でも切りてあるけばい丶に。よいは鷰筒(きせる)通(とほ)しにならばなれ。朝鮮まででへもひゞいたる予が筆法。どうして今さら改められようと。机にかゝりて。また來る春のとしだまくばりに。新奇のものを彫刻せんと。工夫觀想にいとまなし

垂跡はやしろ本地は持明院
　　これぞ兩部の大師樣なる

志りうこと　大尾

寫して。いはゆる旖旎婀娜たる所を書き。虚名を走らせらる丶がこ丶ろ惜く。示談におよぶなり。もつとも予が古跡に似するをもつて巧と爲ずといひしことは。世の書家輩の難しとする所なれば。近來明の謝在杭も。必畫をゑがきて似ることを求むるが如し。優孟が孫叔敖を學ふがごとき。これを去ることいよ〳〵遠し。これ近日書家の通病なりといひたりき。然れども。古人の書をまなぶところは。はじめ其門に依りて。のち一家をなすが定矩なる故に。同人また論じて。右將軍はじめ衞夫人を學び。すでにして筆法を鍾繇張旭に得たり。しかれども。其みづから門戸を立つること。何ぞ曾て三家と彷彿たらんやといへり。足下これらの書をも讀みながら。なほわが二王らの方勁硬堅なるによらずして。別に一機を出だせるに眼を著くること能はず。しきりに予が法予が訣と稱して。いはゆる閫外を出づること能はざるは。そも〳〵いかなる故ぞや。かつ先刻も申すごとく。強翰を用ふること成らざるなんどは。すなはち在杭がいはゆる。近代の書は柔筆剛筆より多し。柔なれば腕を運ばしやすければなり。偏鋒正鋒よりおほし。偏なれば態を取り易ければなり。然も古今の相及ばざること。あるひは政に此に坐せらるとある論のごとく。この癖に坐せられたるものにて。片腹いたく思はる丶事なり。足下もすこぶる一時の名家。なんぞ古人に縛せられ。柔筆に坐せられて。遠くは二王ら漢晉の大家。近くは明末雜駁の閩人なんどに。末來記をもつて彈せらる丶は。吾朝の耻辱としらずや。足下すでに年六十の關を越されたりといへども。那智八十の入れ算をして。八十までも學ばれなば。わが眞面目も見出ださるべし。序なればいはん。足下すこぶる藏書家の聞えありて。不忍文庫の名を知らぬものもなけども。好事癖はやめられよ。但し文政九年戌の暮に。松岡辰方が方へやられし手簡に。近來風流好事流行にて。武備を忘れ候人も可有之哉と。不安心に存候など丶。みづからは好事家ならぬやうにいはれしは虛談ならん。其證は。先年孔明が陣太鼓の歌をよまれし時に。太田南畝があな小面にて明神下の弘賢が眞名のなまにゑよみ出づるかもと。ざれ返歌せしをもても知らる丶なり。年玉賦りの小摺物も。帝昊金や。封牛考や。日野唯心殿眞蹟などの。

之遺美。加ㇾ之以㆓風土自然之妙㆒といはれたるは。もとより書の。この國のものならざるを思はずして。佞媚せられたるおまけ口上といふ者なり。これを尊朝親王の眞蹟の跋にももち出だされたるは。よく〳〵外に的當の論なさ故と見ゆ。また書訣の附錄に擧げられし。獻筆表と啓とに見えたるごとく。空海の用筆は狸毛にて。今も水筆に多くあるなり。しかるを足下。鹿毛を用ふといひながら。馬毛筆のみを用ふるはいかなることぞ。空海に據るとならば。その用筆を用ふべき事なるに。强翰を用ふる事あたはざる故に。結體に力なく勢ひうすく。提灯屋を用ひて。字形を補はる、などは。はなはだ以て卑劣千万なりと。息をも突かずまくしかけられ。輪池翁面色あるひは青くあるひはあかく。玄關前ではあり。門人ども家來のてまへ。往來のもの、見る目も耻かしく思はれければ。さて〳〵おどろき入りたる貴僧の高論。霧を披いて日光を見るに似たり。まづこなたへと。座敷へともなひ。貴僧の道號承知いたしたし。今の世かくばかりに。某を論破すべき人を覺え申さずといはれしかば。かの僧こたへて。貧道實は空海法師。の

ちの謚號弘法大師なり。足下貧道を尊信せらる、は。よろこばしきに似たれども。吾が見識とははなはだ相違せり。それは足下も。書訣の附錄に擧げられたるわが論に。詩を作るもの古體を學ぶをもて妙とす。古詩を寫すを以て能しとせず。書もまた古意に擬するをもて善しとす。古跡に似するを以て巧とせず。振古の能書白家體別に。蔡雍大笑し。鍾繇深く歎ずるゆゑん。良に以ありといひしは。万世不刊の法矩なるを。足下古跡に似するを巧とせざる見識をば用ひず。や、もすれば。わが古跡を襲ひてよしとせらる、は。いろはを習ふ小兒が無心にして書きちらし。いたづらに俗師の爲に。金釘を師匠まつかに燒きなほしといふやうに。添削せらる、もおなじ理なり。故に世の黑輩ども。予が眞面目正體妙所あるを知らず。大師樣とあへいへば。たゞ屈曲迂回。ひよろ〳〵ぬら〳〵として。油手で鰻鱺をとらへたるやうなる書を。かくこと、こ、ろ得たるは。かたはらいたき事なり。且足下が楷書は顏眞卿を學びて。や、一家をなすに似たれども。行書草書にいたりては。凡庸を免かる、こと能はず。わづかに持明院家の筆意を

は。古今著聞集に。嵯峨天皇つねに空海と筆跡を爭ひ給ひしに。ある時。空海が唐土にて書きたる一卷を。天皇しろしめさずして。譽め給ひしのち。實は空海がつかうまつりしなりとて。卷軸をはなして。末に某の年月沙門空海と。書きたるを見せ奉りしかば。天皇大におどろかせ給ひて。その書體と當時空海が書くところの異なるを不審し給ひしかば。空海こたへて。それは國によりて書きかへて候なりといひしことあり。但し著聞集に。唐土の大國なると。日本の小國なるとの差別のごとく書きたれども。さにあらず。この國人の方勁に難く。優美に易き質なるを見て。韓方明より直傳せし。雙鉤を單鉤にあらためて。その時好にしたがひ。二王らが方勁硬堅の勢あるを取らず。べつに屈曲迂回の運筆をひろめ。一機軸を出だせるのみ。主とするところの佛法すら。別に即身成佛の義を立てたるを以て例しゑるべし。よりて狂放散逸なる書體。また額字の法のごときは。みな一時のよろしきにしたがへるなれば。今もたま〳〵世に殘りたる經切の眞蹟など。正體に妙所あり。聖蹟三蹟ともに同じ事なり。もしその迂回屈曲なるもの

が。眞面目なりといはゞ。科斗鳥形などの書を除きて。八の字を鳩のかたちに象るごとき書體。漢土にありとせんか。しかるに足下。空海が論にのみ據りて。二王らが筆論によらざるは卑し。空海豈おのが論にのみ據らるゝをよしとすべき。たゞ此國の人の指力つよき故に。雙鉤せずともよしといふばかりの論議にて。實は指力つよき人。なほ雙鉤を用ひなば。指力ます〳〵強くして。もとより優美婉曲なる上に。また確乎として不レ可レ拔の勢を書き出だすべきものなり。故に足下も大字を書くときには。かならず雙鉤するにあらずや。これは雙鉤の力つよく。運筆自在なるが故にて。中字細字に單鉤のみを用ひらるゝと。單鉤を是なりと論ぜらるゝとに。矛盾するといふべし。それを足下の相口なる平田篤胤が。神代文字の事から引きつけて。此國の人もとより優美に。單鉤になし來りし故。空海も詰屈に力を用ふる雙鉤におよばず。單鉤第一とさだめたるならんと。古史の開題記に論じたるを。足下ももつともと思はれたる樣子なれども。篤胤はもとより惡筆にて。筆法をしらねば。あて外方の空論といふものなり。さて足下書訣に固是晋唐

岸もとにさける梔うべしこそ
　實の一つだになき學びなれ

第六　弘法大師屋代輪池翁を諭す

屋代輪池翁は。能書のきこえ高く。鑒定の稱譽ありて。藏書に富み。すこぶる一時の名家なり。ある日退朝して門に入らんとするとき。香染の衣のやぶれたるを着て。藜藋の杖を突きたる。八旬ばかりの乞食坊主。門外にたゝずみ。うそ〳〵と内をのぞきて居たりしが。草履取り門内に入りて。お歸り〳〵といふと。內弟子侍などおの〳〵下座敷に出でゝ。輪池翁を迎へしかば。かの乞食坊主聲を發して。足下屋代氏なりや。愚僧は紀州より來りし者なるが。申すべき事ありといひしかば。輪池翁こゝろの內に。緩怠なる乞食坊主かな。紀州より來しといへば。大かた德本のやうなる奴にてあるべし。また短册を奪はるゝことかと思ひながら。いかにも予が輪池なり。何の用ぞと答へられけるに。かの僧さらば尋ね申すべし。足下つねに空海が書法を用ひらるゝよしなるが。實に空海眞面目の書體をわきまへられたりやと詰りしかば。輪池翁勃然として。予が空海の法則によることは。書訣を公行せしにてもしるべし。すでに書を作すに。單鉤をもて第一とすることは。空海の論に。俗にこれを包筆と謂ふ云々。ひとへに第四五の指を壓すなり。これを掣りて脫せざらしめんと欲す。そのこれを執ること至牢なるを明せり。但し小指力微にして久任に堪へず。およそ此勢をなせば。その掌自から虛し。たま〳〵その虛に中れば。ほゞ亦輕快なり。すでにその理を知りて。その微に詣るべし。もとより單指の力。ひとしく以て長久に困しまざるべきに若かず。單指において。手の便なるところあれば。則ちまた其便なるところに從がつて。流轉せしむるに取る。とあるに據れるなりと。答へられければ。かの僧笑つて曰く。足下實に右の論によりて。單鉤を第一とし。書訣の法に從ふとならば。こゝろみに一二を論ずべし。まづ右の論中。凡爲二此勢一と省文と注されたるによりて。此勢とよまるゝなるべけれども。勢に非ず。なほ執にて。明二其執レ之至牢一とある。執の字と同體に書きて有るを。見あやまられしものなり。さて單鉤をよしと。空海の定めたる

といはんとて。ダニと書きたるものと見ゆ。しからば山吹の實の一つだにといふダニを。シカの心として解さんには。山吹にも實一つはあるやうに聞ゆ。夫では簑のさへなきといふ言ひ譯にはならぬなり。そのごとく注をして。却つてまろがこゝろに違ひ。世の人を誑惑することにて。はなはだ以て麁漏千萬なり。これらが解せざるほどならば。標注をせぬがよし。もつとも此日記の考證は。「でくのぼうおのれ動くと思ふなよ。ひだりは家根屋右は喜世留屋といふ歌のごとく。家根屋（梅園靜盧）喜世留屋（村田了阿）のおかげで。出來たることなれば。今さらいふは野暮らしけれども。一體その方が考證は。たゞ書きぬきを並べ立て。見る人宜しきに從へなど、いふのみ。一つも解釋の允當なるを得ず。嫋竹（鳴門中將物語）四十二の物諍。いづれも〳〵書入本といふべきものなり。中に就きて。太秦牛祭（うつまさうしまつり）の畫卷などは。高島の千春に縮圖をさせしのみにて。肝心の祭文のおもしろきところをば考證もせず。只校合ばかりしたるは。何の用にもたゝぬことなり。勿論祭文は古雅なるものにて。中々その方が手際に。考證はとゞくまじければ。もつとものの事にあるべきか。さて先年檀几叢書の中の。書本草を板に刻したるとき。その方が跋に平弦と書きたるは。由豆流の義なることは論なけれども。藤原の不比等を史と書きたる同例にて。はなはだ借上なりといふべく。しかしながら儒者どもが。二字の名を切りて唐人めかすにひとし。しかも職分がらおもひ付きたる名ながら。その源は荷田の御風が高弟なりし。越智の弓弦（河野四郎右衛門）が名を襲ひしものなり。これらを以て見れば。まろが撰みし古今集に。なまじひなる增注をせんよりは。自家の學問をみがくがよし。後撰集增注にも。いふべき事あれども。これは梨壺の五人にゆづりて。まろは辨ぜぬなり。とてもその方が臆度で。まろらが歌のよく解すべきに非ねば。やはり。諸名家合作の團扇へ。自得の歌を書きちらして。巨勝子圓の見世番でもしやれ。しかし太平の世の弓弦なれば。用にたゝぬ無理ではない。さらばさらばとたち上りて。机の下なる堤中納言家集の。眞蹟本のもとに寄るぞと見えしが。そのまゝ姿は消え失せて。跡に一首の歌をのこされたり。由豆流ホッと溜息ついて。とり上げ見れば

のはじめに。言をうらうへにいひたりと論じながら。心付かざるはいかに。但し何は河の字のあやまりなるべしとはよく見出だしたり。ほやのいずしは。主計式の貽貝。保夜交鮨（ほやのつまずし）なることは勿論ながら。本居宣長が。ホヤは肥前の國佐伯の海にありといひしのみならず。奥州福島のいと深さ海底にもありて。長さ四五寸。横二寸ぐらゐのものにて。總身朱のごとく赤く。目も口もなく。甲には生海鼠（なまこ）の疣（いぼ）のごときもの數々ありて。上品の味あるものなり。このところの土人もホヤといふ。これは東游雜記にも載せたるを。その方藏書家ながら見及ばざりしにや。貽貝は谷川士清も。五條殂などを引きていへるごとく。本草綱目にも。東海夫人の名をあげたるを。などてこゝへは擧げざりしぞ。これが形の女陰に似たる故に。脛をまくりあげて。貽貝のかたちのすし蚫のやうなる所を見せたりと。詞をあやなして書きたるなり。こゝに心づかぬ故。世々の注者の説を見ること。靴をへだて、痒きをかくこゝちでありしなり。よく考へて見よ。何のために脛をあげて。まことの飯鮨（いずし）やすし鮑（あはび）を見すべきいはれあらん。また二月五日の條に。余は船人がいふに任せて。たゞ一つ持ちたる鏡なりしかども。海へはめたるなるに。その方が注に。まなこさへ二つあるに。たゞ一つだになき鏡をたてまつれりとなりといひたるは。はなはだ其意得がたし。一つだになき鏡をといひしダニは。まろが。ちるまをだにも見るべき物をと詠みしをはじめ。躬恒がふるだにあるを。また春を思はぬ時だにも。ちりをだにすゑじとぞおもふ。また貞文が。植ゑてだに見じのたぐひ。まろが撰める古今のゝちにも。多くよみし詞にて。中にも後拾遺の。山ぶきの實の一つだになきぞ悲しきの歌などは。道灌このかたみな人のしりたる所にて。ドヾイッとかいふ。賤しきうたひものにさへうたふ事なり。塵をもすゑじ。植ゑても見じ。手をもふれじ。實の一つもなきといふこゝろなること論なきを。一つだになき鏡をといひては。一つもなき鏡といふ心になるなれば。その一つもなき物を。いかにしてか海へ打ちはめらるべきや。然らばその方は。ダニを俗にいふ。一つしらない。一つしかない。一つほつきやあないなどの。シラやシカと同じこゝろに思ひて。一つしかない鏡を。はめたる

字を發語につかひたる詩文漢土にありや。またたとひいかほど例ありとも。それは抑の字の上の例のみにて。わが國そも〳〵の語の例とはしがたし。しかも抑は反語の辭。また亦然の辭。また發語の辭にて。打まかせたる發語にあらず。故に謠などの拙きものでさへ。からあたまからそも〳〵といひし例はなく。みなはじめに次第の文句などありて。さて詞のはじめに。抑これは九州肥後の國。などゝはいふなり。すでにまろが日記正月七日のところに。そも〳〵いかゞよみたるといぶかしと書きおきしを。その方語をいひおこす詞なりと注して。續日本紀の曾毛曾毛百足之虫のとある詔詞。竹取物語のそも〳〵いかやうなるこゝろざしあらん人にかといふ文。うつほのとし蔭に。そも〳〵けだものといへど。といふことばを擧げて。眞淵がそれとはしを起していふ詞を重ねて。そもそもといへり。もは助字なりといふ說にしたがひたる趣なれども。續紀なるは更なり。竹取。宇津保の詞ども。そも〳〵といふ所を句のはじめとして。文義解すべきや。みな上の句をうけていひたる詞なること。よむ者として知らざるはなし。しかるをその方。

竹取。宇津保ともに。中途より句を切りて。そも〳〵が最初の句のやうに標注したるは。提要の口上に合せんとしたる巧なり。いひ譯ありやといはるゝにぞ。由豆流赤面して。それがしはたゞ夫の字を二つかさねたりといふ。眞淵の說によりたるのみにて。別に語釋はとゞき申さず。故に標注にゆづりて。そも〳〵の語意をしらさずに置きたるにて候と答へしかば。貫之さも有るべし。さて正月十三日の條に。何のあしかげにことつけて。ほやのつまのいずし。すしあはびをぞ。心にもあらぬはぎにあげて見せける。といふ段は。日記中の難所にて。古今の注者。一つも實意を說き得たる者なし。その方が考證するほどならば。さだめてまろが意を說き得べしと樂しみおもひしに。舟の中の人に。ほやのつまのいずしすし蚫などを見せけるなるべし。裾を用意したるさま。女の心さもあるべし。といひしはなに事ぞ。まろ何のためにか用もなく。貽鮓(いずし)などをたゞ舟の人に見すべきや。さらば一向不用の文句といふものなり。これはまろ元來女のつもりにて。をかしみを書きたるものゆゑ。その心して見れば解すべきことなるを。考證

いへば。貫之いやまろはその注の事にて來りしにあらず。世中の學者どもが。其方がことを議論するが氣の毒さに。先年まろが書きたる土佐日記を考證したるよしみもある故。いひ聞かすべき事ありて來りしなり。まづ問ふべきは。かの考證のはじめに。提要といふ條を立て。そも〳〵この日記は。と書きたる。そも〳〵の詞。何とやら承けとりがたし。もつとも舟辨慶の謠に。その方同祖の知盛がことばに。そも〳〵これは桓武天皇九代の後胤といひしをはじめ。謠曲には例もおほく。また緣起のはじめや開帳場のいひたてには。おほくいふ詞なれど。外には見あたらず。これはいかにといはれしかば。由豆流すこしもさわがず。こは頭殿の御詞ともおぼえ申さず。抑は發語の詞にて。詩の小雅。十月之交の篇に。抑此皇父と用ひたる例もありて。承前起後の辭とのみおぼえたるは。杜撰にて候と答へければ。貫之だまれ由豆流。まろも御書の所の預りなり。さばかりの事を辨へずに居るべきや。十月之交の篇なるは。上の章に。皇父卿士番維司徒とある句をうけて。さて次の章に。抑此皇父豈曰レ不レ時と句を起したるにて。すなはち承前起後の例にかなへり。よし又夫が發語の例ならんとも。たゞこの一章のみにて。外に抑の

もの、師といふに足らず。また漢籍の上のさたなりといはゞ。引證するに及ばぬことなり。しかもてにをはは知らずとも。歌だに正心もてよめばよき物ぞといへるなどは。己がてにをはに暗きを。おほはんとするまけ惜みにて。てにをは合ずしては。歌にならぬ事をしらざるにや。其上すべての論辨こと〳〵く。佛意を以ててにをはを解し。一向點の勸化といふもの。法談といふものめきて。實に抱腹にもあまりあり。御同流の宗匠家ゆゑ。餘計のしごとなれども御達し申すなり。さてまた足下の。しみのすみか。都のてぶりなどは。一時の狂文論ずるにたらねども。北里十二時は。磐瀬京傳が。青樓ひるの世界錦の裏のしやれ本の丸どりなれば。卑劣ならずといひがたし。雅言集覽は。あまり大部ゆゑ今は辨ぜぬが。賣れを求むるところよりして。むかしはなはだ詈れる本居が弟子の大平に。序をたのみたるは。いやしき心なり。但し齋藤彥麿が名義考のやうに。人の說を書きぬいて。わが說にやき直すやうなことは氣を付けられたがよし。すべて學業は。眞實に居て世を茶にするが。われらが眞面目なれども。人を非りて。人の說を用ふるは。愚者だもよく爲ざるところ。向後眼目を著けかへ給へ。酒を呑ませねば醉ひはせぬが。御免候へたあい〳〵と。いづ方へか消え失せたり。雅望大に歎じていはく。ことしは燒けたり論じられたり。いつそ眞顏がやうに死んだもましかい

麻布ではなけれど六の樹がしれぬ
飯盛なれし抄子定規に

第五　紀貫之岸本由豆流を嘲る

岸本由豆流。古今集の增注をせんとて机にかゝり。古今の聞書どもを。あれこれと取りちらして居たる所へ。しのぶ摺の雁衣に立烏帽子着たる人。忽然と入り來たり。まろは延喜の朝に在りし。その集の撰者紀の貫之なり。申し談ずべきことありて來りたり。とありしかば。由豆流いそがはしく舖蒲團をはづして。さては木工の頭殿にておはしまし候か。それがしこの勅撰を增注いたすこと。蟷螂が斧に似て候へども。本居宣長が遠鏡などの。あまり俗に過ぎたるがかた腹いたく存じ候てなり。其志を御感じありて御出の儀に候はゞ。一しほ有難く存じ候。分り兼候事もあれば。眼のあたり御示しにあづかりたく候と

かまはず。おのづから英雄のこゝろざしあるに似たりしに。眞顔大宗匠となりしとき。足下もあひ亞ぎて。眞顔の推擧にて台賜をねがひしに。狂歌にては下されず。俳諧歌と稱すべくば賜はらんと有りしかば。百日の説法屁ひとつとなりて。今までかれが俳諧體を唱ふるをそしりて。牛角にならび立ちたるをわすれ。つひに見識をおとされて。唱へつけぬ俳諧歌の稱號をかうぶり。眞顔が驥尾につきて。座をさだめしは。舊來の見解に反して。たゞ大名をよろこべるのみ。故に今まで足下にしたがひし判者どもの中には。足下を疎みて退きたる者も多かりしなり。予も實は眞顔と足下と。いづれか賢れると。旦暮工夫したりしが。此度の不見識。かれにまきこまれしをもつて。はじめて足下の短をしりぬ。おもひ合すべきは。先年鷺丸がほりし。今樣職人盡のことば書。眞顔のはことずくなに。雅と滑稽ありて。かの親長卿の面目を襲ひたるに。足下のはわる長くくだ〳〵しくて滑稽すくなく。かつ舊本の語調に似ず。一々辨ずべきなれども。あまり長くなる故。こゝにはいはず。自反してかれこれ考へ合さるゝがよきなり。これらも足下のみじかきところなるを。名を以て人を嚇さるゝとも。庸人はおそれなんが。具眼の予などは微笑して居ることなり。さてついでなれば申し置かん。ちかごろ眞顔沒したるのち。おなじ台賜の宗匠なる。森羅亭萬象が。四方の歌垣を兼ねもちて。その風を行ふはよけれども。眞顔の舊門人ども。萬象をしたはざる者多き故に。萬象大きに怒りをおこし。風流を辨ずる詞といふものを上木して。あまねく人に配りたるが。まことに拙文愚論。さたの限のものにして。予が齒牙にかくるに足らねど。中にも愚昧はなはだしき事は。ニヨライの音を反切して。ノリといふ訓と約るといへるなどは。音訓の差別をだにわきまへざるものなり。また菅公の御歌を引いて。祈らずとても神や守らんと。世に傳ふるてにをは違ひのまゝにしるし。また論語の丘が禱ること久しといふ語は。子路がいのらんと請ひしなるを。五尺の童子も。論語を讀む者としては。知らざる者あることなし。然るを子貢が事として引證したるは。そも〳〵いかなるあやまりぞ。これを暗記の失なりといはゞ。さばかり口もとの文をだに記覺せずしては。

ひたるや。官家にあづからざる事は。やはり孔子と稱して。王禮の稱號を書かざりしこと。世にある書物を見てもしるべし。孔子といふほどならば。孔丘といふとも何ぞ妨げん。もとよりその敎をしたふ者こそことさらに尊稱もすべけれ。慕はざるものにおいては。格別の不敬にあらず。すでに釋迦は佛法の敎主淨飯の王子とて。世尊といひ。佛と稱して。浮屠氏はみな尊信し。續日本紀の宣命には。聖武天皇さへ三寶の弟子と稱し給ひしかども。佛徒ならざるものは。たゞ釋迦といふがごとく。また舍人親王はもとより皇子にて。崇道盡敬皇帝と論號せられしかども。人なほ舍人親王と申すにあらずや。これらはわが朝の皇子にて。わが朝の事業に功勳おはしまし。すでに天皇の論號を奉られしだに。やはりもとの御名を申し。また傳敎弘法の大師たちをも。その徒ならぬ者は。なほ最澄。空海とよび。圓光大師などは。同流の一向宗にてすら。法然上人といふに非ずや。されば足下も孔丘とこそいはね。なるべしの論の下に。徂徠の事をいひて。孔夫子の賛に。といはれしならずや。文宣王の稱を上るならば。なぜ文宣王の賛にとは書かずして。白虎通にいはゆる。大夫は人を扶達するものとある。孔夫子とは書きたるぞ。王號のおくりなあるそへて。大夫相當の夫子といふ語をる人を。先生の稱を以ていふこと。不敬ならずとすべきや。孔丘と稱したると。たゞ五十步百步のたがひのみ。さればまた玉くしげの論の下には。舍人親王も安麻呂もしかじかといはれたりき。これら崇道盡敬皇帝もなどゝはいふべからざる。勢のおのづから然らしむるものにして。本居が孔丘といへると。また爰ぞ異ならん。されども。人を論ずるとしては。自分からあらためて行ねばならぬことなり。實はたゞ宣長を憎むあまりに。前後をわすれたる耄悖といふべしと難破しければ。雅望大きにいきどほり。予も以前こそ足下の敎をうけたれ。當時は台賜の宗といはんとするを。南畝わらひながら。オットみなまでのたまふな。その宗匠にていふべきことあり。眞顏が俳諧歌を中興して。世を一變したる大功を稱し給ひて。宗匠免許の事ありしは。實にわが黨の光彩といふべし。しかるに足下。かねては予が風を下さず。落書體の與歌をよみて。眞顏が俳諧體に

第四　太田南畝石川雅望を懲す

蜀山人。仙境にありて閑暇のあまりに。むかしの門人たりし六樹園雅望が家にあそびに來りしかば。雅望よろこんで座に請じ。賓主の禮をはりてのち。南畝まづいふやう。足下兼ねての著述ねざめのすさびを。近ごろ上木されたるが。寫本にてありしとは相違して。削られしことおほきはなんぞや。雅望こたへて。寫本にて傳ふるあひだはともかくも。公行する日になりては。さてうつとしく。嫌疑を遠ざけんために。ぬきたること多く候なりといへば。南畝。予もさやうに思ひしことなり。それにつき。本居宣長がことを。伊勢暦をもぢりて。彼が古事記を專學として。漢學を破れることをにくみ。伊勢こじきの落話を作られたる。滑稽もさることにて。ねざめのすさびの寫本に。眞暦考。玉くしげ。玉かつまなどいへる書ども。讀むに堪へざる僻說どもおほかり。わが皇孫たらんものらは。ゆめかゝる說にまよふことなかれといひ。和學者忘られしはいかに。など、憎く／＼しくかゝれたる故。宣長ぎらひなるべく。人も思ふところに。先年かの人源氏物語の注をして。紫文要領。源氏年紀考などいふものを草稿せるを。足下ひそかに伊勢のしる人の許より得て。その說をうばひ。公然として源氏の講釋をせられしかば。人こと／＼く新說に瞞せられて。めでたきことにおもひ。すでに眞顏も甘心して。足下が說を聞きに行きたりき。その、ち宣長。右の草稿どもを。玉の小櫛と號けて出板せしかば。源氏の注。足下の說ならざること世にあらはれ。眞顏も彈指して。そのこゝろぎたなきをいきどほり。つひに二十年來絕交したるを。近年になりて。家根屋靜廬らが取り持ちて。中直りせしこと。足下さだめておぼえあるべし。僻說のみ多きによりて。兒孫たるものも。その說に惑ふなといふ斷見ある足下。なに故にそのひがごと多き和學者の說を盜み。自說のやうにせられしや。かの面從すべき足下にあらねば。はなはだ以て意得がたし。さてまた本居が。孔子のことを孔丘と書きたるとて。續日本紀を引きて。文宣王の號を以て論じられたるなども。一應はもつともらしけれども。一片の論といふものなり。和學者がいふぐらゐの事でなく。唐の代王號を諡りたるのちに。唐土の人も吾國の儒者も。文宣王とい

べし。されぱこそ其方が眞似して。もと其方が門人なりし。山崎美成とかいふ博識ぶりする男も。ある諸侯の家來分になり。大小さしていぢかり股してありくを。世にはをかしがることなれ。さて門人某甲が書きたる分にて。小山田再興記とかいふ書をかき。先祖代々有縁無縁の戒名をならべ立てたるは。百匹づゝの付施餓鬼めきて。ちと外聞がわろきやうなり。ことに其節そへて配りし所書はなに事ぞ。こと〴〵しく俗名雅名姓氏。別號を二とほりまで書きて。四の日八の日の在宿をしるし。狀の上書の宛名まで志るしたるは。飛脚屋の出日の札か。大坂の金毘羅船宿の張紙めきて。さらに學者の所行にあらず。後には戯作者どものやうに。畫贊扇や出來合の短尺を。書林に出だして賣るであるべし。なにとてさやうに見識ひくきぞ。それ故三味線の考はさらなり。書きあらはすものども。こと〴〵く愚人をわが博覽の舟にのせて。漕ぎ賃をおほく得んと欲する。卑劣心が見えて。見ぐるしさいはんかたなく。つねに本居宣長が說を破さでは。こゝろよからずといひながら。下總や常陸邊へ。學問あきなひに出てかけし時。田舍人は志るまいと思ふて。宣長らが說を盜み講じたるに。さき〴〵にてきめつけられて。鼠のごとく迯げ歸れるなどは。ことに見ぐるしくおぼえしなり。また先年擁書漫筆に。牛祭祭文をあげたるなどは。その年の正月。岸本由豆流が出板したるを見ながら。三月に上木するものへ。知らぬ顏して入れおきしなど。校合の麁なるにはあらずして。見識なきなり。されば和歌高名競の唄に。「松はふしくれ山吹は黃色に咲くでわしやいとしと。由豆流が肩をもつもの有りしなり。耻づべきをはぢざれば。耻ぢかいたためしはなけれど。よく耻を志つて學問し。たま〳〵學士と成りたる。わが山の名を穢すことなかれ。南无阿彌南无阿彌と。十念をさづけ給へば。與淸衫に冷汗をながし。渴仰して念佛をとなへ居しが。よく〳〵見れば。こはいかに。祐天寺の影堂ならで。權之助阪の田甫なりけり。與淸おどろいて眉毛へ唾をつけて居れば。門人ども打ち笑ひて。先生。眉をおぬらしなさるには及びますまい。世間の人が化されて居ますから

川船の船頭いかに多ければ

小山田までも漕ぎのぼるらん

得るものおほく。つひには家作に氣をもむために。身上も不勝手となる者ことに多し。これらさへ歎息のかぎりなるを。又候その方がために。墓地にまでまごつきて。住持に難儀さするものま丶あるよし。わが末徒ども丶迷惑することなり。それほど墓相にくはしきその方。何しに子を先立つるやうの逆ありしぞ。もとより穢土に住する如夢幻泡影の身として。吾子の夭折することさへしらず。たゞ書面の墓相説をあげて。口傳など丶となふること。人はみな書をよまぬものにしたる。自許の所爲。はなはだすまぬことなり。ことにこれは太田錦城が。世上の家相方位の説をなすもの丶。流行をうらやみ。種々の家相書を著述して。愚人をたぶらかしたる術計をぬすんで。利を射んと欲せるにて。その方すこぶる黄金家にてありながら。尙卑劣なる金まうけしたがる癖あるは。つひに死して有財餓鬼とならんことうたがひなし。まだあるは。去年世に出だしたる藥師寺金石記に。緣山倭學士と書きたるは。もつとも笑ふに堪へたることなり。わが山の號は。親緣。近緣。增上緣の三緣をもつて號したる名にて。かならず三緣といはざれば。義にかなはず。もつとも吾徒の中のものも。こ丶ろえ違ひして。緣山といふたぐひもありて。淨土列祖傳などには。いづこも〳〵緣山とのみ書きたれども。かの書は杜撰おほくて。宗門寺傳とあはぬ事あるによりて。宗徒は珍重せぬものなればしばらくいはず。もし緣山といひてよきならば。こ丶ろみに東叡山を。たゞ叡山とばかりいひて見よ。江戸か京かわかるべからず。もつとも徂徠や。南郭が詩どもには。緣山とも緣嶽ともいふ。三山とも用ひたれども。これは例の亂名家のしわざなれば。例にすべき事にあらず。三緣と正しく語をなすを。俗なることに思へりや。名を正すが學者の本意なるに。開卷第一の亂名。いかんぞ學士の名に恥ぢざる。また倭學士といふもをかしきことなり。これでは震旦人が。わが國の譯者をつとむるやうに見ゆ。わが山の徒もみな印度人ならず。別に倭の字のことわりには及ばぬことなり。元よりこれはある武士の前に。帶劔して徉ゐられたるくやしんぼうに。大小が指したくて。わが山の學士となりたるにて。その根ざしは駑胤といふ山仕が。吉田殿をこしらへて。學師となりたるからの思ひつきなる。

まさに。之を淸め除ふべきを以てなりといふ字義にたがひ。高岸より河に臨む屋なる故に。河屋といひし古意に反して。下學集の高野の說より。今一きはつたなき解なり。厠。果して香屋ならば。糞をよき香といふべきか。これ味噌も糞も一緒の說なり。かくいはゞ印土にて牛糞香を塗ることなどを。證據にするであらうが。あれは別に說ありて。この引證にはならぬことなり。さて大事の事あり。先年墓相の說を主張して。支那の陰陽五行家の書より抄錄して。門人どもに墓相小言を作らせ。また東脩已上の門人には。別に口訣をさづくるよし。口訣もさだめて。園墓書などの說を書きぬきにして。人に示すならんが。唐土の墓相家說に。しか〴〵の相の墓は。子孫かならず公卿を出だし。封侯を出だすなど、あれども。吾朝の人にそのまゝ示す事は。禁を犯すにちかしといふべし。それは太平二百餘年の今。公卿は公卿の分。封侯二千石は封侯二千石の分あることにて。おのが子孫をして。公卿封侯たらしめんとおもふは。士庶の分をしらざる亂賊の人なる故。たとへいかなる美相ありとも。大聲にはいはれぬことなり。その方も官途の事をしらざる者ならねば。かの口傳の巻物にも、さだめし明々地には書かざるならん。然れども。住居より北の方の墓がよしなど、。小言にいひしはいかなることぞ。わが本山などは。芝から品川あたりの者ならでは。北方にあたらず。されども格別南西の旦方のあしきといふ說を聞きたることもなし。これらはなはだ禁忌に拘はることなるをしらずや。しかるにその方が說にまどはされて。改葬せしもの少からず。大きに難澁したるものもありしよし。これらはなはだ天下の害なり。當時寺院おほく旦方おほきによりて。金一升の土地。墓相のよき樣に好みだてをすることは。列侯貴人か田舍ならでは出來ぬことにて。たとひその方が口訣を得ても。わづかに田樂石の一本も立つるばかりの庶人は。改葬せんにも地面はせまし。さりとて打ちすておく時に。家に不祥のことあるか。病人夭折。火災盜難あるときは。さればこそ墓相のよからぬ故なれと。氣にかけて。彌々衰乏するもおほし。全體ちかごろは。堪輿家相の說はやりて。勝手のわるき所へ。窓をあけたり。戶をふさぎたり。不勝手にすることを。よしと心

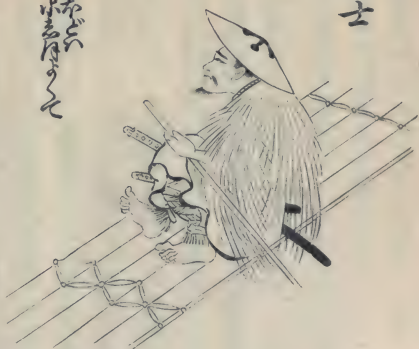
人のもとより。雨雪の事實をくはしく書き綴りて。校合に越したるを。其人をあざむきて終に歸さず。おのが著述の戯書の中へ。そつくりと書きつらねて。見て來たやうに人を欺きし。報惡なることを說きさとして。かれをば呵りかへしたれども。その方が卑劣のこゝろをため直さんとおもふ故に。いひ聞かせおく。心に適して耻かしかるへし。學海は無量なり。なに故にこれは磐瀨醒が說なりとはいはずして。自己の物にしたるなるぞ。卑劣とも無識とも沙汰の限の穢行。彈指に堪へたることなり。すべてその方は。見世學問にて。書目と卷づけと丁づけにて。何の著述をもふさぎ。斷見の論あることなく。藏書自慢に過ぎざるのみ。自著のもの、なかに。松屋主人みづからいはくの。松屋高田子曰のと。書きさらしたるは。何といふ了簡なるや。かつ淸水濱臣と中よかりしなどは。漫筆にも。ところ〴〵に譽めて置きながら。竺志舟かの序文に。左右のことより論おこり。亂酒の上とはいひながら。つかみ合同樣の喧嘩をなし。のちに太田覃らがとりもちにて。やうやく仲直りとなりしとき。學問よみうたの甲乙をもて。伯仲をさだめんには。おの〳〵不足のこゝろあるべし。男子第一の勝負は。男根の大小をくらべて。造化にまかせたるがよしとて。覃らがすゝめにしたがひ。滿座の中にて陽物をかゝげ出だし。濱臣が大太なりしに屈伏して。その方仲にさだまれるとき。例の南畝が。「松の屋の松蕈よりもさゞ波や志賀の濱松ふとくたくましとよみて大笑したりき。必竟學問の上にて。甲乙をさだむるに。陽物をかゝげ出だすなど。猥雜のことをなせるは。根が持操なきがいたすところにて。春屋の日祭あそびに似たり。學問沙汰は學問ざたの上を以て。どこまでも論議講究し。かれがみじかきか。吾が長きか。折衷して伯仲をさだむるはづなるを。負惜みとをつかなびつくりと。相半して居るゆゑ。南畝らが說柄になりたるものなり。この餘。東梁集や。俳諧歌論や。松屋叢話や。殘月抄などにも。いふへき事多かれど。さのみは論に足らねばさしおくなり。但しその方が解釋のくだ〳〵しくつたなきことは。三樹考に。厠の和名カハヤを解きて。ナホリヤなりといひしなどは。說文に厠は淸なりとある徐氏が注に。いにしへこれを淸といふものは。その不潔常に

方積徳叢談を書きて。人に陰徳者とおもはするつもりならんが。あれは實は小谷三思を引きずり込みし趣向なること。予はこれをしれり。また富士根元記を作りしも。富士講の徒を手なづくる計略にて。富士講の謠の注をも書きたるに。三思もさる者なれば。その手のに乘らざりし故。近ごろは仇敵のごとく。罵じるよし聞ゆ。これら世に衒ひ。人に阿るを以て。賢才とこゝろえ居る故にて。學者の耻づべきことならずや。されば書物藏を擁書倉と名づけたるも。擁書漫筆に。北史や世說新語補を引きて。こと〴〵しく由來をとき。其黨の者どもの詩歌などを擧げたる故。世の愚輩は擁書の熟字。はじめて其方が用ひ出だしたるやうに思へども。さにあらず。實はちかごろ死たりし近藤正齋が書齋を。擁書樓と名づけしなるを。其方おもしろしとて奪ひとりしなり。よりて正齋この事を難じて絕交去たりき。予に向ひては爭ひがたからん。正齋もすこぶる學才ありし故に。李永和が傳などより。見出だして號したるなるを。しらぬ顏して人を欺くことゝ。いはゞ盜賊の上まへとりにちかし。まだその上に。藤井高尙が松屋といふ號をも奪ひて。自稱する事。そも〳〵いかなる事ぞや。また漫筆に。山東京傳がことを論じて。醒が學風考据を專らとして。世のなま著述家の類に似ず。そのあらはせる骨董集に。孫引の一ふしだになきを見ても思ふべし。などゝ譽めておきながら。ひそかに京傳が說を奪ひしは何事ぞ。その說をもいひ聞かすべきなれども。旁に門人どもゝ居る故。その方身を容るゝに地無からんかと思へば。忍辱意を以て。その非はつゝみてつかはすなり。さて京傳ある會席上にて。その方が盜說を咎めて。かの說は予が發明なるを。足下自說として唱へらるゝこと。はなはだ遺憾なりといひしとき。その方まざ〳〵しく大音に。予いかでか足下の說を奪はん。何ぞ證據ありやと。居丈高になつて說破したりしかば。京傳はなはだ逆上せて。論議するうちに。持病の喘息大に發して。痰血を吐し。籃輿にたすけられて家に歸りしが。これより病みて起つことあたはず。つひに病床に憤死したりき。これ其方が氣死せしめたるなる事。人あまた知れることなり。京傳この事を予に訴へて。寃罪をあかしくれよと歎きし故。かれが先年越後のある

ヲケリてんつるつんなゆきのり

第三　祐天大僧正小山田與淸を呵す

松屋與淸。三縁山の學士となりて。大小をさしこわらし。結城揃へを一つまへに合せ。昂然として門人どもを連れ。目黒の祐天寺に參詣して。大僧正の像堂にぬかづき。この寺もとは善久院とよび。のちに今の名に改めたるよしなどを。門人に語り聞かせて居たる時。忽然として大僧正の像聲を發し。與淸與淸と呼びたまひければ。かの善光の背中を借り給へる。如來もどきではあるまいかと。與淸大きにおどろきしが。心を落づめて。元の座に直りければ。大僧正のたまはく。其方かねて予が德をしたひ。相馬日記に本傳を引いて。累女解脱のことをねんごろに記したるは。死靈解脱物語の杜撰なるにかはり。穿鑿もよくとゞきたり。しかも三縁山の學士になりたる故。ことさら吾像前にぬかづくこゝろざし。過分に思ふなりとありければ。與淸低頭して。それがしいさゝか國恩に報ぜんがため。報國恩舍と家を號し。道ゆきぶりのはしり書も。人のためになるべきことを專一とこゝろがけ候までにて。御賞譽にあづかりては。かへつて恐れ入候といひければ。大僧正のたまはく。その人のためにせんとする處より。かへつて世の害になる事多き故。申し聞するなれば謹んで諦聽せよ。そもそもその

船士

てたがるは。甚だ以てよからぬ風なり。それも若狹の義門が友鏡や。殿村常久がかたばみ草や。土佐の五藤正英とかいふ童子が。綾のをひもなどいふたぐひは、みな吾ひもかゞみを根株にして。言葉詞花のかざりを委曲にしたるものなれば。初學のために益なき事能はず。予もうれしくおもふ事なるに。加藤重春といふものが。五十聯韻の圖を五行をもて論じ。いろ〳〵に古事附の注を加へたるなどは。殊更笑ふに堪へたる事なり。又今井中が。得るによりて經。經るによりて得とかいふ說を立て。ウヘ。ウフ。といひつのりて。西洋人の名のやうに。ウルトフル。といふことばかりいふなどは。拖腹にもたへざることにて。しかも書名を。矮屋一家言と題したるは。いふにも足らぬ愚名なり。松岡玄達が本草一家言や。そのほか一家言と名づけたる例によりしならんが。わざ〳〵矮屋と冠したるはいかなる故ぞ。矮たる家の中限でいふことならば。無用の櫻木を費して。世に行はずともあるべきことなり。しかもかれは諸侯の臣にてありながら。君より賜はれる家を。矮屋などいふこと。失敬いふばかりもなし。もつともおのが住む家なれば。高屋大厦とこそいふべからね。賜はれる家さほどに不足ならば。浪人して一家をなすがよきなり。先年も書物無盡の引札をくばりて。同志の人の勸化を乞ひしことありしに。書目の中に學者必用歌學などするもの、。持たではあるまじき書名さへ載せてありき。さばかりの書だになくて。一家の言をなし。人をその門に引誘せんとするは。蠡を以て海をはかるにひとしく。自高妄許のしわざといふべし。これら足下に預らざることながら。てにをは家の事故ついでに申し達しおくなり。その意して足下も研究いたされよ。予が歌の解釋にあやまりありと論ぜられし中には。またいふべきふし無きにあらねど。さのみはくだ〳〵しく。足下たちが。テケリケンツルシツ。ツ、キナバヌルシカなど、。べら〳〵と多言る、口眞似に似て。海鼠の口のこたへせぬためしもあればと。座を起つと見えけるが。響かぬしゞまの鐘の音と、もに。愕然としておどろき覺むれば。ありし宣長の形はなくて。ことばの玉の緖のみ殘れる。一片の蚩夢なりけり

玉の緖の長き脊丈や學ぶらん

宣命。萬葉の歌ども。三代集その餘。うつぼ。源氏のたぐひ。歌。物語の上にも。すべて一つも例ある事なし。もしはたらくべき格あらば。あまたの古書の中に。たゞ一處ぐらゐは用ひてあるべきはづなり。例せば射ル居ルなどのごとき。居リ射リとは活用かざるがごとし。足下予が影に吠えて。てにはを唱へ。一家を成したるは手際なれども。をしいかな。學問なき故。强說も出來るなり。ちと予がこゝろざしの。てにをはに任せるに非ざるを辨へて。よく古書をよみわたし。さて天語でも地語でも解かるゝがよし。千言萬語たゞ章をつみ。句を探る。歌文章の上のみにて。悟り得べきことにあらず。すべて足下に限らず。てにをは家は。たゞ章句にのみ泥むが故に。たま〳〵半片や一枚のはした文を作きても。幽艶閑雅なることはさておき。文義淺くして。全部の趣意通らぬもの故に。古學者流の中にては。とかく議論したがるなり。併し予が門人の中。平田篤胤などは。てにをはを知らぬ故に。論說し得たりとおもふことも。實は趣意に背ける語格ありて。その門人にも心づくものもなきと見え。てにをは家の難をかうむることと多きなどは。予において二つながら甘心せぬなり。

さてついでに申し述べん。尾林元雄ぬしも。てにをはの家風を張り。足下も初は服從せられたるやうすなりしが。右の天語通に眩まされて。その子を足下の門人とし。秘奥を聞き得たるのちに。元雄ぬし自己の說なりと主張せられしは。はなはだ以て卑劣なり。もとよりかの天語通。人の說を奪ひておのが說とすべきほどの。發明のことには非ぬを。足下の大聲におびやかされて。右の卑劣をば行はれしなり。しかるを足下。龍王領下の珠を奪はれたるごとく怒りて。絕交に及ばれしは。愚昧なんぞかくのごとくはなはだしきや。予が眼をもて見る時は。漢人孟子がいはゆる。五十步を以て百步をわらふたぐひ。京極家の歌學を。六條家より議せられしにひとし。足下このゝち門人を取るとも。和歌三神の像前に誓ふことなどはやめられよ。歌はもとより自然の餘意にて。詩は志を述ぶるものと。漢人のいひしもおなじく。古今集の序を見ても悟らるべし。さて今の世すこし古書のはしをも覗き。こし折の一首もひねり出だすやうに成ると。てにを〳〵と。自家を立

は。いはゞ枝葉といふべきことながら。てにをはは。古書をよみ。文學びするもの。一日もしらでかなはぬ事ゆゑ。まづ紐鏡をもつて初學をさとし。さて玉の緒を作りて。大體を示めしたるに。足下よく通覽して。予が玉の緒に論じたる說の。あやまりあるを考究せらる〻こと。すなはち予が後說にして。至極よろしき事なり。然るに近ごろ。てにをはに通達せられしを自負の餘。慢心と見えて。天語通とか天狗通とかいふものを書き。人に示さる〻よし承はりおよび。予もさる席にて一見せしが。何か大きなる紙へ。アカサタナの。五十韻字を書きて。箱の中より小札をとり出だし。何のことばにもあれ。一言よりして千萬語にはたらく言葉を。小札にてあちらへやりこちらへやり。こゝへ行くとかう轉ず。かしこへ行けばかうはたらくといふやうに。目まぎらしく轉じてはたらかせらる〻故に。初學や愚昧固陋なるものども。一驚を喫ひて。珍らしき事におもひ。一時に名を轟かせられたれども。上木して公行にするといふうはさばかりにて。今に世に示されず。あまつさへ近ごろは。小札の筥も圖も何處のか隅へおし結果て。

天語の天も字もいはれぬは。いかなることにや。大かた。よく思ひて見れば。すべて言葉のはたらきは。足下のごとく圖を書きたり札を作りたり。一言の下へ系圖を引いて。何十言にはたらくなど〻いふやうにこそ辨へね。皇國の人は誰も〳〵。用ひ馴れはたらかし來りて。何となく覺えて居ることなれば。さらば圖說を公行せんと。氣をとりて見れば。いはずとも知れし事なる故に。一時の名を賣りたるを勝譽にして。引きこませられしなるべし。予もよくはおぼえぬが。見ルといふ詞などは。ラ行に移りては。見ラン見ル見レと。活用なれたることばながら。行を行ラン行リ行ル行レ。知を知ラン知リ知ル知レと。はたらかす例に准へて見れば。見も見リともはたらくべき格なりといふやうなる說もありしとおぼゆ。すべてことばの八千街にわかれゆくことは。天地自然の妙用。いはゆる言靈のさちはふ國がら故ながら。古人も別に例なき言葉を。みだりにはたらかしたることなし。いかにも見は見ランとつかひし例あれば。見リともいはゞいはるべきやうなれども。古事記はさらなり。日本紀以下の國史。祝詞。

汝が意に解しよきやうに點したるは。杜撰これよりはなはだしきはなし。また仲景考といふものなどは。もとより牽强附會のことにて。論ずるに足らざればさしおくなり。とかくいふ内。時刻うつる故。これぎりにしておくべし。以來は山事をやめて。汝が著述目錄にのせし。乞盜ならぬやうにこゝろがけよ。かつ又みだりに鬼神の情狀を伺ひえたりなど、いふこと勿れ。汝があしくいふまろが來たるを。天神下降とこゝろえたるなどは。佛頭に糞を著くといふものなり。いかでか情狀を伺ひ得べき。いざとて御身を起し給へば。馬子。妹子左右に從ひ。赤檮。川勝警蹕して。空際にのぼらんとし給ひながら。やよ篤胤。なんぢは浮浪人と聞きたるに。存外なる大家に居て。多人數をやしなふやうすなるが。いはゆる山師の玄關なるべし。しかし米價がたつとくて。さぞ困るであらうと。から〳〵と笑ひ給ひて。雲のはた手に御身を隱し。はるかに虛空に上り給ふ。篤胤は癡なるがごとく。愚なるがごとく。愕然として目の上の瘤を取られたるこゝろもちになりしが。なほ負けじ魂さかんにして。むかしは鷄來りて處宗と談じ。狐變じて。一條太閤を詰りたりき。かの上宮太子も。大かた妖魅の類ならん。おもひ切りて妖魅のつもりに。手きびしく論じて見んと。なほ附會のこころざし。いよ〳〵增りていまだ悟らず

たゞ賴むしめぢが原にくらべては
　さしも効なき氣吹の屋かな

第二　本居宣長海野幸典子を詰る

海野幸典ぬし。門人にてにをはを示し。あまりに口が草臥(くたびれ)しかば。とろ〳〵と眠られし夢の中に。紫元結にてもとゞりを卷き。道行ぶりのやうなる衣を着て。葛の袴をはきたる老人。本居宣長と名のりて座につけば。幸典ぬしおどろきて。うや〳〵しく座をしりぞき。それがし翁の德義學風をしたひ。みづから弟子と稱して。なほも翁の歌文に長じ給へるを。主張いたし候所に。よくこそ御來臨下されたれといはれしかば。宣長會釋して。足下予が生前の門人ならねども。孔子が堯舜を師としたるこゝろざしにもとづき。弟子の禮を脩めらるゝこと。祝着千萬なり。さていふべきは。予元來縣居翁の門に入りて。古への道を振ひしことは。縣居翁の遺意にて。歌ぶみの事

かいふものを作りそへて。世に示し。はなはだ議論ある所は。古史傳にいふを見るべしなど、逃げて。その古史傳といふものは。何の世上木するやら知れぬ故。凡人ども不審におもふ事ありても。その門に入らねば。その說を聞くこともならねば。止む事を得ずして。屛息して居るとはしらず。よきこと、心え。古史徵あるゆゑに。衆人難破しえずなど、。喋々しく大言を吐くは。抑いかなる事ぞや。孔子の集めて大成すといふこゝろにて。成文と名づけたるならんが。まろが眼にて見れば。古史叢ともいふべき體裁なるを。勅をもつて撰みたる紀記などをば傍にして。自家の作書を公然として講釋するなどは。いやはや片腹いたきことゞもなり。知らずや。むかしある人。涅槃經の異同を對校せし時。金人夢に告げて。大聖の金口みだりに改むべからずと呵したる故に。恐れてすなはちあらためたりき。よりて今涅槃經に。南北の二本あるは。對校の有無によりてなり。汝がきらひなる佛經の上にてさへかくのごとし。まして汝もしるごとく中古までは。大嘗會の時に。語部御前にまゐりて。上古の古事を奏したる。わが國の古傳。いかんぞ汝が臆度をもて。みだりに刪補することを得んや。これは吾國をたつとぶといひながら。いはゞ神典を亂るといふものなり。しかも一字一言の訓點も。わたくしに改むべきものならざること。安和年中に。天台法相の大宗論宮中にてありしとき。良源大僧正は。法華經方便品なる偈文の。若有聞法者無一不成佛の句を。若し法を聞くこと有らん者は。一として成佛せざること無しと訓じたるを。法相宗の學匠松室の仲算は。若し法を聞く者有りとも。無の一は成佛せずと訓みて。法相の意としたりき。訓點によりて意のちがふことかくのごとし。近ごろ荻野梅塢がもと吾黨のものなる故。ある人の議にしたがひて。法華經を校正し。上木したるはよけれども。異本の校合を傍注にも加へず。自己の了簡にて取捨したるなども。汝が所行と相似たり。常在靈鷲の金口の種子を。大俗凡下の身として。わたくしに用捨すること。いかでか敎主の意に叶はん。そのくらゐなら。まろも小野妹子がとつて來たる經のまゝでおいて。別に夢殿に入る辛苦はせぬなり。そのごとく紀記どもの古典の訓を。わたくしによみあらため。

のみ。汝もすでに漢字をもちひて。文章をなすにあらずや。神代字用ふべくは。今こゝろみに用ひて見よ。誰も一人としてよみ得るもの有るべからず。余ももとより皇子なり。皇朝の古事實傳を。よく後世にも傳へたき故に天皇記。國記を作りて。日本紀などの嚆矢となりしなれば。上宮太子全依㆓經史之例㆒。能勢㆓文筆之體㆒など、。中古の者もほめたるなり。余は用明の御子。崇峻の御姪。推古の太子。尊き事天子に亞ぎ。神道を起復し。儒道を再興し。佛法を張行し。その餘百千の伎術諸工。大かたまろが巧夫を離れたるはなきに。汝一介の凡下。卑賤の匹夫にして口ひろく余を詈ること。僭上无禮。孔子のいはゆる。その國に居ては。その太夫をだもそしらずといふ義にも戻り。はなはだ以て不埒なり。いひわけあらば返答せよとのたまへば。篤胤業火心頭より上れども。なまじひに手出しせば。赤檮や川勝が箭鏃にかけられんことを恐れ。ちひさくなりて愼み居たり。太子また宣はく。寅吉がのちに。勝五郎といふ小兒が再生したることを。例の山事の口實として。再生記聞とかいふものを書きたるは。かの靈の眞柱に。人の魂は產靈神の賦りたまふまゝにして。死しては幽冥に屬し。再生轉生するものはなきやうに說を立てたる所に。再生の小兒がまのあたり出來たる故に手をとりて。俄に再生もなき事あたはずといふやうに論じたるにて。いはゞ尻口でものをいふといふものなり。それに漢土の故事を多く擧げながら。まろが南岳の惠思禪師が後身なりといふ本傳を。いさゝかも引き出ださゞるは。甚以てその意を得ず。まろ實に惠思が後身なる故に。平氏が太子傳はさらなり。今昔物語。元亨釋書その餘の末書どもにも擧げたるを。わが國の古事をさしおきて。漢土の事のみいひしは。汝が平生の見解と。犬牙せるにあらずや。さて古史の成文といふ物を見るに。日本紀。古事記はさらなり。古語拾遺。延喜式をはじめ。いろ〳〵の末書ども。あるひは世々僞書の論ある書どもにあること。また近來のものが書きしものに載せたる事までも。是は古傳の存りたるなり。かれは幽契に合へりなどゝ。ごたまぜに書き集めて。朝庭の記錄。宗源の古典どもを。わが勝手に作文し。或はつゞめ。あるひはのべ。文を欠き句を補ひて。もつともらしく徵と

んと謬りしこと。掌上に示るがごとし。また汝が俗稱を大角といふことは。軍法分に。大角。少角。及軍旛など、ある文や。倭名鈔に大角。和名波良乃布江とあるに依りて。海中より拾ひ上げし穴ある石の何のこともなきを。天石笛とか名づけて。それを得たるによりて。大角と名乘るよし人にも示めし。天石笛記とかいふ書にも書きあらはしたるおもむきなれども。その實は。かの役公小角が。鬼神を駈役したる神變をしたひ。小角より上に立たんとの下ごゝろにて。大角と名乘しなり。さればこそ寅吉といふ天狗小僧を何國からか呼びよせて。當人もよみえぬ文字をしきりにのたくらせ。一人して吹く事もならぬ長笛を作らせて。人を惑はしたれ。皆これ德を人に示して。信伏せしめんとする奸意。山事に非ずして何ぞや。故に世上にては。汝を山師の學頭とこゝろえ。たま〳〵發明したる古傳說の古意に符ひしがありても。例の山事とおもふ故。門人の外には。誰一人とり上げて見る者もなし。これ等却りてわが國固有の大道。口々に存し。戶々に傳へたる眞傳をも。地に墮すべきしわざにして。憎むべきのはなはだしきものなり。然るに。汝余がことを漢土の風を好み給ひて。文字も禮義も彼風を移しとられたるより。かく成り來つるにて。慨くくちをしき事の極なるをなど、。古史の開題記とかいふものに書きたるは。余が像末の世の人機に。相應すべき見處ありて。儒佛を興隆したる心腹を知らざる故なり。はじめ推古の御時。上古より有り來りの古書へ。漢字を塡て、神代字を刊り。また漢土の書へは漢字の假字をつけて。論語の字を。アゲツラヒカタラヒコトバと訓ませたる類の骨折。なか〳〵容易の事にあらず。さうせねば今の世に成りて。神代の古典を讀むものもなく。漢土の書をわが國の音訓によみおぼえて。重寶にする事も出來ぬ事なればなり。漢土にても。はじめ象形。會意等の六體の古文を作りしが。はなはだ迂遠なるが故に。史籀が大篆。李斯が小篆おこり。なほ簡便につきて。隸書。八分。楷法はじまり。つひに劉德昇が行書。張伯英が草書とうつりしも。みな事の易きにしたがへばなり。しかればわが國神代字の婉嫚なる。末世の急務にあらざるが故に。刊り去りて漢字にあてたるは。日用簡便をおもふの微意

かせて中央に立ち給へば。左に蘇我馬子大臣。右に春日皇子の子。妹子大臣。甲冑を着して相したがひ。跡見赤檮。秦河勝。弓箭を取りて。まつ先に進み。篤胤が家居まぢかく下り給へば。篤胤はこれを見て。是は定めて。天神たちの。予が妖魅を降伏せんとするこゝろざしを感じ給ひて。天降り給ふならんとおもひ。にはかに嗽ひ手水をして。內弟子どもにいひつけ。それお神酒よお洗米よと。槌で庭はく輕薄を。太子は笑ひながら御覽じて。つか〳〵と天降り給ひ。汝はさだめて天津神などの天降りしと思ふべけれどさにあらず。まろはこれ用明天皇の御子。上宮の廐戸豊聰耳の皇太子なり。さんぬるころ。築地の太子堂類燒したるにより。分身の見舞に。忉利天より降る序ながら。汝が不埒をこらさんために。今日わざ〳〵道寄するなりとの給へば。篤胤不平の顏色にて。それがし苟くも朝庭の御民として。皇孫の姓を冐せるゆゑ。且は國恩に答へんため。且は庸愚を諭さんために。若きよりこのかた手筆をとゞめず。目書を放たず。古傳をあきらめ。古意を明すより外に。一點の不埒もいたさず候。何事の不埒か御座候て。御懲しを受け候べきと。いはせも果てず。聖德太子呵々と打ち笑ひ給ひ。まづ一二の不埒を論ぜば。先年汝が書きたる靈の眞柱といふ書は。ある人の歌に。「だまされておどろく人のおろかさよから鐵炮の玉の眞柱と。詠みしごとく。窮理をそしりながら。窮理の窟中に入りて。臆度をもつて人を誑惑したる書なれば。論ずるにおよばざれども。中にも日は旋らずして。月と地と共に動りてやまず。たとへば舟に乘りて海路をゆくに。人。舟の動くをしらずして。岸のうつるがごとく思ふに同じといふ新說を立てたるにより。世の文盲なる者ども。珍らしき說なりと思ひ。囂々として相誹り。中には難破をいひ越したる者もあるよしなれども。あの說は。尙書緯の考靈耀に。地恒動不㆑止。而人不㆑知。譬如㆘人在㆓大舟中㆒閉㆑牖而坐。舟行而人不㆖覺也と。漢土の上古に。はやくさやうの說ありし事なり。世人かの書を見ざる故に。汝が新說のごとく心えて。或は信じ。あるひは惑ひたるなり。汝明の孫瑴が錄したる。古微書の中からそつと見出だして。ひとり發明の說のごとくいひなし。汝が師の本居宣長が說と矛盾して。一家を成さ

皇朝學者妙々奇談 志りうこと

小說家主人著

第一 聖德太子平田篤胤を詈る

平田篤胤は。復古の國學をとなへて。一世を瞞肝し。古事記の序に。「參神作ニ造化之首」とある句によりて。みづから造化參柱の神のこゝろもちになり。世上の儒家佛氏の。すべて狂人のごとく思ひて。とりあへざるをよき事とおもひ。わが國巫祝のとりあつかふ神道をあなどり。儒を誹謗し。佛を摧破し。古醫方をとなへ。一大地球こと〴〵く皆わが國の出店なりと說を立て、。口をたゝき書を作り。近ころ佛法を魔事と稱し。天狗を釋魔ととなへて。古今妖魅考といふものを書き居たるが。ある日空にはかにかき曇り。天狗倒しとおぼしくて。家鳴り震動おびたゞしかりしかば。篤胤こはいかにと驚きて。虛空をきつと見てあれば。黒雲のたえ間より。日月打ちたる錦の御旗一流さしかけて。天王寺の聖德太子。黃金の大よろひを召し。角生ひたる甲斐の驪駒に。白鞍をお

皇朝學者
妙々奇談志りうこと目錄

志りうこと目錄終

志りうことのはしかき

からまなびするよの人どもを。これかれろうじ。しりうごちたるふみはたへなりともたへに。あやしきものがたりとなんいひける。それはた世には。ものにあたりての、しりあざみあへるめるを。このしりうことのふみは。おほやまとの國のものしり人どもに。かずまへらる、かぎりを。かにかくにしりうごちいひあはめつるたはれふみにぞ有りける。さはいへど。おのがひとさかの見えざるかぎりも。人のへきたなむみゆるといふめれば。このふみかける人はた。いかでか人にしりうこちあはめられでやはあるべき。からざまにいひもてゆかば。ことわざのいたちこ、。ねずみこ、になむ似るめるを。かばかりあは〳〵しうろうじ志りうこつべきしれびと。この、ちのよにまさにあらめや。かういふはあめ保みするみつのとしのむつき

源　朝　臣

志りうこと序終

後言序

近時文運之不レ振。世乏二其人一矣。其老師宿儒自居者。非二汲々射レ利之徒一。則必矻々賣レ名之輩。其所レ言。多牽强傅會。守レ株畫レ足。以爲二一家之見解一。或多儲レ書。每レ有二一事一。諏左右抽掠。而傲然夸二辨博一。世亦多眩二惑其說一。而竦然欽慕焉。友人瞋二目於斯一。作レ書辨レ之。名以二後言一。盖有レ所二後言一也。雖レ如下抉剔二疵瑕一。無上レ所レ容。而實大方家之藥石。而眩惑者之金篦也。讀二此書一。而取二其長一舍二其短一。以知三老師宿儒之爲二老師宿儒一。則其於二知人風鑑一。不レ無二小補一云爾。天保辛卯杪冬五日。觀雷老漁序

牢扶持を喰はず。牢役尋ねければ。我は主君ありて。扶持に預る身なり。たとひ餓死するとも。他人の飯は喰はずと云ひければ。長州の役人つたへ聞きて。吟味中入牢の足輕どもの。三度の食を牢内に贈りしに。吟味つまりて。弓町の者三人遠島。其餘一件の者御咎ありて。足輕どもは無事に濟みぬ。飯を喰はざりし足輕は。長州家中にて。三王五郎兵衛と異名せられ。祿もましけるとぞ。弘化三丙午年。件の一件より五十餘年歴て。再び傳馬町より山王祭禮にはかならず出づる。神祖御手張の獅子と唱ふる持夫の者（町鳶の者）と。かの棒引と。口論打ち合ありて。雙方入牢ありしに。長州先例によりて入牢。足輕（入人ときく）へ三度の食を給ひしとぞ。（吟味百日計りにして。木挽町の鳶の者。傳馬町にやとはれ。此口論發頭人とて流罪。足輕どもは追放。内々長州へかへさる）長州侯より御願にて。棒引警固相止む。山王へ金子にて奉納あるとの風聞なり（同年正月廿五日記）

猶記すべき事あまたあれど。他の編作に筆せはしくして。うちおきぬ。ひまを見て書きつくすべし

蜘蛛の糸巻追加終

享保以前。山王。神田明神の祭に。屋臺と唱へ。破風作り四本柱。總黒塗になし。此内に草花人形など。さま〴〵の飾物をなして擔ひありく。其費屋臺一つ三十五匁を限りしとぞ。物の價今より安かりし故なるべし。此事享保六年國禁ありて絶えしに。卅年ばかり後。寶暦に至り。始めにかへり。附祭りと云ふ事も起り。昔飾り物。屋臺をどり屋臺と唱へ。正面に腰掛を置き。毛氈を掛け。女子三人三味線を彈き。歌を謠ひ。其姿は髷の正面に花かんざしの長きをさし。其をたよりとして。紫絹紅裏手拭やうの長を着たる後見あり。此屋臺の後に付けて。男あるひは女のはやし方。いづれも銀地の扇の上に。牡丹の花の作り物を付け。皆紅裏の絹の手拭やうの物を縫ひ付けて。かぶりありきながらわざをなす。是寶暦。明和。安永中三十年ばかりの間の風俗なり。天明中の末に至りて。今のそこぬけ屋臺とて。はやし方是に入りてわざをなす事起りしなり。天明二三年の頃の事かと覺ゆ。松村町に附祭りありし時。踊り指南なる藤間おかん。踊屋臺はて。石橋の所作ありし時。歌は松永忠五郎（狂言坐立歌也）此屋臺大評判なりしに。（是はゑんばより出だしゝにや。其比、しんばの屋臺と云へり）ゑんばの樹に黒びろうどを一拂に切り拔き。下に緋縮緬を着たる者。多くありしを見たり。今はさる事なし。尤國禁嚴なり

十七　祭禮萬度

天明前後の祭禮には。萬度と唱へて。七八寸の角柱の。たけ九尺なるを眞とし。上には横板ありて。是にさま〴〵の飾り物をなす。正面には。扇の形の額をうち。山王と大書し。町名を出だし。或は氏子中など書くもあり。是を手だめしに持ちありく。其力量にほこるを俠とす。此小なるを小萬度とて。子供らに持たしむ。祭禮近なる夜中。角物に土俵を結付け。かりに萬度としたるを。かの俠客ども。萬度の稽古とて持ちありく。各町の手提灯おほかたは。裸體にて鉢卷。緋ちりめんのふんどし。見る者群集をなして隨ひありく。子供等も又是に倣ふ。天明中の風俗なり。扨天明五六年の比と覺ゆ。京橋弓町より藤棚の大萬度出で、（山王なり）町の木戸口に障りて。横になして通る程の物なり。此祭禮の時。警固の棒引。足輕と口論して。雙方入牢のものありしに。長州の足輕七八人。入牢の中にて。一人剛氣の者ありて。三日

はせよと。墨河がいふに隨ひ。五町はせ廻り。名の出し遊女共廿七人。一人三百疋づゝ、櫻田へ贈る時。其禿ども。吉原の姿にて廿七人。五町おの〳〵やり手一人。若者付添。中村座二階座敷。七間つゞきにて。一日見物しけるに。さ　き白金の花咲きたるが如し。其頃街談喧しかりき。天明の時勢を知るべし。櫻田ははからず廿金計りを得て。此上るり吉原はさらなり。世上にはやり。板元蔦屋重三郎も。通油町 大金を得たりと聞きぬ。さて又右名寄に入りし遊女ありし　郎屋。今殘るは玉屋山三郎のみなり。嗚呼變りたる事かな

十四　關の戸上るり

天明四年辰霜月。顔見世より。市村座名題かはり。相長相なり。此顔見世に常磐津兼太夫上るりにて。積戀雪關扉小町。墨染櫻の生靈 菊之丞。四位少將門之助。關守關兵衛實は大伴黑主仲藏大當り。今も上るり殘り。芝居にて度々する事あり。作者櫻田治助なり

十五　高尾の淨瑠璃

天明二寅の秋。狂言中村座伊達染仕形講釋。二番目上るり豊前太夫。土手の道哲團十郎。高尾幽魂菊之丞。上るりげだい新曲高尾懺悔、櫻田治助作なり。此時初日以前に櫻田。家兄京傳翁のもとへ來り。此程五明樓に居つゞけしたる時。此度。路考にさする高尾上るりの文句あらましをつゞれり。いまだ本書にあらねど見給へとて。懷中より小菊紙にあら〳〵と書きたるを。京傳見て。「ねんがあいてのたのしみは。やがておの字の名を付けて。むり酒呑まぬ身とならば。すあしもやぼな足袋になり。とは句々玉の如し。しかしむり酒呑まぬと云ふを。二日醉ひせぬとあらばいかゞあらんと云ひければ。櫻田膝を打ちて然なり然なりとて。家兄が机上の筆をとりて。即座に點竄せり。此時京山傍に居て見たりき。是も此上るりを聞く度に。おもひ出だして。むかしをしのびぬ。櫻田治助は脊高き人にて。此頃五十年餘に見えたり。常に來りて家兄と親しかりしが。家兄は此頃吉原の洒落本と云ふ物に妙作あまたありし故。高尾ざんげの上るりも。吉原の妓女が身の上の事ゆゑ。文句の相談ありしなるべし。かやうの事も記しおかば。身後好事の談柄にもならんかし

十六　山王祭禮

天明二年寅の霜月。顔見世に中村座にて豊前太夫上るり いつき太夫。としろ太夫 にて いろでまろめヽ二人萬歳 花の物云ふ對の春駒 朧月戀の手取。八幡太郎義家澤村宗十郎。鎌ヶ權五郎景政市川門之助 すぢくま 才藏の姿 宗十郎は萬歳の太夫の姿にて。本舞臺せり出だし。見物紀の國屋。宗十郎家名 瀧野屋 門之助家名 と譽むる聲かまびすし。上るり一くさりありて。見物切幕の方に目をそゝぎ。大和屋。澤村屋と口々にほむ。半四郎宗任の妹うとふ。菊之丞うとふの妹やす方なり。半四郎は丸顔にて太く。肉太がらなり。菊之丞は細面やさかたにて。生年も半四郎よりは歳下なり。姉妹のさま眞に迫れり。兩人とも振袖を紫手綱に。金糸にて櫻の花ちらし縫もやう。帶は緋繻子に黄ちりめん。紅うらのほゝかむり。手に鈴付の駒。手綱は紅白。手綱染切まくより半四郎出でゝ。跡より菊之丞出づ。見物の聲雷をなす。兩人義家と見て花道に止まる。豊岡太夫妙音にて。櫻田妙作にて。吉原の遊女名寄の春駒。兩人の所作奇々妙々いふべからず。半四郎は近年うせたる。太夫といひたる半四郎が父 菊之丞は仙女といひしが若盛りの時なり。此時京山十四歳にて。目撃したるをいふなり。此時の役者宗十郎。門之助。半四郎。菊之丞上るり。豊前太夫 作者。左交。櫻田治助 らが影の後年に殘りしは源之助。菊五郎。多門といひし菊之丞。大太夫とよばれし杜若。延壽太夫。鶴屋南北等僅に影ばかり殘りしに。それさへ今は一朝の露ときえて。戯場に人なし。かゝる事にも嗟歎するには。おのれ此年八十二まで。眼の黒き故なり。扨右遊女名寄の文句にのりたるは。若紫。玉屋 千山。丁子屋 雛鶴。同 九重。同 もろこし。同 丁山。同 なゝ里。扇屋 若松。同 連山。同 濃紫。玉屋 花紫。同 誰か袖。大文字屋 かほる。同 花扇。二代目 若菜。わかなや 白露。越前屋 くれなゐ。同 すがたの。松葉屋 都路。同 あげ巻。同 瀬川。同 龜菊。同 すが原。同 江川。同 ときは木。同 かたらひ。同 春日野。同 以上廿七人。いづれも時の名妓。みせにつかず。仲の町をはりたる遊女どもなり。よし原も盛りなりしをしるべし。右の遊女ども此度天明二寅 顔みせの上るり。名よせにいれられたれば。作者櫻田治助へ謝禮有るべしとて。花扇 時は十九歳 が番頭新造花町。才有りしもの故。花扇つき出だしの時より。主人宇右衛門墨河が目がねにて。花菊を番頭になし。此花町故にて花扇大にはやる 玄かぐのよし。主にいひければ。此方のみにて。仲を袖になさんはいかゞなり。五町にはから

三歳。安永六年酉七月三日。戒名實盛中車眞海淨土寺は淺草觀藏院なり。此狂言中團十郎寺岡平右衞門にて。おかるに逢ひ勘平の死を語る時。懷中より勘平が戒名なりとて取出だし。八百藏が戒名をよみ。たかるとゝもになげき。見物に向ひ。をしい事を致しました。おなじみの中車儀（八百藏俳名）憚りながらいづれも樣も。御宗旨の御回向願ひまするとの口上に。見物袖をぬらさぬはなかりしとかぶき年代記に見えたり。此作者焉馬は役者雀なりし故。目前見たる事を記したるならん。此八百藏。其頃役者中の美男にて。婦女としてひゐきせざるはなく。中車うせたる初七日。婦女の參詣多く。淺草近邊のしきみの花。賣切れしと。京山母の物語りきゝぬ。墓前に中車が紋所をつけし銀のかんざし。參詣の婦女手向の心にて。地上にあまたさしおきしとぞ。又戒名一枚百疋づゝにて寺より與へしとぞ。近來婦女たちのひゐきありし役者のうせたる多かりしに。さる事のおろかなるふるまひありしを聞かず。僅に七十年ばかりの間に。世間の人情才智になりしをしるべし。されば小兒の遊にも。目かくし。鬼こつ子と云ふわざはさらなり。杜とつゝきなりと云ふ事。今路上にてする童を見ず。元祿のむかしは。十五六の女子竹馬に乘りて遊びしと。西鶴が草紙に見えたり

十二　芝居三日替り

天明元丑年四月廿五日より。市村座戲場花萬代曾我。二番目江戸京大阪の事を三日替りの狂言に。初日（お夏清十郎　菊之丞門之助）道行比翼の菊蝶。二日目（おちよ半兵衞　菊之丞三津五郎）道行垣根の結綿。（おはん長右衞門　菊之丞幸四郎）道行瀨川の仇浪。上るりいづれも富本豐前太夫。（いつき太夫　あは太夫）狂言作者櫻田治助なり。古今の大當り。秋まで興行せり。（此頃豐前太夫が紋は。つるの丸なり）此時。京山十三歳にて。おはん長右衞門を見物したるに。おはんが美容今目にあり。長右衞門になりし幸四郎は。近年うせたる幸四郎が父なり。踊の手なかりし故。長右衞門が役をさせ。おはんが踊る間。只うで組みしておはんを殺す事の。いたましきを心になげくさま見えて妙なりと。人々いへり。かゝる事今は見ず。戲場の盛なりしと知るべし。近來鶴屋南北の後。狂言作者に。櫻田治助がやうなる上手もなく。役者も亦然り。新作の狂言更になし

十三　春駒の上るり

あからさまに作りたる物あまたありぬ。寛政中の草雙紙に。天下一面鏡の梅鉢と外題したるは。時の執政越中守殿の紋梅鉢なるを當てたるなり。越中守殿を小野篁に見立て。さま〴〵の仁政ある趣向なり。か丶る事もありし故にや。其比。草ざうし開板町奉行にて。可改令ありしが。僅一年にして。町方名主に草ざうし改役と云ふ新令ありて。猥に開板を許し給はず。今に然り

九　十八大通

蛛の糸巻に。十八大通の事あり。おもひ出だして記す。十八大通の中我が識る人兩人あり。一人は本所三つ目に住せし七百石取の官士なり。富饒なりしが。大通の爲に散財し。且又瘡疾を得て鼻をも失へり。一人は近き邊りの築地に住し。四百石の官士なり。是も富饒なりしが。大通のために晩年は貧しく成れり。此人に一奇事あり。相學。易術もしらざりしが。死去の前年十月。日頃親しき朋友の許にいたりて。我來七月七日に天命終はるべし。暇乞に來れり。馳走給はれと所々にいたりしに。いづれも戯言とはおもへども馳走はなしけり。扨翌年の夏に至り。我死期に近しとて。おもふま丶の遊をなし。家來にまで形見をあたへ。云ひしにたがはず。七月四日只二日の病にて。行年五十八九にて死去せり。今は此人の孫の世なり。祖父大通に似ず大武邊者にて。御足高給はり。近々昇進もあるべき人物なり。大通二人姓名はもらしぬ

已上九條は。天野翁自記して贈られしを寫す

十　天明中俳優

天明。寛政の比は。藝道に名人多かり。俳優にも市川團十郎。（六代目。後に向島白猿）中村仲藏。松本幸四郎。大谷友右衞門。中村助五郎。澤村宗十郎。嵐三五郎。二代目市川八百藏。市川門之助。女形に瀨川菊之丞。（仙女の盛）同富三郎。岩井半四郎。中村富十郎。同のしほ。小佐川常世。佐野川一松。山下金作。いづれも千金の役者なり。今に比すれば立者多かりき。尙委しくは初代の立川焉馬が作。歌舞時代記を見て知るべし

十一　中車死亡

安永六年の秋。初代の市川八百藏。市村座にて。八百藏勘平。菊之丞おかるの役にて出勤中。病氣にて引き込み。（代り瀨川雄二郎つとむ）遂に此世を去りぬ。行年四十

寛政年中。松平越中守殿執政ありて。御改革ありて。天明の國體一變したる頃。松平隱居少將一心齋殿御用番。越中守殿へ吉原町見物致し度段相願。本格の供立にて。吉原大門の掟札にも不拘。二本道具を先に立て。廓中を靜々見物して歸られけり。此人は器量才智世にしられたる豪氣なり。おもふ所ありてせられし事と見えたり。かゝる人今は見えず

京山曰。此事は其頃街談にも聞ゆ。しかのみならず。此君日本橋に供廻りをまたせ。駕よりおり立ち。日本橋高札の前に立ち。刀番に刀を持たせ。高札讀み給ふ。供の大勢路上に蹲居して膝を列せり。依之しばらく往來停りぬ。これおのれ目撃したる事なり

或曰。故ありて高輪淨土禪林と云ふ額ある東海寺に參詣したる時。此寺は備前侯の菩提所なる故。一心齋殿の筆なる屏風を見しに。唐紙二字の草書。筆力飛動剛氣紙に溢れり。平日の氣象見るに足れり

七　初　鰹

天明の頃。我家の長臣渡邊松右衛門。石町の豪富林治左衛門が許に至り。今は此大家おとろへ。賤しきくらしとなり 初鰹の振舞に逢ひし時。林が手代に價を尋ねければ。今日は安し。壹本貳兩貳分なりと云ひしとて。立ち歸りて我が父へ語りたるを。我等傍にありて聞きし事ありき。我父鰹を好まれしゆゑ。出入の魚屋常に持ち參りしが。初鰹は高價なりしが。秋の古脊に至りては。肥大なるも價二百孔に過ぎず。今は初鰹も貳兩三兩をなさず。古脊も貳百孔の物なし。いかなる故やらん

八　風邪流行

不圖思ひ出づる儘。むかしをしのびて記すは。寛政三四年の頃にやありけん。江戸中風邪流行して病ざる家なし。市中商人の家など戸さして。家内風邪に付相休申候と札を張りたる家所々に見えたり。殿中伺候の面々。供立減少。長髮不苦と云ふ令を出だす程なり。此比街歌に。そんれはおそろきお世話へと云ふ童謠はやりし故。此風邪をお世話風といへり。其翌春。京傳作草ざうしの新板に 此頃は。上下一部紙員十枚なり おせはと云ふはやり女郎深川にありて。客床に入れば團扇を以てあふぐ。客たちまち襟元ぞつとして風をひき。熱にをかされ。樣々の事をなす趣向なり。大に世に行はれ。予も幼年所持せり。是も六十年のむかしとなりぬ。此比の草ざうしは。其時世の事を

もある事なり。されど此酌取女も質素の風ありて。髷結に紅絹の切を。よしの紙に包みて用ふる事はやり。地女等も是を學べり。今は田舍娘も髷結に縮緬を用ふるなり。天明年間町方の女ども。櫛髮(くしまき)といふ髮はやり。髮を束ねて櫛につらぬき。根元を文通の反古にて卷きし物なり。今は見る事なし

五　雷除に赤もろこし蟲の藥　青酸漿

淺草觀世音每年七月十日を四萬六千日とて。參詣群集なす。此事昔はなかりしを古老いへり。さて又此日。此山内にて。赤き唐もろこしを雷除とて商ふ。俗子買はざるはなし。そも〳〵赤き唐もろこしは。近き文化の始め。何國に生ぜしにや。其以前はなかりし物なり。本草家栗本隨仙院に尋ねしかど。書物には見えず。近來變生の物なりといへり。されば文化年中よりの品物なるべし。雷除なりとは何によるにや。芝愛宕山の四萬六千日は。每年六月廿四日なり。此日御夢想の蟲の藥なりとて。青酸漿を商ふ。用ひやうは。水にて鵜呑になすなり。參詣の諸人爭ひて是をかふ。此事の起りは。明和年中愛宕下の靑松寺前なる。倉橋内匠（或は井上助之進の家來ともいふ）の中間。此四萬六千日の日。主人の廣庭掃除より青ほうづきを取り來り。今日是を丸呑にすれば。大人は癪の根を切り。小兒は蟲の氣を去る。愛宕山の御夢想なりとて。戲れに家中の者等をだましけるより起りし事と。其邊の老人いへり。かの赤唐もろこしも此たぐひなるべし

京山ひとゝせ。此四萬六千日に參詣したる時。社前にて此青酸漿を賣る物三人あり。諸人より立ちつどひ。こゝにて小兒に呑ますもあり。あるひは町人など立ちながらいたゞきて呑むもありしに。其中に大諸侯の重臣と見えて。若黨兩人めし連れたる半老の武士。若黨に命じて青酸漿をもとめさせ。ほうづきを水に入れたる茶碗を。社に向ひていたゞき呑みしを。おのれ傍に立ちて見ながら。此人主人の國政を攝けばと嗟歎したる事ありき。五雜俎に。樹の皮に草鞋をうち掛けしが。つぎ〳〵にうちかけ〳〵して。終に草鞋天皇と祭りしと云ふ事見えたり。赤もろこし。青ほうづきも。和漢古今の駢事なり

六　豪　氣

に。小兒の頃此凧をあげざるを耻とせり。是余の居宅の邊りの凧屋に近き故なり。其後京橋彌左衞門町と覺ゆ。和泉屋と云ふに。室崎屋と同じ凧を商へり。是今の如く。凧の奢侈になりし始なり

三　たぼさし

今貴賤となく用ふるたぼさしと云ふ物は。寛政七八年の比。一橋殿御館の女中の召仕ふ婢女が工風にて。厚紙にて手づからたぼの形に作り。墨もて塗り用ひしに。髪結よかりしとて。（今とは少し異なる）此部屋方にて。婢女多く用ひしに。作り様粗なる故。損じやすきをいとひ。常に出入する小間物屋神田明神下に住める。兵藏と云ふ者にかやうの物をとて。其たぼさしをあたへて作らせよとて。誂ひしより世に流行せしとぞ右の兵藏は。予が許へも出入の者ゆゑ。此度か樣の髮結ふに便利なる物いできて。女中方多く用ひたまふは。いかにやとて。予が下女に見せしを。下女どもとゝのへ用ふと。予が父聞かれて。驕りの端なりとて不興し給ひき。後々に至りては。世上一統の用具となり。今猶殘れり

京山按ずるに。寛政年間翁の隨筆。賤のおだまき（寫本）といふ物に曰。延享の頃女中のたぼさしと云ふ物。初めてはやりいで、。京より下りしを。母をはじめ召仕ふ女どもまで。めづらしがりてもてはやしぬ。鯨にて作りたる物なりとありて。圖をいだしたる傍註に。此物今すたれて。誰しる者なしとあり。其後。小林歌城翁（御旗本隱居）鯨にて作りたるたぼさしのいと古きをおこされて。時代の考證を尋ねられしに。かのおだ卷にのせたる圖と同じ物なり。形圖の如く。總長六寸。左右の張出し四寸なり。おだ卷にある延享の物に定むるよしは。此頃の女のたぼ先。かもめつとゝ名つけ。たぼのさがり襟に至る程なり。右の圖のたぼさしの丈の長を以て。延享の物と定むべし。おだ卷に此物今すたれて。誰知る人もなしとあれば。近來のたぼさしは天野翁の說の如く。婢女の作り始めしは。古今の闇合にて。いとめづらしき說なるかし

四　町藝者

天明の頃は。世の中賑はしく。武家にても少し酒盛めく折は。町藝者とて酌取女を招くは。何れの家に

蜘蛛の糸巻追加

本編の糸巻。かりに清書したるを。齋藤彦麿翁に見せけるに。翁が説を標注して返されし故。おのれおもへらく。靜庵翁も八十餘の人と云ひ。博識の文人なれば。おもしろき追加もあらんと。其事を文通してもたせやりしに。四五十日ありて。返しおこせしに。一言の追加もなかりき。後に人づてにて聞きしは。靜庵より轉借したる人ありて。寫し取りたる人もありしとぞ。さればかりそめのすさび。世にちりしも知るべからず。扨武名世に高き天野三郎兵衞殿の後裔(屋敷築地備前橋向)今の三郎兵衞殿の御父。今隱居なる某殿。武事の外文雅もある御人にて。おのれ京山雅莚に侍したる事しば／＼なり。ある日。蛛の糸卷といふ物作りし由語りければ。そは見たき物なり。借覽せんとありし故。見せけるに返されしにそへられし追加の說。兩三紙に書かれたるを。文のまゝ追補す

一　手遊盆太鼓

寛政の比迄は。六月の比より七月の末まで。手遊やにて盆太鼓と云ふもの鬻げり。こは昔の盆踊りに。手太鼓をうちて踊りたるなごりなるべし か様の形にて。縁は竹なるを。紙にて張り。黄に染め。草花など書き。丹もていろどり。膠をつよく引きたるゆゑ。うてば少しく響をなす。柄は木にて墨にて塗りたるものなり。予も幼き頃手遊にしたり。此物今淺草寺中見世といふにあるを見れば。形は以前にかはらざれど。眞の皮張にて。漆の塗柄なり。價も以前に十倍せり。僅に六十年前にして。小兒の手遊さへ。樸奢の變風。嗟歎すべし

二　紙　鳶

寛政の比迄のいかのぼりは。今の如く(嘉永)横骨多くいれしはなく。八枚張以上ならでは。七本骨はなし。繪樣は京山翁が本書に云はるゝ如し。されば價も今より下直なり。一枚張十六孔。二枚張三十二孔。四枚張八枚張も。一枚十六孔に價定まりてひさげり。然りしに。寛政八年の頃。鐵炮洲船松町に室崎屋と云ふが。今の如き手を盡くしたる畫樣をなし。大凧仕立と唱へ。一枚張にて骨七本なるを賣り弘めし事ありき。價は昔しに一倍して。一枚張三十二孔なりし

草雙紙の變格

天明年間に記し、如くの世上なれば。洒落本流行。繪雙紙も滑稽の笑ひをとる旨趣としけるに。京傳翁十九歳の時。（天明二年）始めて御發賣買物（全二册板元鶴屋自畫）といふ繪ざうしをか、れしに。其年四方赤良（蜀山）作にて。繪雙紙評判記つたや板出板ありし時。京傳翁總軸巻極上々吉にあげられき。是道を戲作の花澤へ踏み落とされしはじめなりけり。をかしき本を作るゆゑに。戲作者の名あり

享和のはじめ。南仙笑楚満人と云ふ者（芝神明前へ獨居板木師。學問はなけれど。風韻なりし老人なり）敵討三組盃と云ふ前後六册物を出板（芝神明前和泉屋市兵衛板）して。大に流行し。翌年京傳翁敵討千鳥の玉川前後六册大に行はる。是より戲作變じて實錄めかす物となりぬ

文化の中比にや。京傳お六櫛木曾の仇討を作られし時。書師豊國おもひつきにて。卷中に人初めて役者の似顔になせり。又口繪といふもの（さうしの始めに。一卷の人物を出だし。讃などあり）つかひはじめて加ふ

かやうにおもひ出だしつゝ。筆を操りつるは駑馬のあゆみぞかし。むさし野の古草は。たづぬるに果なし。且白駒の寸陰もをしければ。筆を山東庵の窓下に拭ふし（此一卷は悉く實記にて。いさゝかも文勢虚談なし。我ならぬ八十に及ぶ人はしりつべし。四五十年以下の人はいかゞ思ふらん）

文化三年丙午初夏朔日筆を起し四日のともし火のもとに記し終る

七十八翁　京山老人百樹

蜘蛛の糸巻 終

（此本我家にありしが類焼の時失せぬ）此雙紙大に行はれてより。年々作ありて高名になりぬ。蔦屋に三年ばかり奉公して。よき入聟の口ありとて。家兄をたのみいとまもらひ。飯田町中坂なる下駄屋にて。家主なる後家へ入聟となりしに。筆硯を好む心には。下駄屋はいやなり〳〵と常にいひしが。千蔭翁の門人となり。出精して少しく筆意を得て後。下駄屋を止め。其うちにて手習の指南をなし。かたはら戯作をなし。後には娘に聟をとり家主をつがせ。悴清吉に或家の醫師の名目を買ひとり。宗伯と名乗らせ。下谷宇鼠屋横町といふ所に。玄關付の家を買ひて。同住せし事多年の間。著述を以て家内の口をすごせり。此間に一子宗伯死す。かくて天保十一年秋書畫會をなしたる時。藏書のこらず賣り。書畫會の金を合せて。輕き官士の名跡を讓り受けて。宗伯が一子につがせ 今八十一歳ばかりならん。四五年前より眼病つのりてと盲人となり。宗伯（此者は。二十年前死去）が妻に筆を執らせ。字まども口授して。今に著述の上梓あるは一奇人と云ふべし

家兄死去の時。（文化十二年乙亥九月八日）馬琴へも知らせやりしに。寺へばかり（本所回向院）悴宗伯を名代として。自身不來。舊友は蜀山翁までも來られしが。馬琴が來らざる故。人々宗伯に尋ねしに。病氣にはあらざるよし。七日佛事の時も馬琴をも書中にてまねきしかど。佛前へ少しの物使のみにて。其後亡兄のいたみもいひにも來らず。書狀にもたづねず。音信不通なり。しかるに馬琴書畫會をなす時。京山。京水越後の留守とは聞きながら。家兄亡後始めて來り。自筆の扇二本持參したるは。いかなる心ぞやと。妻旅より歸りて云ひける故。舊友なればすてもおかれずと。會の後ながら。目錄もちてかの下谷を尋ねしに。うりすゑといふ札を見て。行きし先まで尋ぬべきにもあらねば歸りぬ。此事は天滿宮も照覽あらせ給へ。いつはりにあらず

右の次第なれど。京傳。馬琴と雙璧によばゝるゝは。出藍の才子なり。殊更八犬傳の末に自稱もあれど。よみ本にて全部五十卷にもおよび。人に推稱せらるゝもの。源氏物語。水滸傳にも比すべし。よみ本といふもの。天和の西鶴に超り。自笑。其磧。寶永。正德に鳴りしが。馬琴には三舍すべし。惜哉此人にして此病あり

佐竹の留主居 春町。小石川官人 好町。四ッ谷官人 全交。芝赤羽根觀世坐狂言師 京傳。

曲亭馬琴は。寛政の初。家兄の許へ。酒一樽持ちてはじめて來り。門人になりたきよしをいふ。所を聞けば。深川仲町の裏家に獨り住むよしをいふ。家兄曰。草雙紙の作は。世を渡る家業ありて。かたはらになぐさみにすべき物なり。今時鳴なる作者皆然り。さて又戯作は。弟子としてをしふべき事一つもなし。さればおのれをはじめ古今の戯作者。一人も師匠はなし。まづ弟子入はおことわりなり。しかし心安くはなしに來給へ。また出きたる物あらば。みる事はみてやるべしと示されけるに。しば〳〵來りてもの問へり。其後すこしばかり卜筮をしりしゆゑ。うらなひにて錢をとらんと。しるべありとてかな川宿を心あてに。錢次第にて永くも足を止めんとて。いとま乞ひに來りしが。其後六七十日。音づれを聞かざりし故。馬琴は狼にや喰はれつらんなど。家兄戯れいはれしが。ある日。今歸りしとて來り。旅寐のはなしするうち。物など調じてくはせ。さて立ち歸りしが。或日又來りて云ふやう。旅の留守に出水の是寛政三年の洪水ために。疊殘らずくさり。壁も落ち。勝手の物流れうせしも多し。旅の稼ぎもはかぐ〳〵しからざりし故。今我足なき蟹の如し。いかゞせんといふ。家兄曰。しからば當分我所に食客せられよと聞きて。馬琴大によろこび内弟子の心にて居し故。衣服までも心つけ給へり。かくてありし事半年あまり。ある日地本問屋蔦屋重三郎通油町京傳戯作あまた上梓したる板元來り。家兄にいふやう。此節見世の番頭引員にていとまをやり。帳場あきて見世あしゝ。みれば居候の男年比もよし。帳だに付くればよし。かゝへたき物なり。いかゞあらんといふ。家兄曰。酒はのまず。手も書き。文字もよめ。作氣もあり。てうどよからん。志かし實體とたしかには請合申されぬ。何れ當人に咄して見んと。蔦屋歸りて此事を咄しければ。戯作者になりたく家兄をうらやむ馬琴なれば。大に喜び家兄世話にて別に請人ありて證文をなし。蔦屋が家僕となりしは己目前知りたる事なり馬琴は京傳翁の大恩受けし人なり。元武家浪人にて醫者の内弟子となり。瀧澤宗仙と改めしかど。町醫の方を追出だされ。飯田町邊の家主となり。變名をいとや清右衛門とし。終に作者となりしは。皆京傳の大恩なり。序に曰蜀山人の高弟子なる宿屋飯盛は。蜀山人死亡葬送の時に行かず。師恩を忘却したるは。馬琴と一對の不義にて。人倫とは云ひがたし

さて奉公中。花の春虱の道行全三冊。但一冊五枚宛春朗今の北齋畫にて蔦屋出板。馬琴自序に京傳門人とあり。

はれけり。又五つ計の男の子。祭に出立のまゝなる死骸をいだき。なく〱ゆく老人もありけり。水上には祭のねり物にいでたりと思ふ花笠。挾ばこ。茶屋臺といふ物など流れたり。初めは二三十人の死體といひしに。追々波の上に浮き流るゝにより。官命にて諸方の船集り。小き碇に苧縄を付けたるをなげいれ。死がいを船にひろひ。東のきしなる空地につむ。(御船組手屋しきの前なり)町與力。同心。爰所にありて指揮す。初は老若男女一所に積みおきけるが。死がいを貰ひに來る者。見わくるにたよりあしとて。綿服。絹服。老若。男女。年のほどまでも一類にわけおきける故。夜に入りても見わけ安かりしとぞ。是にても溺死の多かりしをしるべし。(人形町所役人。名前橋請負罰せられし迄。聞き書きしおきたれど。さてはうるさし)なほ委しくは。此時家兄の記されたる夢の浮はしといふ寫本一冊子あり。今なほ藏す。おのれ七十年來大火洪水の死亡は聞きたれど。同じ時。同じ所にて。一瞬の間にいく百人水死したるは。古今きゝもおよばざる天變なり。是をおもへば。大に群をなすとき。弱きはしを心なく渡るべならず。風烈又は雨中暗夜の船行なども。あやうし〱

けふのお祭は評判なり。天氣はよし。内に居たまふ日にはあらず。われらが行く先は親類なり。いざいさとすゝめられて。おのれが妻子らもゆく心なりしが。不思議の事ありて行かざりし。誘ひし神田邊の醫師の娘十三歳。下女十八歳二人溺死せり。此とき誘ひに隨ひなば。今日の顏は見られじ

兒ども遊び

寛文の比は十五六の娘。竹馬にのりて遊びし事を。正德の比(寛文より五十年後)自笑が(京板)書きしものに見えたり。今思ふときはうそらしけれど。誠にありし事なめり。今より六十年前の比は。市中の街上にて。十より以上以下男女の子供。うちまじりて目かくし。鬼兒つ子。杜とつゝき。草履かくし。かくれんぼなどととなへて。夏の夕。往來の妨になるほどむらがり遊びしに。今さる事する兒どももなきは。さかしくもなりしにや。おのれをさなき時と。今の子ども遊びのかはりし事。なほさま〲なり(安永天明の比の小兒は。寛文の比の大人の如く。當時の小兒は。安永。天明の比の大人にまされり。こざかもしき事なり)

天明中戯作者

天明中草雙紙の作者。有名の者。通笑(横山町道具屋)喜三二。

案ずるに。荒凶は。大方五十年を一期とす。前記をおもひはかるに。飢饉の備はなしたきものなり。一人三度の飯の一箸を米につもりて。五十年貯へおかば。荒凶の時。一家安心はさらなり。他人をも救ふべし。是何のざうさもなき事なれども。吉に居れば凶をしらず。成なすこと安して成る人を聞かず

文化四年丁卯八月廿九日。深川八幡祭禮の日。朝四つ時比。貴重の御船。永代橋の下を通るとて。空船なれども。橋番人繩を橋のきはに引張りて。人を留めけるに。珍らしき祭禮ゆゑ。千家萬戸見ざるはなく。時刻は四つ時。人の出盛りなりしに。大方は皆此永代橋にかゝるゆゑ。一條のなは幾百人を止めし事半時あまり。まちくたびれたる時。それ通れとて。繩を引くを見て。數百人の駈け通る足の力。體の重み。數萬斤の物をまろばすが如くなりし故。細き長橋いかでかたまるべき。橋の眞中より深川の方へ十間計りの所を。三間あまり踏み崩しければ。いかでか落ちざらん。跡の者はかくとはしらずおしゆくゆゑ。おされて跡へすさる事ならず。横へひらく道なき橋の上なれば。夢のやうに入水したるも多かるべし。此時一人の武士刀を拔きて。高くひらめかしければ。是を見て跡へ迯げ歸りて。道を開きたり。我も行きて橋を渡らんとするに。込み合ひて渡りがたければ。豊海橋の邊なる家より、舟にのりて。川中まで漕出だす比。橋は落ちて。目くるめ、きもをひやしたり。よくぞ橋を渡らざりし。後に聞けば黒川穂足は。川下の水くずとなりしとなん。いとびんなきわざしてけり　此一刀にて多くの人を助けしとぞ。此事世上にてほめけるが。其名をいふ人なかりしを。今年まで四十年。其人をしらざりしに。今年の晩春。幽篁庵の席上話此事におよび。おのれが見たる所を語りしに。見たるとは。はしのおちし時。かけ行きて見たるはなし　御主人久松助殿五十三　曰。一刀をふりしは。南町奉行組同心渡邊小右衛門と云ひし半老の人なりと聞きて。其時にあひて。四十年しらざりしを發明して。耳を新にせり。此人なくんばなほいく人か溺死せん。無量の善根といふべし

此時橋落ちしと聞きて。おのれ駈け付け。岸に立ちて見たるに。年の比は十六七の女。色小袖に髪は亂れたる。死體をなはにくゝして。小船にゆひ付け。水中を引き行く。今死にたれば。紅おしろいも落ちず。船には四十ばかりの女。顏に袖をあて聲をあげてなく。母ならんと見るもいたはし。付き添へたる男。町人體なり。愁の色見えざるは。他人とおも

神職三千五百八十八

右の外御用達町人。能役者。諸家の家業町住の者は除くなり

賢臣擧げらる

打ち續く荒凶ゆゑ。富農ども穀を出ださず。官柄にも動かし易からざるに似たり。されば。國憐普からんとて。此年天明七丁未六月廿日。賢臣伊奈半左衞門。當年二十七ぬきんでられて從五位下攝津守に任じ。御小姓組番頭格假に五穀運搬の總司令に命ぜられ。米穀買ひ上げの金子二十萬兩を降し給ふ。是他用ならず。市中御救のためなり。余此ときいまだ藩に入らざりければ。國恩の一飯を喰し、ゆゑ。今拙筆に染むるはいといとかしこし。伊奈殿總司と聞きて。富農ども招かざるに集り來り。穀路大にひらけ。時の相場にて買ひ上げ。價を減じて諸民にうりたまへり。官仁職憐に感服して。諸國よりも穀船日毎に入津す。船印に伊奈の二字を染めたる幟をひるがへせり。依之米價追々引き下げ。六月雨に一斗八升の米。七月二斗八升。八月四斗二升五合。九月六斗八升より。僅に一二升上下して年おはり。萬民喜躍して。春をむかへり

謹んで案ずるに。左傳に有徳は萬世祭らるといへり。萬世は大數をいふのみと。經にも見ゆ。豈萬世のみならんや。蕩平の天運。茲に循環して。白川の賢君重任に坐し給ひ。奸猾職を削られ。賢者擧擢の時に遇ひ。寶暦以來三十年來。侈放の國體を一洗したまひければ。天もまた豐兆を下し。五風十雨にして。五穀富饒。萬民鼓腹して。萬歲を唱へり

追加　凶荒年表　永代橋崩る

寛永十九年壬午飢饉　是より三十三年の後
延寶三年乙卯同　五十七年經て
享保十七年壬子同　五十二年經て
天明三年癸卯不作
天明六年丙午飢饉　四十八年經て
天保四年癸巳同　此年八朔大風雨

九月比より白米小賣。百文に五合五勺。御救米兩度。翌年春六合五勺。北國不毛餓死多し。然るに。江戶の窮民に菜色なかりしは。御德澤に浴する故なり。仰ぎこうむるべし。國恩一日も忘るべからず

屋を打ち毀す。此の時おのれ十九歳。毀したる跡を見たるに。破りたる米俵家の前に散亂し。米こゝかしこに山をなす。其中にひき破りたる色々の染小袖。帳面の類。やぶりたる金屏風。こはしたる障子唐紙。大家なりしに。内は見えすくやうに。殘りなく打ちこはしけり。後に聞けば。はじめは十四五人なりしに。追々加勢にて百人計りなりしとぞ。同夜中小網町。伊勢町。小船町。神田内外。藏前。淺草邊。千住。本郷。市ヶ谷。四ッ谷同夜より翌日廿二日に至りて。曉まで諸方の蜂起。米屋のみにあらず。富商人は手をくだせり。然れども。官令寂として聲なし。廿二日午の刻。町奉行出馬幷御先手方十人捕へ方の命あり。又竹鎗御免死骸酬に及ばざるの令。市中に降りしゆゑ。市人勢を得て。木戸〳〵を〆切り。相識し言葉を作くり。互に加勢の約をなし。柏子木をしらせとす。茲に至りて。蜂起も又寂として聲なし。江都開發以來。未だ曾て有らざる變事地妖といふべしと。諸人いひけり。後に聞けば大店の閉したるは。大八車四五輛に。大勢取り付き。撞き破り。打ち毀したるのち。酒食をむさぼりしが。同類盜を禁じたるは。いはゆる江戸子なるべし。されども。蜂起散じたる跡には。盜もありしとぞ

此時の町奉行は。曲淵甲斐守侯。牧野大隅守侯なりしを。石河土佐守侯。柳生主膳正侯。池田筑後守侯。山村信濃守公。初鹿野河内守など度々かはりし。

道路に散たる物を取りて。逃げる者あれば。打ちこはし人取り返し打擲して取りたる者は引き破り。捨て置く事。町火消の掟によく似たり

市中の人數

同月廿日の蜂起より。廿一 ○廿二日。廿三廿。廿四日まで。江戸中諸商人戸をとざして業をせず。依之米はさらなり。諸人日用の品に困る。廿五日初めて戸を開く。町奉行に公命ありて。御救被下。曲淵甲斐守 牧野大隅守 四日市に小屋かゝり。施行場とす。壹人に玄米貳合五勺。豆貳合五勺。銀三兩貳分づゝ。小兒七歳以上迄。御救被下。此時町家の人數を檢戸ありしと。ある記に

町數二千七百七十餘町

表店二十萬八千餘家

市中總人數百二十八萬五千三百人

内 八千二百人 男 六千三百人 女 二千五百人 遊女禿

出家五萬二千四百三十八人 一向宗の女除く

山伏七千二百三十人 妻帶の者の女除く

ぬ。地妖といふべし

火事

天明六丙午の春。件の如く天鼓の妖。玉川水妖あり。是より先。正月中旬こゝかしこにて。今年は火災ありと。誰いふとなく言ひふらし（此時何となく。柱壁など。夏の日にあたりたる如く熱かりしを。人々あやしく思ひしなり）扨毎日風烈しく。物の乾く事不思議なり。同月廿二日。湯島臺より出火。西北の風烈しく。狂言兩坐燒亡。北は馬喰町。東は濱町山伏井戸の邊にて消火す。明くる廿三日。西久保紙屋町より出火。北風烈しく。同町海岸にてきゆ。同月廿七日午の刻。本所四つ目より出火。釜屋ばりにて消ゆ。其夜。御搗屋より出火。北風にて火の粉。金城にふる。依りて俄に公命ありて。八手の大名并町火消にて飛火なし。同年四月九日。日光山風雷烈しき日。日光奉行天野山城守臺所より出火。四十一坊民家十三町燒亡。江戸は四月半迄雷なく。およそ三十七八日晝夜風烈しく止む時なく。諸人手を束ねて。火災のそなへをなすのみ（此比。町火消のまとひ。銀箔にて。大小二本を用ひしに。寛政に禁ぜられ。今の如くなる）同年五月半比より。七月迄霖雨。晴日なく。道路田の如し。諸人洪水をおそれしに。果して七月の末。稀有の洪水にて。猿ヶ股の堤きれて。八十餘村を流し。溺死數を知らず。深川の大家は軒を浸し。小家は棟を越す。御藏前通り船にて通行。大橋東橋も追々洪水にて崩れ。兩岸通路たえしゆゑ。親族水災を案じ。人心安からず。官船數艘溺を助け。あるひは屋の棟に露命饑餲を救ひ。兩國廣場。馬喰町馬場二箇所に小屋を作り。朝夕の食を賜ふ。是より先。市中の童謠に。親もくれば子もくるといふことはやりしに。果して此洪水あり。此洪水五十餘日にして。常の水路になりぬ（此春。玄米一兩に八斗。七月洪水に六斗。十二月もち米兩に貳斗五升）

うちこはし

翌年天明七丁未年五月。玄米兩に二斗五升。麥八斗。大豆六斗。同月十日比。白米百文に付三合五勺。豆七合。同廿八日比。百文に三合。御藏米三十七石に。金二百五兩。一兩に一斗七升。錢兩に五貫二百。玆にいたりて米穀動かず。米屋ども江戸中に閉す。同月廿日の朝。雜人共赤坂御門外なる米屋を打ち毀す。（此時數十人の打こはしの中に。美少年一人。大入道一人まじりて。少年は飛鳥の如く飛び回り。入道は金剛力士の如くにて。目も綾なしと。見たる人語りき。こはあらびにつれて。暴神の顯形したるなるべし）同日同刻京橋南傳馬町三丁目。萬屋佐兵衞萬佐とてきこえたる。米穀問

手に銀紙張りたる劍を持ち。鬼を追ひまはし。窃に佐野の眞似をなして。街上をかけめぐり。門々に錢を乞ふ。よき案じなりとて。門毎に錢をあたふ。是余が見たる所なり

朝參り

同五年乙酉六月。嵯峨釋迦囘向院にて。開張群をなし。朝參りの者。さま〴〵の好みをなしたる提灯を高く照し。夜をこめて群集なし。是をとて觀に行くも有りければ。茶見世。辻賣。晝にまされり。此年例より大暑なりしゆゑなり。されば新穀みのりて。諸人安かりけり

天鼓の妖

明くれば天明六丙午元日も。丙午日蝕皆既（元日四つ時より日蝕闇の如し。諸侯は大半登城なし給ひしが。退出なりがたく。下馬の供待の士。蝕にあたりて氣絶せし人。二三人ありしとぞ）いかなる天災にやならんと。諸人安き心はなかりしに。初春より雷にもあらざる響。天にあり。北に聞くかと思へば南にあり。四方所を移し。晝夜定まらず。物しる人は天鼓ならんといへり。おもふに。明の英宗が天順七年癸未の年。天鼓の妖あり。時に賢臣李賢凶作なりと評したる事。明史に見ゆ。果して同年八月より。大樹君御不例。八月一日。田沼侍從城を削られ。減地一萬石。雁之間詰。屋數三日の間に取り拂ひ。相良城御取上（城受取脇坂）同時稻葉越中守職を削られ。減地三千石。九月八日薨御の普聽あり。十月四日御出棺。同月十二日。何者の浮言にや。兩水道に毒ありと流傳して。市中騷動云ふべからず。愚人は懼れ。智者は笑へり。此妖言江戸中一時なりき

此時おのれ十八歳なり。よく覺えしは。我家に家翁の養ふ猫と雞とに水を呑ませてこゝろみ給ひ。猶茶を煎て。色香をためし給ひしに。常にかはらざりしゆゑ。ゑかく〴〵の由。緣者はさらなり。よしみある者はこゝろみ給へとをしへくれしかど。用ひざるもありけり。此比は未だ今の如く堀井戸多からざりしゆゑ。水道を汲み置きたるをも捨て。堀井戸へ至りみれば。我より先に汲む人群集して。よりつかれざれば。また足を遠きにはこびてみれば。こゝも群集なし。むなしく空桶をもち歸るも多し。是夜中の事なり。諸人水に噪ぐ事。火に騷ぐが如し。清潔なる水色に。高野水の浮名を流したる事一日一夜にして。いづこよりともなく止み

行人坂の大火

明暦三年丁酉正月十八日出火。同十九日の夜火しづまりたる次第。幷に主なき燒死十萬八千人を。本所に埋め。常念佛の庵室を官より建て給ひし事どもは。武藏鐙と云ふ。（板本二巻あり給入にて上下）物に詳なり。庵室は今の回向院なり。此比未た兩國橋なし。此火事の後かけぬ。右大火後廿七年たちて。天和元二度打ち續きて。大火ありしことは。天和笑委集（寫本十巻）中に一條ありて詳なり。（八百やお七。天和二年春三月大罪の事あり）さて右大火の後百十六年を歷て。明和九年は。明和丸の歲なりとて。雜說さまぐ\ありしに。果して二月廿九日。西南の烈風砂礫を飛ばしけるに。午の上刻。目黑行人坂大圓寺所北長五郎坊主と異名せられ惡漢。（十八歲とぞ）師匠にいさゝかうらむ事ありて。物おく所に火を放し。二日二晚にて。火消えたる事。（目黑より吉原まで燒け。千住にて止まる）今も巷說に傳ふ（燒死四百餘人。燒亡の地里二里。幅一里。長六里）

白刃仇を斬る

天明四年の春。米價貴躍。同年三月廿四日。若年寄衆退出の時。新御番佐野善右衛門。田沼山城守殿を斬る。翌日死す。主殿頭長男大目付松平對馬守殿。佐野を組み留む。御目付柳生主膳正殿。佐野が血刀を奪ふ。同四月三日　山河下總守殿檢使として上り。坐敷庭上にて切腹。家斷絕。父主殿頭は三日過ぎて常の如く勤仕。主頭殿は事なく職に坐す。佐野殿は淺草本願寺內德本寺に葬る。香花を手向くる人。貴賤老若群をなせり。此年おのれ十六歲。柔術の師本間丈右衛門（照降町新道住）に隨ひ。德本寺にいたりしに。先門前に莚を敷き。花線香を賣る所三ケ所。門に入れば。四斗樽に水をたくはへて。手洗ふまうけとして。錢を乞ふ。墓には花を立てしさま林の如く。地上線香煙り人を襲ふ。群集開帳場の如くなりき。かく有りつるゆゑに。寺社奉行の令として。參詣を禁じゝゆゑ。門を閉ぢけるに。夜中窃にくゞりより參詣せしとぞ。かく群をなせし由は。佐野氏白刃を揮ひし翌日より。高直なりし米價俄に下落せしゆゑ。佐野を世直し大明神と市中にて唱へしゆゑなり。是地妖といはゞいふべし

乞食鐘馗に扮出す

此比。非人一人は。七つ梅の酒樽の莚を着。鬼の面をかぶり。（田沼の紋所七つ梅）一人は。劍菱の莚に。鐘馗の面。兩

市中灰降る

天明元年。田沼侯御老職御勝手。同三年關東飢饉下に其略を記す

同年七月六日夕。七つ半比。西北の方鳴動。諸人肝を冷す。翌七日猶甚しく。江戸中に灰ふる。是淺間山の燒けたるなり。此時おのれ十五歳なり。六日は時ならぬ風吹き。北烈しかりしゆゑ。屋根などに灰のつもりしを。人々灰ともおもはず。風塵とのみ見すごしけるに。六日の夜中。積りし灰を七日の朝。人々見て愕然せざるはなし。おのれも硯箱の塗ふたを。物干にゑばし出だし置きたるを取りいれ。指頭にて字を書きて試みしに。霜の厚く降りたるが如し。家内うちよりて。是を見て。いかなる天變にやといろいろに評しけるに。家翁いひけるやう。寶永四年。不二山燒けたる時。江戸に灰のふりしことあり。昨日鳴動したるは西北の方なり。此方に當りて。江戸近き高山は淺間なり。常にも燒くる山なれば。おそらくは淺間の大燒ならんといはれけるに。人はゑかりともおもはず。此日は一日往來もまれなり。八日は快晴無風灰も降らず。諸人安堵しけるにや。往來常の如し。九日の夕方。亡兄の友なりし伊勢町の米問屋丁子屋兵衞門が長男。斐太郎とて。千蔭翁の書も歌も門人なるが來り。上州よりの書狀なりとて見せけるに。淺間の燒けはじめて騷然たり。亡兄。家翁が推量の違はざるを感服せられき。家翁は享保七年の生れなれば。近き寶永の燒を。親たちの話しにも聞かれしならん

此一條を書きつゝ。ふと心にうかむやう。犬馬の老は論ずるにたらざれど。卓識はさらなり。少しく事物の義理を辨へたる老人は。事の實地を踏みて感服したる事多なれば。一言の下にも味ひある事多し。されば老人の詞は馬耳すべからず。然るに。若人は老人を流行おくれとおとしむれど。其流行といふは。五十歳の人ならば。物心を覺えて僅三十年の世を歷て。六十年七十年の世を歷たる人をおしとむるは。槿露松霜をゑらざるが如し。子に霜踏すといふも。松霜のよしなるべし。おのれ犬馬の老にしてかくいふは。おのが田へ引く水くさのやうなれど。若人の爲に記す。是も流行のおくれたりとやいはん

いろは茶屋二朱。音羽二朱。赤坂二朱。氷川二朱。市ケ谷八幡社内。二朱※麴町天神かげま。大久保ゑく〲谷切みせ。二朱下谷柳の稲荷四六と。切みせ三島門前ひとよ泊り。二朱切二百淺草朝鮮長家切みせ。同所大根畑切みせ。同所堂前切みせ。赤羽根二朱。芝神明社内二朱にかげ。まもあり高輪二朱。中町切みせ。花ぶさ町かげま。二朱三田三角二朱。淺草馬道二朱十。匁蒟蒻島靈岸島の内。埋立地。二朱蒟蒻島は。横堀を埋立てなれば。あるくにぶら〲ふるひ動くゆゑに名。つけたるなり八町ぼり代地かげま出合茶屋。切二百。泊り二朱上野下佛棚。同所三枚橋東側。けころ切二百。泊り二朱此けころといふ名義は。此比。淺草。兩國。橋町。石町邊にてころび藝者と唱へ。百疋づゝにてころびねの枕席したるものありしゆゑ。此名あり。けころの名は。蹴轉ばしの義なり。此けころ切二百。泊りは客より酒食をまかなひ。夜四つより二朱なり。一軒に二三人づゝ、晝夜見世を張り。衣服は縮緬を禁じ。前だれにて必半疊の上に座すなり。案ずるに水茶や。茶汲女の姿なりつらん此賣色大方佛店より軒を並べて。四五十軒許りありつらん。是おのれが目睫をいふ。けころの姿。繪にも團扇にも賣り出だしたるを。余一柄を藏す。今は珍奇なり。さて賣色。藪下。麻布市兵衛町切みせ。鮫ケ橋切みせ。兩國回向院前銀猫二朱。同所辨天金猫一分。同所おたひ。同所松井町二朱。入江町四六。深川仲町切二百。大橋十匁。二朱櫓下一切二朱。裏やぐら同。すそつき同。三十三間堂四六。直助長家同。入船町同。網打場。同古石場一切二朱。新石場同。新地同。大橋びくに切二百。下は百。泊。り二朱以上三十三ヶ所。此外船まん頭とて。深川吉永町に軒をつらねたるもの。夜に入れば船に一人づゝのりて。所々川岸。あるひは高瀬船に色をうる。百。下なるは五十提重。切賣女と號して。色を賣る。美惡にて價上下あり地獄。夜鷹右追々絶えて。今依然たるものは。北廓はさらなり。品川。新宿幷夜鷹のみ

疫病

安政二年夏。疫病流行死亡多かりしゆゑ。官より寺院へ御たづねありしに。疫死十八萬人。蓋し中人以上は。病者稀にして。下賤に多かりしと。同三年の冬。嚴寒にて。川々氷厚く通船なりがたく。諸品高價同四年。凶作。同五年。麻疹流行。三十以下の人。貴賤となく。病まざるはなし。同九年。夏洪水。米價貴躍す。同九年。五百羅漢寺蠑堂建つ。安永終はる

慈愛せられ。十三四の比より。師に志たがひて。志ば〳〵瓊殿錦室へも舘入せりとぞ。是寛政の比なり今より五十餘年前案ずるに。寛政の末。尾上松助今の菊五郎の父九尾の狐の狂言に。始めて中乘りといふ事をして。世の中を動しけるに。松助かつて山田に志たしかりし故。松助は三味線の上手なり是によりて山田檢校。人氣をはかりて。今も彈く奈須野といふ新曲を作り。臨機の才。其餘を知べし。今琴の音する所。山田流にあらざるなきは。山田。山登二檢校の名譽といふべし山登。今年六十四歳なるよし。門人いへり

料理茶屋

百五六十年以前は。江戶は飯を賣る店はなかりしを。天和の比。始めて淺草並木に。奈良茶飯の店ありしを。諸人珍らしとて。淺草の奈良茶飯喰はんとて。わざ〳〵行きし由。近古のさうしに見えたり本書より抄出し置きたれ共。坐右におきてむつかしければ。引據せず志かるに。都下繁昌につれて。追々食店多くなりし中に。明和の比。深川洲崎に。升屋祝阿彌と云ひし料理茶屋。亭主は剃髮にて。阿彌といふ名をつけしは。京都丸山に傚ひたるなるべし。此者夫婦。人の機をみる才ありて。志かも好事なりしゆゑ。其住居二間の床。高麗緣長押作り。側付を廣敷とし。二の間。三の間に座しきをかこひ。中の小亭。又は數寄屋鞠場まであり。庭中は推して志るべし。雲州の御隱居南海殿。おなじく御當主の御次男雪川殿。志ば〳〵爰に遊び給へり。此兩殿は。大名の通人なり。雪川殿のかくし紋。▮▮▮此の如く川といふ字の羽織。名あるたいこ持は着ざるはなし。升屋祝阿彌。件のごとき大家ゆゑ。諸家の留守居者の振舞といふ事。みな升屋を定席とせり。其繁昌今比すべきなし。廣座敷に望陀覽の三字を鑄物になし。地は呂色。緣は蒔繪。四角に象眼のかな物。大さ六尺ばかり。書漢文にて南海君の祝阿彌へ賜ふゆゑよし。二百字ばかり記しあり。嗚呼盛唐の宮閣も亡ぶる時あり。此額近ごろ。質の流れを買ひしとて。或人の家にて見しが。後に聞けば今の白猿に與へけるとぞいひし。天明に磯せゝりの通人が遊ぶ料理茶屋。葛西太郎隅田川より秋葉へ往く。堤の下り口。今は平岩大黑屋孫四郎。同所秋葉甲子屋。眞崎二軒茶屋。深川八幡境內百川室町横町

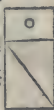
かくし賣女

天明中盛んなりしは。娼妓の賣色。根津二朱。谷中

至情の歌妓をつれて。江戸へ逃げ來り。余が住みし同街の裏にすみ。名を利介とて。朝夕出入しけるに。或る時亡兄いふやう。大坂にてつけあげといふ物。江戸にては胡麻揚とて辻うりあれど。いまだ魚肉あげ物は見えず。うまきものなれば。是を夜見世の辻賣にせばやとおもふ。先生いかん。兄曰。そはよき思ひつきなり。まず試むべしとて。俄にてうじさせけるに。いかにも美味なれば。はやく賣るべしとす、めけるに。利介曰。是を夜見世にうらんに。そのあんどんに。魚の胡麻揚としるすは。なにとやらん物遠し。語聲もあしく。先生名をつけてたまはれと云ひけるに。亡兄すこし考へ。天麩羅と書きて見せければ。利介ふしんの顔にて。てんぷらとはいかなるいはれにやといふ。亡兄うちゑみつ、。足下は今天竺浪人なり。ふらりと江戸へ來りて賣り始める物ゆゑ。てんぷらなり。てんは天竺のてん。即ち揚ぐるなり。ぷらに麩羅の二字を用ひたるは。小麥の粉のうす物をかくるといふ義なりと。戯れいひければ。利介も洒落たる男ゆゑ。天竺浪人のぷらつきゆゑ。てんぷらは面白しとよろこび。見世を出だす時。あんどんを持ち來りて。字をこひける故。亡兄余に字を書かしめ給へり。こは己れ十二三頃にて。今より六十年の昔なり。今は天麩羅の名も文字も。海内に流傳すれども。亡兄京傳翁が名付親にて。予が天麩羅の行燈を書きはじめ。利介が賣り弘めしとは知る人あるべからず。此説實に侍り。我幼き比は。行燈に本胡麻揚とありしなり　さればおのれ増修したる北越雪譜の二編。越後の小千谷にて鮭のてんぷらを食したる條下にもいへり。おもふに物の始源。おほかたはかやうなる事にぞあらんかし

琴曲の變格

近古の琴曲は。八つ橋検校一變して。明和に生田検校出で、二變し。世上の琴聲生田流にあらざるはなし。予が姉ふたりも生田の門人なりき。扨天明に山田検校出で、。寛政。享和を盛りに歴て妙音なりし上に。風雅もありて。文墨の名家にも交り。自作の琴曲。或ひは名家の作もありて。文句みやび。且艶色もありて。調の手。雅俗に渡りておもしろければ。生田の森は落葉して。山田の稲いやさかえて。琴曲の風三變して。門人多かりし中に。今の山登検校出藍の聞えありて。山田も我が跡をつぐべきものと

たゝ紙。文字には畳紙ともあり。しかれば。今の鼻紙は昔のたゝう紙なり。さて鼻紙袋といふ物は。余の父の物語に聞きしは。寶永の比よりの物にて。（今より百四五十年前）はじめは絹にもあれ。木綿にもあれ。四角にぬひくゝるべき紐をつけ。内には途中用の物を入れしを鼻紙袋とて。妻などに細工させ。今の如く（天明をさしていふ）鼻紙袋屋といふものなかりしといはれき。扨烟草入は。余の幼年（安永中）の比は。今の鍔袋［図］の形にて皆こはぜがけなり。表は似た山木綿。裏は黒繻子。鼈甲のこはぜがけなるを。上なきものとして。人も手に取りて見る程なり。價は五匁位なりしに。安永の末の比より。丸角はやり出だし（今も室町に居あり）銀の櫻鋲に。織部形の［図］［図］［図］かやうなり。是今いふかな物の起立なり。又此同家にて。織部形といふ烟草入をはじむ。［図］此形今にのこる。天明の比。かの通人ども銀の櫻鋲に。織部形の煙草入を持たざるはなし。寛政に至りて（今より六十年前）浅草田原町に。越川屋といふ袋物見世はやり出だし。懐中ものに一層の奢侈を增長せり。此店御藏前札さしどもよりはやらせはじむ。名物の製功をうつし織らせたるは。此見世に權輿す

菓子の變格

天明の侈風なるも。未だ菓子には移らず。饅頭羊羹を最上としたる鶯餅。一名を仕切場と唱へ。茶店にも用ひ。通人の稱美したるものなるに。今は駄菓子や物となりて。おつかア四文くんねへの いやしき小兒の物となりぬ。然るに。菓子追々奢侈にうつり。寛政の始。大久保主水の菓子。杜氏のはて喜太郎といひし者。日本橋の新道の小家の表は格子作りにて。夫婦に丁稚の召仕一人のくらしにて。自ら上菓子少しばかりづゝ造りて賣りけるに。煉羊羹といふ物を製しはじめけるに。今のやうに。さゝ折といふものもなければ。口に奢る者。重箱を持たせて取りにやるに。けふは賣れ切れたりとて。空しく歸る。さらばあすとて。煉羊羹のために招きたる客をかへす程の稱美と云たるに。今は諸國にもある中に。日光なるは江戸にまされり。僅に六十年の變化。素の侈りし事。菓子に於ても此の如し

天ぷらのはじまり

天明の初年。大坂にて家僕二三人も仕ふ商人の次男。

店にて。六疊に勝手のみにて。天井張らす。茅屋根の裏みゆ。庭よりの上り口に。雙六盤のやつれたるをすゑて踏段とす。三尺の佛壇ありて。圓窓を開き。内に小石を敷き。瀬戸もの、佛具有り。正面に佛像はなくて。白紙一枚を張り。或日亡兄眞顔おのれもしたがひ。白猿を尋ねし時。佛像なくて白紙あるを。兩人いぶかり問ひけるに。白猿うちゑみつゝ。御兩人さまよく見給へ。あの紙は西の内なりと答へければ。兩人はさらなり。おのれが若かりし心にも。おもしろく覺へて今にわすれず。此時天井に竹を渡し。ひらきたる屛風のせてありしを。眞顔尋ねければ。白猿曰。風ふけば硯にちりおちて。物書くにあしきゆゑなり。此屛風につけて狂歌あり。先生いかゞあらんやとて

天井をはれば鼠はさわぐなり
水もたまらず月も宿らず

是等の風骨元政の筋脉ありて。俳優にはをしき人物なり。隱居の雜費。一月に金貳歩づゝと定めたるを。（芝居茶屋いづみやが妻は。白猿が實子）むすめよりおくる。をり〳〵は魚類をもおくるゆゑ。心足らずとおもふ事なし。老いたる役者ども、私の樣に世をすつれば隱居なるべきに。をごる心をすてざるゆゑ。いつまでも顏をぬり候と。同じ時の咄しにいへり。此白猿の名をつぎながら。今の白猿。罪を驕奢に得て。棄市の罪に遇ひ。孝心なる三升顏も見られず。父子山川を隔つるはいかにぞや。隱居白猿泉下に告け（柏子）うたせて。今の白猿をにらまざらめや。事皆ぜいたくより出づ。おそるべし。愼むべし（五代目白猿初德藏。六代目三升早世。七代目白猿初新之介。八代目當時）

按ずるに。ぜいたくと云ふ詞は。おのれが若かりし比には聞かず。今より十四五年以來。市中よりいひはやしたる詞なり。たとへば銀器の物をくすべ。それとみえざらしむる。是ぜいたくなり。されど人に對しては。是はぜいたくなりとはほめず。是は御好事といふ。さすればぜいたくは誹る詞の氣味あり。好事の文字は。五雜俎にも多く見えたれ共。ぜいたくの文字。なに物にも見えざるはさらなり。またおもひえず。卓識の人に問はん

鼻紙袋の始

按ずるに。上古の人といへども。他行の時は。懷中に使用の紙なくんばあるべからず。是を古書にはた

娼家に樓號の始

娼家に樓號を付けはじめしは。五明樓なり 扇屋五明は扇の異名 墨河好事なりし故。樓號をつけしより同時に。雞舌樓 丁子屋。鷄舌は丁子漢名 松葉屋を松葉樓又は館といひしは。今すこしあるべし。うちつけにてをかしからず。玉屋を玉樓は。玉の字うごかしがたし。近來はさまゞゝの樓號あるが中にも。大黑屋を甲子樓といひしはいさゝかにや。五明。鷄舌。松葉の三軒は。今絶えたれば。獨り玉樓のみ光りをうしなはざるは。代々主人綿服にて。萬事素をつとむと聞く。以玆光を失はざるならん。返々も今いふせいたくは。亡家の毒水なり。若人たち愼むべし。懼るべし 文化の比に至りては。深川新地などの岡場所にても。大觀樓。百歩樓。抔似けなき號を犯せり。料理茶屋。蕎麥屋など皆僭上なる世となりぬ

文墨の名家

天明を盛。歷々たる名家。儒子。曲山 北鵬の二家は少しおくる 詩は。西野 市川小左衛門。米庵の父 和歌は千蔭。書家は親和。東江其寧。淳信。畫家は朱紫石。唐畫 浮世繪に北尾重政 書も。よし 勝川春章。角力に谷風。小の川。遊女に花扇。瀧川。俳優に團十郎 白猿。中村仲藏。狂歌師に四方赤良 後に蜀山人 朱羅漢江。元の木阿彌。大屋裏住。鹿津部眞顔。宿屋飯盛。錢屋金持。右いづれも。おのれ十五六歲の時。見聞の名家なり。文墨の人々は。亡兄の友なりし故。余も又咫尺にて。容貌今猶目にあり 此比三井親和は。高名なれば。煙草入女帶な織物にし。浴衣手拭など染めものにしたりど

白猿の質朴

市川白猿。ひとゝせ木挽町座にて。春狂言に岩藤の役をなして。大入をしたる時。眞顔。白猿より棧じきをもらひ。亡兄 京傳 をさそひ。余も見物をなし。幕の間に。三階の部屋へ禮にゆきし時。白猿。お初玄かへしのまくの時なれば。中通の女形におしろいさせゐたりしが。役前なりとて無禮を一揖なし。おしろいつけさせつゝ云ひけるやう。昨日も顏におしろいつけさせながら。涙をおとし候。それはいかんとなれば。御素人様ならば。悴へ家業をゆづり。隱居をもすべき歲なり。然るにいやしき役者の家に生れし故。歲にも耻ちず。女の眞似するはいかなる因果ぞと。しきりに落涙いたし候。役者として。こゝに心づきては藝にもつやなく。永く舞臺はつとまらぬものなりと。歎息して語りけるに。はたして二三年の後。寺島村 あざ名向じま に隱居せり。隱宅は人の孫

たる費。三百金なりとぞ。此一事を以て。富饒を知るべし。此大名の眞似したる悴。をろかなりし故。家次第におとろへて。家亡び。晩年剃髪して俳諧師となり。名を百路と云ひて。天明の比。藏前邊に住し。富家の遊び坊主となり。亡兄に俳諧の上の事など。度々聞きに來りしが。をかしき坊主にて。是が事にはくさ〴〵をかしき話あれど洩しぬ。此大上總屋の後世に聞えしは。江戸町一丁目扇屋宇右衞門墨河と號す。妻をいなきとて。夫婦とも。歌も書も千蔭門人にて。天明中の盛家なりき。亡兄したしかりし故。二人が短冊など。今猶家に殘れり。墨河が親はちいさき娼家なりしに。墨河にいたりて大家になりしとぞ。天明の比。初代花扇東江門人なり。遺墨世にちり殘る中に。見めぐり稲荷の額に。自筆のよみ歌のこれり。同じ時。同家の瀧川は千蔭門人なり。千蔭も東江も。天明中の名家なれば。これが門人となしたるは。墨河が一つのはかりごとなるべし。しか思ふ由は。墨河が計にて。一ヶ月一度づゝ。おゐらんと稱せらるゝ者へ。客の多少により。品に位を付けて。褒美をとらすなり。然るに瀧川が客の。花扇におとりたる事多かりければ。其後の時。位よき品をわざと瀧川方へもたせやり（花扇は表座敷。瀧川は裏座敷。三間つゞきなり）ふたゝび輕き品なるをもたせやり。使にわざといはするやう。今のは。表座敷へ參るものなりしを。間違しとて。よき品は花扇へもち行きたりければ。瀧川心に不足して憤發の心を起し。勤に精を出だしければ。兩妓一雙の珠光をなしゝとぞ。是亡兄が目睫の話なり。おもふにかゝる才量ありし故。家を起しつらん。墨河一代は盛なりしに。親骨折れし後。今扇の風ありやなしや

妓　風

天明の後廿年ばかり。文化の比まで。おゐらんと稱せらるゝは。大方は横兵庫といふ髪の風なりしに。近年此風たえ。むかしを失ふ。さしかざるかんざしは。昔にまさりて。大きになりしなり。天明の比は。いかにも細くかるげなり。されば今の如く。馬蹄は頭にのせざりき。女の髪の結ひぶりの始は。唐輪。其後。兵庫。次に島田。丸髷（一名勝山）次にしひたけ。其沿革は余が歴世女裝考に圖說を擧げて記しぬ。近きに上梓せん

經師に張替さする時。經師言ひけるやう。こゝは何人の住ひし跡やらん。あるじは物好みにふけりたる人にて有りけん。天井を張りたる紙を見るに。一つ紙にはあらず。日本國中の紙なりといひけるよし。ある隨筆に見えたり。おもふに紀文零落しても。心のをごりかくのごとし。此一を以て盛なりし時を知るべし。今いへば是ぜいたくなり。ぜいたくは驕奢の陰病なる物なり。此病ある者。黄金湯を用ふれば。ます〳〵上昇して治しがたく。その上遂には破財亡家の死にいたる。亨和の比。川柳點の句に。「唐やうで賣店と書く三代目とは。よきいましめぞかし。扨本編の神代のなごりにもいはれしごとく。天明の比。花車風流を事とする者を大通。又は通人。通家など、唱へて。此妖風世に行はる。其中にも。十八大通とて。十八人の通人ありけり。首長たる者は。日本橋西河岸の（材木屋と聞ゆ）十曉。御藏前なる（札差大口屋治兵衛）文魚なり。ある日。十八人の通人集會ありし時。文魚銀のはりがねにて。髮を結びて出でしを。通者も見て譏り云ふやう。文魚が銀の針がねは。今日一日の晴ならん。さのみ稱すべきにもあらずといひしを聞きて。此後は平日も銀の針がねにて髮を結ばせしとぞ。其比巷說にもいへり。此文魚も紀文の如く零落して。御厩川岸の格子作り。間口二間ばかりの家に住ひたる比。ある貴人の御隱居。文魚が河東節の上手なるを聞き給ひて。召されける時。上るり終りて。別の座しきにて酒食をたまひ。文魚なりとて目錄は多からず。八丈縞五反給はり。文魚が連れ來りし。名のきこえたる河東ぶしの三絃彈にて。藝を業とする者なれば。目錄を給はりけり。時に文魚たまもの、反物を今日はたいぎなり。是は寸志なりとて。一人へ三反。一人へ貳反。其座にてとらせたるを。貰ひし三味線彈。昨夜かやうの事有りしとて。亡兄に語りて。文魚を稱したりき。おのれかたはらにありて聞きぬ。三味線彈は山彥源四郎なりき。紀文が天井の紙。文魚が八丈縞の一對の奇談と云ふべし

墨河が智計

北廓にて娼家の富饒なりしは。明和中にて。大上總屋なり。あるじが俳名を一魔といへり。淺草三社祭禮のありし時。幼き悴を大名の行列にいでたゝせんとて。道具類殘らず新に作らせ。二日ねり物に出だし

しこへ假宅して。夜見世の賑ひ。天明中の一壯觀。筆にも詞にもつくしがたし。猶七八十の老人に尋ぬべし（此時五明樓は。高橋の大家茶屋石橋よろすと云ひしをかりて。抱の遊女計は。こゝにて客を迎ふ）因にいふ。花街燒亡は。明曆の大火に。元吉原類燒して。同三酉年。新吉原に移り。十六年經て。延寶四辰年十一月七日江戸町二丁目花屋といふ遊女屋より出火。一廓殘らず燒亡。此時假宅なし。此後九十三年經て。明和五子年十一月七日（延寶出火と同月同日）江戸町貳丁目。四つ目やと云ふ遊女屋より出火。一廓燒亡。假宅始めて願濟み。今戸。橋場。山谷。鳥越此のち三十年經て。明和八卯年四月七日。揚屋町河岸梅屋（遊女屋なり）出火。假宅前に同じ。一ヶ年經て。同辰年二月廿九日（此年の秋。安永と改元）目黒行人坂より出火。南風礫を飛ばし。一廓燒亡。假宅。兩國橋邊。深川。其後十年經て。天明元年巳の九月晦日。伏見町家田屋（茶屋なり）より。出火。一町燒亡。假宅なし。四年經て。天明四辛辰年四月十六日。水道尻秋葉常燈明より出火。假宅。兩國。並木。駒形。黑船町。其後四年經て。天明七未年十一月九日。角町より出火（火元きゝもらす）假宅。大橋邊。深川新地。同八幡前。中洲。高橋此後八年經て。寛政六年四月二日。江戸町二丁目丁子屋（大家の遊女屋）より出火。假宅。田町。聖天町。山の宿。瓦町。七年經て。寛政十二年申年二月廿三日。田甫龍泉寺門前より出火。假宅同所。十二年經て。文化十三子五月三日。京町の娼家海老屋吉助より出火。假宅同所。此後今年まで。三十一年のあいだの燒亡は。今の耳目にもあれば。さのみはとて記さず

十八大通

元祿の比。紀伊國屋文左衞門といふ材木の問屋。本八丁堀壹町殘らず持地面にて。大廈高堂を構へ。片名に呼びて紀文といふ。今も其名人口に膾炙す。其角門人にて俳名を千山といへり。其角五元集にも。千山が宅にてと云ふ句二三首見えたり。紀文ひとゝせ。歳越の夜花街に遊びて。豆の中へ小粒金を交へて。豆蒔をしたる事。口碑にもつたへ。物の本にもみゆ。（委數は己が家兄醒齋京傳翁著。近世奇跡考にあり）紀文かゝる奢侈に家産を破り。晩年深川一の鳥居の邊に住し。こゝに歿せり。其後。俳諧の宗匠某。紀文が住みすてしを買ひけるに。居間の天井紙張にてありしが。いたくふるびたれば。

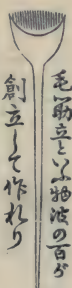
かり宅　中洲

天明四年辰四月十六日。廓中水道尻秋葉常燈明より出火。廓中殘らず焼亡して。假宅は兩國。並木。駒形。黒船町なりき。此時兩國なる今の淡雪の店。橋より左の方の二階計りを。吉原の若栄屋假宅にしたるに。（あわ雪の隣。二軒をかりて勝手としたり）何者にや。世の中はさかさまにこそなりにけり上には若栄下にあわ雪。同七年未の十一月九日。角町より出火。假宅。大橋。深川。新地。中洲（按ずるに。中洲は安永二亥年ひらけ繁榮。十二年にして寛政三年戌の秋。御改革にて町家取り拂ひ。埋め立てありて。元の川つらとなれり）深川富永町。高橋此假宅は己れ十七歳の時なり。抑中洲といひしは。今五十代の人も名のみ聞きてしるまじきは。論におよばず。中洲とは大橋より南の方。川岸凡三丁餘。川中へは二丁ばかり。安永の末に埋め立てたる新地なり。名主は二人。湯屋三ヶ所。人家はいか計りありしやらん覺えず。行くての道は。大小三四路も有りしやうに覺ゆ。かくし賣女の家あり。岸には水茶屋鱗次として軒を並べたる中に。大橋の方の岸に臨みたる所に。四季庵といふ大廈高臺の料理茶屋有り。三夏の比は。岸にのぞみたる茶見世の軒に。提灯をかけ渡したるが。水面に映ずるさま。遠目には龍の都のこゝに浮み出でたるかとおもふ。夜見世の見世物も多かりし中に。鶴市といふ非人。歌舞妓どもの身ぶりこわいろをなすに妙を得て。しかも美男にてありし故。婦女子にすかれ。濫行もありしとぞ。扨其構をなしたるさまは。今の見世物芝居にかはらざれど。木戸錢は一人前百銅なり。是にて鶴市が藝の妙をしるべし。此比。市川八百藏とて。婦人には殊さらひゐき有りし立ものに。此鶴市常もよく似たる故。顔をつくり。衣裳を飾り。其聲色をつかへば。八百藏こゝにあるが如し。是鶴市がはやりし所以なり。なす所の藝はすべて相手をとらず。物ぐるひ。物語。扇の手など。其外さまざまの事を八百藏。團十郎。仲藏。團藏。菊之丞。里好（女形）又は中役者迄も。其こわ色はさらなり。顔つき身ぶり。それかあらぬかと。目をぬく計り奇々妙々なり。始めは常なみの非人。手つま一つ二つなし。扨鶴市出で、一藝をなし。是をひと幕として打ち出だす（一まく一人前百銅）中洲ありし比は。五月節句より。夜見世ありき。鶴市の外。見世物。辻賣。千燈萬照かゝる中に。彼の四季庵へ五明樓（扇屋宇右衞門）をはじめ。北廓の娼家こゝか

此賓引いくたりもこゝかしこの辻に立ちて。さ來ざい／＼と呼ぶ。兒ども此聲をきゝつけ。足のふむ所を知らず。此賓引大方は。松の內を盛りとし。十日比に止む。新春の一つの景物なりしに。寛政に禁令ありて。聲なし

女髮結の起立

安永の末（再按山下金作寶曆七年はじめて下り。安永の末は二度目の下りなり）山下金作といふ女形下り。深川の榮木といふ所に住む。時鳴の正旦なりき。此者のかつらつけ（かつらの髮結なり）仲町の妓に通じたりしに。或日此妓の髮を金作がかつらの樣にゆひけるを。妓輩うらやみ。謝物をおくりてゆはせけるに。後は一度を二百錢と定めけるに。結はするもの多ければ。かつら附を止めて。妓の髮を結ぶを渡世としけり。甚吉といふ若き男。弟子となり。一度を百づゝにて。妓家の仲居どもの髮までゆひけるに。百づゝ故。百さん／＼と呼ばれ。つひには名となりけり。此百は擧音聲。天然婦子の如く。男に情をゆるすを好みけりとぞ。されば女の業なる。女の髮を結ふ事をも習ひしならん。此者後に八丁堀大井戸といふ所に住み。藝者ども或はかこひもの抔ゆひあるき。女の弟子ありて。弟子に髮をすかせる其跡へまはりて結ふ。うかれ地女など結はすれば。茶屋ものなり。驕りなりとて。他に譏らるゝ故。此惡風俗他の女には移らざりけり。こは寛政二三年の比なり。是女に髮結といふ惡風起りたる起源なりけり。其後百が弟子の玄孫弟子。或は自立の者も多く出來る故。起立の百をくづして。五十となり。三十二文。又は二十四文の安賣もありて。女髮結千筋に別れ。招く物も。櫛の齒を挽くが如くなれば。今三十代の市中の婦女は。髮結ふすべを知らざるに至る。是他なし。かの百が妓風の毒を殘しゝなり。然るに。維新の御時に遇ひて。此妓風一時に止まるは。恭くも賢き事にぞ有りける

百樹再按。天保十五年辰。大坂板に二千年袖鑑と云ふ。事物の始源の年數のみを記したる物に。女髮結は明和七年より始まるとあり。思ふに。件の金作がかづらつけ妓の髮を。後には女髮結を渡世としたるも。大坂の風によりたるなるべし。しかりとすれば。女髮結は大坂を始とすべし

毛筋立といふ櫛波の百が
創立して作れり

猶ありし中におもしろしとおもひて。今にわすられざるもあれど。さのみはとて記さず此席中の酒池肉林はさらなり。其比躍り子と唱へし時。島の藝者ども十四五人酌を操る。鬼に鐵棒といふ題の景物は。其比はやりし銀の延べのきせるに。虎の皮の煙草入なり。茶番の連中多かりし故。夜明けたれども。戸を開かず。燭をてらして茶番のはてしは。朝五つ比なりし。此一事にて天明の時勢を知るべし

　うちはうり　扇賣　いかのぼり

か丶る世の中なりしかど。猶古質の殘りたる事もあり。此比は今の如く。繪店にて錦繪の團扇は稀には賣るもありけれど。はしぐ〵には繪見世さへなければ。團扇を物に入れて脊負ひ。竹に通したるをもかたげ。ほんしぶうちは。うちは。更紗うちは。ほぐうちはとよびて賣りありく。大方は若衆ごさえなり。錦繪の團扇一本十六文なり。其麁末なりしをしるべし。凧も二枚張四十八文。繪は杉の立木に片馬。居浪に日の出。雲に舞鶴の羽など。いかにも麁末なる繪なり。これはおのれが七つ八つの時なり（安永四五年。安永は九に改元）其後十二三の比（天明元年）にいたりて。字凧と唱へて。龍。蘭。鶴の字など雙鈎。字のめぐりを藍。又は紫に色どりたるを珍とし寶として喜びけるに。今の字凧は。下品として子供よろこびず。又扇賣といふものありけり。扇の形したる箱をいくらも重ねたるを。肩におき。あふぎ〵〵とよびありく。其姿は。染めゆかたに白き脚半。じん〵〵ばしより。おほかたはなまめきたる男。あみ笠をかぶり。呼び入るれば。地紙を見せ。其座にてをりてうるなり。凹 □△ 是正徳比の遺風なりしに。寛政にいたりて絶えたり

初代市川門之助と云ひし凡役者。扇賣の狂をしたる事ありき

市川門之助〔幼名辨藏〕市川男女藏〔幼名辨之助〕

市川門之助〔幼名多門〕

　はせうり　さござい

同じ頃。餅米をいりてふくれたるをはせといひて。是をば。必年の始の蓬萊には。家毎にしく事なりし故。大晦日の明ぼのに「はせやはせ引と賣りありく聲。いと春めきて心よかりしも。今はきかず

同じ比。辻寶引とて。寶引の糸を持つ物に。くさ〵〵の手遊を入れならべ。糸一筋の價。手遊のよきあしきに依りて高下あり。當れば随意の品一つをとらす。

蜘蛛の糸巻

岩瀬京山著

茶番

おのれ京山は。明和六年己丑の歳の生にて。天明元年辛丑は。十三歳なりき。（今弘化三年丙午より六十六年まへ）されば物心ありて。見聞したる事ども。心の底にたもちたるをおもひ出だすに。天明元年の十二月ある所なる勢家にて。年忘れとて茶番といふ事ありしに。客は大家の留守居たち。或は權家の歷々たちなり。茶番の題は。「鬼に鐵棒。「二階から目藥。「猫の尻へ木槌などいふ卑俗の諺なり。此比神田邊に住したる生花の師匠。門人（神田小柳町に住める。生花の師匠。其邊の町醫某の娵門弟なる名を松と云ひし由。其比のはやり唄にいさゝか心の底にのこれり）の小娘を強淫して。淫門を破りしに事起りて。獄に下りし事。巻說雷同の比なりければ。彼の猫の尻へさいつちと云ふ題を強淫の事に趣向したるは。此時に北廓のたいこもち名高かりし五町と云ひし者也。是は猫の題を取りたる勢家の命じたるなり。扨茶番の日の晝七つ比。吉原にて勝れて美しき禿十四五人。扇屋。松葉屋。丁子屋。玉屋などより五町が才覺にて。やとひたるを家形船にて來り。一石橋につけて上り。茶番ある家の門より。廓中の姿のまゝなる禿ども入りたるを。おのれ十二三の時。目の前に見たり（此時おのれは此勢家に出入する醫者の悴と同じく。茶番の見物に禿ども共に門に入りし時なり）扨猫の茶番に成りし時。五町坊主のかづらをかぶり。猫の禿に花をしふるさまをなし。強淫におよばんとする時。十二三人の禿出でゝ。五町を打ちたゝきなどし。つひに裸になしたる時。張子のさいつちを五本持ち出だし。すこし歳たけたる禿。五町が尻をうちて。餅つくさまをなす。此時大小の皷を打ち。三味線にて餅つきの歌をうたふ。皆廓中の歌妓なり。五町は猫の身振りをなして笑を取り。禿どもに米の粉をふりかけられ。箕の中にいれられ。禿どもに引きづられて樂屋に入る。一坐絕倒せざるはなし。扨五町かたちを改め出づれば。跡より大きなる三方へ。蒲色びろふどにて作りたる煙草入。同じきせる筒へきせるを入れ。うち違ひにとぢつけて。さいつちと見せたるを。大三方へ積み上げしを。前に置きて。五町が口上に。是は何樣の茶番なりと。面白く口上をのべ。三方なるを總景物とて。連中へ禿にくばらせけり。

蜘蛛の糸巻目錄

追加目錄

蜘蛛の糸巻目錄終

鞬櫜以來。蕩平二百餘年。枝をならさぬ松の色。千とせの春を契りて。昨日の淵は。今日の瀬と換りつつ。地廣ごり人集りて。萬民鼓腹の逸樂に遇ふは。かしこくもかたじけなくも。嬉しくも面白くいふは更なり。抑大江戸の繁昌たるや。武藏野のにげ水はいづくへかにげゝん。なりかけの井も跡なし。絶えて玉川の流は。衢の下をくゞりて。千門萬家國のめぐみを若水に汲み。風呂の澤に浴するも馴れ。流れはかくあるものと思ふめるは。いと／＼かしこき事ぞかし。されば夫を筆にのせて。大江戸の移り換りたる事どもを。書き記したるものは。落穗集。事跡合考。むかし／＼物語（一名老人雜話）春臺獨語。松下隨筆。龍溪隨筆。我衣の類。猶あまたあれど。明和以前の人たちのすさみなれば。近き六十年の昔をば。今の若人はしらじ。筆にまめなる人のもよふしたるがあるべけれど。世に出でざるにやあらん。これら思ふにつけても。彦麿翁が神代のなごりの冊子は。若き人にひらがす浦島が玉手箱にぞありける

蜘蛛の糸巻序 終

叙言

齋藤彦麿大人は。おのれが兄なりし醒齋翁の。學の窓におとづれかはしたる知音の益友なり。さればおのれもまた其琴の緒をつぎて。おとづれを絶たず。机下に問を擧くる事。玆に五十餘年。猶色かへぬ松風をちぎるになん。一日。大人を尋ねし時。一冊子を出だして閲を許したまへり。其夜燈下に開き見れば。神代の餘波と題して。大人の若かりつる昔の。今に移り換はりたる事のくさ〳〵を。書き集め給ひし物にぞありける。大人は今年七十九歳。おのれに一とせの兄なれば。大人の記したる事ども。おのれ猶睫にあり。嗚呼。白樂天が七年の夜雨はものならず。六十年の秋の月をしのぶぞ多かりける。いでやおのれも神代のなごりにもらされしをひろひつゝ。忘貝の忘れしを思ひ出だして。硯の海に筆をぬらしぬ。其事皆見聞の實跡に據れば。敢て文を飾るべきものならず。草稿だになさで。心に思ひ出づれば筆隨ふ。されば年序の前後。自他の語格もいと覺つかなし。此叙言も亦然なり。こは例のはかなき雙子いそがれて作るひまをぬすみつゝ。心鬧しき黄昏の軒に。あみ作るふるまひなれば。蜘の糸巻と題しぬ

花の雲ちらすををしみ春の夢
しばしとゞむる蜘の糸巻

弘化三年丙午更衣の日

七十八翁　京山老人百樹

百樹曰。本文の標注は。彦麿翁が筆なり

蜘蛛の糸巻序

岩瀨ぬしは。其名普く大八島の外までしられたる醒齋京傳翁のはらからなる。京山老人にてぞ有りける。年比親しくむつびかはせる學びの友にて。京傳翁は過きし文化十二年の長月。木の葉と共にちりうせられしなごり。千むらの錦は色もあせずぞありける。おのれいさゝかいとま有りしころ。若かりし代に。見聞しつる事ども。今はいたく替はりはてぬるが。いと多かるを。數々かき記して。神代のなごりとしも名おほせつるを。百樹老人ひと渡り見て。是にもれたる事の。心に思ひ出でらるまに〳〵。心にうかみぬるかぎり書きとめて。やがて蜘の糸卷と號けて見せられしは。醒齋翁のおもかげほの〴〵のこりて。いとむづまし。百樹翁と我とは同じ明和の生れとて。只一年のたがひにこそあれ。かたみに八十近くなりぬれば。いとゆかしくなつかしく。其世のことゞもまのあたり見るこゝちして。ひとりゑみもし。淚もさしくまるゝは。あはれめでたくうれしき一卷になんありける。其よし書き記してよとこはるゝに。すまひもせずて。たゞにはしぶみとなしつるは

弘化三年の夏　七十九翁齋藤彥麿

呼吸とし。之が爲に生を爲す。魚は濃水を呑納するは人の呼吸の如し。其の氣人の體中の火を保つに食を以てす。薪の如し。是人の活きて居る所以なり。死するや薪盡き火消ゆ。火は天に歸す。其の機何ぞ君子小人の別あらんや

○蜀の諺に曰く。書を學ぶ者は紙を費す。醫を學ぶ者は人を費す。余友人に告げて曰く。謹みて初學の醫の爲に費さる、事なかれ（余江漢曰く。醫は仁術と云ふ。然らず。藥は毒を以て病を打つ。其の危き事不仁術なり）富家の翁年八十。余に問うて曰く。老いて生を貪る。是惑ふか。余が曰く然り。先輩有レ言。衣敝則欲レ新レ之。年頽則不レ欲レ舍レ之。達ニ於用物一。惜ニ於用レ我。不レ知ニ天地視レ我。亦敝衣類耳と。由レ是思レ之苟に賢者能者凡世に補有る者に非ずして。強ひて生を貪るは乃惑なり。敝衣も惜しむ事なかれ。翁惘然たり

○余江漢曰く。人は限ある命を以て限なく存生せん事を欲す。百歳の人今日死する事を思はず。實に愚と云ふべし。人の老耄と衣類家具の古く損じ壞れたる物と同じ。用を爲さず。頃日朔三と云ふ人。百七歳なり。諸侯貴客其の壽に移（アヤカラ）ん事を思ひて。呼びて謁す。値へたりとも。其の齡の似る事か。笑ふべし。朔三無能。世に不用の者乎

文化八年辛未冬十月日誌之

本書は大槻修二氏が神田孝平氏の所藏をかりて寫しおかれたるを今般請ひて原本とはなしたるなりこゝに一言して大槻氏に謝す

校正者識

春波樓筆記 畢

ず。二年の後氣體稍盛なり

○或人問ふ。妻死して子有り。再娶るべきか否か。曰く。曾の大賢すら尚。再娶らず。矧や庸人をや。某側に在りて曰く。我常に人の子繼母に鞠はるゝを視るに。其の才多くは實母ある者に過ぐ。再娶ごとに必子に益なきに非ずと此の言理あり

○余江漢曰く。人薄弱にしてつねに寒風にいたむものあり。愈身を掩うて養ふ者益感ず。氣を張りて病内に入らず。旅中必病者少し。氣の充つる故なり

○又曰く。四十を過ぎて後妻を娶るべからず。人四十にしては漸く精氣衰ふ。女子と小人とは養ひがたし

○或人曰く。子死を知るや否や。余が曰く。未し。然るに先輩これを論ずること備なり。彼に由りてこれを思へば則言ふ可き者なきにあらず。夫人の生や。猶月下一甌水のごとし。甌水は吾體なり。月影は吾が氣。有明にして甌毀れ水竭きぬれば。是吾が死なり。月影散漫す。是吾が氣の歸るなり。此の如くなるのみ。曰く。何ぞ氣のみを說かんや。曰く。理は是氣。上に泊り在らず。初より凝結せずして別に一物たり。亦曰く。夫人物は天地の造化の氣となり。氣伸びて息する時は生。屈みて消ずる時は死。只是一氣の衆散のみ。散じて其の初に返る。故に曰く。厚レ始反レ終。又曰く。鬼は歸なりと。但其の歸る所。蓋君子小人些しく別無きこと能はず。君子は許多の道理を盡し得て斃る。故に直に天と地と其の化を同うす。小人は私意人欲死に至るまで衰へず。割捨し斷えず。其の氣之が爲に滯結して散せず。甚しき時は厲たり。釋氏謂レ之爲二輪廻一。顧に夫君子の死するや。譬へば火の木を燒くが如し。盡きて灰尋（ナホ）冷えず。小人の死するや。譬へば火の金を燒くが如し。化し難く熱亦久し。然れども亦時あつて散ず。皆亦天地の公共の氣なり

○余江漢曰く。懶齋儒學を以て死生を云ふ。いまだ理を究めずして死す。生を盡すに似たり。夫人は水なり。水に火の入る時は湯となる。故に活物たり。氣は則天火なり。是大陽の氣水と雜はりて地氣となる。和蘭之を淡水と云ふ。人は其の淡水を

一儒者側に在りて從容として曰く。和歌を知らずと雖も其の趣何ぞ詩文と異ならん。歐陽子不レ好ニ杜詩一。曾眉山不レ好ニ史記一。杜詩其文非レ拙。歐陽子蘇子其人非レ愚。人情各有ニ好惡一。瑟雖レ工如王之不レ好何かせんと

○予江漢曰く。横山安之丞と云ふ人。性馬を好む。五十年の舊友なり。然れども其の好む處余と別なり。信友にあらず。毎々我を訪ふ。會して談話なし。所謂白頭如新。ある時馬に乘る者と對話す。傍若無人なり。亦或は一書生あり。能辨才子。桂川の家に會す。桂川は蘭學者なり。集る者同癖。彼の書生一言の話を發せず。吾よりして愚と視る者愚にあらず。才子と視る者才子に非ず。吾が好と不好と

○寬永中武城に。井上氏執事を土井公に謂つて曰く。公の事を官に決する當らざる所なし。吾甚其の明に服す。公の曰く。明なるに非ず。吾に術あり。曰く何ぞや。曰く會議ごとに吾人の上に在り。故に先下坐。各に所見を陳しめ。其の衆言の中に必吾及ばざる所の者あり。因りて其の言を執り。少しく之を潤飾して以て己が見と爲る所以寡過なりと。井上滋これを歎ず。土井公書を學ばずと雖も。聖人の語に幾し。

○余江漢曰く。今の脇坂侯も同才

○茶非純良之物。本草を製する者の曰く。多服を忌まざるは靡し。其言に曰く。性和に苦寒久しく食すれば。人をして瘦せしむ。人の脂を去り。人をして睡らざらしむ。又曰く。大渴酒後に茶飲むは。水腎經に入り。人をして腰脚膀胱冷痛せしむ。兼ぬて水腫攣痺を患ふ。大抵茶を飲む宜し。熟して少かるべし。飲まざる尤佳なりと

○茄子の性寒。本草に皆言ふ。人を損じ疾を動かし。瘡及痼疾を發し。人をして腹痛下痢せしむ

○余江漢曰く。此の二の物毒ある事。本草に述ぶる如し。然れども吾日本これを喰ふをつねとす。其の毒に當る事なし。タコバを吸ふ者と同じ。又曰く。山中米なき地。病者あれば米を以て藥とす。効驗あり。都會の人常食とす

○余が舊識竹野氏。身而嫩白屢風寒に感ず。藥服する事殆虚日なし。後其の君の爲に用ひられ。日夜に近侍す。藥灸せずと雖も亦久しく風寒に感せ

す。胸中の痞膈を消し。經絡の結滯を開く。然るに臟腑經絡皆氣を胃に稟く。烟胃中に入る頃刻にして身に周し。是以て氣道頓に開け通じ。體と倶に快し。然れども火元氣と共に立たず。人の元氣此の邪火終日薫灼すれば。眞氣日々衰へ。陰血日々涸れ暗に天年を損ずれども。人覺らざるのみ。竊に謂ふ。洞詮に言ふところ。ほゞ其の能を說くと雖も。實は則人をして其の毒を知らしめんと欲するのみ。豈須臾の快を爲して終身その患を遺さんや。且夫人初めてこれを吸ふ眩暈せざる事鮮し。煙管の中に油煠(ヤニ)あるを。禽蟲誤りてこれを甜む。即死す。峻烈此の如し。咸常に見る處なり。曷洞詮に言ふ所を竢ちて。而して後多毒を知らんや。人曰く。豆醬の能。煙草の毒を解す。故に吸者病を成さずと。然れども豆醬の力。安ぞ其の峻烈の氣に克つ事を得ん。銖積寸累遂に大患をなす事必せり

○余江漢曰く。タバコは天正の頃。異人持ち來る。長崎の櫻の馬場に之を種ゑ。遂に天下に流行す。此を今思ふに。長崎の者十人あれば三四人之を吸ふ。京の者十人あれば七八人之を吸ふ。江戸の者十人あれば九人之を吸ふ。其の吸ふ事甚夥し。東奥の人十人にして十人吸はざる者なし。蝦夷國に至りては之を嗜む。タバコの起原は大槻玄澤著烟錄に委し。亞墨利加のタバコ島の產なり。夫タバコの大害は田畑を損ず。又火災の患此の微火より發る。屢禁ありと雖も敗る。戾る事なき術あり。今よりして小兒に之を吸はしむべからず。若禁を背く者あらば父子をして共に死罪にす。大約三十年四十年にして漸々止むべし。亦烟具を鬻ぐ者いたまず。懶齋先生は正德年間。爾來百有餘年嗜む者尠しとせず。今に於てをや。其の盛なる事。吸ふ者愈多し。亦烟具を美にする事增衆し。これ制のおもき。禁ずるものも之を嗜む嗚呼

○又曰く。吾國人氣遠き慮なし。窮理を好まず。己一人の安全を禱りて子孫を思はざるか。嚮頃下總に桃花を見し時。利根川の岸に犬あり。病みて己が手足を嚙み喰ふ。奇病と謂ふべし。故に歩む事能はず。禁のおそきも斯の如きか

○詩歌會議の間。一人卒爾として曰く。我定家の歌を愛せず。衆口を掩うて笑ふ。其の人赧然たり。

かへるに路なし。故に主人亡ぶれば從者殉死す。古の王者病を以て死する時。近臣殉死する事あり。是全く往古人道に闇く。死して亦往くところ有るが如く。浮屠の敎ふるに迷ふ者か。誠に愚なる哉。亦曰く。病みて死する者殉死を云ふは。是妄語なり。僞りて命に隨ふ事をせんや

○北小路法印玄惠が曰く。聖德太子一代の行に分毫の誤なし。震旦といへども。いまだ曾て是の如き聖人あらずと。愚といふべし。前輩論なり。曰く。太子不是の處多し。君を殺す賊之を討つ事能はず。反りて賊と共に國事を謀る一なり。守屋無罪これを殺す二なり。臨終に及び唯熊凝增廣(クマコリマスヒロ)が事を奏す三なり。熊凝增廣が事は。乃大守寺侈新の役是なり。顧に夫推古は女主にして太子攝政す。其の將に薨せんとする時。豈言ふべきことなからんや。一言も國家に及ばずして。唯寺院侈新の役を求む。是震旦にも未曾有の聖歟

○伊勢皇太神宮は。本朝始祖の大廟なり。公侯大人と雖も。亦輕々しく參謁せざるべし。況や微賤をや。今士庶より以て。庸奴。甕婢に至るまで。滾々として廟庭に拜する事。殆虛日なし。褻瀆孰か甚しからざらん。道に志す人。豈敬して之に遠ざからざるべけんや

○余江漢曰く。聖德太子帝と謀りて佛像を尊信す。何の事ぞや。守屋の曰く吾國神明の道にして異域の外道の法を用ひんやと云つて。佛像を難波の堀江に流す。太子帝に奏して守屋を亡す。何れか是なる。佛法今自蔓して何奈ともする事能はず。太子天下に益なき道を弘めたる祖なり

○又曰く。伊勢太神宮は吾國の始祖にして。上天子の拜すべき神靈なる事明なり。然りと雖も今に至りては。萬民の祖神とす。吾國道なく。日向の國槵が原に都して人道の祖なり。故に卑賤として拜すべからざらんや

○近世烟草を嗜む事愈衆くして。之を樹うる者も亦多し。最良田美地に限らず。夫烟草これを多波古と云ふ。林羅浮以て本草に載する所の良若と爲るなり。いまだ知らず。然りや否や。大淸人吳興沈穆が著すところの本草洞詮に稱二之烟草一とす。其の言に曰く。烟草味辛し。氣溫毒あり。寒濕痺を治

く誠に武門の義士なり

○近來諸國火災頻に臻る。如何せば則息まん。昔鄭國に火災あり。定公之を禳はんと欲す。子產の曰く。德を修むるにありと。夫子產は博物の君子なり。もし方術あらば何ぞ知らざる。苟も知る事あらば何ぞ告げざる。火を息むる術。德を修むるにあり

○紫陽處々の子多き事を欲せず。五子あれば二兒を殺す。習うて以て常とす。人も怪しまず。吁人を以て虎狼に如かざるべけんや。後漢の賈彪新息と云ふ所の長として。嚴しく此の事を制して人を殺すと罪を同うす。是よりして數年の間。生育する者千を以てかぞふ。曰く賈父が生む所なり

○中家利が曰く。財欲の斷ち易きは浮屠に如はなし。何となれば妻なく。子なく。父母を養はず。糧盡きぬれば。則行きて人に乞ふ。人悅びてこれに與ふ。隱れて山林に在れば愈餓る。余が曰く。此の如くして猶或は財を貪る者あり。僕其をして僧たらざらしめば。天下の賤丈夫なり

○備陽の舊君宇喜公其疾篤。左右を顧みて曰く我死せば誰か殉死せん。左右いまだ答へず。老臣花房氏其側に居てこれを聞き進みて曰く。人鬼途を異にす。冥漠の中安ぞ臣僕を隨ふ事を得ん。且君の左右の臣良士に非ざるはなし。もし君萬歲の後は。悉く是嗣君の肱股耳目たり。豈是を無用の地に棄てんや。臣聞く。沙門は能く死者を導きて善所に赴かしむと。もし必君に從ふ者あらん事を要せば。臣當に老高僧を國中に擇み。殺して以て葬に殉せしむべし。是幽途に利あるに庶幾しと

○余江漢曰く。火災を息る方。子產の曰く。德を修むるにありと。夫德とは天爲して受けず。上大王下の貧民を救ひ助くるにあり。及ぶべからず

○又曰く。子の多き事を欲せざる國。筑前。筑後のみに非ず。豐前。豐後。日向。或は常陸。出羽。奥州に至りて。農夫早く娶る故に。子を產む事十に過ぐる。殺す者多し。吾國土地小にして狹し。西洋の諸邦交を隣國にす。人の尠き事を憂ふ。故にかつてなし

○又曰く。欲を斷ちて僧となる者なし。欲の爲に出家す。又曰く。殉死するは戰國の世。軍破れ城落ち。

また酒に造りて美味。他邦米ありとも日本米の如くならず。酒に造りて夏月腐り。味を變ず。故に燒酒とす。味辛し。糯米亦他になし。支那月餅(エペイ)と云ふ者あり。八月十五夜に造る餅なり。予長崎に遊ぶ時。之を喰するに餅にあらず。今云ふ落雁の如し。米の粉を熬りてつくねたる物なり。吾國の

○如く糯米なき事知るべし。又曰く。天竺赤道に近き諸島。サーゴボームと云ふ樹の皮を製して黍の如し。之をサゴ米と云ふ。其の餘麥を以て食とす。吾國の禁にして他邦に船を出ださず。故に他國の事を知る者鮮し。吾等蘭學を以て之を知る

○元亨釋書に云ふ。空海の傳に曰く。弘仁帝の時諸宗と辨論す。宮中において五色の光明を御座に放つと云ふ。是實説なれば魔法なり。古の名僧皆魔法をなすか。上天子佛像を信じ。僧を重く用ふ。故に傳敎。慈覺。弘法の如き者あり。佛書悉く不思議奇妙を以て誌せり。浮屠の説を述ぶる時。多くは此の類なり。文法の飾乎。實説にはあるべからず

○魔法は女狐を閨房に畜ひ。之と通じて生みたる子。皆狐なり。然りと雖も心は人なり。此の事或人の話に聞けり。故に人の言を能く辨ずる者なり。古の傳敎。慈覺。弘法の如き。此術をなしたるか。今の僧にはかつてなし

○閑際筆記は。久留米侯の醫官にして。官を告げて京師に隱居す。正德年間の人なり。名は藏字は季廉。號は伊蒿子と云ふ。後に藤井懶齋と號す

懶齋筆記の抜書及評論

○板倉周防守重宗。京に諸司たる時。其の弟内膳正重昌(シゲハル)肥州島原の耶蘇の役に死せる事を訃げ來る。重宗時に廳事に在りて書を見ても敢て其の故を言はず。公事畢へて後退き。家臣を召し咸く前に集め。從容として謂って曰く。汝等宜く慶ぶ事あり。吾將に之を告げんとすとて。人をして訃書を讀ましむ。臣皆涙を垂る。重宗の曰く。何ぞ復せんや。我家ありしより以來。父子昆弟上に事ふる。身を君に致さゞる事莫し。但。いまだ忠死する者あらず。遺憾なき事能はず。然るに今重昌此の如し。慶ばざるべけんやと言訖りて涙下る雨の如しと。岡本玄淋偶この座に在りて後に余に語る。余江漢曰

黄なり。出羽庄内領飽海郡。文化甲子夏六月。大に地震して最上川の水底より古木を出だす。豫州扶桑木より上品にして紫檀の如し

○蟹あるひは海老石と化する者。貝の石となると同じ。貝の内に土砂流れ入りて。其の土の石となる者の如し。魚或は木の葉石となる者は。土中に籠りて其の土の石となりて其の物の石となるにあらず

○山領雅伯の話しけるに。ある人佐賀領の中の島人を家の奴僕とす。僕主人に向ひて答ふるに御の字を云はず。主人の曰く。吾日本の俗語に尊敬するに。御の字を以て冠らしむ。汝之を知らず。僕諾して命に從ふ。正月元旦。嫡子始めて射御す。其の僕矢を採る。的に當らずして矢の有る所を視ず。僕の曰く。お矢を失へりと。主人聞いて歡ばず

○滿ればかくると云ふ事は。今日常にある誡の敎なり。月盈れば虧る。盆に水を盛る充分なれば溢る。國治まれば亂る。草木葉みてれば枯る。人老ゆれば死す。始ある者は終ある目前の事にして。酒を多く呑めば醉ひ伏す。其の中庸を知る時は君子なり

○人婚姻を爲すに男子は三十。女子は二十。大約。唐。和蘭と共に定則とす。近年吾日本。男子二十に至らずして婚姻を爲す。男女ともに二十に足らざる者の子。必愚なり。壯年の者の子必才子なり。精氣は神經とてたましひなり。草木の實。能く熟すると熟せざるとの如し

○其の原を知りて末を考ふる者は智人のふるまひなり。人間の起りは天地より涌き出でたる虫なり。往古は土を穿ちて穴居す。而後己の爲に爭鬪を起し相戰ふ。今大平の世となり。其の起原を知り。古を感ずる者鮮し。故に多くは人道に背き聖賢の敎を失ふ。夫上天子は人道の始り神の末なる故に。民是が爲に尊び敬ひ貢ぐと雖も。上位を爭ひ。下國を奪ふ。復亦爰において人道を失ひ。漸く武を以て治むるに至る。今既に太平なり。民太平を歡び年貢を以て其の國の王侯に奉る。然るに吾日本米穀を以て食の第一とす。世界の諸邦此の米かつてなし。五十度外にしては。牛肉を以て上食とし。其の餘は麥粟稗を以てす。人の生命食にあり。吾國の米穀味甘くして淡く。膏油あつて身體を潤す。

の如き物を造る。其の製船の如し。洪水にして山の頂に至る。爰において家族と共に彼の船に乗り。風に従ひ波に隨ひ。漂流して亞爾默尼亞(ゼルマニヤ)國のタウルスと云ふ高山に至り止る。洪水一百五十餘日にして竟に收まる。人類悉く皆滅亡して。此の一族のみ助り存命す。是を第二の開闢といふ。蘭語にてはテウェーウェーレルドと云ふなり。ノアクスに三人の子あり。兄をシャム。二男をヤヘット。三男をセムと云ふ。此の三人歐羅巴諸州を開く。ヤヘットは。亞爾馬尼亞國王の累孫と今に云ひ傳ふとぞ。吾日本。唐。天竺と共に己の國より世界は開けしやうに。古を推して傳記したる者なり。然るに能々是を考ふるに。歐羅巴を以て開闢の始とす。夫よりして天竺。唐。日本なり。和蘭近世の說に。地は圓球にあらず。僅に楕圓なりと。是水の傾を云ふ。今水の傾きて高き所は日本の東洋海。亞墨利加の西なり。此の間無人の小島。僅に數ふる程あり。數萬の年を經るに至りては其の小島。國となり。吾日本も亞墨利加の地と接續するならん。南北の極下に至りては。水の傾あるべからず。只赤道より南北の方へ五十度外にかぎるべし。此の水の傾き滿ちぬる時國土亡び。水干て國土あらはるゝ時を開闢と云ふ。爰において草木人間禽獸始めて生ずべし。吾日本にて海を隔つる事十里二十里の山頂に貝石あり。貝は海の淺き所にあり。山下石炭を生ず。樹の土中にありて石と化し。硫黃の氣あつて石の如し。多くは筑前に生ず。これ開闢以前の物か

○伊豆熱海より登る事五十町。日金山あり。絕頂を圓山と云ふ。文化八年未九月亦此の頂に登りて四方を眺むるに。十國五島山々連りて海に入る。予考へ見るに實に水の減りたる狀。山々の皺にあり。富士のみ出現したる山なり。往古より數千年にして燒け出づる者。又砂凝り結ぼれて石となる。土は化して岩となり。岩亦年を積みて堅石となるなり。水化して石英。水晶となる。是皆開闢以前の者なり

○紫檀。黑檀。皆埋木なり。豫州の海中。或は土中より扶桑木を出だす。相州箱根山より神代杉を出だす。奥州二本松の邊より埋木を出だす。其の色

たずして直に知る妙器なり。此の物古はなし。故に古人知らざる處なり。然れども古法に倣ひて銘の傍。年月を志すに二月八月とす。然れども冬至より夏至にいたる間に燒及する者は二月とす。夏至より冬至にいたる間に燒及ずる者は八月とすべし。且又錆を生ずるは及の方よりす。復此の理を知る者鮮し。鉛錫の如き金は生精にして濃なり。故に氣其の中に入る事能はず。鐵は其の生麁し。剛にして氣。中に徹達して鐵の中空徹するなり。氣は則地氣にして水氣なり。故に燒及するに及びて鋼鐵の中又々巣の如くなるなり。爰において地氣益徹通す。夏月尤地氣厚し。故に錆を生ず。又曰く。古刀は輕く新刀は重し。古刀は錆を生ずる事數年。亦之を研ぐ事數度。年を經る故に錆を生ずる事多し。鋼鐵の中悉く空達し。鐵氣虚となる者なり。古刀は名のみにして。斬伐の用をなすべからず。新刀以て用をなすべし。又曰く。世人燒及の紋を見て劔刀の相を見る者あり。愚と云ふべし。燒刃自顯る丶者に非ず。亂直燒このみに從ふ。古人は自己標的とする處。其の紋の中にあり。いま刀を作る者。刀の文裝とす

文化八年辛未七月　東奥二本松　古山東藏誌

西洋天地開闢

○蘭書コロートヒストリイと云ふは。天地開闢の事を志したる書なり。天地開けざる前人なし。故に知るべき理なし。啻推量して誌したる者なり。其はじめ天に一の日輪を生じて。日氣の爲に水氣を生じ。水氣結れて地球となる。日氣照凝して土地あらはれ。鳥魚を始とし。人類及禽獸草木を生ずと雖も。無始の始にして記する事能はず。彼の國の書にはアダム。エバと云ふ男女始めて生ず。是吾國に云ふ天神地神の時を云ふなり。アダムは壽九百三十歲。アダム子を生じて兄をカインと云ひ。弟をアベムと云ふ。兄弟爭の始とす。金の代と云ふあり。金の代終りて銀の代となり。銀の代終りて銅の代となり。銅の代終りて鐵の代ありけるに。天罪の爲に世皆滅すと云ふ。然るに四金の中鐵の世の末に至りて。聖人ノアクス。アルゲなる者あり。是ラメキスと云ふ人の子にして。アダムの苗裔なり。天地滅亡する事を前に知り。大なる箱匣

故に諸侯は諸侯。旗本は旗本。藩士は藩士。農人は農人。町人は町人。心底をあかし。交を厚うする者。是を信友と云ふなり。然るに予貴賤上下と交りしに。かつてわが同輩にあらざれば心底を明けて話せず。諸侯貴客には僞り諂ひて。向ふの惡しきを善しと譽め。わが善きを言はず。向ふを才子とし。吾を愚とし。還りて貴人を増々愚にし。嘲弄するに似たり。信實の話を爲る時は。忽忌みきらはれ遠けらるゝ者なり。かつて阿侯のみ幼君の時より。予と會して物談す。わが本心を以て惡しきはあしきと云ひ。善きはよきと云ひければ。一々是を聞き容れ感ぜられしに。今に至りては四十近くならせられ。大才智の稀なる侯とはなりぬ。頃日久しぶりにて謁ありしに。間もなければあるべからんの話のみしてかへりぬ。兼好法師の曰く。交りてあしき友。氣づよき人。酒好む人。高くやん事なき人とあり

作刀之序

○吾國之以二刀劔一。所謂萬邦稱二利刀一者。此地三十六度。而寒暖應レ時。天氣徹通。而爲二中央一。且夫近二赤道地一者常暑。亦近二北極地一者常寒。所レ産之萬物。順二隨於此度數一焉。譬有下云二巴旦杏一者上。近二赤道一者味苦。去二赤道一者味甘。所下以天氣射レ地。而徹二通地中一。爲中苦甘之二種上者也。蓋作レ刀之術有二燒及一。其燒及時沒レ湯焉。其湯非レ溫且非レ涼。所謂湯加減是也。古者有二正宗者一。實爲二名家一也。夫刀者不折不曲焉。知二此術一故乎。予雖レ不レ知レ造レ刀。然以二天學一知二此理一矣。古山氏從レ吾聽二此理一。當時作レ刀者。有二窮レ理極レ術者一哉

文化八年辛未七月　　司馬江漢識

刀を作る記

夫刀は吾國に産する鋼鐵を以て世界第一と稱す。刀を作るの術は利く截れ。且折れず曲らざるを以て名刀とす。古人正宗のたぐひ。銘に年月を志す者。必二月八月とす。是燒及する法なり。今刀を作る者。此の理を知る者鮮し。一年にして。春分秋分は寒暖の中央とす。井水は夏月涼にして冬月溫なり。水元溫涼なし。人の肌躬天氣の爲に溫涼を知る。奚を以て古人の曰く。湯加減是なり。今まさに西洋より齎す所のタルモメートルと云ふ器あり。天地寒暖の氣候を計る具なり。春秋の時を待

がたきを能く解し。和歌をも漢文とし。又は聖經をも能く解し。聖人の心を譬を以て教示し講釋すれば。俗人は聖人の行を爲るやうに思ふは甚間違なり。聖人の道を行ふは。儒者のあづかる所にあらず是は人による事なり。いかほど利口にても邪惡の人あり。又愚にても聖人のふるまひの人あり。文學を能く知り。學者と他より譽らるゝ人にても。一向に理の分らぬ人あり。數萬卷の書を讀み。博識なりと云はるゝ人にても。聖人の意をしらざる者あるなり。故に聖經を以て其の道を儒者に能く聽き。己に能く得て躬に行ふ者を眞の儒者と云ふなり。然れば世にある渡世儒者の事には非ずと知るべし

○三教とて。釋迦。孔子。老子を以て名づく。釋迦のをしへははじめ天文より出で、須彌山と云ふ世界を造り。是を第一の教の基として。此の中に森羅萬象を生ずと雖も。生類を衆生と云つて水の爲にかたちつくり。火の爲に活物となり。心ある故に苦樂あり。心と云ふ者は何より來りし者と云ふ事を知り。天地人の大機を以て教を立てし者なり。また孔子はたゞ人間の上の事を以て。仁義禮智信の五行の道を立て。今日人間の交をなすに。此の道を以て定規として世を渡る時は。爭闘起る事なし。誠を以て私する事なしと教へたり

○老子は佛法の道に似て。天下を治むる道に非ず。己一人を安居する法なり。天下の人おの〳〵皆志違ひて天氣を稟けて生るれば。善人は教へずとも善人なり。惡人はどう教へても惡人なり。故に教を立てゝ天下を治むるは間違なり。自然天然にして治まる事なり。是を無爲と云ひて。定規ある故に曲れる物を見。寸尺ある故に長短を知る如く。光をかくして塵と交り。出る杭うたるとて兎角名利を離れよと云ふ教なり。莊子も同じ様なる事なれど。また別なり。人間を菌にたとへり。ぼうふりと云ふ虫にたとへ。また世の賢者をかつぱに見たて。色々と浮世の人を。皆愚物なりと笑ひたり

○牛はうしづれ。馬はうまづれと云ふ譬あり。關侯の隱居東鶴翁君は。隱宅に庭を造り池をほり。海邊なれば池に潮さし干す。魚を色々はなちけるに。大なるは大。小なるは小と。皆群り遊ぶ者なり。人も其の年頃にあらざれば。話も合はぬ者なり。

めとがむるもの多し。不然なり。誠の釋迦の敎の出家にならんと思はゞ。たゞ心の持ちやうの事なり。寺に入るにも及ばず。剃髮するにも及ばず。佛と云ふ者は何者を指して云ひしと考へ。經文の意味を能く解し。毛の穴より三千の菩薩が現れ。大地が裂けて。百萬の寶塔出現する事は。竹田のからくりの如し。これを能く解し。眞經には摩訶般若到彼岸(マカハンニヤハラミツタ)は。梵語に般若とは智慧を云ふ。愚ではいかん事なり。凡夫では佛意は得られぬ事なり。極理分明なる人にあらざれば出家にはなれぬなり。日本はおろか。此の世界の中に釋迦と同意の人は。今活きて居る中にかぞふる程の外はなし。今日本の中に天窓の丸い出家幾萬人もあるべし。其の人々大智の人の有るべきにや。故に皆經文は譬諭なり。夫も釋迦時代の天竺の譬にて皆俗語なれば。今時の人が日本にて彼の經文を見て解すべきやうなし。日本にて往古の辭でさへ今にては知れざるに。何として解すべきや。天竺は元より其の外世界中。漢字はなし。皆言葉を假名にかきたる者なり。今和蘭の學問をする如く。容易には解しがたし。シンチベールとて。彼の國の譬を以て敎としたる書あり。是は一向に解しがたき者なり。此の經文も譬にて。天竺ことばを漢譯したる者。間違のみ多かるべし。到彼岸はきしに到ると云ふ事にて。爰より向にいたると云ふ事なり。是も實の解しかたにはあらざれども。まづ成佛と解するなり。到彼岸と云ふも梵語なれば字義はなし。千人譯をすれば千人ながら違ひぬ。是文句に迷ふと云ふ者なり。只釋迦の極意は。世界の衆生は天の一氣より生じ。草木國土皆悉成佛とて。總て皆佛なれども。生類の中。人間は智と云ふ者の爲に佛となりかぬる事なり。故に人間とは何者を云ふ。また人間は如何なる者と知り。此の根元を知りぬくと。無と云ふ者になるなり。無と云ふ事を知れば則佛なり。爰において釋迦と一致して通達すれば。己と云ふ事明なり。是を出家とは云ふなり。家を捨て、出づるにおよばず

○今の儒者は儒者にあらず。躬の持ちやうも知らず。大酒を呑み放蕩不埒者なりと誹る事なり。是は甚間違なり。儒者と云ふ者は漢の字を能く知り。讀み

吾も夢中の人。向ふ人も夢の人。只迷ひ惑ふ事のみをして。是を樂しみ或は苦しみ。亦歡び患ひて。此の世に居る中は懼しき夢を見ぬ樣にして安居すべし。大なる樂歡をする時は必また大なる困み心配あるなれば。其の度を能く考ふべき事なり。名利とて此の二に迷ふ事なれば。爰を知り給へ。巨萬の富貴も。名の高く聞えたる人も。一世の中の事なり。釋迦も孔子も名のみ殘りて其の人なし。わが子われ一人の者に非ず。夫婦の間より生ず。子また孫を生ず。孫また彥を生ず。漸々血脈の遠く淺く淡くなりて。末に至りては悉く他人となる。然れば他人皆われなり

○精進と云ふ事。生臭きを忌みさくる事に非ず。殺生戒とて生きたる者を殺す事なり。獸魚の類。目鼻口皆人に似たり。魚聲なしと雖も。獸聲あり。これ人に近し。哺の物は喰ふべし。草木元より生類と同物。然れども人に似ず。出家女犯を戒しむ。子を生まざるは戒しむるに及ばず。色慾に迷ふが故なり。子は己の體なり。人間の迷の基。愛欲は去りがたし。故に子無き者悟道に入り安し。女子經水の後。めぐり終りて十日過ぐれば孕まず

○予老いぬれば浮世の人の歡樂とする處。更におもしろからず。思ひ出だす事あれば筆にまかせて書きぬ。後世我と同志の人あらば感じ給へ。每々云ふ如く。文學を好めば漢文に書きたく（闕）予倅に文を學ばず。故に國字を以てす。是兩道に通じ安く。漢文意を述べがたく。視る者肯て解しがたし。吾國往古は（推古帝聖德太子の時代）假名字の國にて（古事記舊事記）其の後漢學を尊みけるが。國亂れ武家の天下となりて漢字を失ひ。今に至りては太平にして諸民に至るまで文學を好めども。いにしへ菅相丞。小野篁の時代の如くならず。天下武威を以て治まる。また吾國。支那に從はずして。獨立堅固の國なる故歟

○今の出家は大僧正をはじめ。皆釋迦の傳へし出家にてはなし。世の道具にして古の出家とも違ふ事にて。士農工商僧と。世の中の渡世なれば。且て出家の出家たらざる事を咎むべからず。只釋迦の法に倣ひて。女色を斷ち魚を喰はず。又頭を丸く。衣類の上にころもとて佛衣を着るのみ。今日の理に闇き人は。出家は出家の樣になしとて。責

給ふ

寛政五丑年六月二十七日　　ワシレイローチン　え

右は松前表において

○白川侯博學敏才にはあれど。地理の事においてはいまだ究めざる事あるに近し。長崎の地へは千里の遠路にして。亦蝦夷地において交易の場を開く時は。彼の地自ら開くべし。また切支丹を甚懼れ恐るゝは何事ぞや。信長彼の宗法を信じ。彼の國の僧を多く渡海をゆるしければ。僧徒日本美國なる事を知り。竊に闘ふにや。衆俗を從へなづけし故。其の後神祖大君此の宗法を惡み給ひし事は。其の殘黨相群り徒黨をなす。且は大亂の基なる事をしろしめし大禁の命令あり。今此の宗法を以て魯西亞人弘むと雖も。誰か一人之に與せん

○其の後十餘年を經て文化二丑三月。肥前長崎の津に魯西亞の船を入る。使節の者。國老レサノット。女帝アレキサンデルの印。其の書翰に曰く。吾國は貴國と隔たる遠しと雖も。屬國貴地に近し。故に隣國のよしみをなし。年々聘使を以て交易をなさんとす。大日本國大王の膝下に拜禮をなすとあり。然るに。魯西亞の使者を。半年長崎に留め上陸をも免さず。其の上彼等が意に戻り。且其の返答甚失敬不遜。魯西亞は北方の邊地不毛の土にして。下國なりと雖も。大國にして屬國も亦多し。一概に夷狄のふるまひ非禮ならずや。レサノットは彼の國の王の使者なり。王は吾國の王と異ならんや。夫禮は人道敎示の肇とす。之を譬へば位官正しきに。裸になりて立つが如し。必や吾國の人を。彼等禽獸の如く思ふなるべし。嗚呼慨哉

○天明年間。オランダ國風説書。年々寫し置きしに。其の頃の書上に。リユス國にて。日本漂流人を捕へ置き。日本辭を學ぶよし。本國より申し來る。リユス國とは魯西亞の事なり。文化辛未の年の夏六月。蘭船入津せず。館内のカヒタン。其の餘皆衣服敗れ食盡き困窮す。蘭船の來らざる。萬國の風説知らず

○夫人間の小慮を以て瞻れば。一生は永い夢。天の大理を以て視る時は實に短い夢。夢を夢と思はぬうちこそ。人間の境界なれ。我は夢も覺めかゝりて何事にも迷ざればおもしろからず。さつはり覺めては夢もむすばず。此の世は夢の迷の中なれば。

天地の窮理を知らず。問に應ずる事能はず。首を縮め舌を嚙みて退く。故に侯悦ばず。然るに小子侯を肯て懼れず。吾業つねに大侯の前に出づ。侯を視る事同僚に遭ふが如く。思これに繇りて天を談ずる事。王宓が如し。侯甚感ぜられ。吾をして臣たらしめんとす。時に年天命を知る。且いまだ人の臣たらず。竊に慮ふに曷己を養ふに己の力を以て。人の爲に勞せんやと云ひて。竟に命に從はず。今日七十有五。心を放肆にし。諸侯召せども往かず。己の業を務めず。冬月日當に臥し。夏月は樹下に座し。性好んで山水を愛す。數。東西に旅行す。名山風景を瞻ては。家に歸りて畫に摸し。またわが天文地轉の説を好む者と窮理を談じ。樂これに過ぎず

○文化辛未の年岩附に遊ぶ。小林源吾と云ふ者。吾門人となる。半年を經ずして天象を知る事。小星に至るまで覺えたり。實に奇人と稱すべし。奥喜三郎と云ふ者。わが門に遊ぶ。新製地轉儀を作る。其の形平圓にして徑三尺廻に。恒天の二十八宿あり。中に吾地五星ありて。日輪を中心とし地轉して。所を移せば五星おの〱順行と逆行とを視る。ほゞ五星暦の算術をなす。亦西洋算法をからずして萬年暦あり。然るに吾國の暦と差ひ。閏日を以て閏月を置かず。此法に傚ひて。日本萬年暦を製す

○近年米穀安く武家に益なし。今に方りて魯西亞と交易を爲ざるを思ふはなんぞ愚ならずや。寛政五癸丑年七月。魯西亞船蝦夷地子モロと云ふ所に。幸太夫を乘せ來りし時。日本米と彼國の產物と交易を結びたく。幸太夫を以て願書を出だす。其の頃越中守白川侯權錘を取る。則。信牌を下さる。曰く

一。おろしや國の船一艘長崎に至る爲の印の事。

一。汝等抑切支丹の敎は我國の大禁なり。其の像及器物書冊等に至るまで持參する事なかれ。必害せらる丶事あらん。此の旨能く悟導して彼の地に至らば。尙研究して上陸をも免すべきなり。夫が爲に此の一張をあたふる事しかり

石川將監花押

村上大學花押

此の度政府の指揮を奉じて

アタンラクマン

蘭書を譯する者。大抵斯の如し。其の頃天下漸く治まり。戰國の風いまだ解けず。武家に財貨夥し。今に至りては太平の續き。人氣遊樂を好み。渾べて懦弱となりぬ。嗟

○江戸赤坂御門松平出羽侯の藩士に。號を天寓孔平子と云ふ者あり。俗稱を知る者尠し。常に弊れたる衣服を着。草履は路々拾ひたるを。二三重ねて之をはき。刀を太刀の如く提け。脇ざしを脱ぐときは人間の如し。其の容乞食の刀を帶びたるのみ。家に千金を積み貯へ。頗漢字を知る。故に風流雅人を吊ひ。只己の名の他に知られん事を好みて。神社。佛閣。堂塔の小社に至るまで。己の名を誌すに。紙を以て黒く石摺の如くして。「天愚孔平子」予彼に對して曰く。名利に溢れ。雅俗の者を訛す者か。孔平子嗚嗦して去りぬ

○人死する時は病に困れる者。其の病苦。罪ありて刑罰に行はる者と同じ。上天子下庶民に至るまで。生ある者此の如し。又老耄して死する者。夢に苦を知る如し

○紀州侯初めて予を召す。近臣の者予に對して曰く。中納言殿に謁し言ふにあらず。我等に物談するを。席を隔て、之を聞しめさるゝなり。予謹みて諾して出つ。甞に作處の天球の圖。地球の圖を持ちて頓首して拜す。侯の曰く。江漢には始めて逢ふ。然りと雖も名は兼ねて。知れりと。予天球地球を以て近臣に對話す。時に侯の曰く。其の兩圖は先達て所持す。わが前に寄せ近づけよ。熟視して其の昧を聞かん。爰に於て前に薦む。徐に云つて曰く。吾國地轉の説を知る者なし。故に地轉儀を製して。五星の順逆。また天の冷際震雷は云ふに及ばず。霧環は水火の二氣五彩をなし。鹹と硫氣とにて五味となる。濃水淡水。風は水にして水は風なる事を釋きけり。而後畫を作るに和歌の浦の寫眞。及其の餘の山水數品。此の技をなして退く。時に侯近臣に向つて曰く。今日は好學問したりと仰られける。後に聞けば侯は天學を好むこと年あり。司天臺の吉田氏及山路才助等を召して。天理を問はしむるに答ふる者なし。如何となれば。各小祿の者にして恐怖し。心中意を刻み思を苦め竭すと雖も口より出でず。且彼等は暦算家にして。

ある。飯田町邊に牛原と云ふ所あり。車置場は江戸橋の四日市にあり。牛車追々渡世薄くなり。牛三十六疋になる。其の後牛原の牛。今の車町に來たる。海ぎはの地車置場になる。漸々減じて今五軒となりぬ。大八車のみ用をなす故なり。千場太郎兵衞と云ふ巨家あり。牛屋に千場氏あり。太郎兵衞もと此の家の牛牽なり。故に主人の苗字を己の姓とす。牛屋の名を耻ぢて近來牛屋の千場衰微す。太郎兵衞其の家を買ひ取り。千場の名を止め別號とす。熊本侯の金用達にして。帶刀の免許あり

○予が近隣に八十餘の老人あり。大道寺某の作の落穗集を所持す。世にある落穗集に非ず。實錄なり。御入國以來の事を誌す。明暦以前は江戸の町も少く。また諸大名の家居は至りて大造にして。表門には家根の上にシヤチホコあり。長屋も高く造りたる事にや。明暦の火災に皆燒失して。漸々今の如くになりぬ。其の頃の風俗。女の帶は絹巾半巾。たびは紫の皮なり。大名の火事羽織はくすべ皮なり。從者は木綿のハッピ。夫よりしばしば災火ありて。大名は羅紗となり。從者は皮羽織となる。故に價貴くして。たび皆木綿となるなり。又曰く。壹岐守松浦侯予に向つて曰く。朽木隱岐守に蘭書あり。ウエイレルドベシケレイヒングと云ふ。此の書を求めん事を欲す。余爾を以てす。余江漢諾して應命。則朽木侯に謁して此の事を話す。竟に其の書を松浦侯に贈る。其の中イギリス船平戸島に入津したる事を誌す。其の頃松浦法眼と云ふ人隱居して政事を取る。或時婦女を從へ。イギリスの船に乘る。船の內數品の額あり。其の中に春畫ありけるを。婦人是を熟視せずして拜す。イギリス人おもへらく。嚮の頃吾國の佛法。此の日本に來る事あり。其ならん事を思ひて春畫を拜するかと。また法眼婦人をして三弦を引かしむ。イギリス人己の國に無き器なりと云ひて悉く其の形狀を誌せり。其の中に神祖家康大君の御墨付の寫あり。皆彼の國の文字に譯す。イギリス人江戸へ來たる時。大名の家居長屋造を見て。窓牖に玻璃を用ひざるを怪しむ。其の頃の家居。彼の國の家居におとらざるを知るべし。彼の國寒國にして。石を以て壁となし。牖はビイドロを以つて紙の如くし。右は

非を容るゝ者は君子なり

或男の。酒栄にせんとて小鳥をさしけるに。其の鳥の曰く。我の如き小雀を酒栄にし給ふとも奚味はふ處あらん。助けたまへ。其の酬に善き事三をしへまゐらせん。過ぎたるを悔むべからず。及ばざる事をすべからず。己の度量を知るべしと云ふ。いかにも汝が云ふ處の敎。尤なりとて放ちぬ。其の鳥喬木の上に飛びのぼりて曰く。そなたは愚なる者かな。吾腹内に寶の玉あり。此の玉を持つ時は富貴心のまゝなり。あやふい哉あやふい哉と笑ひけり。汝小雀吾をあざむく。悪きやつめとて竿にモチを付け。あなたこなたと追ひけるに。彼の雀の曰く。卽いまの敎をわすれたりやと。書籍などすら〱と讀み。其の章句の敎を直にすら〱と忘るゝが如し

此の書は二百年以前の書にて。皆かな書なり。汝と云ふ事を御邊とあり。其の後お手前と呼ぶ。また貴様と云ふ。今は武家に至るまでお前と呼ぶ。御前と稱するが如し。譬の諺に云く。お前敬薄。同輩に向つてお前と云ふ事。諂者なる事を云ふ。

亦云く。此の書は西洋書にて。シンテベールと云つて譬諭なり。いま和蘭の書を學ぶ者。解しがたき辭にして。二百年以前西洋の學をする者ある事を知るべし

○吾日本開闢近し。故に人慮の薄き事此の一事を以て知るべし。醫家欽鑑及。西洋の書中に載する處。種痘の法あり。此の法を用ふる時は死する事なく。面部に痕なく。難症なし。流行に傳染する時は。毒多き者は死す。然りと雖も生得重毒ある者あり。必二たびす。種痘を以て其の毒を滅ず。滅ぜざれば流行に感じて必死症なり。又虚薄の生あり。痘をうゝべからず。余が親族小兒あり。此の法を傳ふるに更にうけがはず。如何と云ふに病を求むるに近し。一時其の難をのがれん事を愚と云ふべし。竟に種う。卽輕し

○江戸車町は芝高輪の手前。牛屋あり。是はいにしへ御入國の時。東照神君。大津牛を呼びよせらる。百三十六疋と云ふ。御城の石垣の石を牽かせたり。二代將軍秀忠君の時に至りて。牛方共大津へ歸らん事を願ふ故。五十六疋を留めて。殘をおん返し

人間の交に爭ふ事なく。天を恐れ鬼神を祭る事をす。是悉く人間のふるまひなり。予昨日まで醉うて今日醒めたり。鏡裏霜を見る。嗚呼人間の終なり。一生は一睡の夢。覺むる時は亦夢

○西洋の畫にアドホカートと云ふ者。是は窮理學者の號なり。Het Stof Slik end, en is Den Swizt niet waard 人一生涯衣食住の爲に求め得る處の諸器諸家具。己に得んとて利を爭ひて求め得る處の物は皆塵なり。土や泥などにてありき

○文化八年未七月立秋の頃より。彗星初昏西北の方北斗の上に。大尊と太陽守との間に麗りて。尾の光芒長からず。亦曉東西に現れて尾の光芒長し。白露。秋分。寒露。霜降。立冬と漸々南東に昇りて尾も長く。天頂を過ぎて。小雪。大雪頃に至りて河鼓の少し上に留まりて。尾も漸々短く。冬至の頃に天に昇りて竟に肉眼に見えず。又巳の年に彗星現れし時は。天頂より少し西によりて。光芒も至りて薄し。初昏より戌の時頃まで見えて西に落ちて。二十餘日を經て天に昇る。彗星。孛星天上にある事。其の數を知らず。亦行環も悉く異なりて。黄道より斜絡して其の環亦楕圓なり。西洋人といへども。いまだ推步窮理せざる者乎。又曰く。土星の上。二星の惑星を見出だすと。蘭書中に著す。尤望遠鏡に非れば見えず。吾日本人始めて蘭學を務むる者あつて。此の說を知ると雖も。いまだ其の星を視ず。然れば肉眼に因りて視る者を以て五星と名づけ。土星の上。數十の惑星ある事を知るべがらず

○伊曾保物語と云ふ書は西洋の譯書なり。其の原本紀州侯にあり。予直に見たり。皆譬を以て敎を設く。爰に一二章を揭ぐ

猛獸狼。喉に骨をたて喰する事能はず。既に饑に及ばんとす。時に鶴來れり。狼鶴に向つて曰く。汝に吾たのむ事あり。長き嘴を以て咽の骨を拔くべしや否や。鶴恐れて曰く。命に從ふべし。竟に骨をぬく。狼の曰く。予此の骨の爲に數日饑ゑたり。故に先汝を喰はんと。恩を讎で報ずと云ふ事なり

猿多く群り。躍り舞ふ事人の如し。然りと雖も人之を視るときは人の如くならず。故に其の惡しきを敎へ學ばしめんとするに。還りて猿大に立腹し。群猿共其の人に仇す。人の非を言ふべからず。

め我なし。無終のをはり我なし。爰において我獨尊み。現在わが子あり。我に非ず。兄弟あり。我にあらず。然るに我にあらざれば我に敎ふる者なし。我我に敎へて知る時は。我を安んず。我獨と云ふは釋迦己を云ふにあらず。敎へ導く辭なり。三敎の意皆以て同じ。愚人皆迷ふ。故に苦とす。然るに苦を以て安逸とす。惑ふを以て樂とす。人間常の情とする處なり。人各好む處を別にす。己の好む處を以て是とし。己の好まざる處を以て非とす。智人能く辨ずと雖も。苦と樂と其の中にあり。愚者辨せずと雖も。苦樂亦其の中にあり。夏月暑惡み冬月寒を惡み。春秋必天雨す。亦曰く生類食を以て生を保つ。夫食を求むるは苦を以てす。農人は耕し。祿ある者は務め力む。譬を以て云はゞ。食者は薪なり。神經は日輪の火なり。水を湯とする如き。體中の火。食の爲に消えず。不食時は火忽消ゆ。すなはち死なり。骨肉水土となり。神經天に歸す。燈火を吹き消すが如し。消ゆるに非ず。天火に歸るなり。良才容智なる者は神火厚し。能く感じ能く應ず。必氣剛し。愚なる者は神火

薄し。事々物々に應ぜず。火氣鈍し。必柔弱なる者なり。然るに世界の中。日氣の地を射る事。度に順して所を異にす。五穀及草木の實。日氣の爲に甘き者苦く鹹き者辛く。もと鹹の一味より生ず。天氣のしからむる處なり。人も亦之と同じ。吾日本東西の國。其の氣質異にて。一國毎に各別なり。矧や世界の中においては。歐羅巴の中ゼルマニヤを以て開闢の久しき國とす。吾日本開闢甚近し。故に人智も淺し。思慮尤深からず。神武此方の國にして年數久しからず。人工歐羅巴に及ばず。漸く地轉の說今にして知る者僅に二三輩。是淺慮の淡才にして。歐羅巴人に及ばざる所以なり。吾國儒者あり。聖經は支那の書。支那の文字を讀む者を云ふ。僧あり。釋迦の遺言八萬。法藏の一切法經に通ずる者を云ふ。天竺は梵語なり。支那人之を翻譯して漢字とす。皆譬諭方便にして。一言之を解すべからず。凡僧かつて佛と云ふ事を知る者なし。啻惑僧のみ多し。古の名僧人を惑なし誣ふる厲。其の遺風今にあり。吾國の神道は只正直にして。人道の始祖を以て神靈として之を祭る。孔子の道は

たり。時に直衡は五條の君と云ふ。奈良法師と圍碁す。近臣之を奏すといへども。目は局にありて顧みず。良久しくして時を移す。秀武老の力盡き古を思ひ。今從者の如くなりたるを憤り。持ちたる金を庭上に抛けすてたり矣。直衡大に怒り。秀武は清衡家衡をかたらひて大亂となる。これ後三年の軍なり

○上天子將軍より。下士農工商非人乞食に至るまで。皆以て人間なり。獅子。熊。狼。犬。猫に至るまで獸なり。人魚。鯨。鮫。鰯に至るまで魚なり。鸞。鳳。鴻。鴈。小雀に至るまで皆鳥なり。蛇。百足。蚯蚓に至るまで虫なり。小は大に逮ばず。大は小を從ふ。是皆地球の水土に生ずる者にして各心あり。筋骨の機。奚や。人間と同じ。食の爲に生をなし。欲念の情あり。其の中。人は智ありて其の智の爲に己を困め。生涯此の世に迷ふ事。貴賤上下皆同じ。下の賤しきより上の貴きを望み見る時は。歡樂のみありて苦なしとす。己より下の卑しきを眺め見る時は。苦のみありて樂しき事なしと思ふは。己を知りて他を知らずと云ふべし。これ苦樂皆其の中にあり。名聞利欲の爲に生ずる處なり。然るに此の欲を抛つときは卽ち安し。然りと雖も亦之に應ずる苦樂共に追うて來る。然れば悟道人となつて山林に入り。又市隱となつて安逸なるか否か。生ある者は寒暑の苦あり。一日に起伏或は二便の苦あり。矧や世に迷ふ者。苦以て樂とし。樂以て苦とす。紅塵の街に風の土を吹上ぐるが如し。玆に佛書因過經曰。天上天下。唯我獨尊。三界皆苦。我等安レ之。釋迦は王位を捨てて乞食の行を爲す。悟道人の祖なり。孔子。仁義禮智信の規を立て、敎を爲す。然りと雖も戰爭を起し。國治れは名利の二に爭鬪し。もし敎を感ずる者は智人なり。感ぜざる者は不智なり。智と愚とを半にす。夫人は無始より起り無終に終はる。皆此の如し。亦曰。老子無爲を以て敎ふ。曰く言者不レ知。知者不レ言。是不言の敎なり。莊子大小を以てす。大は貴く小は卑し。亦云く。大は大智小は小智。象牛は大。蚊虻は小。大小別ありと雖も更に大小なし。亦復曰。天上天下。唯我獨尊。三界皆苦。我等安之焉。現在我あり。無始のはじ

しと雖も其聞え高し

○永祿年間の江戸の圖を見るに。南は金洲崎白銀臺。西は麻布飯倉。今井村。今の江戸見坂邊を云ふ。櫻田村。今の霞が關なり。北は神田川。湯島。忍が岡。今の上野なり。不忍池より下谷の方へ流る川あり。また荒川は今の千住川。淺草觀音は島の如し。又芝通。日本橋邊の町々。小川町。下谷。本所。深川。皆淺海にして池の如し。淺草海苔の名明らかなり。海の漸々阜となる事は。爰を以て知るべし。今より十億萬年を經る時は。此日本亞墨利加の地と接し續くなるべし

○圍碁は遊民の外士農工商共に此の技を爲すべからず。奕と同じ。君子の戲にあらず。無益の暇を失ふ。務の大害を爲す事多し。舊記に云く。市佐時光笙を吹く事絕倫。一日召レ之。會時光不至。一老人と碁を圍む。使者促レ之。顧みずして唯眼は局にあるのみ。（大伴の宿禰子蟲。中臣の連東人と對局。東人失言。子蟲之を斫る）亦聞く事なく遂に召に應ぜず。太閤記に載す。公朝鮮を伐つとき。諸將を遣し役に在ること數歲。中間時。黑田如水。淺野霜臺。軍令を奉じて朝鮮に赴く。諸將を集め以て公命を告げんとす。諸將ゐるに二子唯心碁に爭ひ傍に人なきが如し。諸將皆出づ。公肥州名護屋に在りて之を聞き悅ばず。左右に謂つて曰く。爾曹終レ身まで勿レ圍レ碁と

○昔奥州の大亂は宗任。貞任。源の賴義朝臣の軍功によりて治まる。是を前九年の軍と云ふ。また出羽の國の住人淸原の眞人武則。共に戰ひて貞任が跡を以て押領して。奥六郡の主なり。鎭守府將軍たり。其の子荒川太郎武貞。父が跡を相續す。嫡孫直衡。眞人が代に至りて。威勢亦父に越えたり。爰において奥羽の二郡靜謐たり。時に直衡嗣子なかりければ。常陸の國の住人海道小太郎成衡と云ふ者を子とせり。いまだ妻なし。故に常陸の住人多氣權守家基が女。源將軍の子を生む事あり。此の子を迎へ取りて成衡に娶す。爰に出羽の國の吉彥秀武は。故淸將軍武則が甥ながら聟にて雙無き兵なり。今は年老い一門皆從者の如く。皆直衡が威に隨ふ。直衡。成衡を世續として家基が女を娶る時。一門從者之を賀して色々の品を獻上す。古彥秀武は盤に黃金をうづ高く盛り。庭上へ出で、跪き差上げ

衆し。韻鏡圖圏一萬五千八百二十四聲の外無しと雖も字數は衆し。三萬三千二百五十六字と云ふ。夫より正字通の書出づ。韻會と字彙に挍ぶれば又字數增したり。嘗て大淸の字書正字俗字數萬となり。彼國の者學び盡くす事能はず。況や日本の人をや

○世の人古書を引きて證とす。是證に非の證多し。假令ば五雜俎を引きて證とす。謝肇淛もし誤り妄に誌さば。後世の人其の僞を眞とす。諸記に曰く。漢の建武年中。長沙の歐囘。白日に屈原が亡靈に値ふ。數百年以前の屈原が顏。何を以て見知りたるか。左傳は賢者正史として。浮屠の說は夢にも見ざる時の書なり。死靈奇怪の事を記せり。矧や夫より下。史記漢書をや。晉の阮瞻は無鬼論を作る。忽客來りて鬼の有無を論ず。客遂に屈す。卽云く。我は鬼なりと云ひ終へて容を變じて鬼となる。鬼とは何なる形を云ふか。一笑の談なり

○阿波侯の世子伊豆の熱海に湯治す。かへらん事を忘れて數日を經たり。其の頃吾も同じく此の湯に浴す。二十餘日を歷て歸る。時に阿波侯の行蹟。常に朝は夜の丑の時を以て起き。讀書弓馬兵術を。世子をして學ばしむ。故に之が爲に僅の日を熱海に遯る

○嚮の年十月鎌倉に遊び。光明寺に至る。時に十四日なり。堂中老若男女交坐に充ちて念佛の黨なり。堂の外椽床を見れば。菰を着たる者數十人伏す。寒風の夜なり。何故と問ふに。卑賤の農夫堂中に入る事能はず。たゞ經音を聞きて成佛すと心得たり

○江戶の町は御入國此方の事にて。其の頃よりの名主を草分と云ふ。町數八百八町ありしに千八百八町となりぬ。正月三日帝鑑の間の大廊架において御通がけの御目見え。獻上物大臺に熨斗。一斗入酒樽十。大納言樣にも同じ。通油町。田所町。大傳馬町。總町代として三人。通油町の名主宮部又四郎。田所町の名主田所平藏。大傳馬町の名主馬込勘解由

○深草の元政は法華宗なり。日蓮は諸宗を誹謗したる故に。我慢我意と云つて。諸宗の曹これを惡み誹る。元政は佛の理を悟り。出家の道を知り。戒を保ち。法華律宗の祖なり。年四十六にして死す。齡短

義高を奉行として詮議ありけるに。難風に仍りて爰に着岸す。船中唐銅永樂錢數萬積みたり。依之京都前將軍義滿入道道有。新將軍義持公へ此の由を訴ふ。唐船關東へ着岸する上は。滿兼徳分たりと下知しければ。船中の財寶殘らず押しとめ。其の價として此の國の產物を給ひ。船は歸國す。其の後若干の永樂錢。徒に廢るべからずとの法を立て。關東に於て之を用ふ。夫よりして遙の後年を經て天文年中の頃。永樂錢に鐚と云ふ惡錢を雜へて。同じ直段に用ひしに因りて。商賈の輩惡錢を撰み論じ爭ひて已まず。然るに天正の始。北條氏康關東八州を從へ。諸士悉下知に就きければ。氏康の云ふには。夫錢は品々有れども永樂に如くものなし。今より關東にては永樂を用ひ。他の錢を用ふべからず。家臣山田信濃守定信。笠原越前守守康に仰あつて。莊鄉村里の辻々に。右の趣を書き誌したる高札を建て。自然と鐚は上方へ登り。永樂のみ關東に滯る樣になしける。此の時鐚を京錢と呼ぶ。其の後慶長九年御代に至りて。天下一統に永樂を用ふ。然れども鐚一向に棄つべきにも非ず。永樂一錢の換に鐚四文を以てす。此の旨仰せ渡され。亦其の後慶長十年十二月八日。永樂を停止。江戶日本橋に高札を建て。永一貫に金一兩とし。金に替ふるに百錢の中一錢宛除き。是を口錢とす。然るに今の世に於ても。年貢に永納あるは此の時の遺風なり。鐚百錢に之を移し。永一錢の價を除き。九十六文を以て通用す。小子壯年の時。相州鎌倉江の島に參詣す。漁夫の小童旅客に就き錢を乞ふ鐚(ビツキ)と云ふ。又府中六社に參る。同じくビツキと云ふ。キは一寸の和訓。鐚は銅にして孔穴あり。古の錢和銅開珍あり。其の後和錢ありと雖も。銅を支那に贈り鑄せたるなり

○支那の文字甚多し。爰に悅の字を掲ぐ。悅怡歡喜欣忻懌忭忔懽怦憔恞悆惞愹惣憘歖懙憗俽訢謜台邑喀嘉愉慆歆衎の屬。これ悅の淺深。或は悲の中の悅。懽の中に悅を生じ。其意味あり。彼の國は文字を以て符契とす。故に文字を離れては言語意味通ぜず。倉卒に言ふ時は貴人と雖頭を振り動し形容して談語す。吾日本元來音訓の國にて。中古より支那の文字を雜へ漢語を爲す。然りと雖も字數

用ふる事を知らず。曇りたる鏡の如し
○駿州藤枝の驛に橋あり。川上三里に神の祠在り。其の邊の谷川の鰻魚は一方にのみ眼あり。此の神の使令(ツカハシメ)とて人懼れて喰はず。予長崎へ遊歴する時。藤枝より僕一人を連れたり。其の者此の鰻を喰ふに祟なし。又相州鎌倉の海にて漁する鰯は。口曲りて片口と呼ぶ。其の種にて生る、者諸國此の類多し
○駿州岡部の在所に。坂本村輪宋院と云ふ禪寺あり。天明五六年の頃。住僧歳八十。山に入り。一片の乾餅を喰ふ事三年。また寺に來りて入定す。時に弟子食を進む。僧の曰く。問答吾に勝たば喰ふべし。交當る。更に勝者なし
○備中足守の醫杏庵の曰く。在所に狐の寓きたる者數度療治す。或時民家の婦に狐寓く。更に去らず。故に全體を拈みければ腕先に摩り付きたり。夫故腕を縛りければ瘦の如し。鍼を打たんとす。狂人の云く。今將に去らんとすと。故に其の縛を解く。忽舊の如し。欺きたり。また再摩撫し肩に至る。是非鍼を以て衝殺さんとしければ。狐大に屈伏し。眞に去るべし。其の證は藪の中に體あり。往きて見るべしと。果して云ふが如し。卽縛を解く。狐一聲して去りぬ。然るに狐の氣のみ人の體に入る事。人此の術は及ぶべからず。人々に寓く能はざるなり。譬へば鳥の空中を飛ぶが如し。小蟲と雖も羽翼ある者。人之に及ばざる事を知るべし
○東都本所囘向院の入口。左右淡雪豆腐の茶店。晝食せんとて爰に寄る。傍に卑賤の者二人酒を飮む。酒菜(サカナ)なし。予思ふに。元來酒菜と云ふは後世の事なり。今は酒菜數品。奢慢なる事を知るべし
○聖人釋迦の敎を一口に云へば。夫人間は今日活きて居る中。仁義禮智信の敎を設けて。生涯の間能く守れとの敎なり。釋迦は人間一生は少の夢の如し。故に僅なる夢中を安心せよと云ふ敎なり
○永樂通寶の錢。はじめ日本へ渡りし事は。後小松の院。應永十年八月二日未の刻より。大風雨にて堂社民屋悉く倒る。翌三日巳の刻に風止む。其の日の申の刻。唐船一艘相州三崎濱へ漂ひ着す。其の時鎌倉將軍足利左兵衞督滿兼卿下知ありて。伊東次郎右衞門尉貞次。梶原能登守景宗。三浦備前守

○筥根權現の社の前に大釜あり。文永五年辰の十一月十二日と鑄付けられたり。今年文化九年まで五百五十六年

○日光山霧降の瀧より五六里深く山に入り白根山あり。人家なく祠のみ。六月氷凍して寒月の如し。白鳥鵰の屬多し

○樂羊は魏の大將にして中山と云ふ所を攻めたるに。樂羊の子中山にあつて。中山君其の子を烹にして遣りければ。樂羊は幕の下にて之を啜り。一杯喰ひ盡くす。魏の文公が堵師贊と云ふ者。人に言て曰く。樂羊は子の肉を喰へりと。答へて云く。誰も喰はず。樂羊は中山を罷けし故に文公其の功を賞美す。然れども心底をば疑はれたり

○鎌倉にどこも地藏と云ふあり。或時堂守の僧參詣もなき堂を守るより。何方へなりとも立ちのくべしと思ひ。其の夜夢に地藏の曰く。どこも〱と云ふ。老僧目を覺し考へ思ふに。何方も〱同じ事と云ふ事なるべしとて。生涯此の堂に終りぬ

○東都麻布邊に關榮一郎と云ふ儒者あり。歲七十餘にして病に臥せり。更に死と云ふ事を知らず。書を讀む者天理天命を知らず。愚なる者なり

○或人の曰く。駿河の產にして年々遠州秋葉山に參詣す。九月十七日祭禮神事に。火の舞とて火を神前に投げ振りて舞ふ。然るに火の何れへも燃え付かざるを奇とす。是火防ぐ神なり。予考ふるに。火は天地の中間に充ちて造化の元なり。火は何物へも通徹す。目前の理なり。然れども水氣を得る時は火移らず。山上陰濕の氣多くして。萬物濕氣閉塞し樹木茂り。地氣つねに上昇して雲霧を生じ。火氣衰へて物に移らず。故に夏月火災尠く冬月多し。神靈火を防ぐにあらず

○招隱館漫筆に曰く。人君は天職なり。今の君は人君ありての人民と思ひ。驕慢の心發起して。士民を視る事草芥の如し。故に君一人奢を恣にし。無用の財產を私欲の好む所に費し。耳目の歡樂を極む。國民の膏油を絞り。血淚の殘餘を歡樂に供するは。豈不仁の甚しきに非ずや。上に居る者は君子にあらざれば治まらず。君子は己に同しても與せず。己に異にしても非とせず。明君賢子は忍人を察し。闇君は必巧言令色諂諛の人を愛して。賢者を

六分六秒とす。亦圓の半。卽六數なり。其の起。三數より出づ。五七三十五七七四十九とするは誤なり

○世の人を思ふに。人事の小道を知り好む者ありと雖も。天の大道を知る者鮮し。われ久しく東都に居るに。諸侯貴客書を好む者多し。天を聞く者更になし。晉中納言紀州侯一人のみ。日本小國と雖も罕には我を知るものあり。我往きて說く事能はず。彼來りて聞く事能はず。國を隔て、遠きが故なり

○古之善爲道者。非以明氏。將以愚之。予考ふるに下民故より淳樸。田夫の如き皆愚なり。生れながらの本姓

○報ㇾ怨以ㇾ德とは老子の謂なり。讎に却りて與ㇾ物を云ふ

○或人予に虛と實とを問ふ。答へて曰く。人の生死を云ふ。死は實なり。生は虛なり。生たる貌は水上の泡。內氣を包み外水にて掩ふ。容水氣の爲す處。虛空より出で、生をなす。虛空は實なり。質となる時は虛なり。實以不二滅亡一。名の可ㇾ爲ㇾ名に非ず。所謂無名なり。天地の間に生る、者皆虛なり。無情之を實とす。日輪天に麗りて無心。大地旋りて無心。氣昇降して無心。又曰く。岩石鐵金以て實とす。草木以て虛とす。花發け實を結び。土を去り水を離る、時は死す。是生物にして非情に似たり。故に實なる者萬古亡びず。虛なる者際あり。人の存在之を虛とす

○大學衍義に曰く。古より中國にて衣服と爲す所の者は。絲麻葛褐の四の者のみ。漢唐の世に。遠夷木綿を以て貢に入ると雖も。中國にはいまだ其の種なし。故に民未ㇾ爲二衣服一。宋元の間始めて傳へて入二中國一。蓋此の物來たる事。外夷より閩廣(ミンカン)の海に商船を通じ。關陝の土壤西域に相接する故なり。我朝上世永祿天正の下民の服皆麻葛の類なり。今に至りては貴賤共に用ふ。その故にや。古賤者は蒲團。蒲入綿なり。今わが國の綿は草綿なり。木綿に非ず

○瞽者我に云ふ。畫は奇なる者なり。譬へば升の如きを描くに。其の底に至りて深く入る事。如何して之を圖するか。西洋の畫法は遠近深淺を爲す。わが日本の畫法と異なり

すと雖も。其の者共漁におこたり酒を呑み聚まり遊ぶ。爰において竟に知れたり

○又或時。磯邊へ流れよる物あり。之を見るに餅の如き物數々あり。怪しみて能々視れば蠟なり。暴風の後破船の具漂ひよるとぞ。海國ながら。吾國の人の駕航柁術に悉しからざるを。西洋人評して曰く。支那以て盲乘。日本以て片目乘

○佛者欲下以二方便一導上還使レ迷レ己矣。莊子不レ究二眞理一。惟推量而安二一身一耳

○予所持する寒暖昇降を以て暑寒を計る。毎年冬の寒十二三分。極寒は八九分なり。文化六年己巳の冬寒氣。十一月九日五分。二十五日同五分。廿六日二分半。卅日一分。十二月朔日一分半。二日十分。六日五分。七日二分半。九日十分。十一日三分半。十七日九分半。十九日寒無度。廿五日同廿六日二分半餘。廿八日九分。午の正月十日二分半。大雪數度。何十年にもなき寒氣なり。凡四十日餘續く

○大和の國南都の邊へ行き見るに。婢女つねに麻を績ぐ。其の價を得て半を主人に出だす。半は己の物とす。主人の用を缺き。夜は油を費す故なり。前漢の張安世。家僮七百人。紡績皆手技あり。內治二產業一を織微累積して巨萬の富とす

○享和三年丙寅秋八月。關侯隱居の話しけるに。在所新見。夏雨降らざる事六十日。草間村と云ふ處は。山田のみにて常に水なし。此の所の農夫の妻は。水を河より汲む事を力とす。河の傍までは一里を隔つ。其の路皆山坂なり。水桶を頭上に戴き。兩手にて麻を績む事を常とす。其の一村のならひなり。其の村に一寺あり。僧七日斷食して雨を禱る。果して七日にして大雨田畑を潤す。領主より其の僧に金錢米穀を賜ふに更に受けず。其の雨近村に及ぶ故に。他村より米錢を持ち來て寺に贈りければ。不得已して受けたり。是天の感應したるには非れども。彼の僧正直無心にして。只百姓の困窮を悲み。無慾眞實なるに因りて。倖に雨の降りたるなり。是を德と云ふ

○七日を以て一周とする事。七日に非ず六日なり。其の故は其の日より七日目は六日なればなり。閏月は四年にあり。實は三年に當る。天度三百六十度

ぬと。人には告げよ海士の釣舟」また「思ひきや鄙の別に衰へて。海士のなはたき漁せんとは」承和七年赦免六月歸京。黃衣を著朝廷に拜謝す。翌年本爵正五位の下に復し。文德天皇仁壽二年冬十二月薨ず。下野國足利鄉學校。先聖の像を安置して。其の頃敎授する者相續ぐ。今下野の阿波の谷村に一寺あり。學校の跡と云ふ

○天下に才ある者といへど。農夫商工の家に生る、時は。卑賤なりとして之を用ひず。諸侯貴家に生る、者は。才なしと雖も之を用ふ。才あれども用ひざる時は愚人の如く。不才の者時得て用ひらる、時は才子の如し。百里奚は虞にありては愚人の如く。秦に至りては智人なり

○末大なれば必折れ。尾大なれば掉しがたしと云ふ譬あり。初は何事も小にして。後に至りては漸々と奢に長じ。大となりては夫に馳じ尊み貴む。卑く小にはなりがたし。末に至りては終に壞る

○木を刻みて糸を牽けば老翁となる。鷄の皮鶴の毛を以てすれば。眞物の如し。須臾弄びて罷みて寂として無事。還つて人生一夢の中に似たり

○善人と惡人とは生れ稟くる事なり。松を接ぎて杉とならず。聖人の敎を學び習ひても。本性を失はず。柳下惠飴を見て以て老を養ふによろしとし。盜跖は以て錠に粘るによしとす

○予峻天理を曉明すと雖も。世俗之を知らず。書は幼稚の時より好むと雖も。前に善書あり。これに及ばず。故に屛風のごとく屈曲して。從俗は諸侯貴客われを視る

○備中岡田平治兵衞が東遊雜記を見るに。南部の邊地を通行せしに。海邊に米櫃。金匣。帆柱。柁の類。波に打ちよせ渚邊にある事限なし。所の者に云て曰く。何ぞ拾はざる。取りて薪とせざる。今稀に金錢もあるべしと。所の者答へて曰く。此の物は皆破船したる者の失ふ所。之を取りてわが物とすれば必亡靈祟をなす。かつて拾ふ者なし。北方の邊地愚直なる事を知るべし

○予が家に上總の者あり。彼が話しけるに。東浦にてかつを漁舟七八艘。沖に出で、漁する時。櫃の如き物流れ漂ふ。引き揚げて見れば。内に數十金あり。皆々配分して家に還る。隣家にもこれを知ら

ども再三に及びて竟に京師に入り。玉體に近づき加持し奉る。忽平愈の事あり。帝深く法德を歸依ありて。位階を下し給ふと雖も更に受けず。亦辭し去りぬ。弘仁九年夏六月。暮齡八十餘にして備中湯川寺に遷化す。古の名僧。弘法。傳敎をはじめ。多くの衆僧皆名利を離れず。此の玄賓一人眞の出家にて。其の名聞えず

○承和三年春月。遣唐使選擧已に定まりて。藤原の常嗣を正使とし。篁を副使とせられ。兩人を紫宸殿に召され宴を設け。文人墨士に餞別の詩文を作らせ。兩人へ天盃を下さる。常嗣詩を獻じて壽を上る。此席に往歲本朝の命を銜みて入唐せし使者。並に留學の輩。彼の地に在りて自沒する者八人に。各位階を贈らる。所謂。藤原淸河。安部仲滿。石川道益。紀馬主。甘南備言景。紀三濱。掃守宿禰明。田口歲富等八人なり。同七月遣唐使四艘の船。大使。副使。判官。主典。太宰府を出船しけるに。日氣あしく。九州の地に泊して順風を待つ。漸く天氣を得て蒼海へ漕ぎ出だす。また俄に風起り逆浪天を浸して。諸の船を淘り居う。殊に常嗣が乘りたるは。檣も折れ柁も摧け已に覆らんとす。漸く四艘とも日本の地に吹き戾さる。船も破損しければまづ一度歸京すべしとて。各京に歸る。則叡聞に達し。明くれば承和四年三月。遣唐使再催しありて。復太宰府に下り出船ある。其の時慈覺大師も同船あるべしと云ふ。然るに篁は俄に病と稱して京に歸る。其の宿意は。篁つねに學才に自負の思ありけるに。常嗣を正使とし篁は副使なり。心緖不快にして憤を含むと雖も。勅命嚴重なれば。是非に及ばず其の旨に隨ひ。斯て太宰府に至り。艤のせつ常嗣が第一の船。去年破損しければ。因りて篁が乘りたる二の船と取り替へ。常嗣へ篁が船を進め。篁は破れたる船とさだめける故に。之を怒りて竟に病と云ひて京に歸る。常嗣は已に出船す。篁は家に返りて門を閉ぢ。西道謠と云ふ文章を作りて暗に常嗣を誹謗す。其の文章の中上を輕んじ憾む意あり。嵯峨上皇逆鱗ありて。其の罪輕からずとて。死罪を宥され。承和五年十二月隱岐の國へ流さる。筆翰の逸人なる故に時の人之を惜む。篁船中にて。「和田の原八十島かけて漕出で

爰を以て聖人は其の一を貴ぶ

○書二采覽異言後一

浙西李之藻。刻二萬國坤輿圖一。萬曆年間。大西利瑪竇重修改定。附以二南北半球圖一。事具二二子所一レ敍。而一時薦紳揚景淳。吳中明之徒賛述焉。正德己丑冬。美得レ遇二西人一。乃按二其圖一訪以二方俗一。其人曰此圖明人所レ作。稍似二縝密一然與二地理一不レ合。莫レ由二依據一敢辭。美意謂彼不レ解二漢字一敢爲二大言一耳。美乃曰是則歐羅巴人利瑪竇所三携入二于中州一者。世稱二其善一。子無レ取焉獨何與。曰某未四嘗聞三我人有二其姓名一者也。曰西敎東漸自二利氏一始。子不レ知二其人一可乎。彼笑而不レ答。既而索二得西圖於官府一以示レ之。披翫久レ之曰是和蘭鏤版。蓋百年之物也。雖二我西土一亦不レ易レ得。某與二此圖一唯得三見レ之矣。於是左把右指章步而亥算。使下人不レ待レ窮二夫轍迹一。而周二游乎八極名山大川一。擧レ望而出。殊方絶域隨レ顧而在上。亦奇矣哉。誠得二其術一也。明年春和蘭人貢。美私其使者以質焉。對曰輿地全圖舊有二數本一。此板弊邑所レ刻。去レ今既一百一十三年。先レ是西土佛來。釋レ古者始唱二天敎東南諸州一。其塔今在二印度地一。香華之盛一二百七十年茲一焉。歐羅巴人未レ聞下有二利氏之子一者上也。美竊怪焉。嗣後適得二金闇鐘始振闢邪論於新增大藏函中一。因知竇本生二於廣東傍近海島間一。北學二於中國一實非二西方人一。則前者之說果不レ誣矣。李氏徒。徒嘆二其學在レ夷。而不レ知レ用レ夏變二於夷一也。故今我是編所レ採。其說係二之明人一者。蓋從二其實一。癸巳之秋源君美書

○采覽異言は白石先生著す所の者にして。利瑪竇及明人の說を揭ぐ。萬國の事を誌せり。後に蘭人に遇ひて。始めて利瑪竇は歐羅巴人に非る事を知れり。今亦吾が黨の者。蘭學を好み。尤醫術委し。小子は天文地理を好み。わが日本にて始めて地轉の說を開く。職方外記。天經或問。利氏の言なり。竇は廣東の西琶牛の人と云ふ

○日本いにしへ玄賓と云ふは河内の人なり。今世の僧侶の如く。榮達名利に繫縛せられず。南都の興福寺宣敎の法嗣にして。俗姓弓削氏なり。道鏡などの作業を惡み。潜に洛陽を出で、伯州の深山に隱れ居たりしに。其の後桓武帝御不豫のをり節。詔書を下されければ。詔命を遁れて出でず。然れ

処に至り。遊女を求め見るに。常の遊女なり。席上酒肴を出だして興を催し。妓は立ちて舞ふ。性空（仲太が事なり）目を閉ぢ觀じければ。忽。妓女は普賢ぼさつに現じ。又目をひらけば。元の遊女なり。性空つらく思ふに。此の妓女と見るは實に生きたる普賢ぼさつなりと。有りがたく思ひ。時を移して後去りぬ。六百歩を過ぎてかへり見るに。彼の女は死にたりと。普賢かりに遊女に現じ。我之を拜する事の不思議さよとて。人にも語りければ。衆俗皆性空上人とぞ貴びける

予江漢曰。笑ふべき事なり。西行此の愚談を集に入れたるを見れば。佛の道を知りたる者に非ず。佛道に迷ふ者なり。然れども妻子の愛念を捨て。浮世を見かぎり。乞食となりて諸國の行脚したるは。實に世を棄てたる人にはあれど。貴き人の佛門に入り世を捨つとて。山に入り食に餓ゑ。乞食となりて無欲なるとて。衣服を脱ぎすて裸になりて。野に伏し山に寐ね。寒暑に堪へかね苦しむを。名利を棄てたると心得。是を尊く思ふは更に理に當らず。予江漢も。西行は深草燒にても小兒の時より見知りてあれど。今此の選集抄を見て。初めて佛の道を知りたる道人にあらざる事を知れり。兼好法師の徒然草は格別勝れたる者なり。一席の談にあらず

○磁石の妙なる事。いまだ解し得がたき處あり。石を水中に浮べ見るに。南北ありて東西なし。然るに針を以て南と北との氣を磨し。亦水に浮ぶるに。南は北を指し北は南を指す。石と返覆す。此理未解せず。亦針二を以て北の一方に磨し。石を離るるやいなや。忽二の針合せず。北は南につぎ南は北につぐ。是天の空氣の引く處にして。南北極地球の軫軸。天に係りて旋る故なり。しかれば赤道以北は頭とし。赤道以南を頭とす。故に地球の四面に人居立し。地より上を以て天とす。ヱレキテルを以て此の理を知るべし

○天地の生物を見るに。生ずる者は神氣なり。死する者は臭腐なり。臭腐は人の惡む處。天氣は清淨。大地の水氣又清し。然るに天は火地は水なり。兩氣相徹して其の中腐爛の臭氣萬物となる。故に臭腐復化して神氣となる。神氣復化して臭腐となる。

の私の爲に不動。藍染（アヰゼン）。大日藥師の屬。神と佛とを混じ。各人の貌となして愚人を誑す方便とす。是悉く大陽を以て譬へたる者なり。故に其の像皆火を脊ひ輪光をなす。察し知るべし

○風鳥と云ふ者あり。生きたるはなし。皆皮むきなり。必足なし。蘭書花連的印（ハレンテイン）に圖ありて。此の鳥印度諸島にあり。然れども稀なり。恒に天を飛びて地に下らず。鳩の大さにしてかき色。又紋あるもあり。其の種二三品。尾は孔雀の如く。左右の脇より。雲珠（ウヅ）巻きたる羽あり。和蘭これをパラディスホーゴルといふ。パラディスは天堂を云ひ。ホーゴルは鳥なり。故に極樂鳥と譯す。亦燕は春暖氣を得て出で丶。初夏家の軒に巣を爲す。初秋に至りて天中を飛び繞る。必地に下らず。秋の末になりて何方へか去りて見えず。南向の樹の洞の如き處に集りて。寒月は出でず

○蝙蝠軒に掛りて人の倒に歩くを怪むとは。惡人の善人を見て。己の如くならざるを云ふ故なり。然れども。飛ぶ時或は喰する時。亦糞する時は頭を上とす。只安居するに至りては。頭を下にして倒に掛かる。人の伏すが如し

○西行法師の選集抄に曰く。拾遺抄に載せてあるを爰に摸すとあり。むかし播磨の國書寫山と云ふ寺に。性空上人と云ふ僧のありける。是は本院の左府時平の孫にて。時朝大納言の侍に。仲太小三郎と云ふ男あり。大納言の許に。昔より傳はりて大切なる硯の有りける。官位に昇る度毎に。此の硯を拜する事なり。ある時仲太彼の硯を見たく思へども叶はず。故に若君十歳不足してありけるを。仲太此の君を賴みて竟に硯を見たり。其の時仲太あやまちて硯をおとし破りたり。若君の曰く。われ破りたりと云はんと。仲太歡び去りぬ。其の後大納言昇身の事ありて。硯を拜せんとするに破れてあり。若君の云く。われ破りたりと。大納言大に怒り若君を殺せり。仲太此の事を聞きしより。出家して後。播磨の國書寫山に庵をむすび。無常を感じ住みけるが。恒に普賢菩薩を拜みたく願ひ。一心に念じける時。夢の如く一人の天童あらはれて曰く。汝室の津の遊女を見よ。實の普賢なるぞと云ひをへて消え失せたり。夫よりして室と云ふ

念凝り結ぼれ。目に怪を見る。皆己の迷より視る處にして。かつて怪にあらず。僧侶玆に就いて愚民を誑し。死靈亡魂なりとす。夫わが國神明の盛なる事。伊勢皇太神へ東西南北の農民に至るまで。つねに參禮する事虚日なし。拜禮する者かつて私願を口に言はず。神靈かつて奇瑞を垂れず。神の道の明に。佛の道の昧く。神に怪なく佛經一章毎に怪語を爲す。古の弘法傳敎怪術あり。其のころ上理に闇くして之を奇妙とす。また愚ならずや。其の後賴朝北條足利の代に至るまで。戰爭人を殺し。其の亡靈祟をなす。故に國亂をなし。或は疾病流行し。凶年打續く。爰において僧侶其の虚に乘じて堂塔佛閣を建て並べ。其の遺跡天下に益なく人を惑はす。是其の始馬子太子と謀りて佛を信じたる故ならずや。窮理に昧き愚人と云ふべし

神と佛とを論ず

○神とは何者を云ふか。佛とは何者を云ふか。それ神は日本 わが國 の祖人の靈を祭れる 者なり。靈とは何を云ふか。鬼なり。鬼は何を云ふか。氣なり。氣とは天地の中間に充てる虚空なり。虚空に物なしとす。然らず。大地は球にして天中に麗り上下なし。大氣之を揚ぐ。この氣宇宙に充滿して隙なし。一尺の地を穿てば一尺の天を增し。魚水に游びて水を知らず。人氣中に居て氣を見ず。天氣は地氣と感じて神變不思議をなす事。森羅萬象皆此の氣の爲に生ず。人間禽獸及草木は天地の大機にして。恒に靜動變化をなす。是妙と云ざらんや。故に神は氣なり。鬼神と云ふ。人および萬象。氣中より出で、氣中に歸る。氣の根元大陽日輪とす。故に天照神明の名あり。神道の傳書譬諭を以てし。實事を云はず。視る者能く考へ察せよ

○夫佛とは釋迦の名づくる者にして。天の大氣虚空を云ふ。之を無と名づく。是を佛とす。日輪を指ざして阿彌陀と稱す。像を造りて人の如し。光明遍照十方世界。四方に光明を放つ。是像を作りて譬諭とす。亦三世の敎をなして。虚空を以て一世とす。虚空の天氣地球に徹通して森羅萬象を生ず。是を現世とす。生を爲す者皆悉く滅し亡びて。天氣に歸す。是往生して極樂に至るを佛になるとは云ふなるべし。窮極則神佛同じ。後世の僧徒。己

行して人多く死す。神國異域の外道の敎を信ずる故なりとして。佛像經論を堀江に流す。寺院堂塔を燒滅す。夫より二十九年を經て。亦重ねて佛經及禪律佛工師寺匠等を獻ず。時に敏達丁酉六年なり。同己亥八年。新羅より釋迦金像を貢ぐ。故に愈馬子等佛法を信じ。堂塔を建て並べ。時に亦しば〳〵疫病流行す。乙巳十四年三月帝に奏し。守屋に詔して佛法を斷つ。爰に於て佛塔を斫り倒し。佛像及佛殿を燒き拂ふ。餘る所は難波の堀江に棄つ。其の夏六月にして。亦蘇我の馬子奏して再佛法を起す。秋八月にして天皇崩ず。同九月豐日の皇子。天皇の位に即き給ふ。丙午春正月用明元年なり。次の年夏四月天皇病みて崩じ給ふ。爰において守屋。穴穗を帝とせん事を欲す。馬子推古に奏して穴穗を殺す。諸王子群臣と謀りて守屋を殺す。聖德太子其の軍中にあり。馬子は必しも義兵にあらず。守屋必しも寇賊に非ず。守屋佛を廢するは我國神國たる故なり。穴穗は皇子にして推古は女皇なり。馬子穴穗を殺して推古を立つるは。女主佛法を念ずる故なり。時に太子攝政たり。馬子其の後幾ならずして。果して崇峻帝を弑す。馬子主君を弑する大惡人。太子之と與す。是を聖賢の人とせんや。佛法國を治むるに設けたるに非ず。今に至りて政道に益なく。之を破り敗る事能はず。上闇く下亂を起す事此のごとし

○予江漢考に。支那及わが日本究理の學なし。古は猶人智淺し。しかればわが國神の道を以て。他邦の敎を用ふる事有るべからず。佛法は異道にして其の敎別なり。いにしへ上天子下諸臣。佛像經卷を以て專拜し。啻病疾おのづから愈え。吉事福樂拜し願ふ所從ひて自生じ。奇妙不思議を爲す事。是何なる故ぞや。支那我國に鬼神を論ずる者あり。誠に愚論と云ふべし。鬼神とは水火の二氣を云ふ。天の火氣地に徹し。地の水氣と相混同して升降す。是を鬼神とは云ふなり。人此氣中に居て清濁を知らず。疫病。麻疹。疱瘡。皆此氣の侵す所なり。鬼神の怪異をなす者に非ず。草木花發け實を結ぶは正理にして奇ならず。然れども實にこれ奇とすべし。怪これを奇と云ふべからず。それ怪は狐狸の爲すところなり亦愚恐怖し。或は患ひ。心中惑

有㆓自然釜鍑(カマ)㆒。有㆓摩尼珠㆒。名曰㆓熖光㆒。置㆓於鍑鑊下㆒。飯熟光滅不㆑勞㆓人巧㆒

右の忉利天と云ふは。佛ばかり住居する所にて。此上もなき樂しき世界なり。手も勞せず。自然と白米のありて。飯となり。暑寒もよいかげんにて。蚊の人をさすと云ふ事なく。蛇などのあしき虫もなし。路も平で山坂もなし。爰が則極樂淨土と云ふ所なり。人死すれば無心即安樂なり。爰を以て極樂に往生すとは云ふなり。今の出家は。誠に此やうなる所へ。死ぬれば往く事と思ふは。愚と云ふべし。法華經は釋迦說きをさめの眞實の經文と云へり。故に法華經を見しに。やはり奇怪なる。大地より三千の寶塔涌き出でたりと云ふが如き。機事とす。譬諭なる事を知らず

最明寺時賴の百首の歌とて。道歌あり。其中に

只ありの人を見るこそ佛なれ

佛も元は只ありの人

法然上人の歌に

墨染に心の底はそめずして

世渡り衣着るぞはかなき

○古より悟道人幾たりもあり。名の聞えたるものは。眞の悟道人にあらず。天笠釋迦は天子の兄弟と云ひ。貴きを棄て、乞食の業をなす。孔子は仁義の道を弘むと雖も。人是を用ひず。竟に古鄕にかへり。春秋を作りて。死後に名を揚げたり。眞の悟道人は。無極の人と云ひて。名もなく音もなし

○天地の中。水の傾きあり。今日本水干減ずる時なり。今亞墨利加の方水高し。土地減ず。故に日本の地開けたる事。甚近し。故に人智も淺し。歐羅巴の地開闢も久し。又人智も深し

日本佛法の起。聖德太子守屋の是非を論ず

○わが日本の人。究理を好まず。風流文雅とて文章を裝り僞り。信實を述べず。婦女の情に似たり。婦女皆迷ひ惑ふ。必。欺を信じて是非に昧し。いにしへ欽明帝の時。壬申十三年。百濟國より始めて佛像經論を渡す。信ずる者蘇我大臣。稻目宿禰等。信用せざる者には物部大連尾輿。中臣連鎌子なり。故に佛像經卷を稻目にたまふ。大臣と謀りて向原の家を拂ひ淨めて寺とす。即。向原寺(カウゲンジ)と號す。わが朝佛法の起。僧侶の始なり。其の年天下疫病流

れて合して一味となる。夫故に海水は鹹苦。又曰。大海中。有二諸大身衆生一。所レ吐大小便利相聚爲二鹹苦一。右は海の中に世界が有りて。大なる人にて。其人此世界の如く衆生ありて。其人々の大小便があつまりて。海の水が鹹苦となるなり。又曰。雨降りて海に入れども海水不レ溢。華嚴經云。大海有二四熾燃光明大寶一。其性極熱。常能飲縮。百川所レ流二無量大水一。故大海無レ有二增減一。是は華嚴經と云ふ經文に。海の潮が盈ちたりひたり。又は大雨が降りても。海の水があふれもせず。是は何なる事と云ふに四熾燃光明大寶と云ふ火の燃ゆる大なる寶がある。定めて海の眞中にある事なり。其大寶殿が。極めて熱する事なり。夫故に所々方々から。大河の水が流入する事。無量なる大水を燃えあがる。大寶殿が。皆飲み縮めかはかす故に。大海の潮は。增も減もせぬなり

地獄と云ふ所は。地の下。何里程にありやと問ふ。倶舍論と云ふ經を引きて依りて曰。南閻浮提下過二二萬由旬一。有二無間地獄一。梵一云二阿鼻一。長阿含經云。先世修二十善供養。沙門造塔供養一者。依二此福業一。得レ生二北州一。北州之人者。盡得レ生レ天也。四州中北州果報殊勝也。唯有二種々快樂之事一。更無レ有レ苦。此阿含經に云ふ所の おもむきは。前の世にて。十善を修め行うて。又は沙門塔を造り。供養する者は。此爲によりて。北州と云ふ所に生るる事を得るなり。此北州の地は。福樂の業のみにして。壽命盡きて死ぬると云ふ事なく。直に生るるなり。四州の中。此北州と云ふ所は。果報殊に勝れたり。唯常に種々快く樂しむ事のみにして。更に苦勞と云ふ事なし

○皆是釋迦阿難の云ひのこし、事故に。出家は釋迦聖人の道を學ぶ事故に。此輕文を眞うけに請けて。譬諭と云ふ事を知らず。誠に愚なる事なり。天に生る、と云ふは死にたる事なり。人々善事をすれば。北州に生ると云ふは。此世の事なり。皆愚民に敎ふる法なり。又曰。長阿含經云。此地平なる事如レ掌。無レ有二蚊虻蛇惡獸一。無レ有二沙石一。陰陽調和せり。四時順和して。不レ寒不レ熱無レ有二冬夏一華菓茂盛事也。其土に自然の粳米(ウルコメ)があリて。無レ有二糠糟一。無二白花聚忉利天衆味一具足せり。其常

ゐるべしと云ふ。玄知の云。いな左樣に非ず。いつまでも爰に置くべし。さあらば實熟さば如何すべしと問ふ。實は用なし。只花のみ望む所にして。吾物にして見ざればおもしろからずとぞ

一枝を吾物にして梅の花　小子玄知が風流をもて發句を作れり

○肥前佐賀の城下に。泰長院とて禪寺あり。住僧大機和尚は歳八十餘にして。老僧たりしが。兎角住持たる事を愁ひて。隱居せん事を欲すといへど。後住なき故に免されず。ある時。寺を欠落して逃げ去りぬ。やう〳〵にして尋ね出だして。後住を定め。而後に。隱居せん事を皆々責めければ。大機の曰。後住は我疾に約せり。相州鎌倉圓覺寺近日來るべしと云ふ。ある時佐賀の藩士生野圖書と云ふ者。番頭と云ふをつとめて。三十餘の人なり。文學もありて。頗。理學者なり。大機和尚に謁して曰。地獄極樂ありや。大機の云。あり。又問ふ。火車ありや。大機の曰。あり。何を以て薪とし。何を以て火を出だすやと問ふ。大機默して答へず。圖書甚怒りて責めとふ。機の曰。汝が。顔色赤し。是腹中に火あり。其火何れより來るか　佐賀の藩士利昌山領氏話しける

○專齋江村氏諱宗貝。倚松庵と號す。もとは備前三つ石の城主にして。落城の後。京に登り。宗貝に及ぶ迄。新在家と云ふ街に住めり。始め加藤清正に仕へ。後森美作守に仕ふ。され共。躬は京に居り。は壽百歳を保つ。老人雜話と云ふ書は。此翁の話しなり

○東湖禪師の歌に

みよしのはさくらの外に峰もなし
花やつもりて山となりけん

○賣茶翁の狂歌

茶錢は黄金百鎰より半錢まではくれ次第。たゞ呑み勝手。たゞよりはまけ不申

達摩さへおあしで渡る難波江の
流を汲める老の吾身ぞ

○佛書は一向につまらぬ事のみ多し。出家〻經文をば讀まず。只文學のみする事なり。爰に經の中にある所を拔きかきす。海水の鹹く苦き者を問ふ。阿含經曰。三つの因縁あり。海水の鹹苦のは。一つには成刧の時。光音天に至りて遍く大雨を降し。天宮及び天下を洗濯す。其中諸の所。穢れ惡む者あり。是鹹害なり。其諸の不淨の物。大海に流し入

迷ふ時は。三界皆苦しみとなりて。我を亡す

○一生此世の中に暮す間。若き時より老ゆるまで。誠にたわひもなき事なり

世の中は市の假屋の一とさわき
誰ものこらぬ夕暮の空

是は近世人のよみたる歌なり。道歌なり

○樹木谷織田侯の隱居へ參るとき。織田某とて公家衆のよし。三十餘の方にて。客なりき。某の曰。江漢は西洋おらんだの事を能く知れり。おらんだは人類にあらず。獸の類なりと云ふ。然れども。細工は妙なる事をする事なりと被仰ける。故に予答へて云ふは。人は獸に及ばず

○加賀の國松任の人。千代とて。人の知る俳諧女なり。美濃の盧元坊を師とす

ほとゝぎす郭公とて明けにけり

澁かろかしらねど柿の初ちぎり

朝顏や地に咲く事をあぶながり

朝顏に釣瓶とられてもらひ水

千なりやつる一筋の心から

○歌川は越前三國の遊女なり。其後豊田屋吟と云ふ。後尼となりて。瀧谷といふ。東國の方を行脚したる女なり

目覺しに琴しらべけり春の雨

さそふ水あらば／＼と螢かな

瓜紅のしづくに咲くや秋の海棠

おく庭のしれぬ寒やうみの音

たゝいても心のしれぬ西瓜かな　是は客に贈る

千代は常の女なり。歌川は遊女なり。孰れも其情見ゆ

○奥州石の卷の醫。京學に行きて歸るさに。予宅へよりし時。古式紙をもらふ。也有と云ふ人の句

盜ふか云ふて見やうか梅の花

奇人傳を見しに。尾州藩士横井孫右衞門と云ふなり。俳諧に名を得たる人なり

○奇人傳に云ふ。峰玄和は雲州侯の茶道なり。和歌を好めるの癖あり。或日郊外へ出で、。梅園の花盛にて。梅樹の主を問ひて。樹を買はんとす。敢て肯せざるす。高價を以て強ひてのぞみければ。已む事なく約す。翌日酒魚を以て樹下に來り慰む。農夫曰。根の損せざるやうにほりうがち。明日持ちま

は十四五人。或は二十人。又相を學ぶ者あり。是は孝安應對して。神相前編の正儀とて。印刻の書を著し。是を講釋する事なり。初弟子入として金五百疋を出だす。又極の秘傳書と云ひて。之を傳ふるには。金七兩貳分。貴人は銀二十枚。或は三十枚なり。石龍子の人となり。文盲にして他人と交る事なし。大船の船頭の如く。人に向ひて禮をなす事を知らず。門人の内一二人と交るのみ。其一人は芝切通種物賣にて。文化辛未二月十一日。市谷より火出で、。芝赤羽橋にて消ゆ。其時彼種物屋の老夫焼け死にたり。焼け死ぬと云ふ事夢にも知らず。又吾相を見て。今より三年と云ふ。今に死なず。相と云ふ者。面部の内。各々名を付け。或は五嶽にたとへ。兩眼をば日月とし。占の卦をたつると同じ事にて。地の下に風あれば。風地は觀なりと云ふが如し。埒もなき八つ當りなり。又弱く見ゆる人をば。短命と云ひ。金錢の乏しき人は誰が見ても貧相に見え。武士。町人。百姓皆人品に見ゆる者なり。又貴人にも色黑き下相あり。唐にても。日本にても。天下の主となりたる。漢の劉邦や。日本の太閤秀吉の類。卑賤より出で、天下を取りたる故に。古へ相者の見たると云ふは。後人の説にて。只文章に書きたる者なり。愚者。賢人は面體にて。誰が見ても知るなり。然れば世には貴賤はあれど。智者は少き者なり。愚人のみ多し。智者不惑。勇者不懼と云ふが如し。或とき孝安親に向ひて曰。人老いては餘命なし。折々は樂むがよし。終日坐して愚惑の人に應對し。[illegible]さけども是を知らず。夏月納涼と云ふ事も知らず。書を讀みてたのしむと云ふ事も知らず。何を以て樂しとするか。答へて曰。我は人の相を見て。百錢を得。是を積みて金銀とし。又一日に三度の飯を喰ふより外におもしろき事なし。樂み是にかぎると

○三世因果經曰。天上天下唯我獨尊三界皆苦我等安之。是は釋迦の遺言にして。人の能く知る處なり。予此語を解して云。天地は無始にして開け。其中無始にして人を生じ。是より先。無終の年數に人を生ずる事。無量なり。其中我と云ふ者は。予一人なり。親子兄弟ありと雖も。皆別物なり。然れば予能く吾に教へて迷はざる時は。生涯我を安んず。

へ示す事なり。又禪家は。己一人を以て。佛の本原を知り得る事にて。釋迦の遺言。八萬法藏をもいはず。敎外別傳と云ひて。辭にも文にも述べがたき虚無自然たる事。天地の萬造。人間草木。皆水火の二氣より出で。又水火に歸する事を推究し知る。是を草木國土悉皆成佛と云ふ事を能々悟道するなり。是も天下を治むる事にあづかんず。古は出家にならんと欲する時は。行者とて。其頃一國に一寺國分寺あり。今はなし。其國分寺へ行き。學問する事なり。學問成就して。佛經の譬諭方便の文面を能く解し。信實なる理を曉し知る。地獄極樂の論を以て。愚民を善に導く事を得度し。其頃京に玄蕃寮あり。爰にて其學の長たるを吟味し。又戒壇とて。諸所にありて。是にて度狀と云ふを請け。是よりして剃髮し。法師となる。是を敎導師と云ふ。今の僧は。寺を己の住居の家なりとし。我は高位高官なりと驕をきはめ。民を善道に導く事を知らず。實に國用の者にあらず。故に今よりして。僧をみだりに爲すべからず。田夫の如きに至りては。子多くして。末の子をば菩提のためなりと云ひて。小兒を出家にする者あり。長(ヒトヽナ)りて悪僧となる者多し。中年にして。佛道佛理を好む者をして。出家させる時は。名僧智識自ら出來るなり。古の法の如くして出家する時は。僧も自然と減ずべし。今の出家は。死人を葬むる事を業とするのみ

○奕は下の賤しき愚人。酒食の外樂しみなし。故に之を好む者多し。十人にして勝者は一人なり。負者九人。盗となるより外しかたなし。先達白川侯權を取られし時。博奕の宿は死罪。其一坐の者は遠島と有りければ。其頃は一向博奕なし

○芝三島町と云ふ處に。年久しく人相見あり。石龍子と云ふ。生は攝州池田の產にして。今に實子なし。孝安とて妻の連子なり。五歳の時養子となり。今三十歳位なり。其母は先年病死して。今の母は三人目なり。石龍子は歳七十になりけれども。至りて健にして。又孝安は至りて君子なり。親は至りて悪人なり。然るに。孝安親の命に少しも逆ふ事なし。親を尊敬する事聖經に不レ差。然るに相を見せる者百錢を出だす。其迷ふ者貴賤日々何十人と云ふ事を知らず。春三月比に至りては五六十人。平日

したり。夫より。絹地竪横に色々の御好みありて。後には其近臣の者に望めとありければ。多くは墨竹墨梅を筆疾に描きけり。畫の八時頃より。夜の八時に相濟む。親和と共に引き退く。伺公の間に。谷田太郎左衞門一人詰め居たり。是は其頃の留守居役にてありける。親和の曰。足下は唐畫描と聞きしに。和漢の人物風景山水を畫き。大名の前には。甚能きふるまひなり。今より二十年を經るならば。天下に名を爲す人と云へり。吾居所は神仙坐なり。甚是より近しと云ひければ。親和の云。我足下をおくらんと戲れければ。小人の宿には茶のなまぬるきが有るのみならんと答へければ。扨々能き挨拶なり。我等が宿の會日に。チトお出でとて別れける。吾が年三十歳の時なりき

○京師に應擧と云ふ畫人あり。生は丹波の笹山の者なり。京に出で、一風の畫を描出す。唐畫にもあらず。和風にもあらず。自己の工夫にて。新意を出だしければ。京中之を妙手として。皆眞似をして。甚だ流行せり。今に至りては。夫も見あきてすたりぬ。又江戸は奥州の方へ屬して。氣質も京人のやうにはなし。唐畫にも。和畫にも似ぬ風は。呑み込まぬ事にて。吾が自身工夫したりと云ひては。夫は法がないと云ひて。請け取らず。然れども。畫は其物の形を見て。其形に似るをよしとす。法手本とする處は。卽其物なりと心得たる者も無きにもあらず。又奥州の方は。今に於て。其かたくななる事かはらず。予二十五年以前より。日本の山水富士をはじめ。名山勝景を寫眞にして。阿蘭陀の法を以て。蠟畫に畫き。諸國の寺院佛閣の額に掛け。諸侯貴客へも數々認め遣しければ。世に之を奇歡とす。需むる者多し。然るに之を求むる者は。皆上方中國筋の人なり。奥州の人は。一向に是を取らず。愚直なる事かくのごとし

○僧を猥に爲ざる事。今の僧は。天下の遊民にして。出家の業なし。佛道も國民を治むる一助に備へたる者なれど。今の僧は。己一人を修むる事すら。能はず。一體僧は出家とて。家はなし。愚民をして。譬諭方便を以て敎導するを業とす。今の門徒家は。甚。其法にかなへり。無智の凡夫を極樂へ往生する事を。常に說き聞かせ。惡念の起らざるやうに敎

みては。景色なし。此山のかたちは。世界中になし。元市場と云ふ處は。白酒を賣る處なり。爰にて富士山の圖を板行に彫りて。埒もなく押してあるを。蘭人往來する時。何枚も需むる事なり。さて此山は。神代の以前より燒出し。數千年を經て。四面に砂を吹きふらし。如此かたちとはなりぬ。我壯年の時までは。頂より煙立ちけるが。今は煙なし。山嶽は皆世界の不開前の物にて。波濤の形あり。此富士のみ。出現の山なり。遠く望むべし。山には登るべからず。天の逆鉾の如き。埒もなき物よりは。此富士を稱歎すべし。夫故予も此山を摸寫し。其數多し。蘭法蠟油の具を以て。彩色する故に。髣髴として山の谷々。雪の消え殘る處。或は雲を吐き。日輪雪を照し。銀の如く少しく似たり

○吾國畫家あり。土佐家。狩野家。近來唐畫家あり。此富士を寫す事をしらず。探幽富士の畫多し。少しも富士に似ず。只筆意筆勢を以てするのみ。又唐畫とて。日本の名山勝景を圖する事能はず。名も無き山を畫きて。山水と稱す。唐の何と云ふ景色。何といふ名山と云ふにもあらず。筆にまかせておもしろき樣に。山と水を描きたる者なり。是は夢を畫きたると同じ事なり。是は見る人も。描く人も。一向理のわからぬと云ふ者ならずや

○予壯年の時。專ら唐畫を以て人にも敎へ。墨竹など描く法は。葉は个字點分字。節の法は。上乙。下八。小枝は雀足とて。法則を以て人に示す。ある時。仙臺侯の大夫後藤孫兵衛とて。吾を旅館にまねき。机の板に畫を請ふ。予墨梅を畫く。描きながら畫法筆法を談ず。此花を此所へ一りん描くと。則此根がしまりて畫法の妙とする處なりとかたりければ。皆々かんしんす。其後は仙臺侯へめされ。相手には深川親和父子なり。奥方は公家衆久我家の女なり。簾屛風の内より御覽にて。仙臺侯は吾が向におはしまし。用人役平賀藏人傍に居て。命に應じて。絹紙を取り次ぎ出だす。予曰。お好みに從ふべし。其紙へ美人を認めよと仰せられけるに。直に筆を採りて草々と。和美人の立てるすがたを描く。是と對なる物を認むべしと。又同じく和男子を圖す。侯興に入りて。其畫を自持ちて。簾屛風の內へ御入りある。女中の笑聲交々

天の逆鉾とて。數丈の鉾。岩上に逆さまに立てり。石にも非ず。金にもあらず。神代の文字にて。銘を鐫りてありと云ふ事。昔より云ひ傳へ。誰一人見たる者なし。然るに京に住する橘石見助は。東遊記西遊記とて。板本あり。西遊記の中。薩州に至り。此霧島の逆鉾を篤と見たる樣に誌し、なり。尤十死一生の思ひをなして。見たるとあるが。此平治兵衞の紀行には。霧島町に宿して。庄屋の家に行き。鉾の一たんを聞きしに。昔より鉾ある事を。人人云ひ傳ふ事ながら。十里も人家なき深山幽谷の道もなき所へ行く事故。誰あつて。其路を知るものなし。身の程を知りたるもの、行くべき所にあらず。此五六里の村においては。我は行きて彼逆鉾を見たりと云ふ者は。聞き傳へずとの事なり。予考ふるに。此鉾何の爲に建て置きしと云ふ理もなく。天より降りしにや。國常立の尊の建て給ひしにせよ。何になると云ふいはれもなく。埒もなき事なり。全く自然天然と鉾に似たる似象と云ふ者なるべし。吾國。神代の事は。傳記なし。神代以前は。何れの異國の人住居したるや。播州石の寶殿と云ふあり。四間四面に石を刳りて造る者人工なり。又因州に。熊權現とてあり。皆柱石を以て疊む。是も人工の者にて。何の爲に造りたりと云ふ事を知らず。民俗の云ひ傳へには。古の神。此海へ橋を掛けたまはんとし給ひしとぞ。又蝦夷地に。タサリチと云ふ處あり。是は六角の柱石の數かぎりもなく。海岸皆此石なり。是は人工にはあらず。天然の者なり。近藤氏ヱトロフ島へ。五度行かれし時。庄藏とて。南部の者書をよく描きしに。蝦夷地を寫させ。其圖を予又寫せり。世界の中には。此類いか程もある事にて。蘭書中には。奇妙不思議の山水景色ある事なり。吾日本の人は。僅の天の逆鉾石を見て奇妙なりとするは。世界の事を知らぬ故なり

○吾國にて奇妙なるは。富士山なり。此は冷際の中。少しく入りて四時。雪峰に絶えずして。夏は雪頂きにのみ消え殘りて。眺め薄し。初冬始めて雪の降りたる景。誠に奇觀とす。富士は駿河の國内より見たるはあしく。二十里。三十里。隔たりて。遠くより望む時は。山を高く見る。低き地より望

駒の隙を過ぐるが如し。夫天地は水と火なり。水火の中に生じ。天地は人の視る處。不視處を以て。窮理する者多からず。天の廣大よりして。大地を見れば。一粟の如し。人は其一粟の中に生じて。微塵よりも小なり。汝も我も其みぢんの一毫ならずや。予爰を知ると雖も。之を信せず。小なりと思はざるは。小慮を以て。能く人間の道理を考ふるに。持つまじきは子なり。子は我後身なり。吾體と同じ。子いためば。我又いたむ。ある人の云。子なきは子孫斷絶すと然らず。吾先祖より糸すぢの如く。連綿として。子々孫々何れにか傳はりなん。其元を知る時は此の如し。佛道にては。此世を修羅と云ひ。亦地獄と名く。死する時は極樂なり

　寝るは樂起きて地獄の夢を見る
　　寝續にする是ぞごくらく

○宿に婢老婆あり。其愚なる事數々ありけり。ある時。しぶなしの榧を貰ふ。故に煮豆にせんとて。豆も脣喰とて大なるを取りよせ。喰ひけるに。榧一つもなし。如何と尋ねければ。榧は小口より薄く切りて入れけり。夫故に微塵とくだけて無きが如し。豆もついでに小口せよと笑ひける

○人百歳に至れども。欲念の更にぬけると云ふ事なし。老人は恥ぢて云はず。情氣は卽神經にて魂なり。活きて動くうちは此念あり。老僧の杖にすがりても。此念心根にあり。鳥の囀づるも啼くも。皆さかる故なり。虫の羽を動し。音を出だすも盛なり。秋の末に至りて。西風吹き搖落せんとする時。草中に虫の聲かれ〲にす。死に至るまで聲を發するは。神經以てする所なり。天地の中の活物は。奇妙なる機にしたる者なり。是皆天火の爲すところ

○古川平兵衞が西遊雜記に云。薩州霧島山は。九州第一の深山にて。幽谷嶮岨かぎりなし。人知る者稀にて。山奥は肥後の米良山に續きて。南は大隅にまたがり。數十里に連りし山なり。高山と云ふにはあらず。深山なり。躑躅の木あまたにして。花の頃は谷々峰々緋の如し。山一面に赤く段々と山奥は。夏までも咲く事にて。東霧島村。西霧しま村あり。此山の中。嶮岨の峯に。神代に建てし

御通行の時。老婆の衣類をせんたくしけるを御覧じ。其寺號を御付け成されしとぞ。珍しき名の寺なり。其日の暮方。此寺に葬禮ありと云ふ。其事も知らず。夜半頃染屋主人と。二人通りかゝりしに。其寺の門前とおぼしき處に。白き衣服を着たる者の。腰より下は地よりも離れ。あなたこなたと動く者あり。世に云ふ所の幽靈なり。我も若年にて。此樣なる者今まで見たる事なし。甚おそろしく思ひけるが。其近邊に酒屋あり。寢入りたるを。戸をたゝき起しければ。酒屋六尺捧を手に持ち。イザござれ世に化物のあらんやと云ひて。先きに立ちて行く。跡よりヲヅ〳〵して就きて往き見れば。葬禮の時。紙にて造りたる幡の。木の枝に掛りたるなり。葬禮の時。幡の木に引き掛けたるを。其儘にして置きける。晝も此寺の前は。樹木茂り。薄闇き所なり。殊更夜分故。甚あやしく見えしもことわりなり

人間感

○予七十有餘に及びて。始めて人間と云ふ事を知れり。壯年の時は。古人の遺書を讀みても。其意味深き處は知りがたし。今將に人間と云ふ事を考ふるに。不思議奇妙なる者なり。吾日本は。天照太神人道を開き給ひけれ共。其古より此國の人ありて。獸と共に食を爭ひたるを。大神日向の國。檍原の海濱に都を建てゝ。人間の道を敎へたるなり。中臣の祓にあり。親を犯し。子犯の罪然れば吾先祖も。其子孫にして。天子も我等も同物なり。世界の中には。未開古への日本の如き國。今にあり。夫人間の道を敎ふるは。智の始めにして。漸々と人智盛んに開け。其中。智ある者長となり。而後上下君臣分れ。爰において亂世の代となり。是誠に禽獸の餌を爭ふにことならず。今方に大平の世にして。古。人間の起を知らず。啻に名利のみを是として。歡樂を極め。食にあき滿ち。此欲の爲に。大に迷ひ。賢きも智あるも。愚も智なきも。共に相爭ひ。身を立て志を得んとて。暑にも寒にも奔走し。貴は駕籠にのり。卑は之を昇き。老いて貧賤なるも。食を乞ひて生を保つは何事ぞや。日々天旋り。四季移る事。幾萬億の後も此の如し。今日過ぐれば。亦明日となり。竟に老いて死に至る事忽なり。人生白

者なり。此書を作る者。信州の人ならんか。日本諸國の人風。美濃を以て譽む。丹後の人は一人として善人なし。古。三生太夫此國の人なり。能く此國の人をかんがみるに。一向能き人なし。又伯耆因幡を以て惡しき國と云ふ。白井權八。因幡小僧。河合又五郎。此又五郎は又左衞門の子なり。又左衞門は。安藤對馬守の臣なりしに。人を殺害して。因州鳥取渡邊數馬が處へ立ちのき。而後又五郎あり。故に又五郎は。因州鳥取の生れなり。予數々彼國の人を考るに。各々才あれども愚なり。智あれども取り用ふる處なし

○今より二十七八年も過ぎし事にて。芝愛宕の下に。村尾權之助とて。小十人組にて。居宅を糀町法眼坂に。人の半(ナカバ)建てたる家を買ひ取り。又建てたしして住みけるに。小身なる者故に。權之助夫婦と嫡子二十二三歲。弟は十三四にて。下女一人仕ひけるが。ある時。五月淋雨。日々降りける時。日暮下女泣きて曰。今引窓を。火の玉飛びけりと云ふ。皆聞きて誠なりとせず。其翌日も雨降り。三男玄關の後に部屋を造り。爰に書を讀み居ける時。日もくれかゝりける故。障子を開き見れば。長一丈ばかりに見えて。白髮を亂し。眼は金の如く。手に火の玉を持ち。腰切の衣を着。だん／＼と進み來る。彼童子脇差を以て貫き打ちにしけり。夫なりに氣絕しぬ。其音に皆々おどろきて行き見るに。鞘は手に持ち脇差の身は向ふへ投げたり。何故と問ふに。右の如く咄しけり。此庭は法眼坂の下にてがけなり。ふしんの時。狐の穴ありしを埋めしに。必古狐のしわざならんと。其翌日吾宅へ父子ともに來り。直に化物に出逢し者に聞きしは。初めてなり

○今より四十年以前の事なり。六郷の川上に毬子の渡りあり。則まりこ村なり。爰より二十町餘行きて。鄕地(ゴウチ)と云ふ處の染物屋の亭主は。兼ねて予に畫を學びて弟子なり。九月の末。我をともなひて。鄕地に至る。翌日は雨降りて。四五日も滯留す。其時五六町かたはらに。江戸より來り居ける者とて。手習の師匠あり。主人と二人連れして。彼師匠の方へ行きける。夜に入りて歸る。其路盥山洗足寺と云ふ寺あり。是は古へ神祖源君公。此處を

の隱士無外子闘通と云ふ出家。佛國曆象編と云ふ書を著せり。是は須彌山を是とし。地球を非としたる事にて。萬書を引きて。漢文なりき。文盲なる者をおどす謀事なり。又文學者にも。理に疎き者まゝあり

○一夕土佐の人來りて。獨笑妄言の序を見せしに。讀む事流水の如し。若輩の人なれども才子なり。然れども。是も文字を知りたりと云ふ事を。他に知らせるまでにて。其文章の意味一向に知れず。一句ごとに。篤と讀みたき者なり

○鍋島侯の藩士利昌山領氏の話に。在所佐賀にて。佛事ありて誦經す。一人の僧經をよむ事瀧の如し。一人の僧の曰。汝經文を疾く讀む事なかれ。音韻わからず。又汝はやくよむを自慢自負とするにおいては。予又是を摸寫せん。爰において筆に墨をてんじ。紙に點をうつ事連綿。汝が疾く讀經するは。此點と同じ

○人は必ず移りやすき者なり。詩集を讀めば。詩を作りたく思ふ。文章を見れば。文を作りたく。旅談を聞けば。旅して他國を見まほしく。然れども一向の俗人は。書もよまず。只色欲飲酒にうつるのみ

○和學者とて。日本往古の事を知る事なり。其書を見るに。萬葉假名とて。古事記。舊事記などの言葉を以てしるし。今の假名字のなき古のかなを以てす。古雅にはあれど。不レ讀二和書一者にはよめず解せず

○朝貌の瑠璃色なる花。前朝咲ける一朝早く起きて。之を見るに。常よりも色淺し。茶など呑み。又見るにおよびて。色濃くなる。金山より綠砂紺砂を出だすが如く。誠に青色は。日輪の空氣なる色なるを知る。先達て銅板を押す時。其板を日の照し。上に映じて青色に移るなり

○人國志と云ふ書あり。北條時賴最明寺殿の作と云ひ傳ふ。疑ひ無き事能はず。然れども。天下海内をして。民情を撿察するに非ざれば。如斯詳に盡し知る事能はず。今大平にして。風移り化に浴し。古に異なりと雖も。民情古の遺風あり。是皆風氣水土の所二以使一レ然也。今將に此書を閲するに。信濃を以て美國と稱し。隣國の郡村を委しく知る

ると雖も。知る者なし。是名を得たるの後悔。今にして初めて知れり。愚なる事にあらずや。夫天地は限りなし。名千歳に殘るといへど。十萬歳に至るべからず。爰を以て考ふるに。名は生きて居るうちの名にして。是皆心得違ひなり

江漢後悔記の畢

○夷賢志と云ふ書あり。皆因縁因過の事のみを誌したる書にて。談議僧の取りあつかふ者といへり。其中に崑山の揚老と云ふ人。一日門に坐して居けるに。一の婦人前を通る。銀の簪を墜せり。徑のかたはらの石にあたりて。カラリと鳴る音きこえたれば。此女の行き去るを首鼠(ウカヾヒ)。ひそかに彼石の處へ行き拾はんとて。往き見れど。簪とてはなし。只蚓の石の間にあるのみ。揚老不思議に思ひ。今鳴りたるははたして此あたりと見しに。其間に俄に一人の男そこを通り。うつむきて物を拾ふを見しが。彼銀の簪を拾ひ取りたり。揚老是を視て。高聲に呼びて曰く。夫は吾墜したる物なり。是へ返せと云ふ。拾ひたる男は。何か僞りを云ふとて。足疾に去る。揚老追ひかけて。其著物を執へて。是非に夫を返せと云ふ。時に彼男簪の股より二つにして。一分にて魚を買ひ。一分にて酒一壺を求め。揚老子いざこなたへと家に至り。二人して賞翫し樂しむべしと云ふ。揚老是を同心して。其魚を煮んとて。先釜の上に置く。サテ酒を暖めんとする處へ。隣の猫魚をくはへて忽逃げ去れり。やれ惡き猫めと云ひ。杖にて逐ひ撲たんとして。誤りて一壺の酒を打ちこぼし。皿は墜ちて微塵となる

○文字も皆唐の字なり。聖賢も皆唐の人なり。然らば唐の書籍を讀み得ざれば。理非分明ならず。其意を得んとするうち。文章のおもしろきに心移り。色々と書き貽す事も。皆唐の文章にする者なり。是は心得違ひなり。人によりて書くなど。一向にきらひ。唐の文章を知らざる者に。還りて聖賢の志ある者あり。故に和語にして書くべし。兩道に益あり。大槻玄澤と云ふ人は。仙臺侯の外科にて。蘭學に名あり。頃日。タバコの起原の書を引きて。皆漢文なり。タバコは多くは愚人卑賤の好む者にて。故に此書は世の嘲弄ものとなりぬ。又京東森

書く事能はず。文字と同じく戯に書く法に非ず。國用の具也。吾國の人は。萬物を窮理する事を好まず。天文。地理の事をも好まず。※淺慮短智なり。予此日本に居て。吾國の人に差ふは。甚しき謬なり

○予壯年の時。老母一人あり。親をば十四歳の時失ふ。かつて妻子なし。母の性質剛直にして貞實也。孟子の母の如し。故に三十有餘にして。妻を娶らず。ある時考へ思ふに。生涯妻子を求めずして。母沒しぬる後に至りては。日本諸國を遊歴して。而後には京攝の間に住居して。昔此地に旦丹（旦丹は淡々なり）と云ふ。俳諧師歳八十餘まで存在して。妻子なし。十一二三歳なる童女を多くかたはらに置き。左右の物を取らしむ。彼が自筆を得る者鮮し。皆童女をして代筆なさしむと。予此タンタンが人となりをしたひしに。母七十三にして老耄して沒しぬ。さらば家を捨てゝ。獨歩して。諸國名山を遊覽せんと決しけるに。親族の者頻に留め。聖人の教を以て示し。人道は妻子を以て子孫とし。之に差ふ時は人道にあらず。爰において竟に留まる。是も量見違ひなり

○さて亦子なき者は物のあはれを知らず。我子を愛するのあまり。其愛他の子に及べり。此情は書にも文にも述ぶる事能はず。然るに段々と生長して後は。各々己の志しをあらはし。必。親の志と差ひ。己の身體。親の躬より出でだりと云ふ事を辨ずる者鮮し。且又孝をつとむる者多からず。親を親とせざる者多し。親は子を子とし。子を思ふの情深し。是己の體より出でたる故なり。今に至りて考ふるに。子は無きにしかじ

○今西洋の天學。萬造の窮理を以て考ふるに。天地の中。一つとして靜まる者更になし。日輪。五星。地球。月皆動き旋り。一刻も留まらず。元より。生類人間走り動き。惑ひ迷ふ事。天と一物の機なり。目に物の移り。耳に音のひゞき。神經以て之を知り。物欲。色欲。飲食欲。貴も賤も此欲の爲に靜まる事能はず。然るに此三欲に迷ひ惑ふは。活きたる者の性質なり。我名利と云ふ大欲に奔走し。名を需め利を求め。此二の者に迷ふ事數十年。今考ふるに。名ある者は。躬に少しの謬ちある時は。其あやまちを世人忽に知る者多し。名のなき者誤

めて工夫したる事は一つもなし。然るに日本往古は。家の內皆土間に居立したる事にて。今は總床となり。土間の遺風のこりて。床の間と云ふ處を傍に設く。總て土間の時は。主君此床に坐し。從ふ者は土間に坐す。しき物あり。坐しきと云ふ。黃蘗派の禪僧拜の時。下に敷物あり。是を坐しきと云ふ。今に家の內に坐敷の名あり。其後主君に替へて掛物とす。故に釋迦達摩或は維摩の如き。唐にても。古へは吳道玄皆神僊を畫く。多くは仙佛なり。後代となりて。花鳥山水人物も。ともに神佛に非ざる者を畫かけり。今三幅畫とて稱する者。中尊左右を脇畫と云ふ。必。中は人物にす。世俗釋迦觀音の類は佛なりと。人死ぬれば佛なると云ふ。爰において。中尊壽老人左右鶴龜松竹の類なり。吾日本にて。妙畫と稱する者探幽なり。咸筆の法とて。一揮にして。人物山水花鳥を描く。誠に奇絕の技なりとぞ。此風天下に流行す。中興唐畫風と稱するは。宋朝。明朝又は今の清朝の畫を寫し得て。唐畫家と云ふ。何れにしても國用の物にあらず。皆翫弄物にして。今にては只床の間の掛物とするのみ。床。違ひたな。書院とて。古への遺風なり。只名のみにして。其古事を知る者なし。書院には必文出し机とて。傍に一間ほどの處に窓あり。其窓にあかり障子を四枚立つ。えんの方へ差し出したる者なり。今においで田舍にはあるものなり。江戶は數々火災にて。諸侯の家にも書院の名のみにして。文出し机なし。然るに畫の妙とする處は。見ざる物を直に見る事にて。畫は其物を眞に寫さざれば。畫の妙用とする處なし。富士山は他國になき山なり。之を見んとするに。畫にあらざれば見る事能はず。然りといへども。只筆意筆法のみにして。富士に似ざれば。畫の妙とする處なし。之を寫眞するの法は。蘭畫なり。蘭畫と云ふは。吾日本唐畫の如く。筆法。筆意。筆勢と云ふ事なし。只其物を眞に寫し。山水は其地を踏むが如くする法にして。寫眞鏡と云ふ器あり。之を以て萬物をうつす。故にかつて不見物を描く法なし。唐畫の如く。無名の山水を寫す事なし。又畫を作るに。五彩の畫の具は。皆膠水を用ひず。蠟油を以て。調和して之を造る。貴人の席上。酒邊の傍にて

ふ。如ㇾ岩如ㇾ石物現る。之を見るの術あり。我等も是にも加はりしに。甚しき間違ひ見損じある事にて。後悔し止みぬ

○我が先祖に畫を描きし者ありけるにや。吾伯父は。吾親の兄なり。生ながらにして畫を善くす。其血脉の傳はりしにや。予六歳の時。燒物の器に雀の摸樣ありけるを見て。其雀を紙にうつし。伯父に見せける。十歳頃に至りては。達摩を描く事を好みて。數々書きて伯父に見せけり。後長じて狩野古信に學べり。然るに和畫は俗なりと思ひ。宗紫石に學ぶ。其頃。鈴木春信と云ふ浮世畫師。當世の女の風俗を描く事を妙とせり。四十餘にして。俄に病死しぬ。予此にせ物を描きて。板行に彫りけるに。贋物と云ふ者なし。世人我を以て春信なりとす。予春信に非ざれば心伏せず。春重と號して。唐畫の仇英。或は周臣等が彩色の法を以て。吾國の美人を畫く。夏月の圖は薄物の衣の裸體の透き通りたるを。唐畫の法を以て書く。冬月の圖は。茅屋に篁繞り。庭に石燈籠など。皆雪にうづもれしは。淡墨を以て唐畫の雪の如く隈どりして。且其頃より婦人髮に鬢さしと云ふ者始めて出でき。爰において。髮の結び風一變して。之を寫眞して。世に甚行はれける。吾名此畫の爲に失はん事を懼れて。筆を投じて描かず

○唐橋世濟とて。下谷竹町と云ふ所に居て。儒者なり。吾近隣に宗元と云ふ醫者あり。世濟爰に來りて書を讀み。或は講釋す。故に予も行きて學びぬ。先生題を出だして。詩を作らしむ。予も詩の下に誌すに。唐風に非ずば風雅にあらずとて。名は峻。性は司馬。字は君嶽。號は江漢とす。峻嶽を以て名字とす。江漢とは。予が先祖は紀州の人なり。紀の國に日高川。紀の河とて大河あり。洋々たる江漢は南の紀なりと。故に號を江漢とす。其後如來先生に逢ひしに。江水。漢水とて二水の名なり。之を合せて名としたるを笑ひけり。略人に知られければ。江漢にして置きぬ。これも謬とぞ

○書は。貴賤共に好むものにて。別けて彩色すれば。俗眼に入りやすし。今唐畫と云ふも。和畫と云ふも。元は皆唐畫にて。富士は日本の名山なるを寫しても。描きかたは唐の法にて。吾日本にて。始

又。宗眠といへるは。英一蝶の下畫にて。草々としたる咸筆をうつし。片切彫とて毛彫にして一流を工夫す。其二代目宗與も。之を次きて妙手とす。書に譬へて云へば。後藤は高彫とて。金銀其外赤銅火色四分一色々にまじへて形とす。是極彩色の如し。躬卜と云ふは。肉ある彫にして。薄彩色の如し。宗眠。宗與は黒書の如し。各々一流を工夫して。一家を爲せり。此上の工夫に非ずば名を得る事かたし。爰において止めぬ。其頃平賀源内とて。讃州の人なり。江戸神田お玉が池と云ふ所に住す。源内は物産家にて。本草者とて仕官を好まず。浪人者なり。其頃八重霧と云ふ歌舞妓芝居の女形。兩國三つ股にて。蜆を取るとて。水に溺れて死せり。之を源内戯作して。地獄に落ち。閻魔王の前にて。狂言をする事を。讀本にして。世の人甚珍らしき新作とて。おもしろく思ひ。其後神靈矢口の渡しと云ふ。義太夫淨瑠璃。人形芝居の狂言の作をす。淨瑠璃は。大坂より初まりて。近松門左衞門の作多し。故に大坂言葉なり。夫を源内は。江戸言葉としたる故にや。甚珍しく。爰において世俗源内の名を知る。源内又おらんだの奇物を好みて。其頃は蘭學者も少く。杉田玄伯。中川順庵のみ名あり。源内はヨンストンスと云ふ蘭書は。五六十金の物にて。家財夜具までも賣り拂ひ。此書を得たり。此蘭書は。世界中の生類を集めたる本にて。獅子。龍其外日本人見ざる所の物を生寫にしたる事。かずかぎりなし。今は此書も所持したる者ありけるが。其頃はかつてなし。其後に長崎へ行きけるに。昔し獻上せしに。不用とて長崎へ持ち歸る。此物通詞の家に數年ありける故。くづれ損じ體なしになりて有りけるを。源内東都に持ちかへり。數日工夫をばめぐらし。竟に考へきはめたり。是今ある所のヱレキテルなり。大名。小名之を見物す。爰において源内を奇人と稱す。然れども。只紙の動き飛ぶと。火氣の光り見ゆるのみにして。人の體へ動ずる事なし。彼ビイドロの壺もありけれども。何にする物と云ふ事を知らず。源内死後におんらだより渡り來りて。今に至りては見せ物に出だし。世俗の人も見る事とはなりぬ。源内は嘗て金銀銅鐵の山にあるは。山頂に立ちて云

あり。遊女ある處なり。夫より二里右の方へ入る。足守に至る。爰は木下侯の領地なり。留まる事數日。予鹿の生血を啜らん事を云ふ。領主俄に狩に出でられけるに。漸く鹿一疋を獲たり。則生きたる鹿の耳元を小つかを以て衝き破り。血を啜りければ。人々懼れをなしける。予薄弱なれば。鹿の生血は至りて肉を養ふ良藥と聞く。然れども得がたき物なり。又ある時。鹿の肉を喰はんとて。料理人に云ひ付けゝるに。煙り臭くして。一向に喰ふ事能はず。何なる故と問ふに。此所は吉備津の宮あり。皆其神の氏子なるにより。獸類は。穢とて之を忌み嫌ふ事なり。故に外に竈を造り。鼻に氣の入らぬ様に。長き竿を以て煮たる故。あんばいあししと云ひければ。夫故に吾生血を呑みたる事を聞く者。如鬼思ふも尤ぞかし

○佛國暦象編と云ふ書。今年開板して。全部五冊。一冊五十餘丁あり。京東森隱士。無外子釋の圓通撰する者なり。其書を閲するに。須彌山を以て是とし。地圓球なる者に非ず。日輪中には日天子あり。其眷屬あり。月中にも月天子とて。又眷屬あり。月食は地景にあらず。羅睺計都食をなす。暗氣と云ふ者なり。須彌山は九山八海とて。上を北とし。下を南とし。日月横を旋る。今天下に用ふる處の暦象考正及地球なる説を。悉く非として。梵暦と云ひ。天竺釋迦在世の時の法を以て是としたる書なり

江漢後悔記

○我今年七十有餘にして。始めて壯年よりの誤を知り。我若き時より志を立てん事を思ひ。何ぞ一藝を以て名をなし。死後に至るまでも。名を貽す事を欲して。初め刀を作らんとせしに。刀は武門の第一の器なれば。之を造り後代に殘し。名を後世に知られんと思ひしに。今天下治り。國靜謐なれば。古刀の名高きを以て武門の裝とし。新刀を用ひず。亦人を伐斬する具にして。凶器なり。故に後悔し止みぬ。又目貫緣頭。皆刀脇差のかざりなり。治世には之を翫弄する者多し。則後藤彫とて。其家代々を以て名作とす。其頃。宗與宗眠又朴ト とて。高彫を略して。肉あゐとておきあげの如く。肉高に彫りて。人物虫魚に至るまで。妙工をなす。

を以て凌ぎ。火を少しも恐れず。火事あれば幸なりと思ふ者多し。大工。左官。屋屋ふき。其下をはたらく者。火事を待つ事。吉事を禱るが如し。江戸は。昔御入國の時分は。八百八町ありしに。今は千八百八町となる。其竈數に及びては。何億萬と云ふ事にして。冬月は火事のある道理なり。年々火事あれば。武家町家共に衰微する事なり。ある人の咄しに。鳥見と云ふ役人四五輩。田舍へ行きたる時。村の庄屋の宅にて。晝食するとて。其飯を喰すると。忽死にけり。何なる事と吟味したるに。飯の內にトカゲと云ふ虫あり。飯をめしつぎにうつす時。上より落ちたる者と思はる。其飯を炊く者。十七八の女なり。然るに五人御家人を殺したる故。此女罪なしと雖も殺されたり。予考ふるに。毒虫の飯器に入りたるも知らずと云ふは。元疎草とは云ふべからず。迂濶の至りなり。又芝牛町の火事は。タバコの火より出で、。又谷町の火事は。一人者火を焚きかけ隣へ行きたる跡にて。火事となる。大風の時。火を恐れざるは倉卒とは云ふべからず。總て江戸の人は。京の人と逢ひ、綿密にあらず。其上近國近鄉の者。奴僕となり。此者共。火を恐れざる黨なり。然れば火を出だす者は一人なり。重き罪科に行ふ時は。火事少かるべし。扨冬月火事ありて。夏月なきは。夏は天氣地を照す事つよし。故に地氣上升する事さかんなり。萬物皆濕りて。火移らず。冬月は天氣薄く。地氣升らず。故に萬物乾きかれ。水氣なし。故に少しの火にても。物に移る事早し

○間宮林藏と云ふ人。蝦夷の奥へ冬月行かん事を好みて。文化午年十一月。此地を發して。辛未正月にかへる。六月二日。予が家に來る。冬月は海川皆氷となる故に。其上を渡り行く。故に行きやすし。唐太の地に。トナカヒと云ふ獸あり。大さ大八車を引く牛程ありて。頭に大なる角あり。全體鹿の如し。蹄もわれてあり。如牛如馬畜ひて甚用をなすと云ふ。おらんだにては。「レンシイル」と云ひ。支那にては。順鹿と云ふなり。唐太は。領主もなし。都會の地もなし。一向の不毛の地なり。滿州人。蝦夷人と少しの交易をなすのみ

○備前岡山より二里過ぎて。宮內と云ふ處は。茶屋

り。深林の中を過ぎて。裏門へ出づ。出家は律僧のみ。寔の出家なるべし。朝粥を喰し。四時過るに飯を喫す。其餘食を求めず。湯茶のみなり。亦戒を保つ事。五戒。十戒。或は四五十戒とす

○森侯は。播州赤穗なり。大川量平と云ふ醫者ありける。文人才子なり。隱居して常に京に出で、學者と交る。鬚長く白し。顏色唐人の如く。常に唐服を着て。予に生寫しを賴む。畫にしては日本人とは見えず。然るに只文學の長じたるのみにして。經學。實學。天學甚疎し。先達七十餘にして故人となりぬ。今の醫者皆其弟子なり。其學風にして。文字の事は甚明なり。其中神木主膳。學醫の一人なり

○貴賤上下共に學ぶべき者は。聖人の道なり。只。論語。大學を幾遍もくりかへし讀むべし。佛の教は學ぶべからず。異端の教なり。八宗。九宗共に本源の起は。西洋の天主教なり。釋迦爰に基く者なり。天正の頃。信長切支丹を信用して。近江の國に南蠻寺を建て。宗法を弘めしに。其教に曰。天地の始まらざる無量劫の時。天帝天地日月を造り。後に衆生を生じ。天帝之を憐み。末の世になりては。人智の私を以て。欲の爲に迷ひ苦しむ。之を「ハラデイス」と云ふ。安極世界に導き給ふ教なり。此世は假の世。此世にて難行苦行して。首切られ。重き罪をうくと雖も厭ふ可らず。忽安樂世界へ產れ。天帝の憐を受け。無量劫が間死すると云ふ事なしと教ふるなり。是釋迦の須彌を立て。地獄極樂の方便と同じ。又禪宗の悟と云ふも基く處は。同じ事にて。只譬諭方便を打ち貫き。天地の虛空より。人間萬造皆現れ。亦本の虛無に歸ると云ふ究理を知り曉す事なり。寔に異端の教なれば。常人はかつて學ぶべからず。若。此悟を學ばんとならば。六十餘にして學ぶべし。壯年の者學ぶ時は。天壤の廢物となるべし

○火事の事は。每々疎草と云ふ事にて。火を出だしたる者。格別の罪なし。何故と云へば貴人の家よりも。火を出だす事有りと云ふ事なり。貴人大家は從者多し。下々の輕き者なほ多し。火を疎末にする事は。輕き者なり。一年切の奉公人にして。家なければ。貨財なし。寒月は衣服うすければ。火

林清都大夫一中是は本願寺派の出家なりと。寶永正德のころなりき。都古路國大夫は。一中の弟子。初の名は半中。又元祿年中岡本文彌一流をかたる。文彌ぶし是なり。然し是等は皆一段淨瑠璃にて續物にてはなし。寛文の頃。大坂に井上市郎兵衞。井上播磨之掾。藤原要榮。門人井上市郎大夫。淸水理兵衞。此理兵衞は安居天神の邊の料理茶屋のよし。播磨は貞享二年丑五月十九日五十四にて病死す。其風をのみこみしにや。淸水をば今播磨と云へり。竹本。豐竹共に此風なり

○攝州東成の郡天王寺村の百姓。井上に從ひ。淸水理兵衞に學び。貞享二年乙丑の年。道頓堀に芝居を興行す。是を義太夫と云ふ。淨瑠璃作者近松門左衞門も。其頃の人なり。義太夫は。竹本筑後之掾。藤原の博敎と受領せり。正德四年午の九月十日六十四にて病死す。文化八年辛未まで九十七年になるなり。是義太夫節の起なり

○蒼田變じて海となる。湖水或は河自然と山嶽の砂石流れ出で丶。河は湖中に入り。年々にして溢れ。皐に至る。今淀川稻葉侯の城内へ。水車を以て水車の水を入る仕かけなれど。其水車一向にめぐらず。淀の川瀨の水車とて。世に名高し。故に取除もせず。今は淀川淺くなり。城内は低くなり。河水皐に溢る丶故なり。諸國此うれひ多し。關東の河は泥川也。中國西國は流河にして砂石多し

○常人は悟るに及ばず。出家は出家たる名の如く。宿なし。されば物々事々にはなれ。是も非もなし。然るに釋迦須彌山を造りて。八萬法藏を說く。八萬の法藏皆譬諭方便なる事を知らず。今の僧は其經文に迷ひ。人を濟度する事はさておき。己一人に敎ふる事能はず。常人と共に大迷ひなり。釋迦が佛になれと敎へたる事を。能く考へ知るべし

○ある日。目黑新寺とて律院あり。門に入るあたり。塵を掃ひてうるはし。しばし行けば。三界外相の碑あり。僅に登りて山の中腹に出づ。方丈は山下にあり。正面に本堂本尊は釋迦佛。黃金泥色其作妙なり。堂中の傍木魚を擊ちて一人の僧あり。我足音を聞きて。後を顧みる。生きたる者氣の動く處なり。然れ共實に精舍にして人跡絕えたり。更に妄念起らず。只松風の音のみして。何なる凡人も心澄み。塵外に出でたる心ちし。夫より右の方山に登

行き渡らざる事と見えたり。世には唐めきたる事を好み。風流なる人を誤りて。學者と云ふ者多し

○ある者子を法師にせんとて。學問させければ。佛經おもしろからずとて。文學を好みて。古人のふるまひをしたひて。色々に心移りて。佛の道は更に知らざりき

○大福長者の曰。まづしくては生きたるかひなし。富めるのみを人とす。然るに。大福とならんと欲するには。無常を少しも觀ずる事なかれ。常に心を強く忍んで。萬事世に願を叶ふ可らず。所願は無量なり。欲に隨ひて志をとげんと思はゞ。百萬の金も忽ち失はん。所願心に芽す時は。我を亡すと心得。少しの事にてもなすべからず。金銀をば君の如く。神の如く恐れたふとみて。從へ用ゆる事なかれ。恥に望んでも恥とせず。衣食住のつゐえをはぶき。己の業をおこたらざれば。大福人となる事忽なり。然れども金を積みて用ふる事なきは。貧乏と同じ事なり。大欲は無欲に似たり

○淨瑠璃と云ふは。永祿年中織田信長の侍女に。小野の小通とてありけるが。信長生害の後は。太閤秀吉の簾中と稱せらる。徒然〳〵に。源氏物語にならひて。昔左馬頭義朝の末子牛若丸。金賣橘次と共に。鞍馬山を出でゝ。奥州伊達秀衡方へおもむく折から。三河の國矢矧の長者の娘。淨瑠璃御前と忍び逢ひたる古事を。小通草紙物語につくりしとぞ。御前と稱するは。幼若なる男女の事なり。六代御前とは。小松の内大臣重盛の息男の事なり。女と心得たる者多し。又靜御前は義經の愛妓なり

○鳥羽の院の御宇に。信濃前司行長入道平家物語を作る。生佛と云ふ盲人節を付けて。琵琶に合せて語る。生佛に學んで。琵琶法師十二段に節を付けたり。瀧野檢校。角澤檢校の兩法師。三味線に合すとなん

○天正年中角澤より傳はりて。薩摩治郎右衛門。攝州西の宮傀儡師の人形に仕立て。十二段をかたる。永祿年中六字南無右衞門女大夫と。京四條川原に芝居す

○薩摩は法體にして。淨雲と云ふ。淨瑠璃大夫の根元なり。其弟子四人あり。江戸肥前。同外記同土佐とかや。永閑半大夫河樂流説經(セツキヤウ)與八郎歌念佛日暮

然れども何分箱根へ行き。湯治場を見物して。歸りに大山へ登るべしとて。加奈川を發して。戸塚邊にて家臣の者に逢ひたり。予チト云ひ殘したる事あり。幸に大井河の渡を賀す。飛便ありと云ふによりて。一封を賴み遣す。其事は領分順見の小百姓を按撫するの謀事は。老いたる者をば駕の傍へよび。自扇樣なる物か。菓子樣の物をつかはされたりと云ふ事なり。百姓と云ふ者は。誠に愚直なる者にて。其國の領主をば。人間には非ず。神なりと思ひ居る事にて。一度拜すれば。一生涯あんおんにしてわざはひなし。故にや老婆老夫皆出てて。珠數を以て拜む事なり。闇君は死なざるわれを佛にするとて。嫌ふ者もあり。是は大なる量見違ひなり。上として下の百姓をば憐むにしくはなし。民の父母なりと云ふ事を知りて憐むべし。吾敎の如く極老の者には。駕の前へよび。手自扇樣の物を下され。中老には菓子など下されければ。誠に難有かる事淚を流しければ。予も共に落淚せしと。吾方への文通にあり。今の諸侯には珍らしき御方なり

○文化辛未六月五日。熊谷邊の百姓とて。六十に近き者來りぬ。其者の曰。先生の所に。星の圖あるよし。吉田氏の親類より承る。其星の圖を以て。毎朝水を捧げ禱れば。家繁昌して災難を免る丶よし。此守を頂戴仕度と云ふ。予一笑して云。星の圖あり與ふべし。拜する共不拜とも。勝手次第なり。夫吉凶は。星のあづかる所にあらず。然れども火星を蘭語にては。マルスと云ふ。摩利支天の事か。眞言にては。皆星などを以て神としたる者也。禱りても祟なしと云ひ聞かせければ。是は麁忽なる事を申しけりとてかへりける

○岩國に至り。彌山が嶽に登らんとて。其路犬戻しとて。岩石をあらはし。飛泉流れ。誠に岩國とは。爰を言ふか。農夫樵夫の路にして。漸く過ぎて。一村に入る。五六歲の童女。三歲位の兒を背におふて行くあり。此者兩親に離れ。外によるべき者なし。一村中の食の餘りを請ひて助かりぬ。家はあると見えたり。鰥寡孤獨の者は。領主より助けすくふべきに。此國の大夫舍と云ふ人は。賢人にて。學問したる人と云ふ事を。其頃に聞けり。

し

○長田春臺と云ふ森侯の醫のはなしけるに。某と云ふ儒者。病をうけて死にたるに。腰に金を結ひ付けてありけるを見て。皆々興さめぬ

○人は兎角己が好める事のみほむる者なり。徂徠が己が國を夷狄と書きたる如し

○文化八年四月十四日。武州大相模の不動大聖寺に居たる禪僧壽山和尚參りて。蕎麥を出だしければ。初のほどは。汁かけて喰ひけるが。後は汁かけずに喰ひける。汁はきらひかと問へば。イヤ好きなりと云ひつゝ。汁はかけざりき。歸りて後思ふに。汁の中魚味あるかと疑ひしなり。出家はさも有りなん

○ある時。阿部侯へ參りたる時。次の間に近臣の居けるが。予根付時計持ち行きけるに。天府のせはしなく。カチ〳〵と廻りければ。是は命の縮む樣なる物と云ふ。卽縮むなり。日々死に近よると云ふ事を知らず

○此國の風とて。無類の物を寶として。萬金を以て換ふるは愚なる事なり。たぐひ二つあれば。其價をひくうす。唐畫など一向すゝけ破れ。不明をも名の聞えたる筆跡をばとうとみ求む。假令眞物にもせよ。何の益あらん

○往古。佛道の此國へ渡りしも。如此佛像を尊拜すれば。何の爲にすと云ふ事わきまへず。上天子も是を信仰して。寺院佛閣を建て並べ。今の世となりても。寺領をそくばく付けられ。無用の僧高官に居れり。天竺にては天下を治むる爲に設けたるなり。上たる者の信仰する者にあらず。下の愚民に布き。忽ち善心とする謀事也。故に地獄極樂を以てす

○阿部侯初めて入府の時。江戸發駕の日は。天氣もよく。品川までは皆々出入の者送りけれど。夫より先は予一人なり。又川崎本陣田中兵庫方にて出會し。箱根まで可參旨申上ぐ。予は步行故に。漸く加奈川に。跡より參りしに。此所は先刻御出立と申す。日も晩景なれば。此所に止宿して。明朝早天に出立して。小田原は泊り故に。夜に入りても能きと考へ。其積に決し。翌朝起き見れば。大雨なり。夫故にとても小田原まで行く事かなはず。

ければ。貧朝卿の曰。是は年のよりたると申され
ける

○蟻の如く集り。東西にいそぎ。南北に奔り。貴あり。賤あり。老いたるあり。若きあり。行くところあり。歸る家あり。夕に寢て朝に起き。いとなむ所何事ぞや。生をむさぼり。利を求め。已む時なし。身を養ひて。何事を待つ。期する所只老と死とに有り。其來る事速なり。念々の間に留まらず。是を待つ間何の樂しみかあらん。惑へる者は。是を恐れず。名利におぼれ先途の近き事をかへり見ず。愚なる人は。又是をかなしむ。常住ならん事を思ひて。變化の理を知らざればなり

友とするに惡き者七つあり

○一に高くやん事なき人。二に若き人。三に病なく身つよき人。四に酒好む人。五にたけくいさめる人。六にそら言する人。七に欲深き人

○能友三つ。一に物くるゝ友。二にくすし。三に智慧ある友（物くれる人は。必。金持に非す。大氣なる人を云ふ。又醫者は。世に多き者なり。多くは庸醫のみなり。又智ある者。皆わる智多し）

○高倉院の法華堂の三昧僧某の律師とかや云ふ者。或時鏡を取りて顏をつく〴〵と見て。吾貌の見惡き心ちしければ。其後は長く鏡を忘れて手に取らず。更に人にも交る事なし。御堂のつとめのみして籠り居たりと。良人才子も。他人の事のみ謀りて。己をば知らず。我を知らずして。外を知ると云ふ事あるべからず。己の貌の見惡くけれども知らず。心の愚なるをも知らず。藝のつたなきをも知らず。身の數ならぬをもしらず。年の老いぬるをも知らず。病の身を侵すをも知らず。死の近き事をも知らず。行ふ道の至らざるをもしらず。兼好もかく云はれけり

○いかなる愚人にても。己は智者なりとして。且愚と云ふ事を知らず。己の度量を知る事至りてかたし。年老いて漸く知る者ありと雖も。多くは知りがたし。他を謀る時は。至りて明なり。己をはかる時は暗し。他の非を見て。己に敎ふるにはしかじ。譬へば往來にて。奴僕とはなしゝながら。又はいかり腹立などしたる見にくし。獨して笑ひながら行く者あり。女をふりかへり〳〵見て行くあり。鼻の穴へ指さしいれ〳〵して行くあり。見惡

後年を追ひて大商となり。今に至りては。人五十人を遣ふ程の見世を張り。中井新三郎と家名して。今三代目なり。其外下總の相馬太田原邊へも見世を出だし。今において三十萬金の富商とはなりぬ。予二十五年以前長崎へ行くとき。此日野により。老人にも逢ひしに。伜六十位に見えしが。實は七十に餘れる老人なりき。この三年以前に。九十餘にて病死しぬ。二代目は酒などを好みて。五十餘にして病死しぬ。今は孫の代なり。珍らしき商人なり。文化八辛未年しるす

○大名などは心がけ大切なり。猛毅なる時は。人恐れて従はず。懦弱なれば。内より亂れ敝る

○志の同じ樣なる人は。今始めて見ても。昔より知る人の如し

○白頭如新傾蓋如古何則知與不知「おのが身に化さるるをば知らずして。狐たぬきをそれぬるかな

○悟りても身より心をしばり繩。とけざるうちは凡夫なりけり

○無と云ふもあたら言葉の障かな。むとも思はぬ時ぞむとなる

○妙法阿字眞言佛阿彌陀。四十九年一字不說。莊子曰。不言敎

○つれ〳〵草に。何にがしとかやいひし。世すて人の。此世のほだしもたらぬ身に。たゞそらのなごりのみぞをしきといひしこそ。誠にさも覺えぬべけれ

○人死して財の殘るはあしく。又よからぬ物たくはへ置きたるもつたなし。後には誰にと心ざす物あらば。生けらんうちにぞゆづるべき。朝夕なくてかなはざらん物の外は。何も持たであらまほし

○あらえびすの云。君は子を持ちたるやと云ふに。子なしと答へければ。さてはさては物の哀はしりたまはず。親妻子の爲には。世に諂ひ。恥をもわすれ。盜もする心になるなり。其ぬす人を罪せんよりは。上たる者奢をやめ。費をはぶきて。民を撫で農をすゝめ。下に利あらん事うたがひなし。衣食住に足りたる人。ひが事するこそ盜人と云ふべけれ

○西大寺靜然上人。腰屈み眉白くして。大裏へ參られ。西園寺内大臣の云ふ、あなたふとやと申され

る事。今の風俗に比せば。甚しき違なり

寛永年中の画

男女共ニ帯ニ結目なし

貧福の論

○貧を貧としては。貧を知らず。福を福としては。福を知らざれば。貧福一物なり。然れども福を福とせざる者よりは。貧を貧と思ざる者。世に聞えよし。顔囘の如き臂を曲げて枕とし。樂しみ此中にありと雖も。我等が量りけんにては。不自由なんぎなる事なり。福を福とせず。金銀貨財一時に滅亡すといへど。少しも之を憂へず。自若たる者は。福を福とせざる者なり。是も亦難き所なれど。貧を貧とせざる者よりは。行ひ安かる可し

○近江國水口より三里入りて。日野と云ふ所。岡本町と云ふ所に。中井源左衞門と云ふ者商家にてありけるが。日野は一向往來のあらざれば。人の通行なし。故に商ひの手立なし。總じて近江の國の人物は。心肝大きく思慮あり。日野はみせを開き。商人の體見えず。然るに。富商多し。又此近きに八幡と云ふにも富家あり。其地貧にして渡世なりがたき邊土は。必。富める者あり。吾近郷に産する物を買ひ取り。他國へ行き。之を賣り。又其國の物を求め。他所に行き。是をひさぎ。吾國に歸るに及んで。吾國になき物を求め來るを交易と云ふ。見世を開き商をするを。賈人と云ふなり。往來の路傍に一膳飯を鬻く者は。生れし其處を離れずして渡世のなき故に。生涯一膳めしを以て終はる。彼源左衞門と云ふ人は。僅の元金を持ち。奥州仙臺に行き。此地に綿を生ぜざる事を考へ。大坂より綿木綿古着の類を買ひ取り。仙臺へ船まはしゝて、賣りけるに。初は少々宛の商ひして。

七山—里—放—光
五山—瀧—吟—落—碧—三
三山—海—浪—高—船—片—雲—社
一山—廟—等—一—扶—桑—神—片—漲—景
二山—客—成—群—數—萬—人—輪—塵—春
四山—樓—鏡—動—月—輪—惱—宮
六山—谷—洗—流—煩—本
八山—花—猶—馥

人間の機を考へて云ふ
活者(イキモノ)は水で包んで火で動く
薪を喰ふて腹は竈(ヘッツ)る
文化八年三月廿八日　不言道人

景法師
元來有物不離身。揚手同揚伸足伸。全體分明無面目。起居動靜似侮人。

梅法師
往昔江南沒落時。起靑道心成法師。欲問橫斜疎影古。伊勢壺底暗皺眉。

虱
獨臥寒衾患幾千。余身貧極有誰憐。夜深依被半風食。天到曉鐘未作眠。

男根
一生忍衆動焦身。八寸推根尙勝人。入道修行若時事。須臾老去革頭巾。

女淫
元來有口更無言。百億毛頭擁丸痕。一切衆生迷途所。十方諸佛出身門

熊谷敦盛
生年十六美男兒。身命碎珠回馬時。熊谷道心從此發。法然庵室念阿彌。

宇治川
萬騎如雲宇水邊。東關諸將爭先。功名誰出四郎上。一馬化龍何着鞭。

右は一休の狂詩

○一休は文明十三年に寂す。文化八辛未の年まで三百三十年になる。此一休はなしと云ふ書。百八十年以前。寬永年中に出來たる本なり。畫の古風な

ふては。何にも出來ず。馬にも舟にも乘る事ならず。兎角己を知るにあり

一休ばなし

○一休の事は。京洛中にて。不思議の名僧にて。凡僧と違ひ。魚をムシヤ〳〵と喰はれける。其喰ひたる魚を吐き出だし給へば。忽小魚と化して。水中に游ぎあそぶ。奇妙なる事なりと。評ばんするを。一休聞き付け。さらば衆人の目を驚さんとて。來る何日下松(サガリ)のほとり。紫野において。魚を喰ひて。其まゝ元の魚に吐き出だし。水中にてをどらしむる事なり。たのぞみの方は。見物に參るべく。大夫天下老和尚一休禪師と自書して。町の門々へ張る。自筆の張札を各〳〵見て。其日には。京中の者。群集して。一休の門に至りければ。庭の眞中に大盥に水をタフ〳〵と盛り。其傍に色々の魚を皿に盛りける。見物の者。今か〳〵と待ち居る處へ。一休奥より出で、。皿にもりたる魚を殘らず喰ひつくし。夫よりして彼盥に向ひ。吐き出ださんとせられけれ共。一向に出でず。一休の曰。腹中に篤と納まりたれば。嘗て出でず。糞になりともいたすべし。各々もおかへりあれと云はれけりと

○或人ふぐといふ魚を喰ひて死す。一休に引導を賴みければ。我行くに及ばず。書付して遣はすべしとて。海中有毒魚名云河豚魚。面腹白背斑人不食。此魚鳴呼痛哉。亦治郎食之忽死。彼歲五十四。又彼歲五十四矣。合せて數珠の一連百八煩惱のきつなをふつゝと截りて行たい方へとゆけ

○一休高野山に登りて山形の詩

七山—秋—葉—落
五山—春—開—花—發—空
三山—迎—連—峰—報—佛—心—亦
一山—高—近—都—卒—內—院—土—進—空
二山—閑—表—華—藏—世—界—地—醒—寂
四山—平—幽—源—化—佛—惱—亦
六山—夏—涼—風—煩—寂
八山—冬—素—雪

右と同じ

樣。未生以前に立ち歸り。何もかも皆無と云ふ事を知れば。安樂世界なりと敎へけるに。一人出でゝ。某の隣に天摩屋善兵衞とて。悟りきつたる男あり。其人となり。寐たい時寐。起きたい時起き。喰ひたい時喰ひ。呑みたい時呑み。福をも悅ばず。禍をも憂とせず。生をたのしまず。死をも惡まず。得失存亡を釣瓶に譬へ。苦樂盛衰を碓なりと。貧富貴賤を一目に見て。諂もなく。禮もなく。人譽むとも榮とせず。人毀れども耻とせず。此人寵愛の一子あり。男子なりしが。十歳の春急病にて相果てぬ。日頃は悟りきつたりとも。などか力の落さざらんと思の外、憂ふる色なく。我等問ひて曰。寵愛の一子を離し。憂ふる色の見えざるはいかん。實に愁ふる心なきか。天摩屋笑ひて云。吾十年已前子なし。只十年已前の如し。なにの憂ふる事のあらんやと。さつはりとしたる顏色。是等は彼の輪奈を拔けたる人か。未生以前の人か。生きて居るか。死にて居る人か。形は人にして情なし。人として人の情なきは。何を以て人と云はん。昔子を先だてし人の歌とて。「有るもの、なきこそ本のすがたなれ。とは思へどもぬるゝ袖かな

○予考ふるに。何事も耽けるよりして。躬を損ふに至る。度量過さず。中庸が宜し。片々よつてはあしく。世の中の人を善事に導き敎へても。善人になる人は生れながらに善心なり。惡人にはどう敎へても惡人なり。惡人がある故に善人も知らるゝなり。皆世上の人が善人ばかりにて。未生以前の心にては。爭ふ事なし。人此世界へ產れ出でしより。長となりて。世の中の事皆珍らしく。是迷ふ樣にした者なり。中年から其迷ひがだん〳〵と覺め。老年になりては。さつはり覺め。爰において未生以前の人にかへり。虛無自然たる事を悟り。安樂にして死すこそ。本道の人とはいはめ。若き時から悟りては。前に云ふ天摩屋の如し。ならぬ事はならぬと知れ。金も儲けられるならば儲けろ。名もあがるならあげろ。只己の量を知りて。出來ぬ事をするな。何事も身のをさまる樣に工夫して。過度するな。是は能きあんばいじやと云ひて。やり過すな。中位の所が大事じや。聖人は危を嫌ふとて。爰を踏んだら。あすこが上ろう。あぶないと云

兩全なる事はなしと知るべし。豐後の國岡の城は。誠に堅城とは此事にて。岩にあらず。石に非ず。ぬめり岩にして疊み揚げ。七曲りの坂を登り。城門に至る。太閤秀吉此城を見て。か丶る堅城もある者かと感心したりとぞ。今太平の世となりては。出入あしく。老人など別けて難澁する事にて。是又兩全なる事なきなり。是よりして年々順道にして豐作し。其中には老いたる者は死し。若きは老となり。飢饉と云ふ事。夢にも不知者の世の中となりて。圍米(カコヒ)の倉は鼠の穴となり。言譯の爲に戸前の口に俵を積み。後は空虚にして。何がなして凶年を願ふ様にて。食に飽き滿つるに至りて。天不順となり。夏月冬の如し。萬物不實。爰において一年の凶年にて。人多く餓死するに至る。天地の機はこうした者なり

○世の中。狐狸の輪奈かけて。智慧の餌にて人を釣るなり。狐狸が云ふ。我等は人と違ひ。色々に化る事を知りて。人かつて是をしらず。然れども。彼鼠の油揚のかほりが鼻に入ると。あれを喰へば。命輪奈にか丶ると。命を失ふ事は知れてあれど。命を捨て丶も喰ひたいと云ふは。畜生のあさましさなり。爰を以て考ふるに。人間も輪奈にか丶りそうな者じやと思ひ。人の好む物を以て餌として置けば。人悉く輪奈にか丶る。餌には盃。小判。玉章。扨て酒さかなを餌とすれば。是を好む者多し。喰ひたふれ。酔ひたふれ。後には狂人の如く。首を斬られても知らぬ様になるなり。又小判を餌とすれば。急に金がほしくなりて。地道にしては埒があかず。夫故に山事にか丶り。大損をして。後には盗となるなり。又玉章は則ち女なり。是を餌とすれば。貴賤上下若老をえらまず。輪奈にて首を縊る事なり。然れば貌は人間にて。心は獸ならずや。稻荷は狐なりと心得。獸に手を合せて拜むも尤ぞかし

○賣卜先生糠俵と云ふ心學の書に。兎角に慾をはかるな。貧になるぞ。無慾にしてよき。己に備はりたる業を業とし。正直にして。望を少くし。只足る事を知る時は。大福長者なり。人は元裸で出で。裸で歸る事にて。此世に居るは。すこしの齢を。永く覺えて。僅活きて居るうちを。慾の爲に地獄のあり

春波樓筆記

司馬江漢 著

○治久しく續きぬれば。美を好み奢に長ずる者なり。奢とはいつ奢るともなく。目にも見えず。年のよる如く。いつ老ゆるとも知らず。いつ奢るともしらざる者なり

○畫は書と同物と云ふは。古の風俗を。今目前に見るは畫なり。頃日寛永年中の畫を見しに。女の帶は。絹巾を半巾にして。結びめなし。振袖は二尺に足らず。頭に櫛竿かうかいはなし。油も水油のみにして。今の迦羅の油と云ふはなし。此一事を以て知るにあり。吾國物產限り有り。故に祿限りあり。天下一體上貴人より下の賤しきに至るまで。懦弱となり。遊樂美觀を好み。是れ內より亂れ敝るる基なり。今既に如斯。爰に於て。下をしひたげ。民これが爲に困窮す。竟には動亂起れば。必。外國其虛を窺ひ來らん。遠き慮りなき時は必近き愁あらん

○米穀價安くして。諸家困窮する事は。甚しき間違なり。五穀成就するを豐年と云ふなり。豐年を以て困窮する事。表裏のさたなり。爰を以て奢りたるを知れり。小子幼時。米穀價六十目に一石五六斗餘なりき。今は漸く一石なり。定相場といふべし。今年も天氣順道にして。又々豐作疑ひなし。先年凶年打ち續きて。俄にもみ倉建つ。芝宇田川町加藤庄次郎とて。甚世事に才ある者にて。算筆は云ふに及ばず。諸藝に達したる者なり。商賈にもあらず。千金の地面を持ち居て。是にて暮し居けるが。もみ倉の役人となりぬ。甚調法に思はれ。倉ふしんまで彼がかゝりとなり。或とき予に對して云ふ。俵數の事など咄しけるに。彼に云ひて曰。咽元過くれば。煖わすれると云ふが如し。家に盜賊入る時は。俄に用心して。後には用心をわする者なり。粮倉の建つは。必豐年の續く基なりと。總じて今年迄は米穀やすし。昔有德院殿大君の御代。予壯年の時なりしに。米安く。其時も武家勝手あしく。上にもおせわありけり。其頃錢甚不足して。六十目に四貫餘なりき。今は六貫四五百文なり。是は武家にはよけれど。又商人にはあしく。

厘。後漢の尺七寸八分を以て度るに。其長伸びたるよし。度量衡再編に載せたり

本より我東方は。四大洲に長ずる寶貨第一の國なれば。諸國の寶山を一々封禪し。彼は金山。此は銀山。銅山と尊崇し。堀開する事を禁じ。永く地中に安置して。不消不滅。幾億萬歳を經といへども。日月と同じく仰ぎたきものなり。彼肥後國阿蘇山を。明朝より壽安鎭國山と稱美するごとくに致しなば。人々自ら寶貨に尊き事をかへりみ。聊も耗散磨滅の氣は起らず。大切に取り扱ふべし。國家入用の節は。何時にても堀開して。其用を催すにいたらむ。其内に。國家の三不利を考制し。無益の用を省きなば。國家所有の寶貨。一天下を往來するとも。聊も耗散磨滅はなき理なり。先三不利を制するは。金銀泥薄より始まる時は。人々磨滅をしる所なり

此邦の金箔三寸四分四方。百枚重三分四厘許。世に四寸箔といふ。佛師箔は箔の上品なり。また大中小三種あり。大は曲尺方四寸。中は三寸五分。小は三寸。大は百枚重四分六厘。中は三分九厘。小は二分七厘。箔に製する金は。上澄といひ。出紙ともいふ。銀箔は百枚重七分許

其二貨を磨滅する。天下の廣き推知すべし。海舶互市の費は。五事略及折焼柴記に。正保戊子より寶永戊子まで。六十一年の大數を載せたり。其外太宰の經濟錄にも。寶貨の事論あれども。何れも耗散磨滅の不利を說かず。また永く地中に安置し。我國四大洲に長ずる不消不滅の寶貨とする事を說かず。故に隨筆しおくのみ

茅窓漫錄 終

異物を賞美し。外國他域の品を尊び。海舶互市に交易し。天下の寶貨好奇の用となる事十に二三。是二の不利なり。第三に。貴賤一統。美麗華色を本とし。服佩器物玩弄の品まで。鏤刻泥薄に磨刓し。天下の寶貨。裝飾の用となる事十に一二。是三不利なり。識者出で給ひ。此三不利を考制あるときは。我東方は四大洲に長ずる寶貨富有第一の國たるべし。昔は寶貨を磨滅する事制禁あり。續日本後紀に。承和元年二月癸巳。勅曰。金銀薄泥用ニ之公私一。有レ費無レ益。宜レ禁ニ斷之一といへり。漢土にも耗散磨滅の事をいひし人。數多あり。其一二をいふに

宋方勺泊宅編云。東坡嘗怪。今之黄金。不レ若ニ昔之多一。糜レ之者衆也。宜其小價貴也

草木子（巻四雑俎篇）前古黄金如ニ王莽末年一。省中尚有ニ六十餘萬斤一。後世黄金絶少。由下其所レ耗之途廣上也。金一爲レ箔。無ニ復再還一レ元矣

謝肇淛文海披沙（巻六）黄金一種。古多而今少。漢高帝賜ニ陳平黄金一。至ニ四萬斤一。梁孝王沒庫中黄金尚四十萬斤。韓嫣以レ金爲レ彈。董卓積レ金成レ塢。而漢制天子毎レ聘レ后。輙用ニ黄金二萬斤一。今之大内豈易レ辦レ此。所ニ以然一者。世間糜費澌滅唯金最多。而四夷之外。去不レ返者不レ與焉。衣服之銷レ金鏤レ金。器玩之鍍レ金。鎦レ金鉤レ金釘レ金。箋扇之泥レ金灑レ金貼レ金。神佛之鋪レ金。經典之乳レ金。軸文之貼レ金。天下廣。一日殆以レ萬計。皆磨滅至レ盡。間有ニ銷鎔所一レ得者。一萬中之一二耳。生之有レ限。安能副ニ無レ窮之用一哉。考下宋太宗時禁中自ニ中宮一以下服玩皆不上レ得レ用レ金。一切銷レ金貼レ金鏤レ金。間レ金戧レ金圈レ金解レ金剔レ金撚レ金陷レ金明レ金泥レ金影レ金榜レ金闌レ金盤レ金織レ金。金線皆不レ許レ造。安今日而一申ニ明此禁一也哉

謝肇淛がいふ所を。今此地にて金貨を磨滅する所と。一々引き合せ見るべし。外國に持ち歸りて返らざるの外。無益の事に七寶最上の物を磨滅するの廣。一日にても磨滅する事。廣大なれば。終には。勿體なき事にあらずや。又彼がいふ如く。天下は寶貨も盡くすに至ると宜ならずや。金貨は地中に在りては。數千載を經る程。生長する物なり

天明四年。筑前國那珂郡にて。後漢光武帝金印を堀り出だす。是卽倭奴國王の印。其方七分八

但馬國より金銀を出だす。延喜式に對馬島の銀をいふに。但馬の國司は。此例に非ずといへば。其比より銀を出だせり。圖錄に。但馬國小判金。小判銀。南鐐小判。但馬南鐐。小玉銀等數品載せたり

石見國より金銀を出だす（金種類石州方言あり。金鐵屎をツヨシ伴金石をデイシといふ）銀多く出づる故に。銀山の名となれり

武德編年。慶長九年八月十日に。且石州銀山も庚子まで。毛利輝元領分の時は。銀僅に出でけるが。辛丑公領となり。長安檢斷して。壬寅の年中。砂銀出づる事。四千貫目に及べりといへり

圖錄に。石見國挺銀。公用切銀。灰吹銀等數品載せたり

美作國より銀を出だす。作州眞島郡神代に。古の坑山其蹟猶存す。圖錄に美作國二菊小判銀壹分銀載せたり

此外に。伊豆國より金銀を出だす事。陸奥南部より黃金を出だす事。五事略に載せ。圖錄に。各國の金銀數十品載せたれども。其坑處及正據なきは記さず。今は佐渡の金銀。陸奥。石見の銀のみ。多く出だす。又圖品。圖錄等に玩賞の金銀。凡七十品載せたれども。國家通用の寶貨にあらざれば記さず。和銅は國史に見えしより以來。諸國に出づる殊に多く。攝州多田。奥州南部。同仙臺。越前。紀伊。伊豫。日向。備中。美濃等より出だす。其中越前を上品とす。是も鑄錢國家通用の外。弄錢。繪錢數百品あり。孔方圖鑑。珍貨百錢圖及錢範泉彙等に多く載せたれども。通用の寶貨にあらざれば記さず

我國人皇の御代となりて。一千五六百年の間。異朝より來りし寶貨と。國土に堀出せし寶貨と。其數廣大無量にて。測算の及ぶ所にあらず。然るに金銀銅の三貨。今日國家に充滿すとも見えざるは。七寶最上の物。不消不滅の德をかへり見ず。耗散磨滅する事多き故なり。耗散磨滅に。大率。三の不利あり。第一に欽明帝の御代より。佛氏舶來し。代々の帝王佛氏を尊信し。推古。聖武二帝大佛を造り給ひし如く。佛道次第に行はれ。天下の寶貨。佛氏の用となる事十に七八。是一不利なり。第二に。貴賤上下。皇統神明の大御國に生れ。古帝明王の世。無爲無欲。各長壽の風俗をしらず。奇珍

壹朱判。朱中の四品なり。往古よりの舊制に因りて。天正中改鑄後より。今に至りて。一國通用を許さる。圖錄に一百三十六品を載せたり

近江國より黄金を出だす。石部驛より東に入る。金山村是古の坑山。其蹟猶存す。今の通路は。古の通路にあらざるなりと。（一說に銅坑ともいふ）圖錄に。近江國戶笹小判金江津川桐小判金を載せたり

出羽國より金銀を出だす。此國は元明帝和銅五年九月に。陸奥國を割きて始めて置かれ。同年冬十月。陸奥國最上置賜二郡を割きて。出羽國に隷けられし事なれば。其昔は國史に載せたる大寶年中より。金を出だしゝと見ゆ（出羽國村上郡寒川江村より砂金を出だす）圖錄に。出羽國月山及赤西小判金。秋田小判金。龜田。窪田。横手。角館等の切銀。或は佐竹花降銀等數品載せたり

加賀國より金銀を出だす。金坑は澤村山にあり。圖錄。圖品等に。加賀小判金。梅鉢小判銀。花降銀。七八種竿銀。挺銀。切銀。南鐐等數十品を載せたり

越後國より金銀を出だす。是は謙信佐渡を領せし時。其金山より採りし物ならむ。圖錄に。越後國高田小判金。圓小判金。越座小判金（一名皆謙信小判といふ）長岡寛字切銀。村上永字銀及新潟榮字寶字しかみ切銀數千品載せたり

佐渡國より金銀を出だす。其黄金出づる事は。宇治大納言物語（卷四）に載せたり。此國は聖武帝天平十五年二月に。佐渡を以て越後に幷せ。孝謙帝天平勝寶四年十一月。又置きて國とせらる、事。拾芥抄に見えたれば。越後の屬國なり。上杉謙信佐渡を攻め取りしより。其金を採りて年々國用を催せり。大閤秀吉公兼ねて此事を聞き傳へ。謙信義子中納言景勝を欺きて奥州に移し。其國を私領して。金を採らせらる。然るに金出でずして。程なく薨ぜられし。其後年々多くの砂金を出だせり

武德編年に。慶長九年八月十日。大久保石見守長安伏見に至りて。其司る所の佐渡國の山兵砂銀を出だす事夥しきを言上す。五年以前庚子まで。上杉景勝佐州を領せし時は。僅に砂銀出でけるが。辛丑公領となり。石見守按檢して。壬寅一ヶ年に出づる所。萬貫目なりといへり

圖錄に。佐渡上銀。一分上銀。元印銀。新印銀等載せたり

ふ十字。裏に銀座二字ありて。常是の二字なし圖錄に載する加賀南鐐。但馬南鐐。菊桐南鐐の類數品。是と異なり。按ずるに。南鐐は上にもいひしごとく。源平治承の頃よりありて。圖錄に載せたる。南鐐大判表に南鐐一枚と銘して。重四十三匁。尊氏小判銀表に壹兩と銘して。重四匁三分。此等銀貨の起りにて。後世の丁銀一枚四十三匁。豆板一丁四匁三分に定めたるは。此南鐐銀の遺意ならむか。鐐は爾雅に。白金謂二之銀一。其美者謂二之鐐一とあり。南は海篇朝宗夷語音釋珍寶門銀南者とあり。南は離にして明なり。詩小雅。以雅以南も。南夏文明の方。銀は明白にて貴き物なり。故に事物異名に。銀の一名白貴といひ。白物といふ。鏡の裏に南天燭を鑄付くるも。離乾二卦に象り。明白にして貴からむ爲なり。南方を火とし。朱とするは明なり。故に銀の一名を朱提ともいふ。行厨集に見えたり。南鐐は明白にして貴き銀といふ事なり

太上天皇天明四年。奥州鑄二仙臺通寶一

是は楕（イツ）の鐵錢にて。仙臺の地のみ通用する爲に鑄たるに。諸國に分散せしが。今は通用せず。西國にては長崎のみ通用せり。此錢泉彙に出づ

同八年四月。南鐐銀有二永代通用之命一

是銀貨通用の便利。最上といふべし

以上我國の寶貨。世に通用する物。皇后新羅の役より。一千五六百年の間。其大略如レ此諸國の寶山も追々にひらけ。其始末詳ならざるも多し

大和國より金銀を出だす。金峯山は金の峯とて。黄金出づる事。宇治拾遺に見えたり。銀の嵩は吉野山にあり。將軍義輿の反せし所なり

攝津國より金銀を出だす。元祿以前まで出でたりといふ。攝州金津山は。打出村の北にあり。阿保親王此山に金の瓦一萬黄金一千枚を埋みたりといひ傳ふ俗傳に歌あり「朝日さすいり日かゞやく此下に金千枚瓦萬枚」圖錄に。攝津國多田鈹銀を載せたり

甲斐國より黄金を出だす。其金坑は山梨郡黑川にあり。神名式に。甲斐國山梨郡金櫻神社。在二金峰山一といふ是なり。其金座は。志村。野中。山下。松本四家あり。其古金は。碁石金。板金。大鼓判。細字金。延金。縄目金等あり。其新金は甲安金。中金。甲重金。甲定金等あり。今通用するは壹分判。貳朱判。

銀十五貫賜はるとなり

同年。鑄ニ寛永通寶十字及小字錢一

是は元文丙辰年命ありて。東府二ヶ所にて鑄る。五月より深川十萬坪にて。十字錢を鑄る。十月より同所小梅村にて小字錢を鑄る。（小字錢は銅鐵二品なり）此錢泉彙に出づ

同二年。鑄ニ寛永通寶仙字及川字錢一。佐字錢異品亦出ニ乎其間一

是は奥州仙臺石巻にて。仙字新錢を鑄る（享保中に鑄る錢とは異なり）又東府小名木（ヲナギ）今うなぎ川といふ川にて。川字錢を鑄る。又佐字錢異品も。是年前後に鑄る（正徳中に鑄る錢とは異なり）二品泉彙に出づ

同五年。有ニ鑄錢之命一。寛保二年鑄ニ寛永通寶元字錢一。又是歳鑄ニ足字錢一

是は元文五年に命ありて。寛保二年より元字錢を鑄る。此時大坂高津新地德倉長右衛門。別段の用座命あり。又是歳下野國簗田郡足尾村にて。足字錢を鑄る。泉彙に出づ

後櫻町院明和二年。鑄ニ五錢歩銀一。同三年。歩銀通用有レ命

是は明和二年九月四日。新に五匁銀貨を鑄らる。形南鐐の如く。表に銀五匁。裏に常是二字を刻す。此銀重五匁三厘。金壹分に銀三枚。金一兩に銀十二枚の積なり。同三年三月。此銀通用を命ぜらる。圖錄に出づ

同五年。鑄ニ寛永通寶鎮鍮當四錢一。又是歳。鑄ニ長字錢及久字錢一

是は明和五年三ヶ所にて鑄錢あり。鎮鍮の四文錢は。東府龜井戸村にて鑄る（是年五月晦日。始めて行はる。錢背に波少きは。同六年秋以來に鑄る物なり）長字錢は。肥前長崎にて鑄る。久字錢は常州三戸にて鑄る。此錢二品泉彙に出づ（漢土にて鎮鍮錢は。明孝宗帝弘治十六年。弘治通寶を鑄る）

同九年。鑄ニ南鐐銀貳朱判一

是は明和九年九月七日上銀南鐐を以て。貳朱歩判を鑄らる。重二匁七分五厘。長九分半。横五分半。厚八厘。表に以南鐐八斤換小判一兩の十字。裏に銀座常是の四字を識す（オキアゲニ）。金銀錢譜に載する南鐐異品二種あり

一種は今の南鐐。裏紋分銅を菊の紋にしたるあり。一種は表に以ニ南鐐十六一換ニ小判一兩一とい

是は正徳四年五月十五日。金銀二貨慶長の法制。古に復さむとの事にて。慶長金の目方に改め。小判は重四匁八分。分判は重一匁二分。添極印等なし。是を世に正徳新金といふ。佐渡にて鑄る。佐字小判佐字壹分金あり。裏に佐字を刻す。挺銀。豆板も慶長におなじ。圖錄に出づ

又是歲奉ㇾ命。鑄二寛永通寶佐字錢一。至二同六年十一月一

是は正徳甲午に命ぜられ。同乙未十一月まで。佐渡國相川にて。寛永通寶佐字錢を鑄る。此錢二品泉彙に出づ

享保元年。鑄二享保通寶一

是錢背に永字を刻す。泉彙に出づ

同三年十一月朔。二貨有二轉換通用之命一

是は金錢引替の命あり。乾字金百兩に上金五十兩。元字も同前なり。寅年まで五年を限とす。新銀拾貫目に元字銀十二貫五百目を以て替ふ。寶永銀は十六貫目。中銀は廿貫目。三寶は廿五貫目。四寶銀は四十貫目を以て替ふ。右の割合を以て。來る寅年まで五年を限り。引替ふとなり

同十年十二月朔。鑄二新金大判一

是は元祿大判を止めて。慶長大判の法制に改め鑄らる。重四十四匁。花押は壽乘の判を刻す。是を世に新金大判といふ。一枚金七兩二分の積り。同十一年にも亦鑄る。今用ふる物是なり。圖錄に出づ

同十三年。鑄二寛永通寶仙字錢一。至二同十七年一。同十三年。是歲鑄二大錢一

是は享保戊申より同壬子まで五年の間。奧州仙臺石卷にて。仙字錢を鑄る。又是歲。攝州難波にて大形の寛永通寶を鑄る。此錢金鉛銅の三品あり。俱に泉彙に出づ

櫻町院元文元年。改二鑄文字二貨一。且有二轉換通用之命一

是は元文元年五月十二日。金銀を改め鑄らる。小判重三匁五分。壹分判重八分七厘五毛。文字の添極印を刻す。是を世に文字金銀といひ。又文金銀といふ。同年六月十五日より引き替へ始まる。其命は慶長金百兩代百兩。乾字金二百兩代百兩。慶長新銀十貫目代同じ。文金改鑄の分は。分判古金百兩代。文金百六十五兩賜はる。古銀十貫目代文

是を元字金銀といひ。又元祿新金といふ。判金大小共に背に元字を刻す。江戸座。京座小判及壹分判。重皆慶長の制に同じ此改鑄金大判は。享保十年十二月朔日停止。小判分判は。享保三年通用停止。其形は悉皆圖錄に出づ

同十年。鑄二朱判金

是は元祿十年六月晦日。新金を以て二朱判を鑄る。重六分。圖錄に出づ。此金。寶永七年四月停止

同十六年正月。鑄銀代通寶

是は伊勢屋道喜といふ者の願書納まり。一錢壹分五厘の通用。大九分五厘。重一匁六分。鑄高百廿萬貫文。未。命令なきに試に鑄る。泉彙に出づ

寶永三年。新鑄銀貨

是は寶永三年六月六日。新銀を以て挺銀豆板等を鑄らる。寶字極印二つを刻し。常是極印なし。世に是を二つ寶銀といひ。又寶永新銀といふ。圖錄に出づ。此銀享保七年通用停止

同四年五月。始鑄當十大錢寛永通寶

是は一文十文に當る。通用京七條にて鑄る。此制は漢土にもあり。文獻通考に。宋崇寧二年令陝西鑄折十大錢。御書當十錢。每錢重三錢とあり。此錢同六年正月通用停止外に寶永大錢時代に一字寶永十錢通寶を鑄る。倶に泉彙に載せたり

同七年三月。改鑄二寶銀貨。同四月二日。改鑄三寶銀貨。同月十五日改鑄乾字金貨

是は寶永七年三月六日。二寶銀を改め鑄らる。兩頭に寶字の極印。中に永字の添極印を刻す。世に是を永字銀といひ。又中銀といふ。挺銀。豆板共に此銀享保七年通用停止。又同年四月二日。三寶を改め鑄らる。寶字極印。三を刻す。世に三つ寶銀といふ。此銀も享保七年通用停止。又同月十五日。元字金を改め鑄らる。小判壹分判ともに。小形となる。乾字を刻す。世に是を乾字金といひ。又乾金といふ。小判重二匁五分。壹分判重六分二厘五毛。圖錄に出づ。此金享保五年停止

中御門院正德元年。改鑄四寶銀貨

是は正德元年二月二日。三寶銀を改め鑄らる。寶字極印四を刻す。是を世に四寶銀といふ。同年九月鑄所を廢し。挺銀。豆板ともに此銀享保七年通用停止。圖錄に出づ

同四年五月。改鑄貨稱復古

船。鎌倉に來著す。領主滿兼より。京都將軍義滿に言上す。義滿下知して。其錢を滿兼に賜ふ。其後。北條氏康關東を領せしより。永樂錢のみ通用。下知を施し。他錢を鐚と名付け。永樂錢一文に。他錢四五文宛行はる。故に他錢多く京地に集り。京錢と稱せり。一說に應永十八年八月。相州三崎に。永樂錢積みたる船漂著す。將軍義持の時なりともいふ。一說に。當時永樂錢を重じ。黃金と米價と。皆永樂錢にて定む。黃金一枚といふは。七兩二分なり。物の代附二千貫といふは。金五十枚なり。二百貫は五枚なり。七兩二分は。代銀四百五十目なり。千石千貫といふは。みな永樂錢なり。千疋萬疋といふは。一分を百疋の積なり。當時永樂と。鐚との擇み強く。人々永樂を好みて。京錢を惡み。每々爭論に及ぶ。故に制札に。要脚精撰と書くも。錢の擇みなく通せよとの事なりと。此說に據れば。金幾枚といふは。室町時代より稱する事。いよ〳〵證とすべし

永樂と鐚との爭ひ。天文十九年より慶長十一年まで。五十七年といふ。慶長通寶を鑄たる年より。永樂錢停止せられ。永樂常錢の差別なく。同じ一文の通用に定まりぬ

同十四年。鑄二大佛大判金一

是は武德編年に。慶長十四年。秀賴洛東大佛再興あり。秀吉聚斂の黃金千枚分銅を潰し。大佛資用の爲に。大判とせらるといふ

後水尾帝元和元年。鑄二元和通寶一

是錢四五品。泉彙に出づ

明正院寬永十三年。鑄二寬永通寶一

是歲五月。錢座免許。此錢背文一より十六にいたる。悉皆泉彙に出づ

靈元院寬文八年。鑄二寬文通寶一。至二天和三年一

是錢。京都大佛の像を毀ちて鑄たり。寬文より天和にいたるまで。十六年の間。東府龜井戶村（俗龜戶村といふ）にて鑄る。泉彙に出づ。（文錢是なり）

貞享元年。鑄二貞享通寶一

是は銀錢なり。泉彙に出づ

東山院元祿八年。改二鑄判金大小挺銀豆板等一

是は元祿八年九月十日。二貨を改め鑄らる。世に

極印に定められ。其銀貨を俗に大黑遣ひといふ。常是は乃其名なり

慶長丁銀は。大抵目方四十三匁の內外なり。大黑丁銀は。大黑の形。十二程刻せり。豆板(マメイタ)は眞面に寶字を刻し。裏に大黑を刻す

按ずるに。丁銀の起りは。漢土の銀錠。又は鋌銀に倣ひて造りしといふ說あり

金銀を錠といふは。通雅に見え。金銀銅を鋌といふは。後魏崔浩。好觀㆓星變㆒。置㆓金銀銅鋌於酢器㆒と。史に見え。銀八千鋌は。五代史買緯が傳に見え。銀錠は品字箋に見え。鋌銀は通鑑釋文辨疑に見ゆ

豆板は。俗に小玉といふ 漢土の碎銀。又は散碎銥こまがねと。東涯の六帖に載せたるより。後人多く引書を出だし。種々の說あれども。是等も皆漢土の法に倣ひしとも見えず。是より以前。天文。永錄の比。石州銀山にて。始め銀貨を鑄たる公用丁銀 公用永祿二字を刻し 其後。文祿二年に鑄たる丁銀。重四拾三匁 石州銀文祿二卯月日を刻し 同年。筑前博多丁銀 博多御公用文祿二中山與左衛門名一面に刻す 慶長丁銀 四十三匁の內外常是を刻する物 共に其形。宛然として相同じ。されば最初丁銀を鑄たる時より。今の形を造りしなり。又碎銀(コマガネ)も切り使ひなど諸說あれば。彼土にも豆板に似たる物あり。群談採餘に。景泰上頗事㆓聲色奢侈㆒。嘗以㆓銀豆金銀物㆒撒㆑地。令㆔宮人及宦侍㆒。爭拾爲㆑中関笑㆑上といひ。輟耕錄に。白金白星許といふも。豆板の事ならむ

一說に。豆板はちやぼ銀に倣ひしともいふ。是は重一匁五分許。圓形にて面に矮雞(チヤボ)の形を鑄付けたり。京都室町養林庵に。昔は數百粒を藏せり。此寺加藤清正の菩提所にて。矮雞銀(チヤボギン)は朝鮮銀なりと

同八年五月。鑄㆓慶長大判㆒

是は金銀圖錄に載す。丸の內に。五曜星の紋と。慶長八五月極六字を分書し。壹兩用介花押とを刻す

同十一年。鑄㆓慶長通寶㆒

是は銅錢なり。武德編年に。是歲。永樂通寶を止め。薄錢を用ひらる。五事略に。慶長十三年十一月。止㆓永樂錢㆒。用㆓京錢㆒と。二說同じからず

後小松帝應永十年八月三日。永樂錢を積みたる

なり。又大閤圓歩判金の圖を出だして。重壹匁二分と記せり

此外に。大閤但馬小判。軍用金銀二貨。重六分及花降金銀二貨等。圖錄に載せたれども。國家常用の物とも見えざるなり

文祿元年。鑄二文祿通寶一

是錢泉彙に出づ

同四年。鑄二駿河小判金及武藏小判金一

是は五事略に。駿河判江戸判など。皆々造られし所を以て稱すといふ物にて。紳書に。後藤云。文祿四年。江戸。駿河兩所にて小判を定めらる（駿河小判重四匁貳分五厘。武藏小判重四匁八分弱。並に圖錄に出づ）

慶長年中鑄二金壹分判一

是には諸說ありて一決せず。五事略に。慶長四年。始造二壹分判一といひ。紳書には。後藤の說を引きて。慶長五年に造るといひ。武德編年には。慶長十年後藤庄三郎光次に命じ。金壹分判を始めて造らせらる。其重目壹錢目二分なりといへり。常山紀談に。後藤庄三郎黃金を四つに切りて通用せむと望みけり。今の一分金といふは。夫より始まれり。但甲州には。信玄碁石金といふあり。一分金は碁石金に倣ふにやあるべしと云々。是等の諸說孰か是なるや。其黃金を四つに切るといふは。靜庵隨筆に。花小判といひて。金子壹兩を四つにして。小判のやうにしたる物なり。壹分の大なりと。重壹匁二分。其形は。圖錄に出づ（碁石金は。甲陽軍鑑に出でたり。圖錄に。露金を出だし。此類なるべしといへり。圓形なり）

同六年。鑄二判金大小挺銀豆板等一。而定二法制一

是は五事略にもいへり。慶長六年五月。始めて通用金銀の法を立てたまひ。判金大小。丁銀豆板等の制定まる

圖錄に。慶長大判金。重四十貳匁二分。十兩二字後藤榮乘花押を刻す。同筆大判金目方同じ。但榮乘の花押變態なり。江戸座金小判金重四匁八分壹兩二字。光次花押を刻す。京座。駿河座二品文字目方皆同じ。万兩頭小判は光次花押上下に刻す。壹分判重壹匁二分。是に片本字兩本字あり。目方皆同じ

此時始めて銀座を置きたまひ。其座より菊一文字。夷一文字。大黑極印等を刻して調進せしに。大黑

事などはなく候と見えたり。是則大判の權輿なるべしといふ

按ずるに。板金の起は。周禮職金の金鈑。爾雅の鉼金。漢書武帝太始二年更㆓黃金㆒師古註。吉字金挺之類。小判は夢溪筆談の小金餅など。東涯の名物六帖に載せたるより。後人多く引書を出だし。種々の説あれども。盡く漢土の法に倣ひしとも見えず。甲州金などは。數十品あるもの。多くは圓形なり

同天正年中。鑄㆓長大判金㆒

是も重四拾四匁。拾兩及後藤榮乘の花押あり。圖錄に出づ

同十五年。鑄㆓天正通寶㆒

是錢二品あり。一品泉彙に出づ

同十六年。鑄㆓大佛大判金㆒

是は金銀錢譜に。天正十六年造といふ。重四拾三匁。其面に筵目なく。文字花押もなし。圖錄に出づ（紳書に。大佛供養の時。造られしとあり）外に同名あり

又鑄㆓讓葉大判金㆒。又鑄㆓小佛判㆒

是は二品共に諸書鑄たる年を記さず。金銀圖品に。讓葉金大判或は大佛判といふ。其形は。圖錄に出づ。金銀吹替錄に。小佛判是を二條判といふ。慶長以前より通用すといふ

後陽成院天正十九年。鑄㆓判金大小㆒

是は武德編年に。天正十九年。此年關八州へ通用せらるべき爲に。後藤德乘幷に門人庄三郎光次に命じ。黃金を以て。大小の形を定めて鑄させらる。但大判は。金目四拾八文目を以て一枚とす。是は室町將軍家の流例なり。往古より今にいたり。小判といふ事は無く。灰吹の砂金を權衡に掛けて。通用すといへども。急務をなさず。今度光次に命じ。昔年よりありし金錢に。四增倍の積り四文目八分を以て小判とし。是を鑄て。通用其便を得るに。金錢ともに世に行はると云々

五事略には。天正十六年。造㆓黃金大判小判㆒。とあり。されども。圖錄にも天正十九年とあり

天正。文祿之間。大閤鑄㆓大判金及圓步判金㆒

是は圖錄に。重三拾八匁二分。天正。文祿の間造る所なり。大閤小判といふ。又靜庵隨筆を引きて。大判に橋本といふ極印あるあり。大閤の時の銀座

按ずるに。砂金一分とあるは。孝謙紀に見えたるのみにて。其餘砂金一分二分とあるは。未見あたらず。室町時代に。三十三兩二分といふは。
砂金なるにや覺束なし

其後。天文永祿の頃大内義興。毛利元就石州を領せし時。銀貨を造られし事。石州銀山舊記に見えたるよし。圖錄に載せたれど。是は其私領のみ通用にて。甲州金壹百三十六品。越後小判諸國の金貨多く載せたるごとく。天下一統公用の寶貨にはあらざるなり。其後。元龜天正の頃。金銀に幾枚といふ名目あり。圖錄に引用する所。多く見ゆ。多門日記略に。元龜三年十二月。信長衆[illegible]の時。銀子百枚。又云。天正二年十二月。銀一枚代三石八斗に買之。同八年十二月金子（一枚持上代廿八石五斗）同九年八月。金子一枚（代寺升卅八石五斗）其後引續きて二貨幾枚と唱へ。大閤記に。金賦之事。天正十三年初秋の頃。金子五千枚。銀子三萬枚。諸侯太夫等に施したまへりと云々。右元龜三年より。天正年中まで。金銀に幾枚といふ。其寶貨は何れの世。何人の造りて。いかなる形。其目方何程といふ事詳ならず。青木敦書の說。又は圖錄に。彼此と考證あれど。皆後世よりの臆斷にて。確說とはいひがたし。武德編年大判條に。是は室町家の流例なりといへば。信長以前室町の時代より。金幾枚と唱へ來りしと見ゆ。黃金を音に呼ぶは今の大判の事なり。是は信長の時に始まれり

正親町院天正年中。始鑄二黃金大判金一。一名板金是は織田信長公造らせらる。其形は。圖錄に載せて。拾兩二字幷に後藤花押を刻せり

圖錄に。右天正大判金重四拾四匁。大判は信長公の時に始まる。紳書に。後藤云。大判に拾兩と書く事は。小判拾兩にてはなく。黃金拾兩なり。黃金拾兩とは。昔は銀壹枚を黃金壹鐐とし。銀拾枚を黃金拾兩といふ。大判壹枚を銀四百二十匁に通用せり。又云。大判は信長公の時。後藤の先祖極む者なりと。板金といふは。同書に進退記を引きて。板金の事。是も殿中にては披露なし。又進上もなし。私ざまにての事なり。五枚。十枚。百枚とも候へば。折又は唐の盃などに居ゑて披露候。只一枚二枚も同前に候。御前にて包を明け候

事。その證を見當たらず。室町殿時代も。寶貨の沙汰は見えず。中原康富記に應永八年五月十三日。日本准三后道義書。上ニ大明皇帝陛下ニ云々。中略金千兩馬千疋（此千兩は砂金なるや）其餘は。同書に文安六年四月宣下に。砂金二十兩二褁といひ。親長記に。文明五年十二月元服に。砂金十兩。但代二千匹といひ。長興記に。文明七年四月宣下に。砂金一褁代二千疋といへば。專ら砂金を用ひしと見ゆ。鹿苑院義滿公は。大に奢侈を好まれ。國家の金貨を磨刓し。應永四年に。金閣寺を建てられ。同八年五月十三日。大明の皇帝へ金千兩。馬。鎧。劔刀種々の品を贈らる。此皆皇國第一の寶貨を磨滅し。神明守護の御德をかへりみず。其弊政いふばかりなし。其後太宗の壽爵を受けられし故に。彼土より永樂通寶の錢を多く頒ち贈れり。（天野氏鹽尻には。應永十年八月三日と記せり）此錢文は。相國寺の僧中正藏主（一名仲芳）の筆なるよし。本朝通鑑。異稱日本傳。五岳傳。連珠集等に見ゆ。義滿奢侈の風。その子孫に流傳し。慈照院義政の世にいたり。殊更甚しく。天下の寶貨を融通する事能はず。應仁文明の大亂も。其まゝにて東山に銀閣寺を建てられ。文明十二年に。世務を讓りて。是に閑居す。金閣に準じ。銀閣といへば。其弊政亦いふばかりなし。故に皇國神明の冥加なく。寛正五年。文明七年。同十五年以上三度まで。大明の天子に錢貨を賜はるべきを乞ひ求めらる。中にも文明十五年には。錢十萬貫を賜はりなば。我國の財用足り申さむと歎かれし事あり。我朝未曾有の大亂世とは申しながら。左程まで困乏せしも。寶貨の德を輕んずる冥罰にやあらむ。先是普光院義敎の時代に。灰吹銀といふ物通用せしにや。永亨二年八月記に。鈴鹿某云。灰吹銀五十目。錢壹貫文價也とあり。金銀錢譜に。えぎれ銀は灰吹にて。耳薄く。中厚く。細長く。えぎれの魚に似たる故にいふと。其形はいかなる物にか。金銀圖錄に。石州御藏灰吹銀。其種二三品を載せたれど。是は其時代より後世の物なり。蔭涼軒日錄に。永亨十二年十月。金三十三兩二分といひ。親元日記に。文明十一年時岡民部丞預置金四十兩。料足十貫といふも。義滿大明へ贈られし千兩も同じ金貨なるや

貢金當時長元の貢銀と同じく。世に行はると。其金は金銀圖錄に載せたる。對馬高木掟小判金。形。柴刀の如く。津の字高木の二字とを刻する物是なり。是のみ例金とも見えがたし。其後高倉院安元元年六月。小松重盛黃金三千兩を。宋の育王山へ贈られし事。平家物語に見えたり。其金貨いかなる形なるか。治承二年十一月十二日。安德帝御誕生のとき。金錢九十九文を皇子の御枕に置かせらる事。平家物語に見え。謹上泰山府君都狀に。銀錢二百四十貫文と。朝野群載に見えたれば。其頃金銀二錢も專ら通用せしにや。源平盛衰記に。治承二年砂金千兩。南鐐百とあり。平家物語に。南鐐を煖遼に作り。東鑑に。南廷に作り。砂石集に。軟挺に作るも皆同じ。其形は。金銀圖錄に多く載せたれど。何れを當時通用せしか詳ならず。又壽永小判金といふは。壽永中造る所といふ。其形。今の判金と同じく。壽永二字と。花押とを刻せり。重五匁。（或云。北條泰時造ると）當時此等の寶貨通用すと見えたり。又其頃。異朝の錢も。來舶すと見えて。法曹至要抄に。建久四年宣旨停ニ止宋朝錢貨一とあり今も世に多くある。嘉祐通寶。治平。熈寧。元豐。政和の類。是なり。善隣國寶記に。元史を引きて。後宇多院建治三年。是異朝渡レ錢之始也といふは誤れり。

されども。其頃は。戰國大亂の世なりし故に。金銀も不自由の事有りしにや。治承四年。南都東大寺重衡の兵火に罹りて。再建の沙汰あり。建久の初。白河法皇より右大將賴朝と。俊乘坊重源師とに。其命ありしに。賴朝より朝金五十兩寄附せむと申されしに。其年旱魃にて。都合調はざる事。東鑑に見えたり。其のち北條時代には。寶貨の沙汰は見えず。銅錢を用ふる事は。東鑑脫漏に。嘉祿二年。先レ是以ニ準布一爲レ幣。至レ此又用ニ銅錢一とあり。東鑑建長四年記に。砂金百兩。南廷十兩とあれば。引き續きて。此等の寶貨を通用せしと見ゆ。南北朝時代も。寶貨の沙汰は見えず。金銀圖錄に。大塔宮小判。重四匁六分。太平小判金。重三匁六分。新田判官仁木賴明の造る所。赤松小判金。重四匁壹分。尊氏小判。銀。重四匁三分。各其圖を載せたり。されども。當時此等の寶貨を通用せし

ど。國史に見えたる砂金なるや。砂金に砂と沙と二品あり。砂金は。碎石。又は金礦中より出づ。强流水の底にあり。佐渡。松前より出だすを瓜實(ウリザネ)といふ。伊豫より出だすを茄子實(ナスビザネ)といふ。沙金は。水沙中にあり。佐渡西三河。伊豫三角寺奥の院。及吉野川の底にあり。人民筵にて抄取(スクヒ)るに。大に人力を費して利あらず。今は此事を止むといふ。砂金を冶へば。熟金となる。生金是なり。沙金を鹽上に置き。炭にて燒けば。金沙集まりて玉となる。俗金丸といふ。和漢三才圖會に見えたり。宋の朱輔が溪蠻叢笑に。二種共に載せて。名二絲金一といへり。天工開物にも二種を載す。國史に見えたる砂金は。何れなるや詳かならず。黃金も小一百兩とあれば。大小ありと見ゆ。其形。量目詳ならず。白銀も錁は砂銀なるや。其形。量目皆詳ならず

大抵。六史に載せたる頃は。國家通用は。錢貨のみ多く用ひて。金銀二貨。今のごとくは用ひざると見ゆ。勅命。制令二貨の事なきにてしるべし

宇多天皇寛平二年。鑄二寛平大寶一

是錢泉彙に出づ 二品ありといふ

醍醐天皇延喜七年。鑄二延喜通寶一

是錢泉彙に出づ この錢。天明二年壬寅三月下旬。攝津國川邊郡東長洲村にて。數枚堀り出だせり。銅錢多くして。鉛錢少くなし

村上天皇御宇。鑄二乾元大寶一 見二拾芥抄一

是は延喜通寶の錢文を改め鑄るなり

日本紀略云。天德二年三月廿五日。改二錢貨文一。延喜通寶爲二乾元大寶一。三月八日右大臣於二仗座一。仰二外記一。令二因幡介廣兼圖書允阿保懷之一。令レ書二新錢文一。但被レ用二懷之之字樣一

和同開珍より乾元大寶まで。大平と開基と二品除く 本朝十二錢といふ。冷泉帝より。天皇の號止みて。皆院號となり。鎌倉時代までは。三貨及鑄錢の沙汰なし。日本紀略に。後一條院寬仁元年。盜人前攝政家の倉町に入りて。砂金千三百餘兩を盜み取りし事見えたり。小右記に。長元二年九月。前陸奥孝義志二砂金十兩一。金粒太大不レ似二例金一。又此砂金異二例金一。不レ可レ被レ充二用雜事一といへば。當時は砂金を專ら通用せしにや。例金といふは。別に通用の金貨ありしにや。一説に。大寶元年。對馬島の

て。鑄錢司より進獻する所の新錢は。文字少々不レ明。又少の疵有るとも通用に妨なく。請取渡可レ致處に。是は文字不レ全。是は輪郭（ワフチ）有レ缺などいひ立て、。十に二三は嫌ふ故に。此度嚴重に禁制せられて。通用せよとの事なり

同九月廿六日甲辰。勅二木工寮一。採二銅於山城國相樂郡岡田郷一。舊鑄錢司止

是は岡田郷採銅の事にて。同九年六月九日丙子の勅。同十一年七月十日丙寅の採銅使。元慶五年六月丁丑朔採銅使停止。同八月廿日丙申採銅使返進は。皆是なり

同十二年正月廿五日戊寅。詔曰云々。（上略）錢文曰二貞觀永寶一。一以當二舊之十一。母子相隨。並共通用。同八

是歲又鑄錢あり。此錢泉彙に出づ（母子といふは。母は種錢。子は通用錢）

月五日乙酉。鑄錢司進二新鑄貞觀錢一千一百十貫文一

陽成天皇元慶三年十月十三日己巳。勅。令二太宰府一庫物之代砂金六百三十三兩。水銀百七十斤。注二附官帳一。先レ是府司申請。每二唐人來一。募二貨物一。直借二用庫物一。交開畢後以二砂金一給レ官給レ綿。總計返納。其砂金一兩充二綿十六屯一。絹一疋宛二十四屯一。府司不レ能レ勘。行來尙矣

是は當時砂金を綿絹に充て、交易すれば。其一兩はいか程といふ事をしるせり。金銀圖品に砂金の圖あり

以上國の六史。日本紀。續日本紀。日本後紀。續日本後紀。文德實錄。三代實錄に載せたる金銀銅鐵の四貨。及代々鑄錢の沿革。勅命制令の文。すべて皆かくのごとし。是を見て。正史に載せたる。寶貨の大率知りぬべし

按ずるに。外國貢上の金銀は。皇后の御代に始まり。和銀の出づるは。天武帝三年に始まり。獻二銅鑛一と。冶二金鑛一とは。文武帝二年に始まり。貢二冶金一は。大寶元年に始まり。獻二和銅一は。元明帝和銅元年に始まり。陸奥貢金は。聖武帝天平二十一年に始まる。其中に練金。砂金。黃金に大小あり。銀に白銀及錍あり。いかなる形なるか詳ならず。又金に分兩あり。銀に兩斤あり。其量目も亦詳ならず

練金は。後世にいふ竹流金にて。竿金といふ說もあり。砂金は。金銀圖品に。その形を載せたれ

年三月十五日符にも見えたり〇六史の中。日本後紀は欠本にて。全部なし。故に日本記略。類聚國史 類聚三代格 承知年符を以て年序とす

續日本後紀云。仁明天皇承和二年正月廿二日戊辰。令レ鑄二新錢一。下レ詔曰云々。上略是以今制二新錢一。以叶二適變一。文曰二承和昌寶一。以二新錢之一一。當二舊錢之十一。新之與レ舊宜レ令二並用一

是歲新錢を鑄さしめ。年號を以て錢文とせり。和同開珍は。銅出づるに因りて。是と異なり。年號錢文は承和通寶に始まる。此錢二品泉彙に出づ。漢土にて。年號錢文は。南宋の孝文帝孝建四銖錢に始まる

同二月廿三日戊戌。下野國武茂神奉レ授二從五位下一。此神坐下採二沙金一之山上

是は延喜式に。下野國より每年砂金百五十兩。練金八十兩づゝ貢すといふものならん圖錄に。上野國吉豆小判金。一名足利小判載せたり

同三年正月廿五日乙丑。詔。奉レ充二陸奧國白河郡從五位下勳十等八講黃金神封戶二烟一。以レ應二國司之禱一。令レ採二得砂金一其數倍レ常。能助二遣唐之資一也

是は奧州白河郡より。砂金を採り得て。遣唐使の入用を助けたる故に。其賞に封戶を充てたまふなり

嘉祥元年九月十九日乙亥。令レ鑄二新錢一。下レ詔曰。云々。上略宜下改二舊貫於皃鏹一。磨二新彩於金刀一。文曰中長年大寶上。一以當二舊之十一。新之與レ舊並用雜行。將レ令下用不レ倦旣富レ之而敎上レ之

是は年號改元に因りて。新錢を鑄たまふ。この錢二品泉彙に出づ

三代實錄淸和天皇貞觀元年四月廿八日癸丑。詔曰。云々。上略宜下改二舊弊一更制二新錢一。勤二此變通一救中彼流弊上。文曰二饒益神寶一。一以當二舊之十一。卽舊之與レ新並令二雜用一。同年十月廿八日庚戌。是日鑄錢司進二鑄錢一

是も年號改元に因りて。新錢を鑄させ給ふなり。是歲二月廿五日。長門國海部男種麻呂といふ人を採銅使とし。三箇年の內。年々銅鉛三千斤づゝ進むべき事を載せたれば。新錢の用となしたまふ事しるべし

同七年六月十日己未。禁三京畿及近江國賣買之輩擇二棄惡錢一

是は去る弘仁十一年六月九日。大藏省に下知あり

是は以前よりの古錢多く。隆平永寶の新錢多からず。其中には。收錢の者もあり。乏民に行き渡らざる故に。新古共に列ね用ひ。融通せよとの事なり

弘仁元年十二月廿日丙戌。銅錢司用ニ乗銅一鑄ニ進新錢一千四十貫一。因レ茲賜レ祿有レ差

是は銅錢司より。銅の有餘を計りて。隆平永寶を鑄て進獻す。大同三年。新錢未レ多とあるに。鑄進する故に。賞美して祿をたまふなり（按するに。類聚國史第百七職官部。十二鑄錢司條に載せたるは。文長し故に略す）

類聚國史（第百七職官部）弘仁七年秋七月戊寅。廢ニ鑄錢司一

是は鑄錢司を廢せらる。其譯あり。同月癸巳詔。日本紀略を考ふべし

日本紀略云。弘仁九年十一月辛巳朔。詔曰云々。（上略）改ニ錢文一曰ニ富壽神寶一

是は隆平。永寶の錢文を改むるなり。延喜通寶を乾元大寶と改むるとおなじ。この錢四品泉彙に出づ

承和符云。（八年閏九月廿九日符）弘仁十二年七月壬戌符偁。得ニ鑄錢解一偁。依ニ去弘仁九年六月十一日申レ官支度帳一。件錢每レ年鑄作可レ進。而始レ自ニ九年一。至ニ于今年一。堀採之銅。乏少作レ物之類有レ欠。望請。五千六百七十貫之內。減定ニ三十貫文一。每レ年作貢。但豐レ銅之年。隨卽陪作。不ニ必限以ニ此數一

是は官に申し上ぐる支度帳の事を陳ぶるなり。去る弘仁九年六月十一日に。鑄錢司より申し上ぐるは。每年五千六百七十貫づゝ。調進可レ致の所。其年より今十二年七月まで。四年の間。堀り出だす銅乏しく少なくして。錢より外の銅器を造るにたらず。定數の內三十貫を減じて。每年調進可レ致。銅豐に出づる年は。三十貫に限らず。其倍も鑄作らむとの事なり

承和符云。（八年閏九月廿九日符）淳和天皇天長三年九月乙酉。下ニ民部省一符偁。相ニ轉舊錢一鑄ニ造新錢一之間。宜レ停ニ鑄錢料銅一令レ進ニ年料熟銅千斤一

是は此朝。舊錢を相轉じて。新錢を鑄作らむとの事にて。新錢出來るまでの間は。鑄錢司へ賜はる料銅は停止せられ。諸國より貢進する熟銅は。每年千斤づゝに定めらるなり。同八年三月癸卯。鑄錢司秩期。一准ニ諸國一と。類聚國史（職官部）及承和二

贈り給ふ黄金なり。小一百兩とあれば。此時黄金に大小の分あり

同十年八月壬子。勅。去寶龜三年八月十二日。太政官奏。永止ニ舊錢一。全用ニ新錢一。今聞。百姓徒蓄ニ古錢一。還憂無レ施。宜レ聽ニ新舊同レ價並行一

是卽三年八月庚申の奏を勅し給ふなり。其年永止ニ舊錢一。全用ニ新錢一とは。奏せざれど。新古一貫十貫の高下あり。その時より百姓等。古錢を蓄へ持ちたるは。格別の損あり。施すべきやうなき故に。新古におなじ價に通用せよとなり

桓武天皇延曆九年冬十月甲午。復置ニ鑄錢司一

是は先例におなじ

日本紀略云。桓武天皇延曆十五年六月壬戌。木工允上道廣成授ニ外從五位下一。褒下採ニ備前國銀一之功上也

是に據れば。當時備前の國よりも銀を出だせり

日本後紀云。桓武天皇延曆十五年十一月乙未。詔曰。云々。上略 是以更鑄ニ新錢一。仍增ニ其直一。文曰ニ隆平永寶一。宜下以ニ新錢一一。當ニ舊錢十一。新舊兩色兼使中行用上。但舊錢者。始レ自ニ來歲一。限以ニ四年一。然後停廢。辛丑始用ニ新錢一

是平安城遷都以後に鑄させ給ふなり。此時古錢は四年を限り。通用停止せり。此錢大小中數品あり。三品泉彙に出づ 往年大坂堀江川にて。此錢數枚を堀り得たり。其所の橋を隆平橋と名つくといふ

同十六年二月甲申。勅。云々。上略 今聞。京職多有レ收レ錢。事須ニ賤レ本貴レ末。一絕ニ收錢一。但恐民有ニ貧富一。不ニ必蓄レ穀。宜レ聽ニ貧乏之徒進レ錢。通計不レ得レ過ニ四分之一一

是は京職の者。多く錢を收めて其價を高くし。貧乏のもの不便なる故に。其制を立てたまふなり

聚類三代格二 第十 延曆十七年九月乙丑。是日太政官符。禁ニ斷貯レ錢事。被ニ右大臣宣一偁。奉レ勅用レ錢之道。取ニ於輕便一。有無均レ利彼此得レ宜者也。如レ聞。外國吏民多有ニ貯蓄一。京畿士庶還乏ニ貲用一。既乖ニ均利之義一。亦失ニ得レ宜之方一。宜下ニ嚴制一不上レ得ニ更然一

是は畿內より。外の國に多く。錢を買ひ貯へて。京畿の錢乏く。利用に不便なる故に。蓄錢を禁じたまふなり

日本後紀云。平城天皇大同三年五月己丑勅。百姓之間。新錢未レ多。宜ニ新舊列用濟ニ民乏一

源平盛衰記に。小松内府重盛公。奥州知行の時。氣仙郡より金千三百兩を參らせたりといふも。是等の調金なるや。後世に傳ふる奥州上字小判金。分銅金種々あれども。必當すべき徵なし

廢帝天平寶字四年三月丁丑勅。云々。上略頃者。私鑄稍多。僞濫既半。頓將ニ禁斷一。恐有ニ騷擾一。宜下造ニ新樣一。與レ舊並行上。庶無レ損ニ於民一。有レ益ニ於國一。其新錢文曰ニ萬年通寶一。以レ一當ニ舊錢之十一。銀錢文曰ニ太平元寶一。以レ一當ニ新錢之十一。金錢文曰ニ開基勝寶一。以レ一當ニ銀錢之十一

是は金銀銅の三貨を鑄させたまふ。是れまで銀銅鐵三錢はあれども。金錢は見えず。金錢は此朝に始まる。萬年通寶は銅錢なり 按ずるに。錢文に通寶と名付くるは。萬年通寶に始まる。漢土にて通寶と名付くるは。唐高祖開元通寶に始まる事通鑑に見ゆ 金銀以レ一當レ十といふは。漢土の制法にもあり。後漢西域傳に。大秦國以ニ金銀一爲レ錢。銀錢十當ニ金錢之一一とあり。萬年通寶泉彙に出づ

稱德天皇天平神護元年九月丁酉。更鑄ニ新錢一。文曰ニ神功開寶一。與ニ前新錢一並行ニ於世一

是は銅錢なり。故に前の新錢と並び行ふ 拾芥抄に。神功開寶は稱德御宇鑄之とあり。王思儀が三才圖會に。小窓別記を引きて。神功開珍とあり 同二年十二月。是歲民私鑄レ錢者。先後相尋。配ニ錢司一駈役とあり。是より。私鑄の者は。皆鑄錢司に屬託す。此錢三品泉彙に出づ

光仁天皇寶龜三年八月庚申。太政官奏。去天平寶字四年三月十六日。始造ニ新錢一。與レ舊並行。以ニ新錢之一一。當ニ舊錢之十一。但以ニ年序稍積新錢已賤一。限以ニ格時一。良未ニ安穩一。加以。百姓一人間償ニ宿償一者。以ニ賤日新錢一貫一。當ニ貴時舊錢十貫一。依レ法雖ニ相當計一。價有ニ懸隔一。因レ玆物情擾亂。多致ニ諠訴一。請新舊兩錢同レ價施行。奏可

是は寶龜三年より。十二三年以前に鑄たる新錢。段々に價賤しくなりたるを。一錢十錢と引き替への制をいひ立て、下りたる新錢一貫を以て。高き時の古錢十貫に引きならし。差引する故に。每々諠譁訴訟に及ぶ。新錢古錢おなじ價にし通用させむと事を奏するなり。聞き届けあり

同八年五月癸酉。賜ニ渤海王書一。曰云々上略又緣ニ都蒙請一。加ニ附黃金小一百兩水銀大一百兩一

是は渤海國の使者都蒙が歸る時。天皇より彼土へ

獻る事あれども。斯地にはなき物と思へると宣ふは。甚しく佛に泥みて媚び諂ひ給ふなり。此帝は其妣光明皇后。皇女孝謙帝二代とも。深く佛を信じて出家し給ふにより。二代とも御謚を奉らず

續日本紀聖武天皇注云。謹案二勝寶七歳勅一。曰。太上天皇出家歸レ佛。更不レ奉レ謚。至二寶字年一。勅進二上此號謚一。孝謙帝注云。出家歸レ佛。更不レ奉レ謚因取二寶字二年百官所レ上尊號一。稱レ之

此邦國家第一の寶貨を。大半佛氏の用となし。後世に流傳し給ふは。推古。聖武二帝の御代より始まる。其原は百濟王より始めて俑を作れり。西蕃外國の徒。吾皇國に害ある事。識者考ふべし

天平感寶元年四月乙卯。陸奥守從三位百濟王敬福。貢二黄金九百兩一

是は二月丁巳（二十二日）に始めて貢せし物とは異なり。四月二日感寶と改元ありし同月乙卯なれば。四月二十二日なり。然るに。稱徳紀に冶鑄云畢。塗金不レ足。而陸奥國馳レ驛。貢二小田郡所レ出黄金九百兩一といへば。二月丁巳（二十二日）の貢金も。九百兩なり。此歳二度の貢金合せて。千八百兩としるべし

孝謙天皇天平勝寶二年三月戊戌。駿河國守從五位下楢原造東人等。於二部内廬原郡多胡濱一。獲二黄金一獻レ之（練金一分 沙金一分）於是。東人等賜二勤臣姓一。同年十二月癸酉。授二駿河國守從五位下勤臣東人從五位上。獲レ金人无位三使連淨足從六位下一。賜二絁一十疋。綿四十屯。正税二十束一。出レ金郡免二今年田租一

是は文徳實錄仁壽二年二月乙巳。滋野貞主卒條に。曾祖父楢原東人天平勝寶元年爲二駿河守一。于レ時土出二黄金一。東人採獻レ之。帝美二其功一。曰。勤哉臣也。遂取二勤臣之義一。賜二姓伊蘇志臣一。といふ。是なり。此献金は。風土記に鷹河國薦河郡鞠込貢二黄金一といひ。宣秀卿記に。享祿四年駿河金といふ物にて。後世に傳ふる駿河今川永四貫小判金即此なりと（此金三品あり。圖錄に出づ。當時練金。沙金一分といふは。分兩の分なるや）

同四年二月丙寅。陸奥國調庸者。多賀以北諸郡。令レ輸二黄金一。其法正丁四人一兩。以南諸郡。依レ舊輸レ布

是は奥州の地。おひ／＼金貨を出だすにより。調布の代に黄金を納めしむるなり。調布の代なれば。金貨分量の制も立つと見えたり。其量未詳ならず。

に。數萬の金銅を用ひたり

朝野群載に。東大寺大佛を鑄る時。熟銅七十三萬九千五百六十斤。白錫一萬二千六百三十八斤。練金一萬四百三十六兩。銅五萬八千六百二十兩。炭一萬六千三百五十六石といふ

乃其像を裝飾せむとし給へども。國家の金銅を多く用ひ盡されたれば。其料金無く。是非異朝へ乞ひ求めむとし給ふとき。陸奥國守百濟王敬福より黄金を貢す。于レ時太平二十一年二月丁巳二十二日なり。天皇限りなく感悅し給ひ。同年夏四月甲午朔。幸二東大寺一。御二盧舍那佛前殿一。北面對レ像。勅。上略陸奥國守從五位上百濟王敬福伊部内小田郡仁黄金在奏氐。獻此遠聞食。驚伎悅備貴備念久波。盧舍那佛乃慈賜比(メグミヒ)福波倍(サヒハヘ)賜物爾有止云々。下略此日授二百濟王敬福從三位一。元亨釋書に。陸奥國守敬福を銀青光祿太夫に任せらるゝといふは。是なり 其翌二日乙未に。天皇又大佛の前殿に御し。大臣以下多くの百官士庶を行列し。是日改二天平二十一年一。爲二天平感寶元年一。如是院年代記云。四月二日改元 萬葉集第十八 天平感寶元年五月十二日。於二越中國守館一。大伴宿禰家持作レ之

須賣呂伎能御代佐可延牟等阿頭麻奈流美知能久夜麻爾金花佐久(スメロギノミヨサカエムトアヅマナルミチノクヤマニコガネハナサク) 夫木集に。殷富門院大輔「咲き初めし黄金の花はすべらきの。光をひらくはじめなりけり

此年號天平感寶は。年中改元とて。年代曆に不レ載と。清輔が奧儀抄に見えたり。又同年五月庚寅。陸奥國免二三年調庸一。小田郡永免。同閏五月甲辰。授二獲レ金上總國人大部大麻呂從五位下一。授二治レ金人左京人戸淨山大初位上。出レ金山神主小田郡日下部深淵外少初位下一。同秋七月甲午。是日改二感寶元年一。爲二勝寶元年一。其後廢帝天平寶字二年八月戊申の勅に。信終出二勝寶之金一。我國家於レ是初有二奇珍一。開闢已來未レ聞若レ斯盛德者也といひ。高野天皇天平神護二年六月壬子にも。我國家黄金從レ此始出焉といひ。此貢金大佛の用となりて。其大佛の名。殊に高く。光仁帝寶龜五年十月己巳の條。文德實錄齊衡二年九月甲戌の條。同三年五月丙寅の條。三代實錄貞觀三年正月廿一日丙申。同三月十二日丙戌の條にも載せて。聲價代々世に高く。人のいひ傳へて異朝までも聞く事になりぬ。先レ是文武の朝。大寶元年三月甲午。對馬島貢金こそ。實に此邦金貨の始發ならめ。聖武帝大佛の前にて。勅し給ふに。此大倭國者。天地開闢以來に。黄金は人の國より

武。元明三帝の例に傚ひ。更に鑄錢司を置き給ふなり

同二十一年二月丁巳。陸奥國始貢二黄金一。於レ是奉レ幣以告二畿內七道諸社一（丁巳は二十二日なり）是卽世に所謂奥州の貢金なり。其堀り出せし、山は。稱德帝紀に。陸奥國馳レ驛貢二小田郡所レ出黄金九百兩一。我國家黄金從レ此始出焉といふ。小田郡は金華山なり。其山に社を建つるは。神名式に。小田郡黄金山神社是なり。今の仙臺も此金を出だしたる金華山より起れる名にて。陳子昂が春日登二金華觀一詩に。白玉仙臺古。といふによれり。金華山には。黄金と水精とあるに因りてなり

仙臺城下。儒士の著はし、奥羽觀跡聞老志に。陸奥の砂金は。もと小田郡陸奥山に出づ。山は式に載する所の黄金山神社なり。後世其地を牡鹿郡に併せ。其山を金華山と改む。古を失ふといふべしとあり

此貢金は。延喜式交易雜物に。陸奥國砂金五十兩といひ。小右記に。長元二年九月。前陸奥孝義志二砂金十兩一といひ。東鑑に。文治二年十月。陸奥國今年貢金四百五十兩といふ物にて。五事略に。其後。後白河の頃まで參らせしなりとあり。後世に傳ふる陸奥國永字小判金（一名秀衡小判）卽此なりと。其始は對馬の貢銀と。大抵同じ。貢賦なりしに。此金のみ諸書に多く載せて。聲價世に高く。人のいひつたへて。異朝までも聞きしにや。東西洋考（形勝名跡條）東奥州産二黄金一處といひ。（物産條）引二僧奝然曰一。東奥州産二黄金一。西別島出二白銀一。以爲二貢賦一といふ（宋史日本傳にも見ゆ）其譯あり。是より七年前。聖武帝天平十五年冬十月辛巳。詔曰。（上略）粤以二天平十五年歲次二癸未一十月十五日上。發二菩薩大願一。奉レ造二盧舍那佛金銅像一軀一。盡二國銅一而鎔レ象。削二大山一以搆レ堂。及二法界一爲二朕知識一。遂使下同蒙二利益一共致中菩提上と云々。同月乙酉に。皇帝近江の紫香樂（シガラキ）宮に御し。右大佛の像を造り奉らむために。始めて寺地を開きたまふ。此時。行基法師弟子を率ゐて。多くの衆生を勸誘せり。同十六年一月壬申に。近江の甲賀寺に。右大佛の像をたて。骨柱出來たるとき。皇帝みづからその繩を引きたまふ。同十七年八月に。其大佛を南都東大寺に移さる。此佛像を鑄る

錢並行。比奸盜遂レ利。私作二濫鑄一。紛二亂公錢一。自レ今以後。私鑄二銀錢一者。其身沒官。行レ濫遂レ利者。加二杖二百一。加レ役常徒。知レ情不レ告者。各與二同罪一

是は新鑄の銀錢を。以前の銀錢に代へて。又新鑄の銅錢を並び行ふに。私鑄の者あり。故に此詔あるなり

同二年三月甲申制。凡交レ關雜レ物。其物價銀錢四文以上。卽用二銀錢一。其價三文以下。皆用二銅錢一

是は銀錢少きに因りて。先其價を貴くし。後是を發して。專に銅錢を行はむが爲なり

同三年九月乙丑。禁二天下銀錢一

是は前年銀錢の價を貴くし。後又是を廢し。今年に至りて禁せむが爲なり。同四年冬十月甲子に。私鑄の者を嚴重に制勅あり。同六年三月壬午に。賣二買田一以レ錢爲レ價の詔あり。同七年九月甲辰の制。不レ得レ擇レ錢の勅あるも。銀錢を重じ。銅錢を行ひ。濫錢を破らむが爲なり

元正天皇養老五年正月丙子。令下天下百姓以二銀錢一。當二銅錢二十五一。以二銀一兩一。當二一百鐵一。行上用レ之

是は銀銅錢の三品。其充用の制を定め給ふ。銀錢一文を以て。銅錢。鐵錢の廿五文に當て。又銀一兩を以て。鐵錢百文に當て。行ひ用ふ事を示し給ふ。鐵錢は。此朝を始とす。當時の銀一兩。諸說あれど詳ならざれば。强解しがたし

同六年二月戊戌。詔市頭交易元來定レ價。中略更量二用レ錢之便宜一。欲レ得二百姓之潤利一。其用二二百錢一。當二一兩銀一。仍買レ物。貴賤價錢多少隨レ時平章。永以爲二恒式一

是は前年銀一兩を一百鐵に當て用ふべき制あれども。鐵の價に高下あり。多少に因りてなれば。市頭にて交易する時は。一兩を二百錢に當て。通用せよとなり。是歲九月庚寅。令下伊賀。伊勢。尾張。近江。越前。丹波。播磨。紀伊等一。始輸中錢調上とあるは。錢の多寡を知らむ爲と見ゆ

聖武天皇天平二年三月丁酉。周防國熊野郡牛島西汀。吉敷郡達理山所レ出銅。試加二冶煉一。並堪レ爲レ用

是は文武の朝に。周芳國獻二銅鑛一とある種類ならむ

同七年閏十一月庚子。更置二鑄錢司一

是は諸國より三貨おひ〳〵出づるより。持統。文

三年の間。國家用ふる所の金貨。悉皆外國貢上の物なり。然るに。對馬島より此和金を貢するに因りて。文武帝五年三月廿一日。大寶と紀元あり。（如是院年代記云。大寶元三月廿一日。改元年號。始於此。是歲對馬島貢金。由是三月廿一日甲午改元大寶）是より以來歷代の年號連綿し。數千載に相續するは。全く是日本金貨の盛德長久の兆としるべし。此貢金は。四年前十二月辛卯に冶（キタハ）しむる金鑛なり。故に是歲八月丁未。先是遣大倭國忍海郡人三田首五瀨於對馬島。冶成黃金。至是とあり。又對馬島及郡司主典已上。進位一階。其出金郡司者二階。獲金人家部宮道授正八位上。幷絁綿布鍬。復其戶終身。百姓三年。又贈右大臣大伴宿禰御行首遣五瀨冶金。因賜大臣子封百戶田四十町とあり。當時金貨を貴重し給ふ事知るべし。金限圖錄に。對馬國高木握小判金（重四匁。津字高木二字銘）載せたり（此貢金を砂金といふ說あり。國史本文前後を考へざるなり）

同三年五月己亥。紀伊國阿提。飯高。牟漏三郡獻銀也

是に據れば。當時紀伊國よりも銀を出だせり

元明天皇和銅元年正月乙未朔乙巳。武藏國秩父郡獻和銅。詔曰云々。（上略）改慶雲五年。而和銅元年爲（トシ）。而御世年號止定賜

是此邦銅貨の始發にて。人皇より第四十三代一千三百六十八年後なり。唐中宗景龍二年に當る。皇后新羅の役より。此朝和銅出づるまでは。五百二十年の間。國家用ふる所の銅貨。悉皆外國貢上の物なり。先是文武の朝に。因幡。周芳二國より銅鑛を獻りし事あれど。熟銅ならず。此朝熟銅を獻るに因りて。慶雲五年正月十一日和銅と改元あり（如是院年代記云。正月十一日改元和銅。自武藏秩父郡貢熟銅故）

同二月甲戌。始置催鑄錢司

是此邦和銅を以て錢を鑄る始にて。文を和同開珎といふ。其後。歷代の鑄錢每に。最初に和同開珎一錢を鑄るは。定例といふ。此錢泉彙に出づ（和銅を和同に作るは。當時省字の法なり）

同五月壬寅。始行銀錢。秋七月丙辰。令近江國鑄銅錢。八月己巳。始行銅錢

是は催鑄錢司を置かれ。新に鑄たる銀錢。銅錢を行はる。故に始めて行ふといふ

同二年正月壬午。詔向者頒銀錢。以代前錢。又銅

一理有りて。一決しがたし
又此歳より人に銀を賜ふが例となりて。九月己巳朔壬申。賜ニ音博士大唐續守言。薩弘恪書博士百濟末士善信。銀人二十兩一。同十二月戊戌朔己亥。賜ニ醫博士務大參德自珍咒禁博士木素丁武沙宅萬首。銀人二十兩一。同六年二月丁酉朔丁未。陰陽博士沙門法藏道基。銀人二十兩とあり
同八年三月甲申朔乙酉。以ニ直廣肆大宅朝臣麻呂。勤大貳臺忌寸八島。黄書連本實等一。拜ニ鑄錢司一
是此邦鑄錢司を置ける始なり。和語連珠集に。持統天皇八年に。鑄錢司の事始めて見ゆ。然れども。此時未本邦に銅無し。異邦より來たる所の銅にて。鑄たるなるべし
續日本紀云。文武天皇二年三月乙丑。因幡國獻ニ銅鑛一。同九月壬午。周芳國獻ニ銅鑛一。同十二月辛卯。令三對馬島ニ冶中金鑛上
是は銅金ともに堀り出でしまゝなり。鑛といふは。生銅。生金の一名にて。鑛銀は本草蒙筌に見ゆ。石州方言に銀のとちといふ。金銀銅ともに。堀り出しのまゝ。銅絲の如く束ねたる形なり。石雜りたるといふ非なり。又銅の蔓。金の蔓といふも非なり（金銀の蔓は。金苗。銀苗といふ。天工開物に見ゆ）是を冶（キタフ）て。竿金。板金となしおき。金貨。銀貨の類を造ると見えたり。今の銅に竿と板とあるも。其遺形ならむ。されども。當時の金貨。銀貨はいかなる形なるや詳ならず
同三年十二月庚子。始置ニ鑄錢司一。以ニ直大肆中臣朝臣意美麻呂ニ爲ニ長官一
是は文武の朝に。銅鑛。金鑛おひ〳〵出づるにより。鑄錢司を置きて鑄させ給ふなり
大寶元年三月戊子。遣ニ大肆凡海宿禰麁于陸奥一。冶レ金
是は陸奥に金出づることを聞き給ひて。其金を冶（キタハ）しむると見ゆ。されども。何れの所に出づるは詳ならず。陸奥は所々より多く金を出だす事。後しるすを見つべし
同三月甲午。對馬島貢レ金。建レ元爲ニ大寶元年一。始依ニ新令一。改制ニ官名位號一（甲午は二十一日なり）
是此邦金貨の始發にて。人皇より第四十二代一千三百六十一年後なり。唐中宗嗣聖十八年に當る。皇后新羅役より。五百十

是時は。金銀二重に獻りし事。後十年十月とおなじ

同十年四月己亥朔辛丑。立二禁式九十二條一。因以詔レ之曰。親王以下至二于庶民一。諸所二服用一。金銀珠玉紫錦繍綾及氈褥冠帶幷種々雜色之類。服用各有レ差

是は金銀富有にして。庶民にいたるまで服用する故に。其禁式を立てたまふなり

同十月丙寅朔乙酉。新羅遣二沙喙一吉飡金忠平大奈末金壹世一。貢レ調。金銀銅鐵錦絹鹿皮細布之類。各有レ數。別獻二天皇皇后太子金銀霞幡皮之類一。各有レ數

是前八年十月に獻ると例おなじ

同十二年四月戊午朔壬申。詔曰。自レ今以後。必用二銅錢一。莫レ用二銀錢一。乙亥。詔曰。用レ銀莫レ止

是は和銀の出でし十年後の事なり。以前顯宗の朝より。引き續きて鑄たりし銀錢なるや。詳ならざれど。四月十五日に銀錢を禁じ。其四日後十八日に通用すべき詔あるは。譯ある事と見ゆ。此年銅錢とあるは。外國貢上の銅を用ひたりしは勿論なれど。何れの年に鑄たりしや詳ならず 和銅の出づる是より廿六年後にて。鑄錢司を置かるゝは。持統帝八年にて。是より十二年後なり

朱鳥元年夏四月庚午朔戊子。新羅進調從二筑紫一貢二上細馬一疋。騾一頭。犬二狗。鏤金器及金銀。霞錦。綾羅。虎豹皮及藥物之類。幷百餘種一。亦智祥健勳等別獻レ物。金銀。錦霞。綾羅。金器。屛風。鞍皮。絹布。藥物之類各六十餘種。別獻二皇后皇太子及諸親王等一之物。各有レ數

是は前八年十月又十年十月に獻ると例おなじ

持統天皇二年二月庚寅朔辛卯。太宰獻二新羅調賦金銀絹布皮銅鐵之類十餘物一。幷別所レ獻佛像。種々彩絹。鳥馬之類。十餘種。及霜林所レ獻。金銀彩色種種珍異之物。幷八十餘物

是は天武の朝獻物と。品種少々異なり

同五年秋七月庚午朔壬申。伊豫國司田中朝臣法麻呂等。獻二宇和郡御馬山白銀三斤八兩鉳一籠一

是に據れば。當時伊豫よりも銀を出だせり。銀に斤兩をいふは。是を始とす

斤兩の名。漢書律暦志に。二十四銖爲レ兩。十六兩爲レ斤といふより。今の清朝に至るまで。彼土の銖兩は。大抵知れたれど。此邦幾兩幾分幾銖と。延喜式に載せたるは。先輩の說多きも。各

からざるなり。故に顯宗の朝に。銀錢を交易して。
國家に通用あり。造佛の頃は。國家に金銀多き事
しるべし。銅も是に準ずるなり

皇極天皇元年二月丁亥朔壬辰。高麗使人泊二難波津一。
丁未。遣二諸大夫於難波郡一。撿二高麗國所一レ貢金銀等
幷其獻物一。使人貢獻既訖而諮云

是卽皇極帝の御代まで。金銀を獻りし事しるべし

孝德天皇大化二年三月癸亥朔甲申詔。無レ藏二金銀銅
鐵一。一以二瓦器一合二古塗車芻靈之義一。同三年。是歲制二
七色一十三階之冠一。（上略）小錦冠以上鈿雜二金銀一爲レ之。
大小青冠之鈿以レ銀爲レ之。大小黑冠之鈿。以レ銅爲レ之

是は二年葬棺の制を陳べたまふ時は。金銀銅鐵の
四貨を禁じ。三年冠制を陳べたまふ時は。金銀銅
の三貨を用ひ。各法度を施したまふ。當時四貨不自
由ならば。何ぞ葬棺に藏めんや。甚富有なる事し
るべし。皇后新羅の役より。此後天武の朝に。和
銀出づるまでは。四百七十六年の間。國家通用す
る所の銀貨。悉皆外國貢上の物としるべし（〇以上推古帝以後載二于國史一者）

天武天皇三年三月庚戌朔丙辰。對馬國司守忍海造大
國言。銀始出二于當國一。卽貢上。由レ是大國授二小錦
下位一。凡銀有二倭國一。初出二于此時一。故悉奉二諸神祇一。
亦同賜二小錦以上大夫等一（丙辰は三月七日）

是此邦銀貨の始發にて。人皇より第四十代一千三
百三十四年後なり。唐高宗上元元年に當る。其堀出
せし山は。三代實錄に。貞觀七年八月十五日癸
亥。太宰府言。對馬島銀穴。在二下縣郡一。自二高山底一
穿二鑿巖一。堀入四十許丈。白晝執レ炬而得レ入とあ
り。其銀を貢上せし文は。朝野群載に。對馬貢銀
記あり。其山に社を建つるは。神名式に對馬島下
縣郡銀山上神社是なり。此貢銀は。白石の五事略
に。天武白鳳三年三月對馬より銀を貢す。是延喜
式に。太宰府より毎年銀八百九十兩づゝ、貢すと見
えしは。對馬より出だせる所なり。此後鳥羽。堀
川の頃まで。對馬より銀出でしと見えたりといへ
り

同八年十月戊申朔甲子。新羅遣二河飡金項那沙飡薩
虆生一朝貢也。調物金。銀。鐵。鼎。錦。布。馬。狗。騾。駱
駝之類。十餘種亦別獻レ物。天皇皇后太子貢二金。銀。
刀。旗之類一。各有レ數

年に當る。されば。三韓の外。漢土より金銅を此邦へ貢し上つる事。亦知りぬべし

按ずるに。三韓より貢つる金銀の量數は詳ならず。その形も詳ならず。魏晉の一兩は。今の二錢三分强半に當れば。八兩は今の十八錢四分强半に當る

顯宗天皇二年冬十月戊午朔癸亥。宴二群臣一。是時天下安平。民無二徭役一。歲比登稔。百姓殷富。稻斛銀錢一文

是此邦。錢貨の見え初めしなり。皇后新羅の役より。此朝に至るまで二百八十七年。其間に鑄錢の事ありしと見ゆ

和漢泉彙に。顯宗の御時より。文武の御宇まで。共に其錢文を載せず。寶曆十一年辛巳十月七日。攝津天王寺村南。平野町杼屋(ハゼ)が田地。字眞寶院と稱する畠中より。無紋の銀錢。凡。百枚許を得て。官に納むと。即是なり。重二文目八分

武烈天皇紀。伏願陛下仰答二靈祇一。弘宣二景命一。光二宅日本一。誕受二銀鄉一

是三韓銀貨を貢上する天皇となり給ふをいふ

繼體天皇六年冬十二月。中略 夫住吉神初以二海表金銀之國。高麗。百濟。新羅。任那等一。授二記胎中譽田天皇一。故大后氣長足姬尊與二大臣武內宿禰一。每レ國初置二官家一。爲二海表之蕃屛一。其來尙矣

是即神功記に見えたることにて。三韓の外。任那よりも年々金銀を貢上せし事知りぬべし。故に二十三年夏四月戊子。任那王己能末多干岐(コノマツタカンキ)來朝して大伴大連金村に啓して曰。夫海表諸蕃。自下胎中天皇置中內官家上。不レ棄二本土一。封二其地一良有レ以也と。合せ看つべし

宣化天皇元年夏五月辛丑朔。詔曰。食者天下之本也。黃金萬貫不レ可レ療レ飢。白玉千箱何能救レ冷。中略 是以海表之國。候二海水一以來賓。望二天雲一而奉レ貢。自二胎中之帝一洎二于朕身一

是は黃金萬貫譬の言なれども。下文胎中之帝に及ぼす時は。上文とおなじく。譽田天皇以來。貢を奉る事をいふ〇以上推古帝以前載二于國史一者

されば。仲哀帝九年冬十月。皇后新羅の役より。推古帝十三年に至るまで。四百六年の間。三韓及漢土任那より貢し上つる所の金銀。其量數測るべ

日本紀云。推古天皇十三年夏四月辛酉朔。天皇詔皇太子大臣及諸王諸臣。共同發誓願。以始造銅繡丈六佛像各一軀。乃命鞍作鳥。爲造佛之工。是時高麗國大興王。聞日本國天皇造佛像。貢上黄金三百兩。同十四年夏四月壬辰。銅繡丈六佛像並造竟是卽光銘とおなじく。其本は百濟國より事起れり。欽明帝紀に。六年秋九月百濟遣中部護德菩提等。使于任那。贈吳財於日本府臣及諸旱岐。各有差。是月。百濟造丈六佛像。製願文曰。蓋聞。造丈六佛功德甚大。今敬造以此功德。願天皇獲勝善之德。天皇所用彌移居國倶蒙福祐。又願普天之下一切衆生皆解脫。故造之矣とあるに因りて。推古帝右の佛像を造りたまふ。然るに此邦に銅金二貨の見え初めしは。其年より遙か後世の事なれば。當時さほどの銅金を用ひられしや。高麗王貢金の餘は。以前より貯へおきしや。彼此と疑ふ者あり。因りて國史を考ふるに。其年より遙か以前より。金。銀。銅の三貨はありしなり。神代の時白銅鏡。八咫鏡は。いかなる銅貨にて造りたまひしかしらず。金銀の二字見え初めしは。神代紀上一書曰。素戔嗚尊曰。韓鄕之島。是有金銀。若使吾兒所御之國不有浮寶者。未是佳也とあり。人皇の御代となりては。仲哀帝紀に。八年秋九月乙亥朔己卯。有神託皇后。而誨曰。中略 愈茲國。而有寶國。譬如美女之睩。有向津國。眼炎之金銀彩色多在其國。是謂栲衾新羅國焉とあり。古事記に。西方有國。金銀爲本。目之炎耀種種珍寶。多在其國といふも。是なり

神功皇后紀云。九年春二月。足仲彥天皇崩。冬十月辛丑。從和珥津發之。便到新羅。中略 仍賫金銀彩色及綾羅縑絹。載于八十艘船。令從官軍。是以新羅王常以八十之調。貢于日本。其是之緣也。於是高麗百濟二國王。中略 自來于營外。叩頭歎曰。從今以後。永稱西蕃。不絕朝貢。故因以定內官家。是所謂之三韓也

是其年より三國の王。年々金銀を此邦へ貢し上つる事知りぬべし。又魏志に。明帝景初二年十二月。詔書報倭王。中略 又特賜金八兩。五尺刀二口。銅鏡百枚とあり。景初二年は。皇后三十八年に當る。又齊王正始元年。奉詔書印綬。詣倭國賜金帛。錦罽。刀鏡。采物とあり。正始元年は。皇后四十

地獄の火車が迎ひに來りしといふ。後に其戸を引き裂き。山中の樹枝。又は岩頭などに掛け置く事あり。火車と名付くるは。佛者よりいひ出だしたる事にて。法事讃に。無量刀林當レ上而下。火車爐炭十八苦事。一時來迎といひ。因果經に。今身作二後母一。謏二尅前母兒一者。死墜二火車地獄中一など。愚俗を驚畏せしむるなり。慈鎭の拾玉集に

火の車今日は我門やりすぎて
　あはれいづ地に巡り行くらむ

其火車に捉まれたるといふは。和漢とも多くある事にて。是は魍魎といふ獸の所爲なり。罔兩とも。方良とも書く。酉陽雜俎に。周禮方相氏歐二罔象一。好食二亡者肝一。而畏二虎與レ栢。墓上樹レ栢。路口致二石虎一爲レ此也とあり。此獸葬送の時。間々出で、災をなす。故に漢土にては聖人の時より。方相氏といふものありて。熊皮をかぶり。目四つある形に作り。大喪の時は。柩に先立ちて墓所に至り。壙に入りて戈を以て。四隅をうち。此獸を毆る事あり。是を險道神といふ。事物紀原に見えたり。此邦にても。親王一品は方相轜車を導く事。喪葬令に見ゆ。今俗葬送に龍頭を先きに立つるも。其遺意なり。時珍の綱目に。述異記を引きて。秦の時陳倉の人。獵して此獸を得たり。形は若レ彘若レ羊とあり。古より。愚俗の誤りて火車と名くるゆゑ。地獄の火車と思ふ。笑ふべし

魍魎（クハシヤ）

淮南子に載せたる罔兩は。大和本草に。俗いふ河太郎といふ獸なりと。是は本草綱目。溪鬼蟲附錄に出でたる水虎にて。通雅に。水唐。水蘆の名あり。形猴のごとく。圓く鼻長く赤毛を戴く。項に皿あり。全體龜の種類にて。水に居て。人を捕り食ふ者なり

飛鳥寺銘并三貨由來

大和國高市郡飛鳥寺尖銘云。推古天皇十三年歲次二乙丑一。四月八日戊辰。以二銅貳萬三千貳百斤金七百五十九兩一。敬造二釋迦丈六像銅繡二軀幷狹侍等一

是國史に載せたる文に能く符合せり

權貴の側に陪侍の女多く居て。雜說奇談を聞く每に。其君に言上し。十に八九は。女と共に忌み避くる事になりぬ。聖人不レ語二怪力亂神一。又有識の人は。雜說方忌は決して信ぜず。其譯は。漢土にて大歲を忌み避くる事。此邦中神金神を避くると同じ（大歲は。三才圖會に見ゆ）然るに。酉陽雜俎に。百姓王豐常於二大歲上一堀レ坑といひ。宋仁宗は。嘉祐年中東華門を建つる時に。東家西。乃西家東。西家東乃乃東家西。大歲果何在といひ。董表儀は。土を堀りて肉塊を得たるを。人大歲といふを聞きて。河に投げて何のさはりもなき事。幽怪錄に載せたり。有識の人はかくあるべき事と思はる（鬼門金神の事。本朝俚諺にも委しく論ぜり）

庭忌草

芭蕉を庭忌草と名付くるは。桔梗をきちかふといふとおなじく。字音にては。歌によみにくきによりて。名付たるにや。庭忌といふは。佛書に此身如二芭蕉一と云ふ。其葉脆く。風に破れやすき故に。庭に植うる事を忌むとみえたり。西國にては。神社佛閣より外は植ゑず。然るに。此草に花咲く時は。優曇華の咲きたるとて。大に貴ぶも亦をかし。優曇華は。般泥洹經に。閻浮提內有二尊樹生一。名二優曇鉢一。有レ實無レ花。優曇華は三千年に一度花咲く。輪王出世の瑞にて。一名靈瑞花ともいふ。人壽八萬歲の時。輪王四州を巡る。其時海水半現するに及び。此花咲くなどいふにより。人皆貴賞すと見ゆ。東鑑に。鎌倉淨密法師が庵に。優曇華の咲きたるとて。人多く群聚せり。二位禪尼。左近將監を遣はして見せしむるに。芭蕉の花なり。元來此草花の著き兼ぬるものなり。花を生ずれば。直に枯るゝなり。一草一花にて用舍甚しきは何事ぞや。藏玉集に

吹く風の草や破らむ庭忌草
　花は軒端の燈の影

火車

西國雲州薩州の邊。又は東國にも間々ある事にて。葬送のとき。俄に大風雨ありて。往來人を吹き倒す程の烈しき時。葬棺を吹き上げ吹き飛ばす事あり。其時。守護の僧珠數を投げかくれば異事なし。若左なきときは。葬棺を吹き飛ばし。其尸を失ふ事あり。是を火車に捉まれたるとて。大に恐れ恥づる事なり。愚俗の言傳に。其人生涯に惡事をおほくせし罪により。

經に。天一立二中央一。爲二十二將一。定二吉凶一とあり。陰陽書に。天一遊行方角。百事犯二向之一大凶といふ。暦家に。此神四方に五日づゝ。四維に六日づゝ巡り行く。凡べて四十四日。下土を巡り。日を重ねて長くあるにより。一長神ともいふ。此後上に上り給ふ間。癸巳を始とし。戊申を終とし。凡。十六日を天一天上と名付け。八方へ行きても忌む事なしといふ。通書大全に。鷄神遊方毎日各有二避忌一。但癸巳日。到二戊申日一。鷄神在レ天。无二避忌一者といふも。是神にて。百鬼經に。天女化身ともいへり。此神に向ふを方違。方塞といひ。忌み避くるなり。北山抄に。方忌といふも。此事にて。十訓抄に。後頼朝臣曰。白河院淀に御方違の行幸ありと見ゆ。又此神を太白神ともいふ。袋草紙に。明日有二還御一は。當二太白之方一と書きたり。元來は。陰陽家雜書より出でたる事にて。物語の類に多く載せたるを。遂には陰陽家の職となりて。後世に傳はる事になりぬ。後撰集に

逢ふ事の方ふたがりて君こずは
思ふ心の違ふばかりぞ

金葉抄に

忌むこそは一夜巡りの神ときけ
など逢ふ事の方違ふらむ

又。金神を忌み避くるも。保元。平治以前よりと見えて。百練抄云。後白河天皇保元二年十二月廿二日。諸卿定下申諸道勘ヰ中二金神一方忌可レ被レ棄哉否事上。件方角。永長。定後。眞人依二申出一。三四代所二忌來一也。自レ今以後。不レ可二忌避一之由。宣下有レ之。仁安二年二月廿三日爲二御方違一。行二幸鳥羽殿一。修二理大膳職一之間。爲レ避二金神方一と。此金神は。山海經。萬斛明珠。三才圖會などに載せて。西方蓐收。金神左耳。有二青蛇一。乘二兩龍一而目有レ毛。虎爪執レ鉞とあり。是も元來陰陽家雜説にて。正史になき事なり。然るを。昔より忌みさくるは。高位

金神

王思義三才圖會所載

べし。然るに。欽明帝の御代より佛道行はれ。尊き神の御名佛に混ずる事多し。能く分別すべき事なり。和名抄に醫を久須之と訓ずるは。藥師の義にて。光明皇后佛足跡の歌に。くすりしとよめり。常陸國大洗磯前。酒列磯前の二神は。本は藥師明神なるを。菩薩の號を付けたるは。佛氏の書より俗稱に從ひしなり。大寶積經に。譬如下藥師持二藥囊一。自身病不上レ能二療治一といふ文あり。是より藥師は。醫家の祭るべき佛と心得て。藥師菩薩。藥師如來など稱し。又佛氏の徒より藥師を牽强し。慈覺大師經文を修むるとき。一佛一神來て守護せり。一佛は藥師如來。一神は江文明神などいふ妄說を信じ。正月八日藥師結緣日とて。藥師と神農とを祭る者なり。其國に生れながら醫道祖神をしらず。愚昧文盲の至。可レ笑可レ恥の甚しきなり。又醫者藥師を以て姓とするも。佛氏より出づるにあらず。日本紀推古帝三十一年。醫惠日福因等並從二智洗一來之。惠日は。德來五世の孫。德來は百濟の人。雄略帝御字投化す舒明帝二年秋八月癸巳朔丁酉。以二大仁藥師惠日一遣二於大唐一。續日本紀孝謙帝天平二年三月。內藥司佐兼出雲國員外掾正六位上難波藥師奈良等。中略昔泊瀨朝倉朝廷。詔二百濟國一訪二求才人一。爰以二德來一貢二進聖朝一。德來五世孫惠日。小治田朝廷御世被レ遣二大唐一。學二得醫術一。因號二藥師一。遂以爲レ姓といへる。是等の藥師も。佛氏の藥師と相混じ。藥師菩薩の俗稱となりて。此邦醫祖二神を鎭坐する所に。悉く藥師佛を安置するは。桓武帝以來の事なり。尊神と胡佛と相混ずる事。尤分別すべき事なり。予先年日本名醫圖一幅を作り。上二神を始め。國史に載する所。悉く抄擧し。旁近世に至るまでの醫名を多く載せたり。藤原愛親卿より。文章及褒詩を賜はる。其詩に。誰甘二髡髮一學二軒岐一。爾挈二靑囊一不レ踏レ斯。表二揭國家千古美一。能知二其本一是良醫と。こは予が浪華にありし弱冠の頃なりき

中神金神

此邦。昔より方違。方塞。方忌などいひて。中神金神を避くる事あり。物語の類に多く載せたり。源氏帚木の巻に。中神内よりはふさがりてと書きたるは。內裏より左大臣の御所辰巳の方にある故なり。中神は倭名抄に。天一神。なかゞみと訓ぜり。天一神は地星の靈とて。中央に立つ。ゆゑに中神といふ。金匱

たまひし藥方にやあらむ。先レ是に。皇極帝四年。蘇我入鹿を誅伐せられしとき。蘇我の臣蝦夷等誅に臨みて。天皇の記。國紀。珍寶を悉く燒き棄てたり。此時療レ病之方。禁厭之法なども。皆燒失せしと覺ゆ。實に長大息すべき事なり。大己貴命一神七名に分つ。京下賀茂本殿前七社是なり。（中二座。一言社。西二座一言社。東三座。三言社）又五條天神（松原通西洞院。俗天使社と云ふ）少彥名命相殿大己貴命を祭る。毎年節分の夜。朮（ヲケラ）の勝餅（シヤウノモチ）を禁庭へ獻り。朮の神事あり。（俗に小の餅と書くは誤。シヤウハ勝の字音なり）四季物語。追儺の夜は。祭の餅つぐみの鳥など燒き奉り。御餉の御まはりに奉る。又世諺問答。康富記にも載せたり

朮は白朮なり。天武紀招魂にも。白朮煎を用ひ給ふ事見えたり。ヲケラといふ鬼嫌（オニキラフ）の略語と詹詹言に載せたれど。ヲの假名違へり。ヲケは祈禱の義。ヲケラウケラ音通。八雲御抄に「うけらが花の色に出でめやの歌を引きて。註し給へりらは卽枚（ヒラ）なり。餅を枚ともいふ。靈異記に見ゆ

此朮餅は疫疾を除く藥品にて。今人每歲除夕に。祇園社にをけら參りといひ。神前燈明の火を燃し歸るもおなじ（除夕に。朮を燒く事。月令廣義に見ゆ）其本は。醫道始祖二神の御藥方なれば。闇齋詩にも永言少彥名。經濟起二蒼生一。除夕世間靜。神風餅朮馨とも作れり。尤尊崇し。敬祀すべき事なり。又姓氏錄に。山城國神別神宮部造。葛城猪石岡天下神天破命之後也。六世孫吉足日命。磯城瑞籬宮御宇。天下有レ災。因遣二吉足日命一。令レ齋二祭大物主神一。災異卽止。天皇詔曰。消二天下災一。可レ爲二宮能賣神一。仍賜二姓宮能賣公一。然後庚午年籍註二神宮部造一也とある。宮能賣神は。卽ち大己貴命にて。天下の災異を消し給ひ。百姓福を得るも。日本紀。古語拾遺と能く符合して藥の御神なればなり。延喜式。造酒司坐神六座。大宮賣神社四座も。此御神にて。拾芥抄に宮咩祭文ありて。宮咩笠間廣前といふ。其祭日は。伊呂波字類抄に。宮咩奠正月十二月初午日。院宮諸家祭レ之。笠間神社越前國坂井郡。實方家集に

天にます笠間の神のなかりせば
　ふりにし中をいかで問はまし

古語拾遺に。令三大宮賣神侍二於御前一といひ。八神殿に祭る大宮賣も。皆おなじく此御神なり。此邦の人醫祖を祀らば。此二神より外祀るべき御神なきとしる

獻。二殿之祭。并以㆓春冬㆒仲月上甲日㆒。彼土先醫を祭るに。上祀㆓三皇㆒は。人道開基の聖人なれば。神農に限らざる事しるべし。此邦にも人道開基の神人ましくて。醫者の祭るべき事なるに。其國に生れながら。其神を祭らず。淮南子などの寓言に据り。神農一人を祭るは。其道を失ふといふべし。此邦の神人醫祖といふは。日本紀神代上一書第六云。大夫己貴命與㆓少彥名命㆒。戮㆑力一㆑心。經㆓營天下㆒。復爲㆓顯見蒼生及畜産㆒。則定㆓其療㆑病之方㆒。又爲㆑攘㆓鳥獸昆虫之災異㆒則。定㆓其禁厭之法㆒。是以百姓至㆑今咸蒙㆓恩賴㆒（古語拾遺も同じ）是なり。精要記に療㆑病之方。則藥物醫體也。禁厭之法。則呪祝方術也とありて。此二神日本醫道開基の始祖なり。其民を濟ひたまふ御靈の。今世まで顯然として著き事。仰ぎ尊むべし。文德實錄云。齊衡三年十二月戊戌。（戊戌は廿九日）常陸國上言。鹿島大洗礒前有㆓神新降㆒。初郡民有㆓煮㆑海爲㆑鹽者㆒。夜半望㆑海。光耀屬㆑天。明日有㆓兩恠石㆒。見㆑在㆓水次㆒。高各尺許。體㆓於神造㆒。非㆓人間石㆒。鹽翁私異㆑之去。後一日亦有㆓廿餘小石㆒。在㆓向石左右㆒。似㆑若㆓侍坐㆒。彩色非㆑常。或形㆓沙門㆒。唯無㆓耳目㆒。時神憑㆑人云。我是大奈母知。少奈比古奈命也。昔造㆓此國㆒訖去。往㆓東海㆒。今爲㆑濟㆑民更亦來歸。これ卽ち二神の出現し。民を濟ひ給はむとて造りたまふ二石なり。神名帳に。常陸國鹿島郡大洗礒前藥師菩薩明神社。那賀郡酒列礒前藥師菩薩神社。幷名神（文德實錄。天安元年冬十月十五日己卯條も同じ）といふ是なり。（藥師菩薩の名下に見ゆ）其外にも二神の石像を造り給ひし事。處々にあり。能登國羽咋郡大穴持像石神社。能登郡宿奈彥神像石神社。幷に延喜式に見えたり。（三代實錄に。貞觀二年六月九日戊子。能登國大穴持神。宿那彥神像石神㆓前。並列㆓於官社㆒とあり）萬葉集第三。

生石村主眞人

大汝少彥名の座しけむ
しづの石室は幾代經ぬらむ

播州石寶殿も。今は二神を祭りて。生石子大明神。高御座大明神と號す。此事は神代より傳へ來りし明證にて。日本紀神功皇后十三年。酒樂の歌にも。區之能伽彌等虛豫珥伊麻輸伊波多々須。周玖那彌伽未能等豫保枳とよめり。區之能伽彌は藥神なり（奇の神とするは非なり。スリの反ス）日本後紀に。大同三年五月甲申。衛門佐安倍眞貞。侍醫出雲廣貞等。撰㆓大同類聚㆒百卷㆒奉進。其中に數多神方と稱するものあり。神代二神の傳へ

道生長の日にして。君上を臣下より祝賀し奉る日なり。然るを庶人の家に。祝賀宴樂するは。無禮僭擬の甚しき。尤愚昧文盲といふべし。又是日に神農を祭るは。いかなる所謂あるや。淮南子などの寓言を信じ誤り祭ると見えたり。三皇氏は人道開基の聖人なれば。漢土にても大醫院に祭る事はあれど。神農一人を祭る例なし。又冬至に醫祖を祭る例もあらず。淮南子脩務訓云。於レ是神農乃始敎三民播二種五穀一。相下土地宜燥濕肥墝高下上。嘗下百草之滋味水泉之甘苦上。令三民知二所二避就一。當二此之時一。一時而遇二七十毒一。此事は高氏小史。司馬貞が補史記。程氏遺書にも見えて。淮南王の寓言なるよし。王安道が溯洄集にも最初に論を立て、大に詈れり○帝王世紀云。伏羲嘗二味百藥一○孔叢子云。伏羲始嘗二草木一。一日而遇二七十二毒一○武林前王劒池金環傳云。伏羲神農嘗二百草一○雪窓私記云。古傳黃帝嘗二百草一非。黃帝師二藥獸一。而知レ醫○神仙通鑑云。帝使三岐伯一嘗中味草木與生上。醫疾經方本草素問之書咸出レ焉。是等の書を信ずる時は。伏羲。神農。黃帝。三皇氏。岐伯もおなじく草を嘗めたるに。神農に限り醫者の祖とし祭るも。淮南子の寓言を誤り信ずと見ゆ。漢土の醫祖を祭るは。決して冬至の日にあらず。說郛中の潜居錄に。古人以二八月朔一爲二天醫節一。祭二黃帝岐伯一

風俗通に。八月一日是六神日。以二露水一調二朱砂一。蘸二小指一宜レ點レ灸。去二百病一。又云。楚俗以二八月八日一。以二朱墨一點二小兒額一。爲二天灸一。以厭二病疫一。

此等皆醫にあづかる事なり

又。大醫院に祭るは。春二月。冬十一月。幷に上甲日を用ふるなり。大明會典云。嘉靖十五年建二聖濟殿于文華殿後一。以祀二先醫一。遣二太醫院正官行レ禮。二十一年又建二景惠殿于太醫院一。上祀二三皇一。配以二句芒。祝融。風后。力牧一而附二歷代醫師於兩廡一。凡二十八人

東廡醫師十四位。分設二三壇一。僦貸季　天師岐伯　伯高　鬼臾區　兪跗　少俞　少師桐君　太乙雷公　馬師皇　伊尹　神應王扁鵲　倉公淳于意　張機

西廡醫師十四位華佗王叔和　皇甫謐　抱朴子葛洪　巢元方　直人孫子邈　藥王韋慈藏　啓玄子王氷錢乙　朱肱　李果　劉完素　張元素　朱彥脩

歲遣二禮部堂上官一員一行レ禮。太醫院堂上官二員分

とするにたらず。すべて是のみならず。天より異物を降らすは。みな遠方より風に隨ひて來るものとしるべし。天地の大なる歲月の久しき。此後又いかなる異物の降るべきもはかられず。若。又たとひ異物の降りたるも。國の盛衰。歲の豐凶に當るべき必徵なければ。古より和漢に例多きを考へて。更に奇異とするにたらざるなり。愚昧鄙俗の附說あるを曉さむために。爰に錄するのみ

纖工

予先年。至りて纖工の物を見る。稻穀一粒の內に。神體を刻み。兩脇に狛犬を安置す。顯微鏡にて照し見るに。神の威體儼然たり。虞初新志に。王叔達奇工人也。作二八分舟一。刻曰。天啓壬戌秋日虞山王毅叔達甫刻とあり。其後筆のすさみを讀みしに。奥州會津の近邑柳津といふ所の圓藏寺より。京師へ贈り來せしは。長一寸許なる榧の實の中へ。白檀の木にて。七福神の像を彫刻せり。每像一體の大さ二三分。各儼然として。面目口鼻皆具はるといへり。和漢とも纖工に達人ありしと見ゆ

神農祭并醫祖神

此邦の醫者。每年冬至の日に當れば。神農祭と稱し。赤豆餅。赤豆飯又は酒肴盛饌の具を調へ。親戚。交友を集め。賀宴する事常例となれり。是は歲時雜記に。至日以二赤小豆一煮レ粥。合門食レ之。可レ免レ疫といひ。又風土記に。天正日南黃鐘踐レ長。是日始芽動。爲二饘粥一以養レ幼。俗尙以二赤豆一爲レ糜。所二以象一レ色也とあるに据ると見ゆ。されども是日に限り神農にあづかる所謂なし。又冬至は。庶人の賀宴すべき日にあらず。馬總が通曆に。地皇氏以二十一月一。爲二冬至一とありて。漢雜事に。冬至陽生。君子道長。故賀といふ。類書纂要に。冬至陽氣起。君道長。故賀といひ。宋書に。魏晉冬至日。受二萬國及百僚稱賀一。因小會。其儀亞二于歲朝一とあり。此邦にては齊明天皇五年十一月一日。朝有二冬至之會一。（日本紀）類聚國史（卷七十四）に聖武帝神龜二年十一月己丑。御二大安殿一。受二冬至賀辭一。此爲レ始より。陽成帝元慶三年十一月丙辰朔冬至まで。數十條を載せたり。其中に。延曆三年十一月戊戌朔。詔曰。朔旦冬至者。是歷代之希遇。王者之休祥也。朕不德得レ値二於今一とあり。玉燭寶典に。冬至陰陽百物之始。有二履長之慶一といふも。君

桂子也と。又後宋の慈雲式公が月桂詩序に。天聖丁卯八月十五夜。月有ニ濃華一。雲無ニ纖迹一。天降ニ靈實一云々。識者曰。此月中桂子。好事者播ニ種林下一。一種卽活といひ。又佛氏の說には。禪林備覽に。天竺山八月十五日夜。常有ニ桂子落一といへり。楊升庵の如き卓識の人も。丹鉛總錄に。杭州靈隱寺月中墜ニ桂子一。事涉ニ怪異一。余按ニ本草圖經ニ云。江東諸處多于ニ衢路間一。拾ニ得桂子一。破レ之辛香。古老相傳。是月中下也と載せたり。最初隋唐の小說より事起りて。其寓言なるをしらず。月桂の名數千載に傳ふる故事となれり。初唐の比は。比邦より遣唐使多く往來し。追々彼土に留學する者も多く。彼土の說を聞き。晩唐樂天の白氏文集など。專に用ふるゆゑ。彼土にいふ故事は。多く取り用ひて歌にもよめり。月の桂といふは萬葉集第四。秦陽原王が娘子に贈るとて

　目には見て手には取られぬ月中の
　　桂のごとき妹をいかにせん

是を證歌とし。後世月の桂とよみたる歌。多く詞林採葉に載せたり。鴨長明秀逸の歌といふにも

　宵の間の月の桂の薄紅葉
　　散るとしもなき初秋の空

月人壯(ツキヒトヲトコ)。又は桂男(カツラヲトコ)などよむも。桂下有ニ一人一といふを故事とせり。また天子御卽位の時。月像の旗。徑三尺。上に玉兎を圖して。中央に桂を用ふるも。此

月桂　一名天竺桂

葉ノ形肉桂ニ似テ三縱道葉ノ末マデ通ラズ實ノ大サ櫧(カシ)子ノ如ク其色黑シ二三粒著キテ下垂ス熟シテ皮上ニ白粉ヲ生ズ

藥舖ニテ松浦桂心ト云フ是ナリ又眞ノ根皮ト云フモ此ノ根皮ナリ

月桂なるべきに。昔より誤りて賀茂の葵に配する桂を用ひ來れり。月の桂(カツラ)といふ意ならば。月桂を用ふるこそ本意ならめ。此月桂諸國に多く喬木あり。外の木實と違ひ。其實間々遠方へ吹き送る事多し。奇

に武后垂拱三年七月に。廣州に金を雨す事見え。五行志に。垂拱四年三月雨二桂子於台州一。旬餘乃止といひ。德宗貞元四年陳留といふ所に。樹木を雨す事を載せたり。時珍綱目に。宋仁宗天聖乙卯八月十五夜。杭州靈隱寺桂子降。其繁如レ雨。其大如レ豆。其圓如レ珠といひ。仁宗慶暦元年に。京師に藥を雨す事。神宗元豐三年六月に。饒州に雨二木子一數畝。狀類二山芋子一。味辛而香と載せたり。元史に。天より米を雨す事見え。群芳譜に。弘治乙卯六月。黟歙雨レ豆。隆慶六年四月陝西寧衞天降二黑豆一。偏地人食レ之氣閉といふ。此類も亦擧げて數へがたし。されば。和漢とも天より異物を降らす事。古より數度あり。謝肇淛が文海披沙。又は物理小識に。異物の降る事多く載せたり。時珍曰。泛觀二群書一。有下雨二塵沙土石一。雨二金銀鉛錢一。雨二草木花實一。雨二毛血魚肉一之類上。甚衆。凡べて皆奇とするにたらず。其中に雨レ豆如レ豆といひ。降二黑豆一などいふは。多く皆月桂の實なり。月桂一名天竺桂ともいふ。本草に載せたり。俗にだもといふ。西國にてたぶといふ。諸國方言多し和泉。土佐アサダノ木。○因幡アサカイ○長門コガノキ○伊豫タマクサ○阿波ムヅ○上總シホタマ○伊豆クロタマ○ヤブ肉桂○油ダモ○クスダモ○タツノ木○ツヾノ木○佛タラシ○クスメンドウ大葉。小葉の二種。赤實。黑實の二種あり。此實を窄りて臘となし。諸國に貨賣し。或は藥用にも入れ。又此木を線香の具にも用ふるなり。此實風に隨ひて。遠方へ吹き來たし。天より豆の降るごとく。分散する故に。月桂の名を付けたり。和漢とも雨レ豆如レ豆といふは。此實なり。月桂と名付くるは時珍の説に。吳剛伐二月桂一之説。起二于隋唐小説一。月桂落レ子之説。起二武后之時一といへり。其本は酉陽雜俎に。月中有レ桂高五百丈。下有二一人一。常斧斫レ之。樹創隨合。乃仙人吳剛也といふ。小説により。此實の天より降り下るに。牽强して。遂に月桂の名を作り出だせり。武后の時。駱賓王が詩に。桂子月中落と作れり。其より以後。月桂の故事となりて。白樂天も偃蹇月中桂。結レ根依二青天一。天風繞レ月起。吹レ子下二人間一と作れり。故に後人其説を附演して。種々月桂の説を設く。霏雪錄に。宋天聖中秋月甚朗。降二靈實於靈隱一。狀若二珠璣一。翟璨奪レ目。有二異人一識レ之。因曰。此月中

後堀河帝寛喜二年十月十六日。奥州に石を降らす。後深草帝建長元年三月十六日。常陸國に菱を降らす。龜山帝文永三年二月二日。泥を降らす。後花園帝文安元年三月四日豆を降らす

中原康富記に。是日洛中之男女。皆申云。自二虚空一大豆小豆降と云々。雨降時分交下。其體如二大豆之形一。但慥非二大豆一歟。下女等拾取持來之間。見レ之所詮如二米之實一歟。何樣表二豐年嘉瑞一者哉。珍重日本昔不レ知二時代一。大麥自二空中一降下。又飯降事在レ之由。見二類聚國史一云々。漢家例。周室王屋之上。有二火化烏一。此烏牟麥銜來と云々。后稷之時五穀之種自レ空降下と云々。慥可二引勘一レ之。近江國飯降山云々。名所在レ之。飯降之故歟。見二類聚國史一。本朝大麥降事。淸外史之所レ令二語給一也。聖武天皇天平十三年六月戊寅。日夜京中條々飯降之由。見二水鏡一といふ

後土御門帝文明九年七月北陸道に。紅雪を降らす事一寸餘。同延德元年三月廿日。北陸道に泥雨を降らす。後陽成帝慶長元年天下一統土を降らす。是歲閏七月十二日地震。月を踰えてやまず。諸國に毛を降らす事。長四五寸。明正帝寛永八年十月。諸國に灰を降らす。後光明帝慶安三年六月四日。毛を降らす事。長四五寸、靈元帝寛文十年三月廿九日。大豆のごとき物を降らす。東山帝元祿五年七月。伊賀國島原村に五穀を降らす。同十三年三月伯耆國に。麥。赤小豆を降らす。寶永二年にも大豆のごとき物を降らす。中御門帝正德二年十一月。東國一統に白沙を降らす。（俗に舎利降りたるといふは誤なり）同享保十九年十二月五日。大豆の如き物を降らす。桃園帝寶曆六年四月朔日夜。長崎に黃豆を降らす。後櫻町帝明和元年五月初旬。京大坂に灰を降らす。同六年九月七日八日九日三ヶ日の間。京。大津に白毛を降らす。同八年にも豆のごとき物を降らす。此類擧げて數へがたし

漢土にては。大禹之世。天雨レ金三日と。通鑑に見え。漢書に。元帝永光二年八月に。天より草を雨すといひ。博物志に。孝元竟寧元年に。南陽縣に穀を雨す事を載せたり。又漢惠帝。晉惠帝の時。倶に天より血を雨す事。通鑑に見えたり。また漢書に。哀帝建平年中に。山陽の湖陵に血を雨す事。三日といひ。平帝元始三年正月に。草をふらす事を載せたり。唐書

とつになりたる。いかにわびしからむといふ。是冠の薄く柔かなるなり。徒然草に。此頃の冠は。むかしより遙に高くなりたるなりしとぞ。或人仰せられし。古代の冠桶を持ちたる人は。はたをつぎて。今用ふるなりといふ。是冠の巾子。後世高くなりたるをいふ。今公の冠服を見て。古代溫順寬厚の風しるべし。又公の印を高芙蓉が手錄せしあり。甚古雅なれど。當時かゝる印を彫刻なりしやしらず。併せ載せて後考をまつ

天降二異物一 并月桂

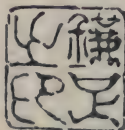
天より異物を降す事。和漢とも古より數度あり。奇とするにたらず。和邦にては。天武帝七年冬十月甲申朔。有レ物如レ綿。零二於難波一。長五六尺。廣七八寸則。隨レ風以飄二于松原及葦原一。時人曰二甘露一也。日本紀○按ずるに。甘露の降る事類聚國史祥瑞部に。數多見えたれど。此朝如レ綿といひ。長五六尺。廣七八寸といふは。異物なり　聖武帝天平十四年正月廿三日己巳。陸奧國言。部下黑川郡以北十一部雨二赤雪一平地二寸 續日本紀 仁明帝承和五年七月十八日癸酉。有レ物如レ粉。從レ天散零。逢レ雨不レ銷。或降或止。同九月廿九日甲申。從二七月一至二今月一。河內。參河。遠江。駿河。伊豆。甲斐。武藏。上總。美濃。飛驒。信濃。越前。加賀。越中。播磨。紀伊等十六國一々相續言。有レ物如レ灰。從レ天而雨。累日不レ止。恒雖レ似二怪異一。無レ有二損害一 續日本後紀 文德帝齊衡三年八月八日戊寅。安房國言。天雨二黑灰一。從レ風而來。委レ地三四許分 文德實錄 陽成帝元慶八年六月二十六日。秋田城雷雨晦冥。雨二石鏃二十三枚一。七月二日飽波郡海濱雨レ石似レ鏃。其鋒皆向レ南。陰陽寮占云。彼國之憂應レ在二兵賊一。先レ是。國忌。御齋會布施依レ式充二用官家功德分封物一

三代實錄○按ずるに。雨二石鏃一といひ。雨レ石似レ鏃といふは。天より降りたるにはあらず。是は雷斧石といふ物にて。雷雨の後。山中に間々多く生ずるものなり。本草に載する霹靂碪は。卽此なり。月令廣義に。雷公石といひ。玄中記に。石䃜ともいふ。俗に狐の斧。または天狗の斧ともいふ。越後山中。其外奧州津輕。美濃金生山などに尤多し。雷雨の後多く出づるなり

國の正史に載せたるは。大抵右のごとくにして。又寶鑑七年。仁和元年に石を降らす事。東鑑に載せたり。又圓融帝天延元年に。大和國に水精を降らす。

誅し。其族蘇我蝦夷等を夷滅し給ふ。勳功によりて。孝徳帝御宇。以㆓中臣鎌子連㆒始爲㆓内臣㆒よし。職原鈔に載せたり（内臣は左右大臣の上にありて。令外の官なり。此官に任じたまふにより。鎌子を改めて。鎌足とし給ひしや。孝徳帝五年紀に。鎌足連とあり）其後。天智帝八年十月十五日庚申に。東宮大海皇子を内臣の家に遣はして。内大臣とし。大職冠を授け。藤原朝臣の姓をたまふ。大職冠は正一位の名にして。織部の冠に繡を縁にたち入れたる。尤極官の服なり。此冠を戴く人は。衣服令に據れば深紫を袍とするなり。（按ずるに。此事如是院年代記には。天智帝四年乙丑八月とす）藤原は地名（藤原の系圖云大和國鎌足之所㆑住也）同十六日辛酉。御壽五十六歳にて薨じたまひぬ。同國十市郡倉橋山多武峯に葬り奉る

公の墓はもと攝津國島下郡安威村にあり。公の庶子釋定慧なる者。白雉四年遣唐使に従ひて入唐し。其喪に遭はず。歸朝の日改めて。多武峯に葬る。十市郡妙樂寺護國院といふ。定慧の建立なり。公の祠廟は。正堂東にあり。元亨釋書に。僧定慧率㆓其從屬㆒。上㆓阿威山㆒。取㆓遺體㆒改葬㆓於此㆒。建㆓祠廟墓上㆒。又起㆓十三層浮屠㆒。以薦㆑公即此。天安二年十二月獻㆓年終荷前之幣㆒

或一故家に。公の御像寫眞の圖あり。縉紳執柄家より出でたりといふ。威體服度拜看すべし。此圖は孝德帝三年に。七色十三階の冠制を定めたまひし時の服なり。古の圭冠は柔かにして。あげ緒にて括りたるゆゑ。甚雅古にして。燕尾(エビ)もたれ下りたるなり。巾子も今のごとく高くはあらじ。枕草紙に（わびしげに見ゆる物の條）雨のいたくふる日に。ひさげ馬にのりて前驅したる人の。かうぶりもひしげ。うへのきぬ下がさねもひ

大職冠鎌足公眞像

鎌足印

せたりけり。夫木集に

此度は見で返しけり手馴つゝ
　引き墨たがふ文字の上書

疫　神

疫疾を神と崇め祭る事は。和漢ともにあり。此邦は古より殊に甚しく。續日本紀に光仁帝寶龜四年秋七月癸未。祭二疫神於諸國一。同六年八月癸未。祭二疫神於五畿内一。同八年二月庚戌遣レ使祭二疫神於五畿内一。同九年三月癸酉。又於二畿内諸界一。祭二疫神一。是より以來引き續きて祭れり。紫野今宮神社は。皆人の知る所にて。朝野群載に。正暦五年六月安二置疫神祠船岡山一。寛治中祭刀禰請二和歌於藤原長能一。其辭云

今よりは荒振心ましますな
　花の都に社さだめつ

白妙の豐幣をとり持ちて
　いはひぞ初むる紫の野に

二首。後拾遺集に見ゆ。漢土にては湧幢小品卷十九符堅死二于新平佛寺一。見二夢寺主磨訶一曰。改爲二吾宮一則已。不則盡殺二居者一。果死。疫相繼。因共改レ寺爲レ廟。遂無二復疾疫一。正月二日民競祀以二大牢一。號曰二符家神一是なり。諸神記に。今宮神社は。長保三年五月九日。被レ遷二座疫神紫野一。京師衆庶行二御靈會一。被レ遷二此所一。依二靈夢之告一也世諺問答も。長保三年五月九日とありされば。今の紫野に遷すは。符堅疫神とおなじく夢の告なり。又愛宕郡祇園の社も。備後風土記と。簠簋內傳との寓言により。蘇レ民將レ來とする祝文なる事をしらず。中臣祓抄に。貞觀十八年。疫神の祟を六月七日十四日神泉苑に送り。祇園會となるといひ。今にては。專。牛頭天皇と稱して。今宮も一體の神とせり。牛頭天皇と稱するは。いづれの比より始まりしや。應仁。延久の宣命には。祇園天神とあるよし。松岡氏いへり如是院年代記に。正暦五年建二祇園大神堂一とあり

大職冠像并印

大職冠鎌足公の御事は。世人の遍く知る所にして。姓氏錄に兒屋命二十三世孫小德冠御食子之長子。御母は扶桑略記に大伴夫人と申し奉る。一に橘夫人ともいふ。公御母の胎中に在す事十二月。御聲外に聞ゆといふ。推古帝二十三年甲戌八月廿五日。和州高市郡に誕生し給ふ。初は中臣鎌子連といふ。皇極帝四年夏六月。中大兄皇子と相議りて。逆臣蘇我入鹿を

前にあり。漢書夏侯勝曰。取二青紫一如レ拾二地芥一。楊雄曰。紆レ青拖レ紫。是其證なりと。しかるに。漢の制。百官服色を考ふるに。青紫を服する官なし。當時青紫をいふは。皆是貴官燕居の服にて。正服にあらず

此色次第に行はるにより。弘仁元年九月廿五日壬戌制。大臣身帶二一位一者。聽レ著二中紫一。今宜三改著二深紫一。又諸王二位已下五位已上及諸臣二位三位者。依二令條一著二淺紫一。今改著二中紫一と。日本後紀に見え。又延喜彈正式にも見えたり。萬葉集に。紫の名高浦(タカウラ)とつゞけ多くよみたるは。其色高貴なるを以てなり。花鳥餘情序にも。東琴を諸の器の上におき。紫を萬の色の外に貴ぶと書き。枕草紙にすべて紫なるは。何も〳〵もめでたしと書き。和歌六帖に

紫はなべて位の色なれば
濃も薄も上著なりけり

されども。此色は婦人。又は僧道などには似合しき色なれど。朝廷命令を執り行ふ威權の服には。甚柔弱にて。聖人命服とし給はざるも宜なり。王楙が燕翼貽謀錄に。中興以後行都貴賤皆衣二黝紫一。以二赤紫一爲二御愛一。紫無下敢以爲二袍衫一者上。獨婦人以爲二衫綬一爾とあり。又僧の紫袍を著る事。漢土にては代宗實錄に。大曆三年僧惠崇內賜二紫袈裟一記以爲下僧賜二紫衣一之始上とあり。唐會要には。開元二十年波斯王遣二僧及烈一至レ唐。勅賜二紫袈裟一ともあり。又祖庭事苑僧史略などには。則天の朝に僧法朗等大雲經を譯し。符命の言を陳ぶるに因りて。紫迦沙龜袋を賜ふを始とすともいへり。此邦にて紫衣を賜はるは。玄昉。道鏡に始まれり。此の色の起を考ふるに。和漢とも婦人御愛の色より流例となりて。高位權貴の服となるも奇ならずや

封　字

今人書狀を封ずるに。〆〻等を引くは。封字の傍をとりて封ずといふ意なり。いづれの頃より墨を引く事にはなりしや。江家次第正月十一日縣召除目下に。今夜加波加利大臣卷二大間一。次結二固成文一。結レ之上引レ墨。已上入二一筥一進レ之とあり。又北山抄に。封字代近代急引レ墨とも見ゆ。枕草紙(すさまじき物の條に)文のむすびたるもたて文もいときたなげに。文字なし。ふくだめて上に引きたりつる墨さへ消えたるを。おこ

といふは。其色朱にまがふゆゑなり。今の中緋の本紅にまがふがごとし。古の紫は。和漢とも染草ちがふ故に。朱とまがふなり。趙彥衞が雲麓漫抄に。孟子云。惡ニ紫奪レ朱也。蓋朱與レ紫相亂久矣。仁宗晚年。京師染レ紫變ニ其色一。而加レ重。先染而作レ青。徐以ニ紫草一加染。謂ニ之油紫一。自後只以ニ重色一爲ニ紫色一。愈久人愈珍レ之。與レ朱大不ニ相類一。淳熙中北方染レ紫。極鮮明。中國亦效レ之。目爲ニ北紫一。蓋不ニ先染一レ青。而改レ緋爲レ脚。用ニ紫草一極少。其實復ニ古之紫色一。而誠可レ奪レ朱。中略則知古之朱。赤汁染レ之。紫與レ朱實相去不レ多。今之淺紫。甚似レ之矣といへり。古の紫は下染に青色を用ひず。最初に緋色に染め。其上に紫根汁を少しかけたれば。朱の色とまがひやすし。朱を奪ふといふも宜ならずや。今の紫は後世の事にて。彼土にては油紫といふ。此邦も古は茜草汁にて染めたる故に。朱にまがひやすし。茜指紫とつゞけたるも。其色似たるを以てなり。元來。紅。紫。紺。緅等の色は間色にて。聖人は命服とし給はざるに。隋唐の頃より和漢とも。高位貴官の命服となるも奇ならずや。隋禮儀志に。大業元年煬帝詔ニ牛洪宇文愷等一。創造ニ章服差等一。五品以上通著ニ紫袍一。六品已下兼ニ用緋綠一。胥吏以レ青。庶人以レ白。屠商以レ皂。士卒以レ黃といふ。是漢土にて紫色を用ふる始なり。二儀實錄に。隋煬帝詔ニ牛洪等一。三四品通著レ紫。五品朱。六品已下綠といひ。杜氏通典に。以ニ紫緋綠青一爲ニ命服一。昉ニ於隋帝巡遊之時一。而其制遂定ニ於唐一といふも是なり。唐書馬周が傳に。三品服紫。四五品朱。六七品綠。八九品靑といへば。其差別馬周より始まる。此邦も推古帝十一年。始行ニ冠位一當隋文帝仁壽三年たまふ。其大德。小德は今の四位にて。紫冠の始なり。皇極帝紀に。私授ニ紫冠於子入鹿一とあるは。階位を僭する事を書れり。孝德帝三年に。七色一十三階の冠制を定めたまふに。深紫を第一とし。次に直緋。次に紺とあるは。漢土の制に倣ひたまふと見ゆ。二條裝束抄に。異朝には。紫を朝服に用ひず。婦女の服に近きを以て。褻服にもせずといふ。隋煬帝より。一品紫。次緋。次は綠を用ふるよし見ゆといひ。野宮定基卿抄に。李唐之制以レ紫爲レ貴。本朝衣服令。專据ニ唐開元令一立レ制とあるも是なり

一說に。漢土にて紫色を貴ぶは。隋唐より遙か以

漢人定法なき事なり。緯書の類はとらず。王俊川曰。緯書多以二三字一爲レ名。（中略）皆異端邪術之流。假二託聖經一。以售二邪誣之説一。其書今雖レ不レ存。而類書引用尚多。終惑二後學一。（見二郡[illegible]代序一）王者の大義法則を取るの書にあらず。改レ元立レ號は。國家第一の大義にて。劉炫曰。唯王者然後改レ元立レ號。（見二左傳疏一）漢人紀元の法に倣はゞ。緯書佛氏等異端冥妄の説取るに足らざるなり。文字を用ふるも。一字より四字まで。古例法則あり。方日升曰。案二紀元一云。以二一字一紀レ元者。始二於漢文帝後元年景帝中元年一。以二二字一紀レ元者。始二於漢武帝建元元年一。以二三字一紀レ元者。始二於梁武帝中大通元年一。以二四字一紀レ元者。始二於漢哀帝大初元將元年一。今詳二立レ號紀一レ元。當レ始二於文景一。非二武帝一也。（見二韻會擧要小補一）此邦異年號に。兄弟和。倭黄縄。白鳳雉の三字あり。又天平感寶。天平寶字。天平神護。神護景雲の四字あり。いづれも漢土の例に倣ひたるにや。文字の美惡。義理などは。勿論吟味講究して。古人の論辨したるを考索し。紀元あるべき事と覺ゆ。漢土にて改元の誤を論じたるは。明の燧和仲が千百年眼（卷十二）に。國家以二改元一爲レ重。然歷世無レ窮。美名有レ限。遂有二前後相複之嫌一。（中略）又當三詳稽二國運一。如下宋改二治平一而説者謂火德不レ宜レ用レ水。則我朝土德不レ宜レ用レ水犯レ之者有中耗二損元氣一之嫌上。又當レ審二國姓一。如下周高祖姓宇文改二元宣政一。當時以爲文亡日上。是也。又當レ避二忌國號一。如下唐禧宗改二元廣明一。而當時以爲唐去二其口一而著二黄家日月一。後果爲二黄巣一所上レ簒是也。大率離合之讖。深徴難レ逃。最宜二熟察一。桓玄改二元大亨一。議者以爲。一人二月了。果二月乘輿反二正于江陵一。梁豫章王揀二武陵王紀一。皆改二元天正一。説者謂。二年一年止といへり。其他。齊後主緯は龍化と改元し。隋煬帝は大業と改元し。未齊顯祖は天保と改元し。宋徽宗は宣和と改元し。欽宗は靖康と改元し。各皆其徴を載せたり。又正の字はたゞしき字義なれど。一止を合せて正とすれば。正始。正隆。正平。正曆。正法の類。皆古徴にあらずといへり。正の字も用ひどころによるべし。此邦改元ある毎に。難陳といふ事あるは。專らに此等の事を是非せむが爲なるべし

紫色

今の紫は古の紫にあらず。論語と孟子に。紫之奪レ朱

烟袋の類を出ださず。主人火刀を以て火をうち。黄籤(ツケ)にて喫すといへり。當時は最初異國傳來の法を失ひ。人々烟器を所持し。獻酬の禮なく。不遜鄙野の態いふばかりなし。これも太平の化に乘じ。人氣高上各好事に耽り。貴賤一統奇をこのむ風となり。異國蠻夷の品物。國益ならざるも次第に流行し。遂には制止なりがたきに。識者の尤思慮あるべき事なり。凡べて品物のみならず。聖人諸子百家の道といふとも。其理を講究し。吾國治道の具となすこそ本意ならめ。ある一故家に。蠻人土製の烟管あり。圖の如し

革命紀元

此邦辛酉甲子の歳運に當るときは。必紀元すといふ事。兼良公の三革説にも見えたれど。何れの御世よりいひ出だしゝことにか。日本紀に。神武帝辛酉年春正月。天皇卽二帝位一。故に辛酉の年。必紀元すといふは。其理當れり。甲子に必改元すといふは。いかなる義にか。詩緯推度災に。戊午革運。辛酉革命。甲子革政といふに據るにや。されども。年號定まりて。遙か以後にいひ出だし、事ならむ。大化以前の異年號も。始終定かならざれど。欽明帝の明要と。推古帝の願轉。齊明帝の白鳳とのみ。辛酉に紀元ありしと見ゆ。甲子の紀元は。未見えず。年程定紀の大寶も。辛丑の年に紀元ありて。辛酉は改元なし。聖武帝の辛酉甲子とは。改元ありて。桓武帝の甲子と。仁明帝の辛酉は。改元なし。醍醐帝の辛酉は。改元ありて。甲子はなし。村上帝辛酉應和。甲子康保より。後柏原帝の文龜永正まで。五百四十三年のあいだ。辛酉。甲子ともに皆改元ありて。正親町帝の辛酉。甲子はともに改元なし。後水尾帝の甲子は。改元ありて。辛酉はなし。靈元帝の天和。貞享より當今にいたるまで。改元あり。然らば辛酉。甲子は。必。改元すといふ定法とも見えず。帝王編年紀云。延喜二十三年昌泰四年七月十五日改元。依二辛酉革命老人星一也。孔雀經御修法記云。土御門天皇建仁元年二月廿一日壬寅。修二孔雀經法于閑院一。禳二辛酉厄一(建仁元年は辛酉)此等の記を考ふるに。神武帝御卽位の辛酉を。必定法則とし。紀元すとも見えず。老人星。辛酉厄などいふは。緯書佛氏等のいふ說にて。人君體レ元。以居レ正。元年を稱する大法にあらず。勿論辛酉甲子の改元は。

作るもの過怠として。牢舍たるべし。其所の代官過料錢五貫文。村中總百姓より。一人にて過料錢百文宛出だすべし

されども。竊に吸ふ者あり。罪人多きとて程なく宥免あり。最初は幾世流とて。小き竹の節を留め。火皿の大さに作り。筆の軸に似たる物を横につけ。其烟を吸ひしなり。又紙に卷きて呑みたる事もありしと見えて。羅山文集に。佗波古草名。採レ之乾暴。剉二其葉一而貼二于紙一。捲レ之吸二其烟一といへり。其後黄銅の幾世流出來たる時も。自身には所持せず。家家にこしらへおき。人の來る時取り出だし。請取渡の禮あり。年々流行するに隨ひ。次第に增長し。今は其法の廢るのみか。勿體なき白銀黄銅の國貨を以て。烟器を作り。或は錦繡綾羅斑毛皮革の文物を以て。草具を製し。其弊年々いふばかりなし。然るに此物元來毒草にして。人に益なし。性辛烈にして。無レ病に津を生ず。津は一身の液なり。潤養せずして反りて枯竭するときは。損あるべし。畢竟は少々鬱を開く能あるのみ（本草備要に。飽則易レ饑。饑則飽と載せたれども。煙草の饑渴を救ひし事を見ず）黄蘗の隱元禪師烟草を惡む偈に。一管狠烟呑復吐。恰如二炎口鬼神身一。當年鹿苑有二此草一。不レ說二五辛一說二六辛一といへり。漢人是を惡む事。諸本草に多く見え（大抵上に出だしたる別名を載する本草は。皆惡めり。篛王吉が醫意商は。殊に甚しく惡む事を載す）明の崇禎時。嚴禁レ之不レ止よし。松谿縣志に載せたり。此邦も。次第に流行するより。多くの田畑を費し。金銀銅鐵は勿論。錦繡綾羅斑毛皮革の類。國家の貨物を消鑠する事廣大なり。蠻人最初傳へしは。土にて烟管を長く作り。客來の時取り出だし。一服每に吸口を折りて。又他の人に渡す故に。請取渡の禮あり。漢人も大抵右のごとく禮式あり。八僊燕式記に。（寶曆辛巳刻。清人吳成充が長崎にて山西金右衛を船中に饗せし筆記）叙席烟筒に烟草をつぎて出だす。管の長凡四尺許。管の長きを馳走とす。芬盤（タバコボン）。火盤（ヒイレ）。

蠻人土製烟管圖

石居寫

金絲醺 姚旅露書　金絲薰 香祖筆記　淡肉果 物理小識 書隱叢說 松谿縣志

淡巴菰 香祖筆記 姚旅露書 書隱叢說　淡芭姑 漳州府志　淡把姑 物理小識 祕傳花鏡

相思草 本草備要 本草洞詮 本草會纂 錦囊秘錄 書隱叢說　餐香茹柏 怡曝堂集

漢土の書に載せたるを見るに。大抵皆いふ。此草呂宋（ルスム）國に生ずるなりと。然るに劉廷璣が在國雜志に。閩外人相傳。高麗國其妃死。王哭レ之慟。夢妃告レ國塚生二一草一。名曰二煙草一。采レ之焙乾。以レ火燃レ之。而吸二其煙一。則可レ止レ悲。亦忘憂之類也。王如レ言采得遂傳二其種一といふ。此說奇なり。袁棟が書隱叢說に。相思草（一名略之）好レ之可二以破レ寂助一レ氣。無二大利一亦無二大害一。前世未レ聞焉。相傳。起二於明末一。今已十室而九無レ論二朝野雅俗良賤一。且波二及閨閣一矣。用レ之者若刻不レ能レ忘。即間窓弄レ墨。與二夫工作及勤劬者一同飲二食之一。不二須臾離一レ焉。豈習俗使レ然耶。抑天道使レ然耶といふ。此說雅なり

此邦へ傳來の事も。諸說數多あり。いづれを正據とし難し。本朝食鑑云。煙草素自二南蠻國一來。移二種于本邦一。不レ過二六七十年一。中略 初番舶商夫卷レ葉作レ筩。如二筆簗狀一。吹レ火夾二廣處一。吸二狹處一。則煙滿レ口。欲レ呑二其煙一。暫住二喉中一。而吹二出口及鼻孔一。令下二胸膈一以通利上。令下レ氣以舒暢上。而得二一時之快一。故長崎商客爭效者如レ流。人人吸レ之。不レ經二年月一。而九州同翫レ之。後蠻國傳二吸管一。此號二幾世流一

世事談及其蜩老人が翁草に。慶長十年始めて南蠻國より種を傳へて。長崎櫻の馬場に植う。其後山州花山に作り。花山多葉粉（タバコ）といふ。其より和州吉野に作り。相續きて丹波に植ゑ。次第に諸國へ廣まりしといへり。奧州四家合考に。頃年夷狄の傳來とて。烟草といふ物。諸人好みて是を吸ふ。つひに是年奧州の地にて流布すといふ。是年といふは。慶長十年を指すなり。慶長日記十二年の記に。此比タバコといふ物時行。南蠻國より渡ると記せり

後水尾帝御製

藻鹽燒く海人ならねどもけふり草
なみよる人のしほとこそなれ

あまりに諸人の好むにより。元和三年六月廿八日。天下一統に制禁あり

武德編年に。元和二年十月烟草益制禁畠に彼草を

儀は。歌序の中に多き事なりといへり。又後奈良院享祿元年十一月十六日。古今御傳授逍遙院申さるゝと。御湯殿の記に見えたり。又外に一種日向國小戸窟の邊より出だすをがたまの木あり。是は通雅に見えたる楊桐(サカキ)の種類にて。神代に用ひたるかしはとは。大に異なるやうに覺ゆ。先年日向より予が門に來りし書生。一枝を贈る。寫眞しれけり

四百餘州

日本より漢土をさして。四百餘州といふ事。古今の人のよくしる所にて。明の萬曆十九年。大閤秀吉公彼土へ答ふる書に。一超直入二大明國一。易二吾朝風俗於四百餘州一。施二帝都政化于億萬斯年一者。在二方寸中一（松下見林が異稱日本傳に見ゆ）されども。漢土の書に。四百餘州といふ事。多く見あたらず。何れの頃よりいひ傳ふるにや

圖書編（第八十三）臣博考二前古一。若二光武中興一。監二前世官冗之弊一。裁二省天下四百州縣官一。止二七千五百餘員一。額類極少者也

便明全書云。光武中興乃併二省郡國十縣一。道侯國四百餘所。呂東萊紫微詩話云。李芳州贈二汝州大守一詩。安得吾皇四百州。皆如二此邦二千石一

水滸傳首卷云。一條捍棒等身齊打。四百軍州都是姓趙。此等の書に據りていひ傳ふるにや。東見記に。千歳寶掌和尙の詩を引きて。行盡支那四百州。此中偏稱道人遊ともいへど。彼土は四百餘州にわかつ事。歷代の正史にいはざるところなり。

烟草

烟草の事は。近年刊行なりし蔫錄に委しく載せたれば。諸人のよくしる所なり。別名多く諸書に見えたり。此邦傳來の事も。數多說あり。覺えたるを左にしるす

烟草（本草備要 本草彙言 本草洞詮 食物本草 本經逢原 錦囊祕錄 物理小識 匏庵雜記 在國雜志 食物本草會纂）　烟葉（博學彙言 肇慶府志 格物志）

烟花（祕傳花鏡）　氣烟（醫意商）　烟酒（本草紀言 聞見巵言 奇園奇所奇）

建烟（行厨集）　噉烟（願體集）　魂烟（本草會纂）

蔫（行厨集）　芸（景岳全書）　酒草（博學彙言）　仙草（怡曝堂集）

葢露（食物本草 姚旅露書 本草會纂）　露酒（聞見巵言）　余糖（姚旅露書）　髮絲（同上）

返魂烟（祕傳花鏡 本草會纂）　返魂章（本草彙言 書隱叢說）　南靈草（芝峯類說）

綠南草（同上）　金絲草（物理小識）　金絲烟（芝峯類說 秘傳化鏡）

會和字抄に委しく見ゆ 坂井兼政が著はせる三貫柏巻二に。御綱柏。又三葉柏。又三角柏。俗に御祭葉。又俗に葉盛葉。木は桐に似て枝多し。莖赤くして又芽赤し。故に赤芽柏ともいふ。藻鹽草に。伊勢の御裳川の岸に生ふる柏なり。是をとりて神供をもそなへ。又占をもするなり

占をする事。是も神名帳秘書に出で丶。年の豊凶をしるよし。夫木集の歌祭主輔親の歌。禰宜氏良。寂阿小侍從。神祇伯資茂俊賴などの詠。諸書に多く載せたれども。是にあづからざれば載せず

古事記に。大后爲レ將二豊樂一而於レ採二御綱柏一。幸二行木國一といひ。應神記に聞二看豊明一之日。於二髮長比賣一令レ握二大御酒柏一とあるも。皆此柏にて。承和大嘗會悠紀方歌に「蓑山に繁(シヽ)に生ひたる玉柏。豊の明に逢ふがたのしきとよめるもれなじ。本草綱目喬木類に載せたる梓是なり。此木冬は葉落ちて。春新葉を生ず。大三四寸。形三尖にして。細鋸齒あり。嫩葉は全く赤くして蓼に似たり。長じて青色に變ず。故に赤芽柏の名あり。夏の頃枝の末毎に花を發く。黄白色叢生して傘を張る。花後小實を結ぶ。大さ南天燭子のごとく。軟刺あり。初青く後茶褐色にして枯る。其實熟すれば。四つに發けて。中の子椒目のごとく色黒し。西國にては。今も此葉を採りて。御祭葉と名づけ。神供を盛るなり。されども。此をがたまの木は。古今傳授といふ事になりて。種々の説あり。一

玉柏 御祭葉

一種ヲガタマノ木 日向國小戸岩屋ニ産スル者

決せず。一説には門松の下に立つる木をがたまの木といふもあり。又岡靈(ヲカダマ)の木といふもあり。定家卿の説に。鳥柴をいふともあり。貞德自筆の和歌寶樹には。宗祇の切紙を難じて。三箇ならで古今集の奥

等は似よりたる說にて。招は古事記に。遠岐日本紀に招禱(ヲキ)とよみて。をがみなり。因りて考ふるに。をがたまの木は。をがみたまの木なり。天武紀に。招魂みたまふりとよめり。神を祭る時。御魂をがむ木なり。日本紀に設齋二字。又齋字をがみとよめり。齋(ヲガ)むとき用ふる木は。玉柏(タマカシハ)なり。日本紀竟宴の歌に

玉柏をがたまの木の鏡葉に
神のひもろぎそなへつるかな

此歌をがたまの明證にて。延喜天慶の頃まで傳へ來りし事と見ゆ。此邦上古は。凡べて飲饌の類皆柏葉(カシハ)を以て器とす。柏をかしはと訓ずるは。堅葉の義にあらず。食舖葉(ケシキハ)の省言なり。萬葉集第二

家にあれは笥に盛る飯を草枕
旅にしあれば椎の葉にもる

柏葉のみならず。凡べて木葉をかしはといふ。仁德紀分注に。葉此云二箇始婆一とあり。鏡葉(ヅミハ)は神代紀岩窟章の故事をとれり。柏葉にひもろぎを盛りて。神を祝ひをがむなり

萬葉第十一に

神並にひもろぎたて、齋へども
人の心は守りあへぬも

同十二に

はふり等がいはふ三諸の十寸鏡(マス)
かけてぞしのぶ見る人なしに

此玉柏の木。卽ち神の御魂を祭りをがむ木なり。顯昭曰。祭レ神時以二柏葉一。爲二葉盤一盛二飯菜一。按ずるに。今人酒肴を臺に盛るに。青き木葉などを鋪くも。神代よりの遺風なり 其柏葉を後世葉守の神といふは。盛と守と同訓なる故なり。大和物語に

柏木に葉守神のましけるを
しらでぞ折りし祟りなさるな

此歌。淸正集にも載せたり。後撰集には。上句ならの葉の葉守の神とあり

新古今に。藤原基俊

玉柏しげりにけりな五月雨に
葉守の神のしめはふるまで

枕草紙 木といへる部 柏木いとをかし。葉守の神のますらむとかしこしと書けり。此事漢土にも聞ゆると見えて。北史倭國傳に。俗無二盤俎一。藉以二槲葉(ヒラヤツ)一。槲葉はかしの葉なり 又此柏葉より事起りて。神武紀の葉盤八枚。仁德紀の御綱葉(ミツナカシハ)。持統紀の柏手(カシハデ)及び拍二八開手(ヤビラ)一。打二天枚手(ヒラノ)一。大嘗會柏殿も皆く此より出づるなり。大嘗會柏殿は。兼良公の大嘗

命下二文人一賦上詩。花宴之節始レ此焉。伊勢物語に。業平

世の中に絶えて櫻のなかりせば
春の心はのどけからまし

奥儀抄に。貫之の歌を引きて

櫻より增さる花なき花なれば
あだし草木は物ならなくに

拾遺集に

日本に咲ける櫻の花見れば
よその國にも有らじとぞおもふ

又。後冷泉帝天喜四年。櫻花の宴。新殿成就せし時。記を作りて上りし事。清輔袋草紙に載せたり。本より櫻は此邦第一の花にて。漢土にも賞美せり。義楚六帖に。日本國都城南五百餘里。金峯山頂上有二金剛藏王菩薩第一靈異一。山有二松檜名花軟草一といふ。金峯山は神名式に見えたる大和國吉野郡金峯神社にて。（今は金精明神といふ）名花は。今の吉野櫻なり。宋景濂が櫻詩に。賞レ櫻日本盛二於唐一。如レ被三牡丹兼二海棠一。恐是趙昌所レ難レ畫。春風總起雪吹レ香と作れり。趙昌所レ難レ畫といふは。枕草紙に繪に書きて劣る物といふにおなじ。神代木の花櫻より王仁が難波津の詠に入り。歷代帝王の花宴を開き。詩歌墨客の賞美するところ。實に日本第一の木の花なる事しるべし

ヲガ玉木

古今集物名に出でたる。をがたまの木は。古今傳授にて。往古より秘說とせり。傳授に御賀(オガタマ)玉木と唱へ來れり。それには譯のある事なり。をがたまの木は榊なりといふより。御賀玉と書き傳へり。是は度會社家の據とする神名張秘書に。輿玉(オキタマ)社无二寶殿一。以二賢木一爲二神殿一也といひ。對馬の藤齋延が說に。諸神本懷といふ書を引きて。八神殿不レ安二御體一。唯用二賢木一也といふにより。御賀玉輿玉とおなじ假名に用ひ來れり。輿玉社は。伊勢にて猿田彥太神を祭るといへど。社壇のみにて社はなし。二見浦立石の邊に輿玉石といふもあり。されどもをがたま御賀(オガタマ)玉の假名相違へり。御は大。御など略して於と書くときは。御の假名にて。をがたまと書くときは。御の假字にあらず。故に御賀玉輿玉より牽强して。榊なりといふも妄說なり。一說にをがたまは招魂(ヲキタマ)の義にて。伊勢神宮の禰宜の寶物ををがまといふ。（キタの反カ）此

殿左近の櫻も。本は梅樹にて。桓武帝遷都の時植ゑたまひしに。承和年中に枯れたるより。改めて櫻樹を植ゑたまふ事。東齋隨筆に見えたり。又葛野郡梅宮四座も。橘諸兄公を大若子とし。佐爲卿を小若子とし。三千夫人を酒解神とし。牟漏女王を酒解子とす。皆美努王の御子なる事。公事根元に載せたり。承和年中に祭る事。三代實錄に見えて。因りて古今集の細注も。梅花に決しがたけれど。梅花を賞美せむとて。梅なるべしと書きたるなり。元來。梅は此邦山野自然生の樹なければ。田道間守が橘を絶域より採り來りしごとく。外國より來りし物と見ゆ。彼細注より。木花を梅に決するゆゑ。八雲御抄にも往昔花とのみ稱するは梅なり。後世花とのみ稱するは櫻なりと載せたまひ。光廣卿百椿園序にも。凡日本に花といふ櫻になむ。それすら中比の事にして。昔は梅をぞ申したんなると書かれしは。彼細注よりその誤を次第に承け來れり。又木花を梅に牽强せむとて。宋の山谷が水仙詩を引きて。山礬是弟梅是兄といふを證とする者あり。王仁がよみたるは。應神帝崩御の後。東宮を互に讓りて。位に卽き給はで。三年になりにければといへば。西晉の懷帝永嘉末年の比なり。八百餘年後の山谷が詩を引くは何事ぞや。梅は熟實(ウミ)の義にて。初は花を賞せず。一說にうめは梅の唐音ともいひ。萬葉に烏梅(ウメ)と書きたるは。字音なり（萬葉集に。たゞ一所牟女と書きたるあり。今はうめと書かず。皆むめと書く）漢土にても梅花を貴ぶは。自二戰國一始と。瀛奎律髓に見えたり。梅を木母といふは。湖海新聞に見え。好文木といふは。晉の起居注に見え。末世になりて次第に花を賞する事になりぬ。此邦は最初は花を賞せず。實を以て名付け。末世にむかひ。次第に花を賞するなり。櫻は此邦山野自然生の樹にて。木花開耶の轉音なり。（サクヤ サクラ）一說に咲簇(サキムラガル)の訓ともいふ。（キムの反ク）最初花を名付けて。賞美せり。開耶木花より始まりて。履仲帝三年磐余の稚櫻宮に櫻花落二于御盞一たる事見え。允恭帝八年井傍櫻華を御歌に詠じ給ひ。其後。平城帝櫻花の御製あり。凌雲集に

昔在二幽岩下一。光華照二四方一。忽逢二攀折客一。含レ笑亘二三陽一。送レ氣時多少垂レ陰枝。短長如何此一物。擅レ美九春場

類聚國史に。弘仁三年二月。幸二神泉苑一。覽二花樹一

報國にはあらず。盡忠報國なり。通鑑に文天祥殺さる、時年四十七。其衣裳の中に贊あり。孔曰成レ仁。孟曰取レ義。惟其義盡所二以仁至一。讀二聖賢書一所レ學何事。而今而後庶幾無レ愧といふ三十二字を記せり。此兩人忠義確實。其志相同じ。後世の人を感激せしむるも。宜ならずや

木花櫻

木花は。古今集序細注よりして。千載以來梅花の名と成れり。されども。其起りを考索するに。梅花にあらず。櫻花なり。木花開耶姫五字は。神代紀下一書第二に。妾是大山祇神之子。名神吾田鹿葦津姫。亦名木花開耶姫とあるを權輿とす。（又木華ともあり）木花は櫻樹にて。鎭座傳記に。伊勢朝熊神社以二櫻樹一。爲二木花開耶姫靈一。（サクラ。サクヤ音通ず見二延經之注一）此朝熊社。櫻宮ともいふ。西行の歌あり

神名秘書。苔虫神社も。櫻大刀自の神體形石に坐せり。苔生ひたるをいへり。思圓上人文永十年記に。小朝熊宮坤の方隅に聳えたる巖ありて。其上に櫻樹あり。高三尺許。此樹往古以來枯れず。これ櫻大刀自命の神體なりとあり是なり

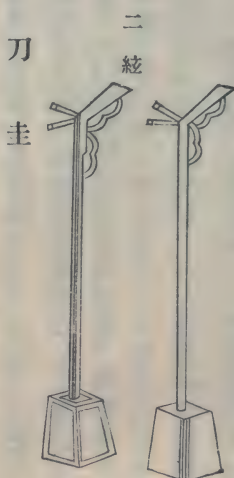
此外にも櫻樹を祭りて。木花開耶姫とするは。駿河の富士淺間もおなじ。一宮紀に見えたり。神名式に。甲斐國山梨郡金櫻神社。在二金峯山一。三代實錄に。貞觀七年十二月廿日丁卯。令下二甲斐國一於二山梨郡一。致中祭淺間明神上とあるも。皆伊勢朝明郡布自神社。櫻神社と同じく。一體一神なり。此櫻樹木花開耶姫を王仁はよみたるなり。故に萬葉集第二十に

櫻花今盛りなり難波の海
おしてる宮にきこしめすなへ

是は王仁が難波津に開耶木花の歌をふくみてよみたるなり。然るを。古今集序注に。この花は梅の花をいふなるべしと書きたるにより。和歌者流今にいたるまで。木花は梅花と傳へ來れり。古今集序細注を。貫之の自序。自注と心得て。千載以來の取違なり。彼序細注は。後人の加筆なる事。平維章が和學辨にもいひたれど。何れの世。何人の加筆なるや知れがたし。彼注者も。木花は必定梅花とも決しがたき故に。この花は梅の花をいふなるべしと書けり。必定梅花に決したらば。この花は梅花なりと書くべし。此以前より大内にて梅花を賞美し給ふと見えて。南

紘をならべ出だせり

穆王見王母圖　錢穀

二紘

刀圭

醫者の用ふる藥匙を刀圭といふ事。和漢とも詩文章に書く人多し。白樂天が挽茶の詩に。湯添二勺水一煎二魚眼一。末下刀圭攪二麯塵一と作り。蘇東坡が句に。促レ膝問二道要一。遂蒙分二刀圭一といひ。元の林坤が誠齋雜記に。出二篋中刀圭藥一滲レ之。悉化爲レ水と書きたれど。其名義しれざれしに。王士禎が池北偶談(巻二)刀圭字。常用レ之而未レ有二確義一。碧里雜存云。在二京師一買得二古錯刀三枚一。形似二今之剃刀一。其上一圈如二圭璧之形一。中一孔即貫索之處。蓋服食家舉レ刀取レ藥。僅滿二其上之圭一。故謂二之圭一。言二其少一耳。泉布錯刀。皆古錢名といへり。されば。彼土にても刀圭の名義しれがたしと見ゆ。碧里雜存は。明の海鹽の董穀が著なり。其外に飮刀圭といふあり。是は藥匙にあらす。道書入藥鏡に見ゆ

岳飛四字

宋の岳飛が赤心報國の四字を背に黥にせし事。人みな傳へいひて感激する所なり。山崎闇齋の高弟淺見重次郎(綱齋)は此四字を自佩ぶる所の刀の脛(ハバキ)巾金に書き付けたり。予がしる人その刀を所持せり

人物志などに。鐔に彫り付くるといふは非なり。四尺有餘の長劍。其脛巾金に書き付けたり。地は赤銅半面に赤心半面に報國。行書にて字の大三分許。黑字なり

此四字は。煎燈新話に出でたりといへど劉氏鴻書(巻二十)岳飛下に。檜遣レ使捕レ飛。父子證二張憲事一。初命二何鑄一鞫レ之。飛裂レ裳以レ背示レ鑄。有二盡忠報國四大字一。深入二膚理一(中略)於是飛以レ衆證。坐死。時年三十九とあり。又萬暦三十七年正月十五日。原任巡按直隷監察御史臣胡時化著。孝經列傳六卷あり。岳飛忠孝部に。嘗自涅二其背一。爲二盡忠報國四字一。深入二膚理一。張浚謂レ人曰。岳飛忠孝人也と載せたり。さらば赤心

武官人未署置。軍中以次第呼太子秦王。爲太郎次郎〔二郎〕〔次郎〕晉書杜軫傳。號蜀有二郎神祠云。○事物紀原。元豐時國城西民立灌口二郎神祠云。又云。會要所謂水次子郎君神也　〔三郎〕唐書郎餘令傳。帝語稱三郎。○五代會要。後唐長興四年七月。封泰山三郎爲威雄大將軍。○宋朝會要。廟在兗州泰山下。即泰山神三郎也○聞見錄。三郎者文正公且也。○因樹屋書影。邑有戚三郎與婦王篤伉儷

〔四郎〕南史王訓傳。謂門人羅智國曰。四郎眉目疎朗。舉動和韻○柳敬禮傳。故襄陽。有柳四郎歌〔五郎〕隋唐嘉話。張易之昌宗初入朝。官位尙畢諂附者乃呼爲五郎六郎。自後因以成俗○唐書宋璟傳。呼易之五郎昌宗六郎。○夢溪筆談。有杜生者。不知其名。邑人謂之杜五郎〔六郎〕同上○唐楊再思傳。謂昌宗曰。人言六郎似蓮花。正謂蓮花似六郎爾〔七郎〕書苑。王子敬出戲。見北館新泥堊壁白淨。取帚沾泥汁。書方丈二字。觀者如市。義之見歎美。問所作。答曰。七郎〔八郎〕國史補。樂人皆大驚曰。是李八郎也〔九郎〕〔九三郎〕孝學庵筆記。徐謂黃門曰。九三郎爾尙欲咀嚼耶〔十郎〕唐書安祿山傳。林甫呼十郎○霍小玉傳。色目共十郎相當矣

大抵唐朝より專らにいひし事と見ゆ。此邦も其頃は。唐朝と數往來せしゆゑ。彼土の稱呼にならひ。遂に俗をなせりと覺ゆ。源氏物語に。大殿の太郎君といひ。次郎。三郎肥後國の太夫監にすかされてなど書きたるも。滋野貞主を滋二と稱し。在原業平を在五と稱するも。其例皆おなじ。拾芥抄に。有河朝臣。云嫡子太郎。云嫡孫二郎。已下可云衆孫ともあり。東鑑に。太郎。二郎。三郎を字と稱する事あれども。古法にあらざるなり。何分にもかやうの事は。常例となる。其起を推し尋ね。一概に俗稱和習ともいひがたし。當時の儒者。二郎。三郎。などを笑ふは。古例をしらざるなり

二絃

○樂器の絃に。一絃。二絃は古今ありて。人皆しる所なり。二絃のものは聞かざりしに。高孟彪が印譜古帖を見れば。二絃の圖を寫し置けり。漢土には二絃も用ふと見ゆ。雜字采珍樂器部玩器類三絃二

を討つに利ありとの義なり。賢秀鎗にて大利を得。其後楠正儀京軍の時。鎗を以て敵を討つ事おびたゞし。是より諸家に習ひて。多くこしらへ。遂に武道の寶具となれりといふ。古今銘盡に。近江天國九郎俊長といふ者。始めて鎗を作るといふ。（俊長は。延文年中の人）太平記に。住吉合戰の時。阿間了願といふ者。鎗をもて敵を多く突き伏せたること見えたり。古書に多く載せざるゆゑ。大抵南北朝以來。應仁。文明の頃より專に用ひたるやうに。人みな覺え來れり。白石の軍器考にも。足利殿の末に及びて。鎗交る事の一番二番などいふ事にて。其賞格を定むる事になりしかば。弓矢打ち物取りての高名は有れども。無きに似たりきといへり。されども。鎗の製作。今の形とは異なるかしらざれど。此器はるか以前より有りしと見えて。日本紀（皇極紀）執₂長槍₁。隨₂於殿側₁。三代實錄元慶五年夏四月廿五日。抗表に。槍一百八十一竿。鎌槍七十三竿。鯰尾槍一百八竿とあり。延喜式に。花槍あり。槍鎗ともに同じ。（槍鎗ともに同じく漢土にも用ふるは。名物六帖に見ゆ）今にては直鎗。十文字鎗。鍵鎗。管鎗。鎌鎗等の品種數多ありて。公侯諸士の武具第一となれり。其中管鎗は。江州佐和山の主大谷刑部より始まるとも。又手棒（テボウ）左馬介といふ者作るともいへり。元來此器は。古の儀式などいひし如く。其人の品位に据りて。其威儀とするゆゑ。今に道具といふ名殘れり。今にては。弓矢取る身の武士は少くて。鎗突かす武士こそ多けれ。熊野新宮に。嵯峨帝納めたまふ鎌鎗あり。古より有りし事ゑるべし

郎字

此邦の人。太郎二郎など名づくる事。古今常例なり。其始は。日本紀に。皇極帝四年蘇我入鹿を君太郎といふよりこと起りて。光孝帝の三子を。太郎。二郎。三郎と稱し奉るも。唐朝の例に傚ひたまふにや。唐太宗は。高祖の二男にて。二郎と稱し。玄宗は睿宗の三男にて。三郎と稱するがごとし。後世多く其例に傚ひて。源賴義の三子は。太郎。二郎。三郎と稱し。佐々木兄弟五人。太郎定綱より五郎義淸まで。皆おなじ。漢土も五郎。六郎は唐朝より俗をなす事。隋唐嘉話に見えたり。太郎より十郎にいたるまで。漢土の書に載せたるを擧げ見るに

〔太郎〕創業起居注云。命₂太郎二郎₁率ﾚ衆取。時文

もて戻ぢけるごとく。摺りたる衣の色は。誰ゆゑにと疑へるなり。みだれ初めにしは。古今集にみだれむと思ふとあり。されども初と染と兼たるは。萬葉につきなむ物をみだれ初るやの意なり。我ならなくには。爾阿の反あらなくになり。みだれ心は我にはあらず。萬葉に心つくしてわが思ひはなくにの意なり。古今集前後三首ともに。色を主としてよみたる歌なる事しるべし。後世此歌を證として。よみたるも數多あり。千載集に。寂然

陸奥のしのぶ戻摺しのびつゝ
色には出でじみだれもぞする

又は

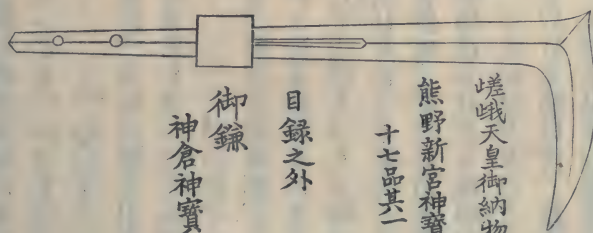
君にかく思ひ亂るとしらせばや
心の奥のしのぶ戻摺

飛ぶ螢ひるはしのぶの摺衣
夜は思ひの色にみだれて

和歌者流。信夫の地名をおさず。年月時代を考へずして。昔より彼地に。信夫摺の石ありと心得るは疎ならずや。すべて彼邊には。後世僞造の地名あり。義經勳功記に。義經蝦夷へ渡りしといふ妄說により。蝦夷に辨慶崎といふ地名を造りし事。伊勢平藏が四季草に見ゆ

鎗來由

雜々拾遺に。敏達天皇の後胤。和田賢秀曆應元年手

鎌鎗圖

嵯峨天皇御納物
熊野新宮神寶
十七品其一
目録之外
御鎌
神倉神寶

長さは。脛巾金の上より鋒先まで壹尺壹寸。廣さは一寸一分を半にして。其中に通りて脊あり。前後の面片方は小劔の形を陽文に彫付け。片方は隱起にして顯はし。皆長さ四寸八分なり。心の長一尺二寸二分。脛巾の地金は黑く色付きて。其性見分け難し。神人社僧。古より鎌鎗と云ひ傳ふ

鉾の中より鎗を工夫し。始めて作り出だす。是短兵

ぶ草もて摺りたる衣を出だしたる事ありて。其所はいづ地とも定めなけれども。其色の戻摺たるが。みだれて見ゆるなり。河原左大臣は。弘仁三年の生にて。寛平七年に薨ず。此時奥州に信夫といふ郡なし。倭名抄に。陸奥國郡部に。國分爲二伊達郡一とあり。郷部にも伊達郡信夫郡ともになし。安達郡郷名に。伊達といふは見ゆ。されば信夫といふ地名は。後世に出來たる名なり。信夫といふ地名出來たるにより。此歌を種として。今の信夫といふ地に。信夫摺の石を僞造し植てたるなり。或は方二尺。長八尺といひ。或は幅七尺。長一丈三尺といひ。其石に大小ありて。所在も定かならざるは。全く後人の僞造せしなり。昔。東國陸奥邊より。しのぶ草の摺衣出だしたるは。もとよりあるべき事と見えて。公忠朝臣家集に。東に下る人に。白き物を青き物して摺りて。火打を入れておくるとて

打ち見ては思ひ出でよと我宿の
しのぶ草して摺れるなりけり

昔はしのぶ摺のみならず。小松摺。紫の根摺の衣。眞はぎもて摺れる衣。萩が花摺。一入摺の小忌衣などいろ〳〵摸樣を摺りたるなり。陸奥ならでも。しのぶ摺の衣をよみたるは。千載集に頼政

思へどもいはでしのぶの摺衣
心のうちに亂れぬるかな

呉竹集に。清輔の歌を引きて

昨日見しゝのぶのみだれ誰ならむ
心の程ぞかぎりしられぬ

此歌は。前右馬助範綱が子。清綱がしのぶ摺の狩衣を着たりけるをよみたるなりと。しのぶ草は其葉細かにして。摺りつくる物の形。色摸樣あざやかならず。戻けるごとく亂れて見ゆるなり

和名抄に。垣衣一名烏韭。之乃夫久佐と訓ずるは。本草學ひらけざる時の誤なり。烏韭は和名アタゴ苔。一名瓔珞ゴケなり。しのぶ草は漢名小雉尾草戻はもぢける事にて。夏の衣に綟をもぢといふは。集韻に麻綟と見ゆ。枕草子に山藍にて。摺りもどろかしたる水干袴といひ。狹衣に「我心しどろもどろになりにけり。袖より外に涙洩るまでとよみたるも。おなじ詞にて。俗にもぢるもぢけるといふは是なり（一説に。戻摺は二戻り摺りなり。トチ通音。りを中略とも云ふ）上の句は。陸奥よりしのぶ草

陸奥のしのぶ戻摺(モヂズリ)誰ゆゑに。みだれそめにし我ならなくに。古今集。河原左大臣 此しのぶ戻摺を。昔より彼此と諸說多くして一決せず。古今榮雅抄に。信夫郡に大なる石貮あり。其面平にして戻(モヂ)のやうなる紋あり。其に藍にて摺る布を。昔年貢に奉りけり。天智天皇の時奉りしなり。松岡氏結毦錄に。山藍を以て摺り付け。其汁にて摺り。石の面平なりしが。旅人頻に來り。傍の田地を蹈み損ずるを以て。今は其石を倒して平かならずといふ。此二說は。石と藍とを主としていふ 信夫摺記に。奥州人著。姓名未詳 信夫戻摺の狩衣は。陸奥に信夫の鄉にて染めしなり。信夫の鄉は。今の福島の事なり。此所に石あり。此に草の葉を摺り塗りて。絹をおしぬれば。色々に亂れ染みて見ゆるなり。今其石福島の府より一里許隔ちて。山中村の山下にあり。方二尺。長八尺許なり。童蒙抄に。戻摺とは。陸奥信夫郡に摺り出だせる摺なり。打ちちがへて亂りがはしく摺れり。此二說は。草の名をいはず。信夫郡の名を主としていふ 壽鶴齋が東國旅行談に。奥州福島の驛より山口宿まで。此間に川あり。節黑(フシクロ)川といふ。此川につゞきたる山上に。幅七尺に長一丈三尺許なる石あり。此石を信夫草といふ草を以て。石面を磨けば鏡のごとく。我影を摸すに因りて鏡石とも名づく。又は絹。或は紙を此石にあて。彼信夫草を以て摺る時。石の摸樣うつくしく。色々にみだれ染むとなり。見事なる故に。陸奥のしのぶ戻摺誰ゆゑに云々といへり。此石いつの頃にや。大地震にゆり動き。山より落ちて。今は田地の中に。石の裏を見せてあり。名のみ殘りて。今は石を摺る事なしといふ。此一說は石と忍草とを主としていふ 此等の諸說。陸奥國に。今信夫といふ地名あるにより。昔より其地に石あると心得て。或は藍にて摺るといひ。或は草の葉にて摺るといひ。地名と石とを主として說くゆゑに。彼此と一決せざるなり。元來此歌は。古今集讀人しらず三首ある。其中に出だし。前には紅のはつ花染の色ふかく。後にはあさぢの色ごとにちゞの色にうつろふらめの歌とおなじく。色を主としてよみたる歌を撰びて。一所に類聚せしなり。昔は摺りにいろ〳〵ありて。黄土摺(ハニズリ)。山藍摺(ヤマアヰズリ)。榛摺(ハギズリ)又しのぶ摺。小松摺。遠山摺など。延喜式に見えたり。中右記に。鳥羽院時。禁三民間服二摺衣一といふは。當時の俗。我思ふ物を好みて。衣に摺りたるを禁ぜられしなり 後世の染模樣は。其遺風なり 昔。陸奥の國よりしの

枝折といふは。

まだ見ぬかたの花を尋ねむ

ゑをりと訓ず。標折（シメヲル）の義にて。一字にては。栞の字も所レ行斫二其枝一爲中道標上也。周伯溫曰。禹貢隨レ山。栞レ木謂下隨レ行斫二其枝一爲中道標上也。佩觽集。書益稷隨レ山刊レ木。作二隨レ山栞レ木一字書に。栞槎識也とあり。日本紀皇極紀折二取枝葉一。懸二掛木綿一といふもおなじ

縁に金とりたるも。又金紙にて仕立つるもあり。又裏を銀にしたるもあり。穴を明け。皮にて括るもあり。或は房を附くるもあり。人々の好によるべし

長サ曲尺八寸

幅曲尺一寸六分

折返シ曲尺四寸

此圖は。湯淺常山が文會雜記拾遺に載せたり

下野國都賀郡標茅原（シメヂガハラ）も。昔在原中將敗軍に因りて。奧州小野の人。猿丸を賴みけるに。猿丸其地理に熟せざるゆゑ。茅を折りて標とし。其戰利を得たりしより。其地を標茅原といふなり

山に入るに木の枝を折りかけて。道の標となすをいふ。此意をとりて。今の枝折といふ物は出で來たれり。文房必用の雅器となりしより。天下讀書の人。みなしる事になりて。右西行の歌も書き。又拾玉集慈鎭の歌

歸りては重なる山の峯毎に
とまる心を枝折にやせん

又。堀川百首傳燈大師の歌

暮れぬさき山を出でむと急ぐ間に
枝折をもせで越えにけるかな

右二首も書けり。此物漢土にもあり。事林廣記に。若作レ詩時用二此一韻一。則揭二開策子一。一覩則皆可レ見矣といふ。開策子なり

戾摺

歌のならひにて大閤秀吉公紹巴と發句し給ひし時。「奥山に紅葉踏みわけ鳴く螢 大閤 鹿とも見えぬ燈火の影 紹巴 螢は鳴く虫にあらずと。紹巴申す。大閤聞き給ひて。我鳴かせんとせば。鳴かすべしと有りし傍より。細川幽齋「武藏野や篠を束ねて降る雨に。螢より外なく虫もなし。古詠ありと申され。大閤喜悦し給ひしとぞ。螢は鳴く虫ならねど。諸虫夜分には見え難し。たゞ螢の光のみ分別し。螢鳴くがごとく見ゆ。故にかく詠せしといふ

ワレカラ

偏傍

明の楊太史が菰林伐山に。五行偏傍の字を出だせり

淼音眇　焱音談　鑫音忻　森音參　垚音姚。宋人以名」字

是は陳仁錫が遵韻海篇。朝宗に載せたる三同四共類に多くあり。奇とするにたらず。是に似て尤奇なるあり。吳郡の丑青夫が書畫舫に。宋迪秋山對レ月圖卷。是周草窓藏本後有二元人鄭采一。題レ語甚奇。走レ筆錄レ之とあり。藏頭隱語の如くなる者にて。武后の十二字。宣和書譜中に載せたる七字とおなじく。音注なくては讀みがたし

天𡗗𡗗兮月朤朤兮山㠭㠭兮
水淼淼兮木森森兮竹𥰭𥰭兮
勢𡫸𡫸兮墨鱻鱻兮滎陽鄭采
題 眞跡

天皎々兮月耀々兮。山疊々兮水眇々兮。木參々兮竹戰々兮。勢凜々兮墨鮮々兮。滎陽鄭采題といふ事なり

枝折

文房の具。書紙の間にはさみおく枝折は。近歲の物にて。黄門義公始めて製したまひ。大内へ獻せらる。後水尾帝枝折の名を付けたまひ。新古今集に載せたる西行の歌を書きつけたまふ 寸法あり

吉野山こぞの枝折の道かへて

を彩色せしあり。蒹葭堂主人寫しおけり。是彼土の隱嚢なり。常の皮枕は。遵生八牋に見ゆ

唐山寄枕
皮製頂
之画

蒹葭堂
主人手謄

ワレカラ

海人の刈る藻に住む虫の我からとねをこそなかめ世をば恨みじ 古今集典侍藤原直子 我からは。我故(ワレカラ)の義なれども。其虫の聲無きにねをなかめとよみたるにより。其虫の形狀。昔より諸說多し。大和本草に。本草約言を引きて。紫菜中に有二小螺螄一といふを據とし。藻に付きて殼の一片なる螺あり。破殼の意なりといふは。牽强の說なり。呉竹集。愚見抄などに。海草にとり付きたる小貝なりといふも似よりたる說なり。怡顏齋の介品に出だしたる我からの圖も小螺なり。一說に伊勢にてはなりけりといふ虫。八寸餘。手足長く色青しといふ。是說も覺束なし。伊勢物語注に。和布(ワカメ)苔(ノリ)などに付きたる。蝦の樣なる物の付きたるをいふと是なり。此虫。形水黽(アメンボ)に似て。長二三分。色青黄にして足長く。蝦の種類にて。水を離れても能く飛ぶものなり。北國には。佐渡に多し。四國邊には。此虫を藻と共に煮て。酒肴に充て食ふ。甚賞味なり。名を我からといふ虫なる故に。戀歌に人のとがならす。我故(ワレカラ)の意に屬(ツヅ)けたり

隱れなく藻に住む虫は見ゆれども
　我から曇る秋の夜の月　西行

又我からと名を出ださゞれどもよめり。呉竹集に

人を猶恨みつる哉蜑の刈る
　藻に住む虫の名を忘れつゝ

「戀しつらしと何を恨みむ「世こそたゞ藻に住む虫の思ひなれ 宗祇附句 我からとねをなくは。日本紀 仁徳紀 に載せたる困己物以泣といふ意なりともいふ。續後拾遺集。「形見こそおのが物から悲しけれ。誰ゆゑならぬ墨染の袖 聲無き虫も鳴くとよむは。

仁壽年中の人なり。當時安八郡の陂渠決壊して。是を修めむとす。其陂に神ありて。若水を遏め逆ふ者は死す。高房曰。苟利ニ於民一。死而不レ恨と。遂に其陂を築きて。流を通じ。亦席田郡に妖巫あり。民多く毒害せらる。古來恐怖して。其部に入らず。高房單騎にて。其部に入り。其類を追ひ捕へて。一時に酷罰する事。文德實錄に載せたり。又黃門義公は。寛文五年十二月定ニ寺社法令一。毀ニ淫祀三千八十八一。同六年毀レ新。建ニ寺院九百九十七一と。常山文集附錄に載せたり。此後もかゝる有識の明士達君世に出で、。淫神淫祀の類一々其始原を糺明し。妖妄奸惡の徒は。悉皆驅除ありたき事なり。元來日本は皇統連綿。神明正直の大御國なれば。神代より天下大小の神祇。鎮坐祭祀おの〳〵皆顯然として。延喜神名式に載せたり。淫神淫祀の種類。相混雜するは尤惡むべきの甚しく。又恐るべき事どもなり

此邦。元祿年中以來一派の學風行はれ。稱して國學といふ。其先生達おひ〳〵多く世に出で、。國の正史古書等を吟味し。其學風の書尤多く。汗牛充棟ともいふべく。天下の書肆に充滿せり。最初音韻古言より事起りて。國書考探の是非。今日に至りては。その詳明なること餘蘊なしといふべし。然るに多くは皆。國書紙上の善否を。彼此と論辨して。今日將來ともに天下國家治道の益。又は生民言行の助となるは。未見あたらず。故に予は國學者ならず。漢字をまなぶまに〳〵。國の正史古書等を見る每に。片言隻語も。天下生民の益助なる事あらばと。彼此數多抄書し置きたり。今其國學者の是非もかへりみず。識者の用捨にかゝはらず。漫に隨筆中に錄し。諸君子達の是正をまつのみ

寄枕

座(クラ)は來居(クヰル)の義にて。天子御座したまふを高御座(タカミクラ)といひ。馬背の鞍(クラ)も座なり。頭を置くを枕といひ。足を置くを胡牀といひ。古事紀に呉床。日本記に踞ニ坐胡床一とあり 肱を曲ぐるを肱枕といひ。身を寄するを寄枕といふ。近歲刊行せし梅窓筆記に隱囊の圖を出だし。よりまくらと訓ずれど。隱囊二字。其出據をしるさず。是は明の楊太史が。菽林伐山に。六朝人作ニ隱囊一。柔軟可レ倚。中略 王維詩隱囊沙帽坐彈レ棊といふを用ひたるなり。漢土の寄枕と稱する物。皮を以て制し。其上面に舞鶴

に狐穴を探り馳むとする其前夜に。狐の啼く聲甚し。夜明けて一疋の狐。河邊に喰ひ殺されてあり。是其前夜に群狐聚り。右の惡狐を喰ひ殺すと見ゆ。尙齋急に屠者に命じて。其皮を剝ぎとらせ。常に布皮とし。其上に坐する每に鞭ちて。曰淫獸己何ぞ萬物の靈を害するやと叱せられしなり。此事先達遺事にも載せたり。正道を行ふ識者は。邪妖を懼れざる事しるべし。昔は此淫獸を取り扱ふ者。禁獄せらる。中原康富記に。室町殿醫師高天被ニ禁獄一。父子三人也。此者仕レ狐之沙汰風聞とあり。凡べて獸畜淫神を役し。人を害する者を。怯恐する故に。古昔より此類諸國に多し。畢竟は。其所に主たる者。志怯く正道に見識なき故なり。西國雲州邊に。狐蠱。犬蠱(トビヤウ)あり。俗に犬神といふ。四國に蛇蠱あり。俗に土瓶といふ。備前。備後の猫神。猿神。東國は上州南牧の大さき使。信州伊奈郡のくだ。皆此種類なり。漢土にも常州人好殺レ犬以祭ニ淫神一。而犬名ニ韓盧狗大王一。卽犬妖所レ作といふ。錢希言が獪園に見え。搜神記に載せたる犬蠱もおなじ。蛇蠱は隋書志に見え。猫鬼は病源侯論及隋書。獨孤陀傳に見えて。此等の妖術淫神を役使する者。悉皆誅罰せられ。其家も破却するなり。開皇十八年夏四月辛亥。詔畜ニ猫鬼蠱毒厭媚野道一之家。幷投ニ於四裔一とあり。もとより不正の道を唱ふる者。聖人の法。尤嚴重に制したまふ。禮王制に。執ニ左道一以亂レ政殺。假ニ鬼神時日卜筮一。以疑レ衆殺とあり。唐の狄仁傑は。寧州の刺史となり。江南巡撫使の時。吳楚の俗に淫祠多きを一々禁止し。凡。千七百房を毀ちて。殘り夏禹。吳太伯。季札。伍員の四祠のみを留めて毀たざる事。唐書本傳に載せたり。明の行逢は。以ニ淫祠一爲レ患。管內祀廟非下前代有レ功及レ民者上。皆毀析一時有識之士。欣然以爲ニ明斷一よし。周羽沖が三楚新錄に載せたり。此邦にても。古書は淫祀。巫覡の類。奇怪を唱ふる者。嚴しく禁斷せらる。續日本紀に。光仁帝寶龜十一年十二月甲辰。勅ニ左右京一。如聞。比來無知百姓搆ニ合巫覡一。妄崇ニ淫祀一。蒭狗之設。符書之類。百方作レ怪。塡溢ニ街路一。託レ事求レ福。還涉ニ厭魅一。非ニ唯不レ畏ニ朝憲一。誠亦長養ニ妖妄一。自レ今以後宜ニ嚴加ニ禁斷一。如有ニ違犯者一。五位以上錄レ名奏聞。六位已下所司科決とあり。有識の人は。淫神巫覡を懼れず。越前守高房は。

造の祉に。稻荷ほど流行するは外になし。畢竟は愚昧文盲の鄙俗。おの〳〵淫獸妖魔の智を假りて福を求め。利を得むとするより。次第に行はるゝなり。人は萬物の靈に生れ。天性五常の德を具へながら。淫獸の智を假らむと思ふは。もとより論なし。然らば。彼佛家にて。陀耆尼天の惡魔を。白晨狐王菩薩。又貴狐天皇など稱する飯綱使(イツナツカヒ)とおなじく。野狐大明神なりとも。野狐大菩薩なりとも稱し。祭る時は鄙俗の爲には。其應もあらむかし。恐多くも倉稻魂の神名を假り。直に尊位を受領するは。淫獸ながらも無禮の甚しき。猩猩能言不ㇾ離二禽獸一とはこれなり。獺祭ㇾ魚然後虞人入二澤梁一。豺祭ㇾ獸然後田獵とは。正邪善惡。大に懸隔の相違にて。尤惡むべき者なり。或人予を笑ひて曰。子は世の諺をしらざるか。虎の威を假る狐とは。たれも〳〵もいふ事にて。文選に鼠憑二社貴一。狐藉二虎威一とあり

狐借二虎威一者。江乙所ㇾ對二楚王一之喩也。其王戰國策爲二宣王一。春秋後語爲二莊王一。一書所ㇾ引。新序只爲二楚王一よし。山本格安が燕石錄に載せたり

狐虎の走る後より。其尾に附きて走る。時人虎を懼るれば。己其威を假りて人を懼れしむ。邪智淫獸の性なり。尊神の御名を假りて。鄙俗を懼れしむるも宜ならずやと。兎角にもかゝる惡魔の流行徘徊するにより。妖巫邪覡の輩。次第に其尾を貂續し。或は口寄。識神。或は加持祈禱など。種々の奇怪を唱へ。愚昧鄙俗を誑し。財寶を貪り。人心を疑惑せしめ。國家を治むる正道に害あり。畢竟は天性萬物の靈たる。己が明德を忘却し。陰惡狐獸の妖をなす。邪智に依賴するが淺間敷なり。正道有識の人は。かゝる淫獸を毫も懼れず。昔帥大納言經信卿の時。野干を以て神體とし。崇め祭る者なり。其社邊にて。狐を射殺したる者訴へられ。罪の沙汰に及ぶ時に。經信卿曰。白龍之魚縣二豫說之密網一とのみ有りて其咎なき事。續故事談に見えたり。續日本後紀。天長十年八月十三日乙未。有ㇾ狐走入二內裏一。到二淸涼殿下一。近衞等打殺ㇾ之　又三宅尙齋は。播州の人山崎垂加翁の門人なりしが。其在所に野狐有りて。一人の老婆を取り殺す。尙齋の姪幸助といふ人。其村の里正を勤む。尙齋幸助を責めて曰。汝當村里正の事を掌る。何ぞ擧村の人を催し。野狐を驅り殺さゞる。於ㇾ是幸助其所の若者數十人を催し。兵器罝罘の具を用意し。既

ふがごとし。古書正史に。野狐を倉稲魂神と稱する事。ゆめ〳〵なき事にて。其五文字本は借字なるをしらず。尊き神の御名を黷すに至るは。尤恐れ多き事なり。又野狐を稲荷の神使といふも。古書。正史に見えず。神使といふ事もなきにはあらず。古事記。日本紀に出で　。猿を伊勢太神の使といふは。齊明帝紀に見え。熊野の烏は。神武帝八咫烏の導を得給ひ。熱田氣比の鷺は。仲哀帝白鳥を愛したまふ緣によりて。倶に紀に見えたり。八幡の鳩は旗と音通じ。春日の鹿は鹿島より。鹿柵（カセギ）に乘りて來り給ひし歌あり。其外に松尾の龜は。龜尾山の因をとり。日吉の猿は月行事の社。猿田彦の緣を結び。愛宕の猪は宍戸氏の功によりて。各皆其所謂譯のある事なり。野狐はもと淫獸妖魔の物。北方陰地に多く居て。白晝の中は幽闇の間に隱れ。夜中のみ出で、。物を掠め取り。人を惑し寃をなす。（狐の人に喰ひ付きたる事。徒然草に二事を載せたり。伽藍記に。狐の化けて人の髮を截りし事。一百三十人に及ぶ事見えたり）南方陽地に居る事あたはず。此邦南海四國及對馬五島には狐なし。漢土にも江南無二野狐一と。北夢瑣言に見え。江東無レ狐。狐出二北方及益州一と。時珍綱目に載せたり。か、る淫獸妖魔を倉稲魂神使ひたまふといふも。亦恐れあるべき事なり。わづか專女三狐神といふ。五文字より事起りて。尊神も野狐も混じ祭る事になりぬ。（女童の小歌に。稲荷といふも狐なり。狐といふも稲荷なりとは何事ぞや）其始は。陰惡狡猾の徒。五文字を證據として。野狐を祈り。鄙俗を誑かし。福を求め。利を得む事を。作り出だしたりと見ゆ。愚昧文盲の鄙俗は。其淫惡妖魔に化され。いつとなく天下風俗をなせり。漢土にも朝野僉載に。初唐時。百姓多事二狐神一。時有レ諺曰。無二狐魅一不レ成レ村とあり。宋史に見えたる狐王廟も此類にて。尤惡むべきものなり。此等の妖魔次第に行はる、により。貴賤上下押しなべて。野狐を尊恐する事。鬼神の如し。妖巫邪覡の輩は。流行の時勢に乘じ。種々の奸惡をめぐらし。一の獸穴を見出だす時は。稲荷の來現と稱し。又狐惑の人あれば。神降りたまふなどいひ觸らし。神職掌る家に授位を請へば。直に正一位大明神を賜はる。其より己が居宅に社壇を搆へて。鳥井瑞垣等の物を飾り。木綿繈をかけ。幣を持ちて。人の吉凶禍福。物の得失出入。或は病の治不治。方角の善否をいふ。是を御窺ひ。又は御指圖など稱し。所々に數多あり。故に近歲新

昔外宮に。御饌殿ありて。内宮へ供進しける事。聖武帝の御時までありしに。途中汚穢に觸れし事ありて。別に内宮に御造立あり。忌火屋殿といふ是なり

◎故に日本紀に。神食二字をもミケとよめり。津は例の中の休め字にて。乃とおなじ。凡べて神號に上に津の字あれば。下に乃を付けて讀むは。古例なきに。後世乃を付けて讀み誤るもの多し。專女三狐神といふは。燒米御食乃神といふ事にて。宇賀之御魂神は。亦燒米御食に供するの御神。一名といふ意なり。倉稻の實は米なれば。稻の實卽ち御食なり。此邦にて。稻米は五穀の長たるを以て。日本紀に。嚴稻魂女イヅウカノメとよめり。尤嚴重の意なり。三狐神。三狐乃神（ケツ〇ケツノ〇　ケツ子ノ子音通）讀み誤りやすし。元來鎭座傳記にもせよ。三狐の三。古書になき假名なり。古事記。日本紀に。三の字みの假名に用ひたる例決してなし。後世の書なる事知るべし。然るに。日本紀に專の字。專女の二字タウメともよめり。（タク タウ クウ音通）和名抄に。老女を呼びて專と訓じ。土佐日記に。翁人ひとりたうめひとりと書けり。是卽ち神代紀に姥トメとよめる姥も。專女もおなじ事にて。專は級長戸邊も。皇代紀の荒河刀辨。苅幡刀辨も同語なり。（一說に專は刀自女の中略ともいへり）野狐をタウメといふ事。古書正史に決してなき事なり。源氏東屋卷に。伊賀たうめと書きたるは。岷江入楚に伊勢。伊賀の諺に媒の事をたうめといふ。專は老女の稱にて。狐は人を誑かすを以て。よそへたりといへり。新猿樂記に。野干坂伊賀專之男祭と見え。山槐記に。治承二年於齋宮御在所。射殺白專女といひ。百練抄に。藤原仲季於齋宮邊。依殺白專女と書し。宇治拾遺に。狐のいひし語に。たうめや子供などにくはせむとあるも。皆老女の稱にて。其本は玄中記に千載之狐爲淫婦。百歲之狐爲美女といふより出でたる事にて。人を誑かし惑はすにたとへたるなり。其專の字。專女の二字。タウメと讀むにより三狐の字讀み誤りしか。牽強せしか。狐の一名とし。三狐を稻荷三の峯に配し。遂に野狐を合せ祭る事になりぬ。是非もなき恐るべき甚しきなり。鎭座傳記の文能く考へ讀むべし。宇賀之御魂神亦名專女三狐神とあれば。卽ち神の御一名にて。假令へば。宇賀之御魂神亦名豐宇氣姬命とい

の杉の枝を折りて。鎧の袖にかざしてとあり。いかなる所謂なるや。杉は正直の表物なれば。日本紀に石上振之神榲。萬葉集にも。三諸の神の神杉などよみたれば。神明正直の意にとるにや。大殿祭の辟木を神木とし。古は神木をかざせしにや。今も紀州熊野にては。毎年二月初午の日は。人々神木をかざすといへり

然るに。いつの比より。何者のいひ出だし丶か。野狐を稲荷の神使と稱し。初午の日は。天下一統貴賤押しなべて。家々に持囃し。赤小豆飯。油煮等の供物種々と丶のへ。町家士民の中にても。其格式定例ある家は。居宅の内に鎮守の小祠稲荷を勸請し。正一位大明神の幟を立て丶。往來群聚いはむかたなし。其本原を委しく推し尋ぬるに。鎮座傳記云。素戔鳴尊子。宇賀之御魂神。亦名專女三狐神（タクメ タウメ音相通ず。下に見ゆ）此二句下の七字より事起ると見ゆ

鎮座傳記。倭姫世記などは。昔外宮にて何者か書きたりけん。佛書雜りに作りたる。神道五部の書にて。古事記。日本紀等の正書にあらず。禁河の書とて。宮川より外へ渡さゞるも。彼地よりいひ出だしたる事にて。正しき證據となしがたし。其譯は。已前外宮より出だしたる御秘箱に。二天八王子。諸神。諸佛又は渡海祈禱の秘に。八幡大菩薩。五大力菩薩など書きたるゆゑ。寛文の比銘淨論記を著はして。大に批評説破せり

亦名專女三狐神といふ七字。古書字音に暗き人讀み誤りしか。利を釣る餌に牽強せしかはしらざれど。是七字より外に稲荷に野狐のあづかる事更になし。其譯。委細明白に辨じ曉さん。專女三狐神といふは。本は借字にて。日本紀に專の字。專女の二字。タクメとよめり。タクハ燒なり。古事記に。燒擧。燒凝の語あり。メは米なり。和名抄に。糯糠ヒメとよめり。非米なり。糯は米なり。三狐は御食津なり。御饌津。或は御膳御氣とも書けり。萬葉集に。御食津國。又御饌津國。伊勢。志摩。淡路。難波などつゞけたり。大御食の御贄を奉る國をさしていふなり儀式帳に。朝乃大饌夕乃大饌とありて。直會御歌に「拆鈴五十鈴の宮に御氣立と打つなる膝は宮もとゞろにと唱ふる御氣の事にて。中臣壽詞に。長御膳乃遠御膳。又祝詞式に御膳持須留といふ。皆同語なり

字を書きしより。後世種々牽强附會の說をまうく。神名式に。山城國紀伊郡稻荷神社とあるは。今の稻荷山なり。釈良公世諺問答に。二月初午は。弘法大師東寺の門前にて稻荷たる老翁に。二月午の日逢ひ給ひて。則東寺の鎮守に勸狀申され。此寺繁昌せしより。此日を以て緣日とすといへり。一說に此山の地主神を。荷田神といふ。後に倉稻魂を祭るといふ。其弘法大師稻荷し老翁に逢ひ給ふといふは。元亨釋書の妄說より出でたる事。恕庵が詹々言に見えたり。又例祭東寺の南門に。神輿を舁き入れて。神供を奉る事は。昔東寺の傍に二階長者あり。二階祭といふ神輿を。其家に舁き入れて。神供を奉りし事ありて。今に例式となりぬといふ。又其荷田神といふは。いかなる神を指すにや。神祇拾遺に。右の三社に。田中社四大神二社を併せて五座とす。弘長三年に告ありて。文永三年に。併せ祭る

多田義寛が蓴の草紙に云。稻荷五社は神紀に所見あれども。今祭る者多くは。狐なり。人は萬物の長にあらずや。四足の物に敬禮をなし。供物をなす。其意財を祈るより淺間敷なり降れり。士たる者などは。殊に恥づべき事なり

又一說に田中社の客神。大歳神は鶴と化して。稻の穗を含みて來現す。故に此社に一切の鳥を奉る事を忌むといふ。是は風土記に稱二伊奈利一者。秦中家忌寸等遠祖伊侶具秦公。積二稻粱一有二富祐一。乃用レ餠爲レ的者。化成二白鳥一飛翔居二山峯一。遂爲二社名一とあるを。聞き誤りしならむ。諸神記に。稻荷秦氏之祖神也とあり。今に稻荷の社司秦氏を名乘るも。譯あることゝ見ゆ それはともあれ。初午詣は。昔より年久しくありしと見ゆ。貫之家集に。延喜六年月次屛風歌の中に。二月初午稻荷詣したる所といひ。源順集に。二月初午の所に。花摘にかくしよみたる歌あり

按ずるに。稻荷山に多く杉をよみ入れたる歌あり。顯仲朝臣「稻荷山しるしの杉を尋ね來て。周防内侍「稻荷山杉間の紅葉來て見れば。家隆卿「稻荷山杉の庵の明ぼのに。新撰六帖に「二月やけふ初午のしるしとて。稻荷の杉葉本つ葉もなし。稻荷山にて杉を挿頭花にする事多く諸書に見ゆ。初午ならでも。此事ありと見えて。有家歌に「稻荷山杉の青葉をかざしつゝ。歸るはしるきけふの諸人。又平治物語に。淸盛稻荷の社に參りて。おのお

等しくすれど。時珍の綱目には。心氣鬱結。或は活血驚悸の症のみに用ひて。格別の功能を載せず。近歳主治を法のごとく。數人に用ひ見るに。功能奇驗格別の事更になし。兎角にも末世に及びて。貴賤一統奇を好む癖情。世と推し移ると見ゆ。いふ程の功能奇驗あらば。漢土の書にも多く載すべし。當今清朝の方書。多く舶來するにも。未見當たらず。此邦の主治方書は。往古より大抵漢土を法則とすれば。風土人情格別に異なる事はあるまじ

初午并稲荷

毎年二月初午の日。貴賤一統にもて囃し。初午稲荷祭といひ。在々所々。其祠へ詣する事。天下一統風俗となれり。これは和銅四年二月十一日。午日出現有りしといふに據ると見ゆ。其稲荷といふは。神代紀に保食神腹中生レ稲とあるを本據とす。イナリは稲生の義にして。稲は飯の根。生は生産の義なり。日本紀。萬葉集に。生。成。產。業の字。皆ナリとよめり。伊勢國奄藝郡に稲生村あり。延喜式に。伊奈冨神社。又は朝野群載にも見えて。保食神を祭れり。又文永十一年。正三位藤原經朝卿の書かれし額に。正一位稲生大明神とありといふ。然らば稲生と書くべきに。文德實錄に。稲荷神三前とあれば。古昔より稲荷と書き來りしと見ゆ。されども荷の字。古書にリと讀みたる例なし。一說に。荷はリと通ず。古は稲荷と いひしならむ。（古事記に。樺井を苅羽井に作るがごとし）當今祭る所三社第一は。倉稲魂。第二は須佐之男命。第三は大市比賣といへば。神代紀倉稲魂は古事記にいふ。宇迦之御魂神にて。大殿祭祝詞にいふ屋船豐宇氣姬命。稲の靈なり。（ウケはウカにて。食饌の義なり）天武紀に。祭ニ大忌神於廣瀨河曲一といひ。神名式に。廣瀨郡廣瀨坐。和加宇賀賣神社在ニ川合村一とあり。祝詞式に。廣瀨能川合爾稱辭奉流。皇神能御名乎白久。御膳持須留。若宇加能賣能命登御名白氏といへる是なり。神祇秘書に。豐宇賀乃賣神。神祇官坐。御氣津神是也と見ゆ。（舊事記に。乞ニ食物於大御食都姬神一とあるも。是事にて。奥儀抄に「深見草庭にしげれる花の香たえ。家よきてへようけもちの神）大殿祭祝詞註に。今世產屋。以ニ辟木束稲一置ニ於戸邊一。乃以レ米散ニ屋中一とある。束稲は屋船豐宇氣姬にて。稲の魂なり。（俗に米をうちまきといふも。束稲より出でたる詞にて。其元は天孫日向國高千穗の峯に。天降りたまひしより。事起ると。日向風土記に見ゆ）しかれば保食の神。稲生の義。能く符合せり。荷の

和州奈良山に出づる上とし。信州奈良井に出づる次とす。鳴聲も尋常の者は。月日星（ツキヒホシ）となき。神路の山にては。日月星（ヒツキホシ）となき。東國の產は。其音だみて聞ゆ。風土によりて異なり。況。異國の產をや。時珍綱目に載せたる鸎の圖。王思義三才圖會載せたる黃鳥雌雄雙飛の圖。及朝鮮うぐひす寫眞の圖を出だし。其形狀をしらしむ

サフラム花

サフラムは近歲刊行せし六物新志に載せてより。始めて西洋歐邏巴。亞弗利加。亞細亞洲の諸國に生ずる草花の蕊なることを人皆知れり。それまでは蠻國に生ずる紅花を蜜にて製するものといひ。其草の形狀知れざるゆゑ。此邦山中に生ずる猩々袴といふ草を充てたる人もあり。漢土にも時珍の綱目までは知れざるにや。隰草の部に。番紅花を出だし。釋名に泊夫（サフ）藍（ラム）撒法郎をならべ載せて。西蕃回回地天方國の紅藍花なりといひ。又獸部羊心の附方に。正要を引きて泊夫蘭は卽回回紅花なりといひ。同腎の附方にも。泊夫蘭と書けり。遵生八牋には。撒夫蘭とも書けり。皆是蕃名を字音に假借する者にて。實物を見ざる故なり。形狀は新志に載せて。一種花の中心。三線の蕊をなし。細き長舌の狀に似たり。その色赤黃にして。味辛く少苦を帶びて。油氣のあるに似たり。其氣芳烈にして。人の鼻を撲つもの。又一種春苗を生じ。秋に至りて花を開く。六辨にして其色緋黃。其香百合に似たり。花後に實を結ぶ。ともに三房をなす。根は韮蒜（ニラコビル）に似て毬をなせり。然るに品類ありて。形狀其地に隨ひて少々異なりといへり。さもあらむ。以前浪華蒹葭堂へ蕃國より贈り來るを寫眞し。一幅となし。人に見せらる。予其圖をこひ得て。爰に摸す。新志に載せたるものとは。形狀また少々異なり。萬國地球圖に載せたる形狀ともおなじからず。いかにも種類多しと見ゆ。此品近歲貴賤一統に珍重し。其價。韓參に

泊夫藍

蒹葭堂寫眞標軸

樊養しがたき鳥なり。然らば此邦うぐひすは。いづれに充たるかといふに。貝原氏の本草名物附錄。及び江村如圭が名物辨解に載せたる報春鳥は。大抵時候名稱も能く充たれるやうに覺ゆ

○陸羽顧渚山茶記云。山中有レ鳥如ニ鴝鵒一。色蒼毎レ至ニ正二月一。作レ聲云ニ春起一也。至ニ三四月一云ニ春去一也。採レ茶人呼爲ニ報春鳥一 ○月令廣義云。報春鳥一名喚起

報春鳥は。潜確居類書にも出で、。劉孝綽が詩に。復値懷春鳥。枝間弄ニ好音一。孤鴻若無レ對。百囀似ニ群吟一といふもおなじ。報春懷春の名。此邦うぐひすに能く充たれり。一名喚起といふに因りて。百舌一名喚起に牽强し。綱目陳藏器の説を主張して。百舌を充つるは反りて誤なり。白石の東雅に。萬葉を引きて。春鳥うぐひすと訓せしを疑へども。是も報春鳥懷春鳥の省と見るべし。余先年癸未の夏。長崎に在りて。朝鮮學士將仕郎韓用楫と對坐筆語せし時。問ひて曰。鸎所謂黃鳥者。朝鮮之地多居乎。用楫答曰。黃鳥果多。人稱ニ喚友鳥一。又問曰。其大比ニ鸜鵒一如何。正二月之間。期ニ梅花一而來。發ニ圓滑之聲一乎。又曰。此邦所謂。鸎者非ニ眞黃鳥一。形比ニ鶺鴒一稍大。其來必正二月之間。上ニ唔香樹枝一而鳴。用楫答曰。鶺鴒之謂正合當。而眞鸎三四月于ニ飛樹林間一鳴。此答形狀は詳ならざれども。喚友鳥といひ。三四月といへば。彼地に居る事疑なし。されば鸎も。婆餅焦も。百舌

朝鮮鸎
喚友鳥

漢土鸎
本草綱目

黃鳥
雌雄雙飛者見ニ王思義三才圖會

及剖葦も。皆此邦うぐひすに充たらず。凡べて是のみならず。此土に有りて。漢土に無きもの。牽强して。漢名を充てむとするより。古今誤稱するもの頗多し。其的充しがたきは。國字にて事足りぬべし。尤學者の心得べき事なり。又此邦うぐひすにも品種あり。

ひすを。百千鳥とよみたる歌見ゆ。佛國禪師。或人の親の百ヶ日佛事せしに。折節軒端の梅にうぐひすの啼きけるを聞きて

なき人の日數もけふは百千鳥
　啼くは涙か花の下露

されども。百千鳥は春秋ともに一物を指すにはあらず。百千鳥の群れ來りさへづりなどするをいふ。後拾遺集に

聲たえずさへずれ春の百千鳥
　殘りすくなき春にやはあらぬ

六帖に

百千鳥花になれ行くあだし身は
　墓なさ程にうらやまれぬる

此等は。皆春になれば。百千鳥のきたりさへづるをよみたるなり。塵添壒囊抄に。貫之集を引きて

太山(ミヤマ)には月もさだめず百千鳥
　時ぞともなくなき渡るかな

是は百千鳥の題に入る

いでつとふ春にもあらぬ鶯は
　谷にのみこそなきわたるかな

是は鶯の題に入る

兩種格別なる事明白に論ぜり。元來百千鳥といふは。海邊に鷗の如き鳥の。數百千鳥群れ集る名にて。一物を指すにはあらず。故に水邊に千鳥一つ立てるを見て。和泉式部

友をなみ川瀨に望み立ち居なく
　百千鳥とはたれかいひけむ

其千鳥も近歲まで漢名しれざりしに。彼土にて水喜鵲といふ。清の余曾が三百鳥圖に見えたり。兎角にも鶯の字。此邦うぐひすに充たらざる故に。古今種々の說を設け一決せず。石川丈山は剖葦うぐひすに充てたり。是亦大なる誤なり。剖葦は本草綱目（巧婦鳥集解）時珍曰。一種鷦鷯。爾雅謂二之剖葦一。似レ雀而靑。灰斑色長尾好食二葦蠹一と是なり。此鳥筑前にてギヤウ〱シ。若狹にてゲヽシといふ。皆鳴聲に因りて名とす。仙巣稿（筑前聖福寺僧玄蘇著）葦雀の序に。斯禽也。筑前。肥前最夥といふ者にて。俗に葦原雀といふ。山城伏見邊葦原の中に多く居る。全體うぐひすに似て。腹下白く尾長し。一名蘆虎といふ。兼名苑に見ゆ。鳴聲うぐひすに能く似たり。性甚柔弱にして。寒暑に堪へず。

鸎也と。其誤は集解に。時珍委しく論せり。此邦古昔より百舌もずと訓じ來れるより。此誤出でたり。

日本紀仁德天皇四十三年秋九月庚子朔。是日幸ニ百舌鳥野一。而遊獵。同六十七年。以探ニ其痍一。卽百舌鳥自レ耳出之飛去。

古事記に。裳伏山岡毛受之耳原ありて。山岡は河內國惠賀にあり。應神帝の御廟なり。耳原は和泉國大鳥郡にあり。仁德帝の御廟なり。並に延喜式に見ゆ

此百舌もずにもあらず。又うぐひすにもあらず。是も一種の鳥なり。漢土の書に多く載せたり○易通卦驗云。反舌鳥百舌鳥。能反ニ覆其舌一。證ニ百鳥之音一○淮南子説山訓人有ニ多言者一。猶ニ百舌之聲一○格物總論云。百舌春二三月鳴。至ニ五月一無レ聲。亦候禽也○山堂肆考云。百舌一名望春。一名喚起。江南之人謂ニ之喚春一。聲圓轉如ニ絡絲一。喚起の事後に見ゆ。同名を以て誤る 其外益都方物記に。一名翠碧鳥ともいひ。事物異名に饒舌郎といふも。能く諸鳥の眞似をする故なり。文同が詩に。就レ中百舌最無レ謂。滿口學盡衆鳥聲。自無ニ一語出ニ於己一。徒爾嘲音誇ニ縱橫一といふも。其眞似を惡みてなり

王維が聽ニ百舌鳥一詩に。入レ春解作ニ千般語一拂レ曙能先ニ百鳥一啼。唐詩紀事に見ゆ 然るを。和名抄に。鵙の一名伯勞とし。百舌鳥とする。鸎の一名黃伯勞 古昔よりの誤を承け傳へ。枕草子に嬰の鬪と書きたるを。季吟の春曙抄に。百舌鳥陵と注せしは。次第に誤り來れり。鶪は爾雅に云。鵙鶪郭注に。俗呼爲ニ癡鳥一といへるもの。鄭漈が草木略に。按此似ニ鸜鵒一無レ冠。而長尾。多在ニ山寺厨檻間一。今謂ニ之鳥鵙一と是なり。此鳥の癖として。最初の發聲に何となく諸鳥の眞似をする中に。うぐひすの眞似を能くする故に。彼此と誤りきたれり。此鶪を萬葉集第十六に

吾門の榎の實もりはむ百千鳥
千鳥は來れど君ぞ來まさぬ

秋の比。榎の實熟する時。多く來るものにて。六帖に「鵙の居る野邊の草葉の末さばき。羽もやすめず秋風ぞふく」 此百千鳥は。百津鳥の義。五百津鳥ともよめるが如し。萬葉は秋の百千鳥をよみたるをしらで。此鳥を春のうぐひすに充てたる說。古來より諸書に多く載せたり。僻案集。吳竹集。藻鹽草等も。彼此と覺束なき說あり。源氏若菜卷に見えたる。百千鳥うぐひすといふより。古今集の百千鳥さへづる春はの歌を宗とし。拾遺愚草。林葉集等うぐ

爲レ候〇陸璣草木疏云。黃鳥黃鸝留也。常以二葚（クハノミ）熟時一來。桑間里語曰。黃栗留看二我麥黃葚熟一。亦應レ節趨レ時之鳥也。〇正韻云。雌雄雙飛。鳴聲如二織レ機聲一〇時珍曰。冬月則藏蟄。入二田塘中一以レ泥自裹如レ卵。至レ春始出

此等の諸說を考ふるに鸎は。此邦のうぐひすにあらず。朝鮮又は高麗に多く居るといふ。故に本草家にて。朝鮮うぐひす。唐うぐひすと和訓せり。其形大抵鵙（モズ）の大にして。全身黃色。背少し青綠色を帶びて。腹下白く。尾と羽とに黑毛あり。鳴聲此邦の物に似よりたる所もありといふ。昔年伊豫の大洲山中にきたる事あり。又筑前於呂島に栖むともいふ。說文以下の說に据れば。鶯の出づるとき。桑葚熟する比。雌雄ならびとぶものと見ゆ。楊夔が止妬論に。梁武帝郗后性妬。或言。倉庚爲レ膳療レ妬。遂令レ茹レ之。妬果減レ半と。此事は五雜爼にも見えて。鳥の雌雄ならび飛び。匹偶する故なり。此邦のうぐひすは。形狀も大に相違し。鶯出づる時。桑葚熟する頃。雌雄ならび飛ぶものにあらず。又田塘の中に。泥を以てつゝみ。卵の如きものにあらず。大抵冬春の間に。村里へ來り。二三月の頃は。山中にのみ多く鳴く。樹上に巢をくふものなり。野必大が本朝食鑑に。華之黃鳥兼二本邦之鸎一。形色大小殊者甚矣。近頃。黃鳥雖レ來二于本邦一。未レ得レ聞二雌雄相和。睍睆綿蠻之聲一。則太有レ恨矣といへり。又石川丈山嘲三吾邦黃鸎非二眞黃鸎一詩に。春上二竹梢一雖レ奏鳴。形聲毛羽異二倉庚一。見來爾是鶺鴒類。幸被三人呼二黃鳥名一といふも。うぐひすは鸎にあらざるを誓るなり。羅山文集には。姿餅焦といへる鳥。うぐひすに充てたり。是は事物紀原に。昔人有二遠戍一。其婦山頭望レ之。化爲レ石。其姿爲レ餅。將二以爲レ餉。使二其子偵レ之。恐其焦不レ可レ食也。往已無レ及矣。因化二此物一。但呼二姿餅焦一也。今江淮所在有レ之といへり。此鳥は重修鎭江府志。寧波府志等にも見えて。形狀大に相違するのみならず。舶來もせざるなり。宋の范石湖が。曉聞二婆餅焦一詩に。曉寒燕雀噤二春陰一。珍重淸簧度二好音一。窓色熹微敧レ枕聽。夢成舟艤竹溪深。又陸游が枕上聞二禽聲一詩に。破レ曉一聲婆餅焦とも作れり。其形狀鳴聲を見聞せず。牽強臆斷するは誤ならずや。又百舌鳥うぐひすに充てたる說あり。是は本草綱目に。陳藏器曰。百舌今之

木部に入れて。萬葉下句を寺井のうへの堅かしの花と出だせり。此草の形。葉は和大黄の初生。または車前葉のごとく。一根にたゞ二葉生じて相對す。其葉に淡紫色の斑點あり。山生は四月頃葉間に莖立ちて。莖頭に六瓣の紫花を開く。長五寸許。徑一寸

旱藕（カタクリ）

五分許。唯一莖花のみ俯してひらく。百合花のごとし。瓣の末は上に翻る。希には白花もあり。根は白葱。又は水仙のごとし。北國能登邊にては。此根を採り。煮熟して食に供す。所在寒國に多く生ずる物なれど。今は諸國往々にあり。京都近邊は。叡山。雲母坂。篠原の中に多く生ず。嫩葉を摘みて漬物となし。菜に充つ。又播州神出山。雄子尾。雌子尾の山中に多くある事。播州名所圖會に載せたり。此根を採りて葛を製するごとくにし。餅とするを堅子餅といふ。越前にて多く製す。南部にての製。東府へ献上せらる。又大和宇陀葛屋藤助よりも。おなじく献上す。此草諸國方言多し。京師にてカタユリとも。初ユリともいふ。東府にてカゞユリとも。フムタイユリともいふ。佐渡にてカタハナといふ。延命長生の語より事起りて。危篤の病人一統に服餌する風俗となり。遂には進獻供用の物となるも奇ならずや。

鸎字幷百舌百千鳥

此邦古昔より鸎うぐひすと訓じ來れり。鸎は此邦にいふうぐひすにあらず。別に一種の鳥なり。鸎の形状。漢土の書に數多載せたるを見てしるべし

○格物論云。鸎大勝鸐鴿。黒眉嘴尖紅。脚青遍身黄色。羽及尾有黒毛相間。三四月間鳴聲音圓滑○爾雅黄鳥注。幽州人曰之黄鸎。一名倉庚○説文云。鶬鶊鳴則蠶生。倉は淸なり。庚は新なり。感青陽淸新之氣而初出故名と。章龜經に見ゆ ○禽經云。商庚夏蠶候也。注云。此鳥鳴時。蠶事方興。蠶婦以

初ニ唐曆延載之後。有ニ澄淸一。新書無レ之。年號史家當ニ具載無ニ去取一。不レ知何爲如レ此差誤。見ニ瑯琊代醉ニ）

中元　大鵬（徐氏筆精云。先輩陳中丞甞于ニ荒莽一。得ニ石盆一甚巨。背刻ニ中元庚申僧本玆造八字一。按中元乃光武年號。光武無ニ庚申一。庚申乃明帝之永平三年也。今石盆猶存。余友林熙工掘レ地得ニ古磚一。刻ニ大鵬二年一。大鵬年號無レ攷。書レ之以質ニ博雅者ニ）

以上年號係ニ建元以後一

和漢の異年號。諸書に見えたるもの大率かくのごとし。紀年の始末しれざるは。いづれも臆斷しがたし。此外に。彼土には年號同名數多あり。陳繼儒が偃曝談餘に。漢の建元より。明の正德に至るまで。凡一百餘名を載せたり。其中大半は僭號多し。此邦は。皇統一姓にて。ありがたき事なり。繼體帝の正和と。花園帝の正和と同名なれど。大化以前の年號は。正史に載せざれば。證據となし難し　いづれにも年號は國家第一の重事たるべき事と思はる。餘は革命紀元の條に詳にす

カタクリ

病人飲食進みがたく。至りて危篤の症になると。カタクリといふ葛粉のごとくなる物を。湯にたて、飲ましむ。近歲一統の風俗となれり。最初何者のいひ出だし、事にや。是は本草綱目山草類王孫の釋名に出でたる。旱藕といふ草の根を製したるものにて。東國北國より多く出だし。奥州南部。加州山中及越前より出づる物。最上品なり。唐書方技傳に。開元末。姜撫言。終南山有ニ旱藕一。餌レ之延レ年。狀類ニ葛粉一。帝作ニ湯餠一賜ニ大臣一。右驍衞將軍甘守誠能銘ニ藥石一。曰。旱藕牡蒙也。方家久不レ用。撫易レ名以神レ之爾とあり。餌レ之延レ年といひ。陳藏器の說に。長生不レ飢黑ニ毛髮一といふにより。か、る風俗となりしと見ゆ。此草。昔は堅香子といふ。一名猪の舌ともいふ。萬葉集第十九天平感寶元年五月十二日。於ニ越中國主館一。大伴宿禰家持作レ之。攀ニ折堅香子艸花一。一首

物部乃八十乃𡢳嬬等之挹亂。寺井之於乃堅香子之花

小車の諸輪にかくるかたかごの

いづれもつよき人心かな　コガ通音

萬葉目安に。堅香子花はつ、じに似たる草なりとて新撰六帖には堅香子を讀み誤りて。樫とこ、ろえ。

見え
今日本紀に改二元白雉一とあるも。後世文人の稱する所。定式となし難し。其譯は。續日本紀に。白雉以來朱雀以前といひ。古語拾遺に。難波長柄豐前朝白鳳四年とあれば。白鳳と書きたるにや。水鏡。正統記。賓基本紀。元亨釋書の類證據となし難し。又如是院年代に。天武帝十五年丙戌を大化元とし。和州獻二赤雉一。因レ玆改二朱鳥一とあれども。日本紀に此事なし

天武帝十五年朱鳥の號あれども。年號改元の規則とせず。本朝改元考云。本朝文武天皇創建二大寶之號一。嚮レ此雖レ有二孝德天皇之大化。白雉。天武天皇朱鳥一。而紀二一時之瑞一。未レ爲二定式一。故源親房正統記以二大寶一。爲二年號之始一（本朝改元考は。山崎闇齋の著なり） 源爲憲が口遊（天祿元年冬十二月記） 年代門に。今案自二大寶元年一迄二今年一。總二百七十年。昔大寶以往有二年號一曰二大化。白雉。白鳳。朱鳥一。凡至二白雉一。合九載。其後齊明。天智二帝雖レ治二天下一。專無二年號一。轉更至二天武治レ天。歲號二朱鳥一。其後持統一帝無二年號一。亦文武御レ天歲號二大寶一。從レ此以來永以不レ絕也とあり。此即ち。吾國金貨の始發する日にて。文武帝五年三月廿一日。大寶紀元の號。本朝紀年の權輿。萬世不易の定法とするべし。漢土にも。武帝建元を紀年の始とすれど。文帝の後元と。景帝の中元後元は。史官追書の名として。改元定式の年數に入れざる事。改元考に見えたり

雅安志。及祭祀志に。建武中元元年二年と書きたるを。諸書に誤りきたる事。瑯琊代醉にくはしく論せり

漢土異年號

平初（中天皇氏號地） 太始（地皇氏年號幷見二三一經一） 上皇 永壽 元景
延和 赤明 延康 康泰 龍漢 開皇 無極
（以上道書年號見二紀年通譜一）
方通（幷見二楊雄蜀王本紀一） 中皇（見二三統經序一） 淸虛（見二漢武內傳一） 叢帝
以上年號係二建元以前一

載初 如慕 澄淸 （柳芳唐書。武后載初元年。是月改二天授元年一。三年四月戊申。改二如意元年一。是歲九月庚子。改二長壽元年一。計三年。新書。自二天授元年正月庚辰載初二年十月一改二長壽一。不レ載二如意一。計一年十月。新書。永昌後有二天授一。自二天授一。改二載初一。而唐曆。無二天授一。自二永昌後一便改二載

此山の神大山祇なりとて。案内にそひ奉るに。鈴鹿川水まさりて。渡り兼ね給ふに。鹿きたりて。天皇を負ひ奉りて。驛路の鈴を付けて渡しぬ。因りて鈴鹿といふ。其天皇を案内せし翁を祭りて。油火明神といふ）天平感寳（淸輔奥儀抄云。此號年中改元不レ載ニ于年代暦一。此號在ニ萬葉集一〇按ずるに。是は聖武帝天平二十一年。陸奥國始貢ニ黄金一時の事なり。三貨由來の條に詳にす

因りて考ふるに。此邦大化前後の頃までは。年號紀元の事は。甚疎略にして。制法もたゞず。年數の長短も。正しく記載せざりきと見ゆ。故に諸書に載せたるも。彼此異同ありて。いづれを證據となし難し。續日本紀に。神龜元年十月朔日。詔曰。白鳳以來朱雀以前年代。玄遠尋問難レ明とは是なり。文字の美惡是非は勿論。その頃は。佛道興隆の初なれば。名目多くは佛家より出でたりと見ゆ。孝德帝の御世。蘇我入鹿天誅に伏し。暴虐夷滅せらる後。敎化大に行はれ。人々に制をなす始を示さむとて。大化の號を紀元し給ふ。日本紀略に。弘仁詔。朱雀以前未レ有ニ年號之目一。難波御宇始顯ニ大化之稱一とは是なり。海東諸國記に。繼體帝十六年壬寅始建ニ年號一。爲ニ善化一。五年丙午改元とあり。此帝の七年に。五經博士を置きたまへば。文字の義理も定めて吟味ありつらむ。然るに善化を以て。紀元の始とし。又孝德帝の御世。大化を以て紀元の始とし給ひ。二つの化字五年にして。同じく改元なりしも。燧和仲が言ひしごとく。大卒離合之讖。深微難レ逃とは是ならむ。此邦改元ある時に。難陳といふ事あり。年號文字の義理出據などを吟味し。善惡是非を難じ陳ぶといふ。其時易經の語を引くには。書名をいはず。或文に曰と書くは。故實にて。變易變化を忌み嫌ふなりと。然るに。近歲にも化字を用ひて。紀元ありしは。いかなる事にや。又孝德帝の御世より。天下の政事多く改まり。專に漢土の法則に倣ひ給ふ。故に古代の年號は。皆刊り去りて。大化と紀元し給ふと見ゆ。されども。これより定式となり。末代に連綿せざるなり。又朱雀。白鳳などの號一時の瑞を紀したる。諸書載する所。始末おなじからず。日本紀に載せざるゆゑ。年號の數に入れざるなり。日本紀に大化五年二月庚午朔戊寅。戊寅は九日 穴戸國司草壁連醜經獻ニ白雉一。改ニ元白雉一の號

十五年丙戌改元。四年終。見二古代年號一）大和（持統帝四年庚寅紀元七年後不レ見。見二古代年號一）大長（持統帝六年壬辰改元。九年終。年代。皇代。曆略。如是院皆同○海東諸國記。延曆中解文所レ載。並皆係二文武帝丁酉年一。而四年終）

白雉。白鳳。朱雀。朱鳥之號。始末未レ詳

○白雉（日本紀。孝德帝六年二月庚午朔戊寅。宍戸國司草壁連醜經獻二白雉一。此年爲二白雉元年一。如是院年代記亦係二六年庚戌一。改二元白雉一。○水鏡二本。年代。皇代。曆略。諸國記皆以二孝德帝八年壬子一。爲二改元一。如是院年代記八年無二改元一○舊唐書以二孝德大化乙巳年一爲二改元一）

白鳳（水鏡二本。年代。皇代。曆略。諸國記。如是院皆以二齊明帝七年辛酉一爲二白鳳元年一○大織冠公傳以二孝德帝五年己酉一。爲二改元一。如是院以二六年庚戌一爲二改元一。引二二月長門國獻二白雉一○愚管抄。良醞年中行事並皆以二天武帝即位壬申一爲二白鳳一）

白鳳雉（水鏡二本。天武帝二年癸酉二月廿七日即レ位改二元白鳳雉一。如是院癸酉二改二元白鳳一。二月皇后立）　朱雀（水鏡二本。天武帝即位元年八月改二元朱雀一○如是院以二天武帝十三年甲申一爲二朱雀元一。那須國造碑。海東諸國記並皆同。而朱雀爲二朱鳥一）朱鳥（日本紀天武帝朱鳥元年秋七月己亥朔戊午改レ元曰二朱鳥元年一○如是院天武帝十五年。大化元和州獻二赤雉一。因レ茲改二朱鳥一。日本靈異記天武帝十五年丙戌。改元。朱鳥七年後不レ見。海東諸國記改元同レ上。歷世九年改元）

以上年號係二大化以後一○如是院年代記天武帝十五年爲二大化元一

○證明（詹詹云。江州油火明神の社記に。證明四年と云ふ書付あり。此曆號何代なることを知らず○此年號右社の鰐口にもあり。按ずるに。兼延が名法要集に。大織冠曰。吾唯一神者以二天地一爲二書籍一。以二日月一爲二證明一。此語を兼倶が神代抄に。皇太子の語といへば。法興聖德など、おなじく。推古。舒明兩帝の御時なるべし。油火明神は。江州甲賀郡にあり。油火と名付くるは。昔。文武帝。大友皇子に襲はれ。吉野より鹿伏を經て。この所にいたり給ふ。鹿伏兎是なり。時に山中に燈火見えけるが。忽一人の翁顯れて。天皇に謁し。吾は

皇代。曆略。如是院皆同〇諸國記作二(煩轉一)光元(推古帝十三年乙丑改元六年終。古代年號。諸國記皆同〇皇代記光元作二(弘元一)曆略。如是院並作二(光充一)〇按此年四月。造二丈六佛像一。故爲レ號)定居(推古帝十九年辛未改元七年終。年代。皇代。曆略。諸國記。如是院皆同〇水鏡二本。六年後不レ見。神明鏡二年後不レ見。聖德太子拾遺記定居作二(定光一))見聖(推古帝二十一年癸酉改元五年終。見二古代年號一)倭京(推古帝二十六年戊寅改元五年終。古代年號。諸國記皆同〇水鏡二本作二(和京一)六年終。〇一本作二(委京一)〇如是院作二(和景繩一))景繩(推古帝二十六年戊寅改元五年終。年代。皇代。曆略。皆同〇神明鏡二年後不レ見。皇代記一本作二(和黃繩一)〇按此年年中改元諸書所レ載不レ同)法興元世(推古帝二十九年辛巳改元其終未レ詳。見二法隆寺釋迦佛光後銘一。〇和漢三才圖會。信州善光寺條云。法興元世一年辛巳十二月五日〇源平盛衰記云。法興元世二十一年壬子 〇按此年皇太子薨是與二法興一同浮屠之所レ稱也) 仁王(推古帝三十一年癸未改元六年終。年代。皇代。略曆。諸國記皆同〇水鏡二本。三十二年改元五年終)節中(推古帝三十一年癸未改元一年終。見二古代年號一〇按此年改二元仁王一。又改二元節中一。是與二上倭景繩一同未レ知二孰是一)聖德(舒明帝卽位元年己丑紀元六年終。年代。皇代。曆略。諸國記皆同〇古代年號作二(聖聽一)三年改元)僧要(舒明帝四年壬辰。改元五年終。見二古代年號一。〇諸國記。如是院並七年乙未改元。五年終)僧安(舒明帝七年乙未改元五年終。年代。皇代。曆略。諸國記皆同〇按僧要。僧安以二字體似一。一是必有レ誤。未レ知二孰是一) 命長(舒明帝十二年庚子改元。水鏡二本。三年後不レ見。諸國記七年後改元〇古代年號九年丁酉改元。五年後不レ見。一本作二(明長一)一作二(長命一))今長(改元同レ上。七年終。年代。皇代。曆略。所レ載皆同〇按命今字體相似。一是傳寫誤)

以上年號係二大化以前一〇如是院年代記。孝德帝朝。無二大化之號一

〇常色(孝德帝三年丁未改元五年終。年代。皇代。曆略。諸國記所載皆同) 中元(天智帝卽位元年壬戌紀元四年後不レ見。古代年號所レ載) 果安(天武帝

申改元二年終。年代記。皇代記。春秋曆略。如是院皆同○古代年號三年終）法靖（欽明帝十五年甲戌改元。年代記。皇代記皆同○春秋曆略。如是院年代記作二〔法清〕一○海東諸國記作二〔結清〕一古代年號十六年乙亥改元）兄弟（欽明帝十九年戊寅改元一年終。古代年號。皇代記。春秋曆略。諸國記。如是院皆同一本作二〔兄弟和〕一）藏和（欽明帝二十年己卯改元五年終。年代記。皇代記。春秋曆略。諸國記。皆同○古代年號二十一年改元 ○如是院作二〔藏知〕一）師安（欽明帝二十五年甲申改元一年終。年代。皇代記。峯相記。春秋曆略。諸國記。如是院皆同○古代年號一年後）知僧（欽明帝二十六年乙酉改元五年終。年代。皇代記。曆略。如是院皆同○古代年號二十七年改元○諸國記作二〔和僧〕一）金光（欽明帝三十一年庚寅改元六年終。年代。皇代記。古代年號。曆略。如是院。平家物語。源平盛衰記。諸國記皆同）賢稱（敏達帝五年丙申紀元五年終。年代。皇代記。曆略。如是院。水鏡二本皆同○古代年號作二〔賢接〕一 ○海東諸國記作二〔賢接〕一一本作二〔賢輔〕一又一本作二〔賢博〕一）鏡常（敏達帝十年辛丑改元四年終。水鏡二本。古代年號。年代。皇代記。如是院皆相同○海東諸國記作二〔鏡當〕一一本作二〔鏡照〕一）勝照（敏達帝十四年乙巳改元四年終。年代。皇代記。諸國記。如是院皆相同○古代年號一年終。○古本水鏡勝照作二〔勝烈〕一）和重（用明帝二年丁未紀元二年終。見二古代年號一）端政（崇峻帝二年己酉紀元五年終。皇代記。春秋曆略。水鏡二本。古代年號。諸國記皆同○年代記。平家物語。源平盛衰記皆作二〔端正〕一○如是院年代記作二〔端改〕一○古代年號。端正爲二推古帝二年改元一）喜樂（推古帝即位元年癸丑紀元一年終。見二古代年號一）告貴（推古帝二年甲寅改元七年終。年代。皇代記。春秋曆略。皆同○諸國記告貴作二〔從貴〕一一本作二〔告言〕一○如是院記二年改元作二〔吉貴〕一）始哭（推古帝三年乙卯改元一年終。見二古代年號一）法興（推古帝四年丙辰改元五年終。見二古代年號一○釋日本紀引二伊豫風土記一云。法興元年十月歲在二丙辰一。見二道後湯碑一○一本作二六年一非二六年辛酉改元一願轉。蓋元字以二六字體似一誤。一說此年法興寺落成。故改二元法興一）願轉（推古帝九年辛酉改元四年終。古代年號。年代。

釋義堂が銅雀研記に載せたり。（義堂は貞治年中の人）今其研いづれに藏するをしらず。予が家に大雅堂所持せし舶來の澄泥研圖あり。其形甚奇雅なり。（朝野群載に見えたる猿頭硯。兼頁公藤河記に見えたる龍尾硯の類ならむ）

和漢異年號

和邦の年號。大化前後に異年號ある事。藤貞幹が逸號年表に多く載せ。高昶が和漢年契凡例にも並べ擧げたれど。國の正史に見えざれば。紀年の始末。文字の異同ありて。皆後世より臆斷するもの。いづれも確說とはいひがたし。故に如是院年代記。繼體帝十六年善記注に。或曰。繼體天皇自㆓十六年㆒始めて年號在㆑之云々。分者朱にて書㆑之。年數相違之處在㆑之。不審とあり。漢土の異年號も。建元以前にあるもの。大率相同じ。紀年の始末。臆斷し難し。諸書に載する所。その異同を擧ぐる事左のごとし

和邦異年號

○列滴（孝靈帝之時。紀元始終未㆑詳）璽至（應神帝之時。紀元始終未㆑詳。一說。沙功皇后攝政四十年庚申。魏齊王正治元年。贈㆓倭王印㆒。璽至年號據㆑此）嘉紀（武烈帝即位元年己卯紀元四年終。同五年改元。是字下一字磨滅未㆑詳。歷年四年後無㆑紀）善化（繼體帝十六年壬寅紀元五年終）。以上三號見㆓古代年號㆒○海東諸國記云。繼體帝十六年壬寅。始建㆓年號㆒。爲㆓善化㆒。五年丙午改元○春秋曆略年代記。皇代記並皆四年終○如是院年代記。善化作㆓〔善記〕㆒四年終　正和（繼體帝二十年丙午改元五年終。年代記。皇代記。春秋曆略。海東諸國記皆同。皇代記作㆓〔正治〕㆒○古代年號二十一年丁未改元四年終○如是院年代正和元太子立年六十一）敎到（繼體帝二十五年辛亥改元五年終。古代年號。春秋曆略。年代記。皇代記。古本水鏡。活字水鏡皆同○續敎訓抄云。安閑帝敎到六年丙辰○海東諸國記作㆓〔發到〕㆒）寶元（安閑帝二年乙卯紀元五年後無㆑紀。見㆓西林寺佛光後銘㆒○如是院年代記無㆓寶元號㆒）僧聽（宣化帝即位丙辰年紀元四年後無㆑紀。春秋曆略。年代記。皇代記。海東諸國記。如是院年代記皆同○古代年號水鏡二本至㆓五年㆒）明要（欽明帝二年辛酉紀元十二年終。春秋曆略。年代記。皇代記皆同○皇代記作㆓〔明安〕㆒○古代年號九年改元。得字下一字磨滅未㆑詳。海東諸國記作㆓〔同要〕㆒）貴樂（欽明帝三年壬

ある時に。家々に是を作り貯へおく時は。第一菜蔬の資となり。又米穀とおなじく荒年の助ともなるべし。琉球國には。其法制あると見えて。是を掘る時に。頭人帯劍にて男女に下知をなす事。此邦の農監田地を巡り。檢見するがごとし。或一故家に。琉球國より書き來る實圖あり。左のごとし

彼地は。暖國ゆゑ海邊砂地に栽ゑて。莖を生ずる時。其莖に土をかけおけば。その所より根を生じ。塊をなすなり

澄泥研

澄泥研は書畫好事家の貴重する所。其名義をいはず。按ずるに。高似孫が硯箋澄泥研 澤州金道人 澄泥硯有二呂字一。堅緻可レ試レ墨○文房四譜云。魏銅雀臺遺趾人。多發二其古瓦一。琢硯甚工。貯水數日不レ燥。世傳。其瓦使下二陶人一澄泥上。以二絺綌一濾過。加二胡桃油一埴レ之。與二他瓦一異○李之が硯譜云。虢州澄泥唐人品レ硯以爲二第一一○博聞類纂云。俗呼レ硯爲二硯瓦一者。以二硯中隆起如レ瓦仍不レ留レ墨。故以名レ之非也。昔人多取二古瓦一。琢爲レ硯。故有二是稱一。如二今人所レ蓄魏之銅雀臺瓦硯一是也。耶州萬道與二盧陵澄泥研一。乃其遺意其外硯史賈氏談錄等に。澄泥研を造る法あり。遵生八牋に。澄泥研圖あり 銅雀臺の物は。彼土にも絶えてなく。僞造の物のみ傳はると見えて。王荊公の詩に。吹盡西陵歌舞塵。當時屋瓦始稱レ珍。甄陶往往成二今手一。尚託虛名動レ世人見二優曝談餘一 然るに。銅雀臺の物此邦に來りし事あり。昔天龍長老春屋葩禪師海舶に求め得て。幕府源公に獻ぜらる。背に建安十五年と記し。面上に紹聖元季七月十六日東坡居士銘。黃庭堅書とあり。

澄泥研

大雅堂藏

にゑきにうてける。新猿樂記に仕㆓式神㆒など。或は榮華物語に見えたる口寄。台記に寄㆓帝巫口㆒たる邪術など。皆其支流餘裔と見えて。今の世までもあり。愚陋恒民を眩惑するのみか。尊き神名に混雜し。大に正道に害あり。有識なる人出でたまひて。邪法惡魔の種類を糺明し。驅除いたしたきものなり。此邪法飯繩等の術を破るに。莽草を燒けば行ひ得ずといふ（莽草は本草綱目毒草に見ゆ。俗に樒といひて。佛前に供する物）さもあらむ。周禮に。煎氏掌㆑除㆓蠱物㆒。以㆓莔草㆒薰㆑之。則死と見ゆ。蠱も同類相兼ねたる邪毒なれば。凡べて此種類を破るには。莽草を薰ずべし

一說に。此種類蠱毒を治むる蘘荷を用ふるもよろしといふ。鄭漈が通志に。搜神記を引きて。此事をいへり。是も周禮庶氏掌㆑除㆓蠱毒㆒。以㆓嘉草㆒攻㆑之とあり。嘉草は蘘荷といふ

甘　藷

甘藷さつまいもと訓ずるは。最初薩摩へ來す故なり。琉球いもといふは。彼土に多く作る故なり。元來は蠻種にて和漢ともになき物なりしが。今は和漢とも甚多し。白赤黃の品種ありて。赤き者は閩書に。蕃薯根如㆓山藥㆒。皮薄而朱とあり。貝原翁は赤きを赤芋とし。甘藷を常のさつま芋とし。兩種分別せらるれど。實は兩種一物なり。此物和邦流行の本は。東涯の門人に。靑木敦書字厚甫昆陽と號す。（小名文藏といふ）此人登用せらるるの後。國家有益の事ども多く考索いたし。自おもへらく。遠島流罪の地は。五穀に乏しく。罪人等餓死せむ事を憐み。國字を以て蕃薯考一卷を著はし。培養收藏の法を委しく記し。官刻なりて島々諸國へ下し賜はり。今のごとく天下國家に充滿し。米穀とひとしく流行する事にはなりぬ。故に靑木敦書の碑に。甘藷先生墓と題せり。實に國家有益の事いふばかりなりし。此物人に益ある事。時珍綱目に詳なり。授時通考には。十二勝を載せたり。異邦には固より食糧に充つるゆゑ。南方草木狀には。藷糧とも見え。博聞類纂に種㆑芋三十畝。可㆑省㆓米三十斛㆒ともいへり。又酒にも釀すと見えて。類腋に。徐玄扈の說を引きて。甘藷可㆑充㆓籩實㆒可㆓以釀㆑酒ともいへり。制用によりては。酒にも作り。又葛粉餅の代ともなる。鈴木俊民が甘藷記あり。蕃薯百珍といへる書などには。百品の料理やうを載せたり。國中農民の制

遂には檢地定免の兩法となりて。造化の生物を農監と民と。相きしらひ。地上の新穀を上下する事にはなりぬ

伊　豆　那

世に伊豆那の術とて。人の眼目を眩惑(クラマ)す邪法惡魔あり。何の世。何者の傳へしかはしらず。大倭本草に。天竺の茶耆尼天の法なる事を載せたり。伊豆那といふは。飯綱。又飯繩とも書く。もとは奧州仙臺飯繩山に此法を祭るゆゑ。飯繩三郎と呼ぶといへり。其法飯繩使に高倉楊梅小次郎といふ者。舟屋文治といふ者と。仕合せし事。宗祇物語に見えたり。此邪魔また信州戸隱山。越前日永嶽。武州高尾山にも祭れり。遠州秋葉山三尺坊の祠も。以前戸隱山より移し祭るといふ。其茶耆尼天。一に陀吉尼。或は茶吉尼。又は陀祇尼とも書けり。茶耆尼といふは。元來狐の別名なり。其證は。著聞集に。知足院殿何事やらむ御望深かりける事侍りけるに。大權房といふ效驗の僧に。茶耆尼の法を行はせられけり。三七日に滿ずる日。知足院晝寢の夢中に。狐の生尾を得て。其明日午刻に御悅の事。公家より申され。件の生尾淸き物にひめ藏め。其後花園大臣の御跡。冷泉東洞院に御渡りありしときも。祠を構へて祝はれたり。福太神とておはしますめりと載せたり。京都葭屋町一條の南福太明神是なり。初は下立賣高倉にあり。寛永中九條殿の舘舍を建つるに因りて。今の地に移す。稻荷を祭るといふ。實は狐なり

茶耆尼といふは。外國の名にて。高野山運敞が谷響集に。茶耆尼有レ二。謂三實類與二漫茶羅衆一。實類茶吉尼名レ噉二食人心一。雖二業通自在祭者得一レ福。名爲二邪法一。漫茶羅中茶吉尼者。如來應迹噉二盡心垢一。住二大涅槃一。所二以名一レ乘。如二天龍八部一皆此義也とあり。其噉レ心などいふは。皆邪法にて。魔僧妖巫のする所なり。文德實錄に。席田郡に有二妖巫一。其靈轉行噉レ心。一種滋蔓民被二毒害一とあるも。茶吉尼の邪法なり。太平記に。妙吉侍者外法成就といふも。此種類にて。盛衰記に荒神鎭して財寶を得るといふも。實は陀吉尼天なりといふ說もあり。元來狐を使ふ故に。佛家にて陀耆尼天の別號を。白晨狐王菩薩。或は貴狐天皇など稱し。稻荷の神體は。卽ち是形像なりといひ。稻荷の社には。飯繩といふ物を瑞垣延るといふ。稻荷に狐のあづかる義なし。初午稻荷の條に詳にす　かゝる邪法惡魔。古へより世に傳はりて。撰集抄にいへる物の識。または宇治拾遺

りといふは。白沙ならむ。舍利の降るべき理さらになし。又鮓答ならず。別に一種バサルと名付くる獸あり。渤泥波斯等の人持ち渡る事。間々あり。バサルといふは。此獸の腹中より出づるといふ說あり。馬。狗。猿。猪の類。皆此病癖あるときは。此獸にもあるべし。一物には限るべからず。浪華蒹葭堂に。バサル獸を寫眞せしあり。圖のごとし

外に一種阿媽港より渡す。大舍利あり。是は鮓答にあらず。菩薩石なり。本草綱目にも見えて。嘉州娥眉山より。出だす事。諸書に多く見ゆ。此邦にては。能登國鳳至郡菩薩谷より出づる者。色黃にして。長一寸許。又大和國反田よりも出づ。又對馬の六萬石も同種なり

檢　地

檢地の二字。此邦古書に見えず。毛視地の義なるべし。稻穗を毛といふ。東鑑に。田園作毛とあり。砂石集に。秋の毛の上を賜はりて下ると見えたり。檢地といふは。農監の人。稻田を巡り。稻穗の毛を見て。其年の豐凶を定め。歛法をおこなふをいふ。漢土の檢蹈に似たりともいふ。往古は此事無かりしに。世の降るにしたがひ。戰國打ち續き。上は下を疑ひ。下は上を僞るやうになりて。出で來たる事と見ゆ。信長公勢州一國を治むる時。瀧川一益といふ人。始めて檢地を入れ。諸家是に傚ひ。諸方に檢地を沙汰す。その頃。信雄。信包兩人勢州南北の境を改めらるゝ時。雲出川を以て定めんとせらるゝに。或老人進み出でゝ。古歌を引きていはく

風早の池の流のしたゞりは
　安濃と一志の境なりけり

此歌を以て其境決定する事。北畠物語に見えたり。其後天正年中に。大閤秀吉公日本國中悉く檢地せらる。山城國粟生野光明寺は。西山派淨土宗なり。領內兩度まで檢地せらる。其時の奉行は。細川幽齋なり。光明寺の住持幽齋の前に出でゝ狂歌せり

御狩野のわれは雉子とぞなりにけり
　檢々地にてほろ〳〵と鳴く

幽齋其意を感じて。殿下の御前はからひ。當寺の領內ばかり赦免ありし事。雜々拾遺に見えたり。其後文錄四年の檢地高と。末代に稱するは。其頃に改め出だす所をさしていふなりと。武德編年に載せたり。

神を練修して。氣液の凝竭したるなり。然るを漢土にても。佛者より尊重し。最初舍利塔を建つ。是佛氏塔を建つる權輿なり。高僧傳に。康僧會吳赤烏十年至ニ建業一。孫權使レ求ニ舍利一。既得權爲造レ塔。晋帝過レ江更修ニ飾之一。此中國造レ塔始也とあり。其後佛道次第に盛に行はれ。年々冥祥奇瑞をいひ立つるより。遂に天下後世に及べり。宣律師の廣弘明集に。隋高祖仁壽元年六月十三日。詔立ニ舍利塔於諸州一。靈瑞甚多とあり。此時王郡といふ人。舍利感應記を著はして。諸州の奇瑞を悉く載せたり。又舍利を見て。佛者となる人もあり。林間錄に。宋文潞公見ニ魏府老元華嚴化ニ舍利一。大駕歎異。自レ是竭ニ誠内典一とあり。是等皆氣血精液の凝竭したる病癖をしらざる故なり。有識の人は左にあらず。舍利を尊重する事なく。靈瑞奇怪をとらず。通鑑綱目梁大同二年下に。致堂胡氏曰。五色珠琲名曰ニ舍利一云。是物也。是精氣所レ結也。非ニ益レ民者一と見ゆ。朱文公は佛學も致されたる人なれど。佛舍利の靈瑞奇怪はとらず。朱子語類に。釋氏之學務使ニ神輕去ニ其幹一。以爲ニ坐忘立脫之備一。其魄之未レ盡者。則流爲ニ膏液一。散爲ニ珠琲一。以驚ニ動世俗之身目一。因論ニ釋氏多有ニ神異一。疑其有レ之曰。此未ニ必有一。使レ有亦只是妖怪といへり。此邦へ舍利を渡すは。敏達天皇十三年秋九月なりしが。蘇我馬子試置ニ舍利於鐵質上一。以ニ鐵鎚一打レ之。質鎚共摧。舍利不レ毀。投ニ之水一水自能沈浮。同十四年起ニ塔於大野丘北一（高市郡和田村）日本紀に見えたり。其後崇峻帝元年三月。百濟國釋惠慈來。使下恩率首信一。貢中佛舍利及沙門惠聰上よし。善隣國寳記に載せたり。引き續きて佛道盛に行はれ。今のごとく尊重する事にはなりぬ。氣血病癖の凝竭も。人の用ひやうによりて。金銀明玉よりも尊重するは奇ならずや。其物の生起を究理し。用不用は和漢共に有識の人にこそあるらめ。されども舍利の生ずるは。精神氣血の凝竭なれば。尋常の人には多くあらざるべし。正德二年十一月關東一統に舍利降りた

バサル獸

魃の時。山上に持ち行きて。雨を乞へば。直に雨降るといふ。又務にある者は。日本紀（垂仁紀）に丹波國桑田村有レ犬。名曰二足往一。是犬咋二山獸名牟士那一。而殺レ之。則獸腹有二八尺瓊勾玉一。因獻レ之。是玉今有二石上神宮一といふ。石上神社は。神名式に載する布留御魂神社にて。後世ふるの枕詞に用ひて零(フル)とも雨になど。萬葉によみたるは。鮓答雨乞の意に。自然と其調感符するも亦奇なり（布留の社は。山邊郡布留村にあり。曾丹集に「春雨のふるの都の花見ると。三笠の山をさしてのみこそ）又魚にあるものは。間々出づる事あり。山城宇治上林峯順が家に。鯛魚を料理せしに。腹中に八九寸の圓石二つありし事。中山三柳が隨筆に見ゆ。又介にある者は阿古耶貝(アコヤカヒ)を始め。（阿古耶は尾州知多郡）石決明(アハビ)。淡菜(イガヒ)。魁蛤(アカガヒ)。蛤(ハマグリ)。蚌(ドブガヒ)。蜆(シヾミ)の類。おの〳〵皆珠あり。其中阿古耶貝より出づる者。上品にて所謂眞珠は是なり（山家集に「阿古耶とる貼菜の殼を積みおきて。寶の山を見するなりけり）今にては。伊勢。肥前を上品とす。下品の者を貝の玉といふ。されども介毎にあるにはあらず。介を數多破りて。稀に得る者なり。凡べて此等皆病癖の凝竭したる者にて。得難きによりて。皆寶とす。人にある者は舍利なり。北山醫話に。牛之有レ黃。狗之有レ寶。魚之有二鮓答一。人之有二癖石一。僧道之有二舍利一。謂二之病一可也といふは。能く卓見發明せり。然るを。法華經に。以二佛舍利一起二七寶塔一といひ。或は釋迦佛の骨子は。如レ珠光瑩堅固。名曰二舍利一など佛者より尊重し。さま〴〵の奇端をいひ立つるにより。いつとなく金銀寶玉よりも珍重する事になりぬ。草木子に僧之有二舍利一。其心源澹然無レ欲。秘耀含靈眞積レ力久。氣血精華結成レ之也。故及二其火化一。炳然獨存といふも。氣血の凝竭したる事を說くなり。物理小識に。徽士死。茶毘之心內包二觀音像一。如二刻成一。此皆志局不レ分。精靈氣液因レ感凝レ形といふもおなじ。昔或女を葬りしに。古冢の棺內。其心堅くして石のごとし。鋸にて挽き破るに。中に山水の形ありて。畫くがごとし。其傍に女あり。此女山水を好む病癖なる事。程氏遺書に見えたり。又宋の潛溪文集に。一人の像を火葬せしに。たゞ心のみ化せず。狀如二佛像一。此僧平生に。大舟三昧の法を行ひし。一心の凝結する所なりと。此邦にても。雄略帝の皇女。腹中有レ物如レ水。水中有レ石といふも。病癖石瘕なり。また惠心僧都を火葬せしに。心內に三本の青蓮華ありしといふも。皆是精

兵制日本風土記云。男子斷髪魁頭○東西洋考云。男子魁頭削髪○海防纂要云。各倭頂髪開塘。外髪稍長○劉民鴻書云。其國人皆髡髪孝服則留頭○昭代叢書（外國竹枝詞）毎逢朔望。鬀新頭。（自注曰。叫禮日皆剃頭）此外にも數多あれども。大抵皆室町家以來。當時のごとく大きくなりたる形を書きたるなり（琉球國にもこの風俗あるは此邦に倣ひしにや。中山傳信錄に。剃頂髪留外髪。一圍縮小髻於頂之正中とあり。西川忠英が增補通商考に。交趾東京は男女倶に齒黑くし。男は小き月額を剃るとて。其圖を出だしたれど。是は月額にあらず。頂の正中に小き圓形を剃る。此邦幼童の中剃といふがごとし。前髪は落さゞるなり

舍利并バサル

佛者のいふ。舍利は翻譯名義。金剛明經。法苑珠林等に多く載せて。尊重せしより。此邦にも永観律師が舍利講式。妙幢が舍利驗論。亮汰が舍利禮科注などに。佛者より至寶奇瑞の事さまぐ\に傳はれど。是は獸畜魚介にも多くあるものにて。實は病癖の凝竭したる物なり。獸畜にある者は。本草綱目に載せたる鮓答なり。其色白黑黃赤ありて一樣ならず。人にある者は。火燒する故に。多くは瑩白なり。狗にあるを狗寶といひ。猿にあるを猿棗といひ。猪にあるを猪黶といふ。其中馬に多くある者なり。至りて大なるは毬鞠のごとく。小なるは木槵子(ツブ)のごとし。其形も一樣ならず。或は三角。或は扁(ヒラタク)種々あり。正圓なる者は腹中にたゞ一塊ある故なり。數塊聚り生ずる者の種々に變ず。至りて小なるものは。馬糞中に雜り出づるなり。（伊賀の方言に。小なる者を石の糞といふ）鮓答の訓へイサラバサラといふは蠻名なりといひ傳ふれど。是は訣のある名なり。陶宗儀が輟耕錄に。蒙古人禱雨。惟以淨水一盆。浸石子數枚。淘漉玩弄密持呪語。良久輒雨。石子名鮓答とあり。梵語のへイサラダバサラタといふを飜譯すれば。雨金剛。雪金剛となる。毎年雪降る時に。小童の悅びて。雪やこんご霰やこんごと唱ふるは。雨雪金剛をいふ詞にて。雨を祈るに。此物を用ふる故なり。名義抄に。金剛石。梵語跋折羅(バサラ)とあれば。蠻名ならず。雨を祈るに唱ふる梵語より出でたる名なり。此邦にても。美作國一宮末社に。雨乞祠あり。其神體は。鮓答なりといふ。又武州雨降山。雨降明神に納むる鮓答は。大瓠子の如く。旱

冠下の粧より出でたる名なり。その形。月の出でしほに似たるを以て。假名文には月しろとよめり。沙石集に。月しろある入道と書し。撰集抄に月代など鮮に見ゆと書けり。悅目抄に。「櫓棹たて湊もしらぬ夕暮に舟漕ぎ出だせ夜半の月代」最初は右の風俗なりしに。鳥羽院の御時より。强き裝束を用ひ。男眉の毛を拔き鬚をはさみ。鐵漿を付くる風俗となりて。此事海人藻芥に見ゆ いつとなく其月代鬢上へ剃り入るようになり。高倉院の御時は。月代の形批判すと見えて。兼實公玉海の註に。安元年中其鬢不ㇾ正。月代太見苦とあり。年山打聞にも此事をいへり 其頃より打ち續き。源平戰國の世となり。內兜を透さむ爲に。冉々に大きくなりしと見ゆ。平大納言時忠月額を顯はす記あり。されども南北朝の比までは。今の如くはあらざりしや。大塔宮熊野落の時。片岡八郎。矢田彥七頭巾を脫きて側にさし置く。實の山伏ならねば。月額の跡隱れなしと。太平記に見えたり。永祿十一年。足利義照流落し。濃州にいたり。織田家に據り。信長上洛を催し令して曰。信長に同心せむ者。月代を廣大にして。半頭を剃り。下髻をすべしと。是より月代大きく風俗をなせりと。織田家記。將軍上洛記等に見えたり。今の風俗は其頃よりか。木村長門守重成が首實檢に入れける時。兜の內に蘭奢待を燒かしめ。口に鷄舌香(チヤウジ)を含み。かほど最後をたしなむ身に。月代の少し伸びしは如何と耳語(サヽヤク)を。兩公再び御叱ありて。其は風氣などが。又は兜のしまりの爲に。わざと剃らざるかなるべし。御意に從ひ。改め見るに。果して上意のごとくなる事。翁物語に見えたり。心得ある武士はかくこそあるらん。一說に。男の鬚剃る事は天智天皇。未大海皇子とて東宮におはせしとき。疑を散せむとて。鬢髮を除剃し給ふ事あり。又源氏柏木卷にも見えたれど。頭髮を剃る事はなく。五刑に及ばぬ程の輕罪は。髮刑とて頭髮を剃る事はあり。今のごとく貴賤一統に頭髮を剃るは。漢土の辮髮に傚ひ。みな僧尼より事起るともいへり。元來冠下の粧より出でたる名ゆゑ。今にても市民奴僕の徒。成童以後額に角を剃り入れ。其後に前髮を落すを。皆元服すといひ習はす。古の遺意なり。漢土の書に。此邦の月代を載せたる數多あり○平壤錄云。日本其產ニ育男女ー。初以密請ニ一友ー。認爲ニ義父ー。子年十五以上。親父厚ㇾ禮。送ㇾ子歸ニ義父家ー。斷髮魁頭 ○今浙

此歌人口に膾炙して。千載の絕唱といふ。是は後拾遺集旅部に。前大僧隆辨の歌に

七十の年ふるまゝに鈴鹿川
老の浪よる影ぞかなしき

是をふみてよみ。七十歲によくかなへり。然るに丈山の別名を凹凸先生といひ。丈山詩集の覆醬集にも凹凸窠十二景の詩あり。喜㆓詩仙圖成㆒詩にも。風雅新開凹凹花と作れり。是まで多く見覺えたりし丈山の書。落欵にも凹凸窠夫。凹凸主人など多くあり。何とてかゝる奇字を用ひたるかと思ひしに。其譯あり。瑯琊代醉巻十二 土窪曰㆑凹。土高曰㆑凸。古之象形字也。周伯溫乃曰。凹當㆑作㆑坳。凸當㆑作㆑垤。俗作㆓凸凹㆒非。是反以㆓古字㆒爲㆓俗字㆒也。東方朔神異經云。大荒石湖千里無㆓凸凹㆒。平滿無㆓高下㆒。畫記云。張僧繇畫㆓一乘寺壁㆒。遠望如㆓凹凸㆒。近視則平。名曰㆓凹凸花㆒。俗呼㆓一乘寺㆒爲㆓凹凸寺㆒。江淹靑苔賦云。悲㆓凹險㆒兮惟流水爲㆓馳騖㆒。高僧傳云。谷之應㆑音語雄而響厲。鏡之鑒㆑像形曲影凹。字皆名人文士所㆑用。其來夐矣。豈至㆔伯溫始貶爲㆓俗字㆒乎とあり。此文はもと楊升庵外集卷六十四に載せたり。丈山叡嶽の麓。凹凸の地一乘寺村隱居せられしゆゑ。漢士の一乘寺凹凸に擬して。かゝる奇字を用ひられたり。又別名六々山人といふは。右三十六人の詩仙を以てなり。是も歐陽修が六一居士の稱に傚ひたると見ゆ。いづれも譯のある事なり

武家月代

今世の武家一統に月代するを見るに。前額を剃り落し。後髮際(ハヘギハ)にて厚一寸許殘し置き。殘髮を四角へ引きわくれば。宛も法師のごとく見ゆ。如何に大平の御世なればとて。武具すべき人は兜を戴くとき。必難儀すべし。平人は論なし。心得ある武士は平生に氣をつくべし。元來月代する事は。此邦上古はなき事にて。源平以前の頃より。此風俗出で來しと見ゆ。最初何者の始めしか。されども昔の月代は。今の月代にあらず。其名付くる訓義にてしるべし。昔の月代は。冠下に月額を入るゝ事にて。日本紀に冠サカとよめり。又鷄冠トサカといふにおなじ。ヤキは鮮(アザヤカ)の約。鮮(アザヤカ)は明(アキ)サヤカの約。冠下の額に角を剃り入るゝ事。却月のごとく。其跡鮮明なるゆゑ。サカヤキは冠明(サカヤキ)なり。冠の半額を半月形ともいへば。もとは

學分れて兩岐となる。不レ歸レ宋則歸レ明。不レ之レ明則之レ宋事に成りぬ。因りて考ふるに。惺窩。徂徠の二先生は。當代文學の儒祖たるべし。天下の庠校學館に祭酒たる人。二先生の支流餘裔と知るべし。其德を仰がむ人は。行狀碑銘を見をべし。或一故家に徂徠先生の眞像を祕藏す。因りて拜膽し。惺窩先生と幷べ出だす

六波羅寺額

東齋隨筆に。佐理大貳任はて丶。鎭西より上る時。伊豫國の泊にて。風波惡くて船を出だす事能はず。

六波羅寺

縦二尺餘　横六尺餘

其夜の夢に。三島明神社の額をか丶しめむとて留め給へる事見えたり。卽神の御前にて額を書きて打け(ウタセ)れば。順風になりて煩なく著岸せり。日本第一の能書なり。三島の額と。六波羅密寺の額とは此人の筆跡なりと。さもあらむ。筆力勁健。當時汎々の書ける及ぶ所にあらず。塵塚物語に。參議佐理卿は三島明神の神言によりて。日本想鎭守三島大明神といへる額を書き給ひけるとぞ（伊豫三島は。越智郡の島にあり。大山祇神を祭る。伊豆の三島は。伊豫より遷す。攝津の三島は神代よりあり）

丈山歌幷凹凸の字

石川嘉右衞門源重之は。丈山と號す。寛永十三年五十四歳にて。藝州を出で丶京師に隱れ。板倉周防侯と會友なりしが。其後叡嶽の麓。一乘寺村に隱遁の居を搆へ。詩仙堂を建てられ。詩人三十六人の像を狩野尙信に書かせ。自其詩を書きて常に書籍を友とし閑居せり。承應元年七十歳に及びて。三河國泉鄉は。其故鄉たるを以て歸るべき志ありしが。板倉侯にかくと申されしに。許さゞりければ。今よりは京師に再び出でじ。御元へも參らじとて歌よめり

渡らじな瀨見の小川の淺くとも

老の浪よる影もはづかし

意の氣象あれども。顚倒錯置多く。頗和習あり。漢人作家の文法に傚はざると見ゆ。於レ是江府に物部氏徂徠先生起る。初め程朱の書をよみ。壯年の頃。蘐園隨筆を著し。尙濂洛の風ありしが。中年後より翻然として學を變じ。大に宋儒の非をさとり。性理議論は言ふまでもなく。瑣々たる注解は。目も觸れず。挺然特立一家の學を創立す。辨道一卷を著し。孔子の道は先王の道なる事を辨じ。一家の學要を示し。次に辨名二卷を著し。仁義道德より以下。名目の訛を正し。論語徵。大學。中庸解を著し。合はせて經學發揮の書と定め。詩文のごときは特得の見

惺窩先生眞像

を以て。古文辭を唱へ。四家雋を著して。韓愈。子厚。于鱗。元美を作文の規則となし。唐後詩絶句解拾遺等を著して。皇明詩選。明詩正聲の純粹をとり。李王の詩に注解を加へ。是を藝苑の規則と定め。大に復古の學を唱ふ。もとより材氣豪邁。特絶大器。其量千古に卓越するを以て。雅樂象胥。軍旅法律。及諸子百家の道を究め。各注解國字を施し。多く生徒を誘ふ。實に東方一偉人なり。其門に出づる者百人。入室の弟子みな英材なり。春臺。周南。南郭。東野。金華。灊水の徒。靡然として其學風に偃し。雷同震撼して天下の學を一新せり。自レ是以來東方の

徂徠先生眞像

先生の事を孔子の道のすたれたるを興しける背の山人と。磐齋が大原紀行に書きたり。背の山人は惺窩先生の事なり。徂徠與二都三近一書にて。王仁。黄備。菅原。惺窩の四氏有りて。稱レ天語レ聖。斯四君子者。雖三世尸二祝乎學宮一可也と褒稱せり。先生別號數多あり。北肉山人の外。柴立子。廣胖窩ともに市原村閑居の地による。都句墩も先生の別號なるよし。松岡恕庵が詹詹言に載せたり。（都句は蘇鐵の別名。未しらずといへり）先生の高弟林羅山弱冠の頃より。朱子集注をよみ。會友講究せられしを。明經博士家より難詰せらるれども。惺窩の門に入り。頻に講究し。登庸の後。朱學を奉教して。遂に泮宮の祖となる。引き續きて山崎闇齋出で、。數多の生徒を教授するも。專朱學を唱へ。其徒殊に多く。各皆列國侯伯の師となり。天下の學。程朱。宋儒の教。濂洛の風となれり。惺窩先生四書首書。羅山四書點。闇齋四書點など。おひ／＼に國家に廣まり。三歲の童子も四書の名をしる事になりぬ。是皆其もとは。惺窩先生の功德餘論の及ぶ所にして。最。景仰すべき事なり。或一故家に。先生の眞像。並に先生の書を祕藏す。予就きて眞像。及花押を拜膽す。溫良恭嚴。威而不レ猛。其人たるを知るべし。次第に治平の世の中。文學の士。おひ／＼數多傑出し。伊藤仁齋先生の如き。初は朱學を尊信し。大極論。性善論。心學原論等を著し。濂洛の風なりしが。中年の頃より見識發明する所ありて。朱學性理の說をとらず。大學非孔書辨論。孟古義等を著し。六經を宗とせず。宋儒理學の教を排斥し。別に一家を立て。古に遡らむとするより。古義堂を標して。多く生徒を教授す。縉紳高位の人も數多その門に學びたまひき。されば物窮而變は。天の道なり。惺窩以來の學風。性理議論のみ高くして。先王の大道に疎く。孤單の弊あり。仁齋古義を唱ふるに及びて。性理の學。聊か衰兆を見はし。變化の氣あり。仁齋性理の非を覺り。古義を標する一世の大儒なれば。論孟を以て聖人の道足れりとし。易經古義を著はし。是を謂ひて卜筮之書とし。聖人十翼をとらず。其餘の聖經。大抵取捨あり。大宰の斥非にいふごとく。六經を以て雞肋とするより。其解說する所。肯綮に中らざる事多し。畢竟は宋儒の範圍を免れざる故なり。詩文のごときは風雅の趣なく。作文數章。大抵達

なく。又嘉文亂記及長濟草などいへる書夢にもなき事なり。是は瞽者玄信が。一時作說の妄言なるを。伯養信じて。遂に海內に流傳せる事。日夏高繁が兵家茶話に委しく論ぜり。當時伯養其友藤井懶齋に語る。懶齋虛實を質さず。其妄言を國朝諫諍錄に載せしより。次第に世に妄傳する事になりぬ。新書籍目錄に。日本にて往昔より四書を講ずといへども。大學中庸は朱子の章句を用ひ。論孟は何晏。趙岐が注。皇侃。刑昺が疏を讀み來れり。慶長年中に。惺窩先生。林羅山先生。朱子の新注を讀みてより以來。今に新注を用ふ。自レ是宋儒の道學盛に世に弘まれりといふ。何人の說か知らざれども。證據とすべし。惺窩先生は。永祿四年に生る。冷泉家なり。先生系譜略云。出二于法性寺攝政道長公六男長家卿一。中略參議侍從累世住二播州一。歲時入朝。有二子數人一。長曰二爲勝一。爲二左近衞權少將一。次曰二敎勝一。次乃先生也。幼而爲レ僧。既長常讀二聖賢之書一。志嚮二儒術一。後還俗。名肅。字斂。父號二惺窩一。先生初め薙髮して相國寺に入り。名蕣。妙壽院と號し。舜首座ともいふ。浮屠を遁るゝに及びて。四方に漫遊し。始めて四書。五經。朱子の新注を讀みて、大に發明する所あり。然るに當時戰國海內擾亂の世なりし故。質問講究する人なきを悲み。奮激して漢土へ渡り。所見を質さむと欲し。既に出船なりしに。中流にて暴颶にさへられ。鬼界が島に漂流し。志遂げずして歸り。自以爲聖人に常師なし。四書。五經に求むるに玄くはなしと。京北市原村の山莊に閑居し。頻に程朱の學を唱ふ。別名北肉山人といふは。居地八景の其一。北肉峯にとれり。此先生當代開國以來。儒道の先達にて。朱學の嚆矢なり。其證は。先生與二朝鮮姜沆一書に。赤松公今新書二四書五經之經文一。請レ予欲下以二宋儒之意一。加二倭訓于字傍一。以便中後學上といへり（赤松は播州の赤松廣通也）程朱の學名價世に高く。天下の學に志すもの。皆先生の門に入る。林羅山。松永昌三。那波活所。菅玄同。堀杏庵の徒。當時の俊才。皆先生入室の弟子なり（林羅山。松永昌三。那波活所。堀杏庵。惺窩の門四天王と稱す）朝鮮の姜沆來聘せしとき。先生に謁し。出で、人に語りて曰。朝鮮國三百年來。未レ有下如二先生一人上也。と賞歎せり。此先生よりして。聖人孔子の道。次第に世に廣まり。戰國以來の世。既に地に墜ちむとするを再興し給ふゆゑ。

臥雲日件錄。第十六寶德元年閏十月三日。長照院竺華來過。竺華曰。吾翁大椿筑紫人也。少年東遊。就二常州師一。學二四書五經一。始聞二孟子講一。時食不レ足。就レ人求二豆一斗一。掛二之座隅一。日熬二一握一。以療レ飢耳。如是者凡五旬〇建內記嘉吉元年四月十五日下云。晦翁集朱熹集事也三十冊賣本被レ召二置禁裏一。此代八百匹自二長橋局一到來。送二清大外記許一畢。彼請取進レ局畢。後人本人了淳請取。外史見レ送レ之。加二一見一返遣畢。以上の諸說を考ふるに。朱學の書。始めて本朝に讀み初めしは。後醍醐帝の御時と見ゆ。獨清軒玄惠師の最初開講せられしも。四書集註にて。禪閤兼良公の四書童子訓は。朱註に据りて編したまふ禪閤は應永九年生。文明十三年薨。年八十歲。公卿補任に見ゆ然るに。日野弘資卿手錄に。四書は。正嘉の比。始めて渡りたれども。其後打ち續きても渡らず。公私倶に是を用ひしむるは。文錄以來なりといふを據とする者あり。此正嘉といふは。後深草帝の正嘉なるや。後醍醐帝の御時まて。六七十年の間。埋れ居たるや。儒家用ひざるや覺束なし。大抵宋學の書。珍重するは。應永以來の事なれば。此正嘉は。室町將軍の頃。正長。嘉吉の間をいふにや。康富記日件錄などに。孟子を珍重し講談するも。朱子の新註なり。先輩の諸說考索の足らざるより。瞽者の妄言を據とせり。其妄言は。二山義長字伯養小名彌三郎。時習堂と號す。石見の人寬永年中。江戶駒籠に在りて。儒を業とし。始め浮屠の書をよみ。後王陽明。朱紫陽の書をよみ。發明する事ありて。朱王學辨を著はす。此人の妻。垂水氏に娶る。名三。字は省君といふ。貞操文學の賢女なり。時に佐々木玄信といふ瞽者あり。諸家系譜を記臆して。其證なき家系は。自己說を作りて。人を欺く。或日。伯養が許にいたる。伯養其妻垂水氏の家系を問ひければ。卽答に。長濟草云。垂水廣信稱二河內守一。伊勢垂水人。事二後醍醐天皇一。所レ著有二嘉文亂記六十五卷一。廣信嘗在レ京。與二藤房一論レ學。一日語二藤房一曰。宋大儒朱晦庵之書。前レ此六年始入二本朝一。世儒未レ有レ知レ焉。我幸深尊二信之一。請今借レ之。宜レ覃二思於斯書一。藤房諾。然藤房之學。雅混二儒佛一。以レ故卒與二廣信一不レ合。廣信延文元年三月下世。年九十六といふ。伯養聞きて大に喜び。其明證を得たりと。當時の諸儒に語る。相傳へて垂水廣信は。朱學の權輿といふ。然るに。古今に垂水廣信といふ人

主人大に喜びて生狀（イツクリ）せし佛法僧一羽取り出だし見せらる。又主人手錄せし禽譜に。形。鳩に似て。目大に青色。嘴赤黃を帶び。目の左右の郭赤く。足淡赤にして。爪黑く。頭頰より喉に至りて黑く。右の赤色を以て頭頰の間をわかつ。喉下及翅羽の端。皆群青色。頰より背及胸腹皆黑質にして。綠色を帶び。翅羽尾並に黑しと記されたり。其後。主人その形を寫眞し。予に贈らるゝもの。下のごとし

朱子學四書來由 井二先生像

吾朝の儒學。上古はさておき。程朱の書。四書。小學。近思錄の類。舶來せざりし時は。いかなる學風なりしにか。五經十三經の類。大抵漢唐諸儒の注疏を用ふと見ゆ。四書。朱學の書始めて舶來せし事。先輩諸說も數多あれど。某年某地に舶せし事定かならず。藤井懶齋が國朝諫諍錄。永井貞宗が本朝通紀。寺島良安が倭漢三才圖會。井澤長秀が俗說辨などに。伊勢國司垂水廣信與㆓藤房㆒論㆑學。朱晦庵之書。前此六年。始入㆓本朝㆒よし。長濟草に見えたりといふを。朱學の權輿とすれど。夫は二山伯養が許にて。佐々木玄信といふ瞽者の妄言なり。（後に詳にいふ）○貝原篤信和事始云。古は魯論五經の類。皆漢唐の注疏を用ふ。吉野先主の時。獨淸軒健叟（玄惠法師が事なり）始めて程朱の義を唱ふ。（兼良公の尺素往來に記せり）是程朱の學。日本に傳はる始なり○山崎闇齋答㆓眞邊仲庵㆒書云。朱書之來㆓于本朝㆒。凡數百年焉。獨淸軒玄惠法印始以㆑此爲㆑正。而未㆑免㆑佛。藤大閤亦以爲。程朱新釋可㆓肝心㆒。而猶惑㆓乎佛㆒（二說相同）○南山編年錄云。元應元年十月四日四書集注舶來○中村惕齋曰。後小松帝應永十年癸未。南都歸船載㆓四書集註詩經集傳㆒來。同年八月三日。達㆓之洛陽㆒。於㆑是東福寺不二岐陽和尙始講㆑之○新書籍目錄云。（亨保十四年己酉冬。文照軒柴橋著）朱子の新註本朝へ渡る事は。後花園院御宇。普廣院殿御治世。東福寺不二庵岐陽和尙。始以㆓朱子註㆒講談したまへり（以上二說相同）○中原康富記云。應永廿二年八月明月詩。吉亭軒康富。書程詣㆓寶生庵㆒之處。今日孟子談義延引云々。明日可㆑讀之由被㆑申。明日予出仕之事候間。不㆑可㆑參之由令㆑申。無念之至也。又云。亨德三年十月四日壬午晴。參㆓青蓮院殿㆒。孟子第六被㆑遊㆑之。無㆓論談㆒矣。無㆓異儀㆒不㆑寫㆑之。同十一日乙丑晴。參㆓御室㆒。孟子第三終㆓御談義㆒申退出。過㆓菩提院㆒。用非時㆒矣○

僧鳥鳴。衆人聞奇異。自二去三日一講二法華經一〇藤原敦光記云。下野國二荒山有二佛法僧一〇醍醐寺鐘銘云。山城國宇治醍醐山有二佛法僧一〇性靈集云。於二高野山龍光院一後夜聞二佛法僧一詩。寒林獨坐草堂曉。三寶之聲聞二一鳥一。一鳥有レ聲人有レ心。性心雲水倶了了〇本朝無題詩。暮春於二醍醐寺一卽事。中原廣俊 七律 櫻桃李色花空。盡佛法僧音鳥獨鳴。自注云 此山有二佛法僧一故云 此外にも通念集に。佛法僧の鳥の事は。靈峒閑林の中にて。曉方一夏の間鳴くなり。雄佛法と鳴けば雌僧と聲を合はするなり。鴉鷺記には。佛法僧は。鳥に似たりとも見ゆ。夫木集に。三首

我國は御法の道の廣ければ　　慈圓
　鳥も唱ふる佛法僧かな

鳥の音も三の御法を聞かすなり　　家隆
　深山の庵の明方の夢

松の尾の峯靜なる曙に　　光俊
　仰ぎてきけば佛法僧なく

此外にも

憂き事を聞かぬ深山の鳥にだも
　鳴音はたえな三の御法に

とよむも此鳥の事なり。深山に居る鳥にて比叡山。日向霧島。くる孫ヶ嶽にも間々居るといふ。高野山に居る者は。大。白頭翁(ヒヨドリ)に似て。指の前後二つに分るといふ。佛法僧と名付くるは。いかなる義にか。日本紀 推古紀 聖德太子十七條に。篤敬二三寶一佛法僧也。佛寶。法寶。僧寶。謂二之三寶一。又住持三寶 同體三寶。別相三寶。大小乘三寶といふ事。華嚴經に見えたり 懺悔物語 花かづらの條 に。佛法僧の三寶みちみとりと書きたるとおなじく。御法の聲は法華の義にて名付けしならむ。魏書釋老志に。其始修レ心則依二佛法僧之三歸一。若二君子之三畏一也といふも。おなじ意なり。元來漢土に聞かざる鳥ゆゑ。貝原の大和本草にも。たゞ日本の鳥なりとのみ記せり。

佛法僧鳥

蒹葭堂主人寫

予謂ふに。池北偶談に。王得臣が塵史を引きて。安陸有二念佛鳥一。小二於鸜鵒一。色靑廣。唐韋蟾岳麓道林詩。靜聽林飛念佛鳥といへり。此等にやあらむ。予過ぎにし頃。浪華蒹葭堂にて此事を語りしに。

貝原の諺草にも。是を引けり又雲笈七籤に。瓜熟蔕落。啐啄同時とあり。箇禮集巻二太刀折紙條に。此分之由。啐啄之返答に因りて。御返事申し上げ候ともいへり。啐啄は俗に咋合よろしといふ程の事にて。當時天下の諸侯大小ともに。釁を窺ふ節なれば。雙方とも咋合よろしきを見計るべきとの事なり。信玄は機山と號し。大僧正達台密禪奥儀の人にて。當時天下の諸侯。弓矢の取り扱ひを論じ。信長。謙信。六角義秀。淺井長政。及。昭代の事を語られし事。和論語に見えたり。未然を透察する武略明智の人なり。惜しきかな其父信虎大惡無道により。不孝の名をとれり。甲陽軍艦に載せたる詩十七首。十九歳までに作られ。松同レ花題にてよまれし歌を見るに。かゝる戰國爭亂の世に出で、詩歌にも心を寄せられたるは。感賞すべき武將なり。不孝の名をとれりとはいへど。其父信虎の大惡無道致し方なきにより。家老舊臣と相談し。姉聟の今川義元と謀り。其國を退出せしむ。室鳩巣の非言茶話に。此事を論じて。信玄名は不孝にして。實は孝なり。十八歳より一生論語を手にとらず。其言に曰。此書孝道を說けり。我が如き不孝の子の見るべき書にあらず。予是に於て落涙して。信玄の不孝無レ據事をしれりといへり。五十三歳病卒。辭世の句に。大底還他肌骨好。不レ塗ニ紅粉一自風流。また平生自警の歌に

人は城人は石垣人は堀
情は味方仇は敵なり　身の鏡に載せたり

凡べて。國を領する諸侯は。大小によらず。誰も〳〵かくありたき事なり

信玄。吾身人の善惡を評判するを拙き女子に問うて。人の飾詞を質されし事。諫草に見え。又義家。頼政二人とも。禁中の妖怪を鎮めたりしを。平家を語る檢校信玄の前にて語りければ。當時武道の衰へたるを歎かれし事。鳩巣の不忘抄巻二に載せたり

佛法僧鳥

佛法僧といふ鳥。此邦に居る事。諸書に多く載せたり〇日本紀略云。延喜六年右大臣光修法華八講。佛法僧來鳴。同十八年右大臣忠平於ニ五條家一。限ニ五日十坐一。講ニ說法華經一。佛法僧鳴ニ樹上一　〇扶桑略記裡書云。延喜十八年八月十四日夜。五條后宮松林佛法

中虚しく。縁より聲を出だす。是は權貴の人。または聲音不足の老人など。人を呼召するとて。旁に置くもの。多く牛馬の頂に掛くるなり。是も亦漢土にあり。品字箋に。金鈴以レ銅爲レ之。虛ニ其中一。而裂ニ

驛路鈴　常陸國鹿嶋　正等寺藏

長壹尺一分

此處ハ臺ナリ　其脚三方ニアリ

眉目鼻モ皆隱起ニテ　菊邊幅ノ處ニ破目アリ

高芙蓉寫

其半一。納ニ小鐵子一。搖レ之令令作レ聲。郵卒懸レ腰。與ニ驢馬掛レ頂者一是と見ゆ。三種同異物。おの〱分別すべし

啐啄

武德編年集成に。甲州武田信玄へ交通せん爲に。信州伊奈の下條彈正信氏を以て。書を酒井左衞門尉へ贈りしに。紙表に啐啄の二字あり。當時其意を辨知せず。然るに。勢陽の江南和尚岡崎を經て。東國に趣く。石川日向守家成是に對し。彼文字の旨を問はれしに。和尙の言ふは。鳥の卵を破るに。その節あり。太。早ければ。未水にて益なし。餘り。遲ければ。腐ると云ふ意味なりと答ふ。此事御聽に及ぶ所。萬端時を待つ事肝要なり。武將一人此心を存すべき旨命ありて。後日柴山小兵衞を召して。鷹も能く夜居をなし。其節を得て。鳥を捉(ツカマ)しむる事。啐啄の心かと宣ふとぞ云々。予謂ふに其比江南和尚答ふるに。書名出據を引かざるはいかなる事にか。此二字禪家の書に多く見えたり

○傳燈錄巻二十 如何是啐啄之機。又師上堂曰。諸方只具ニ啐啄同時眼一。不レ具ニ啐啄同時用一（又十九同二十九にも見ゆ）○普燈錄。有レ僧問。如何是啐啄。同時用院曰。作家不ニ啐啄一。啐啄同時失 ○禪林寶訓音義云。啐啄。如ニ鷄抱レ卵。小鷄欲レ出。以レ嘴吮レ聲曰レ啐。母鷄憶レ出。以レ嘴嚙レ之曰レ啄。作家機緣相投而解。亦猶レ是矣。

旅人の山越わぶる夕霧に
驛の鈴の聲ひゞくなり

東海道驛路鈴といふ書に。むかしは驛路鈴とて。勅使外國へ趣きたまふ時。賜はりて付けしなり。此鈴を付けたる馬は。晝夜にかぎらず。關の戸もあけて通しけりとあり。神祇式に。凡驛使入二太神宮堺一者。到二于飯高下樋小河一。止二鈴聲一といふも是なり。この鈴は。漢土にもあり。大明會典に。遞二送公文一。照二依古法一。一晝夜通一百刻。每二三刻一行二一鋪一。晝夜須レ行二三百里一。無レ分二晝夜一。鳴レ鈴走遞。前鋪聞レ鈴。鋪司預先出レ鋪交収といひ。又元の經世大典に。凡文書往來。卒腰二革帶一。帶二懸鈴手槍一。挾二襏襫(カツパ)一。齎二文書一以行。夜則持二火炬一焉。道狹車馬者負。荷者。聞レ鈴則遙避二諸旁一。夜亦以驚二虎狼不若一。又響及レ所レ之鋪一。則鋪人出以俟二其至一といふも是なり（世事通考全書に。載せたる提鈴も是と覺ゆ）驛路鈴聲は。杜荀鶴が。秋宿二臨江驛一詩（漁舟火影寒燒レ浪。驛路鈴聲夜過レ山）和漢朗詠に見えて。人のよく知るところなり。江談抄（卷四）に。時棟語曰。忠文民部卿爲二大將軍。下向時。宿二駿河國清見關一。軍監清原滋藤夜詠二此句一。將軍拭レ涙とあり。今禁中にあるは。形。四角にて。大貳寸許。厚壹寸許上に鈕(モチフ)ありて。兩面に驛路鈴といふ三字を隱起(オキアゲ)にし。鈴口は常の鈴におなじ。先年聖護院より御還幸の時。隱岐國社司より奉るといふ。その摸寫を陶器とし。間々世にあり。古は此驛鈴を掛けたる船を鈴船といふ。日本紀仁德天皇三十年秋九月朔。親幸二大津一。待二皇后之船一。而歌曰。難波人(ナニハビト)鈴船執(スズブチトラセ)腰腦(コシナヅミ)。其船執(ソノフチトラセ)大御船執(オホミフチトレ)。これを私記には。鈴以て飾れる船なりといへど。水驛に置レ船事は。廐牧令に見えたれば。驛鈴を掛けたるべし。中納言行平須磨へ左遷の時。船に此鈴を掛けたるを。上野近き海邊の雉子。其聲に驚きしとなむ。千五百首に顯昭（一に行平とあり）

鈴船を寄せ來る波に驚きて
須磨の上野に雉子鳴くなり

今も勅使などの旅行には。乘輿下乘の時。かならず此歌を吟じ給ふとなり。昔遠州掛川の近邑西方村。龍雲寺福天權現の土中より堀り出だし、驛路鈴は。いかなる形なるか。又一種俗人の覺え侍る驛路鈴といふは。松岡玄達の詹詹言に。漢土の虎撐を出だし。其圖を載せたり。徑貳寸餘。厚壹寸。形輪のごとく。

茅窓漫録

茅原定著

驛路鈴

驛路鈴は。常陸國鹿島明神正等寺の什物にして。其長壹尺壹分。耳目口鼻皆具る。形甚奇雅なり。又河内(丹北郡長原村)日蔭明神の寶物にもありしが。今は同地丹上郷彌五郎が家に秘藏せり。その形。鹿島のものとは少々異なる所ありて。面目見え兼ぬといふ。驛路鈴は。古き書にも數多見えて。鹿島に傳ふるものは。扶桑見聞私記。(第六十一)建久五年十二月下に。大庭景義曰。驛路鈴の事出づる所をしらず。神代より相承ありし驛路鈴といふは。何れの御代よりか。鹿島神の寶前に奉納あり。其形。柄香爐に似て。其音たかし。昔は彼の鈴を賜はり。朝敵退治の人持參し。彼の鈴を以て軍兵を指揮しけりといへり。能く惡魔を降伏すとなり。今俗にいふ所の驛路鈴といふは。驛馬の韆頭(オモガヒ)に付くる鈴をいふなり。驛路の鈴聲夜過レ山といふも。驛馬の鈴なりといふ。今按ずるに。驛路鈴と名付くるもの三種あり。鹿島。日蔭兩社に傳ふるものは。神代より相承ありし。其所謂詳ならず。一説に。是は鬼面鈴なりともいふ。又驛馬鈴を。後世押しなべて驛路鈴といふ。是は日本紀孝德天皇大化二年春正月甲子。宣二改新之詔一に。驛馬傳馬及造二鈴契一。定二山海一。又凡給二驛馬傳馬一。依二皆鈴傳符尅數一。凡諸國及關給二鈴契一とあり。又天武紀に。令レ乞二驛鈴一といひ。續日本紀(文武紀)に。飛驛鈴八口。傳符十枚とあるも。皆是なり。公式令に。親王及一位驛鈴十尅。傳符三十尅より。初位驛鈴二尅。傳符三尅に至るまで。品級次第あり。其餘。江家次第にも見え。禁秘抄に。俊實通俊曰。件鈴太有レ興物也。或六角。或八角とあり。又は天子御讓位の時。固關の使。上卿に御馬を賜はり。内舍人一人官符と。驛鈴二口とをたまふも。皆おなじ。萬葉集第十八に

　　つぶな子がいつきしとのに鈴かけぬ
　　　映(はゆ)まくだれり里もとゞろに

堀川百首に。大江匡房

　　逢坂の關の關守出で、見よ
　　　　驛傳ひに鈴聞ゆなり

新撰六帖に。衣笠内大臣

茅窻漫錄目錄

茅窻漫錄目錄終

漫錄自敍

此書。寫本三冊。予が名を著はして。以前より。坊間に商賈する者あり。其書は。予が手錄にあらず。假說の大僞書なり。予幼年の比より。群書に涉獵するを好み。蠹魚の癖ありて。書き物さへあれば。おのが食物にせむと。目に觸れ。手に輟めずして。遺忘せざらむため。一々書きぬき。反故雜りの漫錄數十卷あり。弱冠の比より四方に漫遊する事十年餘。見覺え聞き覺えたるも。亦數多あり。壯年に及びて。浪華に羈留し。六七年の間。編述草稿のまに〳〵書き加へ。寫眞模帖などあれば。彼此と考の事。其傍に記しおきたり。本より編述すべき意なければ。校合改竄は勿論。くさ〳〵反故雜りの小冊子なりし。文化丁卯の秋。京地へ來りし時。一二書肆の人親しく訪ひ來り。机邊に漫錄あるを披き見て。頻に懇望し。見了ると。卽時返却せむといひ。おのが家に久しく留めおけり。其人は一年餘にて身まかりぬ。二三年經て。後に尾張より來る書生あり。予が名を著はしたる漫錄寫本三冊。彼地にも數多ありしといふ。予大に驚きて。いかなる漫錄にやと問へば。寫眞模帖など玄か〳〵の由語る。こはさきの書肆の人。此漫錄を本とし。有るにもあらぬ事など。おの等が業に僞り作りたる書。彼地へもおくりしと覺ゆ。されども。編述草稿に暇なく。今更一々せんすべなく。打ち捨ておきけり。其後東府にて。或人の隨筆に。漫錄の書名出だせりといふ。乙亥の春。又一二書肆の人來り。校合改竄なるうへは。急ぎ板に彫りたき由。頻にいふまゝ。以前より坊間にあり觸れし漫錄は。大僞りの書なる事をしめし。更に編みてつかはしむ。其書も年月ふりて。やう〳〵此比にうながし來るにより。其首に辨ずといふ

文政己丑の春　　　茅原定識

後撰集戀の歌に

人妻に心あやなくかけ橋の
あやふきみちは戀にぞありける

朱子自警詩。世上無レ如二人欲險一。幾人到レ此誤二平生一ともいへり

同じ集に親ある女に隱て通ひけるを。男もしばしは人にしられじといひ侍りければ。よみ人しらず

なき名ぞと人にはいひて有りぬべし
こゝろの問はゞいかゞ答へん

淺見安正曰。誠意之歌也といへり

紅花謂二末摘花一。源氏物語に見えたり。草に就きて。其花を摘み採るなり。紅色これをくれなゐといふ。呉藍の轉語なり。又もみといふ。捫の字の義。紅色は其花汁を捫出し。物を染むるなり。後撰集に

雁鳴きてさむき朝の露ならし
龍田の山を捫み出だすものは

此紅葉をいふなり。此歌。本。萬葉集に出て、下句春日山を令黃物者とあり。凡。萬葉集もみぢ用二黃葉字一。唯。一首用二紅葉字一。第十卷に見えたり

猿丸大夫歌

奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿の
聲聞く時ぞ秋はかなしき

菅公此歌もて詩を作りて云。秋山寂々葉零々。麋鹿鳴音數處聆。勝地尋楓遊宴處。無レ朋無レ酒意猶冷。此詩尋來をもて貼二蹈分一。看以係レ人。說者恐是ならず。按。源順沙門敬公集序云。林鹿踏レ葉之夕と。蓋。此歌を取るなり。然則係レ鹿說者爲二古義一。語路もまたよし

典略云。嘉禾始熟。而農夫先嘗二其粒一。此乃惟農夫の事のみ有志の士。豈其しからんや。孟秋天子嘗レ新。月令廣義云。沈約四時珍新未三曾得二薦祠一者不レ得レ嘗。况。神國之人乎。鎮座本紀云未レ至二新嘗會一。不レ食二新穀一。蓋。古之制也

鋸屑譚 終

いのらずとても神や守らん

の歌。亦出二於同口一而如レ合二符節一。蓋。是此神の家風。精誠通レ神のしからしむるなり。夫誠者天人之道也。無レ誠無レ物祭レ神致二如在一者。白帛ヲ云ッ乎。拜趨云乎。神詠之妙。至矣。盡矣

眞俗交談記。有二賀表松筆事一。資實云。取レ松之山非二一所一。然れども春日山をもて其始とす。匡衡記これを男山にとり。明衡記これを春日山にとり。敦光は賀茂の山にて取レ之といへり。松筆は謂二筆管一歟。司空圖隱二中條山一。芟二松枝一爲二筆管一曰。幽人筆當レ如レ是

耶舍法師傳云。西國以三牛能耕レ地出二生萬物一。故以二牛糞一爲レ淨。梵王帝釋及牛並立二神廟一以祠レ之。佛隨二俗情一故同爲レ淨。楞嚴經云。牛糞取二雪山大力白牛一。若非二雪山一。其牛臭穢不レ堪レ塗レ地。事林廣記云。西天南尼華羅國事二西天佛教一。尊レ牛屋壁皆塗二牛糞一。以レ此爲レ潔。各家置レ壇。以二牛糞一塗レ壇。然後置二華水熱香一供レ佛といへり

貞德の問に。深情の所レ寓詩にありや。はた歌にありや。幽齋の答に白居易の詩に。大底四時心總苦。就中斷レ觴是秋天。古今集に。此詩をもて歌を詠じていふ

何時はとはときはわかねど秋の夜は
物おもふ事の限りなりける

夜の一字を添へ得て。轉有二感慨一矣と。見二貞德自筆書一。

萬葉集香具山歌云。天降付天之芳來山。又云天降就神之香山。風土記云。天上有レ山。分而墮レ地。一片爲二伊豫之國之天山一。一片爲二大和國香山一。晉西天僧惠理登二杭州飛來峯一。嘆曰。此是中天竺國靈鷲山之小山嶺。不レ知何年飛來因名レ之と。同日之談也

白玉翁狂歌蘭花讃に

山蜂のすがたに花は咲き出で、
芳香や遠く人を追ふらん

杜詩。花底山蜂遠趁レ人の句をとれり

僧契冲歌

長月の天の長田に今日や苅る
鋭鎌さやかに見ゆる三日月

杜詩。新月似二磨鎌一。天長田見二神代紀一。鋭鎌見二中臣祓一

てこの文字好まぬ身なれば。巴の文字も書き流すべきにあらず。三巴記云。巴州閬ノ白水東南流。曲折三回。如二巴字一。按に。巴の字に流すもの曲水の意なり

文德實錄云。從四位上和氣朝臣仲世奉公忠謹。每夜寢間に臥す每に。首を宮闕にむかはしめしとぞ。古歌に

何國にも君住むかたをまくらにて
跡にはなさぬ都なりけり

文武紀云。賜二諸王卿等帒ノ樣一。元正紀云。朝服の帒と。其賜二帒ノ樣一者。似レ謂二魚袋一。文德實錄云。帝聞二光定在レ山資用絕乏一。別賜二乞食袋一。濟二山中之急一。三代實錄。納糒帶帒千枚可レ帶二士卒腰底一。以支二急速之備一。和名抄。幐於比不久呂。嚢之可レ帶也 古事景行記。裏書云。錐文案レ之。今世俗火打嚢と號し。刀につくるものは。此因緣なるべし。いと興ある事なりと。萬葉集に

はりふくろこれいたはりぬすりふくろ
いまはえてしが翁さびせん

はりぶくろは針袋なり。萬葉集多くよめり。すりふくろは。或いふ火打袋なり。或は籠袋也。旅行可二以代レ籠之袋也。新千載集。親盛唐物使にて行くに。金の火打火嚢(はくそ)に沈平して。信夫摺の袋に

打ちつけに思ひ出よやと故鄕の
忍草にてすれるなりけり

源氏物語に春の手向のぬさ袋あり。近世好事の者。書袋といふものを傳ふ。其製僧家の三衣袋と云ふものに似たり。おもへらく。菅神のはじめて製する處なりと。是文獻通考所レ謂挾嚢之類乎。漢書。文帝集。書嚢爲二殿帷一。事林廣記云。吏員書袋以二紫紵絲一爲レ之。又以二狸皮一爲レ之。各長七寸濶二寸厚半寸と見えたり。宋呂蒙正爲レ相。夾袋中有二冊子一と。五車韻瑞に見えたり

菅家の歌に

此たびは幣もとりあへず手向山
もみぢのにしき神のまにまに

又扈二從雲林院一。不レ勝二感歎一。聊。叙二所觀一詩序云。供奉無レ物唯花色與二鳥聲一。拜謝有レ誠。唯至心與二稽首一而已。其旨正可三以相發二矣。而所レ謂

心だに誠の道にかなひなば

づく。盡。是。殼子の潮汐にしたがひ。以集ニ於海濱一。歌客吟情をよせて。費ニ艶辭一耳

土佐日記にほやのつまのいずし。按に。和名抄に云。老海鼠和名ほや。貽貝和名いがひ。五雜俎云。海參一名海男子。其かたち男子の陽莖のごとく然り。淡菜の對なり。海參は。卽。海鼠。淡菜は。卽。貽貝。其形女子の陰口のごとく然り。故又名ニ東海婦人一。屠本畯が海錯錄云。誰謂ニ之東海婦人一乎。當レ謂ニ西施不潔一耳。蓋貫之亦たはむれていふ。貽貝は。則。老海鼠の妻なりと。與三謝肇淛云ニ淡菜之對一。自相符耳。老海鼠雖下與ニ海鼠一有上レ別。而亦類也。貽貝謂ニ之伊須之一。者は。貽貝のすしをいふなり。次鮓鰒あり。可ニ以見一矣。或說以爲ニ穗屋妻之蝙蛣鮨一。義通じがたし。和名抄云。蝙蛣和名爲。其かたち蚵に似て大なるものなり。豈可レ爲レ鮨之物乎。況爲と伊假字の用甚異なるをや

清少納言云。公卿殿上人は。替る〲盃取りて。果てには夜句貝といふ物。男兒などのせんだにうたてあるを。御前に女ぞ出で、取りける。和名抄に。錦貝はやくのまたら貝。俗說に西海夜久島あり。彼島所出也と。今人おほく石決明のうるはしきもて盃とす。或浮瀨をもて名とす。楊升庵が丹鉛錄云。車渠作レ盃。注レ酒滿過ニ一分一不レ溢。車渠一名海扇。和名帆立貝。今多く匙杓に作るといへり

源順狂歌云。夜行翁夜々警レ火。舊府中呼曰ニ火危彼誰何一。今人呼曰ニ火用心一。蓋。火危の轉訛也。事物紀原云。夜行擊レ柝。伐ニ更籌一。曰ニ蝦蟆更一と見えたり

源順の貴賤。交を同うするをそしる歌に。共耻ニ白物之入ニ靑雲一。白物しれものと訓せり。按に。漢書。蘇林注云。色理淸徐而心不慧曰ニ淸狂一。淸狂如ニ今白痴一也。白痴亦しれものと訓ずべし。萬葉集に。世間之愚人。愚人の訓しれたるひと、す。源氏物語に頭ノ中將何某もしれもの、物語せんといへり。榮花物語云。すべてしれかたくなしき。宇治拾遺集云。老いしらみたると此意なり

菅家三月三日詩序云。書ニ巳字一而知ニ地勢一。江匡衡三月三日詩序云。因ニ巳字一而添ニ風流一者也。四季物語にいふ。今日なん曲水の御宴。今ばかりはじまるべきにこそ。素より土器もたらぬ谷の戸閉。まい

鄙哉。源氏物語。空穗物語などにいふ。窮(せまり)たる大學の衆と。彼此古今相同。而大江匡衡與二藤原行成一書載せて本朝文粹にあり。其書憤恨滿レ紙。傍若無人。盖素受領を望みて。除目不レ及。故至二于此一也。時爲二大子賓客一。而非二受領一不レ能レ潤レ屋故耳。久しく居二冷曹一。而不レ得二受領一者。愁レ窮恨レ貧之事。詳に源氏物語に見えたり。匡衡得二受領一の後。行成に寄する書。亦載せて文粹にあり。其書。意氣揚々。諛辭媚言。與二前書一悲喜忽飜レ手。氷炭易レ面。其何不レ耻之甚。不レ暇レ顧二潤レ身之德一。古の才子もとより如レ斯乎。匡衡抱二豪邁不羈之才一。赤染を妻とし。擧周を子とし。孫に匡房あり。名望一門に萃る。可レ謂レ盛矣。而時屬二聖代一。所二依賴一亦得二其人一。盖。行成卿天資溫柔寬厚。視下報二匡房一書及爲二實方中將一。所レ落二其冠一進退自若上。可二以知一耳。又匡衡以二姓名一爲レ名。盖。慕レ之也。古有下以二孔子釋迦等一爲レ名者上。有レ詔禁レ之。然亦有二伊尹一。可レ謂二奇辟一也。匡房襲二祖名一也。復有二乃祖之風一。博學强識有二口才一。而世莫二比者一。故蔑二視時人一。今猶有二江帥之諺一。以レ此故也。官至二太宰帥一。故稱曰二江帥一。見二林氏之書一

甲香は貝香也。貝香は香螺の葢也。香螺俗夜啼螺といふ。傳云。能止二小兒夜啼一。故名づく。又名海鳥。兼好法師云。武藏國金澤浦多有レ之。海人これをへなたりといふ。義未レ詳。甲香は薰衣香の方に多く用ひて。藥用に入れず

明朝學士薔薇花を佩びて。諸の惡臭をさくるよし。群芳譜に見えたり。今世忍冬酒を製するに。亦多く此花をまじふといへり。蠻酒方銅甑をもて。薔薇花を蒸し。その露のしたゝりを採りて。疔瘡惡瘡に傳ふ。これを阿蘭陀にろさろんと名づく。是花の露なり。近比一種の花の露を鬻く。蘭の露。梅の露。菊の露等の品あり。此は是點二滴酒盞一以レ芬芳を助くるもの、み。香錄に大食國花露五代の時蕃使以二十五瓶一獻ずと見えたり

野(モトノマヽ)大云。凡。蛤貝の類不レ可二勝計一矣。若夫身無レ貝。空瀨貝はもとより空殼の名なり。わすれ貝。妹脊貝。片子貝。背見貝。袖貝は惟意趣の所レ寓もて名づくるなり。華貝。櫻貝。梅の花貝。千種貝。撫子貝。增穗貝。蘇枋貝惟形色の似たる所をもて名

水の色とす。母道也。母は但陰ニ育於中一。故不レ現也。按。蠶豆花のごとき白黑相雜るといへども。其黑色黯々墨のごとし。古人此色を紫といふものは甚非なり。唯此花此色をあらはす。いまだしらず。此他此色ある事を。恨らくは不ニ純色一。雖レ然黑白相半。尤分明則化工之妙。不レ可ニ測識一矣

六帖の歌に

祈りつゝ賴みぞ渡る泊瀨川
　　うれしき瀨にも流れ逢ふやと

千載集に

憂かりける人をはつ瀨の山おろし
　　はげしかれとは祈らぬ物を

祈ニ戀於泊瀨一事。住吉物語に見えたり。蓋起ニ于齋宮一也。天武紀云。欲レ遣ニ侍大來皇女于天照大神宮一。而令レ居ニ泊瀨齋宮一是也。遺跡今在ニ氣波比坂下一。自レ本不レ涉ニ觀世音事一耳

蝙蝠和名加波保里。今かうもりと名づく。いふ蚊欲(かをほり)なり。或云。川守なり。薄暮善川上に飛翔し。以て蚊蚋をくらふものなり。順。和名抄蟲豸類に入れたり。蟲にしたがふもてなり。諸本草皆載ニ之禽鳥部一。翼あるをもてなり。禹貢有ニ鳥鼠同穴山一。或云。蝙蝠也。蝙蝠。亦。天鼠。仙鼠などの名あり。鼯鼠亦身有ニ細毛一。而肉翼甚蝙蝠に似たり。これを鼠の屬とす。けだし此物共に獸にあらず。鳥に似て鳥にあらず。蟲に似て蟲にあらず。ゆゑに世俗の諺に鳥なき里のかうもりといへり。言下寒鄕僻地。挾ニ兎園册一。知ニ一小藝一者。自負尊大誇ニ於野婆田翁一。而傍若無人上也。夫木集。和泉式部

人もなく鳥のなからん島にては
　　このかはもりも君をたづねん

新古今集。香椎宮の杉をよみ侍りける

千磐破香椎の宮のあや杉は
　　神の御衣木に立てるなりけり

今猶文杉存矣。世おもへらく。別種唯在ニ此社一也。然るに。大神宮三十六番歌合に

萬代を山田の原の文杉に
　　風敷き立てゝ聲よばふなり

これによれば。則謂ニ杉葉如ニ綾文一。別種あるにはあらず

列子曰。貧者士之常也。孔仲山曰。貧者士之宜。豈爲レ

君が御影に並べてぞ見む

按に。歳始用下大鑑如二面鏡一者上。神前に供し。又君父に供し。或毎レ人居レ前以嘉二祝之一。此吾神國之風なり。直にこれをかゞみといふ。亦良有レ以也。或向二此鏡一時。吟二詠大友黒主之歌一曰

近江野や鏡の山を立てたれば
かねてぞ見ゆる君が千年は

新後拾遺集に。水上月を

水や空そらや水とも見えわかず
かよひてすめる秋の夜の月

滕王閣序。所謂。秋水共二長天一一色といへる意なり

壒嚢抄。輕刑屎を遍身に塗りて。山野に追ひ放つ律あり。蓋。中臣祓屎戸の事に似たり

紙屋紙。昔は大内の紙屋にて調ぜしなり。故に名づく。紙屋川は此紙を漉く川なり。故に名を得たり。又宿紙と名づく。紙屋において。結番宿直して造レ之なり。或云。宿紙即延喜式部省式所レ謂熟紙也。綸旨に。此紙を用ふ。故俗綸旨紙といふ。薄墨色なり。今漉返しといふ是也。源氏物語に所レ謂陸奥紙は檀紙也。始出二于陸奥一。故に名を得たり。俗引合せといふ。按。或云。紙屋紙。一名水雲紙（水雲和名もつく）一名宣旨紙。古昔以二艶書類一。漬二紙屋川一漉レ之。故色淡墨也。輕レ宿之故又宿紙と名つく。今亦有二漉返之名一。予おもふに。漉返は西人所レ謂反魂紙是也。光孝紀云。清和天皇女御藤原朝臣多美子。天皇晏駕の後。生前に賜ひし御筆の手書を取りあつめ給ひ。紙に漉せてその紙をもて法華經を書寫し給ひしとぞ。此けだし漉返の史にあらはれしものなり。檀紙。又有二松皮紙。繭紙。大高等名一。賓退錄云。唐時日本國出二松皮紙一。唐書云。建中元年。日本國使者眞人興能善書。其紙以繭而澤人莫レ識。初學記云。紙呉人以繭

古歌に。ひざくらをよみし歌あり

梓ゆみ春の山邊に煙立ち
もゆとも見えぬ火櫻の花

火櫻古說不レ決。壒嚢抄云。櫻色謂レ白也。赤則實色歟。今按。櫻色謂二淡紅色一也。其謂二火櫻一者。稱深紅色也。不三必求二別種一而可

蠡海集云。草木の花。雖レ曰二五色一。獨無二黒色一。黒を

國三輪山ニ來。曰現ニ神妙相ニ而敎示。神乃曳ニ上御舟於松梢ニと。日吉密記に見えたり

風雅集に。高野の奥院へ參る道に。玉川といふ川の水上に毒虫の多かりければ。此流を飮むまじきよしを戒め置きて後。詠み侍りける。弘法大師

　わすれても汲みやしつらん旅人の

　　高野の奥の玉川の水

この歌を石に彫りて。玉川の邊に立つ。故に人口に膾炙せり。其毒を或は馬醉木(ゑせびのき/あせぼのき)とし。或は砒霜石とするは。皆謬れり

新千載集。從三位信久

　一條に祈れば君が御幸をも

　　三葉のさかきわれぞ探せず

三葉の賢木。賀茂には故事ありや否やしらず。鴨祐世

　色かへぬ三室のさか木として經て

　　同じ常磐に世を祈る哉

おもふに。三葉の賢木は みむろの賢木の誤歟

伊勢の鷄は。長鳴鳥の故事也。八幡の鳩は。鳩の名。幡と訓通。新後拾遺集

　八幡山神やきりけん鳩の杖

　　老いてさかゆく道のためとて

又山を鳩の峯といふ。春日の鹿は。神幸の時。鹿に乘り給ふと諸記に見えたり。稻荷の狐は專女(たふめ)三狐(みけつの)神(かみ)の號によれり。凡。神社に神使と稱するもの。多くは皆此たぐひなりとぞ

新千載集。俳諧歌。津守國冬

　苗代にこゝろの種を蒔き添へて

　　鳴くや蛙のやまと言の葉

古今集の序に取れり。蛙發レ聲時。喉籠脹起。俗これを歌袋といふ。古歌に

　徒に鳴くや蛙の歌袋

　　愚なるをもおもひ入らばや

新拾遺集。十二月晦日に。藤原の基俊乃子法師といふが許に。法師者。永緣之弟子 權少僧都光覺也 もちのかゞみ遣すとていひやりける。權僧正永緣

　年を經て官位を增かゞみ

　　千世の影をば君ぞ見るべき

返歌

　萬世によろづ世添へてます鏡

にて葺の葉の亂れしごとくに書きて。今いふちらし書といふものなり

三絃。俗三味線といふ。近世に起れり。蓋。出二于箏斗爲巾三絃一也。琵琶謂二之四絃一。玉葉集

道を讓る君に牽かれて四の緒の

その音も高き名をぞ揚げぬる

北史倭國傳云。樂有二五絃琴一。和名鈔云。日本琴。體似レ箏而短小。有二六絃一。新勅撰集

六の緒のよりめごとにぞ香は匂ふ

彈く少女子の袖や觸れつる

東舞歌章云。七津緒の八津諸の琴。古事淸寧記云。八絃の琴。隋音樂志云。琴神農制して五絃とす。周文王加二二絃一爲レ七者なり。琵琶一名半月。玉葉集人の許に琵琶を贈り遣しける人に代りて

四つの緒の調につきて思ひ出でよ

半ばの月に我も忘れじ

琴亦有二十三絃者一。西京雜記。高祖初入二咸陽宮一得レ琴。長六尺安十三絃二十六徽。皆用二七寶一飾レ之。隋音樂志絲の屬。四曰箏。皆用二七寶一飾レ之といへり

眞賢樹。眞坂樹共見二神代紀一。各有レ義存矣。又榮樹の義とす。仙覺萬葉集抄に出でたり。續千載集小大が長歌云。綠なる坂木の枝の立榮と。此蓋本義なり。此木古より以爲二神木一。良に有レ以也。故後世制二榊字一。貝原氏以爲出二于日本書紀一者謬矣。和名鈔龍眼木也といふ。何据といふ事をしらず。或以爲冬青樹と。冬青の名は廣し。然して諸書にいふ處と殊に別なり。猶下賀茂葵與二細辛一似而非上也。此特に我邦の產。不三必遠求二異邦一之名而可也

諺所レ謂とく／＼事をなす。又とく／＼と心得るといふ。合レ用二解字一なり。緒を亂る糸にたとふ。言。其みだれしいとくちを解脫なり。萬葉集に。妹之紐解登結而立田山といひ。又續千載集

振りかくる額の髮の片みだれ

とらへと賴むるけふのくれ哉

或云。得々也。東坡詩。知是多情得々來

續千載集。祝部行氏

いにしへに神の御舟を引き掛けし

梢や今の唐崎の松

往昔尊神臨二着于唐崎琴。御舘宇志丸宿。庭前松下一。問曰。君從二何方一來臨耶。神答曰。我是自二大和

蜻蛉乳（とんぼうのち）。採二莖葉一陰乾燒レ之。除二惡臭一尤妙。故香取と名つく。後西院帝勅名也

續後撰集。後鳥羽院御製

　夜を寒み閨の衾のさゆるにも
　　藁屋の風をおもひこそやれ

此御製可三以比二天智帝御製一也

續後撰集。式子內親王

　筆の跡に過きにし事を止めずば
　　しらぬむかしにいかで逢はまし

いはゆる往事を述べ來を思ふ歌也

天神七代。地神五代の名。紹運錄に始めて出でたり。蓋。配二天七地五之數一也。新後撰集に。太上天皇

　千磐破七代五代の神世より
　　我葦原にあとをたれにき

秋の御方。源氏物語に見えたり。蓋。出二于長秋宮一。玉葉集建久五年八月。中宮の御方にて。月契二秋久一といふことをよみ侍りける。正三位季經

　雲井にて幾萬世かながむべき
　　月に馴れたる秋の宮人

俊成家集云。再皇大后宮大夫に任ぜしとき

　雲の上遙にてらす月影を
　　秋の宮にて見るぞうれしき

源氏梅枝卷。葦手歌繪をおもひ〳〵に書けと宣ふ。又いふ。葦手の草紙ともと云々。そゝけたるあしの生ひ樣など。難波の浦に通ひて。又葦手に打ち出でたる。又後撰集に。陸の國へまかりける人に。扇調じて歌繪にかゝせ侍りける。拾遺集。洲濱の敷物に。數多の歌葦手に書ける。玉葉集。天王寺にまうでゝ難波の浦にて。讀み侍りける。大僧正行慶

　夕暮に難波わたりを來て見れば
　　唯うす墨のあし手なりけり

同集に。千載集奏覽の時入れて侍りける。手箱にあし手に蒔きたりける歌。又風雅集に。津の國に侍りける比。京に相しりたる人の許に遣はす文の上に書きて侍りける。津守國基

　津の國の浪速よりぞといはずとも
　　葦手を見てもそれとしらなん

花鳥餘情云。あし手は。葦の葉の中に文字を書くなり。水石鳥などの形にも書きなすなり（接、あし手書は歌繪）

前太政大臣

こゝに又光を分けてやとすかな

越のしら嶺や雪のふる里

題にいふ。客人の宮に奉りけると。客人の名亦佳なり

續古今集に。式乾門院の御匣

思川逢瀬まてとやみなはなす

もろき命も消え殘るらん

水沫なす微命の語。萬葉集に見えたり。奈須は如の字の古訓。古事記に久羅下那洲多陀用弊琉之時。舊事紀に如二水母一浮漂之時と是也

洲の字。須とよむ音なり。倭訓にあらず。古事紀久羅下那洲多陀用弊流。以上の十字音を用ふと。州の字とよむ。神功紀云。百濟の人彌州流。釋云。州音都とあり。按に。川の字都とよむ。續日本紀萬葉集に見えたり。疑らくは。州の字の略なり。釋云。川字。乃字等は。出二肥人書一

世俗。素服を稱して。色を着るといふ。古も亦此名あり。續古今集云。父の卿の服脱きける比。母又身まかりければよめる。法印實伊

脱き捨つるかひこそなけれ藤衣

今もいろなる袖の泪に

同じ集に。母のおもひに侍りけるに先たちて。色なる人の許に遣しける。左近大將通雅

はかなくも後るゝ露の身をしらで

人のあはれに袖ぬらしけり

禁裏の文臺に。蔦の細道といふあり。桑をもて造るよしいへり。何の故をもてかくは名付けしやしらず。或云。取二于伊勢談宇津山故事一也。後水尾帝所レ勅也。續後撰集。九月十三夜十首歌合に。むかしの長柄の橋のはし柱にて。造りたる文臺にて。講ぜられ侍りしとき。太上天皇

月も猶長柄に朽ちし橋ばしら

有りとやこゝに澄み渡るらん

按。文臺。見臺。書臺等の名中世以後に起れり

洛東祇園有レ樺。和名がば。又云。香庭櫻。又南殿櫻。又犬櫻。其實鹽藏して。以媒二於酒一。芳香可レ愛。謂二之表水一。後水尾帝勅名也。照水梅あり。花香實と名つく。其三共堪レ賞也。此亦後水尾帝勅名也といへり。蘿摩和名加我美。又云。我々芋。又

範車城一押二北方一。往昔權冠者東小洋藩君章宗顧厚賞定二總軍曹事官一。令レ入二北鑛一。不日破二蘇敵一得二印符一。疆來屬二幕下一。築二範車一護焉。頃侵二北天一。渡二龍海一得二一島一。山河麗奇。而悉金玉也。民知レ煎二靈草一。少レ食二五穀一。屠二生肉一甚嫌。故无二邪煩一。老仙伊香保行二辰行本命法一。儀相无レ異怪。德勝二故人一。義行皈趣尊敬得二長壽一。後遊二中華一。隱顯不レ定。或曰。義經改二義顯一。見二玉海一。又改レ義其爲レ仙也。見二義經記一。いはゆる陸華仙とは。陸奥金華山なるべし

婚嫁之饗禮用レ蛤。而不レ用レ鰒。けだしはまくりはからふたつ相あひて。陰陽の象あり。鰒はその殼偏なり。新勅撰集に

伊勢の海人の朝な夕なにかつくてふ
鰒の貝のかたおもひして

忘草。忘貝は祓除の遺意なり。故住吉多詠レ之。新後撰集に貫之

住の江の朝みつ潮にみそきして
戀忘草つみて歸らん

住吉神官田中氏云。此歌則忘草之傳所二採用一也。古今集

道しらは摘みにも行かん住吉の
岸に生ふてふ戀忘草

新勅撰集

いとまあらばひろひに行かん墨の江の
岸によるてふ戀わすれ貝

續古今集に

夜寒なる穂屋の薄の秋風に
そよさぞ鹿も妻を戀ふらん

袖中抄の古歌

信濃なる穂屋の薄も風吹けは
そよ〳〵さこそいはまほしけれ

或云。信濃諏訪社。昔時有二勅使一。造二假殿林椽屋床一皆用レ薄。謂二之穂屋一。芭蕉老人の發句に。信濃路を通るとて

雪散るや穂屋のすゝきの苅のこし

越州白山四時雪あり。故に名つく。異邦の雪山。一名白山と同意なり。神祠あり。菊理媛神を祭る。神代紀云。菊理媛神有二白事一。故にこの處に鎭座ましますなり。日吉客人宮亦同續古今集。後京極攝政

新勅撰集に

狩ごろも飾磨のかちに染めて着ん

野ごとの露にかへらまく惜し

八丈島有二朝草一。今日蒔レ種。明旦萌生す。故に名つく。根は蘿葍のごとく。葉は前胡に似たり。香氣水芹に類せり。島人常にこれを食して。ほうそうをうれへずといへり。本草曰。扶桑の東。女國あり。鹹草を産すと是なり

八丈島。いにしへはこの島を女護島といへり。今にして男あれども。女子多くして且容色ありといへり。一小島の內。爲井邑八郎明神あり。鎭西八郎爲朝を祭るといへり。蓋。爲朝嘗竄二于伊豆一時。此島を護りて以鎭二制之一。後北條早雲。南方の諸島を征せしとき。皆伊豆に屬す。所謂八丈島。三宅島。三藏島。青島。大島。利島。新島。神集島。鋪根島。鐵島等是也

琉球國爲朝祠あり。舜天太神宮と號すといへり。南浦文集云。爲朝公爲二鎭西將軍一之日。遠航二於海潮一。求二一島於海中一。故始名二琉求一。友人曰。相傳永滿元年。爲朝有レ事流二于伊豆一。於レ是自二大島一西至二琉求一。安二撫島民一。續弘簡錄云。按琉球上世无レ攷。据二其世續圖一云。宋淳熙十四年舜天王卽位。舜天爲朝之男子。未レ詳二何許人一

朝鮮釜山浦義秀の祠あり。傳へいふ。朝夷義秀建保の亂をさけて。海に浮びて高麗に至り。遂に終を取りしなり。土人其稜威を慕ひて。爲レ之此祠を立てしとぞ

加羅布登島。義經の祠あり。傳へていふ。九郎判官義經は。奥州高館において。いつはり死して。蝦夷が島に逃れ渡りて。加羅布登にいたれり。從士も亦多かりしとかや。是において。土地をひらき。民人に敎耕せしめ。其地を號して源國といひしとかや。今猶日本の風俗にて。言語も亦通じて。國王は卽義經の胤なりと。按。加羅布登島。則韃靼部也。今淸人長崎に來る者いふ。北限二魚皮一疑是也。金史列將傳云。範車國大將軍源光錄。義鎭者曰東陸華仙。權冠者義行子也。始入二新韃靼部一。爲二千戶部判事一。身長六尺七寸。性溫和而勇猛才思甲二諸部一。外夷多隨拜。入二學館一辨二禮義一。後遷二咸京錄事一。章宗詔轉二光錄大夫一。累任二大將軍一。久守二

佛說辨才天經。凡有二三部一。其說有二少異一といふ。若欲レ供二養此神一者。白月一日より十五日に至るべし。若白月をもてせざる人は。毎月巳亥の日を用ふべしといへり。按に四月初の巳の日。天子御園祭を行はせ給ひ。十月上の亥の日。家の兒の節會を行ひ給へり。されば。巳亥の日を用ふるも。亦これに据れる成るべし

日蓮上人三面大黑天の讚文云。甲子の日每に。生黑豆百粒をもて祭るべし。是秘中の秘なりとぞ。佛說大黑天神經。南海寄歸傳等無二此說一。其像坐して金囊をとり。小牀に卻き踞り。一脚地に垂ると。その鼠をもて神使とする事。大巳貴命の故事に起りて。舊事紀に見えたり。則。甲子の日を用ふる固有レ据。今世祭る所の像も。亦日本の風儀に非ず。梵天像也

夜擲櫛を忌む事は。神代紀に見えたり。又。世櫛を婦女に贈る事を忌むは。蓋。齋宮群行辭二見天子一。天子手自櫛を執らし給ひ。これを其ひたひに加ふ。謂二之別御櫛一也

宿院は。泉州堺開口原(あくちのはら)にあり。住吉明神六月晦日はらひのとき。神幸の行宮なり。壬二集。住吉三十首の內。詠二開口原一和歌

水無月のけふのさかひにみそぎして
千歲を延ぶる神の宮人

六帖に

水無月の名越の山の呼子鳥
大幣にのみ聲のきこゆる

柹本人麿の社。播磨明石大倉谷にあり。安產をまもり。火災を避け。祈るにしたがひ志るしあり。蓋。安產は人生(ひとうまる)の義に取り。禦レ火は火止(ひとまる)の義に取るなり。與下和歌之傳以二人麻呂。赤人。底通姬一配二子日道三天一。以爲中日留之義上。共和語妙。神人之德。不レ可レ誣耳

伊豫溫泉郡山越邑有二櫻樹一。名二正月十六日櫻一。としごとに此日をもて滿開とす。伊勢奄藝郡。寺家櫻樹あり。不斷櫻と名つく。四時花あり

播州飾磨郡印南野里。搗染を出だす。凡。賀祝此色を用ふるは勝の義に取るなり。赤人歌に

染めてほすしかまの搗を見るよりも
ぬれて色濃き我おもひかな

此より後のむかし語りぞ

次ニ栂尾者宇治茶一也。有ニ初昔後昔等之名一

將軍塚在ニ圓山上方一。桓武天皇遷ニ都於平安ニ時。八尺の土偶人を造り。甲冑をきせ。太刀をはかせ。帝都にむかはしめ。これを埋みて。もて都の鎮護とせり。もし變災あれば。かならず鳴動すといへり。親長卿記云。明應二年十一月五日。將軍塚鳴動す。周一居士送三人之ニ日本一詩。所レ謂將軍塚靜家無レ難是也

葵祭は。元明帝和銅五年始行レ之。物語草紙等に祭の日を稱するものは。これをさしていふ。此日社司神供の葵を大内にたてまつらしむ。しかるに中世其事廢絶せり。元祿七年嚴命ありて。再ニ興之一。飛鳥井榮雅卿歌に

けふといへば簾のみかはあふひ草
ふるき文にも巻き添へにけり

毎年二月午の日。初午と稱し。稲荷社にまうづ。蓋。初鎮座の日なり。新撰六帖に

きさらきやけふ初午のしるしとて
稲荷の杉葉もとつ枝もなし

關東人此日馬頭觀音にまうづ。初午をもて馬頭の義とするにや。嘗て紀伊國熊野に行きしに。此日にあへり。土人觀音に群參す。その頭髻に挿むものを見れば。みな賢木なり。これをひとり老媼に問へば。賢樹なり。安く榮ゆるの義を取るゆゑに。古より此儀ありといふ。然則。詣ニ觀音ニ者。後世浮屠氏之所ニ假托一。可ニ以知一矣

延暦十四年。藤原冬嗣公祭ニ宗像神於東西市一。守護神とせり。よりて市姫と號す。蓋。市杵島姫命也。舊七條堀川の西にありしを。後五條市屋の道場に移し祭る。爲賴家集に

市姫の神のいかきのいかなれば
あきなひ物に千代をつむらん

千載集。公任の歌に

おぼつかな宇留まの島の人なれや
我言の葉をしらず顔なる

袖中抄等不レ言三宇留末乃島在ニ何方一。一說云。琉球國也と。大和國添上郡宇留末の清水あり。康光歌に

辰の市うるまの清水底澄みて
人のこゝろのくまも殘らず

同じ。けだし元是大嘗祭の田歌にして。此祭に借り用ひしなり。取二其辭義相近一也。其祭儀は。延喜式にいはゆる。鎮花祭是也。令義解云。季春鎮花祭謂二大神狹井二祭一也。春花飛散の時にありて。疫神分散して。行レ癘爲二其鎮遏一。必。此祭あり。ゆゑに鎮花といふ。新拾遺集に

長閑なる春のまつりの花鎮め
風治まれと倘祈るらし

百錬抄。長和元年二月八日。設樂神自二鎮西一上洛。今日著二舟岳紫野一。三河國設樂郡あり。和名抄云。志太良。内宮年中行事云。志太良とは拍レ手也。或云。したらでんは。謂二震動雷電一也。參河人作二設樂田一云。有二本据一未レ知然否。大嘗會の田歌の末章の結句に。したらこひし、の語あり。寂蓮筆も亦同じ。百錬抄云。近衛院久壽元年四月。近日京中の兒女風流をそなへ。鼓笛をしらべ。紫野社にまうず。世にこれを夜須禮と號す。勅ありて禁止せらる。長明四季物語曰。三月十日あまり五日の比。紫野乃根乃國乃神乃社爾花乎奉留。其日波。也須良爾波亘與也須良爾波亘與止屢歌布亘。花乎手折亘。官乃男子舘爾集布事奈利也須良爾波亘與止波。春乃氣爾上一人與利。下末々末氏。阿多良世賜波須。也須良加爾波亘與登乃事那留陪之。又長和五年三月十日。於二高雄山神護寺法華堂一。始行二法華會一。自レ此毎年爲レ例。俗やすらひ花といふ。夫木集西行法師

高雄山あはれなりけるつとめかな
やすらひはなとつ、み打つなり

類聚國史。弘仁六年。令二幾内井近江。丹波。播磨等國植レ茶。毎年獻レ之。海人藻芥云。上古大内有二挽茶節會一。其儀麗也。葉上僧正入唐のとき。重ねて茶禮を得たり。栂尾明惠上人これを翫ぶ。ゆゑに茶は栂尾を本とすといふ。宋人茶詩曰。幸得二梅山信一。初嘗日本茶。按。栂字字書無レ考得。蓋栂本梅字。湖海新聞梅爲二木母一是也。今訓爲二登賀一。其木大與レ梅異。未レ知レ有二何据一也。又萬葉集刻二樛木一爲二登賀乃幾一。此亦與二字書一義異耳

春雨集茶歌

曇るなる雨ふらぬ間に摘みておけ
梅の尾山のはるの若草

又。後西院御製

世の宇治茶飲みつ、忍ぶ事とては

故にこれをたうけと名つく。往來の人爲二手向一也

夫木集。法性寺入道

九重に疊める玉の御階より

傾く月の練り上るかな

盖公卿長き裾を曳き徐く歩するを練るといふ。ゆゑに月卿雲客に比して詠めるなり

切韻曰。簀牀上藉レ竹名也。三代實錄簀子。和名すのこ。その下に所レ横の竹を。盜竹と名つくといふ。竄二牀下一所二緊縛一也。春雨抄。俊賴

山賤の芦屋にかけるたかすがき

節にくしともおもひける哉

とよめり

和名鈔楮柱唐韻云。楮柱支二屋歆一也。今按。和名すけ。麻柱辨色立成云あなゝひ。按に。楮柱は助之義。今世いはゆる衝梁なり。その小きものに束枝といふ。麻柱は。足並之義。則。今世いはゆる足代なり。大府記云。永保元年被レ立二法勝寺御塔心柱一云々。次打二大鼓一。應二其聲一大工以下立二麻柱一打レ之。人車記云。仁平三年。白川御堂東庭御塔建立也云々。御塔檀上兼結二麻柱一。立二四方柱一。

山槐記云。治承四年。立二高御座一云々。醍工。漆工等結二穴奈井一昇レ之。內宮遷宮沙汰文云。文永三年。正殿御形板頭工三人。地祭物忌父各參昇二殿內一奉レ彫レ之。卽。結二儲麻柱一。元明紀云。彌務爾彌結爾阿奈々比奉。輔佐奉乎事爾依互。聖武紀云。皇朝乎穴比奉扶奉。此與二麻柱柱楮一義相通。稱德紀云。相宇豆奈比奉。相扶奉事爾依氐。中臣壽辭云。相宇豆乃比奉利。凡。宣命此辭多矣。或作二相共奈比一此亦義通ず。うずはけだし珍の字訓。言レ珍二重之一也とぞ

紫野今宮は。長保年中はじめて祭る所にして。其寬治中の祭の時。刀禰和歌を藤原長能にこひ求む。その辭後拾遺集に見えたり

今よりはあらぶる心ましますな

花のみやこにやしろ定めつ

白妙の豐幣帛を採り持ちて

いはひぞそむる紫の野に

此社は疫神をまつりて。今やすらひ花の祭あり。其章曲秘して。神司の家にあり。乃寂蓮法師の筆跡也。古書大嘗會田歌一卷あり。其末章全く與レ此

獸之有二異類一。擧げてかぞふべからず。此鳥獸をたゝちに雷とするは。亦愚なりといふべし。伯耆風土記云。震動之時。雞雉悚懼。則鳴踰二嶺谷一。即。蹴踊也。蜥蜴之雨レ雹。虬龍之降レ雨。雖レ奪二化工之妙一。而還眞此化工之妙。何疑之有

諏訪湖の氷を堀川百首に

諏訪の海の氷の上の通路は
神の渡りて解くるなりけり

其湖上諏訪の社前にあり。毎歳小寒の後。堅氷閉塞有二神獸一。はじめて氷面をはしる。人その跡を見て往來するに。陸地を行くがことし。立春の後。亦神獸氷を渡る。是において。人氷の解くる事を志りて。その後はわたる事なし。神獸は狐にて。狐はよく氷をしるものなりとぞ。又聞く。諏訪湖の氷。小寒の後。漁者於二氷面一立二舍屋一。穿二迪其氷一釣レ鯉。窺二穴中一甚深。氷厚凡六尺餘云

袖の浦。袂の浦ともに相州にあり。袖浦。則。鎌倉稻村崎之海濱。形似二衣袖一。ゆゑに名づくとかや。

順德院御製

袖の浦の花の波にも志らざりき
いかなる秋の色に戀ひつゝ

袂浦は。腰越與二江島一之際濱也。形如二衣袂一。故に名つく。夫木集に

馴れて來し袂の浦のかひあらば
千鳥の跡をたえず問はなん

越前州歸山。五幡山。其間不レ遠。新古今集に

忘れなん世にも越路の歸る山
いつはたと聞く程ぞはるけき

延喜式云。敦賀郡加比留神社。又鹿蒜神社。萬葉集云。伊都波多野佐加歸山は。本。鹿蒜山起二日本武尊故事一云といへり

讀書の齋を精舍とす。後世佛寺の稱となれり。今民間の子女習二書筆一家をてらと稱するも。亦近二精舍之義一といへり

道神。和名たむけの神。夫木集に仲正

鳥居立あふ坂山の堺なる
手向の神よ我名いさめそ

古今集の序に。所謂相坂山に祈二手向一是也。凡。山の頂。登り降りの堺。謂二之峠一。（峠字和俗所レ制。常レ用二嶺字一也）峠の字訓たうけにて與二手向一通ず。山坂巓末必祭レ神。

りしことあり。又。正月元旦。吸二押年魚一事。土佐日記及加茂保憲女集に見えたり。江次第云。元日押鮎一杯。煮鹽一杯。蓋取二於年魚之名一也。子膓を鹽藏すフものをうるかといふ。小式部歌に。

賀茂川の瀨にすむあゆの腹にこそ
うるかといへるわたは有りけり

室八島明神在二下野國總社村一。詞花集に

いかでかは思ありともしらすべき
室のやしまの烟ならでは

或云。野中有レ水。其水氣升如レ煙

小野朝臣篁奏請して。營二學校於諸國一。置二孔聖及十哲像一。今唯存二足利一字一耳。又遂爲二浮屠氏之有一。不レ可レ哀哉。金澤文庫。平實時之所レ營。今又廢矣。鎌倉志。北條越後守平顯時建二文庫一。後上杉安房守憲實再興とぞ

弓を射る必有レ聲を矢聲といへり。矢音なりといふ。射る時の音に取るなり。はなつ矢半途に墜ちんとすれば。大に發二矢聲一。精力通レ靈。其矢たゞちにとほりて的にあたる。蓋。混沌一氣之微妙耳。古語云。物部のやたけ心と。蓋。矢誥也。誥與叫同じ。神代紀雄誥（此云二烏多稽眉一）壒囊用二八十梟文字一未レ穩。夫木集に

道遠き那須の御狩の矢さけびに
迯れぬ鹿の聲ぞきこゆる

越之白山雷鳥と稱するものあり。人まれに見るといへり。其形如二雌雉一。而較少二文采一耳。後鳥羽帝御製

そら山の松の木蔭に隱ろひて
寛にすめる雷の鳥かな

或以爲二爾雅所レ謂鵗一者不レ是。五雜俎曰。雷之形人常有二見レ之者一。大約似二雌雞一肉翅。其響乃雨奮樸作レ聲也。此稍爲レ近矣。夏小正云。雉。震呴。余居近レ山。震時必聞二雉聲一。人謂二之合音一。物類之感可レ見矣。又云。雷不二必聞一。惟雉爲二必聞レ之。餘冬序錄。野雉知二雷起處一。此語によれば。白山の鳥。五雜俎說亦雉の類なり。安房國二山と名つくる處あり。每歲正月そのあたりの俗群集して。雷狩をなす。多く獲てころせば。其夏必雷鳴稀にして。あれどもすくなし。もし獲物多からざれば。雷も又多しといへり。其形鼬鼯のごとしといふ。此亦一奇事といふべし。是豈雷神之所レ好之獸乎。鳥

さかへば。その鱗羽順ふ。順へば反りて逆ふ。人之生ニ於困苦ー。而死ニ於安樂ー。亦猶レ是。或曰。奥。羽。佐越等之魚肥大。而味踈也。攝津。播磨等江海之魚堅小。而味濃也。蓋。此困勞與ニ安游ー之異矣。北海といへども亦如ニ鮭鱒ー其妹最美者。泝ニ於長江ー而困苦すればなり。今按。鯉魚のごとき。淀河に得るものを爲ニ第一ー。亦觸ニ於水車ー。困ニ於急湍ー之故也。よりておもふに。人も亦安富佚樂に養はれしものは味なし。嘗ニ嶮岨艱難ー者。則有レ味矣。沃土之民不レ材。瘠土之民嚮レ義といふも。亦此義也。宴安鴆毒不レ可レ思。誠哉言也。我素戔嗚尊之聖教聖敬日躋也。以ニ辛苦ー爲ニ之表的ー。嗚呼偉哉

新撰六帖に

いにしへはいともかしこき堅田鮒
つゝみ焼きなる中の玉章

鮒。和名布奈。鮒魚之音訓也。魚此に奈と云ふ。又まなといふ。江州堅田湖中に得るを上品とするよしいへり。和名鈔に。禮記の註を引きていふ。炰は裹焼也。和名豆々三夜木といへり

東鑑に。建久元年十月。頼朝於ニ遠江國菊河ー。佐々木三郎盛綱相ニ副小刀於鮭楚割ー。折敷に居。子息小童にもたせまゐらせ申して云く。只今これを削食はしむる所。氣味頗る懇切。はやく聞し食さるべき歟。殊に御自愛。彼折敷に御自筆を染められて曰

待ち得たる人の子鮭もすはやりの
わりなく見ゆる志哉

鮭以ニ越後之產ー。爲ニ最上ー。佐々木盛綱此時領ニ越後國ー之故　本朝式云。楚割。遊仙窟云。東海鯔係これによれば。則。楚割といふは。今の刺身のごとし。あるひは以て鹽引とするものは。疑くは是ならず。其鹽引塡ニ子胞ー者。謂ニ之子籠ー。本朝式所レ謂。内子鮭是也。本朝式云。年魚氷頭背腸。和名鈔云。年魚者鮭魚也。氷頭は比豆也。背腸は美奈和太也。按。氷頭謂ニ鮭之頭骨如レ氷而澄徹者ー。背腸謂下以ニ背腸ー爲上醢也

年魚。和名あゆ。可レ愛之魚。故爲レ名。尾張吾湯市邑のちに愛智に作れば。則。安由與レ愛音通可ニ以見ー。其事神功皇后に始まれり。或云。借ニ鮎字ー安由と訓ずと。亦本ニ皇后ー以レ之爲レ占也。古者おほく神供に用ふ。故に倭姫世紀に。鮎を採るべき淵を獻

いふもの亦不レ誣矣。古者號下壗居暴戾不レ服二王化一者上。爲二土蜘蛛一。亦有二意義一

蠅。和名波閉。蝅。蠅。水に溺れて死し。灰を得ればまたよみがへるといへり。與レ灰訓義通ずるもまた有レ以なり

日本後紀に延暦十六年。掖庭の溝中に魚を得たり。長さ尺六寸。かたち常の魚に異なり。或云。椒魚在二深山澤中一。今俗山椒魚と名づく。ほゞ山椒の氣あり。ゆゑに名づくとかや。あるひはいふ。此魚好みて緣二椒樹上一といへり。本草にいはゆる鯢是也

泥鰌。俗土浄とよぶは音の轉訛なり。今按に作レ鱲。生ながら投二之釜中一。撥々として飛出難二以收一レ之。きうに火ばしをもて釜の臍（鑄留なり）の處を壓ゆれば。すなはち無三一有二動搖者一矣。此亦厭勝之奇術也。嘗聞レ之。京師某姓泥鰌を桶に入れ。畜ふこと十日計。一日當二煮食一而觀レ之。悉。化して爲二蠑螈一とかや

鰐は口濶く。その歯刃のごとく。物として斷切せざるはなし。ゆゑに諺に鰐の一口といふなり。春雨抄云

世の中は鰐一口もおそろしや
夢にさめよとおもふ計ぞ

又社頭拜殿有下稱二鰐口一者上。其形如レ合二二鉦一。而有二大口一。古昔有下神駕二鰐魚一事上。蓋据レ之乎

海鰩魚。此云衣比。和名からいひ。蓋唐海鰩魚也。今略してかれひといふ。良比反禮の音なればなり

新撰六帖に光俊

なにとしていかに焼けばか和泉なる
横山炭のしろく見ゆらん

炭。和名須美。濟之謂。火氣消滅之義也。炭又あらすみと訓ず。延喜式有二荒炭一。和炭一。墨の字訓も消滅の義におなじといへり。熄煨。和名おきひ熾火之謂。今火をさかんにする事をおこすといふ。熄煨生二白衣一。俗呼びて丈といふ。丈とはもと長老の稱にして。以レ似三黑髪變爲二白髪一よく名レ之とかや

凡。魚の游きてみな水にさかひ。むかひてのぼる。いとちいさき魚も大水にあへば。かならず槍てのぼる。鳥の飛ぶも亦多く逆レ風。蓋。鳥魚風水に

大堰川堰杭に來居る山からす
うのまねすとも魚は取らじな

山からす又深山烏といふ。本草に山烏似㆑鴉。而小赤嘴。穴居といへり。增基法師。熊野紀行に。白き頭の烏を見てよめる歌

山がらすかしらも𛀁ろくなりにけり
我がかへるべき時や來ぬらん

こは燕太子丹之故事也。又杜詩。長安城頭頭白烏。夜飛延㆑秋門上呼。此記異也。本草。燕烏似㆓鴉烏㆒而大。白項者以爲㆓不祥㆒。吾本邦肥前州多有㆑之。故肥前烏といふとかや

橿烏。善(この)みて橿の木にすむ。故に名つく。今商家に除夕元旦に食㆑之以祝矣。借して取る義なり。一名懸巣烏ともいへり。言㆘巣㆓一枝㆒懸垂而不㆖固密㆒也とぞ

蝦蟇。雖㆑遐㆑之つねに慕ひて返る。故に名㆑之。和名加閉流亦同じ。有㆑時而合戰す。その史傳に見ゆるもの。吾朝にては神護景雲二年七月。肥之八代郡此事ありき。延暦三年。攝州難波池有㆓此事㆒。おもに續日本紀に見えたり。寛喜三年。高陽院の南亦有㆓此事㆒。著聞集に見えたり。今按㆓事文後集。漢武元鼎五年秋。蛙與㆑蟇鬪。是歳四月將㆓軍衆十萬㆒。征㆓南越㆒開㆓九郡㆒云々。近。勢州亦有㆑之。數千蝦蟇東西相分。隔㆓田畦㆒而鬪。死者棄㆑之。傷者負而走。其聲囂々。俗謂㆓河津陣㆒。螢亦有㆓相鬪㆒。城州宇治瀬田尤足㆑爲㆑觀。此世人所㆓普知㆒也。蛇亦時有㆑之。百千爲㆑群。其勢可㆑懼也 江州人語㆑之

著聞集に。石泉法印歌

此煠は鞍馬の福にてさふぞなり。さればとて又蜈蚣召なよ。すゝは小竹にて。これは箏をいへば。むかでは箏の皮をもかてなり

按に。鞍馬山に有㆓靫社㆒。大巳貴命を祭れり。舊事紀云。天之新巣之凝烟之八拳垂摩氏燒擧ともいひ。又授㆓蜈蚣蜂之比禮㆒。倶見㆓於大巳貴命之事蹟㆒。則其爲㆓古傳㆒無㆑疑矣。俗傳に蜈蚣は毘沙門天のつかひと。ゆゑに獲㆓白蜈蚣于鞍馬山㆒者。爲㆓福德之至寶㆒。蓋謬㆑之也

胡黎。和名木惠牟波。赤卒和名あかゑんは。今俗やむまといふ。ゑんはのあやまりなり

酉陽雜俎云。深山に大さ車輪のごとき。蜘蛛あり。よく人をとりくらふといふ。太平記に蜘蛛人に化して。魅㆓源頼光㆒獲㆓之大窖中㆒。その長さ四尺許と

藍輿之屬にあんだといふものあり。編版の訓なり。
又阿之路は編筵（あむしろ）の訓にて。和名抄に見えたり
釣舟の字。字彙に見え。遊山舟。三才圖會に見えて。
その制首尾相ひとし。下可二裝載一。上可レ坐レ客。往
々用以戴レ酒。故に遊山をもて名とす。又高瀬舟。
三代實錄に。近江。丹波兩國高瀬舟三艘を造ると
見えたり。又過所舟あり。過所の字。續日本紀。
萬葉集などに見えたり。釋名云。過所至二關津一以
示也。或云。傳過也。移二所在一識以爲レ信とあれ
ば。今いふ切手割符の事なり

荀子云。鼯鼠は五枝而窮す。和名毛美。あるひはい
ふむさゝび。夫木集に信實
むさゝびの聲遠近の山本に里とほげなる杜の一
村。俗に野ぶすまといふ。謂下其擴二肉翅於地上一如中
氈衾上也とぞ。關東に謂二之毛々加一。又もゝぐわとい
ふ。九州にて板析敷とへり。壺峯子云。此物晝は
隱二深山一。夜に入りて出て。若人夜行照二炬火一。則
擊てこれを消す。其吹二烟火一。故に人これを妖怪と
す。我東濃。山家兒童之戲に衣をかぶり眼をいか
らし。手をはり臂をぬり。みづから聲をはげまし。
摸々具和といひて。人を駭かす事をなせり

鴛鴦。和名乎之。可レ愛之謂也。背に小羽あり。如二摺
扇半啓一。稱云二劍羽一。今おもひ羽といふ 新撰六帖に
池水にをしの劍羽そひへたて
妻あらそひのけしきはげしも

鵁鶄。和名伊微。今のいはゆる五位鷺なり。相傳ふ近
衞帝の御時。帝神泉苑に宴し給ひしに鳥あり。勅し
て捕レ之。その鳥とび去らんとす。捕者叱して宣旨
也といへば。たちまち伏して動かざりけり。とらへ
て奉りければ。帝その宣旨なるよしを聞きて動か
ざりしを叡感ありて。賜二爵五位一而放レ之給ひしと
かや。唐土秦始皇松を五太夫に封ぜしと相類せり

鳥鳩。一名善知鳥。唐土はいかなる名によぶにやし
らず。陸奥卒土濱に居るよし。津輕安潟の浦こと
におほしとかや。形色鷗に似て。黃觜赤脚。本草
所レ謂信鳧の屬なりといへり。古歌に
みちのくの外の濱なる呼子鳥
啼くなる聲はうたふやすかた

世俗わざの拙きをそしりて。有下烏學二鷺鷥一之諺上。風
雅集に公朝

曰。俗二盤狙一。藉以二槲葉一。此義也。或訓以爲二御食机之音一 非也。 萬葉集に

家に在れば笥にもる飯を草まくら旅にしあれば椎の葉にもる。續千載集。物名[illegible]有二杉折敷一

今人以レ爵爲二香爐一。すゞめ香爐と名付くるもの是なり。觚觶爲二小花瓶一。あるひはこつふと名づくるもの。即觚之小なるものなり

和名抄に。匕の字かひと訓ず。今俗飯匕をおたひかひとす。俗飯をよびておたひといふ。又せかひと名づくるものあり。狹匕の謂也。匕與レ貝同訓。本出二于牙之義一也。飯匕。伊勢物語にいはゆるいひかひなり。狹匕又云。鶯十種香器鶯と名つくるものあり。その形似たり。ゆゑに名つく。あるひはいふ。刷の匙也。佛飯に箸刷匙の三をもちふ。その内の刷子なり

和名抄に。勺。和名ひさこ。瓢。和名なりひさこ。木謂二之杓一。瓠謂二之瓢一。今俗ひさくといひ。又謬りて。ひ尺といふ

櫑盆。俗にすりばちといふ。櫑槌。俗にすりこ木といふ。又はれい木とも。畿内。中國。四國れん木といふ。櫑の字の轉音なり

地爐。いますびつといふ。炭櫃之謂也。覆罩は助炭と名つく。又焙籠あり。その製少しことなり

簾。和名すだれ。簀垂之謂也。一種以二細莖蘆一あみたるものあり。出二于伊豫國一。光俊歌に

年を經て世のすゝけたる伊豫すだれ
　掛けさけられて身をば棄てゝき

又鉤簾ありこすといふ。和名加古。故に略して。古須といふ。今みすといふ。御簾なり。あるひは翠簾の略。今按に。此に鉤簾と書きしはいかゞ。こすは小簾にて。小はをのかなにて。をすといふ事なり。をは發語なり 風雅集に

雨はるゝ風はをり〳〵吹き入れて
　こすの間にほふ軒の梅が枝

幌の字。和名とばり。俗暖簾といふ。今按に。軟簾と書くべきか。私云。簾與レ簀同訓。蜻蛉日記に。擧多め須とこれ簾をいふなり

柳箱。續日本紀元正紀に見えたり。今柳條をもて造る。方にして一尺の臺なり。箱宮のたぐひにあらず。王陶談淵に云。床頭有二柳箱一。可二尺餘一。不レ知如二今制一否。山谷詩集註云。俗名レ盤爲レ臺と見えたり

謂以二夫須皮一爲レ笠。所三以禦レ暑禦二雨也といへり。古歌にみしま菅がさ。又笠にぬふてふ有馬菅がさなどともいへり

枕草紙。東鑑等に所レ謂。調度掛。諸家の説區々なり。文明中太田道灌答二義政公問一歌に

矢をさして左右に弓を調度掛
奥の習ひは家によるべき

古稱二眼釘一爲二眼貫一。太平記劍巻可三以按一也。近世別に爲二一物一のみ。拾遺集に

白銀の眼貫の太刀を提げ佩きて
奈良の都をねるはたが子ぞ

凡。農具にことよぶもの多し。こは籠にて。畚は布古にて振籠也。簀をあじかといふ葦籠也。又かることいふは輕籠也。又もつといふは漏籠也。枵。和名抄にあふことあるは負籠也。糞桶をたことといふも田籠也。又有二鳴籠一者。一名引板續千載集に

秋はつる門田の鳴子いつまでか
ひく人もなき世に殘るらん

又西行法師歌に

何となく露ぞこぼる丶秋の田の
ひたひきならす大原の里

米嚢を俵といふ。俵の字。字書に無二此義一。類聚國史云。一俵は米二升以上をいふ。則。古は大小の異なるあり。かならず五斗米をのみ一俵とはいはず。類書纂要賞賜部云。分俵は俵散也と。これによれば則本出二于賜賞之分俵一。ゆゑにこれをうちまきといふ。打撒之義なり。今たわらと訓ず。田嚢也。蓋謂二田實之苞苴一耳

世に相傳ふ。漆器は惟喬親王より始まると。今江州日野造二漆椀一神祠あり。惟喬を祭るといふ。又勢州多氣郡人杓子を作る祠あり。亦云。惟喬靈。二說相符。雖レ不レ載二實錄一固不レ誣焉

今用ふる皿鉢は。本天竺の器。ともに鐵器也。今借以爲二磁器之名一。その形の似たるなり。友人曰。楪子俗にちやつといふ。唐音也。豆子俗音づす

食机いまをしきといふ。折敷之義也。東鑑用二折敷字一。古は木の葉をもて爲二食器一。故に神武紀有二葉盤一。萬葉集曰

皇祖神之遠御代三世波射布折酒飲等伊布此保實我之波。ほゝがしは和名抄以爲二厚朴一。北史倭國傳

鋸屑譚

谷川士清著

東鑑に弓手といふは謂レ左也。夫木集に
　稀に見む君を見んとぞ左手の弓とる方のまゆね掻
　きつる。丹生津姫記にいふ。矢手は謂レ右也。今
謂二之女手一。左爲レ陽。右爲レ陰。いはゆる男之弭
調。女之手未調是也。内經曰。地不レ滿二東南一。ゆ
ゑに人の左の手足不レ知二右强一也。以二地道尙一レ右
而言とかや

今俗。我子を稱してせがれといふは。瘦枯(やせかれ)の略なり。
日本紀に。吾の字をやつかれと訓ぜり。憔悴をい
へり。廣韻に憔悴は瘦也といへり。又。西人わが
女をも稱して。憔悴といふ。ともにみづからへり
くだる辭なり

踞の字これをかしこまるといふ。蓋畏敬之貌也。跏
趺謂二之阿具良一。似二胡床之形一也。また常樂といふ。
蓋藏六之轉語なり。藏六とは。龜の首尾四足收めた
るさまをいへり。藏六の字雜阿含經に見えたり

匜。和名はにぞけ。有レ柄半二插其内一。故呼二半挿一。と
いふ。今俗。以二耳盥一爲二半挿一者非也。盥。和名
たらひ。手洗の義。新撰六帖に。老いにける程も
　はかなし朝毎の盥の水にうかぶ面影

腰刀に玄(鵄眼)とゝめあり。摺扇にかなめ(蟹眼)あり。あるひは
爲二蚊目一非也。共にその形をもて名とせり。又和
琴の具に。有二鵄眼一。體源抄に見えたり。延暦儀
式帳にも。蟹目釘十三隻といふ事あり

翳訓曰レ波。萬葉集にいはゆる指羽。寶基本紀にい
はゆる刺羽といふもこれなり。即天子即位の時に。
女孺所レ持の長柄の團扇。又羽鳥ともいひ。又日隱
とも。御蔭などいへり。團扇は則似レ翳而小。可下
以撲レ蠅拂上レ蚊。故に名づけてうちはといふ

延喜式にいふ。和泉國の調。藺笠四十六枚と。今泉
州松村所レ作あみ笠その遺風とかや。今出二勢州多
氣郡一者。尤細密なり。よりて目狹といふ。これと
もに莞草を用ひて作る。又有二菅笠一。簟笠と同じ
く暑と雨とを禦ぐ具なり。新撰六帖に衣笠内大臣
　ますらを菅のあみ笠うちたれて
　　目をも合せず人のなりゆき

三才圖會云。臺笠臺は夫須也。即莎草なり。古註

鋸屑譚目錄終

鋸屑譚目錄

し。星みえぬばかり月さえたる夜。晝の心地して梢に打ちさはりて鳴きたる又をかし。夏の夕つかた。日もいりはてゝ凉しき頃。ねぐらとひおくれたるが。二つ三つ飛び行くもをかし。雪ふり積りて。庭も野山もこといろなきに。獨飛びかふもはえありてをかし

宮仕の女。臀ほそきはなく。子あまたうみし女の。髮多きはなく。聲いと高うすめるをこの。色黑きはなく。ひげおほきが髮おほきは稀なり

まづしき家に。子あまたあるぞくるしき。乳いでぬ猶くるし。子の。人のかけ行きて。よききぬ著。よきものくふを見て。うらやむをきくも。いとくるし。あるはやみて籬近く物あきのふ聲きゝて。得まほしとてなくに。かふべき物なき。せちにくるし。をうなの子の。くせかたわなるが。年たけたれど。せんすべなきは。又なくゝるし

物しりたる人の。其ことゝはなしに。言葉のはしばし委しきはいふべくもあらじ

若き男の子の。武藝學ばぬぞいとにくき

夕立と雪とはことに心の外なる物なめり。けふは雲出でたり。苗おき立つかなど思ふに。月のさし出づる頃は雲もなし。此頃の寒は只にやはあるといふほど。うす墨の雲絶間なうとぢたれば。朝戸出たのもしくて起きたり。朝日かゞやきてほい失ふ。只いづれともしらで。人のがり行きてんと出づる頃。夕立にあうてぬれたり。明日は若なつみにとおもひて。曉の頃かはやへ行きしに。月のかげかとおもふばかりにふりつみたる。なゐふりてのち空うち眺めて。空やちかきなどいひあふも。心の外なればこそ。いかづちきらふものは。とくよりしるといふめれど。夕つかたなりはためきてのちに。さればこそけさより心ちあしかりけれとはいへど。いかづちとはしらざりけらし。さるに今年は。雪深からん。雨少なからんなど。空よりせうそこ(消息)來しやうにいふは淺まし。あめあきらか(天明)なる五のとし。きさらぎの半にしるしとゞめぬ

闕の秋風 終

めたる。緋おどしのよろひ。宴室に額かけたるたわれめにたわれて。一生たわれ男の名を取り。たわれ暮して終るはいとおろかなり。たわれ女の誠なきをしりて。我方よりもいつはり云ひてたふらかしてんとおもふが。後にはつかはれて財寶なくし。詞つひやし。名をうしなふぞおろかに淺ましき。人の誠なく。人のいつはりいふをにくみて。我も僞いはましとおもふは淺まし。あしき友どちにめでたくいはれんとて。人の爲にかゝる淺ましきわざなんどなして。一生をあやまるぞおろかににくき。若き人などうちきそひて。あしき道敎ふる猶にくし。此道しらざらんをのこは。人情のわりなさをしらじといへど。さなんいへることは。何の書にかあらん。いといぶかし。古の情しり給ひたるかしこき人は。皆この道に入りけんにや。かゝることわりなき事に。ことわりつけていふぞにげなくにくき

多井某は。祖母につかへていとまめやかに孝を盡し侍りぬ。予もかれが家に立ち寄りたり。多井某。祖母をいだきて出でたり。祖母も嬉しさのあまりに聲あげてなきたり。予が來りし恩を謝する心にや。手をあげていはんとしても。なきになきていはず。とかくして席にふしたり。かたはらに居ける者。皆涙おとさぬはなかりけり

主君の不興を蒙り。あるは若氣の罪を犯し。國遠などせしも。年を經てさきの非を悔い改めんものには。智勇も人に勝れたらんはあんめり。國家の衰廢にのぞんで。忠義の爲に心ざしを盡さむものは。たとひ重き罪ありとも。其忠功によつてとがをゆるうせんといはゞ。誠忠の義士もあらはれ出でなん。さきのあやまりを悔いなんものにこそ。かゝる期に臨みて粉骨碎身の力を盡し。國に報いてん心ざしは。誠にありと思ふべきなれ。たゞかゝる事をいひ出だして。しゆくんのあるべうもおぼえず。みづからなせるわざはひのがれざるは。げにさる事なめり。空しく土芥に義氣を埋みてん。さりながら治亂によるべし。はかり思うておそれざらんや

灸ゑたる後は。こしの雪かこひ取り捨てたる心地すめり。鳥はむくつけき鳥なれど。孝つくす心ばへあはれなり。元日のあけぼの。東のかたゑらみ行くほど。黑き林の中より。聲のみ聞えて飛び行くもをか

は成りぬ
故郷よりの便を常に待ちて侍るなり。便有りたりと聞けば。其文を手に取るも遅しといそぎつゝ。其封を切りとくも心いとせはし。やう〳〵開きて安全の二字を見れば。又こと文を開き見んとして。心つかはるゝものなり。何のしな送り越せるよりも。只自毫の文のこまやかなるいとうれし。只一筆安全とのみ書きて。させるふしもかゝず。かさねてくはしく申入候はんなどあるは。いとゞ口をし。妻呼び迎へたるあけの日。閨より起き出でたらん心の内。何となうつゝまし。いつまでもかゝる心ばへ。わすれ侍らずば。いとめでたくさかえ侍らん。女のひたひにこちたくすみぬりたる。見ぐるし。男のかみのうしろのかた多くそりて。かみのひま〴〵青く見ゆるぞいとわろき。夫のこと國に行きたるに。妻の方より文こして。其國の紅粉。色ことにあなるよし聞き侍りぬ。いそぎ送り給へといひ越したるぞにくき。わかき女の。とも(燈)しくらうかゝげて。よそひをせんなんどいふはあしく。赤き色なと見て。いやしき色かなといはんばか(計)りにみやりて。墨畫の竹。白檀のにほひはめでたしなどいふは。又わろし

人の方へ行きて。物語などするも。心得ありたき事なめり。あるじの名殘をしき程に歸るこそよけれ。あるじ餘所見しつゝ。日はいと短かし。この頃はいと事多し。はや日も暮れなん。夜もいまだ長からず。又しはぶきして。此頃は風寒に感ずる病たほくあり。いとおそろし。日影を見つゝ鐘かぞへなんどして。さぞ事おほからんが。よくぞ語り給ふ。酒すゝめたけれど。ことの外塵事しげく人もなければ。ほいうしなひ侍るなりとやうのこときこえたらば。とく歸るべし

なくてとき物は。女の文才。日記に晴天書きたる。武夫の美服。くすしの髮拙き。歌の枕言葉よみたる。後室の化粧。盲人の老いて目のあきたる。栗の花。法師の額に黑入れたる。ありてよき物は。日暮しの聲。女のなみだの内の空たきもの。才能職任よりおとりたる者の更りたる。若き女の癪やめる

ありてよきはよく。あしきはあしきものは。やんごとなき人の才能。金持ちたる人。女の衣にたき物こ

りなん。妻をのこして活命を見ざる丈夫もあらん。やう〳〵そだてあげて。月よ花よと愛したるみどり子の。つゆときえしもありなん。病を得ずして。鬪論より身を失ひたるもありなん。たゞいといたう心ぐるしうものするは。年の凶きに逢へて。くふ物もたらず。思ふ衣もなくて。一生を終へしもありやせん。又病にかゝりて。藥もとむべき力もなく。あるは鰥寡孤獨にして誰あはれむ人なきもありやせん。いとかしこきをのこの道しりたるが。人もしらずして草芥に等しく朽ちしもありやせん。誠にあはれむべき事なりかし。其所緣の人のまうで侍るとても。さりにし日ばかり思ひ出でゝとへば。つねとふ人もなくて。卒都婆も苔むし。木のはふり埋みて。嵐のこととふも月の宿かるもいかでなからん。人の心をなぐさめ侍らん年々の春の草のみ。心ならう生ひ出でゝ。啼くてふ鳥も虫の音も。むかしの世をや觀じ侍らん。緣の苔もふりてのちはしのぶ人も。この地下にうらみを含むやうになりもて行きなば。其人を忍ぶだにまれになり侍らん。終にはしるものもなくて。ふる塚はすかれてこと人のつかとやなりなん。其後も年を經なば。田となり。野とやならまし。たゞ生死は詮方なし。うゑずこゞえずして命を盡くし。賢き才はあるも。其ほど〳〵人にしられ。世にいづるやうになり侍るは。又かくまでは思ひ侍らじとて。寺の軒ばのかくるゝまで。うちかへりつゝ見送りぬ。

ゑのゝは草は。宗因翁の遺歌集の名なり。納涼の歌は

池廣み寄せくる波に風見えて
　松は音なき陰も涼しき

忍親昵戀のうたに

今こそは忘られぬ草のゆかりまで
　果は思ひの露もそふらめ

いづれも全調のうたとやいはん。今やなし。大息にたへず。去歳より春の初まで雨ふらざりければ。麥など皆かれ葉の芝のやうに成りなん。野邊へ出づる時。八龍神の社を過ぐる折しも。心に雨を念ぜしに。其明の日雨ふりて麥もみなみどりにかへりぬ。いと辱じけなさのあまり。二たび社の造營をいひつけぬ。こぞさつきみな月の頃。雨ふりて秋のたのみ覺束なし。この社へ晴をいのりしかば。其日にはれて有年と

みれば。さるのかしら。犬の手足多くありたり。鬼の栖ともいふべしとてかたりきとぞ
生れて目しひし人の。五色を知るも。常の人のしるも同じ事なり。目しひし人に。五色はいかなる色とか思ふ。云ひて見るべしと問へば。いはれぬにぞ。されぱこそしらざりけれとてわらふ。云はねばこそあれ。黑きはくろく。しろきは白しと思ふは。誰も同じ事なり。常人とても。いかでことばにて。五色をいひ侍るもの侍らん。黑は斯くとて我髮をさし。白きはかくとて我齒をさすはたとへていふなり。かくいふ事は。盲人もいふべし。目あるゆゑに見てしり。耳あるゆゑにき丶てしると思ふは。かなしき事なり
年のはに（毎年）。領國にありとある寺院神官驗者など。城へ出で丶賀する事なり。皆こ丶をせにと威儀つくろひをすれど。鄙にのみすめれば。いといやしくむくつけきさまなり。狩衣に冠きて笏を持ち。遙向ふより膝行して。笏を衣の襟にさしはさみ。或は笏を直にたて。頭を斜にして稽首するなど。皆々舌をかむ事なり。ひとりのけんじや。あしき病にやか丶りけん。はな穴のみ見ゆるなり。其面をもはぢにして。ときんいたゞき出でたる様。誠にはなの額にやあるらん。目は四つやあるらんと思ふばかりにて。みそかにはらをか丶へ侍ることなり
こぞ。三條目といふ村の景政寺へ來りぬ。堂の後へ行きて見れば。石碑多くありけり。其中にはいと苔むしたるもあり。又倒れたるもあり。此頃まうでけんと思ふばかりに。かれ葉少き花など備へたるも有りたり。いでや生きとしいける物。誰か死なからん。陰陽晝夜四時の行はる丶よりして。松の千とせの壽。朝貌の一日の榮。世にありとある物。始より終なきはあらじを。今更なげくもよしなき事なめり。されども。生は好物。死は惡物とて。いづれか。生をこのみて死をにくまぬものはなからん。されどもつひに爰に歸せざるものもなし。此地にうづもれ。この名をいたゞきたらん人も。やまひにか丶りてくすしを極め。人々保護しても命きはまりて。かく成りたるもありなん。老いたるかぞいろを殘して。海山の恩をも報せず。孝子のうらみを地下に殘すもありなん。夫に先立ちて同穴の契りをわすれぬ烈婦もあ

ぞといふも。此國の事なり。さらば此頃とて。かたる事みな此國の外ならねば。いふべき言の葉もなし。其人の善きとあしきと。政の得しと失ひしとは。其職とする有司ありていへば。内官のいふべき事にはあらず。さればとて。國豐に人々とむといふ事のみ。なが〳〵しう日ごとに云ひ出づべきやうもなし。物語せざるもうべなり

秋の頃民家によりしに。餅くひ居たり。見れば小麥の粉を團にして。さゝけの葉をもてつゝみ。其儘火の内へ投ずるなり。其葉のやけ盡くるを期してくらふ。いとうましとぞ

此頃桑名長壽院の元より。澁なし榧といふを送りぬ。珍しき物なり。されどもしぶなしてふは。名のみなるべし。こと〴〵しき名かなとほゝゑみて。開き見れば。實も常よりはいと美し。割りて見ればしぶの衣はなくて。白妙のはだへ顯れたり。見るものみな驚く。其箱の傍に書きたる物あり。ひらき見れば祖公御馬上にて接ぎ給ひし木なり。其後いかに實を植ゑ枝を取りても。おほく生ひ出でず。生ひ出でゝもかるゝまゝ。今は其樹の靈をしりて。枝など折り取るものもなしとや。いとたふとき事なり。予常に榧の實をこのみてくふ。祖公も好み給ひきといふ人のありければ。藩翰の任をあぐる事。いかで祖公の烈に從ふ事か。はじかみ好むとて。ひじりとはいかでいはんといひき。予が名を定信といふ。祖公もしばしが程は。かく稱し給ひしよし。予號を旭峯と云ひ。祖公も後峯と號し給ひしよし。いづれも後に知れたり。偶中とやいはん。なほ不才をはぢぬ

其年饑饉しければ。吏食をやり。租稅をゆるし。除疫の灸を敎へなどしけるを。久來石(くれし)村に藤藏といふ者ありしが。ことにいたうよろこびて。餅をさゝげて。恩を報ぜんしるしに。替へほしきよし願ひ出でゝ。しめ打ちはりてさゝげぬ。其願の志かいたるもの見しに。その言のはのつたなきが中にも。田家の方言をまじへ。夫はいとゞすがた丈夫なりき

遠山猿平といふ。獵やうの事にのみあづかる職なり。顏猿に似たりければ。かく名をいひたり。ある頃しる人の。かれが宿へ行きしに。遠山は鹿の皮はぎながら。其肉を手ぐひにして口も血に染みたり。つまをよびてうつは物持ち來れと云ひて。持ち來たるを

あけず。豊田何がしをして。しひてひらかせたり。狸の足からめてありければ。蠢々のみにして出でもやらず。近づけばえならぬ匂ひたへず。寄合ふ人とてもなし。とく狩人へ返しあたへよとて。又ふたを覆ひ。此ふくろは見るべうもなし。むしろ八つしくばかりなりとも。かゝるのうちには。いかでその術をなしてんやとてわらひぬ

去年九月の初。甲子の山へ行き侍りぬ。城をば曉頃に出でしに四五里にして夜はあけたり。玄ゝだひらといふ所は。平かなる野のはては山に續きたり。眺いとをかし。江の澤の邊。木立なんどいふ所は。皆紅葉のみ生ひ立ちて。萬山一紅ともいふべし。猿の聲などもしたり。かきかね橋といふは。筏などの様に木の枝あみならべて。山の岨へ懸け渡したり。蜀のかけはしなどいふも此類にやあらん。其橋渡りて見やれば。清き瀧のかしこの岩。こゝの石にあたりて白玉くだくるやうになん。實に此景色はかし山第一ともいふべし。是より先は。坂のけはしさいふべくもあらず。いと苦し。溫泉の景色もいとをかし。予道すがら畫きて都のつとにせばやとおもひたれど。言のはも筆も。いかに文くはへ花さかせ。筆をまはし五彩をほどこしたればとて。萬分の一にもいかでおよび侍らん。白川へ至りてかしの山見ざらんは。孔子の門過ぎていらざるがごとし。かしの山へいたりて楓葉の景色見ざらんは。堂に至りて室にいらざるがごとし。もみぢの紅。水の白妙よりして。大なる石は十歩廿歩におよび。小なるは目にもおよばず。みな其形をなしつゝ。こと〴〵の色を顯して。水により山にそひ。谷に望み坂に横たはるさま。云ひ盡しがたし。まいて風雨霜雪花月の折々。うつり行くけしきはいかゞあらん。道の嶮しさをいとひなば。又かゝるながめもしらじ。虎穴に入らざれは虎兒を得ざるといへるにひとしとやせむ。日は長し。事は少し。勤は繁からず。又させる能もなく。いかにして日を消し侍らん。傍の人にも物語して慰めよといひしに。物語する者もなし。おなじ事に日は長し。夜は短しと誰もしれる事のみいふなり。いで此地にありては。人の惡しかりし事をいふも。此國の人のうへなり。かゝる拙き。かゝるおろかなること侍りきといふも。此國の人のうへなり。いとおそるべき質

がた。漸夜寒の頃。此虫も夏の程の。としわかくわざすぐれたる心にて。ひたすらうちとまりて。させどもすへども。己か口ばし七つ八つにさけたれば。心ばかりにて業おとりするぞおろかなる。此外虱のみなどいふ虫も。おなじ憎さなるべし。身にしらざればはぶきぬ。芻蕘にとうてしるべし。（二月）きさらぎのはじめも。いまだ雪うちふり。氷かたくて。梅などもいまだ咲かず。江都はかの臥龍てふ梅も散りたりと聞きて。いとゞゆかしさのあまり。古郷へ文やるごとに。一夜明けてはるになりたれば。述職のほどちかきやうに侍るとのみいひやりたり。或日。冥川寺へ來りぬ。和尚などいで、物語したり。予硯よせて

縦獲雜活本是有心。縦獲雜活本是無心と書きて

絶えはてし谷の棧渡りつゝ
月なき里の光をぞ見る

とよみたり。夫より元門定忠等おの〳〵題をさぐりてよみ出でたり。予も春月と花との題を得たり

しづけしな幾春をかはふる寺の
[illegible]こけの軒端にかすむよの月

咲く花の散るも惜まじ山寺の
かねて心に思ひ知る身は

狸を待しかば。庖丁して汁にさせたり。誰しも初めてくふ事なれば。一たびくひては頭うちかたぶけ。しばしかうがへ（考）ゑばし味ふほどに。其匂ひいとあしく。みな〳〵はなを掩ひて吐き出だしたり。鵜尾何某もおなじく喰ひしが。強食の名を得たりや有けん。其肉を只に呑みては汁をすひつゝ。三度までかへたり。さらば閑かに味ひてといへば。うまきさまなれど味ひもせで。汁打ち吸ひてひたのみに呑みたり。實ははなおほふ人にもかはらざりけりとて興じぬ

狸の頭をやきて其灰を用ふれば。失心風を治すといへり。狸を得なばとく〳〵出だすべしと。國中へ解きたりければ。二三疋打ち殺して出だしけり。みるもの兩の足をひらき。その毛をわけ。しばし頭をかたぶけて。こは雌なりとて笑ふ。狸のかくし所の袋は。席八つしくばかりもありといひたればなるべし。其後。生ながら得たりとて。あやしき箱に入れて出だしたり。ひらき侍らずば見べきやうなし。いかゞはせんと戸おしかため。一間しつらひつゝ。いで此ふたあけよといへど。たれしもこゝろよからずとて

理なりといひて。なぐさむ人のはづかしさよ。あけの日。其事いひ出で、は。きのふさせる事有りしか。いとはづかしとて。しらぬさまなるも。心得のうと〳〵しき。思ひやるべし。暑き日もわするゝとて。盃かたぶけ。汗打ち流すもいかなる事にか。うれひをも忘るとはいへど。酒にて過をなし。はぢを得て。家をほろぼし。身を失ふもあなれば。うれひそふものとやいはまし。昨日酒のみて。今日は心地死ぬべくありとて。枕により。かゆすゝりて。酒のにほひをも。嫌ふにぞ。よし命ありても下戸には成りぬべきと見れは。程なく始めにかへるぞかひなき。其外何の職何の任になりたれば。其位尊く任おもきを賀するよりも。猶々愼みて奢を去り。風致の助なすべきは。殊勝の事なるべし。農になりて鋤鎌なども調はぬに。財をつひやして酒のみ。農になりたるを。ことしはいかなることにや侍らん。蠅てふ虫は又なくにくし。晝寐の夢妨ぐるは。怠りをいさむといふといふべければ。とがめむやうもなし。たゞ書なんど見。晝なんど書くころ。顔のあたりに。ひとつふたつとまるを追ひやれば。しばしかなたへうつり。又飛び來り飛び去り。はては友おほく集へて鬪諍し。あるはえもいはぬふるまひらうぜきなり。又蚊てふ虫もにくさは劣るべからず。夏の夕。涼しさに端居して。笛のしやうかなんどいへば。早其聲をしるべに。飛來り。己が名呼ぶ聲いとうるさし。蚊遣りふすぶれど。煙り薄きほどはなほ立ちさらず。人もたへかぬる頃。かれもしばし立ち行き侍るを。其隙を得て帳打ち垂れつゝ。今宵は安きいをぬべかめるとおもふうち。耳のあたりに聲して。枕のあたりさりぬるいとにくし。しそく（紙燭）もて燒き殺してんとおもへど。起きあがるほどのわびしければ。人のはひ出で、やき盡くせよと。しそく持ちありくほかげの目にてりそひて。ねぶさいとたへがたし。貌に留まりてさすを。はやうちにうてば。とぶともみえず。腹ふくるばかりすはせて打てば。血打ち散りてけがらはし。只手と足との裏さしたらんは。かゆさもそことさすべうもなく。ひたかきにかきてもあたらず。いとくるし。ひるの程も。調度ならべ置くかたはらより。しのびやかに出で、害ふのみ。足に白き斑ありて。こと國にもとらをもて名づけし類なるべし。秋の末

いふは。理しらぬにてぞありける。かゝる酒夜のむしろは。こゝかしこ五人六人ほどつどひ合ひて。定まりたる賓主もなし。あるはたふれふして病者となるもあり。あるはえんのほとりへはひ出でゝ。えもいはぬ事するもあり。あるは席をにげて出でゝ。大路にいぬるもあり。またははぎの毛みゆるばかりにからげて。盃盤の間々をとびこえてすゝむるもあり。酒のみがてにしてにげまよふを。袖引するゑてのますれば。眉ひそめ。目をとぢ。胸打ちたゝきてくるしむもあり。四十にあまる女の。髪も所々白きが。紅こちたくつけたる。口ひろらかにして。若き男のかたはら近く。ねぢより差よりつゝ。あられぬ事なんどいふもあり。いとえんなる女房なども。ゑひ狂ひて髪打ち散らし。もすそ亂し。風いづるばかりありきて。そのこのあたりさらぬもあり。年若き男。初の程こそはありけれ。後には柱に打ちより。白がねのきせるひたひふすぶるばかり。空ざまにあげてのみ。又はゆびのさきに横たへて。水まく如く廻し。つらに手なんどあてゝ。謠歌うたひつゝ。はるかへだゝりて唾壺へつばをとばすと。我は顏の風情なり。はては女の手などとりて。酒のみてんやなどきこゆるも淺まし。又は二人さし向ひて。かたみ（互）に指のべかゞめるやらん。聲高にのゝしりて勝負あらそひ。又聲のかぎりうたひて。顏あつき事いふも。興をまさまほしくやおもふなん。わがひやうしのあしさ。聲のあしさ。姿のあしさも打ちわすれて立ちまよひつゝ。盃ふみわり。肴ちらすもあり。只下戸の。側におそれたるさまして。目のみうごかして。をりもあらば迯げ出でんとするは。此内の智者ともいひつべし。醉なきする物は。過ぎこし事など云ひ出だして。雨雫となきては。酒のむほどに。其座立ちされよといふは。ゑひ侍らぬものを。ゑふといふぞかなしきとて。ひたなきになくを。醉ふてはら立つものきゝて。此いはひの席に涙こぼすこそ心得ね。ぶけうのふるまひするやからは。此むしろにつらなるまじと。いらゝかにいふを。醉ひて笑ふものうちきゝて。何のかなしき事も。腹ふくるゝ事もなきを。あのなみだおとすふぜい。いかりのゝしるさま。いと珍らしと腹うちかゝへて笑ふ。何れも醉のうへなれは。是非いはんやうもなし。只尤さる事なり。きはまりなき道

思ふほど。かねの音をかぞへ。鳥の聲をきゝ。寛の音もうるさくて。志ばし目をとぢて見れども。夢みんやうもなし。かくねまほしくおもふ程ねられねば。よしひとよはおきて明さばやと思ひきりても。兎角ねまほしき心のみわすられず。ほどちかきあたりに。いねし人も。今や夢など見るらんとおもへば。いとゞむねくるし。さらばよその事を思ひ出だしまぎれんと。心にもあらず。をかしき事。たのしき事など思ひみれど。いつかうちわすれて。夢をばいつか見んとのみ思ふなり。夜もやゝ更け行けば。いとゞさびしくて。こしかた行く末の事など思ひつゞけ。あるは心くるしき事など。かうがへて夢もみつかず。せん方なくて。くすしにとひければ。只物をふかくかうがへて。心を勞し侍る事のなきやうにと諫む。されども短才重任。いかでかうがへ侍る事なくてありなん。さるをうちわすれて意とせずば。又國主の職をしるべきやうもなしといはん。とまれかくまれ。才短く任重きはせん方なし。酒飲こそをかしけれ。されども。今の世。うちよりむせみ飲むは。賓主の禮をも失ひ。手をおさへてしひてのませ。肴はさみて投げちらし。後は席上に酒打ち流しなどするぞわろき。そのしひ侍る人は。いたけ高に成りつゝ。詞荒くいきめきて。のみ侍らずばとく／＼此席を出でよ。のみたらばゆるしてんなどきこゆ。しひらるゝ人も。うち腹立てる風情にて。我一人りにかくしひ侍るこそ奇怪なれ。人のみ侍らぬうちはいかにいふとものむまじと云ひて。あらけなきをのこ二三人。かたみにひぢはり。ひたひにすぢいだし。顔赤らめなどして。いかなる國の存亡安危にかゝる事とや思へる。そのさまにげなく愚なり。其中に酒仙ともいふべきが。此盃のむにたらずとて。おもてかくるゝばかりの盃取り出だし。鯨の水吸ふやうにのみたれば。みな目出度きのみ様とて。戰の場にて功名したらんごとし。又酒うけて盃のはし少し見ゆれば。いと淺間しき業かな。滿つばかりに受け給へといへば。又いたく辭してうけがはず。よし其酒ましてうけたらんとて。さのみの事もあらじを。にが／＼しう辭すも愚なり。瓶子の酒のかはりしを。一つのみて後人にすゝむるは。酒の味とあたゝめしほど、を心みるなれば。先よりしひて瓶子のかはりしぞのみ給へと

吹きかふ風もなければ。この汗の衣はいかにしてほしてんといへば。みな〳〵夫につれて。初にはたがひしことばといひどよみければ。此地しりたる者も詮方なくて。常に引きかへたる著なり。箇樣の事は我もしらずいとまれなりといひぬ

むかしの男は。かみにも油つけずして。世にむくつけき風にてありけり。夫より程經て後は。かみに油つけて。うるしゑたるやうにぬりかため。色好するをのこは。紅粉など顏にほどこし。衣もうつくしきをこのみたり。夫より又うつり行きて。今はかみにも油をうすくつけて。びんかきみだし。きのふむすびけんやうなるを好み。衣もうつくしきをばきず。袖などもそろはぬをいとはぬさま。只色をも捨てたりとみゆるなり。今にていはゞ。油つけたるはつゝしむ風情あれば。よしともせん。世の人いろにそみ。聲にふけりて。其ならはしになりもて行くも。おなじまどひに歸するとやいはん。女なき世ならましかば。かゝるならはしのかはり行く事も侍らじ。かしこき人の稱を見なば。其名も世々にくちじ。上たる人の譽を得なば。職任もおもかるべし。夫をもふりすてゝ女の稱譽をのみ。得てほしく思ふぞかなしき。色ごのみする男の。かほよき妻もつはなく。戀ひわびて妻を得しものゝ。榮ゆるはまれなるべし。夫の方より兎や角物いひ出だして。中惡しくなりたるは。ほどなく打ちとけて。初よりむつまじくなるものなり。女の方よりあらそひ出でたるは。初にかへるだにいとかたし。今ひときは打ちとけよかし。今一言きかまほしと思ふほどなるに。なにとなううらみものこるやうにあなれども。いとたふとき女なんめり。うちとけ物がたりして。男の顏まばゆからず見て。つゝましきけはひもなく。ほどなく。いびきかきてねたる。いとあさまし。年若きものゝ。我いとけなき時はといひ出でたるにくし。としおいたる女の。佛このまぬ又にくし。わらんべのいかのぼりあげぬも又にくし。若き女の道行に袖に手してぐひさし出だし。我はがほなるさま。又なくにくし。國家の政をも執り行ふ人の。鄕に杖つくよはひに成り侍りて。文の道つゆしらずして。若き男らとうち交り。遊藝をのみ學ぶは。又似氣なくいとにくし

此頃は。夜はことにいねず。さま〳〵にねまほしく

小澤龍庵も同じく爰へ勤仕に出でたり。年の程若からねば。いと〻故郷をのみ戀ひしく思ひしが。二人のいひしは。月日のたつも駒の隙過ぐるやうにこそあなれ。されどまつ日は遠きやうに覺ゆ。此地に留り給ふもいまだ百日餘りなり。さぞわびしからんときこえしかば。龍庵聞きて修行者など。水をあみて百日を送くるものもあなれば。いかでわびしかるべきとはいひぬ。勤仕のくるしみは水あみ侍るほどにはあらざりけらし

久しく逢はぬ人にあふては。こは久しくあはざりけり。安全にてこそといふより外もなく。何となくつ〻ましく。はぢかはしくて。帶のあたりのみ見やりて。顔など見あふ事もせず。しばし打ちしほれてひたすらはなおしぬぐふは。いとせちなり

をかしげなる所へ書きたる書のおくに。京何町。江戸何町。何右衞門。何兵衞板元とかけるいと口をし。めでたくかなしうしたる弓の。本はずのあたり。ぬり殘して弓打ちたる人の名みゆるいといやし。この國にては。霜月の初めつかた。みな門々へ穴をうがちてむしろもておほふ事なり。いかなる事ぞととひしに。是より霜雪いたく氷れば。年の暮に松建て渡すべうもなし。いまその用意するなりといひぬ

鳥峠といふ山は。いと高くして木立茂りたり。こぞのふみづき(七月)の半。殘る暑に絶えかねて。かの山へ入りしに。此地覺えたる人。山の上はいと寒し。わた入りたる衣。用意すべしといひければ。みな〳〵悦びて。坂のぼるほどのあつさも。山上の寒にわすれなん。されども此ひとへの衣に汗返りたるを。俄に寒風に晒しなば。病をやうけなんといひてうち登るに。上の方を見やれば。長き坂の。むねにつくやうに覺ゆれば。みな足のあたりのみ見て。先立の人にしたがひたり。ふもとよりも。木立の間。坂のくるしさに。あつさもたへがたければ。中々頂へははるかなるべしと思ひしに。先立の人。はや頂に來にけりといふま〻。嬉しくも見やれば。そのながめいふべくもなし。數十里の間うちはれて。麓の山にみえしもあり。つかの樣にみえ。川なども帶引きはへたらんやうに。大きなる木も。はりならべたてけん如し。其眺たぐひなさに。皆々言葉もなかりしが。や〻ありて頂の寒きときこえしが。此暑さは麓にも増るべし。たえて

なじよだ豆だむしといひぬ。女。豆の名なるべしとや思ひけん。其なじよだ豆にて侍るといひければ。男いとうたがひたるさまして。又いひぬ。かたはらに此國の事をおぼえたるがうちきゝて。わらひつゝ。なにの豆にて候かと問ふことに候といひければ。かた（互）にみはらわたをきりたりとぞ。なじよとは。何條といふことなるべし。むしとは此國にて言葉のすゑにつくる事あり。いつか。田家の童の田面にいたるに。何なすかととひしかば。はい。ねにだむしとこたへき

過きにし頃。城の東小目川村のほとり。七まがりといふ坂に。鬼出づといひ出でたり。我も人も打ちつれて見に行きけり。見きといふものあり。又はみざりきといふもありたり。見きといふにも心々にてかはりたるにや。形も一定ならず聞えしかば。いよいよ鬼なめりとて。みな〳〵西へ後みせぬはなく。此事いはぬ人もなし。よくみたる人のかたりしには。鬼にてはあらざりけり。けものなりといふ。我はがほにかまへて高くしたる人は。我が徳にて。名におふけもの、出でしにやと思ひたるも有りけらし。其後狩人銃丸にて打ち留めたるを見れば。羚羊なりけり。こゝらにてはくらしことといふ

このあたりは。雪の降るも越のやうにあらねど。冬の初より日毎のようにふるなり。されども風烈しくて木々の枝につもらず。ふりはべれば忽氷侍りて。江都の氣色におとれり。春野はおもかげ有りともいひつべし

勝屋宣利は舊都よりつき給ふ人なり。是も我に隨ひて此地に勤仕侍りぬ。交はるべき友もなくいと淋しければ。古郷へ歸る日をのみ待つどほに。ものしたるさまなり。ある日青によし奈良の里より作り出せるうちはの骨をかぞへみて。そのかずよりも此地にとゞまる日數は增りぬと。かなしみて。むかし斑女は扇を見てかなしみ。今の宣利は。うちはを見て。故郷をしたふ心にて侍るといひてわらひぬ。されどもちかしき友はともあれ。かぞいろ（父毎）はらから（兄弟）にも立ち別れて。あまさかるひなの住居のわびしさが中にも。わつか。膝をいるゝいとせばき室にのみ一年を送るは。誠にさもありぬべし

この花をやうゐけんとおもふほど。萬のかなしき事も。我身のうへとのみおもひなさるゝやうになりて。只打ち向ひ涙こぼして打ちしをる。よし言の葉にのべんも。筆にかい(書)とめんも。誰に見せ誰につげん。よしつげたらばとて。我かなしさのやむべうもあらじ。見せん人も。つげん我も。いつまでか此月はなにむかひ侍らんと思ふ程。むかしなづかしく。後の世も戀ひしくて。膝をいだきて長嘯し。はては戸閉ぢて奥へ入り。枕よせて見れども。心の底すみ渡りていねんやうもなし。月やいかに。花やいかにとわすられねば。戸おし開き。おし立てゝ。夜をあかし日を暮し侍るもあなるか。又まつ夜ほどふる月に恨をそへ。きぬ〴〵の別れに。有明の月をうしとみ。ひもとく花にあはぬとし月をかこち。散り行く花につれなき命を観ずるも。せちにおもはる。只かくうしとみ。たのしと見るも。みなむかふ心のかはるにて。月の光。花の色は。とこしなへにかはることなし。したへどもみず。むかへどもしたしからず。去りてもうらみず。背きてもいからぬにぞ。代々の人々月花にめで、思ひを盡すも。さる事なるべし。」文のかず〳〵に侍りて。たばこすひてんと。火とり引き寄せ見れば。火は消えたり。いとほい(本意)うしなひて。きせるもて灰かきあらはして見れば。ほたる火の光したるが。二つ三つみゆるぞ。又なくうれし

十月初めつかた。増見村へ行きて。山々の鹿をおひ出だしたり。狩人も多く出でたり。されども其日雪もふらねば。獵獲も少なかりきといふ。雪ふりたらばと心に終したりけれど。其後强ひてふらざりければゆかずなりにき。二たび白川の城へ行きぬる時。年の凶にあひたれば。召しぐしける女もはぶきて。野川菊井といふ老女をのみつれたり。妻室は同道し。人は少なし。いとさびし。野川。初のほど。白川は所の名もをかしく。さびしさも又しづかなるも。いと心に叶ひたりといひたれども。月日のふるほどに。さびしさにもあきてやありけん。江都へかへりたしとのみいひたりければ。初には似ぬことよといひしに。野川も。今はいひかふべき言葉もなくて。しばしが程こそ野山のやうも珍らしく思ひしか。今は誠に秋風そよぐ白川なりといひて抱腹しぬ。下部の女。豆をかはんとて。下部男を呼びて。其由いひしかば。

關の秋風

白川樂翁著

關の秋風吹き初めていく日もあらぬに。此地に來り侍りぬ。政のひまく〳〵心に浮ぶ事をかいとゞめぬ。ゆめ〳〵人に見すべきものにはあらずかし

むかしの習はしはいとむくつけくして。風月の晴なんどたのしむものも少かりきとぞ。花木多く移し植ゑたる庭を見て。其主に。もの丶ふてふものは花など見るものにはあらず。とくぬきすてよとはしたなくいひけるとぞ。木訥の野なる。いとことやうなれども。文のみすぎて。史といはんには勝るべし。今の世のならはしは。風月の情に心をやりて。酒のみものくふをのみ。專とはするにや。むかしは武をのみこのみて。月花をうすしとし。今は奢をのみこのみて。月花をたふとむ。月花に心なきは一なれども。野なるは仁にちかしともいひてまし。いで月花をめづるてふ人は。心に賞を盡くす事なんめり。月にむかひて。目もはなさず打ち守りて。我しりがほに。古き歌など打ち吟じて。古き人は我を知らず。我又古人にはあふ事なし。たゞ月は代々の面影ぞといふめるも。李白の古時の月といひけんにおなじ心なるべけれども。其打ち向ふ人。させるざえあるにもあらざれば。古き人の。よしいま出でたりとも。いかでしりえて交り侍らん。かうやうの人に。心あふ古人ならば。月にこひ侍るにも至り侍らじ。又かたはらの人は。今宵の月の光みまほしくても。夜寒の風たへがたければとて。戸おし立て丶酒のむもあり。花などの枝をしげもなく打ち折りて。酒樽にゆひつけてかへるもあり。又は猿樂を催し。あるは鄙聲を出だして。月はちるとも。花はくもるともしらず。喪心のやうにくるふものありけり。又は我こそといはんばかりに。燈火も打ち消して。笛などふけるも。此頃習ひけんか。ほれてわすれけんか。譜など膝の上に置きてしばしふき。しばしやめて。脊くゞめて譜をすかし見て。くるしむもあなり。其外。心うしと思へば。月を見るも花に向ふも。うきたねとなりつ丶。心にうかぶまに〳〵。我うさはさらなり。人のうさまでおもひつゞけ。なき人も此月をばめでけん。

いにしへ無義の人あり。今建節の士ありと。論衡にみえたれど。善惡雜廁みな其稟け得たる性のなす所にて。古今なんぞ是をわかたん。文筆なしといへども。義あるものは。かならず道をいたし。學習ありといへども。義なき者は。遂に惡をなす。辨士則その久しきを談ずるもの。文人則其遠きをあらはす者。文人辨士わたくしのこのむ所をしるして。よしあしを談ぜざるは。亦是貴鵠賤鷄の說なるべし。我師蜀先生。慶元以來世にきこえたる人物を纂めて。假名世說と題して。書きさしおかれたるものあり。書肆端星堂のあるじせちにもとめて。梓に鐫ん事を乞ふといへども。先生ひさしく病床にいまして。筆とる事もものうしとて。おのれに其たらざるを補へよとあれど。元より書に乏しければ。或は師の藏書より抄出し。あるは友人にもとめ。またはみづから記憶したる事どもをも書きそへて。いさゝか是を論じ。これを補ふといへ共。もとより我性愚にして。且いやしければ撰ぶ所も又これ性によるならん。たとはゞ珊瑚にまじる石瓦なるべし

文寶堂しるす

早くこゝを立ちさるべしとて。山伏町の嘯月樓にゆきて。又々酒くみかはせし時。予狂詩をつくれり

諸君斜曲レ背　白馬横推レ車

已及二戰場一處　逃歸二岡部家一

先生此詩を見て。大笑せられき。此後先生の雷名四方に轟き。日々發行して。染筆を乞ふ者。門前に市をなし。貴となく賤となく。此手跡を學ばざるものはなかりき

○寶永五子年十二月。感應寺の隣なる庵室にて。尙齒會あり。此時渡邊幸庵百二十七歲にて上座し。則筆をとりて

長生殿裏春秋富　不老門前日月遲　（二行書なり）

此詩を書す。これを床の間に掛けおけり。是上席の者の古實なるよし。此幸庵仕官の比は。さま〳〵勳功あり。仕を辭して後。便船して唐土にいたり。天竺阿蘭陀をはじめ。其外の諸州を經めぐり。異境に在る事四十餘年。漸く九十九歲の時歸朝し。都鄙を徘徊すること十年。後武江大塚に閑居す。天正十壬午年。駿河國に出生し寶永八辛卯年。壽百三十歲にて終れり

假名世說終

喰ふ事叶はざれば。日頃すきなる物をくらひて。療治をうけんとて。又蕎麥をとりてこれをもこゝろよくうちくらひて。いざとてかのつらぬきし玄のびかへしの竹をひきぬかせ。是より内外の醫療をうけて。日ならずしてつひに平愈して。以前のごとく日々家職をなしたり。此後十四五年も經て。傷寒をわづらひて終れり。さばかりの豪傑なれども。やまひには勝つことあたはず。定業はのがれがたき事なるべし

○芝三島町に。菓子をあきなふ新右衞門といへるは。少慾至直にして。日ごとに買ふ品の價をあらそふ事なく。賣る人のいふまゝにまかせて。もとめければ。家内の者いぶかりて。商人はいづれも同じ事にて。そのあたへの高下を爭ふならひなるに。いかなれば。かくいふまゝにはしたまふぞといふをきゝて。かれらは日ごとに重きを荷ひて。朝はとく出で。ゆふべには遲く歸る。ことに。暑寒の折からは。其くるしみいふべくもあらじ。おのれらは。年中店に居て。風雨のうれへもなく。家業をいとなむは有りがたき事ならずや。たとひ人にもの施す事はなしがたくとも。せめてはその價をあらそはずして。もとめなば。すこしは。かれがたすけともならんかといひける。後には新右衞門が情ある事をしりて。賣る者も價をひきくして持ち來りしとなん。春の比。遊山に出でんと思へど。われひとりにては樂みうすしとて。櫻花の咲きみだれたるを。いく枝となく買ひ入れて。これを家の内。こゝかしこに夥しくさしかざりて。よき酒さかなあまた調じさせて。妻子をはじめ。召しつかひどもに。うちまじりつゝたのしみけりとぞ

○東江先生（名は鱗。字は文龍 澤田文次と稱す）八丁堀に在りし時。門人いまだすくなかりしかば。正月の會はじめに岡部氏とゝもに來るべきよしをいひければゆきしに。日向氏その外十餘人なりき。吉原大全といふものつくりしとて。板下のまゝに見せられき。かつて唐詩選の句と。百人一首の下の句をあはせて。靑樓の事をしるし。義楚六帖といへる小本を著し置けるなど物語あり。ある日。この先生をむかへて。目白臺の潺々亭といふに遊び。酒もりせし時。白馬とかいへる醉客來て。座中をさわがせしかば。われひそかにはかりてかへせし事あり。先生大におそれ。かゝるものは。又も狗竇(イヌクヾリ)より來りて。さわがせんもはかりがたし。

給はる所にありて。すまの巻にはなし。こゝにおいて。惣左衛門はかの書を妻にうちつけて。其まゝ家を出で。同國烏山村の聟のかたへゆきてかへらず。それより妻は度々烏山村に來りて。いろ〳〵にいひわぶれども。一言のいらへもなく。顔をそむけてかへりみる事もなし。聟のかたにても。たゞ一二日の滯留と思ひゐたるに。年をかさぬれど。歸るべき氣色も見えず。皆々の心づかひに預る事よといふ事だになく。自若として。おのが家にあるがごとし。日毎に黄昏には。鍬を持ちて。裏へ出て畑の際へいくつとなく。穴を掘りおけり。夜あけに至りて。又これを埋む。かくのごとくすること。日々かはることなし。此穴夏はすくなく。冬は多し。其ゆゑをとへば。夜中に起き出て小便する穴なりと答へしとなん。わづかの間と思ひしに。廿四年こゝにありて。寛政元年十二月のはじめ。八十五歳にて終れり

○飯田町眞木川岸に孫市といふものあり。護持院原へいでゝ。往來の人に茶を煎じて商ふ事を業とす。つねに好みて書をよみ。諸家の系譜。又は記録ものなど。よく記憶せり。されど。おのが意とするところは文選なり。雨などふりて。徒然なる時は。二階にあがりて。側に酒一陶をおき。これをのみつゝ。文選をさかなにしてたのしめり。淳朴にして人と對話するに。さらに人の善惡をいはず。もし人の臧否を語る者あれば。面をそむけて答ふる事なし。花の頃は。東えい。飛鳥のほとり。おのがこゝろのまゝにあそびくらせり。平日原に出でゝ居る。をり〳〵時としては。一日に二三度堀ばたへ出でゝ。川をのぞき見る事あり。いかなることにや。人其ゆゑをしらずとなん

大工清吉は。難波町にすめり。藥研堀邊に請け負ひたる家の上棟の日。梁のうへより踏みはづして。大地へ落ちたり。人々驚きさわぎて。いそぎ引きおこし見れば。隣家の庭の屏の上なる。しのびがへしといふものをれて。右の脇より左の腹まで。突きつらぬきて有りけれども。清吉少しもひるみし氣色なく。そのまゝ人の肩にかゝりて。急ぎ我家へ立ち歸りて。すぐに酒一升と鮪のさし身を取りよせ。これをのみくひす。家内の者をはじめ。人々もとゞむれど聞きいれず。今より療治にかゝりては。毒いみにて何も

いへり。彦九郎に一人の男子あり。六歳になりける
が。喪中に父のかたはらにありて

もやにゐて雨のはら／＼落ちくるは
哀そまさる涙なりけり

藤衣ころもさむしと風吹けば
木のはちり行く音ぞかなしき

いまだものかく事をしらざれば。姉にぞかゝせける
と。かの國の人の物がたりなりき

○駒込土物店のほとりに。常陸屋何がしとて。報謝
宿をする者あり。ある日。門口に來りて宿を乞ふも
のありしに。召し仕ふもの。ことばあらゝかにしかり
て。やどをかさゞりければ。あるじこれを聞きつけ。
いかにさやうなる事をいふにやと。障子の內よりの
ぞきみれば。いかにも癩病にて。こゝかしこ腐れた
ゞれて。いときたなげなれば。召しつかひのなさけ
なく。あしらひたるもげにと思へど。かゝるものを
とゞむるこそ。報謝ならめ。されども。かれらが思
ふ所も。いかゞなれば。とやかくやと思ひわづらひた
るに。妻なるものはいぶかしく思ひて。何事を患へ
たまふぞと問ひけるに。しかぐ／＼の事を語りければ。
それこそいとやすき事に侍れ。とく呼びかへさせ給
へ。さほど心ぐるしくおもひ給はゞ。召しつかひの手
にはかけさすまじ。われいかやうにも扱ひ侍らんと
いひければ。いとよろこびて。彼ものをあとより追
ひかけて。連れ來り。つひにとゞめけりとぞ。又常
に古き傘を買ひ置きて。急雨などには。辻に持ち出
て。これはふるくは侍れど。ぬれ給ふよりはすこし
まさり侍らんとて。しるしらぬわかちなく。からか
さもたぬ人にはあたへけりとなん

上州大原に。鑄物師惣左衞門といへるものあり。若
き時より書を好みて。よく記憶せしが。ある時。俄
に雨ふり來りて。道ゆく人もいそげる中に。菰をか
ぶりて。かしらばかりすこし出だして。走りゆく者
をみて。惣左衞門の妻のいひけるは。枕草紙にみの
むしのやうなるわらはとかけるも。かゝるさまにや
といひしに。惣左衞門これを聞きて。それはひが覺
なり。源氏須磨の巻に。ひぢがさ雨とかふりきてとい
ふ所に。見えたる事にて。枕草紙にはあらずと。ふた
りこれをいひあらそひて。つひにふたつの書を出だ
しみれば。枕草紙に。一條院の御めのとに。御ふみ

きたる衣服に着かへ。黒天鵞絨の褥の上に座して。たばこ二三ぷくすひて。寢所に入る。夜具も。繻子。純子の類ひにて。これを着て臥す。夜あけぬれば。また〱例のふるびたる綿服を着して。飴をつくる事。きのふのごとし。人その意をとひければ。人といへるものは。日々おのれが渡世にのみ。心を勞して慰むかたなし。たとへ外にいかなるたのしみをなすとも。其中に利を得んと思ふ心のはなるゝ時しなければ。心のなぐさめにもならず。たゞ夜眠りたる内ばかり。まことのたのしみなり。これによりてさる事をして。性を養ふといへり。實に生涯外のたのしみなく。齡八十餘歳にて。めでたく終りしよし。山の手にすめる友人の物かたりしまゝ。こゝにしるす

○下野國足利の里に。布屋何がし壯年より禪法に歸依せり。ある禪師のもとより

かなでいふいろはにほへと聞えたる
それですまねば我ゑひもせず

としめされたり。近比七十餘歳にして終れり。そのゆふべに筆とりて

一ちりぬるをわか身ひとりと思はねば
あさきゆめみしゆめの夢の世

と一代一首を書き殘せり。年來生死をば。工夫したるなるべし

○芝居ものは見てのみやといふ神を信ずるよし。かたをなみは片男波となり。伊吹山のかくとだにといへる谷の艾。よしといふも大わらひなり。おしつけさなき田といふ新田もひらくるなるべし

○青樓にて。客人權現の宮を信ずるもをかし。山王廿一社の客人權現は女神なり。青樓に女客はいらぬものなり

上州新田郡の邊に。高山彦九郎といふものあり。いとけなき時。父母にはなれ。祖母のやしなひにて成長しけるが。もとより學問を好みて。祖母によくつかへしに。祖母やみて死せり。その時三年の喪を行はんとて。墓所にわらやを造り。其中に入りて。暑寒風雨をもいとはず。籠り居たりしを。ある人問ひけるは。祖母の喪に。かくのごときは禮にあらざるべしといふ。彦九郎いはく。われ幼き時に。父母にはなれてより。祖母の養育にて。人となりたれば。父母の恩は祖母にあり。しかるゆゑにかくはし侍ると

のじりて。やがて舟のうちどよめき。見物に出でし數艘の舟。後は酒のみ。歌うたふ事もせで。川づらのみ守りゐて。たゞさかづきの流れよらんことを待ちて。夫のみあらそひ興じけり。こはまさしく紀文がなしたるわざなるべし。いざみなかみを尋ねばやと。舟を墨田綾瀬のほとりまでもさしのぼせ。いたらぬくまもなくさがし求めけれども。其夜はさらに紀文が舟をば見あたらざりしかば。夜ふけ。興つきて。みな人歸りぬとぞ。紀文は其日舟あそびに出づるとのみいひふらしおきて。自分は家にありて。盃ばかりながさせしとぞ。後に人々傳へ聞きて。その風流を稱しけるとなん

○京都五條の邊に。風之翁といへるあり。此おきなのいはく。人情は通じがたきものなり。わづか五金十金の事にて死なねばならぬといへるも。實の事とゑれば。力のおよぶたけは。合力もすまじきものにもあらねど。其やうなる品を以て。人の金銀をかたりとる者もあれば。叉そのたぐひかと思ひて。取りあはぬもの。世の中に多し。されども。その者實の事にて。いよ／＼たゞぬ義理にて。死しなどすれば。さてはじつの事にてありつるよと。はじめて驚き。かゝる事ともしらば。貸すべきものをと思ふは。たれしも同じ事なるべし。われ壯年の時。西國へ商ひに行きたるかへりに。播磨潟にて。難風にあひ。命から／＼に歸宅せり。其時の物語を。兩親にきかせなば。嘸泣き出だし給ふらんと。その後。そろ／＼と折々はなし出だしぬれど。見ぬ事なれば。それほどにはおどろき給はず。たゞそれは怪我もなくてめでたしなどいひ給ふばかりなり。是わが子を愛せざるにはあらず。無事に歸りたるゆゑなり。もし片腕にても脱けて歸らば。そこでは驚きもあるべし。さすれば。親子の間にてさへ。人情は通せぬものと覺悟してより。浮世もたのみすくなく思ひて。隱遁せりといへり。後に九十九庵風之と號し。諸國に行脚などして。生涯風流にしてをはりしとぞ

四谷に飴屋忠七といふものあり。朝はとく起き出でゝ。飴をこしらへ。家業にをこたりなく。少しのひまをもをしみて。三度の食事の外。さらにやすむ事なし。暮時よりしまひて。風呂に入り。夫よりやぶれふるびたる麁服を脱きすてゝ。黑羽二重に定紋の付

其後の市兵衛。狂名を加保茶元成といへり。一とせ此内所にて。狂歌の會ありし時。持佛堂をみれば。先の市兵衛が位牌あり。法名釋佛妙加保信士とありしもおかしかりき

江戸座の徘諧師神田庵が家に。紀文が涼の酒盃と稱するものを收めてありしを。みたる人のかたりしは。何も別に工せる事もなき朱塗の盃にて。世にいふ小原の形したり。内は鐵線からくさを。猫の畫にしたるものなりき。神田庵主の話に。むかし紀文盛なりし比。一とせ夏のことなりしが。その日。紀文は淺草川に船あそびするよし。世間にいひもてふらせしかば。いかなる遊びをかするならんと。是を見物せんとするともがら。其日にいたりぬれば。われおくれじと競ひて。舟に乘りしかば。川の面は水の色さへ見わかぬまでに所せくもやひつれ。今や紀文が舟は來りなんとて。待ち居たりしに。夕日かたふく比にもなりぬれど。それぞと覺しきもみえねば。後にはこゝかしこふねをさゝせて。尋ねめぐるも多かり。やゝともしつくる比にもなりぬれば。こゝにも盃流れきたりぬ。かしこにも取りあげたりなど。いひの

きたりて。これに舞ひ狂ひけりとなり。然らば寫花といへども。眞に逼る時は。自然の香あるかもしらず。女を海棠といふ。これも畫をよくせり

○寶暦の末。淺草寺のほとりにありがた坊と異名をとりし僧有りけり。本名は樂心といへり。この僧もとよりつんぼうにしておふしなりければ。自性院といへる地藏堂の。常念佛の役に抱へられけり。結衆仲間にても。件のかたはをあなどり。夜の勤番にのみあてけり。樂心は苦にも思はず。元よりものいふ事もならねば。終夜鐘をならして。あゝあゝとのみいひてつとめけり。ある夜。丑の刻ともおぼしき比。地藏尊御聲高く。樂心々々と呼び給ふ。樂心はじめて。耳に入りあいと答へ。又舌もまはれば。有りがたうござりますといふ。これよりものもいはれ。耳もきこえて。今はよのつねの人に異ならず。唯ことばのあとさきに。有りがたうござりますといふを。口くせにいへば。有りがた坊と異名せり

○長崎の鶴亭隱士は。少年より畫をたしみ。墨畫の花鳥などことによく得られたるよし。元より人目驚さんとにもあらず。みづから心のうつり行くにまかせ。或は芭蕉葉の風にやぶれ。或は若竹の雨にきほふなど。あはれにやさしくうつせり。ある時。友人來りて。物語のついでに。印の押所を問ひしに。答へていふ。印はその押しどころ定れるものにあらず。其繪が出來終れば。こゝに押してくれよと。繪のかたから待つものなりといへり。ある人。これを聞きて。よろづの道。是におなじ。譬へば座敷々々も。其客の居やうによりて。上中下の居りどころ出來。また人のあいさつも。その時々のもやうにあり。臨機應變とも。時のよろしきにしたがふともいへるごとく。一定の相はなきもの。しかし其時のもやうの見わからぬ人には。此段さとしがたし。能くわかる人は。よくその場をしるなれば。琴柱に膠せずともいへり

○新吉原京町大文字屋市兵衛は。其かたち見ぐるしく。かしらもカボチヤといふ瓜に似たりとて。みな人かぼちやかぼちやと異名せしなり。顔かたちも童の謠ふうたのごとくなれば。みづから此歌をうたひて。人をわらはせしとぞ。其比都下にてひさぎたる。壹枚繪をこゝに摸寫す

くすぢも集り居たりといへり。又債を人に贖ふ事は。甚正しく。債を人に求むる事は。甚疎にしてかつゆるし。これ尋常異人といはるゝもの〻。眞似にて及ばざる所なるべし。わかゝりし時。二條樋口に居す。書扇并に石印を彫刻する事を業とす。債をもとむるの簿帳を篆書す。一とせ旅行して。臘月に及べども。家にかへらず。老母一族など集り。世にいふ書出しなる物を調んとするに。正文といひ。ことに篆書なれば。さらによめず。龜屋太助といふものを頼みて。やう〳〵にそのなかばをとゝのへきとぞ。他日一族ども。此事をいましめたれば。是より後。篆書をやめて楷書す。譬へば中等扇三柄某先生携歸估直既濟とか。或は未濟とか書す。これすでに老母及ひ一族の理會せざる所ぞ。いはんやこれを篆書せしをや。大雅が書畫は。逸品に入るべし。畢竟一點の俗惡の氣なし

○平澤常富云。我十三四五の比なるべし。存義小網町より深川一の鳥居の北側越えて住す。父と共に行きし事あり。又點取の懐紙の卽點のために。我ばかりゆきたる事もあり。此菴は紀文が衰へてのち住みける所なりと聞きて。少年の時ながら。すこし心をつけて見たるに。かはりたる事もなかりし。天井は一枚紙をたゞやたらに亂りにかさねて張りたるやうに覺えし。其後三十年計り後に。存義がはなしゝとて。晩得が物がたりけるは。かの一の鳥居の住宅の。天井やぶれそこねて。見にくければ。いかやうにも繕ひてよと。門人の中に經師のありければ。頼みけるに。かの經師損じたる所を委しく見て。横手をうちて感じていひけるは。此天井もとのごとく繕はんは。甚難義なり。紙の色いろ〳〵に。少しづゝかはりて。みゆれど。皆同じ白紙にて。糊は色々の糊にて張りたるなり。百年に及ぶ糊あり。五十年。二十年。或は十年經たるも有るべし。今かく百年を經る糊もちたるものなし。奇なり〳〵とて。かんじたりとなん。世にはさま〴〵かゝるはなしも有ることながら。信じがたき事歟。紀文には。わきておもしろき咄も聞き侍りき

三熊思孝（名は正親）京師鳴瀧村の人にして。專ら好みて櫻花の寫生をなす。終にその眞を得たり。或人これをもとめて。裝潢し。壁上に掛けおきたれば。常に蝶

か、るは。山だしの月でござんす。その月がけいせいの乏やれた水にうつりまして。けいせいのこゝろのそこをしりて。西へおつるといふ心で。ぐわちのこう乏やになつたをすいといふでござんす。中略 すいぐわちはけいせいのかたよりいふたことでござんすわいの。ずいぶんかねつかうて。すいにならしやんせ。おかし

按に。水月ものはなしの書名さとれば。ぐわちもなかりけりの文句此文にてあきらかなり

半時菴談々は。從來江戶の產にして。京都六波羅に寓居す。徘諧を以て鳴る。羅人竿秋は其門人なり。しかれども。羅人は擯斥して。貞德正流に歸す。談々後居を浪花にうつして。生涯京の水を飮み。敢て浪花の水をのまず。その驕侈これらにてみるべし

○祖仙 森氏。名守象 崎陽の人。浪花にすめり。猨をうつして。書名一時に雷同す。世に祖仙の猨と稱して。渴望するもの多し。其はじめ崎陽に在る日。獵者に託して。一猨を買ひ得たり。これを庭樹につなぎ置きて。そのかたはらにありて。猨の趣を寫す事。數篇にして。つひに絹に淨寫し。來舶の某氏の鑒を乞ふ。某氏のいはく。惜むべし。此猨は人家の養育の形にて。山中自在のおもむきにあらずといはれければ。猶また山中に入り。切磋する事兩三年。終に其眞圖を得たりと

名の實にかなへるは。大雅堂なるべし。駔儈(スハイ)の風。輕薄の習。つゆばかりもなし。此翁の事實。奇稱すべきを詳にせば。棟牛にも至るべし。かつて語りていはく。われ若かりし時。馬術をならふ。其師のいはく。そこもと武士にあらずして。騎馬の術學び得ても益なし。されど旅遊などせられ。足つかれなば。からしり馬にもまたがるへし。落つる術をならはざれば。怪我すべしと。われこれを是とし學ぶ。所謂からしり乘かけ二寶荒神三寶くはう神なるまで。ことごとくその落ちかたを習ひえて。危難をのがれし事。度々ありしと。又いはく。かつて和歌にあそびて行脚せし比。やどをとりうしなひ。すでに夜に入る。一寺へゆきて。書牘を投じて宿をこひしに。寺僧許さゞれば。とある所の竹林の中に入りて。趺坐して曉をまつに。夜もすがら何やらんかたはらにて。がさがさとせしが。夜あけてみれば。蓑にも笠にも小蛇い

ちといへどもゆるさず。一日鵜飼金平諸人と翁の座にありしが。翁講談の時。金平はさみをもてあそびつゝ爪をきる。翁これを見て。聲を勵して。師席にて爪をきるは。何の禮ぞと。金平おそれおのゝく。其席に有りあふ人々も。色をうしなへりとぞ

文月淺間記は。上野高崎羽鳥氏の女子撰するところ。天實に才を生じて。才古今になし。宋人のたはふれの說に。いはゆる遜杭機雲沒して後。天才子を生ぜし事虛語にあらず。此書のごとき。眞正の才子。未曾有の書と。播磨清詢これを賞して。其序にかけり

○其碩云。男女のしめやかにはなしするは。はなしの品はきこえねど。こゝろゆかしくいやならぬものなり。芝居見物して居るに。どこともなう伽羅の香のすると。松風につれて色糸にのせて。女のほそぼそと花車に歌うたふ聲のきこゆるは。心うきたち。あぢな氣になるを思へば。誠に三味線と蛸は血を狂はす物ぞかし

伊藤仁齋先生。別に棠隱と號する事は。世の人の知るところなり。又櫻隱と號する事あり古學先生和歌集に。菴室の前に櫻を植ゑ侍りしに。年をへて花の盛なりければ

世の中をいとふとなしにおのづから
櫻が本のかくれ家の庭

○諸分店卸は。一名浪花鉦とて。西鶴翁の作といへども。これは後に外題をかへたるにて。實に翁の作とは見えず。其中に

二字論　小太夫

大臣小太夫にいはく。せけんにけいせいかふに。すいじやぐわちじやといふ事。むかしから人ごとにいへども。わけのみこみがたし。きゝたいの小太夫わたくしもしかとしらぬ事ながら。こゝもとでいふ事がござんす。あらまし申しましよ。まづすいといふ字は。水といふ字をかきます。ぐわちは月といふ字でござるさうな。なぜといふに。けいせいを水にたとへ。をとこを月にたとへます。とのたちのすいにならしやるといふは。けいもじにもまれてのちに。なることでござる。まだしよしんなをぐわちといふさうにござる。せけんにしよしんなる人を。山だしといひます。そのごとくをとこのはじめて女郎くるひに

一臨終の遺書とて。山田中村忠太夫家に藏す。その筆のはこび。なか／＼盲人の書とは見えず。また小侯何がしの君の家に。短冊一葉あり。是また其筆意盲人の手跡とは。かつて見えずとなん

○一升樽と。百の錢に手を付くるとそのまゝみなになる事はやし。あてがひ世帶の米薪と。風吹きに爐燭たてると。春の日にあふ軒の雪と。元日から十五日までの日は。はやく立ちて。あそぶ日のみなになる事。毎年我人あそびたらず。光陰にちがひはなけれど。わがこころに好(すか)ぬ事する時は。同じ日を長くおぼえ。こゝろにすきぬるあそびには。もう入相の鐘がなるかとをしみぬと。其碩が喩草に見えたり

勢州に小澤詢五といへる士あり。家世農を業とす。詢五に至りて。いとけなきより學をこのみ。寛延三年庚午京にありて。古義堂に寓す。七月大雷あり。四十餘所に落震す。其夜古義堂に寄宿の門人。數輩みな樓より下りて。一室に蜜坐して。大に驚怖す。詢五一人は通宵書を樓上に讀みて。神色閑正なり。伊藤東所つねにこれを以て。美談とせらる。其後江戶にある事數年。病によりて鄉に歸り。いくばくもなくして沒せり。その死日。子弟をよびて永訣し。且詩を賦し。弟成美をして筆受せしむ。其詩に

十年蹤跡偏ニ中州ー。伏枕歸レ家過ニ暮秋ー。他日人如問ニ遺稿ー。絕無ニ一紙ー一風流

書き終るをみて。其まゝ絕え入りしとぞ。誠に惜しむべし

○堀越菜陽二三次は。狂言の作に老いたるものなり。一とせ森田座の顏みせの名題に

柏木ノ衣紋坂　葺替テ月モ吉原
梅津ノ掃部宿

といへるは。柏木梅津の對聯の詩の名對といふべし。此年明和八辛卯吉原に火災ありて。普請も出來し比なれば。葺き替へてといへるなり。且葺き替へといふも。狂言の詞なり。菜陽かつて作れる狂言の名題に。其名月色人といふあり。この狂言よりして。菜陽が作おとろへたりといふ。羽衣の謠の文句によりしなれども。その名も盡ぬるといへる讖語にや。いま月もよし原といふは。祝ひ直せしこゝろなるべし。今狂言の藪疊といふ道具立は。此人の工夫なりといふ

垂加翁(名は嘉。字は敬義。嘉右衛門と稱す)其門人を接し。少しのあやま

ひていはく。彼是ならば。吾非を改めて。かれが是にしたがふべし。もし我是に彼非ならば。我是は即天下の公共なり。固より辨をまたず。久しうしてかれも又みづからその非をしらん。汝只みづからをさめよ。佗をかへりみる事なかれとぞ。先生の度量。大旨此たぐひなりと。ある人かたりき

〇雪中菴蓼太といへる俳諧師は。横山町にすめり。明和九年二月の江戸大火に。藥罐に白湯をいれて。文臺ひとつを持ちて。深川の六間堀要津寺の中の菴へのがれて

緋櫻をわすれて青き柳かな

といふ發句をなし。火事羽織着て。見まひに來し人に句をよびて。百韵をみて、夜をあかし、とぞ。此蓼太かつて。酒一とくりを携へて。わが牛込のやどりをとひし時

高き名の響は四方にわきいで、

赤らく〱と子供までしる

といへる。ざれうたを添へたりき

肥州に水足平之允といへるありき。卽徂來文集に所謂。西肥の水秀才是なり。十六歳にて。徂來先生へ書簡をよせて。經義を問ふ。誠に奇童なり。ある時。肥州に歸る人あり。徂來翁干鱗の華山の記を出たしていはく。汝これを携へ歸りて。秀才に示し。訓點句讀を付けさせよ。もし立どころに事をなさば。其賞として。吾かた耳をそぎて秀才にあたへんとぞ。其人歸りて。秀才にしめし。且傳ふるに。徂來翁の言を以てす。秀才これを見て。卽坐に訓點句讀をくはへたり。翌年その人また江戸にゆきて。先生に謁し。契約のごとく。かた耳を給へといふ。先生掌をうちて。嘆じていはく。眞に神童なり。若これを讀む事を得ずんば。かた耳をもあたふべけれども。これ苦もなくよむほどの神童なれば。わがかた耳をあたふるに及ばずとて。笑ひてやみしとなん

金蘭齋は。羽州秋田の產にして。鴫三竹といひし人の子なり。幼少にして。京師に遊學し。つひに京に敎授す。名は忠祐福菴と號す。金氏は母方の族なりといへり。辭世に

東山の花見しも此春をかぎりか西山の月みるもこのゆふべかぎりかさても死にともない事ぢや

杉本望一は。勢州山田の人にて。俳諧をよくす。望

り。贈道本禪師詩を書きさし給へるなり。林助高野山に隱れんとて。出でし時。予に贈れり

闕取谷風梶之助。小角力を供につれ。日本橋本船町を通りける時。鰹をかはんとしけるに。價いと高かりければ。供のものにいひつけて。まけよといはせて。行き過ぎしを。魚うるをのこよびとゞめて。闕取のまけるといふはいむべき事なりといひければ。谷風立ちかへり。買へ〳〵といひてかはせたるもをかしかりき。これは谷風のまくるにあらず。魚うるをのこの方をまけさする事なれば。さのみ忌むべきことにはあらざるを。かへ〳〵といひしは。ちとせきこみしと見えたり。是は予が若かりし時。まのあたり見たる事なりき

○古今の事を附會して。時代違ひのはなしをなすを。青特（セイトク）といふ。これは龜成といへる徘諧の點者。別號を青特といふ。此もの、工夫なりとぞ。ある諸侯これをめして。此話を一番きこしめされて。これをも藝と覺えて。一生を送るは不便の事なりとの給ひしを。龜成大に悅びて。一生の規模なりといひしとぞ。墓は牛じま弘福寺にあり

京都の人の諺に。宇野三平（名は鼎。字は士新明霞軒と號す）が出で、ありく〳〵と。香川太沖（名は修。德秀庵と號す）が病者を治せると。谷左仲（名は鸞。字は子詳）文章をかける、○此三を見たる人なしといへり。三平は多病と困學とによりて。實に閉戶先生の稱あり。太沖は治療をもよくせり。然れども。多くは痼疾沈痾に治を求むる故。扁鵲倉公が術にても。いかんともしがたき事あり。ゆゑに此名を得たり。左仲は詩集ならびに論語の玉振錄などを著せり。爾雅の癖有りて。字訓に刻意せる人と見ゆ。もと東涯の門人にて。阿波の產なりといへり

○其碩云。（江島氏）酒の醉のおりやよやせぬ（吾不醉）とくりごといふと。藪醫者の手がら咄しと。駕籠かきのきのふの旦那さま噂と。淨瑠璃かたりの一口かたつて白湯のむとは。癖か餘情か。庭鳥の時うたふとき。羽たゝきすると同じ格にや

仁齋先生存在の時。大高淸助といふ人。適從錄を著して。大に先生を誹議す。門人彼書を持ち來て示し。且これが辨駁を作らん事を勸む。先生微笑してことばなし。かの門人怒りつぶやきていふ。もし先生辨ぜずんば。われ其任にあたらんと。先生しづかに言

よるの玉づさ猶てらせとや
竹椠の前に。此うたありしなり

○揚名介は。三ヶ所の大事とやらにて。つれ〴〵草にも。事むつかしくありしが。これは孝經に揚名の章あり。揚名は高名といふ事なるべし。此比の人。孝經に熟せし事は。日蓮御書にも。孝と申すは高行なりとあり。太平記などにも。をり〳〵この經の文をひけるを見るべし

此御國。文雅の盛なりしは。寶永。正德の間なり。享保の中比より。文雅草莽に下だり。有職の士。是を前知せるにや。赤石蛻岩先生の詩に。登レ高作レ賦今誰是。海内文章落ニ布衣一と。俊述先見の明恐るべきにあらずや。民間にばかり文あらば。文衰なり。無位無官の者。詩文作るは。蟲草間に吟ずるなり。それさへ近年傑出の者なし。枯草の虫。霜枯の音といふべしと。ある人申しき

○三宅石菴（萬年と號す。京師の人なり）の學問は。俗間に鵺（ヌエ）學問といへり。其言にいはく。頭は朱子。尾は陽明。其鳴聲仁齋に似たり。象山のあたりをかけまはると。香川太沖の話なり

東涯先生の子夭死の時。門人數輩棺前に侍り。時に天台家の沙門一人來り。吊ひ禮をはりて。門人にむかひて言ひていはく。か丶る哀哭の時は。無常輪廻の道も。諸君もつともと爲ざることを得んや。諸人みなことばなし。木村源之進答へて云。何さまか丶る時は。魔にも引き入れられさうに思はれ侍ると。かの沙門默然として席をたちしとなり。源之進は。江州の人にて。多年東涯に隨侍し。後に儒を以て紀州に官せり

羅山先生（名は信勝。字は道春。夕顔巷と號す）石川丈山翁のもとへとふらひ給ひし時

詔明欲レ見レ月　來登ニ文選樓一

丈山も案じられしかども。對句つひに出でざりしとぞ

○宇津宮由的（三近子と號す。岩國吉川家臣）京師の書生の戲語に。虱先生といひし。多く頭書を著し、故なり

○川名林助（名は孟綽。字は仲裕。南條山人。房州の人）徂來翁の書きしものを金谷にこひしかば。人々の求め多くして。みだりにあたへがたし。虫干の日に。不用なるを出だし置くべき間。來て盗むべしときこえしかば。一紙を得た

南郭は謝安に似たる人なり。喜怒色にあらはさず。人に搆はず。我ものずきを立てられし人なりと。子式の評なり。君脩云。日本近來の學者。皆酒量あり。仁齋は其中下戶なり。東涯も上戶なり。闇齋淺見重次郎も上戶なり。徂來は下戶。南郭。春臺も上戶なり

○村井椿壽 字は大年。琴山と號す。長崎の人 ある人周公旦待レ旦といひしかば。左丘明喪レ明とこたへしと。浪花にありし時。馬田昌調 學醫。詩をよくす。長崎の人なり 物がたれり

○源氏若紫の卷に。しかのたゝずみありくもめづらしくといふに。なやましさもまぎれはてぬと書きしを。諸注に春鹿をいふ事めづらしとのみありて。杜詩の春山無伴獨相求といふ。次の句。遠害朝看麋鹿遊といふ句に。こゝろつかざりしはいかゞならん

子式 本姓高野。名は維馨。字は子式。蘭亭と號す。東都の人 云。君脩十三歲の時。東都に來りて。先子式に謁す。其時十三經など一周覽し。大抵古書はよくよみて。大學致知格物の說なども議論ありて。經義は中々人にゆづらずと。古人を排擊して。甚才にほこれり。誠に神童なれども。あの才氣增長せば。自負に過ぎて。いかなる人になるべきや。大かたはあしき人になるべきと思ひたるに。春臺とは。子允かねて心やすきゆゑ。賴み入り申さんとありしかば。尤然るべしといひて。春臺の門人になられたるが。春臺のきびしき人に逢ひたる故か。今に至りて才氣よき仁になり。見事の人物になり。いかにも人品よき君子になられたりと。子式くりかへし譽められたり。子式又云。春臺の門人は。才も不才も人品おとなしき事なり。是春臺の手柄といへり

○江戶にて初鰹をめづる事。北條五代記にみゆ。天文六年の夏。小田原浦近く。釣舟おほくうかびたるを。此よし氏綱聞し召し。小舟にめされ。海士のしわざを御見物。珍事の御遊。盃酒に興じ給ふ所に。鰹ひとつ御舟へ飛び入りたり。氏綱喜悅に思しめし。勝負にかつをと御祝詞なゝめならず。此時酒肴に用ひらる。然るに同じき七月上旬。上杉五郎朝定武州へ發向のよし。告げ來る。同十五日の夜軍に。氏綱討ち勝ちて。武州を治め給ひぬ。略 諸侍戰場の門出の酒肴には。鰹を專ら用ひ侍りぬとあり

靈山の長嘯子 木下氏。名は勝俊。若狹椽に任して。天哉翁と號す 短檠の歌とて

をしむ日もやゝくれ竹のともし火は

にて。火おこさぬ夏のすびつのと。打ちながめて過くる青物くだ物あきなふ家は。よし簀たてかこひて。たばね薪ばかり。炭それこれと賑はし。鹽魚何やかや。しいら目黒の切賣。ほど鰯のいさゝか皿に盛りたる。又何とかいふ魚のあぶり物。しびの大魚。いまはしげに切りさいなみたるに。にしんのしたゝかげに煮こゞらせし。たうきび餅。あかむしの切目だかなるにも。大路の土風やかづくらん。香の物。くき漬のにほひ。花やかなる中に。芋むす湯烟ぞあたゝげなる。日は西に沈みはて。風いとゞあらく吹きたちあつごえて着たるさへ。夕じめり身にしみておぼゆ。此あたりにやどりとるとて。あさましげなるものら立ちつゞき。歸りくるをみれば。老いさらぼへる目くらの。竹杖の片手は。十一二なるわらべにひかせて。ゆく〳〵うちたふるべくあゆみくるしくす。此あたりにて。米を呼ばねど。聲をしあげば聞きしりたらんものぞ。垢じみたる物に面おしつゝみたる。うばらの手に蕪菜二かぶばかりくゝりさげて。物えたり顔にゆくもあり。ゐざり法師のかしら髮おどろにおひのびて。つゞれの肩のひまより。氷れる肌のあらはれたるが。何事やらん獨ごとしつゝ。ゐざりゆくは。けふの寒さをかこつなるべし。はやく宿とれるは。一錢が鹽。二錢が餅。これかれもとめありく。此あきなふ家も。こゝに年月住みふりたるは。さるものらもいぶせういやしめず。是めすか。それぞよかめるなど。こゝろよげなり。下略 此翁あるやんごとなき御方に。無腸と名つきたる心をよみて奉れるうた

津の國のなにはにつけてにくまるゝ
　芦間の蟹の横はしる身は

〇蘆橘菴いはく。浪花五人男の鴈金屋文七は。阿波座堀太郎助橋の近所なり。こくい專右衞門も同所にて。藪横町といふ所にすめる。極印鍛冶にて。今その跡紺屋となれり。雷庄九郎は正直なるものにて。時として怒りはらたつ事あり。故に喧嘩大將と異名せり。西横堀大佛屋六兵衞といへる。三十石船の問屋の船頭なり。鴈金文七の奉納したる繪馬。天王寺の元三大師堂にありしが。享和の炎上は免かれしを。惜むべしたれ人か取りゆきてみえず。五人男の法號は。立髮五人男といふ書に見えたり

代々鷹が峯を監護せり。能書の譽ありといへども。筆跡は名のみにて志をいはず。後鷹が峯に蟄して。牛に炭薪を負はせ。京の一家中。又は心やすき方へうり。鷹が峯へ蟄居する前に。家財もよき道具は。悉く一門あるひは入魂のかたへ送り。麁物なる器にて。茶をたのしまれぬ。よき道具は。そこなひわるななど氣づかひにして面白からず。とかく損ひ破れても。くるしからぬぞ樂みなりといはれしとなん

○銅脈先生 畠中頼母と稱す。聖護院宮に仕へ奉る 庚申のとし。中風にして危かりしかば。やんごとなき御方。すでに死せしと聞しめして

傳聞先生道脈揚　定是閻魔成敗場
縱衡赤嘘欺青鬼　魂魄猶迷極道傍

和韻　銅脈

墨蹟手麻商賣揚　死生素是任相場
生兮死兮斯面倒　學仙長欲盡阿傍

翌るとし。享和元年辛酉。つひにうせぬ。銅脈の著す所の狂詩は。太平樂。勢多唐巴詩など人口に膾炙せり

君脩 字は君脩。通名才藏。觀海と號す。業を太宰に受く 云。春臺は物をきはむる事すきなり。人の會釋にも。はじめて逢ひし時より。これは此位の會釋にすべき人といふ格を定めおかるゝなり。書を讀むには。朝早く起きて。まづ國字の書などを見。又は人のみせおきたる詩文をよみ。又校正の書をなし。また會業の下見などをし。いろ〳〵せらるゝゆゑ。倦みつかるゝ事なし。夜はかならず四時に寐られたりとなり。其言行きはめてをりつめて。實義なる事。北宋の人物。司馬溫公。范文正公などに似たりとなり。行狀書に及ぶにと。かく小學の嘉言善行に入るべき人のやうに覺ゆるとなり

○無腸翁 上田餘齋。又休西と號す。京都の人 いはく。むかし男。友たちかいつらねて。住吉の郡。すみよしの鄕の住吉の社に詣でけり。霜月のはじめ比にて。夕さり方の空おぼつかなう霜がれて。海吹く風の鹽じみて。いと寒し。いこま山を見れば。西に入る日の影ぞ。所々赤兀てあいなうあらはなり。今宮村を北に横をれ來れば。長町の南がしらなり。むつかしげなる家ども。ひし〳〵と立ちならびたる中に。はたごやぞ所得がほながら。時ならねば。田舍人の宿れるもまれ〳〵

土藏へ入れおかれたる冬の事なるに。軍書少ばかり出だして見られたる時に。出來はじまりしとなり

○水の行方の跋に。南條山人（姓は川名。名は孟綽。林助と稱す）云。身の長九尺三寸。用ひらるゝに足れりと。自誇れど。陸尺にも頭はづれながくて。三千年の月日をむなしく送りたる。平原屋が三尺の喙を鼓しても。賣懸もとれず。横に寐たがる世の中を。帳箱の陰に避けて書きちらしたる反古をみれば。亦問屋仲間の隱居所の腰張にもならんかし

○下谷にある萬年山祝言寺は。徂徠翁の緣ある寺なり。翁の家につかへし老婆ありて。いひけるは。祝言寺の談義は。參詣多し。此方の會讀の日は。來るもの少しといひければ。先生微笑して。おう〳〵臭いものには。蠅がたかる事多しとの給ひしと。堀口幽谷の物語なり

或人の云。今江戸に。元三大師の畫像をおしたるにて。思ひ出だせり。かの芭蕉の句に

角大師井手の蛙のひぼしかな

滑稽の中に。少し雅なる意あり。されども。あまり耳になれざるめづらしき句なり

水谷琢元は。安永。天明の比の人なり。碁を以て鳴る。門人と一日局に對す。其席平らかならず。よりて門人碁石を取りて。盤の足の下に置く。琢元これを見て。忿然としていはく。子碁を以て業とす。しかるになんぞ其器をかろ〴〵しくするやとて。つひに排斥せしとぞ

○熊澤了介（息游子と號し。二郎八と稱す）云。笙は舌にて調子定り。弦も笙を聞きてしらべ。篳篥も笙を聞きて舌をしらぶるなり。笛ばかりしらぶる事はなく。笙。篳篥をきゝて。それに應じて吹くものなり。ことに弦に笛一管は吹きにくし。調子さとからでは。弦にあはずして和せざるものなり。笛よければ。面白きものなり

○又云。ゆは左の手なり。九はとり十はゆる故にとりゆといふ。時は。九十なり。然れども。九もとりてゆり。十はすくひてゆるなり。此曲を後世は。左の手のしなとのみ心得て。古人の心傳をうしなひたりとみえたり

本阿彌光悅は（了寂院と號す）晩年洛北鷹が峯に一寺を建立して。光悅寺と號せり。其子光甫に至りて。

丸く聞ゆるあり。此三つが中に。目出度器量は。息みちたる方なり。しかしながら。此三つをはなれて。ものになりがたし。息おほきに成りぬれば。しみじみと纈(ツキモノ)にあふ事かたし。又細くしみ〳〵ときこゆは。鳴物すくなき時は。よきやうに聞ゆれども。吹くもの多き時は埋れ。笛ありとも聞えず。笛の中に息みちたるは。手もとにては高くも聞えねど。ほどをへだてゝゆる〳〵と洩れ出でゝ聞え。めでたきものなり

並河五一郎(名は永崇。字は永父。五一居士と號す)父を並河彌右衛門といひて。丹波國並河村の人なり。彌右衛門丹波より山城國鳥羽村へ出でゝ。米商ひをなせり。五一郎勘助兄弟いまだ幼き時に。近所の人にたのみて。四書の素讀を學ばせけるに。或時論語の我黨に身を直くするのありといふ章をよむを聞きて。これは怪しき事なり。子として父の惡事をあらはす事。何として直しといふべきやといひけるに。やがて次の孔子の御言葉をきゝて。かく有るべきはづの事なり。孔子は有がたき人なりといはれし。彌右衛門は文盲無學の人にて。四書の素讀をも。はじめて聞くほどの人なりしかど。その見る所かくのごとし。五一郎勘助の父といふべし。此事其子孫並河清助の物語なりとぞ

○中島正佐は(仁齋の門人なり)教授舌耕を業とす。四書を講ずるに。集注を以てす。家の說には。かやう〳〵といへる古義の說なし。中島點の四書とて。今に傳はれり。正佐嘗ていへるは。昔善導大師は。念佛の功德に因りて。口中より阿彌陀を吹き出だされたりといふ。吾は講釋の德によりて。借宅を三軒ふき出だしたりとなん

○小澤蘆庵は。都人にて和歌をよくせり

　言理正しければ。深遠の意もかくれず

山川のふちのさゞれもかぞふべく
　みゆるは水のすめばなりけり

　言理正しからねば。淺進の意もあらはれず

享和元年辛酉七月十二日にうせたりしに。平臥のまゝを。次の間にうつしゝ時のうた

　波の上をゆく心して磯近く
　　なりにけらしな松の音きこゆ

つぎの日になくなりしとぞ

鈴錄は。徂徠先生。一年風たちて。書物ことごとく

所レ有衣服器用玩好瑣褻除二不レ可レ缺外一。不レ遺二一物一。輯以斥賣。所レ不レ足乞二貸諸其所知一。盡獲二其書一矣。この序文は。此書を筆錄する折ふし。友人古文矩を携へ來りしを借り得て。しるしおきぬ

小澤蘆庵。重き病にふして。久しくなやみ居たりしに。ある豪家の一統は。かねて和歌の門人なりしが。病の時みづから一度も尋ねざりしかば。蘆庵病愈えて後。此事を深くうらみ。かれは富家なり。物ならふ師の病重しときかば。とくにも訪ふべきに。長病に一度もたづねざるは。こゝろざしうすきものなりとて。かの方へふみを送りて。其奥に一首の和歌を添へたり

人の世の富は草葉におく露の
風をまつまのひかりなりけり

とまことに。少し心短くはしたなくはきこゆれど。其憤れるいはれなきにあらずと。ある人かたりき

白石先生弱冠の時。家貧しく書に乏し。其比河村何某といふ者書を多く貯へたるゆゑ。日々に其家にゆきて。書籍をよむ。何某も凡庸の人にあらざれば。白石の末たのもしき才智をしり。女を以てめあはさんといふ。白石の云く。吾は只書をよまむがために。こゝに來るのみ。彼等ごとき鄙夫の女をめとるべきにあらずとて。堅く辭せられたりとなり

○元祿寶永の比。相州にかしく坊といひし者あり。常に駿河に行きて富士の風景をのみ樂しむ。臨終に一首の歌あり

ふじの雪とけて硯の墨衣かしくは
筆のをはりなりけり

げにも生涯富士を愛したりとしられぬ

天野丈右衞門孟子を講じ。其上にて門人へ各にも隨分學問精出し。聖人までは成りがたき事なれば。なにとぞ賢人になられよ。予なども。此年までいまだ君子にもいたらず。しかしながら。一生には君子までには至るべし。各は弱年の人々なれば。かならず精次第にて。賢人にならるべしといはれければ。おの〱拜謝して歸りしとなり

○青木鷺水いはく（白梅園と號し。又三省軒といふ。家書徘徊新式あり。享保十八年癸丑三月廿六日歿す。行年七十六）笛の息に三つの品あり。一には高くはしたなくいかめしきものあり。二にはかすみたるやうにて。うつくしきあり。三には笛の中にいきのみち〱て。

足なくてのぼりかねぬるつくば山
　和歌の道には達者なれども
山鹿甚五右衛門といへるは軍法者。海なき國を歌にて覺らすとて
海なきは大和山城伊賀河内
　つくしに筑後たんばみまさか
あふみぢや美濃ひだの國
　甲斐信濃上野下野これぞ海なし
今日本の繪圖にかける歌これなり
貞享二年神無月のはじめ。播州湊川楠正成が墳墓に來て自害したる者あり。其辭世に
重義名將戰死阡　至レ今一塚堆ニ湊川一
誰知霜刃默然意　梅霜垂レ涕松促レ煙
露霜のしろきをおのがこゝろにて。
　けさくれなゐにそむるもみぢ葉
拙者義遠國の者にて御座候。先年故郷を罷出久しく他國へ住居仕候。兼て御當地之御事傳承候間。御寺へ推參仕候。何之障も無之。何之所緣も無之者にて候。依て只今如此候條。千萬乍慮外。跡之儀奉願候。可然樣に仰付被下候はゝ。可為御厚恩候。折節懐中有合候間。金千疋供佛前申候以上
　貞享二乙丑年十月二日　　橘成信
　　廣嚴寺和尚

○耆山和尚の物語に。赤羽先生門下の諸生のあつまりて。かたるをきけば。狂詩をつくるといふ。何の題ぞと問へば。夜發を詠ずといふ。先生微笑して。二十四文明月夜と。朗吟して過ぎられしとぞ

○東作云。二本さしたる人と見ば。隨分いんぎんに敬ひて。假にも無禮なすべからず。町人の無禮。德のゆく事ひとつもなし。にくいやつとて切り倒されずは。あまいやつとて借りたふさるゝなるべし。いづれにも怪我のもとなり

○徂來翁は。庫ひとつに書物の拂ありたるを。金六十兩にて求められたり。其中に種々の書物ありて。四部稿。于鱗集。名山藏。甑甗洞稿。天目集。李本寧集など。明の書夥くありしとなり。家財を賣り拂ひて求められしとなり。誠に豪傑のしわざなり
宇佐美灊水の古文矩の序に云。余遊ニ於蘐園一。見ニ其多レ書焉。先輩謂レ余曰。曩者。藏書家有ニ破レ産者一。欲ニ盡賣ニ其書一。有レ人來告ニ徂徠先生一。先生聞レ之大喜。

事を禪師に訴ふ。禪師猶その儘にさしおかれし。かくのごときの事。三四度に及びて。猶そのまゝに成りければ。衆僧大に腹を立て。もし賊僧を追ひ拂ふ事ならずんば。衆僧一人も殘らず。退散すべしといひしに。禪師笑ひて。退散したくは。勝手たるべし。悟道善行の僧は敎ふるに及ばず。此結制も左やうなる惡心の者を敎へさとさんためなれば。惡僧なればとて。みだりに追放すべからずといはれしにぞ。衆僧大きに感服しぬ。かの賊僧もこれを傳へ聞きて。深く感悟し。座中に出てゝ賊をせし事どもをみづからざんげして。前非をあらため。德行堅固の僧となりきとぞ

豐後ぶしの文句に。ふたつならべし枕橋とは。たんぼの方より吉原土手へあがる所に。ひとつの橋の中に欄干ありて。二道にしたるありしが。近頃はなみ〳〵の橋となせりをしむべき事なり

○著山和尚十二にして緣山に入り。二十八にて竪義部頭をつとめ。三十二にして母を携へて。青山百人町にかくる。其時の歌とて

百が味噌二百が薪二朱が米

一步自慢の年のくれ哉

くはしくは小机泉谷寺惠頓和尚の衣鉢塔の文にみえたり。塔は目黒祐天寺にあり。文は泉谷瓦礫集に載せたり

箏の名匠に。近江春定といひし者あり。近古の名作なり。京にも。近江の作の箏を持ちたる人は甚稀なり。其近江も數代ある中に。かの春定最上なりとぞ。近江につぎて長門名作なり。長門は近江より多しといふ。後に又人のいひしは。長門はよく鳴りて。近江春定よりも大に勝れりといへり

玉桂氏柳澤云。むかし〳〵吉野といへる大夫にほれし男。よし野ねびきにあひしときゝて。一日のうちに三人まで亂心になりしといふ事。戀路には誠にさも有りたき事なりといへり

南化和尚の狂詩

莫レ怪年頭遲扣レ門　老來膝弱待二天溫一

起居振舞無調法　御祝坐敷斟酌存

○宗祇新津久波を撰みしに。櫻井永仙が連歌不入。是によりて落書を立てしと云ふ

遙見二筑波一錢便入　不レ論三上手與二下手一

天寛。茶水清充レ飲。菊英芳可レ餐。陶家秋色少。

此就二遠公一看の作あり

支唐禪師は。源子和が父の方外の友なり。諸國行脚の時。出羽國より同宗の寺あるかたへゆきて。其寺にしばし滯留ありしに。庭前に椎の木の大なるが朽ちて。半よりをれ殘りたり。一日住持此木を人して掘りとらせけるに。朽ちたるうつろの中より。雌雄の梟二羽出で、飛びさりぬ。其跡をひらきみるに。ふくろふの形を土をもて作りたるが。三つ有り。其中にひとつははやくも毛少し生ひて。啄足ともにそなはり。すこし生氣もあるやうなり。三つともに大さは親鳥程なり。住持ことに怪しみけるに。禪師の云く。これは聞き及びたる事なりしが。まのあたり見るはいとめづらし。古歌に「ふくろふのあた、めつちに毛がはへて。昔のなさけいまのあたなり」と。此事をいひけるものなるべし。梟はみな土をつくねて。子とするものなりと。住持も禪師の博物を感せり

諸江仁右衛門（字號いまだ詳ならず）性理家の儒生なり。本間何がしの御かたへ講釋にゆきしが。冬の事なれば。若き侍。唐銅の火鉢を持ち出で。仁右衛門が前に置き。少しゑざりて手をつき。此火鉢を世上にしかみ火鉢と申し候。しかみとはいかゞ認め候やと問ひければ。答ふべき詞なくや。いまだ考へ申さず。追て御意得べしといはれきとぞ

稻荷山祭主羽倉齋宮東滿は。其職といひ。和歌の道にも深く。その集中に神道といふ事を題にしてよめるうたに

　世の中に神の道とて道あらば
　　人の外なる人やまなばん

君臣。父子。夫婦。兄弟。朋友五常の外に道あらんや。もしあらば。神達ばかり學び給ふべし。人民まなぶに及ばずとなり。有りがたき歌なるべし

盤溪禪師。播磨にて結制の時。僧徒數百人來り集り居たりしに。其中に賊僧ありて。誰も銀子を失ひし。何がしも衣服を盗まれしなど。毎日紛失ものありて。人々疑ひあひて難義に及びしが。後には賊をなせる僧。大抵にしれければ。衆僧一統に禪師に申して。賊僧を追放せんとねがひけるに。禪師聞き届けて。其まゝに捨て置れしかば。數日の後。衆僧又此

採ニ菊(アキシベノハナヲ)東籬下一　悠然見ニ南山一

と訓ぜられしと。禪林の詩僧はほめらるれども。菊の一字をあきしべばなと和訓つけしは。もつてまはりたるこむづかしき訓ならずや。梅をむめと訓じ。櫻をさくらと譯せしには。はるかにおとりたる事ならずや

筑波（本姓石島。初名正猗。字中綠。後名藝。字は子游と更め。筑波山人と號し。與右衛門と稱す）といふ儒者。道灌の碑を書きしに。官は左衛門大夫と書きしを。瓶山といふ者難じて云。左衛門大夫といふ官は。令式職原にもなし。筑波和書を見ざる故なりと。われ年少時。筑波にも度々出會せり。なるほど名ほどのしろものにはあらず。清少納言が書にも多く出でたり。季吟の春曙抄を按ずるに。中務丞。近衛左右の將監。左右衛門兵衛尉など宮中宿衛の官とて。賤しけれども。親密の臣なり。相當六位なり。年臈を移し。五位にのぼるべき。久しく宮內に馴れ上の御用も能く辨ずれば。表の官に出だされては。其あと上の御事かけるほどの人なれば。官は故のごとく。丞尉にて位ばかり五位にのぼらざる。これを外より貴しと呼びて。某の大夫といふ。右近大夫。左衛門大夫。中務大夫（大輔とは別なり）などいへり。大夫とは五位以上をいふ事。唐階に因り。官の正名にあらざれば。みづから大夫とは名のらぬなり。外より稱し。又後代より稱す。今三百年の後より稱する事。何の難か有るべきと。ある書にみえたり

白石先生（名は璵。字は君美。又在中白石と號し。勘解由と稱す）七歳の時。芝居見にゆきて。はじめより終まで一々に記憶して歸られたりとなり。此兒あしくなる歟。よくなる歟。なみなみならずと。父のいはれたりとぞ

○國倫云。鳳凰。孔雀。雉。鷄。雌は雄の見事なるにしかず。遊女。女妓。町屋形女は男倡(ワカシユ)の美なるに及ばず

○靑山にいまし、耆山和尙は。南郭先生の門人なり。靑山百人町の吏。同地をかりてすむ事。三十年。妙有菴といふ。萬翠一窩といへる扁額をかゝぐ。屛風に張り置きたる先生の書翰あり

今日妻子ども召連。開張案内に罷出候處御留守を不顧。大勢押込。どろ坊同前の仕合御免可被下候とあり。本集四編に

古道靑山靜。空居白日寒。柴門信ニ客啓一。筍室容

り。祥瑞は日本勢州松坂の陶工なり。入唐の間。彼邦にて製したる物なりといふ。明の正德八年歸國の時。季春亭なるもの送別の詩あり。送居士五郎太夫歸日本

敬將二玉帛一觀二天顏一。囘レ首扶桑杳渺間。舡泊古鄞三佛地。杯傳新酒四明山。梅黃細雨江頭別。帆引清風海上還。明主貴王應レ有レ問。八方財貢溢二朝班一

と聞けり。實に名譽の陶工といふべし

石田梅巖（勘平と稱す。心法の學をもて人を導く）四十二三歲の時。奉公を引き退き。夫より諸家の講釋を聞き。四十五歲の時。京都車屋町通り御池上る所。東側に住居し。はじめて講席をひらき。表の柱に書付を出だしおけり。其文に

何月何日開講。席錢入不申候。無緣にても御望の方々は。無御遠慮御通り御聞可被成候

いづかたにても講釋の席は。此書付を出だし置き聽衆の席は。男女間をへだて。女の居る所には。すだれをかけおけり

○平秩東作云。自慢も味噌といひ。りん氣も燒餅と下卑て。いさよひはけんどんの銘になれば。戀も煮こゞりの事に聞きなしぬ。おしつけ×××の前栽にさつま芋作らる丶なるべし

○わが家に古寫本の論語あり。その書の末に

于時天正卯五月廿日成就。主筆成田內膳正後見之方念佛御廻向憑入とあり

○風來山人芝居の事をかける文の中に。茶屋の混雜。勝手の騷ぎ。下女飛んで八百屋にいたり。魚ながしに躍る。かまどに陽炎（カゲロフ）もえ出づれば。播盆地下に雷を發し。庖丁に雷光（イナヅマ）あれば。いり鳥鍋に時雨の聲あり。四季のけしき目前にあらはれ。はからずして仙境に入るかと疑ふ

平維章（姓は平。名は維章。字は子文。金吾と稱す）云。菊に和訓なきは遲く此國へ渡りし故。和訓の詮議もなき事。實にさも有るべし。菊の花を歌に賦し給ひしは。桓武帝をはじめとす。其御製は類聚國史にみえたり。國史は六國史部類したる書なれば。續日本紀の桓武紀に在るべし。未だ參考せざれば其事とくとおぼえず。足利將軍開國の頃。東福寺の聖一國師。陶元亮が詩をよまれしに

て。しばし借りたきよしを仰せられしかど。三條殿惜しみ給ひて。拜領の品家久しく持ち傳へ侍る重寶。門外へは出だしがたきよしを斷り給ひければ。晴季卿ちからなく歸り給ひぬれど。猶その琵琶の床しくわすれがたくて。北野の社に日々すあしにて參詣して。かのびはしばらくの間。借り得ん事を祈り申されける。風ふく日も。雨降る日も。怠る事なく。位高き人の供人をも召し連れながら。白晝に徒跣にて數月まゐり給へば。其比町家にても。いと物狂はしき人なりと。沙汰にもなり給ひぬ。三條殿此事を聞き給ひ。深く感心し給ひ。さるにても執心の事なり。いかで借さで有るべきとて。晴季卿を招き給ひ。御心ざしの有りがたさに。かの琵琶かしまゐらすべし。明日にても人して取りにこし給へと宣ひければ。いと嬉しく。明日とは申しがたしと乞び出だして。みづから狩衣の袖の上に抱きてかへらせ給ひしとなん

○四谷新宿に。飯賣女の出來し時。風來一夜遊びにきしときゝて。平秩東作（姓は立松。名は懐之。稻毛屋と稱す。新宿住）が發句を書きて贈れり

ないたかの一夜あかしの浦千鳥

あかしといへる妓なりけり

○凌雲集に。嵯峨天皇贈海上人御製の詩あり

字母弘二三乘一。眞言演二四句一といふは。僧空海の以呂波を作りし事なり。和名抄に母をイロハと訓せり。又今大工の柱だてに。いろはの文字を書く事。頓阿の高野山日記に見えたり

此いろは等の字體は。弘法大師の作といへり。慥なる證ありや。答。いかにも的證あるなり。雲州神門郡神門寺に。大師眞跡の以呂波あり。最初。以呂波製作の時の筆にして。此寺の重寶なり。時の住持も一代に一度ならでは。封を發きて拜見せぬ作法なり。別に尊圓親王の寫も一通添へて在るなり。至極慥なる事なり。庭前に以呂波石と名づけし石もあり。今其眞跡をみるに。終りの京の字なく。十の字の次に。百千萬億の四字あり。尊圓の寫も又同然なり。此眞跡の事。和語連珠集及び本朝學原浪花抄等にも見えたりと。以呂波問辨の意をとりて。こゝにしるしおきぬ

南京陶工に。五郎太夫吳祥瑞造と銘を書きたるあ

不通なりしが。箸紙客の替名をしるせば。文にはおのが本名をあらはしといへる語山人の自讃なりき

◎

田阿子牛込二十騎町に住めりは。土佐の畫風を好みてしかもよくせり。畫のおもふき甚古雅にして。尤風韻あり。性寛悠にして。人と爭ふ事なし。比は寛政乙卯の春正月十日。牛込柳町より火出で、西北風烈しく。飯田町邊も風筋あし、とて。諸道具もみな土藏にはこび入れて。やすき心もなきに。表の門口へ六尺ばかりなる大横物の掛幅を。背負ひ來れる者をみれば。田阿子なり。こはいかにいづこへ行き給ふぞと問ひければ。我家の近きわたりより。火出でたれば。取るものも取りあへず。やう／＼此一軸のみ持ち出でしが。今人々にとへば。はや我家もやけたらんとおぼゆ。さきの程より走りありきたれば。空腹になりたり。何にても少し給はらんと申されしゆゑ。疊もなき所にわづかに敷くものまうけて。有合の調度をしきやうの物取り集め。飯を出だしたれば。心よく食されて。扨此一軸は探幽が畫きたる鷹なり。いかにも世に有りがたきものにて。其筆意ことにすぐれたれば。火にやかん事のをしくて。是ばかりは持ち出でたり。これ見よとてひらきて見せられたり。われもとより畫は好めども。か、る騷しき折なれば。目もとゞまらず。折りしも又火も廣くなりたり。風もつのりたりなど。人々の立ちさわぐに。猶もこ、ろはおちつかざれど。こ、を見よ。鷹の眼中よくかきたり。かしこの羽の毛がき見事なりなど。いはれつれど。耳にはよくも入らず。とかくするほどに。や、火もすこしゑづまりぬと聞えたれば。田阿子は禮をのべて歸られぬ。かくさわがしき中といひ。家もやけたらんと思ひつ、。驚きたる體もなく。畫を賞されしは。かの佛畫師良秀がたぐひなるべし

惺窩先生名は肅。字は斂夫。惺窩と號す。播州人幽棲の地は。鞍馬のほとり市原野といふ所なり。北肉はその近きわたりの山の名なるよし。よりて北肉山人と稱すとぞ

寶永年間菊亭大納言晴季卿は。管弦の達人なりしが。こと更琵琶の堪能にておはしけり。轉法輪三條家に。延喜御物のいはほといへる琵琶を。むかしより持ち傳へ給へるを。晴季卿羨み思し召し。毎度彼亭に至り。乞ひて彈じ給ひしに。一しほのぞましくなり給ひ

に存ずる。足下ならではと存候と答へられたる書を。
春臺大切にせられたりとなり

〇天明の比。地口變じて語路（ゴロ）といふものとなれり。
語路とはことばつゞきによりて。さもなき言のそれ
ときこゆるなり。たとへば

九月朔日命はをし、　ふぐはくひたしいのちはを しいと響のきこゆるなり

市川團藏よびにはこねへか　内からだれぞよびには來ぬかときこゆるなり

一とせ淺草正直蕎麥の亭にて。語路の萬句あり。そ
の時宗近の句。語路萬（ゴロマン）たま子なり。のろまの玉子と
いふ事なるべし。此比の佳句とて。人のもてはやし
ゝは

いなかざふらひ茶みせにあぐら　しなざやむまい三みせんまくらなり

ふざな客には藝者がこまる　芝の浦には名所がござるなり

書畫を展翫する事。用意すべき事なり。東涯先生は名長胤。字は原藏。慥々齋と號すの詩あり

童幼奴僕蟲鼠邊　燈下煙中梅雨天
醉後睡前並忙裏　切戒書生謹繙編

心越禪師律呂の學にくはしく。徂來翁の家に舶來の
琴あるよしを聞き。たよりもとめて。來翁に對面し
ぬ。翁豪邁の人にて。兒輩のごとくあひしらふ。心
越これを心にかけず。終に琴をかり得て。門を出で
ぬ。翁あとより人をはしらせていはく。禪師もと舶來
の琴をわれにもとむるは。製せんがためなり。たと
ひ巧手ありといふとも。外よりうかゞふては。製す
る事をせん。碎きてよく其斧痕を見られよといひつ
かはしければ。心越こたへらく。すでにかりぬるう
へは。もとより主のゆるしをまたずしてかくはから
はんと思ふなりといひき。來翁はじめて。其凡なら
ぬを感じられしとぞ

烏丸光廣卿。春日祭の上卿にてくだり給ふ時。雨ふ
りければ

ふらばふれ三笠の山の雨なれば
さしては何のくるしかるべき

とよませ給ひしかば。雨やみて晴れたり。又その冬
も上卿にて。下りたまふとき

としの内にふたゝびたつる使こそ
みやこの南北の藤なみ

此卿の硯箱は。五本入の扇箱を生涯用ひ給ひしとい
へり

〇風來山人茅町及び南方にのみ遊びて。北里の事は

にもせよ。ことの外あたらしく見ゆるうへ。中に折目のみえぬは不審と念を入れ。穿鑿してみれば。松風はまつ風なれども。江戸の關相撲松風瀬平がふんどしなるよし。此人の覺そこなひは是非なし。さる茶湯者のむら雨といへる。かた付の茶入の袋に所望せられて。夏中の一會有りしとなりきたなや／＼

○増穗殘口（大和と稱す）云。近比菊合ありて。一りんづゝ切りいけにしたるは。美女の獄門みる心地し侍り。おしつけ名所の月も枴(オウコ)にかけて。ふりうりにやならん。風雅の情に本づきて。古賢の樂をしり給へかし

萩生惣右衞門が。和語の中には通じにくきほどかはりしことばつかひあり。これは田舎にてそだちたるものゆゑに。かやうにあるなりとある人申されき

本阿彌光悅が行狀記といへる書を。人にかりてよみしが。光悅の藝。一として其妙手にいたらざるはなし。その手習ふ反古をみしが。一字を數かぎりもなくうつし置きたり。かやうに小致といへども。意を深く用ひしゆゑ。筆道も高く。凡境をもぬけ。其外刀劍の鑒定、茶事は遠州をまなび。文あり。武あり。人となり一時の傑といふべし。其むかし京城の北鷹が峯は。丹波につゞく山めぐり。人家稀にして樹木ふかく生ひしげりければ。盜賊つねに此邊にかくれて。旅人をなやまし。京城などへも入りしかば。關東より嚴命ありて。光悅にかの地をたまはり。此所に光悅家居しければ。夫より。盜賊みな／＼のがれざりし事なり。その武勇はかりしるべし。光悅がかゝる人となりしは。其母妙秀といへる尼の教育によれりとぞ

京都千本通下立賣に燧を賣る老翁あり。吉久と云ふ。寛政八年丙辰百十歲にて壯健なり。鍛冶の職をもよくつとめ。毎日自身に燧を持ち出でゝ。諸方へ商ふ。步行も又甚すこやかなり。故一條關白公より。鐵石軒といふ號を給ふ。その外。王侯貴人あらそひ召して。壽の字などを書かしめ給ふ。ひうちをも老翁みづからきたひて。鐵石軒吉久と銘して賣る。その妻も九十七歲。是またともにすこやかなり。兩人とも猶此上十年の壽をたもつべくみゆ。いと珍らしく目出たき生れなり

徂來先生の刑律を吟味せらるゝ事を不尤なりとて。春臺先生より書をやられたるよし。來翁返書には尤

ち俗年號にはあらざるべし

永正中に。彌勒の號あり。凡て二年を經たり。常陸國六段田村六地藏寺惠範が。諸草心車抄巻二の篇首に。於二田野不動院一。玉幡之供養と題せる願文の末に。彌勒二年三月六日とあり。其次に永正三年十一月の願文。同五年三月の願文の諷誦文。同四年八月の願文等を載せたり。よりて永正中に此號有りしを忘れり。さて永正の何年にて。號ありしと考ふるに。本土寺過去帳に。日富彌勒元丙寅十一月十一日とあり。丙寅は永正三年なり。さらばこのとし始めて此號ありて。四年丁卯まで。彌勒の號ありしと見えたり。自在齟齬せり。恐らくは是にあらず。こゝの丁卯は二丁卯の誤とみえたり。鹿島の社家枝家禰宜が家にも。彌勒の號を用ひたる神符ありし由なれど。近年燒失せしといへり。又今の世に。萬歲が美祿十年辰の年といへることをうたへるも。これらの事を考ふれば。其出所なきにしもあらず。されども。萬歲のうたへるは陰陽家の說より出でたるものなるべし

いにしへは吉原大門口に編笠茶屋あり。遊客編笠をかりて大門に入る事なり。あみ笠をかるに。錢百文を出だしてかり。歸路にこれをかへせば。六十四文さきより返すよし。今酒やにて樽をかりて。樽代を出だすがごとくなるべし

徂來先生（本姓は物部。氏は荻生。名は雙松。字は茂卿。惣右衞門と稱す）の正五九月。寺より祈禱の札とて持ち來れば。其まゝいたゞきて居間にはられしかば。門人何とて札を張り給ふと問へば。これも寺の役にて精に入れしものなり。なんぞ粗略にせんやといはれしとなり

柳里恭（柳澤氏。名は淇園。字は公美。玉桂と號す。權大夫と稱す）云。此頃江口の君の所持のたばこ入といひて。殊の外秘藏して置く人あり。それは合點のいかぬ事なり。たばこといふもの。慶長年中にはじめて日本に傳へしもの、。どうして西行さへかりのやどりを迷惑せられし。江口の大夫がたばこのむぞといふに。さればこそ世に珍敷物なりといよ〳〵秘藏しておきけり。總じて世にはとり違ひ多し。行平中納言須磨の浦より。御所持なされて御覽なされし物とて。秘藏するは何ぞといふに。松風のつねにむすびし帶なりと。さも大幅なる黑繻子。長さ九尺ばかりも有るべし。いかにして松風村雨の結びしむなだか帶。心もとなし。ことにむすばれし

て。江地の下俗賞翫その色黄にして丸し。おしゆん殊の外好物なり武藏の名物とりと、のへ。さん敷に忍び入り。終日あく氣色も色もなきは。櫻姫となりし類之助を露のゆかりの玉かつら。心にかけて思ひ染めつなるべし

按。延寶の比の江戸の名物こゝに盡くせり。此頃いまだ兩國橋の幾代もち。金龍山の淺草餅。本郷笹屋のごまどうらん。鎌倉がし豐島屋の大田樂。市谷左内坂の粟燒などはなしと見えたり。今にのこれるは麹町の助惣ふのやきばかりなり。洞房語園にふのやきの事みえしは。ふるき事なり

九條現山公。東福寺の門前乾高院といふ藪の中の朽坊におはし、頃。供御の後には。御机にか、らせ給ひ。明暮源氏を御覽じけり。此物語ほどおもしろき事はなし。六十餘年みれどもあかず。是をみれば。延喜の御代にすむこゝちすると。不斷仰せられし。ある時。紹巴法橋まゐりて。何を御らんぜらると申されければ源語。まためづらしき歌書は何か侍ると問ひしかば源語。又誰か參りて御閑居をなぐさめ申すと申されければ源語と。三度までおなじ御返答なりきとぞ

廣澤先生姓は細井。名は知愼。字は公謹。次郎大夫と稱すのはなしに。脇差の小刀は七月の末。八月の初によく研ぐがよしといはれければ。其座の人。何故にさいはれしやと問ひければ。栗柹の澤山ある時分なればといはれし

南郭先生姓は服部。名は元喬。字は子遷。小左衛門と稱す。平安人小豆飯好物にて。膳にむかはれし所へ。金華姓は平野。名は玄仲。字は子和。東奥の人よりて金華と號す來りて何をか食し給ふ。あづきめしなり。足下が食の俗なる事とわらはれし。予思ふに。金華先生鬼の首を挑灯の紋に付けられしを。徂來先生見給ひて。金華が物ずきの俗なると笑らはれしとなり。尋常の人。小豆飯を食し。鬼の首を畫きし挑灯とぼしたればとて。俗中には目にも立つまじきなれど。雅人の俗を弄ぶばかりは。かへりて雅のさたになるもあぢなものなり

○三河萬歲の唱歌に。彌勒十年辰のとし。諸神のたてたる御やかたといへり。按。會津舊事雜記に。耶麻郡新宮神器銘。彌勒元年辛卯二月二十二日とあり。元年卯なれば。十年は亥のとしなり。又武州山崎實藏院といへる庵室の板佛に。彌勒二年逆修秀永阿闍梨とあり。海東諸國記などに見えし年號も。あなが

ながる、物ぞ。汝等必小恥を知りて。大恥をまねく事なかれといひし。これは播磨清絢が筆記に見えたり

おのれがゑたしき者の家に。佛事の有りける時。さる方より牌前へ備へくれよとて。贈りこしたる品の上づゝみをみれば。干狐としるしたり。こはいかなるものぞとひらき見れば。干瓢にてぞありける。瓢の字を狐に書きたがへたるなり。かの川柳點の前句に

手紙には狸臺には鯉をのせといふ句もみえたり。是は鯉の字を狸に書きたがへたるなり。よく此句に似かよひたる事なり

出羽の國鶴岡に。鈴木某の妻は天明卯年の凶作に。日比たしなみおきたる衣類櫛笄を取り出だし。これを賣り拂ひて。饑人を救はんとしける時。其夫是をとゞめしかども。人命は衣服髮のかざりにかへがたしとて。つひにこれを賣りて多くの饑人を救ひしとぞ

一日飼ひおく所の鷄の雛。その母鷄に戯る、を。婢女ふかくにくみければ。かたへに有りし奴の云。鷄は聲よく。時つくるこそ其能なれ。母鷄にたはむるゝをふかくとがむべき事にあらずと。いやしき者のかゝる事をいへるは。物まなびたるに似たり

○延寶二年。道久下人彥作が書ける國町の沙汰に云。木挽町山村が芝居にて。一心二河白道（一心二河白道は。丹波國子安の地藏の緣起なるよし。京都にても此佛をくわんじやうし。其名を同號す。土佐少掾上るりを根本ほしかとも是をまなぶ。堺町にて櫻姬に掃部を出たし。木挽町にては類之介を出たす。昔の櫻姬いかで及ばんや）二代目とやらん面白きよし。江地の尊卑。足をそらざるになし。あゆみをはこぶ。見ずなりなんも口をしく。誰かれぐして行くべしなど、て遣し。本より望心は深き最上川。のぼればくだるいな舟のいなにはありずとてよろこぶけしきになん見えたり。棧敷もそこ／＼終日の慰にとてさげ重。せいろうの。色ことに艶なるに鹽瀬まんぢうさ粽、。金龍山の千代がせしよね饅頭。淺草木の下おこし米は（木の下おこし米は。勢州山田の者。來りてこしらへるなり。則。木の下のものなる故名付く）白山の彥左衞門がべらばう焼（べらばう焼は。ふのやきにして。ごまをかけ其色くろし）八町堀の松屋せんべい。日本橋第一番高砂屋がちりめんまんぢう。麴町の助三ふのやき。兩國橋のちゞらたう（ちゞらたうは。風味甚甘美なり。風邪をさり氣を散じ。諸病に宜しとて。今專ら賞翫す）芝のさんぐわんあめ。大佛大師堂の源五兵衞餅（源五兵衞餅。おまんかたみにせしと

行水に流もやらぬ紅葉々や

ちらぬ梢をうつす山川　義延

東武江北染井伊兵衞。政武 地錦抄附錄卷三

享保十八年巳仲春板

誹諧師超波は堺町に住して。存義買明などの師なり。もとより家まづしけれど。さらにうれへとせず。男色を好みて。貯へある時は。色子をよびて。よし町にのみ夜をあかしぬ。ある冬大雪のふりたる日。玄たしき友訪ひ來りしに。家の內火の氣もなく。たゞ二階にて物の音しける故。はしごをあがり見れば。超波はふるびたる袷ひとつ着して。船を漕ぐまねをしてゐたり。その友驚き。こは何事をするぞと問ひければ。けふはわけてさむけれど。着類みな質に入れたれば。金もなし。炭をかふべき錢もなければ。さむさ堪へがたく。ちと汗をかく程あたゝまらんとて。今船をこぎ。骨を折る最中なりといひて。すこしも恥づる氣色なく答へしとなり。日比の行ひこれらにてしるへし。又ある人。鮑の貝の盃を持ち來りて。これに發句を望みければ

うかむ瀨や一ひきひけば三日の月

日暮里に。弟子の建てたる石碑あり。それに四季の辭世四句あり。誹諧はもとより上手なりしが。世をはやうせし事をしむべし

○西鶴云。傾城ぐるいのしまつと。下手に月代をそらすほど。世にいやなるものはなし

明石の里脊鳥羽の三右衞門老年に及び。誕生日に諸子弟一族を會集し。席上にて謂ひていはく。予家幸に貧しからずといへども。水旱の時ならざるあり。其上人に不時の災厄もあるなれば。予が死して後。窮乏になる事も有るべし。さもあらば。先一番に居宅を賣るべし。それにてもふせがれずは。重寶をうるべし。次に諸器物衣服をうり。赤裸にて田地を作ると心得べし。大百姓といはるゝ者。窮乏のはじめにひそかに重寶を質物とし。次に諸器物衣類を質物とす。つぎに田地をたんぐに賣る。つぎに居宅をうる。居宅をうれば。手と身とに成りて。立ちよる方なきにいたる。小恥を知りて大恥をしらず。愚といふべし。一番にゐたくを賣るは。當時は恥なれども。それに準じて。萬事を省略すれば。引きかへす理。既にこゝにあり。其上田地さへあれば。取りつ

ものなればとて。出る儘のいひたい事。つまる所は能も惡もいひなし次第のうき世にて。浮世の定なこは人のこゝろの定なきなり

○ねなし草に云。門松は冥途の旅の一里塚とも氣はつかで。無上に新春の御慶と壽き。懸棘鬣魚（カケダイ）も魚の死骸と悟らねば。めつたに目出度ものと覺え。熨斗鮑をかへせば。しのとよまれ。四の字を嫌へば。五の字もごねるといへば。油斷ならず。戀春川町がうたに

龍宮でいむべき魚のなきがらを
　取りかはす世ぞめでたかりける

松花堂の繪の墨は。牧溪の墨をつたへてかく。牧溪の墨は。色合かはりし所ありと。玉桂申されき

十寸見蘭州が家に。久しくつかへて心すくやかなる男あり。ある冬の事なりしが。寒はけふ何時にいるぞと老母の問ひけるに。五つ時とは申せども。かれこれいたしなば四つ時にもなり申さんといひけるよし。蘭州人々にかたりて興じき

小松百龜（三右衞門と稱す。元飯田町の藥店なり）若き時。同町內中に小紋の絹羽織を持ちし者一人もなし。百龜など外へ出づるときは。小紋のはおりを懷中して。途中にて着たりといふ。町內をば遠慮せしなり。今はいかなる裏店にても。羽織もたぬ者あるべきや。百龜は八十餘歲にて。寛政の頃終れり。此人落し咄の上手にて。聞き上手といひしはなしの小冊。大きに行れたり。これ落し咄。小本のはじめなるべし

○染井伊兵衞（巢鴨染井に住す。植木やなり）云。秋の比。武州秩父の山路を過ぐるに。紅葉最中にて。山谷錦をさらす。山川の岸に紅葉おほく流にうつり波を染め。梢の影沈みて緋金魚のごとく。鮴唐がらしに似たり。農夫に近付き。川の名を尋ね侍れば。四十八瀨の內。こゝを水潜と答ふ。我もみぢの水にくゞるを褒美せしゆゑ。いふやといへば。田夫いきまきあにうそをいふべい。あれなる御堂を順禮札所三十四番水潜と申し奉る。此村の名なるべいと高らかにいふてさりぬ。楓を詠めて村里の古事ををかしくも聞きしよと。楓の種を持ち來りて植うる。實生葉形もかはり。秋の色隨分見事なり。水潜と名づく其葉の形

力を合せて掛くることとなるを。己が力ひとつにて石橋にかけ直し。長く町の費をはぶく。かゝるたぐひのよき行ひ書きつくすべからず。學問など好む事も。深く人に隱したりしが。のち〳〵には文章をもよく作りて。みづから宛丘と號せしなり。安永年中に死去せりとぞ

三味線の作に。古近江と稱するは二代目善兵衞事なり

近江系　初代　源左衞門　二代目

善兵衞 隱居して。總髮となり。貞心と號す。世俗ガツソウ近江。ガツソウ善兵衞とも云ふ。三弦に自銘を付くる

三代目　源左衞門　四代目　源左衞門

五代目　源左衞門

がつそう古近江善兵衞 貞心作 三弦銘

出　雲　八重垣　妻　籠　以上三挺三弦

ひゞき　山　彥　これを二挺三弦といふ

大　瀧　鳴　戸　鏡　山　松むし

常　磐　雲　井　はるか　雛

にしき　百とせ　十二段　いかづち

以上十二挺三弦といふ

近江は名を得し三弦師。他の細工人の及ぶ所にあらず。元は柏屋近江といひて。皷の胴打なり。夫より段々工夫して。三弦の胴の內へ一鉋の削りかたを工夫して。是秘する所なり。この鉋目の妙はいづれの音をも調ぶるなり。凡さみせんは。此三筋の糸を以ていづれの調子へもかなふは妙なり。他の三弦打のこしらへたるは。一二三のさはりの善惡ばかりなり。古近江がうちたる三弦は。樂器に合ふ事妙なり

高津の阿闍梨契冲雙方聞鹿といふ題をとりて。よめるそのうたに

一かたはもし山びこのこたへかと　きけばまことのさをしかの聲

とよめるを。淸水谷大納言實業卿にきこえ奉りしかば。實業卿下の四五句をきけばをじかのよびかはす聲と。添削せさせ給ひしといへり。されば契冲は。實業卿に歌を相談せらしにや

○風來山人 名は國倫。字は士尋。綽號風來山人。又天竺浪人と號す 云。古人春宵一刻價千金とめつたに高ばれば。又浮世を三分五厘と捨て賣りにする男もあり。然れども。春宵一刻に千金出だして買ふたはけもなく。三分五厘に賣りて仕舞ふ出來合の浮世もなし。いかに口から地代の出でぬ

〳〵といへるはじめといふべし。同じ町に。盃の米人といへる狂歌師もありしが。これが軒の折釘に。ある夜すて子をかけ置きたり。市中のもの捨子ならば。町の内の費用にすべきが。此家を心ざしてすてたるものなれば。米人一人の費用にすべしとて。評議まち〳〵なりし時。裏住大屋の事なれば。丁箇はいかゞと問ひしに。裏住袖かきあはせていひけるは。各の評議尤なれども。これなん例なきすて子なり。これは軒にかけたれば。かけごといふものにて。すて子の例にあらずといひしゆゑ。こゝろなき市中の者も。笑ひいでゝ。市中のもの、費用にせしといへり

青やま久保町に長兵衛といへる者あり。幼きより書をよむ事を好み。薬をひさぎて世をわたれり。もとは質屋なりしが。人のおきのるものをうけて。金をかしあたへ。つくのふ時には。そこばくの利銀をそへしむ。或はつくのふとき過ぐれば。その物をとゞめて返さず。外に賣りしろなして。徳つく事をはかれるは。道ならぬ事よと思ひて。年頃藏の中にたくはへつめたるものを改め。きはめて貧しくかねをもつくのひがたき者には。本をも利をもとらずして。其物を返しけり。或は外にうつろひなどして。そのぬしのしれがたきものも。兎角して尋ねもとめ。やう〳〵三とせ經て。その事終り。今の家業にかへりしとぞ。近江の國に田地を持ちけるが。年ごとに行き通ひて。耕し歸り。秋みのりし米を得て。先祖の靈前にすゝめて後。おのれが一年の食料とはなせり。是おのが身の農家より出てゝ。市人となれるをもて。其もとをわすれざる心なるべし。おのが借家をかりてすむ者。家賃のおひめ多く。おのづからすむ事もならで。外に移りなどする者あれば。遠き近きを撰ばず。酒一壺に金壹分を添へて持ち行きて贈り。いづくにありても。借りたる家の賃錢おひめ多ければ。すみがたかるべし。つとめてうきたる費をはぶきて。いとなみに怠り給ふなと。深くいましめ歸る事も有りしとなん。其人となり實義にして。人を敬ふ事厚し。同輩とものいふにも。兩手をつきて人の面を見ず。もし道にゆきあひし時。見すぐす事もあらば。ゆるしたまひてよと。つねに人々にいひき。久保町より原宿村へ通ふ道の橋朽ちぬれば。町の者の

文をよくす。また著述の書多し。陸奥の名所みんとて。立ち出つる頃のうた

　思ひたつ浪の數にはあらねども
　　心をよする松がうら島

剃髪の時のたはられ歌

　けふからはころり坊主になりひさご
　　人にかゝりて世をわたらばや

辭世

　百とせのなかばも何のうつゝかは
　　おもへば蝶の夢さへもなし

自墮落先生（山俊明。字は桓。不量軒と號す）又庵を無思庵と號し。齋を捨樂齋とし。坊を確連坊とす（養福寺の碑文取意）元文四年己未歳十二月晦日。年四十にして。たはふれに柩をつくり。みづからその柩にのり。同好の諸子これを送りて。谷中新堀村補陀山養福寺にいたりて葬儀をなす。住僧下火の文を唱ふる時に至りて。みづから棺を破りて躍り出でしに。葬にしたがふ諸子。酒肴を携へて。うたひつ舞ひつたのしみて。人の耳目を驚かせりとぞ。さて養福寺の堂の前に。しだれ櫻一もとを植ゑて。碑を建て。自ら狂文を書きて。後の北華書と題して。世外の人の思ひをなせり

英一蝶晩年に及び。手ふるへて月などを畫くには。ぶんまはしを用ひたるが。それしもこゝろのまゝにもあらざりければ

　おのづからいざよふ月のぶんまはし

これは高嵩谷の話なり。嵩谷は町繪師にて。近來の上手なり。俳諧を好み。發句をよくせり。海鼠の自畫贊は。望む人あればたれにてもすみやかにかきて與へしなり。その發句

　天地いまだひらき盡くさでなまこかな

○大屋裏住は古き狂歌師なり。（白子屋孫右衛門。江戸金吹町に住す）狹き裏店に唐机をするゑて。書をみしなり。あるとき棚にて頭をうちて

　我やどはたとへのふしの火打箱
　　かまちでうちて目から火が出る

といふ歌あり。又定家卿の御遠忌ありときゝて

　鶯も蛙もおなじ歌仲間
　　經よむもありたゞなくもあり

此歌ある縉紳家にきこえて。萩の屋の號を賜はり。筆を染めさせ給ふ。今の世に狂歌師の號の。何の屋

世はとゝふ人あらば
それ辭世去ほと扨もその、ちに
殘る櫻が花し匂はゞ
享保九年中冬上旬
入寂名阿耨院穆矣日一具足居士
不佞終焉期豫自記春秋七十二歳口口
のこれとは思ふもおろかうづみ火の
けぬまあだなる朽木がきして

先のとし。浪花にありて。銅吹屋熊野屋にて。みし事ありしが。これと同文なりしや。近頃浪花の梅園主人のために。近松の碑文を書きし事ありしが。近松は長門萩の生れにて。兄は名譽の醫師なり。門左衞門近松寺といふに遊學して。其寺の僧。罪有りて。寺門の側にて刑せられしをみて。自らいましめの爲に近松門左衞門と稱せしとぞ。ある時。兄の醫師近松が。よしなき淨瑠璃本を作る事をいましめし時。そこには和語の藥名の書などをつくりて。一字一畫の誤あれば。人の性命にかゝる大事の事なり。我らが作る所は。狂言綺語にして。人の害にならずといひしかば。あにも其理に服し。さあらは。中直りのため。伴ひて大和めぐりせんとて。つれだちてめぐり。世に傳ふる寺子供の。手本の龍田詣といふものを書きしと。盧橘菴の物語なり。近松の碑文には。その事はもらしゝなり

近松の法名。穆矣日具足居士とするものあり。其法名あやまれり。攝津大坂谷町法妙寺中に。平安堂の墓あり。おのれ其墓碑の石摺にしたるを藏す。それにも旦を日一の二字につくれり。思ふに近松は法華宗なれば。さもあるべし。旦操年代記に。十一月廿二日とするものあやまれり。墓碑の裏かけて。終に殘る所に如此あり

○久米園二郎の詩に
舟上筏降大堰河といふ句あり。或人きゝて
名堅人軟石垣町に對すべしといへり

○山岡明阿彌（名は俊明字は子亮。左二右衞門と稱す）隱居して明阿彌陀佛とよぶ。狂名を大藏千文といふ。安永九年庚子。京都に遊び。其頃病死す。時に十月十五日なり。江州三井寺は山岡氏の祖。道阿彌の墓所あり。よりて道阿彌の墓の側に葬るといふ。明阿博學にして。最も和

假名世說

太田南畝 著

○松永貞德（號長頭丸。又明心居士）云。相國寺の仁如和尚の御門弟に俗男の儒學を志し。詩作を自慢せしものあり。入道して道號を和尚に申しければ。かれが心中をしろしめしたりけん。たゞ其方の思ふやうにつかれよとの給ひしに。東坡山谷が片字をとりて。坡谷菴とつけゝり。人々きたなき菴號かなと笑ふよしを聞きて。庵の字をのけて。齋の字につけたれど。いよいよとなへあしくなりて。人にわらはれしと。由己法橋かたられ侍りし。大笑ひ〳〵

○祇園與一（名は正卿。字伯玉。一字は珷南海と號し與一と稱す。紀州の人順庵の門人なり）の狂詩とて。人のかたりしは

朱三起（トタツハ）蟻浪　朱四吹（トハノ）松風　月逢（モヤ）追剝（オヒハギニヤ）否　丸裸（ニテ）出（ルテ）雲時

又祇園豆腐の詩に。○葛溜り琥珀薄く。豆腐玳瑁斑などは妙對といふべし。惜しむらくは全首をわすれたり

○秩父邊の農夫。いかなる物うき事やありけん。みづから鐵砲の玉にて。己が胸をうちて死す。かき置きに云く。うき世にあき果て申し候

○原氏某は。岡安の門人にて。寶永の頃より三弦を以て鳴りたる人なり。ある日。品川のある樓に行きける時。三弦の音。つねに變りたるを聞きて。海嘯のあるべきをしり。其席を終らず。一座の友を誘ひて。急に歸りけるに。程なく大に沓潮して。浪の爲に其ほとりの家ども流失し。人も多く損じたるよし。一時の技藝といへども。その妙に至りしを人々感じけりとぞ

○近松門左衞門（杉森氏。長門萩の人なり）の文

代々甲冑の家に生れながら。武林を離れ。三槐九卿につかへ。咫尺し奉てり寸爵なく。市井に漂ひて。商賈しらず。隱に似て。隱にあらず。賢に似て賢ならず。ものしりに似て何もしらず。世のまがひもの。からの大和のをしへあるみち〳〵。伎能。雜藝。滑稽の類まで。しらぬ事なげに口にまかせ。氣にはしらせ。一生囀りくらし。今はの際にいふべく思ふべき。眞の一大事は一字半言もなき倒惑こゝろに。心の恥をおほひて七十あまりの光陰。思へばおぼつかなき我世經畢ぬ。もし辭

假名世説目録

假名世説目録終

假名世說序

書之有レ說也尚矣。義慶氏取二則於說林說苑一。而世說之書作焉。自レ是而降取二則於斯一者。不レ爲レ不レ多矣。在レ彼何氏語林。在レ我大東世語。可レ謂二其續一耳。慶元以來。縉紳高士。詼儻詭異之行實繁有レ徒。則亦不レ可レ無レ說也。蜀山翁有レ見二于此一。嘗作二假名世說一。翁老罷踈懶。未レ能レ脫レ稿。頃者。書賈請レ上二之木一。縱臾不レ已。其門人文寶與レ校焉。曰。世說猶有レ補。況此未定冊子豈得レ不レ補乎。來卽レ我謀。予與レ翁交情特厚。豈可下以二蕪陋一而辭上乎。因抄下所二臆記一者若干條上與レ之。且語レ之曰。古不レ謂乎。貂不レ足狗尾續後之覽者以レ之議レ之。我將以レ此對。遂以二此言一爲レ序

文政七年歲在甲申閏八月上浣

北峰山崎美成識

文寶堂謹寫

僵尸之事

越後國やひこと云ふ處に。弘知法印と云ふ亡僧の遺骸あり。三百年以前の人なる由。四體完具して。槁木の如く存生せり。何の比か拏鎗人ありて。彼骸を破ると云へり。先年京江戸へも出だし。衆に示して教化す。此も唐にも有ることなり。皇朝類苑に。倦遊雜錄を引きて云。苑岳張起。谷岩石下有僵尸。齒髮皆完。春時遊人多以レ酒瀝ニ口中一。呼爲ニ臥仙一。好事者作ニ木榻一以薦レ之と云々

輶軒小錄　終

んとて開き見れば。其下に一尺程の方石あり。夫を取りてのけ。をしつらへ。方石を庭に出だし置けり。年久しく土に埋れ。初は文字の跡も見えざりき。數日の後雨かゝり土少々落ちければ。小松の二字隱然として顯はる。寺僧とくと洗ひそゝぎ見れば

巳　治承三年
小松内府證空公
亥八月朔日

と有り。堀氏歸りて平家物語を考ふれば。重盛は法名を淨蓮と號して。證空とは無し。何なる故にて。此處に納め置き。法名も如此なる事量り難し。亦訂古の一端ならずや

五位石之事

嵯峨へ往く道。法金剛院の南の山趾に石あり。相傳ふ。某帝の時。詔ありて。五位に叙せらるゝに依りて。五位石と云ふと。何の時にか。承和十四年辛亥。授二雙丘東墳位從五位下一。墳在二雙丘之東一。帝嘗遊獵駐二蹕其上一。以爲二四望之地一。云々と。この事を聞き傳へて。訛り云ふなるべし

一身田之事

伊勢に一身田と云ふ所あり。專修寺と云ふ寺ありて。親鸞宗の一本寺なり。世に高田と云ふ。一身田と云ふこと。いかなる故をしらず。近ころ三代實錄を見れば。元慶三年六月丙寅。勑。以二參河國播磨郡荒廢田一百町一。賜二孟子内親王一。爲二一身田一。と云へり。是に依りてみれば。一身田と云ふは。口分田。世業田の類にて。其一身に賜下せらるゝ田地の名と見えたり。昔この田を賜ふ處。後世遂に地の名となると見えたり。佛家に一身阿闍梨など云ふことあり。あはせ見るべし

圓川之事

圓の字をつぶらとよむ。まどかの義なるべし。昔。圓大臣あり。つぶらとよむ。去る比。三州岡崎の醫。東城氏に出で合ひ。岡崎の近所。江州竹生島へ往き遊ぶ。其西北につぶらをと云ふ村あり。又つゞらをと云ふとも云へり。予謂。是亦つぶらを成るべし。何れも古の訓なり。本朝の舊史。峽の字ををとよむ曲峽宮などあり。亦岬の字をも用ふ。依りて江州遊記に。圓峽と記して。松尾。槇尾。尾上などみな峽の義なり。山の尾さきなり

ふ。其山頂をふめば。鏘然として音有る處あり。慶長の比盗有りて。此をあばきけり。開き見れば。古き石槨なり。此中に銅碑あり。長一尺九寸九分。はば一寸九分。文字ありて凹入す。其表云

飛鳥淨御原宮治天下天皇御朝。任太政官兼刑部大卿位大錦上其裏に刻みて云。小野毛人朝臣之墓。營造歳次丁丑年二月上旬即葬と。凡四十八字筆法遒美にして。唐人の風度有り。別に白川石の如くなる石函ありて。此を納む。其處の寶幢寺といふ寺に安置す。先子の門人西谷道室と云ふ老人ありて。高野の邑に隱居す。吾十二三歳の時。先子に侍して。老人を訪ひ。ちなみに銅牌を見る。其後世年復長準（字平藏號竹里）長堅（字才藏。號蘭嵎）など携へ行く。銅牌のことを尋ぬれば。牌を掘り出してより後。邑衰弊するに依り。本の處に納め置くと云へり。其形木に造り寺にあり。淨見原は天武帝なり。北村氏など日本書紀を考ふるに。其人顯はれずと云へり。其後續日本紀を見れば。和銅七年の下に云。夏四月辛未。中納言從三位兼中務卿勳二等小野朝臣毛野薨。小治田朝大德冠妹子孫小錦中毛人子也。小治田朝は。推古帝なり。妹子は隋の時。華に使して。蘇因高と云ふ人なり。然れば毛人は。妹子の子にして。當時の顯人なり。依りて思ふ。此中疑ふべきこと二つあり。天武帝十三年に。小野臣等五十三氏に氏を給ひ。朝臣といふ。牌丁丑年に造る時は。白鳳六年なり。朝臣に賜ひしより前八年なり。しかるに小野の朝臣と書したるは何ぞや。亦續日本紀に。小錦中毛人と書けり。然るに牌に大錦上とあり。此二ついぶかし。凡て中國の史傳碑碣を掘り出だし。姓名等差異あること。其例多ことなり。亦思ふに。白鳳の年代今を去ること千年に近し。一片の銅牌に依りて。官位姓名具に顯はる。孝子慈孫の其親を不朽にせんと思ふ者。其仕方を知らざるべきや。國史に墓記と云ふもの有りて。家々に記し置くと。彼銅牌は。墓記と云ふ物にや

小松内府墓之事

享保辛亥の冬。堀習齋氏に。一士人の家にて夜話に邂逅す。習齋氏の物語に。近比。大坂の北に中り。田邊と云ふ村有り。平野に近し。此に一寺あり。昔は阿彌陀堂不動院と云ひき。黄檗の末寺に成りて。普門寺と云ふ。此頃圍爐古びたるに依り。造り變へ

顯はるれば。具に擧ぐるに及ばず。是も唐にもあることなり。文選木玄虚が。海賦に。陽氷不冶。陰火潜然とあり。李善が註に。其陽則有二不冶之氷一其陰則有二潜然之火一也。説文曰。冶銷也と。大抵天地の間。陰陽の二氣。聚散交錯して大海積水の中にも。火有りて燃え出づ。大洋の中にも温泉有りて湧き出づ。其然るゆゑんのわけ。誠に得て究め知るべからず。熊野新宮の温泉は。大河の中心より湧き出づ。竹の筩にて引き上げ。連筒にて陸へよせ。人々湯治すと云へり。東北津輕蝦夷の海は。冬になれば氷となる。其中を穿ちあくれば。らつらといふ物飛び出づるを。追ひまわし取ると云ふなり。湯氷不冶と云ふは。此様なる事にや

東極之事

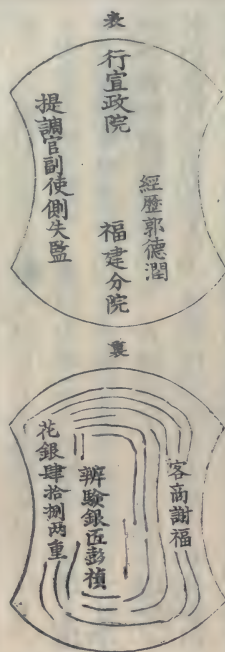
享保某年。江西の中小松鵜川等の村。地界を爭ひて。訟獄に及びて。其中流刑に處せられ。三宅島に放たる。其後。年歴て赦免を蒙り。歸鄕を免さるゝものあり。折節極月のことなるに。二艘連れ立ち。島を出づるに。一艘は先へ出で。恙なく江戸に歸る。跡の一艘は。ふと大西風に合ひ。限りもなく東へ行くこと幾百里と云ふことなし。大様日績を以て。海上の路程を量るに。日本より東へ七百里も行きぬべしと思へり。其處にて朝方の様子を見れば。夜の明けんとする時は。紺碧の層雲。海の東より立てり。やがて大陽海より升り出づ。其大二十丈ばかりに見え。大白星いまだ殘れり。其大傘の如し。日昇ること究めて早し。其熱きこと盛夏の如し。人々衣を脱して頭上に物を置きて。暑を防ぐ計りなり。暫くありて日上れば。次第に冷氣になりて。時節相應の寒氣なり。扨糧米はあれども歸るべき方便なし。只。神明に祈り。冥助を求むるより外なし。暫有りて。風變り。東になれば。幸と思ひ。帆を上げ。そろ〳〵と西に歸る。始終廿日程歴て。臘月廿七日に。江戸に着く。小松の一僧彼流人に檀越の好み有る故。京都の政府へ願ひて。江戸より迎へ歸る。予が所識大森杖信老人。彼僧と相識なる故。始末を詳に物語れり。此様子を察するに。天地の間。東極の地なり。李白が詩に。巴陵洞庭日本東と云ふはさらなり

小野毛人墓之事

比叡山の西麓に。高野といふ村あり。亦小野ともい

年丙申。彼石佛の脇。藪竹生じけるに依りて。彼墓を一二尺わきへ移す。六月十九日。其所を掘りければ。亦壺一つ掘り出だす。此壺前より大なり。其中より銀の法馬八錠を掘り出だす。大體長四寸五分程。重四百九十目餘もあり。大三小五ありて。料目少々不同。小成物長二寸五六分あり。其法馬表背に文字あり。八つにて合せて二貫百七十四匁四分あり。其餘金の鈴。金虎。銀の刀鞘。金銀鑄の造物。諸具品々出で銀目合せて五貫目餘も有りと云ふ。法馬形左の如し

表
行宣政院　福建分院
經歷郭德潤
提調官副使側失監

裏
客商謝福
辨驗銀匠彭楨
花銀肆拾捌两重

右の形を考ふるに。元の時の物なるべし。元の時に。諸道に行宣政院と云ふ官府を置き。一道の政事を掌る。經歷は其下役の官なり。提調官副使と云ふは。其官の司にて。正使のたすけなり。側失監は。韃人の名と見えたり。元の時に。丞相捌思監と云ふ人あり。字は異なれとも。其音相近し。辨驗銀匠と云ふは。日本にて云ふ兌銀鋪の銀見なり。客商と云ふは。銀主の事なり。本朝二三百年前は。異國の商船筑前博多の津に付き。唐にても覇家臺と覺えて居る所なり。其時分亂世のことなれば。元人彼津へ來り交易する次手。忍びて埋むるなるべし。今より四百年程になる。昔。元の世の金幣の制度。可二考見一なり

陰火潛然之事

肥後の海中に。龍燈と云ふ物あり。大海の內。夜中に火燃え出づること。人々云ひ傳ふることなり。肥後の人に邂逅の序に尋ねしに。今に有りとはいへども。惜に目擊すること無ければ。詳なることを知らず。癸辛雜識に。西湖の四聖觀の前に。每夜一灯有りて。水に浮ぶ。氷灯と云ふと。昔。景行帝西國巡行の時より。海中にしらぬ火有るに依りて。其國を火の國と名付く。今の肥前。肥後となる。歌の詞に。しらぬひの筑紫と云ふも。是より起る。委しくは舊史に

事鎌倉志に詳なり。亦嵯峨に尊院山に法然の墓あり。空公行狀と云ふ。上に二字づゝ書きてあり。予。先墓。拜掃の次。每度摩挲すれども。此も文字見えず。宋刻の碑と見えたり。高四尺許もあり

備中古墓之事

備中國某郡に。惠良村と云ふ所あり。二里程東に八田村と云ふ村あり。其處に。吉備大臣の廟あり。二十年ばかり前に。八田邑より一里西に。東三成村と云ふ所あり。其村の百姓古き塚をほり。鐵器を出だし。其名に下道氏國勝。國賴母夫人の骨。和銅元年とあり。其器は所の地藏院に安置せり。領主伊藤伊豆國勝の社建立と云々。さて地藏院を改め。國勝寺と被ㇾ號。骨器の銘まさに廿字餘も有る由。中國すぢより書き付け來る。國勝と云ふは。吉備大臣の御親父なり

和州古碑之事

享保十三戊申の秋。和州宇知郡の內。大澤村の農家平右衛門の家に。四五升程入る壺一つ。幷に瓦十二枚を掘り出だす。中一枚文字を彫り付け。朱を入れたり。瓦の厚一寸八分。はゞ一尺七寸。長一尺九寸なり。其文に從五位上守右衞士督兼行中宮亮下道朝臣眞備。葬二亡妣楊貴氏一之墓。天平十一年八月十二日記。歲次己卯と。凡四十三字づゝ一行にあり。此は上の墓の碑と同じく。吉備大臣の母氏なり。上のは祖母なり。此は母義なり。同じく近年に掘り出だす事。誠に希代のことなり

新羅鐘之事

對馬國の內。八幡宮の鐘銘とて。或人將來す。其文天寶四載乙酉思仁大角干爲賜夫只山村無盡寺鐘成敎受同成時願助在衆臥僧村宅方一切檀越幷成在願旨者一切衆生苦離樂得敎主成節雀乃秋長幢主と。若干字あり。唐玄宗の時の物なり。其時は三韓は新羅國なり。大角干幢主は。其國の位階職名なり

享保より前の比。筑前博多中に市小路と云ふ町あり。其濱に吳竹善三郎とてあり。其妻物故しけるに依りて。聖德寺の塔頭瑞應庵へ取り納む。墓地を掘るに。壺一つ掘り出だす。其中に金銀の分銅。金銀の作り物等。品々取り出だし。其跡へ彼妻を收め葬りてけり。金銀は寺へ上り。祠堂の料とし。其跡に石佛一體を安置し。其所を記し置けり。其後十九年。享保元

羅漢洞之事

豐前國某郡に。羅漢寺と云ふ處あり。此處に山巖の自然石を刻りて。五百羅漢の像を刻めり。予が所識豐後臼杵の人田中登。親しく其處を一覧するよし物語れり。羅漢の像きはめて精巧。唇に朱などさし、處。于今粲然たりと云へり。巖洞の中に有る樣に覺ゆ。所には上代神僧の作と云ひ傳ふ。此事詳に絶海の蕉堅稿にあり。曰。延文五年に照覺と云ふ僧石室に入りて居り。終に室坊をなす。未。幾ならずして僧建順と云ふ有りて。岩奇伏環奇の狀をみて。手づから羅漢像五百軀を彫む。儀貌魁梧。靈祥荐顯と云へり。然れば三百年前のことなり。豐州の僧。導香も毎に物語れり。唐にも此に似たる事有り。燕范陽郡に。石徑山と云ふ山あり。峯巒秀拔。天竺の山の如し。故に小西天と云ふ。隋煬帝の大業中に。僧靜琬と云ふ者。此山に居る。佛經の難有らんこと恐れ。發願募緣して。工人をつのり。大藏經を石にほり。後世に傳ふ。唐の貞觀の初めまでに。大涅槃一部を成就して。靜琬死す。其末葉世々相續し。其功を次き。億萬人を化し。唐宋遼金を歷。一切經全部成就す。岩洞に貯ふる物七つ。石門を以て閉づ。地に穴する物二つ。浮屠を以て鎮す。明姚廣孝石徑山の詩有りて。其序に詳に是を記す。此詩曹學詮が歷代詩選に載す。亦此事他書にも具なり。佛子護法の志。堅固不易。あに其道の人に遠きを以て。退轉を畏れんや。儒者の志なき者亦はづべき事となり

江島の古碑之事

相州江島の祠の側に古碑あり。高五尺ばかり。廣二尺七寸。厚四寸。上頭幷に左右の側。別の石にて緣をとる。土上に竪立し。趺石なし。上に篆書十二字三行あり

大日本國
江島靈跡
建寺之記

とあり。其外雙龍雲氣を彫り付け。其下に横畫ありて。碑文を記す。石斷えて横文あり。文字湮滅知るべからず。わづか十晌性人成五字のみよむべし。相傳ふ。土御門院の時に。良眞と云ふ僧あり。入宋して慶仁禪師に得て歸ると。亦鶴岡の社前に石あり。水をそゝげば。龜鶴飛動の狀。宛然として著はる。土人呼ひて鶴龜石と云ふ。此二

十九字尓召元年己丑四月。飛鳥淨御原大宮。那須國造追大壹那須宣事提許督被賜。歲次庚子正月二壬子日辰節彌故意斯麿等立碑云々。凡て文字二百七十二字あり。文辭古拙不分明。ことに最初の二字明ならず。朱鳥とよむ人あり。又は永昌とよむ人もあり。古。那須は一國にして。其司を國造と云ふ。造はみやつことよむ。上世一國の司にて。民神のことを司る。古は百四十國にわりて。國別に國造あり。舊事記に詳なり。追大壹は古の位階の名。古時の制。地中より出づること珍し。全文別册に書き置く水戶の儒官考あり。扨飛鳥淨見原天皇と申すは。天武帝なり。持統は天武の后なり。相繼きて此の大宮にいませしに依りて。亦淨見原の大宮と稱するなり。然れば。此己丑は。持統の朱鳥三年なり。然るに。元年とあり。唐の則天武后の永昌元年に中る。文字は永昌と云ふが。大方近き由云へり。然れども。唐の年號を用ふることといぶかし。殊に元年四月とあれば。唐より日本への通。京より野州までの路次。數千萬里をへたらん。にはかに達しがたきなるべし

野州多胡碑之事

上野國多古郡本鄉村と云ふ所に。古碑石あり。古來穗積親王墓碑と云ひ傳ふ。古き樟樹有りて。其上に生ひかゝりて。碑身半は樹にかくると云へり。近頃其碑の委細を尋ぬれば。高四尺四寸。橫二尺。厚一尺八寸五分。其下に臺有り。上に覆石あり。中反り平瓦の如し。三尺四寸にて。厚六寸あり。碑面に記す

辨官府上野國片岡郡綠野郡甘良郡。幷三郡內。三百所郡成給□成多胡郡。和銅四年三月九日甲寅宣。左中辨正五位下多治比眞人。大政官二品穗積親王。左大臣正二位石上□□。右大臣正二位藤原□□依りて續日本紀を考ふるに。元明帝和銅四年三月。割ニ上野國甘良郡。織裳。韓級。矢田。大家。綠野郡。武美。片岡郡山等六鄕一別置ニ多胡郡一と。碑は蓋この時立つること。其文符節を合はすが如し。太政官符を石に刻して。後世にのこすなり。亦按。慶雲三年二品穗積親王知太政官事。和銅元年に石上麿任ニ左大臣一。藤原不比等任ニ右大臣一。碑文位署の連名。亦この文符合す。碑文石上藤原の字の下文字不分明。上の例を考ふれば。各朝臣の二字有るべきか。

生横山怡白來り學ぶ。依りて何の比より掘り出だすと尋ぬれば。中古越後長尾氏に屬す。其後公領と成り。天正の比より銀掘り出だすと云へり。然れば銀の出づること。甚。近世なり。其國の地理遠近大方知れたることとなれば。記すに及ばず。其國牛馬犬猫の屬は有りて。妖怪猛鷙物なく。盜賊の患もなし。海中の一島なれば左もあるべし。按ずるに。本國。金有ることを知るは。聖武帝の時に初まる。何れも唐の世全盛の時に中る

二萬の里之事

備中に邇麻と云ふ處あり。今諸侯の采地なり。先年其邑の醫生に遇ふ。久しきことなれば。名を失ふ。此里は古歌にあらはる名處なり。金葉集に。藤原家經の歌をのす。「三調物はこぶ丁を數ふれば二萬の里人かつそひにけり」と。或書の說に。昔。清見原帝。大友皇子と合戰の時。何くともなく兵二萬ばかり出で大友方を退治する故に。二萬と名付くと此僻說なり。天武の軍。備中國まで至ること見あたらず　此事は本朝文粹にくはしくあり。三善清行意見封事と云ふ物にのす。播磨風土記を引きて云。皇極帝の時に。唐より百濟をうつ事あり。百濟より加勢を本朝に乞ふ。天皇筑紫に行幸ありて。援兵を出ださんと。下道郡に至り。一鄉の民戶。甚。繁昌なるを見て。兵を徵さるゝに。勝兵二萬を得たり。時に。天智天皇太子にて從ひ行き給ふ。帝大に悅びて。邑を名付け二萬と云ふ。後改めて爾麻と云ふ。已にして。帝崩御有りて。援兵は遣されず。其後吉備公以來數人。世々所の官司となり。課丁を閱せらるゝに。皇極帝より以來。延喜の時まで二百五十年の間。段々減少して。清行の時分には。課丁一人も無きことを奏し。諸國の衰弊を推しはかり。仁政を行ひ給はんことを申す。其詳なることは本書を考ふべし。此を聞きはつり。怪異の僻說を云ひ出だすなり。左なければ。金葉集の歌も分明ならず丁。の字をよほろとむなり。課丁とは。十六歲より六十歲の人夫。役を勤むるを云ふ

那須國造碑之事

今より四五十年も先。上州湯津上村と云ふ所あり。里民地を掘りて一の方石を得たり。寫の本紙を見れば。高一尺二三寸に。幅九寸。碑文凡八行也。一行

成りて。其ばかりにて其分數は違あるべし。考古の一端なり。亦十代田と書きてそしろ田とよむ

妓王堰之事

清盛の寵愛妓玉は。江州益須郡中北村の產なり。其村灌漑の利少きによりて。そのかみ寵幸の時分。清盛に乞ひて堰を掘り。水かゝりの便をなす。其假今に殘り。益須川を決して三里程の間。水を取るに三村の潤となる。一日の間に成就すと云ひ傳ふ。田へかけ餘りは湖水へ落つるなり。奇有りて妓王妓女を追善す。所の耆老は人によりて妓王が忌日には精進すと云へり。賤婦の身にも。後世に利澤を殘せば。蘇公堤とも名を齊し。西施の洗紗石にもまさるにや。木村伯倫其邑人なるにより。余詳にこれを聞きぬ

山火之事

山の燒くること。日本には處々にあり。富士山古へは常に燒け出づと云へり。富士の烟も。今は燒けずと。何の比よりか燒け止まりしことを知らず。淺間の岳は。今も燒くるなり。此外肥後の阿蘇。薩摩のうんせんも。今に燒くるなり。中國にては聞くことなし。大明一統志を見るに。西北夷に火州と云ふ。處。南北朝の比より唐までは。高昌國と云ふ地なり。其國に火焔山と云ふ山あり。山中常に烟氣ありて涌き上り。雲霧なし。夕に至りて。光烟炬火の如くかゞやき見ゆ。禽鼠皆赤しと云へり。亦其隣國に白山と云ふあり。山中常に火烟あり。硇砂を產す。此を取る者木底の鞵を着けて取。る皮なるものは卽焦くる穴有りて。青泥を出だす。外へ出づれば。卽砂石となる。只此二國のみ。出燒け出づることを記す。是も火州は南干闐に抵り。東南肅州に至ると有り。中國より遙に西北夷狄の地なり

銀坑之事

日本には東奥州生レ金。西對州生レ銀と云ふこと列代の史傳に多く載す。續日本紀天武天皇三年三月。對馬國司守忍海造大國と云ふもの。常國より初めて銀を出だす由言上して。銀を貢上す。依レ之小錦下の位を授けて褒美し給ふ。其銀を諸神に奉じ。官人小錦以上大夫等に分ち給ひきゝなり。日本銀有ることを知るは。天武帝の時を初とし。始めて對馬より出づ。近世對州より銀の出づるを聞かず。近代は佐州より銀を掘り出だす事。其名尤あらはる。前年其國の學

多し。都邊にはつゆ草（鴨頭草）つき草（鴨跖草）と云ふ。亦青花と云ふ。東國にては紺屋五郎と云ふとなん

山陵之事

仁徳帝の陵は。泉州堺の東。廿町許にあり。周回十丁餘ありて。まはりに堀あり。はゞ三四間あり。小舟一艘ありて往來す。上に登れば。谷々ありて小山の如し。予四回まで拜覽す。土人此を大仙陵と云ふ。大山陵の訛なるべし。應神天皇の陵は。河州にあり。大仙陵の如し。山少く小なり。周回の地なし。譽田八幡と云ふ社あり。社領二百石にて。社家社僧あり。東一院。西一院。大滿院など云ふ寺家十軒許あり。予癸丑の夏拜見す。院にて古樂器。古書等一覽す。緣記三卷。普光院義敎之筆なり。繪は土佐となり。其後亦南都之柳原氏に邂逅す。神功皇后の陵は奈良より西三十町許にありと云ふ。上に梓宮を奉藏する處あり。人畏れ敢て近付かず。其脇に二斗許入る壺多くあり。大様一間四方に一つ程のわりにて。地に埋め有りと云ふ。次手の咄に。奈良の若草山と云ふは。仁徳帝の后の陵にて。鶯の陵と云ふとなり。近年並河五一郎吟味ありて。其上に標ありと云ふ。其奥に鶯の谷と云ふ處ありと云々。播州宍粟人中村生云。明石より前に垂水と云ふ處あり。此處に仲哀帝の陵あり。是も回に池あり。道側に其標あり。陵に上れば。是にも壺多くあり。わたり口三十一尺許なる一間程間を明け。上に二行あり。其外所々に有ること。凡四五百もありて。何の用たることをしらず。土人云。古此に花を生けて。供養ありと云ふ。後世民間の推量ならん。古葬に瓶を用ふること。禮記にあり。古制重ねて考ふべし

十代田之事

中村生の話に。宍粟邊の山よせの村には。今の一町一反と云ふつもりもなく。一代と云ふと有りて。其廣狹同じからずと云へり。代と云ふこと所にも知らず。其制いかゞと云ふ。予答云。古之制三百六十歩爲一段。三百六十坪也。此を五にわり。七十二歩を十代とし。百四十四歩を廿代とし。二百十六歩を卅代とし。二百八十八歩を四十代とし。三百六十歩を五十代とす。五十代を一段とす。此事拾芥抄に詳なり。然れば一代と云ふは。今の二頃に中る。一段の地を五十代に準ずれば。自知るべし。古制年久しく

頭石と云ふ。外白く薄皮の如くにて。中に赤き粉あり。饅頭のあんの如しと。此は禹餘粮にても有るべし。右二件丹州龜山中村大進氏の物語なり

七くりの湯之事

清少納言枕草子に。湯は七くりの湯。有馬の湯。玉造湯云々。有馬湯。天下にあらはる。玉造の湯何處に有ることを知らず。七くり湯は伊勢榊原にあり。今に至りて湯治の爲に往來するもの多し。奥田蘭汀生の物語なり。津の領内の由となり。亦次手の話。志州に片枝の梨と云ふ異木あり。一年は南枝に實のり。一年は北枝に實のる。故に片枝と云ふ。古歌にも是有りと云ふ。予按ずるに。牡丹に轉枝紅と云ふ有りて。隔年に枝を易へて紅白の色をなすと。說郛にあり。因りて思ふ彼志州の梨は。轉枝梨と云ふべきや

磁石之事

享保丁未の年十月盡日。西三伯醫八の子德元磁石を持ち來り示す。近年丹羽正伯を召し出だされ。諸國藥物御吟味に付き。處々巡行僉義の處。奥州南部の管内に。閉伊郡大鎚と云ふ處あり。其山より掘出すとなん。四五寸程の一拳石色黑し。一方の小口せん屑を付くれば。蝟毛の如く吸ひ付き。針亦釘を付くれば。五つ程つれ下る。南をさすこと弱し。亦一塊來りし由。南の方をたしかにさすと云へり。鑷夾剪の類を近付くれば。飛び付きて自付くとなん。江戸へ持ち歸り候由にて。是は不見。膽礬一包見せらる。色甚翠碧なり。琥珀も出づる由。磁石日本に產すること。前代未聞珍しきことなり

かまつかの花の事

枕草子に。草の花はなでしこ。からのはさらなり。やまとも目出たしと云へり。唐のなでしこは今の石竹なるべし。近比亦あんしやれと云ふ一種あり。色深紅。或は紅白のしぼり。其香奇南の如し。もつとも逸品なり。南夷より出づと云ふ。名も蠻名ならん。亦云く。かまつかの花らうたげなり。らうたげなると。かまつかの花。何樣の花なる事をしらず。其後。作州の人明石生を伴ひ。嵯峨の邊を行くに。道邊に淡竹花多く咲けるを見て。中國にては。かまつかと云ふと云へり。然れば枕草子のも是なるべし。禮失而求二之于野一と。古の雅言却りて田舍にのこること

を海にすてけり。三年巳年七月に五人の者大坂に付き。奥州へ通路ありて。吏を遣はし迎へ歸さるとなん。此亦天下太平四海無事のしるしならずや

田文之事

攝津國豐島郡南鄉村は。小曾根莊の中也。此處に春日の社あり。社司を今西宮內と云ふ。其家に古來傳來の古證文ども多くあり。此中に田文と云ふ物あり。今の世にくゞと云ふ紙の如くにて。はゞ一寸餘。竪にけいを引きて。亦橫四けい有りて。山川田畑墓原など一々慣に書きてあり。其最初に文治五年。御撿註加納田畑取帳とあり。前に垂水鄉御牧榎坂とあり。けいの內には敕旨田。不輸田。公田など云ふことあり。後世に裏打して。折本に直せりと見えたり。東鑑。太平記等に。大田文と云ふことあり。今時の人はいかやうの物たることをしらず。此證文にも田文と云ふ文字はなけれども。古來此を田文と云ひ傳ふるなり。今世に水帳など云ふ類とみゆ。敕旨田と云ふことは。古き文書にもあれども。不輸田と云ふことは記憶せず。一人受け持ちて。回持にせざる田地のことなるべしと。或人惟量す。左も有るべし。右は享保十五年の冬紀府の學職岩橋氏。望に依りて平野鄉の土橋元信氏。今西氏に緣有る故。いひ遣はしゝ由。岩橋氏物語れり。今西の族人。正立醫人は予亦此を知る。右の序に。河內道明寺の古物を見る由物語れり。道明寺は菅家の伯母に尼有りて。其時より傳來の古寶餘多ありと。此中に象牙の笏あり。菅公の遺物の由云ひ傳ふ。はゞ二寸。長一尺二寸。厚四分程。本少しせばし。頭少し圓みありとて。先年平野へ行き遊ぶ。土橋氏の話に。鄉に古き帳ありとて。其中に花兵子段錢など、云ふこと有りと。是も昔の文書なれども何の時代たること不慥。是等の名目は。とかく年貢などのことの樣に聞えたり

熊野饅頭石之事

總州佐倉の城下一里計り有る處に。熊野石と云ふ石あり。昔熊野より來る人。履底に付け來ると云ひ傳ふ。此石年々に成長し。今は大なる岩となれり。其形狀。傘の如しと云ふ。ある人。廿年計見來るに。その間三寸も長ずと云へり。此は天中紀にのする活石なるべし。亦次午の喘に。筑前竈山の山上に丸き石餘多あり。五厘饅頭の大さの如し。土人これを饅

り。唐には神仙厲鬼の詩あり。公冶長の雀。丁令威の鶴。皆韻字を押して。好詩を作れり。日本にて神佛の名歌餘多あり。鶯宿梅の詩は。あて字交りの拙詩なり。何事も人の心の呼び出だすと知るべし。徐氏筆精。九花山産念佛鳥。形大如レ鳩。色黄褐翠碧。間而成文。音韻清滑。如二誦レ佛聲一。唐韋蟾詩云。靜聽林飛念佛鳥。細看壁畫馱經馬

獨繭之事

漢書司馬相如傳の賦に。曳二獨繭之褕袣一と云ふことあり。郭璞注に。獨繭一繭糸也とあり。此わけ明ならず。美濃人廣瀨生。毎に來り。話の次。故國蠶鄉なれば蠶のこと詳に物語れり。其談に云。蠶の眉の中にたゞ一匹をるあり。いくつもをるあり。一匹をるを一つまゆと云ひて。其糸。甚好く。專。糸につくる。二つ三つをるは。其糸弱きに依りて。綿に造る。依之さとるに。所謂獨と云ふものは。一つまゆの事なること。偶。天工開物と云ふ書を見るに。擇繭の條下に云。凡取糸必用二四正獨蠶一。繭則緒不レ亂。若下雙繭併二四五蠶一共爲上レ繭。擇去取レ綿用。或以爲絲則粗甚と。果して廣瀨生の談と符合す。亦詩人玉屑第二卷詩評の中に。韋蘇州が詩を評して云。如二園客獨繭。暗合二音徽（皷弓）一と云ふ。此獨繭はまゆのこと、見えず。今所謂こきうなどの屬か。一線のひきものと見えたり

遠人木牌之事

正德二年の冬。奥州荒濱。相馬二邑の船頭八人舟に乘りて。米を積み。江戶へ運しけり。風に合ひて。中國南海の地へ吹き放され。甚難義に及べり。其處の者。遠國の人なるを憐み。五寸程の木牌をこしらへ。人々のこしに付けさす。其語に云

蕃人打破舟不得回籍伏乞
列位大爺相公施舍米飯以救
殘生公侯萬代

此牌を帶びて。轉回して廣東省の領內に至る。廣東よりは。年々長崎へ賣買の便有るに依りて。其舟に付き。長崎へ歸る。其中一人は唐にて死す。唐人棺をこしらへ葬る。二人は船中にて死にければ。死骸

芝石之事

西國に芝石と云ふものあり。京師にては人々木葉石と云ふ。石中に自然に木葉の紋あり。栗葉の如き物宛然たり。其石の色。褐紫色にして理麁なり。先年牛山老醫。一塊五七寸なるを贈らる。夫には蛤蜊殼石に成りたるが付けり。筑紫には。處々にありと云へり。中國物産の書册にも。此事ばかりは見當らず。頃日皇明文徴を撿するに。都穆が遊王喬洞記云。新安有二王喬洞一。洞在二縣西廿里一。石皆土所成。而破レ之木葉形交二錯其間一。文理具在。若二彫刻一者。蓋山石皆然。洞之上二木亦皆化石。而復產二枝葉一。與二凡木一類。予見レ之乃大駭。以爲穹壤間之所レ未レ有。碑言。昔神仙大丹之成。土木皆化爲レ石。其說似レ爲レ得レ之。此に依りて見れば。中國には甚珍らしきことにて。定まりたる名稱もなし。因りて神仙の所爲など、料簡を付くるなり。吾思ふに。天地の陰陽の二氣。融結變化して。柔なる物變じて堅く成り。散ずる物聚りて塊となる。然れば土地の性により。或は陰陽變化の時に因りて。柔なる者木葉魚介の類の如き。水土と、もに變じ。堅剛の石となると見えたり。亦備前に燒山と云ふ處あり。其山白石を出だす。柔滑。刻みて器物に造るべし。或は薄紫の紋理あり。或云。滑石なりと

禽言之事

釣舟。格磔。喚起。盍且。泥滑々。浦餠焦。不如歸去。鳳凰。不如我如き鳥の聲。人言に片どること多し。依之。四禽言。五禽言の詩あり。明の張祥鳶が。詩和禽言成樂府。寛裁荷葉製衣裳と。群芳譜にこれを載す。日本にも。高野山に佛法僧と鳴く鳥ありと云ふ。亦日光にて慈悲心となく鳥ありと云ふことを。昔より和歌に詠じ。人々傳誦することあり。是も唐にもあり。百川學海中蜀都襍抄に。峨眉山に佛光といひて。時に依りて光の現ずることあり。其前に鳥あり。施主發心菩薩來到と呼ぶ。光のあとに施主不施菩薩去了と呼ぶに似たり。亦云。鳥聲只三字佛現了と云ふ。雀に似て只三枚有りとなり。此等のこと合せ案すべし。すべて鳥獸の音。碓磨の聲。此方の聞き樣に依りて。樣々に聞き取らる、ことなり。深山幽谷。禪佛の境には。常々佛事を談じ。佛語を談ずるに依りて。山獸の音も佛書に聞きなすと見えた

須郡田中村と云ふあり。其士豪田中氏園中に池あり。珍しき蓮をうゑ傳ふ。其樣子を尋ぬるに。大白蓮にてわたり四五寸も有り。一莖の上に九の花房あり。みちあうて咲く。小なるは或は七。或は三あり。中元の比より咲き初め。八月上旬まで咲く。其花落つることなく。來年まで枯れ殘る。萬葉蓮と云ふとなん。或云。此花とくとは咲き切らずと也。卽群芳譜を見るに。千葉蓮と標し。分注云。花山有レ池。產ニ千葉蓮一。花服レ之羽化。今人家亦有レ之。然頭重易レ萎。多難ニ開完一とあり。詳ならねど大樣此なるべし

石炭之事

西國に燃ゆる石あり。其色黑く光あり。地中より掘出し。人家炊爨の用に供す。多くたけば。其臭あしとなり。弟長準字平藏先年初めて筑後久留米へ官して行く。上京の次。小なる物四五塊を持ち來りて見す。火爐に入れ。烟草の用に供すれば。炭のほこる如く。暫時に通紅になり。小塊故か。さのみ惡しき臭もなし。彼近邊には。所々にありと云ふ。本草を見れば。たしかに石炭なり。李時珍曰。石炭卽烏金石。上古以書レ字故謂ニ之石墨一。今俗呼爲ニ煤炭一。煤墨音相近也。拾遺記言。焦石如レ炭。嶺表錄言。康州有ニ焦石穴一卽此也。亦云。石炭南北諸山產處亦多。昔人不用。故識レ之者少。今卽人以代ニ薪炊爨一。煅ニ煉鐵石一。大爲ニ民利一。土人皆鑿レ山爲レ穴。橫入十餘丈取レ之。有ニ大塊如レ石而光者一。有下踈散如ニ炭末一者上。俱作ニ硫黃氣一。以レ酒噴レ之則解。入藥用。堅塊如レ石者。昔人言ニ夷陵黑土一。爲ニ刼灰一者。卽此踈散者也。孝經援神契云。王者德至ニ山陵一則出ニ墨用一云々。亦大學衍義補云

人形原之事

右の序に。長準談じけるは。久留米城下の郊外。何の方か人形原と云ふ處あり。餘多土偶人山の原に臥し倒れたるあり。大。常人の如くにして樣體唐人の如し。古人何の爲にすることを知らずとなり。凡べて土中より掘出す。器物に今の人の見ては。何の用に成ると云ふ了簡の付かざるもの有り。いにしへの祭器明器の類にやあらん。本朝の古。貴者の葬には。生人を殉葬す。野見宿禰の奏に依り。土偶人を用ひらるゝこと。明に國史にあらはる。彼人形原の偶人。もしくは殉葬の土偶にてもや有るべき

相可(アツカ)の邊に逍遙し。彼石を見んとて。案内者を尋ぬるに一人もしる者なし。蘭汀生。漸。嚮導一人を求め得て。西山四神田など云ふ所を歴て。或は山。或は村。淸泉茂林の幽辟の間を行くこと數里にして。駒が野と云ふ處にて日暮る。此處に寄り。川を見下し。尤絶景なり。此處に宿し。翌日行くこと二里許にして。中村と云ふ所に着く。一の大岩石山の半腹に偃然たり。卽鸚鵡石也。其高さ十餘丈。横はゞ二十丈許もあり。其色靑黑山石の色なり。その右手百間も有るべきか。其上に氈など布き。數人坐し居るべし。其岩の上に居て云へば。彼石も亦人の言ふ如く對ふるなり。謠を諷ひ。皷を打ち。三弦など彈ずれば。石も亦夫々の音をなし。さゝやけばさゝやく聲をなす。わめけばわめく聲をなす。屛風障子のあなたにて人の言ふが如し。帝釋中之助と云ふ鄕士あり。夫より皷をかり來り打ちければ。岩の中にも皷を打つ。一行の中。笛を携へ來る人あり。試に。吹きけれども。曾て答へず。不審なり。總體其響く處は。岩の左の角にあり。全體へはひゞかず。唐にも有ることにて。響石とて詳に勢遊志に著しおけり。此に贅せず。其所は紀州の領地にて。宮川の源也。歸りは舟を買ひ。流に沿ひて下ること八里程にて。宮川に着く。此間も景よき處なり。其後傳播やゝひろく。桑原菅長義卿のうはさに因りて。詩記等を院の睿覽に入る時に。靈元帝御在院にて。畫師山本宗仙に仰せ付けられ。屛風に圖せられ。其記を書き付く。近比。亦奥田氏より云ひ來る志州の海邊に。安樂島と云ふ處あり。此所に一の響石あり。鸚鵡石の如し。その地。海畔にて風景尤宜しき所にて。同言石と云ふとなん。亦海内奇觀と云ふ書を考ふるに。安慶府の浮山に。鸚鵡石と云ふ石あり。其形翅をたれ。啄むが如しと。此は形を以て名付くる也。亦雲林石譜を考ふるに。荊南府に石あり。巨碑の如し。色淺綠にして甚堅からず其色星を靖(本のまゝ)すべし。鸚鵡石と名づく。此は色を以て名付くるなり。廣き天下の中。さまぐ\のことありて。人の物を名付くるも同じき名にても。夫々の趣向同じからざること。此にて推量すべし

千葉蓮之事

此冊書寫の折節。井上毅齋氏の甥來り語る。江州益

ふ島を圖せり。亦隋書に。朝鮮より日本へ渡る所に。舳維島と云ふ島に至るとなり。磯竹を指すに似たり。此島にも常に人は住まずと見えたり

無人島之事

先年。南方より橘をのせて江戸へ行くもの風に吹き放され。極南の一島にかゝる。其後。歸りて此由を官へ申し上ぐ。官より其樣子を尋ね求められたりと云ふ。延寶三年乙卯の歲のことにて。詳に土地海中の路程を記し。外に圖一枚あり。世に此を無人島と云ふ。其圖記共に山本通春より是を借り寫す。同年閏四月五日に。官船豆州下田を出船し。七日に八丈島に着。九日晡後に。八丈島を出で。海路十八里にて。夜中に青が島に付く。夫より或は東。或は辰巳。或は午未の間を差して行く。その間。十里。廿里。三四十里の間に。所々に小島あり。極南の大島。廻り十五里。その地形半環の如く。西北に向湊あり。其東北に廻り五里と七里の島あり。江戸房州の邊よりは南。(すこしく東に中り)己午の間に當る。三百七十二里五町となり。此所謂無人島なり。琉球國其正南に中る六百里餘(七百里餘も有るべしと云ふ)天文生を伴ひ行きけるや。北極地を出づること廿七度。赤道の北廿七度去ると云へり。其地。見事なる木餘多あり。樟に似たる木。山檳榔子さまぐの樹あり。檳榔子の木高二十尋も有りて。二抱三抱もある木あり。鳥多くあり。日本にて見付けぬ鳥あり。樹木も名を知らざるもの餘多なり。都べて魚鳥とも。人を恐れず。何れも手取にすべし。亦路にて八丈より東南六七丁に廻り三里程の島あり。茅など生ひ茂り。居人なし。白き鳥有りて。形白鳥のごとし。羽先より羽先まで八尺餘あり。此も人を畏れず。國語に云へる鵜鶘の類にても有るべきや。其年の六月五日に。本島を出船して。夫より日員十三日歷て。十七日下田に歸りぬとぞ。其書付の奥に。島谷市左衛門。中尾庄左衛門とあり。そのかみの咄には。長崎にて海路の舟行の鍛煉者と云へり

鸚鵡石之事

伊勢山田の祠官福島鶴溪氏。平素物語に。本州市の瀨村に。異石あり。人語に答ふ。土民因りて鸚鵡石と云ふ。享保十五年庚戌の歲。奥田蘭汀(名士亨字喜甫)の招に依りて勢州に往き。豐原に留りぬ。夫より射和(イサワ)。

名自呼。•形大于猿。其體不過三尺。而尾長過頭。鼻孔向天。雨則桂木上以尾塞鼻孔。其毛長柔細滑。白質黑文如蒼鴨。脇邊斑毛之狀。集之爲裘褥甚溫暖。雖仰鼻而長尾則此也。此文と少々違ふ事あれども。大檨此物なり。蜼は。十二章の內。宗彜にゑがく尻蜼と云ふ則此事なり

虫の巢之事

東北邊地蝦夷のあたりより來る虫の巢と云ふ青き玉あり。海中に有りて。小虫宿り居る巢なりと云ふ。其大小不同。中に自然に穴通りて巾着の壓子にしてよし。好事の人尤是を珍とす。眞なるもの甚得がたし。或云。靺鞨珠と云ふ物なりと。左もあるべし。本草を見るに。青琅玕と云ふ物あり。亦は石闌干とも。亦は石珠青珠とも云ふ。陳藏器云。石闌干生大海底。高尺餘。如樹有根莖。々上有孔。如物點之。漁人以網罾得之。初從水出微紅。後漸青。亦蘇頌云。琅玕青色。生海中云。海人以網於海底取之。初出水紅色。久而青。有枝柯似珊瑚。而上有孔竅。如虫蛀。擊之有金石之聲。乃與珊瑚相類。亦珊瑚條下云。明潤如紅玉。中多有孔。亦有無孔者云々。此諸說を按ずれば。珊瑚。琅玕。畢竟一類にして。其色を以て名を異にするのみ。二ともに自然に孔あり。今世に有る虫の巢は。自然に圓成にして。虫の巢を作りて成す物と云ふ。夷人採り得て琢磨しして圓珠とするもしるべからず。亦寶石の下に。寶石出粟田回鶻地方。雲南遼東亦有之。碧者名靛子。翠者名馬價珠。亦云。碧者唐人曰之瑟々。紅者宋人謂之靺鞨と。遼東靺鞨は。皆吾蝦夷の地に近し。亦可併見なり

磯竹島之事

北海の內。隱州を去ること三十里許。北に磯竹島と云ふ所あり。周圍十里許あり。此島に巨竹あり。鰒魚。海物等多し。亦一種の猫あり。常猫とは甚異也。因州の管內に。大屋。村河と云ふ兩氏あり。所の土豪なり。百年前より公儀より符驗を給はり。間年に彼島に下り。海物等を取り集め業とす。後にまた至れば。朝鮮人多く集り居て入ることを得ず。是より往來斷絕せり。因州の儒官辻晩庵。每度此物語あり。只今は如何と云ふことを知らず。朝鮮の申叔舟が。海東諸國記の圖に。日本と三韓との間に。竹島と云

ふ。其字鵺の字を書く。朱冠玄衣。青腹白翅のさきに白色を帯び鵲の如し。雌は雌雉の如し。甚。其子を愛す。白山は北國にては。究めて高山なる故。四時常に雪あり。山の絶頂より下廿町ばかりに五葉坂あり。萬松環り圍む事數十回。この鳥。其間に棲宿し。曾て他所へ行かず。見る人尤稀なり。たま〳〵見得る者あれば。以て奇瑞とすと云ふ。此鳥よく火災をさくとなん。昔後鳥羽院の御製の和歌ありて。夫木集に載すと云へり。其歌。「白山の松の木陰にかくろひて安らにすめる鵺の鳥かな。國に小武友梅と云ふ老人あり。家素より豪富にて。好事の雅人なり。平生山水の癖ありて。天下の名山奇水遊歴せずと云ふことなし。常に白山の神を崇信し。度々山上し。路に休所の廬を結び。往來の人をやすらはしめ。したしく彼鳥を目撃し。圖繪して風早實積卿に因りて。靈元帝の御覽に入る。亦かの歌を實積卿に請けてその上に題せしめ。亦予に其記を作らしむ。近頃亦刊刻して書軸となし。世に行ふときく。頃日。偶古文品外錄を閱るに。宋の晁補之が新城遊北山記をのす云々。旁皆大松云々。松間藤數十尺。蜿蜒如二大蛇一。其上有レ鳥。黑如二鴝鵒一。赤冠長喙。俛而啄。磔然有レ聲云々。此樣子を考ふるに。たしかに鵺の鳥と見えたり

いすかの事

世間に。人事のくひ違ふことを。いすかの喙と云ふ。前の年一童生小鳥を好き。一つの小鳥を籠にして吾に示す。いすかと云ふ鳥なりと。其鳥の形狀。あつ鳥の如く。其喙甚利にして短く。上下くひ違ひてあり。寔に事の相違の譬に唐にも有る鳥なり。餘多のことなれば。其名知れずと見えたり（農田餘話云）

果然之事

昔。先子壯年の時。近江に中村宗全と云ふ老人あり。津輕へ往來して業をなす。彼地より珍しき猿。寶石など餘多持ち來る。先子其家へ至れば。其猿を出だし示す。常の猿の如くにして其色潔白雪の如し。尾甚豊にして長し。夜眠る時は。其尾にて面を掩ひふす。甚だ人に馴れて憐むべし。其後家の小僕たはむれに。天仙蓼（またゝび）を喰はせければ斃れける。先子云。此果然と云ふ猿なりとなん。本草を考ふれば。郭璞が云。果然自呼二其名一。亦南州異物志云。交州有二果然獸一。其

筒の節をぬき。挿し入れておけば。其中より火出づ。常には火出づることなし。火を用ひ度しと思ふ時は。上より付け木にて。火を呼び出だせば。夫よりちよろ〳〵と燃え上り。灯燭の用に代ふ。近所の婦女の曹。其所に集りて。紡績夜作を勤むとなり。亦壬子年に。柄目木村にも。ふと火井を取り出だすと云へり。此を本草綱目に考ふれば。石腦油と云ふ物なり。亦は石油。石漆など異名品々なり。左に此を錄す。

張華博物志。延壽縣南山石泉注爲レ溝。其水有レ脂。挹取著ニ器中一。始黃後黑。如ニ凝膏一然レ之極明。謂ニ之石漆一。段成式。酉陽雜爼高奴縣有ニ石脂水一。膩浮ニ水上一如レ漆。取以膏レ車及燃レ灯。唐譽水昨夢錄。猛火油出ニ高麗一云々。

李時珍云。石油所在不レ一。出陝之肅州。鄜州。延州及雲南之緬甸廣之南雄。自ニ石岩一流出。與ニ泉水一相雜。汪々而出。肥如ニ肉汁一。土人以レ草挹ニ入缶中一。黑色頗似ニ淳漆一。作雄硫氣土人多以燃レ灯甚明。得水愈熾。不レ可レ入レ食。其烟甚濃。沈存中官レ西時。掃ニ其煤一作レ墨。光墨如レ漆勝ニ于松烟一。亦綱目に。明の正德年中に。嘉州に鹽井を開く。たま〳〵油水を得。其光明夜を照すべし。水をそゝけば焰いよ〳〵盛に。灰にて撲滅せば。雄黃の氣をなす。土人雄黃油と云ふ。亦琉黃油とも云ふ。此數品名はかはれども。何れも石腦油なり。時珍料簡には。雄黃石脂を產する處は。源脉相通ずる故に。此物有りと云ふ。皆陰火也と。越北の地にも。鹽井溫泉多くありと云ふ。然れば土地の氣脉に依ると見えたり

鹽井之事

秋田侯の官木村信甫。松軒と號す。先年上京し。先子に依りて學ぶ。秋田に歸る道に。黃鹽峠と云ふ所あり。山中に井あり。鹽を產す。其水色黃なる故に。依りて名付くるなりと云ふ。越後の人にきくに。鹽井の鹽は。其色常の鹽より甚白く精よし。一日の間に。只一二升ばかりを得るとなり。其詳なることは聞かず。日本にては沿海の所多きに依り。海鹽ばかりを用ふ。中國には。地鹽。井鹽さま〴〵あり。義之が十七帖に。蜀有ニ鹽井火井一と云ふこと有りと覺ゆ。彼方にも偏土にあることなり

越山鵣(ライ)之事

越の白山にらいの鳥と云ふ物ありと。昔より語り傳

草生水。火井之事

越後に。地より油の涌き出づる所ありと云ふ。亦火の出所ありと。昔より人々言ひ傳ふる事なり。近年越後の書生二三輩來り學ぶ。其中淸田順養と云ふ醫生。詳に物がたるなり。亦樋口十郎兵衞正しく其所へ行き。目擊の由にて。圖幷說を將ち來り。其委曲を聞く事を得たり。先越後の柴田と云ふは。今は新發田と云ふ。溝口侯代々傳來の領地なり。城下より七八里わきに。蒲原郡新津と云ふ所あり。其屬邑にがらめきと云ふ村あり。文字柄目木と書く。その村の東南十五町ばかりに小山あり。其山に油井ありて。水底より水に夾りて。油涌き出づ。其勢甚猛烈也。土人此を涌壷と云ふ。其水これをくさうずと云ふ。文字には草水とも書き。又草生水とも書く。昔は。其水地上へふきあぐると三尺ばかりなり。見る者土くれ或は石などを投ずるに依りて。水底浮き塞かるにや。今はわづかに一二尺ばかりわき上る。其井のわたり三丈餘。深五丈ばかりも有り。まはりに五六丈ばかりの杜をめぐらし立て。横に木を貫き。竹數百本を束ねて。墻の如くして此を圍み。其內に藁を束ね網として。其わたり二丈ばかり。石油其上に溢れ出づ。土人芦穗を束ね帚となし。油を掬みとる。全く水氣なし。その臭甚あし。其色黑くして漆の如し。ともし火に點ずれは。光明常の油の如きなり。價甚廉なり。人其臭を惡みて。旁近の村落には用ふれども。遠方へは至らず。邑の長眞柄茂助と云ふ者。世々其利を專にして。稅金を城主へ上る。其由來を訪ふに。古代より是ありて。何の世に初まることをしらず。其山の近所半里ばかりの間に。小井三十ばかりあり。皆わたり六七尺。深二丈ばかり。何れも油出づ。大抵方三四里の間。田際山畔。或は溪流の中。多く石油わき出づ。何れも薄くして用に中らず。土人藁を浸し乾し。燈燭の用とす。又其西に火井二つあり。其一つは。小松山にあり。其中より火燒え出で材木をやくに依りて。石を餘多打ち入れて。此を塞くと云ふ。又城の西三里ばかりに油井有り。かくまと云ふ草あり。蕨に似たり。乾してくみ取ると云へり。此は其詳なる事をしらず。扨火井の事は。同國にて妙方寺と云ふ所あり。一民家の庭より火出づ。その上に石を置く。石の眞中に穴ありて。竹の

輶軒小錄

伊藤東涯 著

壺碑之事

中華にて。金石の究めて古きは。周の鼎河に沈み。秦の璽夷に沒し。石鼓の文。嶧山の碑。後世わづかに其文字の彷彿をうつしつたふ。本朝にて。碑碣のきはめて古きは。奧州壺の碑にしくはなし。昔。賴朝公の和歌に詠ぜられしに因りて。人々記臆することなり。其時よりも。世に故事と成りて。古今の間に名高きことなり。其碑自然石にて。其背馬鬣の如し。高六尺五寸濶三尺一寸其中に界あり。その竪三尺八寸五分。橫二尺六寸。奧州宮城郡市川村の北岡にあり。上代に多賀城と云ふ。城地の舊跡なり。其時のしるしなり。筆者何人たることをしらず。近世陸奧の風土記と云ふ物出で、。三雲直人と云ふ人の筆迹なりと。水戶の儒官の考あり。前時國主より儒官を遣して寫さる、に依りて。今は世上に。打本。寫本等多し。僧顯昭の說に。壺の碑と云ふは。昔。田村將軍東征の日。弓の弭を以て。これを畫すと云ふは謬傳なり。或は云。此は表の文にあらず。碑の背に書き給ふと云へり。いかゞ。大野東人と云ふは。紀職大夫直廣肆果安が子にして。神龜三年征夷に從ひて。戰功を著し。從四位勳四等を授けらる。天平三年に陸奧の按察使となり。鎭守府將軍を兼ね。後官を累ねて。參議人養德守征西將軍となり。從三位に至る。十四年に薨じ給ふ。此碑神龜元年に。按察鎭守從四位の官を書すは。碑を立つる時にあとより書きたるに依りて。相違ありと見えたり。藤原朝獦と云ふは。孝謙の寵臣大師惠美朝臣押勝の子也。天平寶字四年に。陸奧國按察使となる。鎭守府將軍を兼ね。從四位を授けらる。五年に仁部卿と成る。今の民部卿なり。六年十二月。東海。東山節度使となり。十二月に。參議となり。其歷官の次第。續日本紀に詳なり。碑に記す處と相違なし。賴朝卿の和歌新古今集雜の下にあり。前大僧正慈圓の文にては思ふ程のことも申し盡し難き由。申し遣し侍りける返事に。

前右大將賴朝

陸奧のいはで思ふはゑぞしらぬ
書き盡くしてよ壺のいしふみ

輶軒小錄目次

輶軒小錄目次終

輶軒小錄自叙

昔。漢の揚子雲。四方言語の異同をあつめ。輶軒絶代語と云ふ。輶軒と云ふは使の車なり。皇華の使四方へ出で行くに。其國々の詞をきくに依りて。其書に名付けたるなり。予幼にして。先子に侍り。四方の士の來り集まるに。其國々の山林。丘陵。草木。鳥獸の奇異珍怪なるを物語するを聞き覺えて。書き記し。予が世に及びて聞きうる事。予自至り見るところ。先後を辨へず書き昝めて。輶軒小錄と云ひて。後世子孫の見聞に備ふと云ふこと爾り

平安　伊藤長胤題

より飲み當たる數によりて。番を立て七日の會をはりて。勝負を定め。賭を得とみゆ。太平記にて見れば。必ず七日を一會とするにもあらず。日數は勝手次第とみえたり。下の良仲等の字は。十種香の目錄の如く。名の一字なるべし。親尊の二字は。位賤き人ゆゑ二字書なるべし。さて七所を粧るは石州流の眞の臺字の七所飾のことなるべし。七番菜は今の卓子の六碗菜。八碗菜と云ふごとく。茶湯は菜を一番二番と段々に出たすゆゑ。七菜のことなるべし。盧仝謝レ寄二新茶一歌に。一椀喉吻潤。二椀破二孤悶一三椀搜二枯腸一。惟有二文字五千卷一。四椀發二輕汗一。平生不平事盡向二毛孔一散。五椀肌骨淸。六椀通二仙靈一。七椀喫不レ得也。惟覺二兩腋習々淸風生一とあるによりて。本非の茶に多く七の數を用ふるなるべし。さて本非の茶は。賭の多くして財を費すゆゑ。紹鷗いまの茶湯はじめしなるべし

昆陽漫錄 終

自二大宛一移中植漢宮上。按。本草已具。神農九種當塗熄レ火去レ鶩末レ遠而魏文詔之。實稱二中國名果一。不レ言二西來一。是唐以前無二此論一。予嘗以爲下大宛之種必與二中國者一異上。故博望取レ之。段白所レ載必有レ所レ據。但失レ實耳。比戍二酒泉一。屢嘗取乾レ之名曰二瑣々一。比二中國者一差小。形圓而色正。亦其味甘美。非二中國者可一レ敵。則予所レ見庶或得レ之。今此種處々有レ之。獨蒲坂者勝。土人乾之。以資二貿易一。江南重レ之。稱二蕃葡萄一。曰。蕃云者豈承二襲瑣々之乾一歟。姑識レ之以俟二知者一と。この説にてみれば。葡萄の種多ければ。酒に造らる、葡萄あるべし

本非茶

太平記に曰く。佐々木道譽我宿所に七所を粧りて。七番菜を調へ。七百種の課物を積み。七十服の本非の茶を可レ呑。同書に云く。道譽百味の珍膳を調へ。百服の本非を飲みて。懸物如レ山積み上げたり。茶壺の狂言栂尾へ茶を求めに行く辭に。我等が主殿は。三國一の數奇者にて。非の茶を立てぬこともなし。一族の寄合に。本の茶をたてんと。多くの足をつかひて。略す栂の尾になりしかば。峯の坊。谷の坊。赤井の坊の帆風を帆風は茶名と見ゆ十斤ばかり買ひこんで略す。明惠上人茶を栂の尾へ植ゑしより。栂の尾の茶。名品にして。本の茶には栂の尾の茶を用ふるなるべし これにて本の茶は式多く。非の茶は式少くして。今の濃茶。薄茶と云ふが如きことしるべし。辻某の家の貞和の頃の殘本の中に。祇園社家記の殘册あり。その文左の如し

祇園社家記に。茶何種と云ふこと有レ之。或云。十二種。或有二四十種一。數ケ所有之

巡立本非茶次第

一番五日良　二番九日仲　三番七日仙
四番七日美　五番六日親尊　六番九日岐
七番十日秋　八番十日中　九番十一日妙
十番十一日中　十一番午十二日目　十二番午十三日菊

右會過毎日午刻者雖レ爲二五人一可レ被二取行一於二遲參之輩一者不レ嫌二親疎一不レ可二相待一之茶十種懸物二種可レ爲二當人沙汰一仍所レ定如レ件

康永二年九月五日

これは五日。六日。七日。九日。十日。十一日。十二日。の七日を會日と極め。今の十種香の如く。茶何種にてものこらず飲み當たる者を一番とし。それ

穴ありて。其穴より日中に星を見ると云ふは。徐光啓の說信ずべくして。豐の卦の日中見レ斗も。假說の言にあらざるにや（或の云く。琴々と書す）

御　柳

五雜俎曰。今閩中有二一種柳一。其葉如レ松。而垂長數尺。其幹亦與レ柳不レ類。俗名爲二御柳一。夫詩人之咏二御柳一不レ過二禁御中柳一耳。此則別是一種而强名レ之者也と。いまの御柳卽是なり

木　香　花

祕傳花鏡曰。木香の名。錦棚（本ノマヽ）兒藤蔓附レ木葉比二薔薇一。更細小而繁。四月初開レ花。每レ穎三蕋。極其香甜可レ愛者。是紫心小白花。若二黃花一。則不レ香。卽青心大白花者香味亦不レ及。至レ若二高架萬條一。望如二香雪一。亦不レ下二於薔薇一。剪レ條扦種。亦可。但不レ易レ活。惟攀條レ入レ土。雍泥壓護。待二其根長一自二本生枝一。外剪斷移栽卽活。臘中糞レ之二年大盛。群芳譜曰。木香灌生。條長有レ刺如二薔薇一。有二三種一花開二於四月一。惟紫心白花者爲レ最。香馥淸遠。高架萬條。望如二香雪一。他如二黃花紅花白細朶花。白中朶花。白大朶花一。皆不レ及と此のころ。近年渡りたりとて。木香花を見しゆゑ。これを記す（今の人呼二一種薔薇一爲二木香一。と李時珍の說あれば。木香花は明より玩ぶなり）

二十四孝

世の稱する二十四孝。その作者をしらず。續文獻通考に。元の郭居敬撰二二十四孝詩一。以訓二童蒙一とあれども。郭居敬はじめて二十四孝となしたるや。詩ばかり作りたるや詳ならず。郭居敬の全相二十四孝詩選をみれば。小傳と詩ありて。今の二十四孝と次序同じからずして。江革。仲由なくして。張孝。田眞あり。林道春云く。群書備數に曰。古今言レ孝者。有二此二十四人一。大舜。老萊子。曾參。閔損。江革。陸績。郭巨。董永。丁蘭。韓伯兪。劉殷。田眞。孟宗。王祥。陳娥。蔡姑。五武。子魯。義姑。姜詩。剡子。鮑一。黃香。趙孝宗元覺と二十四孝は名家の撰にあらずして。童蒙に訓ふるものゆゑに。諸書一ならざるべし

蠻　酒

阿蘭陀人蠻國の酒は葡萄を以て造ると云ふ。いまの葡萄にては酒に造らるまじと。甚だ疑はしけれども。蒙泉雜言曰。酉陽雜俎與二六帖一皆載。葡萄由下張騫

按ずるに萬暦四十七年は。元和五年にあたれば。この將軍樣は。台德廟にして。董伯起等を西土へ歸されしは。誠に廣大の御仁政しるべし。將軍樣と書きたるは。唐の張九齡が。我國の辭に從ひて主明樂美御德（すめらみこと）と書きしに同じきなり。さて氏の王の字ばかり有りて。名の字なきは。傳寫の誤りとみゆ。歸王は歸土の寫し違ひなるべきにや

氣筒

乾隆六年の條例に。査二京通各倉一。収二貯米石一。毎レ廒各置二氣筒伍個一。宣二洩米氣一。甚爲レ有レ益云々。毎レ廒應レ用二氣筒伍個一。毎レ個用二大小毛竹十五枚一とありて。その制詳ならざれども。これに依りて氣筒を考へ作らば。上下の益にして。物を費さず。誠に一大惠政なるべし。乾隆六年の條譜なれば。長崎へ來る唐山人に問にゞ其制知るべし。條例の文長きによりて略す。廣群芳例に。毛竹をのす

本

孔子家語王肅後序に。天漢後魯恭王壊二夫子故宅一。得二壁中詩書一。悉歸二子國一。皆所レ得壁中科斗本也とあれば。本と云ふこと久しきなれども。本の義あきらかならず

十二時蓮

江州野州郡田中村名主田中源兵衛が家に。十二蓮あり。慈覺入唐の時に持ち渡り植うと云ひ傳ふ。近頃乾たる十二時蓮を觀るに。一房に五六花ありて。白蓮と見ゆ。實は無しと云ふ。世には色々珍らしきものあるものなり。十二時の義は知るべからず

日中見星

徐光啓西洋暦曰。夫密室測量。蓋因二陽精炫耀一非二人目可一レ當。初虧時率多未レ見。或用二水盤一映照。則免二于閃爍一。又苦二動搖一。故善巧者設二爲此法一。用二素板一。作二圜界一。畫二分抄一。以承二日光一。則虧。復初終分數多寡灼然不レ爽下所レ取二于密室一者上。竅レ光自レ闇倍蓰。分明即眢井茂林。日中見レ星之儀。僧寮中或爲二幽房一。通隙以受二塔影一。亦是理也と。我國にても眢井の中より日中星を見ると云ひ傳へ。薩州鹿子島の城より半里ほどあるタンタトウと云ふところ。三町餘山へ上れば。平かにして岩屋あり。蛇の穴と云ふ。穴の口廣さ四間ほど。奥へ五間ばかり。往きて岩屋より上の山へ。まはり二托ほど。長さ二丈餘の

我國を待する輕重しるべし。崇德は。いまだ明をほろぼさゞる時の清の大宗の年號なり

燭

管子弟子職に云く。昏將レ擧レ火。執レ燭隅坐。錯レ總之法。橫二于坐所一。（總設二燭之束一也）櫛之遠近乃承二厥火一。（櫛謂燭盡察二其將レ盡之遠近一乃更以燭承二取火一也）居レ句如レ矩。（句謂二着レ燭虛言一居二燭於句一。如二前燭之法一。矩法也）蒸間容レ蒸。然者處レ下。（蒸細薪者。蒸之間必令レ容レ蒸。然燭必處レ下以焚也）捧椀以爲レ緒。（緒然燭燼也。椀所二以貯一レ緒也）右手執レ燭。左手正レ櫛。有レ墮代燭。（燒燭者有墮卽令其以代之也）交坐毋レ倍二尊者一。乃取二厥櫛一。遂出是去と。これにて古の燭を執る式みるべし

州軍

宋史に云く。命二期臣一出守二列郡一。號二權知軍州事一。軍謂レ兵州謂二民政一焉。函史に云く。州主レ民。軍レ主兵。或非也。地小不レ成レ州曰レ軍と。宋の制なれども。宋史より函史よろしかるべし

張文相書

此頃。明の張文相の書を寫したるを觀る。その文左の如し

欽着總鎭浙直地方總兵官中軍都督府僉事王爲下靖レ盜安レ邊以杜二商患一事上。照得丁巳年間。據下福建軍門海道申二報貴邦一送二回中軍官董伯起等一情上。具表申奏。朝廷乃知下北韃南返。忠臣無二故國之悲一。去珠復還。壯士沐中歸王之慶上。蓋甚盛心也。于是海禁從寬來往。商船得二以通行一。迨二今年肆月間一。福建軍門差レ官報レ府。沿海奸徒聚レ黨。却二掠商船値物一。以致二殺傷一。官兵知レ會二本府一。連レ兵合捕。因思此輩刼逃。必假二過洋客船一。混至二貴邦一交易。商名盜行眞僞難レ分。虎攘狐藏。憲典莫レ及。倘非二察剿一。是養レ奸貽レ患。皆有レ國者之耻也。爲レ此本府特差二標下中軍官一賚レ文前往二將軍樣麾下一。投レ遞乞行二令各郡一。將二所レ到商船一。逐一查理。及一切經年流落商人或賭博棍徒皆易レ爲レ盜者。悉宜細勘。俾三入贓一得レ實。卽嚴刑懲治上。庶上伸二三尺之王章一。而商利允沾下杜二兩邦之盜患一。而邊疆永靖益信下昔日惠二歸我人一之非上虛矣。伏惟將軍樣照レ允施行。須レ至レ文者

大明萬曆肆拾漆年陸　日承行典吏張文相

照會

述一等語。平差又言。俺等不レ日當回棹轉二報大君一。愼勿二等閑視一レ之。說罷卑職等多方開諭。令三其且待二朝廷分付一。等情其報據レ此切照。臣等伏見。諸臣馳報內事。彼方隆二創佛宇一。文具是尙慶幸生レ男。撫弄爲レ樂。其在二鄰國一之道。惟當下順二適其心一。助中成其事上。實合二機宜一。且其所レ欲者。俱非二難レ辨之物一。況倭情巧詐褊急多張二恐嚇之語一。今若不レ許。亦慮先二其權心一。姑依二其願一。許二其准請一。因レ係二是倭情一。合無備將前回移二咨該部一。以レ便轉奏。允爲二便益一。等因二其啓一。據レ此爲レ照二得倭差所一レ言。係二是邊情一。理宜二轉報一。煩乞二貴部一。査二照咨內事意一。轉奏施行。右崇德八年朝鮮國王李倧具咨達レ部。咨云。據云。議政府啓稱。去歲二月對馬島倭八遣二平城幸一。持レ書至二東萊一云。日本國大君年四十以レ無レ嗣爲レ憂。幸于二去年一生レ子。命名二若君一。此國中之大慶。班應下遣レ使以二喜音一上中聞貴國上。又謂日光山申康廟後新建二一祠一。此皆大君之虔誠。不レ忘二其初心一。貴國亦當下備二香燈祭器等物一以垂中永久上。雖二是我國諸物皆有一。但助レ自二貴國一。卽爲二鄰國一生レ子有レ慶。與二夫建レ廟祈一レ嗣、亦當レ從二其所一レ欲。因將二此情一。已曾達レ部轉爲二奏聞一。乃于二去

年四月初一日一得二其兵部咨一云。王遣レ使來二書本部一。一一奏聞。得旨詳二倭國之言一。雖レ無二大惡一。寔有下傾二壓朝鮮一之意上。旣修二鄰好一。王當下量二其可否一而行上。勿レ爲二衆之撓亂一。是以欽二奉上命一。向彼來使許下遣レ人致上送二建レ廟儀物一。其後本年于二正月初七日一。東萊副使鄭維城遣レ人來報云。去年十二月二十日倭國使藤直純來言。五月內約三我使至二江湖一。又言。王備二祭物一。當二遣レ人來祭一。致二書若君一。必同下大君式樣上。寫二朝鮮國王四字一。押二印于上一。再押二印白紙二張一。以爲二我用一。臣等想。彼國大喜建廟已許二遣レ使送禮一。今應三撰レ使送禮以赴二前約一。申康廟祭物已送往。當三往祭之。一次以盡二鄰國之禮一。但若君係二幼子一。原無二致レ書相問之道一。復索二空紙押印一。未レ審二是何主見一。皇上曾諭。若二東萊副使幷通官一。至レ不レ可レ輕二許レ之。着將情事達二于部一。臣想。遣レ使送禮。亦鄰國交好所レ宜レ然。彼國勢較レ前稍變。借レ此可三以觀二其形狀一。是以令レ部。選二禮部參議尹順之弘文館衙門典翰官趙絅吏部正郎官沈旭之等一。于二本年二月二十日一。將二祭レ廟各色器物一。往交二與倭國來使一。以レ此移二咨貴部一。奏聞。以レ便遵行。兵部轉奏 右崇德八年 これにて朝鮮の

本倭言我國大君年將四十。每以嗣爲憂。上年八月始生一男。名之曰若君。大小官員咸聚江戶。到戶之時。大君言於島主曰。我以無功無德之人。承襲關白。三世於此。年將四十。尙無一子。惟得罪先世。是俱幸而天佑神助晚得此男。朝鮮聞之亦必喜悅矣。有一執政。言于島主曰。此是日本國之大慶。朝鮮必有遣使致賀之擧。衆官齊聲並應曰。此言誠是。仍著島主通知。故島主差俺來者。且曰。光山有申康廟堂。而廟堂之後新刱社堂。梁柱四壁皆以玉石營造。其爲華麗萬古无比。有守僧二人。其一卽天皇之子也。其一年一百二十歲。申康生時親信者也。上年冬大君率衆官。親往焚香。後與衆官及兩僧。會坐相賀。老僧言曰。今爲申康營建社堂。而康爲朝鮮。殲滅秀吉。誠好誠信於今四十餘年。朝鮮若聞大君爲申康致誠追遠之事。則必相賀之禮。又有送物留迹之擧。今島主將此意。報知朝鮮。請得國王殿下親筆一紙及諸臣讚誦詩篇。以爲萬世流傳之寶。至如大藏佛經。乃是寺刹極重之書。大鍾香爐燭臺花瓶等器。雖是我國易得之物。若得朝鮮所製以爲社堂傳

玩之寶。此亦朝鮮之功德也。將此事意使島主轉達朝鮮如何。衆官皆應曰。此言極是。又言。上年冬執政等問於島主曰。近聞漢人商賈之言朝鮮與淸國好和之事。島主何不報知於大君耶。島主答稱。朝鮮旣與淸國和好別無他情。執政但唯々而已。所謂數件乃此事也。等情據此。續據接慰官李泰運東萊府節度使丁好恕等聯名馳報。卑職等就于本倭館。所接見茶罷後。本倭所言大略與洪喜男等。相同手本。卑職等答稱。貴國大君生子。果是慶事。大藏經乃壬辰兵火之後。經板散失。今難印出。大鍾等器。我國原無銅之地。如此大器本難鑄成。本倭回言。銅蠟當自鄙島量入送來。但欲得貴國一鑄。以爲流傳之物耳。卑職等再三搪塞而止。如國王親筆。亦難准請云。則本倭多有慍色曰。島主欲爲朝鮮永結和好以爲兩國安寧之計。有此數事相懶而終不之許。則從前相好之意盡爲虛地。悉聽汝意爲之。其恐嚇之狀難以形容。其書契有本邦雍容垂拱云。八月上旬若君慶誕之日。誠懽仰太平盛事莫大於此。貴國亦不勝歡愜也。先奉賀緘以聞。他詞俱令平城幸口

鮮國書曰。日本國對馬州太守。拾遺官平義成奉書朝鮮國禮曹大臣閤下。維時暑日欝抑台侯若何。恭惟本邦益固金湯。貴國彌安磐石。千里其數一也。先是乙亥載。遣去使臣。同時以貴國答書之情由。稟奏於東武執事。即令擧舊例。可圖議之。休茲命以受矣。自今更始須差使舡。故姑爲先容。仍公歴土宜具在別幅。伏冀。采納總悉差使口布。爲國順時自愛。惶恐不宣。寛永十六己卯歳五月。又單開金屛風一雙。茶臺子一個。銀臺天目二個。提瓶二個。金文紙二百片。（右崇德四年）朝鮮國王李倧移咨到部咨云。據議政府狀啓。本年二月初十日備慶尙左道水軍節度使宣若海馳報。節該本月初四日。准釜山節度使鄭楷塘報。該石城軍丁貴生告福。初三日下午時。有異樣船一隻。行至倭島外洋。遭東北颶風大作。泊於多大浦鎭前。等情卽着通事崔義告。馳往船處。詳探事情。去後回據本官口報本差。係是倭差平城幸坐船封進押物人一名。侍奉二名。伴從三名。梢工四十名。盤問得本。倭稱。有公幹。出來事若得成。有許首座滕智純等。亦當從後出來。事若不成不必來了。卑職又問所幹何事。本倭回說本國大君新生一子。此是莫大慶事。俺爲此出來多少說語。當俟洪李兩通事至面悉之。不可造次說破。終未明言。所賚書契亦不傳授。等情准備具啓。據此行據本府狀啓。節該合差禮曹官一員與通事官洪喜男李長生等。前往釜山。細問本倭出來情由等。因據此卽著本府。別差禮曹接慰李泰運馳報。卑職蒙差馳至東萊。與本府節度使丁好恕釜山鎭節度使鄭楷。一同會議。據洪喜男李長生崔義等手本。卑職等先入本倭館。所設茶後探問出來之意。則本倭所稱大君久無嫡嗣。上年八月生男。此是本國大慶理宜傳報貴國。請遣賀使。近因長溪漢船。得聞淸國消息。而又有數件事。上年十月自江戸起行。前來卑職等回言。隣國生男。固是慶事。淸國消息未知何指。數件事未知亦何。本倭言大君生子。遣使。惟在貴國處分。數件事當從容言之。及卑職等索其書契一觀。本倭言從江戸。起身時。島主與大君及僧人道春一同緘封而來。進茶之日。當爲呈覽。卑職等再三問之。更無言語。等情據此續據東萊府節度使丁好恕馳報節該洪喜男李長生等手本。卑職更爲就館探問。

五陽極也。易道虧レ盈。故曰。醜二三陽爻五一。
於レ是五子一子短命
何以知二短命一他以レ故也
未レ詳恐有二脫誤一

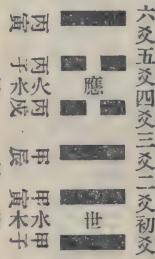
朝鮮王李倧咨

大淸紀事曰。朝鮮國王李倧遣二倍臣一。賚レ咨赴二兵部一。求二代題一。幷以二日本國書一送呈。咨曰。朝鮮國王爲下傳二報倭情一事上。本年八月初六日。東萊府使李民寏牒呈。據二慶尙道觀察使李命雄狀啓一。節該七月二十九日。倭差二平智連藤智純等一。持二島主書一。自二倭京一來。卽遣二譯官洪喜男李長生等一。就レ館相見。平智連等稱。去年大君有レ疾。久不レ聽レ政。今春始瘳。山獵舡遊與レ前無レ異。島主輒得二陪侍一。連被二恩賞一。此誠一島之榮幸而大臣左右用レ事之人。需二索貴國土產一者。甚多。稍違二其意一。讒謗隨レ之。此島主之深患也。自二調興元方兩人差遣停廢一以來。貴國土產其數無レ多。且唐貨交易之路又絕。大君左右所レ求無二以應一レ之。調興元方兩人奉レ使。代以二麟書堂等三人及島主官下三人一。更番乘レ船來往。乙亥以後。求レ給之物。一一追給。然後兩國可レ保二無事一矣。薩摩州太守主レ和二疏球一。肥前州大守主レ和二南蠻一。每歲所レ得不レ貲。而島主名爲レ主レ和二貴國一。所レ得零星視二二州一何如哉。自二貴國被レ兵之後一。日本國中訛言甚多。年少喜レ事之輩。希二望功賞一。造二不測之言一。處々蜂起。而島主竭レ力周旋。以爲二貴國誠信一。貴國何以盡知レ之哉。島主謂二俺等一曰。今所レ請送レ舡。事若未レ蒙二許可一。則不二必强請一。卽速回レ棹。直告二大君一。庶免下主レ和二朝鮮一之責上。恐喝之言不二一而足一。等情具啓。緣レ此爲レ照。所謂大君者乃日本國君之號。所謂調興者乃島主之副官之名。所謂元方者乃島主書記之名也。初約レ和時。本國授二兩人章服圖書一。許令下每歲送レ舡來致二胡椒蘇木等物一上。本國因以二土產一估。乙亥年間。調興元方得二罪於國君一。流二配遠方一。而島主猶望二前給之物一。本國以爲兩人得レ罪遠謫。則仍レ舊送使事涉レ無レ據。須待二其代差出一方可レ許也。自レ此絕不二復言一。忽訴二於國君一。有二此來請之擧一。視二其書詞一。文字僻澁。殆不レ可レ曉。而倭差所レ陳情涉レ叵レ測。差二令邊臣一。照レ舊施行以冀下彌二縫一面一。戒飭防守以備中不虞上。此後如別有レ所レ聞。亦當二隨卽咨報一。緣レ係二倭情一理宜二轉聞一。煩乞二責部一。照二詳咨內事意一。轉奏施行日本國平義成與二朝

謂捨金宣盒。卽唐之創金也と。按ずるに。輟耕錄にては。創金は今のチン金彫とみゆれども。通雅の說の如く。今の創嵌なること明なり。品字箋に俗以レ漆內雜レ金謂二之鈒金一とあれば。俗にチン金彫を鈒金と云ふとみえたり

大畜艮之二世

史記商瞿傳の正義に。子曰。卦遇二大畜艮之二世一。九二甲寅木爲レ世。六三丙子水爲レ應。世生二外象一。生家來爻生二互內象一。艮丙子應有二五子一。一子短命。顏回云。何以知レ之。內象是本子一艮變爲レ二。䰠二三陽爻五一。於是五子一子短命。何以知二短命一。他以レ故也とありて解しがたし。考ふること左の如し。尙博物の士に問ふべし

遇二大畜艮之二世一

六爻	五爻	四爻	三爻	二爻	初爻
▅▅▅	▅ ▅ 應	▅ ▅	▅▅▅	▅▅▅ 世	▅▅▅
丙寅	丙子水	丙戌火	甲辰	甲寅木	甲子水
	納音水		納音土	納音木	
			辰數五 土數五		

斷易山天大畜謂二之艮土二世一

九二甲寅木爲レ世。六五丙子水爲レ應

是以二納音一言也

世生二外象一

九二木之應二六五水一。十曰三世生二外象一。外象外卦也

生象來之生二互內象一

未レ詳。或曰。是以二十干一言也。生互猶レ言二互生一也。生象指二六五丙一也。九二木之應二六五水一。而水生レ木。六五丙來應二九二甲一。而木生レ火。故曰二互生一也。內象內卦也

艮丙子應有二五子一

類書纂要曰。六甲之中。惟甲寅無レ子。故曰二五子一 六甲。甲子。甲戌。甲申。甲午。甲辰。甲寅也。九二甲寅之應二六五丙子一。故曰三應有二五子一

一子短命。顏回曰。何以知レ之。內象是本子

是以二十二支一言也。指二內卦九二子一也。卦從レ下成。故曰二本子一

一艮變爲レ二

斷易卦遇二大畜艮土二世一。初九九二變爲レ艮

䰠二三陽爻五一

未詳。或曰。三陽爻。指二九三一也。九三一爻不レ變。以レ陽居二陽位一。而甲木爲レ春。辰數土數皆

既一。而日光四溢。形如二金環一。故日無下食二十分一之理上。雖レ既亦止二九分八十抄一。（西洋の說の如く。日行高くば。金環食なく。日行卑くば金環食あるは。必然の理なり）春秋桓公三年七月壬辰朔。日有レ食レ之。既。杜註曰。曆家之說謂。日光以二望時一。遙奪二月光一。故月食。日月同會月奄レ日。故日食。食有二上下一者。行有二高下一。日光輪存而中食者。相奄密。故日光溢出と。杜預の時いまだ金環の名なけれども。日光溢出とあれば。西土の曆家も精密なりと云ふべし

阿咀吒

堀本一甫薩州より得たりとて。琉球の阿咀吒實（我國にては下略して阿陀と云ふ）を惠まる。速に種ゑたれとも。久しき實なるにや。芽を出ださず。大さ圖の如し

總の長一寸六分。毛の長さ一寸。圍さ三寸六角一。

先年琉球より來り。世に玩ふ阿咀は。赤花を開き。かくの如き實あらず。中山傳信錄をみれば。女木花なくして實あり。其文左の如し

阿咀吒葉長。旁有レ刺。久成レ林。連蔓堅利可レ爲二藩籬一。葉可レ造レ席。根可レ造レ索。開花者爲二男木一。花白若レ蓮。瓣合尖左右迸疊十餘朶。直上五椏。藥露如レ杖。長數寸。芳烈如二橘花一。女木無レ花結レ實。大如レ瓜。膚紋起レ針。皆六稜可レ食云。即波羅蜜別種。粤東亦有レ之。名二鳳梨一。（琉球には白花のものありとみゆ）

鎗金銀法

輟耕錄曰。嘉興斜塘楊匯髹工。鎗金鎗銀法。凡器用什物先用二黑漆一爲レ地。以レ針刻二畫或山水樹石。或花竹翎毛。或亭臺屋宇。或人物故事一。一一完整。然後用二新羅漆一。若鎗金則調二雌黄一。若鎗銀則調二韶粉一。日曬後角桃桃嵌二所レ刻縫一。以二金薄或銀薄一。依二銀匠所レ用紙糊一。籠罩。置二金銀薄一。在レ内逐旋。細切取鋪。已施二漆上一。新綿揩拭牢實。但著レ漆者自然黏住。其餘金銀都在二綿上一。於二熨斗中一燒灰。甘鍋内鎔鍛渾不二走失一。通雅曰。以二金銀絲一。創レ器曰レ商。謂二鑲嵌一也。元美曰。趙希鵠云。夏時器多相嵌。訛爲二商嵌一。用修以爲二鑲嵌一。智謂本商嵌蓋古謂、刻爲レ商。商金商銀古之遺稱也。張懷瓘書錄言。三伏鈿金。今之所

識因問レ之。題レ詩云。花如二木槿一花相似。葉比二葵蓉一葉一般。五尺欄杆遮不レ盡。尙留二一半一與レ人看。外國又有二此能レ詩者一と。これにて我國の人。詩を能くすること知るべし

沙門島

甲申雜記曰。沙門島舊制有二定額一。過レ額則取二一人一。投二之海中一。馬默處厚知二登州一。建言。朝廷既貸二其死一矣。卽投二諸海中一。非二朝廷之本意一と。これ經國に志ある人は知るべきことなり

鷓鴣斑香

桂海香志曰。鷓鴣斑香。亦得二之于海南一。沈水蓬萊及絕好箋香中槎牙輕鬆色褐黑。而有二白斑點一。點如二鷓鴣臆上毛一。氣尤清婉。似二蓮花一と。いま白斑點あることを云はざれば。鷓鴣斑疑はし

分金

奚囊橘柚曰。車胤讀二書于鼓樓山一。一日行樂次得二金于眢井中一。求二其主一不レ獲。因集二貧民百餘人于石室一。分二與之一。至レ今其地有二分金洞一と。これ宜しきしかたなり

蝦蟆

東齋筆記曰。沈文通守二杭州一。禁三民食二蝦蟆一。終二三年一。人不二敢食一。蝦蟆亦絕不レ生。及三文通代去一。禁弛而蝦蟆復生と。いまも領主地頭。その地の出産の物を禁じて。民と與にせず。獨り利を專にすれば。出産の物自然に少く。禁を弛べ。民と與にすれば。その物また多く生ず。小事といへども。誠に天の民を惠む一端とみえたり

毦

枕譚曰。毦音餌。一名二兜鍪一。劉備好二結毦一と。諸書毦の註明ならざるゆゑ。これを載す

五絃琴

文獻通考曰。倭國其樂有二五絃琴笛一。每レ至二正月一日。必射戲飮酒爲レ樂。隋大業中嘗遣二裴世清一。使二其國一。其主設二儀仗鼓角一。歌舞迎レ之と。これにて見れば我國五絃琴ある事久しと見えたり

赤繡毬

花疏曰。赤繡毬倭國中より來ると。これにてみれば繡毬の赤花は西土になしと見ゆ

金環食

明史曰。日體大二於月一。月不レ能レ盡二掩之一。或過二日

地の名のロウニウェイキデバルマートと云ふ者の云く。一角獸二疋メッカー（アラビヤ國の府の名）ケルク（阿蘭陀にて大家をケルークと云ふ）の傍の厩に繋きありしを見たり。大きなるは三十月を經たる馬の如く。額に一角ありて。長さ三アイラ（曲尺六尺八寸餘）小さきは一年を經たる駒の如くにして。一角の長さ手を四束ばかり（阿蘭陀の尺二尺の積り。阿蘭陀は手指を以て尺寸の名とす）この獸の黑色にて頭は鹿の如く。頸短く毛髮少く。鬣短くかたかたへたれ。足やせて牝鹿の足の如しの蹄。さき少しわれて。羊の如く。右の足の毛多し。」一角獸女兒を好み。香を悅ぶ。いつの頃よりか獸の角にあらず。北海の魚の一角なりとも云へり

この說も一定ならざれば信すべからず。敦書あらはす所の和蘭櫻木一角獸說の如く。山獸海獸知るべからずとなす。よろしかるべし

按ずるに。此圖阿蘭陀本草（阿蘭陀にて本草をコロイトブウクと云ふ）にあれども。山獸海獸知るべからざれば。是亦信ずべからず

瞻軍

劉元作守レ汴。或言。相國寺佛有レ汗。元佐遣往持二金帛一以施。繼遣二其家屬一往禮レ之。翌日復起二齋場一。由レ此士庶競集輸施甚衆。乃令下將吏籍中其物上。十日乃閉レ寺曰。佛汗止矣。所レ得數十萬盡贍レ軍と。これよく權時の計をなすと云ふべし

耀蟬

荀子曰。夫耀レ蟬者。務在下明二其火一振中其樹上而已。火不レ明雖レ振二其樹一無レ益。註曰。南方人照レ蟬。取而食レ之と。賈誼新書の所謂耀蟬はこれなり

城築

雪舟誣話曰。彭大雅知二重慶一。大興二城築一。僚屬不レ從。鼓曰。不レ把レ錢做二錢看一。無三不レ可レ築之理一。而城戌僚屬。乃請立二碑記一之と。これ能く人情を知ると云ふべし

蜀葵花

西野雜記曰。成化中倭人入貢。見二欄前蜀葵花一。不レ

者也。遠遊之人不レ可レ不レ知と。按ずるに。猪脬は瓢より輕く。特に長崎に多き物なれば備へたきことなり

含生草

證類本草曰。含生草主ニ婦人難産一。口中含レ之立愈。亦咽ニ其汁一。葉如ニ卷柏一而大。生ニ靺羯國一。其葉煮レ之。不レ熱無レ毒と。阿蘭陀持ち來り。我國安産草と云ふもの。卽ち含生草の類なり。阿蘭陀にては。ロスハンエルコと云ふ（七八十年前に。阿蘭陀より來る。安産草は大く。其後中絶して。近年渡る安産草は小さきなり）

倭扇

蓬窓談錄曰。余至レ京有ニ外國道人利馬竇一。贈ニ予倭扇四柄一。合レ之不レ能ニ一指一。甚輕而有レ風。又堅緻道人又出ニ番琴一。其制異ニ于中國一。用ニ銅鐵絲一爲レ絃。不レ用ニ指彈一。只以ニ小板一案。其聲更淸越。又有ニ自鳴鐘一。僅如ニ小香盒一。精金爲レ之。一日十二時。凡十二次鳴亦異物也と。此倭扇は今の扇より骨至りてうすく。地紙は西土の地紙に比べて堅緻といへば。今の地紙と同じかるべし。先年觀たる阿蘭陀のカラーヘシン木匣の横へ小本をならべ。竪に鍮金の針金を絃とし。指を以てならべたる小本を推せば。推したる本の先。絃へあたりて聲をなす。琴より大きく。絃も多けれども。馮時可が觀たる番琴はカラーヘシンの類なるべし。さて如ニ小香盒一とあれば今香盒時計と云ふも。本つく所あり

樹衣

上州の深山より出づる木海苔は。ぶなの木の苔なり。本草綱目に。霏雪錄を引きて。金華山中多ニ樹衣一僧家以爲レ蔬。味極美とあれば。西土にても樹衣を食ふこと知るべし

一角

阿蘭陀大譯今村源右衞門。阿蘭陀の諸書を考へて。一角の說を著し。一角獸の圖をのす。その略に云くハウルスヘ子ートスと云ふ者の書に曰く。韃靼のガム（韃靼にて國王のことをガムと云ふ）一角獸を畜ふ。又ランフリイの都にて。象の小き程なるをみる。形。頭べ平く野猪の如く。舌尖り。釣針の如く。眼は犀に似たり。パウルスヨーヒユスケ云く。一角獸は灰色小馬の如く。頭に髮多く覆ひ。羊の如き鬚ありて。額に長さ二コビト（今の曲尺三尺二寸餘）程の一角あり。又ホノニイ

事にして。種を遺さゞるほどにあらず。平江記事曰。大德丁未吳中蟹厄如レ蝗。平田皆滿。稻穀蕩盡と。これにて越語の稻蟹は。蟹厄たること明なり。且吳は古より蟹厄ありと見ゆ

毀　廟

穀梁傳。壞廟之道易レ檐可也。改塗可也とありて。壞廟は毀廟にして。毀廟はのこらず。廟を毀つにあらざることと見るべし。文獻通考に。唐の時に毀廟を軍營となしたることあれば。後世も穀梁の說の如しと見えたり

野　氣

淸書筆談曰。廣野中。陽燄望レ之如ニ波濤奔馬一。及海中蜃氣爲ニ樓臺人物之狀一。此皆天地之氣。絪縕盪滴回薄。變幻何往不レ足。故知萬象者一聚之氣。兩間之幻有也と。この野氣は。いま武藏野にある水影の類と見えたり

蠟

僧家所謂。伏蠟者。謂ニ削髮之後受レ戒。若或斷ニ酒色若干件一。每歲禁足。結夏自ニ四月十五日一至ニ七月十五日一。終ニ西方之敎一。結夏之時隨ニ其身之輕重一。以レ蠟爲ニ其人一。解夏之後以ニ蠟人一爲レ驗。輕重無レ差。以爲ニ驗定而無ニ忘想一。其有ニ忘想一者。氣血耗散心輕ニ於蠟人一矣。湯朝美作ニ本然僧塔銘一。寫作ニ伏臘之臘一。蓋未レ詳レ此也と。いま佛氏の年臘。法臘等みな臘の字に作る。別義あるにや

茶　實

閩部疏曰。閩所レ產松杉而外有ニ竹茶烏臼之饒一。竹可レ紙。茶可レ油。烏臼可レ蠟也と。我國はいまだ茶の實の油をとらず。油を笮せば。是亦民を惠むの一端なるべし

代墨村

上野國群馬郡代墨(マイズミ)村は。黛の一字を二字となし。黑を墨と讀みがたき故。土を加へたりと見ゆ。三州の山高山村も。元來嵩山村と書きたれども。後に嵩の字二字と成りたり。畠山の畠は。白田の二字一字となりたるなり。白田の畑のことなり

乾猪脟

春溪暇筆曰。大宗以ニ北兵一渡レ淮時。無ニ一葦之楫一。有レ人ニ於囊中一。取ニ乾猪脟十餘一。內ニ氣其中一。環在ニ腰間一。泅レ水而南。徑奪レ舟以濟ニ北軍一。猪脟蓋預備レ之

來王之職。其狀貌各不同。然皆野恠寢陋。無華人氣韻。如丁簡公家凌煙功臣孔子七十門人小樣。亦唐朝粉本形性態度人々殊品。畫家蓋以此爲能事也。此圖題字殊妙。高昌等國皆注云。貞觀某年所滅。又落筆氣韻閻立本所作。職貢圖。亦相若得非立本摹元帝舊本乎。或以爲梁元帝所作傳至貞觀後人因事記於題下。亦未可知。然畫筆神妙不必較其名氏。或梁元帝。或閻立本皆數百年第一品畫也。紙縫有褚長文審定印章長文鑒書有名于古。定然知非此不凡也。書譜曰。古人畫稿謂之粉本。前輩多寶蓄之。蓋其草々不經意處。有自然妙と。これにて古人粉本を貴ぶこと知るべし

讀書

天爵堂筆餘曰。六經二十一史。文章有茲。經濟亦有茲。所當讀之書盡于此矣。此外即諸子亦經史鼓吹耳。讀固可。不讀不妨。近日學者務旁求百家雜撰。尤沈酣世說。以爲奇。而質以經史。茫然不能應亦奚爲と。これ偏論に似たれども。學者の知るべき所なり

負菜而歸

比事摘錄曰。張詠爲崇陽令。嘗坐城門下見里人有負菜而歸者問。何從得之。曰。買之市。詠怒曰。汝居田里。不自種而食。何惰邪。笞而遣之。此等小事史何足書。然百姓因此。知上之敎。勤于農殖家給人足。公之爲惠則大矣と。これにて上に忠あり。下を惠むの人は。小事といへども。のこさゞることと見るべし

問民疾苦

畜德錄曰。周文襄公忱巡撫江南時。嘗去騶從入田野。與村夫野老相語。問民間疾苦。每坐一處。使聚而言之。惟恐其不得盡と。これにて志ある人の素あること知るべし

稻蟹

越語曰。今其稻蟹不遺種。韋昭註曰。稻蟹食稻也。この註にても稻蟹あきらかならず。函史に。蟹。秋末稻熟時。乃出各執一穗。朝其魁。晝夜鬻沸望江奔。既入江則形稍大於舊。自江復趨海。如赴江狀。入海益大。或曰。持稻以輸海神。八月開其腹。有芒長寸許者。稻芒也とあれども。年々の

陽分巡副使許完。都指揮張浩一。閉レ關絕レ貢。振二中國之威一。寢二校寇之計一。事方議行。會下宗説黨中林望古多羅逸出之舟。爲二暴風一飄至中朝鮮上。朝鮮人擊二斬三十級一。生二禽二賊一以獻。給事中夏言。因請逮赴二浙江一。會三所司與二素卿一雜治。因遣下給事中劉穆御史王道上往。至二四年獄成一。素卿及中林望古多羅弁論死。繫レ獄久之皆瘐死。時有二琉球使臣鄭繩歸一レ國。命傳二諭日本一以禽二獻宗説一。還二袁璡及海濱被レ掠之人一。不則閉レ關。二十六年其王義晴遣二使周良等一。先レ期來貢。用レ舟四人。六百泊二於海外。以待二明年貢期一。中臣沮レ之。則以レ風爲レ解。十一月事聞。以二先レ期非レ制。且人船越レ額。敕二守臣一勒回と。この論文は是時のことなり

龍骨

先年阿蘭陀人へ龍骨を見せて尋ねしに。阿蘭陀人ステインと云ふ（ステインは石なり）本草彙言に云く。龍骨石燕石蟹之類也と。阿蘭陀人の説と合ふ

茆

品字箋に云く。茆今作二草茆字一非也と。これにて明よりして誤りて。茅屋等に茆の字を用ふことしるべし

青錢

乾隆五年改二鑄青錢一條例曰。鎔試以二青錢四串一計。重三十觔内有二紅銅十五觔。白鉛十二觔。七兩二錢。點銅九兩六錢。黑鉛一觔十五兩二錢一。俱鎔二化三十觔之青銅一。必須外加二黑鉛十七觔一。鎔計始可下將二青銅一投入鎔化上。合計鎔試一爐。分二得紅銅五觔八兩。黑鉛脆錫十七觔一。其餘盡行二折耗一と。（文長き故全文をのせず）乾隆の錢も康熙の錢の如く。鍮金なりと云ふは。青錢は卽ち鍮金錢のことなるべし。白鉛。點錢。脆錫知得すといへども。意ふに白鉛はしろめの類。點銅はとたんのこと。脆錫は白鉛。黑鉛。點銅の交りたるものにや。猶博物の士に問ふべし。我國の青錢青銅と云ふは。惡錢に對して云ふことにて。精錢の精を省きて。青錢青銅と云ふと見ゆ

番客入朝圖

某の家に番客入朝の圖の屛風ありと聞く。按ずるに書品に梁の元帝の書の三十五國入朝の圖あり。其文左の如し

梁元帝爲二荊州刺史一。日所レ畫粉本魯國而上。三十有五國皆寫二其使者一。欲レ見二胡越一家要荒種落共

心一。而氣以繹二吾說一。遲以二數月一及レ期以入。是使三彼此俱免二於罪一。而華夷永孚二於休一也。汝亦何憚而不レ從乎。汝等其試思レ之。汝等其試思レ之

（初五の二字本書朱書）

嘉靖二拾陸年陸月　初五日諭

寧波府

按ずるに。王代一覽に。大永三年。細川高國商船を大明へ遣す。宋素卿と云ふ者を使者とす。素卿は元來唐人也。日本へ渡り。細川政元にちなみ。法住院殿へも謁し。其使者となり。大明へ渡り。歸朝して日本に住居し。高國に從ひけると也。此時大内介義興も。周防より商船を大明へ渡す。宗說と云ふ使者たり。寧波府にて素卿と宗說と。先後を爭ふ。宗說は素卿より先に着岸すれば。先に出づべきを。素卿賂を寧波府の奉行に與へて。先出で、奉行に謁す。宗說大に怒りて。其召し連れたる者共をかたらひ。寧波府を燒き。奉行を殺して濫妨す。素卿逃げ匿れしを。大明にて捕へて禁獄す。宗說は事故なく歸國す。是より日本の海賊年々寧波府の近邊を濫妨す。天文十六年二月。大内介義隆進貢船を大明へ遣す。鹿苑院殿の比より。大内介代々異國往來のことを掌りて。勘合の印を預り。周防國にて船を作り。使僧を發船せしむる例なり。明史日本傳曰。宋素卿鄞縣朱氏子。嘉靖二年五月。其貢使宋設抵二寧波一未レ幾。素卿偕二瑞佐一復至。互爭二眞僞一。素卿賄二市船太監賴恩一。宴時坐二素卿於宗說上一。船後至。又先爲二驗發一。宗說怒與レ之鬪。殺二瑞佐一焚二其船一。追二素卿一至二紹興城下一。素卿竄二匿他所一免。凶黨還二寧波一。所レ過焚掠。執二指揮袁璡一。奪レ船出レ海。都指揮劉錦追至二海上一戰沒。巡按御史歐珠以聞。且言據二素卿狀一。西海路多羅氏義興者。向屬二日本一統轄。無二入貢例一。因二貢道必經二西海一。正德朝勘合爲レ所レ奪。我不レ得レ止以二弘治朝勘合一。由二南海路一起程。比レ至二寧波一。因詰二其僞致一啓レ釁。章下二禮部一。部議。素卿言未レ可レ信。不レ宜レ聽二入朝一。但釁起二宗說素卿之黨一。彼レ殺者多。其前雖レ有二投番罪一。已經二先朝宥赦一。毋レ容レ問。惟寧諭二素卿一還レ國。移二咨其王一。令下察二勘合有無一行中究治上。帝已報下。御史熊蘭給事張翀交章言。素卿罪重不レ可レ貸。請幷治二賴恩及海道副使張芹。分參守政朱鳴

先朝舊例而
上之拾捌年所二申命一之者也。比來爾國往々違レ例求レ
貢。釋壽光以二廿參年一至。淸粱等以二廿伍年一
至。其蔑二棄
王章一敢無二友紀一亦甚矣。節二經臺憲一劾
奏欲レ從二重典一。賴二我
聖明寛宥一。姑置勿レ問。但將二沿海將士一。但置二於法一
仍戒。自今貢期不レ及。及人船過レ額者。徑自
阻回不レ容レ入レ港。有レ違者定以二軍法一從レ事。
此則近年
題准事例。視レ昔又加レ嚴矣。爲レ照二汝等一。以二拾捌
年一入貢。至レ是已及二玖年一。稍待二半年一。則貢期
及矣。然信之一字。華夷之所三共守 以成二其義一
者也。苟違二大信一雖二小選一不可。而況於二壹
年一乎。且汝國之違レ例求レ貢至レ是已參度矣。
而人船又過レ額。萬一聞二於
朝廷一。非二惟不レ得二入貢一而
聖意難レ測。汝之貢路恐自レ是其理絕。吾爲レ汝計。莫
レ若下姑廻二汝棹一暫歸二汝國一將二多餘人役一。盡
行二裁減一。候レ至二明春一。遵レ例來貢。貢惟以上時。

則汝等爲二守レ信之人一。而汝國爲二秉レ禮之國一。
聖心嘉悅必倍二尋常一。非三獨容二汝之貢一。而且將レ有レ大二
賚於汝一矣。久安長寧之道。何以易レ之。且汝國
遣レ使非レ時。則其失レ不レ在汝也。然汝心兢々
猶懼レ不レ免二於刑戮一。今汝非時求レ入。則失在
レ汝矣。而吾容二汝徑入一。則其在レ失。又在レ吾
矣。吾與レ汝雖レ欲レ不レ懼。亦焉得而不レ懼也。
豈謂二
堂々天朝號令之嚴。曾小夷不レ苦乎。矧
今上文武神聖首出二庶物一。廟謨雄斷。度二越千古一。雖二
窮髮之比一。亦知三中國之有二
聖人一也。汝國越左二東鄙一。居二我南荒一。其去二中國一。不二
數千里一。而近我中國有
レ聖而不レ知レ之。是無レ心也。而不レ聞之レ是無レ耳也。
安有下無レ心無レ耳而可二以爲一レ人者上乎。安有下有
二人心一。而不レ知レ遵二
聖人之訓一者上乎。且汝雖二異域一。亦爲二吾黨一。汝今慕
レ義遠來。吾豈不二汝念一。但緣下貢未レ及レ期。人
・船過レ額。例應中阻回上。若容二汝徑入一。非二惟吾等
得レ罪。而汝等亦或不レ利焉。若能姑置二其成

諸軍或用二西域金銀之錢一。而不レ禁と。これも一時に通用することにて。定めたる通用にあらず。これにてみれば。歐羅巴の地方は金銀の錢を使ふことは久しきなり 宋史燕王德昭傳曰。三歲作二弱弓輕矢一。植二金錢兩的一。俾二之戲射一。皇明通紀曰。景帝以二銀豆金錢物一撒レ地。令下宮人及官侍爭拾爲中閧笑上とあれば。宋明までも金錢は民間に散用するにあらざることと明なり。これにて考ふれば。金を錢に易へて用ひたるゆゑ。金と錢と合せて。一千四百萬と云ふことなるべし

河決

宋熙寧十年七月。河決二壇州一。遣レ使修閉。判大名府文彥博言。河勢變移。四散兩岸俱被二水患一。而都水止。固二護東流北岸一。希二省費之賞一。未三嘗增二修隄岸一。今之決溢非二天災一。實人力不レ至也と。これ宋のみならず。古より通患なり。國を治むるもの心を盡さゞるべけんや

小兒剔首

韓非子曰。夫嬰兒不レ剔レ首。則復痛 不治二首病一則加レ痛也 不レ揃レ痤則寖益。謂レ癰也疈威而潰レ之。揃拔也 剔レ首揃レ痤必一人抱レ之。慈母治レ之。然猶啼叫不レ止。嬰兒不レ知三犯二其所一小苦一致甲其所中大利上也と。註癰に對して首病となせども。病の字なければ。首病となしがたし。按ずるに。康熙字典に云く。說文剔解レ骨也。剔又他計反音剃。同レ剃とあれば。小兒の髮を剃らざれば。腹痛すと云ふことなるべし。今の人も小兒の髮を剃らざれば腹痛すと云ふ

津介

唐書太宗諸子傳曰。要三結中朝臣一。津二介賂遺一群臣更附爲二朋黨一。荷唐書介一作レ通 と。これにてみれば。津は送ることにて。津遣。津送。津搬の津も送ることなり

論文

寬保元年 敎書 命を蒙り。信州を巡りて。古書を求む。松本より差し出だせる。明の嘉靖二十六年。寧波府より周良へ諭す書。左の如し

寧波府諭二日本使臣周良一

我

皇明之王二天下一也。薄レ海內外罔レ不二來賓一。長馭遠賀。前古未レ有。然而小大之邦無レ論二遠邇一。入貢必有二常期一。使臣必有二常數一。所丁以昭二大信於無一外。而使丙華夷有乙定守甲也。其在二爾日本一。則貢以二十年一爲レ期。人以二百餘一爲レ度此

の川向の北の牛田（本は丑田と書くと云ふ）と云ところの惡水おとしの廣さ十間餘の川を。土人古隅田川と云へば。地變じて川の流。古と異なること明かなり（今神祇官の六月祓を角田川の沖へ流すとありて。中川の沖へ流さるれば。角田川の川瀬の變ずること知るべし）凡そ川の廣狹緩急變地によりてかはり。高岸爲ㇾ谷。深谷爲ㇾ陸なれば。古の石川今は泥川となり。向ふ岸くづれて卑くなりたるべし。古は橋場より渡りて川甚た大きなるにや。又橋場は石濱ゆゑ。餘程石濱を往きて渡るにや。今は地變によりて。橋場より直に渡るにや。しるべからず。或人の云く。總泉寺即ち石濱城の墟なり。さもあるべし。碑文左の如し（この碑の額に梵字あり）

大同元丙戌三月十四日入寂　春秋七十九歲
大僧都知海法印
砂尾石濱道場開基初祖

此外天長。仁壽。齊衡。昌泰。文永。正應。正安。嘉元。德治。延慶等の碑あり。額に梵字ある多し。海石を薄くへぎたるものにて。建て置くべきと見えず。高橋明矩云く。目黑其外にて掘出せるも。石うすくして碑石とは見へず。其上碑に建て置きたるを見ず。土中より掘り出で丶。はなはだ大小あれば。碑にあらずして。古への墓誌なるべし。此說實によろしからん。

夏隆按。大同改元は延曆廿五年五月十八日。平城天皇即位ありて。改元せられしを非禮なりと議論せしこと。日本後記に見えたり。此碑に。三月を大同に係けたるは。後世に記せる證とすべし。又。古人年月を記すに。必。元年二年と記せり。年字を略して。直に支干を記すは。後世俗の習にて。やゝふるき物にこれを見る事なし。此碑は。初祖の遠忌に建てしなるべし。碑額に梵字をかけるもの。弘安の頃より應永以後までの年月あるを多く見たり。此碑も皆追福のために作れるにて。二三百年前のものなるべし

除骴

周禮蜡氏下士四人。徒四十人。掌ㇾ除ㇾ骴（骴は骨の肉あるもの。除は埋み去るなり）これにて先王の仁政の及ぶ所見るべし。今升平の時にして。水死の尸ねは。埋め葬る人もなく。甚だ哀むべし。蜡氏の官を置きて埋めなば誠に御仁政の一端なるべし

金錢

宋の蔡襄の萬安橋の碑に。靡二金錢一千四百萬一とあり。古より歷代金は散用のものにらず。梁の始め。京師三吳荊襄郢襄梁は錢を用ひ。其餘の州郡は穀帛を雜へて交易し。交廣の域は金銀を貨とすれども。此時南北に分れ。交廣の域ばかり金銀を貨とすれども。金錢にはあらず。隋書に云く。後周保定元年。河西の

むべきならねども。周の代より服内に子を生むは。人の恥づることとみえて。左氏傳に桐門右師の譏をのすれば。これ不禁の禁にて。學者は戒むべきことなり。我國は喪五十日に過ぎざれば論ずるに及ばず

石濱

橋場の法源寺に(或人の云く。保元年中より保元寺と號し。其後法源と書きかふ。大同の時の寺號は知るべからず)古き石碑もあり。(或人の云く。先年地中よりほり出だせり)その内の大同元年の碑に。砂尾石濱道場とあり。(隋の時に寺を道場と改め。また寺といへば。我國の古へも。寺と道場同じきことゝみえたり)江戸砂子に云く。橋場の渡は古の奥州道にて。伊勢物語の隅田川の渡は此渡にして。太平記の小手差原の戰に。將軍引き退きて。石濱より渡られしも此所なり。石濱城には千葉の末葉二郎惟胤住せりと。敦書按ずるに。今砂尾山不動院橋場寺と云ふ寺。橋場にあれば。古の砂尾石濱は橋場なること疑なし。今橋場の土人橋場を宿と云ふものあれば。古の奥州道にて。こゝより隅田川を渡り。石濱を宿としたるべし。太平記に云く。武藏の小手差原の戰に。新田武藏守義宗將軍を追ひかけ。小手差原より石濱(參考太平記に云く天正本作二隅田川一)まで。坂東道すでに四十六里を(參考太平記云く。天正本作二五十餘里一)片時が間に追ひ付きたり。將軍石濱を渡り給ひける。川の向ふの岸高うして。屏風を立てたるが如くなるに。數萬騎の敵かへし合せて。こゝを先途と支へたり。日すでに酉のさがりになりて。川の淵瀨も見分かざれば。新田武藏守義宗つゝきて渡すに及はず。本陣へ引き返さる。此戰は。文和元年閏二月廿日辰の刻に。新田武藏守義宗。武藏野小手差原へ打ちのぞまれたれば。それより諸軍をそろへて戰ひ始まり。將軍打ち負けて引かるゝは。午の時にもなりぬべし。閏二月廿日のことなれば。午より酉のさがりまでに坂東道四十六里馳せ至るべきや。片時と云ふは文の失なり。坂東道の一里十二町なるや。今考ふべからざれども。今の人の言ひ傳へたる六町を一里とすれば。二百七十六町にて。今の三十六町一里にすれば。七里二十二町なり。武藏野所澤村(本は野老澤と書くといふ)より八王子へゆく間の原を小手差原と云ふ。それより石濱へ今の里の九里あり。小手差原より石濱への道。いにしへと今と同じからざるべければ。九里の内にては。二里三里の遠近あるべきか。さて今を以て見れば。砂利場の近くなるゆゑ。古は隅田川石川にて。橋場は石濱とみゆ。橋場

りたることみえざれども。玄宗の天室十五歳より。肅宗代宗を經て。德宗の貞元元年まで三十年なれば。常袞二十歳ばかりにて。天寶の末に進士第に及ば、。貞元まで常袞世に在るべし。唐書陸贄傳曰。陸贄調二鄭尉一罷歸。壽州刺史張鎰有二重名一。贄往見語三日。奇レ之。請爲二忘年交一。既行餉二錢百萬一。曰。請爲二母夫人一日費一。贄不レ納止。受二茶一串一曰。敢不レ承二公之賜一と。これは德宗いまだ立たざる時のことなり。同書張鎰傳曰。張鎰大曆初云々。擢二侍御史一兼二緣淮鎭守使一。以レ最遷二壽州刺史一とあれば。張鎰が茶を贈るは。大曆中のことなれば。德宗の前代宗の比より一串と云ふにや。通雅曰。唐茶不レ重レ建。以二建末一有二奇產一也。至二南唐一初造二研膏一と。これにて見れば。畫墁錄建州の茶の餠樣をなしたるを一串と云ふはよりがたし。何れの茶にても。餠樣をなしたるを一串と云ふは。唐より始まること畫墁錄の如し

救荒本草

救荒本草は。周憲王の作にあらず。憲王の父定王の作りたるにより。（敦書）經濟纂要に其事をいへり。其後張庭玉が明史を見れば。定王の作とせり。（獻徵錄名山藏明史藁にも周定王荒救本草を作るとあり）救荒本草の李藻が序にも。永樂間周藩所著とあり。永樂は定王の代にて。洪熙元年定王卒すれば。定王の作たることいよ〳〵明なり。明人の李時珍。陳子龍等憲王の作となしたるにより。我國の人憲王の作とするはさもあるべし。李時珍。陳子龍は適然の誤なり

服內生子

群書考を見れば。東谷贅言を引きて。明律に服內子を生むの禁なきことをのす。其文左の如し

孝子禁二服內生一レ子。考二之經傳一。未レ見二明訓一。蓋自二桐門一右師譏二然明一始也。歷二漢唐宋元一。此禁尤嚴我朝則無二此禁一矣。嘗莊誦孝慈錄御製序文一。其中有レ曰。禁二服內生一レ子。不レ近二人情一。故大明律无二服內生レ子之條一。嗚呼。此聖明所下以緣二人情一而立上レ法也。類如レ此。近年江東有二朝士服內生子一。反下誣其妻與二外人一通上。其妻自縊死。潮南有二老儒一。服內生レ子乃沈二之江中一。遂絕レ嗣。此皆不レ知三本朝無二服內生レ子之禁一也

この說の如く。經傳に明訓なければ。（喪大記に吉祭而後寢すとあれども。禮記は秦漢の儒の附會もあるによりて。信用しがたきにや）服內に子を生むは。痛く責

之沒骨一と。これにて見れば。寫生沒骨相似て墨跡なきゆゑ沒骨と云ふと見えたり

繳

增續龍龕手鑑に云く。繳衣領中骨也と。是にて見れば我國の雨衣の領の如く。西土の衣領には心を入ると見ゆ

番　薯

敦書民間に在りし時。番薯は（甘藷とも云ふ）饑年第一の助ゆゑ。諸書を考へ集めて一卷となす。享保十九年敦書に命じて養。生所の墝地に作り試みしむ。敦書元來近年關東島々困窮して。飢人在りと聞くによりて思へば。罪人を島々へ流さるゝは。罪人の天年を終へしめられんためなるに。却りて飢うれば上の御惠みに違ひ。甚た不便なることゆゑ。番藷を考へ集めしなれば。關東島々へ渡し度と申し上げゝれば。關東島々へ渡さる。敦書身に餘り難有ことなり。其後島々にて作り習ひたりや否や。絕えて知らざりしに。寶曆六年都人神津島へ漂泊しけるに。島人番藷を與へて食はしむ。漂泊人この島にいかゞして番藷ありと問ひければ。島人答へて云く。享保年中上より番藷の種を渡し下されたれども。貯あしくして。種くさりしに。其比薩州人島にありて。番藷を作り。貯へ様を委しく敎へしにより。精を出だし作り習ひ。大さ大椀に入らざるほどに出來る。神津島は至りて小く。食物すくなく飢人ありしが。番藷を作りてより。食物とぼしからずして。飢に及ぶことなく。人も次第に多くなるにより。上の御惠の難レ有あまり。小祠を立て、番藷を祀ると云ふ。これ今年夏聞くところなり。誠に一人にても飢人を救ふは。廣大のことにて。有德廟の御仁政深く仰ぎ奉るべきなり。さて八丈島にては。番藷を少し作り。其外の島々は作らざるにや。いまだ聞かず。作り習はせ度きことなり（これ寶曆九年聞くところなり）

茶一串

畫墁錄に。唐茶品以二易美一爲二上供一。建溪北苑未レ著也。貞元中常袞爲二建州刺史一。始蒸焙而硏レ之。謂二硏膏茶一。其後稍爲二餠樣其中一。謂二之一串一といへども。唐書常袞傳曰。常袞天寶末。及二進士第一云々。德宗卽レ位再貶二潮州刺史一。建中初。揚炎輔レ政。起爲二福建觀察使一云々。卒。年五十五とありて。建州刺史にな

總計五錢五分五厘五毫五絲五忽にて。漢の水五升は當今の四合六勺五撮餘にて。今の水一合に藥一錢一分九厘三毫餘。唐の小斗の五升は。當今の六合九勺七撮四にて。今の水一合に藥七分九厘六毫餘にて。藥至りて薄し。これ等を考ふれば。他書に一斤を二斤とする秤。後漢より唐まであることを云はずといへども。一斤を二斤とする秤ありしこと明なり。通雅曰。陸文裕曰。虞書曰。乃同二律度量衡一三代共レ之。至レ秦不レ師レ古。而後紛綸莫レ定矣。迨二南渡六朝割裂之際一。乃有二大升大兩長尺之法一。當時調二鐘律一測二晷景一。及冠冕制用二小斗小兩一。自餘公私用二大升兩一。胡三省曰。北魏高祖已有下廢二大斗一去二長尺一之令上矣。由レ此論レ之。三兩爲レ兩。三升爲レ升。二尺爲レ尺。不レ始二于唐隋一而先行二南北朝一と。是を以て西土の度量衡一定ならざること見るべし

藥升

古へ方寸匕の類に。散藥を量る藥升あり。陶弘景曰。藥升方作二上徑一寸下徑六分深八分一。內二散藥一。勿三按二挿之一。正爾微動令二平調一爾。今人分レ藥不三復用二之と。今の人用ひずとあれば。梁より前。藥升ありとみゆれども。いづれの代に始まること知れざるゆゑ。周尺を以て量るなり

今周尺を以て量るに。度量衡考に云。周尺は今の七寸一分九厘六毫三絲有奇に當る 上徑一寸は。今の七分一厘九毫六絲三忽。下徑六分は今の四分三厘一毫七七八。深さ八分は今の五分七厘五七零四に當り。一升今の三撮零々四六六九一五九餘なれば。上徑の冪と下徑の冪と。上下相乘の數を相併せて百零一分五零一九九八零三二四となる。これに深さを乘じ。三約して百九十四分七八三六七八五八となる。今の升法六万四千八百二十七分を以て除すれば。三撮零々四六六九九一五九餘を得るなり 甚小くして。他に用ふべからず。散藥の升たること疑なし。李時珍升積を筭せず。藥升を以て古量となして註せしゆゑ。通じがたし。尙。證類本草を考ふべし

魚子

農圃六書曰。凡魚嘯レ子必沿二水痕一。雖二乾涸十年一。遇レ水相生。其長甚易。嘯レ子時候以二五月一。銀魚鱠殘魚嘯二子於氷一。氷解三日卽生と。我國の魚子も如レ此と云ふ

寫生沒骨

香祖筆記曰。宋初收二江南西蜀一。徐照黃筌父子皆入二京師一畫二花卉一。但以二輕色一染成不レ見二墨跡一。謂二之寫生一。熙以二墨筆一畫レ之。殊草々略施二丹粉一。而神氣生動。筌惡二其軋一レ已。言下其不上レ入レ格罷レ之。熙之子。乃效二諸黃之格一。更不レ用レ墨。直以二粉色一圖レ之。謂二

三厘九毫四不盡なり 總計七十九錢五分零五毫六絲有奇。右七味以二水一斗二升一煑取二六升一。再煎取二三升一と。漢の一升は當今の九勺三撮一二にして。一斗二升は當今一升一合一勺七撮四なり これ今の水一合に藥七錢一分一厘七毫餘にて。水すくなくして煮ることかたかるべし。總計を半減すれば。三拾九錢七分五厘二毫八絲餘にて。今の水一合に藥三錢五分五厘八毫餘にあたり。煮やすかるべければ。仲景が方の秤は一斤を二斤とするの秤なること知るべし。唐の小斗の一斗二升は。當今の六合七勺三撮七六にて。今の水一合に藥二錢三分七厘五毫なり。桂枝湯。桂枝三兩。甘草二兩。生姜三兩。芍藥三兩合せて十一兩は今の三十二錢五分九厘二毫五絲六忽 大棗十二枚十二枚は四兩にして。今の十一錢八分五厘一毫 今總計四拾四錢四分四厘三毫五絲六忽。右五味以二水七升一微火煮取二三升一。七升は當今の六合五勺一撮八四 總計を半減すれば。二十二錢二分二厘餘にて。今の水一合に藥三錢四分零九毫。唐の小斗の七升は。當今の九合七勺六撮三六にて。水一合に藥二錢二分七厘五毫餘あり。小建中湯。桂枝三兩。甘草三兩。芍藥六兩。生姜三兩合せて十五兩は。今の四拾四錢四分四厘四毫四絲 大棗十二枚今十一錢八分五厘一毫 膠飴一升。總計五十六錢二分九厘五毫四絲。右六味以二水七升一。煮取二三升一。去レ滓入二

膠飴一。總計を半減すれば。二十八錢一分四厘七毫七絲にて。今の水一合に藥四錢三分四厘八毫餘にて。唐の小斗にて算すれば。今の水一合に藥二錢八分八厘二毫に當る。仲景が方附子乾姜の入湯は薄し。飲みがたきゆゑなるべし 陶弘景曰。凡煮レ湯欲三微火令二小沸一。其水數依二方多少一。大略二十兩藥用二一斗一。煮取二四升一。以レ此爲レ準 仲景が方に。微火を云はざるもあれば。必ず微火ならず 二十兩は。今の五拾九錢二分五厘九毫餘にて。梁の一斗は當今の一升一合なれば。今の水一合に藥五錢三分八厘七毫餘に當る。半減すれば。今の水一合に藥二錢六分二厘九毫餘にて。微火にて煮やすかるべし。金匱要略。枳實湯。枳實七枚

陶弘景云。枳實若干枚者。去レ穰畢以二一分一准二二枚一と。又云く。古秤惟有二銖兩一。而無二方名一。今則以二十黍一爲二一銖一。六銖爲二一分一。四分爲二一兩一と。度量衡考に。梁の秤は。古秤に依るとあれば。梁の一兩も當今の二錢九分六厘二毫九絲六忽にて。一分は當今の七分四厘零七絲四忽なり。枳實七枚の重さ。當今の二錢五分九厘二毫五絲九忽 白朮一兩當今の二錢九分六厘二毫九絲六忽なり。さて朮の赤白を別つは。宋よりなれば金匱要略に白朮と云ふは疑はし 右二味以二水五升一煮取二三升一分溫三服とあり。二味

一合一勺。秤依二古秤一とあれども。水の重さによれば。梁の一升は。今の一合一勺四撮不盡に當る。梁の秤は古秤なれば。一斤は今の四十七錢四分零七四不盡に當る。是を實とし。水一升の重さ四百十五錢を法として歸すれば。一合一勺四撮不盡を得たり 度量衡考の後漢の升に比すれば。一升にて三弗一すくなく。梁の一升にては四撮多し。これは水の輕重によるなるべし

以一斤爲二斤秤

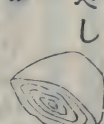
古秤一斤を二斤とし。一兩を二兩とする秤。後漢より唐まで行はれたるゆゑに。證類本草序例曰。臣禹錫等謹按唐本又云。但古秤複今南秤是也。晋秤始二後漢末一已來。分二一斤一爲二二斤一。一兩爲二二兩一耳。金銀絲綿並與レ藥同。无二輕重一矣。古法惟有二仲景一而已。涉二今秤一者耳。若用二古秤一作レ湯。則水爲二殊少一。故知下非二複秤一。悉用中今秤上者耳と。按ずるに。唐本は唐本草を指すなり。唐の高宗英國公李勣に命じて作らしむ。是を英公唐本草と云ふ。顯慶中右監門長史蘇恭重ねて訂註を加へて。表して修定せんと請ふ。高宗また趙國公長孫無忌等二十二人に命じて。恭と共に詳定せしむ。之を唐新本草と云ふ。宋の仁宗嘉祐二年。光祿卿直秘閣校理林德等に詔して。諸醫官と同じく本草を重修せしむ。是を嘉祐補註本草と云ふ。古秤複今南秤是也と。これにて唐の時まで。古秤を行ひて。南秤と云ひしことしるべし。素問に。二鷄矢醴四烏鰂骨一藘茹及び藥熨の方。靈樞に半夏湯等あるのみ。ゆゑに古方惟有二仲景一と云ふ。唐の高宗の時。古秤の一斤を二斤とし。一兩を二兩とする秤ありて。是を今秤と云ふ。これは唐の小斗は。北周の玉尺量の升にて。一升今の一合三勺九撮四八に當り。鐘律冠冕湯藥に是を用ふれば。この推量すべて度量衡考に依るなり 仲景が法。古秤にて量れば。水少なくして煮ることかたかるべし。蘇恭等詔を受け。本草を詳定し。且其時のことなれば誤り有るべからず。西土の習にて官の事には管制の秤を用ふれども。民間にては用ひ來る古秤を半減にしたる秤を用ふるゆゑに。今秤と云ふなるべし。蘇恭等藥は人の曉り易き宜きに因りて。民間盛に用ふる秤を以て云ふなるべし いま漢の秤量及び唐の小斗を以て算するに。傷寒論。小柴胡湯。柴胡半斤半斤は今の二十三錢七分零三毫七絲零三七合せて十二兩は。今の三十五錢五分五厘五毫五絲二忽て。今の七錢四分零七毫餘 黃芩三兩。人參三兩。甘草三兩。生姜三兩 半夏半斤陶弘景曰。凡方云二半夏一升一者。洗畢秤五兩爲レ正。是によれば。半升に二兩半にし 大棗十三枚陶弘景曰。棗有二大小一三枚準二一兩一と。これによれば。十三枚は今の十二錢八合

ば。呉は。我國へ近きによりて。開元錢多く渡りて。今に開元錢多しとみえたり

錢　糧

同書に云く。今民間輸レ官之物。皆用レ銀。而猶謂二之錢糧一。蓋承二床代名一。當時上下皆用レ錢也と。何國にても言ひ習ひたること改めがたしと見えたり。且爵秩便覽をみるに。雍正亥年一歲。西土の錢糧銀三千二百六十四萬四百二十九兩。米三百二十四萬三千八百三石とあれば。西土の錢糧の多からざること知るべし

清銀

ツボ深ク渦ノ如キ系アリ

切リタル圖

寶曆五年長崎へ來ル清ノ銀ハ形圖ノ如クニシテ、極印一ナラズ、極印ナキモアリ

表

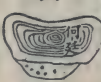
何廷

底

ツボ深ク系アリ

極印何廷

裏

山

極印

何廷極印ノ銀ハ重サ五匁五分

黎振

永盛

王

豊

恒

財

真

何廷ノ外ハ此極印

コノ極印ノ銀大キナルハ、重サ四十七八匁ホド、小キハ二十匁程、

某ノ家ニ交趾銀アリ、圖ノ如シ我ガ國コレチ鳥銀ト云フ

表

極印

裏

重サ四分五厘少弱コレヨリヒトマハリ大キナルモアリト云フ

銀　錠

唐に吉字金鋌あり。宋より銀鋌あれとも。錠の形を記さず。河野松庵藏むる所の明人の百工の書に銀錠あり。今の小兒の弄するこまの如くにして系あり。清の銀錠左の如し（清の銀錠州の鉈切銀の如く切りもて行使するなり）

一角地

荒政要覽に角地あり。算經に云く。一畝分爲二四角一。毎レ角六十步也と。これにて角は六十步たることとしるべし。さて流政要覽は。經濟に志ある者よむべき書なり。今板絕ゆ。甚惜むべし

權　水

後漢書禮儀志曰。權二水輕重一。一升冬重十三兩。梁沈約袖中記曰。漏水一升秤重一斤。時經二一刻一。度量衡考曰。漢一升當今九勺三撮。一二一兩當今二錢九分六厘二毫九絲六忽不盡。一斤當今肆拾七錢四分零七毫四絲零七四不盡と。今冬の水一升を秤するに。重さ四百十錢。或四百二十錢。平均して四百十五錢。これにて算すれは。後漢の一升は今の九勺二撮八一不盡に當る。（後漢の十三兩は。今の三十八錢五分一厘八毫四肆八忽不盡に當る。是を實として今の水一升の重さ四百拾五錢を法として歸すれば。九勺二撮八一不盡を得たり）度量衡考に。梁一升。當今の

訓蒙圖彙に。慈姑を白くわゐとつけ。鳧芋をくわゐとつくるは。古名を失はずと云ふべし 鳧茈一名鳧芋

萪 藤

東西洋考に云く。萪藤蔓抽被レ地。無ニ枝葉一有レ皮。裏ニ其外一如ニ竹皮一。剝レ之則落。長數丈不レ値ニ剪伐一。可ニ繚繞一と。これは今の藤とみゆ

蟲 絲

圖書編に。蟲絲 横楓始生。有ニ食レ葉虫一似レ蠶。亦作レ絲。光明如ニ琴絃一。蠻人不レ作ニ釣緡一 とありて。蟲絲はてぐすの事なり。同書に云く。界稻十月種。次年四月熟と。これは南方暖國の物なるべけれども。種を得て試みたきものなり

白染園爐

機警に云く。沂陽子曰。相傳開濟館ニ其尙書家一。上ニ郊祀一索ニ白染園爐三百一。尙書窘迫莫レ應。濟敎截ニ矮卑脚一。鑿ニ圓孔一。白紙粘レ之。取ニ鐵鍋一爲レ爐。如レ數進上と。誠に有才の人と云ふべし

鉛 瓦

陶朱新錄に云く。其正室之瓦以レ鉛爲レ之と。鉛を薄くして瓦となしなば。銅に劣らずして軍用に備ふべし

試 鹵

西溪叢語に云く。閩中之法以ニ鷄子桃仁一試レ之。鹵味重則正在レ上。鹹淡相半則二物俱浮と。これもまた經濟の一端なるべし

洞

靑溪寇軌に云く。群黨據レ險以守。因謂ニ之洞一と。これにて洞蠻の洞しるべし

祭飮食

三餘贅筆に云く。古人每ニ飮食一必祭。未レ有ニ不レ祭而飮食者一。今之釋老食時猶祭。而士大夫乃反不レ行。古云。禮失而求ニ之野一。此亦可レ見と。これにて後世風俗の薄きことしるべし

珠 子

書影に云く。唐開元錢燒レ之有ニ水銀出一。可レ治ニ小兒急驚一甚驗。見ニ無顏錄一。開元錢惟金陵最多。本草綱目に直指方を引きて。開元錢を燒きて。慢脾驚風を治すとあり 珠子按ずるに。西土の錢。鉛錫を數ふることは見ゆれとも。水銀を入るゝことを聞かず。今試に西土の諸錢を燒くに珠子の出でざるなし。これ水銀にあらずして。鉛錫なるべし 眞字の至和通宝錢。煙尤多くして。其煙物に着きて木綿の如し。鉛多く入れたるゆゑにや 開元錢惟金陵最多しとあれ

方　麯

北史にある方麯解しがたし。楊升菴外集に注あり。その文左の如し

北史。楊愔傳。方麯讀者不ㇾ解二何語一。按說文作ㇾ笛。蠶簿也。通作ㇾ曲。禮記曰ㇾ簿。周勃傳織二簿曲一爲ㇾ業。方言簿之言簿謂二之曲一。此云二方麯障ㇾ面。蓋竹織方面也

時　分

俗に何時と云ふことを。いつ時分と云ふも。西土によるにや。無冤錄に云く。時分猶ㇾ言ㇾ時也

支　配

胡三省が通鑑の注に云く。支分也。配隷也。支配猶三今人言二品配一と。いまの支配と云ふも此等によるとみゆ

拏

明史に云く。萬曆元年恭言祖宗時造二淺船一近ㇾ万。非下不ㇾ知二滿載省舟之便一以中閘河渡淺上。故不三敢過二四百石一也。其制底平倉淺。底平則入ㇾ水不ㇾ深。倉淺則負載不ㇾ滿。又限二淺船一用ㇾ水。不ㇾ得ㇾ過二六拏一。仲三大指與二食指一。相距爲二一拏一。六拏不ㇾ過二三尺許一。明ㇾ受二水淺一也と。これにて淺水の船は。底平かにして。西土も大指と食指とを伸ぶるを五寸とすることしるべし

神　鷩

名山藏に。大祖高皇帝生二於土地神祠中一。白氣貫ㇾ空。異香經ㇾ宿。祠中神鷩避數里。時元天曆元年戊辰九月十八日也とありて。何の神なるや知るべからず。雙槐歲抄に云く。大祖高皇帝及ㇾ誕云々。隣有二二郞神廟一。其夜火光照耀及二天明一。廟徙二東北一百餘步と。これにて二郞神なること知るべし。詢芻錄に。二郞神衣ㇾ黃彈射擁二獵犬一。實蜀漢王孟昶像也とあれば。孟昶ゆゑ大祖を畏るゝにや。明史には此事をのせず。誠に正史の體を得たりと云ふべし

凫　茈

凫茈の葉。燈心草に似て食はるゝものゆゑ食はるゝ燈心草を中略してくはゐと云ふなるを。今慈姑さかんなるによりて。却りて凫茈を黑くわゐと云ふは宜しからず。爾雅に。芍凫茈也。郭璞註曰。苗似二龍須一而細と。後漢書に掘二凫茈一而食ㇾ之とあり。本草にも。凫茈は別錄中品にして久しきものなり。增補

光祿大夫太保中書平章政事盧陵郡公。諡ニ忠武一。命ニ王積翁ヲ書ニ神主一。洒掃柴ㇾ市設ㇾ壇以祀ㇾ之。丞相孛羅行ニ初奠禮一。忽狂風旋ㇾ地而起。吹ㇾ砂衰ㇾ石。不ㇾ能ㇾ啓ㇾ目。俄捲ニ其神主於雲霄中一。空々隱々雷鳴。如ニ怨之聲一。天色愈晦。乃改ニ前宋少保右丞相信國公一。天果開霽。事雖ニ周公不ㇾ同。然其忠誠格ㇾ天一耳と。これにて視れば。西土にも死後雷となると云ひ傳ふことしるべし

毀銅佛爲錢

南宋南平王偉が傳に。武帝軍東下。周度不ㇾ足。偉取ニ襄陽寺銅佛一。毀爲ㇾ錢とあり。これ權時の良策なり

公主賜謚

文昌雜錄に云く。唐德宗貞元十年七月賜ニ故唐安公主ニ曰ニ莊穆一。蓋公主賜ㇾ謚始ニ於此一也

持　更

鐵圍山叢談に。今之更點擊ㇾ鉦。唐六典皆擊ㇾ鐘。太史門有ニ典鐘二百八十人一。常擊ニ編鐘一とあれは。世々一ならずと見ゑたり

清　吏　司

明の時。六部の諸吏みな命じて。清吏司と云ふこれは周官の六計廉を主とするに本つきて。清吏司と云ふ函史にみゑたり

麻沙　書影に。麻沙を地名とす。未たいつれか宜しきをつまびらかにせず

通雅曰。麻沙八印之初出未ㇾ精者也と。先年通雅の校合くはしからざる本をみたり

味　諦

說苑に味諦とありて解しがたし。通雅に注あり。その文左の如し

味諦猶ニ未審一。說苑作ニ味諦一。韓詩外傳作ニ味投一

需　頭

獨斷にある需頭解しがたし。通雅に注あり。その文左の如し

空ㇾ首幅曰ニ需頭一。需頭空ニ前幅一面一也

名　紙

梁の時より名紙起ること。林下偶談に載せたり。其文左の如し

梁何思澄終日造謁。每ニ宿昔一作ニ名紙一一束。曉便命ㇾ駕朝賢。无ㇾ不ニ悉押一。名紙盖起ニ於此一。今人謂ニ之名贄一非也

尾山鑛計ニ一斗一得ニ銅八兩一と。これにて鑛より銅の出づる數しるべし

街　樾

道中の並木。唐書の吳湊が傳にあり。其文左の如し

街樾稀殘有司蒔ニ楡其空一。湊曰。非三人所ニ蔭玩一。悉易以レ槐。及ニ槐成一而湊已亡。行人指レ樹懷レ之

脚氣腫滿

近年流行する脚氣腫滿。我國の古にもありしにや。東鑑にあり。其文左の如し

入道從四位下行遠江守平朝臣朝時卒。法名生西五十三。數月脳ニ脚氣瘇病等一云云

鶴頂紅

今の緒じめになす鳳てんは。彊識略に見えたり。其文左の如し

南番大海中有ニ鶴魚一。頂中皴紅如レ血。可レ作レ帶。名曰ニ鶴頂紅一

歸　第

宋史の趙普傳に云。舊制宰相以ニ未時一歸第。是歲大熱特許レ普夏中至ニ午時一歸ニ私第一と。これにてみれば。西土の宰相は。平日未の時に退出するなり

妻　有

越後略記に。蒲原部妻有(ツマリ)の鄉あり。太平記のつばりなるへし

以子配謚

蔡邕が朱公叔謚議に云く。古之以レ子配レ謚者。魯之季文子。孟懿子。衞之孫文子。公叔文子皆諸侯之臣也。至ニ于王室之卿大夫一。其尊與ニ諸侯一竝故以レ公配と。是にて子を以て謚に配すること知るべし

蝓　道

王履か始めて入ニ華山一至ニ西峯一記の內に云く。崔罅爲レ級如レ梯。鑠旁垂。問之乃百尺撞也。撞直絳切。自レ下突之義。蓋聞ニ之山中道士一云級每レ腐或缺。由レ級以上先輕躡試レ之。然後置レ足とあり。これ大抵大峯に似たるなり

咄　嗟

野客叢書に云。咄嗟猶ニ呼吸一。疑晉人一時語耳

爲　雷

王世貞が云く。余讀ニ趙弼文公傳一。深信ニ反風禾起之說一。按文山既赴レ義。其日大風楊レ砂。天地晝晦。咫尺不レ辨者數日。宮中皆秉レ燭而行。群臣入朝亦爇レ炬前導。世祖問ニ張眞人一。而悔レ之。贈ニ公特進金紫

載二于后一

又（又通作レ有。以下字多假借）秦嗣王𣪘（籀文敢字後同）用二吉玉宣（古宣字通作レ瑄。璧六寸曰瑄）璧一使三其宗祝邵鼛布忠（篆文似作愍字。又作愍 王本作□。）告二于不顯大神巫咸一（久湫本作二不顯大沈一。久湫亞駝本作二不顯大神一。亞駝久讀作故。亞讀作烏。按文王詩有周不顯 毛氏注甚顯也。正與二此不顯字一同意。或者假借爲二不顯一。正不必然）㠯（古以字）底二楚王熊相之多辠一。罪昝昔我先君麸（穆）公及二楚成王一是（讀作寔）繆（讀作戮。左傳成公十一年。戮レ力同レ心）レ力同レ心兩邦𤰇（古若字）レ壹（古壹字）絆㠯㳿（婚女 姻因）衿㠯二齋盟一曰。枼（葉）萬子孫毋レ相二爲不利一（子孫毋レ變也 檀弓世々萬）親即（王作レ印）（讀作レ仰）不顯大神巫咸一（久湫本無二不顯二字一。只作二木沈一。久湫亞駝本作二不顯大神一。亞駝以下凡擧二所レ祀神名一皆同）而質焉。今楚王熊相康（讀作レ庸）回無道淫失（讀作レ佚）甚（讀作レ耽）亂。宣（宣）奓（侈）（古文）競從。（讀作レ縱）變輸（讀作レ渝。按春秋六年鄭人來渝平。左氏傳作レ輸。公羊穀梁作レ輸。二字蓋通用渝變也）盟一剌レ內レ之𠟭（籀文則字下同）虣（古文暴字周禮有二司虣一）虐二不辜一。（久湫本作レ姑。通用）刑二戮孕歒一（婦）幽刺二親敕（久湫亞駝本作 古文字）戚一。○（戚字漢戚伯著碑。夏承碑皆用二此字法一）拘二圉其叔父一寘二者（讀作諸 下同）冥室櫝棺之中一外レ之𠟭（則）冒二改久心一。不レ畏二皇天上帝及不顯大神巫咸之光（別）烈威神一。而兼倍二十八世之詛盟一。率二者（諸）侯之兵一。而㠯臨二加我一。欲（下）剗二伐我社稷一。代二威（許劣反滅也詩褒姒威レ之）我百牧一。（姓）求（中）蔑レ灋（古法字）皇天上帝及不顯大神巫咸之卹（上）。㠯二圭玉羲（犧）牲一。述取二衙（古我字一作レ吾）邊城新鄓（音皇）及鄔（王本作柳）長敘一。親衙（我）不二𣪘敢曰レ可。今有（通作レ又。久湫亞駝本作レ又）悉興二其衆張矜意一。（王本作意。籀文億字。說文云滿也。左傳以馮二怒陵我敝邑一不レ可二億逞一）怒飾レ甲底レ兵奮レ士盛レ師。㠯偪二（王本作倍云。久湫亞駝本作二偪字一。當作偪）衙我邊競一。（讀作レ境）將欲レ復二其䝨（䝨）迹一。唯是秦邦之羸衆敝賦𩊄（王本作レ鞈、讀作レ鞹。鞹音俞刀鞘也。言以棧革一也 皮去レ毛曰レ革 鞹レ革飾二刀鞘一也）輿禮使（上聲）介老。將（去聲）レ之㠯自救殹（久湫本作レ也。殹古也字。見二石鼓文及秦權一。輸輸棧輿言レ非二戎器之備一也。介老謂二一介之老一。言二又非二將師之才一也。秦自謂不レ得レ已特遣二一介之老將一。屯二羸衆一自救而已。言レ不二敢飾レ甲底レ兵以先伐レ楚也。曰二禮使一者。言二楚與レ師之不レ以レ禮也）亦應レ受（古受字）皇天上帝及不顯大神巫咸之幾靈德一。賜（下）克（古克字）㓨（二作レ劑。導爲反。王本齋レ制。古制字。久湫亞駝本 爾雅云。劑齋也）楚師一。且復（中）略我邊城（上）。𣪘敢數二楚王熊相之倍（倍）レ盟犯一レ詛。著二（著者諸）石章一。㠯盟二大神之威神一

さて神は非禮をうけざれとも。英傑の人も。人情にて我曲をすて。人の曲を訴へて。幸を神に禱るるものなり。敦書先年命を承けて。諸國をめくりて。古書を求む。甲信の內に。信玄の願書甚た多し。信玄の武も猶かくの如し。遠三州は。神祖勃興の地なれとも。願書の類一章もこれなし。誠に神祖大德古今にすぐれ給ふこと知るべし

銅　鑛

魏書食貨志に云く。尙書崔亮奏。恒農郡銅靑谷有二銅鑛一。計二一斗一得二銅五兩四銖一。葦池谷鑛計二一斗一得二銅五兩一。鸞帳山鑛計二一斗一得二銅四兩一。河內郡王

延年。特茂霜松。孤懸皓月。高標懍々。千載仰其清芬。明鏡亭亭。萬像含其朗耀。味夫純粹。罕測端倪。故燕公剡義詞曰。新詩冠宇宙。斯言不佞信而有徵。於是欲罷不能。研章摘句輙因註述。思欝文繁庶有補琢磨。俾無至於凝滯。且欲啓諸童穉焉。敢貽於後賢。時亙唐天室三載龍集涒灘之所述也

雌　鹿

遼史曰。令獵人吹角效鹿鳴。既集射之謂之雌鹿。又名呼鹿と。これにて見れば。笛にて鹿を呼ぶも久しきことなり

開　中

宋の時に。鹽錢香藥室貨を以て入中をなす。明これに效ひて開中をなす。開中は商人米豆を各邊に納めて。その替りに。各該運司鹽課提擧司より鹽を渡すこと也。各邊の糧の缺を救ふ策也

呂子義

何氏語林に。呂子義がことをのす。其文左の如し

呂子義往省一友人。嫌其設酒食。懷乾糒而往。主人爲供饌。子義出懷中乾糒。求一杯冷水食之

さて子義廉潔の士と云ふべけれども。人情に非ず。君子はとらざるべきか

詛楚文

秦の惠文王の梵を詛する文。史記にのせず。古文苑にのせて注あり。其文左のごとし

秦惠文王

詛梵文

奉告巫咸文。說者皆謂。近世出於鳳翔府祈年觀基之下。眉山蘇氏形之詩詠。亦以爲然。此編既云。唐人所藏。於佛書龕中得之。則唐時此文已流傳於世。惜无名士如韋應物韓退之輩題詠。故其名不顯。按巫咸在解州鹽池。與古維相遠。盟石以告神。或瘞於土。或沈於水。皆當在本所。如告文。湫文得於朝郍。湫傍是也。告巫咸文不應遠在古維。以是推之。此不出於唐之前后。後湮沒於祈年觀下。至近世而後出。理無可疑。文多古字。間有假借。王厚之音釋頗詳。今

正　悦

勸　化

先年豆州田方郡の願成就寺より出だせる上葺の書にてみれば。今の御免勸化は。永祿の比より起りたりとみゆ。其文左の如し

爲大御堂上葺之豆州中家一間以榛原升米壹升宛遣之候從諸百姓前可請取候也聊此外之儀申懸由至于御耳入者可被處重科候但家數八千九百五十五間半本棟別之高辻也然間鄕々へ以配符被仰出狀如件

永祿貳年十一月十六日　北條家ノ虎ノ朱印　文字ミエガタシ　狩野弥太郎　奉

豆州御堂
本願十穀

子

諸式目にのする長祿三年十一月二日の式日にてみれば。今の何文子と云ふは。子は字の字の省略なるべし。其文左の如し

一質物利分事

絹布類繪移物書籍屬樂器具足家具幷雜具以下可爲五文字

盆香合茶碗物瓶香爐金物武具等幷米穀類等可爲六文子

長祿三年十一月二日

百　詠

源平盛衰記に。小兒の百詠を讀むとあるに。唐の李嶠が雜詠百首の事にて。註もありて。今の庭訓の如くはやりしなり。いまは好事のもの。李嶠雜詠百廿首。張庭芳が註の序のみを傳ふ。其文左の如し

故中書令鄭國公李嶠雜詠百廿首

登事郎守信安郡博士帳延芳注並序

嘗覽。尊レ德敘レ能。述レ古不レ作。竊所二跂慕一。情發二于中一。顧有レ闕二於愼言一。誠見レ貽二於尤悔一者也。然夫楚鷄雖レ謬。周鼠徒珍。猶遇二兼金以答一。豈獨盧胡致レ哂。頃尋二擇故中書令鄭國李公百廿詠一。藻麗詞清。調諧二律雅一。宏溢逾二於靈運一。緻密掩二於

船六十里。約二漏半有零。人行先二木梯一爲二不レ及レ更者一風慢船行緩。雖レ及二漏刻一尙無二六十里一爲二不レ及レ更者一也。人行後二於梯一爲二過レ更者一。風疾船行速當レ及二漏刻一。已踰二六十里一爲二過レ更者一也

長　息

中國描談に。日本氣息長。而筑紫之漁女在二于海底一。春秋分四刻。震旦之海人者非二于人倫一。而祝融河伯之奴也と載すれば。我國の人は息長しとみえたり

民　家

世諺問答に云く。むかしは一町のうちを五丈づゝにわりて。門を立てしかば。八の門ありしなり。その中に賤が家をつくるとあり。これにて我が國古へ閭門ありしこと知るべし

反

先年相州鎌倉圓覺寺より出だせる元亨二年の注進に。（この注進甚だ長きゆゑ其文を記さす）町段に。段反の二字を交へ用ふ。これにてみれば。反の字を用ふること久しとみゑたり。同所の建長寺の西來菴の注進にも。段反の二字まじへ用ひたり。その文左に記す

西來庵領懷島内三郷辻在家

田數一町一反内　左衞門四郎
二反半　河成
四段半　鶴田　不作
定作田數四段
分錢參貫貳百文　各々八百文代
田數七反成　助四郎
二反　坪は中せきのやしろ方へ　押領
定作田數五段
分錢四貫文　各々八百文代
同郷畠年貢
畠數貳町二反半内　左近三郎
一町一反　坪若宮小路右京畠　不作
定作畠一町一反半
分錢三貫四百五十文　各々三百文代
畠數一町八段成　助四郎
七段　坪右京畠高畠　不作
定作畠一町一反
分錢三貫三百文　各々三百文代
已上拾三貫九百五十文
文安五年戊辰十月　日　納所

の年號を用ひられしにや。其文左の如し

永昌元年己丑四月。飛鳥淨御原大宮那須國造追大壹那須宣事提評督被ㇾ賜。歲次二庚子一年正月二壬子日辰節。殄故意斯麻呂等立二碑銘一偲云。爾仰惟殞公廣氏尊胤國家棟梁一世之中重被貳照一命之期連見再甦碎骨𨦂髓豈報前。恩是以曾子之家。无有嬌子。仲尼之門。无有罵者。行孝之子不改其語。銘夏堯心澄神照乾六月。童子意香助坤作徒之大合言喩寄故无翼長飛無根更固（那須拾遺物語には爾故を殄古と見えたり）

良峯宗淳が云く。永昌元年は持統天皇の三年に當る。那須拾遺物語に云く。至りて堅きみかけ石に細字に刊り付けたる故。文字碎けてみえず。嬌の字は嫡の様に見え。香の字は杳の如くみえ。終の行の大の字を。六の字に見たる人もあり

賡和

劉攽貢父詩話曰。唐賡和有二次韻一（先後无ㇾ易）有二依韻一（同在二一韻一）有二用韻一（用二彼韻一不二必次一）とこれにて次韻。依韻。用韻明なり

黃道

子元案垢曰。天之黃道可ㇾ見。處暑後秋分前。晴朗月沒時于二高處一。向ㇾ南視ㇾ之。若二虹霓一斜。界二雲氣一皆不二敢入一者是也と。これ未た試みず試むべきことなり

鉛錢

九曆に云く。天德三月廿八日。可二新錢鑄一。進數並鉛錢宜可申者。而依二公卿乏一ㇾ恭不ㇾ能二定奏一と。これにて見れば。天德に鉛錢鑄られしにや。天正慶長の比は關東の民ひそかに鉛錢を鑄て使ひしなり（敦書見たる本あしくして。天德何年と云ふことなし。尙善本を考ふべし）

更

中山傳信錄に。更を定むることを載せて詳なり。其文左の如し

海中船行里數皆以ㇾ更計。或云。百里爲二一更一。或云。六十里爲二一更一。分二晝夜一爲二十更一。今問二海舶夥長一。皆云。六十里之說爲ㇾ近。舊錄云。以二木梯一從二船頭一。投二海中一。人疾趨至ㇾ梢。人梯同至謂二之合更一。人行先二於梯一爲ㇾ不ㇾ及ㇾ更。人行後二於梯一爲二過更一。今西洋船用二玻璃漏一定ㇾ更。簡而易ㇾ曉。細口大腹。玻璃瓶兩枚。一枝盛ㇾ沙滿ㇾ之。兩口上下對合通二一線一。以過ㇾ沙懸二針盤上一。沙過盡爲二一漏一。卽倒轉懸ㇾ之。計二一晝夜一。約二十四漏每ㇾ更

以代レ名耳。今人不ニ復識一。見ニ押字一便怒とあれば。西土の書狀は。印を用ひず。押字を用ひて名に代ふとみえたり

赤　錢

唐書郴州桂陽郡の土貢に。赤錢あり。連州連山郡の土貢にも赤錢あり。桂陽郡の章義縣連山縣より銅出づるによりて。鉛錫を雜へざる銅錢を鑄て。赤色なるゆゑに赤錢と云ふなるべし

潮

潮の漲退。月にかゝるといへども。地勢と海勢とによりて不同あり。我國東海は。潮の漲退あれども。北國は漲退なし。これにて地勢によることしるべし。中山傳信錄に云く。福建北極出レ地二十六度三分。今測琉球北極出レ地二十六度二分三厘。琉球偏度去ニ北極中線一。偏東五十四度。與ニ福州一東西相去八度三十分。毎レ度二百里。推算徑直海面一千七百里。而琉球潮候與ニ福建一不レ同。率後ニ三辰一。東西地勢復自然之理也。各洋海舶柁工言レ之皆不レ同。西洋一日一潮率以レ申漲。以レ寅退。是又以ニ一晝夜一爲ニ消息一矣。潮生。潮漲。潮退。率三辰爲レ準。今略列表如レ後と。

列表の圖左にのす。福建琉球赤道を去ること同度にして。海つゞきよりその間に國なければども。東西相去ること八度餘にて。潮候三辰のたがひあれば。これにて海勢によること知るべし。說楛に瓊海潮不レ以ニ晝夜一望以前東流。望以後西流すとのすれば。潮汐の一ならざることとしるべし

●潮漲　○潮退

	初一初二十六十七 福建 琉求	初三初四十八十九 福 琉	初五初六二十二十一 福 琉	初七初八二十二二十三 福 琉	初九初十二十四二十五 福 琉	十一十二二十六二十七 福 琉	十三十四二十八二十九 福 琉	十五三十 福 琉
子		◉			◉			
丑		●	◉		●	◉		
寅		○	●	◉	○	●	◉	
卯	◉		○	●	◉	○	●	◉
辰	●	◉	◉	○	●	◉	○ ◉	●
巳	● ◉	●	●	◉	○	●	●	● ◉
午	●	○ ◉	○	●	◉	○	○	●
未	○	●	◉	○	●	◉		○
申		○	●	◉	○	●	◉	
酉	◉		○	●	◉	○	●	◉
戌	●	◉	◉	○	●	◉	○ ◉	●
亥	○ ◉	●	●	◉	○	●	●	○
子	●	○	○	●		○	○	
丑	○			○				

年　號

下野國那須湯津上村の碑文にてみれば。我國暫く唐

し。藝林伐山に云。皮日休詩襄陽作二髹器一中。有二庫露眞一。註玲瓏空虛故曰二庫露一。今諺呼二書格一曰二庫露格一是也と。これにて庫露眞は書格の內。むなしき漆器にて。花文をなし。或は碎石にてかざりたる者なること知るべし。盛來は五かざり十かざりと云ふことなるべし。皮日休が詩。通典唐書みな庫露眞の三字つゞきあれば。庫にして內の眞まで露るゝゆゑ。庫露眞と名つけたるなるべし。楊升庵庫露の二字を註して。眞字を註せず。升庵の博物なるも。たま〱通典唐書を考へざるにや。（眞の字を註せざれば。皮日休が詩解せず）皮日休が詩。正字通康煕字典みな露に作れば。通典。唐書省略して路に作るとみえたり。通典眞を貞に作るは。眞貞は義の通する故なるべし

魚皷簡板

心越禪師持ち來りたる魚皷簡板。續文獻通考その制をのす。其文左の如し

魚皷制未レ詳。用二婦女八人一。服二雜綵衣一。槲葉魚皷簡子與二男子八人一。又男子五人執二龍頭藜杖一。齊舞。唱二山荊子帶襖神急之曲一。按近制截レ竹爲レ筩。長三四尺。以レ皮冐二其頭一（皮用二猪脬上之最薄者一）用二兩指一擊レ之。簡子則以レ竹爲レ之。長二尺許。濶四五分。厚半レ之。其末俱略反レ外。歌時用二二片一。合二擊之一。以和レ此。卽其制也。歷代未レ有。當下自二胡元一所上レ製耳。宜レ入二俗部一

これにて魚皷簡子俗樂の器なることしるべし。宣政雜錄曰。靖康初。民間以二竹徑二寸長五尺許一。冐二皮於首一。皷成二節奏一。取二其聲似一曰二通同部一。又謂二製作之法一曰。漫上不レ漫。通衢用以爲レ戲云々と。これ魚皷の始めとみゆ。續文獻通考これをのせざるは一缺なり。さて靖康は宋の欽宗の年號にて。欽宗金へ虜はれ宋亡びて南宋となりたれば。魚皷は君子の玩すべき器にあらず。簡板は板牌のことにて。簡子にあらず（誤り傳へて。簡子を簡板と云ふとみえたり）

簡　板

老學菴筆記曰。士人有下金漆板代二書帖一。與二明儕一往來者上。已而苦二其露泄一。遂用二竹兩片一相合。以二片紙一封二其際一。久レ之其製漸精。或又以二綀囊一盛而封レ之。南人謂二之簡板一。北人謂二之板牌一。其後又通謂二之簡板一と。これ今の拭板の類なり。孫公談圃に。先朝人。書狀簡尺。後多用二押字一。非二自尊一也。從二簡省一

中爐甘石鎔化成レ圓。冷定毀レ罐。取出。每十耗去ニ其二一。卽倭鉛也。此物與レ銅。收伏入レ火。卽成レ烟飛去。以ニ其似一レ鉛而性猛故名レ之曰ニ倭鉛一と云ふ

食草木葉法

農政全書に。草木の葉を食ふ法あり。其文左の如し

食ニ草木葉一法。用ニ杜仲(去レ絲鹽炒)茯苓。甘草。荊芥等分一爲レ末。糊丸如ニ桐子大一。每服數丸。細嚼卽喫ニ草木一可ニ以充一レ飢。止有ニ竹葉惡草不一レ可レ食この法凶年の一助なるべし

開河

續二三場群書備考に云く。王氏注ニ溝形一。當ニ如レ罄直行一。折行五而曲ニ其勢一。是以水流湍激疾而不レ壅也。太河之水十里一小曲。百里一中曲。千里一大曲。水勢然也。今人開レ河。徑直而身狹。初无ニ參伍罄折之法一。內水箭射而海潮逆衝。泥沙直上無レ所ニ廻旋一。勢必就レ闕下流。既闕上流自潰。若果倣ニ奠水法一行レ之。寧患ニ河患一乎と。これ水學に志ある者のしるべきことなり

京秤

由木左衞門の書にて見れば。古へは秤に京目田舍目あること明なり。其文左の如し

北條陸奥守平氏照內
天正六年戊子三月十七日　由木左衞門尉景盛
拜遣高野山(龍光院之內 宗忍房)
二親爲成佛高野山月牌奉納之。但黃金貳兩京目
國宗刀(長サ二尺三寸)

さて天正のころ大判ありとみゆれども。小判なきにや。この金一兩は十匁なるべきにや

高然暉

ある人の云く。高然暉が山は。人皆知るところにして。高然暉何れの代の人なるや知るべからず高克恭(字彥敬號房山)元第一の善書にて。克恭が畫く山は。世に云。高然暉が山と同じことなれば。高克恭を誤りて。高然暉と云ふと見えたりと。其後諸書を考索すれども。高然暉が傳見えざれば。ある人の說よろしからんか

庫路貞

通典に。五盛庫路貞二具。十盛花文庫路眞二具とあり。唐書には襄州襄陽郡土貢。綸巾漆器庫路眞二器。十乘花。文五乘碎石文。柑蔗芋薹とありて解しがた

曰二比輪一者。東晉之初度。曰二大貨一者陳一當二五銖之十一とあれども。王莽が天錢徑り寸二分。重さ十二銖にして。文を大錢五十といふ。唐の肅宗乾元重寶を鑄て。一を五十に當るなり。陳の宣帝太建十一年。大貨六銖を鑄て。一を五銖の十に當つ委しく說かず。吳の嘉禾元年より。晉の元帝の建武元年まで僅に八十六年なれども。葛洪丹陽の人にて吳たいらぎて。父に從ひて晉に入る。その、ち鄉里に歸り。元帝に仕へて江左に在りし故。爭亂の時。古錢得がたきによりて。比輪を用ふなるべし。肘后方に大錢を用ひあり。按ずるに。東晉の初の孫子の舊錢。比輪四文沈郎錢の三錢ばかりなれば。大錢と云ふは。比輪のことにして。大錢と書きかへたるものなるべし潛確類書曰。蜀の直百。吳之當千。晉之比輪。陳之六銖。梁の兩柱。皆是失二之太重一と。是は江左にて比輪と云ふゆゑ晉の比輪と云ふとも。吳の當千すなはち晉の比輪なれば。別に比輪を出だすべからず。其上太重は吳の制なれば。之を晉にかくべからず。潛確類書ふかく考へざるなり

沙　　錢

宋元通鑑高宗紀に。惟得二沙錢一とあり。通雅に唐建中初判。度支趙贊采二連州白銅一鑄二大錢一。一當レ十。亦白選遺意也。讀會要曰。開寶中減二桂陽監歲入白金三之一一。至道廢二邵武成州金場一。又廢二衢州銀冶一。景德中連州寶通山出レ銀以レ圖來獻。天聖中虔州石城產レ銀。置二義豐場一。按諸處言レ銀。則桂陽監之白金二爲白銅一明矣。是自漢之白金幣非二眞銀一。後遂以二白銅一爲二白金一耳。白銅亦稱二靑銅一。慶曆中知商州皮仲客采二靑水靑銅一鑄レ錢。張鶱號二萬選靑錢一。曰レ靑者別三其非二紅黃一也。紅銅加レ鉛則黃鉛太多則色雜近レ黝。鑄者煮黃レ之。惟有二萬曆錢一最好。十錢直一兩。與二開元通室制一合鑄用二白銅一。民間每多用レ之。號曰二白沙一と載すれば。宋の沙錢は白沙の類なるべし。さて古へ白金と云ふは眞銀なれども。唐以後の白金は。白銅にて今の白み。又はしやりの類と見ゆ。唐書湖州吳興郡の土貢に。金沙泉あり。沙泉即ち沙錢なるべし

通雅の紅銅加レ鉛。則黃なるの鉛は倭鉛なり。倭鉛は。いま土丹と云ふ。倭鉛の制天工開物にのせて云く。凡。倭鉛古書本无レ之。乃近世所レ立名也。其質用二爐甘石一。熬煉而成。繁二產山西太行山一帶一。而斯衡爲レ次レ之。每二爐甘石一十斤裝載入二一泥礶內一。封果泥固以漸砑乾。勿レ使レ見レ火。折裂。然後逐層用二煤炭餅一。墊二盛其底一。鋪レ薪發レ火。煆紅礶

る。定西はからず佐志貴に逢ひ。佐志貴は駿府にて卒し。清見寺へ葬り。塚あり。定西も出家して。（出家せること法師傳に委し）東都の深川に住居して死す

事

宋元通鑑に。金銀酒器六事とありて解せざりしに。通鑑正編に。昔討二默啜一甲兵皆貯二清河庫一。今有二五十餘萬事一とありて。胡三省の注に云く。一物可レ以給二一事一。因謂二之事一とありて。解したり

者

咨文の終に。須レ至レ咨者とある者の字を。長崎の古人に尋ねしに。我國に。てへればと讀むこゝろにて。然の辭。畢竟附字とみるべしと云へり。行厨集に。須レ至レ牌者とあれば。牌にも者の字を用ふるなり

比輪錢

葛洪肘后方に。比輪錢を用ひあれども。周より晉まで比輪と云ふ錢を鑄ることとみえず。晉書食貨志に。（文獻通考これに同し）元帝過レ江用二孫氏舊錢一。輕重雜行。大者謂二之比輪一。中者謂二之四文一。吳興沈充又鑄二小錢一。謂二之沈郎錢一と。のすれば西晉は魏の五銖錢を用ふれども。吳は遠國ゆゑ。竊に孫氏の舊錢を使ひ。元帝江を渡りて。草創の時なれば。吳俗に從ひて孫氏の舊錢を行ひ。輕重雜行するなるべし。これにてみれば。比輪は元來錢の名にあらず。吳ほろびて。吳人の俗稱にて東晉俗稱によるなるべし。三國志に。吳の孫權嘉禾五年春。鑄二大錢一。一當二五百一。赤烏元年春。鑄二當千大錢一とありて。（當五百當十の二錢形狀輕重を記さず。孫氏の時の一文使の錢は。後漢の諸錢なるべし）孫氏の舊錢。この二錢の外なければ。東晉の大なる者を比輪と云ふは。孫氏の當千の大錢にしてよほど大なる錢なるべし。（當千の大錢ふたつ輪にて。兩輪相比ぶによりて。吳人比輪と云ふにや。考ふべからず）中なる者を四文と云ふは。孫氏の當五百の錢なるべし。（當五百の錢の重さ一文使の錢の四文にあたるゆゑ。四文と云ふにや。考ふべからず）沈充傳なければ。何れの代の人なるや知るべからざれども。又鑄といふにてみれば。西晉の時の吳人なるべし。（晉書に王敦に與する沈充あれども。この沈充と別人とみゆ）齊の孔覬が云く。自二漢鑄二五銖一。至二宋文帝一。歷二五百餘年一不レ變者。輕重可レ法。得二貨之宜一也と。（漢より劉宋の文帝まで。錢を鑄ること一ならざれとも。五銖ばかり久しく行はるゝゆゑ。孔覬これを云ふなり）これによれば。東晉の初度は。孫子の舊錢沈郎錢を行ひたれども。後々は五銖錢多く。江左へ入りて。江左にても五銖錢を使ふとみゆ。通雅に。曰二大泉一者。王莽曰二重輪乾元一者。唐肅曰二嘉禾一者。吳一當二五百一也。

眼罩

尺牘天葩に。褦襶(タイタイ)子卽今之眼罩とありて。眼罩は竹を胎とし。帛を蒙らしめ。暑の時に戴く涼笠なり

七歳兒詩

豐大閤朝鮮を伐たれし時。七歳の兒を虜にして連れ歸りしに。其兒。七言絕句の詩を作りければ。それに感じて其兒をかへさると云ひ傳ふ。あはれなることゆゑ其詩を左に記す（在大唐と云ふ句にて見れば朝鮮の人にこれなく明の兒とみえたり）

夢裏分明歸二故鄕一。雙親向レ我問二扶桑一。華鯨樓上一聲曉。欹レ枕猶疑在二大唐一

さすが西土の兒なればこそ。七歳にしてはよく作りたれ。明史孝義傳曰。麴祥字景德永平人。永樂中父亮爲二金山衞百戶一。祥年十四被二倭掠一。國王知レ爲二中國人一。召侍二左右一。改二名元貴一。遂仕二其國一。有二妻子一。然心未三嘗一日忘二中國一也。屢諷レ王入貢。宣德中與二使臣一偕來。上疏言。臣夙遭二俘掠一。抱レ釁痛レ心。流離困頓艱苦萬狀。今獲三生還二中國一。夫豈由レ人。伏乞賜二歸侍養一。不レ勝二至願一。天子方懷二柔遠人一。不レ從二其請一。但許二給レ驛暫歸一。仍還二本國一。祥抵レ家。獨其母在。不レ能レ識。曰。果吾兒則耳陰有二赤痣一。驗レ之信。抱持痛哭。未レ幾別去。至二日本一啓以二帝意一。國王允レ之。仍令二入貢一。祥乃復申二前請一。詔許二襲レ職歸養。母子相失二十年。又有二華夷之限一。竟得レ遂二其初志一。聞者異レ之と。これにてみれば西土の人の我國より歸ることこの兒のみならず

定西法師

定西法師傳と云ふひらがなの一卷の書をみれば。定西（石州の人）俗之時（天正の比）薩州より琉球の佐志貴王子に從ひて琉球へ渡る。其比。琉球に我國の人あること多し。定西故ありて。琉球の服を衣て。琉球人に成りて名をヤマトカナゾノと改めて。西土へ渡り。商ひして甚た富みて。琉球へ歸る。（委しく法師傳に曰ふ）其後。我國へ歸りて。大久保石見守に從ふ。さて明より若那主部（文盲の人の記したれば文字疑はし）と云ふ者を琉球へ遣し。日本へ通ずることを止む。これによりて薩摩守より願はれて。神祖の命を蒙むりて。琉球を伐ちて大に勝ちて。是よりまた薩州に屬す。其時我國の人琉球に多く在りし故。速にかくれたりとみえたり。慶長十四年定西（此時定西いまた出家せず）ゆゑ在りて。駿府に來る。（委しく法師傳にあり）此時薩州より主部幷に佐志貴王子を虜にして。駿府に來

糠二石一斗四升二合五勺餘にて。米一升にあつるなり。（今は貫目にかまはず。八斗入三俵を一駄とす）米四斗入の俵の內。俵さんだわら共に繩を除き四百二十目あり。糠三十貫を四俵とし。（糠は單へ俵なるべし）四俵代四文にて。藁一貫六百八十目代二文七厘九々餘を減すれば。一文二分あまる。一文二分は俵をあむの代。繩代にあつるなるべし。糠一升は錢二分三厘三三にて。一斗二文三分三厘三にあたる。此時は風俗質朴にして。澤庵漬。糠漬これなく。鬢付油もなくて。人の手洗も稀に。糠の用甚た少くして糠の價甚賤しとみえたり。いま文字金一兩に米一石として。米にてみれば。此時の物價甚賤しきにもあらず。古は物價の賤しきのみならず。淳朴にして奢らざるゆゑ。上下困窮せざるにや

さて西土にて炭薪の貴きことみえず。只元の時に薪の貴きことあり

京　錢

万治元年。下總國布川村川論の繪圖の裏書に。金一兩二分京錢二百五十文とあれば。關東にては此比まて京錢と云ふとみえたり

吉姑蘿（キリンカク）

近年琉球より來る。キリンカクと云ふ草。中山傳信錄にあり。其文左の如し

吉姑蘿一名火鳳。人家牆上多植レ之。以避レ火。幹似二覇王鞭草一。葉似二鎮火草一。花似二黃菊一。亦有二紅者一。名二福祿木一

刀　飾

先年刀脇指のこしらへを通事をして。唐山人に問ひしに。其答左の如し

刀欄　刀柄謂二之欄一俗語不レ用
刀鞘　俗語用之
釼把　未詳
柄鮫　謂二之魚皮一
目貫　無
縁　無
帯金　無
切羽　未詳再考
鵐目　未詳再考

鐔　刀鼻也或云二劔口一俗語不レ用
紮靶　紮字有二束纒之義一。靶者轡革也
刀盤　俗語用之
柄糸　或用レ糸不レ用糸無レ有二定名一
目釘　未詳
粟形　無
下緒　無
鉏　未詳

百姓二交闕各得中其利上と。室町殿日記に。切米兵庫の賣買一石に付。六匁三分の由とあり。これにて視れば。和同より後。段々に米貴しと見ゆ。和銅の穀は籾米なるべければ。五合摺にして。六升は三升なり。和銅四年より建長五年まで。五百八十四年。建長五年より室町殿まで大抵百三十年に中るなれば。（室町殿日記年號なきゆゑ大抵を云ふ）これにて推し量るに。建長の比。大抵米一石（今の升一石の積なり）正銀五匁に過ぐべからず。（慶長の前は正銀の通用なり）正銀一匁錢百文に當り。錢百文米二斗にあたれり。此價を以て考ふること左のごとし

續文獻通考に云く。洪武十八年令二兩浙及京畿官田一。凡折二收税糧一。鈔毎五貫準二米一石一。絹毎レ匹準二米一石二斗一。金毎レ兩準二米十石一。銀毎レ兩準二米二石一。棉布毎レ匹準二米一石一。苧布毎レ匹準二米七斗一と。明の升國々同じからざるも。大抵明の一升は。今の一升五合餘にして。明の一石は今の升五斗餘にあたる。建長五年は洪武十八年より。百三十二年前なれども。我國は米貴ければ。正銀五匁米一石に當りて。大違あるまじ

炭一駄代百文なれば。大抵一駄を三十貫目として六貫目入の炭。五俵一駄にて米二斗なり

薪三十束三把別に百文は。別は今の毎の意にて十把を一束として。其内三把ごとに代百文と云ふことにて。一束は錢三百三十三文なり。薪二駄の價を炭一駄にあてしとみゆ（薪は大把にて一把半を一駄にあつるとみゆ）薪二駄にて米二斗なり。さて薪十束とあげずして。三十束とあたるは。一束は六駄一把にて。十束は。六十六駄一把三十束は。二百把にして端なきゆゑなるべし

萱木一駄八束五十文。萱木は萱草のことなるべし。此時板屋根少く。萱葺多きゆゑ。萱貴くして。大束にて。八束三十貫目あるを一駄として。薪一駄にあて、米一斗にあたるなり

藁一駄八束。代五十文。これも萱と同じことにて。藁屋根多く。其外藁の用甚多きゆゑ。藁甚だ貴くして。大束にて八束。三十貫目一駄として。薪一駄にあて、米一斗に當るなり

糠一駄。俵一文代五十文は。俵の代一俵一文にあつるなるべし。糠一升。大抵重さ百四十目。（粉米をさりての重さなり）あれば。糠三十貫を一駄にすれば。

福德の年號ありて。後土御門院の勅筆と云ふ

四角

丸

着到の釻

聖觀音供

不動供

福德二年正月一日

我國福德の年號なけれども。後土御門院の勅筆と云ふは。福德の年號しばらく用ひられ。改年ありたれども應仁兵亂の時ゆゑ史官失して書せざるにや

物　價

東鑑に。炭薪糠等の價を定められしことあり。其文左の如し

建長五年九月十一日。被㆑定㆓利賣直法㆒。其上押買事同被㆓固制禁㆒。小野澤左近大夫入道。內島左近將監盛經入道等爲㆓奉行㆒

薪馬蒭直法事

炭一駄代百文　薪三十束（三把別百文八束代五十文）

萱木一駄（八束五十文）　藁一駄（五十文）

糠一駄（俵一五十文）

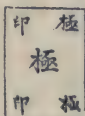
件雜物近年高直過法可㆑下㆓知商人㆒者云々

其頃の金銀米錢の價しれざれば。今の何程に當るやしるべからざれども。我國天福このかた錢鑄られず。建武元年。乾坤通寶錢を鑄れしかとも。兵亂ありしゆゑ。鑄らるゝこと少く。天下に通行せずとみえたり。これより天下錢少きによりて。西土歷代の錢を用ひらる。（宋元通鑑に云。禁㆔日本博㆓易銅錢㆒と。元史に日本遣㆘商人㆒持㆑金易㆗銅鐵㆖許㆑之とあれば。西土より錢の來る多きこと知るべし）室町殿の比より西土歷代の錢を精錢と云ふ（惡錢あるにより て精錢と云へり）關東にては。これを京錢と云へり（京錢は草廬雜談にのす）（關東は應永十年より永樂錢いよいよ多し。委しくは草廬雜談にのす）京室町頭に藏むる。織田殿の書物に精錢とあり。（此書物の寫先年官へあぐるなり）天正二十年。豐臣秀次の次船の朱印にも一文遣の精錢とあり（此朱印は奉使小錄にのす）咸賓錄に云く。（咸賓錄の文は委しく經濟纂要に載す）日本用㆓中古錢㆒。千文價銀四兩と（咸賓錄は明の書なれば室町殿の末より惡錢甚た多く。精錢の價甚た貴きを聞きて。千文の價銀四兩と書きしと見えたり）これにて我國。西土の錢を使ひしこと明なれども。弘長の頃の官錢は。我國の古錢と。唐の開元通寶錢なるべし。東鑑に弘長三年周㆓切錢㆒事可㆓停止㆒之事あれば。建長の比も惡錢ありて。（九暦によれば。天德中に鉛錢鑄られしとみえたり）官錢は甚た貴きこと知るべし。憶ふに正銀一匁に官錢百文に過ぎざるべし。續日本紀に云く。和銅四年以㆓穀六升㆒。當㆓錢一文㆒。令㆔

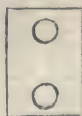
喪二出母一自二子思一始也。由レ是言レ之。子思且無二出妻之事一而況於二伯魚一乎。況於二孔子一乎。其曰下子之先君子上。非レ指二孔子伯魚一也。猶レ曰二子先世之人一云爾。讀者不レ察。遂訛傳爲二孔氏出妻一。致レ使下大聖大賢負中千古不白之寃上。卽謂二漢人皆謬一。又未レ有レ無レ故。而毀二聖賢一者。此非下記二檀弓一者之過上。乃讀レ禮者之過也。孟常此論大有二關係一。故附記之と。この說千古の惑を解くといふべし

甲州金

一老人の云く。古き甲州金に竹流し金。鳥目金。六角極印小判あり

竹流し金長さ二十七八分。横八分ほど。厚さ中にて三分ほど。緣にて一分ほど。長きは幅狹く。短きは幅廣し。重さ四十目十兩と云ひて通用す。形圖の如し。中の極印は。極の字上下の極印は見えがたし

鳥目金重さ一匁一分と云ひて通用す。極印なし。形圖の如し

六角極印小判重さ四匁。形圖の如し。表に六角の極印あり。上の六角内に桐あり。下の六角の内に菊あり。裏極印なし

甲州金。甲州略記に載すれども。其後此說を聞くゆゑ。これを記す。その三金いまだ見ず

風氣

五雜俎曰。金弱冠至レ燕。市上百無レ所レ有。雞鵞羊豕之外。得二一魚一以爲二稀品一矣。越二十年魚蟹反賤二於江南一。蛤蜊。銀魚。蟶蚶。黃甲纍纍滿レ市。此亦風氣自南而北之證也と。菅相公の欲に「これのみぞ人の國より傳はらでかみよをうけしきしまの道」とあれば。西土より渡るもの多きこと知るべし。其後奇器異物種々西洋船持ち來る。我國のみならず。西土も天竺西洋より來ること多し。關東は鮎魚絕えてなかりしに。四十餘年鮎魚生ずること夥し。これらにて考ふれば。風氣は西南より東北するとみえたり

福德

相州鎌倉鶴岡八幡の座不冷所（ザサマサヌトコロ）（鎌倉志云。座不冷所は回廊の東方　あり。天下安　の御　願所にて。十二坊輪番に一晝夜づゝ佛經を讀誦するゆゑ。座不冷行法と名づく。或云く。十二坊一時づゝ勤むるなり。）の着到の軸に。德福二年正月一日と彫りてあり。其文左のごとし。同所光明寺にも。祈禱の額の裏に。

者上。其價亦隨低昂。遂改二鑄銀一。名二承安寶貨一。一兩至二十兩一分二五等一。每兩折銀二貫。公私同二見錢一用。又云。更二造興定寶泉一。每貫當二通寶五十一。又以レ綾印製元光珍貨一。同二銀鈔及餘一行レ之。行レ之未レ久又銀價日貴。寶泉日賤。民但以レ銀論レ價。至二元光二年一。寶泉幾二于不一レ用。哀宗正大間。民間但以レ銀市易。此今日上下用銀之始と。これにて後世銀を貴ぶことみるべし

散藥

王氏談錄曰。肘後有二二藥奩一。止藥末數品而已。每レ視二人病一旋取二諸末一。合和加減爲二劑料一。日服不レ盡二其數一。病未レ愈。他日再至。曰藥服不レ如レ數耳と。これ阿蘭陀人の專散藥を用ふると同じ（阿蘭陀に湯藥あれども散藥を專とする也）品字箋に云く。可レ用之材質。皆得レ稱レ料。布帛之可レ滿二剪裁一爲二件料一。辛辣之可レ入二羹湯一爲二椒料一とあれば。劑料は一劑の藥料と云ふことなるべし

唐書五代史注

宋史虞允文の傳に。注二唐書五代史一藏二于家一とあれども。傳はらざるとみゆ。甚惜しむべし

出母

書影に云く。南城張教授孟常。名世經在二上杭一。常語レ余曰。世傳孔氏三世出レ妻。蓋本檀弓所レ載。孔氏不レ喪二出母一。自二子思一始之說。予竊疑レ之。以爲孔子大聖。子思大賢。卽伯魚早夭。亦不レ失レ爲二賢人一。豈刑于之化。皆不レ能レ施二之門內一乎。或曰。古者七出之例甚嚴。有二一二一此則聖賢必恪二行之一。豈孔門數世之婦皆不レ能レ爲二前車之鑒一乎。夫漢宋諸儒共至二辯于五經一多矣。而此獨闕如。或謂禮記皆漢儒傅會之說。語多不經不二必深辨一。然此須二之學官傳二之後世一。而致レ使下大聖大賢冒中千古不白之冤上。此讀書明理之士所レ不二敢安一者也。間嘗反復取二檀弓之文一讀レ之。忽得二其解一。其曰。昔者子之先君子喪二出母一乎。夫出母者蓋所生之母也。呂相絕レ秦曰。先公我之自出。則出之爲レ言生也明矣。其曰下子之不レ喪二出母一何居上。卽孟氏所謂有二其母死者一。其傅爲レ之。請二數月之喪一是也。蓋嫡母在レ堂屈二於禮一。而不レ獲二自盡一。故不レ得レ爲二二年之喪一耳。其曰下其爲二伋也妻一者。則爲二白也母一。不レ爲二伋也妻一者。則不上レ爲二白也母一。夫所云不レ爲二伋也妻一者。蓋妾是也。意者。白爲二子思之妾所一レ出。而子思不レ令三其終二三年之喪一。故曰。孔氏之不レ

入二慶州一之意上。又告二朝廷一。而取下稟所命令之如何上。而還報是料。但此意不下使二外人一知上之。行長之徒。欲レ聞下上官與二我等一論議之事上。竊所冀者。紛紜更須レ愼レ之。我亦勉力圖二之大計一

一我與二上官一所レ論。事成レ之則渡海何難也

一上京而事之成不成消息則先下二送于蔣啓仁一。使二レ之傳通一。我則待下事勢有上光然後下來矣

一亦未レ可レ期也。隨レ時善處爲レ料

一答佟問書二件一樣

義不義可不可已陳二前書一。吾何與二爾的一强分指レ焉也。只待二天下之公論一耳。復何言哉。雖レ然我尙勉力謀レ之

皇明萬曆二十五年三月二十一日　朝鮮北海松雲

此十一件淸正可レ告二諸日本一

此書軍中にて認めしゆゑか。本書一行の文字の數。文字の大小一ならず。大抵一行二十四字にして。四十六行なり

角判

先年角判と云ふ金をみる。其包紙に角判とあれども。正名なるやいなや知るべからず。形下の如し。金の位は。大佛大判の位に同じと云ふ

表

五十目ノ三字ハホリテアリ

コノ書判ハ持主ノ判ナルヘシ

用銀

書影に云く。江漢石使君座上詢二予前代用レ銀之始一。予按。唐宋以前。上下通行之貨。一皆以鐵而已。未二嘗用レ銀。漢書食貨志言。秦幷二天下一。幣爲二二等一。而珠玉龜貝銀錫之屬。爲二器飾寶藏一。不レ爲レ幣。孝武始造二白金三品一。尋廢不レ行。舊唐書憲宗元和三年六月詔曰。天下有レ銀之山。必有二銅鑛一。銅者可レ資二於皷鑄一。銀者無二益於生人一。其天下自二五嶺一以北。見採レ銀坑。並宜二禁斷一。至二韓愈奏狀一始言。五嶺買賣一以レ銀。宋史仁宗紀景祐二年。詔二諸路一歲輸二緡錢一。福建廣易以レ銀。江東以レ帛。金史食貨志。舊例銀每レ鋌五十兩。其直百貫。民間或有下截二鑿之一

一庚寅歲送使於日本者。只是交隣通信相好而已矣。非皈服也

一此時對馬島守與行長所奏僞也。欺圖日本及我朝鮮。非實語也

一我國有君臣父子。而後爲屬大明之國。君臣義定。誠心事大。雖天地覆墜而不易也。何可與日本借道而同伐大明也。是臣叛君。子叛父。天地之間寧有此理乎。寧可百死也。不願聞此等語

一對馬守與行長。何得以借道事進告于我國也。雖有此等傳語我國只可伏死而已矣。豈可所得從也。是以萬不聞此等語也

一六年前日本軍兵渡海之初。逢城卽毀。見人卽殺。何暇通借路之說。何暇論從不從殺不殺也。行長等報太閤之說。是又太欺圖日本也

一五年前日本軍兵出京城之時。王子放還則國王親渡海致謝之說。實出於何人之口也。割朝鮮地。屬日本之說。又出於何人之口也。出於[illegible]耶。起於行長耶。日本雖擒百王子[illegible]。豈國王渡海致謝之理也。大上官才智出人。豈不知可不可義不義成不成也。而忘爲之哉。知不可成而强爲之。則架竹而打天。敲空而覓響。其可得乎。作此說而報太閤者。欺圖日本。欺圖大門。欺圖朝鮮。欺圖三國。而其庸詎容身於天地之間耶。是人則欺圖天地鬼神矣。欺人猶且不堪。況欺天欺神乎。此必誤國之臣也。不可說不可說。我國則曾未聞此等語也。又不見此等人也。大抵做事。文人則相與論議。義合則成。不合則不成。豈有此等難做底無義事也。吾將此意。皈告朝廷則必付掌也耳。又何言哉

一王子渡海事勢似不難。而義不可也。何也以王子一身論之則宜渡海而伸禮於太閤之前。以宗社論之則不可以王子送禮於君父讎之家。明知決不可送也。況我國王子非天子之命。則入覲天朝。猶且不爲。其能渡海而見讐家之面目耶。然謀在於人而成在於天也。不可言天而不謀也。大上官則宜謀之。而我國則斷之以義也。余皈而先與沈老論

ことは。いまだ聞かざるところなり。さて今の佐渡銀も。この遺風なるべし。佐渡銀の外にあることを聞かず。越後の鉈切銀は。佐渡銀に倣ひていたるなるべし。東鑑に。切錢と云ふことありて解せず。これにて見れば。弘長の比。民間にてひそかに銅を薄く長く吹きて。切りて錢となして通用せしにや。東鑑の文左の如し

切錢事

右近年多出來之由。有二其聞一。於二自今以後一者。用二切錢一事可レ停二止之一。存二此旨一。普可レ令二下知一之狀。依レ仰執達如件

弘長三年九月十日　　武藏守
　　　　　　　　　　相模守

加賀前司殿

さて唐書に云く。兩京錢有二鵞眼古文綫錢之別一。每レ貫重不レ過二三四斤一。至二剪レ鐵而緡一レ之と。切錢も此類なるべし。又同書に云く。鐵葉皮紙皆以爲レ錢と。今のきせるのがんくびの古きを。錢へ雜ふるもこの類なり

西洋印書

阿蘭陀本草等をみるに。甚た精妙にして。萬國に勝れり。西洋の印書は。螺絲轉と云ふ器を用ふること。遠西奇器圖說に載せたり。其文左の如し

西洋印書又用二螺絲轉一。故其書濃淡淺深。曲二盡欵盡之致一

さて遠西奇器圖說は。明の天啓の時に。西海の鄧玉函口授して。關西の王徵譯繪する書にて。西洋の諸器の圖螺絲轉も圖說あり及び說あり。誠に經國に志ある者。講求すべき書なり

天地圓體

我國にて。天地の圓體を云ふこと。中國描談はじめなるべし。中國描談は。防州の商宗設。明の抗州に在りて。大永五年四月朔日に著したる書なり。さて中國描談に。我國は土實して穀美なる故に。南都の諸白。三國の一物なりとほめたり。これにて我國の米の萬國に勝れたること彌しるべし

松雲與二清正一書

朝鮮國の松雲が。加藤清正へ與へし書をみれば。沈惟敬が僞り愈明なり。其書左の如し

日本國入唐使

遣唐使印トアル印

持節大使從四位上太政官右大辨兼越前守藤原朝臣　葛　野　麿

准　判　官　兼　譯　語　正六位上行備前掾笠臣　作

錄事正六位上行式部省太錄兼伊勢大目勳六等山田道大庭

錄事正六位上行太政官左少史兼常陸省上毛野　公　頴　人

明州之印トアル印

本書はこれより餘程大なり。別に寫し藏む

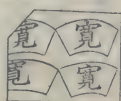
寛字銀

或人越後國長岡にて。先年行使する寛字銀を惠む。形圖の如し

寛　寛　寛　寛

寛ノ字ハ高ク扇ノ形ハヘクボシ裏ハ無地

栄　栄　栄　栄　栄　栄　栄　栄

栄ノ字ハ高ク丸ハクボシ

越後の老人の云く。越後にて通用せる銀は一ならず。長岡にては。寛の字を打ちたる銀を使ひ。（長岡にて吹くは。銀の位宜しからず）新潟にては。榮の字を打ちたる銀を使ふ（新潟正屋吹と云ひて。銀の位上品なり）圖の如し其外。高田等にて使ひたる銀は。形象覺えず。寛字銀。榮字銀も。大抵厚さ二分ばかりに長く吹き。こく印を打ち置きて通用の時に望みて。大小意に任せて。切りて通用せり。故に里言に。鉈切銀と云ふ。元祿九年の秋。越後國諸の銀の通用停止せられて後は。今に至るまで變じて。越後國は金使ひとなれりと。敦書按ずるに。中古金を切りて使ひし事は。人口に膾炙すれども。銀を切りて使ひし

謹言

建武二年五月　日　　金剛峯寺衆徒等上ル

分　疏

輟耕錄に云く。人之自辨二白其事之是否一者。俗曰分疏。疏平聲と今の云分のことなり

鯨

圖書編に云く。鯨頭骨如二數百斛一。一孔大二於甕一と。是いまの鯨なること疑なし。函史に。鯢海中大魚。穴二處海底一。出レ穴則水溢溢。謂二之鯨潮一。皷レ波成レ雷。奮沫成レ雨。能驅二食小魚一。其雌曰レ鯢とあれば。鯨鯢は雌雄たること知るべし。海槎餘錄曰。海槎秋晩巡二行昌化屬邑一。俄海洋烟水騰沸。競往觀レ之。有二二大魚一。遊二戲水面一。頭各下尾上起二烟波一。中約長數丈。離而復合者數回。每二一跳躍一。聲震二里許一。怪而詢二于土人一。曰。此番車魚也。間歲一至二今中州藥肆一。懸下大魚骨如二杵臼一者上。乃此脊骨也と。この番車魚も鯨なり。本草綱目の海鰌もくじらなり。鯨ハ雅名ニシテ。番車魚。海鰌ハ方名也

九　朽

楊升庵全集に云く。先以二土筆一擬二其形一。數次修改曰二九朽一。繼以二淡墨一。一描而成曰二一罷一と。これ書家の燒筆と同じことゝみゆ

舍　利

隋の文帝の齒より舍利を得ること。正史には見えず。古文品外錄にあり。其文左の如し。文帝かくの如く佛に淫するは。國祚の短き所以ならん

隋文帝與レ后每レ食。從二齒下一得二舍利一。以二銀盆水一浮二其一一。出示二百官一。須臾化レ二。凡得二十九粒一。多放二光明一

傳　教　書

叡山の飯室の正禪院に藏むる傳敎の書三卷。その一卷は。日本國求法僧最澄目錄。一卷は天台法華宗年分緣起。一卷は六祖大師の傳にして。紙の表のつきめに。明州之印とある印を押し。紙の裏のつぎめに。延曆寺印とある印を押し。日本國求法僧最澄目錄の卷に。唐の明州の刺史鄭審則が跋あり。跋の後に。入唐使の官位姓名を記せりと云ひて。跋の寫を示す。その文左の如し

大唐貞元二十一年五月十五日。朝議郎使持節明州諸軍事守明州刺史上柱國滎陽鄭審則書

貪欲心切。憍慢思甚。入㆓洛陽㆒伺㆓朝庭㆒。掠㆓賜證道上人之職㆒。遂爲㆓東寺文勸進之聖㆒。苟以㆓隱遁黑衣之身㆒。謬列㆓綱維崇班之席㆒。外號㆓智識聖人㆒。內稱㆓醍醐座主㆒。偏被㆑繫㆓名利之欲㆒。曾無㆓慚愧之心㆒。未㆑改㆓蝙蝠似㆑鳥之質㆒。忽成㆓應鳩變眼之思㆒。剩補㆓一長者㆒。恣掌㆓正法務㆒。未曾有之珍事。不可說之次第也。雖㆑然憚㆓皇憲㆒。道俗側㆑目。恐㆓朝威㆒。貴賤閉㆑口。彼野干對㆓喬尸迦㆒也。坐㆓天衣㆒而說㆑法焉。此文觀之祭㆓茶吉尼㆒也。近㆓龍顏㆒而奏㆑事焉。縱雖㆓好樂㆒々㆓々世間小術㆒。爭令㆑修㆓習無上大法㆒乎。爲㆑法輕忽也。爲㆑宗瑕瑾也。尤擯出宜㆓停廢㆒。自元非㆓大師之門徒㆒。蓋是小乘律師也。抑亦習㆓呪術訛文㆒。豈非㆓追裔之殊俗㆒哉。重檢㆓舊記㆒。弘仁皇帝給以㆓東寺㆒。不㆑勝㆓歡喜㆒。成㆓秘密道場㆒。努力勿㆑令㆓他人雜住㆒。非㆓此狹心㆒護㆑眞謀也。雖㆑圓㆓妙法㆒非㆓五千分㆒。雖㆑廣㆓東寺㆒非㆓異類地㆒。以㆑何言㆑之。去弘仁十四年正月十九日。以㆓東寺㆒永給㆓預小僧㆒。勅使藤原良房公卿也。勅書在㆑別即爲㆓眞言密庭㆒既了。師々相傳爲㆓道場㆒者也。豈可㆘非㆓門徒㆒者猥雜㆖哉。爲㆓我弟子㆒者。末世後世之內成㆓立僧綱㆒

者。非㆑求㆓上下﨟次㆒。以㆓最初成出㆒可㆑爲㆓東寺長者㆓云々。承和官符云。道是密教莫㆑令㆔他宗僧㆒雜任㆖云々。凡於㆓東寺一阿闍梨㆒耶。自㆓實惠僧都㆒迄㆓益守僧正㆒。九十餘代之長者。皆是密家棟梁自門宗匠也。從㆓承和明時㆒暨㆓建武聖朝㆒。五百餘歲之宗務。未㆑雜㆓勸進聖異門僧㆒。嗟呼撰㆓器用㆒者賢王之善政也。誰違㆓先王之德行㆒哉。制㆓異類㆒者。吾師之雅言也。爭背㆓大師之遺誡㆒乎。倩見㆓文觀形儀㆒。頗非直也。事在㆓律家㆒。破戒無慚也。入㆓眞言㆒犯㆓三昧耶㆒。非㆓正道㆒非㆓遁世㆒。既是二途不攝之族也。好㆓武勇㆒好㆓兵具㆒。爭昇㆓一阿闍梨位㆒乎。不㆑知天魔變而滅㆓佛法㆒歟。不㆑審鬼神化惱㆓僧衆㆒歟。爲㆑世爲㆑法可㆑恐可㆑愼。昔南天有㆓凶婆㆒。而破㆓密花園㆒。降㆑彼修㆓與砂子平之法㆒。今東寺有㆓異類㆒而黷㆓宗務職㆒。伏㆑此依㆓金剛峯寺之奏㆒。口開災禍入云。雖㆑憚㆓先言㆒以㆑理糺㆓非據㆒。盍㆑誡㆓後昆㆒仍捧㆓高祖之遺記㆒。欲㆑達㆓未賚之愁訴㆒。望請。天裁被㆔早停㆓止文觀東寺之一長者幷當山座主職㆒者。佛家繁榮遠添㆓龍花樹春色㆒。王化照明遙續㆓星宿劫之曉光㆒矣。不㆑耐㆓懇欵之至㆒。衆徒等誠惶誠恐

以下之地。致違亂之條。太招罪科者歟。所詮止碍妨。如元返付下地於百姓等。嚴密可被致其沙汰。若猶不叙用者。就注進可被處其咎之狀。依仰執達如件

嘉慶二年四月七日　　左衞門佐判

赤松上總介殿

大福田寶憧寺雜掌申。播磨國安田莊。領家。職事。地頭。得平。源太。號德政。任雅意。抑留田畠。以下地。致違亂之條。太招罪科者歟。無謂之由事（本ノマヽ）芐盲所被成御敎書也。早任被仰下之旨。返付下地於百姓等。嚴密可致其沙汰。若猶不叙用者。就注進可有其咎之由。可被相觸之狀如件

嘉慶二年四月廿日　　上總介判

下野守殿

上書

金剛峯寺の衆徒文觀が長者を停めんと請ふ狀。太平記に見えず。參考太平記にもみえず。寶鏡抄にあり。其文左の如し。其頃は高野の衆徒。とかく法外にやかましきものとみえたり

金剛峯寺衆徒等。誠惶誠恐謹言。請下被特蒙二天裁一停丙止東寺勅進聖文觀法師。猥補二長者一忝掌乙宗務甲狀。右謹考二舊貫一。叵唐長安城之左衞有二伽藍。隋文帝勅願號之大興善寺一矣。本朝平安城之東京有二精舍一。桓武聖主叡願名二之敎王護國寺一焉。彼不空三藏翻經之梵閣也。恭授二五智灌頂於三朝一此弘法太師傳燈之道場也。親二致三蜜加持於百王一。鎭國安民之秘術者。誠雖二一致一。令法久住之勝計者卓二礫異朝一者哉。是以弘仁十四年十二月二日官符云。東寺遷都之始。爲レ鎭二護國家一。柏原先朝所レ建也。我朝以二此寺一爲二最頂一云々。大師曰。東寺是蜜敎相應勝地。馬臺鎭護眼目歸而敬者。王化照明華夷太平。怠不レ崇者朝有二妖害一。國有二災亂一云々。料知吾朝安危者專依二此寺興廢一者也。伏惟。我君仁均二上宮之憲政一。德超二太宗之鴻業一。逆浪飜而四海清。潛亂撥而一天靜。五畿七道悉誇二周武一統之太平一。有寮兆民皆歌二漢高三章之制法一。然間元弘元年幸二當寺拜鷲王護國之尊容一。建武又幸二此砌一。遂二鴈塔供養之勅願一。叡信超二他寺一。朝賞勝二餘宗一。自門光花煸二于此時一也。爰有二相似苾蒭一。其名云二文觀一。本是西大寺末寺。播磨國北條寺之律僧也。兼學二算道一好二卜筮一。專習二呪術一立二修驗一。

指腹は後世姦民のなすことにて。詳情公案に注あり。左の如し

指腹男女未ㇾ生。指腹後日所ㇾ生以議ㇾ配

方　圓

舊唐書に。有方圓とありて解しがたかりしに。胡三省通鑑の注に云く。折則成ㇾ方。轉則成ㇾ圓。言下於ニ常税之外一別自轉折以致中貨財上也。これにてよく解したり

兵

讀書雜抄に云く。經中折ㇾ稱ㇾ兵字。皆是戰器之名。これにて古の兵と云ふは。軍卒にあらざることしるべし

起腹尾

九宮譜定に。聲に起腹尾ありとす。假令へば。東の聲。とをんなるこゑ。とを起とし。をを腹とし。んを尾とするなり

刀　子

延喜禪正臺式に云く。凡刀子長五寸以上不ㇾ得ニ輙帶一。但衞府聽ㇾ之と。此比。伊勢守貞親の敎訓狀を見れば刀子のことあり。長祿の比刀子の長さこれにて知るべし。其文左の如し

かたなの事。御前にて立ちふるまふには。わかき者は九寸ばかりの刀。上代より本とす。近代はそのさまうせぬれば。長さ至極一尺八寸ばかり可然候。又當世ある人を見るに。わきざしといひてさす事あり。是はおんけんとて人にかくしてさす事あり。御前にては。たとひ人の見ぬやうにさしたりとも。人に見つけられたらば。上意にたいして。いかなる野心のあるなど丶いはれ。くせごとたるべし。わきざしを可用事は。ぐんぢん。ものまうで。りよかうなどはにあひ候べきなり。中間小者などは。にあひたる事也。にたるものわきざしとみせて。さす事いかなるてがらともおぼえず。常代はや人のふるまひかやうにひれつに成り下り。後世のわかきものいよ〳〵さぞとおもはる丶なり

反田令

先年嘉慶二年の反田の令をみれば。觸と云へる辭も久しきことなり。其文左の如し

大福田寶憧寺雜掌申。播磨國安田庄。領家。職事。地頭。得平。源太。號德政。任雅意。抑留田畠。

日本扇

西土には我國の如き扇なく。明に至りて我國の扇に習ひて作ること。東西洋考に兩山墨談を引きてのす。其文左の如し

兩山墨談曰。宋前惟用二團扇一。元初東南使者持二聚頭扇一。人々皆譏二笑之一。我朝永樂初治。有二持者一。及三倭充レ貢遍賜二群臣内府一。又倣二其制一天下遂通用レ之

頭子錢

宋の苛政に頭子錢ありて。通雅に頭子錢の注あり。左の如し

頭子頭會也。智按。漢頭會箕歛。舊謂下見二人頭一而歛レ錢以レ箕收上レ之。因レ抽レ頭爲二頭子錢一

撒

品字箋に云く。流二放罪人一之名如レ撒レ米。然一去不レ收之謂と。これにて撒の字の義しるべし

洋

侯鯖錄に云。今謂二海之中心一爲レ洋と。これにて洋中の洋知しるべし

著帳戶

遼史に云。凡世官之家泊諸邑人因レ事籍沒者爲二著帳戶一と今の罪によりて使はるゝ者なり

蕎價

杜騙新書に蕎價を載す。これにて西土の諸價推知すべし。その文左の如し

城西驛土至二建溪一。陸路一百二十里常蕎價只一錢六分。或路少二行客一。則減二下一錢四分一。或一錢一分亦擡

粟

太平記元亨元年の夏。大旱して錢三百を以て。粟一斗かふとあり。太平記は西土の詞をうけ用ひたるなれば。今の粟にはあらずして。もみ米のことなるべし

鞦

意就草に。鞦韋囊在二車中一。人所二憑伏一也。今謂二之隱囊一とあり。楊升庵の云く。晉以後。士大夫始作二麈尾隱囊之制一。今不レ可レ見而其名後學罕レ知と。これにて後世は。車に乘ること希なるゆゑ。隱囊すたれるなるべし

指腹

御つぼね方はした衆の切米十二石賣はらひ可申よし被仰越候この頃兵庫の賣買一石に付六匁三分のよしすい田や新右門申候其心得可有之候以上

十二月二日　　加持與兵衛

岡村忠右衛門殿

露銀

露銀と云ふありと聞けども。何國にて使ひしやしらざりしに。或人云く。元來津輕に花降銀（花銀とも云ふなり）と云ふあり。位よろしく形豆板銀の如くにして。大小あり。大なるは胡桃子の如くにして。上圓の下たひらかなり。上の圓中に。瞿粟子。あるひは胡麻子の如くなるあるによりて。花露銀と名つく。極印の有無は覺えず。今も通用するやしらずと。露銀はこのことなるべし

古瓦

先年志賀の王宮の丸瓦をみしに。甚厚くして甚重し。其紋秋牡丹（シウメイギク）の花と見ゆ。我國の古瓦。西土の古瓦。品々をみたれども。志賀の瓦の如く布目なく。古雅なるなし。しかも石はぜありて。志賀の瓦の證あきらかなり。さて甚重ければ。今の宮城の如き柱にては。堪ふまじとみゆ。是にて古王宮の盛なることしるべし

麥

豐後國武田の川中の島に。年々自然と生ずる麥あり。一民取り來りて作るに。實のり甚多くして。農民の助になれるによりて教書懇求して此麥を得て。官へ稟し。國々へやりて作らせ試みるに。地に應ずる所にては。常の麥とは格別實おほし。地に應せざる所は。常の麥に同じと云ふ。よく作り習はせたきものなり

三白酒

四部稿に三白酒ありて。米白。麵白。水白によりて名つく。我國の諸白も三白なれども。水を云はずして。諸白と云ふ

朱戸

明良錄略に。朱戸を賜ふことあり。其文左の如し。これにて朱戸を賜ふの榮なることとみるべし

太祖下二金華一聞二王禕名一。遣レ使徵至二行在一。一見大悅。太祖卽位之後。親戚無二貧福一。皆賜二朱戸一。復二其家一。今村上數家茅屋柴菲上猶施朱

とおぼゆ。吐うるはし普うるはし。加身ひきのまゝ。依身ひきのまゝ。多女まつたしといへるは。兆のたゞしきにしてくしみつけさかりありりやうしといへるは。兆の變なり。こたかにいへばとゆるひたとよりめ。ときれた。とさく。とそれた。とつひた。としひたといへるは吐の變なり。ほそうひた。ほみた。ほきれた。ほさゝ。ほそれた。ほかくめたといへるは。普の變なり。加身いきし。加身をたしひ。加身きれた。加身なるたへといへるは。加身の變なり。依身いきしひ。依身をたしひ。依身なるた。依身なるたへといへるは。依身の變なり。多女うちとをれた。多女ほかとをれた。多女きれた。多女ぬきことをし。つき多女といへるは。多女の變なり。なほよそ下法は。兆をえてよしあしをしるなり。卜の字はそのたちにして。たていつゝよこみつにうがちたをもてやき吐よりはじむ

郡

遠州磐田郡見付驛は。一郡一村なり。さて郡數も古の如くならざるもあり。武藏國二十一郡。信濃國八郡といへども。今武州は二十郡。信州は七郡なり。先年武州多摩郡より出だせる古事にて考ふれば。多摩は東多摩。西多摩と書しあれば。多摩をわけ東西二郡となしたる時もあるにや。多摩は東多摩。西多摩と云ひて二十一郡となしたりとみゆ。信州は伊那郡を二に分けて八郡となしたるなるべし。國家今豆州に居澤郡を置かれ。下總國の葛飾郡を分けて武州に屬し。武州。總州に葛飾郡あれば。郡の沿革古今一ならずとみえたり

木綿布米價

室町殿日記に。木綿布米の價あり。其文左の如し此室町殿日記は。平かな交り一卷の日記なり。片かな眞字の日記にあらず。室町殿日記は二通あり

中間衆の木綿三十五疋置取其役舟彦三に登せ申候可有御請取候こつまもめんは今ほと一疋付一匁六分七分の賣買に而候これらもこつまもめんにおとらぬもめんにて御ざ候一匁三分づゝにさだめ申候間其心得可有之候以上

十一月廿五日　加持與兵衛

岡村忠右衛門殿

左の如し

當町室町頭寄御免除御下知幷朱印有之上者宿に
非分之族有之者堅申付可令馳走候恐々謹言

木下藤吉郎

三月六日　秀吉判

室町頭

町中

今の馳走と云ふと大に異なり。何比より變じたるにや

豐太閤書

豐太閤は。平假名の文にて往返せられきと云ひ傳ふ。左もあるべし　先年相州筥根權現別當より出だし、太閤の書。平假名なり。其後。或人の藏むる太閤の書の寫を見るに。平假名なり。其文左の如し

きさしつゝ、大工一人めしつれ候てこし可申みやけなと候てこし候はゞくせ事にて候まゝ其よをゐ（用意）すこしもいたし候まじく候てむまのり二人ばかりめしつれみちのぞうさなきようにいたし候てこし可申しぜんくわんはく殿より正月の禮に人よこせ候はゝよしたをめしつれこし可申候ふしみのふしんの事ねんころにいそき申つけべく候以上

わざと申つかわせ候こうらゐ（高麗）ゑこし候はんまへに申つけ候はん事おそく候まゝ正月五日すき候はゝ十日より內に其方をたち候てこし可申候此方には五日のとうりうたるべく候まゝ其心候ていそきこし可申又ふしみのさしづもたせ大工のがてんいたし候を一人めしつれ候てこし可申ふしみのふしんな大事にて候まゝいかにもへんとうにいたし可申間いそかしく

大かう

みんふほうゐん

龜卜

龜卜の法。西土に傳はらず。反りて我國には。神功皇后の三韓征伐の時より。對馬國に龜卜の法傳はりたりといへども。いまだ其書を見ざりしに。對州の儒臣雨森氏が。著せる狂草に。龜卜のことを載せたれば。對州には龜卜傳はること明なり。其文左の如し

この國につたへし龜卜は。いにしへの遺法ならむ

し故に。何年と云ふことを問はず。恨むべきことなり

中　城

天正の比には。江戸に城三所にありと云ひ傳ふ。先年武州多摩郡より出だせる天正四年三月晦日の書にてみれば左もあるべし。其文左の如し

江戸中城塀之事

四間　　阿佐ヶ谷

右江戸中城四間當づゝ請取自今以後定置者也依之掟條々

一大風吹散時者島津主水。小野兵庫。太田四郎兵衞三人觸次第修覆可致之事（全文長き故に略す）

さて今も西久保の土とり場を城山と云へば。三所にもありしなるべし

賜一字

先年甲州より出だせる書に。一字を賜ふときの書あり。其文左の如し

實名

君　好

天正四年丙子七月六日　　信君判

これは武田信君と云へり

元人攻ニ小茂田浦一

善隣國寶記に。文永十一年元の世祖高麗を先導として。對州の小茂田の浦へ攻め入る。宗右馬允助國家臣兵衞三郎資定州内の人數を帥ゐ。捍衞の力を盡すと云へども。遂に君臣戰死すとあれば。對馬を攻めとりたりと見ゆ

阿蘭陀尺

阿蘭陀にては。指の幅をドイムストツコと云ひて。尺法是より起る。それゆゑに尺を足とも云ふと云へり。家語に孔子の云く。布レ手知レ尺。布レ指知レ寸とあれば。西土も同じことゝみえたり

阿蘭陀銀

寬文年中の長崎の差出書をみれば。阿蘭陀船。銀を載せ來るとあり。阿蘭陀は銀の價。賤しければ我國の銅と交易をなして宜きゆゑなるべし。（或人の云く。今も阿蘭陀銀を銅と貿易をなしなば。我國の一益ならんと）

馳　走

京室町頭にある豐太閤の朱印にてみれば。馳走とは非分の者を馳せはしらしむることゝみえたり。其文

甲州萩原村雲峯寺に。武田信玄孫子の旗あり。その旗左の如し

孫子の旗長さ壹丈壹尺六寸。幅二尺三寸。疾如レ風。徐如レ林。侵掠如レ火。不レ動如レ山と云ふ文字ありて。紺地文金銀なり。諏訪法性の旗。長さ壹丈三尺五寸。幅壹尺五寸。南無諏訪南宮法性上下大明神の文字あり。赤地文金銀なり。日丸花菱の旗もあり 赤地紋黑

明州開元寺鐘

明州の開元寺へ我國より鐘を鑄て與へしこと。都氏文集にあり。其文左の如し

大唐明州開元寺鐘銘一首并序

乙酉歲二月癸丑十五日丁卯。日本國沙門賢眞敬造二銅鐘一口一。初賢眞泛レ海入唐。經二過勝地一。明州治南開元寺可三以繫二意焉一。可三以降二心猿一。自就一遊。留連數月。有二雲樹一。有二烟花一。有二樓臺一。有二幡蓋一。禪器之類亦多備焉。但獨闕者揵椎而已。擧寺僧徒相共恨レ之。其中長老語二賢眞一。嘗聞。本國好修功德。若究二衆治之功一。以合二雙鑾之製一。徙二彼扶桑之城一。入二我伽藍之門一。遍滿國土不レ得レ不二隨喜一。第二天衆不レ得レ不二敬聽一。爾時賢眞唯然許レ之。歸レ鄉之後。便鑄二此鍾一。送二達彼寺一。遂二本意一也。直指二鹿苑一遠駕二鼇波一。物出二一方一。善分二兩處一。寸心丹實之信。取レ鑑十杖。萬里滄瀛之程。變道一箭念之至也。感レ之通也。推二前王一以言レ之。引二後事一以銘レ之。小僧昔有三誓二願於彼寺一。彼寺今有レ因二緣於小僧一明矣。若不レ然者得レ如レ是乎。凡寺靡レ不レ有レ鐘。鐘靡レ不レ有レ銘。无レ鐘何以驚レ衆。無レ銘何亦示レ人。況乃天非二常天一。地非二常地一。今日謂二之谷一。明日謂二之陵一。庶使二大小衆生台黑四輩千歲捨視一辨一。刻久有二所進士京華封者一。爲二之銘一曰

梟氏三思。鴻鐘四名。赤銅煉盡。朱火冶成。褰レ唇吐レ氣。聚レ乳含レ精。和霜秋晚。影月夜更。禪林共振。清籟混鳴。十方中響。三大下レ聲。鬼神魂聳レ天。龍耳驚二梵音一。旁通永離二苦生一

按ずるに乙酉は。清和天皇貞觀七年なり

大暑

一老人敦書に語りて云く。台廟の御時。重陽の後まで暑甚だつよくして。重陽の日朝參の臣に許して。單衣を服せしめられたりと。敦書此時十四五歲なり

跡上云

黒船

土佐軍要記に。慶長元年九月八日。森種崎の麓。葛木濱浦港へ唐船夥く來るとあれども。崑崙奴あれば。西土の舟にこれなく。阿蘭陀船なるべし

麥節

湧幢小品に。一儒生明の太祖の問に答へて云く。禾播ニ種於春一。至レ秋而穫。凡歷ニ三時一。故三節麥則歷ニ四時一。始成故四節と載せたり。左もあるべし

驛馬

豐臣秀次の朱印にてみれば。驛馬の價。京より西は一里十錢なり。（奉使小錄に委しくのす）先年相州より出だせる書にてみれば。關東は一里一錢とみえたり。この錢はびた錢にてなく。精錢一錢なるべし。その文左の如し。この書年號なけれども。この印は北條の印と云へば。天正の比の書なるべし

傳馬參疋可出之上妙之鑄物師之下可除一里一錢
者也仍如件
　　自小田原西上州迄
宿中

コノ所ミエガタシ
堀和伯耆守奉之

さて先年三州藤川驛の問屋三左衞門が出だせる書にてみれば。慶長の比。藤川邊は驛馬一里。京錢八文なり。その文左の如し

以上

急度申越候沙路次中人足壹人に付壹里に京錢八
文宛取可申候但馬半分之積り也

酉二月十六日（按ずるにこの酉は慶長二年なるべし）

村茂介印
安帶刀印
成隼人印
升志摩印
本上野印

藤川
　傳馬衆
孫子旗

宣德時遣二漆工一至二倭國一傳中其法上と。我國蒔繪すぐれたること知るべし

蔓椒

日本紀に。蔓椒此云二保曾紀一とありて。今なにと云ふ木なるや詳ならず。信州。濃州に木にして蔓の如く。葉山椒の葉に似て。秋に至りて。五味子の大さの赤實を結び。小兒實を食ふ。土人實を取りて油となし。保曾紀と云ふあり。これ古の蔓椒なること疑なきが如しといへども。常世蟲あることを詳にせざれば。蔓椒と定めがたし。尚。濃信の人に尋ねて定むべし

倭文

或人云。神代卷に倭文神あれば。今の倭文氏（シトリ）は其後ならんかと。按ずるに。ツとトとはたちつてとにて通じたるなるべし

賜麥種

日本紀欽明帝十二年三月。以二麥種千石一賜二百濟王一とあれば。百濟は貧しき國にて麥種さへなしとみゆ

麪條魚

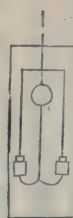
魚品に。麪條魚身狹而長不レ踰二數寸一。銀魚之大者也とあれば銀魚は今のシラスにて。麪條魚は今の白魚なるべし

煙架

中山傳信錄に。煙架の圖ありて。今の煙草盆也

玉衡車

いま流行する水あげは。農政全書に載する玉衡車なり。圖の如し

松煙墨始

松煙墨の始は。久しきことにて。漢の代喩麋山の松煙を取りて墨となす。即是所レ謂瑜麋墨也。しかるに。湧幢小品曰。燎レ松丸レ墨起二于唐方翼一。方翼少孤。母李被レ逐。居二鳳泉里一。執苦養レ母。以レ墨致レ富。後爲二名臣一。是は松煙黑唐に始まるとす疑ふべし

佛足石

南都藥師寺に佛足石あり。西土にも佛足石ありとみえて。續文獻通考に。佛足石のことを載す。其文左の如し

錫蘭山地在二大海中一。多山而翠藍獨高挿レ天。其海邊一盤石上有二巨人足跡一。長三尺許。四季水不レ乾。相傳爲下先世釋迦從二翠藍嶼一來登二此山一足蹋中其

葉似竹也。是にて夾竹の義しるべし

ホウラッカ

阿蘭陀人持ち來る蜜漬のモウマラアカを。ホウラッカと云ふは言ひあやまりたるなり。或人文選六臣注の呉都賦。劉良注引異物志曰。餘甘如梅李。核有刺初食味苦。後口中更甘。高涼建安皆有之と。これモウマラアカなるべしと云へり

櫻

西土の書には。櫻みえず。去る戊辰の年。朝鮮人に尋ねしに。櫻ありてホンナモと云ふと云へり

弄痛

女科百効全書曰。十月未足。臨產腹痛。或止痛不定。名曰弄痛と。弄痛とはよく名けたり

阿蘭陀墨

阿蘭陀の墨は。鐵漿の如し。その方左の如し

五倍子二百五十匁程。桃膠六十四匁程。膽礬六十四匁程。此三味細末酢百三十匁。水百目程交合。右三味の細末を漫し。日に干し用ふ

符

彰明附子記に。七寸爲甕。五寸爲符。終畝爲符。二十爲甕。千二百甕從無衡。深亦如之とありて。符の字の義字書にみえず。按ずるに。陸奥の十符の菅薦の符の字は。薦の編目のことなれば。古へ西土にて。符の字に此義あるによりて。我國にても。書き來れるなるべければ。附子記の符は縦に甕をなし。横に薦の編目の如く。五寸づゝに小うねをなすことなるべし

蟋蟀草

スモウトリ草唐畫にあれども。漢名詳ならざるに因りて。通詞を以て。清人に尋ねしに。雅名これなく。俗に蟋蟀草と云ふと云へり

n

阿蘭陀文字二十五字の内のn（エンナ）（エンナは音にあらず。字の名なり）の字「ナニ」の字のあとへつきても。はねて讀めば。伊呂波のんの字はnの字なること決せり。さて弘法大師入唐の時。歐羅巴の文字を習ひ歸りて。伊呂波を作り。伊呂波の文字つき樣も。歐羅巴の法に依りて。竪につきたるなり。さて伊呂波のはの字は。即ち阿蘭陀文字のhの字なり

泥金畫漆

東西洋考引兩山墨談曰。泥金畫漆之法。古亦無有。

不レ如レ用ニ單輪之滑車兩對一。其所レ倍之力更大。假如ニ一對滑車一。其近遠兩架各四輪。則共八輪其力之加レ大爲ニ十倍一。今有ニ兩對相連之滑車一。其近遠兩架。各有ニ二輪一。則共八輪與レ前同。而其力之加倍爲ニ二十五倍一。與レ前大不レ同也。凡用ニ滑車一運ニ動最重之物一。必須ニ絞架一。所ニ以倍ニ加其力一也。假有ニ相連兩對之滑車一。于レ此各有ニ四輪一。而有レ人在レ丙用ニ四十斤之力一。則能動ニ一千斤之重一。若又添ニ絞架一其絞柄于ニ其絞柱之徑一。如ニ十與ニ一則以ニ四十斤之力一。能動ニ二萬五千斤之重一。故絞架與ニ滑車一互相爲レ用也。若獨用ニ絞架一。則其所レ繞絞柱之一單繩不レ足ミ以當ニ二萬五千斤之重一。若獨用ニ滑車一。則其諸繩雖レ足レ當ニ乎重物一。而其倍力之比例。實不レ及矣。若用ニ絞架一連ニ用滑車一。則合ニ力當レ之而有レ餘焉。又其所レ繞絞柱雖ミ仍有ニ一單繩一。而此一繩則能當ニ雙繩相連八繩之力一也。凡此倍力之所ニ以然一

米價

勢州の人の覺書に。慶安四年勢州にて。金十兩に米四十二三俵。四斗入 承安二年の春金十兩に米四十俵。秋四十六七俵。同三年の秋。金十兩に米三十八九俵。冬四十三俵とあれば。是にて其頃の諸國の米價推知すべし

造道

東鑑に。道作り等のことありて。町屋鋪と云ふも。久しきことなり。其文左の如し

保司奉行人可ニ存知一條々

一差ニ出宅家擔於路一事

一不レ作レ道事

一作ニ町屋敷一漸々狹レ道事一造ニ懸小家於溝上一事

一不ニ夜行一事

右以前五箇條仰ニ保司奉行一。被ニ禁制一也。且相觸之後。七日於レ立レ之者。相ニ具保奉行者使者一。可レ被ニ破却一之狀。依レ仰執達如レ件

寬元三年四月廿二日　武藏守

佐渡前司殿

車佑

注釋雜字曰。放債行レ利。卷ニ人田產一者。曰ニ車佑一。容齋隨筆に云。今ハ出レ本以規レ利。俗語謂ニ之放債一。今の車借と云ふも本つく所あり

夾竹桃

農圃六書曰。夾竹桃夏間開ニ淡紅花一。一朶數十萼。至ニ秋深一猶有レ之。謂ニ之夾竹桃一者。以ニ其花似レ桃

今法止用ニ一輪之滑車一。而力之半能起ニ重之全一。則五十斤之力能當ニ一百斤之重一。若用ニ二輪之滑車一。則是以ニ力之四分之一一。而能當ニ全重一。即二十五斤之力。能起ニ百斤之重一也。三四等輪之比例皆倣レ此。假如用ニ一對滑車一。又須レ用ニ兩絞架一。而一近一遠置レ之。其近者傍ニ于所レ動之重物一。而遠者離ニ于重物一也。今論ニ一對滑車一。以定ニ其如力之比例一。則以ニ近架一爲レ主。蓋近架內ニ小輪若干一。則力必加倍若干也。但比例有レ二。其一平分者以ニ平分之數一解レ之。如ニ四六八等一。其一不平分者以ニ不平分之數一解レ之。如ニ三五七等一。依ニ二法一安ニ定滑車一。則各有ニ不同一矣。如依ニ平分之比例一。安ニ定倍力之滑車一。假如重物在レ庚。滑車各繩定ニ于甲乙丙丁一。人力在レ戊。則加ニ十六倍一。蓋依ニ滑車之力一也。若人力在レ己。則與ニ重物一相等。在レ辛則加ニ二倍一。在レ壬則加ニ辛之力二倍一。己之力四倍。在レ癸則又加ニ壬之力二倍一。卽己之力八倍。益遞加ニ新輪一。則遞加ニ倍力一。有レ如レ此此滑車之輪法。假若倒用而以ニ重物之所レ在。爲ニ人力之所レ在。則重物之斤兩加倍若干。而起レ之速。亦加倍若干。蓋滑車輪多近遠置以ニ兩架一。用ニ一繩一以多繞而相ニ連之一。雖ニ其重大而有ニ垂壓之勢一。然因ニ其繩繞之糾纏一。而勢不レ能ニ驟開一。必有ニ先後漸次一焉。故儀器用ニ滑車一以レ絞動。設縱偶有ニ脫手一。其繩必不ニ能驟開而致レ有ニ崩墜觸損之患一。

新製靈臺儀志圖に滑車の圖あり。左の如し。滑車を考へ作らば。大に世の益なるべし。滑車は今の萬力の類なり

矣。蓋滑車之理。小輪兩架繩々若干。則其用レ力加倍亦若干。又拉レ重者比ニ其所レ拉之重一。行動之捷若干。則其力亦必加倍若干。故滑車之繩一端若レ繫ニ于近架一。拉レ重則更加ニ其力一矣。又用ニ多輪之滑車一對。

羗關防

今清の乾隆の關防これにて見るべし

瑠璃

正字通曰。瑠璃。師古曰。大秦出。赤白黑黃青綠縹絳有二十種一。此自然之物。今所レ用皆銷二冶石汁一。加二衆樂一灌而爲レ之と。これにてみれば。今の瑠璃は皆贋物なり。或の云く。阿蘭陀より來る日を視るゾンカラスと云ふビイドロは。假瑠璃なるべしと。此說の如くならんか

爲裳

明人の幽風を畫ける一軸を視るに。婦人公子の裳を爲る。縫留の糸を齒にて絕つ。いづくも人情同じきこと知るべし

珊瑚樹

輿地全圖曰。珊瑚島珊瑚樹生二水底一。色綠質輕。生白子以二鐵網一取レ之。出レ水卽堅而紅色と。珊瑚を取るは。天工開物に圖ありて詳なり

地差

西極天文志曰。因二月食一以此方食時與二彼方食時一相較。其經度卽可二推得一矣

以レ地驗レ天。每二東西一相距三十度而差二一時一。凡食時在レ前。則定二某地在一レ西。或食時在レ後。則定二某地在一レ東。如三京師月食在二卯正二刻一。西安府則在二寅初初刻一。兩相較而差二二刻一。因知二天度之差七度半一也

總龜

筆叢曰。今世村學塾師敎二小兒蒙求總龜一と。村學にては蒙求を敎ふるも宜なり。總龜は何の書なるやいまだ見ず

引戲

同書曰。以レ令億レ之。戲頭卽生也。引戲卽末也と。俗語の書に引戲ありて解せざりしに。これにて解したり

抿子

行厨集に。抿レ髮者曰二抿子一とあり。髮撫の類にや

滑車

新製靈臺儀象志曰。用二滑車之法一。而運二動儀器一。其便有レ二。省二人力一一也。儀器不レ致二于損傷一二也。其省二人力一者何益。凡人之起レ重。必力與二其重一相等。如二一百斤之重一必須二一百斤之力一。始足二以當一レ之。

朝鮮王を責むる辭なり。又云。每ニ參一斤ー。售價二十兩と。これ同年のことにて。明の季年。朝鮮人參一匁の價銀一匁に過ぎざることと知るべし。天聰は清の大祖の年號にて。明いまだ亡びざる時なり今世朝鮮人參のあたひ至りて貴きは何ぞや。同書順治十年に云く。朝鮮人違レ禁越レ界採レ參被レ獲と。滿州は朝鮮と鄰なるゆゑ界を越えて人參を採りて。滿州へ囚はるゝなり。これにてみれば。朝鮮にも人參少しと見えたり。或の如く。朝鮮の白頭山(ベツラサン)にて。人參を作ると。白頭山は滿州の方なればば左もあるべし

人　事

東齊記事に曰。今人以レ物相遺謂ニ之人事ー。人事は即ち音物なり

渠

墨子曰。備ニ城門ー。城上二步一渠。渠之程丈三尺。冠長十尺。辟長六尺二步一答。廣九尺。表十二尺と。通雅曰若ニ墨子之言ー。渠是今拒馬木品字坑矣と。通雅にてみれば渠は馬を拒くの木なるべし

鐵　鏑

王氏談錄曰。公言古事有ニ相承傳用ー。而不レ見レ出者甚多。如ニ顏回讀書鐵鏑三摧ー。是其一也と。この說の如く。都べて出所しれがたきものなり

大　山

阿蘭陀人カナリー國のビイキ程たかき山は他にこれなし。山の形鎗を立てたる如くにて。不二山より大きなりと云ふ

ビイキ
Beek
カナリイ
Canarije

ビーキ并ニカナリイと左行ニ讀

義理之學

癸辛雜識後集曰。劉克莊云。自ニ義理之學起ー。士大夫研レ深。尋レ微之功不レ愧ニ先儒ー。然施ニ政事ー其合者寡矣。夫理精事粗。能ニ其精ー者。顧不レ能レ粗者何歟。是殆以ニ雅流ー自居而不レ屑ニ俗事ー耳。此語大中ニ今世士大夫之病ー也と。後代儒生を用ひざるも宜なり

關　防

上諭條例曰。凡文武大臣。官員關防奉ニ定清話ー欽レ此

正字通に。不レ葬掩ニ其柩一曰レ攢。天子皇后曰ニ攢宮一。亦作レ樌とありて。かり葬りのことなれとも。其義を說かれず。數書按ずるに。禮記の喪大記に。君殯用ニ輴欑一。至ニ于上一畢塗レ屋。鄭玄註云。欑猶レ菆也。屋殯上覆如レ屋者也と。これによりてかり葬を欑と云ふとみえたれは。木に從ふ宜しかるべし

步

經國大典の東海諸國の中に。道路用ニ日本里數一。其一里准ニ我國四十里一。計レ田用ニ日本町段一。其法以ニ中人平步兩足相距一。爲ニ一步一。六十五步爲ニ一段一。十段爲ニ一町一。一段准ニ五十負一とあれとも。中人平步を一步となすは聞きあやまれるなるべし

不違門

孔子家語の不レ違レ門の女を。吳嘉謹が集校の本に。違作レ建。注曰ニ不建門名一といへども。門をさらざるの女人情にちかし

寄生

寄生の制。後世に傳はらずとみえて。楊升菴外集に。齊高帝紀。時軍用寡闕。乃編ニ欅皮一。爲ニ馬具一。裝ニ折竹一爲ニ寄生一。不レ知ニ何物一也とあり

一里

西土の一里は我國の六町にあたると。云ひ傳ふれども。明史に二百五十里にて。天度一度を距るとあり。我國の測量三十里にて天度一度を距るは。三十里を二百五十里にて除すれば。四町三分二厘となる。これにて明の一里。いまの四町十九間二分にあたることしるべし

一指

西洋曆曰。如レ論ニ古小里一。一百弓爲ニ一里一。四肘爲ニ一弓一。二十四橫指爲ニ一肘一。四ニ橫麥粒一爲ニ一指一。欲ニ以レ步求一レ里。則應ニ一百二十步爲ニ一里一。步依ニ幾何法一。每得ニ五脚一。一脚約十六橫指と。これにて一指しるべし

人參

本草綱目人參集解に云く。宗奭曰。上黨根頗纖。長根下垂有下及中一尺餘上者。或十岐者其價與レ銀等。稍爲レ難レ得と。宋の時は難レ得。上品人參一錢其價銀一錢なり。大淸紀事に云く。人參初時每レ斤十六兩。王誑云ニ明人不レ用而減レ價。頓至ニ九兩一と。これは淸の大祖天聰八年のことにて。此王は朝鮮王にて。

數九。此交互相乘也。以二七八九六陰陽之數自然一故有二九年七年五年三年之災一と。これにて解す。陽九百六は無益のことなれども。書は解得するよろしかるべし

板

沈之奇大清律輯註に。笞杖訊杖の注あり。左に記す。これにて清の笞杖の輕重しるべし

笞杖皆用二荊條一。但以二大小一爲レ荊。擬二定罪名一。而後決レ之也。板卽古之訊杖。或竹。或木。犯レ罪不レ承者以レ杖訊レ之。非二笞杖之杖一也。訊杖重。笞杖輕。故折算決レ之

石奴石

羽州佐州の海濱にて拾ひ得る矢根石にて。硝子および今里茶碗彫むは。阿蘭陀のちやまんの類とみゆ。いまの人ぎやまんと云ふは誤なり

阿蘭陀藥

阿蘭陀人常に用ふる下藥のヒヨルハンムアルムデと云ふ。煉藥を飲むに少し酢くして。甚た緩く。下してよろし。阿蘭陀のタマレインボヲムと云ふ木實を煮。すりこしたるものなり。この實を蜜漬になして食へは。口中をさはやかになす

阿蘭陀兩城圖

我國の城の制は。西土にこれなし。織田殿の時。南蠻人今の城制を傳ふといふ。北條流にては。阿蘭陀の八葉城の制に倣ふと云ふ。和蘭の二城の圖。左の如く。ニコージエの城を。我國にて八葉城と云ふ。

メルデン　ニコージエは。阿蘭陀の地名なり

攅

時記事。江南三月爲㆓迎梅雨㆒。五月爲㆓送梅雨㆒。又坪雅閩人以㆔立夏後逢㆓庚日㆒入梅。芒種後逢㆓壬日㆒出梅。又碎金芒種後逢㆓壬日㆒入梅。夏至後逢㆓庚日㆒出梅。又神樞芒種後逢㆓酉日㆒入梅。小暑後逢㆓未日㆒出梅。諸說不㆑一。要㆑之芒種後。逢㆑酉之說近㆑是。盖其時雨能班㆑衣也。又按楚辭顏黴黎以沮敗兮。注黴音眉。面黑也。說文物中㆓久雨㆒。青黑曰㆓黴然㆒。則班㆑衣梅當㆑作黴

本草綱目は芒種の後。逢㆑壬爲㆓入梅㆒。小暑後逢㆑壬爲㆓出梅㆒。我國の曆は芒種の後。壬日に逢ふを入梅となして。出梅を推す。雅俗稽言の說にても一定しがたければ。姑く闕きて論ぜざるよろしかるべし

肉生

脯鮓品に云く。肉生法用㆓精肉㆒。切㆓細薄片子㆒。醬油洗淨。入㆓火燒紅鍋㆒。爆炒去㆓血水㆒。微白卽好。取出切成㆑絲。再加㆓醬瓜。糟蘿蔔。大蒜。砂仁草。果花。椒橘絲㆒。香油拌㆓炒肉絲㆒。臨㆑食加㆑醋。和勻食㆑之甚美と。本草に肉生あれども其法なし。これにて詳なり

陽九陰六

前漢書の陽九百六。註あれども解しがたし。資治通鑑の註に云く。孔穎達曰。凡水旱之歲。曆運有㆑常。按律曆志云。十九年爲㆓一章㆒。四章爲㆓一蔀㆒。二十蔀爲㆓一統㆒。三統爲㆓一元㆒。則一元有㆓四千五百六十歲㆒。初入㆑元一歲爲㆓陽九㆒。謂㆓旱九年㆒。次三百七十歲。陰九謂㆓水九年㆒。以㆓一百六歲㆒。幷㆓三百七十四歲㆒。爲㆓四百八十歲㆒。注云。六乘㆑八之數。次四百八十歲有㆓陽九㆒。謂㆓旱九年㆒。次七百二十歲。陰七謂㆓水七年㆒。次七百二十歲陽七。謂㆓旱七年㆒。又註云。七百二十歲九乘㆑八之數。次六百歲。陰五謂㆓水五年㆒。次六百歲陽五謂㆓旱五年㆒。注云。六百歲者以㆑八乘㆑八八八六十四。又以㆑七乘㆑八七八.五十六。相幷爲㆓一千二百歲㆒。於㆑易七八不㆑變。氣不㆑通。故合而數㆑之。各得㆓六百歲㆒。次四百八十歲陰三。次四百八十歲陽三。除㆔入㆑元至㆓陽三㆒。除㆓去災歲㆒。總有㆓千五百六十年㆒。其災歲兩个陽九年。一个陰九年。一个陰陽各七年。一个陰陽各五年。一个陰陽各三年。總有㆓五十七年㆒。幷㆓前四千五百六十年㆒。通爲㆓四千六百一十七歲㆒。此一元之氣終矣。此是陰陽水旱之大數也。所㆔以正用㆓七八九六相乘者㆒。以㆓水數六。火數七。木數八。金

九架梁前後卷式

草架 草架 卷 卷 隔間 步柱

小五架梁式

凡造ニ書房小齋或亭ー此式可レ分ニ前後ー

童柱 童柱 童柱 換長柱使裝門 前步柱 後步柱

地圖式

凡廳堂中一間宜レ大傍間不レ宜レ小可ニ勻造ー

列步柱 步柱 步柱 列步柱

凡興造必先式レ斯倫レ柱定レ磉量ニ基廣狹ー次レ式列圖

列柱 襟柱 五架駝梁 脊柱 襟柱 列柱

七架列ニ五柱ー着レ地

襟柱 列柱 五架駝梁 脊柱 列柱 襟柱

列步柱 步柱 步柱 列步柱

托

東西洋考に。指南針の用をのす。其文左の如し

長年三老鼓レ枻揚レ帆。截レ流橫レ波。獨特ニ指南針ー。為ニ導引ー。或單用或指ニ兩間ー。憑ニ其所レ嚮蕩レ舟。此行如欲レ度ニ道里遠近多少ー。准ニ一晝夜風利所レ至為ニ十更ー。約レ行幾更。可レ到ニ某處ー。又沈ニ繩水底ー。打ニ量某處水淺深幾托ー。（方言謂下長如ニ兩手ー分開上者。為ニ一托ー）賴レ此暗中摸索。可下因知ニ某洋島所レ在與ニ某處難險ー宜上レ防

單用とは。乾坤巽艮。甲乙丙丁。庚辛壬癸。十二支の針を單用することにて。單乾。單甲。單子を用ふと云ふ類なり。兩間を指すとは。乾坤巽艮。甲乙丙丁十二支の間の針を用ふることにて。乾亥の壬子を用ふと云ふ類なり。托は打水六托是正路と云ふ類これなり

海𧴩

續文獻通考に云く。雲南賦稅用レ金為レ則。以ニ貝子ー折納と。貝子は卽ち海肥なり。本草綱目に云く。俗作レ𧴩音巴。東西洋考に云く。暹羅古赤土及婆羅利地也。其俗以ニ海𧴩ー代レ錢。海𧴩卽今螺巴。星槎勝覽云。每ニ一萬ー准ニ中統鈔二十貫ーと。紫貝の別名を砑磲と云ふによりて。俗に貝子にも螺の字を付けて。螺巴と云ふとみえたり。巴は肥の省略なるべし

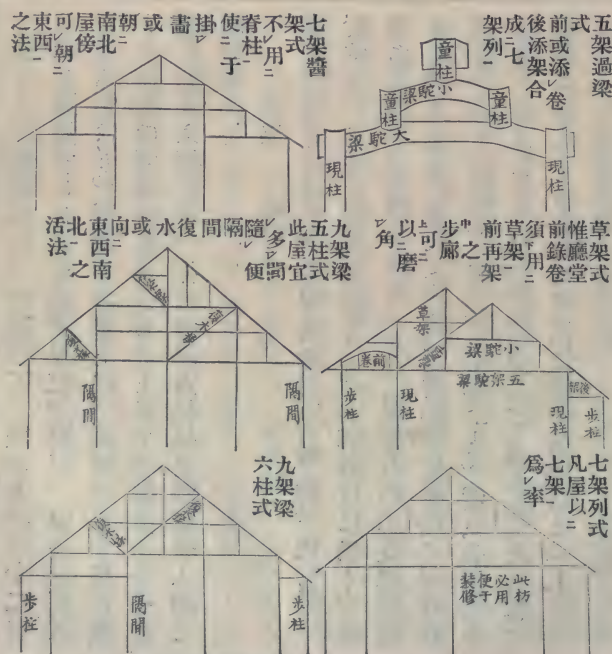
入梅出梅

入梅出梅の說多し。雅俗稽言に說をあつめて入梅出梅を論ず。その文左に記す

南人以ニ衣物斑黑ー謂ニ之上梅ー。以ニ四五月ー為ニ梅天ー。其雨謂ニ之梅雨ー。一曰ニ霖雨ー。又曰ニ煤雨ー。言ニ衣黑如レ煤也。按周處風土記。夏至前雨名ニ梅雨ー。而歲

能ニ爲ㇾ之明一。工長竟斬。衆工愈哀嘆不ㇾ置。徧訪ニ其事一無ㇾ所ㇾ得。乃聚ニ交鈔百錠一置ニ衢路一有下得ニ某工死狀一者上酬以ㇾ是。初婦每ㇾ修ニ佛事一。則丐者坌並也至求ニ供飯一。故偸兒常從ㇾ丐往乞。一日偸兒將ㇾ盜ニ他人家一。尚蚤既熟ニ婦門戶一。乃闇中依ニ其垣屋一。以待ニ迫ㇾ鐘時一。忽醉者跟蹌入。酗而怒ニ其婦一。詈ㇾ之拳ㇾ之。且蹴ㇾ之。婦不ニ敢出一ㇾ聲。醉者睡。婦微ニ誶息醉切詈也燭下一曰。緣ㇾ而殺ニ吾夫一。體骸異ニ處土塲下一二餘歳矣。塲既不ㇾ可ㇾ大。又不ニ敢塡治一。吾夫尙不ㇾ知ニ腐盡否一。今乃虐ㇾ我嘆息飲泣。偸兒立ニ牖外一悉聽ㇾ之。明發入ニ局中一號ニ於衆一。吾已得ニ某工死狀一。速付ニ我鏹一。因俾下ニ衆工一。遙隨往上。偸兒佯被ㇾ酒入ニ婦舍一。挑ㇾ之。婦大詈。隣居皆不平。將ㇾ毆ㇾ之。偸兒遽去ニ土塲一板與擧同ㇾ磚。作下欲ニ擊鬪一狀上。則屍見矣。衆工突入反ニ接婦一送ㇾ官。婦吐ㇾ實。醉者則所ㇾ私也。官復ニ審壕中死人何從來一。件作欵下伏擠ニ騎ㇾ驢翁一墮上ㇾ水。件作婦泊所ㇾ私者。磔ニ於市一。先斷ニ工長死一官吏皆廢ニ終身一。官以下慶死者事若發則官吏又有中得ㇾ罪者數人上。遂寢ニ負ㇾ皮者寃一。此延祐初事也。校官文謙甫以語ニ宋子一。宋子曰。工之死當ㇾ坐下婦與ニ所ㇾ私者一。二人上耳。乃牽聯殺ニ四五人一。此事變之段也。解ㇾ仇而伏ニ酘刀一。逃ㇾ笞而得ㇾ刀。件作殺而工婦磔。負ニ皮道中一。而死ニ桎梏一。赴ㇾ盜而獲ㇾ購。此又轇轕而不ㇾ可ㇾ知者也。悲夫と。

按ずるに詳刑要覽酘刀を毆刀に作る從ふべし

五架草架七架九架地圖式 奪天工に五架草架七架九架地圖式を載す其圖左方の如し

るべからずといへども。意ふに花降銀に同じかるべし。これにて國々にて。銀を鑄て行使することいよ〳〵知るべし

花押　コノ処ニモ印アリ　花押

名用之字

鐵圍山叢談に云く。王羲之子。徽之子。禎之。王允之子晞之。晞之子肇之。王晏之子崑之。崑之子陋之。皆三世同用ニ之字一。胡母輔之子謙之。吳隱之子膽之。顏悅之子愷之。皆兩世同用ニ之字一と。是等通り字の樣なれども。今の通り字の如きことは西土には決してなきことなり

疑獄牽聯

敦書元の任忠が續疑獄集の疑獄牽聯するの事を讀みて。元の治まらざるを知り。又死者寃を含みて。幸に免る丶人の多きを悲む。因りて其文を左に記す

祭酒宋本記ニ工獄一。有レ曰。京師小木局木工數百人。置レ長分領レ之。一工與ニ其長一不レ睦。不ニ往來一者半歲。衆口謂。口語非ニ大嫌一。釀ニ酒肉一强レ工造ニ長家一。和ニ解之一。暮醉散去。工婦素淫。與ニ所レ私者一謀戕ニ良人一。以下其醉ニ於讐一而返上也殺レ之。倉卒藏レ屍無レ所。室有ニ土榻一中空。乃啓ニ榻磚一。劃レ屍爲ニ四五一。始容焉。復磚如レ故。明日婦往ニ長家一哭曰。吾夫昨不レ飯。必而殺レ之。訟ニ諸警巡院一。院以ニ長仇一也。逮至ニ榜掠一。不レ勝レ毒自誣服。婦發レ喪成レ服。召ニ比丘一修ニ佛事一。哭盡レ哀。院詰ニ屍處一曰。棄ニ壕中一責ニ件作二人一。索ニ之壕一弗レ得。刑都御史京尹交促具レ獄。期ニ十日得レ屍。不レ得期ニ七日一。又不レ得期ニ五日一期ニ三日一。四被レ笞終不レ得。二人嘆惋循レ壕相語。笞無ニ已時一因謀ニ別殺レ人應レ命。暮坐ニ水傍一。一翁騎レ驢渡レ橋。擠墮ニ水中一。縱レ驢去。旬餘度ニ翁爛不レ可レ識。舉以聞レ院。召レ婦審視。婦撫而大號曰。是矣。取レ夫招ニ魂壕上一。脫ニ笄珥一具レ棺葬レ之。獄遂成。案上未レ報。騎レ驢翁之族物ニ色翁一不レ得。一人負ニ驢皮道中一。宛ニ然其家畜一。奪而披視。皮血未レ燥。執愬ニ於邑一。亦以ニ鞫訊憯酷一。自誣。劫ニ翁驢一。翁拒而殺レ之。屍藏ニ某地一。求レ之不レ見。輒更曰。某地。辭數更。卒不レ見。負レ皮者庚（音雨飢寒死也）死ニ獄中一。歲餘前長奏下。縛ニ狴（音皮）犴（音岸狴犴獸名獄也）衆工隨而譟。雖ニ皆憤ニ其寃一。而不レ

伐栗

同書曰。郭南爲ニ嘗熟令一。時推ニ能吏一。虞山出ニ軟栗一甚肥美。民摘以獻レ南。食而甘レ之。乃令悉伐ニ其樹一。幷絕ニ其種一曰。後必有下以レ是進奉病ニ吾民一者上と。誠に能吏と稱すべし

惡錢

天正のころ。京より西は金一兩に。鐚五十貫[衍]ほどに當るとみゆ。詳に志寶に載す（我國の鐚の字は。惡錢の二字を省略して。一字となすなり）

瑞穗國

西土のいにしへは。水田少く。岡穗多きによりて。米宜しからず。後世水田大に開くれども。元來岡穗の種ゆゑなるにや。米宜しからず。この比異國の米を見るに。岡穗にして宜しからず。我國上古より水田を專として。米の宜しき萬國に勝ること遠ければ。我國を瑞穗國とも稱せらる丶とみえたり

花降銀

俗說辨に。花降銀の圖を載す（敦書）元文中花降拾兩とある銀を見るに。俗說辨の圖と大樣相似たり。按ずるに。室町殿の末より慶長の比まで。專ら此銀行はれしにや。金銀行使の法。國々一ならずして。花降銀を鑄て行ひし國もありとみゆ。花降銀の二圖爰に載す

俗說辨ニ載スル花降銀の圖

厚サ一分但桐ノ刻印ノワレアリ
橫二寸八分但方二寸八分アリシチ切欠キテトリ遣シ由
重サ四十三匁アリシ由、只今ハ切取の余リ二十三匁アリ

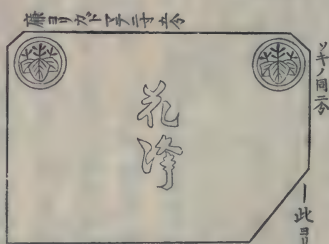
花降
此ヨリ
此マテ人ノ切取リシ形ナリ

花降
淺ク雕テアリ舊四隅ニ圈の內ニ桐ノ刻印アリシ由裏同ジ但裏ハ文字ナシ

元文中近比見ル花降銀の圖

竪三寸五分五厘、橫三寸五厘、厚サ八厘余、重サ四十三匁

花降
拾兩

先年江州佐々木宮の開帳に。花押銀ありとて。江州の人その圖を贈る。其圖左の如し。廣狹厚薄重さし

人の藏むる朝鮮本の韻略と云ふ一冊の書を見れば。三重韻の如く。韻を重ねて。十二門を立てず。宥園韻略によりて。聚分韻の韻を重ねたりと見えたり

姨石

敦書先年使を奉じて信州をめぐり。姨捨山に登り見れば。姨石と云ふあり。姨捨の諸説一樣ならざれども。姨石の事みえず。近頃揚鴫曉筆と云ふ書をみれば。爲氏の說を擧けて。姨石の事あり。その文左の如し。土人この說によりて。姨石と云ふとみえたり

姨捨山と申し侍るは。信濃國にあり。年來母のやうにて養ひたてたる姨を。妻のいふにつきて。甥の男の月あかゝりける夜。ゐて更科山に登りて捨てたりしより。姨捨山とは申すなり。其姨の怨念遂に石になりけるとなん。是は二條の爲氏の說なり

鐵樹

揚鴫曉筆に。鐵樹（揚鴫曉筆は一條の禪閤の作の曉記のことゝかや）と云ふ木を載せたり。今も薩摩の邊にあるにや。その文左の如し

予九州を徘徊せし時。薩摩邊にて見侍りし鐵樹といふ木侍り。三四尺より高きはなし。葉も莖も鷄頭花に似て。それよりはからびて誠の鐵のうち枝の樣なり。花は女郎花などのやうにて。一處にかたまり。梢ごとに咲きて色はから紅のごとし。鐵を末にして。肥しにはするといへり。爰元には見ぬ木なり

石

東齋隨筆に云く。今按。斛は十斗也。また十斗を石とも云ふ。韻書の說なり。石を直に斛の音に讀むこと。延久より始まる歟と。この說の如く。延久の時。穀倉院の斛器を作られしより始まりしならん

劣得

古文品外錄。師鮑照。終不レ及二日中市朝滿一。學二謝朓一。劣レ得二黃鳥一度二靑枝一と。國語註に。僅猶レ劣とありて。劣得は僅に得るなり

塘報

湧幢小品に曰。今軍情緊急。走報者國初有二刻期一。百戶所後曰二塘報一。塘報之取レ義未レ解。所謂 其說亦不著。閱二馬滕藝苑記一云。凡花之丕放者曰二堂花一。堂一曰レ塘。其取二之此一與と。これにて塘の義あきらかなり

四面に書付あり

一面・春日社　　極りたる寸法なし四角なる頭
一面　唯識講往來　の木の長さは書付の文字の數
一面　判一つ何院　によりて長くも短くもする也
一面　實名　　軸の木の長さも字次第也國栖
　　紙又は半紙を用ふるなり

軸の始に施主之願文。次に寄附の式目を書き。次に施物の渡し請取を書きて加印す。年々その次へ紙をつぎたし。書き付けて卷おくなり。外を文卷に卷きて役人寺々をまはり。請取印をとる。箱に入れ置くもあり。箱あるはひもなし

又わり竹を用ひ。頭も軸も。のべ付けに作るあり。又頭を木にして。軸を竹を丸くけづり。或はなよ竹の丸竹を用ふるあり。さて鎌倉鶴岡八幡にある着到と云ふは。往來のことなるべし。關東にては。往來を着到と云ふにや

和蘭無年號

和蘭は年號なし。今年寛保二年なれば。千七百四十二年と云ふ。さて開國よりの年數には。少くみゆるゆゑ。和蘭人へ尋ねしに。開闢よりは五千七百四十六年と云ふ。千七百四十二年は。中興の開國よりなるべし

南　廷

連山雜抄に云く。沙石集の正直の人寶を得と云ふ部に。宋朝の物語を引きて。人の袋を落したるに。銀の軟挺六ありと云ふ。これ今の挺銀なる事疑なし。その頃丁銀を軟挺。南挺とも。云ふとみえたりと。敎書按ずるに。胡身之が釋文辨誤に云く。今人治レ銀。大鋌五十兩。中鋌半レ之。小鋌又半レ之也。謂ニ之鋌銀一と。今の人とあれば。宋朝に鋌銀あること明なり。さて連山氏の說にて見れば。東鑑の南廷は。今の丁銀の類にして。修禪寺紙にあらず

三重韻

三重韻に虎關の序あれども。虎關の時は。聚分韻略と名づけて。韻を三段に重ねず。天野氏の藏むる所の古板の聚分韻略をみれば。十二門を立て、五卷となし。虎關自筆の序。寧一山自筆の跋あり。同人の藏むる享祿庚寅の年刊する聚分韻略三重韻の如く。韻を重ねて跋に。作者宥園。筆者秀篤とあり。是箇便にとりて宥園始めて聚分韻略の韻を。三段に重ねたるによりて。作者宥園と記したりと見えたり。同

元亨三年十月十二日　評定

良慶僧都與二幸勝丸一。相二論越前國泉庄內鍬懸鄉間一事

件鄉事。良慶僧都者以二當鄉一爲二質券一。去應長元年。借二用錢貨百五十貫文一之時。不レ相二副例讓狀一者。難レ治之由。口入人舜實令レ申口難。書與レ之爲二質券一之條。同年十月十三日舜實請文分明之由。令二訴申一之處。如二幸勝丸陳答一者。平民女對二于良慶僧都一。致二奉公一之間。限二永代一。讓二與彼氏女一云々。和二與幸勝丸一。云々。仍披二見件讓狀一之處。不レ相二副本劵一。搆下有二奉公之忠一令中讓與上之段。非レ無二疑殆一。且爲二質券一由來之條。舜實請文分明顯然者。便補二件借物一。於二年土貢一。遂二結解一。可レ被レ返二付良慶僧都一矣

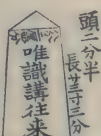
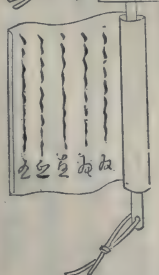
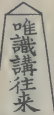
章敦
章房
章躬
章方
明清
秀清

裏ニコノ判アリ
コノ處カク
裏ニコノ判アリ

往來

南都の興福寺に。春日邊往來あり圖の如し。安宅の諸の卷物はこれなるべし。元來今の西國の通り手形の如く。これをしるしにして國々の關を通るによりて往來と名つけしとみえたり

木檜軸同じ

頭二分半
長サ三寸三分
唯識講往來
フトサ寸二分マハリ木四分本末同じ
一尺二寸八分
此所ヘ書付ヲ卷ク
唯識講往來

東西洋考に。瞿褣が云く。兜羅綿。刀矢不レ能レ入と。刀矢不レ能レ入とあれば。今の兜羅綿より厚しとみゆ。同書に兜羅毛毬織成。長者毎レ疋至ニ六七丈一。今人呼爲ニ哆囉嗹一とありて。兜羅綿。羅紗わかちがたけれども。兜羅綿は羅紗のこと、見ゆ。元來西土にて。羅紗を兜羅綿と譯せしを。後あやまりて今の兜羅綿となしたりとみえたり 和蘭にては羅紗をラーケンと云ふ

赦令

柱史抄に赦令をのす。其文左の如し

當日隨ニ職事告一。即以參陣。上卿召ニ内記一。仰云。依ニ其事一被レ行ニ赦令一。詔書可ニ草進一者。内記問可レ被レ用ニ何年例一哉。上卿被レ示者非ニ其口限一。不レ然者相ニ逢職事一。可レ尋者尋ニ問子細一之後。内記成ニ詔草一。入レ筥持ニ參之一。内覽奏下如レ恒。即清書。清書之後。覆奏如レ例。必有ニ御畫一返給。上卿乍レ居レ座。召ニ中務輔若丞一給レ之。輔丞若不レ參者召ニ外記一。外記於ニ宣仁門外一。召レ錄給也 次召ニ檢非違使一。可レ免ニ囚人一之由。被レ仰レ之。但九條殿流召ニ内記一仰ニ詔草一之後。不レ待ニ詔書之施行一。可レ免之旨。召ニ延尉一仰レ之。是即雖ニ一時一。不レ可ニ逗留一。可ニ免赦給一之故云々。抑常赦其例非レ一。改元。朔旦。冬至。御即位。御元服等多是常赦也。其詞云。今日昧爽以前。大辟以下罪無ニ輕重一。已發覺。未發覺。已結正。未結正。繫囚。見徒。皆以赦除。或依ニ先例一。有ニ高年者賑給事一。大赦大辟以下。八虐。故殺人等咸皆赦除。但常赦所レ不レ免者。不レ在ニ赦限一者。大赦絕而不レ被レ行。當時所レ被レ行者常赦非常赦也。非常赦臨時之勅定也。常赦之外。犯ニ八虐故殺。謀殺。强竊二盜一。常赦所レ不レ免者悉皆赦ニ除之一。字可レ加也。或依ニ先例一。調庸未進在ニ民身一者。同以免除。件調庸今年以往。四箇年之外免レ之。故實也。或被レ免下徭牢 徭幷未レ得ニ解由一者上也

閄

湧幢小品の越國俗字の内に載あれば。今の小兒の嬉戯に身をかくして。小兒を驚かすも。西土より傳ふとみえたり。其文左の如し

閄智臧反。言ニ隱レ身
閄忽出以驚レ人也

評定文

先年ある人。元享三年の評定文を寫して示す。その文左の如し。これにて元享の時の評定文みるべし

出で來れり。名あるさふらひのた、かふべき所を。かれらにぬきしせたるゆゑなるべし。されば隨分の人のあしがるの一矢に命をおとして。當坐の耻辱のみならず。末代の瑕瑾をのこせるたぐひもありとぞ聞えし。いづれも主のなき物はあるべからず。向後もかゝる事あらば。おの／＼主々にかけられて。糺明あるべし。又士民商人たらば。立地におほせつけられて。罪科あるべき制禁をおかれば。千に一もやむ事や侍るべき。さもこそ下刻上の世ならめ。外國のきこえもはぢつべき事なるべし

詩學唐韻

字學集要に。詩學唐韻をのせあれども。淸の毛奇齡が著す古今通韻にてみれば。明の時に。唐の詩韻とするも誤なるべし。古今通韻の文左の如し

今世所レ傳詩韻非二沈約韻一。亦非二唐韻一。乃宋南渡後。江北劉淵所レ作。而元迄レ明。誤用レ之者。其書名二壬子新刊禮部韻略一（按壬子爲二理宋淳祐十二年一）

午夜

雅俗稽言に云く。有下謂二午夜一者上。半夜也時如二日午一也と。これ午夜は半夜なり

血脈類衆集記

武州金澤の龍源寺に藏むる。血脈類衆集記十三卷。文明中に寫しゝものにして。血脈のことなれば。世の用にはならざれども。そのうちの承元二年五月十五日とある裏に書けるに。珍しきことあり左の如し

此日雪降上堂列洲之間雷落。法勝寺九重塔燒失

七音

敦書紅毛文字を紅毛人へ尋ぬるに。紅毛文字の寄せ合せ。みな五音なれば。西土の五音は西域の音によること明なり。委くは敦書著す所の和蘭文字略考にて考へ知るべし

艾糕

我國の古への草糕は鼠麴草なり。今の艾糕は朝鮮國より傳へしにや。朝鮮は我國へ近きゆゑ。我國の風俗の移りたるにや。朝鮮賦の註に艾糕あり。其文左の如し

三月三日取二嫩艾葉一。雜二秔米粉一。蒸爲レ糕。謂二之艾糕一

羅紗

の名たること明なり

之字

之は代ことにて。容齋隨筆に委し。其文左の如し。

漢高祖諱邦荀。悅云。之字曰ㇾ國。惠帝諱盈。之字曰ㇾ滿。謂₂臣下所₁避以相代₁也。盖之字訓ㇾ變。左傳陳侯使ㇾ筮ㇾ之。遇₂觀之ㇾ否。謂₂六四變而爲ㇾ否也

買飯

初潭集曰。嘉熙間峒丁反。吉州黃安宰。黃炳鳩ㇾ兵守備。一日五更報₂寇至₁。卽遣₂巡尉領ㇾ兵迎ㇾ敵。皆曰。空腹。炳曰。第速行。飯卽至矣。炳乃率₂吏役₁。携₂竹籮木桶₁沿₂市門₁曰。知縣買ㇾ飯。時人家餐炊方熟。皆有₂熱飯熟水₁。厚給₂其直₁。負ㇾ之以往。士皆飽ㇾ餐。一戰破ㇾ寇と。飯を買ひて士に餐す。誠に有知の人と云ふべし

芋塹

天中記曰。閣皂山一寺僧甚專力。種ㇾ芋歲收極多。杵ㇾ之如ㇾ泥。造ㇾ塹爲ㇾ墻。後遇₂大飢₁。獨此寺四十餘僧。食₂芋塹₁。以度₂凶歲₁と。芋は農民の貯へやすきものなれば。これ救荒の一術なるべし

鮻魚

閩書に云く。鮻魚は細如₂米粒₁可ㇾ鮓とあれば。加州より出づる松百鮓は鮻魚の類ならん

絲金

溪蠻叢笑に。金有₂苗路₁。夫匠識ㇾ之名₂絲金₁とあれば。今の金蔓のことゝみゆ

足輕

樵談治要に。足がると云ふものながく停止すべきことありて。文明のころ野武士などの類にて。惡黨をなす者を足輕と云ふとみえたり。其文左の如し

むかしより天下のみだるゝ事は侍れど。あしがると云ふ事は。舊記などにもしるさゞる名目なり。平家のかぶろといふ事をこそめづらしきためしに申し侍れ。このたびはじめて出來れる足がるは。超過したる惡黨なり。そのゆゑは。洛中洛外の諸社寺。五山十刹。公家門跡の滅亡は。かれらが所行なり。かたきのたてこもりたらむ所におきては。ちからなし。さもなき所々をうちやぶり。或は火をかけて。財寶をみさぐる事は。ひとへにひる强盜といふべし。かゝるためしは。先代未聞の事なり。是はしかしながら武藝のすたるゝ所にかゝる事は

文左の如し

昌泰四年三月重奏云。革命之歲。宜㆑改㆓年號㆒。其奏在㆑別。朝廷信納。乃改㆑元。爲㆓延喜㆒。無㆑幾唐人盧知遠來云。辛酉之年正月十六日。大唐有㆓劉庸均之亂㆒。宮中候（本ノマヽ）屍數千人。數日乃定改㆑年爲㆓天福㆒。卽知天地災祥之會。出㆑自㆓卦象之中㆒。猶㆔四時代謝。日月出入皆有㆓定期㆒者也

敦書 按ずるに。天福は五代石晉の年號にして。辛酉の歲にあらず。其上延喜は唐の昭宗の大復にあたれば。改元記年號を書き誤るとみえたり

雪　水

駿州富士山の下の村にては。糞しなしに水をかけひきして。麥を作る。これ富士の雪水ゆゑなり。北國の蕨薇も。大雪の年は肥えて宜しければ。誠に雪は豐年の瑞なり

都　祭　堂

晉書の成都王穎傳の都祭堂は。回向院の類なり。其文左の如し

盧志言㆓於穎㆒曰。黃橋戰亡者有㆓八千餘人㆒。旣經㆓夏署㆒。露㆓骨中野㆒。可㆑爲㆓傷惻㆒。昔周王葬㆓枯骨㆒。故詩云。行有㆓死人㆒。尙或埋㆑之。況此等致㆓死王事㆒乎。穎乃造㆓棺八千餘枚㆒。以㆓成都國秩㆒爲㆓衣服㆒。斂祭葬㆓於黃橋北㆒。樹㆓枳蘺㆒。爲㆓之塋域㆒。又立㆓都祭堂㆒。刊㆑石立㆑碑。記㆘其赴㆑義之功㆖

洗　馬　池

信州洗馬宿の側に洗馬池あり。土人の云く。木曾義仲の馬洗ひし水にして。此水あるゆゑに。洗馬と名つくと。大明一統志に。蘇州府の洗馬池を載せ。注して云く。在㆓府學南㆒。又常熟縣北六里。亦有㆓洗馬池㆒。相傳宋紹興初。尹團練屯兵防㆑江洗㆑馬之處と。これにてみれば。西土にもあることなり。さて土人この水あるによりて。洗馬と名くと云ふとも。今の洗馬宿は。新洗馬にて。本洗馬と云ふ村ありて。いにしへは本洗馬を通りしが。その後いまの路を通るなれば。洗馬池は本洗馬にあるべし

紬

鎭江府志に。土人所㆑織名㆓南紬㆒。械㆑綿爲㆑之名㆓綿紬㆒と。紬をつむぎと訓ずる宜きなり。同書に云く。紬臘似㆑雀。黑身翎羽雜。多蓄㆑之以爲㆑戲と。先年或書の中に。紬臘ありて解せざりしに。これにて鳥

ㄱ(キヨク) ㄴ(ニウン) ㄷ(チツコツ) ㄹ(リウル) ㅁ(ミヲム) ㅂ(ビヲプ) ㅅ(シヲツ) ㅣ(イ) ㅇ(バイダ)

가(カア) 갸(キヤ) 거(コヲ) 겨(キヤウ) 고(ゴ) 교(キヨ) 구(クウ) 규(キユ) 그(ク) 기(キ) ᄀᆞ(カ)

나(ナア) 냐(ニヤ) 너(ノヲ) 녀(ニヨウ) 노(ノ) 뇨(ニヨ) 누(ヌウ) 뉴(ニユ) 느(ヌ) 니(ニ) ᄂᆞ(ヲ)

타(タア) 탸(ムヤ) 터(トヲ) 텨(リヨウ) 토(ト) 툐(チヨ) 투(トウ) 튜(チユ) 트(ト) 티(チ) ᄐᆞ(タ)

라(ラア) 랴(リヤ) 러(ロヲ) 려(リヨウ) 로(ロ) 료(リヨ) 루(ル) 류(リユ) 르(ル) 리(リ) ᄅᆞ(セ)

아(マア) 야(ミヤ) 어(モウ) 여(ミヨウ) 모(モ) 묘(ミヨ) 무(ムウ) 뮤(ミユ) 므(ム) 마(ミ) ᄆᆞ(マ)

바(バア) 뱌(ビヤ) 버(ボウ) 벼(ビヨウ) 보(ボ) 뵤(ヒヨ) 부(ブウ) 뷰(ビユウ) 브(ブ) 비(ビ) ᄇᆞ(バ)

사(サア) 샤(シヤ) 서(ソウ) 셔(シヨウ) 소(ソ) 쇼(シヨ) 수(スウ) 슈(シユ) 스(ス) 시(シ) ᄉᆞ(ソ)

아(ア) 야(ヤ) 어(ヲ) 여(ヨ) 오(ヲ) 요(ヨ) 우(ウ) 유(ユ) 으(ウ) 이(イ) ㅇ(ヲ)

자(サア) 쟈(チヤ) 저(ゾウ) 져(チヨウ) 조(ゾ) 죠(チヨ) 주(ウ) 쥬(チユ) 즈(ツ) 지(チ) ᄌᆞ(ヅ)

파(ハツ) 퍄(ビヤウ) 퍼(ボツ) 펴(ビヨウ) 포(ボウ) 표(ビヨ) 푸(ブツ) 퓨(ビユ) 프(ブツ) 피(ビ) ᄑᆞ(ド)

카(カツ) 캬(キヤツ) 커(ユツ) 켜(キヨツ) 코(コツ) 쿄(キヨ) 쿠(シツ) 큐(キユ) 크(クツ) 키(キ) ᄏᆞ(カ)

차(サツ) 챠(チヤウ) 처(リツ) 쳐(チヨウ) 초(グツ) 쵸(チヨ) 추(ソツ) 츄(チユ) 츠(ツ) 치(チ) ᄎᆞ(ヅ)

하(ハア) 햐(ヒヤ) 허(ホウ) 혀(ヒヨウ) 호(ホ) 효(ヒヨ) 후(フウ) 휴(ヒユウ) 흐(フ) 히(ヒ) ᄒᆞ(ハ)

稲葉熟水

湯品に云く。稲葉熟水採ニ禾苗一晒乾。毎レ用滾湯入ニ壺中一。燒ニ稲葉一帶レ焔投入。蓋密少項瀉服。香甚と。これにてみれば。醫書に熟水とあるは。煮冷したる水なり

改元

改元記に。三善清行論ニ革命一議狀。清行請ニ改元一議狀。革命勘文等をのせ。辛酉の歳に改元あることを説きて。西土にても辛酉に改元ありしことを載す。其

アベセデより讀みはじむ

ア	ベ	セ
A,	B,	C,
A, a,	B, b,	c, c,
デ	エ	エフ
D,	E,	F,
D, d,	E, e,	f, f, f,
ケ	ハ	イ
G,	H,	I,
G, g,	H, h, h,	I, i,
カ	エラ	マンマ
K,	L,	M,
K, k,	L, l,	M, m,

員數文字左へ讀むべし

一	二	三	四	五	六
1	2	3	4	5	6
七	八	九	十	十一	十二
7	8	9	10	11	12
十三	十四	十五	百	千	
13	14	15	100	1000	
千五百十二	千五十	千一			
1512	1050	1001			

朝鮮諺文

朝鮮諺文左の如し。用ひ様は。朝鮮諺文字母に詳なり。さて朝鮮にて俗の讀みやすきために。諺文を以て書を譯す。我國伊呂波にて書籍を譯して。諺解といふはあやまりなるべきか

先年あるひと樂石と云ふは。いかなる石ぞと問ひしに。樂石は樂器に用ゆる石なるべしと答ふ。其後。古文苑をみれば。秦の始皇の嶧山の碑を載す。その碑文の終りの刻二此樂石一以著二經紀一と云ふところに。樂石の注ありて。樂器に用ふる石たることあきらかなり。注文左のごとし

樂石 石之精堅堪レ爲二樂石一者。如二泗濱浮磬之類一

さて嶧山の碑は。史記にのせず。古文苑に載せて注解つまびらかなり

阿蘭陀文字

法苑珠林に云く。昔造レ書之主。凡有二三人一。長名曰レ梵。其書右行。次曰二法盧一。其書左行。少者倉頡。其書下行と。阿蘭陀字右行にて二十五字。其體篆眞行草の如きありて。横に續けて用ふ。續け樣は。阿蘭陀文字略考にのす今二十五字幷に數字を記す。さて書史會要に云く。帝師巴思八作二蒙古字一。一字具二平上去三聲一。輕呼倶則同二平聲一と。巴思八は僧なれば。梵字に效ひて作るなるべし。大清紀事に。太祖の天命五年に。造二滿字一。大宗の天聰六年。大海始用二滿字一。譯二歷代史書一。頒二行國中一。人盡通曉服用すとあれば 滿字は明の萬暦年中に作るなり。阿蘭陀文字二十五字左の如し。阿蘭陀これをアベセデと云ふ。我國にて。これを阿蘭陀いろはと云ふなり

Q, P, ペ O, ヲ N, エンナ

T, テ S, エサ R, アラ

W, V, U, ユ

Z, Y, エイ X, エキサ

りと。完は宍にして。宍戸宍人二つながらきこゆれども。古へによりて宍人とかける。よろしからん

銜葉而嘯

通典に云く。三葉銜レ葉而嘯。其聲清震。橘柚尤善。或云。卷二蘆葉一爲レ之。形如二笳首一也と。いま小兒これをなすも西土のことに效ふなり

薊

救荒本草に云く。鷄眼草（ヤハズ）。又名二掐不齊一。以下其葉用二指甲一掐レ之作レ薊不レ齊故名と。薊はやはずの如きものなれども。薊の形しれざりしに。農政全書の農器の中に薊あり。その形やはずの如し左に圖す

掐（他勞切　棺也）　薊（呼鑊切　裂也）　鑱（仕衫切　鏨也刺也）

如レ鏟而小中有二高脊一長サ四寸許濶サ三寸

雜戲

文獻通考に。雜戲を委く載す。いま我國にあるものを左に略記す

呑刀（漢よりあり。唐の高宗の時に。天竺より伎を献ず。自から手足を斷ち腸胃を刳剔す。帝その人を驚かすを惡みて。西域の關津に勅して。中國に入らしめず）瞋面戲（唐にあり。手を以て足をあげて。額上に加ふ）絙戲（漢の世に大絙繩を兩柱頭にかけ。相去ること數丈にして。兩倡對舞して。繩上を行きて面を對し。相逢ひて。肩相切して傾かず）猨騎戲（石虎が時にあり。額上橦に緣りて。上に至り。鳥飛して左迴右轉す。又橦を以て。口齒に著て上ることかくのごとし）緣橦伎（漢の世に都盧と云ふなり。又跟をかけ。腹を旋し。みな橦によりて伎をあらはす）藏挾戲（幻人の術なり。物象をとりて懷にして。觀者其機をみることあたはず）雜旋戲（雜器をとりて竿標を圓旋して。おちざらしむ）蹴瓶戲（瓶を蹴て鐵鋒杖端へあけしめ。或は水精丸と瓶と相值回旋して失はず）拗腰伎（その身を翻折して。手足みな地に至り。口を以て器を銜みて立つ）

馬端臨の云く。雜戲はみな民心を善くし。民俗を和する所にあらずと。馬氏の說の如く。雜戲は民俗を害するものなれども。古へよりありきたりたる戲は。禁斷しがたきものなれば。新になせる今の人馬戲の如きは。いたく禁ずべきことなり（元文五年人馬戲はやり。其後やむ）

天平感寶

愚管抄に云。天平感寶元年七月二日。孝謙天皇卽位。この天平感寶は四月十四日にかく改元ありけれど。其年の七月二日。又天平勝寶とかはりにければにや。常の年代記には。この年號をばかきのせぬなるべしと。この說のごとくして。今この年號しる人少し

樂石

肥

水經の註に。博物志を引きて云く。酒泉延壽縣南山。泉水大如ㇾ筥。注ㇾ地爲ㇾ溝。水有ㇾ肥如二肉汁一。取著二器物一。始黃後黑。如二凝膏一然。極明與ㇾ膏無ㇾ異。膏二車及水碓釭一甚佳。彼方人謂二之石漆一。水肥所在有ㇾ之。非ㇾ止二高奴縣洧水一也と。肥は水中より生ずる油の浮びて。水面にあるを云ふなり。漢の相馬を如淳註して云く。主二乳馬一以二韋革一爲二夾兜一。受二數斗一盛二馬乳一。桐取二其上肥一。因名と。これによれば水漆にかぎらず。總て油の如く柔にかたまりて浮くものを肥と云ふなり。楊升菴全集に云く。石燭一名水肥。一名石液。今之延安石脂也と。後世にては。石漆の一名となれりとみえたり。本草綱目に。石燭。水肥。石液。石詣の四名をのせず

蠲紙

楊升菴全集に云く。古有二蠲紙一。以二漿粉之屬一。使二之瑩滑一。蠲之爲ㇾ言潔也と。いまの きら紙 のやうなるものとみゆ

肉飛

吳越春秋に云く。慶忌之勇也。所ㇾ聞也。筋骨果勁。萬人莫ㇾ當。走追二奔獸一。手接二飛鳥一。骨騰肉飛と。肉飛はいまの力こぶのこと、みえたり

千字文

尙書故實に云く。千字文梁周興嗣編次。而有二王右軍書者一。人皆不ㇾ曉。其始乃梁武帝敎二諸王書一。令二殷鐵石一于二大王書中一。搨二一千字不ㇾ重者一。每片紙雜碎無ㇾ序。武帝召二興嗣一謂曰。卿有二才思一。爲ㇾ我韻ㇾ之。興嗣一夕編綴進上。鬢髮皆白と。談苑に曰く。千字文文題云二勅員外郎散騎侍郎周興嗣次韻一。勅字乃梁字傳寫誤爾。當時帝王命令尙未ㇾ稱ㇾ勅。至二唐顯慶中一。始云。不ㇾ經二鳳閣鸞臺一。不ㇾ得ㇾ稱ㇾ勅。勅之名始定二於此一と。千字文はいまの人の常に翫ぶ書なれば。是等のこと知るべし

筺

蟹譜に曰く。匡長而銳者謂二之筺一と。先年金澤の海にありとて。せみ蟹と云ふものをみたり。形蟹の如くして長し。即ち筺なり

宍人

今し、どを完戶とかけども。姓名錄抄に完人(シヽト)とあり。按ずるに。續和漢名數に。宍戶の宍は。肉の古字な

廣大願得二壹拾萬貫一。以滿二其所一レ求。則賜莫レ大レ焉。謹錄奏上。兪容惟望。右咨二禮部一

成化拾玖年癸卯春三月　日　日本國臣源義政

明の年號を用ひらる、は甚しきことなり。さて日本紀に云く。顯宗天皇二年。歲比登稔。百姓殷富。稻斛銀錢直一文。宣化天皇元年。詔曰食者天下之本也。黃金萬貫不レ可レ療レ飢。白玉千箱何能救レ冷とあれば。我が國より金銀出でざるまへ。海表の國より金銀を貢して。我國に行ひしとみえたり

六枳關

容齋隨筆に云く。盤州種二枳六本一。以爲二藩離之限一。立二小門一名曰二六枳關一と今からたちの木を墻となすも。西土の事によれるなり

避嫌名

五雜俎に云く。宋時避二君上之諱一。最嚴。宋板諸集中。凡嫌名皆闕不レ書。如二英宗一名曙。署樹皆云二嫌名一。不レ知二樹音原不一レ同レ曙也。欽宗名桓而完云二嫌名一。不レ知二完音原不一レ同レ桓也。仁宗名禎而貞觀改作二正觀一。魏徵改作二魏證一。不レ知二徵禎不一レ同レ音ヲ也。又可レ怪者。眞宗諱名恒而朱子於二書中一。有レ恒獨不レ諱。不レ知二其解一。或以二親盡而祧一耶。至二於胤義一其不レ諱宜矣と。宋の世に至りて。嫌名まで。諱みて煩はしきことしるべし。今の刊行の杜註左傳に。桓完等の字は。一畫を闕けば。宋板の本を翻刻すとみえたり

鉛槧

群碎錄にいはく。鉛槧槧板長三尺。謂下以レ鉛刻二於槧一而書上レ之。木可二脩削一。故簡板稱二敎削一と。漢の楊雄以レ鉛。摘二次之於槧一。鉛を以て木簡に字を刻したるなり。文選の懷二鉛筆一を。李周翰が註に云く。鉛は粉筆也所二以理一レ書と也。これは胡粉筆となして註すとみえたり

上疏

岩棲幽筆に云く。漢高手勅云。上疏宜二自書一。勿レ使レ人也と。これにてみれば上疏は重きことゆえ自筆にかくやうなれども。宋史に。朱熹所レ奏。凡七事。其三事手書以防二宣洩一ヲとあれは。のこらず自筆にてなく。其中の密事をば。自ら書くとみえたり

疝

釋名に云く。心痛曰レ疝と。これにて病名も古とたがへることとみるべし

布衣記に曰。馬の時僮僕者事衞府の時は。童一人。郎從二人。調度懸一人。舍人三人。中間六人。其儀は時に隨ひ。そへの若黨。中間跡に上下着召し具すと。布衣記は。伏見院永仁三年にかける書なれば。上下の名は久しきことなり。今の上下其制はちがひあるも。この名稱によるなり

袍

唐書に云く。德宗季秋出畋。有二寒色一顧二左右一曰。九月猶衫。二月而袍。不レ爲レ順レ時。朕欲レ改レ月。謂レ何。左右稱レ善。李程獨曰。玄宗著二月令一。十月始裘不レ可レ改。帝瞿然止と西土の人は常にあつきものをきるゆゑに。十月より裘を著するならん

琉球貢使

親基日記に云く。六月廿八日琉球人參レ洛。當御代六箇度目號二長史一。於二御寢殿庭前一。三人懸二御目一。三拜申す庭鋪レ席と。これにて其比の琉球の貢使の拜謁の式みるべし

大嘗會

永和大嘗會記一名御禊の記に云く。主基の神供はて丶。廻立殿へかへらせ給ふ。釆女かへり申すとかや。申す後。鳳輦にめして官廳へかへり入らせ給ふ。此程雪ふりて。いとおもしろく。文和にも雪ふり侍りし代々。御佳例にて侍るとかやと。雪は豐年の瑞なればさもあるべきにや

朱

梁の時官錢にあらずして。民間に行ふ錢の內に。徑り七分半。重さ三銖半の五銖錢ありて。文を五朱と云ふ。これ銖を省きて朱とするなり。甲州金の銖みな朱とあるはこれによるならん

捕賊與西土

南方紀傳に云く。應永二年の秋。義滿公賊徒を召し捕へ。大明に遣す。八年二月。義滿公大明の帝へ黃金をおくると。この比は明と使の往來あるのみならず。賊徒黃金までやらる丶は。明を甚だ貴ばれしとみえたり。さて應永の比は。我國より明へやらる丶ほど。黃金多くして。銅はすくなきにや。義政公永樂錢を明へ請はる。善隣國寶記に。其書を載す。文左の如し

制書幷給賜等物。一一拜納。無レ堪二感荷之至一。抑弊邑久承二焚蕩之餘一。銅錢掃レ地而盡。官庫空虛。何以利レ民。今差二使者一入朝。所レ求在レ此耳。聖恩

を置きて九卿に列し。五府。六部。都察院。通政司。大理寺。庶政を分ち治む。後の嗣丞相を立つることを許さず。臣下の丞相を設けんと奏請するものは。文武の群臣卽時に劾奏して。重刑に處す。西土の丞相を改置するは煩はしき事なり

方便囊

清異錄に云く。唐季王侯競作二方便囊一。重錦爲レ之。如二今之照袋一。每二出行一雜二置衣中篦鑑香茶詞册一。頗爲二簡快一と。方便囊と云ふ文字にてみれば。四角の袋にて。いま僧の出行するとき。首にかくる頭陀袋と同じ樣なりとみゆれば。頭陀袋は唐の遺制なるか

國字返簡

公私雜翰に。琉球國への返簡をのす。其文左の如し

文くわしく見申候しん上の物たしかにうけとりぬめてたく候

永享十一年御印判

りきう國のよのぬしへ

その比は。外國への返書も國字にてありとみゆ。これおもしろきことなり。さて御印判とあるは。義敎公の御印なるべし

婦人不稱行狀

吹劍錄に云く。漢の烈女傳搜二次材行一。晉烈女傳載二修六行一。班姬女史箴有二婦行篇一。然古今志二婦人一者。止曰レ碑曰レ誌。未二曾稱二行狀一。近頃有下鄕人志二其母一曰中行狀上。不レ知二何所レ據一と。婦人を誌して行狀と云ふも害あらざることなれども。古に從ひてかくこと宜しかるべし

菟裘賦

兼明親王龜山の麓に隱居して。菟裘賦を作る。親王薨じて後。親王の次男伊陟へ。帝より何たる文をか作りおかれしと御尋ありしに。伊陟ことなるものも侍らず。うさぎの裘こそ候へと申されしかば。御覽ぜんとありしに。かの菟裘賦を奉れり。菟の字は。兔の字に似たればなり。唐の韓退之が子闇劣にして。集賢校理たる時に。史傳の中に。金根車を說く處あれば。みな臆斷して誤りと思ひて。悉く根の字改めて。銀の字となす。伊陟もこれ等の人なるべし。すぐれたる人の子の不肖なるは。誠に是非なきことなり

上　下

餘四等錢依二小錢制一。遞增すとあり。二十三年の小錢を造り。一十文より五十文に至るは。諸書省きて記さず。續文獻通考に。二十三年の小錢一文。用レ銅一錢二分と。名山藏の毎二小錢一文一銅二分と一文にて一匁のたがひあれども。今猶重さ二分の洪武通寶錢あれば。名山藏に云ふごとく。洪武二十三年の後は。小錢重さ二分より遞增の五等の錢を通用すること明據あれば。續文獻通考の小錢一文用レ銅一錢二分と云ふは誤なるべし。名山藏毎生銅一斤の下に。生銅一斤にて重さ何程の五等の錢を鑄ることを云はざれば解しがたし。敦書意を以て量るに。生銅一斤は。百六十匁なれば。小錢重さ二分より遞增して。當十重さ二匁の五等の錢を鑄ば。重さ二分の小錢一百六十にて。銅三十二匁重さ四分の折二錢八十にて。銅三十二匁重さ六分の當三錢五十四にて。銅三十二匁四分重さ一匁の當五等三十二にて。銅三十二匁。重さ二匁の當十錢一十六にて。銅三十三匁合せて百六十匁四分にて四分不足し。其上火耗あれども。生銅なれば。鉛錫を交へば。四分の不足火耗補ふべければ。毎生銅一斤より一十六までの三十五字。二十三年の依二小錢制一。遞增の下にあるべし。かくの如くならざれば解すべからず。尙又食貨に委しき人に尋ぬべし。さて康熙通寶の重さ二分の小錢多くあれば。清も重さ二分の小錢行使すると見えたり

宰　相

唐は中書令眞の宰相にして。中ごろ改めて左右相とす。他官を以て參するものは定まれる員なし。同中書門下三品及び平章國重事の名を加ふる者は。並に宰相たり。宋の初めには同平章事を宰相とし。唐の制によりて中書門下平章事と稱す。參知政事宰相に副ひて大政を毗く。親王宰相の知政事を罷めて。出でゝ留守節度使となり。京尹の出でゝ守判となりて。侍中中書令同平章事を兼ぬる者は。使相と稱して。政事に預らず。敕に書せず。宣敕と除授とには。敕尾にその銜を存す。元豐の新制には。同平章事參知政事を廢して。三省に歸し。侍中中書令尙書令は。官の高きを以て除せず。尙書左僕射は。門下侍郞をかね。侍中の事を行ひ。右僕射は中書侍郞をかね。中書令の事を行ひて。眞の相とし。尙書左右丞を以て次相とす。明の洪武中に。周の六官に倣ひて。六部

去上。然切不レ得レ令三病者一知上。是誑語也。其孀僕遵レ之。此疾永除。又有二一少年一。眼中常見二一小鏡子一。使二醫工趙卿診一レ之。與二少年一期。來晨以二魚鱠一奉候。少年及レ暮赴レ之。延二于内一。且令二從容一候二客退後一。方接レ俄而設レ臺。止施二一甌芥醋一。更無二他味一。卿亦不レ出。迨レ久促不レ至。少年飢甚聞二醋香一。不レ覺屢啜レ之。覺二胸中豁然眼花不一レ見。因啜盡。趙卿方出。少年甚謝。卿曰。郎君先因二喫レ膾太多一。飲レ醋不レ快。又有二魚鱗于胸中一。所二以眼花適來一。所レ備芥醋。只欲二郎君因レ飢以啜一レ之。今果愈レ疾。烹鮮之會。乃權詐耳。請退謀二朝餐一と。この二醫は固に智なり。後の醫をするものしらずんばあるべからず

四至

裁判至要抄に云く。弘仁二年二月三日の格に云。田地占請之輩。偏限二四至一不レ論二町段一。是以檢二四至一。則渉二于官舍人宅一。勘二町段一則不レ滿二四至之内一。求二之政途一。理不レ合レ然。自レ今以後占請地。一定二町段一。不レ依二四至一と。弘仁より後。いまの田法の如く。四至を論ぜず。專ら町段に依るとみえたり

花

鶴林玉露に云く。洛陽の人謂二牡丹一爲レ花。成都の人謂二海棠一爲レ花。尊二貴之一也と。我國の人は櫻をいひて花となす。これも賞翫するによりてなり。人情はいづくもたがひあらざるなり

五等錢

宋の世の錢。當十。當五。當三。折二。小錢の五等を行ひしより。明も五等の錢を行ふ。王折續文獻通考曰。太祖洪武初。鑄二洪武通寶錢一。其制凡五等。當十錢重一兩。當五錢重五錢。當三當二重皆如二比當之數一。小錢重一錢と。大明會典何喬遠が名山藏。鄧元錫が函史もこれに同じければ。當十は十文錢ゆゑ。重さ十匁。當五は五文錢ゆゑ重さ五匁。當三は三文錢ゆゑ重さ三匁。當二（諸書多くは折二と云ふ）は二文錢ゆゑ重さ二匁にして。小錢重さ一匁なり。續文獻通考に曰く。二十三年後。定二錢制一。小錢一文用レ銅。一錢三分餘の四等錢は。依二小錢制一。遞增と。これ名山藏と異なり。名山藏には二十二年令造二小錢一。一十文至二五十文一。以便二民用一。每二生銅一斤一。鑄二小錢一百六十析二錢八十。當三錢五十四。當五錢三十二。當十錢一十六一。二十三年定二錢制一。每小錢一文銅二分。其

建武二年の記に。建武元年に錢を改め鑄る事をのす。其詔左の如し

詔居二聖人之大寶一。理究二變通一。天地之洪規二事沿革一。察二時制法一。爰拘二一途一。國家有レ錢。其來尚矣。周武闢レ基。九府之圜法肇興。漢文隆レ業四珠之形勢更彰。金錢之品。龜龍之類。象レ物雖レ區。同歸レ節レ用。本朝垂レ範。上世以來屢改二官文一。載二傳簡牘一。所謂自二天平寶字一至二于天德一十有餘度。綿歷最詳。及二近古一求二之外聞一。擅二敷俗間一。官法如レ忘。頗違二彝典一。復扛二政令一。今以二新化一爲レ除二舊弊一。始造二官錢一。須レ頒二天下一。濟レ世便レ民。孰謂レ不レ爾。仍文曰二乾坤通寶一。銅楮並用。交易莫レ滯。仁義所レ本定樂二厥成一。告以二宸衷一。若曰大理主者施行

建武元年三月日

建武の時。錢を鑄ること諸書にみえず。この錢鑄ること少く。後醍醐帝の位に在ること。數歳ならずして。南北にわかれ給ふによりて。乾坤通寶の錢。天下に流行せざりしゆゑに。書傳にのせざるべし。この詔に。銅楮並用とあれば。この時に札もつかひしとみえたり。建武は元の末にありて。西土にて專ら鈔をつかひしなれば。我國も西土の制に傚ひて。暫く札をつかはれしなるべし

茶

菟藝泥赴に。年中行事を引きて云く。栂尾は宇治より以前の茶の名譽あり。日本に茶を用ふることは。明惠上人より以前のことなり。季の御讀經は。天平元年にはじめられて。貞觀の比。毎季に行はれしに。第二日に引茶とて。僧に茶を給ふことありと。この說の如く。我國へ茶の渡りしは久しきことにて。木綿の種の如くに中絶して。後又わたれりとみえたり。海人藻芥にも。茶は自二上古一我朝にあり。葉上僧正入唐の時。重ねて茶の種を被レ渡。栂尾明惠上人翫レ之とあれば。再び渡りたること明なり

智醫

智囊補に云く。唐時京城有二醫人上。忘二其姓名一。有二一婦人一。從二夫南中一。曾誤食二一蟲一。常疑レ之。由レ是成レ疾。頻療不レ痊。請看レ之。醫者知二其所レ患。乃請二主人姨嬭中謹密者一人一。預戒レ之曰。今以レ藥吐瀉。卽以二盤盂一盛レ之。當二吐之時一。但言下有二一蝦蟇一走

る。ひとつの水溜をたかねにてくだきて。貫目を掛け。その手間をつもりて。價を與へらるゝと。また云く。先年大坂の御城の天守へ雷おちけるときに。大石を天守の二重めへはねあげたり。これを下せは夥しき入用か、ること故。役人さまざまと了簡しける折節。信綱上使としてまゐられけれは。役人この由を信綱へ申す。信綱石匠をあげてくだくだに切りておろすべしと指圖あり。其通り申し付く。入用少くして大石を下すと。これ等も皆西土にありしことなれども。信綱有智の人ゆゑに。暗に西土の事と合ひたるにや。西土の事は左に記す

漢孫寶爲二京兆尹一。有下賣二饊散一者上。今之饊餅也。偶與二村民一相二逢於都市一。擊二落饊餅一盡碎。民認レ損二五十枚一。賣者堅言二三百枚一。因致二喧嘩一。至二大守之前一。引問無二以證明一。寶令別買二饊餅一枚一。秤見二分兩一。乃都秤二碎者一。紐折立見二元數一。衆皆嘆服。賣者乃服二虛誑之罪一

宋時陜西因二洪水一。下二大石一塞二山澗中一。水遂橫流爲レ害。石之大有レ如レ屋者一。人力不レ能レ去。州縣患レ之。雷簡夫爲二縣令一。乃令二各人一各于二石下一穿二一穴一。度如二石大一。挽レ石入レ穴窖レ之。水患遂息。」元時福山之石於二上國一無レ所レ用。的斤與二之唐人一。石大不レ能レ動。唐人以二烈火一焚レ之。沃以二醴醋一其石碎乃輦而去

得微雨蘇

宋史趙立傳に云く。金人擊レ之死。夜半得二微雨一而蘇と。微雨を得て蘇すれば。瘡夷の者には。水を忌むと云へるも必とすべからざるか

鑄金爲二神主一

元史宋本傳に云く。國制範二黃金一。爲二太廟神主一と。黃金を以て神主に鑄ば。誠に無益の甚しきなり。張珪傳に云く。比者仁宗皇帝皇后神主。盜利二其金一而竊レ之。至レ今未レ獲と。無益の弊や。盜天子の神主を竊むに至る。これ不敬の大なるなり。元の亡ぶることと宜なり

金泥寫藏經

元史に云く。有レ旨集二善書者一。粉二黃金一爲レ泥寫二浮屠藏經一。帝在二上都一。使三左丞速速一詔二吳澄一爲上序と。いづくにても佛經をば金泥にて書寫するにや

乾坤通寶

陽人。世善刻レ石。其祖嘗爲二浙西廉使裴璩一。采二碑於積石之下一。得下一自然員石如二毬形一或如中甕斷上。乃重疊如レ殼。相包斷レ之。至レ盡其大如レ拳。復破レ之中有二一蠶一。如二蠐螬一蠕々能動人不レ能レ識。因棄レ之。或云。欲レ求二富貴一。莫レ如レ得二石中金蠶一。畜レ之則寶貨自致矣。問二其形狀一則石中の蠐螬也と。本草綱目に載る金蠶とちがひたるやうなれども。寶貨自致と云ふにてみれば。一物とみえたり。さて史記正義に。括地志を引きて云く。晉の永嘉の末に。齊の桓公の墓を發くものありて。金蠶數十薄を得たりとあり。この金蠶も珍玩考にのする。金蠶の樣にもきこえて。とくと解せざりしに。南史の始興王鑑の傳に云く。發二古冢一得下金銀爲二蠶蛇形一者數計上。古人或用レ之。設二其薄一以象レ蟲也。蓋漢天子冢埋二禽獸雜物一之意とこれにてよく解したり

九　鼎

天工開物に云く。禹鑄二九鼎一。則因下九州貢賦壤則已成。入貢方物歲例已定。疏二濬河道一已通。禹貢業已成上レ書。恐下後世人君增レ賦重レ歛。後代侯國冒二貢奇淫一後日治レ水之人不上レ繇二其道一。故鑄二之鼎一。不レ如二書籍易レ去。使下有レ所二遵守一不上レ可二移易一。此九鼎所爲レ鑄也。年代久遠。末學寡聞。如下蠙珠暨魚狐狸織皮之類皆其刻二畫于鼎上一者上。或漫滅改レ形。未レ可レ知。陋者遂以爲二怪物一。故春秋傳。有下使レ知二神姦一不レ逢二魑魅一之說上也と。この說遽によりがたけれども。千古の發明ゆゑこゝに記す

三　智

功物語に云く。松平伊豆守信綱の宰臣たる時に。上の御庭に大石ありて。引き除くべき樣なかりしを。信綱地を掘りて。大石を埋めしむと。また云く。公儀にてからかねの水溜高き四尺。長さ五尺。厚さ七寸なるを數多被二仰付一しに。鑄物師の價を夥しく申けれども。これを貫目にかけて吟味すべき樣なし。役人これを信綱へ申しければ。信綱の云く。まづ鑄物師の申す通りにて申し付け。出來の上。貫目を以て算用すべきよしなり。役人己が了簡はなけれども。其通りに申付くる處に。信綱水溜の數の外。ひとつ申しつけられよとありて。役人申付く。さて水溜出來したる時。これを掛くべきちぎりなし。このよしを信綱へ伺ひければ。信綱その數の外に申し付けた

敗を可ㇾ被ㇾ加

これにてみれば。我國の正史に載せざれども。德政の始は久しきことゝみえたり。小松內大臣敎訓狀を熟讀するに。敎訓の體にあらず。小松內大臣より後の事をも載せたれば。小松內大臣の作にあらず。後人その名を借りたること明なり。しかれども古雅にして。近世の書にあらず。その書に。京鎌倉の海道と云ふとも且平氏へ諂へば。北條氏の時の書と見ゆれども。刑法を說くもの貞永式目と合はざれば。貞永式目さだまらざる前の書にして。寡婦に甚諂ひたることあれば。賴經將軍の代。二位禪尼政子政を聽かれし時の書ならんか。さて天正まで德政行はれしとみえて。遠州井伊谷龍潭寺にある。神祖の御書證とすべし。御書左の如し

一祠堂物借曳之年米錢三和利式文子に相定上は縱天下一同之德政國次之德政私德政雖㆓入來㆒令ㇾ除ㇾ之事

天正七卯三月廿一日　御諱　花押

大樹寺勢蓮社磨譽上人

神祖天下を統理したまはざる時。かくの如き政あれども。神祖海內を治めたまふに至りて。弊政蕩盡し。天下一洗して。古今に勝れたる升平をなしたまふ。御德の廣大なること知るべし

袁了凡

群書備考に云く。家君督ㇾ師渡㆓鴨綠江㆒。以㆓親兵千餘㆒。破㆓倭將淸正于咸鏡㆒。三戰斬馘二百五十級と。この家君は袁了凡なれば。朝鮮ぜめの時。加藤淸正袁了凡と鎗を合はせたりと云ふ傳へたるも宜なり

鯁涕

後漢書皇后紀の鯁涕註なし。通鑑胡三省の註曰。言㆓不ㇾ出ㇾ聲鯁咽而流ㇾ涕也。文選王仲宣詠史詩曰。涕下如㆓縻綆㆒。李善引㆓說文㆒曰。綆汲ㇾ井綆也と。此時群臣董卓を恐るれども。婦人は甚だ悲泣すべし。且綆鯁同音なれば。綆となして宜しかるべし

足國用

南史に云く。劉備取㆓帳搆銅㆒鑄ㇾ錢。以充㆓國用㆒と。創業の人は己を儉して。國用を專とすることかくの如し

金蠶

珍玩考に云く。金蠶を載せて云く。右千牛兵曹王文秉丹

絲煙

前年。或人西土のきざみ煙草一包を恵む。その包內の小票に云く。福建の陳元禮。向在二浦城西關馬頭一。開張特選二上々項葉佳制生烟一。發二販四方一。味甘絲明。色鮮觔足。向有二異路低烟一。冒二稱浦城一者多。但買者眞假難レ辨。今本號特設二包內小票一。凡賜レ顧者。請認二富有圖記一。庶不レ致二冐稱一。眞假辨矣謹白。と何處にても後世はことみな便利なるを好むなり。且そのきざみ甚だほそきゆゑ絲煙と云ふなり

買石

江談抄に云く。備後守致忠（元方の男（致忠奸黠可憎矣））買二閑院一爲レ家。欲レ施二泉石之風流一。未レ能レ得二立石一。則以二金一兩一。買二石一一。件事風二聞洛中一。件事爲レ事之者傳二聞此一。爭運二載奇巖怪石一以至二其家一欲レ賣。爰致忠答レ之云。今者不レ買云々。賣レ石之人則抛二門前一云々。然後撰二風流者一立レ之云々と。これ過分の價を以て求めし故に。爭ひて持ち來るとみゆ。此時の一兩は十匁なるべければ。慶長金の二兩餘に當り。さして過分の價にあらず。昔は諸物の賤しきことと考へみるべし。かくの如くなれば。古へ官の富めるも宜なり

徳政

先に室町殿日記に載せたる料足の手形を視て。（此手形は草廬雜談にのす）姦民の爲すことは防ぎがたきことゝ思ひしに。大舘常興幷大和晴通の記と題する書に云く。天下一同の徳政行共可二返辨一由。堅く雖二申合一。御法の徳政の時は。借書文言によりおしなべて徳政行ふ事なり。其段覺悟ある錢主は。皆預り狀にするなりと。これにてますます姦民の恐るべきをしる。我國徳政の始は考ふべからず。西土は五代の石晉より始まる。小松內大臣敎訓狀に。徳政のことあり。其文左の如し

徳政相論之事

近年の徳政は。先例に替りて兵具をこしらへ。貝を吹き。鐘をつき。勢をそつして倉を責むる事。只山賊海賊に等し。君の御訪に。王御一代に一度づゝ。御年忌に六十六ヶ國の徳政をやらせ給ひし。當時は內裏の宣旨にて。三年の內の借物を。ことごとく成すべからず。取るべからずといふ御綸旨にて。徳政をやり給ひけるは。今時の徳はすくめ往生の天とくにて。只盗人にも似たり。堅く御成

レ費。太過分也。俊兼無ヒ所ニ于遮申ニ垂レ而敬屈。武衛向俊兼ノ仰テ可レ停ニ止花美ニ否之由ト。俊兼申下可ニ停止一之旨上。廣元邦通折角候レ傍。皆銷レ魂云々と。いふにても創業の君は必ず儉を專とし給ふことしるべし。さて延喜の時。時平を咎めらる、と。俊兼の小袖妻を切らる、とは。唐の武宗盛服濃粧の女道士を退くと同術にて。人君尤心を用ふべきことなり

論語板

前年。天文癸巳の年に刊する論語を觀るに。清原朝臣宣賢の序ありて云く。東京魯論之板者。天下寶也。雖然罹ニ丙丁厄一。而灰燼矣。以重鏤梓と。しかれば論語の板のあることは久しきことゝみえたり。さて西の京と云ふに對して東京とか、れしものなれば。東京とは今の京のことなるべし

松皮紙

正字通に云く。日本國出ニ松皮紙一と。この松皮紙は。今の松皮紙のことなるや。昔は別に松皮紙と云へるものありしにや

節序交賀

癸辛雜識前集に云く。節序交賀之禮。不レ能ニ親至一者。毎以ニ東刺一。僉ニ名於上一。使ニ一僕遍投レ之と。いま賤しき輕薄の士。動すればこれをなす。後世風俗の日々にくだることかなしむべし

殺濤

唐書に云く。洛有ニ二橋一。司農卿韋機徙ニ其一一。直ニ長夏門一。民利レ之。其一橋廢省ニ巨萬計一。然洛水歲淙ニ齧之一。繕者告レ勞。李昭德始累レ石代レ柱。銳ニ其前一厮殺ニ暴濤一。水不レ能レ怒。自レ是無レ患と。これ水勢を殺ぐ一術なるべし

鯖頭

古事談に云く。後三條院は鯖頭に胡桃をぬりて。あぶりて常に聞食きと。範時語りけりと。鯖ノ頭は。さして宜きものにあらず。好惡まことに一定を以て論ずべからず

婕妤

世本古義荇菜の注に云く。程大昌云。婕茅擬ニ淑女一也。予於レ是疑。漢之婕妤取ニ此義一以名也と。前漢書の倢伃を顏師古註して云く。倢は接幸也。伃は美稱也と。この二説を參へて。倢伃の義いよ〳〵明かなり

箱ニ以擊レ腹。手レ之足レ之唱ニ萬歲ニ而忘レ力。歎ニ蒼海之數變ニ索ニ銘詞乎余筆ー。貧道不才當レ任。固辭不レ能。課レ虛吐レ章。廼爲レ銘。この銘は性靈集にのせ。池を掘らるゝこと序に悉しきゆゑ。銘は省きて記さず

この本書。その眞僞は知るべからざれども。弘法大師の眞跡のよしにて。印行の書なり。國初には。この板ありしに。其後亡びたりとみゆ。この碑いま亡びてその石趺のみ。和州高瀨村にありて。土人これを岩船と云ふ

禁　奢

大鏡に云く。延喜の世のなかの作法した丶めさせ給ひしかど。過差を得しづめさせ給はざりしに。此殿のみ制を破りたる御裝束の。殊の外にめでたきをして。內に參り給ひて。殿上に侍ひ給ふ。帝こしとみより御覽じて。御氣色いとあしくならせ給ひて。職事を召して。世間の過差の制。きびしき比。左の大臣の一の人といひながら。美麗殊の外にてまゐれる便なきことなり。速にまかり出づべきよし仰せよと。仰せられければ。うけ給はるもいかなる事にかと畏れ覺えけれど。まゐりてわな丶くわな丶く。しかじかの事と申しければ。いみじく驚きて。かしこまりうけ給はりて。御隨身のみさき參るも。制し給ひて。いそぎ罷り出で給へば。御前ども、怪しと思ひてなん。さて本院のおと丶一月ほどさ丶せて簾の外にも出で給はず。人などの參るとも。勘當の重ければとて。遇はせ給はざりけり。さりしにこそ世のなかの過差は平ぎたりしか。內々にうけ給はりしかば。さてはかくぞしづまらんとて。帝と御心をあはせ給ひけるとぞ。これにてみれば。後の延喜の治を稱するも宜ならずや

斷　衣

東鑑に云く。元曆元年十一月廿一日。今朝武衞有ニ御要ー。召ニ筑後權守俊兼ー。俊兼參ニ進御前ー。而本自爲レ事ニ花美ー者也。只今殊刷ニ行粧ー著ニ小袖十餘領ー。其袖妻重ニ色色ー。武衞覽レ之。召ニ俊兼之刀ー。卽進レ之自取ニ彼刀ー。令レ切下俊兼之小袖妻上給後被レ仰曰。汝當才幹也。盍存ニ儉約ー哉。如ニ常胤實平ー者。不レ分ニ淸濁ー之武士也。謂所レ領者又不レ可レ雙ニ俊兼ー。而各衣服已下用ニ麤品ー。不レ好ニ美麗ー。故其家有ニ富有之聞ー。令レ扶ニ持數輩郞從ー。欲レ勵ニ勳功ー。汝不レ知ニ產財之所ー

その年代記すこしばかりを左に記す

干支						
庚申	八龜山宋几菴來九	文應	世宗忽必烈憲宗母弟	中統		景定
辛酉	平重時薨號極樂寺	弘長		二		二
壬戌		二	立王倎子植爲高麗王	三		三
癸亥	平時賴薨號最明寺八十四大風	三		四		四
甲子	大慧星出づ	文永	城燕京建都	至元	慧星化爲霞氣散	五
乙丑	奏續古今集	二		二	慶宗椹理宗姪	咸淳

和州益田の池の銘を觀て。弘仁。淳和兩帝の農事に御心を用ひられて。民を惠まる、の深きをしる。その序左に記す

益田池

若夫咸星銀漢下灑之功深。湖水天池上潤之德普。故能少草因レ之而鬱茂。蟲卵賴レ之長生。至レ若ニ八氣播植五戈陶冶一。北方之行。偏居ニ其最一。坎之爲レ德。遠矣哉。皇矣哉。粤有ニ益田池一。兩尊鼻子之州。八島初導之國。地是漢諳之舊宅。號則村井之故名。去弘仁十三年仲冬之月。前和州監察藤納言紀大守末等(スヱトモ)、慮ニ元陽之可レ支。歎ニ膏腴之未レ開。占ニ斯勝處一。奏ニ請之一。綸詔卽應。爰則令ニ藤紀二公及圓律師等一掬レ功。未レ幾皇帝逝ニ駕汾裏一。滕從レ之辭レ職。紀守亦遷ニ越前一。今上膺ニ堯揖讓一。馭ニ舜寶圖一。照ニ玉燭乎二儀一。撫ニ赤子於八島一。簡ニ伴平章事國道一。代檢ニ國事一。並拔ニ藤廣一。任ニ刺史一。兩公檢ニ校池事一。於レ焉靑鳧引レ塊。數千之馬日聚。赤馬驅レ人百計之夫夜集。旣而車馬轟々而電往。男女礉々而靁歸。土雰々而雪積。堤倏忽而雲騰。宛モ如ニ靈神之挺埴一。還疑洪鑪之化產。成不日畢不年。造レ之人也。辨レ之天也。爾乃池之爲レ狀也。左ニ龍寺一。右ニ鳥陵一。大墓南聳。畝傍北峙。未眼精舍鎭ニ其民一。武遮荒龍押ニ其坤一。十餘大陰聯綿虎踞。四面長阜邐迤龍臥。雲蕩ニ松嶺之上一。水激ニ檜隈下一。春繡映レ池。觀者忘レ歸。秋錦開レ林。遊人不レ倦。鴛鴦鳧鴨戲レ水奏歌。玄鶴黃鵠遊レ汀爭舞。龜鼈延レ頭。鮒鯉掉レ尾。淵獺祭レ魚。林烏反哺。泊如ニ積水含レ天。疊山倒レ景。深也似レ海。廣也超レ淮。笑ニ昆明之非一レ儔。哂ニ耨達之猶少一。虎嘯鼓レ濤。則驚汰沃レ漢。龍吟ッ決レ堤則容與不レ飽。襄陵之罔象不レ得レ溢ニ其塘一。焦山之女魃不レ能レ涸ニ其底一。六部豪レ潤。萬滄湯々一人有レ慶。兆民賴レ之。舞レ之蹈レ之。詠ニ千

昆陽漫錄

青木昆陽 著

周易家語序

慶長四年に刊する所の孔子家語。同十年に鏤むる易經を得て。神祖干戈の中といへども。聖經に御心を用ひらる丶の深きをしる。この二書いま世にあらざればしるものなし。因りて二書の序をこ丶に記して。海内の有衆をして。神祖の御德の古今にすぐれさせ給ふことをしらしむ

世際二季運一。而學校教將レ廢也。維時內府御諱公于レ文于レ武得二其名一。故興レ廢繼レ絕。爲二後學一刻二梓文字數十萬一。而賜レ予。退爲レ謝二公之恩惠一。初開二家語一。此書是聖人奧義。治世要文。寔非二小補一也。刊字列二盤中一則明本家語。以二數本一考正焉。或板行有二訛謬一。或文字有二顛倒一。以レ亡加レ之。以レ餘删レ之。雖レ如レ此有二常席鸛鶴誤一者必矣。只待二博雅君子改制一焉也。謹跋

慶長第四龍集己亥仲夏吉辰

前學校三要野衲於二城南伏見里一書焉

古今學二儒書一者。排二斥佛經一。學レ佛者排二斥儒書一。是世之常而其不レ辨二眞理一也。釋尊生二中國一設レ教。則如二周孔一。周孔生二西天一。設レ教則如二釋尊一。儒釋元來不レ涉二二途一。如二鳥雙翼一。似二車兩輪一也。如二閑室大禪師一者。壯歲入二東關一。讀二四書六經一。而品二論之一。講二說之一。既稱二學校一者。有レ年二于茲一。暮齡到二洛陽一。傳二中峯法要一。位二空門極品一。僉曰。儒釋兼幷。頃蒙二大將軍源御諱公鈞命一。印二行周易一。其志要レ弘二聖道於萬年一。能校二正舛差一。而加二陸德明音義於王輔嗣注一。集而大成者乎。古德曰。鷲嶺拈レ筆。伏羲初畫。少林面壁。文王重レ爻。然則曰二禪門一。亦不レ可レ不レ究二盡易道一。予於二禪師一其情如二骨肉一。因レ需レ跋二其後一。不レ獲二堅辭一。漫書焉也

慶長十年皇集乙巳孟夏初五日

鹿苑　西笑叟承兌

この二書は。敎書先年官へ上る。この易經の表紙に。其比の年代記あり。これにてみれば世に行はる丶和漢合運は。卽ち國初の年代記なり。其後書肆にてこの年代記の殘冊をみる。國初には。この年代記さかんに行はる丶とみえたり。その書體活字にあらず。

昆陽漫錄目錄終

昆陽漫錄目錄

昆陽漫錄序

敦書元文中昆陽漫錄一卷を撰ふ。其後屢小冊を著す。いま再校して。或は去り或は增しすべて六卷となし昆陽漫錄と名く

寶曆十三年二月十一日

青木敦書識

べし。又西行集に。よしの山風にす〻きに咲く花は。人のをるさへをしまれぬかなとよめり
同家集に。人の家うるを見にゆきて歸りて。ともかうもいはねば。あれよりみおとりしたるか。音もせぬはといひたるに。ゆる草ふかく萩おほかりし所なり。しげかりしはぎのやぶこそ戀ひしけれ。しかばかりだに我やとはまし。字書に有水曰澤。無水曰藪といへり。世にはほそき竹のしげきをいひならへり。歌によむ心はかくのごとく。何にまれ草しげき所をいへり
眞淵云。藪の字によりて思ふはわろし。こ〻の語は。彌生の意にて。木草竹など何にても。いやが上におひしげるを。やぶとはいへり
蜻蛉日記に。賀茂の臨時祭をいへるに。やつはしのほどにや有りけん云々。賀茂に八はし有るにや
蜻蛉日記云。やつはしの程にやありけん云々。かつらぎのくもてはいづこやつはしの。ふみ見てけりとたのむかひなし。こたみぞかへりこと。かよふべきみちにもあらぬ八つはしの。ふみ見てきとも何たのむらん
こは寶暦八年の秋の末に。人の得させしを見るに。をかしきものなれば。中に思ふ事あるには。かく筆をくはへたり。このごろしらたみにてふしながら書きつけ侍れば。ことのと〻のほらざるべし　眞淵

圓珠庵雜記 終

じ意なり。この說はいとわろし

鴈。カリ 輕の意に名付けたり。かろくとぶ故なり。天とぶや輕の使などつゞけたるこの故なり

眞淵云。かりはかり〳〵と鳴く故にいふ。よりておのが名をよぶなど。古歌に多くよめり。こゝの說のごとくならば。かるてふかもゝかろきことゝするか。かるは夜もこゝにのみゐて。遠く行來せねば。他の鳧よりも身のかろきといはんよしなし。かの輕の里。輕の池などは。本かるがもによれる名なりとおぼしければ。かた〳〵此注はわろし

幡幢。ハタホコ 幡鉾なり

萬葉十六。ばらもんのつくれる小田をはむからす。まなぶたはれてはたほこにをり

新撰萬葉集の歌に。いくつ度鳴きかへるらむあし引の。山ほとゝぎすおいもしなずて。眞淵云。山かた人のいふ木のうつぼなる中などに。冬はこもりて有りと 下河邊長流が申しゝは。北國の者の語りしは。ほとゝぎすは。深き山に歸りて死にたるやうにてあるか。明くる春の末になりて。又いき出づるやうにて。山をいづるとなん。しでの山より來るともいひつたふ。おいもしなずてとよめるも故あるべし

古今俳諧。いくばくの田をつくればか郭公。しでの田をさをあさな〳〵よぶ

本草集解云。杜鵑出蜀中。略 春暮卽鳴。夜啼達旦。鳴向北至夏尤甚。晝夜不止。略 性食蟲蠹。不能爲巢。居他巢生子。冬月則藏蟄

赤染衞門家集に。なでしこのすゝきになりたるを見て。おひかはるこやなでしこの花薄まねかば人もゆきて見つべし。これはなでしこの變じて。薄になれるか又なでしこと薄と有りけるが。なでしこのおされてみなすゝきになりたるをよめるか。なでしこの變じて薄になれるならば。めづらしきことなり

眞淵云。やまとなでしこは。秋ははやうかれ失する物にて。同じ所にうゑし薄のみ專らさかえたるを。かくかきなしよみなしたるのみ

入江昌喜がくぼのすさみに云。今按に。なでしこの茂生したるをいふなるべし。長明四季物語に。放免の下人の袖たもとにつけたる。もゝなりへうのすゝきに成りたるなどけしからぬ見ものなりと云々。是も百生瓢のしげくむら〳〵としたるをいふ

此意なり。宇治拾遺に。はたご馬などいへり。今は旅人に宿かす家を。はたごやとのみいひて。其外をわすれたり

眞淵云。今昔物語などにかける樣を思ふに。旅人のかれいひなど。その具などをも入れたる籠をはたごといふことおほし。馬に飼ふものをももとより入るべきなり

和名抄行旅具。篚漢語抄云。波太古。俗用旅籠二字飼馬籠也

蜻蛉日記云。はたごところとおぼしきかたより。きりおほねものしるしてあへしらひて。まづいだしたり云々

宇治拾遺。などかくはるかにおくれてはまゐるぞ。御はたご馬などは。つねにさきだつこそよけれ云々

鴛鴦。ヲシ互に愛すればをしと名付けたるべし

崔豹古今注云。鴛鴦水鳥鳧類也。雌雄未嘗相離。人得其一。則一思而至死。故曰疋鳥

惜。ヲシ今於之とかくは誤りなり。萬葉には月花の盛なるを愛するをも惜むとよめり。梅の花いつはをらじといとはねど。さきのさかりは惜しき物なり。是にてよろづを知るべし。後には花のちり。月の入るやうのことをのみ惜むとよめり。

眞淵云。花の散るもをしと思ふより。惜しむといへり。その本は同じきを轉じていへるなり。すべての語さること多きを。中ごろよりから文字にて。書く故に。字につきて別のことのやふに思ひて。人々こゝの語をわすれ侍るなり

鷗。カモメ續日本後紀に。鴨女とかけり。六帖に鴨の題にいれたり。鴨に雌雄あれど。鷗の鴨につれてなるゝこと。雄に雌のそふやうなれば。鷗女といふにや

眞淵云。鷗も鳧も同じ。水のうへにむれゐる物なれば。いと古くはひとつにかもめといひつらんを。その後。その類の別なれば。わけて鳧をおもといひ。鷗をばかもめといひなせるかとも思ひしを。萬葉卷一には。加萬目とびたつと。舒明天皇のよませ給ふに依るに。鷗はかまめといひて。本の名なるか。さてめとはむれ反めなれば。總てすゞめ。つばめなどむるゝ物にいへり。かりかねも。ねとめを通はしていふのみ。鴈群。雀群など書くに同

あをによしならとつゞくることは。添上郡和珥野より。いにしへよき青土をほり出だして黛などにも用ひけるゆゑに。かくはつゞくるなり。其證は古事記に。應神天皇のよませ給へる長歌にあるなり

眞淵云。いまだし。冠辭考にそのかくいはれぬる事を書きたり

古事記云。伊知比韋能和邇佐能邇袁波都邇波波陀阿可良氣美志波邇波邇具漏岐由惠美都具理能曾能那迦都邇袁加夫都久麻肥邇波阿氏受麻用賀岐許邇加岐多禮云々

挑カヽグ　搔擧カキアゲなり。きあ反かなれば。かゝぐといふ。捧サヽグ　指擧サシアグ　擡モタク　持擧モタタ　持タモツ　手持タモツ　助タスク　手助なり　水守ミモル　水を守りて居る者なり。田をうゝるより。今も農民水番と名付けて。すゑおくこれなり

蛭。ヒル　痺。ひるむむしなれば名付たるか

和名抄蟲豸類。水蛭。和名比流

蜥蜴。トカゲ　戸翔とかけりの略か。戸などに居て早きこと鳥のかけるごとくなればいふか

和名抄蟲豸類。蝘蜓一名蜥蜴。一名蠑螈。一名守宮和名止加介

眞淵云。家の戸などにゐるをば家守といふ。井もりにむかへたる名なり。とかげはいかなる意かいまだ考へがたし。けも濁りていひきたれば。かける意にはあらじ

虵。クチナハ　朽繩なり。朽ちたる繩のごとくなればいふ

眞淵云。繩はさもあらんか。くちはかれが名にて侍り。繩のごとくといはんもさもあるべし。くちたる繩といふべきよしなし

和名抄蟲豸類。蛇　和名倍美。一云久知奈波

雛。ヒヽナ　ひゝなはひゝと聞ゆるこゑ。なは鳴きか

和名抄羽族類。雛鳥子生能噣食謂之雛　和名比奈

卵。カヒコ　貝子。かゝひとのみもいふは。貝に似たればなり

和名抄羽族類。卵　和名加比古　鳥胎也

眞淵云。かひといふ總じて口なくてまろめなる物をいふ。貝はもし合の意ならば。それよりうつりて。卵をも芦萠などをもいふか。猶本末考へがたし

篼。ハタゴ　馬に飼ふ物入るゝ籠なり。旅籠とかくも

地而祭於其質也。器用陶匏以象天地之性也てふも。陶は土器なれば。即地に象り。匏は空にみなりて。内の虚なれば。天の形に象るといふか

古事記にところづらとあるは。ところかづらなり。日本紀に正木かづらを。まさきづらとあり。俗に瓜のつるなどいふは。つらにおなじ。然ればかもじは。かあを。かぐろなどのたぐひにそへたる字にて略せるにや。又ひさかづらとよむべきか。又ひさかたのとよむべきか。つらをかへせばたとなる故なり。葛野もかつらのをかどのといへり。應神天皇はかづ野とよませ給へり。今の桂川も〱もとは葛川なり。葛野郡にあればなり。いにしへよりひさかたのあめとのみつゞけたるに。ひさごづらとも。ひさかつらともいはむこと有るべからずや。萬葉には。久堅。久方などかけり。天先成（書紀神代卷云。天先成而地後定）れば。地にのぞめて久しきかたといふか。天は陽なれば。陰に對して。久しく堅しといふか。さらでも天長地久（老子云。天長地久。天地所以能長且久者以其不自生）といふ。堅からぬ物は久しからねば。久堅といふか。今この瓠葛をひさかたとよみて。これ正字ならば。萬葉には。皆借りて書けるか。

この瓠葛に付きていはゞ。神代紀に天吉葛（アマノヨサヅラ）とあるは。延喜式の鎮火祝詞に。伊弉冊尊黃泉におもむき給ふが立ち歸り。四種の物を生み給へる中に瓠あり

延喜式祝詞式云。與美津枚坂爾至坐氐。所思食久。吾名妹命所知食上津國爾。心惡子乎生置氐來奴止宣氐返坐氐更生子水神匏川菜埴山姫四種物乎生給氐此能心惡子乃心荒比曾波。水神匏。埴山姫川菜乎持氐鎮奉禮止事教悟給支

これにあたれり。四種は皆火をしづむる具なれば。おほそらのあを〱と有るは。瓠のつるのそひて葉のしげれるに似たり。又天は陽なるに。水氣のあつまりて成るといふ。火の勢つよければ。水をあつむる故か。陰陽相まじはりて。よろづの物なる故に陽おほし。いまだならしめぬために。天吉葛を空に神のはたしめ給へば。瓠葛の天といふか。また瓠葛をばひさごづらとよまば。ひさかたは瓠形にて。天のかたちのまろなるは。瓠のかたちににたればいふか

眞淵云。右の說どもはみなわろし。此まろなるてふ說は。われも。もとよりしか思へりしを。暗に相同じきこそよろこばれ侍れ

るは。山中の農民の山をかりはらひてすることなり。山のなりにしたがひて。はたけとすること。はたあしに、たれば。はたと名付けたるか。はたけといふは。畑毛なるべし、草木の生ひぬ所を。不毛之地といふにてしるべし

近きころの秉穂錄といふふみの後篇に。畠字は白田の二字一字になりたるなるべし。晉書傅玄傳に。畠收至十餘斛。水田收數十斛といへり云々

眞淵云。はたけは墾田上（ハリタアケ）か。新墾には水田もあれど。專ら山野をひらきて作るなれば。はり田といふは。多くは畑なり。さて水のつかぬ所をあけといへり。田にも萬葉東歌に。水を多みあけにたねまきとよめれば。田に似て高きもの故に。專ら畑をあけといふべく覺ゆ

公羊傳云。君如矜此喪人錫之不毛之地

䨄。シギ　しぎのはねがきは。しげ、ればしけといふ心に名をおほせたるか。神代紀に。䨄山祇（シギヤマヅミ）。これは麓山祇（ハヤマヅミ）にのぞむるに。常にもはやましげ山とよみて。深くしげれるをしげ山といふ。それにかくかりてか、れたれば。しげとしぎと通へることとしるべし

眞淵云。しきの語は繁をつ、めいふはさることながら。鳥のしきはさる意にはあらじ餘り思ひよせ遠し。且繁山をしき山といふは古語なり。それを違へしめじとて。こと樣の字をわざと假りたる物なり、然れば。却りて鳥のしきは同じ意ならぬなり

古今戀五。曉のしきのはねかきも、はがき。君がこぬよはわれぞかすかく

續日本紀に。興福寺の衆徒の仁明天皇の御としよそぢにならせ給ふを。賀し奉れる長歌に。瓠葛天之橋建とよめり。瓠葛をひさごづらとよむべきか

續日本後紀云。興福寺大法師等。爲奉賀天皇寶算滿于四十。中略 其長歌詞云。中略 茜刺志天照國乃日宮能聖之御子曾。瓠葛天能梯建踐歩美天降利坐志志云々

冠辭考云。久堅。久方ともに例の借字とす。さて天の形は。まろくて虛らなるを。匏の内のまろくむなしきにたとへて。匏形の天といふならんと覺ゆ。續日本後紀に。匏葛の天と書きしを。荷田宇志のひさかたのあめと訓れしぞ。即これなりける。禮記てふからぶみに云々。大報天而主日也。略 掃

たがひに引きてとくべし

鯛。タヒ平なり。ひらき魚なればいふ。たひらとは手のひらの心なり。物の平かなるを。たな心のごとしといふ是なり。延喜式に平魚とか、れたり

馬。ウマ美。うまの義に名付くるか。日本紀に。よき人をうま人といへるにて思ふべし。涅槃經には。馬は世の財なる故に。其肉をくはずと見えたり

眞淵云。牛も馬につぎて人の用をなせるを。から人は好みてくへば。財とてくはぬにはあらで。味のわろければ成るべし。馬はけもの、中によき物にて。うまけものといふか。いにしへは何にてもよき事をうましといへり。うま人といふもよき人てふ意なり

涅槃經云。或言。如來不聽比丘食十種肉。何等爲十人蛇象馬驢狗獅子猪狐獼猴。其餘悉聽

史記秦本紀云。初繆公亡。喜馬岐下野人共得而食之者三百人。吏逐得欲法之。繆公曰。君子不以畜產害人。吾聞。食善馬肉不飲酒傷人。乃皆賜酒。而赦之云々。この事。韓詩外傳。呂氏春秋。說苑等にもみえたり

牛。ウシ日本紀に。大人をも。卿をもうしとよめり。しかれば是も中央土畜にて。田をすき車を引き。其用多ければ。このよき名をあたふるか。又うしとぬしと。同韻にて通ぜり

眞淵云。うしは猶思ふよしあれど。いまだ定かならす

猫。ネコマ鼠子(チコ)待(マチ)の略か。鼠の類につらねことといふあれば。ねことのみいふは略語の中にことわり背くべし。猫の性は。鼠にても鳥にても。よくうかゞひて。かならず取り得んと思はねば。とらぬものなり。よりて待ちとつけたるか

眞淵云。たゞ睡獸の略なるべし。けもの、反となり。或人。苗の字につきて。なへけものかといへるはわろし

和名抄毛群類。猫 和名。禰古萬 似虎而小。能捕鼠爲粮

埤雅云。鼠善害苗。而猫能捕鼠。去苗之害。故猫之字從苗

畑。ハタ是は此國にて作れる俗字なり。火田をやいはたといふ。和名にくはしく見えたり。此二字偏旁におきて畑となせり。和名に。截幡。きりはたとあ

也。乃拔鬢髯散之。卽成杉。又拔胸毛。是成檜。尻毛是披。眉毛是成櫲樟

草。クサ雜々の心なり。青人草。民の草葉などたとふるも。雜人の心なり

竹タケ。高なり。木にもあらずして。高き物なれば。此名をおへり。萬葉に嶽に高の字をかけるも。心同じ

龜。カメ神靈あるものなれば。かみといふ心か。めとみと通ず。萬葉第十四。東歌に。神をかめとよめり。又瓶の和名おなじ。瓶も龜に似たるが故か

眞淵云わろし

和名抄龜貝類。龜。大戴禮云。甲虫三百六十而神龜和名加米かめに神靈ある事は。書紀又は浦島子傳など。其外にもあまたみえたり。唐土にも猶あまたあるべし

松。マツ萬葉にもあまた待によせてよめり。然れば。ちとせをふる物にて。行末をまつ心に名付くるか

眞淵云。いかゞなり。もし眞常木(マトノ)といふか。あるが中にとこはを稱へはなり

杉。スギ直淵すぐきといふべきを略せるや

宣長云。すぎは進木(スヽ)なり。この木かたはらへははびこらず。たゞに上へす・みのぼる木なればなり直木とするはわろし。直をすぐと云ふこと古へにあらず

花。ハナはなとははじめをいへば。實にのぞめていふか。鼻の字をはなとも。はじめともよむにて。思ふべし

楊子法言云。鼻始也。獸之初生謂之鼻。人之初生謂之首

蠡海集云。人之受氣而生。則先生鼻。鼻通肺主氣也

野客叢書云。考法言獸之初生謂之鼻。人之初生謂之首。梁益之間謂鼻。爲初。或謂之祖。然則鼻與祖皆始之別名。以鼻祖爲始祖。似未爲是。凡人孕胎。必先有鼻。然後有耳目之屬。今畫人亦然。必先畫鼻

額。ヒタヒひたひとは。廣く平かなれば略していふか。ぬか(ヌカ)は向ひなるべし。ぬとむと同韻にて通ず。板歯を和名にぬかばとよめるも。むかばなり。むかばはあだし歯よりはひろければ。板にたとへてかけるか。

へり

曾孫。ヒヽコ今一重隔ちたる孫なれば。ひゝこなり。

弟ヲトウト劣人なり。兄にのぞむれば。年のおとれるなり

伯父。チヂ 小父。伯母チバ 小母。おほぢ。おばにのぞめてもいふべし。又ちゝはゝにのぞめてもいふべし

從父兄弟。イトコ 古今集にいとこなりけるをとこによそへて。人のいへる時。よそながら我身にいとのよるといへば。たゞいつはりにすぐ計なり。此歌によるに。糸子といふ心か。糸をあはせてよれば。こなたかなたことなれど。ひとつになるごとく。兄弟はふたりにて。ひとりなるやうなるぞ。それが子なれば。いとこといふか。日本紀に。熊之凝がよめる歌に。うま人はうま人どち。やいとこ眞淵云。こはやつこをやいとこといへるにて。此意にあらず。萬葉に八多こらとよめるも。やつこらなれば通はしてしれはもいとこどち。いざあはなわれはとよめるも。貴人をおきて。其外の相ひとしきものを。いとこどちといへり。これは親族の外にいへど。心はかよふべし

宣長云。いとことは。人をふかくむつましむ名にて。いとほしき子てふことなり。本はたがひにむつましみていひしが。定まれる名になれるなるべし

甥。チヒ 姪メヒ 兄弟の子は子のごとくなれど。さすがわがうめるにあらねば。そこを隔てたることにして。ひといひて。男なるををひといひ。女なるをめひといふ心か

眞淵云。この意にはあらじ

和名妙。兄弟類。甥和名平比 姪和名平比

宣長云。めひは。女甥の意の名なるべし

獸。ケダモノ 毛生ひて四肢なれば。毛肢物といふべきを。略せるか

宣長云。けもの。又けだものも。毛をもて云へる名にて同じ。和名抄に獸をけもの。畜をけだものとわけたるはいかなる由にか。けものもけつものとこそきこゆれ

木。キケ むかしはけといふ。すさのをのみこと身の毛をぬきて。投げ給へるが。さまぐ\の木となる故なり

書紀神代卷一書云。素盞嗚尊曰。韓鄉之島。是有金銀。若使吾兒所御之國下。不有浮寶者。未是佳

金葉戀下。忘草しげれる宿をきてみれば思ひのき
　より生ふるなりけり
祖父オホヂ大父なり。祖母オバ大母なり。親オヤ老なり。子にのぞめていふ。曾祖父ヒオホヂひはこほりをひといひ。目の病にうはひ。そこひあるを思ふに。隔つる心。萬葉にいくへといふへに。隔の字をも。重の字をもかける。然れば幾重といふは。いくへたてなれば。へとひと通ずれば。今一重へだてたるおほぢといふなり

父。カゾ數ふる心か。世をかぞふる時。父に繼きて子をいふなり

眞淵云。思ふにいと古語には見えず。紀に鹿父をかゝぞと訓むと註せしも。中頃の事なれば。家尊の意にや。こゝにはちゝといひてことたるを。又別の稱をいふは。いにしへのさまならねばなり

母。オモ　イロハ　おもとは。其恩。尤重ければいふか。いろはとは。母よく子をやしなひて。見るべきいろあらしむる故に。心地觀經には。母を莊嚴と名づくと說き給へるは。生れいづるより。かたちをよくかざりたつる故なり。萬葉に色を色葉とよめり

眞淵云。いろはの說は誤なり。いろは家の事にて。萬葉東歌に。家らにはといふを。いはろにはともよめり。さていろせ。いろと。いろね。いろとゝいふも。舍兄。舍弟の意にて。同居。同胞を。古へは實の兄弟とすれば。母も同居して。そのはらなる意にて。家母てふ事なるを。はぶきていろはといへる事明らけし

宣長云。いろとは。人をしたしみうつくしみて云へる言にて。某入彥。某入姬と申す御名のいり。又。郎子。郎女などのいらも。皆この同言のはたらきにて。同意なり。いろせ。いろと。いろも母をいろはといふも。したしみうつくしみていふぞかし。いろはは。いろはゝなり。師說は非なり

孫。マコ　ヒコ　まごは又子なるべし。ひこは。ひおぢになずらへてしるべし

心地觀經報恩品云。母有十德。中略　六名莊嚴。以妙瓔珞而嚴飾故

眞淵云。まごは萬葉に。父母にわれはまなごぞといへるは。まことのこてふにて。繼父母ならぬをいへり。然れば眞之子を。のをなにかよはしてい

の語に似て。その意にあらず。たゞ文字になづみたるものなり。故わが友だちつとひてよめることあり

書紀孝徳紀云。現爲明神とあるを。舊訓あらかゞみとあれど。今はあきつかみとよめり

社（ヤシロ）。屋代なり

禰宜。日本紀に祈の字をねぐとよめるは。ねがふといふにおなじ。我身人の上を神にいのりて。ねがふものなれば。名付けたるべし

宣長云。神に仕へ奉る人を禰宜といひ。又ねぎごとなどいふも是なり。又ねがふも。本ねぐをのべたる言なり

巫（カムナギ）神和なり。神をなごむる故の名なり

眞淵云。なごめを艶になぎといひなしけん

大刀。（タチ）斷なり。もろをたちきる故の名なり

刀（カタナ）もろはなる劍のかた〳〵なれば。片無といふか

長刀。（ナギナタ）鉈のごとくにて。遠く人をなぐものなれば。薙鉈といふか。此物いにしへはなくて。中ごろより出來れるか。和名にもみえず

眞淵云。薙のかたなの意か。のか反な、ればなり。たを中略していふなるべし。又たゞ長き刀をかくいふにもあるべし

蕪。（カブラ）頭圓。（カシラツブリ）これを略せる名か。和名に。白頭蚯蚓かぶらみ、ずとよめるによれば。かぶはかうべ。頭挿劔をかぶらのつるぎといふがごとし。らは付字なり

眞淵云。頭挿の頭を。古事記に加夫と濁りてかき。かぶろきかぶつくま日など云ふも。かぶは上の意なれば。此説はかなへり

笠。（カサ）重なるといふ略か。瘡も同じ心なるべし。俗に椀の中にかさねて。ちいさきをかさといふにてしるべし。かさにかゝる水のみかさ。本はみなおなじ

眞淵云。此ちひさきといふは。今の椀のかさといふは。内にふたすれど。いにしへのふたは。上におほひてのみありと見ゆれば。ちひさきといひては違ふに、たり

檐。（ノキ）屋のほかにのきてあればいふか。思ひのきばなどそへてよめり

明惠上人傳記云。高雄山を出で、衆中を辭して。紀州に下向す。其時詠じ給ひける云々とて。この歌をのせたり

鶯はもろ〳〵の鳥の中に。すをうるはしうくふなれば。愛食巣と名付けたるか

眞淵云。からすはから〳〵と唱く故の名と聞ゆるに。下にすといへり。きゞすはけんけんともきん〳〵とも啼く樣に聞ゆるをもていふに。下にすあり

魚はうろこあり。尾あれば。鱗尾といふか

鳥は人のとりてかてもし。くひもすれば捕か

湊。途津　鷺。飛　鯉。戀　鵰。熊鷹　凡。物の太きなるを熊といふ

和名抄羽族類。鵰和名於保和之

鷹高　たかくあがる故に

鮒　ふは字の音。なは魚か

鮀　こつをといふは。こつは字の音。をは魚の略なり

和名抄龍魚類。鮀魚漢語抄云。古都乎

寺。丹青色をまじへてその光のてらす故に。名付くるか。又法の燈をこゝにかゝげて。冥き途をてらす故にともいふべし

眞淵云。新羅。百濟などのことばにはあらぬか此二つの說にはあらじ

佛（ホトケ）勃馱を舊譯には浮屠といひければ。それに木計をくはへて。名付けたるか。貴人を木にたとへ。賤を草にたとふる事。日本紀。古事記等に見えたり

眞淵云。木のはじめはけなれど。人を貴みていふに。きといひきたれり。ほとけは浮屠とさもあるべけれど。けは猶あるべし。又是も百濟の語か。かしこよりわたせしときは。いかゞいひてわたしけん。こゝにて付けたる名とも聞えず

宣長云。私記に。貴人を木にたとへ。賤民を草にたとふといふ說はひがことなり

神（カミ）かゞみの略といへり。明神を。日本紀にあらかゞみと點じたればさるにや

眞淵云。鏡といふは。後の說か。明神を萬葉にあきつかみとよむべきなれば。あらかゞみとよみしはわろかりき。紀の訓古へなるべきものは三つか一つのみあり。二つは後の儒者のよみにて。こゝ

秋萩の。ねたる顔にて露ぞこぼるゝ。このねたるといふはなびきふせるをいへるか。又合歡の木ならねども。よろづの草木によるは。葉のまきてあしたにはのぶるおほし。萩はことにゆふべに葉のまけば。それをいへるか。中務集に。日くるればまづぬる萩の棹鹿の。なく聲にだにおどろきやせぬ。これは日くるればまづぬるとよめる心。なびきふすをいふにあらず。さきのも歌は同じやうなれど。それはことば書に。はぎのねたるにとあれば。まだ宵にとはぬるといはんとて。おけりといはゞ。なびきふすも葉のまくにも。猶かよひぬべし

はぎのねたるとは。すべて萩のごとき類の葉は。かり合するものなり。そをねぶるとはいふなるべし。合歡をねぶの木。又は夜合。合昏などいへるも。よるになればねぶるによりてなるべし

類要圖經云。合歡一名夜合。枝柔弱葉似皂角槐細。而密。互相交結風來輙解不相牽。綴其葉至暮而合。故一名合昏

眞淵云。思ひやりの過きたるなり

萬葉第七に。伊勢の海のあまのしまつかあはび玉。とりて後もか戀のしげらむ。六帖に。あまの題に。此歌をのせたるにも。あはび玉をあこや王といへり。すべて萬葉に鰒玉とよめる多きに。或點には皆あこやだまとよめり。山家集にも。あこや玉とよめる歌ありきと覺ゆ。伊勢には女のわざにちひさううつくしき團子をうりありくとて。あこや〳〵めさぬかといふよし。ある人かたり侍りき。あこや玉に似たる故に。名を移せるなるべし。みちのくのあこやといふ所の名も。故ありて同じきにや

谷川士清云。萬葉集の鰒玉を。六帖にあこや玉と點ぜり。されど鰒玉にあらず。一種あこやがひといふあり。たまがひともいへり」

山家集。あこやどるいかひのからを積み置きて。たからのあとをみするなりけり

古事談。みちのくのあこやの松にこがくれて。出でたる月のいでやらぬかな

かけろふ日記に。ほとゝぎすのむら鳥くそふくにおりゐるといへり。明惠上人高雄を出で給ふ時の歌に。山寺は法師くさくてゐたからず。心きよくはくそふくにても。くそふくは。かはやの名とぞおぼゆる

さだめらる。されど冬の風をこそいへといへるをば。然らずともいへる事はなければ。そのころも。大かたは今のごとく冬の物としけるにこそ

八雲御抄。木がらしは秋冬の風。木枯なり。但木がらしの秋の初風ともよめり

淮海集云。霜風稜々萬木枯

はゝこ草は。文德實錄に。母子草とかけり。和名には。菴蘆をぞよめれど。本草を見れば。それにはあらで。鼠麴草にてぞありける。もろこしにも。やよひの三日にはこれをもちひに。くはふるよしそのふみにみえたり。葉の色のねづみに似て花のかたちのごとく。黃なればたとへて名付けたり

文德實錄云。田野有草。俗名母子草。二月始生。莖葉白脆。每屬三月三日。婦女採之。蒸擣之以爲餻。傳爲歲事

曹丹集。はゝこつむね彌生の月になりぬれは。ひらけぬらしなわがやどのもゝ。後拾遺俳諧三。かのよのもちひもくはじわづらはしきけばよどのにはゝのこつむなり

荊楚歲時記云。三月三日是日取鼠麴。汁密和粉。謂之龍古料。以厭時氣

正字通云。鼠麴卽鼠耳草。土人采莖葉和。擣作米果

眞淵云。葉の色は白く青き氣のあるなり。毛ともいふべき物あれど。鼠に似たりとはいへがたきか。鼠麴といへるは。犬たで。猿をがせなどやうに名つけしならん

六帖第五ひものうたに。人まろ。おく山のしげりに立ちてまよふとも。妹がむすびしひもをとかめや。これはひもはふたつある物なれば。道に迷ふ時に。その紐をときて。いづれのかたに行かんとうらなふなるべし。今の人。草の葉などにて占ふたぐひなるべし。又紐の歌に。下紐はとけてやつげぬ玉鉾の。しをりもしらぬ空にわぶれば。解けてや告げぬとは。かゝるをりはみづから解きて。こなたにつきてゆけとつげよといふ心なり

後拾遺集秋上。はぎのねたるに露の置きたるを人々よみ侍りけるによめる。新左衛門まだ宵にねたる萩かな同じ枝に。やがておきぬる露もこそあれ。おなじ心をよみ侍りける。中納言女王。人しれず物をや思ふ

草とよみてさる心とも聞ゆべければ。いかゞあらん。古きよき本にしのびと書きてあるにや。後の本はたのみがたし

新古今に。道命法師。白くもの立田の山の八重ざくら。いづれを花とわきて折りけん。京極前關白太政大臣。白雲のたなびく山の八重ざくら。いづれを花と行きてをらまし。此二首は山に八重櫻をよめり。あるべきにやしらず

眞淵云。櫻はこゝの物にて。世に多かれど。山に八重ざくらはいまだ見も聞きもし侍らず。思ふに。集なとには古き歌を直して入れたる多ければ。上のは萬葉によりたりと見ゆれば。本は立田のおくの山櫻とはあらざりしにや。後のはたなびく山の。山櫻とやありけん。こは心みにいふのみ

初むらさきは。初紫といふ心にて。はつしほなどにそめて。色よきをいふか。紅のはつ葉染とよめるは。紅は葉にて染むるに。初にそめたるが色のことによければ。初葉染とはよめるを。紫は根にてそむる物なれば。はじめと後とをわきていふべきにあらぬにや

後撰雜二。むさしのは袖ひづばかりわけしかど。若むらさきはたづねわびにき。夫木。紫の初しほぞめの新ごろも。ほどなく色のあかれとぞ思ふ

こがらしは。令木枯の意なり。からすとは葉を吹きしをりて。枯木のごとくなすなり。六帖に。木がらしの音にて秋は過ぎにしを。今も梢にたえずふくかなとよめる歌は。秋の風をこがらしといふよしによめり。六帖に。また木がらしの秋の初風吹きぬるに。などかくもゐに雁の音せぬ。我やどのわさ田もいまだからなくに。まだき吹きぬる木がらしの風。好忠集にも。木がらしの秋と立ちにしその日より。いなばのそよといはぬ日ぞなき。これらは初秋にいたくふく風をさへ。こがらしとよめり。げにも秋をむねとかるれば。秋にいふべきことわりなり。これによりて。野宮歌合に。女房但馬が橘正通とつがひて。あさぢふの露吹きむすぶこがらしに。みだれてもなくむしの聲かなとよめる歌を。順の判せらるゝに。右の六帖の歌。二首をひかれたり。正通は木がらしとは冬の風を社いへ。此頃の風をいかゞ。冬のあらしを秋の初風といるにやあらんと難じけれど。猶負に

によめるもあり。わすれぐさおふる野べとは見るらめどと。業平のよめる物を。いかで軒の草とはいふべき。又伊勢物語の心は。一草二名とは聞えず。業平のしのぶとはいひつゝ忘れたるを。女うらみてこれをわすれ草ともやいふとて。しのぶ草を出だして。思ふ心をふたつの草の名にそへたり。下の心はしのぶをばわすれ草とは申さぬものをといへるなり。三つには。萬葉に萱をもしのぶ草とよめり。しのび草とよめるは。かたらひ草のたぐひなり。重之集に。ことのはにいひ置く露もなかりけり。しのび草にはねをのみぞなく。元輔集に。行く先のしのび草にもなるやとて。露のかたみにおかんとぞ思ふ

眞淵云。伊勢物語にいへるはわざと名をかへいひて。男のいはんにつけてうらみんとまうけたる事。此人のいふがごとし。大和物語の頃にしも。誤る人ありつらん。しのぶ草は。枕の草子に。くちたる物のはしなどに生ふるがをかしきよしいへれば。軒に生ふる苔の類にて。さる物のあるなり。わすれ草は。萬葉にも萱草と書き。かの忘憂草の意によみたり。且。枕册子に。六月わすれ草の花の咲きたるよしありて。萱草にうたがひなし。又萬葉に萱をしのぶ草とよめるといふは。しのぶ草は・はへてましをとよめるをいふなり。然れども。それ物語種の意をかたらひ草といふがごとく。したはるゝ思ひ草をはらへ捨てましをといふにて。萱をいふにはあらず」

伊勢物語云。むかし男後涼殿のはざまをわたりければ。あるやんごとなき人の御つぼねより。忘草をしのぶ草とやいふとて。いださせ給へり。それは給はりて忘草おふる野べとは見るらめど。こはしのぶなりのちもたのまん

大和物語云。在中將うちにさふらふに。みやすん所の御かたより。わすれ草をなん。これは何とかいふとて給へりければ。わすれ草生ふるのべとは見るらめど。こはしのぶなりのちもたのまんとなんありける。おなじ草をしのぶ草。わすれ草といへば。それによりてなんよみたりける。續古今戀五。わするゝもしのぶも同じ古郷の。のきばの草の名にこそありけれ

眞淵云。こは理をいふ時は忍び種なれど。猶忍ぶ

爾雅云。蜉蝣渠略注云。以蛣蜣身狹面長有角黃黑色。叢生糞土中。朝生夕死。豬好啖之。

玉かづらにふたつあり。玉鬘と玉葛となり。玉鬘は。安康紀に押木玉鬘など。まことに玉もてかざれるあり。又ほめてもいへり。葛をばひたぶるにほめてのみいへり。玉桂は月の名にて。かんなにかゝばまがふべけれど。つもじすみてかはれり

萬葉十二。玉かづらたゆるときなく戀ふれども。なにぞもいもにあふ時もなき。同二。玉かづら花のみさきてならざるは。たゞ戀ならめわがこひ思ふを。同十二。谷せばみ峯まではへる玉かづら。はへてしあらばとしにこずとも。菅家萬葉。こひわかぬかげをだに見じ。玉桂。ことはねさへにほりてすてゝん。のちつひにいかにせよとか玉桂。こひするやどにおひまさるらん。これら月の異名をいへり

三藏聖教序云。桂輪月也。月中有丹桂。故稱爲桂輪。

酉陽雜俎云。舊言月中有桂。有蟾蜍。故異書言。月桂高五百丈。下有一人。常斫之樹。創隨合人姓吳名剛。西河人。學仙有過。謫令伐樹

初學記引虞喜安天論云。俗傳。月中仙人桂樹。今視其初生。見仙人之足漸巳成形。桂樹後生

もろかづらにふたつあり。新古今に。みればまづいとゞ涙ぞもろかづら。いかにちぎりてかけはなれけん。これは祭の日。桂にあふひをかけたるをいへり。後撰に。あしびきの山におふてふもろかづら。もろともにこそいらまほしけれ。六帖に。神つ代のいがきにはへるもろかづら。こなたかなたにかけてこそ見れ。これらははひあへる葛をいへるなるべし

眞淵云。桂に葵をかへる事あるか。今は葵は揷頭とし。桂の枝は腰にさせり。古への樣考へねばおぼつかなし

眞淵云。はひあへる故にもろかづらといふともきこえず。さる名のかづらひとつあるにや

しのぶ草に三つあり。ひとつには垣衣つねの如し。ふたつには忘草を。又はしのぶ草といふよし。大和物がたりに見えたり。これに付きて先達多くあやまりて。垣衣をわすれ草とこゝろ得られたるもあり。又垣衣の外にわすれ草といふ物の。軒におふるよし

手を誓はたてといひなして。蜘をも雲にとりなして。風をちからとは作りなしたるなり。然れば實に蜘の旗手といふ事はなきを。此歌につきて蜘の旗手をも一つとたてば。又人まどひなん

露霜といふにふたつあり。ひとつには露と霜となり。常のごとし。ふたつには。萬葉第七。同第十に。詠露といふ題に。露霜とよみ。その外露霜さむみなどあまたよめるは。秋の末に至りて。露のこりて霜となるほどの名なり。これをば霜をにごりていふべし

萬葉七。ぬば玉のわがくろかみにふりなづむ。あめのつゆじもとればきえつゝ。同八。つまこひにしかなく山の秋はぎは。つゆじもさむみさかりすぎゆく。能因歌枕。露霜とは。秋の霜をいふ

かけろふに三つあり。野馬と。蜻蛉と。今ひとつはゆふぐれに。命かけたるなどよめるやう蜉蝣にやと覺し。されどそれをば和名にも。ひをむしとのみいへり。萬葉にかげろふの夕とつゞけたるは。蜻蛉なるを。よくも見ずしてかげろふといふ名の。はかなく聞ゆれば。ひをむしの別名かなど。思ひたがへてよみなしけるにや

眞淵云。かげろひは本はかげろひ火なり。古事記に。難波の宮に火つきたるを。かぎろひのもゆるいへむらとよませ給ひ。萬葉に。かげろひのたゞ一目のみ見し人とも。かげろひの岩がきふちともよめるも。はしり火石の火なり。また萬葉に東の野に。炎(カゲロヒ)の立ちみえてとよめるは。明くる天の光なり。かげろひの夕さりくれば。かげろひの日もくれ行かばとよめるは。夕日の光なり。かげろひのもゆる春とよめるは。春の陽炎なり。俗にいとゆふと云ふ。又蜻蛉をもかげろひといへば。萬葉にかげろひてふ所にかりて書ける多し。然ればかく多きが中に。火と日と陽炎と蜻蛉と。四つありといふべしや。蜉蝣をかげろふといへるは。いと誤なれば。數には入れずて誤のよしはいふべきなり。又古事記にかぎろひといひたれば。きとけとは通はしいふべけれど。下のひをふといふはよろしからず

莊子逍遙遊云。野馬也。塵埃也。生物之以息相吹也。郭注云。野馬者。遊氣也。庶物異名疏云。野馬日光一曰遊絲水氣也

に同じ。然るを六帖第三に。海にあまをつゞけ。あまにたくなはをつぎて載せたり。又萬葉以後に。小野篁朝臣の隱岐國にながされてよめる歌。おもひきやひなのすまひにおとろへて。あまのなはたぎいさりせんとは。此なはたぎとは。海人はかづきするに。腰に繩を付けてあがらんと思ふ時は。其繩を引きゆるがせば。舟よりいそぎて。たぐりあぐるなるをいふ。此たぎといふ詞。日本紀にもあり。萬葉にもあまたよめり。岩の上に小猿こめやくこめだにも。たけてとほらせかましゝのをぢ（眞淵云。この岩の上にとつまもあらばの歌は。別に思ふよしもあればひかであるべかりけり）これは日本紀にあり。萬葉二。つまもあらば取りてたけましさみの山。野上のうはきすぎにけらずや。萬葉七。大舟をあるみにいだし八舟たき。わがみしこらがめみはしるしも。同二。たけばぬれたかねば長き妹が髮。このごろみぬにみだりつらんか。同十四。さなづらの岡に粟まきかなしきか。駒はたぐともわはそともはじ。此外にもよめり。此詞たしかには。今いふ詞の中に。それと同じとおぼゆるなし。擧といふにおほくはかよへるが如し。此たぐといふ詞をもて。たくなはといふといへるとは同じからねば。これもまたたくなはにふたつありとしるべし

眞淵云。たくなはのくはすみてよみ。なはたきのきは濁るべき事。萬葉の字の書き樣にしらる。さてなはたぎのきは。くりの反にて。なはたぐりてふ意なり。然れば。かた〳〵いとことなり。たくなはに二つありといはゞ。まどふ人多かるべし。おちなく事をわけて又ひとつにせん物かは。下の玉蔦。玉鬘の次に。玉桂はつを淸めはことなりとて。數に入らぬ類とすべし

くものはたてにふたつあり。雲旗手と。蜘旗手となり。菅家萬葉に。天の原はる〴〵とのみ見ゆるかな。雲のはたても色こかりける。重之家集に。あしたか蜘の手をれたるがうごくを見て。さゝがにのくものはたてのうごくかな。風を命に思ふなるべしとよめり

眞淵云。雲のはたては。萬葉に豐はたぐもともよみて。はゞありて。長きもの故に。旗をはたといふにたとへて。雲をいふは本なり。さゝかにの蜘には。旗といふべきよしも例もなけれど。くもの

か

六帖音なしの山の下行くさゞれみづ。あなかまわれもおもふ心あり。源氏夕ぎり。朝夕になくねをたつる小の山は。たえぬなみだや音なしの瀧

順家集に。兵部君が萩の歌に。さをしかのすだく麓の下萩は。露こきことのかくもあるかな。此露こきは。露けきとよめる書あやまれるか。もとより露のこきとよめるか。露のしげきをこまやかといひて。濃の字を詩には。用ふれど。歌にはめつらし。これに付きておもふに。露けしといふけもじは。ことけと音かよへば。この濃の字を。さいひなせるか

順か集の歌。わがもたる異本には。露けきことのとあり。李白詩云。春風拂檻露華濃。柳公綽詩云。千秋玉露濃。毛詩云。野有蔓草。零露瀼々

眞淵云。猶露けしは。猶露しげしのしを略きたるものと覺ゆ

神代紀に。拷繩をたくなはといへるは。たくは古語に白きをいへる詞にて。しらなはなり。栲衾タクブスマ栲機。タクハタ栲角。タクヅノ皆これなり。たくは木の名にて。其木白ければ。さてかりていへるなるべし

眞淵云。栲の字は今本の萬葉にも何にも多くあれど。こは楮の字を草の書より誤れるものなり。さて楮を製して。おりつくれる布も綱も白ければ。楮づのゝ白濱などよめり。つのはつななり。此楮をゆふともいへり。其證豐後風土記にもあり。木綿も白ければ。白ゆふといへり。それを此人たゞ白きことゝいへるは。雪穗の字を。萬葉にたへのほにとよめるを轉じて用ひたる心を得ずして。泥みていへるなり。物は多くの本を極めて後。轉せる事を思はざれば。たがひの出で來るぞかし

宣長云。豐後風土記に。速見郡柚富郷此郷之中。栲樹多常取栲皮以造木綿云々。栲機。栲衾。栲繩。栲領巾など多くある栲も。右に引ける豐後風土記によるに同物なり。故萬葉に白栲ともかき。又萬の白きものに。栲衾。栲角など枕詞にも云へり。角は綱なりと師は云はれ。或人は栲つ布なりと云へり。さて栲の字は楮を草書より誤りつと。師はいはれつれど。楮の字を書ける例なければ。いかゞ。此はなほ別に和字ならん

萬葉にたくなはのながき命などつゞけたる。神代紀

あるも。榛木を見むと云ふにはあらず。眞野之榛原のすべて地を見むと云へるなり。此上ある歌に猪名野者見せつ。角松原何時しか見せむとある類なり。榛を萩の花のことゝな思ひまかへそ。十四の巻に。伊可保呂乃蘇比乃波里波良和我吉奴爾都伎與良之母與云々。一の巻に。狹野榛能衣爾着成此二首など衣に着そと云へる趣同じきを以ても。榛は波理と訓むべきことを知るべし。さて又榛の字をさに雙べて。蓁とも書けるに。つくをなほ萩ならむかと疑ふ人もあるべけれども。蓁は榛の字の通ふを以て。通はし書けるのみなり

眞淵云。此よく萬葉を見よといへる意は。此人の萬葉の注にも外の歌の注にもくはしく。その意あり。されど。右の説を專らといひつのる心故に。萬葉の見樣に違あるなり。此うちに一つをいはんに。持統天皇參河國に幸の時とて。引駒野ににほふ榛原入れみだれ。衣にほはせ旅のしるしにとよめる。行幸は十月なれば。萩は有るべからず。字も榛とあれば。必はんの木なりといへり。おのれ云。此引駒野は。參河と遠江の堺ちかくて。今は遠江にあり。東參河遠江などは。いとあたゝかにて。冬雪ふるとしはまれなり。然れば秋の花。十月までも殘るはめづらしからず。さてこの歌に入れみだれ衣にほはせといへるを。はんの木は入りみだるとも。衣に色つく事あらんやは。又花などなくてにほふはき原といはんかは。又古人は有るがまゝにこそよめ。此木は皮をもて摺るものなれはとて。强ひて設けてしかよむ事あらんかは。又實に衣の色つかずは。何を旅のしるしとなさんや。古への歌は。實なるを强ひて虛にいひなすものなり。又かの寄木とてよめる歌をもみて。かならず。萩なるをしるべし。さて萩に草萩と。木萩とありて。かの古枝にさけるといふは木萩なり。生じ立つれば。一丈ばかりの木ともなれるなり。これらの外にもいといふべき事多かれど所せくてやみつ

信明集に。音なしの山より出づる水なれや。おぼつかなくも流れゆくかな。音なし山といふより出づれば。音なし河といふにや。又小野山の上を音なし山といひて。山より出づる水とは音なしの瀧をいへる

ふ。日本紀。日本後紀等に。蓁摺衣といへるも是なり。神樂歌にもさいばりに衣はすらんとよめり。今はよき人のきぬなど染むることは聞えず。山里には。猶用ふるなり。萬葉第第に。寄木とて。此榛をよめり。然るに。萩にもまた萩が花ずりとよめば。いよ〳〵人まどへり。遠里をの、眞榛もて。又白菅の眞野の榛原とよめるは。萩にはあらぬを。ふるくより萩とのみおもへり。よく〳〵萬葉集を見て。わきまふべし

眞淵云。萬葉にも。史にも。榛とも芽子とも書けるに付けて。此人はこの說を常書きたれど。なづめる說なり。萬葉に寄木とて。歌は萩をよめるも有り。又榛と書きて。必萩なる歌あり。よくみざる故に偏論をなせり。いにしへの摺衣には。草木の花實など卽色あるものを以て。まだらに摺りたりとみゆ。榛の木の皮を以ては。直にすりがたかるべし。煮汁もてすらば。するべけれど。さ樣にするは。今少し後のわざなり。よく萬葉の歌をみるべし。字に泥むべからず。

宣長云。云ひざままきらはしきことあり。草のはぎと云へるは。萩のこと。木のはぎと云へるは。波理のことなり。是まきらはし。其故は萩に草なると。木なると二種ありて。顯昭が榛と云へるは。木なる萩のことにて。榛をそれに當てたるは誤なれど。契沖なほこれを波岐と訓を木のはぎと云へるは。かの木なる萩のことの如くにも聞えてまきらはしきなり。榛と書けるは波理の木にして。萩には非ず。但し波理をも波岐とも云ひしことはありしか知らず。もし波岐とも云ひしことあらば。契沖が云へるごとく。波理木の略なるべし。そはいかにまれ。萬葉に榛と書けるは波理なり。たとひ波岐とはよむとも。萩のことには非ず。又萬葉なる榛を波岐とは訓むべきに非ず。すべて萬葉によめる榛と芽子とは歌のさま異にして。よく分れたり。榛は衣に摺ることをのみよみて。花をよめり。然るを師の萬葉考別記に。榛をも花咲く芽子と一つなりと云はれたるは誤なり。一の卷に。引馬野爾仁保布榛原入亂衣爾保波勢とあるも。色よくにほへる波理の木原に入り交りて。衣を摺れと云ふことなり。三の卷に。往左來左君社見良目と

にかくす意なるも。いと多きなり。又むかしをしのぶなどいふは。もとよりなり。すべてしのぶといふは。むねの内に思ふ事をおしこたへてあることなり。そのおしつけおくよりあらはさぬ事にもなり。又むねにわすれぬ事にもなる故に。むかししたふ事にも轉ぜり。その本をしる時は。さま〴〵にわかれたる意の行方もしらるべし。此說のごとくのみいひては。わかれたる上をいふのみにて。いときなきものに敎ふるがごとし

花ぞめにふたつあり。花のいろにそめしたもとなどよめるは。さくらいろに染むるなり。花ぞめのうつろひやすきなどよめるは。露草の花にてそめたるをいへり

眞淵云。花ぞめといふは。本。つき草の花にて染むるをのみいふ事なり。然るを。後人かのさくら色にそめし衣てふ心をいはんに。ことによりて。所せくていはれねば。更衣の歌に花染の袖などよめる。いふにもたらぬことなり。かくよめるは。天暦などのころより漸ありしにや。家集に。一首侍りしなり。然れば打まかせて。二つ有りといふはいかにぞや

花さくらにふたつあり。さくら花といふべきを。打ちかくしていへると。又紅のさくらをいへるは。さくらの中に一種の名なり。紅の薄花櫻などよめるもこれなり。六帖にさくらにつゞけて。花櫻の題を出だし。又躬恒。つらゆきなどの集にもよめり

菅家萬葉。あさみどり野べの霞はつゝめども。こぼれて匂ふ花櫻かな。重之集。花櫻つもれる庭に風ふけば。舟もかよはぬ浪ぞたちける。古今春下。うつせみのよにもにたるか花櫻咲くとみしまにかつちりにけり

眞淵云。六帖には同じ事をも少しいひそへたる語あるは。別に擧けたるも多ければ。こゝに引くは中々わろし

はぎに二つあり。榛と。萩となり。榛はりの木といふを。俗にはんの木といふ。それをはぎといふは針の木といふべきを。りもじ（眞淵云。りもじを略すといふは。書きたる所を見ていはんはさも有るべし。こはかゝでもいふなれば。りの言を略せりと書くべきなり。總て後人ことばといふべき所を。もじと書ける多し誤なり）を略せるなり。山のきし。川みぞのあたりにおほき物なり。其皮をとりて物を染るを。はんの木染とい

は。人丸の集には。下旬霞たな引きえあきもいなんとあり。これも誤字なるべし可考

ふぢごろもにふたつあり。服衣の名と。いやしきもの、きる。藤にてあらくおれる布となり

眞淵云。藤衣をいやしきもの、きるは。萬葉にかたゞみえて。今も藤たふとて山中のもの、きるなり。喪にふぢ衣といふは。古今集によめど。實には喪には麻衣をきて。藤布きたる事は古今なし。然れば。ことをつよくいはんとて。藤衣とよめるものなり。たゞふたつありとのみいひてはことたらず。」和名抄調度。縗衣和名不知古路毛喪服也。源氏榊。ふぢの御衣にやつれ給へるにつけても。かぎりなく。きように心くるしげなり。萬葉三。すまのあまのしほやき衣のふぢころもまどほにしあればいまだきなれず

はかぜにふたつあり。雁の羽風。荻の葉風などよめるとなり

舟の梶にふたつあり。萬葉に。二梶。マカヂ八十梶懸ヤソカヂカケなどよめるは。すべて櫓なり

眞淵云。こは今いふかぢをもあげてはふたつといひがたし。又上によれば。後世いふ軒ばのかぢなどをあげいふべきを。落せるか

あまにふたつありといへども。尼を海人にそへてのみよめり。天をもあまといへど。それはたゞはあめといひて。天河などつゞくるにあらねばいはず

眞淵云。下へつゞくる樣なるにも。天のかぐ山は。古事記に。阿米のかぐ山と書き。又天をあめとよみ。あまとよむべきことを分けて。注せし所によるにも。あめのかぐ山とよむべきなり。然れば。此るゐ多かるべし。考へ書き出だすべきものなり

しのぶに三つあり。こらふると。したふと。かくすとなり。忍戀といふは。戀しきことを堪忍して。その人にいはぬなり。むかしをしのぶなどは。したふなり。互忍戀などいふ題は。忍の字を借りてかけども。密の字などなり。隱密するにて。初の忍戀といふに。その心ことなり

眞淵云。しのぶてふ語。萬葉には專らはしたふ心によみて。隱す心なるはいと少し。古人集には。專らかくす戀なる多くて。したふは少し。又その人にいはぬをのみ擧けたるはいかゞ。すべての世

等に見えたり

うつほ物語祭の使。わびぬればさ月ぞをしきあふちてふ。花の名をだにきくと思へば。伊勢集。聲にだに聞きての後はほとゝぎす。あはぬさ月はあらじとぞ思ふ。小大君集。もろともにあひみぬ、まのねをひけば。忘れやしにしながからぬ哉。中務の集にはみえざるを思ふに。いむといへば忍ぶものから夜もすがら。あまの川こそうらやまれつれ云々といへる歌のあれば。これをみあやまりてのせられつるか。しかもこの歌は伊勢が歌にて。玉葉集にも伊勢が集にものれり。藤川日記云。さみだれがみのかきくもらぬさきにとみのしろごろも思ひたつ事ありけり。此月は。萬にいむなる物をといふ人ありけれど云々

あまをとめにふたつあり。天處女と。海人處女となり

あまごろもにみつあり。天衣と。雨衣と。海士衣となり。あま衣なづるいはほなどよめるは。天衣なり。あま衣たみの、島などつゞけたるは。雨衣なり。六帖第三。海の歌に。すまのうらに玉もかりほすあま衣。袖みつしほのひる時やなき

菩薩瓔珞本業經云。淨居天衣重三銖

あま雲にふたつあり。天雲と。雨雲となり。あまぐものよそにもなどつゞけよめるは。天雲なり。後撰に。あまぐものはるゝよもなくふるものは。袖のみぬるゝ涙なりけり。後拾遺に。あまぐものかへるばかりのむらさめに。所せきまでぬるゝ袖かな

宮木にふたつあり。宮木引くいづみの杣。おほくかやふによめるは。宮つくる材木なり。拾遺に。さゞなみの近江の宮はなのみして。霞たな引く宮木守なし。此宮木は。近江の宮の庭の木なり。その宮木守といふも。とのもりづかさのとものみやつこなどをいふなるべし

眞淵云。宮木守の事はおぼつかなし。もし字の誤あるか。宮木とは專ら宮材をこそいへ。近江の宮のあれて後。宮材守るべき事かならずなきことにて。いひ出でんも益なし。こはもしさゞ波の大山守てふを思ひあやまりて。宮木守とよめるにや。引き出でんもよしなし。庭の木を宮木といふ事あるべうもなし。」こゝに引かれたるさゞなみの歌

し御前の菊の賀に。神無月ふたつあるとしの時雨には。一もとぎくも色こかりける。躬恒集。一もとの菊にはあれども露じもに。わけてこと〴〵色はそむらし。みつねの歌は。菊の名にはあらで。菊のひともとの中に。いろ〳〵にうつろふをよめるにや

春の夢は。よくあふよしにあまたよめり。後撰に。ねられぬをしひてわがぬる春のよの。夢をうつゝになすよしもがな

眞淵云。後世む月の初夢とて。こゝろむるも。春の夢はあふとての事か。又初めてみる夢の事をいふも。少しさいつころよりいへば。春の夢てふ名のみか。詩にも春夢と作れり。それよりうつれるか

又。まどろまぬかべにも人をみつるかな。まさしからなん春のよの夢。新古今に。春のよのゆめのしるしはつらくとも。みし計だにあらばたのまん。又。枕だにしらずはいはじみしまゝに。君かたるなよ春の夜の夢。續千載に。あふことをこよひ〳〵とたのめずは。中々春の夢は見てまし。貫之集に。ねられぬをしひてわかぬる春のよの。夢のかぎりはこよひなりけり。新古今に。春のよの夢のうきはしとだえして。峯にわかるゝ横雲のそら。伊勢集に。春のよの夢にあへりとみえつれば。思ひたえにし人ぞまたるゝ。兼盛集に。思ひつゝねいればみえつ春のよの。まさしきゆめにむなしからずな。六帖第五。春のよの夢はわれこそたのみしか。人の上にて見るがわびしき。西行法師山家集にも。年くれぬ春くべしとは思ひねに。まさしくみえてかなふ初ゆめ。これらにてしるべし

書紀崇神紀云。四十八年春正月。天皇勅豐城命活目尊曰。汝等二子慈愛其齊。不知曷爲嗣。各宜夢。朕以夢占之。二皇子於是被命淨沐而祈寐。各得夢也。會明。兄豐城命以夢辭奏天皇曰。自登御諸山。向東而八廻弄槍。八廻擊刀。弟活目尊以夢辭奏言。自登御諸山之嶺。繩絚四方。逐食粟雀。則天皇相夢。謂二子曰。兄則一方向東當治東國。弟是悉臨四方宜繼朕位云々などあるも。春のゆめなり。猶この外にもあまたあるべし

五月には。はじめてあふことをいむよし。あまたよめり。うつほ物語。伊勢家集。中務家集。小大君集

眞淵云。行平卿いなばの山とよまれしも。因幡の國の山の意なるべし

わかさ路。みこしぢ。越 たにはぢ。丹波 以上萬葉 但馬糸。延喜式六帖 石見がた。六帖 はりまぢ。拾遺 はりまがた。吉備人。紀路。古事記 紀人。萬葉 伊輿簾。詞花集。惠慶歌によめり。清少納言にいよすともいへり 土佐路。筑紫路。筑紫舟。以上二萬葉 筑紫櫛。拾遺 宇治人。網代人。以上二萬葉網代は地の名なるべし

眞淵云。地の名ならでも。網代もる人をあじろ人といふべし

奈良路。なら人。あすかをとこ。はつせをくに。はつせめ。はつせをとめ。はつせ風。飛羽山松。とよはつせ路。佐保路。佐保風。宇治川浪。安太人。以上十三萬葉 立田姫。佐保姫。古今 ふすま路。難波人。難波をとこ。難波女。難波菅笠。貫之集にも 三島菅。有間菅。明日香風。須磨人。以上九萬葉 輕をとめ。古事記 さくら人。尾張國。愛智郡。作良人也。催馬樂 きへ人。萬葉遠江國麁玉郡。企閉鄉人也 三島木線。神樂歌 はこね路。あしがら小舟。入間路。うなかみがた。かつしかわせ。きそぢ。いかほ風。かとりをとめ。かとりは陸奥にさいふ所あるか。又かとりを織るをとめか 津守。網引。あそ山つゞら。三宅路。志賀さゞれ石。伊加保背。稲日妻。松浦舟。松浦佐用姫。木線山雪。以上十八萬葉 水莖ぶり。四極ぶり。以上二古今 白濱波。あと川柳以上二萬葉

紫のきくをひともと菊 劉蒙菊譜云。順聖淺紫葉比諸菊最大。一花不過六七葉。而每葉盤疊。三四重云々 といふは。武藏野の心にや。兼輔卿家集に。故内侍のかみのすみ給ひし時。藤壷にて菊の賀。みかどのせさせ給ひけるに。紫の一もとぎくに萬代を。むさし野にこそたのむべらなれ。此歌ゆかりをたのむ心。しか聞えたり。新拾遺集第五秋下に。寛平御時菊合に。紫野の菊をよめる。よみ人しらず。名にしおへば花さへ匂ふむらさきの。一もと菊における初霜。この歌にも。紫の菊をいふと聞ゆ。拾遺集第七物名に。ひともと菊。すけみ。あだなりとひともときへるものしもぞ。花のあたりをすぎがてにする。この歌。新勅撰集第廿雜歌に。みつねが歌とて。ふたゝび載せらる。續後撰集第八冬部に。圓融院にひともと菊奉るとて。藤原灌子朝臣。時雨つゝ時ふりにける花なれど。雲井にうつる色はかはらず。御返し。圓融院御製。古へをこふる涙の時雨にも。猶ふりがたき花とこそみれ。兼輔集に。神無月ふたつあると

にひぢまきといへるは俗語なるべし。ひぢにまと
ふ物故にすなはちいふなり。」古事記云。夫之奴乎
所纏已君之御手玉釧於膚熅剝持來云々。萬葉九。
わざもこはくしろにあらなん左手のわが奧の手に
まきていなましを。和名抄服玩。釧比知萬岐同農耕具。
鉃加奈加岐久之路
盌。もひ。まり
和名抄瓦器。盌末里俗云毛比小盂也
やまとうた。このやまとはこのくにの總名なり
眞淵云。古今序にやまと歌と書けるを。後世筋な
き說どもをいへば。かく書きしのみなり。古へ奈
良の朝となりて。から文。から歌多く行はる丶に
つけて。萬葉にから歌にならべ擧げたる所に。た
ゞ一つ日本挽歌と書し侍り。その後はいよ〳〵か
ら歌のはやりぬれば。それにむかへて。日本のう
たをやまと歌とは云ひたりければ。あらぬ說をい
ふは論にもたらず。その上をいはゞ。皇朝にゐて
やまと丶いはでも有るべきことなるを。むかし人
もよく物を思ひやらで書けるなりけり。後世には
歌にてわかといふこと丶覺ゆるよ。歌にさへ和歌
の浦などよむにや甚しきことなり。紫式部は。さ
る心したるにや。源氏物語にからにむかへぬ所に
は。やまと歌とはか丶ず
山城川。日本紀　淀川か。　山城女。日本紀　やまと琴。
やまと路。やまと島。やまと女。河内女。以上萬葉　大
和舞。古今　やまと人。伊勢物語　あづま路。あづま人。
あづまをとこ。あづまをとめ。あづま歌。あづまや。
あづまあそび。あづまぎぬ
眞淵云。あづまやは東屋の意にあらねば。こ丶に
はいかゞ。あづま琴をもいるべきにや
伊勢人。桓武朝人名。日本後紀大同元年。又永久四年百首詠之。紫式部日記。女房名　尾張粔拾遺集幷新猿樂記
眞淵云。この次に伊豆手船も入るべきを。五手船
と心得てのせぬにや。古へ伊豆の山より舟を作り
て出だせし事。紀にも萬葉にもみえたり
駿河舞。甲斐歌。土佐日記　相模路。さがみね。以上二萬
葉　武藏鐙。伊勢物語　ひたち帶。六帖　あふみ路。萬葉
近江ぶり。古今　ひだ丶くみ。ひだ人。信濃路。以上三
萬葉　信濃野。小大君集　陸奧山。萬葉小田郡に。こがね出でける山を家持おしてかくよめり

鈴をぬりでとも。ぬでともいふ。但。鐸の字をぬでとよむに。これは大なる鈴をいへば。ちひさきをばいはぬか。又さなぎとも。延喜式。古語拾遺にあり
古事記云。阿佐遲波良袁陀爾袁須疑氏。毛毛豆多布。奴氏由良久母。淤岐米久良斯母云々。宣長云ぬでは。ぬりでのりをはぶける名なり。」古語拾遺云。鐵鐸。古語作奈伎 舊事紀云。鐵鐸 謂佐那岐 神祇令鈴二十口。佐奈伎二十口云々

たちを。またはつるぎといふ。もろはなるをつるぎとのみいふにあらず
眞淵云。たちは物を斷ち切る意の名。つるぎは古事記に。つむがりのたちといひて。さきのとがりたるてふ意なり。萬葉につるぎだちもろはのときにとも。紀につるぎのたちともいへば。物はひとつなり。其外大ばがりなどいふも同じ
宣長云。つるぎは物をとくたちきるさまを云ふ言なれば。正しくはつるぎのたちといふを。略きてつるぎとのみもいふなり。しかればくはしくわけていふときは。たちはなべての名。つるぎはその用をほめたる名なり

うなゐと。めざしと同じ。あらはべの名なり。萬葉に放髮草を。うなゐはなりとよめるに。狹衣にめざしなる御ぐしを。せちにかきやりつゝあそびむつれ給ふとあれば。ともに髮のみじかきにつけて。名づけたりとおぼしきなり
眞淵云。めざしはちひさき子のひたひ髮の。みじかくて目をさすごとく前へたれてあればいふ成るべし。然るにさがみ歌に。いそなつむめざしぬらすな。催馬樂の竹川に。めざしくはへてはなてといへるは。少しよろしきほどになりてもいふとおぼゆ。」萬葉十六たちばなのてらのなかやにわがゐねしうなゐはなりはかみあげつらんか。自注云。俑若冠女曰放髮丱矣。催馬樂朝倉。あさくらやをめのみなとにあびきせばたまのめざしにあひにけり。夫木集。きの國のなぐさのはまに貝ひろふあまのめざしのおとなゝりせば

溝。みぞ。うなで
書紀神功紀。欲潤神田堀溝（ウナテ）

ひぢまきを。またはくしろといふ
眞淵云。萬葉にはくしろとのみ多くいへり。和名

べにも人を見つる哉　まさしからなん春のよのゆめ。歌林良材云。夢をはぬるに見るに。夢をかべとはいへり。かへもぬるものになるによりてなり

梭。ひ。かい

和名抄織機具。杼（和名比）亦謂之梭

濱藻。なのりそも

書紀允恭紀云。時人號濱菜。謂奈能利曾毛也

灼然。いちじろし。いやちこなり

眞淵云。後にはいちじるしとのみいへり。萬葉にはいち白しと書けり。」書紀景行紀云。灼然（イチシロク）（此云以耶知舉）。萬葉四。あを山をよこぎるくもの灼然。われとゑまして人にしらゆな

弓を。たらし。又あづさ

眞淵云。萬葉にみたらしのあづさとつゞけしは明なり。只あづさとのみよみしも有りつるかわすれつ

書紀雄略紀云。嗔猪直來。欲噬天皇。天皇用弓刺（ミタラシ）止

萬葉十三。長歌みゆきふるふゆのあしたはさしやなぎねはりあづさをたほみてにとらし給ひて云々。

大澤の池。廣澤の池同じ。中に大澤はむかしの名なり

古今秋下。ひともとゝ思ひし菊を大澤の池のそこにもたれかうゑけん。顯注密勘云。大澤の池とは。廣澤の池なり。ふるくは大澤とよめり。宣胤卿記云。長亨三年二月二日。歷覽廣澤。大澤等池。有佳景云々

更科山を。またはをばすて山といふ

眞淵云。更科は郡の名なり。近江の蒲生郡の野にかまふ野。大和の宇治郡の野をうち野といふが如く。いづれにもいへど。同じ山に二つ名あるにはあらず

卷向山を。またはあなしの山といふ

眞淵云。これもまきむくのあなしの山といふは。かた〲もいひたうのみ。」大和志云。纏向山北曰穴師山云々

いひを。かれいひといふ

眞淵云。かれいひはほしたるをいひながら。中ごろよりひとつにもいひ。又別にもいへり

毛詩。無羊或負其餱云々。伊勢物語云。みな人。かれいひのうへになみだおとして。ほとびにけり云々

をきとよめり。萬葉十七。長歌をくよしのそこになければ。拾遺物名。はしたかのをきゑにせんとかまへたる。をしあゆかすなねすみとるべく

集。あつまる。つどふ

おほうち。もゝしき。こゝのへ

眞淵云。もゝしきとのみいひて。大内の事とするは。伊勢の御の歌に。はじめてみゆ。萬葉には。宮とつゞけたり。十六卷に。とねりとつゞけあれど。是も殿居てふ意につゞけたれば。同じことにて。おし轉ぜしのみ。」もゝしきの事は。猶。冠辭考にくはし。楚辭九辨云。豈不鬱陶而君兮君之門以九重（天子有九門）

みかど。すべらぎ。おほきみ。すべらみこと。おりゐのみや

きさす。きじ

ともしび。あぶらひ

なには。みつ

すみよし。すみのえ

眞淵云すみよしといひたるは。凡。延喜などのころよりの誤り。吉はえのかなにて。古くはすみのえとのみいへり。日吉も古事記に日枝と書きたり。比叡も同じかななり

ひえ。ひよし

ふもと。はやま同じ

きさき。秋のみや

漢書百官表云。大長秋。師古曰。秋者取成之時。長者恒久之義。故以爲皇后宮名。拾芥抄。中宮長秋宮云々。夫木集。月もるもかげをならべて秋のみや。くもらでのみや千代もめぐらん

たみを。あをひとぐさ

古事記。宇都志伎青人草云々。書紀に。蒼生をよめり

はしふね。もろたぶね

和名抄船類。艇（漢語抄云。艇平夫禰。游艇波之布禰）玉葉戀一。たよりある風もやふくと松しまに。よせて久しきあまのはし舟。書紀神代卷。或曰。遊鳥爲樂。故以熊野諸手船

ゆめを。かべといふ

眞淵云。むかしはいめとのみいひたり。いつの比よりゆめとは誤りけん。」後撰戀一。まどろまぬか

眞淵云。兄にいろせ。姉にいろねてふ語をなどおとしけん

すなはち。やがて

竹取物語云。とくおろさんとてつなをひきすごして。つなたゆるすなはちにやしまのかなへのうへにのけさまおち給へり。貫之集。春たゝんすなはちことに君がため千年つむべきわかななりけり。蜻蛉日記云。人〳〵はや〳〵とそゝのかしてわたりたればすなはちとみえたり

和名抄木類。柞 和名由之。漢語抄云。波々曾

柞。ゆし。はゝそ

ならと。かしはと同じものなり

新撰六帖。さほ山のならのかしは木またはへのもとつはしげみもみぢしにけり

鵜 うを。しまつ鳥

しまつ鳥は。鵜とつゞくる冠辭なり。そをやがて鵜の異名のごとくせるなり。十六夜日記云。しらはまに墨の色なるしまつ鳥。筆もおよばゝゑにかきてまし

ひこぼしを。いぬかひぼし

和名抄景宿類。牽牛 和名比古保之。又以奴加比保之

くぢらを。いさなといふ。和名には出だされず

壹岐國風土記云。鯨伏在郡西。昔鮨鰐追鯨走來。隱伏故云鯨伏。鰐並鯨化爲石。沓去一里。俗云爲伊佐

草をくさとも。かやともよめり

霞を興風家集に。春のほだしとよめり

眞淵云。こはかをだにぬすめといふ歌の同じ心にて。花の香がとふもとには霞ぞ春のほだしとよみしなり。さらば。しばらくいひなしたる物にて。必霞の異名にはあらず。興風集。山風の花の香かどふふもとには霞ぞ春のほだしなりける。同。山里は春のほだしにとぢられてすみかまどへる鶯ぞなく

雪を。はだれとよめり

萬葉十九

わがそのゝすもゝの花か庭にちる
はだれのいまだのこりたるかも

招。まねく。をく

書紀神代卷。奉招禱也とあるも。又風招とあるも。

衞門集に。おもひくみにまかるといへるみな同じ

眞淵云。もひはのむ水をもる缶の名なり。それより轉じて。のむ水をもいふを。本末を思ひたがへたり

主水司は。もひとりづかさにて。その水缶によりて名づけし物なり。紀の訓に轉じたる意もてつけたるなり。古事記云。獻大御水（オホミモヒ）也云々。倭姬世記云。倭姬命御水飲止詔氐云々

催馬樂飛鳥井。あすかゐにやどりはすべしかげもよしみもひもさむしみまくさもよし。赤染衞門集。小舟にをのこ二人ばかりのりて。こぎわたるを何するぞと、へば。ひややかなるおもひくみに沖へまかるぞといふ

頰（ホツラ）・和名に桭（ホコダチ トヅラ）これは俗に方立と書きて。ほうだてといふ物なり。今案ずるに。ほこだちはほ、だちにや。のこぎりを和名にはのほぎりとあれば。彼になずらふ歌に。ほとこと同韻の字なれば。かよはしてほこだちといふか。戸のつらにたてる物なれば。ほこだちといふか

眞淵云。ほこだちはおちくぼ物語の部屋の戸に木をたて、鍵をつけたるに依るに戸の面に。又たてに木をたてたる物なり。然ればとづらもその意なり

こほりも。こゞりなるべし

うしろ。しりへ。せなか。そびら

ひたひ。ぬか

催馬樂に。かすがひといへるは。世にいふかけがねなり

催馬樂貫河。かすがひもとざしもあらばこそ、のとむのとわれさ、めひらいてきませわれやひとづま。延喜式に。鎹をよみ。新撰字鏡に。錄をよめり。新撰六帖世をそむく柴のあみ戸のかけがねの思ひはづせば人ぞまたる、

頭。かうべ。かしら

鵠。くゞひ。こふ

和名抄羽族名。鵠 漢語抄云。古布。日本紀私紀云。久々比

乳母。ちおも。めのと

父。ちゝ。かぞ。母。はゝ。いろは

兄。あに。このかみ。せうと。弟。おとうと。いろと。

とよめるは。この鷺のしりさしを略していふにや
眞淵云。今田舍にて。鷺のしりさしと云ふは。いと〱短くて和かなり。藺をいふにあらず
和名抄草類。藺 和名。爲。辨色立成云。鷺尻刺 萬葉十一。みなとあしにまじれる草のしり草のひとみなしりぬわがしたおもひ

かたみを。日本紀にかたまといへり。こに同じかたみをかつまとも。かたまとも云へりし事は。古事記。書紀。萬葉などにみえたり。こは宣長が古事記傳十七に考あり。こと長ければこゝに略す

うひぢ。こひぢ。ひぢりこ。どろ皆同じ名なり。和名にどろは出だされず。日本後紀に。登勒野をある所には泥濘野とかけり。俗にはともじを濁りていふ。いやしきなり。うきも同じものなり
和名抄。田野類。泥 和名比知利古。云。古比知 類聚國史云。天長六年十月丙辰。幸二泥濘池一
夫木集。
今さらに水もまかせず底深き
沼のうき田にさなへとるなり

文集に。塗の字をぬかりとよめり。雨などふりて。道のあしきを常にいへば。上にいへるにはすこしかはるべし
白氏文集云。失足蹈泥塗云々。爲尹卿千首。あせをこす苗代水のほどみえてみちのぬかりはかわくまもなし

きそひがりをまたはくすりがりといふ
眞淵云。萬葉集によめるきそひがりとは。人々競ひて狩する。意にて。いつにもいふべし。その語藥がりの歌にある故なづみたるなるべし
萬葉十七。かきつばた衣にすりつけますらをがきそひがりする時はきにけり。千蔭云。きそひがりは。藥狩なり。卷十六。う月とさ月のほどに。藥狩つかふる時にとよめるに同じ。さてきそひがりは。宣長云。競狩にはあらずして。服裝(キヨソヒ)て狩をするなり

とぶ火を。日本紀にはすゝみといへり
書紀天智紀云。筑紫國。置二防與二レ烽

水をもひといふはのむ水なり。主水司をもひとりのつかさといふこれなり。景行紀に。冷水をさむきみもひとよみ。催馬樂にみもひもさむしとうたひ。赤染

日本後紀云。弘仁三年六月庚戌。幸ニ於大堰ニ云々。類聚國史第卅一にのれり。山城名勝志云。葛野郡大井山云々

賀茂山を又神山とよめり。萬葉によめる神山は大和にて。賀茂山にはあらず。またいづくにも。神のます山をいふ。相模が神山のかしはのくぼのといふ歌は。家集に箱根によみて奉れる中にあり

萬葉二。神山の山べまそゆふみじかゆふかくのみゆゑに長くと思ひき。同十二。神山の山下とよみゆくみづのみをしたえずは後もわがつま。新拾遺冬。水鳥のかもの神山さえつれば松の青葉も雪ふりにけり。相模集。神山のかしはのくぼのさしながらおひなほる身のさかゆべきかな

さけをみきといふ。世には神に奉るをのみみきといふとおもへり。それをば和名に神酒と書きてみわといへり

眞淵云。みきのみは。御酒と書ける所もあれば。天皇にも神にも奉るをあがめていふか。きは酒の古語なり。又醸酒(カミ)を略きたる語とも覺ゆ。そのよしは。味酒をかみなび山とも。三輪ともつゞけしは。酒を醸とつゞけし物なればなり。和名に神酒と書きて。みはと訓みたるはくはしからぬなり。みはは醸瓶の意にて。古くはかみ作りたる瓶ながら。神にも天皇にも奉りしなり

かつみはこもの異名か。六帖題にこもにつぎてかつみを出だしたれば。こと物のやうなれど。ぬなはにつぎて。ねぬなはをのせたるたぐひとすべし

眞淵云。花かつみは。かならず蔣の事にはあらず。別に說き侍れど。所ふたがりてえ書きがたし

萬葉には。舟のろを梶とよみて。今梶といふ物をばよまず。八十梶(ヤツカヂ)。二梶(マカヂ)梶とるまなくなどよめる。皆櫓なり

眞淵云。今は中にて繼きたるをろといひ。一木にて作れるをかいといへど。古くはかいも。かぢも同じ意にいへるもあり。萬葉に。澳つかいいたくなはねそといへり

棹の字。かいとも。さをともよめり。ひとつなり

眞淵云。さをと同じ物と覺えず。萬葉かいの所に。棹と書きしも有るは。そ書きし人のふと思ひしものか

藺ゐを鷺のしりさしといふは異名なり。萬葉に。知草

に。秦大津父といふ人には。父をちとのみよめり
ほのけは。則けふりなり
新撰字鏡。燸燸 介夫利 神樂歌。弓立ていせじまやあ
まのとねらかたくほのけおけおけ
をの。よき。たづき。まさかりこのよつは同じもの
なり
このくだりまへに出でたるとよくにたり
ゐせきと。井堤 ゐでと同し事なり
和名抄。河海類。堰埭 和名井世岐 萬葉七。はつせ川な
がる・みをのせをはやみゐでこすなみのおとのさ
やけく
あしをよしといふは。俊成卿の住吉社歌合を判して。
末にかき給へる言に。あづまの人のことばなるよし
なり。齋宮忌詞に。法師を髮長といへるやうに。あし
といふがゆゝしければ。よしとはいひなすにや。ふ
るくは歌にみえざるにや
眞淵云。遠江などより東の方にては今よしとのみ
いへり。又難波のあしに伊勢の濱をぎとて。此物
を同じ事とよめるは。後の俗の歌にて。萬葉の意を
よくしらでいへり。東歌にはさゝらをぎあしとひ
ことかたりよらしもとよめるは。似て同じからぬ
をもていへれば。中〳〵に別なる據なり。神祇伯
顯仲判住吉歌合。みぎはなるしほあしにまかふは
まをぎはよしとぞみゆるよさのうら人。住吉社歌
合跋云。神風いせしまにははまをきとなつくれど。
なにはわたりにはあしとのみいひ。あづまのかた
にはよしといふなる。

なし。ありのみ
相模集。
おきかへしつゆばかりなるなしなれど
千代ありのみと人はいふらん
事物異名云。梨阿里馬

みわ山をみむろ山ともよめり。この外にまたみむろ
山あり
古事記云。此者座御諸山上神也云々。長宣云。三
輪山を御諸山といへるは。こゝをはじめにて。中
巻水垣宮の段。書紀同御代の卷などに見え。又繼
體卷の歌に。みもろがうへにのぼりたちとあるも。
山とはいはねど。この山の事と聞ゆ
類聚國史に。大堰山とあるは。今の嵐山にや

て。淺く流る、水なり。にはたづみは。雨ふりて俄に水の流る、にて。俄泉の意なり。同じ物にあらず

和名抄雲雨類。潦 和名爾波太豆美 雨水也

あまは。總名にてかづきめは。あまの中の別名なり。歌にはかづきめとよめることはなくて。かづきするあまなど萬葉集によめり

眞淵云。紀を見るにたゞ海邊つきて住人をあまといひて。いやしきもの、みの名にはあらざりしを。後には漁などするものをのみあまといへり

延喜式大嘗祭式に。潜女をかつきめとよめり

神のやしろを。又みむろといへり

萬葉三。長歌わがやどにみもろをたて、まくらべにいはひべをするたかまをまなくぬきたれ云々

みあらかは。との、古語なり。ふるくよりとのともよめり

眞淵云みあらかは。御在所の意なり。所をこともかともいふなり。」みあらかは。古事記に御舍殿などをよみ。古語拾遺に瑞殿をよみ。大殿祭祝詞に御殿をよめり

みづがきを。いがきといふは。たゞ同じ事なり

眞淵云。みづがきはほめていふ。いがきは齋かきなり。故にみづがきとは天皇の御かきをも。古へはいひつ。いがきは神社にのみいへりしなり

和名抄祭祈具。瑞籬 俗云。美豆加岐。一云。以賀岐

よね。こめ

眞淵云。こめは荒稻に對へて。和稻てふ語にて。籾を去りて米とせしをいふ。よねは强ひて思ふに。米を又うすづきてしらげなどせしをいふとおぼゆ。よといふ語はまだよく考へ得がたし。同じ物にて。すこしことなるべければ。用ふるにも心すべし

つら、をたるひといふ。たれたる氷といふことなり

源氏末つむ花の卷に。朝日さす軒のたるひはとけながらなどかつら、のむすぼ、るらん

老翁を。日本紀にをぢとよめり。おきなに同じ

眞淵云。翁のみも萬葉によめり。老いたる人を貴びて小父の意にていふならん

をぢ。をばは。小父。小母なるべければ。これも老いたる人をたふとびて。小父といふ心にや。欽明紀

へみを。神代紀にをろちといへり
和名抄蟲豸類。蛇（和名倍美。一云。久知奈波。日本紀私記云。乎呂知）
ほゝづきを。神代紀にかゞちといへり。山かゞちといふへみの名も。かれがめのかゞちのごとく。てれるより名を得たるなるべし
書紀に。赤酸醬をあかかゞちとよめり。和名抄草類。酸醬（和名保々豆木）
ころもくびを。えりといふは俗語か考ふべし
眞淵云。萬葉に。眞間娘子をよめる長歌に。青衿著てとあるは。あをえりとよむへきなり
古事記に。衣衿とあるを。衣のくびとよめり。新撰字鏡云。襟衿也。（古呂母乃久比）
永久四年百首。思ひ出でば心ばかりにかよはして
衣のくびにことなもらしそ
やまと琴は。緒のむつあれば。むつのをといふ。六帖にむつのをのよりめごとにぞ香は匂ふ引くをとめ子が袖やふれつる
樂家錄云。和琴絃大長。六絃皆同。生糸四爲一束掛曲針凡十六返
御鎮座本紀云。天鈿女命採㆓天香山竹㆒。其節間雕㆓風孔㆒通㆓和氣㆒。（今世號㆓笛類㆒是）亦天香弓與並叩絃（今世謂㆓和琴㆒其緣也）
長明兼名抄云。ある人云。和琴のおこりは弓六張をひきならして。これを神樂にもちひけるを。わつらはしとて。のちの人。ことにつくりうつせると申しつたへたるを云々
玉葉雜五。
よつのをのしらべにつけて思ひいでよ
なかばの月にわれもわすれじ
兼盛家集に。びはほうしよつのをに思ふ心をしらべつゝ、引きありけどもしる人もなし
琵琶をよつのをといふこと。此歌にてはじめてみえたり。びはのほうしといふことも
びはのほうしといふこともとどゝめたるはびはのほうてふ事は。このふみよりはじめてみえたりといふ心をふくめたるなるべし
しみづ。いづみ同じ名なり
眞淵云。いはゞいつみと同じ事ながら。しみづはすみ水。いづみはわきいづる水なり
いさらみづと。にはたづみおなじものなり
眞淵云。いさら水は。いさゝを川。いさらゐなどに

あらしと同じ。萬葉集に下風と書きてあらしとも。おろしともよめり

眞淵云。嵐は和名に山下出風と書ける意にて。萬葉山下風と書き、たれるを。又漸に略して。山下とも。下風とも書きしなり。然れば。皆あらしとよむべきを。やまおろしなどよめるはいかにぞや。三吉の、山下風のさむけくにと有るも。山のあらしとよむべきなり。今山下風とよめるはわろし

あはびをば。萬葉にいそがひとよめり。異名なるべし

萬葉十一。水底の玉にまじれる礒貝のかたこひのみにとしはへにつゝ。同十一。いせのあまの朝な夕なにかづくてふあはびのかひのかた思ひにして

（鴨頭草）つき草を。又はつゆ草ともいふ。歌にもまれにはよめり

萬葉七。月草に衣ぞそむる君がため色どり衣すらんと思へば。散木集いかばかり仇にちるらん秋風のはげしき野べのつゆ草の花。八雲御抄。藻鹽草などには。露草とて。月草を異名とせり。詞林採葉抄にも。月草をつゆ草といへるよしみえたり

おろかおひを。ひつぢといふ。歌にはひつぢとのみよみならへり

和名抄稻類。稻（於路賀於比。俗云。比豆知。）古今秋下。かれる田に生ふるひつぢのほにいでぬはよを今さらに秋はてぬとか

陰草をおもひ草といふは。異名なるべし

眞淵云。を花が下のとよみし故に。陰草といへるか。いまた定かならぬ事なり

萬葉十。かげ草のおひたるやどの夕かげになくこほろぎはきけどあかぬかも。同十。道のべのを花がもとの思ひぐさ今さら何のものかおもはん

山ゆりをむかしは。さゐといへり。古事記に見えたり

古事記註云。山由理草之本名。云二佐韋一

いたどりの花を。古くたぢひの花といへることは。日本紀反正天皇の御卷に見えたり

書紀反正紀云。時多遲華落二在井中一。因爲二太子名一也。多遲華者。今虎杖華也。和名抄草類。虎杖一名武枝（和名伊太止里）

枕草子。いたどりは虎の杖と書きたるが。杖なくともありぬべきかほつきを云々

をいへるを。竹にこづたふとよまれたるは不審なり
眞淵云。鶯の異名といへるは。末の世に思ひあやまりしものなり。かく引ける歌も皆すでに古意を失なへる時なればいふにたらず

古今春上。百千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれどもわれぞふりゆく。榮花物語つぼみの花の巻云。日のけしきうらゝかに。光さやけく見え。もも千鳥もさへづりまさり云々。猶百千鳥の考へは。古今の餘材抄。續萬葉論にもくはしくみえたり

おしねは。おそいねといふことを。そいの反。しなればつゞめていへるなり。おくては奥手にて異名なるべきを。おほくはおくてとよめり

和名抄稻類。稻 今按。稻熟有早晩。取其名。和名早稻。和勢。晩稻於久天。或又處々有之

あした。あさ。ゆふべ。くれ

ふみ玉づさといふは異名なり。萬葉には使を玉梓といへり。たまあづさといふべきを。まにあのひゞきあれば略せるなり。あづさは萬葉十三に。弓をあづさとよめり。弓は矢をはなちやる具なれば。思ふ心を文していひやるを。たとへてほむることばをくはへて。玉梓とはいふなり。使をいふも此心に同じ。萬葉集に玉梓の媒とよめるは。今の心にあらず

萬葉考云。玉づさてふ事は心得ず。強ひて思ふに玉はほむることば。つは助の辭。さは章の字音にや。何ぞといはゞ。文章もて遠く傳ふる事は。本より皇朝の上つ代には聞えず。たゞからもじを借りにし世より。後に出でこし事なり。然れば。この古意はなかるべき理なり。且すべて人の國の物を。こゝに用ゆる事も多かれど。そは專ら字音のまゝに。むかしよりいへるなり。人まろの歌に。からの事をいへるはなかれど。既にしかいひなれし時なれば。したがひていへるならん

宣長云。上古には人のもとへ使をやるには。梓の木に玉をつけたるをもたせて使のしるしとせしなり。玉梓の使とつねにいふはこの事なり

なぎさは。古事記に波限とかゝれたれば。みぎはに同じ

古事記云於其海邊波限

麻苧

あさ。をといふこと一物兩名なり

毛詩疏云。苧亦麻也。科生數十莖宿根藏土中。至春自生不歳種也

多し。古今集にもあり

虫の字。むしとも蛆うじともよめど。うじはきたなく
むぐめくをいひて。歌にはよまず

新撰字鏡云。蛆宇自とあれど。蛆の字をよみきた
れり本草云。蛆蝿之子也。凡物敗臭則生云々

はづかし。やさし。かたじけなし。この三つ同じ心
にて。歌にはかたじけなしとよめりることなし

續日本紀寳龜八年の詔に。辱奈美云々とあるかたじ
けなみとよめり。萬葉五。たましまのこの川上に家
はあれど君をやさしみあらはさずありき。竹取物
語云。あまたの人の心ざしおろかならざりしを。
空しくなしてし事こそあれ。帝のの玉はん事に
つかん。人ぎゝやさしといへば云々。山家集。柴の
庵により〱梅の匂ひきてやさしき方もあるすま
ひかな。西行家集。なにごとのたはしますかはし
らねどもかたじけなさになみだこぼるゝ

かしこみ。おそろし。同じ心なり

古事記に見畏とあるを。みかしこみてとよめり。
又恐をもかしこしとよめり。又新撰字鏡に。悸を
かしこむとも。おそるともよめり

まに〱。まに。まゝに。この三つくはしきと。く
はしからぬとなり

眞淵云。まに〱は。まゝに〱とかさねたるに
て。これもまを一つはぶきしなり

いとまと。ひまと同じ心なり。但ひまはすきまといふ
に同じ。氷のひまなどいふを。氷のいとまとよむま
じきことゝいへばさらなり

古今春上。谷風にとくる氷のひまごとに
うちいづる浪や春の初花

萬葉に。我門のえのみもりはむ百千鳥ちどりはくれ
ど君はきまさぬ。是は多くの鳥を百千鳥とよめるこ
と明なるを。また鶯の異名といへる説あり。俊惠法
師の林葉集に。梅花散りしはてなば百千鳥竹のふし
ごとに枝うつりせよ。拾遺愚草に。建久六年正月叙
位に。ともに加階したる朝に。左衛門督隆房卿。く
れ竹にこづたうとりの枝うつりうれしきふしも友
にこそしれ。返し。百千鳥こづたふ竹のよのほども
共にふみゝしふしぞうれしき。これらはうぐひすと
いふ説につきてよまれたり。事の序にいはゞ。こづた
ふは。萬葉にあまた木傳とかきて。木より木にうつる

この事なるべし。さるを契冲は磐木の下の地などに。長くはふ苔のあるを。それなりと思へるよしあるものに書きたり。そは誤なり。和名抄。祭祈具。蘿鬘（和語云。比加介加都良）同苔類。蘿（日本紀私記云。蘿比加介）女蘿也。松蘿一名女蘿（和名萬豆乃古介。一云。佐流乎加世）宣長云。萬葉十四に。夜麻可都良加氣麻之波爾母衣可多伎可氣乎。これに加氣とよめるもひかげなり。二に山蘰影爾所見乍とあるも。山かづらを枕言として。影はひかげの意につゞけたるを。この十四の歌にて知るべし

やとり木を。ほやといふ。和名にみえたり。萬葉にはほよとよめり

和名抄木類。寄生（和名夜止里木。一云。保夜）萬葉十八。あし引の山のこぬれのほよとりてかざしつくらば千とせほぐとぞ

まさご。いさご。まなご。すなご皆同じ。さゞれ石はすこしおほきなるべし。萬葉にはおほくまなごとよめり。後の歌にすなごすなとはまれによめり

しばをふしといふ。柴を日本紀にやがてふしとよめり。猪名のふしはら。ふしゝば。ふしづけなどみなこの字なり

眞淵云。今もうつふしの葉につける柴一つあり。此ふしにつけて。その柴をふし柴といふを本にて。さらぬをもふしといふか。紀の訓もかならず。上古のみならねば。いづれか先なりけん。書紀。古事記ともに。青柴垣をあをふしがきとよめり。拾遺神樂。しなとり猪名のふしはらとびわたる鴫がはね音おもしろきかな。同冬。ふしつけしよどのわたりをけさみればとけんともなく氷しにけり

いは。いはほおなじ。石の字いしとも。いはともよめど。かはれることつねに人のしるごとし

大日靈尊と申す時は。日をひるとよめば。日とひると同じきこと。夜をよともいふがごとし

書紀に。日をひるとよめり。萬葉に。ひくらしといへる事をひるくらしといへるなどを見ても思ふべし

よと。よはと。よひと皆同じ。萬葉に初夜をよひとよめるは。まだよひにてふけぬさきなり

眞淵云。後の人はこの初夜のことをのみよひとはいへど。すべての夜をよひとよめること。萬葉に

月のすむ空はほかにもかはらじをまなこにあまるひろ澤のいけ。判云。三千世界眼前につきぬなど詩にてきくはいみじくこそ侍れども。歌にてはききよからず。みも及ばずや

ふぢばかまをらにともよめど。蘭の字の音をかくいひなして。異名にはあらず

源氏藤袴の卷。らにの花のいと面白をも給へりけるを。みすのつまよりさし入れて。これ御らんずべきゆゑはありけりとて。とみにもゆるさでもたまへれば。うつたへに思ひよらでとり給ふ。御袖をひきうごかして。おなじ野の露にやつるゝふぢばかまあはれはかけよかごとばかりも云々

しをにの和名はのしなれど。音にのみいへり。菊もまたかはらよもぎとよめることとなし

和名抄草類。紫苑一名紫蒨（和名能之。俗云之平遠）秘藏抄云。さはひこめおくわがやどのませのうちにかはらよもぎはうたゝかれけり。かはらよもぎとは菊をいへるなり云々。かはらよもぎの訓。和名抄にも出てたり

ひこぼしを。萬葉集に月人をとことよめり

眞淵云。さだかに彥星をよめるとも聞えず。今夜の月をいひよせたるのみなり。萬葉十秋風の清きゆうべに天の川船こぎわたる月人をとこ。同。天の原ゆくにやうしとしらま弓引てかくせよ月人をとこ

こほりをひとよむおなじことなり

駒は小馬なれど。只うまと同じくよめり

をのを。たづきとも。よきともいへり

和名抄工匠具。鐇（多都岐）廣刃斧也。斧（和名平能一云與岐）大和物語云。まがきするひだのたくみのたづき音のあなかしがましなぞやよの中。宇治拾遺。あしきだになきはわびしき世の中によきをとられてわれいかにせん

歌の言ならねど。うまごをひこともいふ。曾孫はひゝこなるを。世にひこといへるは誤なり

和名抄子孫類。孫（和名無萬古。一云。比古）曾孫（和名比々古）

こけをひかげといへど。なべてみないふにはあらず。ひかげをまたかげともいへり。萬葉にみえたり

眞淵云。ひかげは深き山などのきにかゝれる。猿をがせてふものなり。萬葉に松のこけとよみしも

古今徘諧。わびしらにましらなきそ。あし引の山のかひあるけふにやはあらぬ。翻譯名義集云。

摩斯吒 此云獼猴

衣をば。きぬとも。そともよめり

衣手。袖。たもと。このみつおなじ

筆をみづぐきといふも異名なり

眞淵云。みづぐき中ごろよりいふ事か。水ぐきの岡は水岫の意なり。まどふ事なかれ。古今六帖。みづぐきのかよふばかりをすくせにて聞きしながらにはてねとやきく

しのぶ草をことなし草といふ異名なり。後撰集つまに生ふることとなし草をみるからにたのむ心ぞかつまさりける。新勅撰集。君みずてほどをふるやのひさしにはあふことなしの草ぞおひける

和名鈔苔類。垣衣一名烏韭 和名之乃布久佐

とこを又は。ゆかといふ

萬葉集第六に。さゝらえをとことは。月の別名といへり

眞淵云。月中に小男の形ある故に。小好男といふなり。吉をえといふは古語なり。萬葉六。やまのはのさゝらえをとこあまのはらとわたる光みらくしよしも。自注云。右一首歌。或云。月別名曰二佐散良衣壯士一也。緣二此辭一作二此歌一。この歌の事袖中抄にもみえたり

夏蟲は。日本紀の歌にも。夏蟲の火蟲とありて。蛾のことなれど。蟬をも螢をも夏蟲とよめることあり

書紀仁德紀云。那菟務始能。譬務始能虛呂望。赴多弊肴氐

和名鈔蟲豸類。夏蟲 俗云奈豆無之 蛾 和名比々流 後撰夏。八重むぐらしげきやどには夏むしのこゑよりほかにとふ人もなし。同。つゝめどもかくれぬものは夏むしの身よりあまれる思ひなりけり

めと。まなこと同じことなれど。歌にまなことはよまず。六百番歌合に。隆信朝臣まなこにあまるひろさはの池とよまれたるをば。俊成卿判して。これを難ぜられたり

眞淵云。萬葉憶良が長歌に。子の事をいふにまなかひにかゝりてとよめるは眼にかゝりての意とみゆ

六百番歌合　隆信朝臣

人ごとにより甚しくよまん歌にはなどかよまざらん。歌のすがたによりてなか〳〵鳴神とてはわろきこともあるなり。萬葉三。或本。王神座者雲隱伊加土山爾宮敷座。佛足石歌。伊加豆知乃比加利乃期止岐己禮乃徵波志爾乃於保岐美都禰爾多具覇利於豆閉可良受夜。和名鈔。鬼神部。雷公一名雷師和名以加豆知

あめ。そら

天をそらといふ事は阿闍梨の河やしろにもみえたり

海。わたのはら。つねのことなり

なでしこは。萬葉にはとこなつとよめるうたなし

和名鈔草木部。瞿麥一名大蘭和名奈天之古一云止古奈豆

鶴

つる。たづ同じ物なり。和名に鶴の下に鶚の字を出だして。たづとあれど。歌には沙汰なし

宣長云。上代には鶴をも。鵠をも。鸛をも共に總てたづといへるなり。くゞひ。おほとりなど分れたる名あるは。稍後のことなるべし。萬葉三に。あふみの海。やそのみなとにたづさはになくとある。これもたづに鵠の字をかけり。鵠と鶴とは別なれども。漢國にても。鶴の事を鵠と云へる例も多く。又字の音も其鳥もにたるからまぎれつる事もあり。五雜俎と云ふ書には。鵠卽是鶴とも云へり。廣韻云。鶚。鶴別名

くしげは。箱の中にくし入る、を。わけていふらんやうなれど。たゞ同じことなり

川をはやたづとよめる歌は。堀川院初度の百首の中にあれど。常にはよめる歌なし

堀川院百首。淵せをもそこともしらぬはやたづのみなぎりわたる川のながれは。喜撰式云。若詠川時ははやたづといふ。俗に堀川次郎百首といへるものは。永久四年の百首にて。鳥羽の院の御代なれば。それにむかへて堀川院初度百首とはいふべからず

には鳥をば。たゞ鳥ともかけともよめり。かけは。かけろとなくこゑよりつけたる名なり

萬葉十一。あかつきと鳥はなくなりよしゑやしひとりぬるよはあけばあくとも。催馬樂。酒殿の歌に。にはとりはかけろとなきぬなり云々

さる。ましら。ともによめり

圓珠庵雜記

僧 契沖 著

しかはし、ともかせぎともいへり。しか。かせぎ。ともに日本紀にみえたれど。歌にはしかとのみよめり。すがるはさそりといふ蜂なるを。誤りて鹿とおもへり。日本紀第十四にみえたり

眞淵云。古人和歌集にすがるなく秋の萩原とあるは。蜾蠃鳴くてふ語を誤りてなくと。書きしより。後の人はか、ることばしらねば。萩につきてすがるは鹿ぞといへるなりけり。萬葉にすがるなす野のほと、ぎすとよめるにてしらる。萬葉になすといふ語に。成鳴などの字を借りたるをしらでなり。なすは紀に如五月蠅を。さばへなすとよむは。古事記に五月蠅奈須とあるを以てなり。是にてしるべし。書紀景行紀に。白鹿をしろかせぎとよめり。伊豆國風土記云。夏野獵鞍毎年撰鹿柵射手行云々。赤染衞門集。朝ぼらけしとみをあぐと見えつるはかせぎの近く立てるなりけり。玉葉集雜三。山ふかみなる、かせぎのけぢかさに世に遠ざかるほどぞしらる、。萬葉集九。長歌こしぼそのすがるをとめのそのかほの云々。書紀雄略紀云。爰命蜾蠃。人名也。此云須我屢 堀川百首。すがるふす野中の草やふか、らんゆきかふ人の笠のみえぬはとよまれしは。鹿と誤れるよりなるべし

いなびかり。いなつるびともいふ。いなづまの異名か。歌にはいなづまとのみよめり

和名鈔。鬼神部電 和名以奈比加利。一云。以奈豆流比。又云。以奈豆末 雷之光也

かげろふ。いとゆふ同じ物にて。いとゆふは異名か。ふるくはかげろふのもゆるとのみよめり

眞淵云。いとゆふは遊絲を後の世の人の強ひて。こゝの語めきていひし俗語なるべし。もし又古へよりいひたらば。糸木綿の意にて。ゆふの糸に見なしたるか。古きものにみえねば用ふべからず。六百番歌合のどかなる夕日のそらをながむればうす紅にあそぶ糸ゆふ

いかづち。又はなるかみといふ。歌にはなるかみとのみよめり。いかづちはおそろしくきこえてうためかねばなり

眞淵云。いかづちは後の歌にこそあれ。古へこのむ

か、づらへることのみをむねといだされたるが。そをからくにたとへていはむには。かの家々の詩話といへるものに。そのさまいとよくぞにたる。さればこの書を見むには。その心して見るべきことになむ

この書の末に。惺窩翁の歌をのせられたる本もあれど。たほくは雜々記にのせたり。しかもこのふみにはにつかはしからねば。雜々記のかたにのせたるをよしとす

縣居の翁のこの書に頭書をくはへられしを得て。そをもらさずあげつ。また本居宣長の說などをも。まれ〳〵にはくはへたるが。すべて人のいへること、。おのがいへることゝまぎらはしければ。そのへだてには墨して。いさゝかしるしせり。見む人そをわきまへてよかし

文化九とせといへるとしのみな月

やまぶきぞのにしるす　平由豆流

圓珠庵雜記序

この雜記てふゝみは。ものまなぶ人たれ〳〵もうつしもたり。されど。ふんてよりふんてに。あやまりよりあやまりをつたへて。いとよみがたきさへぞおほかる。こゝに我友棣棠園のあるじ。こたびよき本をもとめ得て。これいかで板にゑりて。世におほやけにせんとおもひよれるついでに。阿闍梨のおはしけん代よりものち〳〵。この道にたけたる大人たちのおもひえたる事どもをも。ふみのかしらにしるしそへてんといへり。このぬしとしいとわかく。まなびにくまなかれば。猶くさ〴〵のことぶみどもをもかうがへたゝして。板にゑりなんとするあらましいとおほかり。さればことたつはじめに。いにしへぶりのまなびのおやなる。この阿闍梨の此ふみゑりなんこと。いとよきさがにこそあなれとて。其ゆゑよしをはしがきにかいつくるは。棗がもとのあるじ。躬弦なりけり

この書は。圓珠菴の阿闍梨のたゞ思ひ出づるまにまにかいつけられしかば。名をも雜記とはおほせしなるべし。されど。むねとは歌のことばによれることをのみ考へられて。詞のはじめは。ひとつなるべきを。後にはふたつにも。みつにもいひかへ。あるは心ことなるをいひざまによりては。ひとつことのごとくきこえなどすなると。またその外にも。ことばのゆゑよしなど說かれしところ〴〵には。いさゝかかたぶかるゝすぢどもすくなからねど。今の世にこのいにしへぶりのもはらたこなはるゝも。このあざりよりこなたのことにて。この阿闍梨のころは。何ごとにもたど〳〵しき世なりしかば。いさゝかの考へあやまりは。いかでかあらざらむ。そを今さられのれ由豆流らが考へもて。いひとかむとするは。かのことわざにつのをなほさむとて。牛をころすといへるたぐひにひとしければ。なか〳〵にやはとて。ひたすら先たちの考へにのみしたがへり
みな人この文をあざりの隨筆なりとしもいゝふめれど。さはあらざりけり。しかいへるは。あざりの隨筆はべちに河社とてあなるを。この書は歌のことに

の御廟なり。社頭神さびて。松の木の間に月のもり入りたる。たまへの白妙霜を敷けるが如し。往昔。遊行二世の上人。大願發起の事ありて。みづから草を刈り土石を荷ひ。泥濘をかはかせて參詣往來の煩なし古例今にたえず。神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申し侍ると。亭主のかたりける

　月清し遊行のもてる砂の上

十五日亭主の詞にたがはず雨降る

　名月や北國日和定なき

十六日空霽れたればますほの小貝ひろはんと。種の濱に舟を走らす。海上七里あり。天屋何某といふもの破籠小竹筒などこまやかにしたゝめさせ。僕あまた舟にとりのせて。追風時のまに吹き着けぬ。濱はわづかなる海士の小家にて。侘しき法華寺あり。爰に茶を飲み。酒をあたゝめて。夕ぐれのわびしさ感に堪へたり

　寂しさや須磨にうちたる濱の秋

　浪の間や小貝にまじる萩のこゑ

其日のあらまし。等栽に筆をとらせて寺に殘す。露道も此みなとまで出でむかひて。みの、國へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の荘に入れば。曾良も伊勢より來り合ひ。越人も馬をとばせて。如行か家に入り集まる。前川子荊口父子。其外したしき人々。日夜とぶらひて。蘇生の者にあふがごとく。且悅び且いたはる。旅の物うさもいまだやまざるに。長月六日になれば。伊勢の遷宮をがまんと。また舟にのりて

　蛤のふたみにわかれ行秋か

奥の細道　終

心早卒にして堂下に下るを。若き僧ども紙硯をかゝえ。階のもとまで追ひ來る。折節庭中の柳散れば

　庭掃て出るや寺に散る柳

とりあへぬさまして。草鞋ながら書き捨てつ。越前の境吉崎の入江を舟に棹して。汐越の松を尋ぬ

　終宵嵐に波をはこばせて
　　月をたれたる汐越の松　西　行

此一首にて數景盡きたり。もし一辨を加ふるものは。無用の杉を立つるがごとし

丸岡天龍寺の長老。古き因あれば尋ぬ。又金澤の北持といふもの。かりそめに見送りて。此處までしたひ來る。所々の風景。過ぐさず思ひつゞけて。折節あはれなる作意など聞ゆ。今既に別に望みて

　物書て扇引さく餘波哉

五十丁山に入りて永平寺を禮す。道元禪師の御寺なり。邦機千里を避けて。かゝる山陰に跡をのこし給ふも。貴きゆゑありとかや

福井は三里許なれば。夕飯したゝめて出づるに。たそがれの路たど〳〵し。爰に等栽と云ふ古き隱士あり。いづれの年にか江戸に來りて。予を尋ねし。遙。十とせ餘りなり。いかに老いさらぼひてあるにか。將。死にけるにかと人に尋ね侍れば。いまだ存命してそこ〳〵と敎ふ。市中ひそかに引き入りて。あやしの小家に。夕顔へちまのはひかゝりて。雞頭はゝ木々に戸ぼそをかくす。さては此うちにこそと門を扣けば。侘しげなる女の出でゝ。いづくよりわたり給ふ。道心の御坊にや。あるじは此あたり何がしといふものゝ方に行きぬ。もし用あらば尋ね給へといふ。かれが妻なるべしとしらる。むかし物がたりにこそかゝる風情は侍れと。やがて尋ねわびて。その家に二夜とまりて。名月はつるがのみなとにとたび立つ。等栽も共に送らんと。裾をかしうからげて。路の枝折とうかれ立つ。漸白根が嶽かくれて。比那が島あらはる。あさむつの橋を渡りて。玉江の蘆は夜に出でにけり。鶯の關を過ぎて。湯尾峠を越ゆれば。燧が城かくる。やまに初雁を聞きて。十四日の夕ぐれ。つるがの津に宿をもとむ。その夜月殊に晴れたり。あすの夜もかくあるべきにやといへば。越路の習ひ。なほ明夜の陰晴はかりがたしと。あるじに酒すゝめられて。氣比の明神に夜參す。仲哀天皇

秋涼し年毎にむけや瓜茄子

途中唫

あかあかと日は難面もあきの風

小松といふ所にて

しをらしき名や小松吹萩すゝき

此所太田の神社に詣づ。實盛が甲錦の切あり。往昔源氏に屬せし時。義朝公より給はらせ給ふとかや。げにも平士のものにあらず。目庇より吹き通しまで。菊から草のほりもの金をちりばめ。龍頭に鍬形に打ちたり。實盛討死の後。木曾義仲願狀にそへて。此社にうめられ侍るよし。樋口の次郎が使せし事共。まのあたり縁紀にみえたり

むざんやな甲の下のきりぎりす

山中の温泉に行くほど。白根が嶽跡にみなしてあゆむ。左の山際に觀音堂あり。花山の法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後。大慈大悲の像を安置し給ひて。那谷と名付け給ふとや。那智谷組の二字をわかち侍りしとぞ。奇石さまざまに古松植ゑならべて。萱ぶきの小堂。岩の上に造りかけて。殊勝の土地なり

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す。其功有明に次ぐと云ふ

山中や菊はたをらぬ湯の匂

あるじとする物は。久米之助とていまだ小童なり。かれが父俳諧を好み。洛の貞室若輩のむかし爰に來りし比。風雅に辱しめられて。洛に歸りて。貞德の門人となりて世にしらる功名の後。此一村判詞の料を請ずといふ。今更むかし語とはなりぬ

曾良は腹を病みて。伊勢の國長島といふ所にゆかりあれば。先立ちて行くに

行々てたふれ伏とも萩の原　曾良

と書き置きたり。行くもの丶悲しみ。殘るもの丶うらみ。隻鳧のわかれて雲にまようが如し。予も又

今日よりや書付消さん笠の露

大聖寺の城外全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地なり。曾良も前の夜。此寺に泊りて

終宵秋風聞やうらの山

と殘す。一夜の隔。千里に同じ。吾も秋風を聞きて衆寮に臥せば。明ぼのゝ空近し。讀經の聲すむまゝに。鐘板鳴りて食堂に入る。けふは越前の國へと。

く。鼠の關をこゆれば。越後の地に歩行を改めて。越中の國一ふりの關に到る。此間九日。暑濕の勞に神をなやまし。病おこりて事をしるさず

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天河

今日は。親しらず。子しらず。犬もどり。駒返しなどいふ。北國一の難所を越えて。つかれ侍れば。枕引きよせて寢たるに。一間隔て、西の方に若き女の聲。二人許ときこゆ。年老いたるをのこの聲も交りて。物語するをきけば。越後の國新潟といふ所の遊女なりし。伊勢參宮するとて。此關までをのこの送りてあすは古郷にかへす。文した、めて。はかなき言傳などしやるなり。白浪のよするけに身をはふらかし。あさのこの世をあさましう下りて。定めなき契。日々の業因いかにつたなしと物いふをきく〱寐入りて。あした旅立つに。我々にむかひて。行くへしらぬ旅路のうさ。あまり覺束なう悲しく侍れば。見えがくれにも御跡をしたひ侍らん。衣の上の御情に。大慈のめぐみをたれて。結縁せさせ給へと泪を落す。不便のことには侍れども。我々は所々にてとゞまる方おほし。只人の行くにまかせて行くべし。神明の加護かならず恙なかるべしといひ捨て、出づ。あはれしばらくやまざりけらし

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば書きとゞめ侍る。くろへ四十八が瀬とかや。數しらぬ川をわたりて。那古といふ浦に出づ。擔籠の藤波は春ならずとも。初秋の哀れとふべきものをと。人に尋ぬれば。是より五里いそ傳ひして。むかふの山陰にいり。蜑の苫ぶきかすかなれば。蘆の一夜の宿かすものあるまじといひおとされて。かゞの國に入る

わせの香や分入右は有磯海

卯の花山。くりからが谷をこえて。金澤は七月中の五日なり。爰に大坂よりかよふ商人。何處といふ者あり。それが旅宿をもとにす。一笑と云ふものは。此道にすける名のほのぐ〱聞えて。世に知る人も侍りしに。去年の冬。早世したりとて。其兄追善を催すに

塚も動け我泣聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて

て。三山順禮の句々短冊に書く
涼しさやほの三日月の羽黒山
雲の峰幾つ崩て月の山
語られぬ湯殿にぬらす袂かな
湯殿山錢ふむ道の泪かな　　曾良

羽黒を立ちて。鶴が岡の城下長山氏重行といふものゝふの家にむかへられて。俳諧一卷あり。左吉も共に送りぬ。川舟に乘りて酒田の湊に下る。淵庵不玉といふ醫師の許を宿とす

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ
暑き日を海にいれたり最上川

江山水陸の風光。數をつくして。今象潟の方寸を責め。酒田の湊より東北の方。山を越え磯を傳へ。いさごをふみて其際十里。日影やゝかたぶく比。汐風眞砂を吹き上げ。雨朦朧として。鳥海の山かくる。闇中に莫作して。雨も又奇なりとせば。雨後の晴色又頼母敷と蜑の苫屋に膝をいれて。雨の晴を待つ。其朝天能く霽れて。朝日花やかにさし出づる程に。象潟に舟をうかぶ。先能因島に舟をよせて。三年幽居の跡をとぶらひ。むかふの岸に舟をあがれば。花の上こぐとよまれし櫻の老木。西行法師の紀念をのこす。江上に御陵あり。神功后宮の御墓といふ。寺を干滿珠寺といふ。此處に行幸ありし事。いまだ聞かず。いかなる事にか。此寺の方丈に座して。簾を捲けば。風景一眼の中に盡くして。南に鳥海天をささへ。其陰うつりて江にあり。西はむや／＼の關路をかぎり東に堤を築きて。秋田にかよふ道。遙に海北に構へて浪打ち入るゝ。所を汐越と云ふ。江の縱橫一里ばかり俤松島にかよひて。又異なり。松島は笑ふが如く。象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはへて。地勢魂をなやますに似たり

象潟や雨に西施かねふの花
汐越や鶴はきぬれて海涼し

祭禮
象潟や料理何くふ神祭　　曾良
蜑の家や戸板を敷て夕涼　美濃國の商人低耳

岩上に雎鳩の巣をみる
浮こえぬ契ありてやみさこの巣　　曾良

酒田の餘波日を重ねて。北陸道の雲に望み。遙々のおもひ胸をいたましめて。加賀の府まで百卅里と聞

最上川はみちのくより出で、。山形を水上とす。こてんはやふさなど云ふおそろしき難所あり。板敷山の北を流れて。果は酒田の海に入り。左右山覆ひ。茂みの中に船を下す。是に稲つみたるをやいな船といふならし。白糸の瀧は。青葉の隙々に落ちて。仙人堂岸に臨みて立つ。水みなぎりて舟あやうし

　五月雨をあつめて早し最上川

六月三日羽黒山に登る。圖司左吉と云ふ者を尋ねて。別當代會覺阿闍梨に謁す。南谷の別院に舍して。憐愍の情こまかやにあるじせらる

四日本坊において俳諧興行

　有難や雪をかをらす南谷

五日權現に詣づ。當山開闢能除大師は。いづれの代の人といふ事をしらず。延喜式に羽州里山の神社とあり。書寫黒の字を里山となせるにや。羽州黒山を中略して。羽黒山といふにや。出羽といへるも鳥の毛羽を。此國の貢に獻ると風土記に侍るとやらん。月山湯殿を合せて三山とす。當寺武江東叡に屬して。天台止觀の月明らかに。圓頓融通の法の灯か、げそひて。僧坊棟をならべ。修驗行法を勵し。靈山靈地の驗効。人貴び且恐る。繁榮長にしてめでたき御山と謂ひつべし

八日。月山にのぼる。木綿しめ身に引きかけ。寶冠に頭を包み。强力と云ふものに道びかれて。雲霧山氣の中に。氷雪を踏みてのぼる事八里。更に日月行道の雲關に入るかとあやしまれ。息絶え身こゞえて。頂上に臻れば。日沒して月顯る。笹を鋪き。篠を枕として。臥して明くるを待ち。日出で、雲消ゆれば湯殿に下る

谷の傍に鍛冶小屋と云ふあり。此國の鍛冶靈水を撰びて。爰に潔齋して劒を打ち終り月山と銘を切りて。世に賞せらる。彼龍泉に劒を淬とかや。干將莫邪のむかしをしたふ。道に堪能の執あさからぬ事しられたり。岩に腰かけてしばしやすらふなど。三尺ばかりなる櫻のつぼみ半は開きたるあり。ふり積む雪の下に埋れて。春を忘れぬ遲ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰にかをるが如し。行尊僧正の歌の哀も。爰に思ひ出で、。猶まさりて覺ゆ。總て此山中の微細。行者の法式として他言する事を禁ず。仍りて筆をとゞめて記さず。坊に歸れば。阿闍梨の需に依り

けて。舍を求む。三日風雨あれて。よしなき山中に逗留す

蚤虱馬の尿する枕もと

あるじの云ふ。是より出羽の國に大山を隔てゝ。道さだかならざれば。道しるべの人を賴みて越ゆべきよしを申す。さらばといひて。人を賴み侍れば。究竟の若者反脇指をよこたへ。樫の杖を携へて。我々が先に立ちて行く。けふこそ必あやふきめにもあふべき日なれど。辛き思ひをなして。後について行く。あるじの云ふにたがはず。高山深々として。一鳥聲きかず。木の下闇み茂りあひて。よる行くがごとし。雲端につちふる心地して。篠の中踏み分け〳〵。水をわたり岩に蹶て。肌につめたき汗を流して。最上の荘に出づ。かの案内せしをこの云ふやう。此みち必不用の事あり。恙なうおくりまゐらせて。仕合したりとよろこびてわかれぬ。跡にきゝてだに胸とゞろくのみなり

尾花澤にて淸風と云ふ者を尋ぬ。かれは富めるものなれども。志いやしからず。都にも折々かよひて。さすがに旅の情をも知りたれば。日比とゞめて。長途のいたはりさま〴〵にもてなし侍る

涼しさを我宿にしてねまるなり

這出よかひやか下のひきの聲

まゆはきを俤にして紅粉の花

蠶飼する人は古代のすがた哉　曾良

山形領に立石寺と云ふ山寺あり。慈覺大師の開基にて。殊に淸閑の地なり。一見すべきよし。人々のすゝむるに依りて。尾花澤よりとつて返し。其間七里ばかりなり。日いまだ暮れず。杜下の坊に宿かり置きて。山上の堂にのぼる。岩に巖を重ねて山とし。松柏年舊り。土石老いて。苔滑に。岩上の院々扉を閉ぢて。物の音きこえず。岸をめぐり。岩を這ひて佛閣を拜し。佳景寂寞として。心すみ行くのみおぼゆ

閑さや岩にしみ入蟬の聲

最上川のらんと大石田といふ所に日和を待つ。爰に古き俳諧の種こぼれて。忘れぬ花のむかしをしたひ。芦角一聲の心をやはらげ。此道にさぐり足して新古ふた道にふみまがふといへども。みちしるべする人しなければと。わりなき一卷殘しぬ。このたびの風流爰に至れり

十一日瑞岩寺に詣づ。當寺三十二世の昔。眞壁の平四郎出家して。入唐歸朝の後開山す。其後に雲居禪師の德化に依りて。七堂甍改りて。金壁莊嚴光を輝かし。佛土成就の大伽藍とはなれりける。彼見佛聖の寺はいつくにかとしたはる。十二日平和泉と心ざし。あねはの松。緒だえの橋など聞き傳へて。人跡稀に。雉兎蒭蕘の往きかふ道。そこともわかず。終に路ふみたがへて。石の卷といふ湊に出づ。こがね花咲くとよみて奉りたる金花山。海上に見わたし。數百の廻船入江につどひ。人家地をあらそひて。竈の煙立ちつゞけたり。思ひかけずかゝる所にも來れる哉と。宿からんとすれど。更に宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜をあかして。明くれば又しらぬ道まよひ行く。神のわたり。尾ぶちの牧。まゝの萱はらなど。よそめにみて遙なる堤を行く。心細き長沼にそうて戸伊摩と云ふ所に一宿して。平泉に到る。其間廿餘里ほど、おぼゆ

三代の榮耀。一睡の中にして。大門の跡は。一里こなたにあり。秀衡が跡は。田野になりて金鷄山のみ形を殘す。先高館にのぼれば。北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて。高館の下にて。大河に落ち入る。康衡等が舊跡は。衣が關を隔てゝ。南部口をさし堅め。夷をふせぐとみえたり。偖も義臣すぐつて。此城にこもり。功名一時の叢となる。國破れて山河あり。城春にして草青みたりと。笠打ち敷きて。時のうつるまで涙を落し侍りぬ

夏草や兵どもが夢のあと

卯の花に兼房みゆる白毛かな　曾良

兼ねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三堂の像を殘し。光堂は三代の棺を納め。三尊の佛を安置す。七寶散りうせて。珠の扉風にやぶれ。金の柱霜雪に朽ちて。既に頽廢空虛の叢と成るべきを。四面新に圍みて甍を覆ひて風雨を凌ぎ。暫時千歲の記念とはなれり

五月雨の降のこしてや光堂

南部道遙にみやりて。岩手の里に泊る。小黑崎。みつの小島を過ぎて。なるこの湯より尿前の關にかゝりて。出羽の國に越えんとす。此路旅人稀なる所なれば。關守にあやしめられて。漸として關をこす。大山をのぼりて日既に暮れければ。封人の家を見か

浄瑠璃と云ふものをかたる。平家にもあらず。舞にもあらず。ひなびたる調子うち上げて。枕ちかうかしましけれど。さすがに邊土の遺風忘れざるものから。殊勝に覺えらる。早朝鹽がまの明神に詣づ。國守再興せられて。宮柱ふとしく。彩椽きらびやかに。石の階九仞に重り。朝日あけの玉がきをかゞやかす。かゝる道の果。塵土の境。扨神靈あらたにましますこそ。吾國の風俗なれと。いとたふとし。神前に古き寶燈あり。かねの戸びらの面に。文治三年和泉三郎寄進とあり。五百年來の俤。今目の前にうかびてそゞろに珍らし。渠は勇義忠孝の士なり。佳命今に至りて。したはずといふ事なし。誠に人能く道を勤め義を守るべし。名もまた是にしたがふといへり。日既に午にちかし。船をかりて松島にわたる。其間二里餘。雄島の磯につく

抑ことふりにたれど。松島は扶桑第一の好風にして。凡洞庭西湖を恥かしむ。東南より海を入れて。江の中三里。浙江の潮をたゝふ。島々のかずを盡くして欹つものは天を指し。ふすものは波に匍匐し。あるは二重にかたより。三重に疊みて。左にわかれ右につらなる。負ふあり。抱けるあり。兒孫愛すがごとし。松の緑こまやかに。枝葉汐風に吹きたわめて。屈曲おのづからためたるがごとし。其氣色窅然として。美人の顔を粧ふ。ちはや振神のむかし。大山ずみのなせるわざにや。造化の天工。いづれの人か筆をふるひ。詞を盡さん

雄島が磯は地つゞきて。海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡。座禪石などあり。將。松の木陰に世をいとふ人も。稀〳〵見え侍りて。落穗松笠など打ちけぶりたる草の菴。閑に住みなし。いかなる人とはしられずながら。先なづかしく立ちよるほどに。月海にうつりて。晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求むれば。窓をひらき。二階を作りて。風雲の中に旅寐するこそ。あやしきまで妙なる心地はせらるれ

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

予は。口をとぢて眠むらんとしていねられず舊庵をわかるゝ時。素堂松島の詩あり。原安適松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解きてこよひの友とす。且杉風濁子が發句あり

武隈の松みせ申せ遲櫻と擧白と云ふ者の餞別したりければ

　櫻より松は山木を三月越し

名取川を渡りて仙臺に入る。あやめふく日なり。旅宿をもとめて。四五日逗留す。爰に畫工加右衞門と云ふものあり。聊心ある者と聞えて知る人になる。この者年比さだかならぬ名どころを考へ置き侍ればとて。一日案内す。宮城野の萩茂りあひて。秋の氣色思ひやらる。玉田よこ野つゝじが岡は。あふひ咲くころなり。日影ももらぬ松の林に入りて。爰を木の下と云ふとぞ。昔もかく露ふかければこそみさぶらひみかさとはよみたれ。藥師堂天神の御社など拜みて。其日はくれぬ。猶松島鹽がまの所々畫にかきて送る。且紺の染緒つけたる草鞋など餞す。さればこそ風流のしれもの爰に至りて。其實を顯すなれ

　あやめ草足に結ん草鞋の緒

かの畫圖にまかせてたどり行けば。おくの細道の山際に。十符の菅あり。今も年々十符の菅菰を調へて。國守に獻ずと云へり

　壺碑　　市川村多賀城にあり

つぼの石ぶみは。高さ六尺餘。横三尺計歟。苔を穿ちて文字幽なり。四維國界之數里をしるす。此城神龜元年。按察使鎭守府將軍大野朝臣東人之所里也。天平寶字六年。參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣朝獦修造而十二月朔日とあり。聖武皇帝の御時に當れり。むかしよりよみ置かるゝ歌枕。おほく語り傳ふといへども。山崩れ川落ちて。道あらたまり。石は埋れれて土にかくれ。木は老いて若木にかはれば。時移り代變じて。其跡たしかならぬ事のみを。爰に至りて疑なき千歳の記念。今眼前に古人の心を閲す。行脚の一德。存命の悦び。羇旅の勞をわすれて涙も落つるばかりなり

それより野田の玉川。沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造りて。末松山といふ。松のあひ〳〵皆墓はらにて。はねをかはし。枝をつらぬる契の末も。終はかくのごとしと悲しさも增りて。鹽がまの浦に入相のかねを聞く。五月雨の空聊はれて。夕月夜幽に離が島もほど近し。蜑の小舟こぎつれて。肴わかつ聲聲に。つなでかなしもとよみけん心もしられて。いとゞ哀なり。其夜。目盲法師の琵琶をならして。奥

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

月の輪のわたしを越えて。瀬の上と云ふ宿に出づ。佐藤庄司が舊跡は左の山際一里半許にあり。飯塚の里鯖野と聞きて。尋ね〳〵行くに。丸山と云ふに尋ねあたる。これ庄司が舊館なり。梺に大手の跡など人の敎ふるにまかせて。泪を落し。またかたはらの古寺に一家の石碑を殘す。中にも二人の嫁がしるし先哀なり。女なれどもかひ〳〵しき名の世に聞えつる物かなと。袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入りて茶を乞へば。爰に義經の太刀。辨慶が笈をとゞめて。什物とす

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

五月朔日の事なり。其夜飯塚にとまる。溫泉あれば。湯に入りて宿をかるに。土産に莚を敷きて。あやしき貧家なり。灯もなければ。ゐろりの火かげに寢所をまうけて臥す。夜に入りて雷鳴り雨しきりに降りて。臥せる上よりもり。蚤蚊にせゝられて眠らず。持病さへおこりて。消え入る許になん。短夜の空もやうやう明くれば又旅ちぬ。猶夜の餘波こゝろ進まず。馬かりて桑折の驛に出づ。遙なる行く末をかゝえて。かゝる病覺束なしといへど。羇旅邊土の行脚。捨身無常の觀念。道路に死なん。是天の命なりと。氣力聊とり直し。路縱橫に踏みて。伊達の大木戸をこす。鐙摺。白石の城を過ぎ。笠島の郡に入れば。藤中將實方の塚は。いづくのほどならんと人にとへば。是より遙右に見ゆる山際の里を。みのに笠島と云ふ。道祖神の社。かた見の薄。今にありと敎ふ。此比の五月雨に。道いとあしく。身つかれ侍れば。よそながら眺めやりて過ぐるに。箕輪。笠島も五月雨の折にふれたりと

笠島はいづこを月のぬかり道

岩沼に宿る

武隈の松にこそめさむる心地はすれ。根は土際より二木にわかれて。昔の姿うしなはずとしらる。先能因法師思ひ出でゝ。往昔むつの守にて下りし人。此木を伐りて。名取川の橋杭にせられたる事などあればにや。松は此たび跡もなしとは詠みたり。代々或は伐りあるひは植繼などしたりと聞くに。今將千歲のかたちとゝのほりて。めでたき松のけしきになん侍る

こゝろもとなき日かず重なるまゝに。白川の關にかかりて。旅心定りぬ。いかで都へと便求めしもことわりなり。中にも此關は三關の一にして。風騷の人心をとゞむ。秋風を耳に殘し。紅葉を俤にして。青葉の梢猶あはれなり。卯の花の白妙に茨の花の咲きそひて。雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裝を改めしことなど。清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ

卯の花をかざしに關の晴着かな　曾良

とかくして越え行くまゝに。あぶくま川を渡る。左に會津根高く。右に岩城。相馬。三春の莊。常陸。下野の地をさかひて。山つらなるかげ沼と云ふ所を行くに。今日は空曇りて。物影うつらず。すか川の驛に等窮といふものを尋ねて。四五日とゞめらる。先白河の關いかにこえつるかと問ふ。長途のくるしみ身心つかれ。且は風景に魂うばゝれ。懷舊に腸を斷ちて。はる〴〵しう思ひめぐらさず

風流の初やおくの田植うた

無下にこえんもさすがにと語れば。脇第三とつゞけて。三卷となしぬ

此宿の傍に。大きなる栗の木陰をたのみて。世をいとふ僧あり。橡ひろふ太山もかくやと。閒に覺えられて。ものに書き付け侍る。其詞

栗といふ文字は。西の木と有りて。西方淨土に便ありと。行基菩薩の一生。杖にも柱にも。此木を用ひ給ふとかや

世の人の見付ぬ花や軒の栗

等窮が宅をいでゝ。五里許檜皮の宿を離れて。あさか山あり路より近し。此あたり沼多し。かつみ刈る比もやゝ近うなれば。いづれの草を花がつみとは云ふぞと人々に尋ね侍れども。更に知る人なし。沼を尋ね人にとひ。かつみ〴〵と尋ねありきて。日は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて。黑塚の岩屋一見し。福島に宿る。あくればしのぶもち摺の石を尋ねて。忍ぶのさとに行く。遙に山陰の小里に。石なかば土に埋れてあり。里の童部の來りて敎へける。昔は此山の上に侍りしを。往來の人の麥草をあらして。此石を試み侍るを。にくみて此谷につき落せば。石の面。下ざまにふしたりと云ふ。さもあるべき事にや

やがて人里に至れば。あたひを鞍つぼに結び付けて。馬を返しぬ

黒羽の館代浄坊寺何がしの家に音信る。思ひかけぬあるじの悦び。日夜語りつゞけて。其弟桃翠など云ふが朝夕勤めとぶらひ。自の家にも伴ひて。親属の方にもまねがれ。日をふるまゝに。ひと日郊外に逍遥して。犬追物の跡を一見し。那須の篠原をわけて。玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣うで。與市扇の的を射し時。別しては我國氏神正八まんとちかひしも。此神社にて侍ると聞けば。感應殊にしきりに覺えらる。暮るれば桃翠宅に歸る

修驗光明寺と云ふ有り。そこにまねがれて。行者堂を拜す

夏山に足駄を拜む首途哉

當國雲岸寺のおくに。佛頂和尚山居跡あり

竪横の五尺にたらぬ草の庵

むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して。岩に書き付け侍りといつぞや聞え給ふ。其跡みんと雲岸寺に杖を曳けば。人々すゝみて共にいざなひ。若き人おほく。道のほど打ちさわぎて。おぼえず彼麓に至る。山は奥あるけしきにて。谷道遙に松杉黒く苔したゝりて。卯月の天今猶寒し。十景盡くる所。橋をわたつて山門に入る

さてかの道は。いづくのほどにかと。後の山によぢのぼれば。石上の小庵岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關法雲法師の石實をみるがごとし

木啄も庵はやぶらず夏木立

と。とりあへぬ一句を柱に殘し侍りし。是より殺生石に行く。館代より馬にて送らる。此口付のをのこ短冊得させよと乞ふ。やさしき事を望み侍るものかなと

野を横に馬牽むけよほとゝぎす

殺生石は。温泉の出つる山陰にあり。石の毒氣はまだほろびず。蜂蝶のたぐひ。眞砂の色の見えぬほどかさなり死す。又清水ながるゝの柳は芦野の里にありて。田の畔に殘る。此所の郡守戸部某の。此柳みせばやなど。折〱にの給ひ聞え給ふを。いづくのほどにかと思ひしを。今日此柳のかげにこそ立ちより侍りつれ

田一枚植て立去る柳かな

旨世に傳ふ事も侍りし

卅日。日光山の麓に泊る。あるじの云ひけるやう。我名を佛五左衞門と云ふ。萬正直を旨とする故に。人がらは申し侍るまじ。一夜の草の枕も打ち解けて休み給へと云ふ。いかなる佛の濁世塵土に出現して。かゝる桑門の乞食順禮ごとき人をたすけ給ふにかと。あるじのなす事に心をとゞめてみるに。唯無智無分別にして。正直偏固の者なり。剛毅木訥の仁に近きたぐひ。氣禀の淸質尤尊ぶべし。

卯月朔日。御山に詣拜す。往昔此御山を二荒山と書きしを。空海大師開基の時。日光と改め給ふ。千歳未來をさとり給ふにや。今此御光一天にかゞやきて。恩澤八荒にあふれ。四民安堵の栖穩なり。猶憚多くて。筆をさし置きぬ

あらたふと青葉若葉の日の光

黑髮山は霞かゝりて。雪いまだ白し

剃捨て黑髮山に衣更　曾良

曾良は河合氏にして。惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて。予が薪水の勞をたすく。このたび松しま。象潟の眺。共にせん事を悅び。且は羈旅の難をいたはらんと。旅立つ曉。髮を剃りて墨染にさまをかへ。惣五を改めて宗悟とす。仍りて黑髮山の句あり。衣更の二字力ありてきこゆ

廿餘丁山を登りて瀧あり。岩洞の頂より飛流して。百尺千岩の碧潭に落ちたり。岩窟に身をひそめ入れて。瀧の裏よりみれば。うらみの瀧と申し傳へ侍るなり

暫時は瀧に籠るや夏の初

那須の黑ばねと云ふ所に知人あれば。是より野越にかゝりて。直道をゆかんとす。遙に一村を見かけて行くに。雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて。明くれば又野中を行く。そこに野飼の馬あり。草刈をのこになげきよれば。野夫といへども。さすがに情しらぬにはあらず。いかゞすべきや。されども此野は縱橫にわかれて。うひ／＼じき旅人の。道ふみたよらん。あやしふ侍れば。此馬のとゞまる所にて。馬を返し給へかし侍りぬ。ちひさき者ふたり馬の跡したひてはしる。獨は小姫にて名をかさねといふ。聞きなれぬ名のやさしかりければ

かさねとは八重撫子の名なるべし　曾良

奥の細道

松尾芭蕉著

月日は。百代の過客にして。行きかふ年も又旅人なり。舟の上に生涯をうかべ。馬の口とらへて老をむかふる物は日の旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか。片雲の風にさそはれて。漂泊の思ひやまず。海濱にさすらへ。去年の秋。江上の破屋に蜘の古巣をはらひて。やゝ年も暮れ春立てる霞の空に白川の關こえんと。そゞろ神の物につきて心をくるはせ。道祖神のまねぎにあひて。取るもの手につかず。もゝ引の破をつゞり。笠の結付けかへて。三里に灸すうるより。松島の月まづ心にかゝりて。住める方は人に譲り。松風が別野に移るに

　草の戸も住替る代ぞひなの家

面は句を庵の杜に懸けおき。彌生も末の七日。明ぼの、そら朧々として。月は在明にて光をさまれる物から。不二の峰幽にみえて。上野谷中の花の梢。又いつかはと心細し。むつまじきかぎりは。宵よりつどひて。舟に乗りて。送る。千住と云ふ所にて。船をあがれば。前途三千里のおもひ胸にふさがりて。幻のちまたに離別の涙をそゝぐ

　行春や鳥鳴魚の目は涙

これを矢立の初として。行く道なほすゝまず。人々は途中に立ちならびて。後かげのみゆるまでは見送るなるべし。ことし元祿二とせにや。奥羽長途の行脚只かりそめに思ひたちて。呉天に白髪の恨を重ぬといへども。耳にふれていまだめに見ぬさかひ。若し生きて歸らばと。定なき頼の末をかけ。其日漸草加と云ふ宿にたどりて著きにけり。疲骨の肩にかゝれる物先くるしむ。只身すがらにと出で立ち侍るを。紙子一衣は夜の防ぎ。ゆかた。雨具。墨。筆のたぐひ。あるはさりがたき餞などしたるは。さすがに打ち捨てがたくて。路次の煩となれるこそわりなけれ」

室の八島に詣づ。同行曾良が曰。此神は木の花さくや姫の神と申して。富士一體なり。無戸室に入りて燒け給ふちかひの御中に。火々出見のみこと生れ給ひしより。室の八島と申す。又經を讀み習はし侍るもこの謂なり。將このしろといふ魚を禁ず。縁記の

ちた、き水そゝぎ。かた手ふき〳〵石にすりて。がは〳〵といひたる音さへ。哀にきこゆ

おほかた。此調度のもてなしにも。あるじの心のおしはかるゝなり。いつもちりばみけがれて火いれのはひきたなげに。きせるあがつきとゞこほりがちなるは。にくゝさへぞある。きらゝかにみがきなして。きよげなるは。一きはのむ心ちもよし。かゝりとて。あまり心をいれて。ちりもゐさせじともてあがめたるも。是のみにや暮すらんと心つきなし。火のいくたびもきえたる。いとむづかし。はひふきこぼしたるあさまし。さはえもいはず

かくのみいみじくいひなすをいみきらはむ人は。それしかあらじ。やうなき物なりと思ひすてなむもことわりかな。つく〴〵とたどりつゝ思へば。げにはかなくあだなる物にこそとも思ひかへさる。もろこしにても。とり〴〵にことわりてさだめかねたるとかや。いむことたゞしきほうしなんどの。ちかくさしよせだにせぬもいとたふとし。かくまでは思ひとけどもなほおきがたき物にや。あしたにおきたるにも。まして物くひたるにも。ぬるにも。大かたはなるゝ折こそなけれ。かう(斯)つねにはちかくしたしき物はなにかはある。さるをいみじき願たて。ものいみなんどして。七日もしは十日なんどたちゐたらんほどにぞ。つねはさしも思はぬ此君の。一日もなくてはえあらぬことをばしるらんかし

尾花が本 終

ゐ。こしよりきせるとうで(取出)。あつごえたるたばこいれよりひねりいだし。こち〳〵しうおしつぎてく丶みつ丶。かしらかたぶけて火うちひらめかし。口つきおかしげにのみゐたる。はては火けたじとて。手のうちにた丶きあけて。あつければまろばしながら。又かいつぎたるこそいそがはしく見えしか。また木の道のたくみ。さらぬよろづのなりはひにも。身をつとめこうじにたる。しばしやすむとては。かの一服をしたまちつ丶(心持)。こ丶もとしはてなんどたのしみはげむめり。大かた朝夕のさへ。たえ〴〵なる屋にもなほ。此けぶりはたつるぞかし

いづくにもあれ。出でたるにわすれてもてこざりしくちをしさよ。又粉のやうになりたるにも。すべて人にもとむればひげしつ丶あたへたるきせるかりなんと。すべてなめげ(無禮)なること。人に物こふことなんどは。大かたつ丶ましくてせぬわざなるを。是のみ何ともおもはず。ならひになりぬもいかなるにか

きえぬる。すてむとてさしよせたるに。人も同じさまにして。ほうとつきあひたる。かたみにゆづりあひてまちたる。かしこまりある所なんどにては。まづともいふかし。火つくるをりなんどは。さてまつ程も久しく覺ゆ

人につかはる丶わらはの。まだゆるされぬ程。わりな(無分別)くこのみて。使の道なんどしる人のがりかくろへつつ。立ちよりては。こよなうおそかりきと。いちはやくいはる丶物から。とみ(急)の事いひにやりたる折なんども。なほこりずまのあまのもしほ火。けぶりのたえまをうらさびしとぞおもひたんめる

露ばかりのすひがらより。火いできておほくの屋どもやけうするためしもあんなれば。ふかく此の火の事せいするもことわりぞかし。それはさることにて。つねに衣なんどやきたゞらし。あるはた丶み落してしらざるを。人に見つけをしへられて。あわてふためき。ひろひすてたる。かたはらいたくすゞろにをかし

朝まだき霜よのなごり。いと寒むけくて。大かたかしらさしいづべくもあらぬに。さ丶やかなるわらはべの。らうたげにうちしぼみて。けぶりの調度もちいでつ丶かきはらひ。きたなき物きよむとて。氷う

かにねんずるもたふとし。みあらか（殿）のうしろのかたより。いそがはしげにめぐりきて。みはしのもとにて。かた（狀）ばかりをがみつゝ。又はしりゆくは。もゝたびまうでとかや。さるは。手に數さしゆくも中に見ゆ。南の御門をいでゝ。あそここゝ物みありき。下ざまへゆくに。寺なんどもおほくならびたてるまへを過ぐるに。かたはらより。痩せさらぼひていみじきさましたるかたゐ（乞兒）のつとよりきて。あが君〳〵たばこすこしといひたるぞいとこちたき。いひをだに思ふさまにはくはざんめるものゝ。これをしかあながちにこふ事ぞよにあやしき。かへりもみでゆくに。なほけしき（機嫌）とりつゝかゝづらひくるを。うしろより。ずんざの制する聞きもいれず。すこしえさせたるに。二なうよろこぼひていぬるぞ。いとあはれなるや

月のまへ花のもとはさらにもいはず。すべて折々の興あるふせい。めづらしき浦山のけしき。えならぬなんどを見るにも。思ひいでゝとりあへず。をりからのをかしさをもそふる物にこそ

あやしの山がつどものつま木負ひたるが。あまたかいつらねて家路をいそぐ。そばつたひ（傍傳）かたなり（不完全）なるわらはべなんども。程につけつゝになひつゞけたるぞをかしき。すこしたひらなる所にて。木どもしばし枝にあづけおき。まろがれあひて打ちやすみたる。てけ（天氣）のことなんどいひつゝ。例のけぶりはおのがじしたつめれど。かうやうのものゝは。にほひなんども中々うるさければかゝず。たかきいやしきほどほどにつけつゝ。もちふるきざみ〳〵有りて。國々ところ〳〵になたゝるたぐひおほく。おのづからその品かはり。はた匂よりはじめて色ことに。あぢはひおなじ物ならず。よきはよく。あしきはあしくて。いとようけぢめ分るゝものなり

旅人の行きかふ道なんどには。所々にきざみたばこなんどゝ。いと大きにあしで（蘆手）のかきそこなはれたるやうに。しやうじなんどにかき。あるは物のゑやう（繪樣）なんどをかしげに。あやしうかきなしたるを見つゝ行くは。めさむる心ち

春の末つかた。野べに打ちいで。田のもを見しかば。しづの男がたがへしやすみて。道のべにしりさしす

さるからいとゞおもにくきかたも添ふかし。されど。今はおしなべての事になりぬれば。もちひざるは中中さう〳〵し

二つ三つばかりなるちごの見ならひて。ちひさき手さしのべまさぐりつゝ。口にさしいれたる。あやふしとてとらんとするを。むつがりすまひたるいとうつくし

鼻よりふとけぶりのたちいでたるを。炭がまのやうに覺えつといひし。さは其人のかほや雪のやうにありけむといとゆかし

輪にせむとて人の吹きいでたる。烟のをかしくまどかにて。いくつもつらなりあがるを見て。我もなじかはあやまたむ。いとよくしてん。見給へなんどあらがひつゝ吹き出だしたるに。あやしうみだれぬる。心うがりて。此たびはいかでと。いたう口つきつくろひ。心したるが。又吹きそこなひたるいとむとくなり。これをやけぶりくらべといふべからん。わがけぶりに人のむせびて。かほあかめ。しはぶきしきりにしたる。いと心ぐるし

すてたるになほ立ちのぼる烟は。みな人のいとふわざなり。やにといふ物の口にいりきて。ひたひにしわよせたるもをかし。ゑひてかしらいたくしたる。又をかし

思ふどち二人三人類して北野へまうでけるに。いつも人多くまゐりたる。まして廿五日なんどは。おまへわたりところせく立ちこみて。ちかづくべくもあらぬに。からうじて御はしをのぼり。かうらんのほとり。かたはらよりをがみ奉る。こゝらの人。おのがさま〳〵何事をいのるらむ。いと久しくふしをがみぬかづきゐるも有り。かればみたる聲して。なにがしそくさいのためなんどけいするもほの聞ゆ。こと〳〵しきかしは手のひゞきには。あら人がみのかしこき御耳をもおどろかし奉るらんと いとたのもし。手さしのべ。十二銅の心ざしとて奉りたる敬白のかた。うちならすもいとなく聞ゆ。おくのかたを見いれたれば。御札卷數なんど宮僧ばらのとりいでてさづくる。いたゞきてまかんづるもあり。すこしこなたざまには。打ちさうぞきてはらひもなにもしのびやかによみゐたる。法師はだらになんどゆる、

づれにあかしくらすらんおい人の。身をさらぬ友としたるはことわりにこそと。もろこし人の名づけゝむも。げにさることぞかし

世ばなれ物すごきみ山のおくにも。すめば年月をかさねてすむ物の。花もみぢうつればかはる折ふしのさびしさを。いかゞはせむ。秋のゆふべ霧にしをるる槇の下露をながめ。夜ふかく松のみのほろ〳〵と落つるを。ねられぬみゝにきゝゐたらんほどなんどのつれ〴〵は。金爐烟靄のすこしきなるにのみぞなぐさめてまし。何となくはかなげにおよび(指)にすゑて。めぐらしゐたるも。さびしげに見ゆ。あはれ。源氏の君の。須磨の御うつろひのほど。御つれ〴〵なりし世にも。かゝる物ありてましかばと覺ゆ

はなやかに。今やうたひ。いとなづかしうひきすましたる物のねに。きゝゐる人もおのづから時々聲うちそへ。かたはしつゞしりうたひつゝ興じたる。きゝしらぬあたりも。きせるしてしどけなくひやうしとりゐたる。さう〴〵しからぬわざなりや

ふたよ三夜よがれ(夜離)し床のうらみもちりも。まだつもれるとはなけれど。大ぬさのひくてやよそになんど。かこちつゞくる言のはをあはれと聞きつゝ。つひのよるせをかたらひなぐさめなんどしつゝ。かたみ(互)にぬらす袖のうらにもたくものけぶりはたつとなむ。枕より外にもらさぬむつ物がたりもきゝあかすらん。鐘の音も曉ちかくつげわたせど。つきぬちぎりは。なほ有明のつれなき空に止めおきて立ち別れむとする程。妻戸おしあけつゝ眺めいだして。頓にもいでやらず。あしたの霜のと打ちずんし。衣うちはおり。ひもさしなんどする程。女もなほあかぬさまにて。海士のもしほ火またたきそめ。およびしてけしきばかりかいのごひ。こゝろありげにさしよせたる。にくからでとりつゝ吹きいづるけぶりに。入りかたの月かげさとくもりたるは。いひしらず哀にえんなる明けがたのけしきなりとかや。又人めをつゝみ色にもいでゝ。わりなき戀をするがなるふじの煙のくゆりわび。空にきえなむ思のほどをも。かゝるたよりに人づてならで。さながらほのめかし出づるわざもありとかや

女はおほかた。すかざらんがまさりてぞ見ゆる。なよびよし(由)めくかたにはたよりともなりぬべけれど。

たるが。かほふくらし。あくびうちしてはしりくるもをかし。立ちいづるほど。おくより。御たばこいれなんのこりて侍りしとて。わらはべのもていでたる。こはわすれにけりとて。ふところにさしいれていぬめり

さかつきいだしてのみかはすをりなんどは。ろんな（論）うけおされにたるやうなれど。めぐりくるもまどほ（間遠）きひまには。なほしも。はた。えあらぬぞかし。下戸はさらなりや

かのわすれおきていなむとしたりし物よ。をり〳〵の心ばへ。時につけつゝ、しいづるたくみ。年々月々にめづらしう見えしらがへば。いたりすくなき（未熟）わか人なんどは。いとこのましうしつゝ。ふりぬさきにと。いそぎもとめて。ほこらしげにもていありくを。人もはやうもたりけるこそくちをしけれ。大かたかやうの事。人にあらそひうけばり（斷然）たるこそ。いとをさなきわざならめ。めでたしとこひて見るだに。したりがほしたるはにくし。まだあまりきすぐ（質朴）にて。い（人の）つもふるめかしきかたをのみまもりゐたるも。折にふれ所によりては。さはいへど。はえなきわざなり。只なにとなくおいらか（老）になづかしうきよげなるを。あるにまかせてもたまほし。さりとて。ひたぶるにえんだち（艶）なまめきたるも。女なんどこそさもあらめといとをこがましく見ゆるぞかし。かうやうのすきずきしさも。わかき程はつみゆるしつべし。さたす（年頃）ぎたる人の。ようせずばうまごもいだきつべきころほひなるが。いまめきはなやぐこそ。あひなき物なれ

いふがひなく。年まかりより侍りては。何事につけ（是より老人の人）ても。おのづから人に心をおかれ。さるからうちいでむ（に語る詞）とおぼしき事もつゝましく。又おのづからひがひがしき心も。いでまうでくるわざに侍れば。おのづから所せきものになりゆき。うたて（可厭）のおきなやと。うちあはめ（疎）られ。まじらひふれば（觸）ふ人もあり。かたき世にこそ」なんどかたりつゝ。きせるかきのごひ。みがきなんどしつゝのみゐるは。わかゝりしより（以上）。たがひに心かはらぬ友ならんと。見つゝ、心苦しく聞きゐるわかうどさへ。えあらず。ましてひとりつれ

あら〳〵しう吹きしをりし嵐も。なごりなくのどまりてせんざい（前栽）のこずゑもいとゞさびしく。木の本にくちのこる落葉も。あさ霜ながらの氷にうづもれ。空さへ雪げにうちくもりぬる夕ぐれ。やゝちりくる花にぞ。春のとなりのちかければと。すこしさう〳〵しさもなぐさみて。ながめいだせるに。ねぐらにかへるゆうがらすの。三つ四つ二つなきわたるも。いとさむげに見ゆ。かくしつゝ。はやくれ竹の葉ずゑなんどより。やう〳〵（差別）しろくなり行くほど。さすがに。まだ物のけじめも見えわきて。やり水（景狀）のほそうて殘りたるなんどもをかし。内外人のけはひもいたうしづまり。つれ〴〵なるよひの程。庭に跡をもいかゞはといひあへむ。そも何ばかりの心ざしにてか（倦）は。かゝる雪も。よに物する人のあらんとうむじゐたるをりしも。かどのかたに入りくる人のけはひぞする。袖うちはらふほども。心もとなくて。はしち（來客）かうたち出でつゝ（主人の心）見れば。あけくれ二なうむつびかはす人の聲にて。いかゞ（不滿足）物し給ふ。こよひの雪をひとりもてあそばむ事のかたはなるこゝちし侍りてな

（客言）んなどいひたる。うれしくて。いでやこゝにも。心ばかりはかき分けて思ひ（主人の言）やり侍りしかど。ならはぬ夜ありきは。ものうくてなんどいらへつゝ。おくのかたにいりて。いとおほきなる火おけに。すみこち〴〵（無飾）しうおこし。つとよりゐて。なにくれとむかしいまの物語しつゝ。よひ過ぐる程。いとすごくしめ〴〵と心ぼそくて。雪をれの音のみ。しば〳〵きこゆるに。ふりつもる程もしられて。こよなうさむけしや。あかずむかひゐたらむ程。れいのけぶりは今さらにいひたてずとも。空にしるべし。夜やう〳〵ふけゆけば。かへるよしして。心なき長ゐのうらを。下部などや。海士（客言）のすむ里のしるべとおもひ侍らん。ねむたうぞおはすらんなんどいひつゝたつ。なにかは。千夜を一よにとも思ひ侍れど。御心とまるべきくさはひ（種子）にも侍らねば。しひて（主言）今暫しともいかゞは聞えさせむ。ふりはへてとはせ給ふみ心ざしはさる物にて。雪こそふかく侍るめれ。みちの程もおぼつかなし。あかりの御まうけやさぶらふ。まゐらせてむやなどきこえつゝ。ずんざ（從者）よばすれば。ねぶりゐ

はをしきものなり
ふみ分けてこし跡だになき庭の萩原。こと丶ふものは風のみにて。いとゞ身にしみつ丶。色みえぬ心は。木の葉と共にうつろひゆく秋の夕暮。いまさらまつとはなき物から。うちしをれたる淺茅が末の露のそこより。心ぼそう鳴きいでたるまつ虫も。誰をかと思へば人わろくなみだのこぼる丶。もつ丶ましくて。まぎる丶かたもやと。手ずさみのやうに。手つきいとなよらかにて打ちみじろく(身動)さまもらうたし(可愛)や。風にふかれてよこさまにたちのぼる烟の行くへも。つく〴〵とうち詠められて。あはれつらきかたにも。吹きつたへてしがな。さらば。人しれぬ我おもひも。空にしるくや見ゆらんと思ふも。中々の心のもしほならん

ふつ丶かにふとり過ぎたるげすをのこの。かほにくさげなるが。くつろか(緩)にうちあふぎ。ひげかいなで(搔撫)てくはへゐたるは。引きはなちてもすてまほし

かりそめに物したるまらうど(客)にも。すべてとりあへず。まづいだすものなるを。すかぬはやうなしとてかへしたる。はえなき物なり。「心地れいならずなやみゐて。はかなきくだ物などをさへ。いとものうくしたる折にも。いさ丶かおこたりざまなるには。まづおもひ出づるぞかし。つねにすける人の。きよくとほざけて日數ふるは。とぶらひきたる人などにも。しか〴〵なんさぶらふなどもいふかし

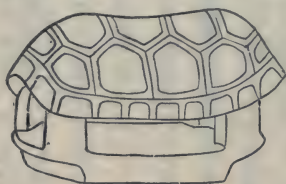
水無月廿餘日のひるつかた。扇の風もよにぬるく覺え。夕風まちつくる程もたへがたくて。のきちかううた丶ねしたるに。ふと目さめぬればかたしけるかたの。あせにしめらひて。いとゞ物むづかしく。あつさ所せきを。めする〴〵引きよせて。火たづぬるもあながちなりや。今ぞすこし。庭の梢もうちそよくほどなる

あまりしたくもあらぬ人のもとにて。物がたりし。例のいだしおきたる。とかくして時うつり。火もしろきはひがちになりたるをたづぬるに。はやくきえぬる。たゞにさしおくがくちをしければ。あるじや心づくと。しばしかきさぐりゐるを。とく見て人よびたるはよし。心やすきわたりにては。いかにもせむを

尾花が本

本居宣長 著

思ひ草は。秋の野の尾花がもとに生ふとかや。またはこのけぶりも。其名にたぐふ心ちして。室のやしまもとほからず。とことは（長久）にこがれつゝ。人の口のはにのみぞかゝる。さるは。いひけ（消）たれても。なほふかくおもひいれて。もゆるけしきは。いぶきの山の。さしも草にもことならず。かくのみたえず。なげきせる。はてはいぶせくきたなげになりてすてらるゝよ。いとかくあだなる物とは思へど。とあるごとには。なほ世にしらずをかしき物にこそあなれ。かゝるも。むげにちかき世の事ぞかし。むかしはをさ〳〵名をだにしらざりし物の。やむことなきあたりまで。もてはやさるゝもいかなるわざにか。人の國にも。いにしへは。かゝる物ありとも聞えず。此頃渡りまうでくる文どもにこそ。こゝにもつゆたがはでもてあそぶよしみえたれ。はるかなるせかいより。此國にめづらしき物ども。あまたわたしもてくる人を。まれ〳〵見るにはなほまさりて。あながちにこのめるさまなり。「鶯の谷より出でし初こゑに。世もおしなべて春めきつゝ。やう〳〵。風なづかしう吹きわたして。おほかたの花の木ども、けしきばみ。梅は今をさかりにて。にほひにかすむ大空ののどけさに。そこはかとなくあくがれいづる。春のひかりにかしらの雪もきえ果てぬべく。おいたるも若きも。おのかじしきよら（美麗）をつくし。とがむばかりの香にしみたる。くれなゐの袖ふりはへて。行きかふ人をまちまうけたる。かりのゆかなどにしばしやすらひつつ。まづ火もてこといひたるに。きよげなる女のあは〳〵しげにもていでゝ。なめげにさしおきたる。さるがふことなどいひあざれたる。いとをかし有明の頃。ものへまかるとて。夜をこめて立ち出づる空は。月影くまなきに。やう〳〵。東の山ぎはあか（明）りてしらみゆくほど。なほ行くすゑは霧わたりて。はるかなる野べに。をり〳〵にうちてたく火のけぶりあらばと。貫之のぬしのいひけむことのはなんど思ひ出でられて。ゆく〳〵燧りいでつゝ。とぶ火のひかりを。野守がいほにはあやしと出で、やみるらむ。かくてまだ。思ふさまならぬに。火のきえぬる

桂林漫錄　終

跋

夜光之珠。愚者怪焉。楚山之璞。識者寶焉。物之顯于世亦必得其人耶。如當時歐盧陵董廣川輩。非攸其人耶。乃謂之千載知己亦可耳。桂林主人此冊概登金石書畫古器之類。益 多聞者數十條。額曰漫錄。其詳論精核。乃稽古一端也。然則若此錄亦謂之千載知己而可也。不其然乎。抑何漫然

氷齋鉉題

ぞ。」知約は翁の抄錄にして。百頁ばかりの綴本。數十卷ありと也。筑前の郁山芝塢。其書を見ることを得。拔萃したる小冊有り是其内の說なる由。氷齋より得たるを爰に記す

○金聖歎

天漢浮槎散人が戲編せる。秋坪新語に云。金聖歎著はす所の解唐詩。五七言の律詩を中より分ち。上四句を前解とし。下四句を後解とす。當時の人戲れて。唐詩を腰斬に爲たりとぞ稱しける。一日金京師へ行きけるが。東の四牌樓邊にて內逼ければ。街心にて袴を褪。大便を遺けるにぞ。見る人駭かざるは無し。坊卒出で、これを叱り禁むれば。金傲然として色を作し。且便し且晒ひて曰。群狗吾矢を噬はんとするのやるせなさに。反りて我を叱やと。坊卒大に怒りて鞭打てば。金も亦大に怒り。侈口に毒詈す。坊卒腹に居ゑかね。金吾の處へ達しければ。拘へて訊爲ける所。いよ／＼惡言止まざりける故。遂に公の沙汰となり。平日の事蹟を搜査ありしに著はす所の書不法の語のみ多かりしに依り。（中頁按に。水滸傳の評。其もつとも甚き物なり）誹謗の罪に坐せられ。市にて腰斬にぞ行はれける。唐詩を中より分ちたるは。其讖なりと。咸。人云ひあへりしとなり。」予友必端堂の主人。聖歎外書の一種。貫華堂選批唐才子詩甲集と云ふ書を（貫華堂は聖歎の號なり）藏す。七言律六百首を說きたり。前解後解と分つこと解唐詩と同じ。序に。順治十七年二月八之日。兒子雍が請に依りて。唐詩七言律體を說き事を述べ。大易學人金人瑞法名聖歎述撰と記す。第八卷末頁に。順治十七年四月十八日。說二唐人七言律詩一竟。（男雍釋弓筆受倂補註）」とあり。解唐詩は五言律をも說きたる由なれば。恐らくは此書の續集なる可し

○林氏印

東都隱士藏六居士なる者。古銅印を藏す。其製奇古なり。形圖の如し

印文和靖信裔とあれば。林氏可山の印なるべし。」因に云。林和靖の像の傍には。必。鶴と梅を畫く事。諸稼軒が堅瓠集に說あり。宋の林處士和靖。隱二居西湖之孤山一。以レ梅爲レ妻。以レ鶴爲レ子。朝廷以二粟帛一云々

○菊變レ艾

連歌師阪昌周。東都山伏井戸に僑居のとき。隣家の老父。菊を好みて作りけるが。長を延ばさずして。花を開かしめん事を欲し。年々切りつめ苅りこみける程に。二三年の後。變じて艾と爲りぬ。唐艾の名宜なりと。昌周が云ひける由。予が幼なるとき。杉田老醫。先考國訓法眼へ語りけるを思ひ出だせる儘。爰に記す

○市語

往年薩州の人の。隱語にて豁拳を打つを見たりしが。一をたんそこ。三をよこがは。七を毛の尻。九を丸まらず。など丶云ひたるを。興あること丶のみ。聞き過しゝが。此頃堅瓠集に。委巷叢談の市語を載せしを見て。始めて唐山の市語なる事を知る。杭人三百六十行。各有ニ市語一。中略不レ若下吾鄉市語有中文理上也。一爲ニ旦底一。二爲ニ斷工一。三爲ニ橫川一。四爲ニ側目一。五爲ニ齾丑一。六爲ニ撒語一。七爲ニ毛根一。八一作ニ皂脚一爲ニ入開一。九爲ニ未丸一。十爲ニ田心一。」全く是より出でたるなり。東都の一大刹に。數字の庾辭あり。一大無人二天無人三王無中四罪無非五吾無口六交無人七切無刀八分無刀九丸無丶十千無ノこれも亦文理あり

○義經之笈

源廷尉奥州下向の時。解魔法師に打扮。千磨百難を歷て羽州に到り。是よりしては。秀衡が領地なれば。旅裝を改め彼館へ趣く可しと。主從さはやかに裝ぞきて下られける。其時の笈山形の領內。七箇寺に一宛傳來す。何れも紙にて張り。柿漆にて塗りたる物なり。義經の笈は小形にて。內を觀世音にて張る。伊勢三郎が笈は勝れて大形なりとぞ。家兄山形侯にて。義經の笈を一覽せられぬ。甚殊勝なる物にて有りしと語られき

○鬼一法眼

貝原益軒翁の知約に云。鬼一法眼は。堀川の人なり。兵法を知れり。軍法。弓馬。劍術ことごとく人に敎ふ。鞍馬の衆徒八人に傳ふ。劍術に京の八流と云ふは。鞍馬八人の衆徒の傳へし流なり。義經も其八人の內の弟子なり。後に鬼一にも習ひしとなり。世俗に天狗に逢ひて劍術を授かると云ふ。虛誕の說なり。又。關東の七流と云ふは。鹿島の神官より出でたり。凡劍術の流は。京都八流。鹿島七流より外は無しと

の書に及ばず。此頃王子年が拾遺記を見るに。岱輿山西有レ曰二玉山一。其石五色而輕。或以二履寫之狀一。光澤可レ愛。有レ類二人工一。衆仙所レ用焉。」恐くは勾玉の事なる可し

○驪龍球

葛西先醒云。驪龍の珠は鮓答なり。馬黑きを驪とし。八尺を龍とす。驪龍の二字。皆馬を云ふ

○舍利

又云。佛氏の舍利と稱するもの。皆小珠なり。按に。儒家の葬禮に含珠あり。僧徒是より思ひつき。潛に死者の口中に小珠を含ましめ。茶毘の後。指して以て舍利と爲すなる可し

○幣

幣說文云。幣帛也。周禮天官大宰注云。幣帛所下以贈中答賓客上者。とあり。奴佐と訓ず。按に。叩頭捧の略にして。乃聘物を云ふなり。布帛を木の枝へ打ち掛けて。神へも貴人へも奉るを云ふ

幣を爾藝弖とも訓ずるは。和布の義にして。布帛のなごやかなるを稱したるなり。又。和名抄云。論語註云。幣。今江東云二幣帛一。和名。美天久良」すなはち滿座の意にて。幣を置き盈ちたるさまを云ふ。是も亦用を以て體に訓じたるなり

小なれば枝を用ひ。大なれば根こぢに抜きたる木を用ふ。今祭禮に用ふる榊は。其形をうつせるなり。又。紙の切垂たるを。木或は竹に挾みて。神の社に奉る物を幣帛と云ふは。其もつとも略なる物なり。古くは神詣する人。幣帛を手づから作りて携へ行くこと。福富草字の書に見えたり。又旅行する人は切麻とて。（又麻を奴左と訓じたるは。用を名としたるなり）靑。黃。赤。白。黑（或は紫）の麻布の長四寸。幅八分に切りたるを重ねて結び。白き紗が綟子の袋に入れ。道すがら神の廣前に捧げて手向する料とす。其袋を麻袋と云ふ。卜部家にて用ひらる、袋の圖式に。寸法を悉しく記せり。好古小錄に載せたる麻囊は。田舍にて葬送の時。柩の先へ持たしむる。花籠と云ふ物なり。（籠の内へ。五色の紙にて切りたる花形と。錢を入れ振りこぼすやうに作る）か、る不淨の物を。爭で宇佐の神事には用ひ來にけん。御簾のつま〲透影など。春の手向の麻袋にやと覺ゆと云へる源語の文には。紗もて作れる袋の目より。切麻の色々すきて見ゆるぞ。親しかるべき

乃姪王二郎宜縣黄花軍人氏 定下宜稱遠 字号
見當本處里正王善的兒子就
姓老實小哥爲保人保謹當氏一
十多歲身價白寶三錠收納
長委天百禄多々衣遠勞役
爲々以代血誓萬乞敵
東人之盛意
惠々不具券冒
收春三月
保主 張凝
李文 王善
許員外大郎 上下

○足利學校足利本

野州足利の學校は。淳和帝天長九年八月五日。小野篁勅を奉じ。草創有りし學校なり。篁の子孫斷えて後。文明年中。僧快元。儒釋同一の學を以て。庠序を中興す。夫より以來。代々僧侶の住持となる。慶長年間。采地を賜ひ。及び。活板の字子十萬餘を賜ふ。此聚珍板(ウヱジバン)にて。刷印したる書を。世に足利本と云ふ。寺號も山號も無く。只學校のみと稱す

○交割

俗諺に。家に久しく持ち傳へたる物を。交割と云ふ事「其解を得ざりしが。古調雅君の雜記に。睡餘操筆林春斎著の說を載せ給へり。」交割とは。寺院の什物を云ふ。唐土にては。寺の住持かはる時。竹の割符を合せて。什寶を前住より後住に交與す。故に交割と云ふ云々

○東海道國名聯

武相駿豆遠州際。參尾勢江雍路中。」林春斎の作なる由。東見記に載せたり

○勾玉

谷川士淸が勾玉考。其說精到なり。然れども言中華

圖に。其形を畫き。傍に。源義家朝臣鞘卷と書きたるのみにて。刀の所在を記さず。彼朝臣の事實の徵とすべき。後三年畫記に。此刀を佩ばられたる所を畫かず。夫より稍後の物ながら。粟田口法眼が。義家朝臣馬上の圖も。黑漆の鞘卷を書きたり靜甫云。此刀の尻に付けたる犬招なる者。古き書にも記錄にも見及ばず。室町比の書より其名は見ゆ。此を以て考ふれば。此鞘卷も。其時代に製したる物なる可し。都て古書に朱漆の短刀を帶びたるは少なり。皆黑漆なりと。予が爲に語りぬ。按に。貞幹が好古日錄に。いぬまねきは猪ノ目貫なりと云ひたるは好し

○祥瑞

南京の陶器に。五郎大輔吳祥瑞造と。銘を書きたるあり。祥瑞は。日本勢州松坂の陶工なり。入唐の間。彼國にて製したる物なりと云ふ明の。正德八年後柏原院。永正十年に當る歸國の時。李春亭なる者送別の詩あり。玉川翁の掌記より出抄して。同好の士に傳ふ

詩送下居士五良大夫歸中日本上

敬將二玉帛一覲二天顏一。回レ首扶桑香渺間。舡舶古鄮三佛地。杯傳新酒四明山。梅黃細雨江頭別。帆引二清風一海上還。明到賢王應レ有レ問。八方職員溢二朝班一

大明正德癸酉夏六月朔　四明　李春亭

原本は。勢州丹生の神宮寺に藏すとなり

○吾妻鏡跋

曝書亭集載。吾妻鏡五十二卷。亦名二東鑑一。撰人姓氏未レ詳。前有二慶長十年序一。後有二寬永三年一。國人林道春後序一。則鏤版之歲也。編中所レ載。始二安德天皇治承四年庚子一。訖二龜山院天皇文永三年七月一。凡八十有七年。歲月陰晴必書。餘二紀將軍執權次第。及會射之節一。其文鬱轖。又點二倭訓于旁一。譯レ之不レ易。而國之大事反略レ之。所レ謂不賢者識二其小一者而已。中略慶長十年者。明萬曆三十二年。寬永三年者明天啓四年也。」櫟窓先生曰。按に。三十二年は三十三年。四年は六年なる可し

○唐山保券

此保券。往年浪速の隱士。警世外史なる者に得たり。源弘賢先年此券書を見たりし時は。未だ破裂せざる前にて。成化甲辰の文字を存せしとなり。今年寬政己未歲より遡る事二百五十六年に及ぶ

廟と題したる碑有り。延寶六年七月十五日。土人の造立せるものなり。傍に祉あり。靈を山王に配祀す。年々七月十六日祭禮ありと云ふ。中良按に。此說甚疑ふ可し。大日本史列傳第十八。淸和帝第三子。貞元親王。宮人王氏生。紹運錄。皇胤系圖 貞觀十五年爲二親王一。貞仁和三年授二四品一爲二上野大守一。三代實錄延喜九年十一月。薨。稱二閑院ノ親王一。皇胤紹運錄。日本記略。一代要記 と記させ給ひぬ。上總國は親王所任。三大守の一なれば。此國の守に任（マケ）られ給へる事の有りたらんに。國史にも古記にも爭で記さでや有るべき。上野にて薨じ給ふとも云はば。謬ながら扠も有りなん。上總にて薨じ給ふと云ふ說。尤不審し。去りながら。深く虛實を論ずるは。神威を侮慢するの恐無きにしも非されば。敬して筆を留めぬ

○鹽釜鐵燈籠

徘士芭蕉が奥ノ細道に。鹽釜の明神に詣づ。神前に古き寶燈あり。鐵の扉の面に。文治三年和泉三郎寄進とあり。五百年來の俤。今目の前に浮（オキアゲ）びて。そゞろに珍しと書きたるは是也。銘は陽識にす

○象　眼

竪一尺一寸七分
幅一尺二寸九分

相嵌と書くぞ本字なる可き。稗史類編云。予嘗見二夏雕干戈一。銅上相嵌以レ金。其細如レ髮。中略 相嵌。今訛爲二商嵌一。」按に。相商の音より象に轉じ。嵌を眼に訛りたるならん

○海老鞘卷

海老鞘卷は。義家朝臣帶び給へる物の製作を摸したる也とは雖ども。其眞物は。何れの寺社。何某の家に有りと云ふ事を詳にせず。軍器考には其名も載せず。白石先生沒後。日下部量衡が輯めたる軍器考

に作れるなり云々。」弄錢家。此御說を見て。千古の疑を解くべし

○古　鈴

予家一古鈴を藏す。其瑩水磨の如く。褐色に黑を帶び。翠綠の雨雪點あり。蓋し芳野山中後醍醐帝皇居の舊地にて。堀り得たる物なりと云ふ。定に古色愛玩すべき物なり。普く鑒賞家の鑒定を請ふに。何の用たる事を辨ずる人無し。近來中村國香なる者の撰する。房總志要なる書の中に。上總國周集郡貞元村の。神將寺と云ふ淨刹に。清和天皇第三の皇子。貞元親王の寶玩。板鈴と云ふ物有りとて。圖したるを見れば。（中良按に。板鈴の名。古書に所見無し。假に設けたる名と見えたり）我所藏の物と。全然たる同物なり。今歲六月。北條鉉。宇野元廸と偕に。房總の地に遊べる時。彼寺を訪ひ。住僧隆辨法印に謁して。古鈴を見んことを乞ふ。法印おもうるに承け引き。頓て鈴。及四品の什物を出して看せしむ。鈴は大小の違あるのみにて。質色臭味。我弆藏の物と。些も異なる事無し。惜らくは其音清亮ならず。我鈴より下る事一等なり。他の四品は。硯大小二枚。石印壹顆。（印文梵字の如く讀み難し）花鏡石と云ふ石一顆。呵する時は水を滴らす。硯滴（ミヅイシ）の用に充る物にして。彼君いまそかりける時。机上の清玩なりしと云ふ。去りながら。鈴の外の四件は。何れも古意も風韵も無き下等の物にして。親王の御物に非る事。言を俟たずして明なり。法印云。親王此國に遠流せられ給ひ。此地にて薨じさせ給へるに依り。御名を所の稱として。貞元村と云ふとぞ。夫より陵を尋ぬるに。寺を去る事一町餘。森々たる古林の中に。いさゝか墳墓の形を殘し。上に清和天皇第三皇子貞元親王御

神將寺古鈴之圖

草窗先正ノ藏書ニ河內國金剛輪寺ニ藏スル金鐸銅鐸數口ノ圖アリ、其中ノ銅鐸ニ此鈴ト同物アリ

桂林舍弆藏古鈴之圖

餘光に依りて。始めて彼書を見る事を得たり。先初卷を披き見るに。卷首に雍成帝御製の序あり。此序文に義經の事を記されず。次に蔣廷錫が表文あり。此上表に。彼文は有るめりと通讀すれども其事なし。次に凡例あり。此中にも見えざる故。總目を閲すれば。圖書輯勘なる書の名も無し。大に望をば失ひたれども。此書を見る事を得たるこそ。生涯の洪福なれ。彼説は忘貝のみにもあらず。普く世に言ひ傳ふる所なり。同好の士。義經の事に於ては。永く繫念を絕つ可し。此書雍正三年に撰成る。銅にて製したる活板なりとぞ。句整分曉。至りて鮮明なる本なり

○八　德

俗に八德と名付くる函の事を。唐山にては八面埋伏と云ふ。邊生八賤云。見下倭人𨫼金銀壓尺上。古所レ未レ有。尺狀如レ常。中略中有下刀。錐。鑷刀（ケヌキ）。指銼（ツメトリ）。刮齒（ヤウジ）。消息（ボンボリ）。空耳（ミヽカキ）。剪刀（ハサミ）上。收則一條。搻開成レ剪。此製何起。豈人心思可レ到。謂二之八面埋伏一

○花　稜

家兄曰。鉢皿の花形なるを。はりきと云ふは。花稜の華音。はありんの轉訛なる可し。葵花稜。菊花稜。の名。武備志の日本嗜好之部に見ゆ

○萩燒茶碗

長州侯の領內。松本村と云ふ所にて製す。彼藩中にては松本燒と稱す。陶工三軒あり。坂新兵衞。輪三十藏。林彌四郎と云ふ。何れも高麗の種子なり。朝鮮征伐の時。擒となりて來りし者の末葉なりとぞ。今血脈にて相續せるは。坂家ばかりなりと。彼國の人に聞けり

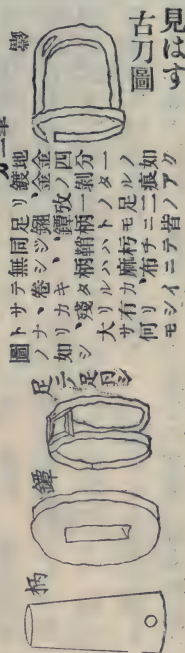
○吳　須　手

白石先生。安澹泊に答へらるゝ書に。（新安手簡に出づ）茶人茶碗の下品なるを。ごす手と申す來由を尋ね候へば。子昂を打ち返し。手の惡きと申す事と申し候。是等も京都將軍の世の。俗語と聞え候とあり

○銠

鶯亭君の撰ひ給へる。錢貨譚論云。閩の王審知大鐵錢を鑄る。泉志に。貨泉錄を引きて云。俗謂二之銠匃一賀考るに。諸書銠匃の字。音義未レ詳とあり。西淸古鑑錢錄に。蓋し閩語にして。正字には無き也と云はれしは笑ふべし。是全く謄寫の誤にて。銠。か賀反と云ふ義なり。二行の註を誤りて。匃の一字

○古　刀

往年北條鉉。南部に歸省せし時。彼地の和賀郡北鬼柳と云ふ所に在所の。蝦夷の古墳を發きて。古刀二把を得たる人あり。土に入る事久遠。質已に鬆脆して用に堪へず。鉉就きて其刀を見。形を押して圖を作る。予も摹寫して一通を收む。原圖を縮して左に見はす

古刀圖

鐔　足　柄

切先ヨリ頭マデ二尺五寸四分強

柄鐔トモ作リ付ケニテ抜ケズ

○齒　黑

兩朝平壤錄載。官家子姪。皆以二銹鐵水一浸二棓子末一染レ牙。與二民家一以二黑白一分二貴賤一。女子不レ分二良賤一。一染レ牙始嫁。日本風土記にも。此説を載す 海人藻芥云。鳥羽院御代以前は。男は眉をぬき。鬚をはさみ。かねを付くる事一切無レ之。及二末代一毎度嬌飾之至也。とあるを見れば。男の銹鐵水を付くるは。古き事には非ざりけり

○下　髪

戎菴漫筆。倭國婦人不レ髮レ足。髮長散披在レ後

○十二天像

備中國淺口郡の佛祖寺に。空海唐土より將來せる。十二天の畫像あり。筆者の名を傳へず其刷印したる物を展看するに。氣韻生動。紙表に飛走する勢あり。印本すら如レ此。眞物の畫力想ひやる可し

○圖書集成

國學忘貝に云。森助右衛門著述圖書集成。全部一萬卷。清の世に至りて編集せる所なり。寶暦庚辰歲。淸人汪繩武なる者齎し來りしを。明和甲申歲。官庫に納められしとなり。書中圖書輯勘なる書百三十卷あり。淸帝の自序あり。其文に。朕姓源。義經之裔。其先出二淸和一。故號二國淸一。と有る由なり。と記せるを見てより。一度其書を見ん事を欲すれども。嫏嬛の秘書に等しければ。空しく渴望するのみなりしが。去年家兄の

石を齎に來る。阿藏なる者に質し、に。果して踪形も無き譌物なり。此像を見んとて。好古の人間尋ね來る事侍りと語りき。全く奇に誇らんと欲する好事者の所爲と見ゆ。憎む可く寃む可し。彼祉。尊の燧袋を神體とする由。是は噓說にあらず。阿藏歸國の後。其圖を送り越す可しと約しぬ

〇向　火

酒折宮の因に記す。日本武尊駿河國に至り給へる時。夷等尊を欺きて野中に出たし奉り。枯草に火を著けて。燒き失ひ奉らんとす。時に尊。御姨。倭比賣命の賜ひたる火打袋より。(是酒折の神體なり)燧を取り出だし。御劍を拔きて草を薙き拂ひ。火打にて火を打ち。向火を著けて燒き退け。還り出で、。夷どもを切り滅し給ひし事。記紀に載せたり。古今の註家。源氏物語。槇柱に。我も向火つくりて有るべきを竹川に。いと後めたき御心なりけりと。向火著くればを。花鳥餘情に。火の付きたるに。此方より又火を付くれば。向の火は必ず消ゆるを向火と云ふ。其如く此方より腹を立ちかくれば。人の腹は立ちやむものなりと註釋したるを引けるは當らず。或武人云。草莽の中に埋伏する時。敵若火を付けて燒討にせば。燃え來る方の草を切り拂ひて火先を留め。扨我後の方へ火を付くべし。燃えざるに從ひて。一條の活路を得る而已ならず。後へ廻りたる敵兵は。此方より付けたる火にて。却りて燒き崩さる、物なりと云ひたる說にて。始めて向火の解を得たり

〇紺紙砂子紙

瀟裝志に載宋徽宗。金章宗。多ㇾ用磁藍紙。泥金ㇾ字。殊ㇾ臻莊偉之ㇾ觀。金粟牋ㇾ次之

〇蚊幮畫ㇾ雁

蚊幮に雁金を染め。或は紙にて切りて付くる事。其由來を知る人無し。按に物理小識。夏月線染ㇾ蝙蝠血ㇾ。橫縫ㇾ帳額ㇾ蚊不ㇾ入ㇾ(マジナヒ)と載せたるを見れば。蝙蝠は蚊を喰ふ物故。厭勝に斯はするなる可し。恐らくは崎嶴(ナガサキ)に客寓の淸人。夏の頃此意にて。帳額へ蝙蝠の形を草畫に書きて。蚊を避くる呪とせし事などありしを。好事の人。此邦の蚊幮へも畫けるが。轉傳していつしか雁金とは成りけるにや。畫箋などの泥畫に。蝙蝠を寫す意にて。如此書きたるもあればなり

山(ヤマ)と云ふ所にて見たりとて。瓦偶人の像を圖す。其狀奇古にして。聊。太古男女の服飾を想像するに足るものなり。往年毛利讃州侯にて。和漢の古玩を集(ツド)へ給ひし時。予も其席に陪せしが。此偶人の腰より以下の缺け殘りたる物を携へ來れる人あり。何れも明器の類なるべしとは云ひて。何たる事を知りたる者なかりしが。近頃此圖を得て。始めて瓦偶人の下體なる事を辨へたり。家兄國瑞法眼も。此偶人の下體を藏す。武州栗橋の邊にて。堀り得たる物なりと云ふ。其質。城州の深草燒に似て甚脆し

瓦偶人之圖

中亘按に、頸に掛けたるは御統(ミスマル)の玉腕に纒ひたるは手玉なり、上古の制を考ふれは、此二の像は女と見ゆ

腰佩ひたるは紐小刀(ヒモコガタナ)なり此像は男と見ゆ

原本云、衣帶是と同くして、劍と覺しき物を佩ひたる像あり、形圖の如し、長さ五寸許中亘其に即上古の劍なり按制作は法隆寺の上宮太子の像、四天王寺、中之院の川勝の像などにて見る可し

穴ナリ

○土　人

隨園子不語云。劉刺史之鄰孫姓者。堀レ溝得二一石門一開レ之隧道宛然。陳二設鷄犬罍尊一皆瓦爲レ之云々。亦有下堀中得二土人一作二臥形一者上。中良按に。皇朝の古。埴輪を以て葬を送りたる事。唐土にも其例は有りけり

○重盛溺死

大系圖。內大臣正二位重盛。平治　年中下二向大和國司一之時。於二宇治一溺死。法名淨蓮。號二小松內府。」と記せり。一門入水の嚆矢なり

○秉燭翁像

近來。甲州酒折宮の日本武尊を祭る本社の傍に祭る所の。秉燭翁(ヒトモシノオキナ)の社の扉に刻する像なりとて。流布する圖あり。深衣の如き服を左袵に著。或人。續日本紀養老三年の詔を引き。此圖を以て。上古は左袵なりし證とす。笑ふ可し、左の詔。愚考あり幅巾の如き物を頭に頂き。渡唐の天神と稱する物の形に似たり。甲斐名勝志を甲州。萩原元克著見るに。彼像の說を載せさる故。彼邦より藥

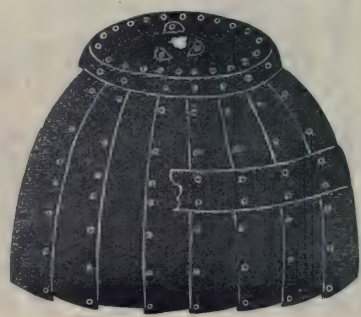
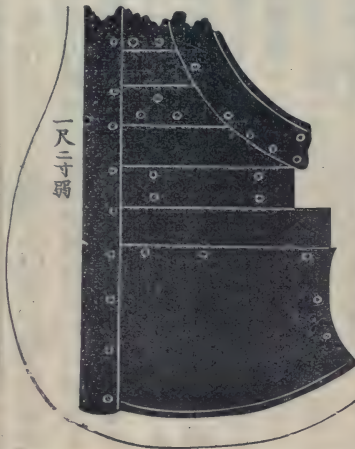
あるのみにて反(ソリ)なし。土銹(ツチサビ)骨を侵して其狀を存せず。甲冑も亦鏽積朽敗して全形を見る事を得ず。相傳ふ昔安德帝西海の難を避け給ひ終に此地にて崩(カム)御(アガ)給ふ。其廟を院社(インノヤシロ)と稱し其陵を院塚(インノツカ)と云ふ。院は院の御所の院なり 物換り星移りいつしか陵の所在を失ひしが。此冢院ノ社を去る事遠からざれば。是なん疑ふ可くも有らぬ院塚にして。何れも帝の御物な

胄之圖

高四寸二分
徑上三寸五分
同下七寸
頂上ニ穴アリ

甲之圖

此二片左右ヨリ引キ合セテ胸前ヲ掩フ物ナル可シ

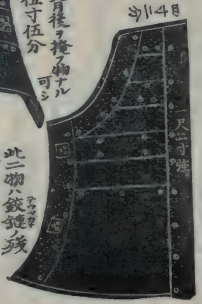
一尺二寸弱

る可しと土俗の云ひたる由を記せり。此物件。盡く何某侯の秘藏となりしを乙卯ノ秋。堂兄堀素山の亭に於て靜甫。佛庵。牛山。春海と倶に熟覽する事を得たり靜甫曰 函人春田永年字靜甫 按に古代の甲冑鐵板を釘屬(クギツケ)にしたる物を聞かず。南北朝の頃に至りて始めて鐵胴の名有り安德天皇の朝を去ること百有餘年。又世に傳ふる所の古鎧を以て是を推すに。安德帝の前二百有餘年未だ此の如き製の物ある事を聞かず。鏡の古色。刀の直制。千歳の遺韵おのづから存す。此に由りて此を見れば安德帝の陵に非ること明らけし。續日本紀に桓武天皇延暦十年六月鐵甲三十領仰下ニ諸國一とあれば。上古の武臣の冢なる可しと云へり

此一片恐クハ背後ヲ掩フ物ナル可シ
縦壹尺伍寸伍分

二尺二寸強

此二物ハ鉸鏈(テフツガヒ)ノ殘缺ナル可シ

○瓦偶人

去りぬる戊午の歳或人上野國那波郡。波志江村の相(アヒ)

西寺目代の印は。京師九條に在り。前少僧都慶俊開基 姫藩の醫官山田安貞祕藏なり。伏水の一古家より得たる物なりと云ふ。百濟寺印は。和州十市郡に在り。皇極天皇始めて造らせ玉ふ。今大安寺と云ふ 予友。北條鉉が所藏なり。何れも希世の珍玩なり

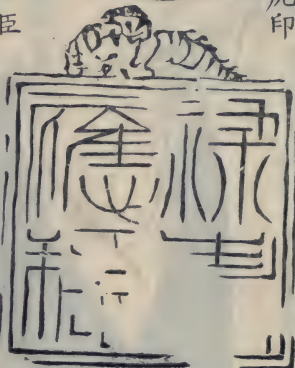
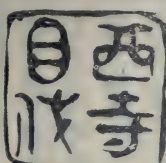
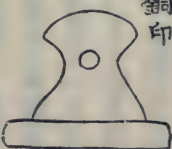
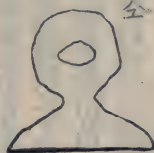
龍印

虎印

豐臣行長印章

祿壽應瑞

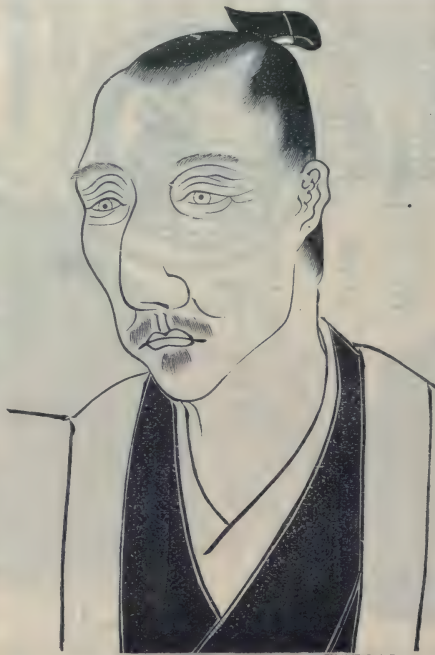
銅印

仝

○龍虎之印 附小西行長印

武田信玄の龍の印は。後藤黎春が著はせる古今沿革考に載せたるものを寫せり。未。眞物を見ざるを憾とす。虎の印は予が弆藏の北條氏政の文書に踏たるなり。眞物を去ること。わづかに一紙を間るのみ。行長の印は。浪速の中井氏祕藏の珍器なり。天野行藏なる者より印紙を得たり。蓋大明より。豐公を日本國王に封ずる時。贈れる物なりと云ふ。印材は象牙を用ふ。鈕は詳ならず

○古甲冑

寛政改元の春。日州諸縣郡。六日町と云ふ所の。彌右衞門と云ふ農夫。埭田に流を引かん爲。溝を堀ること數尺。忽ち一の古冢に逢ふ。穴は横さまに堀りたり。棺材已に朽ちたるや。一片の板を見ず。穴の四邊の赤かりしと云ふは。棺を實たる朱の色の殘れるなるべし。穴內骸骨無く。齒一枚。鑑三枚。刀身五把。鐵甲冑一具。玉數顆。俗に云。勾玉。管石と稱する物の類 其他。遺缺の物。若干を獲たり。鑑は博古圖に載する所の四乳鑑にして。予甑蠟して一本を藏む 純靑翠の如し。鏡背の花紋細きこと髮の如く。纖毫の糢糊なし。刀は長程の差

左頬上有二黒痣數點一。面似二犬形一。」太閤記家豐臣譜などには。猿面冠者。猿面郎など、稱するに。犬面と云ひたるも可咲(ヲカシキ)事なり。公の書は甚拙きを。如何にして誤り傳へけん。王子禎香祖筆記載。華州郭宛委宗昌。嘗從二逐左一。得二倭帥豐臣書一紙一。書間二行草一。古雅蒼勁有二晉唐風一。是朝鮮破後。求二其典籍一之書也。鱗介之族。能好レ古如レ此王。弘撰山史云」と記せり。又謝在杭五雜俎云。地部二 近來如二倭酋關白一。亦吳越書生。累不レ第而入レ海。使レ非下天戮中鯨鯢上。逐左之禍尚未レ艾也」

平信長像

今本。近以下七字を刪る。古本。唐本にはあり 是れ等も何を聞きたる說なるや。明末の書に倭酋關白と稱するは。みな秀吉の事なり。」此二圖遠山氏より得たり。秀吉の像は筆者の姓名を傳へず。信長の像は。右京光信公の世に在はせし時。御前にて寫したる物なりとぞ。原圖は畫史何某法印の家に在り

○石弓

軍器考云。陸奧前後十二年の戰にも。石弓を發ちてふせぎ戰ひし事。あまた所に見えて。八幡殿の薄金と云ふ冑も。その爲に碎かれて失せけり。後の世に及びては。其機械の製も詳ならぬ事になり行きしにや」とあり。飛驒守惟久が大屋惟任が孫也と云ふ畫きたる後三年合戰の畫卷物に。伴次郎傔仗助兼が。金澤の柵を攻むる時。薄金の冑を。石弓にて。打ち碎かれたる所の圖あり。塀の軒へ丸木を架し。夫を枕にして。大綱にて大石を數多吊(ツリ)さげ。塀へ附武者あれば。切りて落すやうに構へたる事。圖を見て明なり。惟久は。此時を去る事。遠からぬ世の人なれば。其圖する所徵とするに足れり

○古印

夫鐘者。震二梵苑之枯禪一。發二騷壇之之深省一者矣。南閻浮提。各以二音聲長一爲二佛事一。西郡勝地。特開二榛莽一刱二此道場一。於レ是傳レ法聊持二短疏一勸發善緣一。新鑄二鳧乳之鐘一。永扣二龍澤之月一。耳根契證者速趨二解說之門庭一。眼裏聞レ聲者。卽獲二圓通之妙果一。當時若不レ記者。後代誰得レ識哉。銘曰

未二鑄成一前　響隔二九天一　新鑄成後　福應二大千一　規模脫出　當レ空高懸　輕々撞著　墮二佛事邊一

至德二年丁卯五月初三日

大勸進小勸進の二名。及び鑄工の名は。原本のまゝ右に見す

○菅公御歌

筑紫にての御歌に

宵の間や都の空にすみもせで
心つくしのありあけの月

と云ふ御歌は。あまねく人の口にする所なり。中良日ごろ此神詠の解すべく解す可らざるを疑ひしが。近頃菅家御集を閱して。初めて眞面目を見ることを得詞意と共に下る

宵の間は都の空にすみぬらん
心つくしの有明のつき

かくありてこそ意も調ひたれ

○眞容圖

太閤朝鮮へ送られたる書に云。予當二于托胎之時一。慈母夢下日輪入中懷中上。相士曰。日光所レ及。無レ不二照監一。中略渡二朝鮮一入二大明一易二吾朝風俗一。於二四百餘州一施二政化一。」懲毖錄云。秀吉容貌矮陋。面色皺黑。無二異表一。但微覺二目光閃々射レ人。」兩朝平壤錄載。見二關白一。

豐關白像

と。或木匠は云へり名譽の彫工にたのみければ。甚五郎いと易き事なりとて。乃ち曳繩を書き添へけり。夫より其事止みにきと。江戸砂子など云ふ書にも載せたり。曳繩は後に加へたるに非ざること。圖を見て知る可し。斯る俗諺は。唐土にもありたるにや。八閩通志云。晋江有二玉髻峰一下有二畫馬石一。餘杭羅隱乞二食山下一。人侮レ之。隱乃畫二一馬於石一。毎夜出二食人禾一。追レ之則馬復入レ石。人乃禮隱乃畫レ椿繋レ馬。夜遂不レ出と云ふ事も見えたり縮圖を左に見はす

○同　鐘　銘

日本國　武州豐島郡　千束郷。　金龍山淺草寺。　洪鐘銘并序

大勸進僧都海譽
小勸進大和國道高
鑄工　和泉守經宏

と云ふ事を　宰相はだかで。虎の頭を取る。又。茶碗と云ふ事を。深山路や深山かくれて。すむ犬の一聲。など、云へると能く似たる趣向なり

○瓦

掛物の糊加減わろくして反返る瓦と云ふ。周嘉冑裝潢志の治糊の條に云。（上略）糊性有レ力。用レ之平貼不レ瓦とあり。余懷硯林に云。曰二硯瓦一者唐人語也。非三以レ瓦爲二硯。蓋研之中。必隆起如二瓦狀一。以レ不レ留レ墨爲レ貴。と云ふことも見えたり

○搔背把

堅瓠集載。俚句云。十指磊𡼏（音雷堆）光鹿禿。有レ時爬二背同一轂轆一。（搔背爬名二轂轆子一）中良按に。吾邦に所謂。麻姑の手なるべし

○萬多親王

平維章が（篠崎金吾。東海と號す）和學辨に。嵯峨天皇の皇子萬多親王に和訓が付けられねば。やはり字音にて讀むも可笑と。東海談にも再載せたり中良按に。此親王の（マンタ）御名を。茨田親王とも書きたるを見れば。萬多は。茨田の訓に字を塡めたるなり。何ぞなれば。茨の訓牟婆羅なり牟羅の反。萬となる。田の訓多なり。左すれば。萬多は。茨田の訓を。音に諧へて書きたる事知りぬべし。國名の針間を。播磨と書きたるを見ても。辨へらる可きことなり。二十歳より以前に。和漢の書。二千卷讀みたるを。動もすれば。自負する人の。爭で此に意付かざりけん

○淺草寺繪馬

武州豐島郡。金龍山淺草寺の繪馬は。東都第一の舊物なり。寬政元年。本堂修復の時。畫工狩野何某これを影寫す。本性既に盡きて。手をさゆれば。凹かになる程の古物にして。凡六七百年餘の星霜を歷たるとは見ゆるとなり。香の煙に黑みわたり。日中にも鮮かには見え難し。只牽繩と鼻革のみ髣髴（ホノカニ）見ゆ。落欵の文字さだかならず。世に古法眼の製する所なりと云ふは非なり。寬永壬午歲回祿の時。木村市兵衞なる者持ち退きたる事を。畫馬の左右二行に記せり

寬永十九年壬午二月十九日炎燒之時
武州江戶之住木村市兵衞出レ之

俗に云。此馬夜毎に出て、。近邊の作毛を荒しける故。士民等これを患へ。左甚五郎と云ふ。（左は飛驒の誤なるべし）

鼻長耳長牙長獸」とあり。是より後の書には。續古事談。砂石集。太平記などに見えたり。唐土の書に載せたる中。吾邦の俗談に似たる事を左に記す。○馮夢龍古今談概曰。有二術者一哭云。吾見爲二天狗一所レ殺矣。忽空中有二血數點一墜下。頃レ之頭足零星而墜○唐李綽尙書故實曰。章仇兼瓊鎭レ蜀日。佛寺設二大會一。百戯在レ庭。有下五歲童兒舞中竿抄上。忽有レ物。狀如二鵰鶚一。掠レ之而去。群衆大駭。因而罷レ樂。後數日。其父母見レ在二高塔之上一。梯而取レ之。則神如レ痴。久レ之方語云。是如二壁畫。飛天夜叉一者。將入二塔中一。日飼二果實一旬日方精神如レ初。○廣西通志云四十二卷池明近山地。牧童十餘人。聚而戯。或歌或舞。忽見二山牛一人一。約長二丈。面濶三尺餘。長倍レ之。披髮鳥喙。背有二一翼一。伏觀二群童爲レ樂。嬉然而笑。」天狗の一名を。胎詹と云ふにや。元伊世珍嫏嬛記曰。君子國有二鳳凰嶺一。出二天狗一。一名胎詹」と有り。唐山にも。彼者無きには有らざりけり。徠翁の天狗說は。高論にして俗に近からず。諦忍比丘が天狗名義攷は。俗にして見るに堪へず

○幽　靈

唐山にて鬼と云ひ。女の幽靈を女鬼と云ふ。萬葉集卷十六怕レ物歌

「人魂仍。佐靑有公之。但獨相有之雨夜葉。非左思所思

と詠みたれば。和訓には。ひとだまのさをなるきみとぞ云ふ可き。覆溺して死せる者の鬼を。覆舟鬼と云ふ事。海外怪妖記に見えたりと。櫟窓先生申されき。京師の畫工丸山主水應擧女鬼を畫くに名あり。予が藏する物すぐれて妙なり。何より思を構へて畫き初めたりしや。見る人毛髮竦然として竪ち。實に神畫と稱すべし

○文具神名

書籍の神を長恩と云ひ。硯の神を淬妃と云ひ。筆の神を佩阿とも化昌とも云ひ。墨の神を回氐と云ひ。紙の神を尙卿と云ふ事。嫏嬛記に載せたり

○蓋　硯　銘

路史に蘇東坡の作れる硯蓋の銘を載す

研(石)石猶在　峴(見)山已頽　姜(羊)女既去　孟(皿)子不レ來

或措大のかゝれたるは。研石猶在を。筧竹壞裂に作り。峴山已頽を。岩山崩摧に作る。小兒の謎語に皿

○節用集

環翠と云ふ人の作なる由。白石先生。安澹泊に答へられたる書中に見ゆ。中亘按に。清原業忠。環翠軒言翁と號す。嘉吉年間の人なり。環翠と云へるは是か軍器考などにも此書を引き。貝原翁の著述の書にも。引き用ひられたり。予活字の節用集一冊を得たり。慶長二年易林なる者の校正せる本なり。近世の節用とは大に異なり

○新撰字鏡

寬平四年。求法ノ沙門昌住なる者の撰なり。古書目錄に。字鏡と記せる物是ならんか。日本にて字書と云ふ物は。此書と平他字類鈔とのみなる可し。字鏡は。東都の平春海なる者。昔年京師の書儈(フルホンヤ)より。不意(ユクリナク)購ひ得たり。是ぞ此書の。再び世に出でたる始にて。今日机上に字鏡有るは。實に春海が賜なり。楫取魚彥なる者。此書は古の字鏡に次ぎて作りし故。新撰とは題せしならんと云へど。昌住が自序に其事を記さず。按に。古より曾て無所の新書なるに依りて。かくは題せしならん。目錄には新撰の二字を省きしにもあるべし

○平他字類鈔

予が藏する所の物至りて殊勝なる抄本なり。卷末に

嘉慶二年十一月廿三日於笠取之服藥所爲後見如形書寫畢

執筆釋迦院寛守

と誌せり。四百年以上の物なり。卷每に黑印を踏(サス)。印文豪古篆を用ふ。圖の如し。按に。此時唐土にては。明の太祖の洪武廿一年に當る。胡元亡びて久しからず。去れば。其比我邦にも。自ら蒙古文字をも傳へたりしにや。當時好事の者の印と見えたり附錄に。平他同訓字なる物一本あり。天地。人倫などの類を分ちて。字を聚めたる書なり。是等ぞ節用の權輿とは云ふべき

○天　狗

世に天狗と云ふ者の說。古書には見ねず。舊事紀に云。此書の僞書なる事は。古人旣に說あり。去れども。七八百年以前の物なるべしと。眞淵翁は云へり 服(スサノ)校雄尊猛氣滿二胸腹一餘。化二吐物一成二天狗神一。姬神而威强。

議なる事なり。」と云ふ說は誤なり。是は俗に曲筆と云ひて。下劣なる者の戯になす事なり。按に。書法正傳に。韓方明が執筆の五法を載す。第一執管。第二簇管。第三撮管。第四握管。第五搦管なり。空海書を韓方明に學べりと云ひ傳ふれば。此執筆の五法に通達したる故。五筆の名を得られしなるべし

○爪　判

戸令云。凡弃レ妻須レ有二七出之狀一。略 皆夫子手書弃レ之。若不レ解レ書。畫レ指爲レ記」東涯本頭書云。古記云。夫不レ解レ寫レ書。賃二他人一合レ作二牒狀一。年月日下。夫姓名注付。食指點署。」とあり。これぞ爪判(サリジヤウ)の始とは云ふべき。唐山にては手摸印とて。休書に五指の頭を印する事。水滸傳元曲選などに出でたり。木煥卿が撈海一得に詳なり

○月待日待

待は祭なり。津利の反知となるにて明なり。子待は子祭。己待は己祭。餘は推して知るべし

○由分田介

實巖と云ふ僧。濃州の邊を旅行せしとき。馬士酒店の暖簾堺屋と書きたるを見て。書法を知らぬ人の書きたるなりと云ひける故。左迄字體に難も無きに。何故笑ふかと尋ぬれば。馬士答へて云ふやう。凡界の字を書くには。由分田介とて。頭を由に作る時は。脚を分に作り。頭を田に作るときは。脚を分に作る法なり。此筆者。此法を知らずと見えて。由の頭に介の脚を書きたるは。笑ふに堪へたる事なりと云ひしと。彼僧の語りき。中良按に。壷碑に界に作り。宇都宮の塔婆に界に作れり。此外にも例あるべし

碑壷

鐵塔婆

○略　頌

今の世に落首と云ふは。略頌の事なるべし。前太平記に。されば季光。かゝる臆病の名を取りたる者ども。四五人も有りけるを。略頌に作りて。陣中に持囃(モテハヤシ)けるとかや。と云ふ事も見えたり

の讀み得ざらんが爲。古今離合の體を以て文を書し。碑頜に一圓相中。梵文の羅字を題して浮圖に換へ。羅字を觀れば。凡夫も成佛し。迷途の枉魄を救ふと。大日經九字秘譯に載す 猶も東奥隱僻の地をトして。植たるにては有りけり。土人渢亭なる者。此文を譯し。考證一篇を著はす。卷を開きて鏡校するときは。文意渙然として氷の如く釋く。實に此碑の叔孫通なる哉。渢亭の次子君卿より。拓本壹幅。考證一冊を得て。架に插む事を得たり。其註譯を撮りて左に見はす

字註

碑之圖

高 六尺余
徑 三尺

吕 隷文ノ以字 人字左邊 斟 古文道字 乀 人字右傍 豆 古文正字 刂 糺糾通擧也 劝 古文教字省畫
⊘ 篆文云字 乆 刈同 𠀉 古文丘字 抃 斷也切也 由 古文歯字 竜 古文死字 乇 相次字也

譯文

夫以人直宜從レ道。人正益擧レ教。云刈レ丘斷ニ歯砥一
吊ニ亡魂ニ元ニ前死一。以ニ後殯一矣
弘安第五天 玄黓敦䍧 仲秋彼岸里末淸俊謹拜

○孟子

孟子はいみじき書なれども。日本の神の御意に合はず。唐土より載せ來る船有れば。必覆へると云ふ事。古くより云ひ傳へたる所なり。去れば彼書の恙なく舶到する世となりても。朝廷には用ひさせ給はざりし事は。貞幹が好古日錄に詳なり。按に五雜俎卷四地部載す。倭奴亦重ニ儒書一信ニ佛法一。凡中國經書。皆以ニ重價一購レ之。獨無ニ孟子一云。有下携ニ其書一往者上。舟輙覆溺。此亦一奇事也。今本此條を删る。何の故たるを知らず。古本には存す 惜むらくは。日錄に此說を脫せり

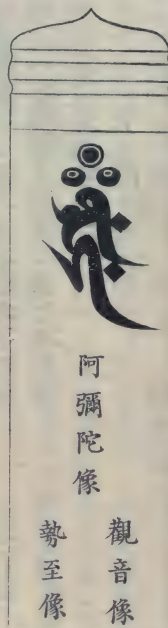
○五筆和尚

古事談云。弘法大師は筆を口にくはへ。左右の手に持ち。左右の足にはさみて眞草の 一本。眞草の上に。一間にと云ふ三字あり 一字をか、れけり。扨五筆和尚とも申すなるとかや不思

實に古色掬す可き物なり。內に殘墨一筋あり。其質南都にて製する物の如し。蠟墨にて面背の文を打ちしが。面の方は失へり。面には天德□詔の四字を隷書にて書きたり

○鐵塔婆

下野國河內郡。宇都宮の城北。芳宮山高照院清巖寺に在り。（宇津宮六郎公綱の麾下。芳賀伊賀守清原高照開基の寺なり）梵字。三尊の像。（此像堆くして打ち難し）及四句の偈。塔婆を治鑄する文。都て隱起（オキアゲ）

鐵塔婆之圖　高九寸五分　橫一尺六分　厚一寸六寸

阿彌陀像　觀音像　勢至像

八葉白蓮一肘間夫母者四恩之元也孝者百行之源也因茲當十一
炳現阿字素光■■■忌■■率都婆之治鑄彌陀之種子三尊之
禪智倶入金剛縛■■■先妣之菩提則持諸佛之照覽早出六趣之
以入如來■靜智苦域速生九品之淨臺乃至法界平等利益敬白
正和元年（壬子）八月日孝子■

にす。文の中湮滅して讀むべからざる物。十字餘あり。惜らくは造立する人の姓名を滅す。土人六郎公綱が造る所なりと云ふは。何に据りての說なるか。信じ難し。此塔婆。昔より清巖寺に建てたるに非ず。此邊の川中に。數百年來沈沒せしが。以前大水の後。土人岸の崩を築く時。無端（ハカラズ）見出したりしを。此寺へ建てたるならんとなり。素より僻鄉の事故。榻甓（イシズリ）する人も無ければ。世に知る人も少なり。字體甚俗ならず。頗る奈良人の風あり

○燕澤碑

奥州宮城郡燕澤に在り。祖元和尚。（佛光禪師と諡す）の建つる所なり。其文殆ど讀み難し。此碑を造り。遠く此地に樹てたる志趣は。弘安四年。元の世祖。我が朝を襲はんと欲し。蒙古。高句麗の兵をかたらひ。八角島（ハカタ）の澳まで寄せ來りしが。八月朔日の夜。颶風起りて。三千の艨艟を覆へしければ。千萬の兵士盡く魚鼈となり。生きて還る者。莫青。于闐。吳萬五。（俗に萬戸將軍と云ふは是なり）三人のみ。祖元は元人なり。弘安二年北條時宗の命に應じて渡抔し。鎌倉の圓覺寺に住す。此歲元兵覆溺の不祥に當れるを以て。私に一塔を造立せまく欲すれども。憚る所無きにしも有らざれば。人の白地

つれば。其夜の中に巓へ還ると事文類集に載す。陝西鳴砂山。砂州南。其砂或隨二人足一而墜。經レ宿復還二於山上一。同日の談と云ふべし。又呉越春秋云。一夕自來曰二怪山一。富士山も怪山なる可し

○和畫唐畫

皇國の畫法を傳へたるは土佐家なり。唐土の畫法を學びたるは狩野家なり。土佐家は和畫なり。狩野家は唐畫なり。今の唐畫書なる者の準据とする所は。明畫の風にして。唐山の古を學ぶ者は絶えて無しと。畫院何某法印の物語なり。去りながら。探幽出で、より。狩野家の風一變す。所謂英雄人を欺くのみ

○倭畫師

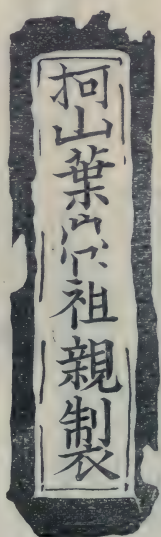
續日本紀。元正 靈龜元年五月乙巳。從六位下畫師忍勝姓。改爲二倭畫師一。やまと畫師の名。始めて此に見ゆ

○朝鮮墨

近日。古調雅君。韓墨一笏を賜ふ。其形。全く本邦の物と異なることなし。未だ磨り試みざれば。其光彩何如を知らず。所謂。麋隃なる物なるべし。青藤山人路史云。唐時高麗貢二松烟墨一。和二麋鹿膠一造。名二麋隃一と載せたり

厚二分 面背ニ切箔トマク

○頼朝公殘墨

相州鎌倉。鶴岡八幡宮に。右幕下寄附の研匣あり。

日の日社惜けれ。」と云ふ歌なり。予韓人の書きたる發句一號を藏す。影寫して下に見はす

韓人書

○清人詠歌

同書に唐土寧波府の人。長崎に在りて詠める歌を載す

中々に心なからん友よりも
庭の木草の朝夕のつゆ
朝鮮聖欽

寛政庚子歳。安房國立澤へ。南京の商船漂着す。彼難商の中。能く日本語を解する者有り（名を傳へず惜む可し）彼が詠める歌なりとて。房州の人に聞けり

いざたとふたつさの澳の荒浪の
人の心に秋の來ぬ間に

此外にも有りしが忘れたりと語りき。彼人難商ども出船の後。假小屋を取り拂ひたる踪にて拾ひたりとも。骨牌（カルタ）一枚を予に與ふ。其形圖の如し。傍に燕青と書きたるは。浪子燕青のことなる可し

○琉人詠歌

明和癸未歳來聘せる中山王の使者。讀谷山（ヨミタニサ）王子が詠歌若干首。予が撰ずる所の琉球談に載せたり。其後寛政己酉歳來聘せる義灣（ギノワン）王子が詠歌あり

蒲原の間にて富士を見て詠める
かぎり無き山を幾重かなかめ來て
それぞとしるき雪の富士の根

安らかなる詞なり。因に云。俗に富士の砂。麓に落

のことなり。今葦葉に乘りし圖を畫くは誤なり。東坡が赤壁賦にも。舟を一葦と云へり。」中良按に。此說甚當れりと云ふ可し。爰に珍しき說あり。記事珠に載す。兎床國有ニ離地草一。人以藉レ足不レ歩而行。達磨見ニ梁武一。去來自由。以レ有下此草上也其葉如レ蘆。故傳踏レ蘆渡レ江。」是も亦異聞を廣むるに足れり

○羅漢像

應眞の像など畫けば。必しも爪一枚を長く畫きて。其外の爪は長く畫くまじきことと也。釋氏要覽云。剪レ爪。爪長破戒之相。」文殊問經云。爪許レ長一指。搔レ癢故。」と云ふ經文もあればなり

○蝦蟆仙人

海蟾。姓は劉。名は喆（哲と同じと注せり）渤海の人なり。金に仕へて相位に至る。後印を納めて終南山に入り。道を學びて仙たり。今蓬頭洗足嘻笑の人。手に三足の蟾を持ちて。これを弄する形を畫き。劉海戲蟾の圖と曰ふ。直に劉海を以て名とす。世擧て其名を知る者有ること無しと。碉石剩談に載せたり

○流月流頭日

東都淺草の閻王殿に。寛延元年來聘せる。朝鮮人の書きたる扁を掲ぐ。落款に。戊辰流月朝鮮國眞狂金啓升書と有り。流月は。何月たるを知る者無し。近日刊行の秉穗錄に（尾張の人岡田挺之著す）朝鮮の南秋月。余に和する詩の後に。甲申流頭日と誌せり。人に問ふに詳ならず。後に東國通鑑を見るに。國俗以ニ六月十五日一。沐ニ髮於東流水一祓ニ除不祥一。因會飮。號ニ流頭飮一。此文にて六月十五日なる事明かなり。」と記せり。中良按に。流月は。流頭飮を行ふ月と云事にて。六月を云ふなる可し。されば唐土にて上巳の日。東流水に洗祓して禊飮する故。三月を禊月と云ふを据所とはすべき

○韓人詠歌

秉穗錄に載す。延享戊辰。來聘の朝鮮人の詠める歌

「としてなん。のんせんとんちや。とらすんぱ。ねいきるねいら。ちやんぱちんぴら」中良按ずるに。これは韓語にて詠みたるなり。譯文無きを遺憾とす。往年ある人の扇面に。鷄林の立德淵。字は仲擧なるものの。平假字にて詠歌を書きたるを見。その口氣大に熟したるものなり

「明日はまた誰なからんも知らぬ身に友ある今

褚稼軒が堅瓠集にも説あれど略しぬ

○刀　劍

按に。多知は刀劍の總稱にして。物を斷切（タチキリ）の謂なり。劍は都留藝と訓じ。刀を加太那と訓ず。古事記に都牟刈之大刀（ツムカリノタチ）とも。亦都流岐能多知ともあるは。尖りたる大刀と云ふことにて。卽諸刃の大刀を云ふなり。今も畿内の人は。尖る事をつんがりしたと云ひ。東國の俗は。ちよんがつたとも云ふ。其言の本は一也。都牟刈の牟を留に通はし。我里の二言を反せば。藝の一言となるなり。加多那は片刃名（カタハナ）の義にして。諸刃の大刀に對したる訓なり。能登守源順和名鈔云。四聲字苑云。似レ刀而兩刃曰レ劍。似レ劍而一刃曰レ刀。」とあるぞ據とはすべき

○金澤文庫

武藏國久良郡。金澤の文庫は。北條越後守貞顯が建をつる所也。佛書には朱肉。儒書には黑肉を以て印をしたり。（印文左の如し）文庫の舊地なる故。稱名寺には當時の書籍數卷を存せりとは聞けり。然れども。まゝ書賈の手に落ちたるもの有り。古物の散逸する。惜むべき事にあらずや

金澤文庫

○鍔口

佛堂の前に掛くる鍔口の事を。古くは金鼓とも云ひけるにや。京師壬生等の鍔口の銘に云

地藏院　奉鑄顯金鼓壹口
正應元丁巳　五月廿九日鑄物師大工大和權守
土師宗貞

○扶桑木

伊豫風土記に云。上古有二二大木一。一曰二桂木一。一曰二臣木一。其實曰レ椹。今桂木の朽ち殘りたる者豫州伊豫郡。森村と云ふ地の海底より出づ。又。同所に桂谷と云ふ地有り。其邊方一里程の間を堀れば。古木を得土人桂木の根なりと云ふ。二種共に同物にして。卽世に稱する扶桑木なり。淸の王漁洋が香祖筆記に。桂板とある物是なり

○蘆葉達磨

怡顏齋が詹々言云。達磨が葦に乘じて渡りしは。舟

桂林漫錄

桂川中良著

○石敢當

藤貞幹が好古小錄に云。肥後國（郡及邑の名を忘る）に立つる所の石敢當。其字大さ尺餘。其書奇古。打本希にあり。何れの人。何れの年に立てしにやとのみ有りて。碑面の字。幷に其說を記さず。近日其搨本を得。字を縮して左に見はす。石敢當の碑。薩州にては所々に在り。（多く。所巷に立つると也）木表に墨にて書きたるも有りとなり。土人其義を知る者無し。按に。姓源珠璣曰。五代劉智遠爲二晉祖押衙一。潞王從珂反。愍帝出奔遇二于衛州一。智達遣二力士石敢當一。袖二鐵鎚一侍。晉祖與二愍帝一議レ事。智遠擁入。石敢當格鬬而死。智遠盡殺二帝左右一。因燒二國璽一。石敢當生平逢レ凶化レ吉。禦レ侮防レ危。後人故凡橋路衝要之處。必以レ石刻二其形一。書二其姓字一。以捍二民居一。或贈以レ詩。曰。甲冑當年一武臣。鎭二安天下一護二居民一。捍衛道路三叉口。埋沒泥塗百戰身。銅柱承陪間二紫塞一。玉關守禦老二紅塵一。英雄來往休二相問一。見盡英雄來往人。」此說にて明なり。

石敢當

竪　三尺四寸
横　一尺三寸一分

桂林漫録目次終

桂林漫錄目次

桂林漫錄序

桂川虞臣氏。數世之刀圭。一時之英俊也。其述作富贍。皆出于洽聞淹通之資矣。或曰。人之材性之受于天也。率無大異。故長于彼者短于此。書曰。玩物喪志。如是者其于事業則必疎矣。何非刀匙是供。徒耽嗜述作也。予以爲非也。虞臣結髮。乃有父兄之教。刻苦肄業。寧有餘事邪。蓋謂不格物窮理。而取諸胸臆。則腐儒自畫者所爲。而我不欲効此。夫古人格物出意。窮理之有得焉。必筆于書。以詔後人。不欲自知也。此爲可貴焉。是以有補翼醫事者。百家之書。莫弗該覽。披閲之間。往々有奇事佳話。可裨陋識者。及四方延請治疾。東馳西走。不避遠近。則聞見所覃。既博且衆。隨獲隨錄。乃成編矣。非敢爲好奇誇博。而不欲自知也。故序次漫然。所以名漫錄也。然初無述此編之意。獨在不墜故業。則既盡心目于書籍。積十數稔之勞。乃致其績矣。此緒餘之所旁及也。今將繡梓。虞臣屢來。屬序于予不置。予既嘉其篤志。賞其服勤。且相識舊矣。不可徒已。遂陳其見聞之由。安足焜燿其窺美哉。是爲序

寛政十二年歳在庚申夏至日端譔午日書

源　忠　道

家弟虞臣述桂林漫錄。謁叙於余。余與虞臣同居數十年。除朝夕寒暄外。談醫事。話世故。忘有骨肉親弟。而覺有快意社友。今閲其漫錄。生平談話。所不及者。什得三四。余嘗立一法。宇宙之間。不問古今。不論華夷。耳貪奇聞。不厭傾聽。目看新書。不辭偸視。自南窓披繙。至村翁流傳。一是以社友待之。吾不知其爲若干萬人。其爲若干萬卷。虞臣爲其中一人。漫錄爲其中一卷。故沾々把筆爲之叙

寛政庚申五月　　法　眼　甫　周　撰

此序者。月池老兄。在于侍醫局中而所作也。此日余亦在局見之。雅致可愛。因自淨寫幷題其後以還之云

法　眼　快　菴

跋

先子以淸文敏識。著述盈室。夙馳名聲於藝林。年洎德立。忽發喘疾。爾後雖或少安。訖弗全瘳。而敎授講論。兀々窮年。未嘗少廢怠。如是者幾三十餘年矣。戊申初夏。宿痾頓熄。起臥寧淸。於是治尙書典謨。將作之解。覃思硏精。孜々搜討。駁正舊說。靡遺餘力。歲晩二典解纔成。而宿疾復動。是以其餘未竣功而止。然性好撰述。病間有所得。輒援筆著錄。上自古昔規制矩度。人物稱謂下至草野奇怪。俚諺童謠。咸有所考正焉。命曰善庵隨筆。是小說之類。特先子之緒餘耳。然小說九百。亦居九流之一焉。古賢輔之相天下也。輯邦國下民之俚謠巷歌。以察人情之邪正。以督政令之得失。而致盛大之治。則是書不特可使學者考時尙之美惡。詳世故之變遷。以資博洽而已。於國家淸明之治。亦必不少補也。書賈玉巖嘗請上梓。先子未及許之而逝。頃震與同志。校讎魯魚。爲揭示題目。以便展閱。乃敢付之。若夫二典解。及其他經說文辭。則先子苦心撰著。畢生精神所寓。在子孫。固不可不廣其傳。然卷帙浩瀚。未易遽從事也。故先刻是書。以爲之兆爾。己酉兼秋

不肖震識

以翁天祐爲轉運使。任以廈門政。三年癸卯。永
曆訃至。經猶奉正朔。稱永曆十七年。於是。清主
鋭意南征。遣人約紅夷。合兵攻島。十月。耿繼
茂李率泰滿師郎賽調。合紅夷舟。出泉州。馬得功
出同安。黃梧施琅出漳州。分道疾進。經部分死
士。令全斌禦之。全斌以二十艨艟。往來奮擊。剽
疾如飛。紅夷砲無一中者。諸軍雲翔而不敢進。得
功先至。爲全斌所殪。既而大軍大集。衆寡不敵。
退保銅山。清兵入島墮城。而兩島之民爛焉。四
年甲辰三月。改東都爲東寧府。陞天興萬年二縣
爲州。前後招納諸省兵民。以實之。然南風不競。
勢日稍蹙。猶能擁孤軍。與大清相抗者十九年。大
小數戰。殺傷相當。亦非義勇所能致哉。天和元
年辛酉正月。經卒。年三十四。猶奉永曆正朔。佩
招討大將軍印。稱世子。長子免𡒉舊爲監國。克𡒉
實非鄭氏出。本姓李。經妾竊養以爲經子。其事秘。
經不知也。克𡒉嚴毅。頗倣成功。諸弟畏之。揚
言曰。克𡒉非吾骨肉。一旦得志。吾屬無遺類矣。
經母董氏卽命收監國印。幽諸別室。諸弟夜拉殺
之。董氏立次子克塽。時年十二。六月。經母董氏
卒。越二年癸亥六月。靖海將軍施琅率舟進討。自
銅山抵澎湖。入臺灣。連克虎井桶盤諸嶼。克塽
勢不支。決計納款。八月。詣軍門降。詔赴京
師。授漢軍公。鄭氏自成功初起。迄克塽。凡三
世。三十八年而明朔亡。明末之亂。清兵百萬。乘
運亂入中國。當此時。世臣名家。屈膝乞降。薙髮
自甘。不知愧也。成功獨據孤島。存故國衣冠于
海外。奉其正朔。以恢復爲任。雖志不遂而三十
八年之久。猶保明統於不絕矣。是可不謂義乎。
又可不謂勇乎。吾乾齋公勇乎見義而爲之。故
以成功有勇有義。不愧其爲日本人。命鼎作
之傳。勒石於千里濱。以存古蹟。蓋亦奉先公賜
宅地之意也。謹作鄭將軍成功傳碑。

善庵隨筆附錄　終

騎。薄前鋒營。余新擊敗之。遂輕敵不備。縱酒爲驩。成功聞之。令張英馳讓新。猶如故。煌言與輝並亦苦諫。復不納。二十三日夜。梁北鳳由儀鳳門。穴城出。銜枚疾走。復薄新營。新不及甲。倉皇出拒。尋皆游江而走。成功聞砲聲。遣翁天祐馳援。已無及矣。二十四日。清以步兵數千。直擣中堅。成功擊敗之。廷佐以騎兵數萬。從山後出其背。夾攻之。猝不及備。遂大傷。成功急麾兵退。以舟遯。獨甘輝且戰且走。至江騎能屬者三十餘。凡所擊破。數十百人。馬蹶被執不屈死。最烈矣。二十五日。還鎭江。二十九日。成功議還島。使馬信韓英督舟師堵守江口。周全斌。黃昭。吳豪爲後殿。餘軍次第登舟而還。八月五日。至吳淞港。九日攻崇明。不下。棄而歸。十月還島。痛哭甘輝而後入曰。吾早從甘輝之言。不及此。祠忠臣廟。以輝爲第一。三年庚子五月。清命將軍達素總督李率泰。部分滿漢軍兵。大船出漳洲。小船出同安。以廣東降將。爲導。成功以陳鵬督諸部守高崎。遏同安兵。鄭泰出浯州。遏廣東兵。自勒諸部。扼海門。一日東風盛猛。一海皆動。北人不諳水性。眩暈不能成列。成功手自褰旂。引巨艦。橫擊之。清兵棄舟登圭嶼。鄭亦督攻鏖戰。斬獲無算。將軍達素還福州自殺。於是。竟成功之世。無獲島者。然成功以廈門單弱。亟思招地。適日本甲螺何斌與荷蘭酋長有隙。自臺灣走廈門見成功。盛陳臺灣富强。爲四省要害。且言可取狀。成功大喜。捩柁東甲。于是遂行。三月。泊澎湖。至鹿耳門。水淺沙膠。海道紆折。不得入。適水驟漲丈餘。大小戰艦銜尾而進。乃攻赤嵌城克之。遂圍王城。堅守不下。乃環山列營以困之。十月。清棄芝龍於柴市。鄭氏子孫在京者。無少長。皆伏誅。十二月。荷蘭窮。以十餘艘決戰。成功用火攻。盡焚之。然終無降意。成功使人告之曰。臺灣。卽先人故地。當歸於我。若珍寶。不急之物。聽汝悉載去。荷蘭乃降。成功既有臺灣。改臺灣。爲安平鎭。以赤嵌城。爲承天府。總名曰東都。設府一。曰承天。縣二。曰天興。曰萬年。寬文二年壬寅五月。成功卒。年三十九。時長子經。出守廈門。六月訃至。經自稱招討大將軍。嗣立。領兵還臺。復至廈門

動。俱以團牌。自蔽望之如堵。清兵三卻三進。鄭陣如山。遙見背後。黑烟冉冉而起。欲卻馬再衝。而鄭兵疾走如飛。突至馬前。殺人。其兵。三人一伍。一兵執團牌蔽兩人。一兵斫馬。一馬斫人。甚銳。一刀揮鐵甲軍馬爲兩段。戰良久。鄭陣中一將與白旗。一揮兵即兩開。如退避狀。有走不及者即伏于地。清兵望見謂其將遁。可以乘勢衝擊。遂馳馬直前。不虞鄭陣中。忽發一大炮。擊死千餘。餘軍驚潰。鄭兵馳上。截前五隊騎兵圍之。大殺。羅部下白先鋒。郎部下王先鋒。歿于陣。提督管效忠率滇南換班披甲數萬。分道馳之。鄭兵不動。用長刀斫馬。銳不可當。退走銀山。效忠留步兵守銀山。騎兵移當大路。成功以銀山迫府治。爲必爭之地。奪而據之。陣以待明。二十八日。效忠復分五道三疊。萃鄭疊。騎射如雨。成功令發大炮佐以金鼓。屋瓦悉震。清兵皆下馬。殊死戰。鄭兵益奮。時鄭將列一陣。效忠望見。謂麾下曰。此八卦陣也。生門向江宜從此攻入。開門而出及入。即變爲長蛇陣。擊首尾應。擊尾首應。遂圍效忠。效忠見軍不利。負旗而遁。效忠馳至城壕。鄭兵飛走隨至。諸軍皆散。效忠出兵四千。僅存百四十八。嘆曰。吾自滿州入中國。身經十七戰。未有若此一陣者。常州主鎮兵三百。存三十七人。高謙五百。存八十騎。入鎮江。登城閉守。效忠走南京。而蔣國柱走丹陽。鎮江守將高謙知府戴可進等降。成功登峴山。大饗士卒。令全斌及黃昭等守鎮江。澄世署道事。屬邑皆下。甘輝曰。瓜鎮。爲南比咽喉。但須坐鎮於此。斷瓜洲。則山東之師不下。據北固。則兩浙之路不通。南都可不勞而定矣。不聽。竟薄金陵。郎廷佐聞鄭兵將至。將城外屋。悉行燒柝。近城十里。居民俱令入坂。斂兵閉守。七月八日鄭兵至。結營白土山距南京儀鳳門七里。以黃安總督水師守三叉河口。成功由儀鳳門登陸。令諸舟一字列斫于江東門外。親率騎兵。歷城下。度營壘。安設大砲地雷密雲布梯。復造木柵。欲以久困之。成功與五親軍。屯岳廟山。留前鋒鎮中衝鎮。屯獅子山。甘輝進曰。夫兵貴先聲。彼衆我寡。及其熸且未定。其勢宜拔。若彼集禦固。緩難圖也。君必悔之不聽。退而告人曰。吾不復此矣。十七日。清兵千

不レ聽。成功議曰。瓜鎭。爲二金陵門戶一。須三先破二之於レ是。率レ兵入寇。甲士凡十七萬。五萬習二水戰一。五萬習二騎射一。五萬習二步擊一。以二萬人一爲二往來策應一。以二萬人一爲二鐵人一。鐵人者。披二鐵甲一。繪二朱碧彪文一。聳立陣レ前。砍二馬足一。最堅銳。侍郎張煌言爲二監軍一。六月初一至二初三日一。蔽レ江而上。初八日。至二丹徒一。十三日泊二巫山一。十五日。先以二吉服一祭二大祖一。次以二鎬服一祭二先帝一。祭畢。大呼二高皇一者三。將士及諸軍。俱泣下。鎭江至二瓜洲一。江面十里。清用二巨木一築二長壩一。截二斷江流一。廣三丈。覆以レ泥。可レ馳レ馬左右木柵有レ穴。可レ射。砲石盤銃。星列二江心一。用二圍尺大索一。牽二接木壩兩端一。以拒二海舟一。操江蔣國柱總兵管效忠。副總高謙。設レ兵嚴守二鎭江一。又于二談家洲一。伏二兵二千一。列二砲于上一。新操江朱衣助。六月十三日到レ任。守二瓜洲一。十五日。海舟二千三百。泊二焦山一。先遣二四舟一。揚レ帆而上。清兵望見。大發二砲石一。海舟近レ覇。從容復下。清兵注二射砲聲一。晝夜不レ絕。凡發レ炮五日。不レ傷二一艘一。海舟既上復下。循環數次。一以誘二清兵炮矢一。二以二水兵一藏レ內。近レ覇即入レ水斫斷。十六日。度二砲將レ盡。悉レ舟過二鎭江一。莫レ有二

遏者一。十七日。上二瓜洲一。從二後寨一殺入。清兵出禦。蓋東門外有二高岸一。騎布列。鄭兵立二兩旁水田中一。斫二馬足一。大敗レ之。鄭將劉某乘レ勝。直追入二瓜洲城一。大殺。將三沿レ江砲一移向二談家洲一擊レ之。兵立札不レ定。洲有二海兵二千一。忽自二江中一浮上。持二長刀一。亂斫。洲上兵走。海舟以二千人一。追殺復移二洲砲一擊二鎭江一。告二急于南京一。南京發二兵洪承疇麾下羅將軍鐵騎千人一赴援。其兵鐵甲如レ雪大言曰。這些海賊。不レ彀二吾殺一。欲二入レ江剿絕一。常州王總鎭。無錫守備張科。江陰守備德某。羅軍將管提督等兵。共九隊。凡萬五千人。而馬居レ半。京軍橋躁。急欲二與戰一。而海舟忽上忽下。清兵駐レ南則泊二于北一。駐レ北則泊二于南一。佯爲二畏避一以誘レ之。清兵隨走。三日夜不レ息。露二立江邊一甚疲。鄭兵前一隊。五色旗。第二隊。蜈蚣旗。第三隊。狩烟。第四隊。倭銃。第五隊。大刀。末後又另用二一人一敲レ鼓。頭上插二一旛一。如鼓聲緩。則兵行亦緩。鼓聲急。則兵行亦急。然多二步卒一。清兵甚輕レ之。凡騎兵遇二步卒一。反退二數丈一加レ鞭突前。敵陣稍動。卽乘レ勢殺入。步卒自相踐陷。騎兵因而蹂躙。以レ此常勝。至レ是亦用二此法一。馳レ騎突前。鄭兵嚴レ陣當レ之。屹然不レ

唯々而已。於是麾軍過聯船。諸皆讋伏。莫敢動。聯丞竄入金門。愬於彩。彩知力不敵。出避之。成功幷聯軍。兵勢日盛。海寇之在東南者。盡歸心焉。承應元年壬辰八月。初芝龍在彼。有子五人。世恩。世蔭。世襲。世默皆成功弟也。芝龍入京。惟世忠從焉。于是。芝龍以其祖父墳墓。俱在福建。請留繼母及弟芝豹子世恩各一人。在彼。其妻妾及諸子。搬取來京。詔允所請。仍官在京一子世忠。爲二等侍衞。命芝龍。書諭成功及鴻逵降。許赦罪授官。並聽駐原地方。防勦浙閩廣東寇往來洋船。令管理。二年癸巳五月。清封芝龍同安侯。成功澄海公。鴻逵奉化伯。芝豹在都督。芝豹隨母入京。成功不受封。寇掠如故。三年甲午六月。和碩鄭親王濟爾哈朗等議。鄭芝龍請以次子世忠與成功誼切手足。若今與使臣同到成功處。諭以君恩。責以父命。巽言婉導。彼必欣然向化。應從所請。令世忠與使臣偕往可也。從之。十月復遣葉阿二滿員議撫。成功不從。葉阿歸報。遂將芝龍芝豹等。俱就寧古塔。正法。成功不顧。十二月。寇漳州。十邑皆下。略泉州。不能破而還。時鄭氏兵勢方盛。乃爲所部。爲七十二鎭。立儲賢館儲材館察言司賓客司。設印局軍器諸局。令六官分理庶事。以潘賡昌。爲吏戶官。陳寶鑰爲禮官。張光啓爲兵官。程應潘爲刑官。馮澄世爲工官。改中左所。爲思明州。以鄭會知州事。奉監國魯王盧溪王寧靖王居金門。凡諸宗室頗給贍之。凡有所便宜封拜。輙朝服北向。遙拜帝座。而焚之。明曆元乙未三月。福建巡撫修國器。獲鄭芝龍與其弟鴻逵子成功交通私書。以上之。十二月。芝龍僕尹大器。首其父子交通狀。敕芝龍自獄中以手書招成功。成功不降。議政王貝勒大臣會議。擬寧古塔地方。近江海。成功賊船。無所不至。芝龍禁後。恐有疎虞。應各用鐵鍊三條。手足扭鐐。命章京兵丁。嚴加看守。從之。永曆遣周金湯航海。晉成功延平郡王。成功乃議。大擧入寇金陵。戊戌七月。以黃廷爲前提督。洪旭爲兵官。鄭泰爲戶官留守。部署諸將。遂引舟師。抵浙江。攻陷樂淸等邑。次羊山。爲暴颶。漂沒八千餘人。幼子從軍。亦溺焉。泊瀛洲理檝。廢然返。己亥五月十三日。成功至崇明。諸將請先取崇明爲老營。

既至此。何愛一死。登城樓自刎。投水死。成功聞之。大號慟不自勝。是時。芝龍尙保安平。軍容烜赫。水陸畢備。外雖示武。而內已納欵。但恐以立福王爲罪。故猶豫未敢迎清師。貝勒王博洛。仍遣芝龍所最善郭必昌而招之。且啗以閩粵總督。芝龍又自恃譎。先撤關兵。於彼有功。芝龍總兵。必可得也。召成功等計事。成功泣諫曰。父敎子以忠。不聞以貳。且北朝何信之有。弟姪亦不願降。皆勸芝龍入海曰。魚不可脫淵。不聽。遂進降表。十一月十五日。至福州。見博洛。博洛握手甚歡。折矢爲誓。命酒痛飮三日。夜半忽拔營。挾以北矣。從者五百人。分隷各旗。莫能相見。博洛召成功。成功不至。芝龍既行。鴻逵鄭彩。率所部入海。芝豹奉母居安平。成功雖遇主列爵。未嘗預兵事。意氣容貌。猶儒生也。既遭國難。諫父不聽。且痛母死非命。悲歌慷慨。謀起義兵。詣孔廟。焚所著儒服。拜先師。仰天曰。昔爲孺子。今爲孤臣。向背去留。各有所用。謹謝儒服。庶先師昭鑒。高揖而去。所善陳輝。張進。施琅。施顯。陳霸。洪旭等。願從者九十餘人。

乘二巨艦。斷纜行。收兵南澳。得數千人。文移稱忠孝伯征討大將軍罪臣國姓。十月。永明王卽位于肇慶。改元永曆。四年丁亥。成功遙奉永曆朔。提師自南澳歸。泊鼓浪嶼。嶼與厦門。隔一帶水。厦門金門。俱隷南安。爲兩島。時鄭彩據厦門。鄭聯據金門。互相犄角。八月成功與鴻逵合攻泉州。敗提督趙國佐于桃花山。追至城下。副將王進。自漳赴援。成功回島。鴻逵艤舟泉港。慶安元年戊子三月。成功攻同安。復侵泉州。八月。清授芝龍爲一等精奇尼哈番。二年己丑正月。成功募兵于銅山。三月。令施琅。楊才。黃廷柯。宸極。康明。張英等攻漳浦。尋下雲霄。抵詔安。屯分水關。令黃廷柯等守盤陀嶺。清兵來攻。宸極死之。七月。永曆封成功延平公。二年庚寅八月。潮人黃海如陣斌。邀成功入潮。城守不可下。遣甘輝殺賊黃亮釆於峽山。敗粵東郤提督于潮陽。兵郤。乃乘流揚帆。直至厦門。成功密與部下謀曰。兩島吾家臥榻側之。豈容人鼾睡。時方中秋。聯醉臥萬石巖。不迎。詰朝醉醒。出見成功。成功曰。兄能以一軍見假乎。未及對。諸執銳者前矣。聯

弟七左衞門。冒母氏。移住長崎。時鴻逵鄭彩兵敗南還。與閣部黃道周等。擁立唐王于福建。改元隆武。封芝龍。爲平鹵侯。鴻逵定西侯。俱加太師。成功年二十二。芝龍携之陛見。丰釆掩映。奕々輝人。帝奇之。撫其背曰。惜無一女配卿。卿當盡忠吾家。無相忘也。賜姓朱。改名成功。封御營中軍都督。賜尙方劍。儀同駙馬。自是。中外稱國姓而不名。然芝龍以擁立非己意。日與文臣忤。又度帝必不能偏安一偶。時洪承疇招撫江南。黃熙胤招撫福建。皆晉江人。與芝龍同里。通聲問。密謀歸欵。成功知而患之。帝亦知芝龍不可特。無以制之。一日成功見帝愁坐。胸塞口咽。跪奏曰。陛下鬱々不樂。得無以臣父有異志耶。臣受國厚恩。義無反顧。請以死扞陛下矣。及兩浙敗。關門不戒。廷臣屢請命芝龍出關。芝龍亦知不出關。無以厭衆心。乃分兵爲二。一軍以鴻逵爲大元帥。出浙東。一軍鄭彩爲副元帥。出江右。帝築壇于郊送之。既出關。上疏稱餉缺不行。逗留月餘。帝下詔責曰。偷畏縮不前。自有國法。乃不得已。踰關行四五百里。乃疏餉絕。留住如故。十二月。帝決意親征。二十九日。駐建寧。二年丙戌三月。幸延平府。五月清兵渡錢塘。六月。封成功忠孝伯。楚撫何騰蛟。江右楊廷麟。皆有疏迎帝。帝意欲住江右。猶豫未決。是時。清兵渡江。錢塘不守。芝龍微聞之。因疏稱海寇猖至。須邀備禦。今三關餉取之臣。臣取之海。無海則無家。臣非往征不可。拜表即行。帝手勅留之。中使奉勅至河。而芝龍飛帆。已過安平矣。守關將施福。聲言缺餉。盡撤兵還安平。自芝龍去後。師決計幸贛。芝龍使軍民數萬人遮道號呼。擁駕不得行。芝龍因具表請回天興。帝不得已駐劄延平。芝龍百計阻之。欲留帝以自重焉。八月。清兵已出詔州抵仙霞關。仙霞嶺二百里。無一守兵。無一敵兵。如入無人之境焉。二十一日。駕發延平。二十七日入汀洲。二十八日。清兵奄至。帝崩于福州。九月二十八日。清兵至泉州。先是。芝豹至泉州。閉城門。大索餉皆計鄉紳家財。勒取。不應。立梟之。抵幕得數萬金。俄而清兵至。芝豹兵潰。芝豹奔回安平。成功母田川氏。在泉州城不獨退曰。事

善庵隨筆附錄

鄭將軍成功傳碑

吾大東日本之人。以武勇勝於萬國世所知也。夫以匹夫馳勇名於西洋。耀武威於天下者。若濱田彌兵衞兄弟於臺灣。山田仁左衞門於暹羅。勇則勇矣。義不知也。其併勇與義而有之。吾鄭將軍成功。蓋其人乎。成功。初名森。小字福松。父芝龍。後號飛黃將軍。泉州南安縣人。祖翔宇。曾祖壽。寰世府掾。芝龍兄弟四人。芝龍卽其長。次芝虎。次鴻逵。次芝豹。初芝龍以妾故。失愛於父。父怒逐之。芝龍亡奔一洋船。父猶罵言。尋出殺之。洋船又刻時掛帆。乃懇巨商。帶往日本。時年十八。來艘返棹。芝龍留在平戶。再一年。前艘又至。及其返。芝龍亦附歸焉。至中途。爲海盜所刧。海盜卽顏思齊。芝龍。海澂人。稱日本甲螺。率我邊民。占臺灣地。與群盜分十寨保焉。思齊爲之魁。至是。入思齊黨。一日一寨失主。芝龍乃請一寨。且曰。若其貨物乞衆力。爲我放一洋。獲之有無多寡。皆我之命。思齊許之。衆亦欣然相佐。刧四艘。貨物皆自暹羅來者。每艘約二千餘金。盡以畀芝龍。於是芝龍之富。冠九寨矣。及思齊死。寨無所統。衆俱推芝龍。爲魁。時則通家耗。輦金還家。置蘇杭細軟兩京大內寶玩。販海外諸國。又屢往來平戶。吾先公賜宅地於千里濱。仍娶田川氏。寬永元年七月二十三日。生成功。後又生七左衞門。於是芝龍寄貨與妻孥。以平戶爲蛟窟之地。五年戊辰六月。明兵部議招芝龍。七月。芝龍率所部降于督師熊文燦。以其平廣盜征生黎焚荷蘭收劉香之功。任都督。從是以軍國事劇。不復得至日本矣。成功年已七歲。芝龍請母子渡海者數矣。官許遣之。母以弟猶幼少。不肯俱往。成功風儀整秀。倜儻有大志。爲南安生員。讀書穎敏。不治章句。先輩王觀光。一見謂其父曰。是兒英物。非而所及也。年十五。入南京大學。補弟子員。試高等。食氣二十人中。聞有術士。視之驚曰。此奇男子。骨相非凡。命世雄才。非科甲者。成功每東向而望其母。又屢致書以迎之。二年乙酉四月十五日。母自長崎渡海。

今此に言ふ氣狐は野狐の人を蠱惑して祟を作し。人身に憑りて食を求め。及道士の驅役する。おさき狐なる者にして。空狐は卽天狗なり。彼此併攷すれば。天狗の狐たること疑ふべきなし

附西北域記に狐之族七。蒙古產者二。毛黃而長曰二草狐一。短而黠曰二夜沙狐一。沙狐賺曰二天馬皮一。頷曰二烏雲豹一。其曰二金雲豹一者。西產也。俄羅斯產者五。俄黑而毫白曰二元狐一。其次身黵（音端。黃黑毫也）而賺黑曰二刀猲一。又其次身皴（音炎。黃色也）而賺青曰二火狐一。此外。又有白狐灰狐一。土人曰。是㺐（宜。狐聲也）㺐者。年老作レ妖。作冠二枯顱一。衣二槲葉一。幻二人形一。爲レ害甚大。又曰。老而妖者。名二犰狐一。亦名二靈狐一。似レ猫而黑。蓋別一種云。

夜譚隨錄に云。狐之類不レ一。有二草狐。沙狐。玄狐。火狐。白狐。灰狐。雲狐之別一。或曰。是の㺐㺐者年老則妖作云々。或曰。老而妖者。名二犰狐一。又名二靈狐一。似レ猫而黑。北地多有レ之。蓋別一種云。（如是我聞。亦云。凡狐皆可二以修一レ道。而最靈者。曰二犰狐一）とありて。狐の類多しといへども。草狐は毛黃にして長く常の野狐にして。沙狐以下は物色を以て名を異にするのみ。たゞ犰狐は別の一種にて。此方に云ふ管狐の樣なれど。似レ猫而黑とあれば。亦自一種なり。管狐は大さ鼬鼠ほどありて。目竪に付く。其他は總て野狐に同じ。但毛扶疎として。蒙戎たらざるなり。管狐を驅役するの術。竹筒の管（竈に所レ用の火吹竹に比すれば少し短く。前後無レ節。吹きぬきのたけづゝといふ）を持して。呪文を誦すれば。狐忽ち管中に在りて所レ問のことを一々告げ知らす。これはもと修驗の道士。勤行精修の後に。金峰山よりして授かる所と云ふ。故に管狐の名あり。此狐駿遠三の北邊山寄の地に多し。關東にては上毛下毛最多し。上毛の尾崎村に至りては。一村この狐を畜はだる家なし。因りて又尾崎狐とも云ふ。浪蹟錄には。武州大崎といふ。いづれか是なる

善庵隨筆 終

のあまくだりたらんも。かくやとおぼえさせ給ひて。彌々しのびあへさせ給はで。つよく取りとゞめさせ給ひけるを。女房あらく引きはなちて。とほりぬと覺しめしける程に。そのかみきれにけり。かたはらいたくあさましくおぼしめす程に。御夢さめぬ。うつゝに御手にものゝかにして有るを御覽じければ。狐の尾なりけり。不思議に覺しめして。大權坊を召してそのやうを仰せられければ。さればこそ申し候つれ。いかに空しかるまじく候。年比嚴重の驗多く候ひつれ共。是程にあらたなる事はいまだ候はず。御望の事明日午刻に。かならず叶ひ候べし。此上は流罪の事は候間敷やと狂ひ申して出でにけり。かつ〳〵とて女房の裝束一襲かつけ給ひけり。申すが如く。次日午刻に御よろこびの事公家より申されたりけるとぞ。攝籙の一番の御まつりごとに。大權をば。有職に被成けり。件のいき尾はきよきものへ入れて。ふかくをさめけり。やがて其法を習はせ給ひて。さしたる御望などの有りけるには。みづから行はせ給ひけり。かならず驗ありけるとぞ。妙音院の護法殿に收められける。いとやぬらん。其いき尾の外も。又別の御本尊有りけるとかや。花園のおとゝの御跡冷泉東洞院に。御わたり有りし時も。ほこらをかまへていはゝれたりけり。福天神とて。其社當時もおはしますめりと。あるにて推知すべし

下總の阿波大杉殿などの眞影を見るに。少しづゝの不同はあれども。小天狗の狐に跨る像なれば。天狗は狐に緣故なきに非ずと思ひしに。日本書紀舒明紀云。九年春二月丙辰朔戊寅。大星從レ東流レ西。便有レ音似レ雷。時人曰二流星之音一。亦曰二地雷一。於レ是僧旻僧曰。非二流星一是天狗(アマキツネ)也。其吠似レ雷に天狗の字をあまつきつねと。邦訓を施す。左すれば天狗を天狐と云ふは。必しも余が創說に非ずして。古人早くこの說ありて。きつねとは訓ぜしならん。頃日皆川淇園の有斐齋劄記を閱するに。野狐最も鈍。其次氣狐。其次空狐。其次天狐。氣狐以上皆已無二其形一。而空狐其靈變更倍二於氣狐一。至二天狐一則神化不レ可レ測。人有下爲レ物所レ役頃刻行二千里外一者上。乃皆空狐之所レ爲。大抵離レ地七丈五尺。彼乃得二攝レ之行一。如二天狐一乃不二復爲二人害一。此說善幻者話云とあり。

も輪番持なり。最乘寺は二十五个寺にて。一年づつ一寺輪番す。昔し道了の眞影は。小天狗の狐に跨る圖なりしを。美濃龍泰寺某和尚輪番の頃。かく道德いみじく。靈驗いちじるくおはしまし。魔形を具するは。然るべからずとて。明覺道了和尚と。和尙號を追贈し。眞影を改め。今の銅印を用ふることになりしとぞ。今玆辛丑を距ること。六十餘年前のことなりと聞く

信濃の飯綱權現

甲斐郡內。上吉田村。富士山神職。小猿。伊豫が家に。古來より所ゝ傳の道了飯綱淺間の三銅像あり。飯綱も道了と同じく。小天狗の狐に跨りたる像也と云ふ。因りて思ふに。護園󠄁遺編に。いづなは信州の山名也。いたゞきに天狗の祠ある故に。山の名を以て。其法に名づく。其法は天竺の荼耆尼天の法なり。法を行ふに。抹香をたけば行はれぬと。この荼耆尼天の法も。狐を驅役するものにや。古今、聞集に。知足院殿何事にてか。さしたる御のぞみ。ふかゝりける事侍けり。御歎のあまり。大權坊といふ効驗の僧の有りけるに。咤祇尼の法を行はせられけり。日限をさしてしるしある事なりけり。せめての懇切のあまりに件の僧を召して仰せ合せられけるに。僧の申しけるは。此法いまだ疵つかず候。七日が中にしるし有るべし。若し七日に猶しるしなくば。今七日をのべらるべく候や。それにかなはずは。すみやかに流罪に行はれ候へかしと。きらびやかに申しけり。仍供物以下の事注進に任せて給ひてけり。初おこなふに七日に驗なし。その時すでに七日に驗なし。いかにと仰せられければ。道場を見せらるべく候や。たのもしき驗候やと申しければ則。人をつかはして。見せられければ。狐一疋來り供物等をくひけり。更に人におそるゝ事なし。扨其後七日のべ行はるるにまんずる日。知足院殿御晝ね有りけるに。容貌美麗なる女房。御枕をとほりけり。そのかみかさねの。きぬのすそよりも。三尺計あまりたりけり。あまりにうつくしうえんにおぼしけるまゝに。そのかみにとりつかせ給ひぬ。女房見かへりてさまあしう。いかにかくはと申しける聲。けはひかほのやう。すべて此世のたぐひにあらず。天人

となりたり。廣大なる地面の上にて。何の損益ありて。一分を加へ給ふの理あらんや。六尺一歩なればこそ。今に檢地帳奥書に。六尺壹歩の間竿を以て。壹反三百歩の積。御檢地相極と書き來ることとなるを。或人の六尺一分と書きて。指し出だし、ことの有りしに。該府にて壹歩と書く。仕來の法に相違するとて。歩の字に書き直し。被二申付一之由。故に縣令も其跟官も。何の故とも知らず。只此歩の字のみに限り。分の字に書くまじきことの樣に心得。堅く先規を守ることにぞ有りける。若し容易に分の字に書き改めなば。今日に在りて。誰か六尺一歩の歩なることを知るべけんや

○此方に天狗と云へるもの。西土の天狗と。同名異物なり。混稱すべからず。世に天狗の所爲と云ふを見るに。變幻自在不可思議なることのみにして。何物と名狀し難く。魑魅魍魎に比すれば。巧なること多くして。其人を蠱惑愚弄する摸樣。大に狐に髣髴たり。因りて思ふに。太平廣記。其外歷代の小說類に多く狐妖のことを載す。狐にも天狐白狐玄狐とて。各々年數を以て差別あり。天狐は其最古き狐にて。精神のみ存在して形はなし。故に物に托して。種々の奇幻を爲し。一瞬千里。風の如く往來す。此方の天狗も。或は僧。或は山伏など。種々に形を幻し。奇變の巧を以て。人を蠱惑する。一に天狐に同じ。もしや天狗は。天狐にてはなきや。世に天狗と云ひ傳ふる。小田原の道了權現

永平寺六代通幻寂靈大和尙の弟子了菴慧明。大和尙に隨從せし。務從(テンス)に道了と云ふ。大力僧あり。平生の行迹に。不思議のこと、も多く。了菴和尙兼て其凡人ならざるを察知し。事に托して試み給ふことなどありしが。遂に生ながら小天狗と成れりと云ひ傳ふ。小田原記卷二云。永祿三年八月。足柄の城御普請。御巡見の爲に氏康御馬を出ださる御歸りに。關本の最乘寺へ御參詣あり。當寺の開山了菴和尙。此地に山居ありしを。大森寄栖庵常に信じ。此寺を建立しける。されば關東奥州まで。此和尙の法孫として。諸寺悉く當寺の住持を勤め。一年替りに輪番なりと。今案ずるに。了菴和尙最乘寺を開基せしよりして。其後大慈院報恩院を逐々に開基して。今は三山となり。又三山と

されておはし、が。歸京をゆるされむと請ひ給ひし狀に云。嗚呼昔侍二鳳闕一。已爲二羽翼之臣一。今在二馬州一。長爲二芻蕘之士一云々。又今は濃州と書くを。美州と書きたるにや。大江匡衡朝臣の美濃守源賴光朝臣に報ずる書の宛所に。謹上美州刺史硯下と見えたり

これのみならず。弘法大師正傳卷二に載する。贈二陸奥德一菩薩一書に。陸州德一菩薩法前謹空とあるは。今いふ奥州なり。日蓮の錄內御書と云へる書には。今いふ房州を安州日蓮と書き。鹽尼に小鼻廣林の張州年中行事と云ふ書を引用す。今尾州といふなるを張州と書けり。これにて其定稱なきことを推知すべし。されど今は關東にて。官にも州の稱を用ひ給ふ樣に思はるれど。流俗に從ひて稱せらるゝにて。碇と制度に建ちしにはあらじ

○西土の人は瑣細の事迄も何くれとなく記載し。餘す所なき樣なれど。文に過ぎて反りて實を失ふ弊あり。邦俗は文足らずして傳ふべきをも傳へざる弊ありといへども。朴實善を守るより。反りて古を存し。考證の資けとなることあるなり。今一事を擧げていはゞ。吾邦古へ唐制に倣ひ。尺に大小の二樣あり。大尺の一步は五尺。小尺の一步は六尺。これ五尺六尺と。名を異にする迄にて。大尺の五尺は。小尺の六尺。小尺の六尺は。大尺の五尺にて。度の長短に變りはなし。たゞ地を度る尺杖は。大尺の五尺を用ふることにして。雜令に凡度レ地五尺を爲レ步とありて。定制の樣に思はるゝなれど。時に臨みて。小尺を用ふることもあるにや。令集解に。和銅六年二月十九日の格を引きて。其度レ地以二六尺一爲レ步とも見えたれば。當時大小の二樣。とり交ぜ通用する事なりし。御家にては。紛はしき故を以てにや。慶長年中より。概して小尺の六尺を用ふるを制度と爲し給ひぬれど。昔より大尺の五尺を以て。檢地せし所は。別に檢地帳を書き改むること無きも。其儘にて差し置かれ。若し新に檢地するときは。必ず御定法通り。六尺一步の間竿を用ふるにぞ有りける。然るを地方懸りの有司文字無きゆゑ。一步を一分と心得違ひし。間竿に一分の有餘を加へ。一間六尺一分とし。二間竿にして。一丈二尺二分を用ひしより。遂には御規定の樣に心得今日に至りては。六尺一分。天下の制度

日本紀に。大藏省御書の中に。肥人の字六七枚許りあり。先帝令レ寫給ニ其字ニ。皆用ニ假名ニ。或其字未レ明乃川等字明見レ之と云へり。今考ふるに。乃川の二字。片假名の外に存するものなし。是れ肥人書は。片假名なる證據なり。故に是を肥人書と云ふなれば。萬葉集十一卷に。肥人を高麗(こまひと)と釋せり。肥と高麗とは。南北一帶の海を隔つるのみにて。皇國人の高麗に住し。高麗人の皇國に歸化在住のもの多し。高麗國にては。唐國と久しく朝聘往來して。上下とも唐國の文字を知りたるもの多ければ。歸化の人の中にて。唐國の字を五十音に製作しに。日用に便利せんとて。敎へたるなるべし。去りながら。夫は國音五十字に寫し取るのみにて。字に義のなきことは。西洋のあべせてと一樣なり。又古來より相傳ふる說に。片假名は皇國の楷書。薩人書は皇國の草書と云へる說のなきとは云ふべからず。薩人書は國音を四十七字に寫し取り。今の平假名なるべし。義は肥人書と同用にして。字に義は無りしを。吉備大臣五十音を。唇舌牙齒喉の五音に分ち。十行にして。輕重淸濁。天下の字音。縱橫錯綜して。盡さゞることなき樣になし玉ふは。吉備公の可レ謂ニ神智ニいろはも。弘法大師四十七字の國字を以て長歌となし。いろはにほへとちりぬるを。わかよたれそつねならむ。うゐのおくやまけふこえて。あさきゆめみしゑひもせすと。誦讀に便ならしむるは。大師の所爲なり。是をたとへば唐國にて梁武帝の頃。王義之の書。一字或は二字。錯雜混亂して。次序なかりしを。周興嗣に命ぜられ。次韵せしめて。千字文となし。人をして誦讀し易からしむ。是と同樣の例なり

○吾六十六箇國を西土の州に擬して。武藏を武州攝津を攝州といふ類は。皆文人一時の隨筆に出で、其稱を雅にし唐めかさんとする迄にして。刺史牧伯など、同じくもとより官より建てられし。定稱にあらざれば。六國史は勿論。正史等に。すべて此稱なしされば文人の稱する所も。己が隨意一樣ならざる也。故に今但馬を但州といふなるを。馬州と稱し。美濃を濃州といふなるを。美州と稱せしは。夏山雜談に。本朝文粹を。引きて云へり

夏山雜談卷五に。今は但州と書を。昔は馬州と書きたるにや。本朝文粹に。山井中納言但馬國に流

一膳の價十六文にあらざるを知るべし

かく二八の調合にては。溫飩に近く。蕎麥たる詮なければとて。新に蒸蕎麥といふものを工夫す。其製法は蕎麥粉を冷水にて。よく溲合せ。麪棒にて按揃げ。ふたゝび棒に捲きて連に打つこと數遍熨して薄片となるを。剉して線となし。沸湯に入れて煠上げ冷水にて洗ひ。ふたゝび蒸籠に入れ。蒸して露氣なからしめ。煎和の醬油を以て。大根の絞汁。山葵海苔等を配して食ふ。西土の河漏はいかゞ製するか。此方の蒸麥とは同じからざるやうに思はる。此方にては。溫飩も蕎麥切も。もと菓子に屬して。菓子屋にては。船切重諾にして。賣りしゆゑに。菓子屋の杜氏は。必らず蕎麥を打つ筈のものなり。今にこれを以て。杜氏の巧拙を試るは。昔の餘風の存せるなるよし聞き及べり。寛文の頃。けんどん溫飩。盛に行はれしゆゑ。蕎麥も溫飩にならひて。けんどんにせしなり。けんどんとは。俗に生質溫和にして。財利にこせつかざる者を。おんとうといふ。おんとうとうんどんと。音の近きを以て。此うんどんは。うんどんならで。けんどんなりといふ意にて。一杯盛切にして。かはりを出さず。給使もせざるより。けんどんとんはいひし。これを便利なりとて賞翫し。下々の者とりはやし。盛に行はれしより。溫飩屋蕎麥屋などいふもの遂々に出來ぬ。故に昔々物語に。寛文辰年四年けんどんそば切といふ物出來て。下々買ひ喰ふ。貴人には喰ふ者なしとありて。用捨箱に。昔は溫飩行はれて。溫飩の旁に蕎麥切を賣る。今は蕎麥切盛になりて。其傍に溫飩を賣る。けんどん屋といふは。寛文中よりあれども。蕎麥屋といふは。近く享保の頃までもなしといへり

○中古小學問の有りしは。民間便用の爲に。皇國人の字音五十字を。唐國の楷書點畫少く或は點畫の中にて。點畫を省き。畫少く書き易き樣に制し。國音の五十音を寫し取り。譬へば天をあめ。地をつち。凡山海風雨の類文字有らしめ。是を肥人書と名く。仁和寺書目に肥人書五卷とあり。蓋し肥の國に古より傳ふる所の文字なり。纔に五卷にて天下の字音盡すべからずと雖も。是を以て例せば。皇國の言葉は盡すべし。今の字引節用の如く。只義理に拘らず。文字の連續を敎ふるのみ。故に五卷にして足れり。釋

○蕎麥は冷物ゆゑ。脾胃虚弱の人に宜しからねば。大小二麥と一樣に常食に充つべき物に非ず。しかし土の肥瘠を論ぜず。一候七十五日にして實熟し。凶荒の備には甚便宜なる故に。○天工開物云。蕎麥實非二麥類一。然以二其爲一レ粉療レ饑。傳レ名爲レ麥。則麥レ之而已 續日本書紀に。養老六年七月戊子。詔曰。今夏無レ雨。苗稼不レ登。宜下令二天下國司一。勸二課百姓一。種二樹晩禾蕎麥及大小麥一。藏置儲積以備中年荒上又續日本後紀に。承和六年正月七日。令二畿内國司一。勸二種蕎麥一。以下其所レ生土地。不上レ論二沃瘠一。收穫只在二秋中一。稻梁之外。足レ爲レ食也などありて。先王天下の國司をして。百姓に勸種せしめ給へば。其後とても。諸國にて蕎麥を種ゑて。凶荒に備へ。二麥の助となし、かど。其頃は蕎麥掻餅。又は蕎麥燒餅に作りて。食料に充てしにて。今の蕎麥切などやうの物はなかりしに。鹽尻に。そば切は。甲州にて天目山へ參詣多かりし時。所の民參詣の諸人に食を賣りけるに。米麥すくなかりしゆゑ。そばをねりてはたことせし。其後うどんを學びて。今のそば切とはなりしとあるにて見れば。最初は蕎麥掻餅。或は蕎麥燒餅に製して。旅籠とせしが。後には溫飩にならひて。湯餅と作せしとなり。西土にても。農政全書に。王禎が農書を引きて曰く。北方山後諸郡多種。治去二皮殼一。磨而爲レ麪焦作二煎餅一。配レ蒜而食。和名鈔。或作二湯餅一。謂二之河漏一。滑細如レ粉。亞二于麥麪一といふ。焦作二煎餅一配レ蒜食レ之は。これ蕎麥燒餅なり。或作二湯餅一謂二之河漏一は。これ溫飩にならひて。湯に入れて。これを煮るものにして。卽ち蕎麥切なり。但し溫飩の如きは。湯餅となして食ふべけれど。蕎麥は湯に入れて煮れば。切々となりて。片をなすべからず。因りて思ふ。當時二八蕎麥と云ひて。蕎麥粉二分。溫飩粉八分。八分と二分との調合にするは。溫飩粉を多くして。切れざるやうにせしにやあらん今の人二八といふは。價のことにて。今蕎麥一膳を十六文に賣るゆゑに。二八十六文の義と心得るは誤なり。其頃は。未だ諸品下直ゆゑ蕎麥の價も十六文にはてあるまじ。還魂紙料に。寛文八年の頃。江戸の流行物を集めし。短歌を載せて八文もりのけんどんや。又かる口男に。○貞享元年頃印本 一杯六文かけねなし。むしそば切。鹿の子はなしに 元祿三年印本 蒸籠むしそば切。一膳七文とあるにても。當時蕎麥

はをなく〱ぞとふといへり。此しぎたつ澤といふ所は。うけられぬことなれど。そのころより。はやくしかいへりしなりけり。とあるを群書一覽卷三に。廻國雜記一卷。一名宗祇回國記と號して。印本五卷に分ち。法源杜多の序文を附す。大に誤れり。これは准后道興の御作なり。文中を考へてしるべしといへど。余は准后道興の作といふ說も。覺束なく覺ゆ。其時代よりは。後の物と思はる

○今の俗名といへるもの。吾日本にて古へ字といふものに當る。萬葉集第十六本朝世記奧羽軍記等に載する所。議すべし。本朝世記。康治二年記曰。六月十三日。戊戌。源賴盛字檜垣三郎。源惟正字辻三郎。忽企二合戰一云云中古文政行はれしより縉紳家も文あれば。漢土に擬して名の外に字といふもの出來す。左れども爵位官職と。實名にて通用すれば。人每に字あるにも非ず。好事の上より。私に文詞上に稱せしまでなり。故に鎌倉時代の頃までは。民間にてやはり今の俗名を字と稱せしことぞ。古文書等に每每見ゆ。慶元以來。文人學士は。必ず俗名の外に。唐人同樣に字あることなれば。今更に古の例を用ひて。俗名を字ともいひがたし。左ればとて俗名俗稱の字は。和漢とも所見なし。因てたゞ稱□□□と書きたらば。當りさはり無かるべし。又漢土に小字といふものあり。今古奇觀に小名宋金郞。官名宋金とあり。官名とは公邊に用ふる表向の名にて。實名といふが如し。小名とは民間に呼び習はしたる。平生の通名なり。これ證とするに足るやうなれども。他書に載する小名小字は。大抵幼少の時の子供の名なり。又侍兒小名錄に載する小名は。此方の人。たとへば家に居るときの名。女子なれば阿松とか。阿梅とかいへるが。諸侯方に奉公すれば。別に名を賜ひて尾上とか岩藤とか改む。その奉公中の名を小名といふ。かく一定せざれば。一を取りて證とし用ひ難し

○僧の姓をすべて釋といふことは。道安より始まる。開元錄云。秦晉已前出家者。多隨二師姓一。後彌天沙門道安云。凡剃レ髮染レ衣紹二釋迦種一。卽無二殊姓一。宜三悉稱二釋氏一。時皆未レ然。追レ譯二出阿含經一。云佛告二比丘一。四大河水入レ海。無二復本名一。同名爲レ海。四姓之子於レ佛出家。剃二除鬚髮一。著二三法衣一。無二復本姓一。但云二砂門釋子一。增一阿含經卷二十一。佛言今有二四大河一從二阿耨達泉一出爲レ四。所レ謂恒河新頭婆又私陀四河入レ海。無二復本名一。倶名爲レ海。四姓出家言二釋子一とあるにて知るべし

僧侶は。犬皮と唱ふ。牛皮にむかへたる名なるべし。犬の字を忌みて。今は硏皮に作る。或人云く。見肥の字にかへなばよけんと

羊肝を羊羹と。音を假りて。文字を易へ。其實を失ふに至る

附犬皮を松風と名づくるわけは。橘庵漫筆卷四に云く。干菓子の松風は。初め京都より製し出だし。或御方へ御銘を乞ひ奉りしに。御覽有りて。松風と號け給ふ。其心は。表に火の剛焦げし跡泡立ちしあと。けしをふるなど。いろ〳〵の斐あれど。うらは絖りとして。摸樣なく。うら寂敷義によりて。松風とは名付け給へりと

○西行の鴫立澤の歌は。もと澤邊に鴫の立てる。秋の夕暮のいと淋しく。物哀れなるさまを詠ぜし。實景の歌にして。鴫立は。澤の名にあらざるを。元祿の頃。宗雪居士が。一時の思ひ付にて。この所こそ。西行法師の鴫立澤と。詠歌せし澤なりと。附會せしを

戸田茂睡が著せる。名所不審相承歌といへる小冊子に。今大磯の鴫立澤なども。近き頃宗雪といふ入道が。名付けたる事なれども。西行法師の身にも哀れはしられけりと讀み給ふ所になれりとあり

寛永年中。俳諧師三千風。遂に庵を結び。鴫立庵と稱し。いかめしく碑など立てしより

碑には元祿十三庚辰二月望日。東往居士三千風誌之とあれども。これは元祿十二己卯年。西行五百年忌の追福を修せし時の碑文にして碑石の立ちしは。寶永年中にあり

今は和歌の一名所舊跡とはなりたり。伊勢物語に。信濃なる淺間の嶽にたつ烟遠近人の見やはとかめぬ。とあるは淺間の嶽に烟を賞玩するを。遠近の人見て咎めはせぬかと。いふ意なるを。遠近を地名と心得違ひし。今は淺間の麓に遠近の里といへるあるさへ可レ笑に。遠近の宮までもあるやうにはなりし。これと同日の談なり

附玉勝間卷五に。宗祇法師が回國雜記に。しきたつ澤といふ所にいたりぬ。西行法師こゝにて。心なき身にもあはれはしられけりと。詠ぜしよりこの所をかくはなづけゝるよし。里人かたり侍りければ。あはれしる人の昔を思ひ出て、。鳴たつさ

日。三月服廿日。一月服十日。七日服三日と云ふ。今の令は養父母已下の二十四字を脱す。補ふべし。塙氏刻本には。此二十四字あり。この文によれば。父母の喪は並に解官して給レ暇ことなく。一年の服を受けしむ。尤も本生父母に限ることにして。養父母はこの例にあらず。これ先王以レ孝治二天下一。萬代不易の難レ有制度ならずや。法曹至要鈔に。假寧令説者云。問僧尼遭二父及餘親喪一。何處分。答。於二僧尼一不レ見二給レ暇法一於二父母一。無レ疑矣とあるなど僧尼は世外の人といへども。服紀爲二父母一。一年なること疑ひなし。給レ暇の法は不レ見とあるにて。父母に暇給のなきこと知るべし。今の服忌令に。父母忌五十日とあるは。先王の令にはなきことなり。何れの代誰人の立てし法なるや。文保記永正記などに。父母幷夫暇五十日。十三个月とあれば。その時代已に專ら行はるゝこと、思はるゝ令に祖父母養父母三十日。服五个月九十日なれば。本生父母に暇のなき理はあるまじ。本生の父母は養父母より一等重くして。暇五十日にて相當なるべしなど心得違ひして。かく杜撰せしにやあらん。高麗の制は。五服を建てゝ、暇を給ひ。暇も亦本朝と異同するは。蓋其損益する所ならん。但し成宗の四年乙酉は。宋の雍熙二年にして。皇朝花山天皇の寛和元年に當り。文武天皇の元年令律修撰。既訖施二行天下一せしより。二百八十五年の後なれば。高麗反りて皇朝の制を受くるに似たり。殊に新建とあれば。これより前高麗に。此式なき事知るべし

〇菓子に名づくる。牛の皮に似たればとて。牛皮といひ。犬の皮に似たればとて。犬皮といひ。羊の肝に似たればとて。羊肝といふ。古人の純素樸率。思ひやるべし。後人の物忌ひする心より。文字の不潔なるを嫌ひ。牛皮を求肥

石川丈山翁の北山紀聞巻一。詩教に云。京より到來とて。牛皮飴の篋を。手づから出だして。華人ならば幾くの詩賦かあらんか。桑域には。未だ詩をきかず。何さま案じて見るべしとて。一笑しぬ。私の云。牛皮の字をさへ忌みて近來。求肥とかく位では。詩はござあるまじといへば。翁嚇々たり

とあり

犬皮を研皮

筆のすさみ巻上に云く。松風といふ菓子を五山の

日。小功十四日。緦麻七日。方進自以二大臣一。故云不三敢踰二制とありて。強起就職の日限まで。上より定めあり。故に出仕するに。朝服を異にして。情を表するなり。朝野雜記に。故事大臣奪情者服二慥光幘黲紫袍皂革帶一。道君惡レ之。政和末。始議以入二公門一。不レ應二變服一。遂以二吉服一朝。然居レ家猶二喪服一也。紹興初。朱藏一起復。右僕射請レ所レ服。太常援二政和近事一爲レ請。而居レ第則慘服去レ佩焉。議者不三以爲二是。孝宗之喪。趙子眞當。國始令二群臣一服二白涼衫皂帶一。以治レ事。逮レ終レ喪乃止。論者以爲レ是。及二光宗之喪一。禮部侍郎陳宗召復。請百官以レ日易レ月。禪除畢。服二紫衫皂帶一。以治レ事從レ之。及び談錄に。李宗諤云。先公周顯德末。翰林學士起復。裹二諤紗軟脚幞頭。黲二紫公服一。毎入レ朝猶佩二魚袋一。或曰。魚袋者取二事レ君夙夜匪レ懈之義一。然以レ金爲レ飾。亦身之華也。居レ喪奪レ情。不レ當レ有二金銀之飾一。公遽謝二不敏一などの禮制あり。五代史に。鄭慶餘嘗採二唐士庶吉凶書疏之式一。雜以二當時家人之禮一。爲二書儀兩卷一。明宗見二其起復之制一。歎曰。儒者所下以隆二孝悌一。而敦中風俗上。且無二金革之事一。起復可乎とはありがたきことなり。余本朝忌免のことに感ずるゆゑ。此に鈔し出だしぬ。本朝のことは別に論ず

○皇朝の古へ律令格式等。何事も唐の制を遵用せられしことなるに。獨り服紀令のみ。凡服紀者爲二父母及夫本主一。一年。祖父母養父母五月。曾祖父母外祖父母伯叔姑専兄弟姉妹夫之父嫡子三月。高祖父母舅姨嫡母繼母繼父同居異父兄弟姉妹衆子嫡孫一月。衆孫從父兄弟姉妹兄弟子七日と一年五月三月一月七日の五等に。服紀を建てられしは。唐士今古に其制を見聞せず。皇朝の創制なるにや若しや三韓などの法を用ひしこともあらん歟など疑ひしに。東國通鑑卷十四高麗紀。成宗文懿王乙酉四年宋雍熙二年冬十月。新定二五服給暇式一。斬衰齊衰三年給二百日一。齊衰期年給二三十日一。大功九月給二二十日一。小功五月給二十五日一。緦麻三月給二七日一。とあり。暇は休暇の暇にして奉公を免し。家屋して喪を行ふ暇を給ふを給レ暇と云ふ。神祇服紀令に。暇俗號二荒忌一。といへば。今日所レ云の忌のことにて。忌といふ稱は。神祇服紀令より出でし詞なるべし。拾芥抄に假寧令を引きて凡職事官。遭二父母喪一。並解レ官。自餘皆給レ暇。夫及祖父母養父母外祖父母卅

ていひしにや。及第のある歳は。國子生など。一同勉學し。誦讀の聲。日夜不レ絶より。勸學院の雀は。蒙求を囀づる。たとへの意を以て。鶯なども歌を詠ずといはんために。式年とは書きしにやあらん

○生母にあらずして子を養育する母を。まゝ母といひ。生子にあらずして。養育を受くる子を。まゝ子といふ。まゝは養育の義にて。小兒に乳を飲付する。今の乳母の事なり。これを古へ。乳付けといふ。東鑑に。武衛頼朝卿をいふ乳付けの青女を召さる。摩々と號すとあるにて知るべし。これより轉稱して。小兒の乳を飲むを。まゝと云ひ。今にては小兒の飯を喫するをも。まゝと云ふことにはなりし

附洛東隱士慈延の隣女晤言卷二に。蓬生卷に。こまゝの、たまひおきし事もありと。云々。又浮舟卷にも。まゝといへるところ。三ところばかりあり。細流に乳母の名のやうに。釋し給へるはたがへり。也足軒の抄にめのとをば。まとゝおしなべてなづくるなりといへるぞかなへる。さらでは物語の中にても。聞えがたきところあり。又陸奥出羽の方にては。今の世も。乳母をすべて。まゝとよぶなり。古語の殘る事はいなかに多きなり。雅語ならねども。さる樂の狂言におのが妻をば。おんなどもとよぶはむかし都にて。妻を女どもと人に對してはいひしなるべし。これも陸奥出羽などの人は。常に人にむかひては。おのが妻をおんなどもといへり

○起復は正禮に非ず。止むことを得ざるに起るなり。故に石林過庭錄に。至和間。富鄭公爲レ相。以二母喪一去レ位。時久無下以二宰相一持レ喪者上。昭陵意大向レ公必欲二起復一。詔再下再力辭。上三以盧朱崕辭文惠故事一、切責有レ云。以二相國之尊一。而守二匹夫之節一。任二天下之重一。而爲二門內之私一。朕所レ不レ取也。且命二中人一督レ公起。非二同就レ道不一レ得二先還一。公復抗レ章。言天下無事。宰相奉行常務。豈可下與二大宗時一比上。中書樞密院臣僚韓琦等。平居皆嘗與レ臣論三起復不二是好事一。今在二嫌疑之地一。必不三肯爲レ臣盡レ言。惟斷自二聖意一。上知二其不一可レ奪乃已とありて。皆然るべきことなるに。漢書瞿方進爲二丞相一。遭二後母憂一。既葬三十六日除レ服。起視レ事以爲身備二漢相一。不三敢踰二國家之制一。注師古曰。漢制自二文帝遺詔一之後。國家遵以爲レ常。大功十五

らず。此經の僞造なることは。空華隨筆に論じありし歟と覺ゆ。併攷すべし
○隅田川は紀の國にも。駿河の國にも。下總の國にもありて。何れも和歌の名所なり。紀伊の隅田川は伊都郡なる。待乳山下の待乳川のことにて。其源は大和の國。葛城山より出で、。北隅田の莊を流れて。紀の川に落つれば。乳待山を隅田川に詠合するは。左もあるべし。駿河の角田川は。淸見寺の西にある。今は旗打川といへる川にて。此邊は庵原郡に屬し。いと海近きゆゑ。庵原崎といふを。略して庵崎とも。磯崎ともいへば。庵崎は駿河の角田川に限りたる名所なり。然るを辨基法師の地理不案內の上から。待乳山夕越えゆけば庵崎の角田川原に獨かもねんと。(この歌井蛙抄には。紀伊とし。契沖阿闍梨は。駿河とす)紀伊も駿河も。混同してあやまれるを。本歌とし。都人の居ながら名所を知り顏するより。角田川とさへいへば。待乳山も庵崎も。あるべきはづの樣に思ひて。それと定むべき地もなきに。待乳山や庵崎を。角田川の景物にして。詠合すれば。後人其歌に本づき。これぞ待乳山なり。庵崎なりなど。名所舊跡を。杜撰附會することにはなりし
○白樂天の謠曲に。孝謙天皇の御宇かとよ。大和の國。高天寺にすむ人の。しき年の春の頃。軒端の梅に鶯の來りて鳴く聲を聞けば。初陽每朝來不遭還本栖となく。文字に寫して是を見れば。三十一字の詠歌の言葉なりける。初陽(はつはる)のあした每には來れども。あはてぞかへるもとの栖にと。聞えつるとある。此しき年の字。古人も明解なく。字形近似せるより。或年の誤寫にもあらんなどいふ說もありて。義に害なければ。知れざることにて。濟み來りつるが。先年予が門人大森快庵より。朝鮮人の書幅に。甲子式年。槐陰長契圖と題するを以て。予に鑒定を乞ひ。且其解を求めしに。予尺牘にて。甲子歲。開レ場取レ士是其常式。故曰ニ式年一。云々と答へ遣はしける。一時の臆說にして。別に所證はなかりしが。其後小雲棲稿を讀みしに。卷十二。與ニ成士執一。科擧問答の條に問。玄川云。小科則以ニ子午卯酉一。開ニ三年一。取ニ二百人一。名ニ式年一とあれば。甲子は。常式に。及第のある歲ゆゑに。式年といひしこと明白なり。本邦も古へ及第のある歲をば。やはり式年と。朝鮮語を用ひ

之所レ藏也。余故有二先生遺文二帙一其間誤處。皆手自塗了。傳燈言。世尊擧レ華。迦葉一笑。今講者以爲經無二此事一。詆二其妄傳一。或曰。金陵王丞相於二秘省一得二梵王決疑經一。閱レ之有二此語一。有レ所二避諱一。故經不レ入レ藏。今先生以爲書二之木葉傍行一之間一。不レ知卽丞相之所レ見。以否。其言如レ此。必有レ所レ考矣。併書二其後一云。夫二先生學廣理明。其言豈妄。近翰林宗公爲レ余敍二應酬錄一。亦曰。予觀二大梵天王問佛決疑經一。所レ載拈花云々。宋公旣親觀レ之。則此經世必有レ之。而或者詆以爲レ妄。前云。有レ所二避諱一。故不レ入レ藏。斯言盡矣とあるも。宋學士集に。應酬錄の敍見えず。蓋し王安石宋景濂の二公に托して。信を世に取んと欲せるにて。實に二公にこのことありとは思はれず。これぞ彼徒の杜撰といふべし」故に濟北集卷十八に。智證大師敎相同異曰。禪宗敎相如何。答唯以二金剛般若維摩經一而爲レ所レ依。以二卽心是佛一而爲レ宗。以二心無二所レ著而爲レ業。以二諸法空一而爲レ義。始自二佛世一。衣鉢授受。師師相承。更無二異途一。嗚呼。珍公何不レ思二自語相戾一。哉已言下自二佛世一。衣鉢授受。師師相承上。何還以二維摩金剛一。爲レ所レ依乎。因二諸宗各有レ所レ依。將以爲二禪門亦有一レ所レ依乎。蓋三論者。依二中百門一也。法相者。依二楞加深密及唯識一也。天臺者。依二法華一也。賢首者依二華嚴一也。此諸宗依二於經論一者宜矣。何者。像法諸師。取二經論意一而立レ宗也。我禪門不レ然。如來命二飮光一傳二心印一。爾來師師衣鉢授受。以爲二法言一。何暇三求レ所レ依。而取二金剛維摩一乎。若有レ所レ依。非二佛心宗一。珍公不レ聽二禪宗一。比二擬語宗一。臆度分別。出レ所レ依者。實可レ笑也。云々と論ぜり。」況や今世に所レ傳の大梵天王問佛決疑經は

大梵天王問佛決疑經。全軸二十四品。分爲二二本一云。是陸奧國。南部花卷玉鳳山瑞興寺。無著靈光禪師所二秘藏一本也と。享保十二年丁未仲夏。靈光所レ誌。凡例十件を附し。享保十二年乙卯閏三月。尾張國。鷲頭山長壽禪寺。東濃道澥の後序あり。或曰。相傳斯經所二珍藏一本邦有二三所一。其一。奧州平泉光堂。秀衡廟處。經堂今存。其二濃州郡上郡長瀧村長瀧寺天台古刹其三攝州水田三寶寺能忍舊跡。今爲二洞宗一靈光所レ傳者光堂本也云文義淺薄にして。西土人の僞作までもなく。邦人の涅槃經に依りて僞造し。台嶺慈覺大師曾自二大唐一抄來在二某國某寺一など、附會せしにて。信用すべか

に曰く。觀瀾先生此事を疑ひ思ひ。或時對州の芳洲雨森氏に是を問ふ。雨森氏云。朝鮮の方言に。總じて邊界荒外の地を呼びて。おらんかいといふ事。定りたる一所の地名にあらず。胡の字を書きて朝鮮ておらんかいと讀む。此方にてゑびすと讀むが如し。淸正の過りし處は。何れか知らず。朝鮮西北の塞外なるべし。女直兀良哈にはあらじ。朝鮮人に此所は何といふ地ぞと問ひし時に。おらんかいと申しゝにぞ。女直兀良哈をおらんかいと讀むも。朝鮮の國語を傳へ聞きて誤れるなりと。これにて余が嘗て疑ひしも。始めて釋然たり

○宋儒の所レ謂道統は。禪家の血脈にして。世尊拈レ花迦葉微笑を曾子の一貫に附會するは世人の知る所なれば。今更にいふに及ばず。但拈花のこと五燈會元に出でゝ。一切經中に所見なしといへども。古來相承の說にして。必しも彼徒の杜撰せるにはあらじ。されど。彼徒は諸宗皆所レ依の經あるに。禪宗に限り。所レ依の經なければ。胡亂なる敎のやうに。人の疑はんことをおそれてや。大梵天王問佛決疑經に出づるなどいへど。其經もとより世に無ければ。嘗て秘府に藏在せるを。王安石は見しとて。僧史稽古略卷四に。引二梅溪集一云。荆公謂二蔣山建康佛慧泉禪師一曰。世尊拈レ花迦葉微笑。頃在二翰苑一偶見二大梵天王問佛決疑經三卷一。有レ云梵王在二靈山會上一。以二金色波羅華一獻レ佛請二佛說法一。世尊登レ座。拈レ華示レ衆。人天百萬。悉皆罔レ措。獨迦葉破顏微笑。世尊曰。吾有二正法眼藏涅槃妙心一。分二付迦葉一とあり

人天眼目卷五に。引二宗門雜錄一云。王荆公問二佛慧泉禪師一云。禪家所レ謂世尊拈レ花出在二何典一。泉云藏經亦不レ載。公曰。余頃在二翰苑一偶見二大梵天王問佛決疑經三卷一。因閲レ之。經文所レ載甚詳。梵王至二靈山一。以二金色波羅花一獻レ佛。舍レ身爲二床座一。請下佛爲二衆生一說上レ法。世尊登レ座拈レ花示レ衆。人天百萬。悉皆罔レ措。獨有二金色頭陀一。破顏微笑。世尊云。吾有二正法眼藏涅槃妙心實相無相一。分二付摩訶大迦葉一。此經多談二帝王事一。佛請問。所三以秘藏世無二聞者一と稽古略に依りていふに似たり

余王梅溪集を反覆閲するに。絕えて影響もなし。又山菴雜錄卷下に明善韓先生。書二陸放翁普燈錄敘草後一云。放翁先生手書。普燈錄敘草本。報恩淨上人

ありて。咸鏡道の外へ人數を押し出だすこと見えず。然るに朝鮮征伐記清正等に本邦の武威を示さんとて。おらんかいの國都まで。亂入する由いへども。其おらんかいといふ國。何れの地方にあること知るべからざるを。何人か兀良哈に充てて。遂に兀良哈をおらんかいと訓譯することにはなりし。兀良哈は。咸鏡道よりは平安道を間介するのみならず。遼河もありて。秦漢の遼西郡の北境に國すれば。朝鮮と四至の境を接せざるは。いふまでもなし。乾隆府廳州縣圖志に。喀喇沁。本二旗。（分左右）新添一旗。本春秋時。山戎地。秦漢遼西郡境。後漢爲鮮卑地。晉爲慕容氏地。北魏時。有庫莫奚居此。唐初內附。置饒落都督。隸營州。後分爲東西奚。尋併于契丹。遼統和中。以故奚王牙張。建城。號中京大定府。金貞元二年。更名北京。置留守司。元初爲北京路總管府。至元七年。改爲大寧。二十二年。改爲武平路。後復爲大寧。隸遼陽行省。明洪武中。置大寧都指揮使司。封皇子權于大寧。爲寧王。以鎭之。二十一年。改爲北平行都指揮使司。永樂初改封寧王于江西。徙大寧都司于保定。以大寧地。賜三衞酋長。續文獻通考云。洪武二十二年。夏四月。詔以兀良哈之地。置三衞。自全寧抵喜峯口。近宣府鎭者。曰朵顏衞。自錦義歷廣寧。至遼河界者曰泰寧衞。自麻泥窪。踰瀋陽鐵嶺。接開原鎭者。曰福餘衞。自錦義渡遼河。至白雲山。爲大寧。皆逐水草。無恒居。朵顏最强。後爲察哈爾所滅。以地予其塔布囊。是爲喀喇沁。本朝天聰年間來降○翁牛特二旗（分左右）在古北口東北五百二十里。本唐饒樂都督府地。遼置饒州匡義軍節度。屬上京道。金爲北京路地。元爲上都路地。明初以兀良哈部長。置衞爲外藩。後自翁牛特服屬于阿祿科爾沁。本朝天聰七年。率部落來歸とあれば。今これを清文鑑に攷ふるに。察哈爾八旗の四十九旗內にて喀喇沁は三旗。翁牛特は二旗。合せて五旗の地なれば。兀良哈はもと一大部落にして朝鮮と地境も隔つれば。清正も容易に亂入するの理あらんや。しかしおらんかいといふ地あればこそ書傳へも言ひ傳へもすれ。たゞ何れの地方のことなりやと。不審しく思ひしに。頃日。川口靜齋隨筆を讀む

ひしより。樒は花とのみ呼びて。賢木の稱は。失へるものならんとおもへりしに。吾外宮神宮に。十二月晦の夜。小内人等。花賢木が。末爲つ多と申して。玉串御門に（内玉垣御門ともいふ）奉れるを見れば。樒にこそ有りけれ。是をもておもへば。神武天皇の大御歌に伊智佐介伎未酒於朋鷄句塢とみよみましゝは。實賢木にて（和名抄に。於比佐加伎とあるは。是にや。比と美と通へる例多し）美者々木といひ。實のいさ多かるものなり（しきみの花のさよみたればなり）神宮に花賢木といへるは。樒をいふなるべく（しきみの花のさよみたればなり）いにしへの榊は。もはらは。樒を用ひしならんとはおもひなりぬ（秦文樹がいふ。丹後國にては。神に奠るは統べて。樒にて其さかしはといふといへり。また或人。伊豆國箱根の邊にても。樒を用ふといへり）とあるは。一理あるに似たれども余山家の人の話せるを聞くに。樒は香氣ありて。狼の忌み嫌ふこと甚しければ。新葬の地には。必ず此木の枝を折り立てゝ。塚を發く患を防ぐことのよし。又葉を乾し末として。抹香と名つけ。香火に用ふるもこの故なりと。然らば元來佛經にも。樒木は香氣ある故に。佛像等を造るに相用ひ來れり。又山家等には。墓所等に植ゑおけば。狼の害をさくる故に。都鄙ともに。今は此木を供するなからん歟

附又萬葉考槻に。落葉に一とせ越後の國高田なる。日吉神社の社人猪俣茂吉が。ふることと學ばんとて。おのがもとにありつるをり。この榊をいひつるに。茂吉がいへらく今神宮に用ひ給へる。榊といふ木は。越の國にはなき木也といへり。故己とひけるは。しからば。越の國にては。何その木を。坂樹とはいへるぞと問ふに。今此所にて。美者々木と。（美者呉ともいふ）いへるは。吾邦にて。神事に用ひ來れる榊也といへり。是ぞ神武天皇の御製に。伊智佐介幾。未廼於朋鷄句塢。云々とみよみましゝなるべく實の多ければ。實榮樹といひしを。今は美者々木とも。美者呉とも訛れるものならんとおもへりしに。本居氏の。古事紀傳に。田中道麻呂が言をあげて。榊の事をいへるも。全く同じかりける。とあるにて考ふれば。陵の字をみさゝぎと訓ぜるも。美者々木を種うるよりの名なるべし

○朝鮮の役に。加藤清正は咸鏡道。小西行長は平安道と。籤を掣して攻め入られしに。清正は咸鏡道の會寧府にて。兩王子を生獲し。退きて咸興府に屯するよし。懲毖錄にも記し。會寧も咸興も。咸興道に

截巖髮而走。隣人逐之。變成一狐。追之不得。其後京邑被截髮者。一百三十人。初變婦人。衣服靚粧。行路人見而悅之近之。皆被截髮。當時。有婦人著綵衣者。人皆指爲狐魅。凞平二年四月。有此。至秋乃止

北齊書後主紀に鄴都並有狐媚。多截人髮など見ゆれど。何れも男子の髮を截ることにて。婦人子女は見當らず

○和名山しきみといへる木を。邦俗樒の字を用ふ。本草家は莽草に充つ。果して是なりや。予は物産に疎なれば。當否は知らず。今都鄙となく。此木を必ず墳墓に供すること。天下一般の俗となれり。此木佛家に因緣ある事。法華經の第一卷には。或有起石廟栴檀及沈水木樒幷餘材甎瓦泥土等。疏木樒者長安有木名樒。任造像。已上是乃栴檀沈香樒木は。清淨にして。香氣ある故に。佛像等を造り。又佛前にも供すと見えたり。然るに宇治荒木田神主久老が。萬葉考槻の落葉に。吾弟子西村重波が疑ひけるは。神樂歌に榊葉の香乎加倶波志美覓來れば八十氏人曾。滿登比世利介流とあるに。貫之の歌にも。おく霜に色もかはらぬ榊葉の香をやは人のとめて來つらん。(新古今集)源氏。榊の卷にも。をとめ子があたりとおもへば榊葉の香をなつかしみとめてこそ來れとあれば。必ず葉に香氣あるべきに。樒も。今の榊も。美者々木も。葉に香氣なければ。いにしへの賢木には。かなはずやといへり。是もひとつの考なるべくおもひて。今按を加ふるに。和名鈔。新撰字鏡等に。龍眼木の字を。佐賀木に當てたるは叶へりやかなはじや。おぼつかなければ。そはおきて。いにしへ佐賀木といへるは師の言の如く。榮樹にて。何にまれ。常磐木を用ふるが中に。專ら神事公事に用ひしは。樒なるべくこそおぼゆれ。(或人の云。龍眼木は。から木也。その葉香氣ありて。形狀樒に似たりと云へり)さるは。卷廿に。奥山乃志伎美が花乃とよみて。かならず深山に生ふるものなれば。奥山乃賢木が枝云々といへるにもかなひ。和名抄に。樒は香木也とありて。其葉香氣あれば。榊葉の香をかぐはしみと。神樂歌にいへるにもかなへり。さて是をしも佛に尊るは。元來神に奉るものなるもて。佛のわたり來し後に。其をうつして佛にも獻りしが。今はもはら。佛のものとのみなりゆきて。神には他木を用

上よりたゝき打ち殺し申し候。其節迄やはり赤子の鳴聲致し申し候。河童の鳴聲は。赤子の鳴聲同樣に御座候。打ち殺し候節。屁をこき申し候。誠に難堪にほひにて船頭など。後にわづらひ申し候。打ち候棒かひなど。青くさきにほひ。未だ去

前

横

後

り不申候。尻の穴三つ有之候。總體骨なき樣に相見え申し候。屁の音はスッ／＼と計り申し候。打ち候へば。首は胴の內へ八分程入り申し候。胸肩張出し脊むしの如くに御座候。死候ては。首引き込み不申候。常地にて度々捕へ候へ共。此度上り候程大きなる重きは。只今迄見不申候。珍敷候間申進候已上

六月五日　　東濱　權　平　治

浦山金平樣

これ享和元年辛酉歲のことなり。余河童の寫眞を見ることと多し。これ獨眞を得るに似たり。因りて此に附錄す

○予幼なりし頃。髮截とて一時流行せしことあり。其後も一二見聞せり。是狐妖とはいへど。道士の狐を驅役して然らしむるにて。大抵婦人女子の髮を截り。男子の髮を截ることを聞かず。西土にもこの事ありて。北魏書靈徵志に。高祖太和元年五月辛亥。有二狐魅一。截二人髮一。又肅宗熙平二年。自レ春京師有二狐魅一截二人髮一

此事を後魏揚衒之が洛陽伽藍記に載せて云。市北有二慈孝奉終二里一。里內之人。以レ賣二棺槨一爲レ業。賃二輀車一爲レ事。有二輓歌孫巖一。娶レ妻三年。妻不二脫レ衣而臥一。巖因怪レ之。伺二其睡一。陰解二其衣一。有レ毛長三尺。似二野狐尾一。巖懼而出レ之。妻臨レ去。持レ刀

何となれば。死する時口より押し入る水。肛門より出づる故に。肛門爛開せざることを得ず

附本章綱目啓蒙に。溪鬼虫附錄。水虎。かつぱ。古歌江戸奥州。がはたらう。畿内九州かはのとの。かはつぱ。共同上越後。佐州がはたろ。京がはら。越前。播州。讃州かはこ。雲州かはこぼし。勢州山田かはらこぞう。白子かはろ。桑名かはた。共同上かだらう。上州ぐはたらう。共同上。豫州。大州。防州。石州。備後ゑんこ。豫州松山めどち。南部がうご。備前かうらわらう。筑前てがはら。越中みづし。加州能州一名水唐。通雅水蘆。同上諸州皆あり。濃州及び筑後柳川邊尤多しと云ふ。凡そ舊流大江邊に。時々出で、兒童を魅(はか)して。水に沈めしめ。或は人を誘ひ。角力して深淵に引き入る。その體甚粘滑にして。捕へ難し。女青藤(へくりかつら)を以て。手に纒へば。角力勝やすく。捕へ易しと云ふ。角力して惱さる、ものは。莽草を用ひて治すること大和本草に見えたり。性好みて。胡瓜(きうり)及び白柿(つるしがき)を食ふ。白柿三箇許を食ふ時は能く醉ふ。麻稭(あさがら)及び其炭を忌み。蜀黍糕(たうきびだんご)を惡む。若し人口に鐵物をくはへ居れば。水に引き入る、こと能はずと云ふ。その形狀は人の如く。兩目圓黃鼻は突出し獼猴の如し。口は大にして狗の如く鼻は。鮠齒の如く。上下四牙尖れり頭に短髮あり。色赤し額上に一孔あり。深さ一寸。上に蓋ありて蛤の如し。面は靑黑色。背色は龜甲の如く。その堅きことも同じ。腹も龜版の如くにして。黃色なり。左右脇下に。一道の竪條あり。柔軟にして。白色なりこの處を執る時は動くこと能はずと云ふ手足の形は人の如く。靑黑色にして微黃を帶ぶ。四指短くして爪長く。指間に蹼あり。手足を縮る時は。皆甲版の間に藏る、こと龜に異ならず。手足の節。前後に屈すること。人に異なり

當六月朔日。水戸浦より上り候。河童丈三尺五寸餘。重十二貫目有之候。殊の外形より重く御座候。海中にて赤子の鳴聲。夥敷いたし候間。獵師共船にて乘り廻り候へば海の底にて御座候故。網を下し申し候處。色々の聲仕候。夫よりさしあみを引き廻し候へば。鰯網の內へ。十四五疋入候ひておどり出だし逃げ申し候。船頭共棒かひなどにて。打ち候へどもねばり付。一向にきゝ不申候。其內一疋船の內へ飛び込み候故とまなど押しかけ。其

疎水一合。疎水出二中盧縣西南一。東流至二郎縣北界一東入二沔水一。謂二疎口一也。水中有レ物。如二三四歲小兒一。鱗甲如二鯪魚一。射レ之不レ可レ入。七八月中。好在二磧中一。自曝二膝頭一。似二虎掌爪一。常沒二水中一。出二膝頭一。小兒不レ知。欲二取弄戲一。便殺レ人。有二生得者一。摘二其皐厭一。可二以小便一。名爲二水唐一者也。後漢郡國志注。引二盛氏荊州記一云。生得者。摘二其鼻厭一。可二少小便一。名爲二水盧一。十道志引二襄沔記一云。或有二生得者一。摘二其鼻一。可三小二便之一。名曰二水虎一。孫汝澄云。皐厭者。水虎之勢也。可レ爲二媚藥一。善使レ內也。皐厭與レ鼻相訛。物類相感志訛爲二木唐一。而疎水作二涑水一とあれば。河童の水虎たる知るべし。然し水唐のこと。僅に此に出づるのみにて。他書に所見なし。西土には水虎の害。至りて罕なる樣に思はる

一は鼈

水草啓蒙に云く。朱鼈備前岡山にては。どうまん。周防にてはせにがめと云ふ。小鼈なり。一寸許腹下赤く。甚強きものなり。大なる物を引き込む。人水中に浴し。偶これに逢へば。引き込る、なり。腹黃赤色にして。黑斑文あり。人背に附けば。乍ち沈むといへり。水虎に引き込る、と云ふは。多くはこの朱鼈なり。出雲の方に多くあり。土人見る毎に捕へて殺すと云ふ。京師にては。未だこれあるを見ず

一は水蛇

江戶近處にては。中川に多く居ると云ふこと。中川に釣する者の話に。水面より一尺許り下を。此岸より彼岸へゆく。其疾きこと箭の如し。形は碇と認めがたけれど。大抵靑たいしやうと云ふ。蛇に似たり。この蛇水中にて。人の手足を纏ふといへども。捕り殺すことを聞かず。又出羽最上川に薄黑くして扁なる小蛇あり。よく桴に附きて人を捕殺すといふ。佐渡にはこの蛇。最多しと聞くなりと云ふ。今この三屍を檢視するに。河童に捕られたるは。口を開きて笑ふが如く。水蛇は齒を喰ひしばり。向ふ齒二枚かけ墜ち。鼈は脇腹章門邊に。爪を入れし痕ありて死す。これを以て分別すべし。何れも肛門は開く世人肛門より入りて。臟腑を食ふと云ふは非也。すべて溺死は。肛門開くものなり。

に。觀照般若。實相般若。文字般若などの差別あれども。何れも智慧のことにて。鬼女の義絕えてなし。故に近人の說に。古の面打に。般若といへる名工ありしが。鬼女の假面に別けて巧妙なりければ。終に鬼女を指して般若といふことになりしなどいへども。面打に般若といふ名工のありしと。古今聞きも及ばず。これ全く意を以て杜撰せるなり。謠曲の葵上に。あらくおそろしの般若聲やといふ文句あり。これは鬼女の大般若經讀誦の聲をおそるゝをいふなるに。おそろしとあるより誤解して。般若聲を鬼女の聲と心得違ひし。鬼女を般若といふことになりしと北山先生語られき。左もあるべしと思はる

○石田三成は。かづしげと云ふべし。世人みつなり。又はかづなりと云ふは非也。

藤堂侯及び伊勢一身田に所藏の三成の假名文數通何れも假名にて。かづしげと署名すと。石川之褧の話

長曾我部は。長曾かめと云ふべし。長曾かべと云ふは非也

異國往來記などに長曾我部を。ちやうそかめと。假名附あるにて知るべし。津坂孝綽曰。長曾我部盛親の假名文も。何れもちやうそかめとあり。假名文のみならず。眞名にて長曾龜と。龜の字を借用して。三字姓に書けるを見しこともありしと。鼎案ずるに。長曾我部を。長曾龜といふは。たとへば。草花に字は。をみなへしと書きてとなへは。をみなめしと云ふ如し

信雄は。のぶかつと云ふ。のぶをに非ず

薦野侯上方氏の祖先は。信雄の家老にて。諱の一字を賜はりて。至レ今歷代通り字に雄の字を用ふ。かつと訓じてをとはいはず。

瀧川一益は。いちますと。一を音にて呼ぶ。かづますといはず。阿斷能屋檢校の話 何れも今其家絕えぬれば。世人其名姓の稱呼さへ。審にせずして。意を以て杜撰するに至る。この類猶多かるべし

○水中にて人を捕り殺すもの。三つあり。一は河童或は河太郎と云ふ。貝原翁の大和本草に。本草綱目溪鬼蟲附錄の水虎に充つ。通雅に水虎卽水唐也。鼻厭其陰也。水經注曰。沔水逕ニ黎邱故城一又南與ニ

十六觀經の日想觀の文に。正坐向レ日。諦觀ニ於日一。專想不レ移。見ニ日欲レ沒。狀如ニ懸鼓一などありて。日想觀は。必しも時正に限ることにはあらざれども。淨家にて時正は。日正東に出で、。正西に沒すれば。日想觀の時節とせるより。其徒この時に乘じて。一七日の法筵を開き談義說法し。沒日を觀念するより。西方淨土を識知せしむるの因を以て。彼岸會とは名つけし。この彼岸會を曆に載する故は。昔時談義說法は。比叡山の阪本に限り。廿一箇所談義所ありて。能辯の僧出席して。談法することにて。他の寺院などには。絕えてなかりし。故に都鄙善信の男女阪本に群集して。聽聞するもの。彼岸の時節を辨知せずして。每度迷惑せしゆゑ。叡山より曆家に請ひて。曆本に書き載せもらひしよりいつとなく。時候の樣になりたり。彼岸の義は翻釋名義集卷四に。波羅蜜。諸經論中。多翻ニ到彼岸一。生死爲ニ彼岸一。涅槃爲ニ彼岸一。煩惱爲ニ中流一。菩薩以ニ無相知惠一。乘ニ禪定舟航一。從ニ生死此岸一。到ニ涅槃彼岸一。故知理定以明ニ波羅蜜一と有りて。時正に少しも。關係することなし。佛說彼岸功德經。龍樹菩薩天驗記などに說く所は。杜撰附會。齒牙に掛くるに足らず。前文の次第ゆゑ。昔は春分秋中の日を彼岸の中日に當る樣にせしと。安倍家の曆本に見えたりと鹽尻に云へり。左もあるべきことにぞ。今は春分より六日まへ。秋分は二日まへを。彼岸に入る日とす（榊巷談苑に。春秋分の後二日を。彼岸といふ事は。いつの頃よりいひ出でけるにや。行幸のまきに十六日彼岸のはじめにてとあり。蜻蛉日記にも彼岸といふこと見ゆ。）曆家の說に。二十四氣を一年に割り付くる。平實の二法ありて。本朝の曆は。平氣を用ひ。唐土の曆は。實氣を用ふ。故に本朝の春秋分は平氣にして。實の春秋分にあらず。實の春分は平春分より三日前。實の秋分は平秋分より三日後にあり實の春秋分は。太陽赤道を行き晝夜等分ゆゑ。此日を彼岸の中日に當て、。平春分より六日前。平秋分より二日前を。彼岸に入る日とすることなり本朝の曆。天保八年丁酉。春分は。二月十七日。彼岸に入る日は十二日。秋分は八月二十二日。彼岸に入る日は二十一日なるを。唐土の曆にては。道光十七年丁酉春分は二月十五日。秋分は八月二十四日。卽ち。彼岸の中日なり。これにて知るべし

○鬼女俗に般若と云ふ。般若は此に翻して智慧とす。（翻釋名義集四に。般若法界次第云。秦言ニ智慧一。照ニ了一切諸法一。而不レ可レ得。而能通ニ達一切一無レ閡。名爲ニ智慧一）般若

此戈の字。何の義たるを知らず。想ふに。中古祐筆方の書法に。目錄の錄を六に作り。講釋の釋を尺に作り。安藝を安木と書き。藤橘を藤吉と書する類。極めて多し。すべて同音の畫の少なき字を借用すると一樣にて。才の字にてあらん歟。など臆斷せしこともありしが。其後日蓮の錄内御書を閲せしに。每に一書の末に年號大歲支幹月日を載す。其大歲を八卷目には。文永十年。大戈癸酉卯月二十五日と大戈に作る。其他大戈と書ける。所々枚擧に勝へず。是にて戈は歲の略字たることを發明せり。頃日又日本靈異記考證を見れば。先哲早くも此考ありて更に委し

日本靈異記考證卷上に。戈即歲字之省。猶ニ舊省作レ舊麻省作レ广之類。或謂借ニ才字。爲レ之。按此字有レ點可ニ以證ニ非レ借ニ才字一也。或說不レ可レ從。又按保元元年。所寫本命鈔歲字皆作レ戈。與レ此同

余が說は。遼東の豕に屬す。錄して一笑に備ふ

○大賈の重立たる手代を。番頭と云ふ。番頭の字。唐書に出づ。といへども。今これを商家に稱するは僭なり。伴頭といふべし。古今類書纂要卷四に。俗呼ニ奴僕ニ曰ニ伴頭一と有り。でつちは。丁稚なるべし。

春明退朝錄に。吳正肅言。律令有ニ丁稚。推字不レ通。少壯之意。當ニ是丁稚一。唐以ニ大帝諱一避レ之。損ニ其點畫一云

○春秋の三分は。日正東に出で、。正西に沒する故に。天竺の俗。これを時正といふ由なれども。此時に彼岸會を修することは。佛經に所見なし

但し立世阿毘曇論には。二月春分を以爲ニ歲首。是劫初に日月下生の日とする故に。彼論の日月行品に云。是時最初日月下ニ生世間一相去甚遠。日下ニ東弗婆提中央。月下ニ西瞿耶尼中央。光明遍照滿ニ四天下一。日照一半月照一半云々。是故梵曆には。春分を以て爲ニ曆元。宿曜經云。上古白博叉二月春分朔于時曜躔ニ婁宿一。道齊景正。月中氣和。庶物漸榮。一切增長。梵天歡喜。命爲ニ歷元一。已上又云。大唐には。以レ建レ寅爲ニ歲初一。天竺には。以レ建レ卯爲ニ年首。云々。是乃唐土日本の春分は。天竺の歲首なる故に。世俗皆祝レ之。佛家には是日を爲ニ吉日一なり。八月秋分には。日輪又再び赤道線を通る故に。時刻春分に同じ。天竺には。爲ニ自恣時一也。但彼岸と名くる事は。一向無レ據

しゆゑ。爲方なくそのまゝにて。打ち過ぎし内に。長崎より召し下されたる。譯司來着せしかば。幸と相談に及び。且長崎にてかやうの銅板は。如何にして製造するやと問ひしかば。譯司微笑しく曰く。これ銅にあらず。松板なるべし。唐船歸棹の時。日本銅を裝入するに。銅は重くして。船底すれ損ずるゆゑ。船ずれに松板を並べ置きて。其上へ銅を積み入るゝより。其松板を銅板といひ。遂に轉じてすべての松板を銅板といふことも。或はありといひしゆゑ。唐人へ松板を遣はして。事濟みたり。言語通ぜず。筆墨を傭ふ上からは。かやうの間違も。定めてあるべし

○水獄の事。資治通鑑後晉高祖紀に。漢高祖聚二毒蛇水中一以二罪人一投レ之。謂二之水獄一とこれ水中に毒蛇を多く聚め。罪人を投入し。罪人水中を限り。外へ出づることならぬやうにして。呵責に苦むゆゑ。水中を獄に比して。水獄とはいひし。別に水獄といふ獄あるに非ず。尤も一時殘忍過刻の刑政にして。これを以て常典とせしにはあらじ。本邦にも國初水牢といふことのありし。此は牢内へ水を入れて。罪人を晝夜とも。平臥のあらぬやうにして。苦ましむる呵責なるよし。傳奇儀太夫本に。白石咄といへるに。と、さまは水牢の苦みとあれども。古今の正史野史及び小説類にも。水牢のこと見當らず。左れども。白石咄にいふ。口氣のありさま。當時現在の實事にして。虛設とは思はれず。頃日落穗集追加を閲せしに。七十年餘りも以前の義は。諸國共に秋先に至り候ひては。その村の名主たるもの、家には。水牢木馬など、申す物を支度いたし。百姓共の中にて私を構へ。收納いたし兼候もの共をば。件の水牢へ入れ。木馬に乘せ責め。凌蹀して收納いたさせ申す如く有之候處に。近年の義は。在邊の百姓風情の者迄も。正路に罷り成り。律儀に收納をもいたし候と相見え。件の水牢木馬等の義も。沙汰なく罷り成り候。とあるを以て見れば。亂世の頃。代官名主など。百姓の年貢未進を取り立つる。私の刑具にして。公法にはあらず。白石咄と合せ考へて。國初まで亂世の餘風。猶。民間に存するを知るべし

○官邊向の書面。或は戸籍等に。年紀を書するに。今玆戊申なれば。當申の何戈と認むること定例なり。

啓蒙に云。昔船來の櫃中に貫あり今はなし。蘇頌の說の如く微小なり。幅一分。長一分許。外皮笋皮の如く。これを包む。故に如二百合辦一と云ふ。內に實あり。蕎麥の如し。至りて小なり。今いぬとくさを麻黄に充つ。然れども。いぬとくさは實なし。故に的當ならず

今一斤の内に。たち麻黄長麻黄。相混雜してあるを見れば。一處に叢生し。莖長くして伸ぶるものは皮薄く。短くして伸びざるものは。皮厚きまでにて。同一物なるべし雲花子に充つるは。如何あるべきや。肯ひがたし

○和學辨に。ひと丶せ長崎にて。唐人の旅館より一日寺（これ一曰示なるべし。譯家必備にも。一曰示一百斤と載せたり）と書き付けて。是をとゝのへくれよと。通詞の方へ言ひおこしたるに。皆皆寄り合ひて何ひて。何の事やら合點せず。誠に唐人のねごとなり。されど。すて置くべきやうもあらで。聖廟の總裁向井玄井に見せぬ。是もとくと合點せず。や丶しばらく過ぎて。玄井云は。もし唐音にてよまば。知る丶事あらんと。唐音にてよみければ。早速事濟みたるよし。一曰寺とよめば。日本人が早く合點すべきと。餘り唐人の念の入り過ぎたるより。おこりたる事ぞかしとあれども。これは長崎の事。不案内ある人の。一曰示と書けるを見て。珍しきことに思ひしよりの造語と思はる。長崎にて唐人應用の物件を乞ふに。必ず單子を用ふ。通詞唐人よりうけとりて先づ唐音にて讀誦一過し。日用ありふれしことは。眞に宿町へ申し付け。ことかはりたるは。翻譯してその役筋へ出だす。唐人すべて日本產の漢名なきもの。或は漢名分明ならず。又はまぎらはしき物件を。單子上に記載するには。一言の下に會得し易からしめんため。唐音を以て日本語に塡字す。鰯魚を一曰示。橿木を加眞。鰹節を戞子魚。疊を蹈蹈面。ふすまを司馬。苫を套馬。辨當を便道。重箱を受百菓。といふ類。枚擧にたへず。これ常の事なれば。なんぞ合點せぬことのあるべきや。寛政元年己酉の冬。朱鑑池の永泰船。紀州熊野浦に漂到せる時。單子を以て。銅板の長一丈二尺濶四尺餘なるを乞ふことありし。早速大阪官銅局へ命ぜられしに。かく長大の銅板を。鑄成したること聞き及ばず。又鑄出だす事もならずとて。ことわり

曰二涒灘一。桓帝永興三年正月戊申。大赦改二元永壽一。明年丙申。戴在二涒灘一是矣。云二霜月之靈皇極之日一。莫レ曉二其義一。疑是九月五日。韓明府名勑。字叔節。前世見二於史傳一。未レ有二名勑者一。豈余學之不レ博乎。とあれば。九月なり。余案ずるに。詩の豳風七月に。九月肅霜とある。夏正を以ていふなれば。卽ち今の九月なり。又二十四節の九月の節に。霜降あるを見れば。此月より霜の降ればこそ。かくはいふなれ。然れば。西土にては。九月を霜降の節とし。本邦にては。十一月を霜降月とする。これ各地風土氣候の異なるによりて。遲速あるなれば。西土にては九月。本邦にては。十一月を稱して。霜月として可なり。十駕齋養新錄に。說二金石一者。不レ曉三霜月爲二何語一。予謂霜月者相月也。爾雅釋天篇七月爲レ相と。この說。恐らくは鑿を免かれず

○今の麻黃は。古の麻黃にあらざるは。人のよく言ふ所なり。西土にも。後世は眞の麻黃絕えて。雲花子を以て換用す。今の麻黃は。雲花子なりと。伊藤溫仙話文政紀元の春。始めて眞の麻黃と云ふを舶到す。莖皮短く厚くして。味少し澁し。長崎の人これよりして。この麻黃をたち麻黃と名づけ。今迄所レ有の麻黃を長麻黃と云ふ。しかし是迄舶到せる長麻黃一斤の內には。このたち麻黃三分の一は相雜れりと。余常に喘疾を患ふるが爲に。每度麻黃湯を服用す。因りてたち麻黃と。長麻とを分服して試るに。たち麻黃の効は。長麻黃に十倍するやうに覺ゆ。案ずるに。本草綱目麻黃附錄に。雲花子あり。時珍曰。按葛洪肘后方治馬疥有二雲花子一云。狀如二麻黃一。而中堅實也と。松岡子の說に。舶來の麻黃は中實す。故に附錄の雲花子に充つと。これ中實すといへば。たち麻黃をいふにて。長麻黃のことにはあるまじ

松岡子の意は。たち麻黃。長麻黃の差別なく。總じて舶來の麻黃を。雲花子に充つるに似たり。然し。舶來の麻黃に。中實せるはなし。長麻黃は勿論。たち麻黃にても皮肉の厚さにて。附錄にいふ。中堅實とは一やうにいひ難し

松岡子又いぬとくさを。眞の麻黃に充つるを見れば。舶來の麻黃を。雲花子に充て。國產のいぬとくさを。眞の麻黃に充つ。いぬとくさの麻黃にあらざるは。小野蘭山の本草啓蒙に辨ぜり

帝一。史皇孫之子。於二昭帝一爲レ兄。孫以係レ祖。不レ得二上與レ父齊一。故爲二七世一。光武雖レ在二十二一於二父子之次一。於二成帝一爲二兄弟一。於二哀帝一爲二諸父一。於二平帝一爲二父祖一。皆不レ可レ爲二之後一。上至二元帝一。於二光武一爲レ父、故上繼二元帝一而爲二九世一。故河圖曰赤九世會昌。謂二光武一也。十世以光。謂二孝明一在。十一以興。謂二孝章一也成雖レ在レ九。哀雖レ在レ十。平雖レ在二十一一。不レ稱レ次とこれにて世の義を知るべし

○慶長の初。紅毛人。自鳴鐘を始めて持ち渡りしとき。蕃名は日本人の口なれざるゆゑ。別にとなへやすき佳名を擇びて名づけたり。折節明の商船舶到せしかば。相談に及びしに。其形斗に似て。鷄の晨を司りて。時を報ずるが如くなればとて。新に斗鷄と名を命じ。其記文さへも添へて贈りしを。紅毛人官府へ其まゝ上納せし由。其事の大要は。白石の東雅に出で。

東雅卷七。器用第七。漏刻二。慶長中に西洋人。トケイといふものをまゐらし、事あり。其刻に衡り製れる。今は盛りに世に行はれぬ。トケトといふ事。蕃語にはあらず。その時の事しるし、日記には。斗鷄としるしたりけり。これも明人にして。蕃語を譯せしめてまゐらし、所なり。その器の製斗象のごとくなるものありて。その指所に隨ひて。その時を知りて。日々鳴りて時を報ずる事鷄の如くなればかく名付けしなり。今はその字を用ひざるにや

大勸隨筆にもいへり。斗鷄はいかにも雅名なるを。何者が杜撰に充字を以て。時計と書きしより。時計の字行はれて。トケイは名のみ傳はり。本字をば知る人もなきやうになり。近頃清人の日本の事を記せる書に。枕時計樓時計の字を出だすを見れば。今は清人までも。日本にては。時計の字を用ふと思へるならん

○簠簋に（俗に金烏玉兎集といふ）十一月を霜月。十二月を雪月といへり。霜月の事は。清輔の奥義抄（上之末）十一月霜しきりにふるゆゑ霜ふり月といふをあやまれりとあれば。十一月を霜月といふは。古く申し傳へたる異名なり。西土後漢の韓勅が造二孔廟禮器一碑に載する霜月は。集古錄に碑云。永壽二年。青龍在二涒灘一霜月之靈皇極之日。永壽桓帝年號也。按爾雅云。歲在レ申

りてより。大概官家の法名には。居士號を出だす。諸宗これにならひて居士と稱するを榮とす。庶人にして道を修行する者を居士と呼ぶは可也。今公卿大夫等を居士と稱するは。貶するに似たり。何の榮かあらんと論ぜり

○吉村又左衞門は。福島家御改易の後。浪人して霞ケ關の辻番をつとめ居りしよし。白川侯霞ケ關を御通行のをりふし。御駕籠の中より見給ひて。供頭に仰せて。夫なるは木村殿にてはなきかと。御尋ありしとき。左にて候よし御答申し上げし。侯御歸の後に使もて。奉公の望あらば。御抱被㆑成度よし。仰せ遣されしとなん。那時御答へ申し上ぐるには。白川侯には如何思召候か。某は舊領一萬石なれば。一石かけても奉公は望なきよし。申し上げつるに。侯の一萬石遣はすべき間。奉公いたすべきよし。仰せられつるゆゑに 遂に奉公致し、よし。又左衞門病死のをりふし。子孫へ一萬石永々相違あるまじきよし。被仰渡しに。又左衞門御答へ申し上げしは。某こそ一萬石の器量ありて。まさかの時は夫だけの御役に立ちてこそ。一萬石致㆓頂戴㆒し、也。我子の如きは。百石の器ならではなきゆゑ。百石も其死後に被下なば。難有よし申し上げて御辭退いたし。一向に御請はいたさぬよし。侯よりいろ〳〵と仰せありて。やう〳〵三千石にて。御請申し上げしよし。今に白川侯に仕へて。三千石を領すと或人云へり

○今俗間に用ふる。武佐升といふは。方四寸六分五厘深さ二寸三分九厘八毛にて。寸積五十一寸八分六厘餘になるなり。赤松某云。そのかみ佐々木氏。江州を領する時。其國八十萬石を以て。强ひて百萬石に當てんがため。秤八合の升を用ひ。江州武佐の驛に倉廩を建て。米の事を司どらせしより此名あり。今濃州今須驛。三輪治左衞門の家に。此升を藏せりと云ふ

○世代の字。唐の世に世民の字を諱み。世の字をすべて代の字に。書き改めしよりして。混同せしならん。父子相繼曰㆑世といひ。兄弟不㆓相爲㆒後などいへば。父子相繼は世といふべし。兄弟相及は代といふべし。世といふべからず。蔡邕獨斷に。文帝第雖㆑在㆑三。禮兄弟不㆓相爲㆒後。文帝卽高祖子。於㆓惠帝㆒兄弟也。故不㆑爲㆓惠帝後㆒。而爲㆓第二㆒。宣帝第次㆓昭

下に連ねて。居士或は信士と稱することあり。信士は漢碑の碑陰に。捐レ財助レ費人の姓名を載するに。處士故吏弟子門人義士の差別あり。義士は故吏にてもなく。弟子門人にてもなく。たゞ義を以て財を助捨する者をいふ。金石文字記に。この義士を後世の信士として。處士者德行可レ尊之人。義士則但出レ財之人而已。今人出レ財布施。背曰二信士一。宋太宗朝避二御名一。凡義字皆改爲レ信。今之信士。卽漢碑所レ稱之義士也といへり。この說趙明誠の金石錄に據りていふなれど。恐くは然らず。佛家にいふ信士は。優婆塞のことなるべし。翻譯名義集に。優婆塞優婆夷肇曰。義名二信士男信士女一。淨名疏云。此云二清淨士清淨女一。亦云二善宿男善宿女一。雖レ在二居家一。持二五戒一。男女不レ同レ宿。故云二善宿一。此未レ可二定用一。荊溪云。依二餘經文一。但云レ近レ佛。得二善宿名一。不レ可三定云二男女不レ同レ善也。涅槃疏云。一日一夜受二八戒一者。名爲二善宿一。優婆塞。而域記云二鄔波索迦一。唐曰二近事男一。舊曰二伊蒲塞一。又曰二優婆塞一。皆訛也。鄔波新迦。唐言二近事女一。舊優婆斯。又曰二優婆夷一。皆訛也。言二近事一者。親二近承事諸佛法一。故後漢書名二伊蒲塞一。注云卽優婆塞也。中華翻爲二近住一。言下受二戒行一堪中近レ僧住上也。又釋氏要覽には。天竺受二五八戒一。俗人稱レ之。亦云。清信士といひ。北魏の頃。洛州郷城老人造像碑に。清信女楊。又劉洛眞造像記に。清信士弟子劉洛眞とあれば。（金石萃編卷三十七）北魏既に信士の號あり。惣て出家剃髮せず。俗人にて。五八戒を持する。故に清淨士。或は善宿男。或は近事男。或は近住。或は清信士など稱す。もとより生前の稱にして。沒後の名にあらず。居士も吾儒にいふは所は。處士と同じことにて。禮玉藻に屋士錦帶。注謂二道藝處士一也。韓非子齋有二居士任矞仕一。不レ臣二天子一。不レ友二諸侯一など。家居して仕へざる道藝の士といふ。佛家にては然らず。釋氏要覽に。天竺種姓有レ四。一者刹帝利。（謂二變世君王種一）二者婆羅門。（秦言二外道一。謂下淨レ行志レ道別有二經書一。世世相承。或在家出家苦行。而多恃二己術一。自我慢人上。）三者毘舍。（或云二吠舍一。謂二商賈之種一）四者首陀（或云二成達羅一。謂二田農之種一）我佛釋迦牟尼世尊。卽刹帝利之種也とある。四姓を長阿含經に。刹利婆羅居士首陀に作り。（中阿含經には。刹利梵居士首陀に作る）居業多積二寶財一。名爲居士といへり。（普行品疏にも以下多積二財寶一居業豐原上爲二居士一とあり）譬喩經に。居士は毘舍に同じ。是商賈市人の稱也とあれば。商賈の種姓を居士と云ふ。故に嚩尻に。禪宗盛に起

失氣の轉失氣に同じきにても。轉反の義なるを知るべし。もし此條の反の字を語辭となして。反りて失氣すなど訓せば。反の字義通せず。又辨陽明證の下文に。傷寒四五日腹中痛。若轉氣。下趣ニ小腹ー者。此欲ニ自利ー也とあるは。腹中痛み。又は腹中痛まず。たゞ轉氣聲響して。小腹に下り趣くをいふ。腹中のことなれば矢氣とも。失氣とも。いはざれども義は同じきなり

○笈埃隨筆に。五山にて毎日早天に。方丈より祖師前へ供膳あり。先拂曉に銅盤に湯を入れ。手巾を添へて奉る。其後白粥を備ふ。未明に至り。齋飯調菜をよく煮。念を入れて鹽梅し。輪番の僧に供し奉る。四季に衣服をも奉るなり。されば俗間に早朝に起きて手水し口漱ぐを。うがいといふは。卯粥なり。事は佛氏に出づとて。瑯琊代醉編卷二十に。周朴唐末詩人。寓ニ於閩中僧寺ー。假ニ丈室ー以居。不ニ飮レ酒茹レ葷。塊然獨處。諸僧晨粥卯食。朴亦携ニ巾盂ー。斷諸僧中。畢飯而退。率以爲常。とあるを例證とす。鼎謂ふ。此說餘り學問過ぎたる考なり。烏鬼を使ふもの。鵜をして。魚を捕らしめ。咽喉より下へ下さずして吐出せしむ。今手水するもの。湯水に口を漱ぎ。咽喉より下に下さずして吐出する。恰も鵜飼の如くなればとて。鵜飼といふ說の簡明朴實なるに如かず

○今日の例。人死すれば。必ず剃髮して寺僧より戒を授けて弟子となし。葬埋することなれば
授菩薩戒儀要解云。梵網云。衆生受ニ佛戒ー。卽入ニ諸佛位ー。又云。若不レ受ニ此戒ー。名爲ニ外道邪見人輩ー。畜生無レ異。木頭無レ異故知不レ受ニ菩薩戒ー者。縱學佛法勤苦修行。經ニ千萬劫ー。秖名ニ衆生ー。欲レ達ニ輪廻ー。終無ニ得理ー。是以西天國王受レ位。百官上レ位。皆先受ニ此戒ー。蓋欲レ饒ニ益境邑人民ー故也
生前の俗名にては。佛弟子めかぬゆゑ。別に沒後の名を製し。これを戒名といふならん。しかし佛典に授戒の儀はあれども。名を授くることはなし。故に內外の二典に。戒名の字所見なし。然れば戒名といはんより。俗に從ひて法名又は法號なと。生前に用ふる所の稱を沒後に移して。法名法號といふ穩なるに如かず。法名法號の字は。唐宋の小說に多く出づ。いづれも皆生前の名なり。又士分の人には。戒名の

ては。精を天癸といふに似たれども。其論未だ盡さず。張介賓の類經に。天癸者言天一之陰氣耳。氣化爲水。因名天癸。其在人身。是謂元陰。亦曰元氣。人之未生。則此氣蘊於父母。時爲先天之元氣。第氣之初生。眞陰甚微。及其既盛。精血乃王。故女必二七。男必二八。而後天癸至。天癸既至。在女子則月事以時下。在男子則精氣溢寫。蓋必陰氣足。而後血化耳。陰氣陰精。譬之雲雨。雲者陰精之氣也。雨者陰氣之精也。未有陰霧不布而雨雪至者。亦未有雲霧不濃。而雨雪足者。然則精生於氣。而天癸至者。其卽天一之氣平。と明白に論ぜり。然れば淫慾の情動く。俗にいふ色氣つく時の至る。これ天癸至るなり。故に男女ともいふべし

〇轉矢氣は。元の蔣正子が山房隨筆に。三山林觀過年七歲嬉游市中。以讕詩自命。或戲令詠轉矢氣。云視之不見。名曰希聽之不聞。名曰夷。不啻若自其口出。人皆掩鼻而過之。林曾試神童科。不甚達。とありて。すかし屁とするに似たり。然れども此文を堅瓠二集に。令詠洩氣に作る。一夕話に載する所も亦同じ。洩氣を是とす。轉矢氣とするは。恐らくは非ならん。轉矢氣は矢氣肛門に逼り。外に洩れず。聲響の内に反轉す。俗に屁かへりといふこれなり。轉矢氣。或は轉失氣に作る。傷寒論辯陽明脈證幷治篇に。轉失氣の字三見す。宋板及び諸本皆轉失氣に作る。玉函經獨り轉矢氣に作る。何にても通ずれども。轉矢氣に作るを文理穩順とす條辨に曰。黃氏昊漢書作屎。古屎矢通。失傳寫誤。續醫說醫學全書曰。是下焦泄氣云。俗去屁也。考之篇韻。屎矢通用。竊恐傳寫之誤矢爲失耳。宜從轉矢氣爲是。且文理頗順。若以失字則於義爲難訓矣。舒氏云。案矢氣二字。從前書中皆云失氣。此誤也。緣矢字誤寫出頭耳。蓋矢與屎同。矢氣者屁。乃矢之氣也。且失字之上。無轉字之理。轉乃轉運也。以其氣由轉運而出。若果失下。夫何轉之有。確爲矢子無疑

何となれば。矢氣はたゞ矢の氣なれば。卽ち屁なり。失氣は矢氣の放失するなれば。放屁なり。其放失すべき。矢氣の外に洩れずして。内に轉反するを。轉失氣といふ。故に辨霍亂病脈證幷治篇に。似欲大便而反失氣。仍不利者此屬陽明也とある。反

節ニ以求レ難レ老注熊經若ニ熊之攀レ枝自懸一也とは誰もよく知れることなれども。雲笈七籤に。漢時有ニ道士君倩一者。爲ニ導引之術一作ニ猿經鴟顧一引ニ挽腰體一動ニ諸關節一。以求レ難レ老と猿經の字奇ならずや

○十二月の水の名を。楊升菴外集に。正月解凍水。二月白蘋水。三月桃花水。四月瓜蔓水。五月麥黄水。六月山礬水。七月豆花水。八月荻苗水。九月霜降水。十月復槽水。十一月走凌水。十二月蹙凌水。見ニ九州記一。とありて。宋の劉跂の暇日記に載する所と同じ。然るを水衡記には。凌解水黄河正月水名。桃花水二月三月水名。麥黄水四月水名。瓜蔓水五月水延蔓。故以名。山礬水六月水名。荻苗水七月八月荻花。故以名。登高水九月水名。復槽水十月水落復ニ故道一。蹙凌水十一月。十二月斷復結とありて。黄河に限るやうなり。漢書溝洫志にも。河決而桃花水美溢。注三月水漲名ともあれば。水衡記にいへる如くなるやとおもひしに。韓詩章句に。三月桃花水之時。鄭國之俗。二月上巳於ニ溱洧雨水之上一執レ蘭招レ魂續レ魄拂ニ除不祥一といへは。汎く十二月の水をいふに似たり。

○眉公見聞録。及堅瓠集に。元旦拜レ年。明末清初。用ニ古簡一有ニ稱呼一康熙中。則易ニ紅單一。書ニ某人拜賀一。素無ニ衣冠一逐逐。大是可レ憎。不レ知レ起ニ於何時一文衡山先生一絶。眞可レ撫レ掌也云。不レ求レ見レ面惟通レ謁。名刺朝來滿ニ敝廬一我亦隨レ人投ニ數紙一。世情嫌レ簡不レ嫌レ虚といへる。我邦俗のなせる所にて。澆末の俗憎むべきは。固より論なしといへども。簡なるまでにて。なほ年賀の禮は頗るありと思ひしに。癸辛雜識に載せる。節序交賀の禮。不レ能ニ親至一者。毎以ニ束刺一僉名ニ於上一。使ニ一僕遍投一レ之。俗以爲レ常。など薄俗至らざる所なしとて。感心せしが。後に堯山堂外紀に。京師毎ニ正旦一主人皆出賀。惟置ニ白紙薄拜筆硏於几上一。賀客至書ニ其名一無ニ送迎一也。といへるを見て。澆薄のさま。今日の如きにまたも感せり

○天癸は女子の月經のやうにいへど。素問上古天眞論篇に。女子七歳腎氣盛。齒更髮長。二七而天癸至。任脈通。大衝脈盛。月事以レ時下。故有レ子云々。丈夫八歳腎氣實。髮長齒更。二八腎氣盛。天癸至。精氣溢寫。陰陽和。故能有レ子とありて。王冰の注に。男女有ニ陰陽之質不一レ同。天癸有ニ精血之形亦異一。といへば女子に在りては。血を天癸といひ。丈夫に在り

寅申に配當し。かく異形の物を擬造揑出し。若し吉凶禍福を問ふものあれば。其人の生れし。年月日時所レ直の支干を推して。占斷することにありけん。祿命のことは通俗編に委し。通俗編卷十二。文海披抄。李虛中以二人生年月日時所一レ直干支。推二人禍福生死一。百不レ失レ一。初不レ用レ時也。自レ宋而後。乃幷二其時一參二合之一。謂二之八字一。按唐有二珞琭子三命一卷一。祿命家奉爲二本經一。三命卽年月日干支也。宋林開加以二時胎一。謂二之五命一。撰二五命祕訣一卷一。皆見二晁氏讀書志一。今所レ謂八字旣取二用時一仍不レ加レ胎。非二三命一亦非二五命一。乃四耳。又云。許氏說文包字象二人懷妊一已在レ中。象二子未レ成レ形也。元氣起二于子一。男左行三十。女右行二十。俱立二于巳一。爲二夫婦一。懷二妊于巳一。巳爲レ子。十月而生。男起レ巳至レ寅。女起レ巳至レ申。故男年始レ寅。女年始レ申也。演繁露此卽今之命家謂下男生一歲小運起レ寅。女生一歲小運越上レ申者。是也。其說若レ出二附會一。而今世命術通用。其說二禍福一甚驗。不レ知許氏于レ何得レ之。殆漢世巳有二推命之法一。而許氏得レ之耶。或是許氏自推二男女之理一而日者取以爲レ用也とあり祿命の字義は。王充が論衡命義篇に。人有レ命有レ祿。命者富貴貧賤也。祿者盛衰興廢也とありて。卜者の祿命を談ずることは。史記日者傳に。卜者多虛二高祿命一以悅二人志一と見えて。漢の頃早くも行はれしにぞ。總て人の生れし。年月日時所レ直の支干を推して。其一生の禍福吉凶を占斷す。これ其人の本命なり。佛家にてはこれを定業といふ。卽ち花報なり。花報を果報と心得たる人あれど。果報は過去に在りて。花報は現世にあり。一樣にいふべからず。容臺別集雜記に。世人以二生時一爲二定命一。釋家則謂二之定業一。定業唯其宿命通者能知レ之。吉凶禍福與二善惡一不レ應者。果報也。與二善惡一相應者。花報也。花報在二現世一人人可二以レ理推一。果報在二前生一。雖二李虛中張果老一亦窮二於術一。とあるにて知るべし。今人果報の名を知りて。花報を知らざるもの多し

○導引することを。熊經と云ふことは。莊子に吹呴呼吸。吐レ故納レ新。熊經鳥申。爲レ壽而已矣。此導引之士。養レ形之人。彭祖壽考者之所レ好也とありて。淮南子に。如二鴻之好一レ聲熊之好レ經といへる如く。熊は經を好むもの故名けしにて。後漢書華陀傳に。古之仙者。爲二導引之事一。熊經鴟顧。引二挽腰體一。動二諸關

避レ所否。泰親曰。今不レ可レ避者。傳聞今年所々此鳥鳴云々。泰親曰。今問二此鳥怪一七八。同二十四日甲辰。鵼事女房勞重。又拾芥抄上本。怪鳥成巢部に。永久三年七月之比。洛中有二鵼事一。此時仙洞有二此沙汰一。度支郎幷李部少卿。被レ獻二勘文一同諸頌部二。鵼鳴く時の歌を載す。こみち鳥。我かきもとに鳴きつなり。人まで聞きつゆくたまもあらじ。とあるにて見れば。其頃鵼の鳴き渡ることは。毎々ありしと見ゆ。宮嬪仕女等の物忌ひする心より。聞きなれざる怪鳥の雲井に聲すれば。何の祟ぞ。何の障碍ぞ。と事々しくいひ罵り。或は占筮。或は祈禱など立ち騷ぐより。何人か好事に。かく異形なる物を杜撰せしにこそ。故に鎌倉實記にはこの事を疑ひて。賴政鵼の聲したるものを射たること。平家物語盛衰記に記せり。今に至りて謠などにもつくり。婦人童子までも。皆能く知りて語りあへり。然るに日並の實錄等に。此事を不レ記。此事小事にあらず。古今の珍事なり。日並の實錄には。いさゝかの怪事まで悉く記せり。かほどの珍事に於て。不レ記事甚不審なり。一説に實云。此事有るに非ず。假りに此事を設けて。たとへば頭は申。尾は巳。足手は寅の如くといひて。方角にとりて。賴政が弓德を表するといへり。私云。此亦附會の說なり。抑賴政は一箇の小臣なり。弓は賴政の一藝なり。其藝德を表せんとて。辱も禁庭に於て。天怪を設け。天子の御惱といひ。寢殿の上に落つるなど、。勿體なき僞りいふべからず。かゝる僞り事を不レ設とも。弓德を表することは。外の譬もあるべし。甚だ笑ふべき說なり。熟思ふに。昔より今に至るまで。いさゝか形のあることを。おびたゞしくいひなすことゝ。妖化ものばなしの習なりといへり。余思ふに。何れ附會にあるべけれど。附會するも杜撰ながら。少しの所レ據はあるべきなり。これ必ず祿命家に出でしならん。祿命家の說に。人は一元の氣。子に起り。男は左行。三十年にして娶り。女は右行。二十年にして嫁す。倶に巳に立ちて懷孕し。男は左行。十月にして寅に生れ。女は右行。十月にして申に生る。其懷孕に在りて未だ生れざる巳前を胎とし。これを年月日時に合せて五命といふ。然れば男女とも巳に孕み。寅申に生るゝ理あるを以て。眼にさへぎらざれば。形容すべきやうなき。怪鳥を十二禽の巳

足は狸。音は鵼なりといひ。平家物語には。頭は猿。むくろは狸。尾はくちなは。手足は虎のすがたにて。なく聲ぬえに似たり。とあれば。二書とも其聲のみ。鵼に似たりといふことにして。總體の名を鵼といひしに非ず。長門本平家物語巻一に。淸盛内裏に伺候したり。夜半計に南殿にぬえの音したる鳥。ひゞき渡りたり。藤の侍從季賢番にておはしけるが。人やあると召されければ。淸盛其時左衛門尉にて有りけるが。候ふと答ふ。南殿に朝敵あり。罷り出で、搦めよと仰あり。淸盛こはいかに。目に見ゆるものなりとも。飛行自在にて天を翔らんものを。捕る事や有るべき。況やすがたもなく。聲許有る物をいかでかさるべきと思はれけるが云々。畏りて承り候ひぬとて。音について。宣旨ぞと申して。おどりかゝる口口左衛門尉の右の袖の中に飛び入りてけり。取りて參らせたり。叡覽あるに誠に少鳥なり。くせ物なりとて。御評定あり。能々御覽ぜらるゝに。年老いたる毛朱なり。毛朱とは。年老いたる鼠の唐名なり。この事。源平盛衰記にも載せたりとあれど。鼠の年老いたるを。毛朱と云ふこと。古今の書に所見なし。余が考には毛朱は。毛末の誤なるべし。もみは鼯鼠にて。俗に云ふむささびなり。朱と末と字形近似たるを以て。誤寫せしにやあらん。和名抄巻十八。毛群の部に云。鼺鼠一名鼯鼠。上音吾和名毛美。俗云。無佐佐比 兼名苑注云。狀如猨而肉翼。似二蝙蝠一。能從レ高而下。不レ能二從レ下而上一。常食二火煙一。聲如二小兒一者也とあるにて知るべし。この毛朱も。ぬえの音したる鳥ひゞき渡りたりといへば。賴政の鵼も同日の談にして。鵼は鵼。毛朱は毛末にて別物なりや。毛朱の鵼の音しつるにて一物なりや。兎まれ角まれ。淸盛も鵼を退治せられしことありしなり。賴政の鵼も。平家物語にて。近衛院の御時仁平二條院の御時應保と兩度の事を載せ。盛衰記には後白河保元二年の事とし。長門本平家物語には。鳥羽院の御時とす。かく說々異同ありて。一定せずといへども。賴政も鵼を射られし事のありしには疑なし。但所レ言の如く。猿や虎を取り聚めたる。異形の物にはあらざりしならん。賴長公の台記に。康治三年四月廿五日。今日寅刻鵼鳴。便泰親占曰吉也。同六月十八日戊戌。丑刻計聞二鵼聲一。天明就レ寢。翼日召二泰親一。令レ占二鵼事一曰。可レ愼二火事口舌一。問曰。可レ

木。入ニ信安縣寶阪一。見ニ童子四人鼓レ琴。倚レ柯聽レ之。既去。柯爛。逹レ家已數十年。一事而所レ記異也。といひて棊のことは見えず。述異記も。棊而歌といひ。因聽レ之といへば。歌に聽きとれて。柯の爛するを知らざるに似たり。東陽記は。もとより琴のみゆゑ。棊の典故には引用し難く思はる。又橘中の樂も。棊の典故とすれば誤なり。唐の牛僧孺の幽怪錄に。巴卭人。有ニ橘園一。霜後橘盡收斂。有ニ兩大橘一。如ニ三斗盎一。巴人異レ之。剖開每レ橘有ニ二叟一。鬚眉皤然。肌體紅明。相對象戲。談笑自若。一叟曰。橘中之樂。不レ減ニ商山一。但不レ得ニ深レ根固レ蔕。爲ニ愚人一摘下耳とあれば。棊にはあらずして。象戲なること論を待たず

○和名類聚鈔卷十八に。鵅唐韻云。鵅音空。漢語抄云。沼江 怪鳥也とありて。如何なる鳥と。名狀を定かにいはねど。いづれ常に異なる鳥なればこそ。怪鳥とはいひたるなれ

冠辭考卷七に。萬葉卷二に。奴要子鳥卜歎居者(ヌエコトリウラナキヲレバ)卷十に。奴延鳥之裏歎座津(ヌエトリノウラナキマシツ)。卷十七に。奴要鳥能宇良奈氣之都追(ヌエトリノウラナキシツツ)云々。こはかれが聲のかなしくうらめしげなるを。人の哭泣に譬へておけり。古事記に。八千予神の。つまとひしてうれへ給ふ時 阿遠夜麻爾奴延波那伎(アヲヤマニヌエハナキ)とよみ給ふも。物おもふ時に。此聲を聞きて。いよ〱愁へましたまへる意なり。卷五に。貧窮問答の歌 奴延鳥乃能杼與比居爾(ヌエトリノノドヨビヲルニ)云々。これも哭にたとへたる意は右に同じ。さて裏歎とかき。能杼與比といへるをもて。或人は隱聲になく鳥ならんといひしを。武藏の上野に實傳僧都といふ有りしが。もと三井寺に住學せしほど。此寺にてぬえの鳴は凶きさがとていむを。たま〱は聞き傳へしに。遙なる谷に鳴くも。耳とほるばかり。高く苦しき聲なり。とかたり侍りし。又土佐人大神垣守がいへる。奴衣鳥は今の猿樂の笛のひしぎてふ音の如く鳴きぬ。亥の時ばかりより始めて夜る鳴くなり。鳩よりもいさゝか大きにて。鳶の羽の如し。よりておもふに。和名抄に。鵅沼江怪鳥也とあれば。梟などの類にて夜る鳴くならん。且喉呼(のどよび)とも書けるは。隱聲なるにはあらで。からころに鳴きかたにていふなりけり。うら鳴は恨鳴なり

頼政の射られしは。得もしれぬ怪獸にて。鳥とはおもはれず。源平盛衰記に。頭は猿。背は虎。尾は狐。

善庵隨筆

朝川鼎 著

○予。先年大橋宗桂の需に應じて。其著述せる將棊の書に。序することありしに。王將といふ馬子(コマ)は。何とも疑はしき名なり。王なれば王。將なれば將といふべし。王と將と混稱する理あるまじと。將棊の諸書を攷證するに。開祖宗桂より。四代目宗桂まで。代々著述する所の將棊圖式に。雙方とも玉將とありて。王將の名なし。因りて思ふに。玉を以て大將とし。金銀を副將とするなるべし。左すれば。金將。銀將の名も據ありて。ひとしほ面白く覺ゆ。蓋し五代目宗桂以後。雙方の同じく紛はしきを嫌ひ。一方は一點を省きて。差別せしにやあらんと。今の宗桂に語りしに。宗桂曰く。それは必ず然るべし。其わけは。毎年十一月十七日。御吉例にて。御城に於て。將棊仰せ付けられ。其圖譜を上るに。雙方とも玉將と書すること。先例にて。王將とはいはぬことの由。家に申し傳へ。今に代々玉將と書き上れども。何故といふことを知らざりしに。これにて明白なりと。遂に其嘗て著述せる書を。將棊明玉と。名を易へ上梓し。予が序を卷首に載せたりき。これ細事といへども。邦俗先規を固守して。容易に傳承の字を。改易せざるより。攷古の資となることもあるは。純樸の一得といふべし

○爛柯の故事は。晉書に王質入レ山斫レ木。見二二童圍レ棊觀レ之。及レ起斧柯已爛矣。とあるよしなれど今の晉書にはなし。古へ晉書幾通りもあれば。何れの晉書にやありけん。梁の任昉の述異記卷上に。信安郡有二石室山一。晉時王質伐レ木至。見二童子數人棊而歌一。質因聽レ之。童子以二一物一與レ質。如二棗核一。質含レ之。不レ覺レ饑。俄頃童子謂曰。何不レ去。質起視二斧柯一。爛盡。既歸。無二復時人一。とあり。左れど後魏の酈道元の水經注卷四十に。東陽記を引きて。信安縣。有二縣室阪一。晉中朝時。有二民王質一。伐レ木至二石室一。中見二童子四人彈レ琴而歌一。質因留倚レ柯聽レ之。童子以二一物如二棗核一與レ質。質含レ之。便不二復飢一。俄頃童子曰。其歸承レ聲而去。斧柯漼然爛盡。既歸。質去レ家已數十年。親情凋落。無二復向時比一矣。瑯琊代醉編卷二十一。爛柯多用二棋事一。水經注。晉民王質伐レ

善庵隨筆目錄

善庵隨筆目錄終

名ある弓とりなれしかるにこよひいみじき（甚）恥見たりまづ此のかたき（相手）とするさぶるこ（遊女）はいづちいにたる宵よりまちつけをれどふとかげをだに見せずこまもろこしよりわたせる名玉のごとくわれをばわたあつきふすまにくゝみおきてとりいろふものもなしにくしともにくしこれをもしのぶべくんばいづれをかしのぶべからざらん此の家のあるじこゝにゐてこたいめ（對面）していふべきことありとひぢもちいかめしくしてのゝしる男たい〳〵しき（下可有）事しばしのどめさせ給へおもとに聞ゆべくといひてたちてゆくおのれいづくへかに（彼）ぐるしやかしらうちわりてんといひざまたちかゝるほどにあそび（遊女）來てなにごとをかの給ふけの（燎氣）のぼりてくるしければしばしかしこにてつくろふとてうつぶしふして侍りさなはらたゝせ給ひそといひつゝ手を袖にいれてかたのほどいさゝかつみたればさばかりたけ〳〵しくはやりたるものゝにはかになへ〳〵と折れてゐみがほつくりてひたひに手をあてゝわづらひ給へる事はしらで申しゝなりゆるい給へといふも聲ふるへていとあまへたるおももちなりさてひかれて屛風のうちにいりぬあはれやう〳〵さま〳〵なる心々おろかなる筆にはかきとりがたくや

〔寅時〕　まくらがみにひゞく鐘のおとはあさくさでらのにやなどたどるほどに例の中やどりがもとなる男のあかしともして屛風のはざまより顔さしいれて御むかへにまうできつといふまだきにいそがせ給ふべしやはとふしながらいふ聲いとねぶたげなりいなつとめてなにがしどのゝみたちにようありてめさせ給ふなりおそくばびんなからんといひつゝおき出づればみたちに出でさせたまはんよりは北の方の御いさめこそおそろしうおぼすらめとくいそがせ給へなどいふもいとねたげ（妬）なるしりめなりとかくしてほそどのゝいたじきふみならしつゝ出でていぬまろ（我）はむねいたければおくり聞えずといへばゆゝしき事湯まゐりてはやうさわやぎ（爽）給へなど打ち見かへりつゝいふもあさくはあらぬこゝろなるべし

すみだ川すみわびぬらしうかれめの
　うきせながらにながらふる身は

北里十二時　終

思ふにかなはぬ物は世の中ぞかしあなかたはらいたしやあなたにはさだ過ぎたる女の聲して宵まとひのわらはをしかりさいなむ格子のかたやう〳〵人ずくなになりてむげにわかきもの丶みのこりゐて長き夜をわびかほなり

［子時］　つゞみをうつこと子午はこ丶のつとこそ庭喜の式には記したれさるをこ丶もとにてははうし木をよつぞうつなる此のおとにあはせてかうしのうちなるあそびどもはら〳〵とたちていぬ此のときくる丶戸をさしかうしうちなるへだてのさうじをもあくるになんこのおとなひこなたかなたひとつ時なればいみじくひゞきあひてかみのなるにやとさへおどろかれぬくりやにてはらいしをしきがふしたかつきのたぐひあらひのごひてとりをさめなどすまらうどせぬ女ばらわらはなどみなふしどにいりてふすたゞ番の男のみひとりおきゐてとき〴〵奥と口と見めぐりてはうし木うちありく大路にはかな杖のやうなるものふりならしつ丶火あやふしなどよびつ丶すぎゆくさてははらとりのめくらほうしそばむぎうる男のこゑのみ大路のかたに聞えてゆきかふ人もをさ〳〵見えずなりぬ

［丑時］　かみしもみなしづまりぬ雲井をわたるかりの聲も所がらにやあはれに聞きなさる丶から猫のねう〳〵となくにもたれかはおきあかすべくとぞおぼゆるされど猶ねもやらで夜ひとようちかたらふ人もありあるは鹽屋のけぶり風になびくをうらみ又山川のあさき瀬をくねるなどとり〴〵なりあやにくにまらうどの二三人きあひたるはせんすべなければ例のいもうとだつ人を出だしてあへしらはすおもへどえこそなどにくきことをさへいふめりあるは熊野の神にちかひてせいしに血をあえてとらせつるをたがまことをかとよろこぶ男もあるをたけなる髪をおしきりてやれるをうれしとだにもみえざるにやかづらながらにたえぬるもみえたるはやうよりゐなかにやしなはれて舌だみてものいふ男のよなかともいはず手うちた丶きてをのこどもとく來といふ聲いとむく〳〵し番の男きてかしこまればゐたけたかうなしてさけびいへるは何がしこそとの丶みうちにありても

しきこといへばさらなり

〔戌時〕大きなるすはまやうの物うちかづきてもてくいづこの峯の松にかあらんかげともたのむばかりなるをひきゝりて中にすゑたり人の心の秋風にうつ(變)ろはせじとのいはひごとにやたかどのにはざうしどもあまたへだてゝつくりみがきてありづしにかひ(厨子貝)などでい(泥)してまきゐしたり中やどりがともしびさきにたてゝまらうどらのぼりてく男たかつきもて出でゝぬかづく(低頭)しばしありて酔ひの香高うかをりてあそびどもかゞやぎ(赤)出でぬたゞ生きてはたらく辨才天女のこゝにあらはれ給へるにやとうちおどろかるまらうどさかづきとりてあそびにさす此のあひだのさほふ(作法)いとつゝましくうるはしきははじめてのげざん(見参)なればなるべしかいひく(掻引)女など出できてうたひなどすべしまた入り來るより女どものかぎり出できてあざな(戯)にやあらん今めかしき名をよびたてゝわらひそほれてうちとけかたらふは月ごろきかよふまらうどにやあらんここなるしも男をさしてぎふとよびつけたるはいかなるゆゑにかあらん髪はつれたる女のまがは(瞼)くろきがはしつかたに曹司しめてをるをやりてとはよぶなりそれはあそびらがうへに心をやりてよろづあつかふればさる名をばおほせけるにや

〔亥時〕ふすまは三つ五つ綿あつらかにつくりて大きなるひたゝれめく物さへまうけおきついづれもくれなゐのにしきなればさながらたつたの山の秋にあへらんやうなりうゐ山ぶみなるまらうどはひとりふせりて今やこんずらんとあくびうちしてまつめりされどむご(無斯)にこねばいたづら(虚)いね(寂)をなど呻きつゝふしをりとばかりすぐしてあしおと(跫音)すなりそゝやと思ひてそらねしてをればしづかに入りきて屛風をおしあけてね給ひぬるかといふ聲はづかしげなり猶そらねしてをればあなたに出でゝともし火かゝげ硯とり出でゝ文かくやゝひさしくためらふほど千とせをすぐすこゝちぞするや里をばかれずとこそむかしの人もよみたれ思ひぐまなき人もありけりなど思ふもうち出でねばたれかはしらんいでやたからにかへて戀する人だに斯うやすからぬこゝろいられはすなりさば

じまらうどにむかひてかれはしんじちのすみかと定めて侍れど本性のひがみてみそか男をのみまうけてかたらひ侍りといへば女ばら手打ちたゝきて笑ふかゝるにむかひなるすのうちよりわらはのくろきあしだはきたるが櫻のえだ一もと手にうちさゝげていりきぬまらうどにそひをるあそびがまへについゐてあがおもとの聞ゆなり此の一枝花もおかしう侍ればたいまつるになんこよひは櫻田なる御心しりのわたらせ給うけるよしわりなううれしうこそおぼすらめうらやましくこそ思う給へらるれといふをまらうどはほのきけどしらずがほつくるもをかし何事かこまやかにいらへしてよく聞えてよといへばわらはは足ばやにたちていぬその隣なるはすだれおろしたればよくもみえねど男どちならびてゐてからこゑにうたふつねきく鳥もわか／＼とゝしをりあげたる糸のしらべもほそく聞えてかみさびぬるこわづかひもやうありげなり

〔酉時〕たそがれのころわらはの格子の内にたちてさしむかひたる家のあきびとをよびて物かふとてむかひなる人々ところゑあげてよぶもうつくしげなり又おなじやうなるわらはのあかつきたる衣きてつゝみにつゝみたるものわきばさみてはしるは何事するにかかの伊勢のごのせにかはりゆくとよみけんやうのわざするにやあらんをのこのかうしのとにたゝずみて内なる女と打ちさゝやくありかたみに山鳥の心ちやすらんかし中のまに伊勢のおほん神をまつれる所ありしも男の來て鈴をうちならせばあそびらはみなあるかぎり格子の間にゆきてゐならぶかの男はおまへのみあかしを物にうつして格子の間の油つぎにともしつく横座にすわりたるはやごとなきほどなるべし壁には鳳といふ鳥をゑがきておしたり二の町なる女ばらは此の壁にせなかおしつゝおしこりをりまがきのきはにならびたるはそれよりもおとりのかたにやこの女ばらすがゝきたかうひきならす大路にはこゝらの人さまよひて格子のひまよりのぞくあかしみつよつともしつらねて男の袖をひかへて女ばら打ちまじりそゝめきさうどきて入りくるなどにぎはゝ

らうたがるあやしきえせ法師をまがきのとによびいれてゆめがたりしうらかたなど丶ふひさしくもなりにけるかなとうちすじぬるは此のゆふぐれのこ丶ろもとなきにやあらん又かたへに打ちしめりて心のうらぞまきしかりけるといふはすさめられぬる人なるべしとの方にはそば麥いれたる箱どもになひつゞけてくばりありくさるはよるのものあたらしうてうじたるいはひごと丶てか丶ることはするなりけり大方ふすまなどは打ちしのびてとりかくし物すべきをもていで丶け丶しくもてなす例にかはりたるならはしになん

〔中時〕ゆふひ西にかたぶくころおのがじ丶さうぞきつくろひてわらは引きつれてねり出でたる此の世の人とは見えず柳櫻山吹など折からのいろあひつき〳〵しくぬひものざうがんなどめもかゞやくばかりにてすそながうひきたるうはぎどもいみじうなまめいたりこ丶は大門よりのたゞぢにて中の町とぞよぶめる家ごとにすだれかけて軒には花色にそめたる布ひきわたしたりいもうとだつ人のかたにか丶りてすのうちなる人に物うちいひてやをら隣のかたへあゆみゆくさまいとのどかなりこ丶にある家どもはあそびがもとにか丶づらふ人のしばしのほどの中やどりとて打ちやすらふ所となんやよひのころは花の木ども所せうゑわたしたれば右ひだりのたがどのをかけてしら雲のか丶らぬ軒なしまらうど丶おぼしきがふところ大きやかになしてはしゐしてをりあそび二三人ちひさきわらはふたりそひゐたりうたうたふ女共四人ばかりたかやかに打ちわらひ酒しひそし丶きさわぐまらうどあるじにさかつきさしたるをいたゞきをるほど女ひきさしてへいじとりてつぐに酒したたりてひざのあたりぬれぬあるじあわて丶紙もてかいのごひつ丶しりめにかけていへるはましがわれにけさうじてしば〳〵文おこせつるをうけひかでありしをねたしとてか丶ることはしつるなめりされどまことにはにくしとは思はざらましといへば女いかがはあが君ざねとこそたのみ奉れといひて笑ふある

かなる老人なりきされど老らかにもてなしあへしらひてかへしゝは人がらのにぎはしくたのもしげなればぞかしといひてたかやかにわらひてゆかたびらないがしろにうちかけてつゝむべき所もおほひだにせず立ちはしりつゝいぬるいとばうぞくなり又いりくるもおなじすぢなるしりうごとのみいふめりいとかしかまし

〔午時〕おくまりたるかたのざうしにいりゐておの〳〵けさうしみがきさわぐわかきは衣びつながもちにうちたるかなぐなどみがく物のふたに花の枝こちたくつみもてきて部屋ごとの花がめにさしていぬるは花うるをのこなるべしべにしろいものもとゆひくし扇などいとふさに箱にいれてもてきてうる人ありくすしにやあらんとやうなるいろの衣きてかほもちうべ〳〵しきがおくなるつぼねにいりきぬ屏風のうちには色はさをにしろくあをみおとろへたる女のほそき紐してひたひのあたりひきゆひてふしをりくすしちひさき綿に膏藥といふものをぬりつけて屏風のうちにいりてふたゝび出來てことにもあらじなどいひてしはぶきうちしてかへりぬいかなるやまひにかあらんいとほしげなりはしらによりゐて文かく人あり手はよしやあしやさながらみゝずのうごめくやうにぞかいなしたるまらうどのもとよりおこせたる文にやうちひらきよみ見てものしきけしきにまじりひきあげて何事いふぞをこなりやかゝること誰かはしらんなどこわだかにふづくみいへるは何ごとゝはしらねどおもふにたがふことにこそあらめとかたはらいたし

〔未時〕さとよりめおやのとぶらひきてなきみわらひみ物がたりなどすげにみるかひある女子をかゝる所にはなち置きては心のやみのはるくべきかたもあらじかし此のころほひよりあそびどもかうしの間に出でゝならぶげそうなればかいまみする人もなしただゐなかうどのこち〳〵しきがたちめぐらひつゝめを大きになしてうかゞふうちには石なとり貝あはせなどしてあそぶふたつばかりのちごのおかしげなるをひざにすゑてうつくしみあそばせかいなでつゝ

ひかれつゝゆくゆきつきていかにかすらんおぼつかなし

〔辰時〕　ものかう法師ばらうちつれてはち〳〵とよびつゝ入りもてくむづかし(來厭)げなる桶さしになひてきたなげなる男どものいりくるも見ゆ物ぬふ女のちかきわたりにすめるがつゝみひきさげてくるもあり髪つがぬる男にやたすきひきゆひていかめしきくしげ(櫛笥)ひきさげていそがしげにはしりあるくわかきあそびどもは猶よべのまゝにて夢路にはあしもやすめぬにやいびきはなやかにかきてあらぬねごとをさへいふなる夜ひとよかたらひあかしてこうじ(困)けるにやけさも猶かへらでやがてねふせるまらうどもあるべし男どもは郎屋々々はさらなりほそどの(廊)くりや(厨)のいたじきなどかいはきのごひなどす大門をはなれてながきつゝみありその下にいさゝかのまちあるをくざく長屋といふこしかく(輿舁)ものどもすみどころなり今戸橋のあたりにはふなをさの家ども軒をならべてたてり此のわたりはいづれもよのつねのごとくこのほどあさげ(朝食)などかしぐ(炊)めり

〔巳時〕　今ぞ家の内やう〳〵おき出でゝのゝしりさわぐ海にとりたるもの山にほりたる物いづくよりもてくるにかになひきてあきなふ家あるじうるしの板によべのまらうどの數しるしたるをとり出でて物にかきつくめ(妻)はこなたにゐてけぶり草くゆらしつゝ何くれのことども人にをしへてまかなはすからうじて(漸)あそびどもゝおき出でゝひと所にこぞりゐてあさげくひてさてゆぶね(浴斛)に入りひたりて口々さへづりあへりさるあまたあるあそびどもなれば心のおもむけもおの〳〵いとことなり物まめやかにつゝましくこめいたるもあり又もてひがめたることのみいひておぞ(強)ましくさがなき(不貞)もおほかりかたみ(互)にゆぶねの口にかゝまりゐてあかかきながしつゝいへることよつかさのこそなんけさはいといぎたな(貪眠)かりし思ふ人にこそあひ給ひつらめといへばあらずわかい男なるがよろづさしすぐいて詞おほくなめげ(無禮)なるが、にくければしりさしむけてねてあかしたりきといらふ(答)まろ(我)がもとなるは鼻ひらめにひたひはれてわきくそ(胡臭)さへ花や

北里十二時

石川雅望著

かりにもおにのとは在五の物語にしるしつけたりあだちの原のくろ塚にとは兼盛の朝臣ぞよみたなる大江戸の北にあたりて然るもの丶すだくところありよしはらのさと丶はよぶめりげにつながぬ身のよるべさだめずあくがれまどふたはれをの枕ひきゆふわたりなりとかいでやか丶るたのしき所にあそびてはわかきどちのはなご丶ろには家路に歸らんこともわすれて斧の柄もこ丶にくたいつべしかの御佛のすみ給へる極樂の國をかけて聞えんはかたじけなけれどあそびがともがらにも猶こ丶の品のけぢめありてそのしなさま〲にわかれたりさるをげほんといへどもたりぬべしなどいふはよくすいたる人の詞なるべくや

〔卯時〕あけぐれの空のおぼ〲しきにかどのとのごほごほとなるはまらうどのかへるにやあらんあそびどもはなれたるきぬのすそひきか丶げてあはたゞしくはしりきてはひりのくちにた丶ずみたちておくりすわきてしたしうせるはひきつれて中やどりの家にいたりて酒くみかはしかゆす丶りなどしてさて大門のもとにいたりてわかるめりねくたれのあさがほ見るかひありなどおもふも心のなしにやあらんやう〲あけゆくほどこ丶らの人どもいろ〲の衣どもきたるがこきまぜにいできていそぎゆくあしもとねぐらをはなる丶からすにもおとらず竹ごしかくもの丶あくびうちしてあまたならびゐたるこ丶ろもとなげなりこ丶に柳ひともとたてり見かへりの柳とぞよぶなる糸によるものとはなしになどうちながむる人もありぬべし門のうちに女ばら五七人物にかくれた丶ずみをりさるはたのめし人のよそ人にうつろひぬるをにくみてそのむくいせんとてしたまつなりけり男は斯うとだにしらねばのど〲とあゆみくるをふいにはら〲といできてひきとらへてゐてゆくゆかじとすまへどあまたしてしたゝかにつかみか丶りぬればすべなくて手まどひしつ丶おめ〲となりて

人誤りてカレトキにしたる。又。坊の條下に。禮記坊記の文。君子之道。辟則坊與。坊二民之所一レ不レ足者也。云々の句讀のたがへる。この類多かるべし。しかれども誤脱は讀むに隨ひて。はやくしらるゝものなればこゝに擧げざるなり。

葉。加賀の江沼。兩郡の郷名なる三枝は。顯宗天皇の三年。夏四月庚申に置かせ給ひし。福草部の名殘なり。この條。上集三枝の編と合せ見るべし【人參】

和名追考　萬葉集第十六所射鹿乎認河邊之和草。身若加倍爾佐宿之兒等波母。この歌に雄略紀を引きて皇后幡梭姫皇女の故事によりてよめるなりといひしは。釋きそこねたるなり。始より人參をよみたりといへるは違はねども。こは齊明紀なる齊明天皇の御歌を引きて解くべし。書紀卷廿六。齊明天皇。皇孫を悼みて作り給ひし。第二歌に云。伊喩之之乎都那遇何播杯能倭柯矩娑能。倭柯倶阿利岐滕阿我謨娑儺倶爾。御歌のこゝろ。鹿をもて人の命に譬へ。又河邊は。光陰の流るゝに喩へたり。皇孫は。尚幼少におはしませしかば。弱草とよみ給へり。この類。後の歌に多くあり。しかれども早世し給へば。これも亦人の一期なり。わかしといふとも。わかかりしとは。われはおもはずとなり萬葉集第十六なる。和草の歌はこれを本にしてよみたるなり。所射鹿の鹿は。これ亦人の命なり。命の終るは。その鹿の射られたるが如し。その絶えんとする玉の緒の鹿をとゞむるは。人參の效にあり。こゝをもて認むる河邊之和草とよめり。下の句。身若可倍爾佐宿之兒等波母とは。人參の效にある物から。身わかきかひにこそ。病み臥せしより。絶えなんとしつる玉の緒の鹿をも。とゞめたりといふなり。句々を轉倒して味へば。通じ易かるべしこの歌は。梁の阮孝緒が母。王氏が故事。卽鹿逃草の義によりて。詠めるならん。かく思ひつゝ。後に又按ずるに。この歌は。和草を。わかくさと讀むべしといふ說も。よしなきにあらず。下の句の。身わかきかへには。上のわか草といふを受けて。かさねたるやうなり。しからば第十一なる似兒草。第十四。第二十なる爾古久佐。二故具佐と異なり。和草を讀みて。わかくさとすれば。意味いたくおなじからず。こは逢戀をよめるのみ。さては人參の歌にあらず。身わかき甲斐にこそ。あふ夜もあれといはんまでにてこれ興なり。◉齊明紀なるいゆししのおん歌を。本にしたれども。こゝろはうらうへにて。男女の春秋に富める。洞房花燭の歡會をよみたりと見んも。なかなかにおだやかなるべし〇この他。雷魚の條下に。霹靂の和訓。カムトキなるに。

七月甲午云々。辛酉車駕還宮。是夜熒惑歳星。於二一歩内一。乍光乍沒。相近相避四遍。この一條を引きもらしたり。これ亦闘星なるべし。地理部。秋田島沼正譌。幷瀧之股。蜂形沼。島遊追加 島沼は。本名鳥沼なり。これを島沼としるせしは。傳寫の訛謬なりき。又出羽國由利部。龜田の封内。府下より一里餘奥なる。瀧の股といふ處に。みねかたと唱ふる沼あり。沼の徑一町半許なるべし。天よく晴れたる日は。ここにも島遊びの事ありといふ。この事きのふ。蕉窗子より告げらる。かゝれば一國にして。この三奇觀あり。いよ〱妙なり。なほ又考索して。その地圖を得ば。後にあらはすべし名手ノ莊の編追考 莊園の事は追考あり。町坊舍條下。壺字正譌 爾雅釋宮。宮中衖道謂二之壼一。壼當レ作レ壺。淨書のとき誤たれしを校し遺したり。說文卷一。口部。篆作壼。曰。象二宮垣上道之形一。詩曰。室家之壼。苦本切。正字通。丑集七壼。部。苦本切。音悃 爾雅云々。詩大雅云々。又震韻。音困。義同。これ壺と同じからざるなり。此方にいふつぼねは。舍にも壼にも。壺にもかなへり。訓義に據れば。壼壺いにしへ通用せしなるべし。

植物部。飛驛の三枝再考 里人等。この樹をおほの木と呼び做したり。おほのきは大之樹なり。再按するに。おほは大の義にあらず。おほの木は。おもの木を訛れるなるべし。書紀。神武紀云。初孔舍衛之戰有レ人。隱二於大樹一。而得レ免レ難。仍指二其樹一曰二恩如レ母時人因號二其地一。曰二母木邑一。今云二飫悶廼奇一訛也。かかれば於母乃木。大之木。和語相近し。もて徵とすべし。母木邑は河内にあらん。その舊迹は。いまだ考へず。彼母乃木の地名に由りて氏にせしは。繼體紀に。河内母樹首御狩といふ人見えたり。又仁賢紀に。難波御津哭之曰。於母亦兄。於吾亦兄。弱草吾夫何怜矣。分註。於母云々。此云二於慕尼一といへり。母をオモといふは古言なり。信濃なるはゝき木を。古歌には母にかけてよみたるもあり。是もオモの木なるべし。又老母草を。俗にオモトといふ。これも母人の義なるべし。又オモの木は。大和本草。雜木部に。篤信云。其葉栗ニ似テ小也。大木アリといへり。飛彈なる三枝のおほの木は。その葉樫に似たりといへば。猶定かならねども。神武紀に所云。母乃樹と同名なるを訛りて。おほの木といふなり。又下總の千

鬘並ニ假髮再考　本邦にいふ。ひかげかつらは。印度なる華鬘の異製にて。唐人の所謂菩薩鬘の類なり。和名鈔。調度部 蘿鬘（ヒカケカツラ） 日本紀私記云。爲レ鬚以レ蘿。和語云比加介加都良。正字通亨集 鬘與レ鬘通。華鬘。梵言云。鬘西方多用ニ蘇摩羅花一。行列結レ之。以爲ニ條貫一。男女皆以レ此莊嚴。又菩薩鬘。小說。開元中。南詔入貢。危髻金冠。瓔絡被レ體。故號ニ菩薩鬘一。唐人因以製レ曲。佛書戒律云香油塗レ身。華鬘被レ首是也。以上摘レ要。便是天朝の菖蒲鬘。葵鬘亦この類なり。續紀。七十 天平十九年五月庚辰云々。太上天皇聖武詔曰。昔者五日之節。常用ニ菖蒲一爲レ鬘。比來已停ニ此事一。從レ今而後。非ニ菖蒲鬘一者。勿レ入ニ宮中一。これなり。葵かつらは。賀茂祭に被く。人のしれる事なれば贅せず。又あやめあふひならでも。蔓草を。男女の頭に被て飾とするを。かつらと唱ふ。これにより。後には紐をもて蔓草にかへたるを。かつらひもといひしなり

○假髮は。和名須惠なり。和名鈔引ニ釋名一云。和名云々。以レ此假覆ニ髮上一也といへり。今の婦女子は。是をかもじと唱へ。俳優の用ふるものを。かつらといへり。並に俗語なり。假髮の和名。須惠とは。これを假りて。髮の末を長くするの義なるべし。これらの辯は。先案疎漏なり。草木身體同訓考　鬘蔓同訓の條下と合せ見るべし

上集中。補遺正謬七箇條　解云。上集の中。遺漏及訛舛あり。よりてこゝに追書して。みづから補はんと欲す。しかれども。いまだ校訂に暇あらず。聊まづ記憶するものを擧ぐ

蛭兒編。星辰の和訓。所レ引書正誤　仁德紀に云々。仁德紀當レ作ニ神功紀一。これ諸記の失なり。神功紀。新羅王重誓まつる段に云。河返以之逆流。及ニ河石昇爲ニ星辰一云々是なり。刻本の書紀に。星辰を アマツアカホシト 訓じたれども。余は。舊訓ホシノヒカリとあるに從へり。○ある人余に問ひて云。蛭兒の編に。星をホシと唱へしは。後の和訓なりといへり。この事何に本づきたる。答へて云。保の言は日なり。志は子の漢音なり。便是日は訓をもてし。子は音をてす。音訓うちまかして唱ふることは。漢字を傳へてより。又後の事なり。よりて星をホシと唱ふるは。後の和訓なりといへり。

隕星の條。鬪星追考　再按するに。持統紀云。六年秋

ず。さらば彼精進場。及城山など唱ふる處は。範頼の事にはあらで。その子孫の古迹ならん歟。これも亦しかるべからず。又彼堀内村を。東鑑に所見あり。當初足立氏の所領なりけんと思ふよしは。東鑑に所見あり。東鑑卷四十三。建長四年七月四日午刻。秋田城介義景妻。女子平産云々。號二堀内殿一是也といへり。義景は。安達盛長の孫景盛の子なり同地名處々にあれば。なほ定かならざれども。今も足立郡に。堀内村あれば。東鑑に云所堀内殿は。安立郡なる。莊園の名に由れるにはあらぬ歟。女子に莊園を分け與へたる事、東鑑に多く見えたりこは推量の說なれ共。姑く管見を錄して。後考の一端に備ふ。或はいふ。石戶の莊は。鎌倉將軍の時。石戶左衞門尉居れり。石戶氏は。石戶氏は。何處の人なるをしらざれ共。再按。東鑑卷三十六。寬元三年八月十六日。鶴岡神事條下云。馬場儀如レ常。十列。一番大隅太郎左衞門尉。二番豐後十郎左衞門尉。三番石戶左衞門尉。四番足立太郎左衞門尉。五番云々。大隅と豐後と。石戶と足立と。つがひたるやうなれば。石戶を武藏の人とする歟。されば東鑑に見えたれども。その墓にはあらずその墓の樹を。蒲櫻といふにより。範頼の事とするは。土俗の傅會なるべしといへり。しかれども。石戶氏の事蹟詳ならず。石戶左衞門尉は。東鑑卷三十六。三十七。寬元中。二个所に。その姓名見えたり。且彼墓所に。はやく。貞永二年。追薦供養の石塔婆あれば。その墓にはあらざるべしこれを里老に問はせしにさる人は。傳へも聞かずといへり。かゝれば或說も又信じがたし。その舊迹はともあれかくまれ。

櫻は世に稀なるものなり。好古の人々はいゆきて觀るべし。

玄同放言下集 終

寺内所レ在供養石塔

塔輪は別石をもて造れり、後に補ひしものなるべし

右樹下の石碑十五本の内其年號ある者九本を得たり又寺内本堂の前南方に石塔一本あり下に圖するが如し其土中に入る處深くして全躰を見がたし是等皆花木の爲に建てたるにあらず又墓碑にもあらず亡者の追薦に建てし石塔婆ならん今はなべて木の卒都婆をたつ當時と雖石を以てせし事如此なるは貴人の追薦の爲歟施主の豪富なる歟なるべし又板橋驛にも是に似たる石塔婆數本ありと云尋ぬべし

土を出づる所竪三尺九寸許　横一尺六寸
その年月日のある處は土中に入りしなるべし

罪に輕重あればなり。しかれども。その卒する年。定かならざるは不審。當所忌むよしありける歟。今にして知るべからず。又按ずるに。足立郡は。藤九郎盛長が苗字の地なり。範頼は。盛長の壻なりその伊豆に幽せらるゝのち。足立氏に預けられし歟。或はまうし預りて。今の堀の內村の地に。推し籠め置きたるにより。範頼竟にその地にて終りしにや。これも推量の外なければども。その由なしとすべからず。その籠居謫罰を。當時忌みかくすよしありしかば。土俗謬り傳へて。蒲殿は。惡病を稟け給ひしにより。人界八町四方を隔てゝ。棄てられ給ひしといふにはあらぬ歟。番坂と唱ふる處は。警衞の番人のをりし處歟。又高松三郎左衞門といひしものは。當初足立氏より附けたる家臣歟これは口碑を助くるに似たれども。東鑑に。範頼の死をしるさゞるに。今其舊迹墳墓ありといふをもて。よく察せずはあるべからず。これを不經の言とすれば。論なし。もしたまたま中ることあらば。舊記の遺漏を補ふ一端とならん。又按ずるに。範頼朝臣の子二人。みな僧になれり。長男を範圓といふ。諸家系圖第四云。順大寺阿闍梨。母藤盛長女。季を範曉といふ。子孫なし。範頼生二爲頼一（吉見三郎）爲頼生二義春（吉見太郎）頼宗一（吉見彦二郎子孫多有）義春（保暦間記作二三郎頼氏一）生二義世一（吉見孫太郎）依レ有二謀反企一永仁四年。於二關東一被二搦捕一畢。保暦間記下卷云。永仁四年十一月廿日。吉見孫太郎義世。（三河守範頼四世孫。吉見三郎頼氏男）謀叛ノキコエ有リテ召シ取ル。良基僧正同意之間。遠流セラル。義世ハ龍口ニテ。首ヲ刎ネラレ畢リヌ。これらの文と。口碑を合し考ふるに。範頼の長男。範圓阿闍梨は足立盛長の外孫なり。その別院。足立郡になしとすべから

が爲に東光寺にいゆきて。その古按古碑等を寫し。且里老を推し敲きて。その口碑を獲たる事右の如し。範頼朝臣始終の事は。既に上に抄錄せり。その遺趾の。足立郡にあるよしは。古記舊文に所見なし。その事土人無稽の說に出づれども。聊その由なきにあらず。東鑑。巻之十三建久四年八月十七日。範頼幽せらるゝ條に。參河守範頼朝臣被レ下ニ向伊豆國一。狩野介宗茂。宇佐美三郎祐茂等所ニ預守護一也。歸參不レ可レ有ニ其期一偏如ニ配流一とのみ記して。この後誅せらるゝの文なし。唯保暦間記巻中に。建久四年八月。三河守範頼誅セラル。其故ハ云々と記せしにより。これより後の物には。皆殺害せらるゝよしをいへれど。必しも間記の一書をもて。東鑑を誣ひがたし。平治物語。巻三下義經奥州下向事の段の參考に。これらの疑難ありて云。保暦間記に。範頼誅セラルト云ヘドモ不レ知レ所レ據といへり。範頼果して誅せられなば。東鑑に必書すべし。しるさゞるは。その譴罰終に赦に遇はされればにや。例せば。義經の子は。みな殺されたり。範頼の子二人。官僧になりたれども。その子孫漸々に多かり。

其六　文龜元年辛酉　後柏原帝御宇　將軍足利義植　○碑文年號如此以推量讀むにこれ文龜なるべし

文政二年まで三百十九年　竪三尺七八寸横一尺五寸許

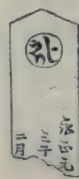
斷碑之一　寛元　後嵯峨帝御宇、將軍藤原頼嗣　元年癸卯より文政二年まで五百七十七年になれり

竪四尺五寸横一尺五寸

斷碑之三　永正元年甲子　後柏原帝御宇將軍足利義植文政二年まで三百十六年

竪一尺許横八寸許

斷碑之二　文永　龜山帝御宇、將軍宗尊親王　元年甲子より文政二年迄五百五十五年になれり

竪三尺許横一尺三寸

範頼石塔　破塔より高サ三尺許樹下の中央にあり

この地は。昔蒲殿あしき病に嬰り給ふにより。一説に。範頼は。正治二年二月五日。この地に卒す。明嚴大居士と追號せり。さくらは。蒲殿手うゑの愛樹なりしといへり。寺説には聞くことなし。且亡者に戒名つくるは。これより後の事なり人界八町四方を隔て丶。棄てられ給ひし處なり。こ丶をもて。その廟所より八町四方は。みな堀の内村なりしに。後漸々に削られて。今は竪のみ八町あり。蒲殿はこの地にして。竟に世を逝り給ひしかば。今の東光寺の地に葬りつ。櫻は墓標にしたるなり。よりてその樹を蒲櫻と唱ふ。樹下なる五輪の石塔は。即範頼朝臣の墓なり以上。堀之内の村長。小林松右衛門が説話なり。松右衛門。本姓は高松氏即三郎左衛門が親屬なりといふ又彼東光寺は。縁起いまだ詳ならず。本堂の額燈籠に。萬年山と記せしは。近きころまで住みける僧の。みだりに自號せしなり。この寺は。西木山と號す。河越なる東明寺の子院にて。藤澤の遊行派なりこの寺。慶長中。村長高松生が家より失火せしとき。延燒して寺記傳はらず。是よりのち。形のごとくなる菴室なれば。無住にて過ぐせし年もありけり。今の住持は。河越なる東明寺より入院せしとぞ。東光寺。現在の説話なり解云。件の巨櫻は曩に仄に傳へ聞きしかど。なほその詳なる事をしらず。此故に。前集植物部に。收むる事を得ざりき。かくて今茲の夏に至りて。これを友人華山子に謨るに。彼人。余

樹下所レ在全碑六本之一

覺嚴大法師は未詳ならず按に足立景盛入道の法名を覺知と云覺知は寶治二年五月十八日高野山にて入寂せり是と同からず、疑似の説もあらんかとて云耳

裂たれ共碑文纔に八九字を闕くのみ

竪四尺六寸横一尺五寸厚三寸餘

文應元年 庚申

龜山帝御宇將軍宗尊親王今文政二己卯の年に迄五百六十年を歴たり

右の碑ハ包まれて北の方に立てり

其二 貞永二年 癸巳

四條帝御宇將軍藤原頼經此年四月十五日天福と改元文政二年に迄五百八十八年を歴たり此碑は尤舊し

この碑ハ幹の中央にたてり 竪五尺八寸 横二尺寸

光明遍照 十方世界 念佛衆生 攝取不捨

其三 弘安元年 戊寅

後宇多帝御宇將軍惟康親王文政二年迄五百四十二年を歴たり

此碑は東の方に立てり、已上幹を後にしたり全圖を見てしるべし

竪六尺 横二尺一寸

其四 建武

後醍醐帝御宇將軍護良親王元年甲戌より文政二年迄四百八十六年

竪三尺五寸許 横二尺五寸許

其五 永徳歟すべて磨滅して讀むべからず

竪四尺許 横一尺五寸許

り。この村は。荒川に添へし處なり。堀の内を去ること。四丁あまりなるべしの背に。城山と唱ふるあり。又東光寺の南のかたに。桶川へ造る間道あり。こゝに石橋あり。これ正門の迹なりといひ傳へたり。この石橋の邊に。精進場と唱ふる處あり。こは範頼朝臣の。せじみし給ひし舊地なり。又番坂。太郎塚。寶塚など唱ふる處あり。太郎塚は。その傳を失へり。番坂は。番士勤仕の處なり。寶塚は本邑の舊家。小林三郎左衛門が曩祖。高松三郎左衛門は。鎌倉より。範頼朝臣に隷進せられし老黨なり。その子孫。村長になりたるに。慶長年間失火して。相傳の武器。調度舊記等。すべて烏有になりつ。その庫の燒跡を。人の踏み穢さん事をおそれ。その灰を埋みて。塚に築きしかば。やがて寶塚と呼び倣したり。この比までは。その家豊なりけるに。後いたく衰へしかば。職を辭して平民になれり。かくて高松を名のらん事。恥かはしくや思ひけん。子孫小林をもて家稱とす。今の小林三郎左衛門是なり塚は卽その家の北にあり。こゝより精進場まで。道直くして。六十丈百間なりばかりなるべし。高松が家門の迹。今なほその間に遺れり。又云。

東光寺蒲櫻並ニ古碑圖　寫眞

幹のめぐり二丈あまり八九尺上より大枝五杈にわかれたり下より見るところ高サ四丈でも枝葉の
△おれたる限り左右三十間に及ぶといふ其樹の巨大なる相像るべし」
花ひとへにしてまろことふ山さくらなるべし咲き出づる色によりてかざさくらといふにはあらじ其枝葉繁茂してさる木の如しさる名木なれどもこれを志る者稀なるは花の為に恨むべし

二間半四面に垣籬をゆひ篇子をあらく画きしは内をよく見せん為なり

亡者の追薦に多宝石塔をたつる事東鑑巻五十二文永二年六月三日安立義景が十三年の佛事の條下に見えたり
この石塔婆もその類なるべし

華山寫

堀之内村（江戸を距ること十二里なり。中山道。桶川驛の西北より。西に入りて。下石戸に至り。又屋津に至り。左りへ諏訪市場に至り。堀の内に至る。桶川の上のかたより。堀の内村に至りて。路程二里なり）なる東光寺といふ小道場の墓門の傍に。巨櫻樹一株あり。下より瞻る所。四丈許。幹の周匝二丈なり。その枝葉の掩ふ限り。左右へ十八丈（三十間なり）に及べり。樹下に古碑十五本（この中。八本全し。七本は斷碑なり）石塔婆（俗に五輪といふもの）一本あり。その碑二本は。既に幹に包まれたり。是その樹の巨大になる隨に。樹と碑と相逼（せま）りて。遂に幹の内に入りしなり。碑は片石にして青し。攝津の御影石といふものに似たり。伊豆石なるべし。その勒せし年月。幽に讀まる。貞永。寛元。文應。弘安等の號あるもの。尤ふりたり。かゝればこの樹は。六百年來の物なる事疑ふべからず。その邊四面に垣籬をしたり。（一方一丈五尺。その垣破壞すれば。里人等修復すといふ）土人これを蒲櫻と呼び做したり。（花は單葉にして。山さくらの如し）即圖して下にあらはす。里老傳へていふ。昔この處は。範頼朝臣の城地なりしにより。今なほ堀の内といふ。その城溝は。過半埋れて。田園になりたれども。遺溝は大きなる池になれり。その深き所は。水下丈餘もあらん。又石戸驛（これを上石戸と唱ふ。驛路にはあられども。土人私にしか呼べ

西木山東光寺圖

卯二月二十八日己亥。今夜殿上口。竊盜剝取二主殿女官衣一。長元六年癸酉正月二十六日癸巳。今夜亥刻。春宮幷一品宮御所。竊盜入取御衣。云々の記あり。この他。群盜。野宮及公卿の家に亂入し。或は朝臣官人を殺害せし事。枚擧に遑あらず。是より先。文德實錄及三代實錄にも。群盜を捜捕し給ふ事。往々見えたれども。いまだ甚しきに至らず。かう數朝の群盜は。古來未曾有の事なるにより。當時好事のもの。千丈嶽なる賊鬼。酒顚童子などいふ物語を作り設けて。寛宥の弊。武備の怠なりしを諷まうせしもの歟。櫻陰腐談上卷に。說邪正集百十三なる。白猿傳を載せて。酒顚童子の物語は。これに繚りていで來つるならんといへり。そも由なきにあらねど。いまだ淵源を考へ得ざりしなり いま巷談術說も。必淵源あり。小說野乘も緣る。所なきにあらず。苟且の作り物語とのみ見れば。無用の物なり。只その不經を笑ふの外なし。もしその緣る所を詳にすれば。治亂得失。當時の形勢を考ふる。一端となることあり。是よりの後。朝野に武を講ずるに及びて。文もつて治むるに足らずとおもへり。武備盛なるまに〳〵。文備衰へて竟に復らず。是源平兩家の因りて興る所以なり

四十二下追加　源範頼 東光寺蒲櫻並古碑附

源範頼朝臣は。左馬頭。贈正二位義朝の第六子。母は池田驛の遊女なり 諸家系圖 遠江國蒲の地に生れしにより。蒲冠者と稱せらる。今按ずるに。遠江國長下郡。濱松の近鄕に。蒲といふ所あり。こゝなるべし 治承五年。七月十四日改元養和 閏二月二十三日。志田三郞義廣 保曆間記。作二義憲一 謀反し。兵を起して。鎌倉を攻めんとせし時。範頼諸將と。小山朝政が陣に加りて。倶に義廣を討滅しつ。保曆間記に據るに。この時範頼鎌倉にあり。武衞の命を受けて。はせて下野に赴きしなり 壽永三年 四月十六日爲二後鳥羽院元曆元年一 正月。前武衞賴朝の命を禀けて。舍弟義經と倶に。數萬騎に將として。源義仲を討ちて功あり。二月。平氏を攝津の活田に襲ひて。これに捷ぬ。範頼義經兩大將たり 六月五日。從五位下に叙し。三河守に任せらる。九月朔又西征す。元曆二年 八月十四日改二元文治一 三月。平家を西家に討滅し。範頼凱旋して。鎌倉濱宿の館に在り。建久四年の秋。謀反の聞えあるにより。八月十七日伊豆國に幽せらる。東鑑 遂に誅せられけるとぞ。保曆間記 こはなべての人のしれる事なれども。江戸より程遠からぬ田舍に。範頼の墓。並に城迹と唱ふる處あり。いといぶかしければ。先舊文を抄錄して。後に里老の口碑を見はし。愚按さへしるしつけて。後攷に備ふるもの左の如し武藏國足立郡。石戸莊。

この書は。全部六卷なり。天正のころ。近江六角家麾下の武士。中村豐前守が男。某甲が著せし草子物語なり。みづから聞見せし奇異の事を。書きつめたりといふ。よに信けられぬ事。多かれども。さすがに。作り設けたる物語にはあらず。一說に。奇異雜談集は。中村某。天文十一年に著し、といへり。しからば明應七年より。四十五年後の著述なり。

かゝる物がたりもあれば。酒顚が事も誣ひがたし。只その賊鬼を聚めて。千丈嶽に籠城せしといふ事。源賴光朝臣詔を奉て。藤原保昌等と、もに。これを討滅せしといふ事は寓言なり。本この小說は。劒の卷（劒の卷は。本は保元物語の首卷なりしを。後人私に。太平記の序目の後に附載せり。その辨參考太平記に見えたり）なる。渡邊綱が。女鬼の腕を斬りしといふ事に。附けまして出來れり。綱が事も。亦ふりたる小說なり。しかれども。此彼その緣る所なきにあらず。日本記略。四村上天皇天德二年。小閏七月九日戊午。有二一狂女一。於二門前一。取二死人頭一食レ之。此後往々臥二諸門一之病者。乍レ生被レ食。世以爲二女鬼一。同書。六圓融天皇安和二年六月九日戊寅。式部曹司內、南舍庇上。女一人撫レ髮立。（立。一本作レ若）是狐妖歟。かの綱が女鬼を砍りしといふ小說は。これらに緣る歟。日本記略。一醍醐天皇寬平九年。大七月二十二日乙未。陸奧國言。安積郡所產小兒。額上生二一角一。云々。亦有二一目一。同書七永觀元年十月二十四日丁亥云々。讃岐國。異鬼解文。本圖等。一頭有二二身八足一。同書。九一條天皇正曆五年。甲午。小三月六日戊午。召二武勇人。源滿正朝臣。平維時朝臣。源賴親。同賴信等一。差遣山山一。搜二盜人一。扶桑略記。二十七村上天皇天德四年。十月四日庚午夜。人々於二淸水寺一。見三鬼火遍二滿京城一。應和二年。壬戌八月十六日云々。丹波國桑田郡人。宇治宿禰宮成。隱二大江山一射二佛工一。（一本工下有二事字一）酒顚童子の物語は。これらに緣りていで來たる歟。只これのみならず。日本記略。醍醐天皇の昌泰二年より。後一條天皇の長元六年まで。凡九朝。一百三十五年の間。京中の群盜を記し、事少々ならず。（將門純友が賊亂。保輔。齊明。道風等の竊盜亦この中に在り）甚しきに至りては。天曆二年。戊申十二月四日戊寅。官奏。今夜盜人取二直忠朝臣衣一走出。殿上盜人及二五度一。天德二年。戊午四月十日辛酉夜。强盜打二破右獄一。奪二取囚人一。九人之中。一人於二獄門一打殺。萬壽四年丁

淋雨積雪の徒然を慰むる外に。させる能毒なきものなるべし

第四十二人事　酒顛童子

酒顛（又作酒呑）童子の物語は。繪卷より出でたり。さればなほふるく傳へたる小說なるべし。或は政事要略に由りていふものあれども。傅會の言なり。又越後名寄（卷之五舊跡部）に酒呑童子岫といふ者見え同書（卷三十二）人倫部にも。又これを載せたり。そは彼兒童は。越後なる民家の子なりしといふより。さる古蹟のいで來たるなるべし。さればとて。鬼子といふもの、なきにはあらず。奇異雜談集（卷二）に云。京のひがし山。獅子谷の一村は小里なり。明應七年のころほひ。地下人の妻。産の時。奇異なる物をうむ事三度におよぶ。一番の産には。男子なうむ。つねの人なり。二番の産には。異形の物をうむ（そのかたちくはしくは聞かず）三番の産には。槌子をうむ。目はなロなきゆゑに。やがてこれを殺しをはんぬ。四番の産には。鬼子をうむ。うまれおちて。すなはち大なること。三歳子のせいなり。やがてはしりありくゆゑに。父おつかけてとりすくめ。ひざの下におしつけてみれば。色あかき事朱の如し。兩の目のほかに。又ひたひに一目あり。口ひろくして耳におよぶ。上に齒二。下に齒二あり。父ちやくしをよびて。よこつち持ち來れといへば。鬼子聞きて。父が手にかみつくを。槌をもつてしきりにうつて。たゝきころすなり。人あつまりて。これを見ることかぎりなし。その死がいをば。西の大路。眞如堂のみなみ。山きはのきしの下にふかくうづみたり。その翌日野人三人。おの／＼拗子をかたげて。同道してゆくに。きしの下の土。うごもてるを見て土龍鼠ありとて。拗子のさきにてつけば。鬼子出でたり。三人大におどろきて。是はきゝおよびし。獅子のたにの鬼子なり。たゞはやくうちころすべしとて。三人あふこをもつてたゝきころすに。つひにしなざるを。しきりにうつてころしをはんぬ。繩をつけて。引きて京にいたるに。路中おほくの石にあたるといへども。その皮膚つよくして。すこしもやぶれず。京中の諸人みてうちひしぎ。たゞらかしてすつるなり。この事常樂寺の栖安軒琳公。幼少喝食のとき。きしの下にてうちころすを。まのあたりみたりといへりと云々

は。勸懲に遠ければなり。謝肇淛が小説を論じたる。西遊記を第一とすべしといへり。又云。惟三國演義與二錢唐記一。宣和遺事。揚六郎等書一。俚而無レ味。何者事太實則近レ腐。可三以悅二里巷小兒一。而不レ足乙爲二士君子一道甲也。又云。凡爲二小説及雜劇戲文一。須乙是虛實相半方爲二游戲三昧之筆一。亦要情景造レ極而止甲。不レ問二其有無一也（見二五雜俎卷十五。事部第三一）といへり。小説戲文の巧拙取捨は。論じ得てこゝに盡せり。但三國演義の。富に過ぎたるをもて云々といひしのみ感服しがたし。彼書は。所謂虛實相半するものなり。（孔明が琴をかきならして。司馬懿を退けたる。又南蠻の孟獲を攻むるとき。假師子をもて。惡象を走したる。すべてかゝる虛談多かり）且陳壽が志には。三國の本紀列傳。紛員として。一朝に通覽しがたし。演義に至りて。三國君臣の終始を話說するに。紊れたる絲を解きて。肇めて篗に掛けたる如し。その才の世に雋（すぐれ）たるにあらざりせば。なしがたかるべき事になん。よりておもふに。三國演義は。作者の胸膈より生出せし趣向にあらず。こは天作にして。自然の妙處多かり。水滸傳は。作者の肚裏より作り出だしゝ趣向なり。こは人作にして。その才亦傑出せしものなり。譬へば。生花と剪綵花の如し。剪綵花の美なることは。寔に美なり。しかれども造化自然の微妙に及ばず。又おもふに。小説の批註は。毛宗崗が三國演義の評論。滑稽いと多かり。金聖歎が理を推し史を引きたる。外書には遙に優たり。この他の諸演義は。謝氏の論ぜし如し。西遊記は。尤妙作なれども。その事怪誕に過ぎて。毫も情致を寫せることなし。その書。水滸。三國演義の右に出でがたきは。その故なるべし。又近屬。この間に刋行せし。前々太平記。前太平記。その他の諸軍記。多くは。唐山の演義に似たり。虛實相半するのみ。謝氏所云。俚而無レ味者也。凡小説は。心を師として。作り出だせるものなれば。巧拙は。作者の才によるべし。今の草子物語を作るに。唐山の小説は本にならず。彼と我とは。物みな異なり。さればとて。竹取。宇津保。源氏。落窪も。本にはならず。雅俗今昔の差別あればなり。その才あるは。心を師とし。その及ばざるは。竊に先輩の佳作を取りて。本にするものあるべし。今の草子物語は。雜劇傳奇の如し。何人かそれを見て。實事とすべき。世を誣ひ。俗を惑はすなど。もの〳〵しくいはんは過ぎたり。只閭人兒幼の夜話を資け。

し。摹寫して右に出しつ。宇津保物語は。婦幼も見るものあれば。おのづから知らん。水滸傳は。明より淸に至りて。刋行のもの多かり。李草吾本と唱ふるものには。像賛なし。本文の中より抜き出で、。見わたし一頁毎に三四回の事を畫きたり。譬へば八文字屋本挿繪の如し。その文省略に過ぎて。見るに足らざるものなり。又京本と唱ふるものも略文なり。畫は一頁毎に。上方に畫きたり。三國志演義の京本の如し。又一友人の藏弆せる百回本は佳本なり。その書の首卷闕けたれば。序目出像は。いかなりけんしらず。華本の水滸傳は。十七八本あり。一搢紳家の藏弆に在りと。聞きしは。三十年前の事なりき。しからばこの間の太平記に。類板多きが如し。（參考。綱目。大全。評判。演義等を加へては。三十板に及ぶといふ。大平記演義は。唐山の俗語に擬して書きたるなり。初板五卷にして止む。全本にはあらず。太平記よみたるなどいふものさへありし。當時の流行想像るべし）又水滸後傳といふもの二本あり。一本は古宋道民雁宕山樵編輯と署したり。（全部四十回なり）又一本は。天華翁が作なり。（二本ともに。今世に稀なり）又本邦の坊間。飜刻の水滸傳は。初板二卷。（第一回ヨリ至二第十回一）は享保十三年。戊申正月。京師書肆。林九兵衛刋行せり。第二板も亦二卷なり。（第十一回ヨリ至二第二十回一）實曆九年。己卯五月

林九兵衞。林權兵衞。嗣梓合刻せり。こは李卓吾が批點本なり。（上にいへる。李卓吾本にはあらず）更に名づけて。忠義水滸傳といふ。忠義の二字を冠せしは。李卓吾が。所爲ならん。そは卓吾が序を見てしるべし。是後又嗣ぎ出ださず。臏災（あまさへ）に罹りて。その板は燒けたりといふ。さる故にや。その書罕に傳ふ。第二編は。尤獲がたし。通俗水滸傳も亦板は燒けたり。只是のみならず。陶氏が水滸傳解（小册一卷。第一回ヨリ至二第十六回一）鳥山氏が水滸傳解。（小册一卷。一名水滸傳抄譯。自二第十七回一。至二第卅六回一）も。今は獲易からず。和版の水滸傳。多く烏有になりたれ共。その書肆の重刻せさるは。俗語を好むもの稀なればならん。なくても事は虧けねども。さすがに人工は惜かり。見に唐山の小說は。俗の解しがたく。讀み得易からざるものなれば。そを好める者といふとも。多くは字義の穿鑿に日を消して。其趣向の巧拙を。細に味ふ者稀なり。余も少かりし時謬ちて。是が爲に。苦しまざるにあらざりしかど。勞して功なしと悟りて。見かへらずなりしかば。見たるも今は忘れたり。大約小說は勸懲を宗とせしものならざれば。弄ぶに足らず。水滸傳は。小說の巨擘にして。今古に敵手なけれ共。今に論議の多かる

中六義斬嫂頭啾々鬼哭兇央樓

行者武松

郎瑛が序したる畵卷及順治板たる武松はこれなり上なる賛は順治板のまゝ也郎瑛が横卷なる武松の賛に云汝優婆塞五戒在レ身酒色財氣更要レ殺レ人陳洪綬が畵幅中なる武松はいまだ薙髪せざるもの棒をわきはさみて走る處を圖したり又李卓吾本なる水滸傳の武松は既に行者になりたる處に至りてその模様これにおなじ只畵も刻も拙きのみ

させ給へ。さゝせたまへとなく云々。この女おきな。見たてまつり侍るに云々。かのいできたりし女おきなは。まところにめして云々。などある女おきな（老媼）おうな（老翁）おきなと。兩人の事なりと思ひとりたるにや。刻本の挿繪には。媼と翁を畫きたり。女おきなは。老女の事也。枕草紙（第六）淑景舍。春宮にまゐり給ふほどの云々といふ段に。あなたにもおものまゐるうらやましくかたぐのは。みなまゐるめり。とくきこしめして。おきな女におろしをだに給へなど云々。おきな女は。中の關白道隆公の北の方をいふ。皇后のざれて。かうのたまふよし。春曙鈔にいへり。老女を翁といふよしは。後漢の范滂が。母を大人といひしにおなじこゝろばへなるべし。（范滂傳に出つ。後漢書黨錮列傳。第五十七に見えたり）かかれば。戴宗を武松にしたると。女おきなを。男女兩人に畫きしは。和漢相似たる訛謬なり。或は畫工の手に誤たれ。或は板せし書肆の所爲にてもありけんかし。そはとまれかくまれ。みな鑿空の書なり。固より咎むるに足るものならねど。いまだその書を見ざるものは。猶わきまへかたきもあるべし。よりて郎瑛が序したる。武松戴宗の畫像と。順治本なる繡像を比校

用走胡北走越　神行太保戴宗

郎瑛が序したる横卷の水滸三十六人の畫像中なる戴宗は是也順治板の水滸傳の戴宗もこれにおなじ但その畫やゝ拙きのみ賛は順治板のまゝに寫しつ又郎瑛が横卷なる戴宗の賛に云不レ疾可レ速故神無方汝行何之敢離二太行一又陳章侯が畫幅には甲馬をかけて走る處を圖したり大にこれとおなじからず雍正板なる水滸傳に謬りて武松としるしゝはこれ也通俗水滸傳にそのあやまりをうけたる事は既に上にいへるが如し雍正板の賛に云亦膽剛腸殺レ人如レ戲貪淫瀆倫視若二狗彘一こは武松を賛せしなり

識に據るものにして。水滸傳を本にはせず。おのづからこれ別本なり。只その畫者の詳ならざるを遺憾とするのみ。陳洪綬（字章侯。號二老蓮一。諸曁人。工二人物一。明崇貞間。召入爲二供奉一不レ拜。南都破爲二僧一。頗眞所レ得。後亡歸卒二於家一。傳見二清張庚國朝畫徵錄上之卷一。）が水滸傳一百八人の畫像は。各その姓名をのみ錄して。賛はなし。圖もおのづから亦異なり。その畫像の中。武松はまだ薙髮せざるもの。棒を挾みて。走る處を圖したり

有二胡濱跋言一。其略云。此陳章侯得意作也。章侯云云。海內好事家。珍二愛之一。如二天球拱璧一。非二虛語一也。然性以レ懶。往々不レ及レ卒レ業。趣棄去。若二此圖一。之毫髮無二遺憾一。又未レ易二數見一者。具眼者。當二自鑒別一。

これを寫山樓主人に問ひしに。陳洪綬が水滸の畫像は。その他兩三本ありといひき。余が視を歷しは。纔に件の二本に過ぎず。畫幅は見易からざれども。順治本なる繡像は。はやく流布せしものなるに。いかにして巾箱本には。戴宗を武松にしたりけん。本邦の草子物語なる挿繪にも似たる事あり。宇津保物語。藏ひらきの上に。としは九十ばかりにて。ゆきをいたゞきたるやうなる女おきな。はひにはひ來て。まづこゝさ

其名。贊於癸辛雜志（志。當作識）。羅貫中演爲小說。有替天行道之言。今楊子濟寧之地。爲立廟。據是送料。當時非禮之禮。非義之義。江必有之白亦異於他賊也。但貫中欲緘其書。以三十六人添地煞七十二人之名。又易尺八腿爲赤髮鬼。一直撞爲雙鎗將。以至淫辭詭行。飾詐眩巧聳動人之耳口。是雖足以溺人。而傳久。失其實多矣といへり。清俗の宋江を祭れるは。水滸傳によりてならん。こはむかし國俗の。筑紫に廣嗣を祭り。東國に將門を祀りしにも過ぎたり。又華亭王圻續文献通考（卷第百七十七）云。水滸傳。羅貫著。貫字本中。杭州人。編撰小說數十種。而水滸傳。敘宋江事。奸盜脫騙。機械甚詳。然變詐百端。壞人心術。說者謂。子孫三代皆啞。天道好還之報如此。（査愼が人。海記に。續文獻通考。藝文類中に。琵琶記。樂府。水滸傳を載せたるを譏れり）書影云。故老傳聞。羅氏爲水滸傳一百回。各以妖異語引其首。嘉靖（明世宗年號）時。郭武定重刻其書削其致語。獨存本傳。かゝれば水滸傳を。羅貫中（貫中と唱ふるは非なれども。かく唱へ來りしことふりたり）が作といふは。普通の說なり。且貫はなほ著述多かり。施耐菴は別に見る所なし。金聖歎が詐欺。いよ〳〵測るべからず。さるを讀書の人。水滸傳をいへば。かならず施耐菴が作として。且金聖歎を推すもの多かり。こゝろ得がたし。又ひとつ。是も要なき事なれども。次にいはん。巾箱本の水滸傳は。清の雍正甲寅（當天朝享保十九年）上伏日。勾曲外史が序あり。（これを金聖歎本といふ。七十回なり）この簡端に出だし。宋江等四十八人の繡像の中。謬りて戴宗を武松にしたり。岡島氏が通俗水滸傳に摸出せし畫像も。亦巾箱本の謬を受けて。武松と題せしは戴宗なり。且原序を載せたるも。勾曲外史が序なり。よりておもふに。冠山は。巾箱本もて譯せしならん。順治本（清の順治丁酉。桐菴が序あり。これをも聖歎本といふ。順治丁酉は。第十二年。卽太祖の號なり。天朝明曆三年に當れり。巾箱本より七十七年前に出でしならん）をもて比校すれば。その託謬分明なり。又彼順治雍正二本なる繡像は。郞瑛が序したる。晁蓋宋洪等三十六人の畫像の摹本なり。（瑛が序は上に錄しつ）只その像贊は。おの〳〵異なるのみ。瑛が橫卷には。晁蓋孫立ありて。公孫勝林冲なし。その他は水滸傳なる。天國三十餘人と相同じ。そが中に急先鋒（索超）は。先鋒とあり。插翅虎（雷橫）は。插翅雲とあり。赤髮鬼（劉唐）は。尺八腿とあり。雙鎗將（董平）は。一直撞とあり。病關索（楊雄）は賽關索とあり。その序をもて推すに。こは癸卒雜

出來。云々。水滸傳。却不レ然。施耐菴。本無二一肚皮宿怨一。要揮出來一。又云。是爲二此書一者之胸中。吾不レ知下其有二何等寃苦一。而必設中言一百八人上。といへり。嗚呼是何等の亂説ぞや。施耐菴が寃苦の有無。評論前後鉾盾して。醉狂の如し。敖戲紛紜。われその取らん所をしらず。聖歎云。或問。題目如二西遊三國一如何。答曰。這箇都不レ好。三國。人物事體。説話太多了。筆下拖不レ動。踅(タラセ)不レ轉。分明如二官府傳話奴才一。只是把二小人聲口一。替二得這句一出來。かくいひながら。聖歎又外二書三國志演義一云。吾謂。才子書之目。宜下以二三國演義一第一上といへり。嗚呼是何等の亂説ぞや。その三國演義を評する日は。これを第一と稱し。又水滸傳を評する日は。三國演義をいたく譏れり。その兩舌かくの如きは。媒婆といふとも猶羞づべし。聖歎云。水滸傳。不レ説二鬼神怪異之事一。是他氣力過レ人處。嗚呼是何等の亂説ぞや。初に洪信が石碣を開きて。魔君を走らし。後に宋江が天書を九天玄女に受けたる。鬼神怪異の事にあらで何ぞや。且その小説を評するに。動もすれば經籍史漢とならべ稱し。又彼一百八賊の行狀得失を論ぜしは。

只是夢中に夢を説くなり。か、れば彼漢は。よく小説を見て。外書批註せしものならねど。慢に附驥の僥倖をなせり。譬へば雜劇の白の如し。然るを彼には。印行の小説毎に。貫華堂(金聖歎が堂號なり)原本と題書し。渠が外書批註を魁本とすなるは。つや〳〵こゝろ得がたし。聖歎が始終の事は。はやく桂林漫錄に載せたれば。贅せず。作者宜しく儆箴となすべきもの歟。顧に明清の間。水滸傳を論辯せしもの少からず。要を提りて錄すること左の如し。田叔禾西湖遊覽志云。水滸傳出二宋人筆一。近金聖歎。自二七十回一之後。斷爲二羅所一レ續。因極レ口詆レ羅。復僞爲二施序於前一。此書遂爲二施有一矣。予謂。世安有三爲二此等書一人。當時敢露二其姓名一者。闕疑可也。定爲二耐菴作一。不レ知二何據一といへり。この言愚意と符合せり。施耐菴が自序の僞作なるよしは。余も亦。金聖歎が西廂記の序中に。渠その馬脚を露はし、を見つけたり。小説を好むものは。彼序にこゝろをつけて見るべし。但その宋人の筆に出でたりといふは。何に據れるにや。仁和郎瑛水滸傳像贊(圖二三十六人一。畫者未レ詳)序云。史稱。宋江三十六人。横二行齊魏一。官軍莫レ抗。而侯蒙擧討二方臘一。周公謹載二

ず。彼等。罪を賊寨に避けて。天威を淩ぎ。財寶を掠奪し。行人を屠殺せしを罪せんとならば。李逵といふとも。何の好處かあらん。水滸傳は。作者の大意。草賊を賢とし。衣冠を賊とす。その筆力。人情を盡すが如きは。寔に小説の巨擘なり。後世これに加ふるものなし。但勸懲には甚遠かり。その趣向の立てざま。善惡正しからず。潔からぬ筋のみなれば。宋江を責め。宋江を罪せんとならば。その兩賊が奸邪愚惡を論ふにしも及ばず。水滸傳を廢斥して可なり。且彼書の作者。七十回後の趣向さへ作り設けつゝ。創したらんとおもふ事あり。天罡星第二員なる。玉麒麟盧俊義は。美貌第一の漢なり。この人最後に。江に落ちて死せし事は。七十回の後にあり。鵔鸃は山雞なり。彼盧俊義は。鵔鸃の鳥を省きて。人を添へたる歟。この姓名により。後に溺死させしなるべし（宋江が賊將。三十六人の姓名は。宣和遺事に見えたり。水滸傳なる。大罡星三十六員の姓名は。これによれるなりといふものあれども。宣和遺事も亦小説なり必しも彼一説に泥むべからず。）何となれば。山雞は。おのが影を愛して。溺死するものなればなり。晉張華博物志云。山雞有ニ美毛一。自愛ニ其色一。終日映レ水。（映一本作レ影）目眩則溺死是なり鵔鸃の山雞なる由は。南越志に出でたり。劉向說苑。辯物篇。猬食ニ鵔鸃一。鵔鸃食レ豹。纂註に。正字通を引きて。似ニ山雞ニ而小卽錦雞也といへり。本草綱目に據れば。山雞錦雞通じて一とす。いまだ孰が是なるをしらず。又地の名なり。後漢書王景傳。俊義令樂浚云云。王渙傳云々。王吉傳。王吉者陳留浚義人云々此なり。浚義は。鳥によりて名を得たるならん。譬へば豫章の木によりて名を得たるが如し

又浪子燕靑は。盧浚義が家僕なり。博物志云。人食ニ燕肉ニ不レ可レ入レ水。爲ニ蛟龍所レ吞。といへり。これに縁らば。盧俊義が江に落ちて死したるは。燕靑を服從せし。此亦名詮自性といふべし。これらの趣向。尤妙なり。聖歎が評論は。七十回以下を取らず。續水滸傳として罵るのみ。こゝに見ることの疎かりしはいかにぞや。猶細に校へば。この他。姓名によりて趣向を立て。趣向によりて姓名を付けたるもあるべし。今一隅を擧げて。作者の深意を曉らしむ。只是のみならず。金聖歎が水滸傳の批評は。こゝろ得がたき事多かり。特に無益の辯なれども。戯れにひとつふたついはん。聖歎云。大史公。一肚皮宿怨。發揮

摸國。金澤の僧。若林が詩集。宜遊草に見えたりとて。訪二白幽子一。詩二首を少出し。又白幽子が自筆の作文なりとて。その書一頁を摹出し。又白幽子が墓は。眞如堂の北にありとて。その墓誌を載せたり。且云。墓石の背に。寛永六己丑。初秋二十五日とあれば。白隱和尚の。この隱士を訪ひしといふ。庚寅正月は。その翌年の事なり。畢竟隱士の名を假りて。丈山の師なり。壽二百歳にも過ぎたらんなど。仙の如くとりなして。其示說を神にせらるゝ、といはん歟。あるひは老後。空記のまゝ、錄し給ふといはんは。難なしといへり。既にその人ありしかば。その墓もあるなるべし。只その自筆の作文といふものは。余がしる所にあらず。よしや眞迹なりとも。さばかりのものは書きもしたらんかし。これを隱者といふは可なり。これを神仙といふは不可なり。これを小文才ありし人なりといはゞ。猶可なり。これを博識通達の士といはんは。過ぎたり。無門關。久關龍潭頌云。聞レ名不レ如レ見レ面。見レ面不レ如レ聞レ名。といへり。證すに雪齋あり。白幽子にも亦いふべし

第四十一　人事　詰二金聖歎一（水滸傳像贊附出）

清の金聖歎。水滸傳に外書批詮して。第七十回までを。元人施耐菴が作とし。七十回以下を羅貫中が續ぐところとす。王望如が總論にも。亦これに附和して曰。細閱二金聖歎所レ評。始以二天下太平四字一。終以二天下太平四字一。始以二石碣放レ妖。終以二石碣收レ妖。發二明作者大象之所レ在。抬二舉李逵一。獨罪二宋江一。責三其私放二晁蓋一。責三其謀奪二晁蓋一。其旨遠。其詞文。而余最服といへり。王氏が總論は辯ずるに足らず。聖歎といふとも亦よく小說を見たるものにはあらず。何となれば。第七十回。忠義堂石碣受二天文一。梁山泊英雄驚二惡夢一。といふ條に至りて。一部の結局とするものはたがへり。はじめに洪信が石碣を拔きて。魔君を奔せしにより。一百八人の豪傑出現し。後に石碣天降りて魔君を收めたるにより。宋江等一百八賊。その本然の善に歸りて。國の爲に賊を討ち。奸を鋤くに至れば。こゝまでが趣向の半體なり。必しも石碣の天降りしをもて。結局とすべからず。又その李逵を擡擧して。獨宋江を責むるを。作者の大象とすといふ事もこゝろ得がたし。宋史所云。淮南盜宋江は。責むべき罪すべきものなれども水滸傳なる宋江は。ふかく憎むべきものにあら

にも。藏を預るものを藏法師といふ歟。是その髮を髮除するの義を取るのみ。必しも刑人をもてせず。令の倉庫令凡廿二條逸して。今考ふべきものなければ。定かにはいひがたけれども。源平盛衰記。卷四鹿谷酒宴の段に見えたる。彼西光西景は。少納言入道信西が小舍人童なりき。後に院のおん目にも掛け進らせて。召し使はるゝ程に。平治の亂に。信西討たれしかば。二人共に出家したり。こゝをもて御藏預りになされしなり。かゝれば藏法師は。周禮の髡者守ㇾ積の義を取られし刑人の所行なり。西光西景も。當時信西が殘黨なれば。刑餘の人なり。これ亦刖者守ㇾ積の義に稱へり。和漢の先蹤かくの如くなれば。藏法師は佳號にあらず。室町家の時。この職名を置かれし歟。こゝろ得がたき事なり。

第四十人事　白幽子異傳

享和壬戌の秋。余京攝に遊びし比。古書をあさりて。多く市に閲し、中に。雪齋紀事といふ古寓本ありけり。その書の中に。白幽子の事を載せたり。假初に見すぐして。購ひ得ざりしは遺憾なれども。今にしてせんすべなし。しかれどもその大略を記臆したれば。要を提りてこゝに書きつく。雪齋云。予總角の比。家兄に倶して。白河なる白幽子を訪ひしに。世には仙人のごとくいひしかども。見ると聞くとは異なり。坐邊に土鍋など取りちらしたれば。火食もするなるべし。その素生を問ひしに。石川丈山先生に使はれし僕なりきといひき。わが兄詩を作りて示ししに。和韻も出來ず。文字篇なき人と見えたり。坐右には。三重韻一卷の外。藏書もなかりしといへり。又云。白河のほとりにて。彼老人の事を聞きしに。白河村にて。年忌などあるをりに。招きよすれば。歡びて來ざる事なし。飲食など。常人と異なることもあらず。衣類の破損するときは。村里に出でゝ。乞ひ受けて着用せしとぞ。以上。この雪齋紀事は。をさ〳〵寛永年間の事をしるしつけたり。記者は京都の人なるべし。筆譚すべて華洛の事のみ多かり。させる隨筆ならねども。白幽子の事は實錄なるべし。白隱の夜船閑話。及壁生草には。白幽子を。さしも神仙の如くに書きなしたり。畸人傳卷五にも。亦夜船閑話。闡提記を載せて。石川丈山の師とし。二百歲にも餘れる人なるべしといへり。續畸人傳卷五には。相

して下つかたは。四大を苦界の鑵鼎にさし入れて。拔くことを忘れたる者なるべし。故に遠中郎廣莊在二秘笈卷十二一云。天地如レ獄。入二其中一者。勞苦無量。年長獄長といへりこの言や釋氏地獄の說に類すれども。亦迷津の一筏なるべし。されば兼好は。かくまでに深意ありて。彼一段を綴りしにはあるべからず。慢に自笑して。且蛇足の成るに驚く。文墨の鷄肋。かゝる事多かり

第三十九人事　藏法師

四季草秋之上云。武家にて。藏を預り。米穀などを出納するものを藏法師といふ。むかしは剃髮せしもの役なる故なり。今世は俗人なれども。昔の名目殘りて藏法師といふ。源平盛衰記卷四に云。左衞門尉入道は西光。右衞門尉は西景とぞ申しける。二人ながら御藏の預るを見ざれば。しるしおくのみ。これ皆比丘の惰逸自恣にして。遂に德瓶を失却するの誡なり。鉢かつぎといふ物語は。徒然草なる鼎の戲に似たるやうにて。その事は異なり

河内國の人。備中守さねたかの息女。その母義の終焉に。數の寶物を。息女の頭にいたゞかせ。そがうへに鉢をかつがせしに。その鉢遂におちず。よりて鉢かつぎ姬とよびなしたり。後に繼母のさかしらにあふて父に追はれ。千辛萬苦の中に。觀世音の利生ありし事。山蔭三位の子。中將のきみにおもはれて。その鉢はじめておちて。頭の上より。金銀財寶あまた出でし事。中將宰相の妻になりて。一期めでたくさかえたるすべて長谷寺の觀音の利益をいへる草紙物がたりなり

そは智度論なる德瓶の譬に由りて。作りなしたるなれども。その勸懲は一致なり。譬へば總見院右府の。坐興に過ぎ。士を侮りて。みづから禍を醸しゝは。又唯惰逸にして。德瓶を破壞すといふべし。唐の韓退之が。華山の絕峰に登りて。返りかたかりしは。幸にして身を喪ふに至らねども亦暴レ虎馮レ河の類なり。その悔はおなじかるべし。韓退之が事は。唐國史補卷中云韓愈好レ奇。與レ客登二華山絕峰一。度レ不レ可レ返。乃作二遺書一。發狂慟哭。華陰令。百計レ取レ之。乃下といへり。現に奇を好みて。俗に異ならんと欲し。或は自大自尊にして。登りて返ることさおをもり。周に髠者をして積聚を守らせしにより。この間

于井側執杖屏處伺之。及暮果至。作戲如初。入罐求撲不脫。婆羅門以杖打死。時空有神說偈曰云々。こゝに野干住とあるを仁和寺の法師に作りかへ。罐を鼎にせしならん。徒然草の抄作りしもの多かれどもいまだこれを引きたりにて。猶被召仕けり云々。東山殿年中行事に。御倉法師正實坊。定泉坊と見えたり。以上。この說しかるべし。余も亦一考あり。後白河院の彼西光西景に。御藏を掌どらせ給ひしは。周禮によりての事なるべし。周禮注疏。巻二十四秋官云。劓者使守關。宮者使守內。刖者使守囿。髡者使守積。註。謂出五刑之中。而髡者必王之內族不宮者。宮之爲翦其類。髡頭而已。守積。積在隱者宜也。疏。舊。云々。劉氏曰。守門。守關。守囿。守積。皆用刑人者。刑之以償其罪也。養之以全其生也。又曰。舊說以爲同族之犯宮刑。而減之者非也。蓋公族不翦其類。但可減爲刖已下耳。苟降從髡。則應劓者。不獲減刑。乃反重耶といへり。蒙學の爲に。まづ是等の文義を解かん。劓は余祭切。音異。刑人の鼻を劓りたるを劓者といふ。周禮註に。鼻亦無妨以貌醜遠之。といへり。よりて關を守らせしなり。宮は音公。腐刑なり。註。以其人道絕也。といへり。刑人既に人道を斷たるものは。宮嬪に近づくも妨なし。よりて內を守らせしなり。刖は魚厥切。音月。刵刑なり。書呂刑。刵辟疑赦。註刵。刖足也。これなり。周禮註。斷足。驅衞禽獸無急行。といへり。よりて囿を守らせしなり。髡は枯昆切。音坤。鬄髮也。餘は上の註疏に見えたり。これ王の同族。罪あるもの。その劓宮刖等の刑を宥めて。髮を剃るす髡者といふ。所云公族不翦其類といふ是なり。積は積聚なり。今の藏のごときをいふ。貨財積隱處。故髡者守之といへはず。益して損することをしらざるものは。華山絕峰の人なるべし。韓退之すらかゝる慾あり。誰か慾なかるべき。只改むるをよしとするのみ。故に應劭風俗通巻三愆禮云。朝廷之人。入而不能出。山林之民。往而不能返。といへり。こは易の四科に由りて。鄧子敬が禮に過ぎたるを論ぜしなり。現に入りて出づること得ならず。往きて返ることの得ならざるは。韓愈が游戲に似たれども。各長ずる所ありて。止まる所を知るものは。高に居て危からず。低にありて卑しからず。是より

しのたまひけるに。いまだものがたりに及ばずして夢さめければ。くちをしき事かぎりなかりけりといへり。延喜。天暦の間。文人詩客。をさ／＼白氏文集を本にして。いたく白居易を景慕したるにより。か丶る物語のいで來しならん。謠曲の作者は。又これらの事に由りて。樂天が筑紫の海まで來て。國人の智を試みんと欲せしと作り。且江談なる。都在中朝臣の詩歌を撮合(とりあは)し。又俗に住吉を。和歌の神といふにより。竊にこの神をもて。野相公。及後江相公に換へたるは。皇國の神威をかゞやかさんとてなるべし

第三十八人事　仁和寺の兒法師

徒然草 五十二段 云仁和寺の法師。童の法師にならんとする名殘とて。各あそぶ事ありけるに。醉ひて興に入るあまり。かたはらなるあしかなへ(鼎)をとりて。頭にかつぎたれば。つまるやうにするを。鼻をおしひらめて。かほさしいれて。舞ひ出でたるに。滿坐興にいることかぎりなし。しばしかなでゝ。後ぬかんとするに。大かたぬかれず。酒宴ことさめて。いかゞはせんとまどひけり。とかくすれば。くびのまはりかけて血たり。たゞ腫(はれ)にはれみちて。いきもつまりければ。うちわらんとすれど。たやすくわれず。ひびきて堪へがたければ。かなはですべきやうなくて。三つあしなるつの丶うへに。かたひらうちかけて。手をひき杖をつかせて。京なるくすし(醫師)がり(許)將て行きて云々。又仁和寺へかへりて云々。或もの丶いふやう。たとひ耳はなこそきれうするとも。命ばかりはなどかいきざらん。たゞちからをたて丶引き給へとて。わらのしべをまはりにさしいれて。かねをへだて丶。くびもちぎるばかりひきたるに。耳鼻かけうげながらぬけにけり。からき命まうけて。ひさしくやみてゐたりけり。解云かばかりの白物。よになきにしもあらねど。こは兼好が佛説によりて。作り設けたる事なるべき歟。暗合歟しらねども。聊亦辨證す。僧祇律云。過去有二一婆羅門一於二曠野一造レ井。給二行人一。至レ暮有二群野干一。趣レ井飲レ水。其野干主。便內二頭汲罐中一。飲已載起。高擧撲破而去。小野干諫レ主曰。若二樹葉可一レ用者。猶讓二惜之一。況此利濟之具。何忍レ壞也。主曰。我但戲樂耳。損壞既多。施者懷レ憤。乃作二木罐一用レ機。故頭可レ入不レ可レ出。置二

れも要なき事なれども。前に引用せし謠曲の因にいはん。白樂天とかいふ能樂は。唐の白居易が。日本人の智を試みんとて。獨みづから扁舟を泛めつゝ。筑紫の海邊に來つるとき。住吉の神漁翁になりて。詩歌の德を論じ給へり。そのとき樂天。青苔衣を負ひて巖の肩に懸り。白雲帶に似て山の腰を廻ると賦しければ。漁翁これを和して。苔ころも著たるいははさもなくて。きぬ〳〵山の帶をするかなと詠じたる。言葉に感服して。樂天はそがまゝに。舟をかへしゝといふ事を。一曲に作れるなり。この詩歌は。江談卷五に出でたり。左の如し

白雲似レ帶圍二山腰一　青苔如レ衣負二巖背一　在中詩

年年別思驚二秋雁一　夜夜幽聲到二曉雞一　擣衣詩 後中書王

こけごろもきたるいははまろひけむ
きぬ〳〵山の帶するはなぞ

後中書王文藻。此詩以後。萬人歎伏。云々の釋文あり。按ずるに。和歌は。前の詩句に對して擣衣の詩に對せず。こは傳寫の錯亂ならん。和歌は。兩詩句の間に置きて見るべし。在中は都朝臣在中なり。都氏は。宿禰の姓なりしに。元慶元年。十二月廿五日辛卯。都宿禰御首。都宿禰長香。都宿禰因雄。都宿禰奧道。四人賜二姓朝臣一事。三代實錄卷三十二に見えたり本朝文粹卷八八月十五夜。賦二清光千里同詩一序あり。是同人の作なり。謠曲には。詩句を轉倒したり。歌も亦まろびけんを。さもなくてとし。帶するはなぞを。帶をするかなに作れり。白樂天がこの土へ來つるといふ事は。偶言なるを。人みなしれり。されば聊縁る事なきにあらず。古事談卷六云小野篁遣唐使ニ渡ルト聞キテ。白樂天悅ヒテ。構二望海樓一。待チ給ヒケルニ見エザリケレバ。太政官符露點。雖二小野篁船一。風帆未レ見ト被レ書ケリといへり。この事國史はさらなり。被の書に出でたるにはあらねど。篁は。當時の宏才なりければ。時の人。その唐國に趣かざるを惜みて。風聞こゝに暨べるならん。篁。遣唐副使たりし日。大使藤原常嗣と。その船を評論して。果さず。憤を含み。病と稱して。國命に從はざりければ。隱岐國へ配流せられし事。續後紀。承和五年。十二月の條下に見えたり。又。古今著聞集四文學部に云。天曆六年十月十八日。後江相公朝綱の夢に。白樂天來たり給へり。相公悅びてあひ奉りて。そのかたちを見れば。白衣を著給ひけり。面のいろあかぐろにぞおはしける。青き物を着たるもの四人。おひしたがひけり。相公都卒天より來給へるかと問ひ奉られければ。しかなりとぞ。答へ給ひたりける。申すべき事ありて來たれるよ

にあらず。唐の代宗の時おくられし圓覺大師は。菩提達磨にあらずといはゞ。人必惑ふべし。又國名なり。達磨悉鐵帝國は。西域記（卷一）珂咄羅國條下に見えたり。又書名なり。伊濕伐羅（唐言二自在一）論師が。阿毘達磨明證論を制し。世親菩薩が。阿毘達磨俱舍論を作せし事。同書（卷二）健駄羅國條下及（卷四）秣底補羅國條下に見えたり。かゝれば達磨とのみいへば。猶法といふがごとし。譬へば。梵書にいふ〇[梵字]（タラマシャサタ）は。唐に法師といふが如し。唐梵千字文。（一名唐字千鬘聖語）〇[梵字]（シャサタ）二合舍。娑多。師。〇[梵字]（達磨）法と譯せり。〇[梵字]（タラマシャリヤ）も法師なり。[梵字]は。同書の補字三十字の内に見えたり。（唐梵千字文は。三藏法師義淨の撰といふ。義淨の自序あれども。疑はしきものなり。されば悉曇愚鈔とこの書によらば。梵字の概略をしるべし）達磨の事は。すべて佛書にのみ出で、。梁書南北史等に明文なし。梁史綱。朱子曰。胡氏云。佛有二五要一。舍（音捨）其一也。梁武爲二帝王一。享二天位一。內蓄二姬妾一。外列二官師一。富貴之崇。子孫之衆。宮室城池。守衞之密。猶以未レ足。又命レ將出レ兵爭二奪于外一。惟恐レ失レ之。安在二能舍一乎。不三惟君子非二之。爲二佛之道一。如二達磨一者。亦不レ取也。或曰云々。天朝造寺の多なる。恭信の嚴しき。聖武孝謙の兩朝より。盛なるはおはしまさず。もしこの時に。達磨の來朝することありて。その功德を問はせ給はゞ。必これを無功德とまうさん。又聖德太子の。片岡山の邊にて。御衣を賜ひしといふ飢人を。達磨の化身とするものは。元亨釋書（卷一）に見えたり。但聖德太子傳曆（下卷太子四十二條上）云。七大夫等。受レ命往開棺。無レ有二其屍一。棺內太香。所レ賜斂物。彩帛等。帖在二棺上一。唯太子所レ賜紫袍者無といふに緣る歟。こは後魏の孝莊が達磨の棺を開きし事と。粗相似たればなるべし。畫者又これによりて書くもの。往々その圖を視ることあり。又彼渡江の達磨の畫圖に似たる事ありけり。陳季卿が竹葉を船にして。その家に還りしといふ小說是なり。事文續集（卷二十七）載二異聞錄一云。陳季卿家二于江南一。嘗訪二僧於靑龍寺一。遇二僧他適一。有二終南山翁一。亦候二僧歸一。東壁有二寰瀛圖一。季卿乃尋二江南路一。而長歎曰。安得三自レ渭泛レ河達二于家一。山翁笑曰。是不レ難。命二僧僮一折二階前一竹葉一。作レ舟置二圖上一。季卿視久之。稍覺二渭水波浪一。一葉漸巨。席帆既張。恍若登レ舟。旬餘已至レ家矣といへり。本邦の小兒。竹葉を舟に作りて。水上に放つものあり。これらも右の小說と日を同うして談るべし。又ひとつ。こ

寺一供養。至二唐開元十五年丁卯歲一。爲二信道者一竊。在二五臺華嚴寺一。今不レ知レ所レ在。初梁武遇レ師因緣未レ契。及レ聞二化二行魏邦一。遂欲自撰二師碑一。而未レ暇也。後聞二宋雲事一。乃成レ之。代宗諡二圓覺大師一。塔曰二空觀一。師自二魏丙辰歲告レ寂迄二皇宋景德元年甲辰一。得二四百六十七年一矣（提要）これに由れば。達磨は流支に毒殺せられしなり。又達磨に諡せし代宗は。唐代宗（肅宗太子名豫）ならん。既にその諡あれども。今なほ達摩と唱ふ。俗にはその諡を知るものなきが如し。いと不審事なり。何となれば。隋唐の時にも。亦達摩といふ沙門あればなり。唐續高僧傳（卷二）隋東都雒濱上園。翻經館。南賢定沙門。達摩笈多傳あり。傳云。達摩笈多。南賢豆國人。開皇十年來二屆瓜州一。文帝延入二京寺一。至三煬帝定二鼎東都一。置二翻經館一。（提要。翻經館。翻譯名義集。作二翻譯館一。法雲曰。達磨笈多。隋言二法密一）又達摩掬多ともいへり。宋高僧傳（卷二）洛京聖寺善無畏傳（達摩掬多）と目錄に出だせり。達摩掬多は。善無畏傳に附出せしなり。顏如二四十許一。其實八百歲といへり。唐開元二十三年化す。九十九とあれば。達摩笈多と時をおなじうせしもの歟。掬多と笈多と。聲相近し。同人なるにやとある人はいへり。今按ずるに。これ同人なり。掬多を笈多ともいふべし。翻譯名義集（總諸聲聞篇）云。優波毱多。或云二優婆掘多一。此云二大護一。或云二笈多一といへり。これに由りて觀れば。掬多と笈多と。その義相同じ。又達磨波羅は。西域記（卷十）達羅毘荼國條下云。達磨波羅（唐言二護法一）菩薩。此國大臣長子也。神負遠遁。因即出家（提要）といへり。又達磨達は。天竺第二十四祖。師子尊者の法嗣なり。又達磨尸利帝。達磨帝利は。並に傳燈錄（卷二）に見えたり。達摩掬羅は。唐言二法性一。達磨畢利は。唐言二法愛一。並に唐僧傳（玄奘傳）に見えたり。又達摩鬱多羅は。法雲曰。此云二法尚一。佛滅八百年出。造二雜毘曇一。又達摩提は。法雲曰。此云二法意一。西域人。齊武永明。譯二提婆達多品一。達摩流支は唐言二法希一。天后改爲二菩提流志一。唐言二覺愛一。南印度人婆羅門種姓。迦葉氏。聰叡絕倫。風神云々。天皇遠聞二雅譽一。遣レ使往邀。未レ及二使還一。白雲遽駕。暨二天后御レ極趣レ京翻譯。至二和帝龍興一。譯二寶積經一。此經玄奘昔翻二數行一。乃歎此土群生。未レ有レ緣矣。余氣力衰竭。因而遂輟。和帝命レ志續二奘餘功一。遂譯二于世一。又鬱伽陀達磨は。大論云。鬱伽陀。秦言レ盛。達磨。秦言レ法。故號二法盛一。以上翻譯名義集（卷一）に見えたり。かゝれば達磨は。一人の名

なり。又思慮なり。放慢なり。煩惱なり。倣慢愚智は。顯達して眞如の月を得見ざるもの。猶胏葉の心を包羅し。枝葉の幹を隱すがごとし。夫一葉を船とし。又一葉を雲とす。譬喩に常器あらず。只意をもて解すべし。故に無門關。非心非佛頌云。路逢二劍客一須レ呈。不レ遇二詩人一莫レ獻。これその爭ひがたく。諭し易からざるが爲なり。達磨は。菩提達磨なり。景德傳燈錄卷三第二十八祖。菩提達磨者。南天竺國。香至王第三子也。姓刹帝利。本名菩提多羅。後遇下二十七祖。般若多羅至二本國一受中王供養上。知二師密迹一因下試令中與二二兄一辨上所レ施寶珠一。發二明心要一。既而尊者謂曰。汝於二諸法一已得二通量一。夫達摩。通大之義也。宜レ名二達磨一。因改號二菩提達磨一。師乃告二尊者一曰。云々。及レ趣二震旦一。王異見王。即達磨侄。即具二大舟一。實以二衆寶一。躬率二臣寮一。送二至海一。師汎二重溟一。凡三周寒暑達二南海一。實梁普通八年。丁未歲。九月二十一日也。廣州刺史蕭昂具二主禮一迎接。表聞二武帝一。帝覽奏レ遣レ使齎レ詔迎請。十月一日至二金陵一。帝問曰。朕即レ位已來。造レ寺寫レ經。度レ僧不レ可二勝紀一。有二何功德一。師曰。並無二功德一。帝曰。何以無二功德一。師曰。此但人天小果。有漏之因如二影隨レ形。雖レ有非レ實。帝。曰。如何是眞功德。答曰。淨知妙圓。自空寂。如レ是功德不二以レ世求一。帝又問。如何是聖諦第一義。師曰。廓然無聖。廓當レ作レ廓。正字通。廓音霍。驚視貌。揚雄蜀都賦。龍睢廓兮 帝曰。對レ朕者誰。師曰。不レ識。帝不二領悟一。師知二機不一レ契。是月十九日。潛廻二江北一。十一月二十三日。届二洛陽一。當二後魏孝明太和十年一也。寓二止于嵩山少林寺一。面壁而坐。終日默然。人莫二之測一。謂二之壁觀婆羅門一。時云々。魏氏奉レ釋禪儁如レ林。光統律師流支三藏者。乃僧中之鸞鳳也。覩二師演レ道斥レ相指レ心。每與レ師議論。是非蜂起。師遐振二玄風一。普施二法雨一。而偏局之量。自不レ堪レ任。競起二害心一。數加二毒藥一。至二第六度一。以二化緣已畢。傳法得レ人。遂不二復救一レ之。端居而逝。即後魏孝明帝太和十九年丙辰歲十月五日也。其年十二月二十八日。葬二熊耳山一。起二塔於定林寺一。後三歲。魏宋雲奉二使西域一廻。遇二師于葱嶺一。見手携二隻履一。翩々獨逝。雲問二師何往一。師曰。西天去。又謂レ雲曰。汝主已厭レ世。雲聞レ之茫然。別レ師東邁。暨二復命一。即明帝已登遐矣。逮二孝莊即一レ位。雲具奏二其事一。帝令レ啓レ壙。惟空棺一隻革履存焉。擧レ朝爲レ之驚歎。奉レ詔取二遺履一。於二少林

なり。か、れば事苑にいふ航蘆も。河廣の編をもて解くべし。且詩人の扁舟を詠じて。一葉といふもの多かり。一葉扁舟泊㆓碧灣㆒。往來人事不㆓相關㆒。これ李嵩が句なり。この他。古人の詩に。一葉白頭翁。舟移蒲浦風。又。來往烟波無㆓定居㆒。生涯一葉外無㆑餘等の句あり。枚擧に遑あらず これらも亦文字に就きて。木葉を船に代へて。人これに乘る處を畫かば。觀るもの佳とせんや。木葉に漁者の乘りたるを畫けば。觀る人これを妄なりとして。笑はざるはなし。蘆葉に達磨の乘りたるを畫けば。人みな眞也として愛翫す。何ぞ目を賤むるもの、多く。耳を貴ぶもの、少からざるや。故に。韓非子外儲說曰。客有㆚爲㆓齊王㆒畫者㆙。齊王問曰。畫者孰最難者。曰。犬馬難。曰。孰易者。曰。鬼神最易。夫犬馬人所㆑知也。旦暮罄㆓於前㆒。不㆑可㆑類㆑之。故難。鬼神無㆑形者。不㆑罄㆓於前㆒。故易㆑之也といへり。圖畫の眞に濫る、。その害小說と異ならねども。事情に通せざるものは。小說の陋をのみ知りて。畫にも亦これらの意味あるをしらず。彼小說は。正史もてこれを訂せば。その僞を辯じ易し。圖畫は。鬼神怪獸。蠻貊異類。地獄天堂の事に至りて。その眞僞を較ぶべきものなし。こ、をもてその僞をいふもの稀なり。譬へば寫眞は實錄の如し。

この他は。寓言に等しき事多かり。韓非が所云。畫者の言。唯畫のうへのみならず。よろづ人情に渉れりといはまし。さればとて。渡江の達磨の畫圖のごとき。眞の船を畫きては。なか／＼にをかしからず。理義を推して圖畫を難じ。經史をもて小說を評するものは。是柱に膠して瑟を鼓するなり。この故に。畫は無聲の詩なりと古人もいへり。詩は比興して物を詠ずればなり。詩歌の經史に合はざるを咎むるものは。俗にいふ畫難坊の類にして。殺風景中の人なり。畫も亦これを準へて評すべし。譬へば。能樂の有をもて無とし。實をもて虛とするが如し。詩歌も圖畫も。趣味相似たり。又彼俊寛の能に。竹を紈(わがね)て。船に擬するが如し。畫者その船の形を寫すとき。能をしらざるものこれを視ば。彼成經康賴等は幻術あり。紈竹に乘りて渡海すといはん。能をしれるものは。疎密虛實に惑ふことなし。この故に。その船に似ざるを拙しとせず。彼渡江の達磨の畫圖も。その蘆は蘆ならず。船なりけりと見るものは。默してその虛實をしらん。達磨告㆓六衆㆒曰。今一葉翳㆑虛。孰能剪拂傳燈錄三 こ、にいふ一葉は。一朶の雲。乃魔雲

旨一云。願假二神力一言已雲生二足下一。乃乘レ之至二王前一。默然而住。時云々。又達磨自二遷化一之後三歳。魏宋雲奉二使西域一廻。遇二達磨于葱嶺一。孝莊聞レ之令レ啓レ壙。惟空棺一隻草履存焉云。大抵この類なり。語は傳燈錄卷第三に見えたり。宋雲が事は下に抄出すべし

しかれども。禪家は寂靜開悟を宗とするものなり。達磨も亦琴高に等しき幻術ありといはゞ。眞面目とせんや。世人その圖畫に視熟れて。亦疑ふものなし。余をもてこれを觀れば。その葦葉は扁舟なるべし。何となれば。祖庭事苑。（釋名識辨）般若多羅第一首曰。（般若多羅者。二十七祖卽達磨之師也。路行云々。傳燈錄卷第二）路行跨レ水忽逢レ羊。獨自棲棲暗渡レ江。日下可レ憐雙象馬。二株嫩桂久昌昌。宋僧善卿曰。此讖二達磨西來始終之事一。達磨始來見二梁武帝一。帝名衍。衍从レ行从レ水。故云二路行跨一レ水。帝既不レ契。祖師遂有二洛陽之游一。故云レ逢レ羊。羊陽聲相近也。祖師不レ欲三人知二其行一。是夜航レ蘆西邁。故曰二暗渡一レ江也。祖師西來見二梁魏二帝一。此曰二日下雙象馬一也。九年面二壁於少林寺一。故曰二二株嫩桂久一。久九聲之近也といへり。航レ蘆といふによりて。一もとの葦に乘りて。江を渡る處を圖したり。初めその圖を作りしもの。只文面に泥みて。その義を解き得ざりしならん。何人の畫きはじめしにや。ふるくは兆殿司にありとある人いへり。明の徐文長に折蘆達磨の賛あれば。唐畫にもあらんたづぬべし。又彼蘆をもて船とすといふよしは。詩の衞風（河廣釋）誰謂二河廣一。一葦杭レ之。誰謂二宋遠一。跂予望といへる一葦の如し。航と杭と通へり。航レ蘆とは。卽一葦杭レ之の義なり。爾雅（釋草）に。葭蘆注葦といへり。蘆葦は和名阿之（和名鈔草木部）なり。かゝれば蘆も葦も等類たるべし。詩にいふ河はいと廣けれども。杭せば廣からずとなり。朱傳に。葦は蒹葭之屬。杭度也とのみ注意して葦を船なりといはざれども。第二章に。誰謂二宋遠一。曾不レ容レ刀といへる刀は。小船なるよし注に見えたり。（刀又作レ舠。楚辭後語。卷四。李白鳴皐歌云。冰龍鱗兮難レ容レ舠。これ亦河廣編より出し來れり）葦に對ていふ刀の小船ならんには。葦も小船なるをしるべし。葦の小船ならんには。蘆も亦小船なるを推して知るべし。詩のこころはじめに小船して渡んといひしのみにては。猶河を廣からずとするに足らず。故にかさねて。小船だも容れずといへり。是その廣しとせずといふ限り

よりて。その應驗あらざることなし。陸龜蒙雜說曰。季札以樂卜。趙孟以詩卜。襄仲歸父以言卜。子游子夏以威儀卜。沈尹氏以政卜。孔成子以禮卜。其應也如響。無他圖。在精誠而已。不精誠者。不能自卜。況吉凶他人乎。これなり。國俗のすなる。橋占などいふ事も。いにしへの遺卜なるべし。辻うらといふもおなじ事なり。むかしはみやこ人。一條戻橋のほとりに立ちて。兆問ひせしといふ。再ひ按に。いにしへ唐土にては。羊の胛骨を以て卜ひしなり二程全書卷之四。伊川云。物之可卜者。龜與羊胛骨可用。蓋其拆可驗吉凶といへり。こゝには羊なきにより。鹿をもて代へたる歟さばれ胛骨と肩骨と異なり。骨胛未詳。なほ考ふべし橋占の事は。源平盛衰記。卷十中宮御産の段に見えたり。又。念佛三心要集に。惠心僧都。西方往生の得否を。戻橋にて占ひし事をいへり。又この僧都。金峰山なる巫の歌占などひし事古事談十訓抄等に見えたり神社考云。安倍晴明。役使十二神將。妻畏識神形。因呪以置十二神于一條橋下。有事喚而使之。自是世人。占吉凶于橋邊。則神必託人以告。といへり。戻橋在一條通。堀河上。相渡東西之橋也。見雍州府志。卷八。古跡門。及山城名跡志。卷十七。洛陽部そのの說やうやく委くして。奇異に渉れり。天朝の卜筮は神世よりありけり。神世紀云。時天神以太占而卜合之。乃敎曰。婦人之辭其已先揚乎。宜。更還去。乃卜定時日而降之。又云。高皇產靈神俾天兒屋命以太占之卜事而奉仕焉といふ是なり。卜筮は蓍龜にはじまり。又鹿の肩骨を拔きて。うらなひしといふ。契沖の河社卷上に。舊事記。延喜式。及大江匡房卿の歌かく山のはゝかゝ下にうらとけて。かたぬく鹿の妻こひなせそを引きて。龜卜は後の事にて。神代には。鹿の肩骨を拔きとりて。うらなひけるなり。といへれど詳ならず。且舊事記は證にしがたし。櫻桃は。中葉まで。御卜の料にせられしかば。匡房卿の歌は。なほよしある事なるべし。龜策は。史記に傳あり。しかれどもその書はなし。漢土にも。その事絕えて。定かならざりしならん。褚先生が補は。索隱正義。共にこれを譏れり。天朝軒廊の御卜は龜となるよし。江家次第卷第十八に見えたり匡房卿の說も。史記に由れるのみ。此にもふるきは傳はらぬなるべし

【第三十七人事】渡江達磨 附和漢知戰

嘗て達磨江を渡る圖畫を視るに。一もとの葦を踏みて。波上に邁所(ゆくところ)多かり。浮屠氏の奇を談ずる事はめづらしからず

達磨使波羅提說法於異見王。時波羅提。恭稟師

は姓を冒して儂氏になりつ。壯年に及びて。その母と共に猶州に黨據し。國號を建て大曆といふ。仁宗の皇祐元年九月。儂智高叛きて邕州に寇し。四年に及びて。邕。横。貴。藤。梧。康。端。龔。潯等の州を陷れて。遂に廣州を圍めり。尹洙が薦めまうすにより。宋朝。狄青を荊湖宣撫使。提擧經制盜賊事として。孫沔余靖と與に。儂高を征せしむ。十二月。陳曙師を帥ゐて。儂智高を討ちて。金城驛に敗績す。狄青遂に曙を執へてこれを斬らしむ。孫沔余靖等。相顧みて愕然たり。諸將股栗して。敢て仰き視るものなし。五年の春。狄青大く儂智高を邕州にうち敗りつ。追奔五十里。斬首萬計なり。智高からくして。夜遁れて大理に入れり。遲明に城に入りて。賊の屍を檢するに。金龍の衣を衣たるものあり。衆謂へらく。智高既に死せり。とく上聞し給へといふ。青が云。安ぞその詐にあらざるを知らんや。寧智高を失ふとも。敢て朝廷を誣ひて。功を貪らじといひて從はず。夏五月。高若訥罷めらる。狄青をもて樞密使とす。これ正史に載する所の概略のみ。但その兩面錢をもて。士卒を勵し、といふ事は小說なり。本傳曰。狄青罷。會二京師大水一。（嘉祐元年）避二于相國寺一行止二殿上一。人情頗疑。知制誥劉敞。出知二楊州一。陛辭。言曰。陛下幸愛レ青。不レ知出レ之以全二其終一。帝然レ之。乃以二使相一判二陳州一。青爲レ人愼密寡言。其計レ事。必審レ中二機會一。而後發。行レ師先正二部伍一。明二賞罰一。與二士卒一同二饑寒勞苦一。雖二敵猝犯一レ之。無二一士敢後一レ先者。故數有レ功。未二嘗專レ賞徹二下。故人皆樂爲レ之死。青在二樞府一日。有二狄梁公之後一。（狄仁傑。唐武后時。封二梁公一）持二梁公畫像一及告身十餘通一。獻二諸青一以爲二青之遠祖一。青謝レ之曰。一時遭際。安敢自附二梁公一。厚贈二其人一而遣レ之。踰レ年卒。といへり。おもふに狄青は。漢の衛青が人となりを景慕せし歟。亦青をもてその名とせしのみならず。その材も伯仲し。その功も相似たり。こは無益の辯なれども。いまだ狄青が本傳をしらで。事のこゝろを得がたきもあらんかとていふなり。又。按ずるに。錢をもて吉凶悔吝をうらなふ事は。漢の京房にはじまれる歟。事文前集（卷三十八）載す。京房卜易。卦以レ錢擲。以二甲子一起レ卦。といへり。京房は前漢元帝の時の人なればふりたり。唯錢をもて卜するのみにあらず。いにしへの善卜とするものは。事物に

ほ多聞に従はざることなく。大賢の言。民心に由らざるはなし。故曾子曰。十目所レ視。十指所レ指。其嚴乎。大學又墨翟が。異學なるも。その論亦相同じ。墨子巻二。尚同下に。一耳之聽也不レ若二二耳之聽一也等の言あり然るに時頼入道。五ヶ年行脚して。纔に經世一人を得たり。夫海内の廣き。親く視聽の及ぶまにく。纔に一窮士を優にせしとて。國に愁訴なく。野に遺賢なしと思ふは違へり。時俗の理義に暗き。時頼を賢明にせんとして。却りてこれを愚將にするをしらず。傳へて以て口實とす。嗚呼嘆ずべきかな

第三十六八事　狄青が錢卜

小說に載す。桶挾間之役。信長夜謁二熱田神祠一。禱レ之曰。駿兵百萬。既陷二數城一。勢呑二中國一。士卒戰栗。不レ知二謀所一レ出。自レ非三假二神威一似二逆二擊之一。豈可レ得二克大敵一乎哉。因顧二軍士一曰。孤欲レ以二錢卜一試三雌雄一焉。今所レ投數（ぜに）皆形。俗曰二錢面一爲レ形孤必大捷。若無俗曰二錢背一爲レ無則議レ和焉耳。此明神之心也。祝了。手自擲二數錢於幣壇一。使二左右抗一レ火視レ之。乃其錢皆面。時神宮中。忽聞二鳴鏃一。士卒感激。勇氣百倍。信長亦大喜明日進レ兵。大戰二于桶挾間一。一擧獲二敵將義元首級一。蓋信長好二詭計一。竊用二兩面錢一奬二士卒一。又。以二鳴鏃一誘二衆心一而已。是謂二兩面錢卜一云。將軍譜。無二錢卜鳴鏃事一。蓋其事出二於小說一也この小說は。宋の仁宗の時の名將。狄青が事と相類せり。馮氏知囊全集巻十五智術部曰。南俗尙レ鬼。狄武襄征二儂智高一時。大兵出二桂林之南一。因祝曰。勝負無二以爲一レ據。乃百錢自持之。與レ神約。果大捷。則投二此錢一盡面。左右諫止。倘不レ如レ意。恐阻レ師。武襄不聽。萬衆聳視。已而揮レ手倏一擲。百錢皆面。於レ是擧兵歡呼。聲震二林野一。武襄亦大喜。顧二左右一。取二百釘一。卽隨二錢疎密一。布レ地而帖二釘之一。加以二青紗籠一。手自封レ馬。曰。俟二凱旋一。當二謝神取一レ錢。其後平二邕州一還レ師。如レ言取レ錢。幕府士大夫共視。乃兩面錢也。馮氏注云。桂林路險。士心惶惑。故假二神道一以堅レ之。といへり。本邦の野史。竊にこれを攬りて。總見院右府の軍略にせしならん。智囊全集にいふ儂智高は。廣源諸蠻の首領なり。儂氏は。唐初より卽ち雄し。黃氏周氏と。州に據るもの十有八にして。儂氏尤强かりしとなり。唐末に。交趾强盛なりければ。廣源これに服屬せり。儂全福が交人に殺さるゝに及びて。その妻。改めて商人に適きて。智高を生めり。智高

之上。所從高太郎承伏勿論之間。雖レ遁ニ斬刑一旨之。評議畢然。而忽以命不レ可レ終ニ其身一之條。殊以不便也。任ニ實正一可レ申レ之。就ニ其詞一加ニ斟酌一。欲ニ相扶一之云々。于レ時諏方。且喜抑レ涙。果ニ宿意一之由申レ之。禪室御仁惠。雖レ相ニ同于夏禹泣レ罪之志一。所レ犯既究之間。不レ被レ行レ之者。依レ難レ禁ニ天下之非違一。令ニ糺斷一給云々。これらの權詐。奸智に長じたる。執權の所行にあらず。その從者高太郎も。なほ首伏せざれども。既に承伏しつ。と謀りて。その實を問ひ究むるは猶可なり。實を告げば。相助けん。と約しつゝ。これを殺すは。是僞をもて刑を行ふなり。君子のせざる所にして。彼人獨これを忍べり。しかるに夏禹の仁に比す。諂諛の飾文は論ずるに足らず。事みなかくの如く狐疑ふかく。政事嚴密にして。變詐奸計を宗としたるにより。諸國の守護地頭はさらなり。百姓浮浪人までも。おのづから心をおきて。最明寺殿こそ。しのび〳〵に國中を行脚して。よろづあなぐり聞き給ふ。といひ傳へたるならん。この入道は。寛元三年、その兄經時に嗣きて。始めて執權たり。時年十九弘長三年十一月廿二日卒。時年三十七その間十九ケ年。最多事なりき何の暇ありて。諸國を微行すべき。且足跡の至るところ限あり。視聽の及ぶところ亦限あり。爰ぞ我が往くをのみ往くとせん。又奚ぞわが視聽をのみ視聽とせん。故老氏曰。不レ出レ戸知ニ天下一。不レ窺レ牖見ニ天道一。出彌遠。其知彌少。是似聖人。不レ行而知。不レ見而名。不レ爲而成。老子四十七章老氏のかくいへるよしは。易繫辭上傳曰。夫易。聖人之所ニ以極レ深研一レ幾也。唯深也。故能通ニ天下之志一。唯幾也。故能成ニ天下之務一。唯神也。故不レ疾而速。不レ行而至。といへるこゝろばへにおなじ。いにしへの聖王賢相は。民の往くをもて往くとし。民の視るをもて視るとし。民の聽くをもて聽くとし。民の言をもて言とすといふ。故に周書泰誓中曰。天視自ニ我民一視。天聽自ニ我民一聽といへり。天は。民の心をもて心とす。こゝをもて。天の視るは。民の視るなり。天の聽くは。民の聽くなりといへり。夫一人の視聽をもて。よくこれを視るとし。よくこれを聽くとせんや。故孔子曰。多聞擇ニ其善者一而從レ之。多見而識レ之。知之次也。論語述而故孟子曰。左右皆曰レ賢。未レ可也。諸大夫皆曰レ賢。未レ可也。國人皆曰レ賢。然後察レ之。見レ賢焉。然後用レ之。梁惠王下生知の聖。な

にょくこの語を記誦して。よくその志を行はゞ。難に臨みて苟も脱れず。又唯恥辱に遠ざかることあらん歟。○再いふ。上集にあらはし、。北條時頼入道 法名道崇 が國中を徴行して。守護地頭の邪正を察きといふ小説は。彼入道の執權たる。その政。よろづ嚴密なるにより。時俗稱に畏りて。云々といへるならん。時頼の刻簿なりしよしは。讀史餘論 巻之二下 云。時頼。その兄 經時 につぎて權を掌り。始めにその主 頼經 を逐ひ。その後。三浦 泰村 一族をはかりて。終に滅し。かさねて又その主 頼嗣 を逐へり。峯殿 道家 の薨ぜしをも。關東の壽策を疑へり。いく程もなく。舊主兩人 頼經頼嗣 共に薨ぜられしかば。これらの疑ひ。故なきにあらず。かくて後嵯峨上皇の皇子 中務卿。宗尊親王 を。關東の主となし。攝家の息女 前攝政藤原兼經女 を。おのれが子になして御息所とす。長子 時輔 を捨て、。幼兒 時宗 をもてよつぎとなし。死して後。その家亂れき。これらをもて觀るときは。渠を泰時と並稱すること。心得られず。それのみならず。はじめて異國の僧をむかへ。禪崛を開きて。今に世の費をなす。後世これを賢明とする事。われその故をしらずといへり。又徒然草に云。相摸守時頼の母は。松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さる、事ありけるに。すゝけたるあかりさうじ 紙障 のやぶればかりを。禪尼手づから。小刀してきりまはしつゝはられければ。せうとの城介義景。その日のけいめいして候けるが。給はりて。なにがし男にはらせ候はん。さやうの事に心得たるものに候。と申されければ。その男。尼が細工に。よもまさり侍らじとて。猶一間つゝはられけるを。義景。皆はりかへ候はんは。遙にたやすく候べし。まだらに候も。見ぐるしくや。とかさねて。申されければ。尼も後は。さばさばとはりかへんと思へども。けふばかりは。わざとかくてあるべきなり。物は破れたる處ばかり。修理して用ふる事ぞ。とわかき人 時頼をいふなり に見ならはせて。心づけん爲なり。と申されける云々。下巻四十二段 これらも。時頼の。よろづ嚴密なるを諫めん料に。母の禪尼。かう計りたるなるべし。又諏方刑部左衞門入道が。伊具四郎入道を射殺して。事發覺の後。彼主從 從者名高太郎 首伏せざりけるに。以下文。出㆓東鑑巻四十八。正嘉二年九月二日條下㆒。相州禪室。被㆑廻㆓賢慮㆒。以㆓無㆑人之時㆒。潛召㆓入諏方一人於御所㆒。直被㆓仰含㆒曰。被㆓殺害㆒事。被㆓疑思食㆒

み死を悼み。思慕して命を隕すものあり。これ士を愛せずして。婦人を愛し賢を用ひずして。佞人を近づけたる。その生平を見るに足れり。國語（魯語下）曰公父文伯卒。其母（敬姜）戒二其妾一曰。吾聞レ之。好レ內女死レ之。好レ外士死レ之。今吾子夭死。吾惡二其以レ好レ內聞一也。二三婦之辱。共二先祀一者。請無二瘠色一。無二洵涕一。無レ掐レ膺。無二憂容一。有レ降レ服。無レ加レ服。從レ禮而靜。是昭二吾子一也。仲尼聞レ之曰。女知莫レ如レ婦。男知莫レ如レ夫。公父氏之婦知也夫といへり。魯の敬姜は一婦人なれども。その賢なることかくの如し。（敬姜が事は。孔子家語。曲禮子夏問にも見えたり。又これと大同小異なり）又重衡は。世累武辨の家に生れて。貴きこと三位の中將たり。もし一毫も學問して。これらの書を讀むことあらば。その身斧鉞に死するといふとも。估客村翁にだも。笑はるゝ恥はあらじ。關羽は好みて。春秋左傳を讀みしといふ。將帥の用心を知らざりけり。只是のみならず。はじめ都に牽れしとき。土肥二郎に請ひて木工馬允友時を使として。年來相狎れたる內裏の女房（櫻町中納言成範女。中納言局）に。書を與へ歌をおくり。（盛衰記三十九）又南都へ送り遣らるゝとき。醍醐の邊にて。源藏人賴兼の從者等に請ひて。日野大夫三位の宿所に立ちより。その內室に對面して。別離の哀傷。外聞を憚らず。（盛衰記四十五）その痴情すべて女子小人の態にして。將相のうへにはあるべくもあらず。既に南都にて斬るゝとき。事を讀經に托して。時を移し。實平（土肥二郎）を見かへりて。敵を敵に渡すことは。昔より未レ聞。賴朝も。彌勒の世をばよも持たじ。云云といふ段に。實平答へて。二位家の計ひばかりにては候はじ。法皇の御計にてこそ候はめ。就レ其鎌倉にて。善便宜の候ひしに。などて御自害は候はざりけるやらんといへば。中將笑ひて。人の胸には。三身の如來とて。佛御座。怖し悲しとおもひて。身より血をあへさん事は。佛を害するに似たり。されば自害はせざりき。只今も。首を刎んとせば。流石妄念も起りぬべし。何となき振にもてなし。吾に知せず頸を打て。（盛衰記四十五。この說南都より出でたりといへり）と利口せし。その怯その愚の甚しき。又多く得かたかるべし。人のしれることながら。平家の三不肖は。池大納言。（賴盛）內大臣。（宗盛）三位中將。（重衡なり）かくの如き人々。父兄の威德によりて。槐門淸花の上にをり。その半生だも保ちしは。猶幸といふべし。孟氏誦二孔子之言一曰。志士不レ忘レ在二溝壑一。勇士不レ忘レ喪二其元一。（滕文公篇下）世に僕夫たり共。常

類ナキ美女ヲ。四十八人擇ミテ。常燈ニ一人ヅヽ付ケ給ヒテ。油ヲ添ヘ。燈ヲ挑ゲテゾ置レケル。齡二十ニモ餘リケレバ。取リ替ヘ取リ替ヘ居ヱラレケリ。日沒ノ時ニ成リケレバ。四十八人ノ女房達。衣裝花ヲ折リ。蘭麝ノ芳ヲ新ニシテ云々。又彼四十八間ヲゾ廻リケル。心ノ闇ノ深キヲバ。燈籠ノ火コソ照スナレ。彌陀ノ誓ヲ憑ム身ハ。照サヌ所ナカリケリ。ト別ノ詞ヲ交ヘズ。是バカリヲ折リ返シヽヽ謠ハセテ。我身ハ中臺ニ座シ給ヒ。是ヲゾ聽聞セラレケル。（並出二巻十一一）といへり。佛に供養する燈籠ならば。法師にこそ掌らすべきに。斯く夥なる美女をもてせられしは。抑何の爲ぞや。これも亦。その病を速くせん爲に。一には佛に佞媚して。身後を憑み。一には女色の刄を借りて。この命根を斷んとてなるべし。しからばこの大臣の。親に先たちて薨せしは。熊野の神の感應にはあらで。この色相四十八如菩薩の利益ならん歟。これも亦しるべからず。こゝに至りて。柳宗元が非國語。ますく味ひあり。この大臣のごときは。從善の人といふべし。これを大賢としもいふは。こゝろ得がたき事なり。○附けていふ。平家の上臈多かる中に。三位中將重衡（相國清盛第四子）は。尤好色の人なりき。一期の不覺。女子と小人を愛せしによれり。既に擒となりて都に牽れしとき。法然を招待して。罪障懺悔の辭に。父入道相國の命によりて。東大寺を燔きたるを。第一の罪惡なりとてうち泣きしは。（見二源平盛衰記。卷三十九一）大將の氣象にあらず。と駿臺雜話にいへり。余も亦ひとつ好みて人の非をいはんとにあらねど。二つ引き出でて。自他の戒にせまほしきことあり。東鑑（卷八。文治四年。四月二十五日條下）云。辛卯。今曉千手前（平家物語。盛衰記。並作二千壽前一。手越長之女也）卒去（年二十四）其性太穩便。人々所レ惜也。前左三位中將重衡參向之時。不慮相馴。（武衞二遣重衡千手前一事。見二同書三。元曆元年四月廿日條下一）彼上洛之後。戀二慕之一。朝夕不レ休。憶念之所レ積。若爲二發病之因一歟之由。人疑レ之云々。重衡。數千騎に將として。敵陣に臨むの日は。堅を摧き鋭を劈き。命に代らんと欲する士卒一人もなし。既にその軍敗れ。生田森にて。莊三郎家長に生拘(いけとら)るゝとき。重衡の愛臣。後藤兵衛守長すら。その主を捨て。その馬（夜目ナシ鴾毛）を奪ひて逃げ失せたり。（見二盛衰記卅七一）かくて鎌倉に送られて。暫く幽せらるゝの日。籠居の徒然を慰めたる。歌妓千手がごときに至りて。別を惜

りて。得べきにあらず。しかれども。周公代らんと乞ひて不死。武王の病瘳えたるは。是その至誠の應驗にして。平大臣。范文子等が事とおなじからず。赤染右衞門が住吉の神に禱りて。かはらんといのる命はをしからで。さても別れんことのかなしき。とよみて獻りければ。その子大江擧周の病瘳えたりといふも。同一理なり。この事は。淸輔袋草子。（卷四）及古今著聞集。（卷五）十訓鈔（第十訓第十五則）等に見えたり。至誠の感應により。病の瘳ゆる事はあらん。死生は禱るとも得がたかるべし。或又云。壽の禱りて得がたきは。翁の言の如くなるべし。死を禱るものは得る事あらん。譬へば醫師の匙をもて。人の年を延ぶることはかたく。その死を速くするものは多かるが如し。神佛の應驗も。易きをかなへ給ふにこそ。と利口せしはをかしかりき。俗に小松の大臣を。菅公。北條泰時と並稱して。天朝の三賢とすといへり。しかれども前輩。或は其不學を譏りその瑕疵をいふものあり。毎夜に夥の燈籠を點たしる。又宋の育王山へ。黃金を寄布せしといふ是なり。（讀史餘論。駿臺雜話等考ふべし）唐山へ黃金を渡し、事は。一定違はざるにや。宋史。（外國列傳日本）傳。乾道九年。（孝宗年號。天朝高倉院承安三年）始附ニ明州綱首ニ。以ニ方物ニ入貢。これ歟。これを盛衰記に合せ考ふるに。育王山へ送レ金事ノ段ニ云。大臣ハ我朝ノ三寶ニ。財寶ヲ抛チ給フノミニ非ズ。異國佛陀ニモ。志ヲゾ運ビ給ヒケル。奧州知行ノ時。氣仙郡ヨリ。金千三百兩ヲ進ラセタリケルヲ。妙典ト云フ唐人ノ。筑紫ニ在リケルヲ召シテ。百兩ノ金ヲ賜ヒテ仰セケルハ。千二百兩ノ金ヲ大唐へ渡スベシ。其内二百兩ヲバ。育王山ノ衆徒ニ與ヘ。千兩ヲバ帝ニ獻リテ。當山ニ小堂ヲ建立シテ。供米所ヲ寄進セラレ。重盛ガ菩提ヲ弔ヒテ給ハルベシト可レ申トテ云云。（この段平家物語には。安元の春の比云云。いわう山。佛照禪師に附與すといへり）宋史に由れば。承安三年の事なるべし。又燈籠大臣事ノ段ニ。大臣ノ常ニ住ミ給ヒケル所ヲバ。東へ十二間。南へ十二間。西へ十二間。北へ十二間ノ屋ヲ立テ四方ニ。四十八ノ間ヲ點ジ。一方ノ十二間ニ十二光佛ヲ。一體ヅヽ奉レ立タリケレバ。四方ニ。四十八體ノ十二光佛御座ケリ。其御前ゴトニ。常燈ヲ燃サレケレバ。四十八ノ燈籠アリ。暗夜ノ星際モナク。澤邊ノ螢ニ似タリケリ。上ハ二十歲。下ハ十六歲。色深ク身盛ニ。姿人ニ勝レ。形

ヨリ又悦ビノ奉幣アリ。人々奇トハ思ヒケレドモ。其御心ヲバ不レ知。下向ノ後。幾程ナクテ。後ニ悪キ瘡ノ出デ給ヒタレドモ。ツヤ〳〵療治モ祈誓モナカリケリ。巻十一 こゝには諒闇の色といへり。諒闇の色は。喪服の色なれば。前にいろとあるを。注するに足りぬべし。抑重盛大臣の。をさ〳〵死を祈りしは。厩戸豊聰耳皇子命の。蘇我蝦夷が驕慢不臣を制しかね。斑鳩宮の寝殿にて。妃と、もに氣を塞ぢて。遷化したまひしと。おなじ意なるべし。厩戸皇子の薨ぜし事は。推古紀。二十九年春二月及平氏が聖徳太子傳暦下編。廿五丁より下に見えたり。こゝに引くところは。傳暦に由れるなり この事唐山にも相似たるあり。晉の大夫范文子名燮。國語或作レ燮。蘇接切。正字通。燮晉屑 これなり。左傳。成公十七年 晉范文子反レ自二鄢陵一。使二其祝宗祈一曰。君驕侈而克レ敵。是天益二其疾一也。難將レ作矣。愛レ我者。唯祝レ我使下我速無上レ及二於難一。范氏之福也。六月戊辰士燮卒。士燮范文子也 杜注云。傳言二厲公無道一。故賢臣憂懼。因禱二自裁一。又この事。國語。晉語六 に見えたり。文大同小異のみ。柳宗元非國語下 曰。死之長短。而在二宗祝一。則誰不乙擇二良宗祝一而乞甲レ壽焉。文子乞レ死而得。亦妄之大者。見二唐柳河東集巻第四十五一 この言猥雑に過きたれども。亦僻論といふべし。かゝればそ

の祈レ死の事は。和漢にふりたる小説ならん。或これを聞きて。余を語りて云。周公旦は聖人なり。しかるに金縢の書の事あり。成王の死に代らんと禱りしは。これ亦周公も。その死を乞ひしにあらずやといへり。余これに答へて云。周書の金縢に由るに。成王の病みたるにあらず。周公の禱りて。その死に代らんと乞ひしは。武王の爲なり。後にその匱を披き。その冊を見て。感じて周公を返しゝは成王なり。史記魯世家には。兩説を擧げたり。初には。武王の病しとき。周公卜して吉を得たり。よりてその策を金縢の匱に藏めきといへり。後又云。初成王少時病。周公乃自揃二其蚤一。沈二之河一以祝二於神一曰云々。成王病有レ瘳。及二成王用レ事。人或譖二周公一。周公奔レ楚。成王發レ府。見二周公禱書一。乃泣返二周公一。索隱曰。經典無レ文。其事或別有レ所レ出。而譙周云。秦既燔レ書。時人欲レ言二金縢之事一。失二其本末一。乃云。成王少時病。周公禱レ河欲レ代二王死一。藏二祝策于府一。成王用レ事。人讒二周公一。周公奔レ楚。成王發レ府見レ策。乃迎二周公一。又與二蒙恬傳一同。事或然也。かゝれば史記は證にしがたし。書の金縢は。昔儒の傳に由るに。死生は禱

平家物語。小松大臣熊野詣の段 小松内大臣。重盛 父入道相國淨海の不臣惡行を諫めかねて。治承三年の夏の比。盛衰記には。五月といへり 公達引き具して。熊野に參詣し。父の惡心止むときなくは。重盛が運命をつゞめて。來世の苦難をたすけ給へと祈り給ふ云々の條下に云。兩个の求願。ひとへに冥助をあふぐ。とかんたんを碎きて祈念せられければ。とうろうの火のやうなるもの。大臣の御身より出で、。はつときゆるがごとくして。失せにけり。人あまた見奉りけれども。恐れて申さず。大臣下向の時。岩田川をわたられけるに。嫡子權のすけ少將維盛以下。公達淨衣の下に。うす色のきぬをきて。夏の事なれば。何となう水にたはふれ給ふ程に。じやうえのぬれて。きぬにうつりたるが。ひとへにいろのごとく見えけるを。ちくごの守さだ貞能よしこれを見とがめて。何とやらん。この淨衣の。世にいまはしげに見えさせまし〳〵候。いそぎめしかへらるべうも候らん。と申しければ大臣。扨は我所願すでに成就しにけり。あへてその淨衣あらたむべからずとて。いはた川より熊野へ。別して悅びの奉幣を立てられける。人あやしみ思へども。猶其心をえしめず。しかるに此公達。程なくやかて。誠のいろをきたまひけるこそふしぎなれ。其後大臣下向の時。いくばくの日數をへずして病つき給ひぬといへり。草牟春備に。此段を引きて云。こゝにいろといひたるは。純色の事なるべし。にび色は。喪服の色なれば。にびいろといふだにいまはしければ。いろとのみいひたるなるべし。今も田舍には。喪のころもを。いろとのみいふといへり。さらば今の女のことばに。紅をいろといふ事。あさましくいまはしきなりといへり。按ずるに。熊野詣の段は。源平盛衰記に異同あり。記ニ云。岩田川ニ著キ給ヒテ。夏ノ事也ケレバ。河ノ端ニ涼ミ給フ。權亮少將已下。公達二三人。河ノ水ニ浴シ戯レテ上リ給ヘリ。薄アヲノ帷ヲ。下ニ著給ヘルカ。淨衣ニ透キ通リテ。諒闇ノ色ノ如ク見エケレバ。貞能是ヲ見咎メテ。公達ノ召レタル御帷。淨衣ニ移リテ。ナドヤ忌敷覺エ候。可レ被二召替一ト申シケル。次ヲ以テ。證誠殿ノ御前ニテ。御念珠ノ時。御後ニ照リ光リシ事。有リノ儘ニ申シケレバ。大臣打チ涙グミ給ヒテ。重盛。權現ニ申シ入ル、旨有リキ。御納受アルニコソ。其淨衣不レ可二脫改一トテ。是

云。然り。左大辨藤原經房と。左少辨藤原經房を別人にして。その事ありとせんにも。猶理義に稱はざるをしらずや。二位尼。竊に經房等の兩臣一婦人を。先帝に傳まゐらせて。潛幸なし奉らんに。などて三種の神器を。玉體にそへ奉らざりし。彼書にいふ如く。寶劍は。須磨にて失せたりとも。なほ神璽内侍所あり。そは別船におはしまして。早(とみ)に取りまゐらするに。便なかりしともいふべし。しからば二位尼の。先帝を潛幸なし奉りしは。源氏にとらし奉らじ。と思ひしのみにて舊都に還幸の議に及ばずとも。先帝は。上皇(後白河)のおんためにも。御孫ならずや。復位はかなはせ給はずとも。いかでか强顏(つれなく)あたらせ給ふべき。又鎌倉幕府(賴朝)もしかなり。平家は朝敵なり。且父の讐なればこそ。討ち滅しもしたれ。よしや自家を營むの奸ありといふとも。後世。明の燕王(名棣。太祖第四子。是爲二成祖文皇帝一)が。靖難を唱へて。都城を陷れ。建文帝(名允炆。太祖孫。懿文太子之子)をうしなはんと謀りし類にはあらず。これ先帝恙なくおはしましゝと聞かば。必その御座を儲けて。迎へとり奉るべきに。彼三臣は。次の年の夏までも。竟に還幸の議なかりしはいかにぞや。其も平維章が。二位尼を論ひしごとく。天下の共主とまうすことを。忘れたるにやあらむ。又その志操。上皇さへにねたく思ひ奉りて。會稽の恥を雪めまゐらせん爲に。ふかく潛せ奉らば。密々に。平家の殘黨を招き集めんとこそ。相謀(はからふ)べき事なるに。さるこゝろがまへもなく。朝敵なる。平家の落人に等しく。露命を繋がし奉るを。おの〳〵その身の務にせしはいかにぞや。こは後生机上の論にして。當時の勢。なほ還し奉りがたきすぢありけんと助けいふとも。さては智勇の足らざるのみならで。忠もなく義もなきに似たり。かゝれば彼經房の遺書をもて。明の史彬が致身錄に擬すとも。その趣は似て。その事は非なり。致身錄すら。彼にも。信くるものあり。僞とするものあり。傳寫の異聞。故より定說なし。むかし孟氏は。萬章に答ふることゝ再三。好事者爲レ之也。(萬章篇上)といふをもてせり。好事のものゝしたらんには。その實なき事しるべきのみ。顧ふに經房の書も。一卷の小說なり。それを實錄としもいふは。好事の手より出づればなるべし

第三十五人事　小松内大臣（平重衡並北條時賴微行餘論附出）

郎等。熊手ヲ下シテ。御髪ヲカラ巻キテ。御舟へ引キ入レ奉ル。提要又云。神璽ハ。海上ニ浮キ給ヒケルヲ。岡太郎經春。取リ上ゲ奉ル愚管鈔。巻五かやうにて。平氏は云々。西國におもむきて。長門の門司の關。壇の浦といふ所にて。船いくさして。主上をば。うばの二位。（宗盛母）いだきまゐらせて。神璽寶劔とり具して。海に入りにけり。神皇正統記。巻五安德天皇記云。清盛が後室。從二位時子といひし人。此君をいだき奉り。神璽をふところにし。寶劔を腰にはさみて海に入りぬ。あさましかりし亂世なり。保曆間記。中巻壇浦合戰段云。二位殿。今ハ限リト思ハレケレバ。寶劔ヲバ腰ニサシ。神璽ヲバ脇ニハサミテ。先帝ヲ按察局ニ懐カシ奉リ。海ヘゾ入リ給ヒケル。譬ヘバ平家ハ亡ブ共。先帝ヲサヘ失ヒ奉ル事。淺增ナンド申スニ及バズ。元ヨリ此老尼ハ。武キ人ナリケル程ニ。カヽル事ヲ計ヒケルコソ。淺增ケレ。女院モオクレ進セジ。ト飛ビ入ラセ給ヒケルヲ取リ上ゲ奉ル云々。神璽ハ浮キタリケルヲ。取リ上ゲ奉ル。これらの證文。各小異（先帝を二位尼抱き奉りしといふと。按察局いたき奉りしといふ類是なり）あれども。大かたは相おなじ。この日は白晝の合戰にして。しかも海上の事なり。經房等翅ありとも先帝に供奉して。虎口を脱るゝ事は。有りがたき勢なるをや。東海談下編に。この段を論じて云。諸源の諸平を滅したるとき。二位尼。天皇を抱き。傳國の璽を帶びて入水せしは。女心と謂ひつべし。いかに女なればとて。最拙きこゝろなり。今の女は。却りてかゝる事はえすまじ。天皇と申し奉る。至極のいはれをしればなりといへり。東鑑及保曆間記に。按察局。先帝を抱き奉りて。入水せしといへるにより。按察局は存命たるに。先帝の尊骸の浮かせ給はぬを疑ふものあり。これらの人。彼經房の書を信けて。二位尼の寃をも雪むべく。數百年來の疑を解かんものは。只この書にこそとて。賣弄もあらん歟。小説傳奇は。はじめより。誰も作り設けたる僞をしるものなれば。誣ふるといふとも猶淺かり。古書を僞作せしものは。竊に緣る所あれば。識者も不圖欺かるゝことあり。こゝをもてその害深し。蝌蚪の魚子に似たるは。何ぞ久しからん。碔砆の玉に混ずる。嗚呼おそるべきかな。惑者の云。しかりといへども。和漢今昔。同名の人。時を同じうする事多かるにあらずや。余が

言に升進し。正治二年閏二月十一日。年五十八にて薨せしなり。源平盛衰記。巻三十一法皇自ニ天台山一還幸事段云。同日壽永二年七月廿七日院ノ御所ニテ議定アリ。左大臣經宗。中略左大辨經房。新三位季經。新宰相中將泰通ゾ參ラレケル。同書。卅二義仲行家受領ノ事ノ段に。八月十日。法皇ハ蓮華王院ノ御所ヨリ。南殿へ移ラセ給フ。其後三條大納言實房。左大辨宰相經房參リ給ヒテ。被レ行ニ除目一ケリ。同書。卅三頼朝征夷將軍宣ノ事ノ段に。壽永二年八月日。左大史小槻宿禰奉ル。左大辨藤原朝臣。在判トゾ被ニ書下一ケル。同書。四十六闕官恩賞人々ノ事ノ段に。同文治元年十二月十七日云々。可レ豫ニ議奏一人々トテ。關東ヨリ交名ヲ注進ス。右大臣云云。藤中納言經房闕云云也。諸家大系圖。第七藤原氏譜。經房頭藏人。民部卿。大宰帥。正二位。三事。參議。大辨。權大納言。母中納言俊忠女。正治二年二月晦日出家。今日進ニ辭狀一。同年閏二月十一日薨。五十八歲。系圖にいふ三事は。書の大禹謨に出で丶。詩の小雅にも見えたり。こゝには一卿三職をいふ。この外に。左少辨藤原經房といひし人。絕えて所見なし。縱ひこれありとも。當時同姓同名にて。共に大少の辨たりといはゞ。誰かは信けん。且その薨卒の年。前後ありといふとも。共に五十八歲にて終りし事。亦怪むべし。人のしれる事ながら。安德天皇。西海に沒ませ給ひし段を參考するに。東鑑。巻四元暦元年三月廿四日條下云。於ニ長門國赤間關。壇浦海上一。源平相逢云々。及ニ午刻一。平氏終敗傾。二品禪尼。持ニ寶劒一。按察局。奉レ抱ニ先帝一。春秋八歲共以沒ニ海底一。建禮門院。藤重御衣入レ水御之處。渡邊黨。源五馬允。以ニ熊手一奉レ取レ之。按察局同存命。但先帝。終不ニ令レ浮御一。若宮今上兄者御存命云々。四年四月十一日。義經朝臣。注進條下云。一生虜人々云々。女房。帥典侍。先帝御乳母大納言典侍。重衡卿妻帥房。二品妹按察局。奉レ抱ニ先帝一雖レ入レ海存命源平盛衰記。巻四十三二位禪尼入レ海段云。二位殿。今ハ限リト見ハテ給ヒニケレバ云々。寶劒ヲ腰ニサシ。神璽ヲ脇ニ挾ミテ。艇ニ臨ミ給フ。先帝ハ云々。云々ト宣ヒモハテズ。海ニ入リ給ヒケル。女院ハ。後レ奉ラジ。ト御燒石ト御硯ノ箱トヲ。左右ノ御袂ニ宿シ入レ。御身ヲ重クシテ。ツヾキテ海ニ入ラセ給ヒケル。渡邊源次兵衞番ガ子ニ。源五馬允眤ト云フ者。急ギ飛ビ入リテ奉ニ潛上一ケルヲ。眤ガ

つりける藤原經房。かき曇る雪げのそらを吹きかへて月になりゆく須磨の浦かぜ」文政元年冬十一月。膽寫の奥書あり。この書。數百年を經たれば。蠹損磨滅。これが爲によみ得がたき處々すくなからず。云々といへり。かゝれば原本を寫し、といふ歟。心得がたき事なり。出野村は妙見山の麓にあり。池田を去ること四里許なりといふ。今按ずるに攝陽群談卷一下村部。能勢郡野間村の下に云。伊奈地。澤。出野。西山。大原立石等ノ邑アリ。といふ是なり。この他。彼書中なる地名の。今と似つかはしきものあれども。無益の辨なれば贅せず。又彼書に見えたる人名を考ふるに。當時典侍と唱へし女官多かり。帥典侍は中山中納言顯房卿の女。平大納言時忠卿の妻なり。中宮御產の時。御侍乳に參りし事。御乳人になり給ひし事。並に源平盛衰記。卷十に見えたり。一の御乳母なるべし。大納言典侍は。平重衡卿の妻なり。と東鑑卷四にいへり。盛衰記卷四十五には。五條大納言邦綱卿の女。重衡卿の北方の妹。先帝の御乳母なるよしいへり。同書卷四十八には大宮太政大臣伊通公御孫。鳥飼中納言伊實卿ノ御妹。五條大納言邦綱卿養子。本三位中將重衡卿北方。先帝の御乳母也。といへり。前に重衡卿の北方の妹といひしは誤なるべし。阿房内侍は。同書同卷に。辨入道貞憲カ女也といへり。かかれども源典侍といひし人は所見なし。右將基道。大輔判官種長も未レ詳。當時關白藤原基通公あり。基道を。基通とも書きたれば。これ同名の人歟。いぶかしき事なり。又平家恩顧の侍に。景家といひしは。飛騨守景家なり。盛衰記卷三十一十八丁ノ左に。飛騨守景家。卷三十二十右にも景家とありて。卷三十八廿八丁右より。下には。景經とあり。こは筑後守貞能。越中二郎兵衞盛嗣等に劣らざりし。勇悍の老武者なりき。壇浦の戰に。景經も陣歿せしよし。同書に見えたれば。同人とすべからず。彼書にいふ郡司景家は。受領何國の郡司なるにか。かへすぐ\もいぶかしき事なり。就レ中疑ふべく。信けがたきは。その書を遺し、といふ左少辨藤原經房なり。[illegible]河となれば。壽永元曆の間。辨官に經房と聞えしは。左大辨藤原經房なり。この經房卿は。平族幼帝國母を挾みて。都を落ちたるとき。倶に西國へ參らず。都にとゞまりゐて。上皇後白河及後鳥羽の朝に仕へ奉り。中納言を歷て。大納

石見國をさして潛幸なし奉りし事。五月三十日に。但馬の國府に近つき。十五日に能勢の長尻といふ處より。野間の郷へわたらせ給ふよしをいへり。このみちすがら。先帝御惱の事。七月二日に至りて。おこらせ給ひし事。里人與三丁太等が議によりて。竟にこの里に潛（しのば）せ奉りし事をいへり。これよりの後。岩先といふ處へ。しば／＼御幸なりし事。長月廿日あまり。紅葉を御覽ずるとて。河合へ御幸ありし事。先帝のおん歌。幷に經房。典侍の歌とて。三首をしるしつけたり。又十月廿四日に。初雪ふりければ。來見の峯に御幸ありし事。くるみの峯にて。はつ雪の御製なども見えたり。その年霜月の條下に。種長景家は。しのび／＼に都。大物の浦へ。主上の御供の料の調度など。しろなして。かへりし事。建禮門院の。大原におはしますを傳へ聞きしこと。都には。主上を安德天皇と稱へ奉るよしを。景家かへりて。人々に告げし事。是より先きに。種長景家等は。田しろをひらきて。畊作を事とする事をいへり。かくてその年は暮れて。壽永五年。都は。文治三年といふ條下に。春は日毎に。岩崎へ御幸なりし事。卯月のはじめより。御惱しきりにして。十七日の朝。登霞し給ふといへり。又御衣御調度などを。岩崎に齋祀るに。世を憚りて八の宮とまうししを。若宮八幡とあはせまつるといふ條下に云。典侍もわれもさまかへて都の大原にまゐらん。□ようゐしあへと。種長景家しひてとゞめ。さまかへはのちたえん。典侍をめとりて。遠な□につかへまつるこそ。臣たる誠なれといひしらす御社はなれんも心うく。里のものになりて。小家しつらひ。田かへしのわざをして。田しろをひらき。末のとし御國忌すきはて丶。典侍にかたらひ御社につかへ奉る。種長は君の來見の御作りうたを京にもて。來見權現とあがめ奉れり。あなかしここのふみ人に見することなかれ

從四位上侍從行左少辨藤原經房 元仁元年壬申八月七日逝行年五十八歳葬來見山辻杜社

建保第五丑年九月二日　左古麻呂へ

この末に行をはなちて。子孫の譜あり。經實 左近行年八十三歳文永八年未三月二日 といふに起りて。經久 久右衞門五十二才天正十五亥四月十八日 といふに盡く。すべて十三人の姓名をつらね記したり。又行をはなちて。經房の詠草を出だしたり。「たてま

小次郎平三口はたちにあまれり。我子左古麿廿六歳なるが。よく田うゑ畑うちして。わなみに世をぞいとなみすぐしぬ。これらはことのもとさたかにもしらず。われも今はたいそちになりぬ。けふにも身まからば。するの世の子孫に口しるものたえてならんかし。云々といふ數行よりかき起したり。又云。壽永四年乙巳三月廿四日の日。二位殿ひそかに典侍大納言局口勾當内侍。阿房の内侍。右の將基道。われ經房大輔判官種長。郡司景家をめされ。我家の運命けふにつゝめたり。されど。家の弓矢盡きたりとて。主上門院同じ道に御幸なし奉らんも空おそろし。何國の浦。何國の山の奥にも御幸なし。後の世の手たてをもなさせ。口口口砂金いくらもとりいださせ。また。のたまふには。たとひ源氏と口奉るとも。いかで玉體を惱ませ奉らん。ひとつ口口一門のやからは。とらはれなば命あるべうもおぼえず。扨ぞ異氏のものばかり供奉さするなれと。女院へわかちつけ給ひける。このものらは。火水の中までも供奉すべきことおぼしはかり給へるなり。心つよく供奉し口れと。ねんごろにお口せあれども。皆涙のみ落ちて。きと

御いらへも申さでありける。あやしの小ぶねに人々身をやつして。その心かまへ（本ノマヽ）てしおりぬ。主上。典内侍。經房。種長うちのりて磯へ漕き。またの小舟に女院。大納言。口勾當内侍。阿房内侍。基通。景家のりてこなたへこぐあひは廿段ばかりも有りぬらん。いそには源氏いくらとなく。舟にも陸にもゐあまりて。のがれはつべくもなし。一門の人々あるはうたれ。海にもしづみ給ひしに。二位どのは。知盛卿の乙の御子にみぞ〇（虫ハミ）けて。須磨の内裏にて亡びさせ給ひしときこえし。御劒めきたるものをもたせ給ひ。海に入りたまふ。見るに心もきえ。やみよりやみにたとるこゝちして。かたきもみかたも。涙口聲をのみて。佛の御名のみとなへつゝ。かづきあげ奉らんとさわく。このひまにありそにつけ種長おひたてまつり。足ばやにはしりてかへりみれば。女院の御舟はありそに著きたるを。はや源氏の武士とりかこみ口り典侍は玉きり給ふ。主上にしらせ奉らじといさめまきれてゆくほどに。いかゞしてのかれ來にけん。景家はやく參りたるなげきの中に力をそへ。三里ばかり山ぶみして云々。これよりの下。三月廿八日に。

りて。もて我を利とす。わが彼を待ちて利とするにあらず。瞽尼が加持に有驗なりしも。無爲にしてよくなすものなり。譬へば谺の響きに應ふが如し。これしらずして應驗あり。わが加持の。彼に驗あるにあらず。彼が思欲の。わが加持に驗あらせしのみ。怪しむに足らず。且その死期を。豫て知るや。亦知らずしてよくしるものなり。譬へば病猫も。よくその死を知りて。みづからその骸を藏すことあり。わがその死期を知るにあらず。死期のわれに知らせしのみ。亦怪むに足らず。彼衆人は。おの／＼智あり。この瞽尼獨愚なるが如し。その智には及ぶべし。その愚には及ぶべからず。既に己を虚うすることを得たり。もしその佛に事ふるこゝろもて。父母に事へなば。孝女ならん。君に事へなば。忠臣ならん。良人に從はば。貞女ならん。子を養はゞ。慈母ならん。惜いかな。これを人事に得ざる故に。得たりといふとも竟に功なし。これを念佛の功德といふこと宜なり。是を人事になせといはゞ。渠よくこゝに至らんや。

第三十四人事　藤原經房

いぬる丁丑の秋。攝津國能勢郡。出野村（しゆつの）（出以音。野以訓）なる。勘兵衛といふ農家の天井より。奇書一通あらはれにき。その書は竹筩に籠めて。水銀をもて充て塞きたり。うち披きて見るに。壽永の闘戰に。安德天皇從亡の忠臣。左少辨藤原朝臣經房の遺書なりけり。私にすべきにあらずとて。やがてそのよしをまうししかば。守云々の後。そのぬしに返し給ひしとぞいふなる。實說なりやしらず。その書に由れば。舊錄軍記に傳ふる如くにはあらで。當時先帝は恙なく。戰塲を出でさせ給ひて。此わたりに。潜みておはしましゝなりといふ。京の人森島守近。（號二琴魚一）はやくこの事を傳へ聞きて。余に云々と告げしころ。いかでその書の見まほしさに。更に彼人を勞煩すること二年に及びつ。守近からくして。ある人に就きて。攝津の人某氏の寫本を借抄し。遂に郵附して見せらる。余これを獲て。燈下に閱しゝに。つや／＼信けかたきものなり。はじめその書に云。ことし建保五年丑ふつき四日に源のすけみまかり給へり御年は五十まり五とせとなん云々。種長は十とせあまり九とせまへに身まかり。景家は十とせまり三年まへにをはりぬ。種長のわすれがたみに。刑部太郎廿八才。景家の子

よしをいふのみ。
道は成り難がたうして。離れ易し。離る丶ときは成ること
なし。楊子法言。巻一學行篇曰。百川學レ海。而至二于
海一。丘陵學レ山。而不レ至二于山一。是故惡二其畫一。畫止也
といへり。これを人事に求むるものは。儒者なり。
求めてこれを得たるものは。其唯顔孟歟。これを高
遠に求むるものは。老莊の徒なり。これを鄙醜に求
むるものは。浮圖氏なり。老佛には。求めて得たる
者多かるべし。然れども人間に要なし。いかにして
これを人事に求めん。孔子曰。詩三百。一言以蔽レ之。
曰。思無レ邪為政篇 苟も思邪なきときは。道その中にあ
り。しかれどもその思慮欲作に昧されて。須臾もこ
こに居り難し。故に老子四十八章曰。爲レ學日益。爲レ道
日損。損レ之又損。以至二於無一レ爲。無レ爲而無レ不レ爲。
といへり。この語は。易の損益二卦より出でたり。
易曰。損。損レ下益レ上。其道上行。又曰。損而有レ孚元
吉。又曰。損レ剛益レ柔有レ時。損益盈虛。與レ時偕行。
序卦曰。解者緩也。緩必有レ所レ失。故受レ之以レ損。損
而不レ已。必益。故受レ之以レ益。益而不レ已必決。故
受レ之以レ夬。夬々者決也。云々。老氏の意これとおなじ。

損なければ益あらず。益なくば何をか損せん。諸子百
家の言は。學問の益なり。よく學ばずば。この益あ
ることなし。益して後に損すれば。豁然として曉る
ことあり。これ學問の至益なり。これを綆なはを引きて。
水を取るものに譬ふ。始めよりわが手の邊に至らし
めんとすれば。罐つるべに過不及ありて。自由ならず。引
きのぼして。後に降せば。速に便宜に隨ふ。これを
益して損すといふ。易曰。益。損レ上益レ下これなり。
これを道を爲るといふ。釋敎にいふ悟道これにおな
じ。攷古質疑巻四に。莊子の大宗師なる。顔回曰。回
益。仲尼曰云云の語を引きて。老子損益の説を解き
たれども。いまだ易に及ぶものを見ざれば。聊こ丶
に愚意を述ぶ。これ老子八十一章中の牡鑰にして。
學問の祕鍵なり。損に居て益を知る。これを名つけ
て。虛靜といふ歟。動きて靜なるものは。道德の靜
なり。靜にして動かざるものは。老佛の靜なり。梵書
にこれを禪定といふ。禪は靜なり。定も靜なり。又
これを。觀といふ。觀に五義あり。觀して煩想なき
ものは。こ丶ろ山窒に等し。心山窒に等しきときは。
物として載せざることなし。こ丶をもて衆人日に入

禹謨云。人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執二厥中一。といへり。これ亦。老子第十章に。載二營魄一。抱レ一能無レ離乎。專レ氣致レ柔。能嬰兒乎。滌除玄覽。能無レ疵乎。愛レ民治レ國。能無レ知乎。無レ智。林本作レ無レ爲といひしにおなじ。營魄の魄は。精魄。卽經營なり。抱一は谷神なり。無レ離乎は。中庸に。道也者。不レ可二須臾離一也。可レ離非レ道也。といひしにおなじ。嬰兒も亦谷神に譬へたり。滌除は洗二煩想一なり。玄覽は。觀念而視なり。この處。王註。林註。迭に異同あり。蒙學の爲。今愚意をもて略解す。先儒の說に。大禹謨は。後人の僞作なりといへり。仁齋の中庸發揮に據るに。荀子解蔽云。昔者舜之治二天下一也云々。故道經曰。人心之危。道心之微。楊倞注云。今虞書有二此語一。而云二道經一。蓋有道之經也云々。この注非ならん。荀況の所云。道經は。道家の經なるべし。大禹謨の舊本に。人心云々の語はなかりし歟。いまだ知るべからず。朱熹亦これを中庸の序に引きたり。且云。心之虛靈知覺。一而已矣。虛靈は水の靜にして。明なること鏡の如くなるをいふ。荀子に虛一而靜。といひしにおなじ

虛靈不昧は。唐譯の大智度論に出でたり。櫻陰腐談大疑錄等に。みなこれをいへり。愚おもへらく。書は言を取りて〻人を取らずこの言梵書に出づといふとも。その文字はこれ儒の文字なり。苟もここに譬ふべくは。佛語なりとも奚ぞ嫌はん。孟軻は楊墨を排斥して。その書に墨翟の語を載せたり。この事は。前版烹雜の記にいへり。楊雄亦周莊を排斥して。その書に莊子を引きたり。楊子法言。問道篇。論二莊周鄒衍一曰。至三周罔二君臣之義一。衍無レ知二天地之間一。雖レ隣不レ覿也。問明篇曰。或問。堯將レ讓二天下於許由一。由恥。有レ諸。曰。好レ大者爲レ之也。顚由無レ求二於世一而已矣。又曰。好レ大累克。巢父灑レ耳。不二亦宜一乎。許由巢父が事は。莊子の寓言に出でたり。又曰。鷦鵬沖レ天。不レ在二六翮一乎。拔而傳二尸鳩一。其累矣夫。幷に卷之五に見えたり。鷦鵬小大の辨は列子に出でたるを。莊周潤色して。逍遙遊に收めたり。これに由りて觀れば。孟楊二氏をして。釋敎中國に入るの後に在らしめば。その書に佛語を取ることあらん歟。これも亦知るべからず。こは無用の辨なれども。三敎一理の

にこれを聞けり。むかし念佛の行者。熊谷直實入道の如き。豫てよりその死期を知りて。示寂せし多かり。又世に高僧といはるゝにも。しからざるものあり。妙圓は無智の盲尼なり。何の故に。その加持に應驗ありし。又何によりて。その死期を知覺したる。これらの事。疑ひ易くして。曉りがたし。よりて益を乞ふといふ。余が云。人のいまだいはざる事を。我獨しるべきにあらねど。問はれて答へざらんは。詮なきに似たり。聊足下の疑ひを釋かん。彼妙圓が如き。俗にはこれを念佛の功德といふめり。これを念佛の功德とすれば。寔に念佛の功德なり。しかれども虛靜は道德の至りなり。德これより明なるはなし。唯念佛の功德とのみすべからず。智を祛り。慾を禁め。一を抱きて離れず。よく己を虛うせば。口に佛名を唱へずとも。人我おの〳〵妙圓たるべし。渠は無智の匹婦にして。且盲目たり。心素より智術なく。眼に色相件々の物を得見ざる故に移らず。こゝをもて道心ます〳〵堅固なり。その虛靜なる故に。人の爲に禳へば應驗あり。その寂滅を樂(ねが)ふによりて。豫てより死期を知れり。その知るは知るにあらず。知るべからずして知るものは。則習の性となゝるのみ。苟その心虛靜なれば。思邪なし。思邪なきものは。則聖人の心なり。所云。虛靜は。荀子。(卷之十五)解蔽篇何以知レ道。曰。心。心何以知。曰。虛一而靜。未三嘗不二臧(讀爲藏也)一也。孔子家語(卷二)好生篇。孔子曰。舜之爲レ君也。其政好レ生而惡レ殺。其任授レ賢。而替二不肖一。德若二天地而靜虛一。化若二四時而變一レ物。是以四海承レ風。暢二於異類一。韓非子。(卷一)主道篇云。道者萬物之始。是非之紀也。是以明君。守レ始以知二萬物之源一。治紀以知二善敗之端一。故虛靜以待。令名自命也。令事自定也。虛則知二實之情一。靜則知二動者正一。といへり。これらの數語は。竊に老子經に由れるなり。老子(第十六章)云。致二虛極一。守二靜篤一。吾以觀レ復。夫物之芸々。各復二歸其根一曰レ靜。是謂二復命一。復命曰レ常。知レ常曰レ明。不レ知レ常。妄作凶。といふ是なり。莊子。(卷五)天道篇亦曰。聖神之靜也。非レ曰レ靜。善故靜也。水靜。明燭二鬚眉一。平中レ准。大匠取レ法焉。又曰。夫虛靜恬淡。寂漠無爲者。天地之平。而道德之至。故帝王聖人休焉。といひしも同意なり。道は至微にして見がたし。心は欲作して。甚危し。故に。虞書大

かたならず。翌はそが示寂の日なれば。村人等。その消息を見んとおもふに。廿八日には。伊右衞門が家にをり。昨夜の儘にして。臥房を出でず。小横に身を倚せかけて。合掌念佛する程に。その聲漸く細りしかば。伊右衞門急に人を走らせて。村人等を集合(つどひ)つゝ。みなもろ共に念佛す。與五右衞門立ちよりて。その脈を診ふに。右の寸口は絶えたり。終焉に程あらじとおもふに。呼吸を復して。何事やらんいひつれども。聞きとるべくもあらず。かねて示しゝには一日後れて。十月廿九日の亭午。合せたる掌を放(ゆるべ)ずして。いとも愛たく往生しけり。時に年五十九。一云六十五〇後いと清麗になりしかば。人々念佛の功德を感嘆せり。かくて十一月二日に送葬しつ 示寂の兩日。又その葬送の日に。里人等群集せしかば。これが爲に。餲あき人さへ。出でたりといふ その遺財。方金云々錢云々ありけり。なほ足らざるを。村人等相助けて。葬式形の如くとり行ひけり。識者云。妙圓が示寂の時に。一日後れしは。正念の後。强ひて加持を乞ひしによれり。渠が意にはあらずとなん」丁丑の冬。柴田元亮。目二琴鱗一 余にこの事を告げて云。吾僚友小林生。前日金子村にゆきて。彼妙圓に由緣ある。與五右衞門

云。阿含經不レ云乎盲龜浮木。百年猶難レ値。蓋人間爲二苦海一。衆生爲二盲龜一。浮木卽菩提也。盲若二彼妙圓一。盲又盲者。而獲二難レ得之浮木一。大凡若レ是因緣。不レ可レ以レ言。唯以レ意可レ贊也。因錄乙於二徹書記草根集第八一所レ見之歌甲。以塞レ笑云。

山川耶瀨爾寄留涙能浮木二毛遇類乎稀乃龜曾鳴奈流

玄同居士□□

妙圓が墓はこの藪のうしろにあたれり田畑の畔にあり

ろ人に。この世の暇乞をせんとて。與五右衛門が女名はくにに手を攙(ひか)して。村長の宿所はさらなり。一村遺りなくうち巡りて。別を告げ。且年來の恩惠を謝するに。人みな心もとなく思へり。次の日廿七日妙圓は。浴みせまほしといふにより。朝より湯を沸し。心得たるもの兩三人。扶けて垢を流さすれば。歡ぶこと大

妙圓石地藏圖 寫眞 武藏國多摩郡金子村人家はなれたる間板橋のほとりに立てり江戸よりゆけば右のかたにあり

佛像は石中に半體を彫出せしなり面目磨滅都て圖の如し石は總高サ三尺許その四面に離笆あり後に造りそへたるなり

今もをり／＼錢をまゐらするもの餅くたものを供ずるものあり錢はそのほとりなる乞兒とれりもちひ果子は小兒輩がものとすといふ

金子村妙圓常念佛遺趾眞景

己卯夏日。渡邊華山子。爲三余之著二是書一。躬趣二于金子村一。寫二其眞景一者即此。雖レ未レ足二以爲一レ奇。然彼我用心。出二於勸懲一。若夫緇流。口說レ法而行不レ依レ律者。披二閱是書一。肇知レ有二彼尼一。據二是地圖一。以詳二其事蹟一。則欲レ無レ差。可レ得乎哉。華山子有レ感二于玆一画成之日。徵二余書於其上層一。余

の上に出で、。鉦をた、き。念佛を唱ふる程に。路ゆく人の投げ與へたる錢。やうやくに數まして。三貫文あまりになりつ。この後。又方金二方と錢二貫を得たり。この金錢をもて。地藏菩薩を造り奉らんと計るに。與五右衞門伊右衞門等。その事を助けつ、。いく程もなく落成す。卽街道の人家離れたる間にすゑ奉りしかば。妙圓歡びて。每日に石像のほとり。に侍り。鉦を敲きて。念佛いよ〳〵懈ることなし。さる程に。武藏の日野の新法寺。（天台宗）糟谷村なる正忍寺（天台宗）の兩住持は。近鄕に聞えたる大德なりき。この兩僧。一日妙圓に。地藏の畫像。（各一枚）を授けていふやう。汝この御佛をよく念じて。人の爲に加持せよかし。深信怠らずば。必應驗あらん。されば。每月に。四日八日。十四日。廿四日。この四ケ日は禱るとも效なし。自餘の日は障碍あるべからず。その念佛の功德もて。人の病苦を救ふことあらば。あはれ尊き行者ならん。と叮嚀に敎示せらる。この事を傳へ聞くもの。試にその加持を受くるに。應驗あらずといふことなし。その咒法。譬へば難產のものの爲には。地藏さま。何がしが妻に。安產させて給ひね。南無阿彌陀佛。南無あみだ佛。と唱ふるのみにて立地に安產す。この他。何にまれ。その人の所願のまに〳〵唱へて。地藏菩薩に祈請し。念佛の外。他事なけれども。一切成就せざることなし。かく行ひつ、年を經て。いぬる丙子の春の比より。思ふよしあればとて加持をせず。そはいかなる故ぞと問ふに吾儕明年の冬。十月廿八日には。念佛往生の素懷を遂ぐべし。さるを猶加持などせば。志願の妨ならんといふ。理なれば。みなその意に任するものから。殊さらなる難產あれば。强ひてその加持を請ふに。必應驗ありけり。かくて丁丑の秋。妙圓は。所得の錢八九貫文あるをもて。葬具を買はんといふ。村人等。その死期をしりたるを。まこと、は思はねども。渠がまに〳〵。棺經かたひらなどを。と、のへて遣はしけり。とかくする程に。かみな月廿三日は。與五右衞門が親の遠忌に當れり。よりてこの日。妙圓をよびて。索麪を食せけるに。箸をとること四五椀に及べり。これを見もし聞きもするもの。老尼がさる食にては。うち殺すともやは死ぬる。とあざみ笑ふも多かりけり。かくて廿六日になりつ。けふはも

けかたき事なれども。亦異聞なり。（長頭王の事は。梁書より先に。晋宋二書に出でたり。しかれども。梁書は。今わが臂ちかにあり。便宜に任して抄録しつ。その文異ならざればなり）

第三十三人事　尼妙圓　附 妙圓石地藏圖

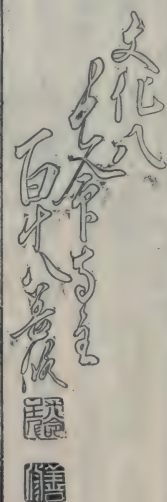
武藏國多摩郡。金子村（甲府みち。高井土石原。兩驛の間にあり。江戸を去ること。四里有餘なり）に。近きころ新造の石地藏一軀立てり。こは金子村なる。妙圓てふ尼が建立せしといふ。この妙圓は。酒井村新田なる。百姓六右衞門（一云。六之丞）が女なり。俗名を熊とぞいひし。（六右衞門に三子あり。長女は熊なり。二女律は。糟谷村なる醫師將祐に嫁けり。季は男子にて。名を六三郎といふ）寬政の初に。森田屋與五右衞門といふもの。熊を乾女（とりご）（俗にこれを娘ぶんといふ）にして。金子村なる。百姓新助（初名は彌太郎）に妻（めあ）せけり。かくて男兒を產みたりけるに。その兒（新五郎。後更ニ新八ー）尚幼少かりし時。（丙辰年。十一月廿三日）良人新助は身まかりけり。又彼新助は。おなじ村なる百姓。倉田伊右衞門が族なり。享保年間。故伊右衞門。その弟新助に分家してけり。新助が子。四五右衞門。四五右衞門が子は。熊が良人。卽後の新助なり。熊は良人を喪ひて。世わたるたつきなければにや。稚兒を携へて。亡父の弟なりける何かし男に適ぎにけり。さる程に。病みわづらふこと久うして。兩眼竟に失ひければ。竊に感悟する事あり。尼にならんとおもひ決めて。後夫に告げて離別しつ。かくてその乾親（とりおや）（俗にこれを親ぶんといふ）與五右衞門に。祝髮の事を相譚（かたらふ）に。與五右衞門も亦感じて禁めず。深大寺村なる深大寺（天台宗）は。その菩提院なるにより。住侍に告げて剃度を請ふに。儳（とみ）に許さるべくもあらねば。又村長にかたらふに。これさへ保人となりしかば。やうやく薙染の志願を果して。壽量妙圓と法名せらる

妙圓が前夫新助が墓は。その子新八が家のほとりなる。田圃の畔埒にあり。覺量休夢信士寬政八年云々と勒したり。妙圓沒して。その墓に合葬せしといふ。舊の墓誌に推しならべて。壽量妙圓法尼と勒したり。さばれその亡日は誌さず。よりて思ふに。妙圓が法名は。在世に刻せしなるべしとぞ。これらの事は。華山子復かの村にいゆきて。目擊していふまゝにしるしつ

復夫も倶に發心し。剃髮してその村にをれり。されば妙圓は。俗にいふ。にはか盲くらなれば。村中をうち巡りて。券緣すべくもあらぬを。村人等憐みて。鉦ひとつなんとらせける。これにより。毎日に驛路

光六十四歲。尤少しとす。見二十二老詩。井司馬君實耆老會序一國に黄耇の得がたきことかくの如し。齡は寔に貴ぶべきものになん。しかれども。人壽百年を有ちがたきは。猶學べども聖に至りがたきがごとし。且上壽は稀にして。下壽なるもの、多かるは。猶賢者は寡く。不肖者は衆きがごとし。故に。列子楊朱篇載二楊朱之言一曰。百年之大齊。得二百年一者。千無焉。莊子盜跖篇亦曰。人上壽百歲。中壽八十。下壽六十。除二病瘦。死喪。憂患一。其中開レ口而笑者。一月之中。不レ過二四五日一而已矣。といひしも。おなじ意なり。呂氏春秋安死篇には。中壽六十安死篇曰。人之壽久之。不レ過レ百。中壽不レ過二六十一といへり。下壽をいはざれども。五十は下壽なるべし。後世修養之方廢れてより。七十古來稀の句あり。遂に五十をもて。壽の大齋とす。亦悲しからずや。又ひとつ。いはまほしき事あり。人の算賀に。四十を不惑といひ。五十を知命といひ。六十を耳順といふは。さもあるべし。みづから年を數へて。四十を云々。五十を云々。六十を云云といふものあるはこゝろ得がたし。不惑。知命は。聖人に限れり。凡夫四十なりとて。惑はざるものあらんや。五十なりとて。いかでか天命を知るべき。さるを只その年をあはして。みづから聖智に比ぶるは。自負の甚しきにあらずや。人心各異なれども。その情のおなじきは。壽福の樂ひなり。しかれども。彭祖も死し。島子も死せり。數百の壽を有つとも。將レ死ときに。その一日を惜むの哀み。老少異なることなかるべし。既にこの生を得たり。孰かその死を脫るべき。さるを不レ死といふものあり。毘騫國の長頭王是なり。梁書。卷五十四列傳。四十八諸夷傳云。扶南國。在二日南郡之南。海西大灣中一。去二日南一可二七千里一。在二林邑南三千里一云々。又有二毘騫國一。去二扶南一八千里。傳。其王身長丈。頭長三尺。自二古來一不レ死。莫レ知二其年一。王神聖。國中人善惡及將來事。王皆知レ之。是以無二敢欺者一。南方號曰二長頭王一云々。國法刑二罪人一。並二於王前一噉二其肉一。國內不レ受二估客一。有二往者一。亦殺而噉レ之。是以商旅不二敢至一。王常棲居。不二血食一。不レ事二鬼神一。其子孫生子如レ常。唯王不レ死。扶南王。數遣レ使與レ書。相報答。嘗遺二扶南王純金五十。人食器形如二圓盤一。又如二瓦塸一。名爲二多羅一。受二五升一。又如レ椀者受二一升一。王亦能作二天竺書一。書可二三千言一。說二其宿命一。所レ由與二佛經一相類。これ失歸の妖歟。いと信

の外祖母。智昌院は。寛延三年五月十日に沒す。時に九十六歲なり。又余が祖父の女弟。眞中氏（名はは。喜津）は。下總河津間の鄕士。藤沼太郎兵衛の後室なりき。（その子も亦。太郞兵衛と名つく）寛政己未年に沒す亦九十六歲也。（その舊里。武藏川口村の子姪。今に至りて錢百の姨御といふ）この他。巷說風聞を取らば。なほ多かるべし。（石川丈山翁。享年九十歲。寛文十一年。壬子夏五月廿三日歿。畸人傳なる。馬杉老人。又下村道端のごとき。幷に九十五六歲といふのみ。その終焉の年月詳ならず。又沙門には。九十歲以上なりしもの。なほ多かるべし）〇宛委餘篇に。公卿太夫の百歲以下。八十歲以上なりしを考へて。多く載せたり。今又贅せず。又。按ずるに。唐の會昌五年。三月二十四日。白居易が尙齒會中の七老。前懷州司馬。安定胡果年八十九。尤長じたり。刑部尙書。致仕。白居易年七十四。尙少しとす。この他。吉皎は年八十八。劉眞は年八十七。鄭據は年八十五。盧眞は年八十二。張渾は年七十七。會中の遺老。李元爽。年百三十六。禪僧如滿歸洛。年九十五。これを唐の九老といふ。（見二九老詩。幷白居易序一）天朝の尙齒會は。古今著聞集。（四）文學部に云。尙齒會は云云。貞觀十九年。三月十八日。大納言年名卿。小野山莊にして。はじめておこなはれけり。又安和二年。三月十三日。大納言在衡卿。粟田口の莊にておこなはれける。その後天承元年。三月廿二日。大納言宗忠卿。白河山莊にして。被レ行けり。七叟の算。三善爲康。（年八十三）前左衛門佐基俊。（七十六）前日向守中原廣俊。（七十）亭主。（七十）式部大輔藤原敦光朝臣。（六十九）右大辨實光。（六十三）式部少輔菅原時登。（六十二）この中。基俊は。病によりて。詩ばかりを贈りけり。時登序をば書きたりけり。垣下に。中納言師時以下侍りけり。云云といへり。貞觀安和。前後尙齒會の詩の序は。本朝文粹（卷九詩序）に見えたり。前序は。菅相公。（是善）後序は。菅三位（文時）の作なり。菅三品。尙齒會詩序云。文時少二於樂天一三年。猶已衰之齡也。かゝれば菅三品。當年七十一歲なり。（日本記略卷七。天元四年辛巳。九月八日□□。從三位式部大輔菅原朝臣文時薨。年八十三。諸家系圖。爲二天元元年一非）日本記略。（冷泉記）安和二年。三月十三日庚寅。大納言在衡卿。於二粟田莊一。有二尙齒會一。七叟各脫二朝衣一。著二直衣指貫一。希代之勝事也。是件の後會をいふなり。宋の至和三年。丙申秋。（是年改二元嘉祐一）睢陸五老。司農卿。致仕。畢世長九十四歲。禮部侍郞。致仕。王渙九十歲。自餘の三老。（林衍。禾貫。馮平）は。八十餘歲のみ。（見二五老圖詩。幷錢明逸序一）元豐五年正月。耆英會中の十二老。年八十に至るものなし。皆七十許歲のみ。この中司馬

て。落欵に。善修とあり。印文も亦。長命主人。善修とあり。善修はその初名なりといへば。このときいまだ改名せざりしにや。しかれども文化八年の筆なり。その明年遷化したれば。既に善を禪に改めたれども。かゝる物には。なほ舊名を署せしならん。その物に拘らざりしといふ素樸を見るに足れり。愛すべき程の手蹟にはあらねど。稀なる壽僧の肉筆なれば。その落欵を影寫して。右にあらはす。おもふにこの老法師。住持の寺を長命といひ。その村を長原といひ。誕生の地を高知といひ。その師の寺を福巖といひ。本山を廣泰寺といふ。且その初住の寺にさへ。永福。寶光等の號あるも妙なり。皆是名詮自性にして。福壽永延の奇僧といふべし。これらはなほ。傳聞をまぬかれず。江戸本船町。武助店 與右衛門が食客七兵衛。文政元戊寅年。その歳一百歳なり。九月十二日。御米拾俵賜はる。稀なる高年なればなり。又[清圓尼]百十四歳の手實なり。清圓尼大石氏。良雄の女。主稅良金の妹なりといふ。手實の傍に。こんひら月参。大石良雄娘。百十四歳清圓。と署したり。原是荻生氏の所藏なりとぞ。闘書家 思亮 摸刻して。その榻本を同好に贈りし事あり。文化癸酉の春なり 余もこれを獲て。雜畫帖に貼しつ。但その受授の年月は。今詳ならずといふ。余聊疑ひあり。清圓尼。果して良金の妹ならば。元祿壬午に。云々の事ありしころは。尙十歲前後なるべし。この年を十歲の時と推しつもりて。文化三丙寅に至りて。百十四歳なるべし。遠くもあらぬ事なるに。その手實をこし、年月の。今詳ならざるは不審。姑く見聞の隨に錄して。後の考を俟つのみ。[九十歳以上]は。堀部金丸の女[妙海尼]安永七戊戌年。九十三歳にて遷化といふ。墳墓は。芝泉岳寺。墓所の門傍にあり。墓誌には。清淨菴寶山妙海尼。堀部彌兵衛金丸娘。行年九十三。安永七二月二十五日と。四行に勒したり。余が相識親類に三人あり。武藏國埼玉郡。志多見の村長松村生は。世稱ニ佐左衞門一 安永中沒す。時に九十三歳なり。余が祖父

寛政八年。滿平百九十四歳妻名氏逸ス百七十三歳。子名氏逸ス百五十三歳。孫名氏逸ス百五歳。曾孫以下。尙百歳ニ滿タサルモノ多クアリト云フ。或ハ云フ。滿平ガ敷地ニ靈水アリ。其井底悉ク辰砂ナリ。古來ヨリコノ水ヲ汲ミ用フル故ニ。一家カクノ如ク長生ストイヘリ。但コノ事傳聞ニアリ。虛實ヲ詳ニセザレドモ。異聞ナルヲ以テ錄ス。といへり。當年余が聞きたるも。これにおなじ。次に伊勢ノ長命寺ノ住持禪修法師は。文化壬申年。その壽一百十九歳なりき。傳云。伊勢國渡會郡。內城田鄕。長原村。慈光山長命寺曹洞宗。同郡田丸。宮古村。廣泰寺末院也。本山廣泰寺。於ニ伊勢ニ爲ニ南方曹洞宗一派法頭ニ者ノ住持。禪修法師初名ニ善修。最後改レ善爲レ禪云は。土佐國土佐郡。高知蓮池町蓮地之地。誤字。當レ爲ニ蓮池ニノ人ナリ。俗姓ハ加藤氏。父ノ名ハ文右衞門。禪修ハ元祿七甲戌年ヲ以テ生レタリ。乳名及祝髮ノ年詳ナラズ。尾張國春日郡。大草村福巖寺ノ白庭和尙ヲ師トスト云フ。明和三年甲申。是年禪修七十三歳。田丸廣泰寺ノ末院。上菅村ナル永福寺ニ住持ス。後ニ中角村敎勒寺。及大野木村宗善庵棚橋村寶光寺等に轉住セリ。天明四年甲辰。五年乙巳。二个年。長原村長命寺ニ看住シ。六年丙午ヨリ住持ニナレリ。是年九十三歳也。文化三丙寅年。國君恩命アリテ。月俸ヲ賜フ。長原村隸ニ田丸領ニ。乃南紀御領也是年禪修百十三歳也。滿百歳ナレバ。月俸ヲ賜フベカリシニ。田舍ノ福院ハ住持ノ極老ヲ嫌フニヨリ。年ヲ隱シテマウサヾリケルトゾ稀ナル壽僧ヲ優シ給フナルベシ。コノ時禪修。冥加ノ爲ト稱シテ。自筆ノ行書一頁ヲ獻リキ。先例アレバナリ。イカナルコトヲ書キタリケン。詳ナラズ九年壬申。下人雜司料トシテ。銀若干。年別ニ賜フベシト。再恩命アリケリ。是年禪修百十九歳。十一月日遷化セリ。其禀性。質朴寡欲ニシテ。物ニ拘ラズ。只酒ヲ嗜ミ。又豆腐ヲ好メリ。ヲリヽヽ其本山。廣泰寺へ赴クニ。路程。二里餘リナルヲ物トモセズ。足駄ヲ穿キツヽ往返シケリ。其出ヅル毎ニ。ミヅカラ一瓢ノ酒ヲ携ヘテ。中途ニ獨酌セザルコトナシ。文雅ノ才アルニアラザレドモ。其壽ヲ愛テ。書ヲ徵ムルモノ多カリケレバ。拙キマヽニ位置ヲ得タリ。コノ他聞エタルコト無トイヘドモ。抑亦一奇僧ナラズヤ。以上略傳。今易レ文以誌レ之解云。余曩に。松坂なる友人三枝園に。禪修の書一頁を惠まる。こゝをもて。長原村に。僧あることを知れり。よりて三枝園を勞煩し。その略傳一編を得たり。余がその所藏の一行書は。唐紙半頁に。明月拂ニ淸風ニと大書し

號ニ渡邊幸庵ト稱聞。俗姓渡邊氏。本國攝州。生國武藏。天正壬午年出生。寶永六己丑年。百二十八歳也。云々。旁注云。壬午年。卽天正十年也。寶永八年卒。時一百三十歳。是年改ニ元正徳ー と細書したり。この幸庵老人は。初官祿ある武士なりき。後に故ありて浮浪し。三十許年。海外を歴遊して。至らざる隈なしとなん。對話記二卷あり。加北の杉本義隣の聞書也。書きざま雅文にあらねども。當時の實錄なるべし。次に江村專齋も。一百歳をたもちしといふ。老人雜話の端書に云。老人は。江村專齋也。諱は宗具。業レ醫。初加藤肥牧ニ事ヘ後森作牧ニ事フ。永祿八年。光源院殿亂ノ年ニ生レ。寛文四年夏六月二十六日沒。滿百歳也畸人傳。巻二にも。亦是を載せたり。別號は倚松庵。京師の人なり。その祖を榮基といひ。父を既在といふ。寛文帝御在位のとき。寛文四年丙辰 專齋を召させ給ひし事あり。この日專齋に。歌杖を賜ひきとまうし傳へたり。余その歌杖を摸したる。助老一枚を藏む。畸人傳には。盍簪錄を引きて。鳩杖。銀絹。茶酒等を賜ふといへり。又その修養の方を問はせ給ひしとき。嗜慾食餌。一切些ニをもてす。と答へ奉りし事をいへり。ある物には。これを今大路道三の事とす。もとより兩説なるか。不審いぶかし。しかれども。筆に載するもの稀にして。細に考ふるに由なし。これらはすべてみぬ世の人なり。近日余が視聽を經しもの亦三人あり。三河ノ百姓滿平は。福艾の聞えあるものなり。東岡舍筆記云。三河國。寶飯郡水泉村ノ百姓滿平。慶長七壬寅年。右同國同村に生レ。寛政八丙辰年。百九十四歳ナリ。享保年間。云云ノ慶賀ニヨリ。徵レテ江府ニ參レリ。酒。白髮ヲ獻ツラセ。御米若干ヲ賜フ。一說ニ。月俸ヲ賜フトイヘリ 今玆丙辰年。復マヰレリ。享保ノ故事ノ如シ。前後イヅレノ日ニカ。吏人滿平ニ問ハク。汝家。何ノ術アリテ。長生如レ此ナルカ。答ヘテ言。他ノ技ナシ。僕ガ家。先祖ヨリ相傳シテ。三里ニ炙ス。其炙方。毎月朔ヨリ八日ニ至リテ輟ム。年中月別ニ。間斷アルコトナシ。其數同ジカラズ如レ左

右朔八壯二日九壯三日十一壯四日十一壯五日九壯六日九壯七日八壯八日八壯

左朔九壯二日十一壯三日十一壯四日十一壯五日十壯六日九壯七日九壯八日八壯

ず。今はその施主絶えたればなり。もし總墓の中にもやある。ゆきて見給へといふにより。寺門を出て。總墓所（天德寺本堂の左なる。山の上下にあり）に攀ぢ登り。興繼もろ共に。聞きつるほとりはさらなり。彼此を見めぐるに。こゝにも亦あることなし。よりて復。興繼を寺に遣はして。案內を乞はせしに。道人總墓所に來て。わが寺の諸檀の墓所は。こゝなりとて指さす筋を。又ひとつ／＼に索ねしかども。其處にも彼墓あるを見ず。さてはその施主なくなりて。墓石も共に壞れしならん。とやうやく思ひ決むるに。此は卯月のながき日を。はかなくこゝに消したり。現に寺の過去帳に。正しくその戒名あれば。ちかき比まで。彼墓はありつらん。墓誌には。戒名の下に。志賀氏。左方に。施主上野恕信。と刻せしと聞きつ。年月も寺の過去帳におなじ。但支干あらざるのみ。よりて寺僧に。隨翁と書きたるよしを敲ねしに。懵として辨ずることなし。その寺により。在世の名號を。戒名に用ふる事を聽さゞるもありと聞けり。しからば麻布二本榎。常行寺なる。徘諧師其角が墓誌に。喜覺と勒せし如く。隨應の應を。翁の字に換へたるならんとおもふに。そが俗名も。亦隨翁と書きたれば。疑ひいよ／＼釋きがたし。口碑に傳ふる如く。隨應は。上野國にて沒したらば。彼墓は。その年忌の折などに。江戶なる親族。或は由緣のもの、立てたるならん。しかれども。寺の過去帳によりて推しはかるに。享保十五年六月十六日は。その亡日なるべし。彼老人の生れしといふ天正丙子の年より。享保十五庚辰の年迄僂（かゞなふ）れば一百五十五年なり。これをもて推すに。その享年。百六十一歲。或は百七十歲。或は百八十歲といふものは。皆信けがたし。百五十五歲といはゞ。當らずとも據あり。又按ずるに。墓石の施主。上野恕信は醫師なるべし。恕信の恕は。藤恕軒の恕を取りたるやうなり。上野はその氏なるべし。上野氏は。何地の人なるをしらざれども。隨應衰邁の後。上野氏の扶助により。その家にて身まかりしを傳へ謬りて。上野國にて沒すといふにあらざる歟。こは余が推量の說なれども。姑く疑ひを述べて。後考を俟つのみ。

次に渡邊幸庵も。亦長壽の人なり。幸庵對話記の序に云。武州大塚。護國寺門前。有二一老人一。（一本人字無）

謂ニ我老耄ニ而舍レ我。必恭ニ恪於朝ニ朝夕以交戒レ我。聞ニ一二之言ニ。必誦志。而納レ之以訓ニ道我ニ。在レ輿云云。於レ是乎。作ニ懿戒ニ以自儆也。及ニ其沒ニ也。謂ニ之叡聖武公○巻十七 武公は衛君にして。且年いたく老いたるも。その恭謙かくの如し。今の良賤。終に五六十にして。みづからその年に誇り。遂に下聞を恥づるものと。日をおなじうして譚るべからず○ちかき世の口碑に傳へたるものに。志賀隨應より。壽なるはなし。しかれどもその事迹定かならず。一説云。隨應ハ。志賀氏。名ハ義則。藤恕軒ト號ス。天正四丙子年。豐後國ニ生ル。童名龜之助。少ヨリ武器ヲ作ルニ賢ナリ。及レ成レ人。織田内大臣ニ仕フト云フ。老後江戶ニ來リテ。新橋ノ上ニ處レリ。又赤坂ニ居シトモイヘリ。隨應曾テ方伎ヲ業トシ。旁神書ヲ看ルコトヲ好ミ。閑暇ノ時ハ。釣ヲ垂レテ樂ミトセリ。竹田侯ヨリ月俸ヲ禀ケタルヲ辭シテ。江戶ヲ去リテ上野國ニ赴キヌ。時ニ年一百三十歲。其終焉ノ年ヲ詳ニセズ。或ハ云フ。百七十歲。於ニ上野ニ沒ス。又一說。志賀隨應ハ。初名ヲ金五郎トイフ。曾テ久能ノ總關ニ仕ヘタリ。享年百六十一歲。或ハ云フ百八十歲。後の一說は。龐にして彌疑ひあり。猶よく考へて追ひて記すべし。昔偶其蜩菴翁草を閲せしに。生島幽軒老人。七十の算賀に。七叟來會せり。志賀隨應も。亦其一人なりしといへり。老應が墨跡は。好事の家に鐘翫せらるれども。僞筆多かり。その手蹟のよきと。その詞句に趣きあるとは贋作なり。余が視を歷たる中に。梅龍園主人の所藏是眞跡なり。影寫して右に出だしつ。百有餘歲としるしたる。そのこころを得ざれども。年を隱すは。老人の情なり。ここをもて百幾歲と。定かには署せざるならん。又この老人の墓は。江戶愛宕下。天德寺の地中なる不斷院に在り。墓誌には云々と。豫て聞きしをよすがにて。一日輿繼を得て。不斷院に赴きつ。その墓所をおちもなく。半日あまり索ねしかども。竟にその墓あるを見ず。困じ果て布施を裹み。寺僧に請ひて。過去帳を披閲するに。享保十五庚戌年。と題せし條下なる。許多の戒名の中に。

眞月院諦念隨翁居士　　志賀隨翁

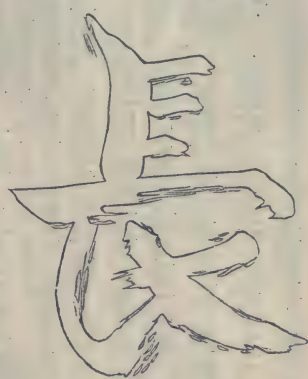
六月十六日　　施主　上野恕信

とあり。この墓今なほありやと問ふに。寺僧もしら

志賀隨應百餘歳眞跡

長生

梅龍園主人藏

藤恕軒志賀台隨應百有餘歳書

北山准后九十歳。是日算賀あり。文甚多。不レ勝ニ抄錄一。於ニ本書一可レ見也又年齡定かならざれども。極老の人とおぼしきは。顯宗紀。元年正月云々。是月詔曰。老嫗。名置目伶ニ俜羸弱一。不レ便ニ行步一。宜張レ繩引絚。扶而出入。繩端懸レ鈴。無レ勞ニ謁者一。入則鳴レ之。朕知ニ汝到一。於是老嫗。奉レ詔云々。二年九月。置目。東鑑卷十二。建久二年二月五日。古左典厩義朝の乳母字摩摩局。年九十二。その離合愛哀。粗置目に似たり。この一條。後に考得たれば追書す。老困乞レ還曰。氣力衰邁。老耄虛羸。要候假レ繩。不レ能ニ進步一。願歸ニ桑梓一。以送ニ厥終一。天皇聞惻痛。賜ニ物千段一。逆傷ニ岐路一。重感レ難レ期。乃賜レ歌曰。云々。書紀十五文武紀。四年。春正月癸亥。有レ詔。賜ニ左大臣多治比眞人島靈壽杖及輿臺一。高年也。續紀卷一廢帝紀。天平寶字六年。八月丙寅。御史大夫。文室眞人淨三。以ニ年老力衰一。優詔聽ニ宮中持レ扇策レ杖。續紀廿四これらは必。九十歳前後の人なるべし。この他。古記錄を涉獵(あさ)らば。なほあるべき歟。復よく考へて。後集に追書すべし。余嘗(もとより)おもふ。年九十に至りて老耄せず。賢なることますます賢なるものは。衞の武公にますことなし。國語。楚語上左史倚相曰。昔衞武公。年數九十有五矣猶箴ニ儆於國一曰。自レ卿以下。至ニ於師長士一。苟在レ朝者。無レ

被レ殺。計二其時一僑如當二四十餘歲一矣。又一百二年。而僑如死二於魯東門一。壽亦將二百五十一矣。魏拓拔主。稱二神元帝一者百四歲。高麗王康。年百餘。吐谷渾王夸呂。卽位後。自稱二可汗一者百年。皆夷狄之主也。宋史。日本國云々。今按ずるに。梁書蕭昱傳。（昱附二出景傳末一）田舍有二女人夏氏一。年百餘歲云々。（列傳十六）孔子家語。（六本篇）本孔子見二榮啓期一段。榮啓期年九十五。（又見二列子天瑞。說苑雜言一）細に孜索せば。この類なほあるべし　嘗　國史を檢せしに。［百歲已上］の老人の。その年をしるされしは。はつかにして四人を得たり。天武紀。十四年。十月癸酉朔。丙子。百濟僧。常輝。封二三千戶一。是僧壽百歲。（書紀二十九。先レ是見二十一年十月條下一。蓋重出也。以二類聚國史一參考。則十四年爲レ是）續紀桓武紀。天應二年。七月壬寅。松尾山寺僧尊鐃。生年百一歲。請入二內裏一。位二大法師一。優二高年一也。延曆九年。十月丙午。召二高年人一。道守臣東人於內裏一引見。時一百二十二歲。（一本作二百十二歲一）其駿尙多。聽如二少年一。矜二其衰邁一。賜二之衣被一。（卷四十）續後紀。承和十二年。正月乙卯。云。是日。外從五位下。尾張連濱主。於二龍尾道上一。舞二和風長壽樂一。觀者以レ千數。初謂二鮐背之老。不一レ能二起居一。及二于垂レ袖赴一レ曲。宛如二少年一。四座僉曰。近代未レ有二如レ此者一。濱主。本是伶人也。時一百十三。自作二此舞一。上表請レ舞。長壽樂表中載二和歌一。其詞曰。那那都義乃。美與爾萬知倍留。毛毛知萬利。止遠乃於幾奈能。萬飛多天萬川流。（卷十五）十三年。二月戊辰。召二外從五位下。尾張連濱主於清涼殿一。令レ奏レ舞。于レ時年百十四。帝矜二其高年一。授二從五位下一。（卷十六）是漢の文帝の時の樂人。竇公と相似たる老翁なるべし。

［百歲以下九十歲以上］も亦稀なり。續紀孝謙後紀。神護景雲三年。冬十月壬戌。授二無位村上刀自女從五位下一。時年九十九。優二高年一也。（卷三十）扶桑略記。後冷泉天皇寬德三年。（是時改二元永承一）丙戌。正月十八日。右大臣藤原朝臣實資薨。年九十歲。（卷二十九）永承八年癸巳。六月十一日。從一位。倫子薨。九十歲。關白左大臣母氏也。（同卷）康平六年癸卯。六月廿六日。前大僧正明尊入滅。年九十三。兵庫頭秦時子也。（同卷）堀河天皇（本書題二書今上帝一）寬治二年戊辰。正月十日戊午。左大臣。源朝臣俊房。牽二卿相侍臣等一。參二入三井寺常行堂一。爲レ修二故高倉（此下脫文）從七位源氏之七七法事一也。前中書王。具平親王女。宇治入道。大相府家室也。去年十一月廿二日逝去。年九十三矣。（卷三十）增鏡。（老の波の卷）弘安八年。二月晦。

至二百二十一而卒。上津人張元始年一百十六歲。膂力過レ人。進レ食不レ異。九十七始生レ子。遂無レ影。唐有二李元爽者一。百三十六歲。開元東封。太原于伯龍一百二十八歲。宋党翁百七十餘歲。譙定百三十歲。瓊州楊叔連百二十二。父宋卿百九十五。九世祖。不レ語不レ食。不レ知二其年一。又云。（宋卿云々。事文前集。年齒部。引二洞微志一亦言レ之。而其年紀不レ同宜二合考一焉）竹書紀年所レ載。諸公之壽。有二可レ攷者一。顓頊三十一年產二伯鯀一。又四十八年而陟。爲二高辛氏一六十三年。按。史記五帝本紀注云。帝嚳。在位七十年。年百五歲。蓋帝嚳高辛氏也。而其爲二六十三年一者未レ詳 又至二堯六十一年一。而鯀治レ河。年百七十二歲矣。堯六十九年而黜。蓋百八十歲也。桀十七年。商使二伊尹來朝一。三十一年桀亡。又十二年湯崩。湯與レ尹年相等。外丙元年。又按。史記殷本紀云。外丙卽位三年崩。立二弟中壬一。四年崩。立二太丁之子太甲一。立三年不明。暴虐不遵。伊尹放二之於桐宮一。且嗣二太甲一者沃丁也。太庚小甲雍己。皆在二其下一 小庚五年。小甲十七年。雍己十二年。仲壬四年。太甲元年。伊尹放二太甲桐宮一。七年而伊尹亡。距二湯亡一三十餘年計。尹之壽。亦可二百三十一矣。紂三十一年。西伯得二呂尙一以爲レ師。年八十。又二十一年而紂亡。又五年而武王陟。又三十七年而成王陟。康王六而太公薨。壽一百五十二也。吳地記。諸樊在位十四年。餘濟十七年。餘昧二十一年。僚十三年。闔閭在位二十年。夫差二十三年。夫差將敗レ之數年。延州來季札救レ陳。去二讓レ國之歲一。不レ下二百年一則三代人臣之壽。未レ有乙如二四公一者甲也。然攷二左傳一。壽夢卒。襄三十一年。又按。襄三十一年。當レ作二十二年一。襄公十二年經云。秋九月。吳子乘卒。左傳云。秋壽夢卒。是也。襄公在位三十一年。昭公三十二年。定公十五年。襄十二年至二哀七年一。計通七十四年也。去二哀七年一。實七十七年耳。其三公紀年。攷二之正史一。未レ盡合一。然要レ之。在二百歲外一也といへり。五雜組卷五にも。亦これらの考あり。大抵宛委餘編と同じ。そが中に此になくて彼にあるものを抄出す。晉趙逸二百歲梁鄱陽忠烈王友僧惠照。至二唐元和中一猶存。二百九十歲。金完顏氏醫老二百餘歲。又云。山東濟寧州民王士能。生二元至正甲辰一。至二國朝成化癸卯一。已一百二十歲。行止如レ常。後不レ知レ所レ終。國初茹文中亦百餘歲。近時閩中林大守春澤公。亦百餘歲。永樂中。楚一盜魁。年一百二十五歲。尤爲レ可レ恨也。五雜俎。人部一。提要 かゝれば唐山にも。三百歲に近きものあり。これらも數代同名とせん歟。宛委餘編又云。鄋滿長狄僑如之弟。焚如簡如。以二宣二年一 又按。宣二年當レ作二宣十五年一。考二左傳一僑如。以二文公十一年冬十月一死。且其弟榮如簡如。以二桓公十六年一被レ殺。焚如之被レ殺。亦見二文十一年傳一。杜預云。榮如焚如之弟。榮如以二魯桓公十六年一死。至二宣十五年一一百三歲。其兄猶存傳言下既長且壽有上レ異二於人一也蓋世貞所レ說亦有レ謁也宜二考訂一者。 攷二齊衡一

禰の子。木菟宿禰は。應神天皇廿一年。皇子大鷦鷯尊(仁徳天皇)と同日に生れたり。(見二仁徳紀元年條下一)この年應神天皇聖壽九十一。武内宿禰は二百七歳なり。二百歳にあまりて。子を生せし事。亦怪むに足るといへども。履中天皇二年に。木菟宿禰。一百十二歳にて始めて。執政たるをおもふに。すべて上古の人の血氣は。今の老人とおなじかるべくもあらず。周武王が年八十一歳にて。成王を生せしを。聖人には似げなしとて。いたく誹りたるものあれども。武内に比ぶれば。武王はなほ乳臭の童子なるべし。掛畏き(かけまくもかしこき)。神武天皇より。仁徳天皇に至らせ給ふまで。聖壽百歳に餘らせ給ふ天子少からず。

神武天皇百二十七歳。孝昭天皇百十四歳。孝安天皇百三十七歳。孝靈天皇百二十八歳。孝元天皇百十七歳。開化天皇百十五歳。崇神天皇百二十歳。垂仁天皇百四十歳。景行天皇百四十歳。成務天皇百七歳。神功皇后一百歳。應神天皇百十一歳。(應神聖算。古事記作二一百三十一。印行書紀作二百一十一。一本作二百十一一爲レ是。)仁徳天皇百十歳。況。田夫野人には。百歳二百歳に迫るものいくばくもありけんかし。南留別志。卷一云。武内宿禰が三百歳は。數代同名なるべし。三韓を威服せん爲なりといへり。後世戰國には。さる權詐もあらめ。(安房の里見の老臣。正木氏のごときこれなり)邈古質朴の世に。ふかく巧める計あるべしやは。情僞を揣るに過ぎたるなり。上古は。人壽百歳を大際とせし事。只天朝のみならず。異邦といふとも。亦かくの如し。明の王世貞。いにしへの人壽を考究して。詳にいへり。要を提りてもて抄錄す。宛委餘編十云。人壽至二百歳一而極。彭祖七百歳。自服二僊丹一。後入二流沙一。亦不レ言レ死。帝王紀。神農在位百二十年。黄帝少昊。倶在位百年。帝嚳年百五歳。堯年百一十八。舜年百有十。禹湯年滿レ百。六韜云。文王祖。古公壽百二十。王孝百歳。文王九十七。武王九十三。周穆王五十即位。在位五十五年。葢世壽也。太公年百三十六。(太公年百三十六、由二下文一乃當レ作二年百五十二一。)召公百八十。畢公年亦百餘。漢文帝時。有二樂人竇公者一。亦年百八十。漢張蒼拜レ相封レ侯。年百餘歳。魏范明友奴二百四十歳。晉范長生兩二仕蜀一。前後百年。魏羅結。百七歳爲二外都大官一。百二十乃卒。梁穰城人。年百四十歳。唯飲レ乳。鍾離人顧思遠年一百十二歳。凡九娶有二子十二人一。死亡略盡。召爲二散騎侍郎一。亦

あらず。その事果て。影媛を娶り。又二个年を歴て。武内宿禰を生ぜしなりかくて又景行紀云。二十五年。秋七月庚辰朔。壬午。遣二武内宿禰一。令レ察二北陸及東方諸國之地形。且百姓之消息一也。二十七年。春二月辛丑朔。壬午。武内宿禰。自二東國一還之奏言。云々。こゝに上の年紀をもて推せば。景行天皇二十五年は。武内宿禰。年甫めて十二歳なるべし。なほ童子なるものを。北陸東方へ遣はして。諸國を巡察させ給ひしは。素より神童なればにや。大人を遣はさば東夷北狄疑ひて。害せんと謀ることもやあらん。と叡慮おはしましゝにより。さる童子を遣はし給ひしならん。かゝれば武内宿禰は。甘羅呂尙を兼ねたる才あり。讀史の者。こゝに疑ひを容れずして。その凡夫ならざるをおもふべし。かくて又仁德紀。五十年。春三月壬辰朔。丙申。河内人奏言。於二茨田堤一。鷹産之。卽日遣レ使令レ視。曰二既實一也。天皇於是。歌以問二武内宿禰一曰。云々。武内宿禰答歌曰。云々。といふ事見えたり。これより後。この大臣の事見えず。履中紀に。仁德天皇八十七年。春正月。天皇崩じ給ひし折。仲皇子兵を興して。太子の宮を圍まんとせしに。武内宿禰の子。平群木菟宿禰。物部大前宿禰。漢直祖。阿知使主等三人。太子（卽履中天皇）を扶掖（たすけひき）たてまつりて。疾く逃れ去りし事見え。履中天皇二年。是年。平郡木菟宿禰。蘇我滿智宿禰。物部伊莒佛大連。圓大使主。共執二國事一。といふ事見えたれば。武内大臣は。仁德天皇五十年より。八十六年までの間に薨せしならん。公卿補任に従ひて。三百十二歳とすれば。仁德八十三年に薨せしなり。宋史に因りて。三百七歳とすれば。仁德七十八年に薨せしなり。水鏡に従ひて。二百八十歳とすれば。仁德五十一年に薨せしなり。今。仁德。履中。兩紀の文に由りて考ふるに。三百十二歳。その實を得たるが如し。（仁德八十三年。武内薨じ。八十七年正月。天皇崩じ給へり。この年仲皇子の亂あり。履中二年。木菟宿禰始めて執政たり）しかれども史の闕文なるを。强ひて。説をなすものは傅會なり。又按ずるに。允恭紀。（書紀十三）五年。秋七月。命二玉田宿禰一。主二瑞齒別天皇（反正）之殯一。云々條下云。玉田宿禰。則畏レ有レ事。以二馬一匹一授二吾襲一爲二禮幣一。乃密遮二吾襲一。而殺二于道路一。因以逃二隱武内宿禰之墓城一。（武内墓。當時在二葛城一）天皇聞レ之云云。武内宿禰薨後の事。纔にこゝに見えたり。仁德天皇八十三年より。允恭天皇五年に至りて。廿二个年なり。又。按ずるに。武内宿

内。三百七歳次云々。弇州山人四部稿。巻一百六十五宛委餘編引宋史云。日本國有大臣紀武内者。年三百七歳。尤爲異聞。五雜俎人部亦云。日本紀武内。三百七歳。これも宋史に據れるなり。按ずるに。宋史外國列傳云。雍熙宋太宗年號元年。日本國僧奝然。與其徒五六人。浮海而至。丁天朝圓融天皇永觀二年。日本記略。圓融記云。天元四年辛巳。八月十六日乙亥。僧奝然。依本寺牒入唐。獻銅器十餘事。並本國職員。今王年代紀各一巻。かゝれば宋史に。紀武内云々としるしゝは奝然が齎したる。年代紀に據れるならん。武内宿禰の母氏は紀伊國の人なり。よりて紀をもて氏とする歟。然れども書紀に。紀を被ていはず。紀氏。以武内宿禰男。角宿禰。爲鼻祖。見新撰姓氏錄巻二。唐山にて。紀武内と唱へたるは。奝然の所爲なるべし。常山樓筆餘。巻二云。武内ハ。景行天皇ノ十年庚辰ニ生レ。仁徳天皇ノ五十七年己巳ニ至リテ。二百九十年ナリ。然レドモ。景行天皇二十五年。武内。時壯年ナルベシ。今コレヲ以テ推シ計ルニ。十年ヨリ前ニ生レタルベケレバ。三百餘歳ナルコト。誤ナラズトオボユといへり。この説も亦誂れり。何となれば。景行紀に。武内宿禰の生れしといふ條と。成務

紀に。武内宿禰を大臣になされし條と。同紀に。天皇崩御の條とを照して見れば。この大臣は。景行天皇十四年に生れしなり。下なる證文を見て。余が言の誣ひざるをしるべし。書紀。巻七景行紀云。三年。春二月庚寅朔。卜幸于紀伊國將祭祀羣神祇。而不吉。乃車駕止之。遣屋主忍男武雄心命一云武猪心命祭。爰屋主忍男武雄心命詣之。居于阿備柏原。而祭祀神祇。仍住九年。則娶紀直祖菟道彥之女影媛。生武内宿禰。この文のみにては。武内の生れしを。いづれの年なりとは決めがたし。かくて。成務紀云。三年。春正月癸酉朔。己卯。以武内宿禰爲大臣也。初天皇與武内宿禰同日生之。故有異寵焉。又云。六十年。夏六月己巳。天皇崩。年一百七歳。これに由りて觀れば。成務天皇六十年に。天皇百七歳にて崩じ給へば。この年。武内宿禰も。亦百七歳なり。この年より溯りて。數れば。景行天皇十四年。即一百零七年に當れり。當初屋主忍男武雄心命。紀伊國。阿備柏原に停留して。九ケ年神事を掌りしより。又二ケ年を經たり。かゝれば武内宿禰の誕生は。景行十四年に疑ひなきものなり。武雄心命。九个年神祇を齋き祀る間には。妻を娶るべくも

を聞きたれども。それすら夢の如しと答ふ。さらばその比は。世間騷がしきをりなり。當國にて戰ひありし。如此々々の事は。聞きもしつる歟。箇樣々々の事は。見もしつる歟。と叮嚀にたづぬるに。山に入りしより。里へ出でたる事なければ。人間の事はしらずといふ。現無智文盲のものなるべし。應答すべて定かならず。只鹽を乞ひ得し事をのみ。歡ぶ外にいふこともなく。又山ふかく走り去りつ。事は壬申の年にあり。大和某領の敎導荒井學士。公廉 敎導の爲。同國の村落を巡りし日。彼異人に邂逅せし樵夫にこれを聞きしとぞ。浪華なる一友人。又荒井氏にこれを聞きて。おなじ年の十一月。余が爲にいへり。おもふに古人の筆に載せたる。地仙などいふものは。この類に過ぎざるべし。巖居水飲。禽獸と倶にして。數百年を歷るといふとも。亦何の益あらむ。吾兄羅文 瀧澤興旨。俗稱臺右衞門。號二東岡舍一。其所レ著罔兩續譚。未レ脫レ稿。寬政十年。戊午八月十二日沒。時年四十。葬二于江戶小石川若荷谷。清水山深光寺先塋之側一 遺稿曰。娶レ妻無レ後者。生涯此同二獨居一。學レ仙入レ山者未レ死如二不レ祀鬼一。又曰。老而不レ足レ談レ故。依レ之造レ壽。富而不レ能レ施レ人。是以有レ錢。この言や味ひあり。前に錄せし奇譚と、もに。廣めて神仙の說を破らむ

第三十二 人事　壽算

謝肇淛云。人壽不レ過二百歲一。數之終也。故過二百二十一不レ死。謂二之失歸之妖一。五雜俎 卷之五 しかれども。百五六十歲。二百餘歲に迨るもの。和漢にこれあり。唯三百歲は得がたし。天朝獨 武內宿禰あり。若二浦島子一雖レ載二之于雄略紀一出二於當時小說一。漢土有二彭祖高成子數輩一。並以爲二神仙一者不レ與焉。 をしいかな。その薨ずるの年を誌されず。所謂史の闕文なり。後にその年をいふもの。各おなじからず。愚管鈔。卷一 皇帝年代記。仁德天皇の條下に云。大臣武內宿禰。この大臣六代御後見にて。二百八十餘年を經たり。かくれたる所をしらず。同書卷三。仁德天皇の段に。これをいへり。文上におなじ 又 水鏡。上卷 仁德天皇の段に云。五十五年とまうし、に。武內大臣うせにき。二百八十になり給ひし。六代の御かどの御うしろみをして。二百四十四年ぞおはしまし、云々。神皇正統紀。仁德紀に。武內宿禰薨ずるの年なし 皇統紹運錄。孝元天皇五世。武內宿禰の下に細書して。水鏡を引きたり。公卿補任には。三百十二歲といへり。この事唐山にも粗聞えたるにや。宋史 外國列傳 日本傳云。應神天皇甲辰歲始於二百濟一。得二中國文字一。今號二八幡菩薩一。有二大臣紀武

り。劉向が列仙傳に。西王母の事なし。劉向列仙傳二卷。赤松子至玄俗一統計七十仙爰に亦一奇談あり。ちかき比。大和十津川の邊なる樵夫等。木を伐るとて。山ふかくわけ入りつゝ、日をおくる程に。一日羅刹の如きもの。遙に來にけり。樵夫等これを見てあやしみおそれざるはなし。そが中に。心ざま雄々しき壯佼兩三人。斧を把りつゝ。前み立ちて。よらば撃たんとにらまへたり。そのとき異人は。手を抗(あげ)聲を發(かけ)。怪むべからず。あやしむべからず。吾も亦人なり。些ほしきものあるに。人語の響きを聞きて。出で來れり。慫ち給ふなと禁めあへず。はや近つくを見れば。頭は蓬を紊しつゝ。長髯さへ。白が黃ばみたる。面は畵ける夜叉の如く。眼は長庚の如くかゞやきて。腰には獸皮にやあらん。視も熟れぬ物を。かきたらして著たり。寔に怪有の癖者なれども。人を害はんとにはあらざりけり。と思ひ量るに。皆漸くに心おちゐて。そのいで來つるよしを問へば。答へて云。われ頃日鹽を用ひ盡し、により。各位に乞はんとて。こゝへ來つるはといふ。樵夫等聞きて。そは易き事なり。餘あるにあらねども。もて來つる鹽をとらせん。鹽は何の爲にするや。

抑汝は何ものぞ。と問はるゝまゝにすゝみ近づき。吾は。元來熊野なる山里のものなり。年十八のころまでに。父母はさらなり。親類皆死果て。たつきなきまゝに。不圖山中にわけ入りつ。遂に故郷に還らずといふ。さらば夥の年を歷にけん。何を食にするやと問へば。鳥にまれ。鹿猿にまれ。獲るに隨ひて食ひつゝ。けふまで存命たり。されば。をり〳〵鹽氣を嘗めずば。露命を繫ぎかたからん。と思ふになん。用ひ竭せばけふの如く。人の山に入るをまちて。これを乞ふのみといふ。凡杣木樵るもの、山に入るときは。山に日數を經ることなれば。おの〳〵貯へたる鹽糟あり。そを些しづゝ集むるに。二合あまりに及べる鹽を。紙に捻りてとらせしかば。歡び氣色にあらはれて。謝すること大かたならず。初おそれたるものも。いと興ある事におもひて。汝さばかりの鹽を獲て。いつまでに嘗め盡すやと問ふに。四五十年はあらんと答ふ。そが中に。心得たるものありて。汝がはじめて山に入りしは。いつれのおん時ぞ。年號は何といひし。審に告げよといへば。年暦時日は忘れたり。只嘉吉と歟。又文安とかいふ號ありし

よりて。竹取物語を作爲せしが如し。昔人曉らず。受けて筆に載せたるを。雅俗于今口實とす。一書說。大和國來目邑。有芋洗芝。昔久米仙見女洗衣之處也。といへり。芋洗（又作五十ロ イモアラヒ）てふ地名は。諸國にあり。奚ぞ來目邑に限るべき。こは訛に因て訛を傳ふるのみ。土俗の臆說。か丶ること多かり。（諾樂の藥師寺の沙門。景戒が日本靈異記に。久米仙の事なきをもて。この物語は萬葉集。世に流布せし後に。作り出だせしなるべし。景戒は。孝謙天皇の朝の僧なりといへれど。靈異記下卷第十一に。當帝姬阿倍天皇代云々といふ事あれば。神護景雲より。なほ後の人なるべし）和漢神仙の事。誣ふべきにあらねども。物にしるしし如くならむや。何となれば。穆天子傳。漢武內傳にいふ西王母は神女なり

穆天子傳曰。吉日甲子。天子賓于西王母。執玄圭白璧。以見西王母。獻錦組百純。紺三百純。西王母再拜受之乙丑。天子觴西王母于瑤池之上。西王母爲天子謠曰。云々。漢武內傳曰。七月七日。上於承華殿齋忽有一青鳥。從西方來集殿前。上問東方朔。朔曰。此西王母欲來也。有頃王母至乘紫雲之輦。駕五色班龍上殿。自設精饌。以盤盛桃七枚。帝食之甘美。帝云々王母曰。此桃三千年。一結實。又南窓下。有人窺看。帝驚問何人。王母曰。是我隣家小兒東方朔。性多滑稽。曾三來偸桃子。此子昔爲太上仙官。但務遊戲。太上謫斥。使在人間。並提要。

畫者これに因りて。その像を畫くもの。嬋娟たる一婦人ならざるはなし。唯是のみならず明の王世貞が列仙全傳の如き。亦これを載せて。神仙の巨擘とせり。（列仙全傳第一卷。西王母爲第三位。老子。木公。在其上）しかれども山海經（西山經）曰。崑崙之丘云々。又西三百五十里曰玉山。是西王母所居也。西王母。其狀如人。豹尾虎齒。而善嘯。蓬髮載勝。是司天之厲及五殘。（厲災厲也殘殘殺之氣也）大荒西經亦云。災火之山云々。有人載勝虎齒豹尾。穴處。名曰西王母。か丶れば。西王母は毛屬なり。（又西王母は。國名桑。爾雅釋地云。觚竹。北戶。西王母。日下。謂之四荒。註皆四方昏荒之國。次四極者）譬へば。梁の任昉が述異記（上卷）にいへる鬼姑神。（述異記曰。南海小虞山中有鬼母。能產天地鬼。一產十鬼。朝產之夕食之。蒼梧今有鬼姑神。是虎龍頭足。蟒目蛟眉。分注云蟒蛇。目圓。蛟眉連生。解云。是與義楚六帖所云鬼子母神。一名訶利帝母神。相似）說類（卷六十）に。癸辛雜識外集等を載せていへる。邕宜以西南丹諸蠻中。彎崖絕谷なる獸埜婆。橘南谿が西遊記（卷三）にいへる。日向國飫肥領なる。山谷中の山婦（以上二書。往記載拙著小說中。今不復贅）と相似たり。西王母すら。かくのごときものならば。神仙は羨むに足らず。宜な

（仙五）曰。久米仙者。和州上郡人。入深山學仙法。食松葉服薜茘。一旦騰空。飛過故里。會婦人以足踏浣衣。其脛甚白。忽生染心。即時墜落。漸喫煙火。復塵寰。然郷黨契劵。當署其名。皆書前仙某。今舊劵之中。往往猶有手澤。悉然。（以下文。同扶桑略記）これより後のものに。又久米仙の事をいへるもあれど。おなじすぢなれば省きつ。右にいふ三仙。大伴。安曇。久米は。各その姓氏なり。久米氏に。朝臣。臣。直の三姓あり。新撰姓氏録巻四。久米朝臣。武内宿禰孫。稲目宿禰之後也。巻七。久米臣。柿本同祖。天足彦國押人命五世孫。大難波命之後也。巻十四。久米直。神魂命八世孫。味日命之後也。（今按。天武紀有大來目部。來目與久米同。）和名鈔。（國郡部）大和國高市郡の郷名に久米あり。久米仙は。この地名によりて名つけしならん。その人なしとすべからず。さばれその。虚空を飛行し。浣婦の素脛を見て。墮落せしといふは。古俗の寓言なり。何となれば。この小説は。萬葉集なる。久米禪師より出で來れり。萬葉集第二。久米禪師。娉石川郎女。時歌五首。

水薦苅信濃乃眞弓吾引者宇眞人佐備而不言常將言可聞　禪師

三薦苅信濃乃眞弓不引爲而弦作留行事乎知跡言莫君二　郎女

梓弓引者隨意依目友後心乎知勝奴鴨　郎女

梓弓都良緒取波氣引人者後心乎知人曾引　禪師

東人之荷向篋乃荷之緒爾毛妹情爾乘爾家留香聞　禪師

こゝに久米禪師とあるを。久米仙に作りかへ。石川郎女とあるによりて。布を浣ふ婦人といへり。又その禪師を仙にせしは。大唐西域記。（巻五）掲若鞠闍國條下云。人長壽時。其王號梵授。時有仙人。居殑伽河側。棲神入定。經數萬歲。一日出定。寓目河濱。遊觀林薄。見王諸女相促媒戲。欲界愛起。染著心生。詣華宮云云。（文甚多。提要以錄。同書卷二。健馱邏國條下亦云。昔獨角仙人。爲婬女誘亂。退失神通。婬女駕其肩。而還城邑。此他梵書。仙人墮落婬女者多有）といふことあれば。これらに縁れるなり。（殑伽川を。吉野川にせし類。是なり）譬へば萬葉集（第十六）竹取翁。逢九箇神女。贖近狎之罪歌。云云とあるに

とまれかくまれ。國俗の口碑に傳へし。玉藻前の怪談と。彼封神演義と。舊新先後ありといへども。その作意。和漢暗合せり後人武王軍談に緣りて。褒姒を妲巳に作りかへしは。なか〳〵にわろし。抑九尾狐の事。前板燕石雜志にいひしは疎漏なり。寔に無益の辨なれども。童子の夜話を資けんとて。かさねてこゝに考正す。好事の癖歟。好事の癖なり

第三十一人事　久米の仙吉野山賽仙附

久米の仙は。布を浣ふ女子の素脛を見て。墮落せしといふ。こはいとふりたる小說なり。先管見を集錄す。扶桑略記醍醐天皇之卷曰。昌泰四年。辛酉八月云々。天台山沙門陽勝。於ニ大和國吉野郡。堂原寺邊一。飛ニ行空中一。元是云々。古老相傳。本朝往年。有ニ三人仙一。所謂大伴仙。安曇仙。久米仙也。但久米仙。飛後更落。其造精舍。在ニ大和國高市郡一。奉レ鑄丈六金銅藥師佛像。幷日光月光像。堂宇皆亡。佛像猶坐ニ曠野之中一。久米寺是也。今昔物語卷廿四第五條云。今はむかし。何れのときにや。帝。大和國高市郡に造營したまふに。國の內の夫を催して。その役とす。しかるに夫ともの中に。仙人々々とよぶものありけり。行事官の輩あやしみて。汝等何によりて。かれを仙人とよぶぞと問へば。夫のものこたへていはく。このものは。久米とまうす。さきの年。當國吉野郡。龍門寺にこもりて。法を行ひて仙となり。空に飛行しける折。吉野川のほとりにて。わかき女の美なるが。裾をかゝげて。衣を洗ふを見るに。脛のしろかりければ。こゝろまよひつゝ。女が前におちぬ。則その女を妻として今に侍り。これよりして。仙人とはよぶなりとまうす。行事官等これを聞きて。さてはやんごとなき人にこそ。その時の行法。定めておぼえたるらん。かう多き材木を。みづからもちはこばんより。祈りて飛ばしめよかし。とたはぶる。久米聞きて思ひけるは。云々。若しやと祈りこゝろみむといふ。行事官聞きて。をこの事とは思ひながら。さもあらば。極めてたふとかりなんとこたふ。その後久米。ひとつの道場にこもり。食をたちて。七日七夜祈るに。八日といふあした。俄に空くもりて。雷雨はなはだし。しばらくありて。空はれたり。その時に見れば。そこばくの材木。南の山邊の杣より空を飛ひて。造營の所にあつまりけり。行事官云々。元亨釋書。卷十八神

明王。即依ニ過去七佛法一。請ニ百法師一。敷ニ百高座一。一日二時講ニ說般若波羅密。八千億偈一竟。其第一法師。爲ニ普明王一說レ偈言云々。爾時法師。說ニ此偈一已。時普明王眷屬。得ニ法眼空一。王自證ニ得虛空等定一。聞法悟解。還ニ至天羅國一。斑足王所衆中一。即告ニ九百九十九王一言。就命時到。人人皆應レ誦ニ過去七佛。仁王問。般若波羅密中偈句一。時斑足王。問ニ諸王一言。皆誦ニ何法一。時普明王。即以ニ上偈一答レ王。王聞ニ是法一。得ニ空三昧一九百九十九王。亦聞レ法。已皆證ニ三空門定一。時斑足王極大歡喜。告ニ諸王一言。我爲ニ外道邪師所一レ誤。非ニ君等過一。汝可ニ還ニ本國一。各々請ニ法師一。講ニ說般若波羅密名味句一。時斑足王。以レ國付レ弟。出家爲道。證ニ無生法忍一。如ニ十王地中一。說ニ五千國王一。常誦ニ是經一。現世生報。大王。十六大國王。脩ニ護國之法一。法應レ如レ是。とばかりにして。この經文中に。狐妖の事はなし。褒姒は。史記四卷周本紀に見えたり。人のしる事なるに。且文多ければ載せず。褒姒は周厲王の時。櫝に藏めたる。神龍の漦を發かれしに。その神龍の精液。即漦也化して玄黿になれり。王宮の童女。これに遭ひて孕みき。その子は即褒姒なりといへり。この事國語十六鄭語に出でたるを。太史公取りて。史記に收めたり。顚末かくの如く。あやしき物語なれば。はじめに。玉藻前の物語の作者。國語及史記なる褒姒と。仁王經なる斑足王の事を撮合して。狐妖の怪談成れるなり。この物語なる。周の褒姒を。殷の妲己に作りかへしは。後人の所爲にして。通俗武王軍談に緣れるなるべし。原彼武王軍談に。武王克レ殷。王ニ天下一までの事は。封神演義の譯文なり。鍾伯敬が批評せし。封神演義は。全部十六卷。題目九十九回。封王女媧宮進レ香といふに起りて。周天子分ニ封列國一といふに盡く。康熙乙亥年月。長洲褚人穫學稼。號ニ四雪堂一が序あり。この演義小說は。九尾の狐。形を變じて。妲己になるといふ事を面目にして。作り設けたり。妲己が事は。史記。三卷殷本紀に見えたり。しかれども狐妖の事あるにあらず。唯王褒が四子講德論に。文王應ニ九尾狐一。而東夷歸レ周といふにより。この瑞獸をもて。彼惡狐前に引きたる。山海經の文考ふべしに作りかへ。周文の祥瑞を。殷紂の妖孽にとりなしつゝ。一部の怪談成れるなり。しかれども通俗武王軍談の原本は。亦是一本なり。譬へば水滸傳と金瓶梅の如し。それ

これらの狐ならん。又國俗の所云九尾狐は。三國惡狐傳。一名三國妖婦傳てふ。草子物語より出でたり。彼惡狐傳は原本何人の作なるをしらず。ちかき比まで。寫本にて行はれき。こは能樂なる殺生石に。今は何をかつゝむべき。天笠にては。斑足太子の塚の神。大唐にては。幽王の后褒姒と現じ。我朝にては鳥羽院の。玉藻前とはなりたるなり。と謠ふを父母にして。ついであやしう作りなしたり。かゝれどもこの事は。謠曲の作者に始まるにはあらで。なほふるき物語なるべし。何となれば。下學集。態藝門犬追物之下云。昔西域有二斑足王一。其夫人惡虐過レ人。勸レ王取二千人之首一。其後出二生支那國一。爲二周幽王后一其名曰二褒姒一。滅レ國惑レ人。死後出二生于日本一。近衞院御宇。號二玉藻前一傷レ人無レ極。後化成二白狐一。害レ人惟多。時俗欲レ驅レ之。先射二走犬一以試二其射騎一。白狐知レ之。化而成レ石。飛禽走獸。當二其殺氣一者。莫レ不二立斃一。故謂二之殺生石一。于レ今在二下野那須原一也。犬追物始二于茲一矣。但聽二之古老之口號一。雖レ不レ知二本說一。且載レ之而已。といへり。下學集は。文安元年編集せり。この事東麓破衲不レ知二何人一の自序に見ゆ文安元年ヨリ至二文政二年一。凡三百七十三年この時既に。故老の口碑に因るといへば。この物語のふりたるを。推して知るべし。又鎌倉志巻四に載せられし。海藏寺號二扇谷山一の開山。源翁禪師傳にも。康治の帝近衞院の寵妃。玉藻前といふもの見えたり。皆當時の小說を取れるなり。或說に。玉藻前の物語は。時の人。美福門院諱得子鳥羽院皇后を譏りまうさんとて。そのおん子。近衞院の寶妃。玉藻前といふものを作り出だしゝなり。といへり。この事何等に本づくとはしらねど。保元の內亂は。をさ〳〵女謁內奏より起れり。これにより。彼門院を。傾けまうさゞるはなし。當時もさこそありけめとおもほゆ。さばれ三國惡狐傳は。またく後人の手に成れるものなり。ふるく傳へし草子物語にはあらず。下學集。及能樂殺生石なる。斑足太子の事は。仁王經より出でたり。佛說仁王護國般若波羅密經。護國品第五曰。爾時佛告二大王一。中略昔有二天羅國一。有二一太子一。欲レ登二王位一。一名斑足太子。爲二外道羅陀師一受レ教。應レ取二千王頭一以祭二塚神一。自登二其位一。已得二九百九十九王一少二一王一。卽北行二萬里一。卽得二一王名曰二普明王一。其普明王白二斑足王一言。願聽レ一日飯二食沙門一頂二禮三寶一。其斑足王許レ之一日。時普

知ニ其所レ反といふ是なり。徑廷に嗚呼の義なし。古人和訓を推し當てたるならん。されども是は猶可なり。呂氏春秋。安死篇なる。徑庭（安死篇曰。魯季孫有レ喪。孔子往弔レ之。入レ門而左。從レ客也。主人以ニ璵璠一收。孔子徑庭而趨。歷級而上。曰以ニ寶玉一收。譬レ之猶レ暴ニ骸中原一也。徑庭歷級非レ禮也。雖レ然以救レ過也。）を。ヲコカマシとはよみがたかるべし。曩に偶好古日錄を閲せしに。引ニ老學菴筆記一云。蜀人見ニ人物之可レ誇者一。則曰ニ嗚呼一。可レ鄙者。則曰ニ噫嘻一。嗚呼ノ者。此間ノ書ニ。古來ヨリ散見ス。俗言に。イキスギ者ト云フハ。噫嘻過ナラムカ。（見ニ下之卷一）といへり。いきすぎは。不レ及の義なれば。往き過ぎなるべし。嗚呼も亦是としがたし。按ずるに三代實錄（陽成紀）曰。元慶四年。秋七月廿九日辛酉。御ニ仁壽殿一覽ニ相撲一。左右近衛府云々。右近衛內藏富繼。長尾米繼。善散樂。令ニ人大咲一。所謂烏許人近レ之矣。ヲコノモノ。はやくこゝに見えて。滷滸と書きたり。烏滸は。地の名なり。後漢書。列傳。（第六十七）南蠻傳曰。交阯之西。有ニ噉レ人國一。（噉レ人國。墨子節葬下。作ニ輆沐國一。魯問編ニ作ニ啖人之國一。）生ニ首子一。輙解而食レ之。謂ニ之宜弟一。味旨則以遺ニ其君一。君喜而賞ニ其父一。取レ妻美。則讓ニ其兄一。今烏滸人是也。といへり。便之ヲコノモノの本文なり。この土にいふヲコノモノは。蠻夷の愚惡に譬喩せしのみ。蜀人の嗚呼とおなじからずその嗚呼と書きたるは假借なり

第三十八事 宋の陳年が綽號

今の俗。妻妾の家政に專なるを譏りて。或は妲己といひ。或は九尾狐といふ。これに似たること。はやく唐山にあり。宋元通鑑。（宋眞宗紀）曰。天禧元年二月。陳彭年卒。彭年敏給强記好ニ儀制沿革刑名之學一。然性奸諂。時號ニ九尾狐一是なり。さてこの九尾てふ狐に二種あり。山海經（大荒東經）曰。大荒中云云。有ニ青丘之國一。有ニ狐九尾一。（傳太平則出而爲レ瑞也）白虎通（封禪論）曰狐九尾何。狐死首レ丘。不レ忘レ本也。明ニ安不レ忘レ危也。必九尾者也。九妃得ニ其所一子孫繁息也。於レ尾者何。後當レ盛也。文選。（論類）王褒四子講德論曰。昔文王應ニ九尾狐一。而東夷歸レ周。武王獲ニ白魚一。而諸侯同レ辭。といひし九尾狐は。並に瑞獸也。山海經（南山經）又曰。青丘之山云云。有レ獸焉。其狀如レ狐而九尾。（傳卽九尾狐）其音如ニ嬰兒一能食レ人。食者不レ蠱。（噉ニ其肉一。令ニ人不一レ逢ニ妖邪之氣一。或曰蠱々毒）同書（東山經）又曰。鳧麗山云云。有レ獸焉。其狀如レ狐。而九尾九首虎爪名曰ニ蠪姪。（龍姪二音）其音如ニ嬰兒一。是食レ人。といひし九尾狐は。並に惡獸なり。宋朝の人。當時陳彭年に譬喩せしは。

るとなれども。借して良賤相呼ぶこと。今も昔もかはらぬに。機と唱ふることの専なりしにより。殿といへば。不敬なりと思ふもの、あるもをかし昔に至尊。その亡臣を愛顧して。殿と呼ばせ給ふことありけり。愚管鈔(巻四)に云。白河院は。つねに能信をば。故春宮大夫殿おはせずば。わが身はかゝる運もあらましやはと。仰せられけるには。必々殿字をつけて仰せられけり。やんごとなきことなり。といへり。こは後朱雀院。病おもらせ給ひしとき。後冷泉院に。御讓位ありけるをり。能信執しまうして。後三條院を。春宮になしまゐらせたればなるべし。白河院は。後三條院の御子におはします。御母は。贈皇太后茂子。能信卿(御堂關白道長公第二子。正二位權大納言)の女なり。顧炎武が日知錄卷四に。人君稱ニ大夫字ヲ。卷廿三に。人主呼ニ人臣字ヲ等の考證あり。亦考ふべし

大樹は。鎌倉及京都將軍を稱するよしにて。をさ〳〵物に書くことなれども。余はこゝろ得がたし。大樹は漢後の馮異が故事なり。馮異傳曰。秀(光武)部ニ分吏卒ヲ。各隷ニ諸軍士ニ。皆言。願屬ニ大樹將軍ニ。大樹將軍。偏將(偏將小將也)馮異也。爲レ人謙退不レ伐。敕ニ吏士ニ。非ニ交戰受レ敵。常行ニ諸營之後ニ。每レ所ニ止舍ニ。議將並論レ功。異常獨屛ニ大樹下ニ。故軍中號曰ニ大樹將軍ニ見るべし。馮異は偏將なり。鎌倉京都の將軍は連帥なり。漢朝偏將の號をもて。我連帥におはするはいかにぞや。讀書の人宜しくわきまへしるべし。但そのことはおなじからで。號の相似たるあり。大柱直これなり。書紀。推古紀曰。二十八年冬十月。以ニ砂礫ヲ葺ニ檜隈陵上ニ。則域外積レ土成レ山。仍每レ氏科レ之。建ニ大柱於土山ニ。時倭漢坂上直樹柱。勝之大高。故時人。號レ之曰ニ大柱直ト。又一个相似たるあり。清の張廷玉が所云木下人是なり。明史(日本傳)曰。信長偶出獵。遇ニ一人臥ニ樹下ニ。驚起衝突。執而結レ之。自言爲ニ平秀吉ト。薩摩州之人奴。雄健蹻捷有ニ口辯ニ。信長悅レ之。令レ牧レ馬。名曰ニ木下人ト。このこと謬傳にかゝるといへども。大樹將には良匹なるべし。

〇事に錯誤しつゝ。よろづ誇貌なるを。ヲコノモノとし。自他の不然を。ヲコガマシといふは。常語なれど。その誼をいふもの罕なり。今昔物語。(卷十二第六條)古今著聞集。(卷之八管絃部)及下學集(能藝門)には。鳴呼者と書きたり。書言字考(人倫部)には。西京賦を引きて。徑廷者と書たり。和訓類林(遠部)にも。徑廷(此訓始見ニ文選ニ。遠己我末志。于此ニ)といへり。按ずるに。文選(賦類)張衡西京賦曰。望ニ㝹窱以徑廷ニ。眇不

勘申御名事云々。二字不㆓偏諱㆒。及㆑唐偏諱抄云。世代。民人依㆑近㆓太宗諱㆒也。といへるは。異朝の沙汰なり。國人の。世字に換ふるに。代をもてすなるは。これも亦諱まずして。諱むといふに近かるべし。

「手兒名ナテコ」は。萬葉集第六。山部赤人の歌。第九。高橋連虫麻呂が歌に見はれたる。勝牡鹿。郡名。即葛飾也眞々又作㆓間々㆒。即繼也の一女子なり。前輩の説に。手兒名は東國の方言。女子をいふといへれど。證文なし。按ずるに。手兒名はその女子の名なるべし。類聚國史。百九十四職官部。弘仁五年。正月丁卯の叙位に。吉彌侯部互僅奈といふ者見えたり。古と僅と通へり。かゝれば手兒名。互僅名は。同名とするに近し。愚按かくの如くなれども。その義はいまだ詳ならず。なほ考ふべし。

「戰國武士悉取㆓官名㆒事」こは人のしる事ながら。就㆑中甚しとおもほゆるは。新編東國記巻二曰。葦名盛隆。其家臣保土原江南ガ嫡子何某。十六歳ニテ。成功アリシカバ。大和守ト名ツク。翌年又比類ナキ働アリシカバ。山城守ト稱セラル。コノ保土原ハ。天正十年。人取橋ノ合戰ニ。它互ノ家臣。濱尾十郎ニ討タル。保土原濱尾。共ニ二十八歳ナリといへり。受領を改名とこゝろ得たる。いとをかし。すべて戰國の武士の僭上なる。かくの如き事一にあらず。又よく似たるものあり。東國太平記に見えたる。篠塚伊賀守。栗生美濃守等は。新田の勇臣。栗生篠塚等が子孫にはあらず。栗生美濃守は。初蒲生氏郷に仕へしとき。その姓名。寺村半左衞門といひしものなり。天正十五年。四月朔日。筑前國。岩石の城攻められしとき。坂小平後改㆓名蒲生源左衞門成郷㆒と共に。城の一番乘りせしにより。栗生美濃守と改名す。と同書巻十五にいへり。これをもて推せば。後の篠塚伊賀守も。昔の篠塚が子孫にはあらで。只その武勇を慕ふにより。如此名告れるものならん。昔漢の司馬相如は。藺相如が人となりを景慕して。相如と名つきしといふ。この類の名。和漢に多くあれども。所縁なきもの。漫に古人の姓氏を冒し。その官名さへ受け繼ぐ事は。戰國弊衰の俗になれり。この後技藝未熟にして。はやく名をしらん爲に。由緣もなき古人の姓名を冒し。或は古人の名號をつぐものは。栗生篠塚が亞流なり。よしやその技上達すとも。道の一祖にはなりがたかるべし。以下係㆓于稱謂㆒

「殿」と稱するは。攝政家に限

四承和二年。正月己巳。左京人。左馬寮權大允。清友宿禰貞岡。散位同姓魚引等。賜二姓笠品宿禰一。非二其願一也。公家避二太政大臣橘氏之名一耳。同書。九承和七年。十一月辛巳。勅。橘戸。蝮橘。橘連。伴橘。連橘。守橘等六姓。與二橘朝臣一相渉。宜レ賜二椿戸。蝮椿。椿連。伴椿。連椿。守椿一。自餘以二橘字一爲レ姓之類。亦以レ椿換レ之。これより。唐山にて。名を諱むよしは。春秋左氏傳。桓公六年九月。その他の史にも。多く見えたれども。名は諱めども。姓に觸るるを諱むことなし。況。至尊その外戚の爲に諱み給ふ事は。和漢に例あるべくもあらず。現に承和の朝廷は。外戚を愛敬したまふことの殊更なりき。されば清友公の父。奈良麻呂宿禰（諸兄公の嫡子）は。孝謙の御宇（天平寶字元年。七月）に。刑せられたれども。承和十年。八月辛未に。從三位大納言を贈られ。十四年。十月丁酉に。太政大臣。正一位を贈られたり。詔曰。云々。（見二續後紀一。十三。十七。）橘氏の榮爵かゝりしかば。役々までも。源平藤に推しならべて。高貴の四姓といふなるべし。又。按ずるに。律。（第七）賊盗律曰。凡恐喝取二人財物一者云云。展轉傳レ言。而受レ財者。皆爲二從坐一。疏曰。假如。

甲遺レ乙。景傳二言於丁一。恐喝取二物五端一甲合二徒一年半一。乙景。各徒一年。是云々。景は丙なり。唐律に景に作れり。世祖の諱を避けたるなり。天朝には。丙字を諱むべき理なし。しかれども當時の儒官。こゝに心つかざりしならん。是諱まずして諱むに似たり。世字に代ふるに。代字をもてせしも。これにおなじ。唐の太宗の諱を。世民といふにあり。唐朝にては。世字を諱むこと甚しかりき。（世代の論は。東庄の秉燭譚。又塵添壒嚢鈔。又池北偶談に見えたり）むかし天朝の儒官。及官僧。唐の文書に倣ひつつ。世と書くべきをも謬りて。代字をもて換へたる多かり。流俗これに浸染して。今に至りて改めず。それも偏に假字を見て。なべてよと讀まば論なし。先祖代々といふがごときは。理義に稱ふべくもあらず。世と代とはその義おなじからず。家督の子。家督の孫。その父祖に嗣ぐを世といふべし。兄の跡を弟が繼ぎ。或は親族の子が繼ぎ。又他姓のもの代りて立つを。代といふなり。世代の差別は神皇正統紀に斟酌せられし外に。亦多く見ることなし。今に至りては。俗に従はんこと。勿論なれども。わきまへてをるこそよかめれ。江家次第。（卷十七）親王宣旨事條下云。

片名を取り給ひしにはあらず。平家には。貞盛。繁盛あり。これも兄弟なり。圓融花山のおん時に。源氏に。滿仲。滿季。滿快。滿重あり。是も亦兄弟なりき。爾後。頼信。頼義。義家。義親。平家には。正度。正衡。正盛。忠盛に至りて。父祖の片名を取ること。恒になりぬ。唐山にも。父祖の名を嗣ぐこと。稀にあり。さりとて。この土のごとくにはあらず。語は日知錄卷廿三に見えたり。文多ければ載せざるなり。本書に就き見るべし。しかはいへども。よに人の弟子たるもの。その師の片名を取りておのが名とし。或は亡師の名號を受けつぐ事。ふるくは和漢に所見なし。按ずるに。文德實錄。卷一 嘉祥三年。五月丙戌。莊二嚴淸涼殿一。安二置金光明經。地藏經。各一部。及新造地藏菩薩一軀一。屈二請百僧一。修二先皇七七日御齋會一。解坐之後云々。是日有レ制。爲二諸名神一。令レ度二七十人一。各爲二名神一。發願誓念。其得レ度者。皆以二神字一被二於名首一。日本記略。一條院 記上 永延元年。丁亥。小 九月廿五日乙酉。於二眞言院一。童子十五人。剃レ頭。令三受戒名字付二諸社片字一。來廿七日可レ被レ奉二佛舍利使一之故也。といへり。淨土宗の譽字。日蓮宗の日字は。これらを濫觴とすべし。それより又おし移りて。巫醫百工。及文人墨客まで。各その師の名號を。一字わが名に受けつぐなるべし。諱レ名之制これを六史に攷ふるに。書紀廿八 孝德天皇の大化二年。八月癸酉の詔に見えたり。しかれどもこの御宇には。なほ嚴密の制度おはしまし、にあらず。續紀。六 元明天皇の和銅七年。六月己巳。若帶日子姓。爲レ觸二國諱一。成務御諱 改因二居地一賜レ之。としるされしこれぞ名を諱むはじめにはありける。かくて。桓武天皇の延曆四年。五月丁酉。續紀卅八 平城天皇の大同元年。七月戊戌。嵯峨天皇の大同四年。九月乙巳淳和天皇の弘仁十四年。四月壬子。平城以下。類史廿八 仁明天皇の天長十年。七月癸巳。續後紀二 數朝その制度おはしまして。上の御名。及先帝の御諱に觸る、ものは。百官の姓氏。諸國の郡縣。及人民の姓名を。改め易へさせ給ひにけり。抑平城の朝 元明 のはじめより。稍漢學闡けしかば。これらの事も。すべて漢法に傚はせ給ひしならん。そが中に。いとも異なりと見奉るは。仁明のおん時に。贈太政大臣。橘朝臣淸友公。嵯峨天皇皇后。橘朝臣嘉智子父。仁明天皇外祖父 の爲に。姓の橘字さへ。諱ませ給ひし事あり。續後紀。

論なし。かくて又。殘缺後紀。十三桓武紀曰大同元年。三月己卯。上病大漸彌留。辛巳勅。緣二延曆四年事一。配流之輩。先已放還。今有レ所レ思。不レ論二存亡一。宜レ叙二本位一。復大伴宿禰家持從三位。藤原朝臣小依從四位下。大伴宿禰繼人。紀朝臣白麻呂正五上。大伴宿禰眞麻呂。大伴宿禰永主從五位下。林宿禰稻麻呂外從五位下一。（家持卿死後。歷二二十三年一。復二本位一）かゝれば家持卿父子。既にその赦免の日。本位に復されしより。延喜十四年に至りて。一百餘年を歷たり。さるを尙。罪人伴家持と貶しめたる。善相公千慮の一失にあらずや。余嘗續日本紀。及萬葉集に由りて。家持卿の人となりを想像るに。文華餘りありて。心術正しからず。さりけれども。當時この卿微りせば。誰詠歌の古風を貽して。萬葉集を今に傳へん。余その歌書を繙く每に。これらの事を念ふにより。爲に寃を雪むるのみ。顧るにいにしへは。天朝の書籍。刋行のものなし。六史ありといふとも。ふかく官庫に秘められて。披閱に容易るべくもあらず。後世亦後紀のごとき。久しく烏有に屬せしも。近日殘壁あらはれて。その印本得難からず是亦泰平の餘澤なり。仰ぐべく驩ぶべし。

不祥の名は。よになきにしもあらねど。いと酷しとおもふは。村岡惡人なり。類聚國史。（八十七。刑法部）桓武天皇延曆十七年。三月壬子朔。美濃國人。村岡連惡人。配二流淡路國一。以レ停二留群盜一侵二犯百姓一也。この惡人も。惡名を賜ひしにあらざるか。おのづからなる名にしあらばその譴罰。名詮自性ならずや。保元建保の間。惡左府。惡七別當。（源爲朝家臣）惡右衞門督。惡源太。惡七兵衞。惡禪師などみづから如此名の告れるにあらず。時人。その暴惡非義を憎みて。惡字を被せしなり。又天正中に。赤井惡右衞門あり。こは自稱なるべし。又。按ずるに。源義平ぬしの外に。惡源太と呼ばはれし武士あり。江濃記に。土岐氏の事を記し、段に。伯耆十郎賴藤（正慶中ノ人ナリ）賴藤弟。惡源太賴遠。數度高名比類ナシ。オゴリノアマリ。康永ノ比。院ノ御所ノ御幸ニ參リ會ヒ。狼藉シテ身失ヒシカバ。其弟。周崔坊入道賴明ニ。美濃ノ守護ヲ給ハルといへり。

取二テ父祖ノ片名一以名二クル子孫一事　こは延喜天曆の年間より。その萌見えたり。しかれども藤氏に。時平。兼平。忠平。仲平のごとき。兄弟その名に。ひとしく平字を命け給へるのみ。祖父の

し是なり。東鑑。文治二年閏七月十日條云。義經已爲叛逆人者。亦義經者。與殿三位中將殿。良經。依爲同名。被改義行之由云々。同年。十一月五日條云。義行于今不出來。云々大夫屬入道申云。義行者。其訓能行也能隱之義也。故于今不獲之歟。如此事。尤可思字訓。可憚同音。依之猶可爲義經之由。被申攝政家。同年十一月二十九日條云。義經亦被改義顯。こは攝政家の公子と。その同訓たるにより。しか改められしなり。又この義經ぬしの名の出處を考ふるに。佛書より出でたるにはあらざるか。維摩詰經。法供養品曰。依於智不依識。依了義經。不依不了義經。注肇曰。佛所說經。自有義旨分明。盡然易了者云々。義經の乳名を遮那王といへり。遮那も亦梵書より出でたり。平治物語に據るに。義經竊に鞍馬を去りて。陸奥へ趣きしは。十六歳のときなり。初東光坊阿闍梨蓮忍が弟子。禪林坊阿闍梨覺日が行童たりし日。右なる經文を見て。その祖考。八幡殿。頭殿の諱なる。義の字を取るに。よろしき熟字なればとて。みづからしか名のれるにや。然らずば當時。法師に憑みて。潜に熟字を撰みしならん。平治物語。三下牛若奥州下向の段に。深栖三郎光重參考云。源仲政子。頼政弟子。陵助頼重云々。早御元服候ヒケルヤ。御名ハ何ト問ヒ奉ツレバ。烏帽子親モナケレバ。手ヅカラ源九郎義經トコソ名乘侍レト答ヘテ。打チ連レ給ヒテ云々。こは无益の辨なれども筆の次にしるしおくのみ。

稱呼謬爲罪人

本朝文粹。卷三。意見封事部延喜十四年。四月廿八日。從四位上行式部大輔。三善朝臣淸行。意見封事。十二箇條の第四條に。給罪人伴家持。越前國云々。山城國云々。河内國。茨田。澁川。兩郡田五十五町。以充生徒食料。號曰勸學田。てふ議あり。この時。家持卿を罪人と唱へたるはこゝろ得がたし。續紀。廿八桓武紀に因れるならん。紀曰。延暦四年。八月庚寅。中納言。從三位。大伴宿禰家持死。中略家持。天平十七年云々。寳龜十一年拜參議。歷左右大辨。尋授從三位。坐氷上川繼反事免。出爲陸奥國按察使。居無幾拜中納言。春宮大夫如故。死後二十餘日。其屍未葬。大伴繼人。竹良等。殺種繼。事發覺下獄。案驗之。事連家持等。由是追除名其息永主等。並處流焉。かゝれば當時。家持父子の罪人たる事は

といへり。現に狐狸の人に變せしも。非人なり。逆臣の隱謀も。非人の所爲なり。源平盛衰記。（巻四十六）義經始終事の段に。此兒打チ笑ヒテ云々。加樣ニ文盲ノ身ニテハ。法師ニ成リタリ共。非人ニコソアラメトテ云々。總て。人なみならぬを。非人といふなり。唐山にても。罪人の族を貶し。惡姓を賜ひし事あり。三國の季に。吳孫秀。晉の南頓公宗。梁の豫章王綜。武陵王紀。隋の楊玄感等。皆其人なり。三國志。吳志。宗室傳。（第六）孫匡傳云。泰子秀。（泰孫匡子。即匡之孫也）秀爲前將軍夏口督。秀公室至親。握兵在外。皓（吳主孫皓）意不能平。建衡三年。皓遣何定將五千人。至夏口獵。先是氏間僉言。秀當見圖。而定遠獵。秀遂驚。夜將妻子親兵數百人奔晉。以秀爲驃騎將軍。儀同三司。封會稽公。江表傳云。皓大怒。追改秀姓曰厲。晉書。列傳。（第二十九）汝南王亮傳附云。宗（即南頓公宗）字延祚。元康中。封南頓縣侯。尋進爵爲公。云々。咸和初。御史中丞鍾雄劾宗謀反。庾亮使右衞將軍趙胤收之。宗以兵拒戰。爲胤所殺。貶其族爲馬氏。（宗晉室宗親。司馬氏。故貶爲馬氏）梁書。列傳。（第四十九）豫章王綜傳云。綜字世謙。高祖第二子也。天監三年。封豫章郡王。邑二千戶。五年云々。普通六年。魏將元法僧。以彭城降。高祖乃令綜都督衆軍鎭于彭城與魏將安豐王元延明相持。高祖以連兵既久。慮有釁生。敕綜退軍。綜懼南歸則無因復與寶寅相見。乃與數騎。夜奔于延明。魏以爲侍中太尉。高平公。丹陽王。邑七千戶。錢云々。綜乃改名纉。字德文。追爲齊東昏服斬衰。於是有司奏削爵土。絕屬籍。改其姓爲悖民。俄有詔復之。其子直爲永新侯。邑千戶。同卷。武陵王紀傳云。紀字世詢高祖第八子也少云々。及太淸中侯景亂。紀乃僭號於蜀。改年曰天正。云々。將軍樊猛。獲紀及第三子圓滿俱殺之於硤口。時年四十六。有司奏請絕其屬籍。世祖許之。賜姓饕餮氏。（摘要）隋書。列傳。（第三十五）楊玄感傳云。楊玄感云々。諸弟並具梟磔。公卿請改玄感姓爲梟氏。詔可之。（文甚多。不勝抄錄。纔提要）この他。南宋竟陵王誕有罪。貶族爲留氏。といふ事。宋書竟陵王誕傳に見えたり。この類。唐に至りてなほあり。餘は數ふるに勝へず。むかし天朝にても。これらの故事に擬し給ひしならん。かくて年歷迴に降りて。後鳥羽院の御宇に。相似て事のおなじからざるあり。源義經ぬ

人家主。紀武聖あり。男子にして女子めきたるは。小野臣妹子。推古紀なり。［六史中無二等類一名］は。吉備弓削部虛空。雄略紀秦吾寺孝德紀白髮部鐙。同紀難波吉士胡床。同紀忌部官𤣥雲梯。類史九十九石上朝臣雖。同巻秋篠朝臣庚子。續後紀十一これらは絶えて等類なし。［惡名］を。罪人に賜ふことあり。孝謙天皇天平寶字元年。秋七月庚戌。勘二問橘奈良麻呂一云々。於レ是一皆下レ獄。又分二遣諸衞一。掩二捕逆黨一。黃文。改二名麻夫禮一道祖。改二名麻度比一大伴古麻呂。多治比犢養。小野東人。賀茂角足。改二名乃呂志一等。並杖下死。安宿王云々。續紀廿孝謙紀黃文王に賜りし罰名。多夫禮に戯なり。今俗に。たはけといふにおなじかるべし。道祖王の罰名。麻度比は迷なり。今俗にまごつきなどいふ類なるべし。角足が罰名。乃呂志は遲鈍の義なり。今俗に。のろまといふにおなじかるべし。のろまは。傀儡師。野呂松がつかひし木偶を。野呂末人形といふに起る。といふものあり。しかれども。遲鈍をのろしといふは古言なり。野呂松より出づるにあらず廢帝天平寶字五年。三月己酉。茅原王。座二以レ刄殺一レ人。賜二姓瀧田眞人一。流二多褹島一。見二續紀廿三。廢帝紀一高野天皇神護景雲三年。五月壬辰。不破內親王有レ罪。詔賜二廚眞人廚女姓名一。令レ莫レ在二京中一。續紀三十孝謙後紀廚女ははしたもの今俗にいふ。まゝたき女にひとしかるべし。罰名にはあられど。この廚女に似たる名は。平群朝臣炊女なり。炊女は巻四十。桓武紀に見えたり。三代實錄巻四十七。光孝紀。山城國從一位平野神社。云々。同神社預一人。御炊女四人。云々。この炊女は。神社に隷けらるゝ職名なり神護景雲三年。九月己丑。和氣淸麻呂。賜二名穢麻呂一。爲二因幡國員外介一。未レ及レ之二任所一。俄流二於大隅國一。孝謙後紀要レ提仁明天皇承和九年。秋七月庚申。罪人橘逸勢。除二本姓一。賜二非人姓一。流二伊豆國一。續日本後紀。巻十二こゝにいふ非人は。今の非人の類にはあらで。是非の非なり。維摩詰經。不思議品曰。譬如三人畏時。非人得二其便一。注。非人。如二羅刹變レ形爲レ馬云々一呂氏春秋。疑似篇云。梁北有二黎丘部一。有二奇鬼一焉。喜效二人之子姪昆弟之狀一。邑丈人。有二之レ市而醉歸、者一。黎丘之鬼。效二其子之狀一。扶而道苦レ之。丈人歸。酒醒而誚二其子一曰。吾爲二女父一也。豈謂二不慈一哉。我醉。汝道苦レ我。何故。其子泣。而觸レ地曰。孽矣。無二此事一也。昔也往。而責二於東邑人一。往可レ問也。其父信レ之曰。嘻是必夫奇鬼也。我固聞レ之矣。明日端復飮二於市一。欲三遇而刺二殺之一。明旦之レ市而醉。其眞子。恐二其父之不一レ能レ反也。遂逝迎レ之。丈人望二其眞子一。拔レ劔而刺レ之。丈人云々。この奇鬼のごとき。皆非人といふべし

淀河漁者。彌陀二郎 山州名迹志十五 あり。里見の家臣。原田大佛之介。菅野神五郎 本朝三國志九 あり。これらの姓名。軍記野乘には。猶あるべし。徒然草八十二段なる。連歌しける法師。何阿彌陀佛。十六夜日記を綴りたる。藤原爲相卿の母義阿佛尼。甲陽軍鑑なる。武田孫六入道定佛など。入道せしものゝ。某佛と號することはめづらしげなし

〔書名〕を取りて名とせしものは。長谷部文選。續紀廿九孝謙後紀 伴宿禰中庸 三代實錄清和紀 なり。特に甚しとおもふは。〔屎クソ〕をもて名とせしもの多かり。そは押坂史毛屎。書紀十七用明紀 錦織首久僧。同廿二推古紀 倉臣小屎。同廿八孝德紀 阿倍朝臣男屎。日本逸史天長中人 卜部乙屎麻呂。三代實錄十七。清和紀 節婦。巨勢朝臣屎子。同廿二清和紀 下野屎子。同四十六。光孝紀。忍海山下氏則妻 いとも異なる名なれども。時俗の習ひ。亦怪むに足らず。今俗に。平氏にして。源を名とし。藤氏にして。平を名とし。末子を太郎と名づけ。長男を二郎。三郎。五郎など名つけたるをも。昔の人なほ在らば。よに異なりと思ふべし

昔も二男を太郎と名つけし事。小說には稀にあり。落窪物語卷の四に。父のおとゞ云々。兄の童におぼしませ。司えさすとも。兄にはまさらん。とすべて此子を。太郎にはせさせ給へと。常にのたまひて。御名も。弟太郎となん付け給へりける。云といへれど。浮きたる草子物語を。證にはしがたし。まして愛子の事なれば。そは此物語のみに限れり

これらの類にはあらで。天武。持統の朝廷より。文德。清和の朝廷まで。〔緣レ氏取レ名〕たるもの多かり。その類をいはゞ。都努牛飼。都努は角なり。角によりて牛を名とせり 柿本猨 以上書紀 柿本建石。橘諸兄。諸兄は。諸枝なるべし 簑笠麻呂。以上續紀 船小楫。山邊何鹿。何鹿は。丹波國の郡名なり。イカナル鹿の略辭なれば。山に緣あり 石川毛比。毛比は水なり 淡路三船。石川淨濱。加茂大川。石川魚麻呂。林山主。以上。殘缺後紀 橘枝子。橘千枝。橘百枝。橘時枝。橘末茂。橘枝主。以上續後紀 船湊守。石川橋繼。御船賀祐。賀祐は。櫂也 以上。類史 南淵永河。文德實錄 柿本枝成。橘信蔭。橘三夏。以上。三代實錄 この他。猶あるべし。近來狂歌師の狂名といふもの。これに近し。氏に緣りて名を取る事は。唐人の名に緣りて。字せしに本つきたるか。譬へば顏回。字子淵。阮縣莊論曰。通二謂之川一。同謂二之淵一 仲由字子路。按。由與熊近。子路熊一名也。然不レ載二諸爾雅一。疑取二由之字一。以爲二熊一名一耳 の如し。〔六親〕をもて名とせしものは。坂本吉士長兄。光德紀 額田部連甥。皇極紀 百舌鳥長兄。同紀 佐々貴山君親人。續紀聖武紀 文室眞人古能可美。光仁紀。古能可美兄也 この他。巨勢臣人。天智紀 多治比眞

陰中の陽なり。之加。諸魚天神御子に仕へ奉りし故事あり。古事記上巻に。天津日高日子番能邇邇藝命天降りまして。竺紫日向之高千穗之久志布流多氣に座せしとき。底度久御魂。都夫多都御魂。沫佐久御魂等。猿田毗古命を送りて。還り到る條下に云。乃悉追二聚鰭廣物。鰭狹物一以問。言二汝者天神御子仕奉耶一。之時。諸魚。皆仕奉白之中云々。後生の人臣。名を鱗介に取るもの、多かりしも。これらに縁りての事なるべし。又按ずるに。同書上巻に。大穴牟遲神欺むかれて。八十神に燒かれ給ふ段に云。神產巢日之命。時乃告三訓黒貝與二蛤貝比賣命一。作活。云々といへり。鱗介をもて名とすることゝ。はやくこゝに見えたり。又按ずるに都宿禰腹赤（類聚國史九十九。弘仁十四年正月叙位）と。粟宿禰鱒麻呂（三代實錄六）とは。その名を等類とせん歟。一說に腹赤は鱒なりといへり。今俗は。鮭の子を腹赤子といふなり。又一說に。腹赤は地名なり。肥後國玉名郡長渚に腹赤濱あり。この海濱にて漁（すなど）取る魚を。久爾倍といふ。腹赤は卽久爾倍の事なり。その濱によりて名を得たりといへり。いまだ孰れか是をしらず。江家次第。（卷之一元日節會）腹赤奏の條下を考ふべし。

「儒佛名號」をもて名とせしは。宮首阿彌陀。（書紀廿八孝德紀）我閉連阿彌陀。（續紀八元正紀）衣縫造孔子。（同三文武紀）文忌寸釋加。（同三。武紀）大宅朝臣君子。（同十二。十三聖武紀）船連夫子。（同十九孝謙紀）阿倍朝臣子路。（同廿五廢帝紀）縣犬養宿禰老子。（同卅四光仁紀）等あり。これらは兒戲に近し。この故に。高野天皇神護景雲二年。五月丙午。詔曰。入レ國問レ諱。先聞有レ之。況從レ今何曾無レ避。見二諸司入奏名籍一。或以二國主國繼名一。向二朝臣名一。可レ不二寒心一。或取二眞人朝臣一。立レ字。以レ氏作レ字。是近レ冒レ姓。復用二佛菩薩及聖賢之號一。每レ經二聞見一。不レ安二于懷一。自今以後。宜レ勿二更然一。昔里名二勝母一。曾子不レ入。其如レ此等類。有二先著者一。卽改換務從二禮典一。（見二續紀卷十九一）と禁めさせ給ひしことありけり。爾後圓融院の御宇に。藤原朝臣伊尹公（日本紀略六）あり。一條院の御宇に。藤原朝臣伊周卿（同書十）あり。伊周は。伊尹周公旦を。一字つゝ取り給ひしなり。是より先き藤原諸葛（三代實錄光孝紀）あり。漢の孔明が復姓を取れり。又花山の朝に。大江匡衡あり。漢の匡衡を取れるなるべし。かくてこの類の名。遙に降りて。一條院の御宇に。江口の遊女小觀音（今樣鈔）あり。高倉院の御宇に。加賀の佛（平家物語）あり。山城國

家語（執轡篇）なる。倮蟲（倮蟲三百有六十。而人爲二之長一）より出でたるなるべし。この他。縣主飯粒。（書紀十八。安閑紀）東漢氏直糠兒。（同十九。欽明紀）舍人造糠虫。（同廿九。天武紀）あり。右におなじ意にて。名つきたるべし。福草（サキクサ）にも同名あり。葛城福草。（書紀廿五。孝德紀）神社福草。（同紀）是なり。鯨（クジラ）には。同名かり。大伴連鯨。（書紀廿三。舒明紀）河内直鯨。（同廿七。天智紀）民直鯨。（同廿八。天武紀）盧井連鯨。（同紀）粟田朝臣鯨。（續日本後紀十六）大伴宿禰鯨。（同上）刑部造眞鯨。（三代實錄七。清和紀）鮪（シビ）も亦三人あり。八口釆鮪女（書紀廿三。舒明紀）物部村井連鮪。（同廿五。齊明紀）吉士小鮪。（同廿七天智紀）この他。萬葉集第十六に。○土師宿禰水通。字志婢麻呂。といふ者見えたり。この志婢も。鮪の假名にはあらぬ歟。考ふべし。堅魚（カツヲ）をもて名とせしは。石上朝臣勝雄。（續紀十一。聖武紀）河原毗登堅魚。（同卅。孝謙後紀）縣犬養宿禰堅魚麻呂。（同卅七。桓武紀）安倍朝臣堅魚。（殘缺後紀廿二。嵯峨天皇紀）大伴宿禰雄堅魚。（又作二小堅魚一。殘缺後紀廿二）伴宿禰眞堅魚。（類集國史九十九。天長中人也）この他。豐岡宿禰眞黑麻呂。（續後紀二）この眞黑麻呂の眞黑も。目黑堅魚の事ならん歟。目黑堅魚の名目は。東鑑に見えたり。鯛をもて名とせしものは。凡眞黑鯛。（續紀廿九。孝謙後紀）大中臣朝臣鯛取。（殘缺後紀十七。平城天皇紀）安倍朝臣鯛繼。（續後紀七）高道宿禰鯛釣。（同八）この他。鯛身命。（姓氏錄十八）小鯛王。（萬葉集十六）又。仁明天皇嘉祥二年。十一月廿日。賣買家地の劵書に。秦忌寸鯛女。（好古日錄上卷）あり。鯽魚（フナ）にも亦同名あり。吉備品遲部雄鯽。（書紀十。應神紀）難波玉造部鯽魚女。（同十五。欽明紀）鴨朝臣子鯽。（續紀十八。孝謙紀。）⿰月魚（シコナ）にも亦同名あり。物部尾輿。（書紀十九。欽明紀）蘇我臣興志。（同廿五。孫德紀）尾張宿禰乎己志。（續紀四。元明紀）大神朝臣興志。（同六。同紀）凡連男事志。（同九。元正書）これらの名すべて⿰月魚の假字なり。鯯魚（コノシロ）にも亦同名あり。鹽屋鯯魚。（書紀廿五。孝德紀。分注云。鯯魚。此云擧能之盧）堺部宿禰鯯魚。（同廿九。天武紀）鯖（サバ）にも亦二人あり。紀朝臣鯖麻呂。（續紀卅八。桓武紀）田口朝臣佐波主。（續後鯯魚）この他。林宿禰娑婆。（殘缺後紀五。桓武紀）あり。こは娑婆國の娑婆なるべし。この餘。魚をもて名とせしもの衆夥なり。枚擧に遑ならず。按ずるに。魚は陰中の陽なり。こゝをもて。むかし百官の名に。多く取れるなるべし。蠡海集。（庶物類）曰。水族乃陰中之陽。何以知二其然一歟。云々。魚乃陰物。而得二陽氣一多。故腹內生レ脬。是以能浮躍。魚目晝夜不レ瞑。因知乙其爲二陰物一。而得レ陽多者甲也。といへり。この小をもて。大に譬へば。人主は陽なり。庶民は陰なり。百官は

改ニ本姓。賜ニ雁高宿禰一是なり。「入鹿」も同名四人あり。蘇我臣入鹿。書紀。皇極紀 和朝臣入鹿麻呂。殘缺後紀五。同十三 粟田朝臣入鹿。同上。又見ニ卷八ニ 多朝臣入鹿。同書。十三。二十 是なり。「蝦夷」も亦二人あり。蘇我臣蝦夷。欽明紀。皇極記 加茂朝臣蝦夷。持統紀「守屋」も亦二人あり。物部弓削連守屋。推古紀 大伴連杜屋。天武紀下 杜屋は守屋の假字なり。守屋は今いふ番屋の事なり。件の兩人。取りてもて名とせり。續紀。光仁紀云。天應元年。五月甲戌。伊勢國言。鈴鹿關城戸(キト)。幷守屋四間。始ニ十四日一至ニ十五日一。自響不レ止。其聲如ニ以レ木衝一レ之。これなり。抑守屋。蝦夷。入鹿等は逆臣なり。しかれども。爾後同名の者多かり。後世嫌忌の甚しきには似ざるものなり。「押勝」にも亦同名あり。河内馬養首押勝。欽明紀 藤原惠美朝臣押勝。廢帝紀 この他。天武紀に。縵造。忍勝あり。押勝。忍勝同訓なれども。假名は異なり。こは同名にはあらず。「清麻呂」も。同名四人あり。田口朝臣清麻呂。續紀卅八。桓武紀。一本作ニ淨麻呂一 大中臣朝臣清麻呂。同卅。孝謙後紀 石川朝臣清麻呂。同卅三。光仁紀 和氣朝臣清麻呂。孝謙後紀。光仁紀。桓武紀 殘缺後紀。桓武紀。この中。和氣氏のみ。婦幼にもしられしは。精忠當時に凜然たればなり。「家持」も亦二人あり。

小治田朝臣宅持 續紀三。文武紀 大伴宿禰家持。同卅八。桓武紀「黒主」にも同名あり。池田朝臣黒主。類聚國史九十九。弘仁中也 節婦春部君黒主女。同書五十七 これに大伴宿禰黒主を加へて。三人なるべし。「猨(サル)」にも亦同名あり。許勢臣猿。書紀十九。欽明紀 柿本朝臣猨。同十九。天武紀。續紀四。元明紀 これに猿丸大夫を加へて。三人なるべし。猿丸大夫が事未レ詳。一説に。柿本朝臣猨。是その人なりといへれど。定かならず。字比麻奈備に辨あり この他。土蜘蛛打猨。書紀七。景行紀 紀朝臣猿取。類聚國史六十六。紀朝臣四上之祖父也 あり。神紀に。猿田彦神。猿女の君あり。「貉(ムジナ)」にも同名なり。石川朝臣虫名。天武紀 刑部直虫名。光仁紀 この他。仁明天皇の嘉祥二年。七月廿九日の劵書に。辛國虫名女。好古日錄上卷 あり。「雷(イカツチ)」にも同名あり。小子部雷。書十紀四。雄略紀。雷初名蜾蠃。七年秋七月。詔使ニ蜾蠃捉ニ三諸岳神一。蜾蠃乃捉ニ神蛇一以獻レ之。于レ時雷虺虺々。天皇慴而避ニ諸安殿一。因改ニ蜾蠃名一爲レ雷 坂田公雷。同廿九。天武紀「正月(ムツキ)」にも同名あり。中臣連正月。書紀二十五。孝德紀 正月王。又作ニ牟都岐王一。光仁紀。桓武紀。殘鈌紀桓武紀 この他。萬葉集第十六に。大舍人。巨勢朝臣豐人字正月麻呂。といふ者見えたり。「虫」をもて名とせしものの多かる中に。粟田臣飯虫。書紀廿五。孝德紀 阿倍朝臣粳虫。續紀十一。聖武紀 は。その名雅致(みやび)たるにあらねども。意味おもしろし。こは孔子

り。この他。藤原朝臣鷹養。（續紀三十孝謙後紀）阪上忌寸犬養。（同廿五廢帝紀）忍海原連魚養。（同卅九桓武紀）あり。この類なほあるべし。

老（オユ）子老（コオユ）大人（オトナ） などいふ名も多かり。氷連老。（書紀卷廿五。孝德紀）間人連老。（同紀）紀臣大人。（同廿七天智紀）三輪君子首。（同廿八天武紀）羽田公大人。（同紀。矢國之子）大神君子首。（同廿九天武紀）平群臣子。（同紀）宍人造老。（同上）河邊君子首。（同上）調忌寸老人。（同卅。持統紀。按。續紀卷一。文武紀。作調伊美岐老人。蓋同人也）田邊史首名。（持統紀。又見文武紀）道公首名。（續紀六。元明紀。同八。元正紀。按。印行續紀。文武紀。脫公字。其他作道君首名。續日本後紀卷四。承和二年。春正月癸亥。左京人。遣唐史生。道公廣持。賜姓當道朝臣條下。作道公首名。）路眞人大人。（同二。文武紀）紀朝臣音那。（同五。元明紀。右大臣。大伴宿禰御行妻也）阿倍朝臣首名。（同紀）巨勢朝臣首名。（同十二聖武紀）穗積朝臣大人。（同紀）矢田部老。（同廿五。廢帝紀）榎井朝臣子祖。（同卅三光仁紀）大中臣朝臣子老。（同紀）村國連子老。（同紀）伊勢朝臣老人。（同四十。桓武紀。老人光仁紀作子老。未知孰是）文室眞人子老。（同卅四。光仁紀同四十。桓武紀）石川朝臣乙名。（同四十。桓武紀。殘缺後紀八。桓武紀）廣井宿禰弟名。（續日本後紀四）通計（大人十一人。老四人。老人二人。子老七人。子祖一人）この他猶あるべし。按ずるに。老は。孝德紀。間人連老の下に分注して。老此云於喩とあれば。いづれもおゆと讀むべし。大人は。おとなと讀むべし。印行の書紀。及續紀に。大人を。ウシ。老人を。オキナヒト。と傍訓（かなつけ）たるはたがへり。首名音那。乙名。弟名。みな大人の假字なり。老人は。おきなと讀むべきにやとおもふに。翁と書きたる人名なければ。是をもおとなと讀むべし。子首は。小老の假字なるべければ。子老にひとしく。こおゆと讀むべし。首名を大人に假りたるよしは。姓の首を。おほと、讀むにより。ほを省き。名字を加へて。おとなと訓じたり。この時世は。俗にいふ萬葉假名の行はる、をもて。人名にも。異字同訓のもの多し。且假名遣ひの正しきを見るべし。

かされていふ。天武紀下に。忌部首首（おゆ）といふ者見えたり。印本に。名の首には。カウベと傍訓たるはたがへり。こも前に錄せし子首に準すれば。老の假字なるべし。又元正紀に。高田首久比麻呂あり。この久比は咋の假字なるべし

又按ずるに。萬葉集第六に。大貳。小野朝臣老。及神社忌寸老が歌あり。第十六に。吉田連老といふ者見えたり。この類の名。彼書にて猶多かり。（忌部首首と共に又四人。老は通計八人なり）

沙彌麻呂 にも。同名六人あり。佐伯宿禰沙彌麻呂。（續紀六。元明紀）阿倍朝臣沙彌麻呂。（同十三聖武紀）土師連沙彌麻呂。（同廿三。廢帝紀）縣犬宿禰沙彌麻呂。（同紀）山口忌寸沙彌麻呂。（同三十。孝謙後紀）昆解（トコロ）宿禰沙彌麻呂。（同卅八。桓武紀。延曆四年。五月戊戌。）

は。貉おじななり。（石川朝臣虫名。見二天武紀一。刑部直虫名。見二光仁紀一）［佐留サル］は。猨なり。柿本朝臣佐留。見二元明紀一）［牟後閇ムゴベ］は。齊むこべ也。（波多朝臣牟後閇。見二文武紀一。持統紀作二羽田朝臣齊一。分注云。齊。此云牟五閉［武智麻呂ムチマロ］は。藤麻呂也。（左大臣。藤原朝臣武智麻呂。見二聖武紀一。武智讀爲二多計智一者非。藤原朝臣藤。見二續後紀卷十七一。蓋別人也）［伊多智イタチ］（又作二伊達一）は。鼬鼠いたち也。（佐伯宿禰伊多智。見二廢帝反孝謙後紀一）［刀良トラ］は。虎なり。（秦刀良。見二孝謙後紀一。生部虎。見二持統紀一）［勝雄カタチ］は。堅魚也。（石上朝臣勝雄。見二聖武紀一。是後。同名者多有）［作良サクラ］は。櫻なり。（紀朝臣作良。見二續紀桓武紀一。佐良王。見二殘缺後紀。桓武紀一。藤原朝臣櫻麻呂。見二嵯峨天皇紀一）［福良フクラ］は。袋なり。（淡海眞人福良麻呂。見二類聚國史卷三十五一。節婦福良女。見二同書卷五十四一）この他なほあり。さのみはとて省きつ。近世の草紙物語にも。西行法師の俗名。佐藤憲清を。義清。則清とも書き。曾我五郎時致を。時宗とも書たる。この類多かり。これも亦。言語を旨として。字義に拘らざりし。いにしへの遺事にぞありける。○古書を讀むに。時世は定かならずとも。人の姓名によりて。その時世も。大かたは推しはからる、ものになん。さればいにしへの人の名を今より見れば。異なりとおもへども。當時は。その名を同じうするもの、いと多なるも。今人の名に。某右衞門。某兵衞など。同鄕合壁に。同名のもの多かるをもて。推してしるべし。大約六史に見はれたる。搢紳に。同名多かる中にも。［馬養ウマカヒ］は。巨勢朝臣馬飼。書紀天武紀下 伊與部連馬飼。持統紀。又文武紀。四年六月條下。作二馬養一。浦島子傳作者 藤原朝臣宇合。續紀卷八。元正紀。養老三年。正月壬寅條下。作二馬養一。其他作二宇合一。宇合卽馬養假字。俗讀爲二乃記安比一者非 小野朝臣馬養。續紀八元正紀 文忌寸馬養。續紀十三聖武紀 調連馬養。同上 猪名眞人馬養。續紀八。元正紀。猪名。又作二爲奈一 粟田朝臣馬養。同紀 船木直馬養。續紀卅三光仁紀 この他猶あるべし。［牛養ウシカヒ］といふ名も亦多かり。都努朝臣牛飼。書紀。天武紀下 多治比眞人牛養。續紀十三。聖武紀。同十九孝謙前紀。作二多治比眞人犢養一。蓋同人也 大伴宿禰牛養。同紀 大田部連牛養。同紀 守部連牛養。續紀十四聖武紀 土師宿禰牛勝。同上 紀朝臣牛養。同廿三廢帝紀 春日連牛養。同紀。本姓達沙氏。天平寶字四年。五月丙申。賜二姓春日連一 弓削宿禰牛養。同二十八孝謙後紀 牛養牛勝。同訓にはあらねども。類をよせてこゝに載せた

十年。夏四月庚申。任二備前守一　柿本朝臣市守。天平廿年。二月己丑。叙二外從五位下一。本位正六位上。孝謙紀。天平寶字元年。六月壬辰。任二安藝守一。五年。冬十月壬子朔。補二主計頭一。廢帝紀。天平寶字八年。春正月乙巳。叙二從五位上一。　柿本朝臣小玉。天平九年。十二月丁亥。叙二外從五位下一。本位正六位上。孝謙紀。天平勝寶二年。十二月癸亥。叙二外從五位上一。　續日本後紀に。柿本安永。卷十二。承和九年。十月丁丑條下云。諸司有二柿本安永者一。利口之人也。自憑二口佞一云々。　文德實錄に。柿本朝臣枝成。見二卷三一。仁壽元年。十一月甲午。叙二從五位下一。本位正六位上　通計七人なり。これに柿本朝臣人麻呂を加へて。八人とすべし。又。[人麻呂]に。同名多かり。續紀聖武紀に。阿保連人麻呂。卷十七。四丁左右。五丁右　陽侯史人麻呂。卷十七。廿三丁左　孝謙紀に。阿倍嚴臣人麻呂。卷十八。三丁左　石川朝臣人麻呂。卷十八。廿八丁右。卷廿九右。十三丁右。卷三十四。九丁左。十六丁左　光仁紀に。加茂朝臣人麻呂。卷卅一。卅丁左。卷三十三。六丁左。卷三十七。廿八丁左。卷四十。二丁左。四十丁左。桓武紀に。出雲臣人麻呂。卷四十。五十三丁左　續日本後紀に。文部人麻呂。卷九。六丁左　伊蘇志臣人麻呂。卷四。六丁左卷　類聚國史に。佐伯宿禰人麻呂。卷六十六。五丁左　通計九人なり。これに柿本臣人麻呂を加へて。十人とすべし。又小說に。惡七兵衛尉景清が女人丸あり。かゝれ共。獨柿本人麻呂のみ名たゝるは。詠歌の德なり。但史に漏れたるを。遺憾とするのみ。以下係二于人名一　國史に見はれたる人名は。眞名假名。打ちまかして書きたる多かり。そが中に。宇合（うまかひ）は馬養（うまかひ）。不比等（ふひと）は史（ふひと）。史讀爲二文人一。又姓氏職名之訓なり　史。皆同なるべきよしを。前輩いへり。唯是のみならず。[身挾（ムサシ）]身刺（ムサシ）は武藏なり。（三輪君身挾。見二雄略紀一。蘇我日向。字身刺。見二孝德紀二）[赤尾（アカヲ）]は鯡魚也。（吉備赤尾。見二雄略紀二）[鹿父（カブ）]は。家尊なり。（菱城邑人鹿父。見二仁賢紀一。分注。鹿父人名。俗呼レ父爲二柯曾二）[飽田（アクタ）]は。芥なり。（麁木妻飽田女。見二仁賢紀一。粟田朝臣飽田麻呂。見二續後紀二）[尾輿（ヲコシ）]は。膡（音朕。和名乎古之。今俗曰二乎古善二）なり。（大連物部尾輿。見二欽明紀一。此他。有乙作二興志一男聿志一者甲。皆鱗假字。）[稻目（イナメ）]は。黎明（いなのめ）なり。（大臣蘇我稻目。見二欽明紀一）[瓊缶（ニヘ）]爾閉（ニヘ）は。鮸（にべ）（和名鈔。鮸音免。辨色立成云。仁倍。一云久智）なり。（河内臣瓊缶。見二欽明紀一。阿倍朝臣爾閉。見二元明紀一）[久僧（クソ）]は。屎なり。（錦織首久僧。見二推古紀一。此他。名レ屎者多有レ之。乃集二錄左方二）[入鹿（イルカ）]は。鯆䱸（いるか）（浮布二音。和名伊流可）なり。（蘇我臣入鹿。更名鞍作。見二皇極紀一。是後同名者多有）[頰垂（ホタル）]は。螢（ほたる）火なり。（阿曇連頰垂。見二齊明紀一）[赤兄（アカエ）]は。紅（あか）鰕（えひ）なり。（左大臣蘇我赤兄。見二天武紀上一）[虫名（ムシナ）]

原太政大臣之女所生。特賜不死。勝寶八歲。安宿王。黃文王。謀反。山背王陰上其變。高野天皇嘉之。賜姓藤原朝臣。名弟貞。かゝれば弟貞卿の藤原氏なるは。母氏の姓なり。こは皇別の藤氏といふべし。

〔源氏〕は。嵯峨天皇よりこなた。文德。清和。光孝。宇多。醍醐。村上。花山。三條の數流あり。しかれども中葉より。清和の一流紛員たり。これも亦。おのづからなる威德なるべし。源氏は。與天子同源といふ義を取りて。命せられたりとおもほゆ。北史。（第十六卷）列傳。（第十六）源賀傳云。源賀。西平樂郡人。私署河西王禿髮傉檀之子也云々。太武素聞其名。及見器其機辯。賜爵西平侯。謂曰。卿與朕同源。因事分姓今可為源氏。といへるによざし給ひしならん。又。按ずるに。續紀。（十二）聖武紀。天平八年。十一月丙戌。從三位葛城王。從四位上佐為王等。請姓表曰。賜姓命氏。或眞人。或朝臣。源始王家。流終臣氏。同書。（十八）孝謙紀。天平勝寶三年。二月己卯。典膳正。正六位下。雀部朝臣眞人等。請改其祖巨勢大臣。為雀部大臣。疏曰。遂骨名之緒。永為無源之氏。望請云々。これらはやく。姓源の故事を取りたり。ついでにいふ。（三代實錄。陽成紀。元慶八年。二月廿三日の敍位の條に。散位從四位下源朝臣平といふ人見えたり。その姓名。かくても紛はしからざりしにや。續日本後紀第十七卷に見えたる。藤原朝臣藤も。亦この非なり）清和に亞きて嵯峨。宇多。村上の三源も。俗に知られたる多かり。こは。渡邊。佐々木。赤松等。夥軍書にあらはれたればなり。源氏は。皇子に。必命ぜらるゝ氏なれば。花山。三條以後なるも。なほ多からん。考ふべし。

〔柿本氏〕は國史に見はれたるも多かめれど。人麻呂は漏れたり。只その考据とすべきものは。萬葉集のみ。その時世は。淨御原の朝（天武）より見えて。藤原宮の季（文武）。迄にあり。平城の朝（元明）に曁ばざりし事。萬葉集第二にてしらるゝ、と宇比麻奈備（卷之上一）にいへり。柿本氏は。新撰姓氏錄（第七卷。大和國皇別）に。天足彥國押人命之後也。敏達天皇御世。依家門有柿樹。為柿本臣。といへり。初は臣の姓なりしに。天武天皇十三年。十一月戊申朔。大三輪君等。五十一氏とゝもに。朝臣の姓を賜ふよし。書紀（卷二十九）に見えたり。さて柿本氏の。國史に見はれたるを檢するに。天武紀に。小錦上（小錦上冠位也）柿本臣猨。（見十年十二月條）續紀。元明紀に。從四位下。柿本朝臣佐留。（和銅元年。夏四月壬午卒。猨。佐留。乃同人。）聖武紀に。柿本朝臣建石。（神龜四年。正月庚子。敍從五位下。）本位正六位上柿本朝臣濱名。（天平九年。九月癸巳敍外從五位下）

月十五日壬辰。山城守。從五位上。與我王男。安平。篤行。有本。內行。潔姬、等五人。賜㆓姓平朝臣㆒ この三家は。桓武以外の平氏なり。これのみならず。平氏は桓武の庶流なれども。葛原親王の子孫ならざるも亦多かり。萬多親王（桓武天皇子。葛原親王弟。新撰姓氏錄撰者）の子。正躬王の男。諸姪等十五人。

三代實錄卷六。清和紀。貞觀四年。夏四月廿日戊午。勅參議正四位下。行彈正大弼。正躬王男。散位從五位下。住世王。无位繼世王。基世王。家世王。益世王。是世王。經世王。侚世王。行世王。故從四位上。正行王男。高蹈王。高居王。故從四位下。雄風王男。定相王等十五人。賜㆓姓平朝臣㆒。先㆑是正躬王抗㆑表曰。云々。竊見㆓宗門㆒。賜㆑姓者多。臣意所㆑欣在㆓平朝臣㆒。請除㆑非㆓女子所㆒㆑有。男兒皆賜㆓平朝臣㆒。亦復諸姪等希㆓望之㆒。同預㆓於此㆒矣云々。至㆑是許㆑之

賀陽親王（桓武天皇子。葛原親王弟）の後。辛身王。（同書卷廿四。貞觀十五年。九月廿七日己丑。左京人辛身王。賜㆓姓平朝臣㆒。賀陽親王之後也）仲野親王（桓武子。葛原。萬多兩親王弟）の孫。茂世王の子二人。好風。貞文。（同書卷。廿六。貞觀十六年。十一月二十一日丙午。從五位上。守刑部卿。兼行加賀守茂世王。上疏請㆑賜㆓男從五位下好風等姓㆒曰。云々。伏望件好風貞文二人。賜㆓姓平朝臣㆒。云々。詔許之。）萬多親王の孫。正行王の子。高平。（同書卷三十二。陽成紀。元慶元年。三月廿七日癸巳。無位高平王賜㆓姓平朝臣㆒。贈一品萬多親王孫。正四位下。正行王之男也。）賀陽親王の孫。潔行王。（同書三十四。元慶二年。十二月廿五日丙戌。無位潔行王。賜㆓姓平朝臣㆒。二品賀陽親王男。從四位上利基王之子也）雄風王の男。平朝臣定相の弟。有相王。（同書卷三十七。元慶四年。正月廿六日庚辰。左京人。文章生。無位有相王。賜㆓姓平朝臣㆒。從五位下。越中介。平朝臣定相之弟也）仲野親王の曾孫。遂良王。（同書卷卌五。元慶八年。三月八日己巳。無位遂良王賜㆓姓平朝臣㆒。仲野親王孫。從四位上潔世王之子也）おなじ親王の裔。安典王。（同書卷四十七。光孝紀。仁和元年。二月八日甲寅。無位安典王賜㆓姓平朝臣㆒。故二品仲野親王之後。從四位上。輔世王之子也）

大凡この諸平は。葛原親王の子孫にあらず。かゝれども入道相國。（淨海）及北條氏。織田氏。兵馬の權を執りて。海內を武斷せしかば。よにこの平氏の多かるも。おのづからなる勢なるべし。萬姓の中。その文字の優美なる。源平兩朝臣にますものなし。平朝臣は。平安宮の平をとれり

藤原氏 にも。鎌足公の子孫ならざるあり。藤原朝臣弟貞卿是なり。續紀廿四 廢帝紀。天平寶字七年。冬十月丙戌。參議禮部卿從三位。藤原朝臣弟貞薨。弟貞者。平城朝左大臣。長屋王子也。天平元年。長屋王自盡。其男從四位下膳夫王。無位桑田王。葛木王。鉤取王。皆經。時安宿王。黃文王。山背王。幷女敎勝。復合㆓從坐㆒。以㆓藤

天神。藤原朝臣。云々。大中臣朝臣。云々卷十二。左京神別中天神。大伴宿禰云々。佐伯宿禰云々。同卷。天孫。出雲宿禰云々。入間宿禰云々。卷十六。地祇。石邊公云々。狗人野云々。卷十七。地祇。吉野連云云。大神朝臣云々と錄したり。この外に。天神。地祇。天孫といふ姓氏あることを聞かず。かばねと姓は。異なるものにしたまひしと。天神。地祇。天孫を姓なりと見給ひしは。またく千慮の一失にもやおはすべからん。又。按ずるに。[大神ノ朝臣]を。オホカと傍訓(かなつけ)たるはたがへり。おほみわのあそんと讀むべし。書紀には。大三輪と書けり。神ノ朝臣。神社氏もこれにおなじ。新撰姓氏錄第十七卷曰。大神ノ朝臣。素佐能雄命六世孫。大國主神之後也。初大國主神。娶二三島溝杭耳之女。玉櫛姬一。夜未レ曙去。不二曾晝到一。於レ是玉櫛姬。績レ苧係レ衣。至レ明隨レ苧尋覓經二於茅渟縣陶邑一。直指二大和國御諸山一。還視二苧遺一。唯有二三縈一。因レ之號二姓大三縈一。又大和國城上郡の鄕名にも大神あり。これをば於保無知と唱ふ。和名鈔卷之九 おほむちは。おほなむちの中略なり。[平氏]は軍書に記すもの。桓武の皇子。葛原親王の子孫ならざるはなし。

新撰姓氏錄。編末追加云。桓武天皇男。一品式部卿。葛原親王一男。大學頭從四位下高棟王。天長二年閏月。賜二平朝臣姓一。貫二左京一。貞觀九年五月。至二大納言正三位一薨。六十四歲。爾後高棟朝臣弟。無位高見王男。高望王。亦賜二姓平朝臣一。是平相國入道以下。諸平祖。

そが中に。ひとり高望朝臣の後。世にあらはる丶ものの多かり。累世軍功あればなり。世俗はこれによりて。平家といへば。葛原の後裔に限れりとおもへり。この故に考證す。平氏に數家あり。なほ源氏に數流あるがごとし。その祖皇を揭くるもの。桓武。仁明。文德。光孝の四帝是なり。延長八年六月廿六日。藤原朝臣清實卿と倶に。清涼殿にて震死せし。右中辨内藏頭。平希世朝臣は。仁明天皇の御子。本康親王の男。雅望王の子なり。おなじ親王の子。行忠王の男。佐幹王にも。平朝臣の姓を賜ひき。見二皇統紹運錄。及諸家大系圖第四卷。平氏譜一 又文德天皇の御子。惟彥親王の孫寧幹王も。平朝臣の姓を賜ひき。平寧幹に。惟世王男也。見二皇統紹運錄一 世にしられたる。歌人。平朝臣兼盛は。光孝天皇の御子。是忠親王の男。興我(こうが)王の孫なり。兼盛は。平朝臣篤行の男也。三代實錄。卷四十九。光孝天皇紀。仁和二年。秋七

へり。是上古の制度なり。姓氏の淵源は。班固白虎通[巻三]に論あり。明に至りて。王世貞宛委餘編十二[四部稿巻百六十七]に。千家姓を輯錄し。又その氏族の。沿革來由を辯じたり。正字通[丑集下]姓の下には。書禹貢。毛詩。左傳。前後漢書。唐書を引據し。氏の下[辰集下]に。漢書。說文。風俗通。六書故を引きて詳に釋きたれども。姓と氏の差別定かならず。畢竟。秦。漢以來。萬姓おのが隨にして。姓の外に氏なく。氏の外に姓なければ。本邦の姓氏とその義異なり。かゝればこゝに引くも要なし。秦。漢以來の人の姓氏は。この土の苗字にひとしければなり。天朝は。姓と氏の差別正しくて。みな朝廷より賜はらざるはなし。氏は私に改むるものありしかど。それ將一字の損益も。上表して請ひまうし。免許を歷ざれば自由にせず。[多治比を。丹墀とし。大枝を大江にあらためたるが如し]亦是上古の制度なり。六七百年以降は。苗字といふものいで來つゝ。氏と苗字と混雜して。姓を唱ふることのなければ。姓氏はありてもなきが如し。しかはあれども。昔姓氏の正しきときにも。稀には姓のなきもあり。そは無姓者某と書きたり。三代實錄。[四十九]仁和二年冬十月の條下云。

三日戊午。勅无レ姓者。其名清實。賜二姓滋水朝臣一。貫二右京一條一。これなり。清實元來姓なきにあらず。十ヶ年以前。罪ありて。屬籍を削られ。その身庶人になりしかば。姓氏なし。この日賜はりし。滋水は氏なり。朝臣は姓なり。又聞見のまゝ記錄するに。姓氏のしれざるものは。不知姓某と書くことあり。中右記。[大治五年。十一月の條]廿三日云々。常陸清原近宗。安房不知姓實信云々是なり。右に見えたる。清原は氏なり。清原氏は。眞人の姓なれども。この時世は。苗字を唱ふるものも多くなりしかば。氏のみ唱へて。姓を省くが恒になりぬ。愚意かくの如くなれども官祿なきもの。及家譜連綿として。正しきものにあらずは。姓を書くことは憚るべし。庶人は昔も姓なし。又。按ずるに。拾芥鈔。[中巻之上]無レ戸姓と題したる。五十六氏の中に天神一地祇二天孫一といふ姓あるは心得がたし。こは實熙公。ゆくりなく。姓氏錄の神系を。見損じ給へる歟。何となれば。姓氏錄に。神別と題せしは。神世より別れたる姓氏なり。その神別にも。天神より別れたるあり。地祇より別れたるあり。天孫より別れたるあり。これを亦分たん爲に。卷十一。[左京神別上]

造の國は。國學なり。造は成士なり。又大領（此云美安通加利）にも通へり。孝德紀に。少領をスケノミヤツコと訓じたるに據るべし。類聚國史。（卷廿五。帝王部）延曆二十一年十二月庚寅。鎭守軍監。從五位下。道島宿禰御楯爲大國造。大國造は大領なり。大領は。國司に隷かず。職員令第二云。大郡。大領一人。掌撫養所部。撿察郡領事。餘准此。少領一人。掌同大領。是なり。續日本後紀。承和五年云々。嘉祥二年。閏十二月庚午。先是。紀伊守。從五位下。伴宿禰龍男。與國造。紀宿禰高繼不愜。云々。この詔に。國造。非國司解却之色。而輙解却矣。云々。と譴めさせ給ひし事あり。令に。大少領は。國司に隷くものならざればなり。これ亦不征於司徒。といふものに近し。これらによりて。國造と伴造は。その威柄の同じからざるを知るべし。大約造は。國造が本なり。その美稱を取りて。姓にも命けられたるなり。[姓の和訓]かばねなるに。拾芥鈔（上末）に。姓尸と書き給へる。又無尸姓などいふ事も見えたり。尸をシカバネとよむによりて。こゝにはカバネと訓ずるにや。姓とかばねは異なりと思ひ給ひし。訛舛は。はやく秋草（卷之上。姓名部）に。論はれたれば。更にもいはず。今按ずるに。カバネに尸字を書きたるは。後人の所爲なれども。そのよしなきにあらず。姓の和訓。かばねのはねは骨ほねなり。（はとほと相通）續紀。（十八）孝謙紀。天平勝寶。三年二月己卯。雀部朝臣眞人が上疏に。骨名と書きたり。新撰姓氏錄の序には。氏骨と書きたり。骨字。氏字に。かの訓なし。こは義訓ならん。正しく姓の字訓にやとおもふは。景行紀に。美濃國造。名は神骨といふ者見えたり。（四年。春二月の條にあり）神骨は人の名なれども。姓の訓義を釋くを證据とすべし。姓を神骨といふよしは。天朝の萬姓は。神の御名より起り。又神世の職名をも取りて。姓とし賜へば。これを子孫に傳へたり。譬へば。人死すれば。その形體は土になれども。その骨はなほ遺れり。姓はその祖神の骨の如し。こゝをもて姓を神骨といふなるべし。又。髮骨の義ともすべきか。髮も亦骨と、もに朽ちざるものなり。この故に。姓に尸字を書くのみは。みな後人の所爲にしあれども。そのよしなきにあらずといふなり。又漢字のまゝに釋けば。姓氏又氏族と熟して。姓も族もその義一なり。天子賜姓命氏。諸侯命族とい

へなるべし。よりて君に直子を借りたり。又。按ずるに。姓の君。公。直を幾美と訓じ。官職の守。正。督。首を。加美と訓じたれども。その義は則一なり。きとかと通へり。きみも亦かみなり。守。正。督。首を。加美と讀むよしは。加美は。鑒なり。士庶の邪正を鑒みて。善政を行ふの義を取りて。加美といふ。即。鑒なり。姓の公。君。直も。この意を得て解すべし。繼體紀に見えたる。筑紫君磐井が如き。後世よりいへば。筑前筑後守磐井なり。姓の君は。君臣の君にあらず。廢帝のおん時に。君の姓を改めて。公とし給ひしは。君臣の君に。紛れ易きゆゑにてもあるべし。村主（スクリ）は總領（總領。此云須久利）なり。須久利は須布流なり。くとふと橫音通へり。りとると。五音亦通へり。書紀及續紀に見えたる。筑紫總領。吉備總領。周防總領。伊豫總領。みなスクリと讀むべし。天武紀なる總令所も。和訓須布流乃毛登なり。總領を。姓には村主に作りて。スクに村字を借りたるは。村落の意にて。スダクの中略ならん。主をリと讀むは。大物主の主の如し。ちとりと橫音通へり。村主は。紀伊國伊都郡の鄕名にもあり。これをもスクリとよむべき歟。和名鈔九には。村主の訓詁闕けたり。又。姓には。勝と書きたるもあり。これもスクリと讀むべし。總領。村主。勝。同訓にて。職官と姓族の差別あり。村主。勝は。假字なれども。同姓にはあらず。なほ公と直と同訓なれども。その姓は別なるが如し。縣主（アカタヌシ）は字の如し。主は首也。（首。此云加美）努之は猶加美といふが如し。造（ミヤツコ）は。官掌（官掌。此云美耶通加佐）なるべし。かこ相通ず。下略なり。又字義に由りて釋けば。みやはみやびの下略。卽秀なり。つは助辭なり。こか相通ず。かは。かどの下略。卽才なり。秀才を。此にはみやつこといふ。下なる禮記の文に照て見つべし。又職の造に二色あり。國ノ造。伴ノ造是なり。伴造は。部ノ官奴なるべし。令義解篇目云。官奴正。（太同三年。併二主殿寮）職員令云。官奴司。正一人。掌二官戸奴婢名籍一。義解云。依二戸令一。官戸奴婢。每年本司色別。各造二籍一通一。是なり。みやつこに造字を借りたるよしは。禮記（第四）王制云。司徒論二選士之秀者一而升二之學一曰二俊士一。升二於司徒一者。不レ征二於鄕一。升二於學一者。不レ征二於司徒一曰二造士一。註。不レ征。不レ給二其繇役一也。造成。云々といへるに合へり。今この義の隨に釋けば。國

國。竹野郡の郷名に。間人あり。（訓詁逸）右の間人を。傍訓（かなつけ）刻本の書紀。及姓氏錄。和名鈔に。ハシウトと傍訓たるはたがへり。これをもマヒトと讀むべし。ふるくは人名に。間字を。ハシと讀みたる例なし。譬へば。天戸間見命。（天津彦根命の子なり）御間城入彦五十瓊殖尊。（崇神天皇のおん諱なり）すべて間ノ字を。まと讀みたり。まはひまの上略なり。姓の眞人をもて推せば。間人も賓の假字なるべし。又按ずるに。宿禰も亦人名にあり。姓氏錄に。大足尼命は。高魂命十二世の後なりといへり。只是のみならず。允恭天皇のおん諱を。雄淺津間稚子宿禰とまうしき（稚子宿禰は。今俗に。若之助といふと同意なり）應神紀に。小泊瀨造祖。宿禰臣あり。臣は姓。宿禰は名なり。應神十二年に。名を賢遺臣（かしこのこりおみ）と賜ひし事。同紀に見えたり。仁德紀に。飛驒國有二一人一。曰二宿儺一。其爲レ人。一體有二兩面一。各相背。項合無レ頂云々。（仁德天皇六十五年の條下に見えたり）持統紀に。佐味朝臣宿那あり。（三年。六月の條下に見えたり）ねとなと通へり。宿儺も宿那も。宿禰と同名なるべし。第四［忌寸（イミキ）］第八［稻置（イナキ）］は。未レ詳。且試にいはゞ。忌寸は歸化（いむけ）（歸化。此云伊無計。言到向也）なるべき歟。この姓は諸蕃に多かり。猶よく考へて。復釋くべし。右八性の外

に。姓氏錄に載せたる姓。首。直。村主。縣主。造等あり。枚擧に遑あらず。そを又ひとつふたついはん。（再按。古語拾遺曰。淨御原朝。改二天下萬姓一。而云々。其四曰二忌寸一。以爲二秦漢二氏及百濟文氏等之姓一。これらによりても。忌寸は歸化にていりむかふの義なるべしとおもへり）［首（オホト）］は大人（大人。此云於保止）なり。人に君父あること。猶身體に頭首あるが如し。よりて大人に。首字を借りたり。是義訓なり。大人は。人名に多かり。（末にあらはす）［直（キミ）］は君なり。君は公と通用す。直は正也。君は猶正（カミ）（正。此云加美）といふが如し。これも亦義訓なり。さるを昔より。姓の直を。價直の直と謬り見て。なべてアタヒと讀み來れり。そを悞とする明證は。新撰姓氏錄。（第五卷。右京皇別）佐伯直の條下にあり。姓氏錄云。（提要）伊許自別命云々。以レ狀復命。天皇（應神）詔曰。宜二汝爲レ君治レ之。卽賜二針間別佐伯直姓一也。（佐伯者。前賜レ姓）直謂レ君也。と注せしを見ば。余が言の誣ひざるを知らん。さるを。姓氏錄に訓詁を施ししもの。この條を何とかよみけん。直には。みなアタヒと傍訓せり。思はざること甚し。又この姓の君に直字を借用せしは。公直無私の義を取れり。直は正なり。萬事正直にして。公ならざるはなし。又。彼君子。持二直道一（直道公道也）而行者也。といへるこゝろば

又。按ずるに。大臣は。成務天皇の御宇にはじまりて。舒明。皇極の御宇まで。おほおみと唱へたるなめり。かくて孝德天皇。はじめて左右の大臣を置かせ給ひしかば。後には便宜に隨ひて。漢音に呼び倣ししならん。和名鈔官職部に。大臣を。於保伊萬宇智岐美と訓じたれども。正しき和名なるべしとは聞えず。何となれば。無と萬と通へり。志と智と横音亦通へり。萬を音便にて萬宇と引き。羅を省きたるごとく聞ゆれば。於保伊萬宇智岐美は。大連公と。和訓おなじきに似たり。玉加都麻に。まうちきみは。麻閉都岐美なるを云々といへれど。なほ詳ならず當初。大連と大臣の美稱を被させ給ひしとき。彼も此も。おなじ唱にはあるべからず。萬宇智の義は。いまだ詳ならねども。ふるくは。大臣の和名ならざる事疑ふべからず。

和名鈔に。太政大臣を。於保萬豆利古止乃於保萬豆岐美。大納言を於保伊毛乃萬宇須豆加佐と訓じたり。和訓を旨とせし世なりとも。かうながく〱しき唱にては。恒の稱呼に便なからん。よりて前輩も。職名の和訓は。後につけたるなるべしといへり

又。按ずるに。眞人は姓より前に。氏にあり。又人の名にもあり。用明天皇の皇后を。穴穗部間人皇女と申しき。書紀。用明天皇元年。及推古天皇元年。夏四月の條下に見えたり穴穗部は。その乳母の姓なるべし。いにしへは。乳母の姓を取りて。皇子皇女に名つけ給ひしなり間人は皇后のおん諱なり。又。推古紀に。間人連鹽蓋といふ者見えたり。十八年。冬十月。新羅。任那の使。入京の條下にありこは間人は氏なり。連は姓なり。孝德紀に。間人連老あり。五年。春正月の條下に見えたり間人連は。姓氏なり。老は名なり。この三間人は。天武天皇。眞人の姓を作りて。皇親に賜はりし已前にあり。是より下は。天武紀に。粟田朝臣眞人あり。十四年。五月の條下に見えたり粟田朝臣は姓氏なり。眞人は名なり。當時天皇のおん諱を。天渟中原瀛眞人とまうしき。しかれども。當朝。眞人の姓を制作して。これを皇親に賜はり。且その臣下に。眞人を名とするものあり。この時。いまだ至尊のなん諱を避けよといふ。制度なければなり。この後。續紀。孝謙紀に。雀部の朝臣眞人あり。天平勝寶三年。七月の條下に見えたり雀部朝臣は姓氏なり。眞人は名なり。是のみならず。新撰姓氏錄。第二卷。第六卷に。間人宿禰間人造の姓を出だせり。間人は氏なり。宿禰造は姓なり。和名鈔。國郡部丹後

大汝ニ並同訓の義稍相近しは。猶大連といふがごとし。大國主と書きたる。こも假字ながら。そこの神しばらく。天下を管領したまひしかば。大守の義なり。よりて後世。親王の任國を大守と唱ふ。諸臣の守たるものに。大ノ守を冠することを許させ給はざるは。もとこれのよしなり。か丶れば大連はその任重く。連はその姓高貴にあらず。後世の制度に。國守は。五位六位の人。これに任せらる丶をもてしるべし。又姓の連は後にして。職の大連は先なり。大連は。大己貴におなじ。この號神世よりあり唯姓と職のみならず。連は人名にもあり。天智紀に。大臣蘇我臣連子あり。天武紀に。馬飼部の造。漣あり。是なり。允恭天皇の御宇より。以來。數朝大臣と大連を。執政の美稱にしたまふものから。連とのみいへば。守護の義なり。大連と同じからず。この故に天武の制。連の姓は。迺に宿禰の下にあり。大己貴。少彦名を姓源とせば。大連の姓は。宿禰の上にあるべき理なるに。さもなきは。太守と守護との等あればなり。物主。少那は。後世の守と介の如しむらじに連字を借りたるは。連比屬續の意なるべし。秀實は。連帥の連として。大連は武官。大臣は文官ならんといへり。文武の差別はとまれかくまれ。連帥の辨は字義なり。從ふべからず。又前輩の説に。連は村主なるべしといへり。甚しき誣罔ならずや。

ついでにいふ。大物主命を。オホモノヌシノミコトと讀み。大國主命をオホクニヌシノミコトとよむは非なり。大物主も。大國主も。すべておほなむちとよむべし。その明證は。新撰姓氏錄に。大物知命と書きたり。譬へば。姓い村主(すぐり)の主を。りと訓じたれば。大物主。大國主の主も。りの音なるをらに通はして。讀むべき理なり。さて。もとむとかよへば。物主はむちなり。こともと橫音亦かよへば。國主はもちなり。大をおほなとよむ。なは大きなるの略辭なり。こ丶には大ノ字に。なるのなをこめて唱ふ。是讀則なり。姓氏錄第十三巻に見えたる。姓の大國主も。おほなもちと讀むべし。古事記に。大國主命。亦名大穴牟遲命。亦名謂ニ葦原色許男神一といへり。これに由れば。大國主と大穴牟遲は。その訓異なるごとく聞ゆれども。そはかの一説のみにこそあらめ。大物主命に。おほものぬしと假名つけたるは非なり。從ふべからず

よりてすくゐを。すくねと唱ふ。卽すけなり。この姓源は。少彥名命より出でたり。須久奈は補佐のよしなり。くとこと通へり。彥名は矮人(ひくな)なり。矮人。此云比久男 人をなといふよしは。大人をおとなといふが如し。この神の身體。いと細小なりければ。高皇產靈神の指間より。漏れ墮ち給ひしとぞいふなる。神紀一書の說なり 又少彥名命は。大己貴尊を佐けて。天下を經營し給ふにより。補佐矮人命(すけのひくなのきみ)。と稱へ奉りしなめり。亡友秀實が職官志を編めるとき。屢。吾廬を訪ひて。職名姓氏の實事などを。討論せしことありけり。そのをり秀實が說に。宿禰は宿衞なり。ゐとねと横韻通へり。後世侍從の官の如しといへり。余これを否して。さてはまたく漢語なり。古言に叶ふべくもあらず。猶考ふべしと答へたりき。かくて秀實沒して後。これらの愚考を得てしかば。こを彼友の在りし日に。えとき示さゞりけるを。いと〳〵遺憾とおもへり

蒲生秀實。俗字伊三郎。號二修靜菴一。下野宇都宮人。甞受二業於同鄉石橋鈴木翁一。後遊二學江戶一僑二居駒込吉祥寺門前一。復卜二居石町病坊一。著二九志一未レ成。文化十年癸酉秋七月五日沒。年四十七。葬二于根津龍興山。臨江禪寺一。所云。九志者。神祇志。山陵志。姓族志。職官志。服章志。禮儀志。民志。刑志。兵志是也。山陵志一卷。刻二於家一。其他稿本猶在。今不レ知レ落二於何人之手一。嗚呼可レ惜焉。

又。前輩の說に。宿禰。宿尼(すくね)。少名(すくな)。おなじ事なるべし。とのみいへるは定かならざるときざまなり。禰宿。又足尼とも書けり。いづれにまれ輔佐の假名なれば。異なるべくもあらず。しかのみいひては。何の事とも解しがたし。その人もいまだ考へ得ざればなるべし。第五 道師 は。字の如し。大和書師。黃書畫師。百濟畫師等の數姓あり。第六 臣オミ は。字の如し。君を神とし。臣を鬼とす。きとかと通へり。說苑辨物篇。其在レ家。則父爲レ陽。而子爲レ陰。其在レ國。則君爲レ陽。而臣爲レ陰。その義おのつから相合へり。 きみはかみ(かみ)なり。かみは陽なり。にとみと横音通へり。おみはおに(おに)なり。おには陰なり。蓋君臣尊卑の等なり。使主オミ も亦同訓なり。こは君臣佐使の意を借りて使主(おみ)とす。卽臣(おみ)なり。訓義は右に同じ。第七 連ムラジ は。守護(もり)。此云毛里 なり。大連は。大守なり。むともと通へり。らしの反りなり。なりを。ならしといふにてしるべし この姓源は。大己貴神より出でたり。大己貴 又作二大物主一。大國主一。古事記作二大穴牟遲一。萬葉集作二

心をこゝに苦めて。十の二三を考へ得たり。書紀廿九天武紀曰。十三年冬十月己卯朔。詔曰。更改二諸氏之族姓一。作二八色姓一。以混二天下萬姓一。一曰二眞人一。二曰二朝臣一。三曰二宿禰一。四曰二忌寸一。五曰二道師一。六曰レ臣。七曰レ連。八曰二稻置一。謹みて按ずるに。眞人マヒトは。賓まれひと賓此云末禮比登なり。まれひとを。まひと、いふは。辭の省けるなり。こは取乙與二賓天子一之義甲以命レ之。この故に。諸王。皇親ならざるものには。この姓を賜はらざりき。眞人は萬姓の上首なれども。後に朝臣の姓の殿ばら。累世執政たるにより。遂に眞人の上にあり。拾芥抄姓尸部に。朝臣を第一として。眞人を次に置くがごときこれなり よりて皇親諸王にも。朝臣の姓を賜はりて。眞人の姓は稀になりぬ。第二朝臣アツミは。大臣なり。大臣。此云阿曾美 玉加都麻巻三に。かばねの朝臣は。吾兄臣あせをみといふ事なり云々といへり。こもよしあるべけれども。證文を引かざればこゝろえがたし。亡友蒲生秀實云。朝臣は大臣なり。大ノ字に阿の訓あり。あには大兄。あねは大姉なりといへり。この說に從ふべし。今按ずるに。神武紀に。大をあなと訓じたり。あなは。贊美のこと葉なり。漢文に。大哉といへるに。おのづから合へり 再按ずるに。成務紀曰。三年春正月癸酉朔。己卯。

以二武内宿禰一爲二大臣一也。先朝爲二棟梁臣一。今改爲二大臣一 是朝臣の姓源なるべし。何となれば。職には大臣。大連。姓には大忌寸。大宿禰。氏には。大中臣。大神など。大字を被かつけさせ給ふもあれど。貴姓の朝臣に朝大臣なきは。朝臣の朝は。大の義なればなり。又前輩の說に。朝臣は朝廷の臣といふ事にて。漢語より出でたり。後に和訓をつくるとき。朝夕の意を借りて。あさおんの反にて。あそんとよみたるなり。といひしは僻說なり。唐山にて朝臣といふは。朝廷の臣たるよしなり。朝臣の事は。蔡邕獨斷に見えたるを。はやくあるものに引きたり 姓の朝臣は。彼義と異なり。その文字は。漢の熟字を假りたりともいふべし。こゝには言語を宗とすなるに。字義に因りて釋くものは。みな傅會なり。又職の大臣は。和名類聚鈔。官職部に。於保伊萬宇知伎美と訓じたれども。こは後世の唱なり。和訓類林於部引二皇極紀一云。大臣於裒於美。玉加都麻。巻一にも亦云。大臣は。いにしへは。意富於美と唱へて。臣といふ尸に。大といふ言を加へて。たふとみたるなりといへり 第三宿禰スクネは。補佐輔佐此云須計なり。何となれば。くゐの反けなり。へんけを。へんくゐ。ほけきやうを。ほくゐきやうといふが如し ねとゐと横音かよへり。

唯駰が諫を得容れざるのみならず。兄弟不軌を作さんと圖るに及びて。宦者鄭衆等に誅滅せらる。清行菅家をもて。彼に比せざる事はさらなり。書は言を取りて。人を取らず。和漢に例多しといふとも。その引據する所。おのづから嫌忌に渉れり。菅家御こころに。愉しとし給はざりし事もありけん。善相公誤れるに似たり。惜哉

又。秦檜が事のちなみにいふ。宋に奸相諱佗冑あり。その毒惡。秦檜。賈以道と雛をなすものなり。この佗冑の佗ノ字。字彙。玉篇。正字通等に見えず。按佗當レ作レ佗。續字彙補。子集。補音義 佗字下云。又人名。宋韓佗冑。蓋取三論語託二六尺之孤一也。譌作レ佗

第廿九人事　姓名稱謂

近曾。姓氏を略解せしもの。吉田兼右卿の官職難義に。氏の事あり。白石翁の人名考に。訓詁の辨あり。安齋翁の秋草上巻にも。亦姓名の編ありて今古の差別を論じたり。この他。宇野鼎明霞。俗字三平。號二近江人が姓氏解名一辨髦録には。和漢の氏族を併論せり。異朝の事には精細なれども。天朝の姓族を釋くにも。漢ごゝろもてせしものなれば。僻事も亦多かり。かゝればその言多なるは。訛謬も少からず。その善きものは疎漏にして。なほ姓源を究むるに由なし。餘も亦前版燕石雜志に。名字の事を論じたれども。今さら思へば淺はかなりき。且誤れることなきにあらず。よりてふたゝび考證す。前にもおなじすぢなるを。復いふとしも思ふべからず

天朝の萬姓。その淵源邈なり。これを神紀(かみのよのまき)に考ふるに。或は神號より出でたるあり。連宿禰等これなり 或は職官より來れるあり。朝臣。直。村主。造等是なり 便是事物紀原。公式姓諱部曰下通暦泊帝王五運歴年記。人皇之後。有二五姓七姓十二姓紀一。則姓之始。疑起中於此上。氏族博考引二通志一。曰乙得レ姓受レ氏有三三十二類一。第一云々。第二云々甲者。亦この類なり。かゝれども唐山は。秦漢以降。その姓氏いたく。紊れて。本邦の姓(かばね)族と。その義異なり。天朝は中葉に。姓族の制度損益あり。さばれその唱を更め給はず。天武天皇の十三年冬十月。詔して。諸氏の族姓を八色に混し。廢帝の天平寶字三年十月。君の姓を改めて公とし。伊美吉を忌寸とし。光仁天皇の寶龜四年に。阿曾美を朝臣とし。文德天皇の齋衡三年に。又忌寸を改めて。伊美伎の姓を賜ふといふこれなり 今もなほその唱は。昔に異なるべくもあらねど。古言を解くこと容易からねば。これを定かに註するものなし。おのれ年來思ひを潛め。

し。よに神佛に佞するもの。名利外聞の爲にせざるは稀なり。こゝろ得られぬ所爲にこそあなれ。又これらのよしにはあらねど。一條禪閤は。菅家を屑ともし給はず。口つから云々。と人にも仰られしとかや。現にこの殿は。博學宏才。當時に獨歩し給へば。さおぼし召したるならん。しかれ共。才あるものは德あらず。百世に廟食し給ふ。菅公の神德には。禪閤劣り給ふなるべし。又讀史餘論壹上に菅家は是善の子なり。一說に天子のおん子なりといへり。しからば仁明のおん子にや。仁明諱は道康。仁明當レ作二文德一仁明のおん諱は正良なり公の諱を。道眞といへばなりと注せられたり。しかれども是より前後に。至尊のおん諱を避けざるも稀にはあり。且父祖の片名をつぐ事は。此御時より後なればおぼつかなし。吉備公の外に例もなく。儒家より出て、。大臣に上り給ひしかば。さる說などもいで來たるにや。またく證文なき事なり。按ずるに。文選斑固幽通賦云。矧沈二躬於道眞一。又張衡思玄賦云。何道眞淳粹兮。去二穢累一而票輕。後漢書。張衡傳注。唐章懷太子曰。道德之眞。謂二之道眞一。菅家の諱は。これらの文より取られたるなるべし

附けていふ。本朝文粹卷七。書部 昌泰三年十一月十一日。文學博士三善朝臣清行。與二菅相府一書云。清行頓首謹言。交淺語深者妄也。居レ今語レ來者誕也。妄誕之責。誠所二甘心一。伏冀尊閤特降二寬容一某昔遊學之次。偸習二術數一。天道革命之運云々。この書明年の氣運をいへり

明年即延喜元年なり。日本記略醍醐記。延喜元年辛酉大正月廿五日戊申諸陣警固。帝御二南殿一。以二右大臣從二位菅原朝臣一。任二太宰權帥一。以二大納言源朝臣光一。任二右大臣一。又權帥子息。各以左降

忠告をさく〳〵。菅家に致仕を勸めたる。もとも先見ありといふべし。さるを菅家の聰明なるも。竟に用ひ給はざりしは。その故あるべき事になん。愚按ずるに。後漢書。列傳四十二 崔駰傳。駰與二竇憲一書云。駰聞。交淺而言深者愚也。在レ賤而望レ貴者惑也。未レ信而納レ忠者謗也。三者。皆所レ不レ宜。而或レ踏レ之者。思レ効二其區區一。憤盈而不レ能レ已也。清行の簡牘は。これによりてかき起したり。趣あるに似たれども。彼竇憲は。漢室の外戚にして。位高く任重かりけるに。憲竇大后兄。大將軍その心ざま奸にして。いたく驕れり。

ニハ六十九云々。如件。今按。扶桑略記。村上天皇篇云。天徳四年庚申五月廿二日己丑。大納言従二位藤原朝臣顯忠。任右大臣。年六十三。故左大臣時平二男也そもそも顯忠公。よろづ節儉を旨としたまひしも。父大臣のうへに懲り給ひてなるべし。この事唐山にも。相似て。禍福の異なるあり。池北偶談巻十載說聽云。秦檜裔孫某。宰湯陰。綽有政聲。毎欲謁忠武祠。輙逡巡弗果。將及瓜。謂同僚曰。少保雖與先世有惡。豈在後嗣哉。且吾守官。無愧神明。往謁何害遂爲文祭之。拜不能起。嘔血數升。而死。事在嘉靖初年。魏莊渠提學。河南歸。爲所親言之。此與宋御史。羅汝楫子。鄂州知州願事。全相類。汝楫附秦檜。劾忠武。願卽著爾雅翼。以古文名。朱子稱爲南渡第一者也といへり。右和漢の奇談。偏に信くるによしもあらねど。今試に論はん。時平公は。能を妬み。權を弄びて。菅家を劾するの惡おはし、かども。彼蠹毒奸虐。宗の秦檜が類にあらず。本朝無二の名家として。祖先の勳功。世もつて人の仰ぐ所なり。さばれこの大臣は。その叔國綱大納言の北の方行平卿の女を掠略給ひし事など。小世繼物語に見えたれば。朝廷のおん爲には疎にて。傲放なる殿なり

けんかし。又菅家は。儒家より興りて。名器德操。君を佐け。民を慈む。大賢相におはします。亦是一世の名德。世もつて人の仰ぐ所なり。よしや寃枉によりて。左遷の辱を受け給ふとも。君を怨み。人を讐として。しうねく祟り給ふべくもあらず。これらのよしは。餘が言をまたず。既に益軒が天滿宮古實にいへり。しからば顯忠の大臣。誠心をもて禱り給はんに。菅廟納受なからずやは。もししからずは。私怨をもて公事を妝ふといはん歟。かくの如きは。菅家の御志にあらずかし。又宋の岳飛は。精忠武略。孔明にして權を得ざるものなり。よりて又忠武侯を贈られたり。又秦檜は。內心を完顏胡に通はして。國を賣りたる大奸賊なり。岳忠武が怨。數十世の後までも。絕えて釋くよしなかるべし。さるをさの神靈。檜が子孫の諂ひ祭るをよろこび受けて。公私の舊怨を忘れなば何をもて忠武といふべき。おもふに秦某が。岳廟を祭りしは。名を取り譽を釣らん爲のみ。もししからずはその祖の仇なり。敬して遠ざくとも。猶かしこしと思ふべき事ならずや。さるをみづからその死をとりしは。積惡の家。餘殃ありといはま

この事本据あり。太平記に因れるにあらず。叉猿樂よりはじまれるにあらず。增鏡第十三草まくらに。時頼朝臣は。康元元年にかしらおろしてのち。しのびて諸國を修行しありきけり。それも國々のありさま。人の愁ひなど。くはしくあなぐりきかんのはかりごとにてありける。あやしのやどりにたちよりては。その家ぬしがありさまをとひきく。ことわりあるうれへなどの。うづもれたるを。ききひらきては。我はあやしき身なれども。むかしよろしきしゆ（主）をもちたてまつりし。いまだ世にやおはすると消息たてまつらん。もてまうでゝ。聞え給へなどいへば。なでふことなき修行者の。なにばかりかはとはおもひながら。いひあはせて。そのふみをもちて。あづまへ行きて。しかゞ〱とをしへしまゝにいひて見れば。入道殿の御消息な（稽首）けり。あなかま〱とて。ながくうれへなきやうにはからひつ。佛神のあらはれ給へるとて。みなぬかをつきてよろこびけり。かやうの事。すべて數しらずありし程に。國々も心つかひをのみしけり。最明寺殿とぞいひける云々。これを樂には。佐野常世てふものさへに作り入れたるなるべし。

如右(しか)見えたれども。すべて三かゞみには。巷談街說。何くれとなく載せられたりと思ふ事なきにあらず。水鏡。欽明天皇の段に。美濃國なる人。狐に子をうましゝといふ事は。日本靈異記卷一。狐爲妻令生子緣より出でたるがごとし さばれ。いとはやくより。口碑に傳へし事なるべければ。これらのよしを引きいでゝ。一證とすべきものになん

一第廿八人事 祭ニ父祖讐ニ禍福 善相公尺牘評 並佗字正譌附

非ニ其鬼ニ而祭レ之諂也。爲政 といふ。聖敎は。自他總角のころより。をさ〱記誦することなれども。釋敎を傳へたる。今にしていかゞはせん。右大臣顯忠公。毎夜に天神を拜みたてまつり給ひしは。菅家の祟を憚り給ふなるべし。さばれ天神とのみいへば。菅家の御事に限るにあらねど。大臣奉レ詔祝ニ天神於交野ニ事。見ニ續紀三十八。桓武紀。延暦四年十一月。及延暦五年十一月ニ 當時朝野。共に菅家の冤をいふもの多かり。村上天皇天暦元年九月九日。遷ニ座天滿天神於山城國北野ニ。事詳ニ于天滿宮託宣記。管家御傳記。梅城錄等ニ その故なくして。天神を祭り給へるにはあらず。十訓鈔七第廿一條には。北野の天神といへり。又故事談卷二云。富小路右大臣。顯忠 時平御子也。毎レ夜出レ庭。奉レ拜ニ天神ニ云々。又以ニ儉約ニ爲レ事。銀器椀手洗(ハンソウタライ)等。永不レ被レ用。又云。此大臣。五十八薨云々。而補任

應永永亭の比の座頭撿挍なり。この兩撿挍の名に。景清の二字具足したれば。景清最後に。琵琶法師になりつ。平家を語りはじめしと作れるもの歟。こは暗合歟。しらねども。苟且の物語も。ふるきは緣る所多かり。况經書史傳の若き。特に深意の存するものをや。いにしへの人の言に。讀書百遍。初通二其義一といひけん宜なり。莊子曰。道在二屎溺一。亦宜なり。廢鼓の革をも貯ふるは。良醫の伎なり。小說なりとてこゝろつきなく。等閑に見すぐさば。讀書の人にはあらずかし。しらず僻言ならんかも

附けていふ。奥州後三年軍記。鎌倉權五郎景正。右の目を敵に射させたるを折りかけながら。答の矢に。その敵を射ておとし。さて退きて。景正手負たりとて。仰さまに臥しつゝ。三浦平太郎爲次に。其矢を拔かする段に。爲次つらぬきをはきながら。景正が顏をふまへて。矢をぬかんとす。景正ふしながら刀を拔きて。爲次が草ずりをとらへて。あげさまにつかんとす。爲次おどろきて。こはいかに。などかくはするぞといふ。景正がいふやう。弓箭にあたりて死するは。つはもの、望む所なり。いかでか生ながら。つらを足にてふまるゝ事あらんや。しかじ汝をかたきとして。われ爰にて死なんといふ。爲次舌をまきていふ事なし。膝をかゞめ顏をおさへて矢をぬきつ。この事三國のとき。魏將夏侯惇拔レ矢啖レ睛の事と。同日の談なるべし。魏志夏侯惇傳。夏侯惇字元讓。沛國譙人。年十四。就レ師學。有下辱二其師一者上惇殺レ之。後從二太祖一征二呂布一爲二流矢一傷二左目一惇云云又世に一目を患へて。僞目といふ物をすることあり。この事唐山には。胡元の時よりあるにや。輟耕錄巻二十三載す。杭州張存。幼患二一目一。時稱二長眼子一。忽過二巧匠一。爲安二一磁睛一。障二蔽於上一。人皆不レ能レ辨二其僞一。この事亦上總忠光が魚鱗を。左の目上に覆ひし事と。年を同して談るべし

第廿七八事　時頼微行

北條時頼入道。諸國を微行して。守護地頭の邪正を檢きといふ事。出處定かならざるよしは。人もいふめり。この事太平記。巻三十五北野通夜物語の段には。北條貞時とす。さるを猿樂には。時頼に作りかへたるにやと思ふもあるべし。又北條時頼記に。これらの事見ゆといふものあれども。それはちかき比。いで來たる俗書なれば。なでふ證にせらるべき。鉢の木とかいふ能樂を。そがまゝに載せたるなめり。考ふるに。

を剔(くじり)挑つゝ。日向國に赴きて。琵琶法師になりにけり。これを日向勾當と唱ふ。瞽者の琵琶にあはして。平家を語る事は。景清より始まるといへり。この稗說は。上總五郎兵衞尉忠光が事を撮合(とりあは)して。作りなしたりとのみ思ふもの多かり。彼忠光が事は。東鑑。巻第十二 建久三年正月廿一日。前幕府。渡御于新造御堂地。の條に見えたり。忠光被召捕。面縛之處。懷中帶一尺餘打刀。魚鱗覆左眼上などいふ事。その條に見えたれば。景清が盲になるといふ事。是より出でたりといふべし。こは但その一を知りて。いまだその二をしらざるなり。彼物語にはなほ父母あり。景清その目を剔挑れりといふよしは。燕の高漸離が故事より出でたり。史記刺客列傳二十六 荊軻傳後曰。高漸離變名姓爲人庸保。匿作於宋子。久之作苦。聞其家堂上客擊筑。彷徨不能去。每出言曰。彼有善。有不善。從者以告其主曰。彼庸乃知音。竊言是非。家丈人召。使前擊筑。一坐稱善賜酒。而高漸離念。久隱畏約無窮時。乃退出其裝匣中筑與其善衣。更容貌前。擧坐客。皆驚下。與抗禮以爲上客。使擊筑而歌。客無不流涕而去者。宋子傳客之。聞於秦始皇。秦始皇召見。人有識者。乃曰。高漸離也。秦始皇。惜其善擊筑赦之。乃矐其目。索隱曰。說者云。以馬屎熏令失明 使擊筑。未嘗不稱善。稍益近之。高漸離乃以鉛置筑中。復進得近。擧筑朴秦皇帝。不中。於是誅高漸離。この高漸離は。荊軻が友なり。よりて燕丹。荊軻が爲に。仇を報いんと欲するなり。始皇も亦高漸離か野心あらんかと疑ひて。まづその目を失はせ。筑を擊たせて聽きたるよしなり。筑は樂器なり。和名なし。形瑟に似たりといふ。これを景清が復讐の事に作りて。その目を矐(よすべ)らる、といふを目子を剔(くち)挑れりと作更(つくりかへ)。筑を琵琶に易へたるにや。又景清が琵琶法師になれる事。平家を吟誦(かた)りしといふよしは。臥雲日件錄。文安五年八月十九日條云。最一撿挍來云々。予又問座頭話平家之由。最一曰。昔爲長卿者作此書十二卷。留在播州。其後性佛者。上之於音曲而歌詠耳。性佛之後。曰如一撿挍者。有一弟子。曰覺一。曰城一。城一弟子城元居八坂。城元次曰城意。城意次曰城存。存尚存焉。覺一弟子有四撿挍。曰通一。曰靈一。曰景一。曰清一。某乃靈一弟子也云々。かゝれば是景一清一は。

侯一。是爲ニ桓帝一。桓帝昏弱。如ニ騰所レ揣也。騰卒養子嵩嗣。嵩子則曹操是也。故范曄宦者傳叙曰。曹騰說ニ梁冀一。遂立ニ昏弱一。魏武因レ之遂遷ニ龜鼎一。蓋創レ魏者騰也

操がいまだ簒(ぬすま)ざりしは。その子に捉(とら)せん爲なり

建安二十四年。孫權稱ニ臣於曹操一。侍中陳群等皆曰。漢祚已終。殿下功德巍々。群生注望。故孫權在レ遠稱レ臣。此天人之應異レ氣齊レ聲。宜レ正ニ大位一。復何疑哉。操曰。若天命在レ吾。吾爲ニ周文王一矣

孔明誠忠。務め漢賊を伐つにあり。二表三出。軀も亦いたく疲勞たり。志遂げずといふとも。遺策魏延を誅戮し。此魏を以て。彼魏に代ふ。事に益あるにあらねど。魏を平ぐる志一なり。天その忠を慰するといはん歟

諸葛武侯。前後二表。誠忠挾レ天者也。三出ニ于祁山一。殫レ性隕レ命。前軍使魏延。勇猛過レ人。善養ニ士卒一。每下隨ニ武侯一出上。輙欲下請レ兵與ニ武侯一異レ道。會中于潼關上。如中韓信故事上。武侯制而不レ許。延含レ之。及ニ武侯卒ニ於五丈原一。延卒反。楊儀等。因ニ武侯遺策一。斬レ延。而諸軍還ニ成都一

張衡が思玄賦。なでふ帝禪あることを知るべき。帝禪の禪は。蜀王の禪に劣れり。亦是名詮自性なるかも。張衡思玄賦曰。鼈令殪而尸亡兮。取ニ蜀禪一而引レ世。鼈令蜀王名也。出ニ楊雄蜀本紀一禪傳レ位也。後帝名禪。字公嗣。昭烈太子。魏封爲ニ安樂公一 ○魏土は漢火に勝つといふとも。乾燥も亦甚し。火德はじめて滅えて。焦土馬蹄に揚けらる。晉泰始元年十二月。晉王司馬炎。受ニ魏禪一。卽ニ皇帝位一。奉ニ魏主曹奐一。爲ニ陳留王一 亦是漢魏陳留に驗あり。初獻帝爲ニ陳留王一。及レ卽レ位。受ニ制於曹操一。操之後。亦受ニ制於司馬氏一。其及ニ簒立一。魏主爲ニ陳留王一。此其應報歟 此等の應驗古人いまだいはざるもの過半。星曆讖記皆この類歟。凡陰陽選擇の家。五行の生剋をもて。吉凶を判斷す。生剋の理あらずとすれば。蕭信に五行大義あり。隋開府儀同三司蕭信。著ニ五行大義一。以詳ニ五行事一 むかし天朝この書を信用し給ひき。見ニ續紀孝謙前紀一。天平寶字元年十一月癸未詔 又これありとするときは。吳蕭等に笑はれなん。宣城吳蕭。著ニ五行問一。以レ謂無ニ五行生剋一。新安張潮。作ニ之序一以附和。其說祖ニ論衡一 有りとやすべき。無しとやすべき。もし生剋の理を問ふものあらば。余はその有無の間に遊ばん

第廿六人事　景淸　一日兩勇 並儁日附

稗說に。平家の侍。惡七兵衛尉景淸。復讐の志を得遂げずして生拘らる。幕府頼朝卿その義を譽むるに。晉の豫讓の故事に因りて。誅を加へ給はず。然れども。景淸は讐を視るに得堪へずとて。みづから兩眼

熹平末。黄龍見譙。光祿大夫橋玄問單颺曰。此何祥也。颺曰。其國當有王者興。不及五十年。龍當復見。此其應也。魏郡人殷登。密記之。至建安二十五年春。龍復見譙。其冬魏受禪○

建安二十二年冬十月。曹丕竟簒立。而是稱禪。丕即帝位。改元黄初。廢漢帝爲山陽公

黄龍の譙は。魏郡にあり。漢燼の譙は。名を周といふ。帝を勸めて賊に降れり。亦是譙々の驗といはん歟。（聞鄧艾已入成都。譙周勸帝詣降。乃遣使奉璽綬。詣艾降）黄初の僞號は。猶患とするに足らず。内に黄皓あり。火德を剋するの驗なり

宦官黄皓。便僻佞惠。後帝愛之。皓畏董允。不敢爲非。終允之世。州位不過黄門丞。及允卒。費禕以陳祗代允。爲侍中。與皓相表裏。皓始預政。累遷中常侍。操弄威柄。終以覆國

蜀に天子の氣ありといふとも。又何ぞ久しからん

董扶私謂太常劉焉曰。京師將亂。益州分野有天子氣。焉信之。遂求出爲益州牧。扶亦爲蜀郡屬國都尉。相與入蜀。去後靈帝崩。天下大亂。乃去官還家。年八十二卒。後劉備帝於蜀。皆如扶言

堅が藏して出さゞりしは。策に質として。兵を借らせん爲にあらず

初平二年。孫堅進屯陽人。與董卓戰大破之。至雒陽。撈露井得玉璽。○孫策年十七。乃渡江居江都。結納豪傑。有復讐之志。欲借兵於袁術。乃至壽春。術未許。因質父堅所得之璽。遂以堅餘兵千餘人還

赤壁の勝ありといふとも。權も亦漢賊なるかな

建安十二年。曹操自江陵。將順江東下。周瑜戰於赤壁大破之。操引兵從華陽道。步走。○後漢昭烈皇帝章武元年八月。吳孫權遣使稱臣於魏主丕。丕受吳降。即拜孫權爲吳王。加九錫。朱子曰。人謂曹操是漢之賊。不知孫權眞漢賊也

騰が梁冀に說きたりしは。兒孫の爲にするに似たり

大將軍梁冀。既鴆質帝。李固與冀書。欲立清河王蒜。中常侍曹騰等。聞而夜往說冀曰。清河王嚴明。若果立。則將軍受禍。不久矣。不如立蠡吾侯。富貴可長保也。冀然其言。遂立蠡吾

れて。暗君を立つることとなく。何進が袁紹に勸められて。虎狼を招くにあらざりせば。卓操が野心も。施す所なかるべし。進むものは後れず。逝くものは返へらず。人事と天數と默契して。誡を後に垂る。此乃天心歟。知命の聖にあらざるより。天と數とは說くべからず。唯符合するものを擧げて。もて。窓友の晤譚に易へたり。幸にして取ることあらば。蒙學讀史の階梯ともならん歟

漢の高帝。秦王子嬰を降して。蜀漢に王たり。四百年の大業嬰より創む。漢元年十月。沛公兵遂先諸侯。至霸上。秦王子嬰素車白馬。係頸以組。封皇帝璽符節。降軹道傍。子嬰爲秦王四十六日。秦竟滅矣 孺子嬰。攝皇王莽に廢せられて。漢祚中絶す。十二帝の彈くる所。亦嬰に卒れり。新莽始建國元年春正月。莽廢孺子嬰爲安定公。孝平皇后爲安定皇后。竟簒漢 一嬰は漢を興し。一嬰は漢を癈す。興亡終始。嬰に驗あり。嬰則嬰孩之嬰。以爲其名 ○高帝は蜀漢より起り。昭烈も亦蜀漢に割据せり

漢元年。項羽負約。更立沛公爲漢王。王巴蜀漢中。都南鄭。五年。高祖竟勝楚。而王天下。○建安二十四年七月。諸葛亮與群下。上左將軍爲漢中王。表聞漢帝。建安二十五年。曹丕簒立。建元黃初。明年傳聞獻帝被殺。漢中王發喪制服。群下請稱尊號。王未許。亮曰。曹氏簒漢。天下無主。大王劉氏苗裔。紹世而起乃其宜也。王從之。夏四月丙午。即皇帝位。改元章武

後帝に至りて。竟にその地を喪ふときは。興廢終始。亦蜀漢に驗ありといふべし後漢後帝。炎興元年八月。魏軍大擧入寇。魏將鄧艾。長驅而至成都城北。帝率太子諸王及群臣。面縛輿櫬。詣軍門降 ○光武は赤眉に興り。昭烈は黃巾に起る

新莽地皇三年。樊宗等。聞莽將討之。恐其衆與莽兵亂。乃皆朱其眉。以相識別白。是號曰赤眉。是年宛人李守等。迎劉秀。與相約結定謀議。歸春陵擧兵。○靈帝中平元年。鉅鹿張角反。其衆三十六萬。皆着黃巾爲標幟。故時人謂之黃巾賊。中平二年。公孫瓚大破靑州黃巾。當是時。涿郡劉備。往見瓚。瓚以爲平原相

漢は火德をもて王たり。火の色は赤し。赤眉の賊は。光武中興の祥なり。火は土の爲に征せらる。土の色は黃なり。黃巾の賊は。曹魏簒立の應なり。○黃龍の應黃初の號。漢火滅却せられて。魏土ますます潤へり

様に。いとあさましうおぼしめさること(異)殿たち道隆道兼の御けしきは。いまにも猶なほらで。この殿(道長)のかくまゐり給へるを。御門よりはじめ。かんじの、じらせ給へど。うらやましきにや。又いかなるにか。ものもいはでぞ候給ひける云々是も亦。剛臆の品定めとまうさまし。事の趣。兒戯に似ためれど。むかし殿上人のよろづ女めきたるかたには。さぞありけめと思ふがをかしさに。いと長やかなるをも省かで寫しつけたるなり。この道長の大臣は。おん心ざま雄々しく。射藝をよくし給ひけるにこそ。右の次の段に。帥殿(中關白道隆男内大臣伊周)の南の院にて。人々あつめて。弓いさせたるに入道殿(道長)このときは。左京太夫にて。なほ下﨟におはし、が。假初にわたらせて。帥殿と賭弓しけるに。帥殿射給ふに。いみじうおく(臆)し給ひて。御手もわなゝき候にや。的のあたり近くよらず。入道殿は。二すぢまで。おなじ矢つぼを射させ給ひつ。饗(臆)ようし。もてはやし聞えさせ給へる興もさめて。ことにがう(剛)なりぬ。父おとゞ(道隆)帥殿に。なにかな(勿射)いそ。な(勿射)いそと制せさせ給ひて。ことさめにけり。などいふ事見えたり。これらの事は。奥の後三年の戰以前にあり。剛臆の品定めといふ事。圓融。花山の御時などより世にもてはやし、事なるべし

第廿五人事　漢火生剋應驗辨

炎漢の興廢。終始驗あり。これを史傳(史記。前後漢書。三國志。及朱子綱目張拭諸葛忠武侯傳)に撿るに。星曆讖記の言に稱へり。浮屠氏はこれを輪囘といはん歟。しかれども彼高帝は。亂を撥正に反すに。布衣より興りて民に功あり。光武昭烈。亦英明の君なり。その志毫も高祖に嗣かざることなし。興復の功或は成り。或は就らずといふとも。行ふ所仁義の名なり。積惡の政なし。なでふ輪囘といふよしあらんや。便是宋陣搏が。一汴二杭。三閩四廣の說の如し。假令その言の驗あるも。天數は偶然にして。人事は必然なり。王莽が假りて返さゞりけるは。元成の惰弱に萌芽し。曹丕が逼りて禪を受しは。桓靈の不仁に禍胎す。元帝が王鳳を重用して。貸すに威柄をもてすることなく。成帝が聲色に溺愛して。萬機に親まざるにあらざりせば。王莽が奸詐も。行ふ所なかるべく。梁冀が曹騰に說か

ましてものはなれたるところなどいかならん。さらんところに。ひとりいなんやとおほせられけるに。えまからじとのみ申し給ひけるを。入道殿（道長剃髪後。世稱ニ入道殿）下」は。いづくなりともまかりなんと申し給ひけれ〔與〕ば。さるところおはしますみかどにて。いときようある事なり。さらばいけ。みちたか〔道隆〕（内大臣稱ニ中關白」）は豐樂院。道兼（右大臣稱ニ粟田關白」）仁壽殿。道長は大極殿へいけとおほせられければ。よその君たち（宿直若殿原也）は。びんなき事をも。そう〔奏〕してけるかなと思ふ。又うけ給〔金〕はりたまへるとのばら（道隆道兼）は御けしきかはりて。やくなしとおぼしたるに。（道長をいふ也）つゆさる御けしきもなくて。わたくしの從者（ずさ）をばぐし〔倶〕候はじ。この陣の吉上にまれ。たきくち〔瀧口〕にまれ。一人昭慶門までおくれとおほせられ「事たえ」（本ノマヽニス）。それよりうちにひとりいり侍らんが。證なき事にこそとおほせらるれば。げにとて。御てばこ〔刀子〕にたかせ給へる。かたな申してたち給ひぬ。いまふたところも。にがむ〱。おの〱た〔出云〕はさらじぬ。子四〔子四〕ねよつとそう〔奏〕して。かくおほせられ。議するほどに。

〔互〕うしにもなりにけん。道隆は。右衞門の陣よりいでよ。道長は。承明門より出でよとそれをさへわかたせ給へば。しかおはしましあへるに。中關白殿（道隆）は陣にてねんじ〔念〕ておはしたるに。宴の松原のほどに。そのものともなき。聲どものきこゆるに。すぢなくてかへり給ふ。粟田殿（道兼）は。露臺のと〔外〕まで。わなゝく〱おはしたるに。仁壽殿の東面のみぎりのほどに。のきとひとしき人のあるやうに。見え給ひければ。ものもおぼえで。身のさふらはゞこそ。おほせ事もうけ給はらめとて。おの〱かへりまゐり給へれば。御あふぎをたゝきて。わらはせ給ふに。入道殿は。いとひさしう見えさせ給はぬを。いかゞとおぼしめすほどにぞ。いとさりげなく。事にもあらずげにてまゐらせ給へるいかに〱と。とはせ給へば。いとのどやかに。御かたなにけづられたるものを。とりぐしてたてまつらせ給ふに。こはなにぞとおほせらるれば。たゞにてかへりまゐり侍らんは。證（しるし）さふらふまじきによりて。たかみくら〔高御座〕のみなみ〔南〕おもて〔面〕のはしら〔柱〕のもと〔下〕を。けづりてとりて候なりとつれなく申す

偏に世の人の心を快くするにあり。その事寓言なりといふとも。縁る所なきにあらず。大約建文帝最後の事を譚ずるもの。必よしあるべけれども。當初諱みて傳へざれば。史の闕文といはまくのみ。かゝれば一休を。後小松帝の皇子なりといふ事と。建文老後に歸京の事と。共に明文あらずして。その事は實なるかも

第廿四人事　文武剛臆の座

奥州後三年軍記に。將軍よし家つはものどもの心をはげまさんとて。日ごとに剛臆の座をなんさだめける。日にとりて。剛に見ゆるものどもを。一座にすゑ。臆病に見ゆるものを。一座にすゑけり。おの〳〵臆病の座につかじとはげみたゝかふといへども。日毎に剛の座につくものはかたかりける。腰瀧口季方なん。一度も臆の座につかざりける。かたへもこれをほめ。かんせずといふことなし。季方は。よし光が郎等なり。將軍の郎等ども。名を得たるつはものどもの中に。今度殊に臆病なりときこゆるもの五人ありけり。これを略頌に。今いふ落首つくりけり。鏑の音きかじとて。耳をふさぐ剛のもの。紀七。高七。宮藤三。腰瀧口。末四郎。末四郎といふは。末割四郎惟弘が事なり。以上こゝにいふ剛臆は。我國の兵誥。猶剛柔といふが如し。臆は後れて得進まざるなり。こは俗にも粗しることなれども。漢土にも。亦これに似たる事あり。後漢書。六十九戴憑傳 戴憑字次仲。汝南平輿人也。習二京氏易一。年十六。郡擧二明經一。徴試二博士一。拜二郎中一。時云々。拜二憑虎賁中郎將一。以二侍中一兼領之。正旦朝賀。百僚畢會。帝令二群臣能説レ經者更相難詰一。義有レ不レ通。輙奪二其席一。以益二通者一。憑重レ座五十餘席。故京師爲レ之語曰。解レ經不レ窮戴侍中。在レ職十八年卒二於官一。詔賜二東園梓器錢二十萬一。これ我瀧口季方が。剛の座と相似たり。和漢文武の對座といはまし。又大鏡。第七太政大臣道長公の巻に云。花山院の御時に。五月しもつやみ。さみだれもすぎて。いとおどろ〳〵しく。かきたる雨のふる夜。御門さう〳〵（寥々）しくおぼしめしけん。殿上に出でさせおはしまして。あそびおはしましけるに。人々物がたりなどし給ひて。むかしおそろしかりける事どもなど申させたまへるに。こよひこそ。いとむづかしげなるよなめれ。かく人がちなるにだに。けしきおぼゆ。

りてなるべし。狂雲集にも。一休は。後小松院の二の宮なるよしをいへり。おなじすぢなれば文多く引かず白石翁は。この事こゝろ得られずといへり。説見ニ讀史餘論卷三余もとし來。不審に思ひたりしに。件の落欵を閲すれば。その事なしといふべからず。何にとなれば。和尚道德高しといふとも。天子の落胤ならずして。自天下老和尚と唱へんこと。もとも僭稱なればなり。又明建文帝は建文四年六月燕兵京師に逼りし日。僭に遁れて僧になれり。年を經て。英宗の時に至りて。明々地（あからさま）に京に還りて。天下老佛と號すといふ。こは英宗の正統五年の事なりとぞ。一云于時帝年六十四皇朝後花園院。永享十一年に丁れり。かゝれば一休在世の日なり。彼は遁世の天子たり。此は至尊の落胤なり。天下老和尚と老佛と。和漢同年の佳對ならずや。建文帝歸京の事は。史彬致身錄に出づといふ。史彬は明黃門左尙書卽建文從亡の一人なり。又帝の編述。從亡忠賢列傳。及從亡諸臣祭文。共百餘篇。並註釋楞嚴法華二經典。其他詩詞尤多しといへり。建文帝最後の事は。駿臺雜話禮集にもいへり。致身錄に因れるなるべし。又彼致身錄は。清王阮亭池北偶談卷之三談献篇に辨あり。云。虞山極辨二史仲彬致身錄之僞一。而予鄉趙隱君士喆。著二建文帝年譜一。多取レ之。劉公子孔和。亦題二致身錄一二篇云。國初殺運烈不レ除。越二三十載一還相屠。仁以守レ之眞不レ足。雖レ有二節士一謀多疎。哀哉中山誠意輩。已盡大計環顧徒。嗟吁。聖祖信レ數不レ建レ輔。使レ作三皇覺之二裔餘一。鬼門一出四十載。歸來老佛惟雪レ顚。竄身萬里。伏二滇國一泰伯不レ得二終封一吳。坳葬西山一抔地。豈有二方逐之疑一乎。當時二十有二人。左右食レ履相携扶。未三必才智似二狐趙一。不レ可レ及者武子愚。二百餘年士最盛。摧傷太過今如レ無。千秋直史不レ可レ滅。帝在二均房一應二屢書一。又明史略。卷二英宗紀にも。亦この事を載せて云。正統五年七月。初建文帝。潜遁。由二湖湘一入レ蜀。以抵二雲闘一。最後僧二于廣西之壽佛寺一。忽一日思恩知縣吟瑛出行。道遇二一僧一。自稱二建文帝一。曰。今老矣。願送二骸骨一歸。瑛大駭。送至レ京。號曰二老佛一。當時舊臣無二一人在一。獨太監吳亮認知遂迎入二西内一。後以レ壽終。葬二西山一。不レ封不レ樹。一云。帝壽八十九又清逸田叟女仙外史は。燕王靖難の顚末を作り設けて。妖婦唐賽兒が事を撮合し。一百回の小說となれるなり。作者のこゝろ。役燕王の不義隱慝を誅心し。建文の年號を稱すること二十六年。

御追號の文字なども。又いにしへにかへされて。漢の謚に擬せられたる歟。しかもみな。德をもて稱へ奉らる。かしこきことに侍るめれど。件の四帝の聖德は。今に聞え給ふことおはしまさず。唯世の不祥にあはせ給ひて。或は蒼海の底はかなくも仵はれ。或は荒磯に遷されて。やがて崩給ひしかは。御追號に離宮をかけて唱へ奉らざりしにや。さばれ土御門院。亦其中におはしませば。さるすぢにのみあらずかし。當時の形勢をもて推しはかるに。またく御靈の祟を懼れて。寃を伸べんとの謀なるべし。史記正義謚法解を考ふるに。好レ和不レ爭曰レ安。（生而少レ斷）綏二柔士民一曰レ德。（安レ民以レ居安レ士以レ事）慈和偏服曰レ順。（能使三人皆服二其慈和一）諫爭不レ威曰レ德。（不三以レ威拒二レ諫）執レ義揚レ善曰レ德。（稱二人之善一）崇顯の兩字は。謚法に載せずといへども。崇高也。顯明也。みな是聖明俊德。無爲不爭の美稱ならぬものなし。四帝もし冥々の中にして。知し召さることとあらば。愧ぢたまはざることはあらじ。當時これらの議によりて。顯德院を改めて。離宮の鳥羽になされたるなるべし

第廿三人事　老佛老和尚

近ころ。一休和尚の內筆を觀つるに。諸惡莫レ作。衆善奉行といふ一行書なりき。その字の大。六七寸もあるべければ。こゝにては臨本を見るによしなし。その落欵左の如し

須一休天下老和尚

この書。友人杉田氏（玄伯。號二柳井舍一家在二飯田町冬青阪下一）の所藏なり。和尚法諱宗順。洛北紫野。大德寺。宗曇花の嗣法にして。道德道號僧に高かり。文明十三年十一月日寂。或云。年九十一。世にこの和尚を後小松院の皇子なりといふ事は。南朝記傳に云。大德寺の一休と聞えしは。實は後小松院の皇子なり。さればいやしき腹にやどり給ひしかば。人臣の子になされて。僧とはなり給へるなり。稱光院の御世つきの事を議せられしとき。一休に問はせ給ひて。定め申すべしとて。院宣ありけるに。和尚言葉はなくて

　ときは木や木てらの梢つゑ捨てよ
　世をつく竹の園はふし見に

さらばとて伏見殿の御子に定まれり。といへるによ

奸佞（蔡京 童貫）は時を得たり。されば盗賊（方臘 宋江）蜂起して。天下一日も安きことなし。終に金人南侵して。二帝。（徽宗 欽宗）北邊の羞あり。宋南渡の丶ち。世を紹ぐもの九主。（自高宗至帝昺）共に一百五十三年。辛くして亡びざりしは。なほ幸といふべし

殘缺日本後紀（卷十三）桓武紀。延暦二十四年。十二月庚申。僧綱言。延暦年中。改諸國國師曰講師。（僞撰日本後記卷六。爲延暦十四年八月詔）一任之後。不聽輙替。講說之外。莫預他事。云々。五雜俎。（人部四）漢張道陵之後。至唐末五代。遂稱天師。據廣信之龍虎山。金碧殿宇。偃然爲世業矣。明太祖曰。至尊者天。豈有師哉。削之止稱眞人。然以二品秩。傳流後裔。亦幸之甚矣。（明史高皇帝本紀考ふべし）その嚴明。和漢符節を合せたる如し

第廿二人事　四論四德

後鳥羽院御追號の事はじめは顯德院と稱奉せらる。東鑑（卷一）延元三年二月廿二日崩御。六十五月廿九日追號顯德院。仁治三年七月八日。改顯德院。後爲鳥羽院。增鏡。（第三 ふぢ衣）後鳥羽院崩御の條下に。はじめはけむとく院とさだめ申されたりけれど。おはしまし、世の御あらましなりけるとて。仁治のころぞ。後鳥羽院と聞えなほされけるなむ。如是見えたるに。亡友蒲生秀實山陵志には。謙德院に作れり。別に見る所ありし歟。恐らく誤てるなるべし。聖武は出家して。佛に歸依し給ひしかは。尊號を上らず。しかれども孝謙天皇の天平寶字二年八月戊申詔して。勝寶感神聖武皇帝と策稱し。又天璽國押開豐櫻彥尊と謙稱し奉らる。孝謙帝亦出家して。佛に歸依し玉ひしかは。復尊號を上らず。在位の日（天平寶字二年八月庚子）百官及僧綱菩提等。尊號を上りて。寶字稱德孝謙皇帝と稱へ奉る。孝謙諱は阿閉。一名は高野姬よりて。續紀に。その後紀には。高野天皇と題書せり。至尊の諱を唱へ奉ること。上代に例ありといふとも。當時はこれを異例とすべし。か丶ればこの兩朝には。論をたてまつらざりしなり。かくて平城。嵯峨よりこなた。文德。光孝二帝の外は。尊號を漢法の論に倣ひ奉らず。亦是祝髮入道し給へばなり。宇多。醍醐以降。御院號とまうす事はじまりて。そのおはしましける地の名。或は離宮の名を被て。唱へ奉ることになりぬ。しかるに崇德。安德。顯德。の四帝のみ。

巡撿朱能所㆑造也。中外咸識㆓其詐㆒。帝獨信㆑之。迎㆓入禁中㆒。魯宗道。孫奭。知㆓能所㆑爲。咸諫不㆑聽。準由㆑是得㆓召用㆒矣。この事。我天平寶字中の。蠶字藤書と類す。寇準は。當時忠良の大臣なり。しかるになほ天書を造りて。復入りて相たり。こゝをもて史官その詐欺をいふもの多かり。原是眞宗。道敎を好み奉て。異說を信惑せしによれり

これらの迷罔。今古に多し。秦始皇が。不死の藥を求むとて。蘆生徐市等に欺れたる。漢武帝が。仙を求めて。最後に悔いたる。梁武帝がいたく佛に倭媚したる。唐玄宗が。道士羅公遠等に魅せられたる。武宗が道敎を溺信したる。元世祖が。八思麻帝師を尊信したる。明武宗が。佛を好みて。みづから大慶法王と名號したる。皆是惑ひを仙佛にうけて。奇を好むものなり。

是より先。（景德元年）契丹大擧入寇して。京師震動せり。群臣或は蜀に幸せんことを勸め。或は南渡の策を獻るといへども。寇準が忠。高瓊が勇。しば〳〵諫めて。天子みづからこれを征し。遂に和議なりて。隣國復堺を犯さず。幸にして事なかりしは。太祖を去ること遠からで。仁義の遺政存ればなり。顧ふに光武は。不㆑受㆓祥瑞㆒

後漢書。孝武本紀中元元年。京師醴泉涌出。又有㆓赤草㆒。生㆓於水涯㆒。郡國頻上㆓甘露㆒。群臣奏言。靈物依降。宜㆑令㆔太史撰集以傳㆓來世㆒。帝不㆑納。帝自㆓謙無㆑德。郡國所㆑上。輙抑而不㆑當。故史官罕㆑得㆑記焉

宋太宗不㆑許㆓封禪㆒。（宋元通鑑。宋太宗紀。興國八年。兗州父老。請㆓封禪㆒。不許）仁宗卻㆓瑞草㆒

同書。宋仁宗紀。皇祐三年夏六月。詔㆓州郡㆒。自今勿㆑得㆑獻㆓瑞物㆒。知無爲軍茹孝標獻㆓芝草三百五十本㆒。帝曰朕以㆓豐年㆒爲㆑瑞。賢臣爲㆑寶。至㆓於草木蟲魚之異㆒。焉足㆑尙哉。免㆓孝標㆒。戒㆓天下㆒勿㆑獻

眞宗は。太宗の子。仁宗の父なり。しかれども。その背ざることかくの如し。徽宗帝亦その子孫として。これらのよしを鑒みず。方士を溺信して。道敎仙經を天下に求め。方士林靈素に眩惑せられて。道史を作り。道宮を起し。道會を興して。天書霧篆の誕妄を曉らず。道籙院の冊章を受けて。敎主道君皇帝と稱せらる。これによりて。爭臣（宋曹輔昭等）は黜けられ。

し。そが中に。聖武の帝は。尊きこと天子として。大佛像の骨柱の。繩さへに引き給ひにき。（聖武紀天平十六年。十一月壬申。甲賀寺始建盧舍那佛體骨柱。天皇親臨。手引其繩。）天子出家し給ふこともこの帝をはじめとす。且その不豫のとき。僧法榮が藥劑ならでは。用ひさせたまはず。崩御の時に。看病の禪師。一百廿餘人なんありける

孝謙紀。天平勝寶八歳五月丙子勅。禪師法榮。立性潔。持戒第一。甚能看病。由此請於邊地。令侍醫藥。太上天皇得驗多數。信重過人。不用他藥。爾其閱水難留。車輿晏駕云云。丁丑勅。奉爲先帝陛下。屈看病禪師一百二十餘人。

緇流朝柄を執るの禍胎。これらの事を基本とす。孝謙帝復先帝の御志に倣はせ給ひつ。その不豫のをり毎に。法師ならでは。看病に侍ることを聽されず。道鏡が寵を得つるも。（按）看病によりてなり（初道鏡侍看病得寵之事。見光仁紀。寶龜三年夏四月丁丑。道鏡傳中。）道鏡既寵せられて。上を惑はし奉り。黨を樹て、權を擅にして。神器を窺ひ盜まんとす。（事見孝謙後紀。神護景雲三年九月丙戌。）譽田の神の威靈によりて。和氣淸麻呂が誠忠直言微りせば。いとも危きことなるべし。（孝謙後紀。神護景雲三年八月己丑。流從五位下和氣淸麻呂於大隅。以忤道鏡也。其姉法均。還俗配於備後。）當朝大臣。眞備永手二公あり。これすら制を道鏡に受けざることを得ず。その他。木偶に等し。か、れば和氣氏一人のみ。（淸麻呂並其姉廣虫傳。見缺本日本後紀卷第八。延曆十八年二月。）又宋元通鑑。（宋眞宗紀）大中祥符元年春正月。有天書。見于承天門之鴟尾。大赦改元。乙丑帝謂群臣曰。朕去年十一月二十七日。夜將半。方就寢。忽室中光曜。見神人星冠蜂衣。告曰。當降天書大中祥符三篇。適覩皇城司奏。左承天門屋之南角。有黃帛曳於鴟尾上。蓋所降之書也。王旦等皆稱賀。帝卽步至承天門。瞻望再拜。遣二內臣升屋奉之以下。王旦跪奉而進。帝再拜受之。付陳堯叟啓封帛上有文曰。趙受命。興于宋。付于沓居。其器守于正。世七百九十定。緘書甚密。黃字三幅。詞類老子道德經。始言帝能以至孝至道紹世。次諭以淸淨簡儉。終述世祚延永之意。讀訖。帝復跪奉。韞以所緘帛。盛以金匱。王欽若之計既行。陳堯叟等。益以經義附和。而天下爭言瑞矣。獨龍圖閣待制孫奭。（音釋）言于帝曰。以臣愚所聞。天何言哉。豈有書也。帝默然。秋九月。以天書告于太廟。冬十月。帝封泰山。禪社首。大赦。三年春三月。判永興軍寇準得天書于乾祐山。

議。神護景雲二年十二月甲辰。山階寺僧基眞。賜姓物部淨志朝臣。拜法參議。隨身兵八人

抑一院上皇の重祚おましましけるよしは。またく蠶字の瑞によりて。おん齡の脩かるべきを。みづからたのみ。思し召し、なるべし。しかれども。先帝聖武靈龜の瑞字ありて。おん齡百年を得たもち給はず。聖武紀。天平元年六月己卯。左京職献龜長五寸三分。闊四寸五分。其背有文云。天皇貴平。知百年　六十にだも滿ち給はで。卒に崩じ給ひにき。孝謙紀。天平勝寶八年五月庚辰。太上天皇崩春秋五十八　などてこれらの事にしも。得曉り給はざりけん。

聖武。孝謙の兩朝に。瑞字を貢ること四たびなり。事見上　白龜を獻るもの。四枚に及べり

聖武紀天平元年六月云々。孝謙紀。天平勝寶四年春正月己卯。太宰府獻白龜。五年十一月己亥。尾張國獻白龜。神護二年九月辛巳。是年七月十一日。肥後國葦北郡人。刑部廣瀨女。日向國宮崎郡人。大伴人益。獻白龜赤眼

これに前後の兩朝元正光仁を加へ奉りて。瑞字は五たび。光仁紀。寶龜二年五月己酉。右京人白原連三成。獻蠶產成字。賜若狹國稻五百束　白龜は十枚とす

元正紀。靈龜元年八月丁丑。左京人大初位下。高田首久比麻呂。獻靈龜。長七寸。闊六寸。左眼白右眼赤。頸著三台。背負七星。前脚並有離卦。後脚並有一爻。腹下赤白兩點。相次八字。改元大赦。養老六年冬十月癸卯。左京人。无位紀朝臣家。獻白龜。光仁紀。寶龜元年八月五日。肥後國葦北郡人。日奉部廣主。獻白龜。又同月十七日。同國益城郡人。山稻主獻白龜。改元大赦。寶龜六年三月乙亥。近江國獻白龜赤眼。九月丙午河內國獻白龜

その瑞を獻る每に。授位賜物。天下に大赦せられしかは。士庶只上を欺くまでに。利に走らざるもの稀なり。就中光仁のおん時に。上總國より進せたる。異馬のごときは尤拙し。寶龜三年七月辛丑。上總國献馬前二蹄似牛。以爲祥瑞。視之人功之所刻也。國司介。巨勢朝臣馬主等。已下五人。並坐解位。其本主。天羽郡人。宗我虫麻呂。決杖八十　桓武は英主とまうせども。なほ赤雀の瑞を受けざることを得給はず。赤雀事見續紀桓武紀。延曆四年五月丁丑　赤雀皇后宮に見れて。いく程もなく皇后は韓乙牟漏。贈內大臣贈從一位。藤原良繼女　そこに崩給ひにけり。延曆九年閏三月庚午。皇后崩。有赤雀瑞。僅歷五年　當時所云祥瑞は。天作ならで。人作多く。禎祥ならで。妖孽にちかかり。いともかしこきことに侍れど。數朝奇を好みて。瑞を受けさせ給ひしことは。浮屠氏に魅せられ給へばなるべ

內頂ニ戴茲祥一。躍踊歡喜。不レ知ニ進退一。悚息交懷。甲午勅曰。云々。卽下ニ群臣一議。便奏云。維天平勝實九歲歲次ニ丁酉一。五月八日者。是陛下奉ニ爲（オホンタメニ）太上天皇周忌一。設レ齋悔過之終也。於是帝釋。感ニ皇帝皇后之至誠一。開ニ通門一。下鑑ニ勝業一。標ニ陛下之御宇一。授ニ百年之遠期ニ云々。宜レ改ニ天平勝寶九歲八月十八日一。以爲ニ天平寶字元年一。先レ是仲麻呂倍寵せられ。竊に天皇を勸め奉り。己が女婿大炊王を立て、皇太子とす。（事在ニ四月辛巳一）二年二月己巳。大和國守從四位下大伴宿禰稻公等奏偁。部下城下郡大和神山生ニ奇藤一。其根虫彫ニ成文十六字一。王大則ニ幷天下人一此內任ニ太平臣一。守ニ昊命一。卽博士に下して議せしめ給ふに。皆阿諛の辭をもて。稱賀せざるものなし。瑞字を出だすこと。既に三たびに及へども。天皇はなほ曉め給はず。詔して曰。大和藤。此當ニ今宰輔一。（宰補藤原仲麻呂也）事已有レ効。更亦何疑。よりて城下郡司及瑞を貢りしものに爵を授け。物を賜ふこと差あり。是年仲麻呂。大保に拜せられ。（本紫微內相たり）勅して姓に惠美の二字を加へ。名を押勝と更む。功封三千戶。田一百町。特に鑄レ錢擧レ稻に。惠美家印を用ふることを聽さる。事皆その謀る所に出でざるはなし。かくて天皇は。位を皇太子（諱大炊）に禪り給ひにき。（八月庚子。皇太子卽位）然れども新帝は。萬機に親むことを得給はず。又改元の沙汰もなし。かくて六年といふ。二月甲戌。大師藤原惠美朝臣押勝に。近江國淺井高島二郡なる。鐵穴各一處を賜ふ。こは漢の文帝が鄧通に賜ふに。蜀の銅山を以てし。鑄レ錢布ニ天下一ことを聽し、と相似たり。かゝりし程に。少僧都道鏡。早晚上皇に咫尺し奉りて。新寵を得たりしかは。押勝こゝろ安からず。八年九月乙巳押勝謀反奔ニ近江一。立ニ氷上鹽燒王一稱レ帝。壬子押勝鹽燒伏誅せり。（以上廢帝紀）これによりて。帝を淡路に遷し奉らる。（在位六年）至尊を遠島へ遷し奉ること。これぞ其はじめなる。（天平寶字八年冬十月壬申。廢ニ天皇一爲ニ淡路公一。送ニ配所一幽レ之）上皇重祚おはしまして。法王。法參議などいふ異なる爵稱いで來にけり

孝謙天皇後紀。天平神護二年冬十月壬寅。授ニ太政大臣。禪師道鏡法王一。詔曰。太政大臣朕大師爾法王乃位授末都良久止勅云々。乙巳詔法王月料。准ニ供御一。法臣大僧都。第一修行進守大禪師圓興。准ニ大納言一。法參議大律師。修行進守大禪師基眞。准ニ參

人馬皮膚曰二加波一。竹木外皮。亦謂二之加波一
人馬骨節。和名爲二布之一。竹木之節。亦讀爲二不之一
胎果也。胎果並和名美 人胎在二於腹一。因以爲二波良美一。木子
麗二于條一。直呼爲二古乃美一。卽木果也。古廼美訓見二
孝德紀一。果子。己廼美。椎子。己能美。釋日本紀曰二企能美一。果子。椎子並人名 然和名鈔。果
和名曰二久陀毛乃一。幾與レ久音通。久陀毛乃卽生二於
樹一物也。古乃美。久陀毛乃。朝野並通用
胤種也。胤種並和名多禰 人子孫相嗣。而不レ絕者。猶二五穀
種子一。蕤レ之無レ絕也。胤種同訓。職此之由。又按。
多與レ佐橫音通。種子曰二多禰一。核仁曰二佐禰一。此同
名。而稱呼自判矣
心神曰二那加古一。見二中臣祝詞一 木髓亦謂二之那加古一。見二和名鈔一
死枯也。死。書紀訓末加流枯。和訓加流留 人之生也。其肢體軟弱。至二其
死一則堅剛。草木之生也。其枝條軟弱。至二其枯一則堅
剛。死讀爲レ枯者。寔有レ由矣。末加留之言魂枯也。
魂枯。此云多末加流 魂曰レ末者。辭之省也。死一云二美末加留一。
卽身死也。死爲レ罷者非二古義一。當レ從二書紀訓釋一也
右和名之所レ出。取二之于形體一。以名二草木一耶。取二
之於草木一。以名二形體一耶。雖レ未レ審二其始一。亦足三以
見二上古聖神。命レ物之槪略一。此非二文字所一レ能。而亦
自與二字義一脗合。非二自然妙契一耶。餘嘗有二好古之
僻一。偶所二發明一如レ之。然大方之觀。非二吾之所一レ敢也。
唯便二于蒙學一耳
右一編慢倣二漢文一。既而欲レ易レ稿。乃不レ果。文義
晦澁。恐有二不レ通者一。因自施二訓點一以輔レ之

第廿一 人事　人主好レ瑞

人主老佛を溺信(そぞろうけ)て。資治冥福を求め給へば。祥瑞の
奏しば〳〵至る。佞臣惑はし易ければなり。この弊
和漢にいと多かり。そが中に。孝謙天皇。天平寶字
の竄字。又宋眞宗帝。大中祥符の天書のごときは過
ぎたり。續紀。寶字稱德孝謙皇帝前紀 天平寶字元年三月戊辰。天
皇寢殿承塵之裏。天下太平四字。自生焉。庚午勅召二
親王及群臣一。令レ見二瑞字一。これによりて。三月二十日戊辰 授レ
位賜レ祿。天下に大赦す。百官上表して瑞字を賀し奉
れり。同日 是年橘奈良麻呂。左大臣諸兄子 黃文王。安宿王。
大伴古麻呂。小野東人等と相譚て。藤原仲麻呂を殺
さんと欲し。且廢立を謀る。六月甲辰。その事發覺
して。或は獄に死し。或は流さる。八月巳丑。駿河
國益頭郡人。金刺舍人麻自(あさより)。獻下蠶兒自成レ字。其文
曰。五月八日。開二下帝釋標一。知二天皇命百年一。因國

爲ㇾ鬘。和名加通良之言髪蔓也。髪蔓。此云加美通留 又假髪曰二加通良一。卽髪也。其義亦同。鬘蔓兩字相似。始作ㇾ字者。有ㇾ意二於此一。和訓漢音。非二偶然一 再按。葛藤並和訓通通良。言加加利通良奈流也。蓋取二蔓延之義一以名ㇾ之。此與ㇾ鬘和名亦相同

髭鬚和名曰二比計一。草木細根。亦謂二之比計一

爪笋也。ツメハノメ 爪和名通兎。笋讀爲ㇾ兎 通兎之爲ㇾ言。角芽也。角芽。此云通乃兎 和名鈔云。長間笋。和名志乃兎。笋讀爲ㇾ兎者。蓋根二于此一。凡蘆荻初生。謂二之通乃久美一。卽爪組也。爪笋同訓。誠有ㇾ以也

肌膚謂二之幾兎一。木文亦謂二之幾兎一。卽標也。俗訛曰二木目一。木以ㇾ音目以ㇾ訓 卽木理也

人馬筋力曰二須知一。莖細筋。亦謂二之須知一

骨根也。骨和名保禰。根和名禰 保與ㇾ波音相通。保禰之爲ㇾ言。波根也。波根膚根也。膚根。此云波太禰 根一云古乃禰。卽根柢也。飛鳥羽毛似二木葉一。因謂二之羽一。卽葉也。和名鈔云。翮和名八禰。爾雅集註云。羽本曰ㇾ翮。一云羽根也。翮可革反 其曰二膚根一。曰二羽根一。亦取二名於草木一

臍蔕也。臍和名保曾。俗云發曾 蔕和名保曾。俗云敝多 胎生。以ㇾ臍禀二氣於其母一。猶二果蓏之蔕。通二氣於其根一也。蔕又作ㇾ蒂。字亦通用。和訓亦同。臍蔕連續。讀爲二保曾乃乎一。卽臍緖也。蔽多之爲ㇾ言。保曾乃衣它也。保與ㇾ蔽音相通。其曰二蔽多一者。辭之省也。合下用二臍條兩字一。配當上。卽蔕也

陰核和名蔽乃古。見二和名鈔一 一云玉莖。源順氏引二房內經一云。玉莖男陰也。而和名未ㇾ詳。俗直呼爲二多末久幾一。其曰ㇾ核。曰ㇾ莖。取二名於木果草蓏一。菓蓏核仁曰二左禰一。婦人前陰似ㇾ之。亦謂二之左年一。和名鈔玉門和名通微。解按。書紀陰訓保登。俗訛云二曾々。又牡々一 左年則關東方言。方書所云。廷孔是也

陰囊爲二布久利一。松柏之贅。亦曰二布久利一。利與ㇾ呂音相通。布久利之言囊也。囊和名布久呂 形狀相似。因等二其名一

人身結病曰二古布一。卽瘤也。古樹結病。亦謂二之己布一。卽癭也。然和名鈔。瘤和名曰二之比禰一。又癭。遊仙窟和訓曰二己布之一。仙窟註云。大樹癭。可ㇾ受二五斗或一石一。以盛ㇾ酒號二酒池一云々。由ㇾ此觀ㇾ之。己布之卽樹所ㇾ云之物也。而人瘤亦同稱。再按。己布之言拳也。屈手形似二木癭一。是以拳亦名曰二己布之一。其曰二己布一者。辭之省耳

木之立。猶二人並立一也。故並曰二安志一。卽多知也

脛莖也。脛和名波岐。莖和名久記　和名鈔載二釋名一云。脛胡定反莖也。言似二物莖一也。今按。波岐之言膚莖也。膚莖。此云波宅久記　音訓同義。可二以徵一也

腓（コムラ）樾（ハコムラ）也。腓樾並名古無良　腓音肥脚腓也。樾和名鈔載二纂要一曰。木枝相交下陰曰レ樾音越。和名古无良。今按。古無良之言樹叢也。人脚腓亦在二兩足相交下陰一。由レ之共訓二古無良一

蹠（ウラ）梢（ハウラ）也。蹠和名安南宇良。梢和名古須惠。一云木乃宇良　蹠與レ跖同。梢一作レ抄。草木倒生。木杪猶二人跖一也。因レ茲和名同。南與レ乃音通。安南宇良卽足裏也。物所レ殫二於上一之處曰二宇良一。季秋落葉。謂二之宇良加禮一。卽杪枯也

胯（マタ）杈（ハマタ）也。胯和名萬多。杈和名萬多布里　兩股間曰二萬多一。樹岐似レ之。又謂二之萬多布里一。布里態也。猶三木立曰二木態一也。卽杈椏也。杈椏沙鴉二音並見二和名鈔一　杈椏。一云木乃萬多。俗云杈萬多。再按。左右曰二萬天一。曰二布利一。譬如下兩鬢曰二布里和氣加民一。岐通曰上二布里和氣一。萬葉集左右讀爲二萬天一。多與レ天通。萬多布里卽有二左右一之義也

膚（ハダ）樸（ハハダ）也。膚樸並和名波宅　木皮曰二波陀一。和名鈔樸和名古波太　肌膚似レ之。又謂二之波太一

臂（ヒヂ）枅（ハヒヂ）也。臂和名比知。枅和名比知記。一云比知太　枅音鷄。承レ衡木也。臂肱似レ之。因同二其名一

毛草也。毛和名計。草和名久佐　計與二久佐之久一。音相通。挾助語也。猶二挾野挾山一。入佐還佐之佐一也。頭毛讀爲二加美乃計一。上野亦讀爲二加美通計奴一。文撰斑固兩都賦。華實之毛。則九州之上腴焉。註毛謂二草木蕃滋如三毛之生二於皮一也。後漢馬融傳。融廣成頌云。其土毛。則摧牧薦草。芳茹甘荼。注云。毛草也。左傳云。楚芋尹無宇曰。食二土之毛一。誰非二君臣一。摧音角云々。由レ此觀レ之。上毛下毛之毛亦草也。然於二和名一。未レ見下毛訓二久佐一者上。唯小兒頭瘡。俗謂二之久佐一。其瘡在二頭毛中一。毛爲レ草者似矣。雖レ然久與レ加音相通。久佐加佐也。非二其義一。再按。毛之言氣也。木亦氣也。草亦氣也。幾久計三音皆通。草木非情也。唯以レ氣繁茂者。猶乙毛髮截レ之不レ覺二其痛一也。魄之所レ不レ係。雖レ傷不レ覺二其痛一。毛髮皮爪是已　因以レ氣命レ之。又按。竹和名爲二多計一。言立毛也。立毛。此云多知計　其曰二多計一者。辭之省也。亦以レ氣名レ之

鬘蔓也。鬘蔓並和名加通良　花卉之蔓生。和名曰二加通良一。一云通流。良與レ流音通。辭之省也。頭髮美。而長者

祝二延年一。然後食レ之。命曰二齒固一。齒固。此云波加多免 以レ齒爲レ葉也

口朽也。口朽。並和名久知 言出二於口一。駟亦不レ及。物入二于口一。無レ不レ化也。竹木朽蠹亦與レ此同。有下不三朽而化。化而爲二土石一者上哉。以レ故口朽其訓同

耳蕈也。耳和名美々。蕈音歟。和名木乃美々 木耳卽木菌也。人耳與レ蕈形相似。因並和二訓美々一。美々幾々也。美與レ幾横音相通幾々聆也。但於レ蕈。添二一木字一以分別焉。木耳俗訛言二木久良計一。卽木海月也。又菌茸。和名多計。俗又譌作レ茸。因謂二之木乃古一。卽木苦也。按。茸音戎。聚貌。又亂貌。茸母草名。茸茸草盛也。非二其義一

顏頰穗也。（カホト）顏和名加保。頰和名保々。穗和名保 禾美惡係二于其穗一。男女美惡在二顏頰一因レ玆並訓レ保。加保之言貌穗也。顏頰猶二五穀之有一レ穗。又一說。保々爲二不久武之不一。凡五穀之穗。未レ出二外皮一者。猶如二含哺貌一。其義亦通

首株也。首和名加字倍。俗云久備 株和名久比耑。俗云加武 首頭氣之所レ集。根株猶二首頭一也。但草木倒生。上下異焉耳。故人馘二其首一則死。草木斷二其根一。不二亦活一。加武與二加字倍一。久備與二久比耑一。其訓相近。凡戴レ頭之物。謂二之加武一冠弁。和名加武里 被蒙和訓同レ上 蓋和訓所レ因取二義於根株一者乎

身幹也。身和名美。幹和名美幾 人之一身。猶二一幹木一也。由レ此和訓同。幹謂二之身木一。添二一木字一。以判二人樹一也。

體亦幹也。體和名加武羅。俗云加羅它。幹一云加羅 體有形總稱。幹竹木總名也。因レ玆並訓二加武羅一。其言二加羅一者。辭之省也。又五穀枯莖。亦謂二之加羅一。卽殼也。人馬死體。亦謂二之加羅一。又謂二之南記加良一。卽亡骸也。只於二稻麥一。謂二之和良一。卽稾也。加與レ和横音相通。和羅亦加羅也。加羅加禮也。羅與レ禮音通 加禮枯也 其物雖レ死。尙有二六骸在一。取二草木枯槁之義一。以爲二加羅一。又按。殼者堅剛也。唯於レ稾爲二柔和一。故相名曰二和加羅一。其謂二和羅一者。蓋辭之省也

肢枝條也。（エダ）肢與二枝條一。和名並荏它 人之四肢與二樹之枝條一相似。是以和訓同。字亦相似

手亦枝也。（エ）手枝並和訓荏氐 與レ衣横音相通。訓義與二肢枝一同

指亦條也。（エ）指和名由比 條和訓衣 人指猶二枝之有一レ條。由比之言條躬也。條躬。此云衣美 由衣音相通。比與レ美横音亦通

足拉也。足和名安志。拉正字通。拉音臘。與レ拉通 又拉下云。俗邀レ人同行曰レ拉。和訓多知 樹腰曰二本多知一。安與レ多。之與レ知横音通。本多知卽樹足也衆

説は李時珍が綱目十二参下に引きたり。名醫別錄に出でたるならん。たづぬべし

第二十植物

草木身體同訓考 此編多言人身體。而收之草木部門者。蓋從其類也

老氏曰。道可道。非常道。名可名。非常名。此空洞靜默之教耳。若夫自非造化陶甄萬物。聖人名之之妙。何由指事造形用辨牛馬哉。故有物必有名。有名必有原。物則物。而名之者人也。人取而名之。人亦取而呼之。人人日相呼。不知所以名之。譬如匹夫不知其祖之所出。動物不知其名之在我。雖則不知之。非今之急務。是以措而不省者。比比皆是。昔者齋部宿禰。撰次古語拾遺。深江博士。輯錄本草和名。至源能州和名類聚最備矣。而若彼三書。唯足知其和名。未嘗足諦其基本。天下昇平二百有餘年矣。文化大闡。鑿說之勉。於是乎釋名書出。而其書雜以他事。未得見如郭璞註爾雅。劉秋孫釋名物也。其他曲學暗記者。蘉字形。以辨事物。傅會故事以釋名義。非但不知古人格物窮理之深。亦唯惹嗤笑於大方。可謂謬矣。愚竊以謂。人之形體。命之以草木。所以然者何也。蓋萬物生於水。水之所逝。必生土。土之所厚。生草木。有草木然後。人倫鳥獸生焉。故草木。以土爲命根。人倫鳥獸。以草木爲食。由此觀之。草木動物原同根。古人命物之妙。於是可知也。雖然淵源窅然也。未嘗有筆之於書者。先哲既闕如考据。以臆度不可談悉。解也何者。敢欲坐井窺天。而所發明。聊以釋其義。雖不足示人。推一理涉萬理。則思過半矣。但所輯錄不廣。所稽攷未悉。姑存稿以備遺忘

目芽也。目芽。並和名免 目之言視也。明也。眼目雖明。非藉太陽。不能視物。猶草木之芽。非遇陽春清明之節。則不能萌也。以此目芽並訓免

鼻花也。鼻花。並和名波南 鼻之爲言端也。兒之生于子宮。形貌端於鼻梁。草木之結子也。非花則莫有之。其義亦同

齒葉也。齒葉。並和名波 齒之爲言蓄也。齒牙脫落。如秋葉一般。嘗有松柏能堪霜在。人亦有似之。老而齒牙堅固者。其命亦隨長矣。是故齒訓與波比。齡也。和訓音漢同義國俗毎遇春初令巨餅固。飾以松柏類各

あらきを見てはたまりやはせん

左京大夫行家 又作信實

いかにしてかきほに生ふるにこ草の
にこ〱とのみ妹にあひ見ん

右大辨入道光俊

右の歌。またく人參をよまれたるよしは聞えず。さしも名たゝる歌よみたちにおはすれば。なほよしある事にや。こゝろ得がたし。是も亦葛の如くて。似兒草の義を得考へず。斯くよまれたるもの歟。わきて河風のあら立つほとり。蘆荻とゝもに生ひ茂る人參ありとしもおもほえず。況や。その葉を摘みとりて。茹てたうべることはあらじ。萬葉集なる似兒草と。後々のにこ草は。彼江南の橘の枳になる類にやあらん。そはとまれかくもあれ。萬葉集に歌あれば。古より大御國に。人參自生せしといふ。亦是一の證なり。むかし人參ありといへども。世間に稀なるのみ。有りがたき聖の御世に。生れあひ奉りぬる福は。今この物の得やすきにも。よく思ふべき事なるべし。かくまでめでたき神草なれども。詩に賦し。歌によめるもの。いと少きは遺恨の事なり。よりて年來これ彼と。和漢の書ども渉獵るものから。あさりかねてかくぞよみける

吉野人參　見ぬかたの花はともあれよしの山
かのにけ草をなほもたづねん

熊野人參　くすりとる春のみくま野にこ草の
おふてふかひに山もみえつゝ

歌は得意にあらねども。余は郭隗よりはじむるのみ。諸賢是より詠歌あらん歟。又から歌和歌より稀なり。われのみならで淸人なる。王士禎もこの事をいへり。唐詩紀事より見出だしゝとて。そが隨筆に載せたりける。段成式求二人蔘一詩云

少賦令才猶强作。衆醫多失不レ能レ呼。九莖神草眞難レ得。五葉靈根許惠無

周繇遺二柯古人蔘一詩云

人形上品傳二方志一。我得二眞英一。自紫團。慙非二叔子一空持レ藥。更請伯言當二細看一

高麗人參譜有レ讃云

三椏五葉　背レ陽向レ陰　欲二來求一レ我　椵樹相尋

陶弘景注云。椵音賈。樹似レ桐甚大。陰廣則多レ生。采作甚有レ法。今近山亦有レ之。但作レ之不レ好。陶が

きたり。言葉は似てこゝろ異なるべし。和草を。わかくさとよむべしといふ説あれども。似兒を女子によせて。彼皇后のおん績を詠めるなれば。和は似兒なり。此歌。生漢こゝろもて聞くときは。酉陽雜俎卷十九草篇に載せたる。天名精。和名はまたかな一名はまふくら宋の劉燼が燼事にやと思ひ誤ることもあるべし。天名精。一名鹿活草。本草作二活鹿草一一名劉燼草。國俗は。ゐのしり草。大和本草やぶたゞこ。若水本草和訓など唱へて。人參には似るべくもあらぬ草なり。又

同書第廿　秋風爾奈妣久可波備能爾故具佐能。二古餘可爾之母於毛保由流香母

こは七夕八首と題せし一うたなり。人參は水邊に生ふるものならずと疑ふものもあらん歟。人參は山澤濕地を嫌はず。好みて巨樹の蔭にありて。よく生長するものなり。說見二本綱人參集解一吉野の溪澗方。固よりその所なり。故なくて。川澤汀渚によめるにあらず。可波備は河邊なり。備與レ邊音相通こゝには天漢をいふなり。吉野山の麓に。天の川と唱ふる處あり。この歌にかなへり。空海の行ひし處にて。故たる地名とぞいふなるたづぬべし。天の河は。吉野山の西。五色小原の東にあり。こゝに辨天堂あり。天の河の辨天と唱ふ

又人參は陽に背き。陰に向ふ神草なり。よりて七夕によみ合したり。されば。似兒草に女子の義をよせて。靡く云々とよめり。二古餘可は。牛女相見て悦ぶ貌。前にもいへる莞然なり。抑この四歌の解は。愚按と前輩の說と。故らに鉾盾すなれば。なほ信けざるものもあるべし。余は唯似兒草の義を解かんとて。しれたる事も諄々と言長やかになりにたり。右萬葉集なる似兒草は。人參ならずといふものなく。かくまで證歌明白なれども。後々に至りては。こゝろ得がたき歌なきにあらず。されば。又

おく霜に枯れにけらしな足柄の
箱根のねろに茂るにこぐさ　衣笠内大臣

あし垣の中のにこ草まちかくて
茂る思ひのほとはしらなん　大納言爲家卿

新撰六帖第六　河風もあらたつ夜半のにこ草の
にこくきよする波のまぞなき　三位入道知家卿

にこ草をつむやかたみのめをあらみ

から咲みて。人になしられそ。と誡めたるなり。にこ草といふをかさねて。にこよかとつゞけたり。爾故余漢は莞然なり。これ疑ふべくもあらぬ。人參の歌ならずや。一說に。にこ草を嫺草と釋し。萬葉集略解十一下には。和名鈔なる葳蕤(ゑみくさ)。和名惠美久佐これにやといへれど。共に從ひかたし。又

同書第十四　安思我里乃波古禰能禰呂乃爾古久佐能。波奈都豆麻奈禮也比母登可受禰牟

安思我里は。足柄なり。峰呂の呂は助辭なり。野を野良といふが如し。人參は。人形なるを貴めるものなれば。土偶木偶を。似兒草によせて。箱根は箱といはん爲なり。箱といふによりて。紐解かず寢んと詠みたり。花都豆麻は。一說に花つぼみと釋し。略解には。下の豆もじを衍文と見て。花妻は。實ならず咲めるの義といへり。孰にまれ。似兒の義に害なし。又人參は。箱根に生ふるものならずと疑ふものあらん歟。彼節人參てふ物は。彼處になしとすべからず。只箱根を詠めるにより。似兒とつゞけ。似兒草といはん爲に。箱根によみたるなれば。こゝらの穿鑿には拘はるまじき事なり。又

同書第十六　所射鹿乎認河邊之和草身若可倍爾佐宿之兒等波母

所射鹿乎認とは。射られたる鹿の蹤血(はかり)を認むるなり。河邊は。吉野川のほとりをいふなるべし。書紀。雄略紀五年春二月。校ニ獵于葛城山一云々。于レ時嗔豬直來。欲レ噬ニ天皇一。天皇用レ弓刺止。擧レ足踏殺。といふ故事を取れり。こゝには鹿とありても。シシとよむべし。舊板にはしかと點せり誤なり　吉野葛城山は。人參の生ふる處なり。よりて雄略の故事によせてよめるなり。和草の和は假字なり。歌のこゝろは。雄略の皇后。幡梭姫皇女。天皇を諫めまつりて。舍人を救ひ給ひしことあり。事詳ニ于雄略紀一　そのおん功德。人參の病者を救ふに等しとまうさん。これらのよしを思ひよせて。かくは詠みたるなるべし。佐宿之の佐は助辭なり。兒等は女子をいふ。こゝには皇后の車駕に從ひまつりて。葛城山に赴き玉へるよしなり。草といふにむかへて。身若可倍にとよめり。この歌。古今六帖第六には。身わかきうへにとあり。宣長は身わかきかひにと釋けるよし。略解にいへり。同書には齊明紀の御歌を引

參をおそる、といふ事實なくは。臆說なるべし。鹿醫草も亦おなじ。麋鹿の芻を呑みて反出し。又これを嚼を齝といふ。さる故事は人參に。これあるよしを聞ざるなり。しからばいづれを是とすといふに。余をもてこれを辨ずれは。鹿逃草を的實とすべし。さばれ書を引きて。その淵源を諦にあらねば。これも亦偶中に似たり。按ずるに。梁書。五十一列傳。第四十五阮孝緒傳云。阮孝緒字士宗。陣留尉氏人也。父彥之。宋太尉從事中郎。孝緒云々。後於二鍾山一聽レ講。母王氏忽有レ疾。兄弟欲レ召レ之。母曰。孝緒至性冥通。當二自到一。果心驚而返。隣里嗟二異之一。合レ藥。須レ得二生人薓一。舊傳鍾山所レ出。孝緒躬歷二幽險一。累レ日不レ値。忽見二一鹿前行一。孝緒感而隨レ後。至二一所一。遂滅就視。果獲二此草一。母得レ服レ之遂愈。時皆歎二其孝感所一レ致といへり。むかし天朝の博士。この故事を引き出で、。人參の和名に取れり。逃の字に味ひあり。右の滅の字とむかへて見るべし。阮孝緒に。鄕導せし鹿は滅せて。そのほとりに。人參を獲つるにより。和名を鹿の逃草と唱へたるなり。人參の漢名くさ〴〵なれども。彼處の名醫。博士等さへに。この故事を漏らし、はいかにぞや。その至孝と。鍾薓の奇效と。纔に和名に取られしは。阮孝緒が幸ひといふべし。又一名を爾己太といふよしは。人參は人形なるもの。神ありといふを取れり。爾己太はこれ似兒草なり。左と太と横音通。久佐の轡卽太なり。李時珍云。人參其根如二人形一者有レ神。又云。人參似二人形一者。謂二之孩兒參一。本綱十二といへるに合へり。これらの證は。萬葉集に。人參の歌あり。歌には似兒くさとよめり。是則人參なり

萬葉集第十一　蘆垣乃中之似兒草爾故餘漢。我共咲
爲人爾所知名

歌のこゝろは。廣五行志曰。隋文帝時。上黨有レ人。宅後。每レ夜。聞二人呼聲一。求レ之不レ得。去レ宅一里許。見二人參枝葉異常一。掘レ之入レ地五尺。得三人參一如二人體一。五雜俎云。千年人參。根作二人形一。千年枸杞。根作二狗形一。中夜時出遊戲。烹而食レ之。能成二地仙一。然二物固難レ遇。亦難レ知也。見二卷十一一。四肢畢備。呼聲遂絕。本綱參集解又抱朴子。外篇枸杞千歲。化爲二蒼狗一。人參千歲。化爲二小兒一。などいふ事あれば。これらの故事を取れり。蘆垣は。藥園の籬笆をいふ。小兒は人を見て。よく咲むものなり。よりて此藥園の垣の内なる人參も。小兒になりつゝ。われ

參は苦味なし。藥店にて鬻く。節人參とおなじからず。その苗を藥園中に移し植うれば。年を歴て三椏五葉を生ずといふ。熊野山最善。その辨。伊勢松坂なる○松本元治が。鬚人參種植法といふものに見えたり。採參製方。略文なれども趣あり。よしや朝鮮の種人參に及はずともその効なしとすべからず。か丶れば熊野吉野の兩巒には。いにしへより山生の人參あり。只多からざる故に。人これをいはず。節人參と相混じて。眞僞を辨ずるに及はざりし歟。和名も共に混相じて。人參の一名に入れられたるにやあらん。譬へば。本草綱目巻之十二に。人參の氣味を錄して。甘微寒。無毒。別錄曰。微溫。吳普云。神農小寒。桐君。雷公。苦。黃帝。岐伯。甘無毒。といへるが如し。上古異邦の良醫。各人參の氣味を辨じて。或は甘しとし。或は苦しとす。その苦とするものは。節人參をいふ歟。その甘とするものは。眞の人參をいふ歟。氣味混雜。今にして判べからず。こ丶をもて餘は。上古より皇國に人參あり。そのくまのいといふものは。高麗參歟。然らずは節人參ならんと思へり。されば。秦の徐福。神藥を求めつ丶。竟に熊野に來住りしといふ。この事國史には載せられず。古俗の臆度に出つるものから。そのよしなしとすべからず。或云。紀伊國熊野山下。飛鳥之地。有徐福墳。又熊野新宮東南。名蓬萊山。有徐福祠。當初徐福が稱へたる。蓬萊の神藥は。熊野に生ふる人參ならん歟。これも亦しるべからず。件の方士が海に入り。蓬萊に赴きて。神藥を求むといふ事は。史記。巻六秦始皇帝本紀。二十八年及三十七年に見えたり。徐福。史記作徐市又徐福が海東に止りしといふ事は。後漢書。巻七十五東夷傳。倭國の後にいへり。後漢書には。夷州及澶洲。これ徐福が止りし處なりといへり。並に日本の海島を指すのみ。いづれの國なるをしらず昔舶來の藥物なき時も。良醫はおのづから良醫にして。治療に事を缺ざりけん。上世には文字なくて。方書の傳はらざるを遺憾とすべし。又神農本經解故巻四に人參の和名解を集錄して云。人參。和名加邪尼傑古察。埵囊鈔。譯曰鹿齡草。藍水譯曰鹿逃草。大州譯曰蚊逃草。又曰香逃草。大州曰。人參歷年者有香氣。枯時土皆有臭氣。故名香逃草。一名古馬那衣。白石譯曰神草。秀菴譯曰熊膽。未知孰是といへり。諸說鉾盾して。多く的らず。香は耗とこそいふなるに。香の逃るといふことは。雅俗並にいふべくもあらず。又蚊は。人

只朝貌のみ。當初書きおけるものを見ず。今。朝貌をめづる人。こゝらに考索ありやしらず。縦。今にして眞黄なるものを得たりとも。元祿以來の二の町なり。彼隋唐の世に。牡丹に黄花淺紅のものなしといへるも同日の談なるべし。件の物見車は。柳淵歩雲といふもの。獨吟の歌仙を。當時高名なる俳諧師。二十餘人に判を乞ひ。これに自評を加へつゝ。その巧拙を辨論せり。園水が牘牛は。物見車の返報なり

第十九植物　人參和名考並詩歌

人蔘（にんじん）又作二人參一は。本草和名に。和名加乃爾介久佐。一名爾己太。一名久末乃以といへり。（和名鈔無二一名爾己太一）前輩の説に。いにしへは皇國に人參なし。當初人參と唱へたるは沙參なり。故に和名を熊の膽といふ。その味。苦惡なることと。彼と等しきによりてなりといへり。（又苦參といふものもあり）沙參は。和名鈔に載せざればなるべし。しかれども。本草和名に沙參あり。和名詳ならざれども。古より沙參はおのづから沙參なり。（俗にとゝきといふ。又つりかれ草と云ふ）按ずるに。續紀。（聖武紀）天平十一年十二月戊辰。渤海郡王欽武が。（渤海此云不加民。舊名高麗國即此）調獻りし。方物四種のうちに。人參三十斤あり。高麗より人參を渡し、こと。國史に見はれたるは。此御時をはじめとす。彼處の人參なかりし世には。熊野葛城など。我邦山生の人參を。用ひられしなるべし。又彼一名くまのいの義は定かならず。今試にこれを釋かば。くまのいは高麗參（こまのし）の義歟。くとこと音通へり。いとしと横音亦かよへり。又高麗醫の義歟。醫はくすりなり。醫師をくすしといふが如し。音訓うちまかして唱ふること。中葉よりその例多かり。かゝればかのにけくさ。又にこたは。本邦自生の人參なり。又くまのいは。高麗なる人參の和名にもやありつらん。又彼熊膽の義とするものを助けてこれを解くときは。皇國にて人參といふに二種あり。その一種は。節人參是なり。此節人參といふものは。その葉芹に似て。細根（ひげ）多かり。山中陰濕の地に自生。今はこれを鬚人參と唱ふ。節人參はその根なり。（大和本草）味苦くして。氣を泄すものなり。故に和名して。熊の膽といふ歟。こは人參に代へて効なし。又かのにげ草。一名にこたと唱ふるものは。眞の人參なるべし。何となれば。今も紀伊なる熊野山。大和なる吉野山に生ふる人

永叔が視を經る所。人の稱するものを取りて。纔に二十餘種を出だせり。かゝれば我寶永の四十餘種。寔に寡きにあらず。寶永を眞盛にして。この花漸々に衰へたり。さばれ余が總角のころまでは。駒込のあなた。西が原てふ處に。茶器を鬻く。牡丹屋とかいふもの丶別莊に。多く牡丹を植ゑしかば。俗に牡丹屋敷と呼び倣したり。そが家號を牡丹屋といひつるも。牡丹を愛るによりてなるべし。これもはや夢と覺めけん。今は彼處に。さるものありとしも聞えず。海內に名產輻湊して。よろづに乏しからぬ大江戸なれども。今にして牡丹の生花を見んことは。三千歲に一たび花さくといふ。優鉢羅花よりもかたくなりぬ。明の謝肇淛が洛陽の牡丹を論じて。氣運有時而盛衰耶。といひけん宜なり。今の俗に弄べる牽牛花も。亦復かくの如くならん。花卉の樂みに志を移しつゝ。可惜日を消さん事は。小丈夫の所爲にしあれど。彼も一時なり。此も一時なり。かくいふも。後は昔ぞ。さめやすき。千朵の花の色よりも。うつるは人のこゝろならずや

因にいふ。この兩三年來の刻本。牽牛品。及朝貌通を閲するに。異樣雜色。數十種を載せたり。しかれども黑牽牛はさらなり。黃花も亦稀なり。好むもの丶云。今年眞黃處々に出つ。これ未曾有の奇品なりといへり。按ずるに。元祿三年の印本。俳諧物見車の卷端に。朝貌に黃あり白きありといふ腰句を出だして。當時の俳諧師。似船。晚山。言水等數人に。上の五文字をおかせたるに。似船は末の世や云々。常牧は僭いかに云々。我黑は時世かな云々。晚山は蝕の夜や云々。と五文字を冠らせたり。又如泉は。當分は五もじ置きかね申し候と辭し。言水は朝貌に黃なるは稀なりとのみいひて。五文字を置かず。方山は返答もせざりしよしを。その名の上に注したり。この事は北條團水が牘牛に飽まで辨じたれども。こゝに要なければ贅せず。よりて思ふに。天和貞享のころ。牽牛花の流行せしことあるなるべし。もししからずは。黃花は今も稀なるに。當初あるべうもあらず。あらずは黃あり白ありといふべからず。元祿の椿白椿譜今なほあり。寶永の牡丹は。牡丹論談に輯錄し。寛政の橘は。橘品論とかいふもの出でたり。

爲二李才元一。題二蜀中花圖一詩小序云。香故難レ畫。蘂亦不レ露。工人非二特減一其圍耳。去年入レ洛。有下獻二黄花一乞レ名者上。谿公名レ之曰二女直黄一。又有下獻二淺紅一者上。鎮名レ之曰二粧紅一。二花洛人盛傳。然此花樣差小。就二洛陽一求二接頭一。若レ得二二種一。在二其間一善。載二于事文後集三十一一 當時の諸名公。諱子華。韓持國。司馬君實。范堯夫等。次韶の詩あり。又張劭が黄牡丹の詩あり。咏物詩選卷之七に見えたり 或說はこれらに因りていふ歟。しかれども酉陽雜俎卷十九草編 云。牡丹前史中無二說處一。唯謝康樂集中言。竹間水際多二牡丹一。成式撿二隋朝種植法七十卷中一。初不レ記說二牡丹一。則知二隋朝花藥中所レ無也。開元末裴士淹爲二郞官一。奉二使幽冀一。廻至二汾州衆香寺一。得二白牡丹一窠一植二於長安私第一。天寶中爲二都下一奇賞。又云。與唐寺有二牡丹一窠一。元和中著レ花一千二百朶。其色有二正暈。倒暈。淺紅。淺紫。黄白檀等一。獨無二深紅一。又事物紀原。卷十 牡丹下云。至德中。唐肅宗年號 馬僕射。又得二紅紫二色者一移二於城中一。青瑣集有二隋朝海山記一。中得二牡丹品一甚多。かかれば隋の時。尚牡丹に雜色あり。唐の時に黄花淺紅なしと思ふはたがへり。但深紅のものなしといふは一定ならん歟。淸の康熙中には。綠牡丹黒牡丹さへありとなん。見二池北偶談卷二十五一 造化も人の好むまゝに。工を盡さゞることなし。しかはあれども。壯なるものは必衰ふ。元明に至りては。洛陽に牡丹聞ゆることなしといへり。五雜俎物部の二に辨あり 本邦にても。近世牡丹を鍾愛することと盛になりしかば。種々の異名さへ負はして。吟味せざるものなかりき。されば寶永の比に至りて。この花を弄ぶこと。異朝唐宋の時に讓らず。當時春桃散人といふもの。牡丹論談一卷を著はしたり。こは寶永八年二月上旬の事なり。撰者の自序に云。春の日の夕ぐれにさへなりぬればと讀みたる人は。その花のふかみ草をしらぬ類なるべし。まことに紅白相まじへて咲き出づるさま。近來の人擧りて樂とせざることなしといへり。かくてその書に志せる牡丹四十三種なり。花毎に注釋あり。詳にして且盡くせり。卷尾に丹花名四十三色也。獨遊軒無會と寫して花押あり。花合の會主なる歟。當時の流行想像るべし。寬永の巨菊。元祿の百椿。ちかくは寬政の橘。昨今の牽牛花と。異なることあらじかし。おもふに歐陽氏牡丹譜に載するもの九十餘種。こは錢思公が嘗輯錄しつるものにこそあなれ。花品敍には。

くはいへども。同名異物。和漢に多かり。（右に錄せし。釋藥性に。牡丹の一名を白朮といふが如し）彼一説に泥むもの。萬葉集なる山橘を。牡丹なりと思ふはたがへり。この他。古今集。（十三）新撰六帖。（第六）夫木鈔。（廿八）等に見えたる山たちばなの歌も。皆平地木をよみたるなり。こは萬葉集を。よくも見ざるもの、爲にいふのみ。牡丹はふかみぐさといはんこそ。正しき和名なるべけれ。今さまざまなる異名を負はするはうるさし

夫木鈔（廿八）夏木たち庭の野すぢの石の上に
みちて色こきふかみぐさ哉　慈鎭和尚

この他。ふかみ草を詠める歌あまたあれども。連歌にのみ。肖柏が「春さかぬこゝろや花のふかみ草。」獨その名を擅にせり。牡丹は皇國にても。いにしへは藥劑にのみ用ひて。花を弄ぶことは聞えず。大治保延のころなどより。宮中にも植ゑさせ給ひけるにや。詞花集（第一）に。新院位におはしまし、時。牡丹をよませ給ひけるに。よみ侍りける。關白大政大臣

「さきしよりちりはつるまで見し程に。花のもとにてはつかへにけり。廿日經に仕をかけてよみ給へり。右のよみ人關白太政大臣は。藤原忠通公なり。當時新院と唱へ奉りしは。崇德院の御事なり。又本朝無題詩。（卷之二植物部）藤原通憲少納言（法名信西）が。牡丹の詩に云。唯惜飄々風底色。不堪二十日間粧これらの詩歌は。白居易が詩に本つくならん。長慶集を考ふべし。か、れば廿日草てふ名も。由來ふりたり。又同書。大江匡房の牡丹の詩に云。對花日夜倚欄干再三沈吟憐牡丹。○法性寺殿（忠通）の歌は。右の兩詩句とおのづからに合へり。前後ありといへども。皆同時の人なり。（匡房卿は。鳥羽院の天仁二年七月五日薨。忠通公は二條院の長寛二年二月十九日薨。通憲入道は。平治元年十二月九日。田原の奥大道寺の坑に竄れて。次の日に殺さる）又本草綱目。牡丹釋名。李時珍云。以色赤爲上。雖結子。而根生苗。故謂之牡丹。○本經解故。（卷八）載通志略云。古言木芍藥是牡丹。牡丹初無名。故依芍藥以爲名。亦如木芙蓉之依芙蓉以爲名也。唯これのみならず。古人既に。唐李綽尙書古實。歐陽永叔牡丹譜。劉公嘉話。鶴林玉露。五雜俎等を引きて。牡丹の事をいふもの多かり。今贅せず。或はいふ。牡丹は唐の武后の時より。盛になりぬといへども。花に五色を出だし、は。宋に至りてなりといへり。按ずるに。宋范景仁

でたき松なれども。遠き境の事なれば。ありとしも人しること稀なり。およそは人の子孫として。その祖を仰ぐ眞實こゝろ。誰もかくこそあるべけれと思ふばかりにこゝに出だしつ

第十八植物　山牡丹 附出山橘

山牡丹は。苑圃中に植うるものとおなじからず。我邦にはこれなしといふものあり。しかれども。煙霞綺談巻四云。遠州秋葉山の麓。いぬゐ川の上なる。京丸といふ小村の片邊り。嶮岨なる山の半腹に。大木二本あり。その一本は。遠くより見る所。凡四圍許。又一本は二圍もあらんかし。初夏に花開を見れば。その色白く。徑尺許に見ゆるなり。これ牡丹なりといへり。ちかき比。その村なる人に問ひけるに。これまぎれもなき牡丹なりといへりとしるせり。鈴木素行神農本經解故巻八云。本邦牡丹。無二山生者一。惟遠江州山中有レ之云。未レ詳といひしは。彼京丸なる山牡丹を仄に傳へ聞きたるなるべし。按ずるに謝肇淛五雜組物部二云。余在二嘉興呉江一。所レ見牡丹。廼有二丈餘者一。開レ花至二三五百朶一。北方未二嘗有一也。かゝれば唐山にも。牡丹に巨大なるもの。罕にはありと見えたり。我遠江なる山牡丹も。そら言にはあらぬなるべし。又堯憲深祕抄に。山橘は牡丹なりといへり。是よりして後。萬葉集に牡丹の歌ありといふものさへあるはこゝろえがたし

萬葉集第四　足引之山橘乃色丹出而語言繼而相事毛將有　　春日王

同第十九　此雪之消遺時爾去來歸奈山橘之實光毛將見　　大伴家持

同第二十　氣能己里乃由伎爾安倍弖流安之比奇之夜麻多知波奈乎都刀爾通彌許奈

けのこりは。頃日なり。雪にあへてるは。萬葉略解廿下に。相照なりといへり。つとにつみこなは。家裹に摘來なり。こゝにいふ山橘は。藪柑子の事なり。大和本草巻十一園木部平地木の集解に。遵生八牋。畫譜。濟世全書。及古今集欒雅が注を引きて。俗にいふ藪柑子なりといへり。しかれども。大醫博士深江輔仁深江。日本紀略作二深根一。見二醍醐紀一。延喜十八年戊寅九月十七日條下本草和名上巻云。牡丹。一名鹿韭。一名鼠姑。一名百兩金。出二蘇敬注一一名白朮。出二釋藥性一和名布加美久佐。一名也末多知波奈といへり。かゝれば。深祕抄なる説を。僻事としもいひがたし。か

眼を病むものは。この樹の虛なる水を乞ひ得て。竹筒にたくはへ。携へかへりて眼を洗へば。果して應驗ありといふ。原この松蔭に。山王の禿倉あり。更に件の松を齋祀て。平松權現と號く。丙子の初冬。余は輿繼に扶掖れて。江島に遊べるかへるさ。目擊する所なり。木たちのさま。よのつねの物にしてッ守渡の千貫松には似るべくもあらず。杪繁からで。只向上るばかりなるを。などて平松となづけゝん。むかひて左なる大枝は折れたり。二十とせばかりさきの年。雷の落ちたることありけり。そのとき折られたりといふ。茶店の翁が問はずかたりいとをかし。然らばなほその頃は。この樹に靈のあらざるなめり。現に。數百年なる物とは見えず。いかなる草鞋大王が。凡夫の爲に福ひして。飽まで齋きまつられけん。生物識のかなしさは。いと解しがたきことにぞありける。（以下孫ニ子　天道松一）

豐後國國崎郡富永村に。一株の壽松あり。土人名つけて天道松といふ。この松名たゝる古樹なれば。又その地に字して。天道寺と唱へたり。傳へ聞く。むかし鄕士に田邊氏あり。子孫の後榮を天つ神に祈りつゝ。手つから植ゑたる小松なん。この松にはありける。そが末葉。田邊文通稱主計てふ弱冠は。いぬる乙亥の夏より。秋のなかばまで。兩子寺の住持ᶜ豪圓法印に倶して。しば〳〵弊屋に來つるものなり。文かねて。件の樹の下に。碑を立てまくほりす。よりて余に。彼松の由來を告げて。その歌を乞へるものから。當りがたきわざなれば。輙くうけも引かざりしに。彼人歸國の後々も。なほ郵書もてねもころに。乞ひ求むることはじめのごとし。竟に推辭に言葉なければ。件の松の由來を略記し。拙詠一うたを創しつゝ。はる〴〵豐後へつかはし、詠草左の如し

天道松記

豐後國國埼郡富永村なる記とふ松ハむかし田邊氏の遠つおや兒孫のはらえを天に祈りて手はから植さるぬさの木なりされバ年を歷世を累ましふ松もうまこも志けまつそれ枝九かとふさかれさかえくようそく里人等その地を天道寺と字しその樹を天道松と唱ふ今茲田邊のやから謀らひつ石を松の側に立すて標とはといふ祖先の德を仰くなるべし

植そくよ利ふ世ふふる枝のさかみとりぬしやうまこハ富永の松

文化丁丑秋日　荏土　曲亭瀧澤解題詠并書

富永村の名にしおひて。親族九軒にわかるといふ。いと美むべき榮ならずや。さればとて恥かゞやかしき筆すさびを。謾に賣弄するにあらず。かくまでめ

て。件の大楯檜に擬したるにてもあらんか。むかし道次なる石神。或はふりたる樹に注連して。神とし祭ること。皇國の習俗なり。琉球國にも。これらの事あり。琉球事略に見えたり正月には神を祭り。よろづ祝ぐものなれば。彼楯檜に換ふるに。松を用てし。これを石神樹神に象りて。注連引き続らし。各門に立てたるならん。この事田舍にはじまりて。後に京師に移りしかば。後々までも。賤が門松と詠みたるなり。今も箱根の山家にては。正月。門に松を立てずして。大きなる莽草を立つ。豊後にもさる處あり。榊を立つる處もありといふ。榊を立つることは。惟宗孝言の詩句より起る歟。本朝無題詩巻五。雑部長齋之間。以レ詩代レ書。呈ニ江才子一。惟宗孝言

占レ期百日潔齋處。正月春中開ニ四慵一。持レ案法華應ニ聖藻一。鎖レ門賢木換ニ貞松一。近來世俗。皆以レ松押ニ門戸一。而余以ニ賢木一換レ之。故云西方晩觀素無レ怠。南无曉聲令レ不レ慵。戴土石山君所レ樂。我猶致レ信是金峰

こは齋戒のをりなれば。榊をもて。松にかへたるよしなり。これらの事を傳へ聞きて。田舍にても。齋する家には。榊を立てたるにより。それさへ例となりたるもの歟。莽草を立つるもおなじすぢにて。清淨を宗とするなるべし。挿は刺し入るゝなり。俗挿又挿に作る。孝言の自注に。世俗皆以松挿門戸といへば。門松もはじめは節分の柊の如く。小松を門に挿みたるやうに聞ゆれども。既に堀河百首。顕季卿の歌。及林葉集俊惠法師の歌に。門松營み立つるとよみ。或はこの門松をわけ來つゝとよみたれば。今と異なるべくもあらず。小松を門に挿む家も。今稀にあり。挿の字によりて疑をなすべからず

第十七植物 三浦平松 國崎天道松附出

相摸國三浦郡。一色村にふりたる松ありけり。土人これを平松と唱ふ。松のある處。守渡より浦賀路を。十五六町なるべし。近きころより。件の松に靈あり。祈ればよろづの病著平愈すとて。近郷の人はさらなり。江戸より詣るも亦多かり。その詣るもの。線香を樹下に立て、。默禱す。願事成就の日は。各芝を蓺ゑ。小幟を建て、。賽せざるものなし。小坪の漁夫等。海の幸なきとき。この幟を借りて。その船にたつれば。究めて獲多しとなん。松の前面なる端山の裾に。いとわびたる茶店ありて。線香を鬻けり。

なり。門松の事なりとしるせり。む月二日。大内の御門に。松立て給ひし事ありと見えたり。これも亦おが玉の木にして。門神にひもろけとり付け侍る事にこそといへり。解云。右にいへる爲尹卿の歌は

爲尹卿千首　今朝は又都の手ぶりひきかへて
ちひろのみしめ賤が門松

爲尹卿は。諸家大系圖（第六）に見えたり。權大納言爲氏卿（これを頭流とす）六世。中將（一云大納言）爲邦卿の子。左中將正三位。應永中の人なり。（一書に。應永二十四年正月廿四日薨。爲秀の子とするものは非なり。爲秀卿の孫なり）藏玉集も。おなじ時代の歌書にて。奥書に。二條攝政良基公（後小松院のおん時。攝政し給へり）注進し給ふよしいへり。按ずるに門松立つることは。應永より三百餘年前。堀河院のおん時よりこれあり

堀河百首（中除夜）門松をいとなみ立つるその程に
春明かたのよや成りぬらん
従三位修理大夫　藤原顯季

又俊惠法師が林葉集（六雜）に。正月三日。人のもとにまかりたりしに。中門に松をたて、。祝はれたりしかば

春にあへるこの門松をわけ來つゝ
われも千世へんうちに入りぬる

林葉集は。俊惠法師の家の集なり。俊惠は俊賴朝臣の子なりといへばこれもふるし。又

拾玉集五　我思ふ君がすみかのおもかげは
松たつ門の春のけしきに
大將軍

拾玉集は。慈鎭和尚の家の集なり。右のよみ人。大將軍は賴朝卿なり。その書の五の卷に。慈鎭和尚と鎌倉幕府と。贈答の歌あまたあり。是その一うたなり。かゝれば門松の事。堀河のおん時より。連綿として證歌あり。されば公事ならざれば。年中行事などへは入れられず。故に濫觴は定かならざるなり。推して說をなすときは。徃古春正月の朔每に。宮城の中門外に。大楯槍を樹てらる（大禮の時も樹つれど。年首を宗とす）こは石上榎井二氏の世々掌る所なり。聖武天皇の大平十七年。春正月己未朔。廢朝なり。このとき俄頃に。山背なる恭仁京に遷らせ給ひしかば。石上榎井の二氏倉卒にして追ひ集まるに及ばず。故に兵部卿。從四位上大伴宿禰牛養。衞門督。從四位下佐伯宿禰常人。大楯槍を樹つるよし。聖武紀に見えたり。かやうの事により。田舍にて。元朝每に。門戸に松を立て

ふべし。又葛をよめる歌
夫木鈔廿八 いかばかり久しかるらん龜山の
ふもとの松にまじるさきくさ
爲家卿
同　栗津野の小萩が花に色そへて
時しりがほにまじる葛
永範卿
前の歌は。またく檜をさきくさとよまれたるなるべし。後の歌は草なるべし。むかしは近江の栗津原にも。あした草はありけるにやいぶかし。又
雲葉集　五千よふべき宿のさき草ひき分けて
みつはよつはにふくあやめかな
占部兼直
新撰六帖第六 いとゝ又つくりますなりさき草の
みつは四葉のさゝがにの宿
知家卿
こは催馬樂なる。さき草を取りてよめるなり。この他なほあり。さのみはとて贅せず。現にあした草は。都人の得見ざるものなるべし。されば和名鈔なる葛を。鬯草なりとはこゝろつかで。或は前輩の訛を受けて檜とし。或は野邊にさく。秋の草花なりと思ひとりて。かくは歌にもよめるなるべし

右の一編。ある人に示しゝよしを。友人良知傳へ聞きけん。與繼に就きて。見まほしといひしかば。やがて書きつけてつかはしゝに。彼人讀みかへしつゝ點頭て(うなづき)。さきくさの事は思ひかけねども。鬯草は。余も亦考へざるにあらず。さるをはやくも。蓑笠子に見つけられたりといひきとぞ。鈴木文。字素行。通稱良知。號二暘谷一。江戸人。處二于神田阿玉池一。嘗衞生爲レ業。倡二神農本經傷寒論一知レ名。文化十三年丙子十一月廿一日歿。年五十六。葬二于駒込大音寺一。愚息與繼。受二本經及傷寒論於斯人一。余亦見レ齒二列其詞友一。言之所三以及二于此一。不レ得レ無レ憾也

第十六植物　正月の門松

鹽尻巻之四湯武篇云。正月門松立つる事。藤原爲尹の歌に。しづが門松といへば。高貴の家。まして相家にはなかりしにや。今も朝庭の諸門には松立つることなしといふ人あり。按ずるに。藏玉集に。年具の歌をのせて。「大内やもゝしき山の初代草。いくとせ人にふれて立つらん。初代草は正月二日。大内に植うる松

枝相値。葉々相當也といへり。あした草は。數莖土際より生ひ出て。各三葉にわかるゝものなり。これ枝々相値。葉々相當也といふべし。又彼新撰姓氏錄に見えたる。顯宗天皇御世。宮庭有二三莖草一。三枝部連獻レ之。といへる神草は。三椏五葉の義にあらず。是も亦葛ならん。さればあした草なるよしは。漢籍にも證文あり。論衡（巻之三 虛異篇）云。夫雨レ穀吉凶。未レ可レ定。桑穀之言。未レ可レ知也。使三暢草生二於周之時一。天下太平。人來獻二暢草一。暢草亦草野之物也。與二彼桑穀一何異。如以二夷狄一獻レ之。則爲レ吉。暢草生二於周家一。肯謂二之善一乎。夫暢草可乙以二熾釀一芬香暢達甲者。將二祭灌暢降レ神。設自生二於周朝一。與二嘉禾朱草蓂莢之類一。不レ殊矣。こゝには鬯草を。暢草に作れり。鬯暢同韻なればなり。葛は。殊にめでたき神草なれば。こゝには福草。又三枝と唱へて。いにしへ異朝へも渡されたるならん。彼處には。その味を取りて。鹹草。又鹽草と呼び做し。或は大廟の祭に用ひられしかば。鬱鬯の義を取りて。鬯草といふなるべし。王充が暢草の說は。周禮（巻十二 春官）に鬯人あり王志長が註疏を參考すべし。小宗伯に。王崩。大肆以二柜鬯一渳といへるもおなじ。いと鳴呼なれども。さき草の事は。十襲祕藏の說なり。又催馬樂に。此とのはむべも富みけりさきくさの。みつはよつはにとのづくりせりと歌ひしよしは。顯宗のおん時に。宮庭に生ひ出でたる三莖草は。いとめでたき祥瑞なれば。今この宮殿もそのごとく。福草の三葉生ひ出で。禎祥吉瑞に富み給へり。と祝きまうし、うたひものなり。三葉よつはの葉は。搏風（はふ）（即榮也）にかけたり。あした草は。必三葉にわかるゝものなり。よりて顯宗紀なる福草。又彼三莖の義を取りて。みつ葉といへり。三葉といふをうけて。四葉とかさねたるのみ。三葉四葉といひても。三葉の事なり。さるを前輩は。枕草紙に。檜を云々といひしに惑はされて。少彥名命の故事さへ附會し。歌にもさきくさを。檜にしてよみたりしは。ふかく考へざりし誤なり。唯契沖が攷に。和名鈔の葛なりといひしのみ。的れりとすべし。かゝれば。あした草は方言なり。和名はさきくさなり。これを神草とすること。由來ふりたり。唯皇國のみならず。異朝には周の時。これをもて宗廟を祭れり。その證なほ書の（洛誥篇及 文侯之命）國語（周語上）にあり考

いはず。こゝに心つかざるなめり。あした草は。味鹹きによりて。漢名を鹹草といふ。炮炙論秋毛の注には。鹹を鹽に易へたるのみ。秋毛鹹草。鹽草。鬯草。數名にして一物なり。又何ぞ疑はん。あしたは。八丈島の方言なり。あは發語。したはしほたるしの略語にもやあらん。古松軒八丈筆記に。あした草の畫圖あり。しかれども。寫眞にはあらず。傳寫の手に誤る歟。虎を畫きて狗となすのたぐひなるべし。件の草は。去年。八丈島八郎大明神。江戸富賀岡。八幡宮の社内にて拜まれ給ひしとき。夥。陰乾にして齎渡(もちわた)りつゝ。參詣の人に賣與したれば。認(みし)れるもの多かるべし。古松軒云。八丈島なるあした草は。山々に生ひ出づること夥し。刈りとれば又生ひ茂りて。四時絶ゆることなし。その莖かずく。土際より生じて。深蒼色なり。島人はこの草を採りて。平生の食とす。中人以上は米一合。中人以下は。麥にまれ粟にまれ。一合をもては。一日の食として。不足は。あした草を雜へつゝ炊きて食へり。固に功能ある草にや。彼島人は。病わづらふこと稀にて。齡七八十に至るもの多かり。神草といふべし。件の草を。伊豆の地に。しばく移し栽ゑたれども。兩三年が程には。漸々に薄らぎて。終には絶ゆといふといへり。現にさる事もあらんかし

因に云。八丈島は。八郎島なり。八郎爲朝朝臣。伊豆の七島とゝもに。管領し給ひしかば。その名を負はして。八郎島と唱ふるなめり。八郎をはつちやうといふは。彼島の方言なり。按ずるに。八丈筆記に。八丈の島つ女が絹おりうたといふものを載せたり。その歌に云。きぬの竹でも。はつちやうにませな。はつちやう。こは弓。こは。はつちやう。オフサひさめよくオフサひさめ。古松軒が譯に。はつちやうは八男なりといへり。こゝには八郎爲朝の強弓をいへるなり。かゝればはつちやうは八郎なり。今八丈島と書くは假字なり。爲朝島渡の事は。保元物語三下に見えたり

又按ずるに。和名類聚鈔。草木部 草の下に附け出だせし葛は。音娘。和名佐木久佐といへり。この葛。といふものは。あした草なりそのゆゑは。漢名を鬯草といふ。鬯と葛と音通へり。源順氏葛に注して。枝

いふとも。葉は細やかなるものなるに三葉四葉といはんことこゝろ得がたし。そはこの次の條なる。鹽草のところにいはん。福草三枝同義にして。紀與伊音相通草には三莖のよしをいひ。或は三葉四葉といひ。楠には千枝にわかるゝと詠める歌あれども。彼のおほの木の三叉枝は。古書には絶えて見えざる歟。博物家ににたづぬべし。これらの愚考は往つ年。二木に諸せし事あれども。定かに考へ得たるにあらねば。何ともいはで過しつるに。今玆飛騨人に訪はれし日。彼の二木生が事を問へば。そはなくなりて三とせあまり。四とせにもやならんといへり。死生は流るゝ水のごとく。しばらくも留らず。今にはじめぬ事ながら。さすがにうちも驚かれて。なげきの霧のたつもはかなし。この故に言はまだ盡くさねども。且相似たるものを擧げて。考据の端をひらくのみ。除墓挂劍の微意といはん歟

第十五植物　鹽草 募考餘附出

ある人余に問へらく。炮炙論の注に見えたる。鹽草といふもの定かならず。前輩發明の辨あることを聞くことなし。こは何等の物にかといはれしに。余答へけるやう。本草は。わが宗とせざる所なり。これらのすぢは。一家をなすもの多かるを。今さらに何をかいふべき。しかれども。こゝに攷なきにあらねば。足下の爲に釋かん。本草綱目。序例下 雷斅炮炙論曰。杴毛ハ注今鹽草也霑レ溺銷ニ班腫之毒一。今按。杴音節。毛草也 鹽草の事明文なし。或は豨薟をもてこれに當てたり。いまた必然らじ。余をもてこれを視れば。殆鹹草なり。鹹草又鬯草に作れり。王充論衡曰。周時天下太平。越裳獻ニ白雉一。倭人貢ニ鬯草一。文獻通考曰。女國在ニ扶桑東千里一。食ニ鹹草一。鹹草此云安之太草或云一名波末々通奈 貝原篤信大和本草草木部 鹹草下云。アシタト云フ草。八丈島ノ民。多ク植ヱテ粮ニ充ツ。江戸諸州ニモ。アシタヲウヽ。葉ハ前胡防風ニ似タリ。各三葉ニ分ル。莖微紅シ。小者不レ紅。微有ニ香氣一。本草綱目三十二卷 鹽麩子附錄云。扶桑東有ニ女國一。産ニ鹹草一。似ニ邪蒿一。而氣香。味鹹。彼人食レ之。篤信云。鹹草ハ。アシタ草ナルベシ。八丈島ハ。日本ノ東ニアリ。昔ハ女人ノミアリシト云フ。後漢書東夷傳曰。云々。又井澤秀俗說辨第三十七卷あした草の條にも。これを辨じたり。その說大和本草にいふ所と相同じ。しかれども。古人鹽草は。鹹草なるよしを

顯宗紀に考ふるに。顯宗天皇三年。夏四月庚申。日神著ㇾ人。謂二阿閉臣一。而獻二磐余田一給ふ條下に。戊辰。置二福草部一。といへるはこれなるべし。又孝德紀に。葛城福草といふ者見えたり。葛城は姓。福草は名なり。和名類聚鈔。草木部草下に。葛を附け出だして云。文字集略云。葛音娘。和名佐木久佐。日本紀私記云二福草一。葛枝々相値。葉々相當也。これを參考するに三枝部連が獻りし三莖草は。和名鈔に見えたる葛なり。この條なほ考あり。そは鹽草の篇にとかん　又千葉。江沼に三枝の郷名あるは。いにしへ葛を植ゑさせられたるによりてなり。しかれども下總は。その郡を千葉と唱へ。又鄕名に名三葛あれば。扶桑に因りての名に似たり。又老樹の枝のわかる、よしを詠みたる歌あり。そは左のよみ人本書のまゝなり。紀郎女なるべし

古今六帖第六　いづみなるしの田のもりの楠の
千枝にわかれて物をこそ思へ
きのらう女

夫木鈔廿九　いづみなる信田の森の千枝ながら
たまのうゑ木にかざるしら雪
前大納言隆季卿

この信田なる楠は。その枝の繁きによりて。千枝にわかると詠みたるなるべし。彼の飛驒のおほの木は。その葉樫に類すといへば。枝のわかれしよしは似て。その物は非なるべし。又淸少納言は。檜を福草といへるにや。枕草子三。木はといふ段に。ひの木。人ちか、らぬものなれど。みつはよつはのとのづくり。をかしといへり。古今集假名の序に。むつにはいはひ歌

このとのはうべもとみけりさきぐさの。みつはよつはにとのづくりせり。」こは催馬樂の歌なり。北畠親房卿の抄に。みつはよつはは。三棟四棟なるよしいへり。親房卿の說は。春曙抄に引けり　また河海抄に。少彦名命檜のたねをまきて。家をつくらすといへり。よりて古人。多くはさきぐさを檜とす。契沖は。和名抄の葛ならんといへり。こは入江昌喜の說なり　又俊惠法師は。松をさきぐさと詠めり

さきぐさの三葉よつばに枝かはす。松の千とせはきみがまに〳〵。」この歌夫木抄廿九雜部十一に入れり。淸輔朝臣の判の詞に。松を三葉四葉といふこといかゞと難ぜられしとぞ。現に松はさらなり。檜と

玄同放言下集

瀧澤馬琴　著

第十四植物　飛驒三枝

飛驒國大野郡に三枝ノ鄕あり。（三枝みつえだと唱ふ）鄕内に五ヶ村あり。その三ヶ村を。上切。中切。下切と唱ふ。中切村に（高山より里半許）巨樹あり。程遠き處といふとも。この樹の見えざるはなし。さる古木なれども。今なほこれを伐ることを許さず。もし人ありて。斧を用ふれば。血流れ出づ。且祟ありといひもて傳へて。その落葉だも拾ふことなし。これを犯せば。かならず瘧を患むといふ。唯樹下に起臥する乞兒等は。その枯枝を折りもしつ。落葉をあつめて。焚くことあれども。露ばかりも祟をうけず。渠等はよるべなきものとて。神の許させ給ふにや。この樹の爲に日を覆はれて。田園の爲には不便なれども。田ぬしもせんすべなしといふめり。よりて里人等。この樹をおほの木と呼び傚したり。おほの木は大之樹なり。或は訛りて。王の木ともいふとぞ。この樹の高。大約一十二三丈。幹の周圍は。七尋にあまりつべし。そが根より。凡二丈許あがりて。大枝三本にわかれたり。その二枝は。周圍二尋に及ぶべく。又一枝は。二尋半。三尋にも近かるべし。これよりして梢まで。枝毎に。三叉にわかれて。絕えて。增減あることなし。その葉は樫に似たれども。何の木といふことをしらず。鄕を三枝と唱ふること。全くこの木に因りてなり。和名類聚鈔。（國郡部）下總國千葉郡の鄕名に三枝あり。又加賀國江沼郡の鄕名にも三枝あり。この兩鄕は。佐伊久佐と訓せたり。これらも亦木によりて。その鄕に名づけしならん。彼のおほの木のある處を。森谷といふ。樹下に溝あり。これより東を。クゲ反畝といふ。クゲの義未ㇾ詳。反畝より上を。王の垣内といふ。方言に。凡稻田によろしき處。苗頃などすべき處を。かいと丶いふとぞ。こは辛未の夏月。飛驒高山の二の町なる。二木長右衛門來訪し日。この物語に及べるなり。按するに。三枝は鄕名のみならず。姓氏にもこれあり。新撰姓氏錄（左京神別中）云。三枝部連。額田部湯ノ座連同ㇾ祖。天津彥根命十四世孫。達己臣命之後也。顯宗天皇御世。諸氏賜二饗醼一。于ㇾ時宮庭有二三莖草一。獻ㇾ之。因賜二姓三枝部造一。これを

玄同放言下集目錄

玄同放言下集目錄終

なじ。こは野渡場（やとば）の義か。鳥羽に並びて。上下の出戶あり。皆淀川の上に在り。餘は準へてしるべし。嘗（あとより）鎌倉志を考ふるに。卷之二。荏柄（えから）天神の條下に載せられし。江亭記。並にその序。（村菴靈彥撰）諸道德の詩句。よく江戶の義に稱へり。記は。文明八年。丙申八月。湘山得公の撰なり。靈彥序云。平蕪茵（シトネノ）布（如キ）。一目千里。野與レ海接。海與レ天連者。是皆公几案間一物耳。以レ故軒之南名ニ靜勝一。東名ニ泊船一。（俗に傳ふ道灌の舟繫松。その處にあらずといへども。泊船亭を訛いふ）村菴詩云。商船似下自ニ平蕪一過上。漁火如乙從ニ遠樹一來甲。景茝詩云。風帆多少載レ詩去。吹レ雪士峯晴墮レ江。この他。臨江の詠ならぬもなし。かかれば江戶の戶はみなと（湊）。又とまり（泊）のとなるべし。文明以往。城邑ならざりし日は。江戶と唱へたる處。今戶花川戶を見て推しはからる。しかるに二百年來大江戶の繁昌なる。漢土長安の萬戶といふとも。これにますことあらじかし。願ふに今の大江戶は。昔の江戶にして。むかしの江戶にあらず。昔の江戶に生れずして。今の大江戶に生れ。むかしの時にあはずして。今の御時にあへり。分を守り足ることを思へばゞ微軀にあまれる福にぞありける

玄同放言上集終

いまだその地を踏まずして。巨細に圖せん事。をさなき筆には。いとく〜心もとなしとて。輿繼は困じつゝ畫ける頃。茂木氏附郵して。彼沼の圖一頁をおくらる。こゝに至りて。その畫稿を易ふる事三たびなり。僅にその眞景を寫すことを得たり

龍華寺

第十江戸古圖略説追考　この條下に。なほしるすべき事あるを。忘れたればこゝに追書す。江戸は。和名鈔。（國郡部）武藏の郷名の中に見えず。東鑑卷一。治承四年。八月廿六日。（衣笠ノ城攻の條下）に江戸太郎重長あり。卷廿一。（建保元年。五月三日。和田義盛陣歿の條）に江戸左衛門尉能範あり。太平記（卷三十三）に。江戸遠江守あり。これらの人々。その地を名乘りたれは。江戸の地名は。なほふるくより唱へたるなるべし。始めは莊なりしにや。とある人はいへれど。しからじ。こゝは江村なり。初は纔に。船の泊る處なれば。江戸と唱へたるなるべし。何となれば。淺草なる今戸船川戸（今は花川戸と唱ふ）も。昔は漁戸なりけるよしなり。應仁文明のころまでも。今戸船川戸のあることを聞かざるは。城邑ならざればなり。か丶れば江戸今戸の戸は。鳴戸由良の戸の戸の如く。みなと（湊）。とまり（泊）の略辭ならん。常陸の水戸もこれに同じ。みとはみなとのなを省けり。水戸と書きたるは。湊及港の假字なり。すべて戸と唱ふる地名に。水邊ならぬは稀なり。伊勢の神戸（かんべ）は。官戸封戸（くわんこほうこ）の戸なれば。これと同じからず。鳥羽は。とまり（泊）のりを省けり。はま橫音相通ず。鳥羽と書けるは假字なり。又みなと場の略辭といはんも。由なきにあらず。さばれ先案を。おだやかなりとすべし。山城の鳥羽も。右にお

稱レ不レ能ニ左右一。縡末レ終。巻ニ調度文書等一。投ニ入御壺中一。起レ座云々。といへる壺は。訴狀などを納れん料に。公文所に置かれたる。磁器の壺のやうに聞ゆれども。さにあらず。こは公文所なる。壺前栽をいふなるべし。さばれ。壺を政所に置くことなきにはあらず。宋元通鑑。安太祖紀開寶六年秋八月。趙普云々。普嘗設ニ大瓦壺於視事閣中一。中外表疏。意レ不レ可者。投ニ其中ニ焚レ之。其多得レ謗。といへる大瓦壺は。宰相。表疏の可らずとおもふものを納れん料に。視事閣中に置きたる壺なり。前に引きたる。御壺中云々のと壺はおなじからねども。唐山にて壺中に。文書を貯藏したる一證とすべし

第十三地理　追加龍華寺全圖 並江戸古圖略說追考

この巻の後に半頁の餘紙ありしかば。第十。富士歌等類の下に附け出だしゝ。望嶽の圖中なる。駿河國有渡郡。龍華寺の全圖をなもゑがゝせつる。この圖成りて。余再思ふやう。彼處に遊べる人たちは。この圖なくてもよくしれり。いまだ彼地を踏まざる人は。圖ありて說なくば惑はん。よりて聊亦筆記す。

龍華寺は。一箇の草堂なり。和漢三才圖會。第六十九駿河國の條下を檢るに。この寺なし。こは新地なる故か。又させる寺院ならざれは載せざるか。いまだ詳ならず。なほたづぬべし。寺内の光景は。圖を觀てしらん。堂の側なる。兩杈の蘇鐵は。その長一丈二尺ばかりなるべし。堂前なる。覇王樹も巨大なり。この二木。人の爲に稱せらる。寺地の前面。石をもて築き立てしは。前に江山あり。眺望の爲なるべし。中山道。楊鐵嶺なる。望湖堂に似たるやうなり。ここより久能山は見えず。寺のうしろの方。迥にして小山連れり。久能山は又その背に當れりといふ。久能寺は近し。龍華寺より左に當れり。又清見寺と江を隔てたる。こなたは清水湊なり。湊より江畔を左に達れば。東海道なる。江尻の驛に出づ。江尻は江後より。なほ坊後を。町尻といふが如し。このうち望嶽圖に漏らしゝもあり。合せ考ふべし。彼圖は。解が藏弆に一本あり。又ある人の寫眞せられしを借り得て比校し。なほよくしれる人に。訊ひ究めつゝ畫きたる。華山子の苦心に成れり。僅に五十餘里なる處だもかくのごとし。況。出羽の秋田なる島沼は。その地の人の口授に由れども。原本は絶えてなし。

ひるつかたまゐれ。雪にくもりて。あらはにもあるまじなど。たび／＼めせば。このつぼねあるじも云云。つぼねあるじは。そのつぼねを賜はりてをる女房をいふなり。今いふ部屋親の類なるべし。同巻（風の段）に。かうしのつぼなどに。さとき（鋭刃）はを。ことさらにしたらんやうに。こま／＼と吹き入れたるこそ。あらかりつる風のしわざともおぼえね。春曙鈔に。格子のひま／＼を。坪といふにや。といへれど。こは簾子障子などにて。打ちかこみたる處を。やがて壺といへるなるべし。今も坊賈（あきひと）の店上に埒して。打ちかこみたる處あり。これらも簾子の壺といふべし。又内庭を。壺前栽といふ。つねの事なり。おなじき四の巻（物のあはれしらせがほなるといふ次の段）に。けふの雪山。つくらせたまはぬ所なんなき。御まへのつぼにもつくらせ給へり。云々といへるつぼは。壺前栽なり。（この段。季吟の鈔には。禁秘鈔。並に三光院殿の御説を引けり）又日本記略（醍醐記）昌泰二年己未小（ナル）六月四日丙寅。云々。監物局枇杷。花不レ發。有二子生一云々と書せし局も。壺前栽なり。又大鏡（第六）道隆公の巻に。高内侍の事をいふ條に。それはまことしき文者にて。御まへの作文には。文たてまつられしはとよ。

少々のをのこにまさりてこそ聞え侍りしか。さやうのをり召しけるにも。臺盤所のかたよりはまゐり給はで。弘徽殿の御つぼねのかたよりとほりて。二間になん候へたまひけるとこそうけ給はりしか。古體に侍るにや。云々といへり。かゝればつぼねは。何處にまれ。引きつぼめる處をいふなり。定りたる後宮の名にはあらずかし又つぼねに。局の字を配當（あて）たるよしは。正字通に。局曹也。部分也。又拘也。促也。又曲身也。又棋局也といへり。男女のつぼねに。曹司部分の義あり。又曲身棋局の貌あり。これによりて局の字をつぼねと讀ますするなるべし。說文（巻十二）には。市居曰レ舍。从二亼（フ）屮（サウ）一也。口象レ築也。始夜切。といへり。舍字の形。おのづから屋のごとく壺に似たり。前輩の說に。つぼねは。とのゐするもの、。帶をもとかで。つぶねするなり。[illegible]といへり。甚しき誣罔ならずや。又東鑑（建久三年十一月廿五日の條）に。熊谷次郎直實。與二久下權守直光一於二幕府（頼朝卿）御前一武藏國熊谷久下。境相論裁許のとき。直實頻に憲斷の速ならざるを憤り。忽遁世する條に云。今直實。頻預二下問一者也御成敗之處。直光定可レ開レ眉。其上者。理運文書無レ要。

町南有二好井一云々。梁武帝ノ時ノ謠言ナリ。街坊ノ名ヲ町ト云フコト。全ク出處ナキコトナリ。地名ニ町トイフコト。外ニ所見ナシ。稀ニコノ事アル故ニ記シ置ク。是モ此方ノ某ノ町ト云ヘルニハ異ナリ。竹町ハ竹叢ナド云フニ同ジといへり。靜齋。名光遠。字子深。靜齋其號。嘗受二業於室鳩巣一。遂仕二侍從大和國守一。寶曆四年十一月十六日沒。一書爲二名子深。字穆仲一者非今按ずるに。西南の夷狄に。鉤町國あり。後漢書。卷七十上。杜篤傳南羈二鉤町一。水二劍强越一。註云。羈係也。鉤町西南夷也。水劍謂二戈船將軍等一。下レ水誅二南越一也。鉤町音劬挺といへり。國の名に某町といふ事。この外に所見なし。これらは此にいふ坊町の町とおなじからず。皇國は言語を宗とすなれば。文字を奴にして使ふこと多かり。さるを唯字義のみ擧げて問難せば。彼杜に膠して。瑟を皷くてふ類なるべし。又舍の和名つぼなり。和名類聚鈔。居處部照陽舍在二溫明殿北一奈之豆保。淑景舍在二昭陽舍北一岐利豆保。飛香舍在二弘徽殿北一布知豆保。凝華舍在二飛香舍北一宇倍豆保。襲芳舍在二凝華舍北一加美奈利乃豆保。以二霹靂一。謂二俗之雷鳴壺一。これら和訓をしらざれば。得讀みがたきものなり。故に昭陽舍を梨壺。淑景舍を桐壺ともかゝれたり。凡この五舍は。前栽の花卉によりて名を得たり。しかれども。文字は優美に。俗ならざるを。擇まれたることかくのごとし。舍をつぼと讀まするよしは。爾雅。釋宮宮中衖。謂二之壼一。郭註。巷閤間道。といへるに因れり。和訓つぼとは。圓におしまとめたる義にて。俗につぼふか。又つぼくちなどいふにおなじ。花のつぼみも。一圓にまとめたる貌をいふなり。衣のつぼさうぞく。つぼをりも準へてしるべし。つぼは元來つぼめるの略辭なれば。宮嬪の居處をつぼねといふめとねと横音かよへばなり。うつぼ物語藏びらき上に。大將のおとゞ。いづくよりぞや。いとはえんあるふみかな。中納言。なしつぼねよりなり云々。こゝには梨壺を。なしつぼねといへり。これその證なり。これよりして。宮中の便殿を。みつぼねと唱へ。女房の部屋を。つぼねといふなり。枕草子一の巻第七段に。御つぼねにさぶらはん。と辭していぬれば。云々。同卷第三段に。女房のつぼねによりて。おのが身のかしこきよしなど。こゝろをやりてとき聞かするを云々。五の卷第五段に。淸涼殿のまへのすのこより。まひ姫をさきにて。うへの御つぼねへまゐりし程に云々。九の卷初段に。けふは

り。又續日本後紀八承和六年。春正月戊戌。織部司織手町災。夏四月丙寅。火二于左馬寮國飼(クニカヒ)町一。文德實錄。天安九年。八月辛卯。右近衛舍人町火。など書せし町は。共に坊の假字なり。前に錄せし御井町の町。これとおなじ。又拾芥鈔。中末諸司所町。外記町。中御門北。大宮東二町。但勘解由小路南。修理職大舍人町云々。としるし、もおなじ。大舍人町以下。二十餘町名を載せたり。女官町采女町。亦その中に在りこれらの町は。舍の字に通はして見るべし。いづれもまちと唱へて。音に呼ぶことなし。又扶桑略記。村上天皇の卷天曆七年癸丑。二月十二日壬戌。丑刻。藍園町。有二失火事一。延及二神祇官後廳屋一。同書六條院の卷。六條卽白河院なり承保三年丙辰。十月六日壬午。六角堂之町燒亡。然觀音寶殿。遂免二餘災一。と書せし町は。今をさ〳〵唱ふる町名とおなじ。又うつぼ物語。藏びらきうぶ屋やしなひ果の段に。御車は。このみかどにあり。今はひとまちばかりなり。中納言もおくりし給ふ。源氏物語。はゝき木に。これは二のまちのこゝろやすき云々。といへる一トまち二のまちは。今俗に。里數幾町。又幾町目などいふにおなじ。又賈人を。町人と呼ぶこともふりたり。古事談。卷一小松帝。親王之時。多借二町人物一。御卽位後。

各參内責申。仍以二納殿物一。併被二返與一云々。是らもまちびとゝ唱へて。音には讀むべからず。今ちやうにんと呼ぶは。又その一轉なり。よに町人に。巫醫百工あり。浮浪遊民あり。しかれども町人といへば。なべて賈人の事とすなるは。邑里街坊は。坊賈貿易の所なればなり。又粟田關白道兼公を。町尻殿と唱へまうしき。江談。卷一町尻殿。道兼所惱危急之時云々。又日本記略。三條院記長和元年壬子。十二月四日丁卯。齋宮卜定。第一當子(マサコ)内親王卜食。坐二于大和守藤原輔尹六角町尻宅一。これらの町尻も。讀みて坊後とすべし。又太平記。卷十四十六に見えたる。參議清忠朝臣を。坊門宰相と唱へたり。この坊門は。まちと讀まずして。音に唱ふるをもて。坊町に。音訓新舊の差別あるよしをしるべし。前にもいへるごとく。街坊にいふ町は。すべて坊の假字なれば。音に唱ふべくもあらぬに。後にはその義を失ひて。をさ〳〵音に呼ぶをもて。字義にたがへり。とのみ思ふものあるか。坊町共に。和名まちとは。ひまみちの略辭なるべし。田區は猶街坊の間道のごとし。こゝをもて坊町同訓なり。又靜齋隨筆引二南史候景傳一云。苦竹

別爲小頃町。といへるを引きなり。又莊子（養生主）云。彼且爲無町畦。（畦戸圭反）亦與之爲無町畦。彼且爲無崖。亦與之爲無崖。町畦は疆界なり。又畔埒なり。收拾なきをいふなり。此には町と區と同訓なるも。畔埒分別多かる義を取れるのみ。故に區々をまち〳〵と讀ませたり。又說文（巻三）云。町田踐處。从田。丁聲。他頂反。又正字通町字下。引區種法云。一畝之中。地長十八丈方爲十町。町間分十四道。通人行。か、れば。町段の制。和漢相似たり。坊は令義解（東宮職員令）曰。東宮坊（東當作春）管監三署六。大夫一人。掌吐納啓令。宮人名帳考叙。宿直事。義解云。謂坊内諸司及宮人考叙。其宮人考叙者。坊司校定。更送中務省。又和名類聚鈔。（職名類）坊。聲類云。房反。（和名萬知）別屋也。又村坊也。字苑曰云々。坊名。教業坊。（三條東大學左京職等此坊）豐射坊云々。以下載十二坊。於鈔可見也。拾芥鈔。（中末）禁中所々異名。坊。華芳。（在朔平門內。桂芳坊東）桂芳。（在朔平門內）蘭林（在玄暉門內）又戶令曰。凡每坊置一人。四坊置令一人。掌檢校戶口。督察奸非。催駈賦徭。事物紀原（橫行武列篇）曰。至道元年（宋太宗年號）十一月。詔改京城內外坊名。卽今太平義和等。一百三十六是也。說文（巻二）云。坊邑里之名。从土。方聲。古通用堃。府長切。正字通。（土部）坊與防有方房二音。又曰。唐（高宗）龍朔中。改門下坊爲左春坊。左庶子爲左中護。改隋與書坊。爲右春坊。右庶子爲右中護。又病坊言其間也。又曰。鷄跖集曰。給孤長者。以黃金布地。故今俗謂菩提坊。又商賈貿易之所。病坊記曰。道辟。則坊與防。民之所不足者也。故君子。禮以坊德。刑以防淫。これ坊の義も和漢異なることなし。しかるに中葉より。坊は坊官僧坊に。音にのみ唱へしかば。邑里街坊の坊をいふには。町の字を用ひたり。これ坊も町も。和名まちなればなり。例せば。缺本日本後紀。（桓武紀）延曆十六年。春正月壬寅。長岡京地一町。贈從四位下菅野朝臣眞道（マミチ）（以下。長岡京地幾町。賜某甲といふこと多く見えたり）類聚國史。天長七年。冬十月乙丑。宮城內。御井町內。南方半町。給中務省厩地。續日本後紀。七承和五年。三月壬申。在京二條二坊十六町二分之一。賜掌侍正五位下大和宿禰舘子（タチコ）などしるし、町は今の町割間地におなじ。又續紀。（聖武紀）天平十七年。春正月乙未。伊賀國眞木山火。三四日不滅。延燒數百餘町云々。と書せし町は。町里の町な

ある所を。頼政曲輪(くるわ)といふなり。この書小説に係ると雖も。かの家説と暗合せり。只その郎等の姓名を識さゞるを遺憾とするのみ

第十二 地理　町坊舍

或余に町坊舍の三義を問ひけり。余云。町段のことは東厓の秉燭譚巻之二第十二則十三則にいへり。しかるに彼書には。大寶令。及左傳。公羊傳。説文。孟子。字彙。宋謝察微ガ算經等を引きて。町里の里數をのみ辨じたり。これらは足下もしれるなるべし。古人考へおきたることを。今又いはんは事ふりにたり。然りながら。足下の問はこれと異なり。町は邑里街坊の義にあらず。さるを街坊の名とせしは。誤なりと思ふめれど。そは字義にのみかゝづらひて。古人の説に。字を奴にして使ふといへるを。よく思はざる故なるべし。坊町ともに和名まちなり。淸寧紀に。十町をとゝころ。又安閑紀に町をところと訓(よめ)り。今俗に。町ところをたづぬるなどいふ是なり　この外に。多くさる訓を見ず。坊は東宮坊のとき。つかさと訓めり。後々は。坊官。僧坊の坊にのみ唱ふるごとくなりしかば。坊をば音に呼び來れり。故に街坊の坊なるをも。町の和名まちなれば。假りて町字を用ひたり。しかれども猶まちと唱へて。音に呼ぶことなかりしに。後竟に故實を失ひ。某まちといふべきを。何ちやうと呼ぶことになりたり。かくては假を認て眞となすのみ。これを詳に解くときは。町は書紀。孝德紀大化二年正月詔曰。凡田。長三十歩。廣十二歩爲レ段。十段爲レ町。段租稻二束二把。町租稻二十二束。若山谷阻險。地遠人稀之處。隨レ便量置。同紀。白雉三年正月。又曰。凡田長三十歩爲レ段。十段爲レ町。段租稻一束半町租稻十五束　令第三田令曰。凡田。三十歩。廣十二歩爲レ段。十段爲レ町。義解云。段穫(ゴトニ)稻五十束。稻得(ゴトニ)二米五升一也。卽於レ町者。須レ得二五百束一也。和名類聚鈔。田園類　町。蒼頡篇云。町他頂反。和名末知(マチ)　田區也。又周禮。地官稻人　稻人掌二稼下地。以レ瀦蓄レ水。以レ防止レ水。註鄭玄云。瀦防。以(オモンミルニ)。春秋傳曰。町二原坊一規二偃瀦一。以列二舍水一。列者非二一道一。以去レ水也。玄が引ける所は。左傳襄公の二十五年に出でたり。傳曰。蔿掩　蔿掩楚大夫　書二土田一。度二山林一。鳩(アツメ)二藪澤一。辨二京陵一。表二淳鹵一。數二疆潦一。規二偃瀦一。町二原防一。是なり。正字通町字の下。及秉燭譚には。この條の杜註に。廣平曰レ原。防隄也。隄二防間地一。不レ得三方正如二井田一。

り。又太平記廿一には。近衛院の御時とのみ記して。年號を掲げず。亦猪早太の事なし。こは琵琶法師が。かたりつるよしなれば。はじめを略して。終を詳にせり。艶語を旨とすればなり。諸説の鉾盾かくの如し。故より定かならぬ事にや。そはとまかくまれ。これらの事は。頼政卿。なほわか、りし時にこそあれ。猪隼太は。この夜。頼政卿に扈從せしものなり。平家物語怪鳥の段に。頼政。たのみ切りたる郎黨。遠江國の住人。猪早太に。ほろの風切はいだる矢を負はせて。只一人ぞ具したりける。源平盛衰記三位入道藝等の段に。頼政云々。郎等ニ。丁七唱。遠江國住人。早太ト云フ者。二人ヲ相具シタリ。唱ハ云々。か、れば早太は。頼政卿に一二と頼まれたる郎黨なり。しかるにこの勇臣。宇治の戰にあはざりしはいぶかし。もし主の頼政卿に。年のましたるをのこならば。治承の比は。八十あまりにもやなりぬべからん。さらば早太は病死して。彼軍にはえあはず。その子に守資。或は資直などいふもの。當時遠江にをり。主君義兵を起すと聞きて。都路さして赴くをり。途に下河邊行吉に逢ひにければ。共に主の首を守りて。下總へ走れるにはあらざるか。軍記に載する所詳ならず。家說も亦定かならねば。只推量の外を出でず。こは人のうへならぬ。祖父の里の事なれば。年來書どもあさる物から。年月悠遠にして。考据に由なし。さばれ頼政卿の首を。古河に埋葬たりといふ事は違はざるにや。松田一樂が武者物語上卷云。ふるき侍の物語に曰。源三位入道頼政。宇治の平等院にて自害の時。郎等に向ひて曰。吾白骨を。平等院にをさむべからず。頭陀に入れ。汝首にかけて。諸國を修行すべし。吾とゞまらんとおもふ所にて瑞相あるべし。其所に白骨を納むべしと有りて。自害とげ給ふ。其ごとくかの郎等。白骨を首にかけ。諸國をめぐる。こゝに下總國古河といふ所に著きたり。とある芝原に。頭陀をおろし。しばし休息して。扨立ちあがり。頭陀を取りて。首にかけんとしけれども。づだあがらず。郎等ふしぎの思をなし。さらば爰に骨ををさめんと思ひ。在所の人をかたらひ。古河村の近所に白骨を納め。其所にかの郎等も庵をむすび。おこなひすまして。其所にて死にたりしとなり。今に於て。古河に頼政塚あり。今は古河の城内になる。彼塚の

して。わが首をば。入道殿の首と。一處におけとて云々。平等院のうしろ戸のかべ板をねぢて投げ入れけり。人これをしらず。後日に血の流れ出たるを見て。かべを打ち放ちて見れば。死人の首一つあり。いづの守なり。扨こそ死がいの門とて今にあり。又云。宗徒のものどもは自害し。落つべきものどもは落にけり。下河邊のものども。數多ありけるも。いづの守方に。伊豆國の住人。工藤四郎。五郎とて。兄弟ありけるも落ちにけり。源平盛衰記（宇治河合戰段）にも亦云。賴政ノ郎黨。下總國ノ住人。下河邊藤三郎清恒。右賴政ノ首ヲバ。下河邊藤三郎。平等院ノ後ノ戸ノ。板敷ノ下ノ壁ヲツキ破テ隱シ入ル。又仲綱ノ首ヲバ。因幡國ノ住人。彌太郎盛兼。掻キ落シテ。入道ノ首ト一處ニ隱シオク。人不レ知レ之。後日ニ竹格子ノ下ヨリ。血ノ流レ出デタリケルヲ怪ミテ。御堂ヲ開キ見レバ。頸モナキ死人アリ。誰ト云フコトヲ不レ知。後ニコソ。伊豆守トモ披露シケレ。ソレヨリシテ。自害ノ間トモ申シ・也。今此彼を參へ考ふるに源三位入道の首をば。下河邊藤三郎が。板敷の下の壁を突破りて。かくし入る、やうにして納れず。竊に抱きて落ちたるなるべし。長門本平家物語には。後日に仲綱朝臣の首は。出でたるよしをいへり。又源平盛衰記に從ふときは。父子共に首は出でざりしなり。參考平治物語（卷二上。義朝寄二六波羅一段）に云。賴政ガ郎等。下總國ノ住人。下河邊藤三郎行吉（參考云。按系圖作二行義一。藤行政子。或作二行政孫。行光子一）ガ放ツ矢ニ。相摸國住人。山內須藤瀧口俊綱ガ首ノ骨ヲ射ラレテ。馬ヨリ落チントシケレバ。云々。か、れば下河邊行吉（盛衰記作二清恒一）は。賴政卿の御内にて。ふりたる剛兵なり。竊に主の首を抱きて。戰場を落ちたる事。疑ふべからず。又猪隼太は。宇治河の一戰に得あはず。途に下河邊に逢へるにより。共に下總へ走りしかば。當時人のしるよしなくて。物には記さゞりけるにや。又按ずるに。賴政怪鳥を射つる事。平家物語（ぬえの段）には仁平の比。近衞帝御在位の時とす。又十訓鈔（第十。可レ庶二幾堪能一事、第三十六段）には。高倉院の御宇として。猪早太の事なし。源平盛衰記（十六）には。平治二年の夏。二條院御惱の時の事とす。同書に異說を擧げて。仁安元年。高倉院。尙春宮にておはしましけるが。御即位あるべきよし。その沙汰有りながら。同年の四月より。御惱おはしまし、時の事ともいへ

べなし。せめて和殿もろ共に。主のおん首に倶し奉り。墳墓せん處をも。見果侍らんといふ。藤三郎聞きて。げに遠江はなほ都のかた近かり。誘(いざ)給へと。打ちつれ立ちて。下總へ落ちて行きけり。かくて頼政公の首を。下總の猿島なる古河の里に埋葬(うづめ)つゝ。隼太は其處にて頭顱を剃りまろめ。塚のほとりに菴を結びて。亡君の菩提を吊ひぬ。是年八月。前武衞木曾冠者。東北に起りつゝ。合戰年を累ねて。平家は。西海の波濤に沈沒し。源氏一統の世となりにけれども。隼太入道は。舊里へかへることを思はず。終に古河にて身まかりけり。隼太が妻子も。其處に集合(つどひ)て子孫眞中村(まなか)（古河を去ること一里許にあり。今は間中に作るといふ。その故をしらず）にをり。これ眞中氏の祖なり。是より十あまりの世を累ねし比。頼政卿の曾孫。左衞門の尉國綱ぬしの後たる武士某氏。武藏國埼玉郡。太田莊の地頭たるにより。舊縁あればにや。眞中氏も。太田の莊へ移住してけり。子孫今なほ彼處に在り。世(よゝ)村正たり。皆實子にてし嗣きぬといふ。この事。祖父（諱興吉。字左仲。法名淨頓。寶暦十年庚辰十二月十九日下世。年六十一）の物語なりとて。わが家の口碑に傳ふる所と吻合す。按ずるに。猪隼太は。右大臣藤原武智麻呂の後裔。遠江權守爲憲が末葉。同國の住人。井氏の族たり。平家物語（ぬえの段）源平盛衰記（三位入道藝等の段）參考太平記（鹽谷判官讒死の段）等に。載する所。猪隼太參考（太平記）猪早太（平家物語）早太盛衰記とのみしるして。實名傳はらず。家記には。守資。或は資直に作る。然るや否やをしらず。凡軍記に載せたるは。頼政卿怪鳥を射る一段のみ。宇治川の戰に。かの人の事見えざれば。事迹の考ふべきものなし。然れども。その口碑に傳ふる所。由なきにあらず。治承四年五月下旬。三位入道自殺の趣を考ふるに。長門本平家物語（宇治河合戰の段）に云。さて三位入道渡邊の丁七となふを呼びて首をうてといふ。主の生首討たん事。流石にかはゆく覺えて。御自害あるべしとて。太刀をさしやりければ。入道太刀を拔きて。いづの守殿（仲綱をいふ）自害ばしわろくすな。これは後代の物語にてあらんずるぞ。是を本にし給へとて。念佛百へんばかり申して。太刀の先を腹にあて。倒れかゝりて死にけり。その後下總國の住人。下河邊藤三郎。よりて御首を取り。直垂の袖に包みて。板敷の上板を。つき破りてかくしてけり。いづの守これを見て。因幡國住人。彌太郎もり兼といふものを召

にして。當初の刻本は稀なり。元和寛永よりあなたの物は。見るよしなしと思ひつるに。ある人の藏弃に。慶長中の江戸畫圖あり。曩に梅龍園主人。巨細に攷證して。件の地圖を。慶長十四年の物とす。その辨論。竟に一卷をなして。縮圖を卷の端に載せ命(なづけ)て慶長江戸圖考といふ。余幸に閲することを得て。圖說の精細なるをしれり。凡圖中に在るところ。今の什が二三にだも過ぎず。その街坊のごときは。就中わづかにして。一も町名を唱ふる者なく。御橋の名も識さゞる多かり。是を寛永中の江戸圖に比校(くらぶ)れば。更に簡古といふべし。且その考證するところ。北條分限帳。開闢略記。慶長記。見聞集。この他得がたき舊記多かり。この書もし世に出でなば。大江戸の古圖てふものは。なべて一卷に盡せりといはん

附けていふ。今俗日本橋以西。四ッ谷。青山。市ヶ谷。北は小石川。本郷を。すべて山の手といふ。物には山壇(て)と書きたるもあり。按ずるに。やまのては山里(て)たるべし。里字にての訓あり。萬里小路を。までのこうぢと讀ますが如し。山城の井堤(ゐて)。又井手。或は堰堤(ゐて)に作る。これも井里(ゐて)なるべし。或問。大手搦(おほてから)手の手(めて)はいかに。答へて云。別の義なし。宋以來陣隊にいふ。鎗手弓手の手の如し

第十一 地理　武藏太田莊

武藏國埼玉郡川口村は。舊名太田の莊といひけり。梅松論(上卷)に。武藏太田莊を小山常犬丸にあて行はる。といへるはこの處なり。白石翁の撰める一書に。永亨記を引きて。備中守資清(法名道眞)は。武州都築(つゞき)郡。太田鄕の地頭なり。といふ事見えたり。その鄕を名(な)告(の)ること云々。又云。太田の鄕は。埼玉郡にあり。都築郡にはあらず。不審といへり。(太田鄕を。都築の郡とせしは。永亨記の作者。謬記の失なるべし)余が通家。眞中氏は。彼鄕の舊家にして。猪隼太が後なりといふ。その口碑に傳ふるよしを聞くに。高倉院の治承四年。五月廿六日。宇治川の軍破れて。三位賴政入道父子。平等院にて自刄し給ひしとき。猪隼太は遠江にあり。(老後本國へ退隱せしなるべし)遙に義兵のよしを傳へ聞きて。走せて京へ赴く折。三河路にて。下河邊藤三郎が。三位入道の首に倶して。下總へとて落ちて來つるに逢ひけり。こゝにはじめて猪隼太は。主家の凶音を聞きて。遺恨に堪へざれどもす

もの。その間道に入るを厭ひて。猶觀ざるもの多かるべし。よりてその圖をこゝに出しつ。これも亦。珍しげなきものなれども。この編は。をさ／＼歌の等類をいへり。そを地理の部に置くものは。その類に從ふのみ。よりてはつかに景物を添へたり

第十地理　江戸古圖略說

世にふりたる江戸畫圖は。長祿長享にますものなし。しかれども彼二本は。こゝろ得がたき事なきにあらず。昔鎌倉管領及北條氏のとき。城邑の畫圖ありて。今の世に遺らんには。武藏のうちにも。八王寺。忍。嵜附等。その他なほあり。何ぞ江戸のみ二本傳はりて。他邑は一本も遺らざるか。是疑ふべきの一なり。梅龍園主人も亦云。彼長祿の江戸畫圖を見るに。千速村と石濱村の間に。會下寺といふあり。會下といふ寺號やはある。是疑ふべきの二なり。顧ふに好事者。北條分限帳などより取りよせて。後に作れるもの歟といへり。しかれども据どころなきにあらねば。姑く温故の一助とすべし。又近ごろ元和の江戸畫圖出づといふ。われいまだその果否をしらず。古印本は。寛永の一張のみ。これも多くは寫本

龍華寺庭前望嶽圖 寫眞

の榮爵かくの如し。武臣の詩歌に譽あるは。美むべき事にあらず。さばれ漏らされしは遺恨の事なり。彼人々のよみたりしは

太平記廿一　　新田左中將

わが袖のなみだにやどる影とだに
しらで雲井の月やすむらん

同　書廿六　　楠正行朝臣

かへらじとかねて思へば梓ゆみ
なき數に入る名をぞとゞむる

同　書十一　　菊池入道寂阿

ふるさとに今宵ばかりの命ぞと
しらでや人のわれをまつらん

吉野拾遺一　　正行朝臣

とても世にながらふべくもあらぬ身の
かりの契をいかでむすばん

安守の懷舊は。これらの歌をいふ歟。この他。世に傳はらざるも多かるべし

附けていふ。大約士峯の眺望は。駿河國有渡郡。龍華寺の庭より觀るを。最一とすべし。この事は。先板雨談にいへり。さりけれども。東海道を往還する

て事ならず。年來東へくだされて。彼此におはしましけり。か丶る亂の折にしも。歌を好ませ給ふなるべし。新葉集も。この親王撰みたまひしを。やがて勅撰に准ぜらるとなり。（于レ時南朝後亀山院の御世、弘和年間。この撰集の沙汰あり）櫻雲記（中一）にも。彼富士のおん歌を。興國元年（南朝後村上天皇の年號）の條下に載せて。詞かきを記錄ぶりに。いと拙なく書きなしたり。さばれ櫻雲記は。僞書なればいふがひなし。件の富士のおん歌を。興國中の事と推しつもりて。明和改元の年まで。世の相去ること四百五六十年。彼我の詠歌。おのづからよく似たるは奇といふべし。琉球の王子朝恒は。李花集を見てよみたる歟。さはあらで暗合なるべし。そはとまれかくもあれ。まこと宗良親王は。おん心ざま忠にして。文武の才長（たけ）給へども。世に傳ふるもの稀なれば。おん諱だも俗にはしられず。琉球人のよめる歌は。人口に膾炙して。當時筆に載するもの多かり。耳を貴び目を賤むる。俗の習とはいふ物から。それ將幸と幸なきのみ。いともかしこきことなれども。この君にのみあらざりけり。殿村安守（號二三枝園一）余にいへることあり。新葉集を閲し侍るに。彼新田楠は。大忠大義のみならず。歌さへによみたるに。などてこれらを入れられざりし。北朝なる新拾遺集には。尊氏卿父子の歌。その餘の武士の歌さへ入れり。南朝の上達部は。武士をば數にもせざりし歟。義貞朝臣。正行ぬしを。彼勅撰に漏らされしは。こゝろ得がたし。と呟きにき。げにおもむきある言なりかし。拾芥鈔（末上）を考ふるに。新拾遺集を撰まれし。貞治二年（北朝後光嚴院年號）三月十一日。武家より行忠三位をもて。綸旨を撰者（爲朝卿歟）へ送るといへり。毎事にかくの如く。足利家の沙汰なりければ。武士の歌の多かるも。おのづからなる威德なるべし。又南朝はこれと異なり。彼勅撰に漏らされたる。事のこゝろをよくもしらねど。新田殿は。正二位中納言を贈られたりといふ。この事江田系圖に載せたるを見たりとて。亡友秀實余に告げたりき。げに脇屋殿は。興國二年に。從三位刑部卿たり。又楠公に贈官あれば。新田殿に贈官なき事はあらじ。この事世に傳ふるもの稀にして。人しらざるのみ。一書に。貞方朝臣（義宗朝臣の子なり）は。天授三年。從四位下左少將。義隆朝臣（義隆或作二美俺一管領九代記作二義則一義治朝臣子）（イニ左）は。天授三年。從四位下陸奥守。右少將たるよしを載せたり。祖孫

ほみらと唱ふるにより。韮をこみらといへるなり。しかれども後世は。韮に大小の差別なし。本草を考ふるに。薤音械。李時珍云。薤韮類。葉似レ韮而濶。多レ白而無レ實。有二赤白二種一。白者補而美。赤者苦而無レ味。云々。稲若水は。薤をたまむらさきと和訓す。方言ならん。綱目二十六。薤の條下に出でたり。又大和本草に。薤をラッキャウとせしは非なり。ラッキョは漢名水晶葱なり。本朝食鑑菜部に辨あり

第九地理

富士歌等類（龍華寺庭前望嶽圖附出）

李花集（下巻）に。宗良親王。富士を詠ませたまふ御歌あり。その詞がきに。駿河國。貞長が許に。興良親王あるよし聞きて。しばしたちより侍りしに。富士のけぶりも。やどのあさげに立ちならぶ心ちして。まことにめづらしげなきやうなれども。都の人は。いかに見はやしなまし。とまづ思ひいでらるれば。山の姿など。ゑにかきて。爲定卿のもとへつかはすとて

見せばやな語らばさらに言のはも
およばぬふじの高ねなりけり

かへし　思ひやるかたさへぞなきことのはの（イニ　さへなきに）
およばぬふじときくにつけても

貞長は。駿河國の住人。狩野介貞長なり。狩野。入江。神原等。當時親王の御方たり。爲定卿は。爲世卿の嫡孫。爲道朝臣の子なり。（諸家大系圖第六。爲定。本名爲孝。正二位。民部卿。權大納言。法名釋空。延文五年二月二日薨。一書云。年五十二）さてこの富士の御歌に。よく似たるあり。明和元年來聘せし。琉球國讀谷山（よみたにさん）の王子。朝恒（ともつね）（この方のごとく訓にて唱ふ）が詠める和歌。十あまり四うたのうち

富士　人とはゞいかにこたへん言のはに
およばぬふじの雪のしろたへ

この歌。當時の人口に膾炙せしにや。西村白鳥軒が煙霞綺談（巻三）及越谷吾山が朱紫（巻一）に載せたり。しかれども。明和元年琉球人の歌。とのみしるして。その姓名を逸せり。そが中に。中良子の琉球談には。彼十四うたを悉く載せて。その姓名をたしかに出だせり。他本に比校すれば。くはしとすべし。抑宗良親王は。後醍醐天皇の皇子。（征夷大將軍）母は贈從三位爲子なり。（爲子は爲世卿の女。爲定卿の叔母）東なる御方の武士等。この親王を。大將軍に仰ぎかしづき奉りしかども。勢微にし

莖名ニ韮白一。根名ニ韮黄一。といへり。凡葱韮の初生。なほ莖の内にあるものは黄なり。かゝれば俗に。淺黄萌黄。黄の字を借り用ふること。ふかく咎むべからす。葱の和名きなるは勿論。和名鈔。菜蔬部。葱音聰。和名紀 この物。初生を。わけきといふ。けとかと相通。わけ葱は弱(わか)葱なり。その次をかり葱といふ。根を採らずして刈ればなり。細くして小蒜(ひる)和名鈔。小蒜。和名古比流。一云米比流 に似たるを。淺葱といふ。食物には。つもじを加へて。淺つ葱と呼びわけたり。尤肥大にして。冬に堪へたるものを。冬葱といふ。和名鈔。冬葱和名布由木 今俗これを根葱(ねぎ)といふ。根を旨として食へばなり。南留別志巻三に。根を殖うる故に。ねきといふ。わけて殖うる故に。わけきといふ。といへるはたがへり。同書に。葱はきなり。きは一字なる故に。ひともじといふ。上總國の民は。韮をふたもじといふ。といへるはよし。皆等類にして。葉の色に厚薄あり。物の青きに喩ふるに。葱をもていふ事。和漢おなじ。文選賦類 張衡南都賦。章陵鬱以ニ青葱一。楊雄 甘泉賦翠ニ玉樹之青葱一兮。壁ニ馬犀之璞瑜一兮。と賦したる青葱は。我邦にていふ萌葱の事なり。又荀子。性惡篇 云。桓公葱云々。古之

良劍也。註楊倞云。葱青也。こは刄の色青く輝りて。葱に似たるにより名とす。かゝれば葱劒の葱は。此土にいふ淺葱におなじ。葱劒の事は。別に愚考あり。そは器材の篇にいはん 韮山は韮を出す歟。させる高嶺にあらねども。小松山にして。所云青葱なるものなり。物に譬へて名づけんに。葱山と書きて。きやまと讀ませんは唱わろし。又冬葱山といはゞ。冬樹にふれて聞ゆべし。漢土に韮山あり。明史日本傳。萬暦八年條云。犯ニ浙江一。韮山。及福建。澎湖。東湧一云々。即此 又西域に葱嶺あり。これ彼おもひあはせつゝ。山の色の青きを取りて。韮山と名づけたる。古人の用心尤妙なり。加之。石郎(じらう)。手石(ていし)。藍玉(あゐだま)など。伊豆にはみやびたる地名多かり。しかれども古歌なくて。名所に漏れたるは。不幸といふべし

つひでにしるす。正字通。韮擧友切。音九。葷菜屬。又韭下別出ニ韮字一云。俗韭字。集韻誤加レ艸作レ韮。かゝれども。我邦の雅俗。韮字を用ひ來たる事ふりたり。よりてこゝにも改めず。なほふるきに從へり。又和名抄菜蔬部に。韮擧友反與玖同。和名古美良。又菜總名也。云々。みらをにらと唱ふることは。みとにと横音かよへばなり。薤をお

既全而無二破壞一。〇十九史略。元仁宗皇慶二年五月。疾風雷雹。成紀縣北山。南移至二西河川一。次日再移。平地突出土阜高者二三丈。陷二沒民居一。この他あるべし。こゝに要なければ。思ひ出づるまゝにす

そは天災地妖なれば。例に引くべくもあらず。それにはあらで。浮島の出で、遊ぶといふことは。和漢の書にいまだ見ず。さるを同じ奥羽にて。兩所までこの奇異あり。その爲ものは。神乎鬼乎。見ると聞くとは異なるか。目擊するものおのづから知らん。よりてその畫圖をこゝに出だしつ。或はいふ秋田なる島沼は。近年いたく荒れて。又島遊のことなしとぞ。いまだしかるや否をしらず

第八地理　伊豆韮山（にらやま）

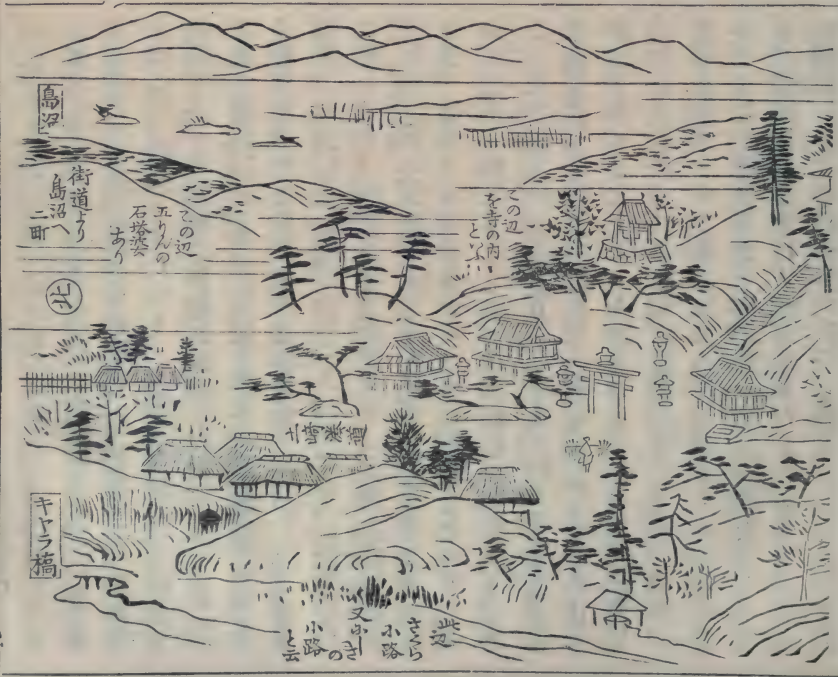
伊豆國。天城。韮山の二峯は。その名いとみやびたり。天城山。在二那賀郡一韮山在二田方郡一天城は。山の高大をもて名を得たり。韮山は山色によりて名づけたるなるべし。巽國にもこれに似たるあり。于闐國なる葱嶺これなり。後漢書卷七十八西域傳云。西域内屬諸國。東西六千里。南北千餘里。東極二玉門關一。西至二葱嶺一。其東北與二匈奴烏孫一相接。南北有二大山一。中央有レ河。其南山東出二金城一。與二漢南一屬焉。其河有二兩源一。一出二葱嶺一東流。注云。葱嶺は山名也。西河舊事云。其山高大生レ葱。故名。といへり。又大唐西域記卷十二闊悉多（クワツシタツ）國條下云。葱嶺者。據二贍部洲中一。南接二大雪山一。北至二熱海千泉一。千泉。疑于泉誤西至二活國一。東至二烏鎩國一。東西南北。各數千里。崖嶺數百里。幽谷險峻。恒積二氷雪一。寒風頸烈。多出レ葱。故謂二葱嶺一。又山崖葱翠。遂以名焉。大明一統志。卷八十九于闐國條下亦云。于闐。東抵二曲先衞一北連二亦力把力。東北至二肅州一。六千三百里古于闐。居二葱嶺之北一百餘里一。又風俗條下云。山川。阿耨達山云々。葱嶺在二國西南一といへり。深山に葱韮を出だすことは。山海經にも所見あり。卷三。北山經云。丹熏之山。其上多二樗柏一。其草多二韮薤一。同書卷五中山經云。葱聾之山。其中云々。この山の名も。右におなじこゝろばへなるべし。又彼葱嶺は。名たゝる山にて。この他。史傳に多く見ゆ。佛學に葱嶺を指すもの。卽こゝなり。西域記なる一説に從ふときは。葱は青葱と熟して。山色の青きをいふなり。今國俗の染色に。淺黄萠黄などいふ黄は。咸葱の假字なり。本草綱目。二十六菜之一韮釋名。時珍云。韮之

まに。輿繼して畫せたり。猶傳聞の失あらん歟。蕉窓云。久保田城より。西の方なる街道を。土崎湊道とす。街道の西に。五百羅漢堂あり。羅漢の北に山あり。高清水と唱ふ。即古城蹟なり。又羅漢より巽のかた。街道の東に坂あり。油殿坂といふ。坂より巽に阜あり。阜上に古四王の神社あり。北向その鷄栖（とりゐ）は。街道のかたに立てり。古四王の神社より北を。すべて寺の内といふ。彼島沼は。街道より東北二町許にあり。この島沼も。その岸おのづから離れて。水中を遊行し。又舊の岸に著くこと。大沼なる浮島に異ならずといへり。その畫圖成りて。余更におもふ。山の移るなどいふ事は。和漢の史にも見えたり。

左の圖中なる伽羅橋は。蕉窓云。昔この邊に。カフルキといふ一種の乞兒をれり。よりてその地をかぶろ木と呼びなしつ。後に訛りてかほる木といへり。かくて薫木の義を取りて。その邊なる橋を亦キヤラ橋といふにやといへり

又云。古四王社頭の鐘は。大同年中の物なり

今按ずるに。圖中の油殿坂は。湯殿坂なるべし

天武紀。七年十二月。筑紫國。大地動之。地裂廣二丈長三千餘丈。百姓舍屋。毎村多仆壞。是時百姓一家。有㆓岡上㆒當㆓于地動夕㆒。以岡崩處遷。然家

ばで。故事ありとしもいはざりけり。これらの人に王維が詩を。見せざるを遺憾とすべし

第七地理　秋田島沼

出羽國村山郡。山形の奥なる大沼の浮島は。（大沼在二置賜郡一）東遊記（巻五）に載せたり。その書に沼の略圖あり。しかれども但省略を旨としたれば。その大抵を觀るに由なし。彼處の畫圖は。水戸宇留野町なる醫隱晴雨坊とかいふ人の寄進せし刻本を。精細なりとすべし。件の畫圖は大沼の山主。大行院より出だすといふ。彼浮島なる。島遊といふことは。未曾有の奇觀なるをつたへ聞き。かたりつぎて。今はしらざるものもなければ。奥羽に歴遊する人は。かならずいゆきて觀るもの多かり。是のみならず。同國秋田郡。寺内に程近き。島沼といふ沼にもまた島遊の奇觀あり。是をば觀る者稀なるべし。甞大東國郡分界圖を攷ふるに。久保田は海を背にして。山（大平山在二豐島郡一）を面にす。大方八郎潟などいふ江は。秋田檜原の兩郡に。界するものに似たり。又山本郡。野田に大沼あり。しかれども彼浮島のある處定かならず。曩に秋田人茂木蕉窓來訪せし日。余この事を告げて。そがいふまに

なり。いきは霧のごとく曇るとなり。角笛のやうなるものともあり。といへり。こはみな推量の說なれば。從ひがたし。さるを近ころの印本。山海名產圖會卷五に。こさふえといふ物の圖を出だせり。諸說皆湖沙と胡笳とを取りちがへしは。傳聞の失なるべし。余曩に。家蒔人に湖沙の事を問ひしかど多くはしらずと答へたり。そのしりたりといふものは。臆斷をなすに過ぎず。古人もかくぞありけんかし。ひとり橘南谿が東遊記に見えたる。胡砂の圖說。是に近かり。その書卷四云。えぞの地方は。陰風常に烈しく。胡塵空に滿つが故に。胡砂吹かば曇りもやせん。とよみたる宜なりといへり。しかれども。胡沙を胡砂として證文を引かざれは。これ將。推量の說に似たり。按ずるに。湖沙は唐維王が詩に出てたり。明田藝衡陽關三疊圖譜曰。王維。字摩詰。河東人。居二藍田輞川一。唐開元九年進士。仕至二尙書右丞一。有二文集十卷一。送二不蒙都口赴二安西一云。嗚笳瀚海曲。按接陽關外。送二劉司直赴二安西一云。絕域陽關道。湖沙與二塞塵一。又曰。陽關漢燉煌龍勒之關也。西域傳。匈奴之西。烏孫之南。北有二大山一。中有レ河。東則接二漢阸一以二玉門陽關一。西則限以二葱嶺一。使二于闐一。記二甘州一。西始二涉磧一。西北百里。至二宿州一。渡二金河一。西百里。出二天門關一。又西百里。出二玉門關一。入二吐蕃界一。西至二沙州一。南十里鳴沙山。又東南十里三危山。其西渡二都鄉河一曰二陽關一。これらの數行に據るときは。註釋を俟たずして。湖沙の義よく聞えたり。げに絕域不毛の地は。常に風いと烈くて。陸には塞塵を吹き立たし。水には湖沙を吹き起し。天色朦朧として。曇らざる日なかるべし。されば爲家卿。彼王維が陽關の詩を想像つゝ。湖沙吹かば曇りもぞする云々とよみ給へるなり。彼は西域遙遠の途を賦し。此は東奥塞下の月をよめり。歌のこゝろは。えぞ人が月を曇らせたるにあらず。湖沙てふものに空はくもりて。可惜秋の夜の月を。えぞには見せじと。こなたより。想像たる餘情ふかゝり。紹巴が發句は。前輩の訛をうけたるなれば。いはずしてしるべし。湖沙は彼地の方言ならぬに。よしや彼處の人に問ふとも。いかにしてその實を得ん。東遊記の作者は。親しく彼地を踏みにきといへば。湖沙てふものを會得せり。遙けき旅宿の甲斐はあれども。書見る事のこゝにおよ

の沙汰に及ばれず。或はおもき罪人を。彼處へ安置せられたり。蘇塗と外と。音訓おなじきによりて。外の濱と書きたるなり。古歌にも。蘇塗を外にかけてよみたるあり。極樂の内ならばこそかたからめ。そとは何かはくるしかるべき 前輩これらの故事をおもはで。臆斷をなすにこそあれ。只類柑子に。卒都の濱と書きたるのみ。是に近かり。約めてこれを釋くときは。蘇塗は東夷の別邑たり。こゝに一屋を構へて。配軍安置の處とす。逃亡のもの。このうちに入るときは。得かへされず。又漢字の義によりて解くときは。蘇字に不安之義あり。又恐懼の貌とす。又屠蘇は平屋なり。正字通蘇字の下に詳なり。又塗は道なり。絶域先途の義を取りて。蘇塗の兩字を配當(あて)たるにやあらん。かくて率都婆の率都にもかよへり

又按ずるに。尾張の熱田にも。外の濱と唱ふる處あり義經記。巻一 しやな王殿げんぶくの事といふ段に。あつ田のさきの大宮司は。よしとものしうとなり。今の大ぐうじは小じうとなり。兵衞佐殿の母御ぜんも。あつ田のそとのはまといふ處にぞおはします。父の御かたみと思し召して云々。こゝには野間の内海に對へて。外の濱といへるなるべし。こは蘇塗の義にはあらず。

夫木鈔 以下係于湖沙 十三秋四 こさふかば曇りもぞする陸奥の
えぞには見せじあきの夜のつき
民部卿爲家

春雨鈔 第七 はまの夜やえぞがこさふく空の月

春雨鈔には。件の歌と連歌の發句とならべ出して。出處の書名と。よみ人の姓名を逸せり。近ころ坊間の印本にも。多く載せたれども。亦この書名を掲けず。こは建長四年。毎日一首中。高濱月と題せし。七うたのうちなるひとうたなり。次の連歌は紹巴なり。此こさといふもの。舊説分明ならず。井空集 第五 云。こさは。笳といふ吹物なり。えぞがてきをまとはし。日をくもらかさんと思ふときは。角笛のやうなるものをもてふけば。霧に似たるものふりて。空くらくなるとなり。一説に海に入りて浮びあがり。汐をふけば。そのいきくもるとなり。こさふかばくもりもぞするみちのくの。えぞにな見せそ秋の夜の月。こゝにはてにをはかへて。注釋にあはせたり 匠材集 第三乙部 云。こさふくは。えぞが息なり。海に入りて。浮きあがり。鹽をふく

皇と稱せられ給ふ。小一條の例かくて紀州玉川の山中に。御籠居ましく〵しかば。玉川の宮と號す。御母儀。嘉喜門院と。よみ替はし給へるおん歌。かの集にあり。又天授二年の夏千首の歌よませ給ふ。然れどもその御製。新葉集に見えず。これをもて考ふるに。御兄弟のおん中不和にして。かの宸筆の御願文も。必南北の間にはあらざるべし。元中二年九月十日。太上天皇寛成敬白。とかゝせ給ふ宸筆の御願文。今現に高野山金剛峯寺にありといふといへり。尤考へ得たりといふべし

第六地理

外濱並湖沙

そとの濱は。陸奥國。今の北郡にあり。西行法師に歌あり。

山家集下　むつのくのおくゆかしくぞ思ほゆる
　　　　　つぼのいしぶみそとのはま風

東鑑。十三建久四年七月廿四日の條下に。外濱に作れり。南留別志巻二南部よりさきは。夷狄の地なるべし。外の濱といふも。日本の外といふ事なるべしといへり。又類柑子。文集上楓子が發句に。卒都の濱に作る。荻ふかし豆腐とよぶは卒都の濱これなり大東國郡分界圖に。曾父ケ濱とす。和漢三才圖會四十二水禽部に。卒土濱に作る。同書六十五地部に。索規濱とす。曾父と索規の義は未㆑詳。卒土は。詩小雅北山之篇に。普天之下。莫非王土。卒土之濱。莫非王士。といふに因れり。おのく〵記者の臆度に出づ。諸說皆非なり。按ずるに。外當㆑作㆓蘇塗㆒。蘇塗は夷人別邑の名なり。後漢書七十五東夷傳曰。韓有㆓三種㆒。一曰㆓馬韓㆒。二曰㆓辰韓㆒。三曰㆓弁辰㆒。馬韓在㆑西。有㆓五十四國㆒其北與㆓樂浪㆒與㆑倭接。又曰。馬韓人。常以㆓五月田竟㆒祭㆓鬼神㆒。晝夜群聚歌舞。舞輙數十人相隨。蹋㆑地爲㆑節。十月農功畢。亦復如㆑之。諸國邑。各以㆓一人㆒。主㆑祭㆓天神㆒。號爲㆓天君㆒。又立㆓蘇塗㆒。註引㆓魏志㆒曰。諸國有㆓別邑㆒爲㆓蘇塗㆒。諸亡逃至㆓其中㆒。不㆑還㆑之。蘇塗之義。有㆑似㆓浮屠㆒。といへるを證とすべし。浮屠は塔なり。釋氏要覽巻下送終立塔。梵語塔婆。此云㆓高顯㆒。今略稱㆑塔也。又梵云㆓蘇偸婆㆒。此云㆓實塔㆒。又梵云㆓窣都波㆒。此云㆑墳。又云㆓抖擻婆㆒。此云㆓讃護㆒。或云㆓浮圖㆒。此云㆓聚相㆒。これその概略なり。かゝれば蘇塗は。塔婆の類。榜示やうのものをいふなり。上古は。三韓のみならで。此奥北倭の盡處にしも。亦蘇塗を立てたるなり。かくて中葉に至りても。浮浪逃亡のもの。その内に入るときは。追捕

の質朴想像るべし。券書にいふ直錢七貫文は。永樂錢にあらず。永は金壹兩を。壹貫文とす。當今江戸の銀相場をもてすれば。永壹貫文は。銀六十匁。五百文は。銀三十匁。二百五十文は。銀十五匁に當れり。又むかし撿地に。貫高といふことあり。軍書に。某甲に。食邑幾貫文をあて行はるなどいへるは是なり。甲斐國名勝志（卷一）に。荻原元克が云。天正年中。毛利氏撿地のころまでは。一歩を一文とし。一畝を三十文とし。一段を三百文とし。一町を三貫文とす。ひと、せ上野廣俊が。信濃國に行きけるに。伊奈郡。北小河村なる。村木何某の家に傳ふる算書に。しか見えたりと語りきといへり。采地の貫高。これにてその義明なり。又地名に某の庄と唱へたる庄は。（庄は莊の草なり。俗庄に作る。非なり）別莊莊園の莊なり。莊は郷とおなじからず。道（東西南北の七道）の下に國あり。國の下に郡あり。郡の下に郷あり。是天朝千古不易の制度なり。今の俗は。さるよしをしらで。郷なりしを。莊と唱へ。莊なりしを。郷とする類多かり。莊はそのぬしの分限によりて。廣狹あり。中葉より。人臣私に莊園を購ひ求めて。子孫の爲にしたるにより。太上皇。（白河ヨリ後鳥羽ニ迄）も。をさ〳〵これらのおん謀あり。寺々へも。多く屬させ給ひしかば。よに莊の名はいで來にけり。莊園盛になりしかば。舊の郷名は亡びて。莊ならぬをも莊といふめり。和名鈔（國郡の下に載せたる。諸國の郷名今存する處。十が二三に過ぎざるは。この故なるべし。又按ずるに。後村上院は。正平廿三年。戊申春三月十一日。辛巳。住吉殿に崩給ひき。（おん年四十一）東宮　長慶院。受禪卽位の事詳ならず。細々要記。その他の古記錄に。明文なければなり。山宮維深が皇統授受圖に。正平廿三年より文中二年までを。長慶天皇の臨御とせしは。花營三代記の訛を受けたるなるべし。又後龜山院を。長慶帝のおん子とせしも。亦非なり。又天野信景の南朝紹運圖に。度會延經が說を引きて。寛成（長慶帝おん諱）熙成（後龜山帝御いみな）同訓なるをもて。（實は寛成熙成を。同訓に唱へ奉りしにはあるべからず。俗點に。足利義詮義教を。共によしのりと讀めるが如し南朝紹運錄のあやまりははやく太田翁いへり）御一人の事とせしは。いよ〳〵非なり。又保己一檢校の花咲松に。新葉集の。序並に證とすべき歌あまた引きて。辨あり。その書の追考に云。長慶院諱は寛成。後龜山院御同腹の御弟なり。正平廿三年。東宮に立ち給ひ。天授の末。辭して太上天

これ唐の李肇が所云。雷州の雷公と仝類なるべし唐國史補下篇云。雷州多レ雷。春夏無二日無一レ之。雷公秋冬。則伏二地中一。人取而食レ之。形類レ彘。といへり。か丶れば雷獣の首。猪に似たるもの。世にこれなしとすべからず。蠡海集。氣候篇亦云。風雷在レ天。有レ聲而無レ形。故假二乾位戌亥一。肖屬以配レ之。是以風伯首像レ犬。雷公首像レ豕。雨爲レ坎。坎中男也。雨師像二士子一。電雷光也。對レ震者巽。巽長女也。雷母像二婦人一。古之鹵簿四神旗。皆繪畫也。といへり。五行の理を推すことは。宋儒の癖なり。謝肇淛は。いたくこれを笑へり。しかれども。雷公の首を豕に像ることは。大に據あり。畫者のそらごと丶のみすべからず。今はしも右なる畫圖を。唐國史補にあはせ考へて。聊こゝに得ることあり。但。奇を好むの譏を免れがたきのみ。ついでにいふ。雷火の陰火たるはさらなり。凡火をも亦陰火とするものあり。清逸田輿小說云。太陽爲レ陽。凡火爲レ陰。故太陽出。而火燄無レ光。水澤之氣亦消滅。これも亦一說なり

第五地理　名手莊大塔御領

文化の初年。京の人河津秋平。（江戸下谷僑居に没す。文化二乙丑のころなるべし。）（その月日は忘れたり）ふりたる字紙を。多く齎したり。そが中にて。余は。後小松院の御宇。應永七年三月十八日。山伏覺算が先達職の劵書一通。南朝の正平二十一年。（後村上天皇年號）丙午。四月廿五日。百姓田中孫十郎が田園の劵書一通。共に二本を購ひ得にけり。よりてその書の由來を問ひしに。秋平云。昔歳高野山なる何がしの院より。京なる經師に。屏風一雙を遺して。修復（つくろは）せたることありけり。これらの古劵書は。みなその屏風の舊の下張より出たるなり。ある人覩て。他紙をもてこれに易へしにより。世にあらはるゝことゝはなりつ。こはその三ッがひとつなりといへり。現にこの正平の劵書は。崑山の片玉なるべし。當時南朝の御領なる國々を。物にしるしつけたるあれども。巨細には聞えず。劵書に。紀伊國那賀郡。名手莊校本大塔御領。野上村云々とあり。原本のまゝ臨寫して。考證の一端に備ふ。田地の售ぬしかくの如き花押あり。當時

孫十郎

越の後なる一友人より。異形なる雷獸の畫圖一頁を獲たり。その圖說に云。元祿年間。夏六月中旬。越後國魚沼郡。妻有の近村。伊勢平治村なる。觀音堂の邊。深田の中に陷りつゝ。竟に斃れし雷獸ありけり。當初袖の澤の里人。豐與といふもの。年十五のとき。觀音詣のかへるさ。雨を長徳寺（この寺觀音堂の邊にあり）に避けて。住持と共に。目擊せしといひ傳ふ。こはよに異なる雷獸なり。その形六足（前二足後四足）三尾なり。首は野猪に似て。長き牙あり。啄の長サ七八寸。尾の長サ啄とおなじ。足の長サ六寸餘許。爪は水晶の如く。鮮にして水搔あり。狼の如し。毛鬣三寸。その色焦茶といふものに似たり。すべては身長狐とおなじ。眼するどく。形體にくむべし。今の畫圖は。小千谷なる。法橋玉湖といふ畫工が總角のとき。（寶曆年間）祖父の話說に就きて圖したるを。復摸寫せしなりといふ。（提要易文）越後鹽澤なる鈴木牧之（通稱義三二）は。素より好事の人なれば。余が爲に。件の圖說をうつしとりて。附郵して見せらる。牧之云。目今の事といふとも。そら言は多かるに。況て百とせあまりの事なれば。證とすべき人もなし。只彼玉湖は。豐與が孫なり。畫をもて僕と。友垣結ぶこと久しくなりぬ。渠が總角のとき。祖父の云々といひしまに〳〵。圖したりとかいふめれど。虛實は定かならずといへり。牧之は老實人なれば。しか思ふこそことわりなれ。げに信けがたき事なれども。因にこゝに謄寫して。兒曹の觀に充つるのみ。よしやこの物よにありとも。その形みなこれならんや。六足三尾は。復あるべくもあらずかし。余これらの畫圖を見て。更に思ふよしあり。

雷獸畫圖

此圖與一本寫生四足之物比校乃祛虛擲實使與繼復画之

鸓字下云。俗鸓字。説文作鼺。といへり。よりてお
もふに。鸓と雷と聲相近し。翠は和訓民騰璘なり。
翠山を讀みて松山ともすべし。且その圖を觀れば。
經と異にして。尋常なる山鷄の如し。鸓の俗字鷗な
れば。この土のらいの鳥に傅會して。雷鳥とも書く
歟。さて火を禦ぐとはいふなるべし
又唐山には漢の時。畫工が圖せしといふ雷公の形は。
王充論衡雷虚篇二十三葉に見えたり。晋の扶風の楊道和
が搏殺せしといふ雷獸は。捜神記卷十二第六條に出で
たり。これらの故事は。前輩多く引用せり。人のし
る事なれば贅せず
雷獸は今も目撃なるものあらん。その狀。小狗に類
して灰色なり。頭は長く。啄半黑し。尾は狐の如く。
利爪鷲の如しといへり。雷震記に圖するもの。信濃
地名考に說くところ大抵相同じ。又一說に。首尾は
貒に似て。狀鼯鼠の如く尾と共に長サ二三尺に過ぎず。
全體雛狐の如しといへり。種類一同ならぬものにや。
越後名寄卷一天象參補亦云。安永中。雷隕二于村松城之士
家一。而獲レ獸。大如レ猫其形亦略相似矣。其毛灰色而
有レ先。日中之後。帶二黃赤色一。如レ金。腹毛逆生。毛
末有レ岐。天晴則終日垂レ首如レ眠。陰暗風雨之日。則
有三可レ恐之勢一矣。此獸打二傷足一。而不レ能二升騰一。是
以被レ獲焉。瘥之後。土人放レ之矣。按蓋雷隕之處。
往往見二此獸一。此獸在二於三國嶺一。河内山中。飯豐山
之中一。雲下掩二山中一。則乘レ之升騰。而奔二走雲中一。從二
雷霆一隕レ地。土俗名レ之謂二雷獸一。といへり。これら
は見聞のひとしからざると。おの〳〵譬を取るのお
なじからざるにもやあらん。此に墜つるもの小狗の
如く。彼に獲らるゝもの。獺の如く猫に似たらんは。
いよ〳〵いぶかし。深山の怪獸。臆度をもて辨じが
たし。姑く異同を擧げて。後勘の爲にす。唐山にも
𤢖といふ獸あり。正字通。巳集下 𤢖字下云。俗鼺字。
舊說引二說文一。鼠形云々。一名鼯鼠。一名飛生。とい
へり。鼺音鸓。玉篇音羸非 これに由るときは。鸓は和名むさゝ
びといふものなり。しかれども續字彙補。巳集 補音義
云。𤢖力追切。音雷。獸名。其形似レ狸。といへり。
かゝれば是國俗の所云雷獸の類なるものか。亦その
雷に從ひて昇降するや。否をしらざるのみ。又一種。
雷獸の首。彘に似たるものあり。そはある人の藏弆
せる。臨本にて見き。寫眞なりといへり。又近ころ

亦多かり。土人これを見るときは。打ちころさずといふことなし。彼鳥好みて。雷の虫を食へり。よりて雷鳥と名づくといへり。こは雷よけといふ義に就きて。土人附會の説なるべし。同書に。陳眉公が祕笈の中なる。太平清和といふ書を引きて。灶神といふ鳥あり。朱冠鳥衣とあれば。この方の雷鳥に似たり。灶神は竈神なり。國俗荒神の繪馬に。鷄を畫けるは。灶神の誤なるべし。といへり。（灶神鳥も亦方言なるべし）この説攷据あるに似たれども。求め過ぎたり。竈神の繪馬なる鷄は。原らいの鳥を畫けるならん。今も荒神の棚には。件の繪馬と丶もに。松をまゐらせざるものなし。らいの鳥松を好めばなり。この鳥はよく火災を。除くといふによるのみ。又雷をおそる丶もの。正月の門松を藏めおきて。雷鳴のとき焚くことも。おなじこ丶ろばへなるべし。事みな彼を師とするにあらず。灶神鳥は求め過ぎたり。世に彼繪馬を。竈の神にまゐらするは。寶永以來の事なるべし。何となれば。いづれの年にかありけん。上皇宮の亭子に。彼鳥の像を畫かせ給ひしかばその亭。寶永五年の火災に免れしとなり。この事は。東涯の鵺説にいへり。

前に載せたる。輶軒小錄なる。來鳥の事と異なることなければ略抄す。紹述文集。（巻九說類）越之白山有鳥。其名曰鵺。字出爾雅。朱冠玄衣。青趾白腹。翅端。云々。州豪小武氏友梅。世虔奉山靈。締盧山腹。以休登陟者之勞。上山者數矣。竟獲覩之。圖而傳之。曩時風早中納言實種卿。奏進之上皇宮。宣圖其像于亭子。寶永戊子之災。亭免于燬。屬者友梅。奉煩卿令孫實積朝臣。辱以聖製題其上幀。屬予記之云。（享保十四年己酉四月）同集。（巻十二。贊類）題鵺圖。越山有鳥。其名曰鵺。潛迹深松。棲彼崔嵬。朱冠玄衣。雙々徘徊。圖而傳之。曰能避災。（癸丑冬日。坊城霽寰公懇）これらの事。世にいひもて傳へしかば。當時繪馬を作るもの來鳥を畫きつ丶。荒神の繪馬とて。賣り出だし丶ならん。かくて年たち人逝くま丶に。はやその原を得しらずなりて。今はをさ〳〵鷄を圖するもの歟。虎を畫きて狗となる類なり。又按ずるに。鵺の火を禦ぐといふよしは。鸓といふ物に本つくにはあらぬ歟。山海經（巻之二西山經）云。黃山之西。二百里曰翠山。其山云々。其鳥多鸓。其狀如鵲。赤黑而兩首四足。可以禦火。（今按。鸓音壘。與鼺同。和名牟左々備。）檢正字通。（亥集中）

たれども。終に石中に走り入らしつ。はつかに雛ひとつを獲たり。雌雄石間にありてひなを呼ぶ。その聲虫の鳴くが如し。幽栖の鳥。人に驚きて聲を出たさず。鷄鳴は妄誕なり。雛の大サ鳩の如し。黄胸高サ五寸許。色は鶉の如し。目上くぼかに。丹頂いまだとゝのはず。といへり。この説尤詳なり。らいの鳥。は蓼科山のみならず。加賀の白山はさらなり。飛驒の乘鞍嶽にもありといふ。この他。北國の深山には。あるところ猶あるべし。電震記云。享保のはじめ。飛驒ノ國。乘鞍ノ嶽に。雷鳥ありと聞えしかば。有司うけたまはることありて。數十羽とらへたりけれども。餌飼のたがへる故にや。多く隕(おち)けり。餌嚢を裂きて見るに。松實のみありしかば。やがて松實をもて飼ひけれども。それすら東都へまゐりしは。五六羽に過ぎず。これもいく程なく隕ちにき。風土の異なる故にやといへり。又谷川士清が和訓栞にも。粗らいの鳥の事をいへり。こは信濃地名考。雷震記。及大和本草等の諸説と異なることなし。（和訓栞。全部のうち。三が一つはいまだ刊行せず寫本にて傳ふ。來鳥の事は寫本のうちにあり）おなじすぢなれば省きつ。今按ずるに。古歌にらいの鳥は。必。松をよみあはせしにて。今いふ雷鳥なるよしは違はねども。雷にちなみある事は聞えず。或は來の鳥。或は鶆と書きたるものあり。鶆ノ字は爾雅に見えたり。しかれどもその義にあらず。爾雅（釋鳥）云。鷹鶆鳩。郭璞註曰。鶆當ㇾ爲ㇾ鷞。字之誤耳。左傳作ニ鷞鳩一。鷹音鶯といへり。刑芮が疏にも。樊光が説を引きて。春秋の鷞鳩氏を證とし。又左傳昭公十七年。鷞鳩氏云々。杜註ニ鷞鳩ハ鷙也。といへるに從ふのみ。元來字の誤なれば。鶆といふ鳥は彼處になし。正字通。鶆ノ字の下にも。只爾雅を引けり。この他。本草等を考ふるに。出づるところをしらず。かゝれば鶆は國俗の合書(あわせもじ)にて。白田を畠とし。火田を畑とするが如し。らいと呼ぶ鳥。この外にもあり。信天翁は水鳥なり。これをもらいといふ。大和本草（十五）水禽部に見えたり。海濱の人。馬鹿鳥と呼ぶもの是なり。（和訓栞にこれを載せたりしかれども本書を引かず）又續字彙補（亥集）鳥部。鸎力。賣切。音賴。鳥名。これらは只同音なるのみ。その字異なり。又いかなる鳥といふことをしらず。信天緣の事ならん歟。雷震記云。加賀國白山權現の山中に。雷といふ虫あり。形。蛙の如し。この虫春に至りて。多く出づる年は。雷も

此方のらいの鳥に似たり。又酉陽雜俎（巻八羽篇）云。京之近山有二紫蒿鳥一。頭有レ冠。如二載勝一。（載勝鳥名。諸説未レ詳）大若二野鷄一。といへり。これも亦らいの鳥に似たり。只好みて松樹に栖むや否をしらざるのみ。又正字通（亥集中）鷄字下。引二臨海異物志一云。閩越有二杉鷄一。居二杉樹下一。冠頰青。亦可レ食。といへり。これも亦らいの鳥の類歟。その栖むところ。松と杉と。冠頰の色異なるのみ。これらの鳥を穿鑿せば。なほあるべし。しかれどもその物を得て見るにあらねば。皆推量の外を出でず。又この方なるらいの鳥は。東涯云。越ノ白山ニ。ライノ鳥ト云フ物アリテ。昔ヨリ語リ傳フ。其字鵜ノ字ヲ書クトナン。朱冠玄衣。足青ク腹白ク。翅ノ先ニ白色ヲ帶ブ。鵲ノ如シ。雌ナルハ雌雉ノ如シ。甚其子ヲ愛ス。白山ハ此國ニテ。究メテ高山ナルユヱ。四時常ニ雪アリ。山ノ絶頂ヨリ下。廿町バカリ[下](本ノマヽ)ニ。五葉[阪](本ノマヽ)ト云フ坂アリ。萬松環リ圍ムコト數十囘。（紹述文集作二數十里一）此鳥其間ニ棲宿シ。曾テ他所ヘ行カズ。見得ル者アラバ奇瑞トス。コノ鳥ヨク火災ヲサクトナン。昔云々。國ニ小武友梅トイフ老人。家素ヨリ。豪富ニテ。好事ノ雅人也。平生山水ノ癖アリテ。天下ノ名山奇水。遊歴セズトイフコトナシ。常ニ白山ノ神ヲ崇信シ。度々山上シ。路ニ休所ノ廬ヲ結ビ。往來ノ人ヲヤスラフ。親ク彼鳥ヲ目撃シ。圖繪シテ云々。（已上輶軒小録。摘要）又吉澤好謙信濃地名考（下篇）云。蓼科山（たでしなやま）に栖む鳥は。世に圖する鵜なり。畫圖に少の差あり。戴冠（とさか）立たず。尾も長からざるのみ。雄のかたち。暹羅鳥（しやむろとり）に似て。高二尺許。黑色に白斑あり烏鷄（からすとり）といふもの、如し。丹頂の肉あり。雌は黄雌鷄に似て。胸のうち黑く。白斑あり。巖穴に栖み。松の翠を啄むといへり。後鳥羽院御集。しら山の松の木かげにかくろひて。やすらにすめるらいの鳥かな。（解云。雷震記には。この御製と。家隆卿の歌を引きたり。しかれども出づる所の書名を揭げず。夫木鈔二十。山部。正治二年百首の御歌後鳥羽院御製。しら山の云々。同從二位家隆卿。あはれなりこのしらねにすむ鳥も。松をたのみてよをあかすらん）又云。この山（立科山なり）には。夜半に鷄鳴あり。こは虚誕なるべし。ひとゝせみな月の末に登山す。あら野に一夜あかして。五十餘町登る。この日は霧立ちて。山中人聲絶えたるに。彼鳥六七見えたり。つく〴〵見るに羽さきまろし。高く飛び去らんことをはかりて。數輩東西にわかれつゝ。笠をかざし。杖をならして逐ふに。をとり甚たけくして。しかも聲なし。三たびおさえ

彼も安藝にあり。此も安藝にあり。千百數年を歷て。同物同國に落ちて死したる事。いよ〳〵奇なり。龍は雷公を役すといふ說あり。見二五雜俎天部一雲は山林より起り。又海上よりも出つ。山より起る雲は。おのづから山のかたちあり。海より出づる雲は。おのづから波に似たり。されば山獸のみならで。雷氣を好む水族あらん。只落つること稀にして。人の觀ること多からざるのみ。又按ずるに。文德實錄卷十云。天安二年。六月壬辰。雷雨此夜左近衞大宅年麻呂。於二北野一見レ之。當二稻荷社一。有二兩鷄一相鬪。其色似レ赤。相鬪之間。毛羽散二落地一。雖二相隔一。見似二眼前一。良久而止。此語類二妖妄一。而記レ怪也。又日本記略後一條院記上云。萬壽四年。丁卯五月癸亥。雷電風雨。京中洪水流入。舍屋顚倒。豐樂院西第二堂。雷火欲レ燒。即以撲レ雷。形似二白鷄一云々。雷公隨二於處々一。かゝれば亦雷鷄あり。今は人のこれを見きといふものを聞かず。さはれ唐山には。このもの多くあるにや。五雜俎天部云。今嶺南有レ物。鷄形肉翅。秋冬藏二山土中一。掘者遇レ之。轟然一聲而走。土人逐。得レ殺而食レ之。謂二之雷公一。余謂。此獸也。以二其似一。故名レ之天上雷公人得食レ之耶。唐國史補。云二雷州雷公。形如レ彘者一。亦此類又云。雷之形。人常有二見レ之者一。大約似二雌鷄一肉翅。其響乃兩翅奮撲作レ聲也。よりてれもふに。天朝天安萬壽の雷鷄は。彼嶺南なる。雷公の類なるべし。世にいふ雷の鳥はこれと異なり。その狀野鷄に似たり。好みて松樹に處るといふ。雷震記に。大明一統志を引きて。漢名は鶉鷄。舊本には松鷄とあるよしをいへり。同書に雷鳥の畫圖を出したり。こは世に傳ふる儘にして。寫眞にはあらず。又輶軒小錄。越山鵺鳥事。と題せし條下云。皆偶古文品外錄ヲ閱スルニ。宋ノ晁補之ガ新游北山記ヲ載ス。云々。旁背二大松一云々。この間脫文歟。善本を得ば比校すべし松間藤數十尺。蜿一本作蜒如二大蛇一。其上有レ鳥黑如二鴝鵒一。赤冠長啄。俛而啄。磔然有レ聲云云。此樣子ヲ考フルニ。タシカニ鵺鳥ト見エタリといへり。その書に鳥の名をしらさゞりしは。晁補之もいまだ知らざりしならん。今按ずるに。山海經卷之二西山經云。華山之西四十五里。曰二松果之山一。云々。有レ鳥焉。其名曰二䳋渠一。䳋音形弓之形其狀如二山鷄一黑身赤足。可二以已一レ𦢊。謂二皮皺起一音叵蛟反といへり。その棲む山を松果といひ。その狀山鷄のごとく。云々といへば。よく

也。六の大一を畫て。これを横に置くときは。仁となすべく。仁の一畫を串きて。これを縦に置くときは。天となすべし。これをもて觀るときは。仁は天功の衍義なり。忠恕は仁の衍義なり。その功天とひとしきは。則仁といふべきのみ。儒の道は卽仁なり　賞罰必時をもつてす。これを人事に象りて。天罰といふ。天は時運の樞機實理の基本なり。これを人事に及ぼして。天命といふ。宋儒は因りて天理といひけり。天數は奇。地數は偶なり。これを歳時に攷へて。天の曆數ともいふ。天職は字育なり。天情は禀性なり。天君は心神なり。天養は衣食なり。天政は禍福なり。又天網は天の囹圄。所云疏而不レ失もの。天神天民は。不爭自得の假稱のみ。方外の書に出づるものから。天と唱ふるよしは違はず。天を尊み日を敬ふ。彼我の分別。遠きことかは。かう揣りつゝわれはしも。三敎その道異なれども。その理は一致ならんとおもへり

この編いぬる比。童子問の答なり。談天空語もとより嗚呼なり。問ひけんものも亦嗚呼なり。そを辨じたる。いよ〳〵嗚呼なり。これ一編の大意なり

第四天象　雷魚雷鷄雷鳥　並異形露獸圖

雷鳥雷獸の事は。曩に拙著の小説に附記したれども。遺漏多かり。よりて再び攷證す。世に雷魚といふもののある歟。書紀廿二推古紀。廿六年云々。是年遣二河邊臣一缺名於二安藝國一。令レ造レ舶。至レ山覓二舶材一。便得二好材一以名。將レ伐。時有レ人曰。霹靂木也。不レ可レ伐。河邊臣曰。其雖二雷神一豈逆二皇命一耶。多祭二幣帛一。遣二人夫一令レ伐。則大雨雷電之。爰河邊臣案レ劍曰。雷神無レ犯二人夫一。當レ傷二我身一而仰待レ之。雖二十餘霹靂一。不レ得レ犯二河邊臣一。雷神卽化二少魚一以挾二木枝一。卽取レ魚焚レ之。遂修二理其舶一。この事。日本靈異記卷之一第一に載せたり。しかれども。泊瀬朝倉宮治二天下一雄略天皇二十三年の事として。河邊臣を小子部栖輕とす。且雷魚の事なし。すべて史とあはず。又源平盛衰記卷十七に。栖輕が事を載せたり。その文靈異記におなじ。皆非なり　これを雷魚といふべき歟。しかれども雷魚の事は。この外に管見なし。但それにやとおぼしきものは。閑田次筆に載せたる。享和年辛酉五月十日。安藝國九日市といふ所なる。鹽竈に落ちて死したりといふ雷獸のみ。曩にその圖説を閱せしに。長一尺四五寸許。四足短毛鱗甲あり。その形粗鯪魚方書に穿山甲といふものこれなりに似たり。かゝればよのつねなる雷獸とおなじからず。水族とするに近かり。推古紀に。雷神小魚に化て。木枝に挾りしといふもの。恐らく古今同類なるべし。もし果してしからんには。

しかれども佛書の註釋は。援引紛紜たり。理を推し。意をもて解がざれば。多く得かたかるべし。嘗大明三藏聖經目錄を閱するに。佛說阿彌陀經二卷。佛說無量壽經二卷。大阿彌陀經二卷。大日經攝念誦隨行法。佛說阿彌陀經疏。與ニ他經一合本各一卷あり。みな眞經なり。考ふべし。傳灯錄に。阿彌陀佛。姓憍尸迦。父名月上。母名殊勝妙顏といふものは。善巧方便のみ。なほ潛確居類書に。老子歷藏經を引きて。日姓張。名表。字長史。月姓文。名申。字子光といふがごとし

○儒道に天と唱へて。固に尊みおそるゝものは。天つ神なり。天神は。日月星辰。司中司命。(司中司命も。亦星の名なり)飌師雨師等これなり。なほ巨細にしらんとならば周禮の大宗伯を照て見つべし。又道德なり。論語(述而)に所云。天生ニ德於予一。桓魋云々の天の如し。又時運盛衰。自然の義なり。書の大甲に。天作孽猶可レ違。自作孽不レ可レ逭。孟子(梁惠王篇)に。吾之不レ遇ニ魯侯一天也。の天の如し。この他。人事に天を被て。唱ふること多かり。天功は。書の舜典に見ゆ。天命は。書の益稷。又易の上彖傳(无妄の文)に見ゆ。書の大甲上には。天之明命といへり。天道は。易の說卦傳に見ゆ。上彖傳(大觀の文)には。天之神道といへり。下彖傳には。天地の道ともいへり。天罰は。書の甘誓及湯誓に見ゆ。天數は易の下彖傳に見ゆ。天職。天情。天養。天政は。並に荀子の天論篇に見ゆ。天綱は。老子の第七十三章に見ゆ。天師天民は。並に莊子の庚桑楚に見えたり。この餘いくばくもあるべし。學者の知る所なり。抑。天は靜默無爲を體とす。その至理微妙なる故は。天德に德なきが如し。老子の玄牝。墨子の兼愛。その指すところ皆これなり。その無上至尊なる故に。天に總名あることとなし。彼が天を敬するは。猶我日を敬するが如し。易(說卦傳)曰。立ニ天之道一。曰ニ陰與一レ陽。天道は。日月星辰風雨寒暑これなり。又天道は日なり。草木子(原道篇)云。冬至。用ニ陽遁一順ニ行九宮一。夏至。用ニ陰遁一。逆ニ行九宮一。從ニ天道一也。天道日也。と自注せしにて。よく聞えたり。日は陽德をもて。四象の主たり。しかれども陽ひとり行かず。日は晝に照らし。月は夜に照らす。星辰風雨。これが佐となりて。萬物を化育せり。是を人事に象りて。天功といふ。天功は卽仁なり。(愚以爲。天從レ一從レ大。仁從レ人從レ二。蓋天人の等)

世界。有下師子佛。名聞佛。名光佛。達摩佛。法幢佛。持法佛。如ニ是等一恒河沙數諸佛上。又曰。上方世界。有ニ梵音佛。宿王佛。香上佛。香光佛。大焰肩佛一。雜色云々と說けり。これらは日のゆく所によりて。四方にその名を異にせしのみ。或は星辰をいふもあらん。阿閦號ニ無動一法雲曰。阿之言無。閦之言動。愚以爲北極也 俗にいふ三尊の彌陀は。三光なるよしも。これによりてしるべし。蠡海集に。十王十干之義也。といへるも。同一理なり。又西方無量壽佛は日なり。又下方世界云々の諸佛は。天日地下を照すときをいふなり。その下方を先にして。上方を後にせしは。釋敎は。西方日沒の時を旨とすればなり。これを極樂國と指すときは。西方十萬億土とす。これ天地相去る里數なり。卽身作佛と悟るときは。阿彌陀は人々の胸膈にあり。佛藏經曰。衆生心中。皆有ニ如來一結跏趺坐矣。涅槃經曰一切衆生。悉有ニ佛性一。如來常住。無レ有ニ反易一。維摩經。佛國品。佛言。審積當レ知。直心是菩薩淨土。解云。此與ニ孟子性善之言一相似 何となれば。日を火元とす。火は心なり。かゝれば阿彌陀は。五臟の主たり。この故に。念佛念經と說けり。或は是心是佛の說あり。祕鍵云。眞如非レ外。棄レ身何求。迷悟在レ吾。發心卽到 俗に家廟の阿彌陀は。立像を忌むべし。これを犯せば。その家あるじの心おちゐず。思慮定まらずといへり。この事婦女子の臆斷に出づといへども。阿彌陀をもて心肝に擬す。理或は然ることあらん。こゝをもて釋敎も。亦天日を尊ぶといふなり。しかはあれども。佛說は無邊無數にして。且。飜譯紛紜たり。譬へば阿彌陀經ありて。又無量壽經。大日經あるが如し。翻譯名義集。諸佛別名曰。阿彌陀。清淨平等覺經。翻ニ無量淸淨佛一。無量壽經翻ニ無量壽佛一。○大日如來。梵云ニ摩訶毘盧遮那佛馱一。此云ニ大日覺一。摩訶翻レ大。毘盧遮那。此云レ日也。法雲曰。賢首梵網疏云。梵本盧舍那。此云ニ光明偏照一。照有ニ二義一云々 この故に。入り易くして覺り難し。又彼ノ西方極樂國と說くよしは。西は五行に金とす。金氣傷殺するときは。混虫蟄蟄伏し。草木凋落す。便。是百物寂滅の時を指すなり。又西方は四時に秋とす。秋は揫なり。物揫斂すれば。乃。成熟す。亦是成道成佛の時をさすなり。且。日は東に生じて。西に死す。釋敎は。寂滅爲樂なり。この故に西方極樂國阿彌陀佛と說けり。加之。水は西よりして東に流る。人はその下流に在り。日々にこれを汲みて。百事經營せざることなし。こゝをもて。西は十方世界の師表たり。韓愈物部ちからありとも。竟に拒み得ざりけん。抑。亦宜ならずや。

かさねていふ。阿彌陀經は。科註にますものなし。

萬五千里。四表之內。并星宿之內。總三十八萬七千里。天中央。上下正半之處。一十九萬三千五百里在於中。此天地相去之里數也。又曰。地厚三萬里。春分之時。地當正中。自此地漸々而下。至夏至之時。地下漸々而向下。至秋分。地正當天之中央。自此漸々而上。至冬至。上遊萬五千里。以上考靈耀の文なり。月令正義考靈耀は。周禮の疏。その他諸書に引けり。この書傳はらず ○周禮天官大司徒曰。日至之景。尺有五寸。謂之地中。天地之所合也。四時云々。註景尺有五寸者。南載日下萬五千里也。地與星辰。四遊升降于三萬里之中。是以半之。得地之中也○劉向新序刺奢篇曰。魏王將起中天臺。令曰。敢諫者死。許綰負操鍤入曰。云々。臣聞天與地相去萬五千里今王半之。當七千里之臺。高既如是。其趾須方八千里。盡王之地。不足以爲趾○淮南子天文訓曰。天有九野。九千九百九十九隅。去地五億萬里。又曰日入于虞淵之汜。音凡曙於蒙谷之浦。行九州七舍。五億萬七千三百九里○白虎通論日月曰。周天三百六十五度四分之一。日月徑千里也○五雜俎天部謝肇淛曰。天去地九萬里。徑三十五萬七十里。此亦臆度之詞耳。天之禮。日月星辰。所不能周

也。而況於人乎。○草木子管窺篇葉子奇曰。空即天也。自地而上莫非空也。即天也。この漢。獨その實を得たり。以下係于三教

○神道は日を尊み。儒道は天を貴ぶ。釋教も亦。日を本尊とせざることなし。三敎その道異にして。理一致なり。何をもて釋氏も亦。日を尊めるよしをしるか。釋氏は阿彌陀を師表とせり。阿彌陀は卽大日なり。佛說阿彌陀經曰。爾時佛告舍利弗。從是西方十萬億佛土有世界。號極樂。其土有佛。號阿彌陀。舍利弗於汝意云。何彼佛。何故號阿彌陀。舍利弗。彼佛。光明無量。照十方國。無所障礙。是その十方國を照して。障礙なきものは。天日にあらずして何ぞや。又曰。東方世界亦有阿閦鞞佛。須彌相佛。大須彌佛。妙音佛。如是等恒河沙數諸佛。又曰。南方世界。有日月燈佛。名聞光佛。大焰肩佛。須彌燈佛。無量精進佛。如是等恒河沙數諸佛。又曰。西方世界。有無量壽佛。無量相佛。無量幢佛。大光佛。寶相佛。淨光佛。如是等恒河沙數諸佛。又曰。北方世界。有焰肩佛。最勝音佛。難沮佛。日生佛。網明佛。如是等恒河沙數諸佛。又曰。下方

也。魄之爲レ用。能動能作痛癢由レ此而覺也といへり。魄は蘭學者流の所云神經これなり。象二之于天地一。天氣爲レ魂。地氣爲レ魄。魂者。神也。陽也。氣也。魄者。精也。陰也。形也。又佛說に。魂識魄識あり。同一理なり。天之魂魄曰二日月星辰一。地之魂魄曰二風雲水火一。日は天の魂たる故に。夜に見はるゝことを得ず。猶動物寢に就けば。魂その位を離れて。自他をしらざるが如し。月は天の魄たるゆゑに。晦望なきことを得ず。猶物の生にはその魄生り。死にはその魂滅るが如し。古人月の晦望に魄をいふもの。誠に所以あり。隕星の變化も。この理を推さば曉り易かるべし。

第三天象　嗚呼物語

天をば測るべし。天をは究むべからず。これを測るものは表のみ。天をばいふべし。天をば辨ずべからず。これをいふものは理のみ。よに有りがたき理もて。有りとしもおもほえぬ事をしも說くものは。釋氏の天堂。道家の玉城。その言をさ／＼奇して。その事は實すくなし。唯老佛のみならず。儒も天の高きこと。いくばく里といふものあり。それを非とするものは。天を氣の積めるものとす。これを不易の論といふとも。亦推量の外を出でず。只見るまゝに說くものは。子思の昭々。中庸 莊子の蒼々。逍遙遊 視聽の及びがたきには。智ありといふとも。得しらぬなるべし。天は誠に昭々たるか。將。蒼々たるか。その高遠して。至り極むるによしなきをいかゞはせん。視れどもこれを見ざるが如く。聽けどもいまだ聞かざる如し。然るを見て來もしつるがごとく。その里數さへ定かにいはんは。人まどはしの所爲なるべし。その里數にも異同あり。大かたは九萬里なり。或は十九萬三千五百里とし。或は萬五千里とし。或は五億萬里とし。或は七萬八千九百四十里とす。佛說には十萬億土といへり。辨あり。三教の係にあらはす この他なほあるべし。勞して功なきわざなれば。許多の書をしうねくは畋獵らず。管見のまゝ左に錄しつ。拾芥抄。上末 天高七萬八千九百四十里。地厚五萬九千四十九里○莊子逍遙遊。大鵬ノ段 搏二扶搖一而上者九萬里。九萬里は。天地相去るの里數。上るものゝ限りなり。○爾雅釋天 刑芮疏。載二鄭注考靈耀一曰天圜周之里數。百十萬一千里。直徑三十五萬七千里。二十八宿之外。上下東西。各

作レ各。亦作レ瓮又寶龜七年。九月云々。是月毎レ夜。瓦石及塊自落二内竪曹司。及京中往々屋上一。明而視レ之。其物見在。經二二十餘日一乃止。こは落星石にはあらで。俗にいふ天狗礫の類なるべし。又續日本後紀。八。承和六年冬十月乙丑。出羽國言。去八月廿九日。管田川郡司解偁。此郡。西濱達レ府之程。五十餘里。本自無レ石。而從二月三日一。霖雨無レ止。雷電鬪聲。經二十餘日一。乃見二晴天一。時向二海畔一。自然隕石其數不レ少。或似レ鏃。或似レ鋒。或白。或黑。或青赤。凡厥狀體鋭皆向レ西。莖則向レ東。詢二于故老一。所レ未二曾見一。國司商量。此濱沙地。而徑寸之石。自レ古無レ有。仍上言者。其所二進上一兵家之石數十枚。收二之外記局一。勅曰。云々。又三代實錄。陽成紀元慶八年。九月廿九日丙戌。出羽國司言。今年六月二十六日。秋田城。雷雨晦冥。雨二石鏃二十三枚一。七月二日。飽海郡海濱雨石似レ鏃。其鋒皆向レ南。陰陽寮占云。國之憂。應レ在二兵賊疾疫一。かく記されたれども。この鏃石(やぢりいし)といふものは。唯奥羽のみならず。越後佐渡にも今なほあり。余も兩三枚藏めたり。俗には神軍の矢の根なりとかいふめれど。こは雷斧の類なるべし。又東鑑寛喜二年八月八日記曰。大進僧都觀基。參二御所一申云。去月十六日夜半。陸奥國芝田郡。石如レ雨下。件石一。進二將軍家一。賴經。大如レ柚。細長也。有二廉石下一。二十餘里云々。こは彼寶龜三年六月の隕石と。その形相似たり。落星石なるべし。又史記。天官書星墜至レ地。則石也。といふ條の正義曰。今吳郡西鄕。有二落星石一。其石天下多有也。といへり。皇國にも亦似たることあり。里人談奇石部に載せたる。信濃國岩村田の邊なる。星糞石(ほしくそいし)是なり。土民春田を鋤き。畑をうつ比に。件の石を掘り出だすことあり。彼地は。流星常に多かり。しばしば流星を見る明春は。この石の出づることも亦多かり。土人これを星糞石と呼ぶといへり。天の四象は。地の水火の如く。象ありて形なし。譬へば星の石になれるも。地に墜ちてはじめて形あり。理或は然ることあらん。死人の魄もこれに類す。落ちて地に入るときは。雪花菜(きらず)に似たり。凡經死せしものゝ魄は。必その土中に入れり。はやく掘るときは。魄なほあり。星石の變化も。亦かくの如くなるべし。星は精なり。精神を魂魄とす。故に類經卷三本神篇類注。張介賓云。蓋精之爲レ物。重濁有レ質。形體因レ之而成

財をしらで。隣の寶を數るに似たり。今本文を抄錄して。もて幼學の爲にす。書紀天武紀曰。十二年。卽白鳳十二年也。本草不ㇾ揭二年號一。大國史據ㇾ之。而有ㇾ辨焉。以二神龜元年十月詔一爲ㇾ證十月庚午。日沒時。星隕二東方一。大如ㇾ瓫。逮于戌時。天文悉亂。以星隕如ㇾ雨。續紀光仁紀。曰。寶龜三年。十二月己未。大國史。作二十三日己未一星隕如ㇾ雨。三代實錄陽成紀。曰。元慶八年。八月四日壬辰。自ㇾ戌至ㇾ子。小星四方流。散行隕墜如ㇾ雨。印本隕作ㇾ損。蓋傳寫之誤也。墜一本作ㇾ墜。墜地也。これを魯史に考ふるに。春秋には莊公の七年にあり。經曰。夏四月辛卯。恒星不ㇾ見。夜中星隕如ㇾ雨。左傳曰。星隕如ㇾ雨。與ㇾ雨偕也。杜註曰。如而也。夜半乃有ㇾ雲。星落且雨。其數多皆記ㇾ異也。日光不ㇾ見。恒星不ㇾ見。而云二夜中一。以二水漏一知ㇾ之。今これに因るときは。雨と倶に降りたる星なり。愚竊に疑ふらく。流星は。雲なき夜に多かり。經にしるす所。恒星見るべくして見えず。是その異をいふにあらずや。恐らく雨と倶なるにはあらずかし。解や惑ひぬ。書紀には。天文悉亂と書し。實錄には。小星四方流。散行云々といへり。かゝればこの夜。雨はさらなり。一天雲なきことと推して知るべし。その文またく左傳に據らず。又杜注を取らず。

隕つる星の多きをもて。雨の如しと書せるなり。經の文もて國史におよぼし。國史の文もて。經の誼を味へば。左氏が傳。疑ふべく。杜預が註。誣ふるに似たり。昔儒謂。左氏是非謬二于聖人一。愚も亦こゝに。疑なきことを得ざるなり。草木子管窺篇曰。星自ㇾ天橫飛而過。則爲ㇾ流自下復上。則爲ㇾ奔。自ㇾ上而下。則爲隕。又曰。星隕。精氣竭也。川竭。川脈絕也。又曰。列星爲ㇾ象也。在ㇾ朝象ㇾ官。在ㇾ人象ㇾ事。在ㇾ野象ㇾ物。各因二其象一占焉。こはよく星變の趣を得たり。又國史に見る所。流奔隕星の外に。鬪星あり。類聚國史。弘仁二年八月甲戌。幸二神泉苑一。是夜有二二星一。乍合乍離。狀似二相鬪一。是夜以下紀略。今按。呂氏春秋明理篇。曰。其星云々。有二鬪星一。有二賓星一。其氣有ㇾ上不ㇾ屬ㇾ天下不ㇾ屬ㇾ地。これなり。天に星あること。地に石あるが如し。さればにや。星隕ちて石になるといへり。左傳。僖公六年。隕二石于宋一五。隕星也。是より以降。史傳に見はれたる。いと夥なれば。こゝに贅せず。國史には。續紀。光仁紀。寶龜三年。六月戊辰。往往隕二石於京師一。其大如ㇾ柚。數日乃止。又寶龜四年。五月辛丑。有ㇾ星隕二南北一石一。其大如ㇾ瓫。石。印本作ㇾ名。一本

也。前後星子屬。索隱曰。洪範五行傳曰。心之大星天王也。前星太子。後星庶子。これ心星に兩星あり。大蛇に八岐の頭尾あり。二は偶の首。八は偶の尾なり。二二を四とし。二四を八とす。その義是おなじ。太史公曰。大星不レ欲レ直。〔中星欲レ明忌レ直也〕直則天王〔卽チ心星〕失レ計。房爲レ府。曰二天駟一。其陰右驂。旁有二兩星一。曰レ衿。北一星曰レ舝。大蛇之段。すべてこれらの文義に合へり。八岐大蛇がきられしは。件の心の大星が計を失ふといふもの是歟。かくてその尾頭より。天叢雲の劍出でしは。彼天王と太子は亡せて。その庶子が繼くに似たり。又房の旁なる兩星。衿は奇稻田姬。舝はおん子大巳貴神にこそおはすめれ。正義引二星經一曰。鍵閉一星。在二房東北一。掌二管籥一也。といへり。〔籥與鑰通〕こは大巳貴神。且く天下を管領し給ひし事に合へり。亦日の神と素盞嗚尊と。御中わろかりしよしは。これも亦史の天官書に。火犯守レ角。則有レ戰。房心王者惡レ之。といへるにかなへり。曾氏十八史略宋紀〔仁宗紀〕曰。眞宗得二皇子一已晚。始生。晝夜啼不レ止。有二道人一言。能止二兒啼一。召入。則曰。莫叫。莫叫。何似二當初莫一レ笑。啼卽止。蓋謂。眞宗嘗籲二上帝一祈レ嗣。問二群仙一。誰當レ往者。皆不レ應。獨赤脚大仙一笑。遂命降爲二眞宗子一。在二宮中一。好二赤脚一。其驗也。といへり。この事小說に係るといへども。素盞嗚尊生ましゝとき。常に哭泣給ひしこと粗相似たり。この他なほ和漢の書を引きつけて。とくべきよしなきにあらねど。餘りに細しからんはいともかしこし。抑諾冊兩尊。日の神月の神を生み。次に星と辰の神を生み給ひつ。於是日月星辰の四象の神たち化生給ひき。易〔繫辭上傳〕曰。大極生二兩儀一。兩儀生二四象一とは。是これをいふなりけり。抑この一編は。とし來祕藏の說なれども。目を賤むるもの多かるべし。又世にいふ夷の神は。蛭子ならずは。彥火々出見尊なるべきよし。先板烹雜記にいへり。かくて今玆。この一卷を創するところ。世にあらはれたる物に。又そこらのことをいへるあり。火々出見尊の一條は。またくおのれが考とおなじ

第二天象

星隕如レ雨

噫世の文場に遊ぶもの。星隕如レ雨といふときは。をさ／＼左傳を引かざるはなし。しかれども國史にも。この事ありといふもの稀なり。さてはわが家の

なり。通と布と横音かよへり。古人すとつを打ちまかせて用ひたる例多かり。布左は房なり。房は房星。星の名なり。禮記（月令）曰。十月日在房これなり。爾雅（釋天）曰。天駟房也註龍爲天馬。故房四星。謂之天駟。又云。大辰房心尾也。（房心尾三星名）註火心也。在中最明。故時候主焉。（心星にも愚攷あり。この次にいふべし。）説文（二巻）屒下云。震也。三月陽氣動。雷電振。農時也。又曰。辰房星。天之時也。これらによりて辰を時とし。星の名とす。辰は日月の交會する所なり。説文（四巻）又云。星萬物之精也。その萬物の精なる故に。山川草木化生て。後に四象の神たちは。化生給ひしといふ。理よく合へり。（この段は。古事記をあはせ考ふべし）かゝれば素盞嗚を。房雄の義とせんも。亦よしなきにあらずかし。この神化生たまひしとき。有勇悍以安忍。且常以哭泣爲行といへり。かゝれば辰の震なるよしにも。進雄々しき義にも稱へり。陽は聲を發し。陰は聲なし。飛鳥混虫みな如此なり。故に斑固曰。（白虎通情性論）喜在西方。怒在東方。又曰。東方物之生。故怒といへり。亦是彼神化生給ひしとき。常以哭泣爲行といふにかなへり。書紀一書の説には。神素盞嗚尊とし。或は速素盞嗚尊とす。古事記には。建速須左之男命とす。神は神速。建は勇悍。速は勁捷の義なり。彼漢人の。東方房辰は。民の田時たり。季春には陽氣動き。雷電振ひ。草木怒生といふに合へり。書紀に。日の神と素盞嗚尊と。おの〳〵その御田頃に播種し給ふ事あり。これらも右に引くところの文を照て考ふべし。同書に。素盞嗚尊。結東青草以爲笠簑。乞宿於衆神。といふこと見えたり。こは書紀一書の説なり。宿は星のやどりなり。又止宿の義とす。宋永亨搜採異聞錄（二巻）云。二十八宿宿。音秀。若考其義。則止當讀如本義。若記前人有說如此。說苑辨物篇曰。天之五星。運氣於五行。所謂宿者。日月五星之所宿也。其義照然。（この書全四巻。凡四十一頁。收めて稗海にあり）又五雜俎（天部）にも。星宿の宿。音夙なるべきよしをいへり。今按ずるに。史記天官書に。房爲天府。といへり。亦是止宿の義あり。かゝれば或は播種し。或は乞宿の事。辰の神の所行にかなへり。將。角氐亢房心箕尾の七星は。東方の星なり。火を心とす。心は東方の星といへども。辰巳に位せざることを得ず。辰巳は龍蛇なり。八岐大蛇の事亦おもふべし。故に。史記（天官書）曰。大星天王

を日子と唱へ。皇女皇后。及皇臣の妻子を。すべて日女と唱ふ。例せば書紀（神代巻）に。天津彦彦火瓊々杵尊とあるを。古事記には。天津日高日子番能爾々藝命に作り。天稚彦を。天若日子と書けるが如し。加以古事記には。饕主日子神。阿遲志貴高日子根神。日子穂穂手見命等。（共見二上巻一）みな日子に作りて。彦と書けるは稀なり。彦は日子の假字なれば。これらは。古事記を正しとすべし。又書紀（神武紀）に。日臣命あり。ひる子日臣。並に臣子の義なり。後世に至りては。彦及姫とのみ書けども。罕には古義の存するあり。續紀（高野天皇後紀）に。多可連淨日女（たかのむらじきよひめ）あり。（天平神護二年。十二月戊申。叙位云々。授二正五位下多可連淨日女従四位下一）又光仁紀に。安曇宿禰日女虫（あつみのすくねひめむし）あり。（天應元年。二月壬辰。授二従六位下安曇宿禰日女虫従五位下一）この他なほあるべし。異朝の制度も。亦これと相似たり。尚書（洪範）曰。天子作二民父母一。以爲二天下王一也。白虎通（爵論）云。所三以稱二天子一者何。父レ天母レ地。爲二天之子一也。又曰。易曰。伏羲氏之王二天下一也。爵有二五等一。以法二五行一。或有二三等一者。法ル二三光一。（今按。易當レ作二易緯一。易經無二此文一。蓋出二易緯一。）三光は日月星なり。前にもいへる如く。日子と日女とは。貴人の稱呼なるものから。君臣うちまかせて唱へたり。こゝをもていと多かり。白虎通（五行論）に。君有二衆臣一何法。法三天有二衆星一。といへるに合へり。漢土には天王及天子と唱へ。皇國にて日神。日子尊（ひとのみこと）と稱へ奉りし。共に至尊の爵稱にして。その義おなじ。されば人の世となりても。寳位を天日嗣（あまつひつぎ）と唱ふ。古歌に。至尊を神としよめるも。同一理なり。（大君は神にしませば云々。さ詠めるうた。萬葉集にあまた見えたり）今の俗は。姫を貴人の稱呼なりとしれるのみ。彦（日子の假字）（ひこ）にもこの義あるよしをしらず。日女は大日孁尊（ひるめ）にはじまり。日子は蛭兒を權輿とす。日孁も日女（ひめ）も。その義異なることなし。萬葉集。（第二）日並皇子尊（ひなめしのみこのみこと）。（天武皇子）殯宮之時。柿本人麻呂歌に。天照日女之命（あまてらすひるめのみこと）云々。と詠みたる是なり。かゝれば姫と書き。彦と書けるは。後に漢子を配當（あて）たるのみ。字義に和訓を被（かけ）て見るべし。又宋邵康節言曰。天晝夜見。日見二于晝一。月見二于夜一。而半不レ見。星半見。半不レ見。尊卑之等也。天爲レ父。日爲レ子といへり。これらは彼處の博士さへ。亦日子の義をいふに似たり。」又按ずるに。素盞嗚尊は。辰の神なり。風俗通。（靈星條）引二賈逵説一云。辰之神爲二靈星一。故以二壬辰一日祀二靈星一。金勝レ木。爲レ土相也。よりておもへらく。素盞（ふさ）は布佐

玄同放言上集

瀧澤馬琴著

第一天象　蛭兒(ひるこ)進雄(すさのを)

書紀（神代巻）に。伊弉諾尊。伊弉冊尊。大八州國。及山川草木を生み給ひて。更に日の神大日孁貴を生み。次に月の神月夜女尊を生み。次に蛭兒を生み。次に素盞鳴尊を生み給ふ段。日の神月の神のうへは。理よく聞えたれども。蛭兒。素盞鳴は。何なる神といふよしを誌されず。後に史を釋くもの。亦發明の辨なし。按ずるに。蛭兒は。日子なり。天慶六年日本紀竟宴の歌に。蛭兒をひるの子と詠めり（得ニ伊弉諾尊一従四位下行民部大輔。兼文章博士。大江朝臣朝綱。加曾伊呂婆。阿波禮度美須夜。毗留能古婆。美斗勢㒑那理奴。阿枳多多須志天。）毗留能古即日之子也。ひは音通へり。日子は星なり。星をほしと讀まするは。後の和訓にして（星辰は。保斯能秘訶里。この訓はじめて。仁德紀に見えたり。）當初星をひる子とも。約めてひこともいへるなるべし。かゝれば蛭兒は星の神なり。星といふともその員多かり。是を何の星ぞといふに。蛭兒は則北極なり。この故に。雖ニ已(マデ)ニ三歳一。脚猶不レ立。故乘ニ之於天盤櫲樟船(アメノイハクス)ニ一而順(カゼノマニ〳〵)風放棄(ハナチスツ)。といへり。論語。（陽貨篇）孔子曰。子生三年。然後免ニ父母之懷一。その三歳まで立たざるものは。必尫弱不具なるをいふなり。爲政篇に又云。譬如下北辰居ニ其所一。而衆星共上レ之。註。朱子曰。北辰北極。天之樞也。居ニ其所一。不レ動也。げに北極は。人にして足立たざるもの、如し。又天磐櫲樟船に乘せて。順風放棄。といふよしは。易に☵坎を水とし。北とす。事文類聚（前集天部。）載ニ三五曆紀一云。星水之精也。といへるを攷据とすべし。古事記に。鳥之石楠船神見えたり。樟も楠も。船に造るに勝へたるものなり。石は木性の堅きをいふ。鳥は鷁首をいふなるべし。本草綱目。（木之一。）樟集解。陳藏器曰。江東攷船。多用ニ樟木一。縣名ニ豫章一因レ木得レ名。又楠集解。寇宗奭曰。江南造レ船。皆用レ之。其木性堅。而善居レ水。といへり。天磐櫲樟船には。樟字を假借し。鳥之石楠船神には。楠字を配當(あて)たる。記者の用心亦思ふべし。かくて日の神を天下の主とす。天子は一人の爵稱なり。猶ニ天從レ一從レ大也。人の世となりては。天皇と稱へ奉る。（令義解。儀制令曰。天子祭祀所レ稱。天皇詔書所稱。皇帝華夷所レ稱。陛下上表所レ稱。太上天皇讓位帝所レ稱。乘輿服御所レ稱。車駕行幸所レ稱。）皇は君なり。その德天つ日の如し。よりて皇子及皇臣。すべてこれ

類經
佛說阿彌陀經
佛藏經
釋氏要覽
搜採異聞錄
事文類聚
五雜俎
咏物詩選
池北偶談
涅槃經
傳燈錄
大明三藏聖經目錄

統計一百九十部

引書は限りもなき事なれば。煩を厭ひてすべてはしるさず。こゝには壹貳の卷々（人事部一以上をいふ）に。引き用ひたるのみを擧ぐ。遺忘に備ふる爲なれども。かぞへ遺せるもあらんかし。

引用書目錄終

百椿譜
犢牛
閑田次筆
牽午通
詩經 朱熹集傳
易緯
孟子
國語
後漢書
梁書
宋元通鑑
爾雅注疏
字彙
文海經
荀子
抱朴子
風俗通
五行大義
遊仙窟
周禮注疏
中庸
史記
三國志
明史
十八史略
說文
續字彙補
老子
呂氏春秋
搜神記
劉向新序
唐國史補
文選
論語 朱注
春秋左氏傳
漢書
張栻諸葛忠武侯傳
通鑑綱目
十九史略
正字通
文獻通考
莊子
淮南鴻烈解
白虎通
王充論衡
酉陽雜俎
長慶集
潛確居類書
蠡海集
大明一統志
陽關三疊圖譜
本草綱目
大唐西域記
維摩經
飜譯名義集
事物紀原
女仙外史
輟耕錄
草木子
五行問

拾玉集
李花集
夫木鈔
井蛙集
本朝無題詩
和名類聚鈔
和訓栞
枕草紙春曙鈔
俗說辨
讀史餘論
萬葉集略解
古今集
詞花集
新撰六帖
新拾遺集
雲葉集
深祕鈔
匠材集
狂雲集
拾芥鈔

宇通保物語
小世繼物語
本朝食鑑
大和本草
信濃地名考
大東國郡分界圖
長享江戶繪圖
琉球事略
出羽大沼浮島圖
秉燭譚
駿臺雜話
煙霞綺談
東遊記
橘品論
類柑子
山海名產圖會
書經　蔡沈集傳
髯人參種植法
甲斐名勝志
鎌倉志

慶長江戶圖考
琉球談
紹述文集
南留別志
武者物語
雷震記
牡丹論談
物見車
八丈筆記
牽午品
周易　程朱傳義
神農本經解故
增補越後名寄
長祿江戶繪圖
寬永版江戶繪圖
諸國里人談
輶軒小錄
鹽尻
靜齋隨筆
朱紫

引用書目錄

書記
僞撰日本後紀
文德實錄
日本紀略
大鏡
新撰姓氏錄
天滿宮託宣記
江談
奧州後三年記
平家物語
東鑑
參考太平記
臥雲日件錄
古事記
續日本紀
三代實錄
扶桑略記
增鏡
諸家大系圖
梅城錄
古事談
參考保元物語
長門本平家物語
義經記
梅松論
南朝記傳
缺本日本後紀
續日本後紀
類聚國史
水鏡
令義解
菅家御傳記
日本靈異記
十訓鈔
參考平治物語
源平盛衰記
太平記
吉野拾遺
櫻雲記
南朝武臣傳
皇統授受圖
日本紀竟宴和歌
古今六帖
林葉集
山家集
新葉集
爲尹卿千首
春雨鈔
本朝文粹
本草和名
和訓類林
源氏物語
和漢三才圖會
花咲松
萬葉集
神樂催馬樂歌
堀河百首
新古今集

玄同放言上集目錄

編は○夜學の抄錄より拔き出て、○讀書の餘論に成れるなり○いさゝを川○深きこゝろのあるにあらねど○昔日○時のこのみに投たる○草紙物語の類にあらず○これ吾少うして好み○今にして倦まざるもの是のみ○卷端に餘紙あり○汝も亳を探らずやといはる○噫蒼蠅の千里をゆくに○驥尾に附かざれは得ならず○不肖もまたかくのごとし○唯愧つ○兒幼鴉青を染めて謾に新著を汚すなるべし

文政紀元戊寅夏五月

男　瀧澤宗伯識

りける條々を。とにもかくにも綴りなして。心ある人に見すべきか。よしやそこまであらずとも。曩にわが著はし丶。燕石襍志烹雜記は。書肆等に急がされて。そが利の爲にせしものなれば。こ丶ろにあらぬことさへに。いたく誤をかさねたり。せめてその失を。補はん料までに。又さるふみを編ばやとて。よにこりずまの硯の海に。珠を撈れる蜑とはなりつ。しかはあれども藏書に乏し。老てはよろづ懶くて。立ちまじらふがうるさ丶に。友垣結ぶことのなければ。他の書をば借るによしなし。されば筆とりそめし日より。如是々々の事は。彼書にあらん。この書にこそと思ひつ丶。そのふみどもの得がたきは。引き漏らせるなん多かりける。むかし諸大家の隨筆は。おのづからなる隨筆なれば。證とすべき文とも。飽くまでに引くことなし。後々の隨筆は。おのづからなる隨筆ならねば。一事をとくに數十部なる。ふみを引けども飽けりとせず。學問は博を厭はず穿鑿至極したらんには。そも亦得がたきわざなれども。管もて窺も天は天なり。わが引く外に引くべき書は。あらじと思ふも外目には。なほ漏らしつと見るもあるべし。われさるまろが人まねに。老の學の松をたのみて。よに限りなき書を渉獵ば。このふみ全なるときあらじ。日は暮れなんとして道遠かり。只見しま丶に。思ふま丶にかき集めつる言葉の露の。霤と落ちて後竟に。ふみまき川のすゑにも入らず。淺くもむすぶかひはあらん。かうはかりつ丶編みてもゆけばなか／＼に後やすかり。これ將よしとするにはあらで。已むことを得ざるのみ。おのが僻事いへばさらなり。傭書彫工等に謬たれて。脫もあらん。衍もあらん。そは閲する人正しねかし

文政元年。戊寅皐月十かの日。初めの二卷を創し果て。後に記しつ著作堂のあるじ解家翁生平の樂。讀書に在り。又著述に在り。しかれども著述は本來の面目にあらず。多くは書肆の需に應じて。時好の爲にすればなり。この故に。少うして好み。今にして倦むことあるに似たり。おのれその勞を憚れて。しばしば徜徉をす丶むれども聽かれず。今茲亦この編集あり。且いへらく。虛名は徒に走れども。身はなほ隱れたり。身も亦いたく勞れたれども。齡少壯にあらず著述にあらざれば。われ一日も所爲なし。この

玄同放言てふ書を編める崖略

いにしへの才ある人。書讀むときは考あり。考あれば撰みあつめて。兒孫後世に貽すもの。慈善のこゝろなしといはんや。しかれども覽ること博からざれば。その考くはしからず。或は覽と考との志はありながら。その才あるにあらざれば。文のうへをさなくて。いふこと毎にこゝろとほらず。或はその才ありといふとも。文華をのみ弄びて。道に志薄かるものは。玉觴當なきが如し。嗚呼ふみ作ることかたくもあるかな。近屬隨筆の多卷なる。天野氏の鹽尻は。その卷數百に及びしとぞ。さばれ世に傳ふるもの。百卷には足らざりけり。白石翁の隨筆は。大約一百三十餘部。卷は三百八十あまり。卷數定かならざるもの。二十三部ありとなん。その書目のみ今に遺りて。人間に在る處。三十部には過ぎざるべし。唐山には宋の時。洪邁が五筆をなも。多卷なりといふめれど。我この翁に比ぶれば。なほ九牛と一犢ならん。次に貝原益軒も。生涯著述多かりき。農業全書。筑前國續風土記は。尤有用の書なるべし。又多卷ならずとも。栗山潛鋒が保建大記は。通鑑綱目と伯仲す。仰きて瞻。俯して思ひ。披きて座右に置くときは。蘭の室に入る如く。日月に闋すれども。猶新なるこゝちぞする。抑この翁たちは。博覽細に考へて。もて兒孫後世に貽せるもの尠からず。慈善のこゝろなしといはんや。いと羨ましく思ふのみ。企て及びがたきを知れり。しりつゝ、獨木の橋の霜。ふみつくる人といはれてし。冬の朝日の影よりも。はかなき世わたりをいかゞはせん。あだなる名のみたつことはやき。わがとし浪も。小動の。いそぢをひとつ過きがてに大かたならず翁さびて。氣力もいたく衰へたり。こは年來思はずに。えうなきふみを綴るとて。養生おろかなりけん。くやしくおもへば今茲より。硯に對ふ日は稀にて。宵ねがちなる瘖寐々々に。ひとりつく／＼とおもふやう。わが壯なりけるときは。記憶ありと人にもいはれ。みづからもさおもひしものが。この三とせ四とせが程より。閱せし書のうへなども。彼此となく忘れにけり。かくてもなほ幸に六七十に至りなば無下に老髑て。活ける甲斐なき物にやならん。人なみ／＼の事はえせず。益なき筆のすさみなりとも。書よむ事を好めるかひに。考へた

玄同放言叙

近有一儒生。題三聖嘗醋圖曰。瞿曇氏云。眼耳鼻舌心意皆空。舌空則何得能辨其味。老聃氏云。五味使人口爽。口爽則何得能辨其味。孔夫子云。心不在焉食不知其味。吾夫子心在焉。是以獨得能辨其味。此言雖出乎戯。亦諍訟之所起也。諍訟三敎之徒也。若使三聖同時出世而相遇。則目擊道存。相笑不言也。其不辨彼此。不論是非。通而一之是謂玄同。此儒生惡知玄同之義。一日簑笠翁。携其所著玄同放言來。而徵序於余。余未及啓其帙。先擧前言。質問其義。翁對曰。先生之言。老聃謂所和光同塵之義。吾豈敢哉。昔東坡作汨突羹。余效之別製一羹。魚肉蔬菜。甘脆苦澁。悉聚之和羹中。雜煮而具於膳羞。私名之曰玄同羹。今余所輯書。亦猶是羹也。五十年來耳目所經隨聞隨見。而隨錄之。古今異同。賢否精麤。彼此是非。自他深淺。雜掇而論之。但其味褻矣。奚足羞於朝夕嘗三舊七醢之人乎。先生幸下一匙而賜品賞焉。余聞其言。頷謝之。乃染指於鼎。遂次是言以代序。

文政元年戊寅六月

鵬齋老人興撰

蕉窓高趣

居士名景雄。字子偉。混跡朝市。寄情丘壑。非儒非釋。恬澹自處。學通和漢。博綜衆藝。蓋古逸民之倫也。余數留連齋中。尤熟平素。乃小詩數章。紀其閑適之狀。唯是據實敘述。不復拘々聲律。詩固無足觀矣。雖然世人欲知居士隱操。讀此詩則庶幾識其概。聊備一小詩史耳。

淅瀝蕉窓雨。懶眠夢覺時。此中有高趣。不使世人知」

品茶追君謨。論水擬又新。古鼎輕烟颺。髣髴建溪春」

窓下天然机。兩三列磁器。幽蘭與矮松。楚楚可人意」

金管吐雲霧。幽香滿戸扃。能論天下種。品賞入烟經（居士嘗著烟經一卷）

幽獨高齋夜。唯有月光照。歌思動情吟。宛似南京調」（南京調謂平城時歌體）

一磨庭圭墨。烟雲浮研馨。蠅頭千百字。終日模黃庭」

衆藝君善解。精微尤在音。琵琶操古曲。坐客潸沾襟」

孤燈客散後。獨坐夜將闌。架上挿羣籍。抽來隨手看」

落々忘彼我。天眞任性情。時遇同人至。談笑到鷄鳴」

展書游山水。披書友古人。此翁非避俗。俗子自難臻」

（文化五年夏五月稿）

泊洦筆話　終

にて。其おもむきのかはれる事。縣居の門人にて。あかたゐにかはれる所あるに似たればなり。縣居翁わかくして。遠州にすまひさせられしをりは。漢學に心をふかめて。渡邊蒙庵（名操字反節春臺門人著國語解）にまなばれしに。論語記聞といふものを草稿せられたる事あり。詩は明詩の體をこのまれて。詩集一卷あり。通計六十七首。五絶七首。七絶五十首。五律七首。七律一首。長篇二首あり。維陽詩草と名づけられたるが。ともにみづからの筆してかきおかれたるを。故ありておのがもとにもたり。其中にて兩三首をこゝにしるす

七夕詞

七月七日早涼生。井欄風度碧桐輕。美人此夜長門殿。深望女牛不耐情。

中秋

平分九秋色。挂月最其清。賞識幾千里。價掄十五城。天高風氣爽。野廣霞華明。登望南樓外。粉々旅雁鳴。

秋閨怨

關山秋月色。愁望懷阿郎。明月郎何憶。閨中觸夜霜。

師もわかくしては。もろこしまなびをのみたどらせられしかば。詩いとおほかりけるを。書きしるしおかれたるもなかりき。晩年におよびても。たまたまはつくられしを。おのれかたへにて寫しとりおけるを集めて。かりに織錦詩草と名づけて。一卷とせり。通計廿九首。五絶十首。七絶七首。七律二首。長篇二首その中にしていさゝかこゝにあぐ

偶成五首

陵遲習俗日浮虚。辨博驚人學却疎。賢傳聖經束高閣。爭求新種舶來書。

文苑家々抱大志。萬言下筆亦容易。提韓挈歐辨論雄。時失焉哉乎也字。

坡老篇章元博大。放翁詞氣自豪雄。近人學宋爲何語。纖弱輕浮比々同。

粉々僞學幾支流。各自張門互效尤。禮讓恭謹此何物。狂言罵詈蔑先修。

儒雅原謹愼作本。風流豈曠達爲先。看他世上靑衿士。多是狹斜惡少年。

よみ盡し來れるふじの山なれば。中々なる言葉にいひけがさんことゝいかゞとおもひて。名所山などいふ題にて。うたよむにも此高嶺をばよまじとせり。こは此高嶺におよぶべき言の葉のいひうまじければなり。ある人この高嶺の畫に歌よみてよとこひたりしかど。しか思ひかまへしことなれば。かへさへ聞えしを。猶しひてといひしかば。その時

神世より雪にみがける山なれば
いひはかすべき言の葉もなし

とかいつけてかへしやりき

一今の世の俳諧といふものは。古の俳諧歌の名をかり。後の連歌といふものをにせて。俗事俗言をいひつゞけて。みやびごとに。口なれぬ人もたやすく心をやるくさはひとせるものなり。強におとしめいふべきものにはあらぬものながら。古き俳諧は。其作者みな世のすねものにて。詩歌の道にもたとく／＼しからぬこゝろ詞よりいひ出でしなれば。俗事俗言にも。自。人の心を動かすが多し。今の俳諧は。心詞いたく歌とは隔りて聞ゆ。宇萬伎が歌に。「もの丶ふの草むすかばねとしふりて秋風さむし桔梗が原とよめるは。かの桃青法師が句に

なつぐさやつはものどもが夢のあと

といへるを。移しこゝろみしなるべし。かれをうつせども。詞づかひのめでたきが故に。彼よりはたちまさりて聞ゆるぞかし。おのれいつの程にかありけむ。花の歌の中に

みよしのゝ芳野の山の花ざかり
しばしものこそいはれざりけれ

とよめりき。これは貞室老人の

これは／＼とばかり花のよし野山

といへるをおもへるなり。古人の俳諧はよくうたにちかきものにこそありけれ。今の俳諧もさるべきにや。おのがしらぬことなれば。くちこはくはいひはりがたし

一高津阿闍梨。は仁齋先生になぞらふべし。縣居翁は徂徠先生によく似かよひたる所あり。本居氏は春臺先生のおもむきあらん。芳宜園は南郭先生にもたとへんか。この中にもほかはおきて。本居氏はもとよりさらになぞらうべき人なきすぐれびとなり。かりに春臺先生によそへしは。徂徠の門人

き、しよりも思ひしよりもみしよりも
　のぼりて高き山はふじのね
又。平高保が富士二首といふものあり。契沖阿闍梨の百首にならへるなるべし。其中の一二をいはゞ
ふる雪にうづもれながらたかき名の
　四方にかくれぬ山はふじの根
いづくよりむかふもおなじおもて／＼
　空にそむかぬ山はふじのね
ひさかたの空は月日をみすまるの
　玉とうながせるふじの山姫
天地のあしけき氣をばしら雪の
　よけて世をふる山はふじのね
世の中の山てふ山をかさぬとも
　不盡のみたけ競ひあへんやは
月を日を友とするがの山人の
　あそぶところかふじの高ねは
枝直が歌に
天のはらてるひのちかき不盡のねに
　今も神代の雪はのこれり

芳宜園の歌に
　はこねぢや神のみさかをこえきても
　　なほふじのねは雲ゐなりけり
などよきうたと人もいひあへり。吾師の歌に
　こゝろあてに見し白雲はふもとにて
　　思はぬ空にはるゝ不二のね
此うたさまでの透逸ともおもはざりしに。いにし文化四年。おのれ伊豆の出湯あみがてら。熊坂の里なる竹村茂雄がもとへと心ざして旅たてる頃。熱海の出湯をいでゝ。弦巻山の頂へかゝりしに。浮雲西の空にたちかさなりたりしかば。ともなへる人にむかひて。不二はいづくの雲のあなたにかあたりて見ゆると問ひしに。はるかにゆびざしてあしこの雲のうちにこそといふほど。いつしか浮雲はれのきけるに。其指ざしをしへたる雲よりははるかに高く。空に聳えてふりあふぎ見るばかりなりしかば。さて其時ぞ。師の歌をおもひ出で、めで聞えたりき（近きころ東海道名所圖會といふ書の。不二のかた書ける所に。大菅中養父の國歌八論斥非といふに。人の歌とて。心あての雪間は猶も麓にておもはぬ空に晴るゝ不二のねとあるは。師の歌によく似たり。されどいさゝかのたがひにて。いみじく歌がらのをとりて聞ゆるやうにこそ覺ゆれ）おのれは。かくいにしへ今に

てかぞへつくしがたし。いにしへは置きていはじ。ちかく水無瀨中納言殿氏成卿の富士百首といふものあり。世にしる人なし。近き比もとめえたるに。よき歌ども多し。その一二をいはゞ

ふじのねやのどかにわたる春風も
たゞ世のなかのあらしなるらん

うつしゑの筆かぎりある不二のねを
かぎりもあらぬ雲井にぞ見る

もろこしの人にとはゞやふじのねの
外には山のありやなしやと

かたるにもよむにも盡きぬ言の葉の
不二の山としよにつもるらん

西の海やもろこしさして行く船の
うへにもふじはいくかみるらん

山をぬく人にはありともふじのねを
見ては及ばぬものとしるらん

わすれてはそらにも雪のつもるかと
見れば雲間にはるゝふじのね　望

積りしはきのふのもちに消えはてゝ
けさみなづきの不二のはつ雪

うつしゑを見るごとなれやふじのたけ
また見るごとに寫繪もあり

これらにならへる契冲阿闍梨の百首。長流隱士の三十首。いづれもめづらしく巧によみかなへられたり。縣居翁の長歌殊にたへにして。人麿。赤人の長歌にもをさ〳〵おとれりとはみえずぞある。あかたゐの長歌の反歌に

するがなるふじのたかねはいかつちの
音する雲のうへにこそ見れ

ふじのねのふもとをいでゝゆく雲は
足柄やまのみねにかゝれり

また記行の中に

いつのよのちりひぢよりかなりいでゝ
不二ははちすの花と見ゆらん

三首ともに透逸ときこゆる中に。あしがら山のうたは。五條三位のうたに

＊　＊　＊　＊　＊　＊

とあるにむかへみるに。こゝろおなじくて。歌がらは縣居の歌。たちまさりてこそおぼゆれ。又。荷田東萬侶大人の歌に

こそ。人はさもおもはね。學のかたにかとはなれたる身ならば。馬追車借をわざとして。五月みな月の照はたゝぎ。霜月しはすのふりこほるころにはだしつるはぎにて。ひめもすに立ちはしるとも。身にいたづきしらぬばかりのすこやかさにこそあるべけれ。されば學の道にも。何のわざにも。身のすくやかならぬは。よろづ口をしきものぞかしといはれき。今濱臣が身の常にかよわく病がちにて。學の道にことゆかぬにつけて。吾師の詞思ひ出でらるゝことつねになむ

一三島景雄有栖川家の御門人にてありし比。都へのぼりしに。某の大納言殿とかの御元へしたしう召されて。御膝元ちかう御物語しつゝ行きかひしに。常のおましのかたへに。文車をおかせ給ひて。いろ〳〵の歌書ども多くつみ置き給へるを。ゆかしう思ひをりしに。殿しばし立ちて。おくつかたに入り給へる程。やをらゐざりよりてみれば。大かたは見なれし書どもなり。なかに八百日集とうはがきせる書あり。いかなる公卿の御集にかあらむ。誰人のうち聽にかと。いとゆかしうてひらきみれば。はやく濱の眞砂といへる詞寄の書なりけり。（萬四。笠女郎は百日行濱の眞砂も我戀にあにまさらめやおきつ島守。この詞をもとにて替名となしたまへるなり）景雄あきれて。こは有賀長伯がうひまなびのあげまきらが爲にとて。物せし書にて。いさゝか歌の事わきまへたる人たちは。また見るものともなさぬまことあげまきのための書なり。此殿いかでかたへはなたぬ文とはかしづき給ふらん。それだにあるを八百日集とうはぶみの名をかへおき給ふは。長伯らが物せし詞寄の書を。かたへはなさずおき給はんは。人めはづかしうおぼし給ふなるべし。いと品おくれたる御心かな。濱の眞砂をあたひなき玉と思ひ給ふ事。またこれを誠よき寶とおぼさば。うはがきも其まゝにてありぬべき事なるを。書きかへ給へるはまけじ魂の心せばさよ。今よりはまゐりこじと。獨言いひてすなはちまかり出でゝ。また參りよることあらざりきとぞ

一不二の高嶺は。わが國のしづめともいひつたへて。こと山にすぐれたる事はいひ出でんも今さらなることなりや。此山をよめる古歌。萬葉集よりはじめて。世々の勅撰私集に入りたる名歌ども。あげ

しるにまかせられて。ふかく考へらるゝまではなかりしこととも有りしとぞ。今いづれをかよしといはん。わが家の佛たふとぶとにはあらねど。俊頼口傳抄にもいはれたる事ありき。其詞に猶うたをよまんには。いそくまじきなり。いまだ昔よりとくよめるには。かしこき事なし。されば貫之などは。歌一首を十日廿日にこそよみたれとあり。かくいにしへ人のいひおかれたるを思ふにも。口ときのみすぐれたることゝはいひがたかるべし。しかのみならず。たとひ筆とりて。すなはちなれる文詞なりとも。其時こそいちはやき筆づかひをほめて。いさゝかの疵あらむもみゆるしてはめづべけれ。後世につたはりたらんに。誰かみる人ごとに。むかひて此文は案をもまうけず物したるなり。さればいさゝかの疵はありぬべきことかとは。ことわりいふ人のあらむ。其をりはたとひ千度もゝたひ書き消しあらたむとも。疵なき玉とならむには。後世につたはりて。誰人もげにとめづべきものなるをや。此おとりまさりいかにか有らん。世の歌人のさだめいふ所きかまほし

一吾師の常にいはれしは。契沖阿闍梨。縣居翁などを今の人の心よりは。四目兩口もありし人のやうにおもへど。さらに今の人にことなるにはあらず彼も人。我も人なり。みづからはこるにはあらねど契沖阿闍梨。縣居翁まのあたり本居氏などの如き。その才氣をたくらべば。われも此三人におとれりとは思はず。絶えておよばぬ事は三人のひとたちは。精神すくやかにして。若きより。老の身にいたるまで。學の道にうむ事をしらず。きはめてつとめし人たちなり。われは幼よりほしいままに。おひたちて。酒色にふけるのみにして。物につとむといふことをなさず。一夜もまどろまずをれば。つとめては倦みつかれて。物のやくにたたず。一日つとめて二日物のやくにたゝぬ故に。何事も心に思ふばかりの事を。十がひとつをもなしをへずして。いたづらに老いくづほるゝに至れるなり。これ身のおこたりとはいひながら。まことは生れたちのかよわく。病におかさるゝ事常にして。物をつとむるにたへぬが故なり。此三人のひとたちは。つねに文机のもとをはなれぬ身なれば

かゝるぞかし。うひまなびのともがら。こゝに心をつけよといはれき。又いはれしは。京極黄門も歌に師なし。古歌をもて師とすとのたまひたれば。必。その道びきをしふる人のまねをのみすべきにもあらず。たゞ其心ざす所に的とする人なくては。歌のすがたあらずゆくものなり。されば心みにいはゞ。三十六人集の内を。よくあぢはへよみて。人々の心にかなひて。をかしとおもへらん歌仙の集を。かりに我師と心のうちに思ひまなぶべし。おほけなけれども。我は貫之集を心の師とは。たのみよむなりといはれき。おもしろきをしへごとならずや。三十六歌仙のみにかぎるにはあらず。今すこし後の歌仙にもあれ。よくその人の歌を心に味へて。そのすがたを得むとするも。ひとつのをしへかたなるべし

一吾師のいはれけるは萬葉集は百人して解かんには百人の說かはりめあるべし。又。獨してよまむにも。十かへりみれば。十かへりごとにかはりめいでくべし。これ古言のうかゞひしりがたく。また古書のあやにめでたきしるしなりといはれき。ひとわたりきゝては。見識さだまらぬ言葉のやうにおもふ人もあるべきなれど。よく萬葉集の古意古言をうかゞひしられしことばといふべし

一吾師は常によみいでらるゝ歌。いと遲吟にして。人の許に行きて。其むしろにのぞみてよまるゝ歌もある時はけふはよみ得ぬなりとて。ひめもす考へられたるまゝにて。むなしくかへらるゝ事たびたびなりき。文詞なども筆とられてより。いくたびか稿をかへて。猶心におちゐぬほどは。其まゝ厨子のうちに卷き入れおかれて。心のおもむけるをりとう出ては。消しおぎなひなどせられしこと常なり。さればみつからゆるして。淸書せらるゝにおよびては。誤れる事は。をさ〳〵なかりしなり。荒木田久老神主は。其こゝろおきて大にことにして。早吟なるのみならず。序文など人にこはれてものせらるゝをりなども。筆をとりて。紙にむかへば。詞膓たちまちに動くとて。案紙をも設けず。たゞちに筆を下されしとぞ。秀才なる驛はほめ聞ゆべき事なれど。さればこそ其文詞ともすれば考たらぬ事の打ちまじるをりありき。又あまり筆のは

雪之窓日々解年來之疑滯欣幸不過之速可申謝候處海紅花不能其義遲久之罪可令高恕給此一幅聊賀與珠玉競光之德榮候趣意ニ而伴函候故笑留者可爲素懷候尙書餘可在此後草々馳禿筆候也

八月十三日　　貞　　直

追而不審之事如丘山候間追々可及質問無隔心垂示之義祈望候

閑夏安布愚古々魯迺牛天自南記美爾波宮馬難空民依牟無左四能々鬪其」萬々爲道自重專一に候也

此書牘にそへて。給へる一幅とあるは。中山前大納言愛親卿の筆にて。絹地に「橘はみさへ花さへその葉さへ枝に霜おけどいやとこはの木といふ萬葉の歌を眞字にて書き給へるなり。また。この書牘のうちにみえたる。かげあふぐの御歌のかへし

千蔭

むさしのゝ小草がうへも雲ゐより
　　もらさぬ月のかげあふぐかな

一又或時芳宜園のあるじ。友たちの許へ卯花をおくりやらるとて

雪に月にまがへる花をみる時は
　　最しもおもひこそやれ君を

これは。白氏文葉の詩句なるをみやびにとりなされしがをかしきなり　この歌。芳宜園のみつからかゝれたる短ざくを。門人光幸某が家に持つたへたり

一又常にいはれしは。おほよそうひまなびのほどは。心よりほかに歌數おほく出來。または思ふにしたがひ。口にいひ出でらるゝをりもあるものなり。これまことにいでくるにはあらず。考たらずして。うはべの心よりたゞ出でにいでくるのみなり。たのもしき事に思ふべからず。或時はひとり思ひ凝りても。ふつに出來ぬをりもあるものなり。さる時は。我ざえのつたなきをうらみて。いまは歌よまじ。かくまで出でこぬことゝかこたるゝものなり。そはなかく\に。歌の上達すべき關なり。こゝにておもひたゆめば。つひに此關を越えずして。中途にて。やがてよみやむものなり。こゝにて思ひおこしてたゆみなく。此關をこゆれば。また口ほごれて。詠みよくなるものなり。朝夕うたに心をゆだねよむ人は。一年に二たび三たび此關に行き

ば。うすること幾度といふことなし。いといぶかしきことにおもひたるに。あるあした小鳥またうせたり。こめおける。籠もくだけぬ。枝直いよ〳〵いぶかしみて。庭のうちこゝかしこ見めぐりみありくに。稲荷のほこらのあたりに尾羽ちりみだれたり。枝直怒りて。年久しくつかひならせる老つぶねを呼びて。とも〳〵にほこらを取りのけつゝ見れば。狐の住所と見えて穴あり。親狐はをりあはせずして。生れ出でゝ二日三日も經つるばかりの。子狐みつよつもこよひ居たり。枝直怒りて。にくきやつ哉。小鳥のうせたるは是の親狐がしわざなりけり。此子狐どもとく取り捨てよとて。彼老奴して此子狐をみな近き川に流させ。穴をうめ。ほこらをこぼち。燒きすてさせけり。しかるに其夜より彼おいつぶね身うちぬるみほとりて。物くるはしくなり。えもしれぬ事どもいひたけびて。あなにくのこの老奴や。わがいつくしむ子どもを流し殺して。わがすむ所をまとはしゝ事よ。いかにせん〳〵。こよひを過さず。とりころしてんと。大聲にさけぶ。枝直聞きつきていよ〳〵いかりたけびつゝ。かの老奴にむかひていふやうは。狐よいましこそ。ことわりなけれ。こゝの居處はおほやけより。枝直に下し給へる所なり。枝直はあるじなり。さればほこらをおかむもおかじも。枝直が心なり。其あるじの好みかふ小鳥を奪ひはむは。ぬす人なり。やよ。ことわりなのくち狐よ。子狐を流し捨て。ほこらをこぼたせしは。枝直がさせしなり。老奴が心よりなしゝにはあらず。うらめしと思はゞ。枝直にこそ訴へなげかめ。老つぶねに何の怨心殘さむとて。はなれよ。さらずばなほいみじきめをみすべしとせためければ。ことわりとやおもひけむ。やがてはなれにけりとぞ。そのをゝしき本性此一事にておもひやるべし

一芳宜園のあるじ萬葉集略解を述作せられて。板にゑられしを。かねての心しりなりければ。富小路貞直卿のみもとにまゐらせられけるに。其かへしあり

未接芝眉傾葵無已鴻便附寄候秋冷之節起居清勝候哉令承知度候抑萬葉集略解之大作渴望之趣季鷹申達有之候哉不料預恵投頂戴感愧之至ニ候螢

るが。かねてや思ひ設けゝむ。又は其をりに臨みてや心に浮びけむ。病いとあつしうなりて

我はもよをはりなるべしいざ兒ども
　ちかくよりませよく見て死なむ

とよみて。身まかりにけり。世のすねものなりけむこと思ひやるべし

一大伴俊明 通稱山岡治左衞門柳營侍臣 後に剃髪して。明阿といはれき 或云。剃髪の後もしばらくは俊明の字音をもちひられし。後に御諡號にはゞかりて。明阿とは改められしとぞ はじめ縣居翁の門人にてあられしを。翁御風と中あしくなられてより。御風とむつびて。翁とは絶交せられしとかや。博覽强記誠に絶倫といふべし。名物類聚三百六十卷を草し。今明阿門人片山誠之が家に。稿本を傳へもたり 其外世にまれなる物語どもを校正して。世に傳へられたるが。後學の爲たすけあることすくなからず。嵯峨釋迦傳來記などいふものをさへつくり置かれけり。されど博に失して、疎漏なる事も多かり。文栞など次第を違へ。作者もあやまりし事すくなからずなん有りける。平生睡眠する事なく。つとめてねぶらじとにはあらねども。癇症にやたえてねぶたしといふ事を覺えずとかたられけり。夜は枕につきて。なほ筆紙をとりつゝ書寫などせられければ。今にそのうつされたる事どもの、筆をひきつづけたるやうの筆くせありき。或時從者一人を具して。近きあたり旅行せられき。旅屋につきて。從者は道の疲にたへずして。枕をとるやおそきと。寐入りぬるを。明阿は例のねられねば。よびおこして。淋しきに今しばしかたらひてなとて。ものがたりしていねさせず。曉にいたりしかば。從者は大きにわびて。つとめていとまをこひて。獨り家にかへれりけるとぞ。をかしき物語なりけり

一橘枝直 はじめ爲直といへり。後枝直とあらたむ は。いとますらを心たくましき本性にて。いさゝかもめゝしき事なかりし人なりき。若かりしほと。おほやけのおほせこととして。町のつかさの下つかさにめしあげられて。住みぬべき居處給へりしに。やがてそのかまへのうち見ありくに。たつみの角に稲荷のほこらあり。枝直おもふに。ほこらこゝに有りて。家つくりせむにたよりあしく。所をかへばやと思へど。今まででかく有り來りし事なれば。さておきぬ。かくて日比ふるに。朝ゆふこのみ飼へる小鳥。ともすれ

きりの葉のこよなと人はいふめれど
　　　しばしばかりやいそぐなるらむ
とてあり。きりの葉の諸木に先だちてちるゆゑ。こと〴〵こよなき早世かなと世人はいふならむ。なれど。末の露もとのしづく。たゞしばしの違のみなりと。よめる心は。二句聊いひおほせねこゝちせらる。後に己此碑文（倭文子が墓深川本誓寺にあり）をみづから榻して。藏せるには
　人の世に先だつことのなかりせば
　　　桐のひと葉もちらずやあらまし
とあり。板本とは。大きに違へり。これも碑にゐるをりに。翁のひき直されしものなるべし

一縣居翁の門人に平高保（通稱服部安五郎）といふ人ありけり。雨引山の惠岳といへる法師が。萬葉集選要抄といふ書作りて。一家の説をたて。暗に翁の説をやぶりたるとのあるをみて。深く憤り。非選要抄といふものをかき出で、。吾師の許に持ち來りて。意見をこへり。師は一わたりみられたるのみにて。惠岳が不學無術もとより辨をまたずして。具眼のものの誰か見しらざらむ。わぬしが辨いはれざるにはあらねども。かゝるをこ人に對ひて。言葉費し。そのかひあらじといはれしかば。高保もげにさりけりと諾ひて。そのまゝにやまれき。又。續冠辭考三卷。萬葉大註三卷。考解萬葉集一卷いづれも學のほど表れて。めでたき考ども多し。又。新三十六歌仙（後鳥羽院御撰）のうたを悉く難論せられたるありて。自かゝれたるを。おのがもとにもたり。其論毛をふきたることもあれど。遁るまじくいひつめられしこと多し。此人常にいひしは。近來の人の辭世の歌といふものを見きくに。みな禪家のさとりにて。心には何に覺れる事なき輩も。辭世の詩歌とだにいへば。みな口きよきことのみなり。いかでこの世を別るゝ際に至りて。さる人ばかりはあらむ。常に題を設けてよみ出だす歌こそ。まれ〳〵には心にもあらぬ言をつみいでめ。それさへいかにぞや覺るを。まして命をはらむきはに臨みて。心にもあらぬ言いひ出づるは。なか〳〵になまさとりなる心あさゝの見ゆるぞかし。在五中將の「きのふけふとは思はざりしを」など讀まれたるこそ。誠にさることなれなど。人に向ひては。常に語りけ

なき御方より。女房の手本ともすべき。十二月の消息文かきてよとおほせごとかうぶられたるをり。よの子にかゝせられしが。いとめでたくつゞけたりければ。やがて其まゝにて奉られけりとぞ。近き比芳宜園のあるじ此消息をみづから筆とりて。かき清めて。板にゑられしもあれば。大かた人もしれり。歌もよきがいとおほく。岐蘇路記といふ旅日記をかしうつゞれるあり。しげ子（又名つくは子といへり。是は筑波山はやましげ山といふ古歌によりて。翁のつけられしなりけり）は。土岐頼房（通稱新左衛門柳營侍臣）の室なりしが。歌はよの子よりも。たちまさるばかりなりき

はるのはじめのうた

かぎりなく來れどもおなじ春なれば

あかぬこゝろもかはらざりけり

此うた縣居翁の評に。天暦の比の女房の口つきなりと評せられき。また

みつになりけるをさな子のなくなれるをり

いはけなくいかなるさまにたどりてか

死出の山路をひとりこゆらむ

たゞ言ながら。心のほど思ひやられて。このうた見るたびに。おぼえず涙ぐまるゝになん。又

商人を

わたらひのこゝろぼそさもしられけり

いとうる賤のたえずくるには

女の歌誠にさこそおぼゆれ。みづから書きつめおける歌どもに。縣居翁の點合をおかれたるを。故ありて己がもとにもたれば。過ぎし享和のみとせ。清くかきあらためて。はし書などものし置きしを。文化十年の春。つひには板にもゑらせたりき。しづ子は廿にて身まかれゝば。まだかたなりなることもまじれりけむ。されどかどあるをとめなりしことは。家集文布をみてもしらる。かのあやぬのの中なる。道行ぶりなどはおほく翁の筆くはへられしものなり。されどかいなでのをみなにあらねば。命ながくて老にいたるまでも。讀みいでたらむには。いかばかりめでたき歌どもいできけむかし。いともをしかりしことなり。又。いま板にゑりたるあやぬの、末に。碑文をあげて。しづ子が身まかれるをりのうたとて

故あることにて。かの歌どもの中に。讀人しらずとて入りたる歌こそ。宇萬伎の歌なりけれ。いかにとなれば。宇萬伎はじめ倭文子が聟とらざりしほどに。互に思ひかはして。密にかたらひしことの有りければ。歌にも其心あらはれて

　　ひとりのみ思ひつゞけて歎くかな
　　　人にいふべきむかしならねば

とはよめるにて。名を顯はさむは。面ぶせなれば。よみびとしらずとはあげしなりけり。かゝる例は撰集などにもつねあることとなり。これにつきていぶかしき事あるは。新千載集雜下に。獨述懷といふことを。爲家卿のよみ給ひしうたに

　　とにかくに思ひつゞけてねをぞなく
　　　人にいふべき昔ならねば

此歌いさゝかのたがひにて。一首のうへ心こと葉たゞ同じうたなり。されど宇萬伎まさに爲家卿のうたをぬすまんや。これぞおのづからあへるにこそありけめ。古今等類のうたいと多けれど。かくばかりなるは數すくなくやあらむ

一倭文子が家集に。雪ふる日女ともどちのもとへの贈答往反數廻のうたあり。これを見て。我友横山光氏がかたぶきいへるこそをかしけれ。あはれ此使こそいとほしけれ。めのわらはにやありけむ。おいつぼねにやものしけむ。いみじうふる雪に。あまたゝび行きかひして。其歌ゐ案じ入りたる程。はだし（跣）つる（鶴）はぎ（脛）にて。そともにうすづきゐたらんさま。今も思ひやられてあはれなり。あるじたちこそ衣あたゝかにかさねて。火桶などによりゐつつおもしろくもめでたくも讀み出でんとはかまへられためれ。使人いかにわびしと思ひけむかしとて。卷をおほひて。かへすがへす大息つきたりき。此使人苔のしたにさこそうれしとおもふらめと。かたはらをかしうこそおぼえしか

一縣居翁の門人いとおほかりし中に。女の歌よみすくなからざりき。殊にすぐれたりしは。よの子。茂子。しづ子の三女なりけり。餘の子（紀伊殿に仕へて。瀨川と呼ばれ。のちに涼月院と申されき）は。鵜殿孟一（字士寧通稱左南南郭門人）の妹にて。漢學にさへたと〳〵しからず。からうたよくつくられけり。兄おとゝのざえを。其身ひとつに集めたりと。孟一つねにいはれしとぞ。翁あるやむごと

といへる筆すさびいとめでたし。さらに儒生の口つきなし。春臺先生の觀放生會記など、は。雲泥のたがひといふべし、

檜垣寺瓦記

ひがきのおうなの歌。その事をあはせて。後撰集大和ものがたりにあらはれたれば。人みなしる處なり。いまはそのあと。寺となりてなむあるといひつたふめり。肥後の曇龍上人ふるさとよりふたたびあづまにむかはんとて。ふるきをしのぶかたくなゝるおきなが心ぐせを思ひはかりて。かの寺の瓦をもてつたへて。あたへ給へり。朝夕なづさひみむに。硯になしてむとて。その道のたくみにことづけて。こゝろむるにいとかたしとて。いなびたればとゞめにけり。さばれひくとはなしにいとなき栞をてまさぐりて。すぐし、ためしもあらざらめやは。さるはことがらのいみじうむかしおぼえて。もてあそぶばかりも。こゝろひとつにをかしきわざなりや。おのれめでたしと見るのみかは。上人のはるゞゝふりはへて。たづさへ給へりし心づくしの海ふかきなさけも。すてがたきまゝに。ならはぬをみな文字して。かいつけたれば。にげなくこそをこがましけれ。かつはしらかはの水からおもへば。老にける身のいまはた硯のすみの黑かみにたちかへるべきすぢもあらずかし。硯なくてもよをもてかぞふるに。ものこそあれ。はかなきいのち毛の筆のすさびは。ながきもよしなしとて。かきさしてやみつ

寶曆八年　　七十六翁□

此記翁のみづからの筆にて。かきおかれたるが。岡部故完（俗稱牛助雲州侯詞臣宇子迪門人）の許に殘りつたはれるを。はやく吾師の原本によりて。寫しおき給へりしかば。またそれをうつし取りてこゝにのせしなり

一縣居翁の門人に。倭文子（京橋弓町伊勢屋某女）といへるは。才女なりしが。齡二十にて身まかりにければ。皆人をしみあひつゝ。かなしみの歌よめるを。彼倭文子の家集。文布といふ書のおくにしるしそへたるに翁をはじめ門人男女の歌おほくのせたり。その中に。宇萬伎一人のうたなし。わきてしたしかりければ。宇萬伎の母の歌もあるを。いかで宇萬伎の歌のみは入らざりけんといぶかしむ人あり。そは

論語子張篇

あふさかのこずゑの花はたをるとも
人のゆるさぬ關路越えめや

家人利女貞　易　家　人

ひききても露亂れなばあやめ草
など我やどのつまにみるべき

無　氷　春秋桓公十四年

まつりごとゝゞこほり行く國なるに
水にはいかで結ばざりけん

春築臺于郎夏築臺于薛秋築臺于秦
春秋莊公三十一年

みたびまでつくるうてなはいくばくの
民のなげきを積むとかはしる

晉侯殺其世子申生　春秋僖公五年

僞りをたゞすの神やまさゞりし
空しく消えし森の下露

一縣居翁一世の年譜行狀は。別にくはしくかむがへしるさんの心ざしあればいはじ。家集は。吾師の筆記し置き給へる岡部家譜考證一卷ありて。いとくはし。墓は武藏國荏原郡品川驛東海寺地內。少林院の山上にあり。翁東都に下られてより。南郭先生といとしたしくむつびかはされつゝ。詩を先生に學ばれしに。先生は國學を翁にとはれて。互によき學びがたきにおはせしかば。先生の墓所も。此寺なるちなみに。翁も墓地をこゝにしめおかれしとぞ。墓石の正面には。芳宜園千蔭の書にて。賀茂縣主大人墓とあり。近來芳宜園。織錦家南氏相はかりて。年每の九月はつる日。此おくつきにまうでゝ。人々と共に歌よむことゝせられゑより。年ごとにまうでつゝ。今も其流をしたふ人々は。その日をさだめてまうづる事になむ。翁の正忌十月晦日なれど。菊紅葉もをかしきをりとて九月晦日に御はかまうでとさゞめられしなりけり。享和元年芳宜園のあるじ此墓側にあらたに碑文をしるし。石にゑりて建てられけり。（此碑文は芳宜園家集に出でたれば。こゝに略せり）其をり。吾師のかく碑文たてられし事をよろこびて。よまれし長歌あり（これも吾師の家集に入りて上木に及びぬれば。こゝに略せり）

一あがたゐ翁と南郭先生とはもろこし學と。やまとざえとをかへ〴〵にして。かたみにとひまなばれしとかや。されば南郭先生の檜垣寺瓦記

また以レ鞭加レ馬有二篤意一といひしをも。蘇氏又嘲りて以レ竹打レ犬何得レ笑といへる。この問答に。よく似たることなりけり

因にいふ。おのが許に物學する柏倉一元といふをのこあり。古事記の倭建命の御歌に。おすひのすそにつきたちにけりとよみ給へるをみて。此つきは月水にて。卽血なり。思ふに。ツキの反チなれは。血は月水の約言なるべきにては侍るまじきやと。おのれうけがはず。血はおのづから血にて。別語なり。女の月水をのみ血といはゞ。わぬしのいはるゝ如くもいはるまじきにあらねど。いかでツキの約チなればとて。大よそに血を月水の約言とはきはめいはるべきといふに。一元猶服せず。反切かなへれば。あながちにツキの約ならむといふ時。おのれ叱していはく。もし反切にのみかゝはりて。語を釋せんとならば。試にいはん。血は流れ垂るものなりとて。タリの約チなりともいはゞ。是にも從はんとせらるゝかと。此時一元大きに服して。誠に然り。おのれあやまりて。しひて反約によらむとして。ひが心得したりとて。論談餘事に及べりき

一宇萬伎の友人に。藤井懶齋といふ人ありき。性理の學者なりしが。かたへに皇朝古言の學を好みて。宇萬伎としたしくむつびかはされたり。齊明紀の童謠に苦心して。是かならず私記の說のやうに。字を上下してとくべきものにはあらじ。もとの字のまゝにてよむべきよしあらんとて。一篇の大意舟のことをよめるならんとまでは。考へつけゝるが。語の解しがたきにくるしみて。宇萬伎にとふ。宇萬伎こは我大人眞淵先師東麿の祕說を傳へられて。みだりに人に語られず。おのれも聞きしることなし。たゞ舟の事をいへるわざうたなりとは。聞き侍りきと答へしに。懶齋其說の符合せるをよろこびしとぞ。此童謠考は先年吾師校正して上木せられたり 此人讀書餘吟とて。四書五經小學のたぐひよりぬき出でゝ。題を設けてよめる歌。百餘首あり。予幼年の時うつしおけり。今其うち數首ぬきいでゝ、爰にあぐ。いづれも性理學徒の歌の口つきにあらず。室鳩巣などのよめるとは。ひとつくちにいひがたし

大德不踰閑小德出入可

せんなるを。雲霧つねにとぢて。眺望なく。中腹より上は。草木さらになく。けがしくきたなきばかりなりとて。おほきにそしれり。是も實にはさることなるべきもしらねど。むかしより日のもとの鎭めとも。譽めたゝへたる名山を。千とせの後に口さがなくいひけがさむ事いかゞあらむ。あかたゐ翁の梅の詞。同日の談とおぼゆれば。筆のついでにしるしそへぬ（この富士山の詞。先年難波人にかりて寫しおけるを。人にかして失ひつ。又。寫し得て添へぬべし）

一凡古言を辨せむと心がくるもの。誰か五十韻の反切によらずして釋し得ぬべき。さはいへその反切になづみて。しひて語を釋せんとすれば。なか〳〵にあやまる事おほし。縣居の翁は。よく其意を得て釋せられしを。そのをしへをうけし輩。よろづの語たゞ反切にありとのみ心得て。あしく心得たるは。五六言をつゞめて。一言となし。しひて古言を釋せむとする人あり。いみじきひがことゝいふべし。翁の門人の中にて。狛宿禰諸成。建綾足など。殊に反切になづみて。牽强の語釋おほかりき。ある時。綾足美樹にあひてかたりいへるやう。おのれ久しく霧の語釋を考へ得ざりしを。近頃發明せりといふ。宇萬伎問ひていはく。そはいかなる釋ぞ。綾足答へて。霧と陽炎（カギロヒ）と同語なり。カギの約キなり。ロヒの約リなり。されば。カキロヒの約キリにて。いづれも天地間の一氣なり。同語にはあらざるやといふ。時に宇萬伎微笑して。やがていへらく。わぬしが霧の語釋によりて。おのれも發明せる語釋あり。鷹と燕と同語なり。綾足かたぶきて。いかで鷹と燕とは同語なるべきといふに。宇萬伎ツハの約タなり。クラの約カなり。さればツハクラの約タカなり。いづれも同じ鳥類なれば。同語同物なることわりなりとあざけりいふに。綾足答ふべき。詞なくして閉口せりとぞ。誠によき答といふべし。霧と陽炎とは。共に天地の氣にてあれば。もしも同語にやと。思ひ疑ふまじきにあらねど。鷹と燕とはいかで同語といはん。共に鳥名なるをもて。答へたるは。當意卽妙の答なり。彼もろこしにて。王安石とかいへる人の。波は是水之皮といへりしかば。蘇子瞻といへるかしこ人の。若然滑は卽水之骨乎とこたへ。王氏が

諸人下立植畢苗其稲
もろひとおりたちうゑしむらなへそのいねよま
榮
ほにさかえぬ

田中道萬呂 尾張名古屋人。本居氏門人。著書數部。今略其目

住江在田居植女早苗稲
すみのゑなるたゐにさをとめわせうゑぬいね
苅落穂拾兒等其從麥蒔
かりてよおちほひろへこらそゆしもむきまけ
栗生作
むはふつくれや

正重 號拙齋 寛政年間人

天地成蒼生稲齋蒔數
あめつちなせるたみのくさいねゆまけりをしへ
親子兄弟丁等不饑畢居
そふわかおやこえとよほろらもうゑすむれゐて
賑
にきはひぬ

此四首は。古學ひらけし後なれば。假字のたがひもなし。いづれをまされりとかおもふ。人々のこころしりがたし

一ある時。縣居翁の家に文會ありて。梅の詞を人々にもつくらせ。翁もつくられたりけるに。翁の文きはめて。梅をそしりて。梅はから國よりつたはれるものにして。いとふるくは歌にもよめることなく。寧樂朝に至りて。大伴卿。家に人々をつどへて。梅の花の宴せられし三十餘首のうた。萬葉に見えたるがはじめなり。枝さしこはぐしく。冬のうちより。我はがほに咲き出でゝかしこがりたるさま。櫻のわが皇國におひそめて。にほひやかなるには。いたくおとれりと。口をきはめていひおとされたるを。門人橘常樹といへるが。ひとりごとのやうにいへるやう。翁の文詞。大よそ人の趣にさまかはりて。めづらしう思ひめぐらされたるはさることながら。梅の文をかゝむとて。梅をおとしめ難せられたるは。梅のため面ふせぞかし。たとひさる事にもせよ。其ものをむねとして。文かき。歌よまんには。わがともがらのうひまなびの身にのり法とし。まねばん事いかゞあらんといへり。げに常樹がことばもことわり。さる事とおぼゆかし。此梅の詞は。賀茂翁家集に入りて。人皆よく見しりたれは。こゝに贅載せず 近き頃。河津宇萬伎。門人上田秋成 難波人號餘齋 は。いと奇僻なることを好む人なるが若かりし程に。富士山に登れる時の漢文の記あり。極めて秀文にして。時人に稱譽せられたるが。その詞中みな富士をあしざまにのみいへり。大意はおよそ高山は。遠くのぞむべき

あふてふなをいかにせむ

國名十　　枝　直

あはれあきの草につゆおきつきいてはいきて
あはましまちもするかに

一世にいひつたふる伊呂波の歌は。護命僧正弘法大師兩大德の作なるよし。江談抄（今は江談抄には此事闕けたり。こゝに引たるは河海抄に江談抄を引きたるによる）に見えて。誰かたぶく人もなきを。吾師は歌にあらず今樣なり。はじめを七言にていひ出だすは。今やうの歌體にして。歌にはなき事なり。またわが世たれか常ならんといふべきを。たれぞつねならむといへるは。てづゝ（拙）也。大師の比の作ならんには。かくしひたるいひなしはなきことわりなり。されど假字は。古格にひとつもたがへるなければ。後世のわざにはあらじ。花山一條の比の今樣なるべしといはれたり。今おもふに。花山。一條まではくだるまじけれど。今樣なりといはれしは卓見といふべし。近來この四十七字をよめるうた。數輩の作あり

細井知愼　通稱次郎太夫　號廣澤

（君　臣　父子　夫婦　兄弟　群集　井穿　田）
きみまくらおやこいもせにえとむれぬゐほりた
（植　末　繁　天　地　榮　世　歎　莫　舟）
うへてすゑしけるあめつちさかゆよをわひそふ
（檣縄）
ねのろなは

古言の學。世にあまねからぬほどにして。かく迄にもよめるは。稱すべき事ながら。古今集序の寫誤のまゝに。まくらとよみ。（まくらは。まろらの誤也と。縣居翁のいはれたるいとよし。本居氏の説は。うけかたきよしば。予別に委しく考おけり）植にウへの假字を用ひ。また世をなわびそといふべきを。たゞよをわびそといひ。（なといふべきをそといひたる誤。新古今の比よりまゝ見えたり。いみじき誤なり。わびそにては。わびよといふ事になりて。勿諾といふことのうらとなるなり。）また。結句心詞とほらず。いとてづゝなり（ある人。此結句の意を知愼にとへりしに。知愼こたへていふ。結句殊に意深し。此一句は結語にして。比の詞なり。舟に乗りて洋海をわたるに。檣縄なくしてはかなはず。世をわたるに。三綱仁義なくては叶はずといふ心なりといへり。いかでさは聞ゆべき。笑ふに堪へず）

谷川士清　號淡齋。伊勢津人。著日本紀通證。和訓栞勾玉考等

（天　地　分　神　日　本　成　禮）
あめつちわきかみさふるひのもとなりてゐや
（代　大嘗齋　ト　設　是　不絶）
しろをおほんへゆかはうらてけねこれそたえせ
（未　幾　世）
ぬすゑいくよ

本居宣長　通稱舜菴。伊勢松坂人。著書尤富矣

（雨　降　井　堰　越　水　分　易）
あめふれはゐせきをこゆるみつわけてやすく

又元正ノ養老ニ。十卷ニコソ刊修アレ。義解ハ淳和ニ選マレテ。仁明天皇承和元。天下ニ是ヲ施行セリ。第一本末二冊アリ。官位本トシ職員ヨリ。後宮東宮家令マデ。四篇ハ一ノ末トセリ。第二ハ。神祇。僧尼ト戸。第三田令。賦役。學。第四ハ選叙。繼嗣ヨリ。第五ハ宮衞。軍坊令。第六卷ハ。儀制令。衣服。營繕三篇ナリ。第七公式。第八ノ倉庫ハ。闕ケテ厩牧アリ。醫疾モ闕ケテ今ハ亡シ。第九ハ假寧。喪葬令。關市ハ傳寫。捕亡令。第十獄。雜二篇ナリ。以上十卷十一冊。逸脱合セテ。三十篇。九百五十五ケ條アリ

一冠辭考板した書きたる人々の名

卷一　縣居自筆　卷二　縣居自筆
卷三　橘　千蔭　卷四　平　春道
卷五　橘　枝直　卷六　橘　御園
卷七　橘　常樹　卷八　橘　御園
卷九　橘　常樹　卷十　橘　常樹

こは吾師のもたれたる本にしるしつけおかれしを書き出でたるなり。世にしる人まれなればなり

一上にいへる縣居翁魚名十の隱題の歌のちなみにいふべきをわすれて。今こゝにあぐ

十二支　荷田東萬呂
たつねとひつしにいぬるみちはさとりうとも
うまれゐるよをさとらざるうし

鳥名十　作者不知 小野古道友人
うかりけりたひはきしかたゆくさきもすかたや
つるとひとのみむかも

同　枝直
やまたかみさこそひかりもすむつきのいつる
にほひはまちうからすや

草名十　同
あさましやあふひもしらにこもりゐてうとしさ
ひしとなきやあかさん

木名十　同
おもひつゝしのひははてしきみなくはなにとか
ならんなかきゆくするゑ
くりかへしかきつくすとも、しひとのみやとか
むへきえやはしのはむ

虫名十　同
ありあけのかけのみしらみゆくものをさしも

賀茂縣主大人爾上

此文を入門のをり。人々に自筆にて。か、せられしが。岡部の家にちり殘りつたはれるを。先年翁の孫。（通稱平三郎）今の家あるじにこひて。おのが家に襲藏す。元文三年（翁年四十二歲）より。明和四年（翁年七十二歲にて歿年前二年なり）まで。二十七人のを得たり。此外にもいとおほかりけんを。散り失せてわづかに殘れるかぎりなり。此なかに小野古道。（通稱長谷川謙益家集一卷予校正して已に刊せり）日下部高豐（通稱今藏貞右衛門家集一卷予校正して近刊す）橘千蔭。（九歲のをりにて通稱要人といはれし人なり）藤原宇萬伎。（通稱河津五郎太夫家集靜舍集先年難波人上田秋成校正して上木せり）大伴俊明。（柳營侍臣俗稱山岡左次右衛門後剃髮號明阿博覽強記著書數十部）源綾足。（建涼岱著書數部今上木して世に傳ふ）平宣長。（通稱本居舜菴）度會正恭。（後改久老通稱宇治五十槻）などの高名の輩入りたり

一縣居翁の筆の跡を見るに。を、しくはたみやびたるはさるものにて。わきて世に似ずおもひあがれる心たかさの見ゆる所なむ有りける。そはおのづからのことわりにて。筆の跡にこそ人々の心くせのあらはれて。たかきもみじかきもいちじるきものなればなるべし。今思ふに翁の筆のおきて三くさのわかちあり。はじめ齡のわかくみさかりにおはせし比は。荷田東萬侶大人の手をまなばれしによりて。うるはしさのいと似かよひたりき。齡の齢過きゆかる、ま、に。花やぎけしきばめるかたをばすて、。かきつよりつ、。またいとこまやかにかく事を好まれて。ほそくこはき筆の先をはさみて。常に本どもは寫しおかれたるが。うはべの筆きえてみゆるに。まことの筋こもれりけり。齡の末にいたりては。天朗帖（王右軍の書といひ傳ふ。おそらくは明人の書なるべし）をこのみて。むねとそのすがたいきほひを似せられしより。いともう（猛）にいきほひす、みて。天とぶ龍の雲ゐをかけるさませられけり。人のよく知れるものにていはゞ。萬葉考のうはがき。古言梯の奧書など。其すがたなりけり。おのがもとにひめつたひたる美酒歌など。殊にめでたくなん有りける。徂徠先生の書にいきほひの似たる所あるは。其氣韻おのづからしからしめしものなるべし

一縣居翁の遺稿の中に。令の目錄歌あり。童蒙に諳記せさせんとの事なるべし。令條異論といふ。識者の爲には要なきものながら見出でしま、。こ、にあぐ。令ハ文武ノ大寶元。十一卷ニ選セラレ。

たるは。わが學の道の。廣く天の下におこなはるべきはじめなりとよろこばれつゝ。とひくる人毎に語られしを。三島景雄。（俗稱吉兵衞。後剃髮自寛）有栖川家の御門人にて。關東の歌目代を蒙り居しがはやく人ありて。此事を告ぐる有りけり。景雄いぶかしきことなり。いかでさる事あらん。其御使といふは。いみじき盜人なり。親王の御ため聞き捨てがたしとて。そのよし都へ聞えあげむといかりけるを。翁聞きつけて。大きにおどろかれつゝ。されば我あざむかれしならん。其御使のもとに問ひたゞすべしとて。人をやられたれば。とく逃け失せてあらずといふに。いみじきことざましになりてやみにけり。いかなるもの、わざならん。狂惑のやつもあるものなりけり

一縣居翁は古意をもとゝして。古書を腹にあぢはへて。歌をもよまれしなれば。しひて後の世の歌よみのやうに。隱題など好みては。よまれざりしが。或時のうたに

擬二萬葉集歌體一剩隱二魚名十一歌

ぬきすたひはきあかつをはえしもみすしひこちいふかかしこひとたち

此魚名のうち。はえは。和名抄に鮠をよめり。今轉じてはやといふ。またみはこれも和名抄に云。文字集略に云。鱴。（音騷。漢語抄云美）鯉屬也とあり。たちは太刀の魚なり。此うた。ちひさき紙にかゝれたるを。おのれもたりしに。難波人松前東樹がせちにこひしかば。あたへやりぬ

一縣居翁東都へ來られて。門人數あまたありけるが。入門のをり。鳥計非言といふものをかゝせしめられき。そは今も世にすなる。入門の誓詞なり。其文は

賀茂宇志酒敎賜倍屢
皇御國酒上代乃道遠已痛願斯奴倍里。故名薄平進
底頁世其道爾赴比伊摩由後敎賜留觶言。遂爾達底里
許流時毛爾之有受波安駄志人爾私言勢自。且宇志爾
對比底爲耶無久異伎之心遠思波自。都底此鳥計非爾
違波言麻久毛恐伎。天津神國津神多知志食毛奈
穴畏

年號月日　通稱　姓名　花押

神不知有所患也。若失國訓之學世名于家。國歌獨絕倫云。是其精神所托。（失當作夫祖組之誤）錦繡而質纂組。成文必也窮日之力。僅得一經一緯。誰不冀留諸天地間乎。女先生略之如上苴敉帚然。（上土之誤）其識之卓達者亦有耻。然亦錦繡纂組家。戶誦其集。終公于世歟。余言爲贅耳。既老而有見男子執贄而進日益多。惜哉未充其盛也。月日葬于淺草金龍寺先塋之側。銘曰

日雲之國　柔祇致祥　風雅妙遷　閨秀觀光
永世不朽　蒼生氏名

兎道澤元愷作文

天明六年丙午五月甲辰朔越十二日乙卯

東都　前田知雄書並題額

義子　尙志建

一縣居翁江戶へ下られてより。復古の學これが爲に一新し。冠辭考を刊布せられて。時人はじめて。古言の學をいふことをわきまへたり。或日京家の靑侍と見えて。從者數輩美々しく裝ひたるが。翁の許に訪ひ來ていひ入れけるやう。是は有栖川家（職仁親王）よりの御使伊藤主膳と云ふものなり。わぬし古言の學に心をふかめて。近來著述の書おほかる中に。此ごろ刊布せる冠辭考おふけなく親王の見そなはし給ひて。いたくめでよろこばせたまひつゝのたまふやう。あはれ吾嬬のはてにかゝる言の葉のおくかをとむるものも有りけるよ。いかでとひ往きて。そのありさま見てまゐれと。又此歌とらせよと。宣まはせしかば。罷りくだりたるなりとて。ことごとしうやうだいして。紫のふくさよりとり出でたる御歌をみれば。みちのく紙の厚くこえたるを。中よりをりて

鳥がなくあづまのはてと思ひしにみやびの道はとゞまれるかなとぞ遊ばされける。（四句神世の事はといひつたふる人もあれど。おのれまのあたり其歌を見しにかくぞありし）翁も身にあまるうれしさに。めいぼく（面目）をほどこして。御使をば何くれともてなし歸しやりて。のち。日頃へだてなうとひくる人々を集へて。かゝる事こそあなれ。いとうれしきことならずや。たとひわがともがら。いかに復古の學をとなふとも。やむごとなき雲の上人に。其心ざしあらずば。學の道廣く天の下に行はるゝことかたかるべし。さるに今此親王のかくまでおぼし入り

歟。餘師其書。何必待人而問爲。其精如此。有人勸著書者。乃謂之曰。家學已敷海内。言之無益于學者。亦何必出自己口而後爲得乎。乃賀茂眞淵翟。受業於先生父祖。而著作頗富。其說非無異同。要亦羽倉氏之學也已。其達如此。蓋其達得之老莊矣。是以洸洋自恣不修邊幅。嗜酒呑任放。其人有典午氏之風。故或爲拘儒所誚。然亦令然自得毀譽置之度外。而不顧。其不欲仕。不蓄書。不著述。亦復以此物焉爾。先生以享保十三年十一月五日。生于京師。享年五十七。天明四年八月十六日病而卒于岡侯邸舍。月日葬淺草金龍禪寺先塋側。先生娶戶澤氏無子。侯使親戚擇可後者。以姨弟藤江尙志季子萬世爲嗣。門人木景滿海。津蔭貞。澤是茂。捐貲助費。侯使結城侯篆額。結城侯初在岡邸。亦學于先生矣。尙志等使元愷銘之曰

魂氣何安。無何有之鄕。是子之所盤耶。營魄何依。四尺之眞珉。是子之所歸耶

天明四年甲辰十一月壬子朔越二十九日庚辰

門人　兎道澤元愷撰

東都　前田知雄書

孝子萬世建

蒼生子の碑は。女先生蚊田氏之墓碑といふ九字を篆額せり。文は

女先生姓蚊田。字蒼生。羽倉在滿之妹。御風之姑也。幼從伯氏而東。若而年已醮。而夫家故。（家或物之誤不然此際當有脫簡）乃孀養于伯氏。以善國歌。應募而仕于紀藩。女公子辭仕之後。復聘而召焉。年四十九。終乞骸骨。而寡居于江戶。香棲（香棲未聞香字可是衍）於淺草里。其名益高於諸侯之間。諸侯夫人女公子執弟子禮而招。不違指數。施及邦君。游事于土左侯最久。姬路侯岡侯亦皆禮待焉。享年六十五。以天明六年二月二日。病而卒于藤江尙志家。初女先生。生養外甥尙志。以其姪配焉。見仕于古河侯。而有兒孫因奉遺命襄事焉。羽子玄先生在日。致姑氏之命於元愷曰。敢以不朽煩焉。爾至病已篤。余往而問。則以前諸余著述。（前諸之間有脫）則曰。宜還諸造化耳。何必傳爲。其言慨切莫忌諱。豈不儼然女丈夫乎。是其平生寡居成家。而不墜其聲。可概見矣。余嘗聞之。女先生長于祠官家。而不瀆外神。其居與仁祠鄰。而不媚佛陀。性善病。雖病不飾不見人。雖

き。女丈夫さへ出で來ぬる。めはづらしきことなり。東滿の家集。蒼生女の家集。杉のしづ枝など。板にゑりてつたはりたれば。誰も見しりたるべし。今こゝに墓碑を抄錄して。行狀の大概をつたふ。其墓碑は。淺草寺町金龍寺といふ寺にあり。東滿は。京都にて身まかりにければ。墓碑此寺になし。在滿。御風（初名冬滿。號眞要齋、通稱東藏）蒼生女三人の墓碑あり在滿の碑は靑石にして。仁良齋の三字を篆額せり。文は。君姓荷田。諱在滿。字東進。族羽倉氏高惟。母伴氏。世奉職京稻荷祠。仲父春滿以邦學名。養君爲後。君承其家學。尤精律令及職官服制。既來東都。徵爲田安記室。後承官命觀大嘗會儀式。以稱旨賜金若干。後病免家居。卒年四十有六。實寬延辛未八月四日也。葬淺草金龍寺中。君娶長井氏。生三男二女。長男少女存。餘皆夭云。銘曰

魂其安　奄以藏　深而固　永無傷

門人有志者相與建之

明和丁亥秋八月　深川三井親和書

御風の碑は。羽倉子玄先生之墓といふ八字を篆額せり。側に眞要齋の三字をゑりたり。文は

先生姓蚊田。諱御風。字子玄。別稱東藏。稻荷山祠官。羽倉氏之族也。學者稱曰羽倉先生。故其族獨著。蓋羽倉氏之學。律令格式爲本。古訓修國史史學。以證事物。是以古今國歌稗海之襍。俗語鄙言之所本。自猶之建瓴破竹歟。世間時師獨取僧契沖之說。沖在元祿寶永之際。盛唱萬葉集訓詁之學於浪華。自有成書。先生祖諱春滿府君。與沖同時。羽倉氏學府君寔創焉。固非取于沖以厚殖也。在邦必聞遂徵于東都焉。府君辭以耄而老。在滿府君因茲東游于公矦之門。先生時尙幼。從而東。在滿府君已家居。後聘問屢至。不肯復出。彌滋學大行于諸矦之間。然先生繼先志。不欲臣諸矦。諸矦之時。一切辭而不仕。岡矦受其學。延而賓其邸。然不致餼稟。知其志也。既而先生歿。矦之言曰。寡人不食先生。我家不庇其後。何以寡人之志。遂立其後以稟焉。其操如此。先生至性强記。一過目。則終身不忘。家貧不蓄書。受業者常數十百人。或受律令國史。或問萬葉若源語。必奉書以問。隨問而解惑。鑿々有明據。據若不明雖家說不擧。學之必辨。以故聞者莫不心醋。嘗謂人曰。若非所校訂則不講

ふまゝに讓りあたへられしとなん。兩方閭郭公と云ふ題に

ほとゝぎすやはた山崎鳴きかはす
　　聲の中ゆく淀の川舟

とよめるも此人の歌なりけり

一羽倉在滿通稱東之進。號仁良齋。東滿甥の律令の學にくはしきことは。世こぞりて知れり。歌文また巧なり。海上春望といふ題にて

めもはるにかすみわたれる海原は
　　あはと見るべき遠山もなし

此歌を眞字借字をまじへて。いはゆる萬葉書にして。五言絶句の詩につくられたり。其書けるさま

春日遊小田原。賦得海上睦望。荷田在滿
味蒙春日霞。　渡流海面波。　阿波登應見。　遠山難追馬。

秀才おもひやるべし

一おなじ人の國歌八論ひとわたりいはれざるにあらず。されども。人のおもて〳〵のかはりたらんやうに。心々はたひとしからぬものなれば。其得失を評論する人おほし。そのかみやむごとなき御あたりに。此書を論じ給へる。國歌八論餘言出で來たりてより。それに次ぎて。在滿またおのれのおもへるとを。御論のかはれるとを。論辨せし一帖あり。又縣居翁の國歌八論餘言拾遺あり。後に寶曆十一年に。大菅中養父といふ人の國歌八論斥非といふあり。在滿の新古今を好めるを難じて。われは。古今集に香火し。貫之に尸祝せんといへり。明和五年。本居氏その八論と斥非との得失を評して。くはしくいはれたるあり。又荒木田久老神主通稱宇治五十槻の評言もあり。本居氏とすこしたがへる事もまじれり。又後閑田子蒿蹊の評あり。かく諸俊傑の論やまざるは。畢竟八論の餘光といふべく。また八論の面目といふべし。今世かく復古の學さかりにひらけゆけるより見れば。八論の說ども。さのみ發明の論ともおもはれねども。當時めづらしくいひ出でたる事にて。一時世の歌人の膽に砭せしなれば。其なごりたえずつたへて。かく數輩の評論をば釀し成せるものなるべし

一凡名家の學。大かた二代とは續かぬものなり。さるを羽倉氏三代家聲をおとさず。蒼生女などの如

りて。うきたる事をかまへ出でたるにこそ侍りけめとて。そこ〳〵にしておくつかたへはひりて。又と出でざりければ。東滿もをかしさをこらへて。家にかへりけるとぞ。此美仲が墓。今のあたり江戸下谷池之端なる敎證寺といふにありて。正面に隱口先生美仲甫之墓といふ九字を。八分にてしるし。側面にはつせ路やの歌。またかたつかたに碑文をゑり付けたり。碑文の說本文とたがへるは。かの東滿のなじりとがめたる後は。亞相のゆるし給へるよしは。かくして世人のつけたるあざ名のやうにいひかへしものなるべし。その碑文いとつたなくて見るにたへざれども。行狀をしるばかりにこゝに載せぬ。先生柳瀨氏。諱方塾。字美仲。世遠州濱松人也。父道意。母山內氏。以貞享二年乙丑之歲生。娶木村氏有一女。先生夙志于和歌。勤而不倦。屢遊學於京都。頗溯詞流淵源。而有驚人之語詠。尋郭公和歌最奇絕。遍流于人間。以爲美談。人呼爲隱口翁。遂以自稱。蓋以其歌中有隱口之句也。私倣待宵侍從。臥芝加賀之例也。後入武者小路亞相公之門。益極其精粹。亞相公賞之。而許正士庶之和歌。於是以養子方恒幹家事。放情山水諷詠以樂。元文四年乙未之夏。應友人之召。來于江都。而講習和歌。書生雲集。先生有正近世和歌之風。而復古之志　故議論甚高。聽者驚駭。及其循循敎誨之久。皆口然大服。恨聞其說之晚。居半歲弟子益進。縉紳公子爭請其是正。五年庚申之夏。罹病不起。五月十七日終於僑居。享年三十有六。葬于江都池端敎證寺中。所著書若干未行于世。門人口錢建石。令安世識其行狀之梗概。且爲之銘曰。

彼其之子　卓犖絕倫　天生斯人　奈奪之年
若其永世　醇風可傳　庶乎庶乎　何黨之因

元文五年庚申七月二十七日　　矯宇滕安世誌
　　　　　　　　　　　　　　癡堂荒文篤書

一享保の比。江戸に鴛氷申也といふ歌よみありけり。名は長敎。號は風弦といひき。廣澤長孝の門人にて。それが敎をうくる人おほかりけり。橘枝直。村田春道。橘常樹などもはじめは此人の弟子なりしとぞ。手よくかきて。源氏一部を自筆にかきをへて。おもしろき書入などありしを。村田の家につたへて。我師村田春海までもたれけるを。後に人のこ

泊洦筆話

清水濱臣 著

一享保元文の頃。柳瀨美仲といふ歌よみ有りけり。いさゝか復古のこゝろざしもありけりとぞ。ある時の歌に

はつせ路や初音きかまく尋ねてもまだこもりくの山ほとゝぎすといふ歌をよみて。おのれもいみじうよみ得たりと思ひて。日頃したしう物學きこえまゐらする某大納言殿の御もとにまゐりて。此うた見せ奉るに。いとめでくつがへらせ給ひて。今の世にかくばかりのうたよみいづべき人またあるべしともおぼえず。かのいにしへの侍宥侍從。ものかはの藏人。ふし柴の加賀。沖石讚岐などが。ためしにならひて。今より隱口美仲とあざなつくとも。誰かはてむつけんとほめ給はせしかば。美仲身にあまるうれしさに。かへるすなはち。しれるかぎりの人々にも。しか〴〵のよし語りきかせて。ほこりけるを。稻荷山の神職羽倉東滿。(通稱齋宮)此よしを聞きてをこがましき事とおもひつゝ。やがて大納言殿の御もとにまゐりて。雜掌某とかいへるにあへて申しけるやうは。傳へうけ給はるに。此頃美仲が歌に。まだこもりくのといふうたよみて。いたく殿の御褒詞に預り侍りしよし。まことさる事やはべりし。おのれも物の心しりそめしほどより。歌の事に深く心をよせ侍るが。こもりくといふ詞は。ふるく古事記。日本紀。萬葉集にわたりて。みな泊瀨のまくら辭にて侍るを。その枕辭をかく秀句にいひかくるのみならず。五言にのみいふべき詞を。上にまだの二言をそへて。七言の句にもちひ侍ること。古歌にたえて例なき事に侍り。いかで此歌をほめさせ給ひて。おふけなく隱口美仲などいふあざ名つけよとは宣はせしならむ。こはさだめて。辻大路のうきたるかたりごとにこそは侍らめ。殿の宣はせしならば。歌の事地に落ちたりとや申し侍らむ。いとなげかはしくこそ。此疑ひうけ給はり。はるけたくてことさらに詣でき侍りしなりと申しければ。雜掌も答にさしつまりて。いかでさる事侍らむ。そは美仲が弟子どもなどが。おのが師の歌をかゞやかさむとて。殿の御名をか

泊洦筆話目次

泊洦筆話目次 終

今俗に御幣かつぎと云ふ。むかし人もさる事あり。芦は悪にかよへば。吉として芳といふ。顯仲住吉百首。「汀なる汐芦に紛ふ濱荻はよしとぞみゆるよさの浦人。梨は無とかよへば。ありといひかへて。相模集に「おきかへし露ばかりなる梨なれど千代ありの實と人はいふらん。又。伊勢内宮の忌詞は　物いまひながら神の御まへにて。穢悪を忌む故に。忌詞をつくられたるなり。季鷹。縣主は。こよなき物いまひにて。よろこばしき事のみいひて。かりにもいまはしき事はいはれざりしなり。さるけ［故］にや。身は正四位にのぼり。齢は百歳にいたり。家はとみて。書籍。器物心にまかせて藏めもてあそび。性はすくよかにて。八九旬までも年若く。容顔すぐれたる妾二人はかく事なく。かゝへおかれたり。いみじのすきものにてぞおはしける

傍廂篇後 終

阿須波神。波比岐神とある阿須波は庭なり。波比岐は。波比里にて門口なり。萬葉集に「庭中の阿須波の神に小柴さし我は齋はんかへり來までに。祈年祭祝詞に。井の神を祭る處に。生井。榮井。津長井。阿須波。波比支登御名者白氏辭竟奉者云々とありて。門の入口を波比利といふなり

くひつみ

初春の祝物のくひつみといふは。春の始めに食ひて藥となるべき物のみ取りあつめて。客も主も物語りしながら。つまみとりてくひし故に。くひつみとはいへるなり。今はくはぬ事として。なま米をつめれど。むかしは葩煎といひて。糯を爆りて孛婁しめたるなり。天明年中頃までは。元日早朝より。江戸中葩煎賣あまたありきしを。つぎ／＼に絕えて。御丸の內のみあまたありきしを。それも寬政の頃より。やうやうすくなりて。今は稀にうりありく者あり。是喰ひつみ臺に置くべき料なり。その喰積臺に小土器をそへ置くは。食ふ人みづから煎燒てくふためなり。米を靈藥の最第一とするは論に及ばず。皇朝人の長壽にて。武勇强力なる。外戎人の短命にて。柔弱非力なるは。米の尊卑。味の濃淡。功能の精麁によれり。その外。栢。かちぐり。梅干。蜜柑。乾柿。熨斗。昆布。楪葉。裏白。山橘。小松。橙。九年母。野老。神馬藻など。皆。無毒有能のものにて。初春の藥に用ふべきものなり。本草綱目に委しくありて。功能あきらかなり。さるを。今はくはぬ物となりたるはをかしき事なり。くひつみの名義をば。いづくにかはうらしけん。當世はくはぬつみとぞなりにたる。「初春にくふべき爲を幼兒もくはで罪をやつくりものなるといひて。初春の笑ぞめせり

物いまひ

物いまひは。あしきをよさまにいひかへぬる事なり。

百三。沼田伴藏百一。水野備中守殿九十二。柴田十右衞門九十二。下條七兵衞九十二。これを思へば。いにしへ承安の頃。藤原清輔朝臣六十賀にありし尙齒會には。八十以上は敎賴只一人にて。源賴政卿七十以上。其外は多く七十以下なり。そは繪卷物に委しくあり

一莖二葉

過ぎし弘化二年乙巳春より夏秋かけて。季候不順にて。寒暖定まらず。雨がちにて。所々にあやしき玉蜀黍出來たり。或は長さ尺餘。大さ徑三寸餘。玉は小柑子。栗などの如きあり。又。一莖に蜀黍四五集り。長三四寸。大さ徑一寸餘。玉は柄鮫ばかなるあり。所々にてまのあたり見たり。我園の畑つ物生ひ出でたる中に。その年の八月。一莖二葉なる芋と。蔔と出來たり。その葉今に取り置きけり

火浣布

火鼠の毛にて織りたる布は。汚れたる時に火もてやけば。垢のみやけて。布はそこねずといひ來れども。其つたへまち〳〵にして定らず。和名抄に。火鼠。比禰須三。取二其毛一織爲レ布。若汚以レ火燒レ之。更令二清潔一とあり。吳錄に。日南北景縣有二火鼠一取レ毛爲レ布一燒レ之而精名二火浣布一。また。搜神記に。崑崙之墟。有二炎火之山一。山上有三鳥獸草木皆生二於炎火之中一。故有二火澣布一云々。その外。本草綱目神異經。齊東野語。夷珍貺考。晉書等にあれど。同じ趣なれば略けり。述異記には。南方有二災火山一。四月生レ火。十二月火滅。火滅之後草木皆生二枝條一。至二火生一草木葉落。如二中國寒時一也。取二此木一以爲レ薪。燃レ之不レ燼。以二其皮一績レ之。爲二火浣布一云々。かくまち〳〵にて定かならず。近き頃。東國にて。石を鐵盤の上に置きて。鐵槌もて靜に打ちくだけば。錦の如くやはらかなる毛出づるを。糸によりたるをいさゝか得しに。金色のひかりあり。火にいれつれどやけず。そはいかなる石ならん。さる石常にありやなしやしらず

はひり

今の世の人の詞に。外より内へ入る事を。はひりといへるは。這入の事として。犬猫のたぐひにいひ馴れたる詞なるべし。はひりは家の門口の事にて。後撰集に。「妹が屋のはひりにたてる青柳に今や鳴くらん鶯の聲。堀川百首に「紫の家のはひりの庭にたく蚊火の烟うるさき夏のゆふぐれ。古事記に大年神子

もこまれり我もこまれり云々。其後呑みぬけどもが。川崎にてもてあそびつる蜂龍盤の盃も大器なり。そは盃をさす。酒をのむ。肴をはさむといふ義なり。其後。又。淺草の並木邊に浮む瀬といひしあり。こゝにも大盃くさ〲あり。江戸より京都迄。五十三の盃いづれも其處の廣狭賑淋によりて。盃の大小深淺をわかちたるなり

島織

後世絹布など竪筋。横筋または格子筋などを島織といへるは。うつりたる誤なり。采覽異言。應帝亞（いんでや）篇云。按有二サントメイ一。西有二チヤウル一。皆屬部也。洋舶所レ載來。有二各色間道緞布一。係二兩地名一者其所レ産也。圖說チヤウル作二利兀兒一。サントメイは今の棧留にて。チヤウルは今の茶宇なり。いづれも竪筋織りたるを。海外の島國よりわたりし故に。筋を島とは。誤りたるなりけり

草字より眞字に直したがへ

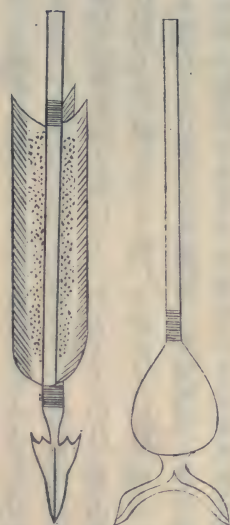
或御家の御定法に。誤としりつゝ。古來より書き來りたるを改むる事なく。鶴の字を俗に靏と書く故に。眞字に直しひがめて。靏とかきて。今に改め給はぬ御家風あり。芝露月町の天水桶に。小さかしき人が眞字に直したがへて。霖月町と書きたる事あり。其外にも書家といへる職の人は。多く無學にて。たゞ書く事のみなれば。かゝるひが文字をあまたかくものなり

尚齒會

ことしこの月（嘉永四年十一月十日）梅本爲山の催にて。老母の八十賀莚に尚齒會あり。七叟は飯田百十歲。廓翁九十四歲。彥麿八十四歲。京山八十三歲。月窓七十七歲。武清七十六歲。綾瀨七十四歲なり。近き世にはいとめづらし。むかし寶永五年谷中感應寺隣の空無庵室にてありし尚齒會の高年は。渡邊幸庵百廿七歲。外六叟は詳ならず。正德五年生島幽軒八十賀宴の尚齒會の七叟は志賀隨翁百六十七。小森閑齋百三十六。古結宗見百八。石寺宗壽九十七。下條七兵衞九十一。谷口一雲九十一。岡本半之丞八十三。又。享保十一年大道寺友山翁尚齒會には。志賀隨翁は出席。外六叟は名詳ならず。又。其頃長壽の人あまたありて。尚齒會なかりしは。志賀隨翁は先に數まへられつれど。其外小出勘右衞門百廿七。伊東市右衞門百十八。石井勘右衞門

遠きさとまでおくりける君がこゝろはわすらゆまじもとよめるは。東歌にて。東國の國詞なれば。格別の事なり

くるり

鳥を射る矢にくるりといふあり。夫木集に「我戀はくるり射流す川の瀨に立ち居る鳥の跡はかもなし。

古今著聞集に。みちの國田村郷の住人馬允何がしとかやいふをのこ。鷹をつかひけるが。鳥を得ずして。むなしくかへりけるに。あかぬまといふ處にをし鳥ひとつがひ居たりけるを。くるりを持ちて射たりければ。あやまたずとりにあたりけり云々。此くるりを舟の鏑とも。目なしかぶらともいふよし。本間流聞書にあり。鏑は檜。桐などにて造り。目をうがたず

叉。後世にいたりて。一種の鏃出來たり。これらくるりよりの思ひ附きにて。今一きは便利を考へたるなるべし。鏃の方にちひさき三立の羽あり

夷三郎

拾玉集に「西の海に風こゝろせよ西のみやあづまにのみやえびすさふらふとあり。こは攝津國武庫郡西宮神をよめるにて。さふらふは。侍候。伺守などの意にて。うかゞひまもり居る事なり。さるを軍物語文などに。夷三郎殿とあるは。をかしき事なるを。近きころには。夷三郎左衞門殿といふ人あり。いつの世の贈官ならん。いと／＼をかしき事にぞありける

大盃

大なる盃を。武藏野といへるは。古き名なり。節用集大全に。酒盃大者曰二武藏野一也。言。野見不レ盡之意也とあり。野廣ければ見つくしがたきを。呑みつくしがたき由にいひしなり。吉原伊勢物語といふいやしき草紙に。此坐には上戶ありとて。大盃出ださんとす。男わびて。「武藏野はけふはな出しそ大酒に妻

良經公。「小山田の苗代水のひき〳〵にわかつや人のこゝろなるらん。碧玉集に「おふけなや皆すべらきの海山を我もの顏に民のあらそふ

ゐもり。 やもり。 とかげ。

和名抄に。蝘蜓。一名蜥蜴。一名蠑螈。本草云。龍子。一名守宮。和名止加介 蘇敬注云。常在二屋壁一。故名二守宮一也とありて。ゐもり。やもりもひとつに擧げられたり。これをわけていへば。蝘蜓はゐもりにて。守宮はやもりにて。龍子はとかげなるべし。水中に在りて。堰埭の水を守る義にて。ゐもりといひ。家の籬壁の間に居るを。屋を守る義にて守宮といひ。草のかげ石垣の間などに居るを。處蔭（とかげ）といふなるべし。今世男女の中の事につきて。水中のゐもりを黑燒に製するよしいへるは。據たがへるなるべし。陶弘景云。蝘蜓喜緣二籬壁間一。以レ朱飼レ之。滿二三斤一。殺乾末以塗二女人身一。有二交接事一便脫。不レ爾如二赤誌一。故名二守宮一。三虫ともに毒虫にて似よりたるものながら。とかげは美麗に見えて。やもりはきたなげに見ゆるものなり。ゐもりは小魚と同じさまに。小兒もとらへて。小器の水中に飼ひ置く事あり。女の身にぬるは今のやもりなるべし

からの小兒の手習はじめ

今世小兒の手習始に。むかしは難波津。淺香山の歌なりしを。今は色は匂へど。散りぬるを云々の歌を手習の始とする事は。天下一統のならはしなり。唐國にて。小兒の手習始には

上大人丘乙巳化三千七十士尓
小生八九子佳作仁可知禮也

この二十五字を習ふと。猥談にあり

まし

歌にゆかまし。かへらまし。見まし。聞かましなどよめるましは。將レ行。將レ返。將レ見。將レ聞の將にて。すみてよむ常の事なり。さるを。ゆかまじ。かへらまじ。見まじ。きかまじなどにごりてよめば。俗言の聞敷にて。うらうへのたがひなり。其事は師翁も。玉あられにいはれたり。累塵集に。結城道閑。「きり〴〵すこゝをさせとしなかずとも月もるまじき閨のひまかはとよみしは。よき歌ながら。まじきといふにて。さとびて聞ゆ。齊明天皇紀に御歌の中に。倭須羅庾麻自珥（わすらゆまじに）とあり。また。萬葉集に「堀江こえ

にても上にいへるをおもひ合すべし

　笛をこちく

歌に笛をこちくとめるは。字音なれば。歌にはよむまじきを。此方來(コチク)にいひかけなれば。よみてよろし。大和物語に「ちゝのねは詞のふしか笛竹のこちくのこゑもきこえこなくに。奥儀抄に「いつか又こちくなるべき鶯のさへづりそめしよはのふえたけ。六百番歌合に「うら山しわがりこちくと笛竹をたのむる中の人はきくらん。書經註に。周禮所謂。孤竹之管竹特生者とあるより出でたり

　有情非情

人は更なり。鳥獸虫魚を有情といひ。草木砂石の類を非情といへるは。いみじきひがことなり。利鈍巧拙の差別はあれど。有情ならざるはなし。鳥獸虫魚はさとくして。生をむさぼり。死をのがれんとす。草木砂石はにぶくして。さる事なければ。廣き處にては。枝朶をのばへ。狹き庭にては。抄を狹めてかゞまりながらおひたち。蔓草の類はすがるべきたよりをたづねて。のびゆくことと非情のわざならんやは。砂石は今ひとときは鈍く拙きものなれど。年を經て。強大になり行く事。非情のわざにあらず。たゞ。金。石。木。竹の類。工匠の手にて器となりたるは。死物なれば。これらこそ。非情の物にはあれ。生のまゝなるは。皆。有情なり

　出芋(いづも)大社

丹波國桑田郡出芋鄉に大社ありて。聖海上人人々あまたゐてまゐりたる事。つれ〴〵草にあり。出芋といふ名より思び附きて。出雲大社を移し建てたる社なるべし。さるにても。出芋村は出雲のかり文字歟又は。この里より。よき芋出でたる故の名なりや。しるべからず

　おのが田へ水を引く

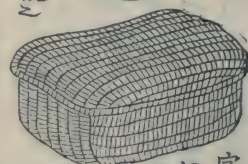
俗言に。身勝手なるを。おのが田へ水を引くといへるは。農夫のわざよりいひ出でたるにて。むかしもありし事なり。孝德天皇紀に。詔曰。其臣連等。伴造。國造各置二己民一恣レ情駈使。又。割二國縣山海林野池田一以爲二己財一。爭戰不レ已。或者兼二幷數萬頃田一。或者全無二容針少地一。及下進二調賦一時上。其臣。連。伴造等先自收斂。然後分進二修治宮殿一云々。むかしよりかかる事はありし故に。さる勅はありしなり。後京極

それより大師河原へ參らんとて。かの瓦をもてゆかんもわずらはしければ。六郷の川ばたの砂をほりて。埋め置きて。さて大師に參らんとて。行きたる跡に。是も好事人とおぼしきが。二人ばかりかの瓦を埋め置くを。餘所ながら窺ひ見居て。かの埋めたる人々のはるかに行き過ぎたる頃。かの二人の好事人。瓦を堀り出だし。舌打ちして。江戸へ持ちかへりたりと。是をも見たる人の語りたるなり。埋めたる人かへり來て。其處堀りて見て。なくなりしを見て。さこそくやしくはらた丶しくいかりの丶しりけめ。はて〴〵はいかゞなしつらん。それまでは見はてぬよし。きかまほしき事になん

　秀吉公の御目のひかり

秀吉公いまだ木下藤吉といふ時に。大澤主水と鎗合はせし給ひしに。主水眼くらみて。向ふ事能はず。うつぶしたる事。又。羽柴筑前守の時に。志豆が嶽にて。佐久間玄蕃允をにらみ給へば。人馬ともにまばゆくて。跡じさりしつる事など。人のしりたる事なり。懲毖錄に。秀吉容貌矮陋。面色皺黑。無㆓異表㆒。但。微覺㆓目光閃々射㆒レ人とあり

瓢　簞

瓢と簞とは別物にて。一物にあらず。一簞の食。一瓢の飲といふは。竹にて組みたる器に。飯を入れたるを。一簞の食といひ。ふくべに入れたる酒を。一瓢の飲といへるにて。瓢と簞とは似よりたるものにあらず。さるを瓢のみをへうたんといへるは。いみじき誤なり

　役行者が畜生道におつ

役行者伊豆國へ流刑の後。かの國にて死して。四十年を經て後に。道昭といふ僧が。唐に行きたるに。五百の群虎出で丶。僧道昭を禮拜す。中に一虎が云く。吾は日本國なりし役小角なり云々。日本靈異記にあり。後世にては。元亨釋書にものせたり。小角はもと葛城上郡茆原村の土民の子にて。狐つかひなり。かけまくもかしこき一言主大神を縛めたりなどいへるは。尊卑強弱をも辨へぬ。愚俗の妄談なり。これ

ちらの誤ならん

軍學の始

續日本紀廢帝の御代に。遣ニ授刀舍人春日部三關中衞舍人士師宿禰關成等六人於太宰府。就ニ大貳吉備朝臣眞備。令レ習ニ諸葛亮八陣。孫子九地及結營向背ニ云々。また。同紀光仁天皇御代に。去天平寶字八年眞備生。年數滿ニ七十。其年正月進ニ致事表於太宰府ニ訖。未レ奏之間。卽。有ニ官符。補ニ造東寺長官。因レ此入レ京。以レ病歸レ家。息ニ仕進之心。忽有ニ兵動。急召ニ入内。參謀ニ軍務。事畢挍レ功。因ニ此微勞。累登ニ貴職ニ云々。この公軍學の始なり。靈龜二年唐國にわたり。經史をよみうかべ。軍術を學び。諸藝を得て歸朝し給へり。官位は正二位右大臣に昇り。齡は八十三歳にて。寶龜六年十月薨じ給へり。物皆たらひたる公にてぞおはしける

飯豐皇女

武藏坊辨慶が一たび女に逢ひてより。以後は。同じ事にて。あく時あるべからずと思ひ定めて。再び逢ふ事を欲せざりしと。世の言種にいひ傳へぬれど。さる事。實にありやなしやしるべからず。書紀清寧天皇三年秋七月。飯豐皇女於ニ角刺宮ニ與レ夫初交。謂レ人曰。一知ニ女道。又。安可レ異。終不レ願レ交ニ於男ニ云々。しらぬ程こそあれ。しりての後にやみ給ひしは。世に稀なるさかしみこになんおはしける

國府臺

下總葛飾郡國府臺は。里見の末の代に。伊勢北條に責められしに。とみに落ちがたきを。利根川の淺瀬に鴻のおり立ちしを見て。不意にからめてよりうち入りて。城をぬきたるより。鴻臺といへるは。附會の說なり。和名抄に。下總國國府在ニ葛飾郡ニとあるをや。その上に國府はコフ。鴻はコウなれば。音聲たがへり

國分寺の瓦

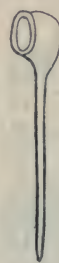
國分寺の事上篇に云ひしごとく。いづれの國も。その國府にありしなり。その跡の古き瓦得んとて。好事の者行きて尋ね出だす事やまず。まして武藏國府は大江戸より近ければいふも更なり。それにつきてをかしきは。近き頃。ある好事の人。國分寺跡の竹むらの中を掘りて。古瓦の缺け損ねたるを。三四人にて。五つ六つほり出だし。藁もてつゝみ。

是時王莽害レ上之萌。自レ此始。かく外戎にてはよろしからぬためしとせり

麥　秋

麥秋といふは。四五月の頃なり。秋にはあらねど。稻は秋にみのる故に。それになずらへて。麥のみのる頃を秋とはいへるなり。野客叢書。宋子京有下皇帝幸二南園一觀レ刈レ麥詩上曰。農扈方還レ夏。官田首告レ秋。注臣謹按レ物。熟謂二之秋一。取二秋斂之義一。故謂二四月一。爲二麥秋一。禮月令にも。麥秋至とあり。朗詠集にも。五月蟬聲送麥秋とあり。夫木集に。「おくるてふ蟬のはつ聲聞くよりも今はと麥の秋をしるかな。これらをもてみれば秋はあかりの約にて。あかりはあからむといふ義なる事うづなし

ひたえのひさご

更科日記に。我國に七三つくりすゑたる酒壺に。さしわたしたるひたえのひさごの南風ふけば北になびき。北風ふけば南になびき。西ふけば東になびき。東ふけば西になびくを見て。かくてあるよと。ひとりごちつぶやきけるを云々。このひさごは。俗言。檜杓にて。水を汲む器なり。瓢に木竹などの柄つくるを。これは。ひとつゞきになりたる瓢にて。俗にひしやくふくべと云ふものなり。瓢を器の形にして。柄をつけたるは。斯くの如くなるを。ひたえといふは。直柄(ひたえ)にて斯くのごとくの一種あり。是をひさくふくべとも。にがびしやくともいへり。我むかし種をまきて。植え生ほし實なりたる事あり。さて上に七三つくりすゑたる云云とある七三は。假名にてち、らとあるを見誤りて。寫しひがめしなるべし。こゝらはあまたといふ言なり。さるを。七三と見て。淸少納言のみつよつふたつといひしと同じ文格のよしにいへるは。いと幼し。かれは。有情の鳥が。おくれ先だち。つぎ〳〵に來るを見て。三來り。四來り。二來りせしよしなり。こゝなるは。非情の酒壺にて。つくり居たるのみなれば。三つ四つと歟。六つ七つと歟あらば。聞ゆべし。七三にてはさらにその意聞えがたし。またくち

にして。關羽は鼠なり。關羽が樊城を責めし時に。曹仁が放つ矢に。右の臂を射られて。鏃をぬきたる跡の療治するに。酒のみ碁打ちて遊べりしを。自慢とすれど。權五郎景政は。左の目を射られたるに。其矢みづからぬきつれど。鏃の、こりてぬけざるを。三浦爲宗にぬかせつるに。强力なる爲宗が手にぬけかねて。額に足をかけて拔かんとせしを。景政いかりて。爲宗が不禮を嚴しくとがめたる事。三歳の小兒もしる處なり。關羽は酒と碁とにて苦痛を紛らはしたり。是を碁にたとへていはゞ。景政は關羽よりも。二十目ばかりも强かるべし。髭を愛して。錦の袋に入れしも。宗祇法師が髭に香をとめし風流には及ぶべからず云々。關羽勇に侈りて。敵を鼠輩と詈れども。却てみづから鼠輩にして。孫權が穽落しにかゝり。首斬られたり云々。その容貌焔魔に似たれば。死して後に堂を造り。住居して。所々箔代の奉加にありくべし云々といへり

可用不可用

人はその筋々道々によりて。賢愚巧拙なき事あたはず。たとへば。工匠の器の如く。鉋は削り。鋸は引きゝり。鑿は穴をうがち。錐はつらぬく事をのみ性として。あだし事には用ひがたし。人もその性にたがはねば。拙き事はあらじ。楠正成卿の臣杉本左兵衞。板持速風など。いみじき大巧をとげたり。あだし事には用ある人にあらず。世に物の用にたゝぬうつけものといふは。用ふべき所に用ひず。あだし事に用ひんとする故にて。鋸に木を削れ。鉋に木を引きゝれといふが如し。つかはるゝ人のその任にあたらぬは。仕ふ人の眼のくらき故なり。棄瑕錄に。用則天下無二可レ棄之人物一。責レ短求レ備。則天下無二可レ用之人物一といひしは。實にさる事にぞありける

角生ひたる馬

新田義興の靈。角生ひたる馬にのりて。江戸遠江守を誅伐したるよし。太平記にあり。寛永の頃。江戸に駿馬ありて。耳の下に長二寸餘の角生ひたるを。阿部對馬守重次朝臣角一雙をとりて。日光山の御齋庫に進呈し給ひし事。林道春大人の文集にあり。太平記なるは。幽靈とはいひながら。なき事にてはあるべからず。前漢書五行志景房が易傳曰。臣易二上政一不レ須。厥妖馬生レ角。成帝綏和二年二月。馬生レ角。

り。只好色にして。美女を愛せるよし。かの兼末記し置けりとなん。我その書はいまだ見ず

柳　橋

兩國橋のこなた南北に。柳橋といへるが二つあり。その邊を今に矢の倉といへり。むかしは横山町二丁目中程より。大坂町。立花町。村松町をり出りて。橋際まで。御矢を納めし御倉ありしよし。元祿三年大繪圖にあり。今は名のみにて。御倉はなし。その御倉の表門。裏門の前なる橋を。矢のくら橋といひけんを。今は矢之城橋といひて。柳の字に書きかへて。橋のみは今にのこりてあり

西　瓜

西瓜。一名寒瓜といふ。西域より出でたる故に。西瓜といひ。冷なる故に。寒瓜といひ。水中に冷し食ふ故に。水瓜といふ。今は西字を水の音によめり。五雜爼に。大元世祖皇帝。征二西域一之後。此種入二于中華一。代醉四十云。五代史。契丹破二回紇一。因得二西瓜一。如二中國冬瓜一。而味甘。丹鉛餘錄に。據レ此謂二西瓜一。五代始入二中國一。故本草不レ載。水東日記に。西瓜自三大元太祖征二西域一始得云々と見えたり

譏　草

近き頃。或人譏草と號けて。和漢の古人をそしりたり。中に蜀の關羽をそしる條に。八十二斤の青龍刀を振り廻はし。勇を三軍に振ひ云々。この關羽如きの勇士は。日本に少からず。關羽は身のたけ九尺五寸なり。日本武尊は御年十六歲にて。御たけ一丈。力よく鼎をあげ給ふ。關羽とくらぶれば。尊は大關にて。關羽は前角力なり。八十二斤青龍刀をふりまはす。何の珍しき事かあらん。新田左中將の臣篠塚伊賀守は。八尺の鐵の棒を芦萱の如くふり廻し。萬鈞の碇を燈心のごとく引きさげ。廿五間の帆柱を竿竹のごとく。押し起す。これにくらぶれば。篠塚は虎

と思ふは。大なる誤なり。第一は。饑を凌ぎ。氣根を強くし。脣精をまし。力量をそへ。手足を健にし。いきほひ盛なるは米のよき故なり。皇朝人の長壽にて。武勇勝れたるも。異國人の短命にて。非力なるも米のよしあし。諸の食料なべての藥品などは。このかたはしにも及ばず。酒菓子すべての物。飯の上にいづることあたはず。何れも十日。廿日。一年。二年なしとて。一命にかゝはらず。米食は半日くはざれば。氣力おとろへ。一日くはざれば。大病人の如く。三日くはざれば。死人のごとくなり。いと尊き靈藥にてぞありける

金銀鐵

上五色金の條にいひしが如く。武士の甲冑。劒刀。鎗の類。農夫の鍬。鋤。鎌の類。匠丁の鋸。のみ。鉋。釿斧の類。すべて鐵をのみ用ひて。あだし金類を用ひざれば。金銀は飾にのみ用ひて。物の用にたたず。たゞ利慾のみ旨とする世となりしより。金銀の價を貴くせし故に。金銀尊き物とおもへれど。物の用にたつ事は。鐵の千分の一にも及ばず。されば。高貴の御方々は。通用金銀は手にふれ給はず。鐵の鏡劔は頭にさゝげて。敬ひ給へり

反齒

我幼き頃。京都より伊勢。尾。參。遠あたりの小兒らが言ぐさに。源九郎義經は。脊低く。色黑く。向齒反りて。猿眼と謠ひしなり。是を賴朝卿の舍弟の義經と思へるは。大なる誤なり。そは近江源氏の山本九郎義經が事なり。淸和源氏と。近江源氏と紛ひ。兩人同時にて。九郎義經なれば紛ひしなり。山本義經は。後に右兵衛尉に任官ありし故に。反齒の兵衛と異名せり。判官義經は兵衛にはあらず。檢非違使判官より。伊豫守を經て。左衛門少尉になりたるなり。その頃。又波多野冠者義經といふ者あり。三人同時同名なりしを。一條良經公攝關になりしゆゑに。三人の義經は。名を改めし中に判官義經は。義行と改めし事。諸書にみゆ。その以前に周防國人岩國三郎兼末といふ者。攝政殿に仕へし頃。判官義經參候したりし時に。兼末は配膳の役にて。よく見しりたり。また一向の小冠者にて。木曾などゝはさまかはりて。最優に京なれて。年頃は二十ばかりにて。色白く。面長にして。鬚もなく。折々は上の方を見あぐる癖あ

和銅元年武藏國より銅出でたり。依りて始めて錢を鑄て。和銅開珎と號し。年號を和銅と云ふ。聖武天皇の天平廿一年。陸奥國より始めて黄金を奉る。續きて同年駿河國にも。金を獲て奉る。それより國々の土中に充滿して。中々に新羅國には絕えてなくなりつゝ。たゞ。いやしげなる滓のみぞのこりける。是皆神のみしわざなれば。人力。人智の及ぶべきかぎりにあらず。あなかしこ。あなくすし

傀儡

傀儡は二樣ありて。いと紛らはし。事物紀原。列子通典。梁鍠傀儡詩。これらは木人形なり。西宮より出づる。箱出狂坊(はこでくれう)といふ。又。一樣は遊女をいへり。下學集。本朝俗呼二遊女一曰二傀儡一。定家卿。季經朝臣などの歌は。遊女をよみ給へり。いと紛らはし。字書には傀は猶怪也。又偉也。大也。美也。盛也とあり。儡は敗也。又。心勞苦貌。又。不二安定一などあれば。遊女にしたるなるべし

舟の名を何丸いふ事

船の名を何丸となづくる事。或人の說に。まろはもと卑下の詞にて。みづからの事を。まろといへるは。我といふ義にて。後世俗にいふ。拙者私などいへると同意なり。さる故に。みづからの名を何麿。某丸と稱せしも。卑下の稱なるを。後には親しみていふ詞となりて。草刈鎌を鎌丸といひし事。萬葉集の歌にあり。小虫を蚱蜢丸(いなごまろ)。蚣蠵丸(いねつきまろ)などいひし事。和名抄にあり。されば。身の守りとして。たのみ思ふ劔刀の類に。小烏丸。鬼丸。友切丸などの名あり。後後は親しみ詞が。美稱となりて。小兒の名に何丸と號けたるが。又。後には高貴の嫡。また。寺院の兒童にのみありて。凡下の少童には。憚るべき事となりにたり。大船を何丸と號けしも。萬里の波濤をわたる故に。命にかけし名なりしを。後又美稱となりて。ちひさき舟には號けがたき事となりにたり。又。城郭に本丸。二之丸。出丸などいへるも。美稱にて。凡下の家の構へなどにはいはぬ事なり。されば。丸は卑下より親愛に移り。親愛より美稱にうつりたるなり。外に故ある事にはあらず

無病長壽の靈藥

食料の最第一にて。不死の靈藥の長たる物は米なり。人々一日に三度食ふ故に。たゞ飢渇をしのぐ爲のみ

無住法師の歌

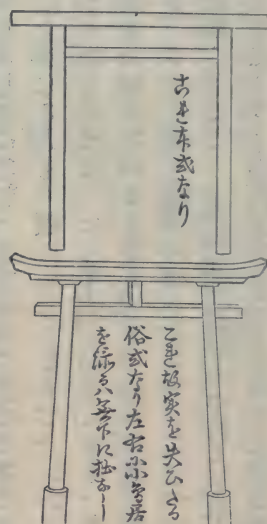
さて又。かの無住法師の歌に「我身猶わがおもふにもかなはぬに人を心にまかすべしやは。」よしさらばものを心にまかせじよ心をものにうちまかせつゝとよめり。世を捨てたる心にはかくあらまほしき事にぞありける

酒のむ人

酒のむ人は。小兒の甘きものくふ如く。歡ばしげなる顔にてのむ人はなし。皆。顔をしかめ。眉に皺よせて。一口のみては。下に置き。又のみては下におきくるしげにのむ。さてのみて後に。常は心ざまやはらかなる人も。俄にあしくなりて。いかりはらだつもあり。又は。いとすくよかなる人も。忽に重き病者の如くなれるもあり。又。死人に等く物も覺えず。さめて後も醉中の事をしらず。生をへだてたるが如くなるあり。吉田兼好法師のつれぐ草に。書きたるは。よくも思ひえたるなり。俗に氣違ひ水といへるもゆゑなきにあらず。から國にても。狂藥とも。禍泉とも。藥水ともいへり。范魯公紀に云。戒レ爾勿レ嗜レ酒。狂藥非二佳味一。この狂藥とあるが。則。氣違水にて。のめば直にあらだつ義なり。佳味にあらずといへるが。則。顔をしかめて。物うげにのむ事なり。兼好法師は。この意をよく辨へしなるべし

金の五色

和名抄。金（古加禰）黄金也。（之路加禰）白金也。銅（阿加加禰）赤金也鐵（久路加禰）黑金也。鉛（奈萬利）青金也とあり。皇朝には。神代上古より鐵のみありて。あだし金はなかりしなり。さる故に鏡。（今は交金なれどいにしへは鐵鏡なり）劍。刀。甲。冑其外農。工。商の器にても。鐵を以て旨とし。あだし金は裝とす。金銀はもとなかりしを。素盞嗚の尊天上より下り給ふ時に。新羅國を見給ひて。かの國にはこがね白かねあり。この皇國にとりよせんには。浮寶なくはあるべからずとのたまひて。舟に造るべき木を始め。あまた木種を施し給ひし事。神代紀に委しくあり。其後仲哀天皇崩御の後神功皇后御みづから神主と成り給ひ。神祭畢りて。新羅へわたり給ひ。百濟。高麗と共に。三漢を從へ。三王を皇朝の馬飼奴僕と定め給ひ。金銀を始め。あまたの珍寶もてかへり給ひしより。金銀の氣土中に滿ちて。天武天皇の三年に。對馬の國にて。始めて銀出でたり。また。元明天皇

は。たゞ。丸木を二本立たゝ。上に横丸木をわたし。中に横木をそへたるなり。社の前にも。横にも。しりへにも。處によりて異なり。後世にいたりては。門の如く。正面にのみありて。門と等し並に思ひて。額を掛けたり。是故實を失ひたる俗式なり。左右に小鳥居を添ふるは。むげに拙なし

九　穀

皇極天皇紀に。元年八月。天皇幸ニ南淵河上一。跪拜ニ四方一。仰レ天而祈。卽雷大雨。遂雨五日。溥潤ニ天下一。或本云。五日連雨九穀登熟於是天下百姓倶稱ニ萬歲一。曰ニ至德天皇一云云。この細注の九穀は。谷川士清が紀の通證に。黍。稷。秫。稻。麻。大麥。小麥。大豆。小豆これを九穀といふは誤れり。彥麿云。九穀の九は。五の誤字なり。麥は大麥。小麥。蕎麥。穬麥なべて麥の一種なり。米は粟は丹黍。秬黍。秫粱米なべて粟の一穀なり。米は秔稉なべて米の一穀なり。豆は大豆。烏豆。燕烏豆大角小豆なべて一穀なり。稗は胡麻。荏香葉。葟子なべて一穀なり。されば。九字は五字の誤なる事うつなし

小兒眞心の歌

惠心僧都は大和國人。卜部正親の男。源信といひしなり。台嶺慈慧の弟子なり。この僧都は。佛道修行の外は。あだし事を深く憎む性なれば。あまたの兒の中に。ひとり歌よむがありしより。朋友の兒また若き僧など歌よみけるを。僧都いかりて。かの兒をうとみて。明日は里へかへさんといひしを其夜かの兒は椽に泣きふして。夜の更け行くまゝに。つくづくと月を見て。「手に結ぶ水にやどれる月かげのあるかなきかの世にも住むかなと。忍びやかにいひしを僧都聞きつけて感にたへず。肝に入りて。さては歌は佛意をはげまし。道心をすゝむる道なりとて。かの兒童を長く寺にとゞめて。みづからも歌よみならはれしよし。梶原平三景時が孫の。無住法師がかきし砂石集にあり

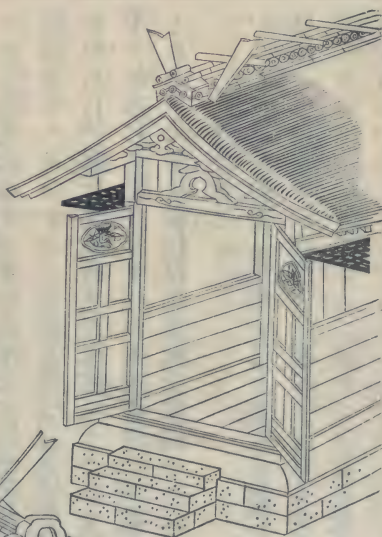
藁を。風に損はれぬ爲に。短き木をよこに結び。押へとしたるが。おのづからなるを。後にたる木のうへ

上古の形

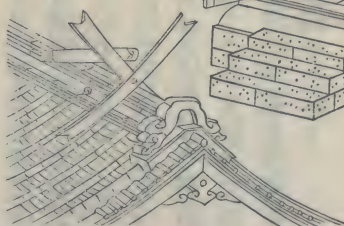
本式の根本なり

これは上古いまだ鋸。鑿。釿。鉋などのなき頃の造りさまなれば。當時は無用なれど。故實のもとのもとたる事をこゝにあらはすのみ

に。出でたると。棟藁おさへの横木とを。別に作り附けて千木。鰹木とかたちをつくりたるなり

これ故實に隨ひたる造營なり

斯の如き棟の上に千木を馬の鞍おきたるさまなるは故實をわきまへぬ拙き作事なり

鳥居

右のちなみにいふ。鳥居は鷄栖ともいひて。鷄をやどすべき木なり。いにしへは。神前へ鷄をも備へし幣帛の一種なり。既に神代にも常夜の長鳴鷄の事。記紀にあり。延喜の式にも。白き鷄を備へ奉ることあり。こは食料にはあらず。曉告げん爲なり。その鳥のやどるべき木を。鳥居といへるなり。そのかたち

出生。幼名は與四郎といふ。十九歳にて力士となり。秀の山といひ。後に伊達が關と改め。廿七歳にて。谷風梶之助と改む。寛政七年正月九日死。行年四十六歳。仙臺東漸寺に葬る。法名釋谷響了風といふ。身長六尺三寸餘。圍七尺餘。四十五貫目あり。我か、る大男を始めて見たり。終に横綱の免許あり。其文に曰く

免許

一横綱之事

右は谷風梶之助依ニ相撲之位一。令ニ授與一畢以來片屋入之節迄相用可レ申候依如件

本朝相撲之司御行司

十九代孫

寛政元酉十一年十九日　吉田追風　判

その頃。又小野川喜三郎といふ大力士あり。谷風に亞きたる相撲人なり。一たび谷風に勝ちたる事ありて。免許あり。其文曰

證條

當時久留米公御家來

攝州大坂住人

小野川喜三郎

右者此度相撲力士故實門弟相加候依レ之證條如件

寛政二戌正月

吉田追風　判

その後。小野川も横綱免許ありしなり

大字

一二三四五六七八九十とかくべきを。壹貳參肆伍陸漆捌玖拾とかくを大字といふ。古事記には。この字を用ひられたり。紛る、事なからしめしなるべし。一は二三五六七十の字に作り。二は三五に作りかへ。三は五につくりかへ。十は廿卅につくりかへて。利慾のために。謀計する者も。大字はうごかす事あたはず。外戎にも明孝宗が代の那谷馬符に。弘治拾肆年とあり。此年は後柏原院文龜三年にあたれり

千木鰹木

いにしへは今の鉋。鑿。鋸。などなかりし故に。神社の柱は。根は土中に立て、。横にも竪にも筋違にも。丸木を繩もて結び。藁もて屋をふきたる故に。兩端のたる木の上にて。やり違へ。繩もて結び。棟包みの

かしより不可を濁り。疑を清みてよみ來れる故に。澁柿と聞えぬれば「澁柿をよく味はへてのみこめばあまぼしよりもうまみありけりとかゝれたり。さるを。文政八年乙酉淺草邊の大道商人の前に。天明二年我十五歳の幼筆の書ありしを。とみにかひとりたり。四十餘年へて再び手にかへりたるもめづらし。于時又奥に。「味ひてよくのみこめばうまきかな大人のよまれしふかきこゝろも。この文政八乙酉は。我も五十八歳なりしこそあやしかりしか

三十六言の歌

師宣長翁の常にもいはれ。物にも記されたる三十一言の歌。一言あまりても耳だち聞きぐるしきを。阿以宇袁の中にて。一言にても。交りたるは。聞きぐるしからずとなり。そは。喉音の輕きなれば。いづれの音にも。韻は。必。阿伊宇衣袁の五言に限りたれど。そが中に衣は。いさゝかおもき故に。歌には六八言にはよみがたし。西行法師の風になびくふじの烟の空にきえて云々。と讀みし初句の耳だつ事は更なり。三句も衣は耳だてり。二條院讃岐の「わたづうみの沖つ汐あひにかづくあまのいきもあへず物をこそおもへ定家卿の「忘れぬらんうらめしとおもひおもふとても待つべきにあらずいはんともいはじ。これらは句毎にあまりて。三十六言の歌なれど。耳だゝず。聞きぐるしからず。定りたる格は犯されぬものなり。但。定家卿の初句はわろし

今神の湯

出羽國最上郡新庄の戸澤侯の領内に。温泉五箇所ある中に。今神の湯には熊野神社ありて。入湯の男女晝夜。狹き所におしこり居る故に。密通する者あり。人の金錢を盜みかくしおく者あり。さる時はいづくより來るらん。蛇出で、。密通の男女へまとひつき。盜み隱したる上に。蟠り居て。忽に露顯する故に。人々あつまりて。さるをこの者は。早くふもとへおひやらへりとなん。をしへ子なる諏訪光忠が。悉しくしりしかたれり

大男

むかし釋迦獄雲右衞門といひし相撲は。身長七尺八寸ありしよし。我幼き頃にて。つひに見ずやみたり。その後親しく見しは。谷風梶之助源守胤といふ。陸奧宮城郡霞月村農民彌右衞門子。寛延三年八月八日

月に星九曜

伊東家の月に星九曜。⁂俗に十曜といふ。斯くの如き文は。もと千葉の文にて。中は月にて。めぐりに九星あり。今俗に十曜と云ふ。伊東祐親が懇望にて。頼朝卿口入なれば。常胤斟酌に及ばずゆづりたる古文。人のしる所なり。さるを。伊東家は。その時讓り受けたるまゝ、にかはる事なきを。中々に本たる千葉家にては誤りて。☾と⁂とふたつになしたるは。いつの頃よりの誤ならん。月に星九曜のひとつを。二にしたるなり

熱田社

尾張愛智郡熱田神社は。三種神寶の中の草薙劍にて。古事記。神代記。古語拾遺幷當社緣起に委しくありて。人皆しれり。さるを。古語拾遺の頃は。いまだ小社にて。重き祭祀もなかりし故に。況復草薙劍者。尤是天璽自㆓日本武尊凱旋之年㆒。留㆓在尾張國熱田社㆒。外賊偸逃。不㆑能㆑出㆑境。神物靈驗以㆑此可㆑觀。然則奉幣之日可㆓同致㆑敬。而久代闕如。不㆑修㆓其祀㆒。所㆑遺一也云々。かばかりの尊き神ながら祭祀嚴重ならざりし故に。かゝる述懷あり。我友平田篤胤云く。廣成の頃は。此社かゝりしを。式の頃は。名神大にて。次々に位も神戸も增りて。今はやむごとなき大社となれるにて。廣成の志通りたるなりといへり。いかにも今は天下にたぐひすくなき大社なり。拾遺に外賊とあるは。新羅僧道行也。不㆑能㆑出㆑境とは。寶劍を盜みて。新羅の國の王位の守にせんとて。ひそかに盜みて持ち出でしを。二度までは寶劍とびかへり給ひ。三度に及びては。船ごめにかへし給ひて。道行は死刑に行はれたり。いとも恐く貴き事いふも更なり。外戎にて得まくほりするも諾なる事なり

詞不可疑

鎌倉の頃。詞不可疑と云ふ書一冊あり。明惠上人の傳と。文覺上人の傳と。頼朝卿より佐々木へ給ふ書と。北條泰時の消息と。すべて五箇條一卷あり。安永三年甲午二月。師貞丈翁五十八歳のとき。寫されて天明二年壬寅六月。我十五歳の時にかりて寫したりしを。いづくにかしつらん。ふつに見えずなりにたり。其書の奥に安永三年二月十日夜燈の前にて寫し畢りぬ。鎌倉代の古書疑なし。可信者なり。此題號詞不可疑をすみてよみ。疑を濁りてよむべきを。む

六年也云々。外戎にも列子に。僬僥國人長一尺五寸

長人國は智加といふ國なり南亞墨利加の內にあり。隣國巴太溫も長人なり。身丈一丈二尺なり。日本より巽にあたる

云々。これ世に所謂。脊高島に小人島なり

小人國は波智亞といふ國なり。歐羅巴の東北の隅。北の冰海にいたる。大寒國なり。半年は晝のみつづき。半年は夜のみ續く。身丈一尺二三寸より二尺程あり

行燈　挑燈

これ又或人の云く。行燈は坐席にあれば字義かなはず。挑灯は他行の爲なれば。是又字義かなはず。互に入れかへてよしといへり。えうなき空論なり。挑灯は後世のものなれば。論に及ばずといへども。挑は字書に。往來貌ともあれば。さてありなん。行燈は必。出行の時の物にて。坐席の物にはあらず。座席は燈臺なり。出行は行燈と松明となり。古書古畫にあまたあり。今も茶人の路次行燈は古實の遺風なり

しへ子なる原田政盈主。横山直行山本美敬などは。駒込千駄木御鷹匠なれば。委しく聞き得たり。鷹の雄は。たゞ胤をとるのみにて。狩の用にたつことすくなし。狩に用ふる逸物は。必。雌に限れりとなんいひたりける

繪そらごと

世に繪そらごとゝいへれど。繪に眞あり。僞あり。一様ならず。後漢書に張衡傳云。畫工惡レ圖ニ犬馬一。而好レ作ニ鬼誠一。誠以下實事難形而虚僞不上窮也。源氏帚木巻。雨夜の品定めの處に云々。人の見及ばぬ蓬萊の山。荒海のいかれる魚の姿。唐國のはげしき獸のかたち。めに見えぬ鬼の顔などの。おどろおどろしくつくりたる物は。心にまかせて。一きは人の目をおどろかして。實には似ざらめど。さてありぬべし。世の常のたゞずまひ。水のながれ。めにちかき家居ありさま。げにと見えなつかしくやはらびたるかたを。しづかにかきまぜて。すくよからぬ山のけしき木深く世ばなれてたゝみなし。けぢかき眞垣の内をば。其心しらびおきてなどをなん。上手はいといきほひことに。わるものは及ばぬ處おほかめる云々とあり。げにさる事なり。むかしある畫師二人物語のついでに。一人の云く。鳳凰は畫き安く。孔雀は畫きがたし。鳳凰は世になき鳥なれば。いかにも畫くべし。孔雀は世にあれば。羽翼の彩色いとむづかしといへり。今一人の云く。我は孔雀は畫きやすく。鳳凰は畫きがたし。孔雀は世にあれば。幾度も見てかゝんに畫き得ざる事なし。鳳凰は世になければ。古人の筆ありともたのみがたく。心にすゝみてかゝんとは。思ひかけがたしといひけりとなん

大人小人の國

大人は長人ともいひて。チイカといふ國なり。南アメリカの内にあり。ハダウンといふもあり。長大なり。凡此方の一丈二尺といへり。日本の巽方にあたれり。四季あり。風俗勇强にて。弓矢を好むとなり。小人はポチャといふ國なり。歐羅巴の隅邊。北の方冰海に至れる地なり。半年晝のみ續き。半年夜のみ續くとなり。人の長一尺二三寸といへど。實は二尺餘有りといへり。唐土にて。短人といひしは是なりとかや。天智天皇十年の紀に。常陸國貢ニ中臣部若子一。長尺六寸。其生年丙辰至ニ此年一也。十

て。その驛を立ちのがれしも。この三脈なり。道三大人の門弟に。三脈を傳へられしが。一子相傳にて他にゆづらざりしを。其筋いたくおとろへて。輕き商人となりしが。我門弟にてありけるを。いたく貧しければ。謝物のなきを恥づるさまなるに。我方よりは。さる事にかゝはらず。まめやかに怠りなく學びなば。それを謝物として。精學怠るべからずといひしに。猶あかずやありけん。家に秘め傳へたる三脈の法あり。是を謝物の代りにとて。我に悉くゆるし。をしへたり。其者木曾の山中にて。杣人の大木を切りかけて。置きしに。大風にて。その木倒れて。おしにうたるべきを。未然に知りてのがれしとぞ。其時のさまゝで。我にをしへたり。そは眉陵人迎扶陽也。火難。盗難。劔難。落馬。破船。病難。死亡など未然にしるにたれり。我この法を受けしより。六十餘年の間たび／＼其驗見たり

勅勘勅許

一條天皇御寵の猫に。従五位下を授け命婦のおもとと名を給ひけるを。翁丸といふ犬が追ひし故に。犬を打ち懲らして。備前國犬島へ流しつかはすべしと勅定ありしに。源忠隆。實房二人して。打ちこらして。御門の外に捨てたりしを。その犬後にかへり來つれども。勅勘を恐れて物もくはずひれふしてのみ居たるをきこしめして。勅許ありしかば。犬は悦びたるさまにて。もとのごとくなれむつびし事。枕草紙に委しくあり。畜類といへども勅定をかしこみおそるゝは。いとあはれなる事なり。小右記に。長保元年九月十九日。内裡御猫産レ子。女院左大臣右大臣有二産養事一有二衝重椀飯納レ筥之衣等一。猫乳母馬命婦時人咲レ之。奇怪事也。犬狩の事禁秘抄に。藏人承レ仰下知。所衆。瀧口參。瀧口帶二弓箭一。儲二所々一射レ犬。所衆入二椽下一狩出。而此役大見苦。仍近代好二遲參一。定蒙二召籠一。仍衞士並二取夫一入二椽下一云々

鳥のせうやうもの

源氏夕霧の卷に。鳥のせうやうの物のやうなるは。いかに人わらふらん。さるかたくなしき物にまもられ給ふは。御ためにもたけからずや云々とある。鳥のせうやう物を說き得たる先達なし。これは實だちたる夕霧に雲井の雁一人守られ居ては。雲井の雁の爲にもよからぬよしを。鷹にたとへたるなり。我を

外三橋は假橋なれば。請負人の願ひにて。橋の雙方に番小屋ありて。武士の外は橋錢二文づゝとりしを。文化四年八月深川八幡祭禮の日に。永代橋落ちて。千餘人溺死したるにより。田其時より皆から本普請となりて。請負人なければ。橋錢もとらず。其橋の落ちたる日は。我も舟にて見しに。あまたの人の水中に落ち入るをみれば。胸とゞろき。目くるめき。腰膝ふるひて。冷汗流れたり。さるけしきのなき。始の程は。橋をわたらんとしつれど。あまりにこみあひぬれば。舟にてわたりぬ。後にきけば。黒川清足は溺死したりとなん。いと便なき事なり。さいふ我もほと〳〵危かりき

こほろぎ　きり〴〵す

なま古學者は。こほろぎをきり〴〵すとこゝろえ。むげの俗人は。はたおりむしをきり〴〵すといへり。外戎の文字も。竈馬。蟋蟀。蜻蛚。蛬蛩。蝗斯鷄。莎鷄などくさ〴〵ありて定かならず。其聲コロコロと聞ゆるがこほろぎにて。ツヽリサセと聞ゆるがきり〴〵すなり。古今集に「秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきり〴〵す鳴く。キリ〳〵チャウと聞ゆるがはたおりなり。六帖に「かりがねの羽風を寒みはた織女くだまく聲のきり〳〵と鳴く。はたおりは暑き頃のみにて。こほろぎはすこしのこりて。きり〴〵すは久しく冬まであり

鐵炮鍛冶の國友

鐵炮鍛冶は國友を氏とせり。もと鐵炮は鳥銃とも。鐵醬銃とも。鐵銃ともいひしなり。天文八年八月。南蠻國の牟羅叔舍といふ者。大隅國赤尾木の湊に來り。多禰島時堯に炮術を傳へしとなり。又。弘治元年。南蠻人長子口琉球により。多禰島に至り。後京都に入り。將軍足利義輝公。佐々木義實に命じて。近江國友村に置れしよし軍記にあり。其中に江源武鑑にもあれど。いみじき僞書なり。作者は近江國坂本雄琴村の農民澤田嘉右衞門といふ者の子なる。喜太郎が僞作なれば。證には立たざれど。鐵炮鍛冶は今も國友を名のれり

三脈の法

今大路道三大人始めて思ひ得られし法なれば。釋書になく。師傳もなければ。醫師は絶えてしらざる事なり。明應の頃。遠江荒井の今切の災を未然にしり

失あり。第一には。陪臣の身として。官位ある高貴を殺害したり。第二は御府内近く劔戟を用ひたり。第三には四十餘人徒黨したり。此三は失なりといへるを。ある軍談講師聞きて答へて云く。官位高き御方にても。主君の敵とあらばゆるすべからず。よしや敵が乞食非人なればとて。刀の穢なりとて。ゆるし置くべきにあらぬも同じ事なり。又。御府内近く半弓枕鎗の類を用ひしは。武士の器なれば相應すべし。農人の鍬鎌をかり。工匠の鋸釿などかりて持ち出でなば。不相應なるべし。又。赤穗浪人數百人會合の度々に入べりして。煎じ詰たる處のわづかに四十餘人は人に勝れて。一人にて敵討すべき英雄なれば。是徒黨と云ふにはあらず。數百人の中にて。わづかにのこりたる捨身の眞忠人なり。さるを失とのたまふは心得ずといひければ。かの學者口をとぢていふ事なかりき

小石を妊娠のまじなひとす

神功皇后紀に。于時也適當ニ皇后之開胎一。皇后則取レ石挿レ腰而。祈曰。事竟日産ニ於茲土一。其石今在ニ于伊都縣道邊一云々。萬葉集の歌に。「掛卷も綾に畏し足媛神の尊韓國を平たひらげて御心を鎭め給ふと伊取志て齋ひ給ひし眞玉子二の石を世の人に示し給ひて萬代にいひつぐがねと海底沖つ深江の海上の子負の原に御手自置し給ひて。神隨神さびます奇魂今の現に貴きろかも「天地の友に久しくいひつげどこの奇魂しるしけらしも。この石筑前國怡土郡深江村子負原海岸岡上に今もあり。萬葉集の傳には。一は長一尺二寸六分圍一尺八寸六分。重十八斤五兩。一は長一尺一寸。圍一尺八寸。重十六斤十兩。並皆楕圓。狀如ニ鷄子一云々。筑前風土記には一は長一尺二寸。太一尺。重卅一斤。一は長一尺一寸。太一尺。重卅九斤。さて年ふるまゝに。つぎ〳〵に大きくなりて。今はわたり三尺にもあまれりといへり。はじめ御帶に挾み給ひしときは。指頭ばかりの小石ならんを。年ふるまゝに巖となりて。苔のむすにいたりぬるこそ。くすしく妙なりけれ

四大橋

江戸の四大橋は。もと三大橋といひて。兩國橋。大橋。永代橋の三なりしを。安永三年に淺草の大川橋出來しより。四大橋となれり。兩國橋のみ本普請にて。

野路の通ひなりがたく。行來の人こなたかなたにげありくとなり。皆おしはかりなり。松平冠山侯縫殿頭定常朝臣の武藏名所考には。右の第二説を取り給ひ。水野村は入間郡山田莊川越領にして。堀金村の隣なり。源は宮寺村より出で、一二里ばかり流れ。川の末堀り切りて。水末より五六間。鍵の手にをれたる邊迄は。潺湲たる流なれど。堀り切りの所にいたれば。水とまりて行くへをしらず。此説に隨ひ給へり。多摩郡玉川の邊。土地墳起せる處にては。水地中に伏し。數里にして涌き出づるもの。豐島郡石神井村三寶寺池。多摩郡井草村善福寺池。牟禮村井頭池など。多摩川の伏流ならす。美濃國醒井の水も。養老の瀧の伏水なり。彦麿若かりし時に。箱根山を數度越えしに。峠よりこなたの往來より。溪を隔で、。右の方の高き山の峯より。下に瀧水涌き出で、。見渡す所二間計も勢ひ猛く。又。小岩のもとにて流れ絶えて行くへなし。所の者は忍びの瀧とぞいふなる。こは峠の湖水の伏流。こゝにて涌き出でたるならん。外戎齊州趵突泉もこのたぐひなるべし。源俊頼朝臣家集に「あづま路にありといふなるにげ水のにげかくれても世を過すかな

　葵を簾に掛く

四月かもの祭より始まりて。簾幷に衣領にも。頭髮にも。門戸にも。掛くるなり。諸かつらといふ。二通りあり。ひとつは葵を鬘のごとくくみたるなり。一つは葵と桂と二種なり。葵は加茂にあり。桂枝は松尾の社木なり

　鷺草

鷺草といへるに水陸二種あり。時珍云。北戸錄云。嶺表有二鶴子草一蔓花也。當レ夏開形如二飛鶴一。翅羽嘴距皆全。和漢三才圖會に。春生レ苗。葉如二麥嫩苗一高尺許。六月抽レ莖開レ花正白色。形如二鷺鳥一。故名。連鷺草。鷺草。一類異種高五六寸。葉略大似二萬年青嫩葉一。花白色似二鷺十有餘群飛一云々。此連鷺草といへるが。陸草の立ちたるにて。鶴子草といへるが陸地を這へる蔓草なるべし。水中に生ふるが鷺草なるべし

　義士の難陳

或學者の云く。大石內藏助を始め。四十餘人の面々主君の敵を討ちし事。眞忠比類なき事ながら。三の

俗　畫

むかしは西川祐信。菱川師信ともに。一家を起したり。其後は鳥居清長。勝川春章これら我若かりし頃。世に鳴りたり。又其後は歌麿。豐國ともに用ひられたり。それより國の字を名のる者あまたになりて。いと多くなりたり。これらの俗畫をうき世繪師といへるは。いかなる故ならん。時世繪師とこそいふべけれ。何も憂事の故もなくては。うき世とはいふべからず。かの小兒もしりたる百人一首の中に。「心にもあらでうき世にながらへば云云とよみ給ひしは。御病身故に御位をゆづり給ひて。仙院に入り給ひて後。思ひの外うく思召し世にながらへ給はゞ。内裏の月を戀ひしく思召さんとの御歌なり。又。「おふけなくうき世の民におほふ哉云々とよまれしは。濁亂の娑婆世界の民に。道徳もなき法師の袖おほはん事似げなしとなり。これもうき世といふ事にて。憂の義なり。たゞ世の事をうき世といふは。外戎の浮世よりうつりしならん。そはまた異なり

那波道圓

那波道圓は。和名類聚抄を校合して印刻したる功ありし人なり。元和の頃高貴の御前に候じたる時。よき御刀得給ひて。御みづからためし給はんとて。罪人を引き出ださしめ。一刀に斬らせ給ひしに。水もたまらず快くきれしかば。歡ばせ給ひて。かゝる銘刀も劒法の修練も。漢土には有るべからずとのたまひければ。道圓答へて曰く。御劒は干將莫耶にまさり。御手練は桀紂におとり給はずと申し上げしかば。御いらへもなくつと入り給ひしを。夜になりて。道圓をめして。今日の諫言感賞少からず。吾誤り入りたりとて。物あまた給ひけるとなり。尊き御心にておはしけり

にげ水

むさし野のにげ水は。諸説まち／＼にて一定しがたし。一説には。遠く望めば水流る、如く見えて。行きみれば。又。異方に流る、如くみゆとなり。又一説には。水野村の郷染忠助といふ者のかまへの内の小川。藪の中に流れ入りて。行末なしといへり。又。一説には宮寺村に年とらず川といふあり。畑中より涌き出で、川となり。十二月晦日にのみ水絶ゆる故に年とらず。にげ水といへり。又。一説には霖雨の折。

て景久が負けし事は。三歳の小兒もしる處なり。景久蛙掛せしやそはとまれかくまれ。後世四十八手としたる中に蛙掛あり。相撲に勝つべき爲の手なるべし。まくべき爲の手をかねて備へ置くべきかは。蛙掛といふ名目は。後にて。むかしの川津三郎に附會したるなり。上古より有りし手にはあらず。相撲の紀原にある圖と。四十八手の傳書の圖とこゝにあらはせり

胡蘿蔔

木挽町の邊なる町屋の裏に。賤き商人老母一人をいたはりて住みけるに。主はいまだ年若けれど。廉直律義にして。老母へ孝をつくし。兩隣近邊へも不實の行跡なく。近きほとりにてほむるばかりなるを。ふと病ひ附きて。つぎ〳〵に重りゆけど。貧しければ。くすしもまねかず。賣藥ものませず。せん方なきを。日數も經る間にいたくよわりて。すでにほと〳〵うせなんとするさまなれば。近きほとりにはよき醫の大家もあれば。老母なく〳〵そのくすしの玄關にて。憐愍を乞ひし故に。行きてみしに。とてもかくてもたすかるべきさまならねば。其よし老母にいひきかせ。もしも人參をたてつけてのませなば。萬にひとつはたすかる事もあらんを。それとてもうけ合ひがたければ。早なきものと思ひ明らめよといひて。くすしはかへりつる跡に。老母は泣き伏して。しばしありしが。ふと起き上り。何思ひけん表の方に走り出で。しばしありて。青物屋にて乞ひ願ひて。五本結なる胡蘿蔔一把かり來り。こまかに刻みて。釜にて煮て。その湯を茶碗にくみ取りたてつけて病人にのませければ。病人は今くすし來て。容體見られ。藥給ひたるならんと思ひ。歡びて信じてたてつけのみければ。日あらずしてよろしくなり。つひにもとのすくよかなる身となりて。商ひに出でありき。始にもまさりて老母をいたはりかしづけりとなん。火の災の後いづくへ行きけん。近きほとりの人。まのあたり見聞きしたるよし聞きしを。其人もいづくへか家かへしつらんしれずなりにけり。愚蒙の賤嫗が調合の胡蘿蔔は。名醫の配劑の朝鮮大人參よりも遙にまさりて。能驗ありしは。母子の貞意をあはれみ給ふ神慮のなす處にて。人力人智の及ぶ處にあらず

年目毎に取り行へり。あしからずよきならはしとなれり

實名を音にて唱ふ

菅原是善卿をゼゼン。藤原時平公をシヘイなどいへるは。後世あがまへていへるなり。俊成卿をシユンゼイ。家隆卿をカリウ。定家卿をテイカなどいへるは。其時の美稱にて。あがまへいへるなり。家たか卿の家にて。或人元服の時に。隆季朝臣加冠し給ふに。名をば何と附くべきなど沙汰し給ふに。渥美三郎爲俊と云ふ。田舍侍がかたはらより出で、。此殿にては皆たかと名のらせ給へば。いへたかとつけ參らせらるべしといひければ。人々わらひの、しる事限りなし。爲俊が父圖書允爲弘聞きて。いかに汝ふしぎを申すぞ。殿の御名をばしらぬかといへば。いかでか知らぬ事あるべき。御名はカリウとこそいへと陳じたるを。人々わらひければ。殿も入興せられしよし。古今著聞集にあり。いにしへはなき事なり。鎌足公の御子の文人(ふびと)公は。史とも不比等ともかき。其御子の馬養公は宇合ともかき。臣滿朝臣は意美麻呂とも書きて。音には唱へがたし

蛙掛

角力の術に河津掛といふを。相撲紀原に云く。この手は上古よりありて。蛙掛といひしを。俣野河津相撲のときに。河津は不雙の大力にて。俣野を片手にて指し揚げ、る時に。俣野が河津にうけし故に。混じて河津が掛けし由に誤り傳へたるなり云々。とあるは誤なり。安元二年奧野の狩のかへるさ。柏峠にて酒宴の時に。若殿原相撲となりたる時に。祐安勝ち

負くべきが勝ちとなる之

勝つべきが負けとなる之

此圖ハ蛙掛の手の傳書にあり

かくてハ蛙がけが負となるふて此図の蛙掛ハ推量あり

幸矢拔

萬葉集二十に。「天地の神を祈りてさつ矢ぬき筑紫の島をさしてゆく我はとあるは。常陸國部領防人使息長國島の奉りたる歌の中にて。火長の大田部荒耳が歌なり。この三句を。縣居翁は矢を射貫くなりといはれたり。師鈴屋翁は矢を箙に差し貫くなりといはれたり。加藤千蔭翁は。本居翁の説に從はれたり。皆誤なり。さては。上の二句益なし。是は天神地祇を祈るに。背矢の上刺を拔き出てゞ。神前に奉り。旅中安全。任中無難にして歸國恙なからん事を祈るための幣物なり。軍物語に。箙より上差の鏑矢拔き取りて。神に奉り。勝利をいのりし事あまたあり

水草

氷草の中に似よりて紛はしき物あり。莕菜と莕蘋と茆となり。莕菜は。莖釵股の如く。上青く下白し。葉は紫赤にて圓く寸餘。花は黄なり。莕蘋は葉の下に一點あり。水沫の如し。一名茉菜といふ。茆は葉大きくして滑あり。花白く實を豬べり。一名蓴菜。また鳧葵といふ

年忌

人死して年忌を弔ふは。もと佛者の業にあらず。儒家のならはしなり。東見記に。櫻町中納言欲レ修ニ少納言信西十三年忌一。其弟高野僧明遍不レ從。佛者四十九日而止。後世倣ニ儒者祭法一。始有ニ年忌之説一。相國寺僧瑞溪一切經を見盡して云く。經中無ニ年忌服紀之事一。蓋假レ儒而用レ之也。大藏一覽云。中有極多七七四十九日定結レ生。五雜組云。死每ニ七日一。則備ニ一祭一。謂ニ之過七一。至ニ四十九日一而止。されど。皇朝につたへしも古き事なるべし。持統天皇二年の紀に。天武天皇の百日及一周忌あり。師翁の玉勝間に。古になからんからにすつべきにもあらず。そこなひだになくば。時世のならひに。そむかざらんこそよからめ云々と。いはれつるぞよろしき。今は四十九日にてやむべき寺院も。悉く開山祖神の。遠忌とて。千年忌千五百年忌など大會を行へり。東鑑に寛喜三年。右大臣の十三回忌あり。園大暦に貞和三年。竹林院左大臣の三十三回忌あり。康富記に寶德三年。細川顯氏百年忌あり。つぎ〳〵に多く。こまやかになりて。一周の後三回。七回。十三回。十七回。廿三回。廿七回。三十三回。三十七回。五十回。百回以來五十

そは續日本紀桓武天皇延暦四年五月の勅の中に。先帝御名及朕之諱云々とあるより。いひ出でし事ならん。こは名字を諱字に寫しひがめたる筆者の誤にして。撰者の麁忽にはあらず。されば。存命の人の名をいみ名といふは。いまはしく穢らはし

植物の虫

すべて草木など植うるに苗の程は。虫に損はるゝものなり。葉を損ふ虫あり。莖をそこなふ虫あり。根を損ふ虫あり。節をそこなふ虫あり。

葉を損ふ虫は　螣といふ
莖を損ふ虫は　螟といふ
根を損ふ虫は　蟊といふ
節を損ふ虫は　賊といふ

かくの如きの虫なり。日々よく〳〵見てとり捨てざれば。多くはそこなはるゝものなり

和歌四天王の異名

近來の人のいひ出でたる。頓阿。兼好。淨辨。慶運を和歌の四天王といひて。いみじき事として異名附けたり。澤田頓阿。手枕の兼好。蘆の淨辨。裾野の慶運なり。そはよみ歌より出でたる異名なり

月やどる澤田の面にふす鴫の
　氷よりたつ明がたのそら　頓阿
手枕の野邊のくさ葉の霜がれに
　身はならはしの風の寒けき　兼好
湊江の氷にたてる蘆の葉に
　夕霜さやぎうら風ぞふく　淨辨
庵むすぶ山の裾野の夕ひばり
　あがるもおつる聲かとぞきく　慶運

共にいへり。新勅撰集。散木集などに。わさ田のをしねとよみしは早稻なり。新撰六帖に「濱田のをしね打ちなびき。早刈しほに成りぞしにけるとあるもわせなり。續古今集に。しら露のおくてのをしね云々。新續古今集に。夕霜のおくてのおしね云々とよみしは。おくて卽おしねなり。おしねはおくてにて。をしねはわせおくてともにいへり

稻　穀

稻とは田に生ひ立ちあるをいふ。禾(あは)とは刈りて。根なきをいふ。粟(もみ)とは藁を去りたるをいふ。米とは穀を去りたるをいふ。糲とはいまだ舂かざるをいふ。粱とは既に舂きたるをいふ。武家の知行萬石千石などいへるは粟なり。穀を去りて米とすれば。萬石は四千石となる。千石は四百石となる。故に千石といへるは。よつ物にて卽千俵なり

頼朝卿より彈左衞門へ給ひたる定書

鎌倉長吏定書

長吏　舞々　猿樂　陰陽師　壁塗　土鍋　鑄物師
辻目盲　坐頭　猿引　鉢扣　弦差　石切　土器師
放下師　非人　笠縫　渡守　山守　青屋　坪立
筆結　墨師　關守　鍾打　獅子舞　蓑作　傀儡師
傾城屋

右之外之者。數多雖レ有レ之。是皆長吏は其かみたるべし。此内盜賊之輩は。長吏として。可レ行レ之。湯屋風呂屋は。傾城屋の下たるべし。人形舞は。二十八番の下たるべし

治承四庚子年九月

頼　朝　御判

鎌倉長吏彈左衞門藤原賴兼

朝朝卿の御一字を賜はりたるなり

大行天皇

天皇御在位中にても。仙洞にて太上天皇と申し奉る時にても。崩御ましまして。いまだ御謚奉るまでの間には。大行天皇と稱し奉る。上古の御定なり。御在世の御名は。崩御の後は。御諱と申して忌み憚りて。申すまじき爲に。しばらく大行天皇と稱し奉るなり

諱

存生の人の實名の事を。諱といふ人あり。人死にては謚を稱して。存生中の實名をば忌み憚りて稱せざる故に。諱といふ。存生の人にいみ名あるべからず。

鹽。又。醬油など附け燒きにして食料とす。是を新五左衛門といふ。所によりては。尻子玉といふ。いかにも尻子玉を聞きひがめて。新五左衛門といひ誤りしならん。肛門に似たる物になんありける。又。鮫の類に角兵衛と云ふあり。龜の類に正覺坊といふあり。笠子といぶ魚を。安本丹と藥名をよべり。鮒を源五郎。鰯をおむらといへるは。古き異名なり

新五左衛門
一名　尻子玉

鯛の聟源八

猫

猫は惡獸にて。牛。馬。犬。猿。鷄の類にあらねど。鼠といへる賊獸を征伐する事。猫にしくものなし。禮記に。迎レ猫爲三其食二田鼠一也といひ。說苑に。騏驥騄駬倚レ衡負レ軛。而趨一日千里。此至疾也。然使レ捕レ鼠。曾不レ如二百錢之狸一云々とある狸は則猫なり。和名抄に。猫。禰古万。似レ虎而小。能捕レ鼠爲レ粮とあり。家猫ともいへり

言を信じて人をしらず

或人賢女傳を著して云く。淸少納言。紫式部。赤染右衛門等有二才譽一。今不レ取何也。彼姪婦而其言驕且醜。其情亂且賤。婦女之長舌利口覆二邦家一。牝鷄之晨。誤二千歲之男女一。狐惑者三女也。これ腐儒の僻論なり。枕草子。源氏物語。榮花物語などは。人情の誠をつらぬきたる事。釋迦孔丘も內心にはいかにも諾なりとめづべき事なり。此三女いかなる罪を犯しゝか。たゞうはべの言を信じて。其人物の貞操なるは夢にもしらず。をこがましき賢女傳の作者なり

おしねとをしねとは異なり

おしねは晚稻にておくてなり。早稻をわせといふ對言なり。をしねは小稻にて。美稱なれば。早稻晚稻

しげな笠印かなとかきたるよし。太平記にあり。今の白石もさるたぐひなり

八神殿の燒失

安元三年四月廿八日。樋口富小路より出火にて。神祇に及び。御正體燒失の事。師翁の玉勝間にいはれたり。其かみの神祇官は。今の竹屋町なれば。程遠くして。いかにも取り出ださせ給ふべきを。其頃のならはしにて。佛像をのみ尊き物とおもほして。神慮をかしこみ給ふ事薄き故なり。其年の十一月に。法皇は淸盛入道の爲に。鳥羽殿へおしこめられ給ひ。後鳥羽院は。同時に佐渡國へうつされ給ひしより。亂れにみだれて。君臣の尊卑も。父子の慈愛もうせはて丶。一天四海の君上は。武家の食客の如くなり給ひ。臣下の奴は。萬乘の位の如く奢にふけりて。禽獸に異ならず。保元平治より亂れそめて。建武以來甚しく。慶長五年まで四百五十餘年さわがしかりしを。元和の頃より。始めて靜になりて。萬民平安なるは。全く神社造營。祭祀禮奠。嚴重に掟て給ひて。むかしにかへし給ひし故なり。是によりてうごきなき先蹤事實あまたあれど。こゝに引き出でんもわづらはしければ。ことに委しく記し置きてこゝには略けり

水仙山

大和國高市郡慈朋寺村に水仙山といふあり。これ綏靖天皇の御陵なり。土俗綏靖を誤りて。水仙と唱へ來りしを。後世にいたりて。神保主膳殿知行所となりし故に。又誤りて主膳塚といへり。さる事あるべし。いにしへも萬葉集なる。攝津國兎原郡葦屋里の少女を。うなひ男と。ちぬ男と。妻諍ひしつるを。少女は心うく思ひて。自殺したる故に。塚をつくりて。をとめ塚といひしを。堀川百首に。「もとめ塚おまへにかゝる柴舟の北げになれやよる方のなきと誤りよめり。また。一説には。瀨川求馬この所にて。血戰したる故に。少女を求馬と誤りたるなりといふは。附會の說にて。主膳塚と同日の談なり

人名の魚

江戶の海には人名の魚あり。河豚の類にて。鯛の婿三八郞といふあり。所によりては源八と稱する人もあり。又。海中の石。また。空貝(うつせがひ)などに附きたる黑赤黃を帶びて。やはらかに丸き肉あり。貝の類なり。

疾病を癒さしめんとし給ふ御恵の奇しく妙なる事。人智のはかりしるべきかぎりにあらず

知　行

武家社院等の知行鎗倉の頃は。何丁何段と云ふ定めなり。室町の頃は。永錢何貫何百文といふ定めなりしを。御當家より。何石何斗と定め給へり。永樂錢十貫文は。金四十兩にあたる。三斗五升入りにて。即。百俵にあたるなり

たゞらめ

源氏末摘花巻に。たゞらめの花のごとかいねりこのむ云々。此たゞらめは。かいねりとひとしく赤き故に。姫君の鼻の赤さにたとへたるよしは。聞えながら。いかなる花とも思ひ得ず。古人の注釋もなし。新撰字鏡に。莘タヽラメとあるのみにて。何の花といふ事しれがたし。もしは辛夷ならんか。格物論に。辛夷一名候桃とあり。時珍云。紫苞紅焔作二蓮及蘭花香一。和漢三才圖會に曰二弊辛夷一とあり。新撰字鏡には。字書に目なれぬめづらしき字あり

徂徠が病中

荻生茂卿が病中に。松岡玄達成章といふくすしより。藥を贈る時の包紙に。調合進申芎藥湯。生妻一片煎如レ常。平生食物肝要事。唯許三牛旁與二大根一と書きたり。おもしろき詩なり。初句と結句とを代ふれば。いづれの病ひ何の藥にも用ひらるべき詩なり

將　棋

門弟桐麿は越後新發田の人なり。我方に來りて。種種物語のつひでに。家なる小兒どもの戯れわざにも。將棋はきびしくいましめ置けりとなり。其故を問へば駒は。取りたるは。戰場にて。敵を討ち取りたる趣なり。其とられし駒。敵方の兵となりてはたらくは。表裏二心の不忠ものなり。さる不正のなぐさみせんより。外の戯れあまたあるべしとて。いましめたりとなり。いかにもさる事なり。碁はもとより。黒白わかてれば。かへり忠はなりがたしとてわらひぬ。また。かたはらよりひそかに墨ぬりて。白を黒方に用ひたらばよからんとてわらふもあり。むかし足利尊氏公。新田義貞朝臣に打ちまけて。武家勢官軍へ降參の時に。笠印の二つ引き兩の中を墨にてぬりて。中黒としたるをみて。何者か五條の辻に高札をたて、。「二筋の中の白みをぬりかくし新田〳〵

はいふべからず。半は道具屋茶人といふべき。いやしきもてあそびとぞなりにたる

さば

さばは生飯。散飯。三飯。早飯。などかけれど。皆かり文字なり。梵語なればしれがたし。飯を器に盛たる上に。又飯をちひさく丸めて。上におくをいふ。佛家にて僧徒の食する時に。先此さばを作りて。別器に置きて。呪文を唱へ。訶利帝へ供ふ。この訶利帝といふは。天竺にて。食物を作り始めたる人とかや。佛家のならはしなるを。朝廷にても。佛法御崇敬よりうつりしなり。佛祖統記。釋氏要覽などに。正食とあるに同じ。壒嚢抄にも鬼神に先供ずる飯をいふよしあり。論語郷黨。雖二蔬食菜羹瓜一祭必齊如也。注。古人飯食毎レ種各出二少許一。置二之豆間地一。以祭下先代始爲二飲食一之人上。不レ忘レ本也。禁祕抄に。取二左波一立レ箸。陪膳取二御箸一。又立二御箸一折出也云云。後醍醐天皇日中行事に。御さばをとりて。あまがつに入れてたてさせ給ふ。陪膳座にてをのこ共をめす云々とあり。朝廷へ入りたるうへに。かしこくも神宮へ移りて。豐受宮御饌殿に。左波の壺といふ物あり。穢らはしき事は神官人もしらず。たゞ。初飯をわかちて。別器に入れて。祖神を祭る事とのみ思へり

松の花

我若き頃。田中勇甫和棟が許に行きたる折ふし。竈神に奉らんとて。花賣老女のもて來たる。小松一もと買ひたるを見れば。小枝の傍に。只一つ花咲けり。白小花にて。榊花。橘。柑花などの如くにみゆ。さることある物にや。我は始めて見たり。時珍云。二三月抽レ蕤生レ花。長四五寸。采二其花蕋一爲二松黄一。食物本草注に。松花。一名松黄。味甘溫無レ毒云々

醴泉

持統天皇紀七年。醴泉涌二於近江國益須郡都賀山一。諸疾病停二宿益須寺一。而療差者衆云々。又。續紀養老元年。天皇臨レ軒詔曰。朕以二今年九月一。到二美濃國不破行宮一。留連數日。因覽二當耆郡多度山美泉一。自盥二手面皮一。膚如レ滑。亦洗二痛處一。無レ不二除愈一。在二朕之躬一。有其驗。又就而飲。浴レ之者或白反レ黑。或頽髮更生。或闇目如レ明。自餘痼疾咸皆平愈云々。かゝるは。皆。大國主神。少彥名神二神の御しわざにて。世の人の

義なれば。上句五七七にていひ切りて。また。下の句五七七にていひきりて。上へかへらぬ事。萬葉。古今など悉く然り。よくも見給はずして。旋頭歌は尋常の歌に。一句多くして。六句によむ事とのみおもほし給ひつらん

すきもの

すきものは好色人の事なり。古今集に「梅の花ちりての後のみなればやすきものとのみ人のいふらん。これ身と實といひかけ。好（すき）と酢（すき）といひかけなり。伊勢物語に「是は色このむといふすき物と。簾の內なる人のいひけるを云々。仲文集に「すき物を花のあたりによせざらばこのとこなつもねだえせましや。うつぼ物語に「よき女のある所をきゝて。すきものどもはいぬるならんとて云々。紫式部日記に。「すき物と名にしたてればみる人のをらで過ぐるはあらじとぞおもふ。かへし「人にまだをられぬ花をたれかこのすき物ぞとは口ならしけん。枕草子に「いとすき給へりなど、うちわらはせ云々。なよ竹物語に「たゞすきあひ參らせん云々。物語文にはあまたある詞にて。もとは好色よりおこりて末はすきぐゝし。すきがましなど。俗言にいふ物ずきなる。醉狂なるなどやうの所にもかよはしいへるなり。物語文にはまめだちて。好色がましきを放れたる所にもある詞なり。源氏明石入道が娘にかはりて歌よみし事をすきぐゝしやとあるも。醉狂なるいらぬ世話などいふ事にて。好色の事にはあらず。又。うつりては色情に限らず。何事にても。心に深くしみて好める事を好（すき）といへるより。芳茗を翫ぶ人は。わきて心を深くしむる故に。好の道といへるを。あまりに深くしみ過ぎて。數千里隔てたる外戎の器。また數百年經たる書畫など。めであつめぬれど。飮食の器は淸く新なるをよしとすべきを。あらぬ隈までさぐりもとめ出だすを功とせり。さる故に。好も數奇の字をあてしなり。今の世にては茶の事に委しく。古人の筆などよしあしさたすめれど。實のよしあしらず。たゞ。先達のたてたる趣にしたがひ守れるのみにて。このめるせんはあるべからず。歌。詩。書。畫などの世にすぐれてよろしきをば。何とも思はず。拙なくいやしきを中々によしとして。愛ではやせるは。實のよしあしをしらず。先達のならはしにはづめる故なり。さるは。實の茶人と

舍にて。白雁に黑文あるを生捕りにして籠にこめて。鳥見司の奉りしを見たり。常に變文あるまじきものに。變文あれば鵰。鷲などは。常に變文ある物なれば。さま〴〵無量なるべきなり。天生自然の變化にて。定りなければ。奇怪の文又再ありともいひがたく。なしとも定めがたし。以上貞丈翁矢羽文考の文といはれたり。これうきたる事にあらず。下總葛飾郡茨木村勘藏といへる者。白黑斑文なる鴨を生捕にして。もて來たり。我にみせし。さて芝のほとりの大廈へ持ち行きたるを。まのあたり見たり。其者今にながらへあり。又。大名小路の上屋敷の吾徒の詰所の庭へ。頭尾白き雀の白腹なるが。群雀に交りて。二三日來りつれど。其後ふつに見えず。人や捕りつらん。我若年の頃の。射術の師なる岡崎侯の御内川來十郎左衞門方に。秘めもたる八幡鷹といへる羽一枚あり。大わしの中黑變文なるべし。岡崎は故ありて。弓術免許の地なれば。武士はさらなり。農民。商人。神司。法師。醫師にいたるまで。的射せざるはなし。さる故に染羽の巧みなること。江戸も及はず。されど。實の變文と染羽とはたがへる處あり。彼八幡鷹は實の變文なり

たひし。かはら。をさめ。みかはやうど

この四をよく說き得たる人古今一人もなし。古老大人たちも難義とせられたり。たひしは。茶毘師にて。今いふ隱亡なり。かはらは屠兒等にてゑとりなれば。今いふ穢多なり。をさめは。長女筬女などいへるは非なり。これは藏にて。道路にすてある穢れたる物を取りをさむるものなり。みかはやうどは御厠人にて。閑所の掃除人なり。これらはいやしき者のかぎりをいへるなり

後世の旋頭歌

萬葉集は更なり。古今集も古格正しきを。續千載集に後成卿「みどり子と思ひし人も。老いぬとて。そむく世をみる。かなしさは。夢かうつゝか。此一首のこゝろ定かならぬうへに。五七。五七。五七にて旋頭歌のしらべにあらず。この歌のかへしに隆信「ありてなき。夢も現も。いかでかく。とはれまし。君がみる世に。そむかざりせば。これ五七。五七。七七にてたがへり。されど三句めの五を七にすれば。句調はあへれど。旋頭歌の趣意にあらず。そは旋頭の

紙などにてつくりて。額にのみ著たるなり。正面よりみれば。風折烏帽子のごとく見えて。横はなし。後世にいたりて。人死たる時は。生涯一度の大禮なれば。白紙にて。額烏帽子作りて著するなり。當時幽靈の繪をかくに。顱烏帽子に旁假名のシ文字かくもをかし。夫木集に西行法師「篠ためて雀弓はる男のわらは。ひたひ烏帽子のほしげなる哉。これはゑぼしのほしげと言ふを。つゞけたるのみにて。烏帽子のほしきにはあらず。雀をほしくおもふなり

神の託言

崇神天皇紀に。丹波氷上人名ハ氷香戸邊。啓于皇太子活目尊曰。已子有小兒。而自然言之。玉藻鎭石。出雲人祭眞種之甘美鏡。押羽振。甘美御神底寶。御寶主。山川之水泳。御魂靜挂。甘美御神底寶。御寶主也。是非似小兒之言。若有託言乎。於是皇太子奏于天皇。則勅之使祭。これは出雲の臣らが大神の祭に怠りし故の神託なり。また。神功皇后紀にも。神託あれど。其意明かにて漢文なれば。神語定かならず。履中天皇紀に。五年九月乙酉朔癸卯。有如風之聲。呼於大虚曰。劍刄太子王也。亦呼之曰。鳥往來羽田之汝妹者羽狹丹葬立往也。亦曰。狹名來田之蔣津之命。羽狹丹葬立往也。俄而使者忽來曰。皇妃薨云々。これは。車持君が。筑前宗形三女神の神領を押領したる祟なり。これらは實の神託なり。國史以下後世の文物語文などにも。正しき神託あれど。或は漢文。或は其世の俗言などにて記せるは。意は聞えつゝも。語はつたはらず。卜部兼倶卿の三社託宣といふものは。つたなきつくり物にて。佛語を以て漢文の對句にしたる下手細工なり。師翁の託宣考に。類聚三代格を引きて嚴くいはれたり

鳥羽變文

師翁の云く。大鷲も小わしも羽に變文あり。切文。爪黒。爪白。中白。中黒。本白。本黒。雪白。黒津羽。護田鳥文（俗にうすべといふ）尼面などは。定りたる變文なり云々。常になき變文たま〳〵出來る事あり。予が家の門上に。烏二つやどりし。一は兩羽に白文交りたるを見たり。又。予が同僚なる成瀬某が土藏の屋の間に。雀巣くひて子產みて。雛の中に。白雀一つありきと語りき。又。先つ年予柳營に上りし日。田

づねんとあり。昔もさる事あり。萬葉集に。神龜年中に。對馬の國へ粮米を贈らるべきよし。太宰府より。筑前宗像の百姓津麻呂を船梶師さゝれたるに。津麻呂は糟屋郡志賀の白水郎荒雄が許にいたりてたのみつるに。荒雄うけがひて。肥前松浦の美彌良久の埼より船出して對馬にわたる海中にて。俄に天暗冥。暴風大雨にて。つひに順風なく。海中にて沈沒したるをかなしめる歌どもあまたあり。つくしより對馬への海路は難所なるべし

あきじこり

萬葉集巻七に。「西市爾但獨出而眼不並買師絹之商自許里鴨」この歌を千蔭の略解には。外に見くらぶる物もなく。始より目につきたる女に心のしみこりたるたとへなり。めならばずは。外にくらべみる物なきにて。しこりはしみこるなりとあるは。いみじき非なり。相聞のたとへにはあらず。市に買物の爲に。只一人出でゝ。相談すべき人も伴はず。あしき絹をよしと思ひて。價高く買ひもてかへりてみれば。始思ひしとは違ひて。いとあしき絹にて。高く買ひたるを悔いて。商人のしこりなりといへるなり。しこりは醜賣にて。俗に云。押覆といふ義にて。こなたの買ひかぶりといふ事なり。市のかひ物には。かゝる事常にあるものなり

額烏帽子

いにしへは官人武士は更なり。農民。工匠。樵夫。

額烏帽子の正面

同うしろ

漁翁にいたる迄。烏帽子に直垂著て。腰刀さしたる姿。古書にあまたあるがごとし。たま〳〵烏帽子著ざる時は。額烏帽子といひて。三角の黒き絹。また

盗といへども。盗才なき者は餓死すとも盗する事あたはず。盗才ある人は。高貴にして富有なりとも盗するなり。時の執政の役も。盗才あるは大祿富貴の上にも賄賂を取りて。政事を曲げて行ふ故に。其人に取り入る。下司ども、。皆盗才ある者のみなれば。主人をかすめて利慾にふけるなり。か、る風俗に流るる時は。武士たる者の恥をしらず。謀計を以て。利を貪る者を賢者とし。廉直忠勤の者を愚者とす。武士は主君の爲に死するを恥をしるといふなり。恥をしらぬ者は。主君よりも金銀を大切に思ふものなりといはれたり。諾(ウベ)も此先生の本心此のごとし

山本晴幸の明眼

山本勘助晴幸は。素性賤く。五體不具なれど。系圖正しき剛勇の士には遙にまされり。或時甲斐の諸侍を集めて。軍慮の物語する席に。小兒三人交れり。小宮山助太郎。小山田八彌。秋山友市なり。助太郎は談中しづまりて。うづくまりてよく聞き居たり。八彌はわらひて居たり。友市は退屈して。度々座を立ちたり。晴幸この三兒をつく〴〵と見て。助太郎は赤心うごかぬ大丈夫にて。八彌はこ、ろ定まらず。友市は不忠の名をのこすべしといひしに。はたして助太郎は後に小宮山内膳と云ひ。故ありて甲州を浪人しつれども。勝賴天目山にて生害の頃。わざ〳〵はせかへりて。死を共にして義を立てたり。八彌は後に小山田八左衛門と名のり。勝賴生害の頃。善光寺へにげ行きしなり。友市は後に秋山内記といひ。又攝津守に任ず。勝賴生害の五日以前に。甲州を出奔し。敵方の織田信忠へ降參しつれども。不忠の逆賊なりとて。しばり首うたれたり。晴幸は一眼ながらよく見ぬきたり

幽靈の見ゆる處

蜻蛉日記に。僧ども念佛のひまに物語するをきけば。このなくなりぬる人のあらはにみゆる所なんある。さて近くよれば。きえうせぬなり。遠うては見ゆるなり。いづれの國とかやみ、らくの島となんいふなるなど。口々かたるを聞くに。いとしらまほしうかなしう覺えて。斯くぞいはる、。「ありとだによそにてもみん名にしおはゞ我にきかせよみ、らくの島というふを。せうとなる人き、てそれもなく〳〵「いづくより音にのみきくみ、らくの島がくれにし人をた

レ天建レ極已來。相續相承。皇緒不レ絕。王道惟弘。是我天神之所レ授道也。また。同考第二に。天照太神以降。神以傳レ神。皇以傳レ皇。皇道神道豈二哉。また同先生文集に。我朝禪繼有二三神器一。相授受又矣。夏鼎秦璽漢劍不レ足二比並一。また。西山義公の大日本史序に。大學頭信篤朝臣云。我國神世置而不レ論レ之。人皇即位以迄二今日一。百王一姓重熙累洽綿々延々繩々蟄々。化郊所レ及與二日月一並明。至運所レ繫與二天地一無レ疆。誠有レ非二夏商周亦所一レ可レ及也。盛矣。大矣云々。不二神德靈妙之所一レ致乎云々。中興の大儒先生は。また比類なき卓見なり。茂卿。純如きの腐儒は。先生の履下にも寄り附きがたし

七賢人

阮籍。稽康。山濤。向秀。劉伶。王戎。阮咸。この七人を世に賢人と稱して褒賞するは。いかなる故ならん。酒のみてうかれありくより外にとり所なし。皇朝人ならば益にた、ずの、み拔けどもなり。萬葉集に「古の七賢き人等も欲する物は酒にしあるらしとよまれしは。讃レ酒の題なればなり。實にほむべき輩にあらず。貝原篤信の和漢名數云。七人放曠荒醉不レ可レ爲レ賢といひしは高論なり。中にも阮籍は酒をのま、くほりて。人にむかひて眼を靑くも白くもしつ、。喜怒の意をしらするきたなき心ざまのくらひぬけなり。近き頃。蜀山人の狂歌に。「竹林は藪蚊の多き所ともしらでうか〳〵あそぶ生醉とよみしは。七賢等が詩文章よりも遙に益れり

下野の花

下野花は。和名。漢名ともにしれず。いかなるよしにて。下野の國名をおほせしならん。花の色は濃紅と。淡紅と二種なれば。霜の置きたるさまにもあらず。又。霜中に咲くにもあらず。古くは物に見えず。拾遺集に「うゑてみる君だにしらぬ花なれば我しもつけん事のあやしさとあれば。その頃より名はしれざりしなるべし

盜才

師貞丈翁云。盜を好むも一種の才なり。母の胎中より其才を受けて。他事には無才にて拙く。盜には巧才あり。人目を凌きて。食物を盜むが。ぬすみの始にて。童友を欺きて。翫物を奪ふが惡行の始にて。成長に隨ひて增長し。終に强盜竊盜に至る。世俗に貧の

武烈天皇御諡名

武烈天皇の御暴惡の事。御紀にあるを思ふに。その御代に百濟の末多王が。暴惡なりしうへに。同御代南齊明帝が。二男東昏侯寶卷が大惡虐も。永元元年にて。この天皇の御卽位元年にあたれば。かたがたいぶかしく思ひしに。遠江國内山眞龍が書紀類聚解卷一神系部に云く。二年より八年まで。無道奇偉の戯を記すは。百濟王の無道暴虐を奏上し。百濟紀の轉じて。本文となれり。この本文上代より誤り傳へて。武烈の謚を奉りしなり云々といへり。扨は我思ふ所と等し。我この天皇の御意よはく。御愼深かりしより證をあげて。暴虐諡名一卷を著せり。かしこくも天皇の尊靈遙にきこしめして。恐くも御こゝろおちゐ給はんと思ふのみ

いしたけ

俊賴朝臣の歌に。「から國にありけることはいざしらずあづまの奧におふるいしたけとよまれしは。藻鹽草に鳥田時主といふ人。石靈人をなやます故に。矢を射付けたるが。卽その矢ぬけずして花咲きたり云々といへる。俗説を中昔いひしを。俊賴朝臣聞き傳へて。かくはよまれしならん。萬葉集には。なでしこに瞿麥。また石竹の字をあまたかゝれたり。又。大蘭。洛陽花などいへる漢名あり。皆。なでしこなり。さるを石竹いしたけとよまば。瞿麥をみぞむぎとよみ。大蘭を大ふぢばかまとよみ。洛陽花をみやこばなとよむべきか。かくてはあだしことゝなりて。なでしこにはあらず。をかしきことなり

位服

いにしへは一位より三位までは紫なり。一位二位紫（黑くして茄子のごとし）三位淺紫。（今の紫なり）四位深緋。（赤菓の熟したるがごとし）五位淺緋。（當世の緋なる）六位深綠。（松葉色のこきなり）七位。（今のもゑぎ）八位深縹（紺のこきなり）初位淺縹。（當世の空色なり）さるを。一條天皇の頃より。すべて物每にみだれて。正暦年中に一位の深紫は。墨染にして。上に紫をかけて紛へ。四位の深緋は黑染の上に。緋をかけて紛へつるが。後々は一位より四位迄は。打まかせて黑染となりはてたるは。いともいともくちおしきことなり。その以前は。黑は凶服になんありける

林家學風

林道春先生の神社考序に。本朝者神國也。神武帝繼

ひぬれば。多米阿比多里と唱ふるなり。これ吉兆なり。この立筋は下より上へ墨にて引き。小刀にて下より上へ筋の通り筋を入るゝなり。都て下より上へとするが。古へのならはしなり。周易もしかり。下より上へ。大極より一陽一陰出づるを兩儀といふ。兩儀より各一陽一陰づゝ出つるを四象といふ。四象より又各一陽一陰づゝ出つるを八卦といふ。此八卦を各下上にかさねつくして。六十四卦となるなり。こは人智もて考へ設けたるなれば。龜卜のごとき神術の類と異なり

つくも髪(がみ)

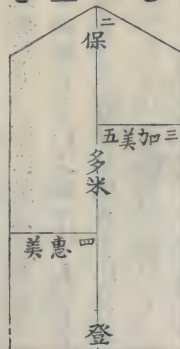
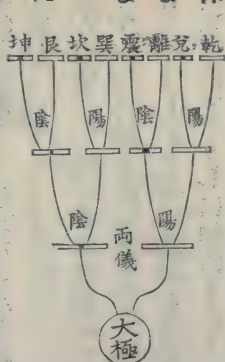
伊勢物語に。「百年に一歳たらぬつくも髪我を戀ふらしおもかげにみゆ。此つくも髪は。古より江浦草とも。馬尾藻ともいへる説あれど。我徒立入信友の考よろし。つくもはつゝもの誤なるべし。つゝは物のみちたらぬことにて。紫日記に手づゝとあるは。手業のたりとゝのはぬ事。大和吉野郡に九尾村とあるを。つゝをよみ。越前敦賀郡筒村より出だす布を。九十布と書きて。つゝぬのとよめり云々。この説よろしく聞ゆ。彥麿云く。信友の考によりて。つゝも髪は。つゝ百の意にて。百にたりみたざる故に。つつもを九十九とかきて。百年に一とせたらぬは。百の一畫たらぬ白髪にたとへいへるなるべし。本草綱目に。海藻生二海島上一黒色如二亂髪一云々。又。馬尾藻云々。近海諸地采取。亦作二海菜一といへるは。今の神馬藻(なのりそ)。また。穂俵(ほだはら)ともいふ

女筆女文

當時世に名高き或書家の女。或高貴の御室の御側に仕へぬるを。早くより我をめして。御歌の添削仰せ給ふついでに。その女も歌よみ出だしたるをいぶかりしに。かたはらに御局ありていはく。この女の父の女にいへるには。御館にて和様文字かく人にたよりて。手習すべし。歌よむ人あらば隨ひてよみ習ふべし。少女の漢様文字かき。詩文章つくるは。傍よりつらにくゝ思ふものなり。和様文字かきて。歌よむ女は。ゆかしくなつかしく思はるゝものなりと。いましめしよし語れり。からぶりの書家には。めづらしき大先生なり。ゆゑありて御館をも。先生の名をも。あらはしがたけれど。おほかたは。人もおしはかりしるべし

討死して。奸佞闇愚臆弱の尊氏公勝利を得。十五代までも。將軍職なりしは。天命にて運にも因縁にもあらず。軍神加護し給ふべき故ある事なり。義貞朝臣に打ちまけて。西國へはしり。筑前國宗像神社に於て。天下泰平。朝敵退治。萬民安穩の重き大祭祀取り行ひ。大軍を率ひて上洛し給ひし故に。正成卿は湊川にて討死し給ひ。義貞朝臣は北國へ走り。次の年に金崎にて亡び給へり。義貞朝臣も尊氏公を西國まで追ひ討ちし給ふか。又は。加茂石清水などにて。重き大祭祀取り行ひ給はましかば。かゝる拙き敗軍はあらざらまし。もとより忠といひ。勇といひ。尊氏公よりは十倍勝れし義貞朝臣に。神力加はらば。勝利疑ひあるべからざるを。武勇智略を誇り。勝利に心たゆみて。勾當內侍に迷ひ。酒宴淫樂を事とせられて。重き神祭に心附き給はぬ故に。軍神の加護なかりしなり。身の行ひの善惡邪正をたゞすは。顯露の政道なり。神幽政事は人智の及ぶ所にあらず。幽顯政事論に委しく記しおけり

　　龜のますら

師詩の「思ひかね龜のますらに事とへばためあひたりときくぞ嬉しきとある。龜のますらは。龜卜の正占なり。萬葉集に「大舟の津守が占にのらんとは正(まさ)しにしりて我がふたりねし。古今集に「かくこひん物とは我もおもひにきこゝろの占ぞ正しかりける。其外にも占を正とよみし歌あまたあり。ためあひたりとは。龜卜の五兆の中のかたのあらはれし時にことわる詞なり。五兆は龜甲の正中に立筋を附くる。下の方を登といひ。上の方を保といふ。其筋の中央より少し上の方に。中より右へ橫筋を附くる。是を加美といふ。また中央より。すこし下の方中より左へ橫筋をつくるを惠美といひ。その加美と惠美との中の立筋を。多米といふ。この五兆を朱櫻の木に火を燃し燒きて。ひゞきわれたる形を見て占ひ判斷するなり。多米合たりとは多米ひゞきわれ合

二 保
三 加美
五 多米
四 惠美
一 登

乾 兌 離 震 巽 坎 艮 坤
陽 陰 陽 陰
陽 陰
兩儀
大極

聲は悦ぶとも。愁ふとも聞きしるやうなし。馬を追ふも。とゞむるもつねにいひなれたる鄙俗の詞にて。シイ〳〵といひて追ひたつる事。既に萬葉集に馬の事を。曾止毛於波受(ソトモオハズ)あるは。ソといひて馬を追ひし故なるべし。假字書にも。ソの一言に追馬の二字をもかけり。ドウは。とゞまれといふ事なり。すべて。牛馬犬猫のたぐひは。里俗の方言はよく聞きしる物にて。其意を得れど。字義をば辨へず

大塔宮

尊雲法親王還俗し給ひて。護良親王と申すを。大塔宮と申し奉るを。世にオホタフの宮と申せど。音訓まじりにはあるべからず。ダイタフの宮と申し奉るべきなり。此宮思召し立たせられし事あらはれて。北條高時弑し奉らんとせし故に。熊野の方へ落ちさせ給ふときに。南都の般若寺の大般若經の唐櫃の中にかくれさせ給ひしを。軍勢來り經櫃をさがしみて大塔の宮は入らせ給はで。大唐の玄弉三藏こそおはしけれと戯れて。一同にわらひてかへりしよし。彼太平記にあり。大塔大唐似たる故の戯なり。この玄弉三藏法師は。唐太宗が時の人にて。西域にわたり。十七年が間に。百三十餘國を遊歴して。唐にかへれり。六百五十七部の經文翻譯せし人なり

軍神問答

師翁の軍神問答は。古今未發の高論なれば。いとたふとくありがたき有用の卓言なり。武士たらん者みずはあるべからず。さるを。中にたゞ一箇條我心に諾ひがたき事あり。或人の問に。楠正成は良將にして。忠臣なる事は。古今の人の知る所のごとく。武道に於て。一事の不善なかりしかども。其功を遂げずして討死せり。軍神の加護なかりしは如何とある。先生の答に。此事は天命なり。俗に云ふ運なり。天命は何故に依りて斯くの如くといふ事は。人智を以て測りがたし。故に聖人も。天命を恐るとのたまひしなり云々とあり。彥麿云く。是師翁の誤なり。外戎には神のある事をしらねば。弑逆非道をはたらき。天より命令するに隨ひたるよしにいひなすは。大罪をおほひて。よく思はれんとかまへたる道具にまうけたる。つくり事にて。天地は形容のみにて靈なし。靈なければ物いはず。物いはねば命令せず。孔子五十にして天の命令を聞きし事おぼつかなし。楠正成

違はねば。師翁貞丈大人も。甲冑着用次第に取り用ひられたり。義經流浪の後。靜は鎌倉へめされて。謠ひ舞しける時に。梶原景茂酒興のうへにて。靜を犯さんとしつるに。靜いかりて云く。我は源二位の連枝たる豫州の妾なり。汝は源二位の臣下なり。豫州沈淪せずば。汝ごとき我に對面する事あたはじといひしに。景茂恥ぢて閉口せしよし東鑑にあり

以レ牛祭レ神

神祇正道に於ては。牛馬犬猿鷄は人に畜はれ。人の用をなす故に。繼ぎて產死の穢あり。食料は甚しき穢惡なり。後漢書に以レ牛祭レ神とあり。廣州記に殺レ牛取レ血。和レ泥塗二石牛背一祀とあり。これら神も眞の神にあらず。牛馬も穢とせざるなり。天竺にては雨を祈るに。以二牛糞一塗二場地一。以二牛乳酪一食二法師一といへり。皇朝にては。甚しき穢として。いみさくる故に。牛肉を田人に食しめたる時に。御歳神いかり給ひて。災ありし事。古語拾遺にあり。さるを。いつの程にか異國の風義うつりつらん。皇極天皇紀に。隨二村村祝部所レ敎。或殺二牛馬一。祭二諸神社一云々。桓武天皇紀に。斷二百姓殺レ牛用祭二漢神一云々。自然と惡風義うつりたるなり

雁金

雁をかりがねともいふと心得て。雁金の字。卽雁のことゝおもふめり。其聲を雁が音といへるにて。古今集には。雁がねの聞ゆるとはあれど。雁がねのなくとも。雁がねの聲ともよみしはなく。雁のなく。雁の聲とはあまたよめり。さるを。萬葉集に。秋風に山とびこゆるかりがねの聲遠ざかる雲がくるらしとあれば。事によりてはくるしからぬにや。かさね言にて。つくばねのみね。かりほの庵などのたぐひなるべし

困快止動

或學者の曰く。世に困快止動の誤といふ事あり。狐のコンとなくを歡鳴といひ。クワイとなくを愁鳴といへる非なり。コンは困にてくるしむなり。クワイは快にて心よきなり。又。馬をつかふにシといひて追ひはしらせ。ドウといひてとゞむるも誤なり。シは止にてとゞむるなり。ドウは動にてうごきはしらするなりといひしは。腹をいだきてわらふべき事なり。狐も馬も學者ならねば。字義をばしるべからず。狐の

傍廂後篇

齋藤彦麿 著

たくじり

神武天皇神祭り給ふ所に。土器類造らしめ給ふ中に。手抉(タクジリ)といふ物御紀にあり。抉は以二手指一剔抉也。和名抄に。[illegible]。久自利。字鏡に。刵剜。久自利惠留とあれば。指先にて。穴を穿つをいふ。竹取物語に。やみの夜に出で、も穴をくじり。こ、かしこよりのぞきかいまみ(掻見)まどひあへり云々。左の掌に土を置きて。右の指先にて。穴をうがつが如くにくじれば。窪みたる土器となるなり。三輪神社にては。右の肘にて。左の掌の土を臼つく如くにすれば。深き土器となる。土器の中には肘の筋骨の跡あり。底には左手の掌の理文みゆとなり

南方退治

元可法師。俗姓は下野國の住人。藥師寺次郎左衛門尉藤原公義といふ。心ゆかたにみやびにして。優なる人なり。かの元可集雑の部に。南方退治發向の時に。天王寺にて。人々題をさぐりて歌よみける時。旅友といふことをよめるとて歌あり(歌は略之)其夜天王寺にやどりて。あくる日は楠正行。正時兄弟と對ふ事なれば。一かたならず心あわたゞしかるべきを。かく探題にて歌よみ遊べるは。武備うときにはあらず。この時の大將は。高武藏守師直。同弟越後守師泰なり。總大將は足利尊氏公なり。何れも佞奸非道の人なれば。官軍にむかひて。戰はん事心よからず思ひての事ならん。さる故にや。早く世をのがれて出家しつらん。其世をすつる時に。「とればうしとらねば人の數ならずすつべきものは弓矢なりけり」とよまれしは。佞惡の尊氏直義などに隨ひ。官軍に向ひ。弓引くはうし。出陣せずしてこもり居ば。臆病未練といはれん。所詮弓矢をすて、。佛門に入るにはしかじとなり。この公義の歌。新後拾遺集にも。太平記にもみゆ。家集一卷あり

靜の前が勇氣

源義經の妾靜は。武勇の女にて。堀川夜討の時に。義經酒に醉ひて。はかばかしからぬを。靜心得て。甲冑をきせし事義經記にあり。その次第けはしき中にもあやまたず。新田義貞朝臣紀にひしひしとあひて

たるまで悉くから人の如くにして。一人當千の勇士所々におこりて。暫時に閻城を打ちおとし。或は殺し。或は生捕りて。忽に地獄破却に及びしさまにつくりし英雄の勇士は。悉く皇朝人にて。外戎の張良。樊噲。關羽。張飛などのたぐひをばまじへず。地獄極樂を始めて思ひよりてつくりし人よりも。さよあらしの作者ぞまさりたりける。正法念經に。閻羅獄卒非ニ實有情ー。以ニ衆生妄業力ー。故見レ之とあるが證なり

傍廂前篇 終

海人は。冬より春かけて白魚を旨と漁れり。年によりてすくなき事あれば。島人一同に神主に祈禱をたのめり。其祭祀には生きたる鯉を二。白木臺に居ゑて神前に備へ。神祭終りて海に放つに。しばしの程は勞りたるさまなれど。海に入りて。いきほひはじめの如く沖の方へはしり行けり。是は住吉神よりわたづみの神へのはゆま使にて。白魚奉らせ給へといひやるなりといひ傳へたり。さる事あるべし。天照大神猿を使とし給ひし事あり。春日神は鹿を使ひ給ひ。石清水八幡神は鳩を使ひ給ひ。諏訪の神は蛇を使ひ給ひ。稲荷山の神は狐をつかひ給ひ。熊野の神は烏を使ひ給ひ。松尾の神は龜をつかひ給ひ。息吹山の神は猪を使ひ給ひ。氣比の神は鷺を使ひ給へり。其外の神々も。其つかはしめ所々によりて異なり。近き頃。下總國船橋太神の使なる鹿を。所の者六人にて打ち殺し喰ひたるに。其者どもの家々は。他の家々をへだて、ぬき／＼に一時に燒け失せ。其六人同時に大熱發して。同時に死亡せり。其六人の中には。折折見受けたるもあり。燒失の三四日過ぎて。船橋へ行きたる時に。其燒跡をも見たり

羽倉在滿翁の眞蹟

或人在滿翁の眞蹟とて。もて來りしを。眞僞はしらず。藏め置きつるを。富永春顏が望める故にゆづりたり。色紙の大きさなる紙に。詩を懷紙の如くか、れたり。春日遊ニ小田原一賦ニ得海上眺望一。荷田在滿。味蒙春日霞。渡流海面波。阿婆登應レ見。遠山難レ追馬とか、れたり。是を味蒙春日霞渡流海面波阿婆登應見遠山難追馬。この春日をはるにとはよみがたし。又。追馬の二字はその一言に用ふる事萬葉にあり。又馬の事をそともおはずとよみたり。しといひて馬追ふは當世俗言なり

極樂地獄の繪

寺院にある所の極樂の繪は。佛を始め。諸菩薩も皆がら肩ぬきて。南天竺の。熱國のさまなれば。さもあるべし。いかならん地獄の繪は。閻魔王を始め。十王冥官獄卒まで。皆唐の姿にて。罪人は悉く日本國の慶長元和以後の月代剃りたる姿にしつるは。作者の愚なるか。畫工の拙かき。あまりなる愚昧のしわざなり。さる故に。さよあらしといへる物がたり出來たるにも。焰王をはじめ十王ども冥官獄卒にい

鮐尾槍

增鏡にあり。新井白石翁云。三條宰相中將さねもり召捕られぬ。三條の家に傳はりて。鮐尾とかやいふ刀ありけるを。この中將日頃もたりけるにて。かの淺原自害したりと見えたるは。正應三年三月九日の事にぞありける。其文字の如く造りなしたる物をいふにや云々とあり。彥麿思ふに。鮐尾槍は。今の長刀なるべし。白石翁は槍とあるに惑はれたるなるべし。長刀も槍の中のひとつなり。淺原八郎爲賴は。甲斐源氏小笠原の一族にて。無法の狼藉者なり。諸國あばれあるき。身の置所なさに。紫宸殿にかけいりて自害せり。射出だしたる矢に。太政大臣爲賴と書き記したる無法のあばれものなり。東鑑脫漏にあり

顏色土の如し

物に恐怖して。血色を失ひたる人の顏色を。土の如しといへり。いにしへは容貌美麗なるに對して。外をおとしめていへる語なり。長恨歌に顧ニ左右前後一紛色如レ土とあるは。楊貴妃一人に色を奪はれたるよしなり。源氏蜻蛉巻に。御まへなる人はまことに土などのこゝちぞする云々。是は薰大將の目には。女一宮を見たる目にては。御まへなる人々はつちの如く顏色なきこゝちするよしなり

神社の星祭

近き頃賣神道の神主が。十一月冬至には。その社の拜殿にも門前にも。星祭の看板を出だせり。いかに世わたりの爲の神主屋ならんからに。神社に穢を犯すは。甚しき罪なり。延喜式に。凡齋王將レ入ニ太神宮一之時。自ニ九月一日一。京畿內伊勢近江等國。不レ得下奉ニ燈北辰一及擧レ哀改葬上とあり。日本後紀云。禁下今日祭ニ北辰一擧レ哀改レ葬等事上。以ニ齋內親王入ニ伊勢一也。又。續日本後紀に云。禁三京畿之內來月供ニ北辰灯一。以ニ齋親王可レ入ニ伊勢一也。かく嚴重なる故は。外戎にてこそ。日月星を等しく思ひて。日月を尊しとも。星を賤しとも思はざらめ。日神月神の畏く尊き事はいふまでもなし。星はそれと等し並にあらず。いといやしく雲霧も同じたぐひなるを。ことごとしくいひなして祭るは。外戎風なれば穢なり

神の使

佃島住吉の神主は。代々日向守といふ。弘好。好祖。今の好貞ともに三代つゞきて我門弟なり。かの島の

なり。さるを。賣物神道者のよむべき俗本には。さくなだりを。佐久良谷と誤れり。さるを。近江國石山の邊の川に。櫻の瀧といふをつくりて。その事とし。又。かの大祓詞に大津邊爾居大船乃云々とあるは。船著の湊なるを。近江の大津とし。彼方の繁木がもとを云々とある。彼方を山城の宇治の彼方に附會せり。また。近江栗太郡佐久那度の神社を。さくなだりのより所としたるも。いと拙なし。そは古事紀神代紀にも。道饗祭祝詞にもある。久那度神にて。此處より此方へ來ること勿れと。宣給ひて。なげ給ひし。御杖よりなり出で給ひし神なれば。莫來所の義なり。直下垂とは大に異なり

・しぬる藥

無病長壽の爲に不死の靈藥は。大同類聚方本草などにもありて。人の欲する事なるを。源氏揚卷に。宇治の大姬君。今はの時に薰大將の

　戀わびてしぬる藥のゆかしきに
　　雪の山にや跡をつけまし

とあるは。釋迦因位に雪山童子といひし時。干丈夜叉理に法を問ひしに。諸行無常是生滅法と半いひて。次は饑ゑていふ事能はずといへば。さらば何をか食ふと問へば。血肉を食はんといふに。童子我身をあたへん。末をいへといへば。生滅滅已寂滅爲樂とをしへたれば。童子は石壁へ書きつけて。谷へ飛びしに。鬼の口より。蓮花出でて。童子を受けたり。この鬼は帝釋天なりと。阿含經に作りたる趣もて。薰のよみ給ひしなり。されば。次の文に半なる偈をしへけん鬼もがなと。ことづけて身を投んとおぼすぞ心きたなきひじり心なりける云々とあり。此偈は涅槃經にあり。いかにも佛法は死を司る物なれば。しぬる藥もとめんには似つかはしき敎にぞありける。さらでも毒藥を用ひば卽時に死ぬるものを

朝なゆふな

朝な夕なのなは。朝夕の魚菜の事といへるは。萬葉集のかり字がきより誤をつたへたるなり。あさのま。ゆふのまといふ事にて。之間の反はななり。よなよなは夜間なり。晝を晝間といふも。夜をよはといふも。夜間の義なり。夜半のかり文字になづみて。深夜の事とするは非なり

くちづたへ

いにしへ文字なき世には。口々に相傳へて。存して忘れざりしよし。古語拾遺にあり。天武天皇の御代に。稗田阿禮は。二十八歳にして。勅語の古事を常に口に誦み。心に勒して忘れず。八十餘歳にして。元明天皇御前にて語りたる事。古事記序にあり。師翁の傳に委しくいはれたり。そをおもへば。外戎漢文帝の時に。伏勝老夫が。九十餘歳にてくちづから傳ふ。大常固鼂借を遣して。古傳を語らせかゝしめたるに。老語朦朧。且鄙言にて通じかたしとなり。阿禮と伏勝とは同日の談にあらず

御位爭

惟喬親王と。清和天皇御諱惟仁と御位爭ひに。紀名虎と伴善雄と相撲の勝負にて。定め給ひしよしいへるは。とらへ所もなきいつはりなり。惟喬親王は承和十一年御誕生にて。同十四年紀名虎卒去せり。夫より三年を經て。嘉祥三年の四月。清和天皇御誕生。同年十一月立坊ありて。皇太子になり給ひ。八年を經て。天安二年に文徳天皇崩御し給ひ。直に清和天皇御即位なれば。爭ひ給ふ程の間はなかりしなり。其後貞觀八年に。伴善雄罪ありて。伊豆島へ流罪なり。是相撲に勝ちたるは僞なる證なり。惟喬親王は貞觀十四年に病によりて。出家沙門となり給ひ。寛平九年に薨じ給へり。御史をしらずして。石清水にて十番の競馬の事。大内にて名虎と善雄が角力の事。又。東大寺にて紀僧正眞濟と。延暦寺にて惠亮和尚と精力を盡して。大威德と降三世との行力くらべなどつくりそへたるなり

ちん犬

矮犬をチンといひて。狆字をあてたれど非なり。狆は字書に狂也とありて。くるふ事なり。小犬のチンは字音にあらず。ぢいぬの音便にて。ぢいぬは。ちひさきいぬの略なり。もと皇朝の物ならねば名はなかりしなり。類聚國史に。淳和天皇天長元年四月丙申。覽二越前國所レ進渤海國信物幷大使貞泰等別貢物一。又。契丹大狗二口猨子二口在レ前進レ之。これ皇朝に矮犬わたりたる始なり

さくなだり

さくなだりは延喜祝詞式に。高山の末。短山の末より。さくなだりは眞下(サクナ)垂(ダリ)にて。水の落つるいきほひ

この歌は。其先は古今集に。初句春日野はとありて。草のつまとよみたるを。この物語にて。男の事とせり。又。萬葉集に

靈の緒をあわ緒によりて結べらば

ありて後にもあはざらめやは

是は。鎮魂の法術にて。壽齡を堅く結べれば。ながらへ在りて。後に逢んといふ事なるを。かの物語には。下句を「絶えての後もあはんとぞ思ふとせり。是は玉を貫きたる糸の絶え切れても。又後に結び逢はせんといふよしにかへたるなり。かくざまがあまたあり。いとたくみにおもしろく聞ゆるものなり

手のよしあしの論

おのれ手かく事拙ければ。よき手して書きたるをば。うらやましく思ふこと。常に絶えず。文字は千歳の後にも傳へて。定かによみしるべく。千里へだちぬる遠き境の人も。まのあたりあふこゝちして。ことのこゝろとほるべき爲にしあれば。いかに手のよからんからに。文字の畫を略き過して。本體を失ひて。曲筆にみだれ書きたるは。打ち見る所は。一きはすぐれて花やかに。なべての人の及ぶべき際ならず。思はるれど。さてよまんには。よみ得がたく。人にも見せて。とさま（彼）かうさま（是）に考へても知れず。つひによみはてずかたみ（互）にかたぶきいぶかりつゝ。つひによみはてずしてやみぬるたぐひ。我師の師なる眞淵翁の筆にもさるたぐひ有りしなり。我師二人は手書の師ならねば。手はつたなけれど。貞丈は草書平假名といへども。略文字はかゝれず。そは手の鈍き故なるべけれど。手書の師にあらず。宣長も手の師にはあらねど。筆體正しく。かりそめにもよみがたき字はかゝれず。書體みだれたる事なし。是をたとへていはゞ。手のよき人たちの。畫を略き。書體を亂し。本體を失ひて。亂れ書きたるは。言語朦朧として。脣舌みだれて。物いふ如く。人の耳に聞きわきがたきが如し。字體正しくさやかにかきて。誰が目にもよくよまるゝは。音勢さはやかに。五十音正しく。三聲清濁明かにしてよく聞ゆるが如し。こゝを以て手のよしあしは次として。言を誤らず。假名をたがへず。てにをはを亂さず。言の意よく通るべくすべきなり。手はよしとても。そのかく事の拙ければ。こよなう心おとりせらるゝ物になんありける

も我をしへ子あれば。悉く聞きたり。追放に處せられしは。顯路政事正しき故なり。一族悉く零落せしは。神幽政事いちじるき故なり。恐れても恐るべきは。公の御掟なり。畏みても畏むべきは。神慮の御定なり

言をいさゝかかへて心をいたく
かへたる歌

萬葉集に

しかの海人はめかり汐やきいとまなみ
くしげのをぐしとりも見なくに

是を伊勢物語には

すまの海人のめかり鹽やきいとまなみ
つげのをぐしもさゝずにけり

萬葉集なるは。髮あぐる解櫛にて。伊勢物語なるは。化粧のさしぐしなり。また。萬葉集に

おもしろき野をはなやきそ古草に
にひ草まじりおひはおふるがに

是をかの物語には

武藏野はけふはなやきそ若草の
つまもこもれり我もこもれり

つきて。うしろよりみれば。松の切口半月の如く。左右に見えながら榮えたり。又。下野の飯岡手古崎神社にも。さる類の事有りしとなり。また。美濃國某村とかやにて。これも寺院の作事の爲に。近きほとりの小社の神木をきらんとするに。神主ゆるさず。神木を汚穢の僧坊にせん事。思ひもよらずといふに。同行とかいへる者の中に。一人嗚呼の者ありて。佛の御爲。寺の御爲なれば。我其神木を穢して。寺へ引かせんといひて。その夜。神木にて縊れ死にたり。依りて切りすてたるを。寺へ引きしに。住僧を始め同行のこらず。大熱にて死にたり。くびれし男は。家内親族殘らず亡びたり。又。天保の九年の頃。尾張の名古屋にて。久米儀兵衞。儀十郎。二人父儀左衞門が死骸を。東寺町日蓮派本住寺の諸化悅山といふ僧と申し合せ。熱田神宮の一の鳥居を通りぬけせしを。神慮を恐れざる無法の所行なりとて。悉く追放に處せられたり。世には希有のをこの者もあるものなりけり。其者共のはてぐゝいかになり行きけん。その久米氏は。子孫一類悉く零落して。大道路にて。往來の人に物乞ふごとくなりはてたるよし。其國に

き頃。加藤一周來りて語りけらく。安永九年五月。南京船安房國千倉濱に漂着のときに。江戸より藍田東龜年といふ人行きて。唐人鄭岱といふ人に清音をとひしに。こたへて大學之道在明德在新民在止於至善云々といひしよし。游房筆話に見えたりとかたれり。我はいまだその筆話を見ず。一周はをさなき頃より我門弟なり

普請作事

殿屋造營を普請とも。作事ともいへるは。佛事より出でたる名目のよし。下學集に。普請ニ諸人一作レ事。故云ニ普請一也とありて。和爾雅に。佛家謂レ營作ニ家屋一爲ニ普請一。敕修清規云普請之法蓋上々均レ力也。分ニ付堂司者一。報レ衆掛ニ普請牌一云々。さる事用ひんよりは。いにしへよりいひ來れるまゝにて。上なるはとのつくり下なるはやづくりにて事たりぬべし

神罰

文化の始の頃。下總國海上郡銚子鄉より二三里ばかりの在にて。或寺の普請に。棟木を求めんとして。近き邊の小社の神木といへる松を買ひて。きらせけるに。その松倒れんとして。傍の楠の幹に。地上より三尺ばかり上にて。斜に附きたるまゝにて放れず。終に大松中楠ともに愈え付きて榮えたり。神主寺僧ともに大熱發して。六七日が程に狂ひ死にたり。木挽も大熱發しぬれど。ひたすらに助命を願ひ。全快の上神樂を奏せんことをいひ。木挽の職業やむべきよし申して願ひしに。木挽は助命して。我行きたる頃。存命にてありしなり。其松を見に行きしに。楠の根より三四尺も上に。楠より大なる松なゝめに

「曉がたに。たゞいさゝか忘れて。ねいりたるに。烏のいと近くかうとなくに云々。續詞花集に

あふことは片躍する山がらす
今はかうとぞ音はなかれける

吉野拾遺に

還幸となくやよし野の山がらす
かしらも白くおもしろの世や

これは假名違へれど。音便は似よれり。萬葉集には

烏とぶ大おゞ鳥の正手にも
きまさぬ君を子等來（ころく）とぞなく

とあるも。皆其聲をいへり

劒刀名義

或高貴の御まへにて。或人申しけらく。つるぎはつらぬきのつゞまりなり。らぬはるとなるなり。たちは斷なり。つるぎ變じて鎗となる。則。男の具なり。たち變じて。長刀となる。是女又法師の器なりといへり。彥麿傍に居て聞く。たちは斷なりといへるはさる事なり。つるぎをつらぬきの反なりといへるは非なり。古事記に都牟刈之大刀とあり。之つむがりは俗言に。スッカリ。スッパリなどいへるよくきるさまなり。鹿島神宮の韴靈劒も。韴はよくきる、さまにて。俗にいふブッツリといふ義なり。廣韻に韴は斷聲なりとあり。又。劒もたちも同じ物なり。歌にも劒大刀腰に取り佩きなどよめるをや。又。劒變じて鎗となり。大刀變じて長刀となりしよしいへるも非なり。鎗も長刀も名目こそ後世なれ。その器は神代よりある桙にて。もとより劒大刀とは異なり。又。劒は兩刀。たちは片刄なりといへるも非なり。劒大刀は上にいへるが如し。兩刄にても片刄にても。長きは大刀なり。短刀は必片刄なり。さる故に。いにしへは刀といへば。腰刀とも。相口とも。首かき刀ともいひき。短刀の事なり。刀は片の刄也。之刄の反はナなり。私の思慮深きにまかせて。考へ定めても。故實にそむける說はうけがたしといへれば。かの人いひやみたり

唐　音

皇朝にて。改め直されたる漢音を。もとより外戎より傳へし韻なりと思ふは非なり。大學論語など。タイカク。リンギヨとよむは漢音なり。ダイガク。ロンゴとよむは呉音なり。共に皇朝改正の音なり。近

郭公

大永の頃。宗祇弟子宗長といふ人。書ける書に。八月中旬の頃まで。子規晝夜となく鳴きければ。齋非時にもたへかねて

聞くたびに胸わろければ郭公
返吐(へど)とぞいふべかりける

又山崎宗鑑が

かしがましこの里過ぎよ郭公
都のうつけさぞやまつらん

貞丈曰く。郭公の聲は。愁はしく物淋しき音なり。されば。好みて聞くべき物にあらず。鶯の聲とはいたく異なり。唐詩などには。此聲を聞きて。愁情を生じ。故郷を思ひいだし。哀しめる意を作れり。實にさこそあるべき事なれば。歌には時鳥を待ちかね。野山に出でゝ尋ねありき。又。初音をば命にかへてもきかまほしき意をよみ。人より先きに聞く事をほまれとし。實に風雅の事にあらず。俗情なる人といどみあらそひて。其の音を人より先に聞きて。愁はしくも。悲しくも。聞きなさゞるは。其音に感ずる心もなく。いどみあらそふうかれ心のさわがしきなり。宗鑑が都のうつけさぞや待つらんといへるは。子規の音聲をよく聞き志るものとやいはんといはれたり。彦麿云く。師翁の說實にさる事なり。されど。愁はしくも。ゆかしくも。おもしろくも。かなしくも聞きなす人の心の。喜怒哀樂に隨ひて。いかにも聞きなさるゝ物なれば。あながちに愁はしきのみにもあらず。曙の空のけしきたゞならぬに。一聲鳴きて過ぎ行く。ゆふぐれの村雨のはれ間に名のり出でたるなどむげに愁はしくいまはしくは聞きなされず。されど。近きほとりの木にやどりて。鳴きかはすは。かしましく。逆上するのみにて。愁はしくはなし。一とせ芝切通しに住ひしけるころ。あまたの時鳥金地院山内の樹木に宿りて。終日をりはへて。たれかまさると鳴きたつるに困じはてゝ。かしらいたきこゝちしたり

からすの鳴聲

皇朝にて。からすと號けしは。から〳〵と鳴く故なり。外戎にて烏とも鴉とも號けしも聲なり。すべて。鳥獸の音は。人の言語とはたがひたる音なれば。人の耳によりて。いかにも聞きなさるゝものなり。枕草子

長しといへり

夜鷹

夜發（やほつ）といへる賤しき遊女を夜鷹といへるはさる事なり。和名類聚抄に。恠鴟。與多加。晝伏。夜行。鳴以爲レ恠者也とあり。一名隻狐と云ふ。不祥の怪鳥なり。さて又。同抄に。遊女云々。晝遊行謂ニ之遊女ー。待レ夜而發ニ其淫奔ー者謂ニ之夜發ニ云々。今井良鼂（ツグ）が荏原郡戸越村に住ひける頃。かたりけらく。たそがれの頃木立のしげみより立ち出づる鳥あり。道路にのけさまに伏し居けるを。人行きかゝりぬれば。立ちて二三丈も置きて。又始のごとくふすとなん。かたちは夕ぐれなれば。さだかに見えねど。ふくろ。みゝづくにやあらんと思ふさまなりと語れり。是夜鷹なるべし。道路にふす故に夜鷹と號けしにやあらん

毒物

荏原郡石川村の邊の道路のかたへの草村に。目なれぬ草花ありしを。來かゝりたる農夫にとひければ。毒物なりとこたへていにけり。こゝろえぬ事いふをのこ哉。草にも木にも大毒小毒あるは。あまたあなるを。これのみ毒物といへるはいぶかしき事なり。漢名。俗名あるべきをと思ひつるに。後その筋なる物產醫に問ひければ。俗に毒の木といへり。漢名は。木本黃精葉鉤吻となんいひける。天野信景の鹽尻に。芫花といひて毒物あり。三月紫花をひらく。藤に似たり。二尺ばかりの小木にて。紫荊樹に似たりといふもこれなるべし

つべく。それぐ〳〵のつかさどり給ふ神々へ。二柱大神より任じ給へる事。御史に明かなり。さるを。譚子に禽獸于人也何異。有巣穴之居。有夫婦之配。有父子之性。有生死之情云々。淨土文に。魚在水中。亦有眷屬。腹中多子云々。無益の理屈だてなり。鳥獸は子を生みたる時のみ。親子の情ありげなれど。成長して其わきだめ（差別）ある物にあらず。かにもかくにも。食料。藥品。器財に用ひん事。なんのひがこと（非事）かあらん。園菜野菜も親あり。子あり。兄弟ありなどいはゞ。いかにも理屈はいはる、物なり。いとおろかなる事にぞありける

得たるわざ

得たるわざにては。思ひもかけぬ幸あるものなり。戯場の市川幸藏といへるは。いと數ならぬ役者。ある時本所邊のさる人の許に招かれ行きたるが。夜更け風雨强きに。高あしだはきて。からかさゝしてかへるに。割下水の邊にて。傘おもりて磐石をのせたるが如く。いかにともせんかたなきうへに。小挑灯は風にけされぬれば。こうじ（困）はて、。やと大聲發して。不意に中がへりして立ちたるに。近き邊の人其聲を聞きて。おどろき燈火もて來てみれば。幸藏は。傘さし。あしだはきしまゝにて。立ち居たる四五間ばかり先に。路上に。强く打ち付けられて獺ひとつ死し居たりとなん。輕き役者なれば。常によき役者に投げられて。中がへりする事なれば。得たるわざにて。思ひかけぬはたらきはしつるなり。よき役者は中々に及びがたし

韃靼國

天智天皇紀に。蘇將軍與突厥王子契苾加力水等水陸二路至于高麗城下云々。この突厥は。即韃靼なり。韻會に。金山狀如兜鍪。俗呼突厥。通鑑に。匈奴ともあり。大明一統志にも。歷代名稱各異。夏曰獯粥。殷曰鬼方。周曰獫狁。秦漢曰匈奴。唐曰突厥。宋曰契丹。元曰蒙古。明曰韃靼。四十二國人物圖說に。東西黑白二種ありて。屬類甚多く。國界四十八道にわかれて。大國なり。南界は唐土に交接し。北方は氷海に近く。大寒地にて。四季晝夜の長短。大に他方におなじからず。最。富饒の國なり。弓馬を好み。勇强の風俗なり。北極地を出づること四十三度より。四十四度にいたりて。南北短く東西

くだかけ

伊勢物語に

　夜もあけばきつにはめなんくだかけの
　　まだきになきてせなをやりつる

とあるくだかけを。あしく心得て。鷄の名と思へり。そくだは惜みの、じる詞にて。かけが鷄の名なり。そをにはとりといへるも名にはあらず。かけといふべき枕詞なり。古事記に。爾波都登理迦祁波那久とあるは。庭津鳥鷄と。野津鳥雉と。對句によみ給ひしなり。さるを。かけは家鷄の二字なりといへるは。むげに拙し。上古に字音はなし。よしありつとも家はケにてカには假り用ひず。漢呉音の差別しらぬ人のいふ事なり。又。くだは東國にて。家をくだといふの説はとるにもたらず。唐丸。矮鷄。暹羅。南京にむかへて。百濟鷄なりといふは。あまりにうがちたり。梵語矩羅倶吒といへるも。東國の片舍田の賤女には似げなき説なり。又。夜くだちて鳴く故に闕鷄なりといへるは。さる事と聞ゆれど趣意違へり。惜みの、じりいへるなれば。腐鷄とか。頑狂鷄とかいふ義なるべし。古事記に宇禮多久母那久那留登理。加計能登理母宇知夜米許世泥云々とある。打ち令病乞にて。打ちてなやませよといふ意なり。萬葉集に。鳥とぶ大おそ鳥。又しこほと、ぎすなどあるも。にくみの、じるなり。遊仙窟に。可憎病鵲夜半驚人薄媚狂鷄三更唱曉云々。されば。くだは惜みののじる詞にて。かけは鳥の名なり。神樂歌に庭鳥はかけろとなきぬ云々とある如く鳴く聲より名とはなりしなり

作者の名

歌の集に。天皇は御名をか、ぬはいふまでもなし。大臣も名をか、ぬはさる事なり。親王は御名をかけれどみことあれば紛れなし。四位は其朝臣とあれば。是れ紛れなし。いかなれば納言以下。三位以上の上階の人々を某卿とか、れざりけん。必。卿とあるべきを。五位以下と等し並に。名を書き放ちにせん事。あるまじき不敬なり

萬　物

禽獸虫魚草木砂石の類は。人の用に立つべきために。二柱産靈神の御恩頼より成り出づるなり。食料を旨として。藥品。殿屋。雜具。器財。悉く人の用に立

たる後の意もて。神代紀に記し給ひしを取りたるならん。されど。みづから中臣氏は榮え。齋部氏はおとろへしを歎かば。久米氏をもあはれびて。大伴氏とひとし並に書くべきなり。既に皇孫の下り給ふ時は。大伴。久米相同じかりしなり。古事記には。天忍日命。大久米命と等しく記されたり。是ぞ上古の尊き傳ひなる

强盜と名のつきたるに異なる人

砂石集に。ある南都の强盜法師は。おのれ强盜の中に交りて。人の家におし入り。財を奪ひ。盜人どもにあたへておのれはとらず。さてあまたの盜人に敬はれ。つぎ〳〵に敎化して。佛道にすゝめいれし故に。强盜法師といへり。又。徒然草にある柳原の强盜法印は。度々强盜に逢ひたる故に。世に强盜法印といはれしなり。名は同じくて故はいたく異なり。砂石集は。梶原平三景時が孫。無住法師の作なり。徒然草は卜部兼顯の子の吉田兼好法師の作なり

灰　零

天武天皇九年六月八日。灰零と御紀にあり。其後。續日本後紀仁明天皇承和五年。有レ物如レ灰。從レ天而雨。老農名ニ此物米華一。おのれ十歲のころ。安永八年十日朔日。灰ふりたる事ほの〴〵覺えあり。その後十四歲のころ。天明三年七月江戸中戸障子ひゞき震動して。大空くらく。灰ふりたり。人々あやしみしを。四五日過ぎて聞けば。信濃國淺間山。燒けたりとなん

けゝれ木

千葉葛野相摸國へ遊歷して。けゝれ木といふものもてかへれり。相。駿。甲三國の界の中心に立ちたる橛の根なり。中心に立てるがゆゑに。けゝれ木といへるは。國ことばにて。こゝろ木といへる事なりといへり。實朝公のけゝれ木と。よみ給ひしも是にてよく聞ゆといへり。最おもしろき事なり。我若かりしころ。甲斐國より刑部刑部刑部（をさかべぎやうぶさだむら）といふ人。よみ歌の師なる季鷹。縣主へたび〴〵來りて。物がたりなどするに。ゆき合ひてかたらふこと常なりしに。はやけゝねつにやなりぬらんといへるは。はや九つの時にやなりぬらんといふ義なり。古今集の。甲斐歌のけゝれなく。横をりふせると。かの金槐集のけゝれ木と。刑部がけゝねつと符合せり

雨二石鏃一云々。我得しも白きあり。赤きあり。青きあり。灰色なるあり。黄をおびたるもあり

國分寺

國分寺の瓦なりとて。諸國より古瓦を。土中より堀り出だす事。こゝにもかしこにもあり。續日本紀に。天平十九年十一月己卯。詔曰。朕以二去天平十三年二月十四日一云々。遍詔二天下諸國一。國別令レ造二金光明寺法華寺一云々。又。同紀に。廢帝天平寶字四年六月云々。創建二東大寺及天下國分寺一云々。また。續日本後紀仁明天皇承和六年六月。勅國分二寺建立。自遠。一則名爲二金明護國寺一。一則號爲二法華滅罪寺一。先帝救レ世利レ物之法。遠傳二不朽一者也。その堀り出だす所の瓦に。古新のけぢめあるは。寺建立の遲速ありし故なり

いろは文字

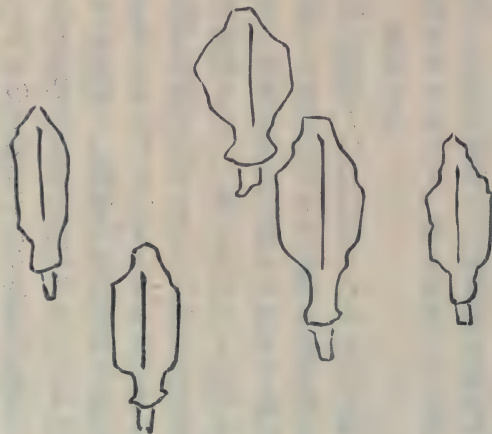
書史會要にいはく。日本國於二宋景德三年一嘗有レ僧入貢。不レ通二華言一。善二筆札一。命以牘對。名寂昭。彼國自國字母僅四十七。能通識之便可レ解二音義一。この景德と云ふは。外戎の宋の眞宗が年號にて。一條天皇の寛弘三年にあたれり。そのかみは小兒の手習の初めには。難波津。淺香山の二首の歌を手本としたるよしは。古今集序にも。源氏物語にもありて。人のしる所なれど。二首にて六十餘字ありて。同字數多あるうへに。五十韻にもれたるもあまたあれば。後に色は匂へど云々の今樣めきたる長歌が。同字なければ。いつとなく。是を手習の始にはせしなるべし。いうえの三字なければ。同字一わたりある故に略きたるなり。又。五七言のしらべをとゝのへん爲にもあるべし。三句目一言たらねども。こはやむことを得ざるなり。その字體も。いと略き過ぎたるなれば。異樣にみゆれど。楷書の草手の略なれば。こと物にあらず。楷書の略なる事は。外戎人の目には。よくみゆべきを。日本の國字といしひは。いぶかしき事なり

廣成の失

中臣齋部兩家相並びて。重き職業なりしを。中臣氏は益榮え。齋部氏はつぎ〳〵におとろへしかば。廣成いたく歎きて。古語拾遺をあらはし。ことわりにかなひたる述懐なり。さるを。其拾遺に使下大伴遠祖天忍日命。師二來目部遠祖天槵津大來目一。帶仗前驅上云云と。記しゝは。大伴氏は榮え。久米氏はおとろへ

隨ひ。嫌へる事をもすてず。諸士と共に佛法を以て。軍慮智略のくさはひに仕ふべし。愚昧にして佛法に使はる、事なかれといはれしは。今に始めぬ大先生の高論比類なし

石の鏃

出羽國庄内の殿の御内人某が。石の鏃もて來りて語りけらく。近き邊の海邊にて。人々ひろふ事あり。こは神代に軍神の鏃なりとも。又は。蝦夷人の鏃なりともいへり。雁の羽などに附けたるを落し、ならんと。むかしよりいひつたへたりとて。二三めぐみたり。續日本紀仁明天皇承和六年冬十月乙丑。出羽國言。去八月廿九日。菅田川郡司解偁。此郡西濱達レ府之程五十餘里。本自無レ石。而從二月三日一。霖雨無レ止。雷電鬪聲經二十五日一。乃見二晴天一。時向二海畔一。自然隕レ石。其數不レ少。或似レ鋒。或白。或黑。或青。或赤。凡厥狀體鋭。皆向レ西莖則向レ東。詢二于故老一。所レ未二曾見一。國司商量。此濱沙地而徑寸之石自レ古無レ有。仍上言者。其所二進上一兵象之石數十枚。收二之外記局一。勅曰。陸奥出羽幷太宰府等。若有二機變一。隨レ宜行レ之。且以上言。克制二權變一。令レ禦二不虞一云云。三代實錄に。元慶八年九月廿九日。出羽國言。六月廿六日。秋田城雷雨晦冥雨二石鏃一廿三枚。また。

仁和元年六月廿一日。出羽國秋田城中。及飽海郡神宮寺西濱雨二石鏃一。同二年二月。出羽國飽海郡神社邊

奇異の思をなし。信じ恐る、愚將は。敵方に城も所領も奪はれつべし

そり　かじき

信濃越後の兩國は。雪深くしてそりにのり。かじきはかねば道路なりがたし。そりは堀川後度百首に忠房

橇

樏

初みゆきふりにけらしなあらち山
こしの旅人そりにのるまで

この橇といふ物は。史記に泥行乘レ橇とあり。孟康云。橇形如レ箕。擿ニ行泥上ニ云々。如淳云。以レ板置ニ其泥上ニ以通ニ行路ー也と註せり。正義云。橇形如レ船。而短小兩頭微起。人曲ニ一脚ー。泥上擿進。用拾ニ泥上之物ニ云々。三才圖繪云前頭及兩邊昂起如レ箕云々。和漢三才圖會云。以レ板爲レ之。其形如レ箕。擿ニ行泥上ー者也とあり。かじきは夫木集に仲正

かじきはく越の山路の旅すらも
雪にしづまぬ身をかまふとか

西行法師家集に

あらち山さかしくくだる谷もなく
かじきの道をつくるしら雪

和漢三才圖會に。其形似レ錐長半寸。施ニ之履下ー。以爲レ上レ山。不ニ蹉跌ー也。按如ニ越州ー。北地雪深而不レ乘レ輴不レ能レ行。不レ著レ操不レ得レ上也。

つかふと　つかはるゝとのけぢめ

同じ先生の軍用記に。神道儒道を好む大將は。佛道を忌み嫌ふ故に。甲冑其外武器の類に。梵字。又。佛像其外佛説の具を爪彈して。忌み嫌へり。さては。佛法に深く歸依の諸士は。無法の大將なりとして。疎みそむくべし。すべて。大將は諸軍士の好む所に

納言善男は。佐渡國郡司が從者なり。かの國にて。善男夢見るやう。西大寺と東大寺とをまたげて立ちたりと見て。妻の女にこのよしをかたる。妻の云く。そこのまたこそさかれんずらめとあはするに。善男おどろきて。よしなき事を語りてけるかなと。恐れ悲みて。主の群司が家に行き向ふ所に。群司はきはめたる相人なりけるが。日項さもせぬに。殊の外饗應して。圓座取り出で、迎ひてめしのぼせければ。善男あやしみをなして。我をすかしのぼせて。妻のいひつるやうに。またなどさかんずるやらんと恐れ思ふほどに。群司が云く。汝やんごとなき高相の夢見てけり。それによしなき人にかたりけり。かならず。大位にはいたるとも。ことにできてつみをかうぶらんぞといふ。しかる間。善男縁につき。上京して。大納言にいたる。されども。犯罪をかうぶる云々。風俗通代酔等に。占夢者といふあり。すべて正夢と思はるゝをば。みだりに。人に語るはよろしからず。又。人の夢を戯れにもあしざまにいはず。よきまにとりなしいふべきなり。是則。言靈の幸ひ助け給ふ上つ代より皇朝のならはしなり。外戎にも。周禮に。夢者事之祥也とありて。占夢官もあり。草木子にもさるたぐひあり南唐近事圓夢とあり

正月事始

延喜太政官式に。凡。元日天皇受二皇太子及群臣朝賀一。辨官預仰二諸司一。辨二備庶事裝束一。辨史等行レ事。前月十三日大臣預點二殿上一。侍從四人左右二人少納言二人奏レ賀奏レ瑞各一人。簡四位以上堪レ爲之事者 奏聞定レ之とあり。十二月十三日。正月の萬事の經營を始めて修す。これ事始なり。さるを。後世は十二月八日となりしを。又。後にいたりて。十二月に正月の事始あらば。二月にも正月の事納めあるべき理なりとて。二月八日の事納めとせしを。又々後にわきだめを失ひて。十二月八日と。二月八日と互に始終を爭ひ論ずる事となれり

握符

師貞丈翁云く。姙婦に安産の符を水初穗にてのましむれば。赤子其符を握りて生まるといへり。是修験者と取揚婆と心を合せてする事にて。軍將の腹心の士を使ふに同じといはれしは。定かに見あらはされし事あればなり。かゝる淺はかなる謀計に欺かれて。

元日の夜に出奔したりとなん。かたりける。そはこざかしきくすしにて。古法の烏頭を用ひしならん。さることあるまじきにもあらず。烏頭を心得たがへて。からすのかしらを剤したるくすしもありきとなん。我徒山本長琢昌邦が云く。あるくすし敗醤を思ひたがひて。ひしほのそこねたるを干して。藥劑に加へたる事ありといへり。敗醬は女郎花の根なり

夢あはせ

崇神天皇紀に。會明。兄豐城命以二夢辭一奏二于天皇一曰。自登二御諸山一。向レ東而八回弄レ槍。八回擊レ刀。弟活目尊以二夢辭一奏曰。自登二御諸山之嶺一。繩絙二四方一。逐二食レ粟雀一。天皇相レ夢謂二二子一曰。兄則一片向レ東。當レ治二東國一。弟是悉臨二四方一宜レ繼二朕位一とあり。また仁徳天皇紀に。昔有二一人一。往二菟餓一宿二于野中一。時二鹿臥レ傍將レ及二雞鳴一。牡鹿謂二牝鹿一曰。吾今夜夢之。白霜多降之覆二吾身一。是何祥焉。牝鹿答曰。汝之出行必爲レ人見レ射而死。即以二白鹽一塗二其身一。如二霜素一之應也。時宿人心裏異レ之。未レ及二昧爽一。有二獵人一以射二牡鹿一而殺。是以時人諺曰。鹿鳴矣隨相夢也とあり。この事攝津國風土記にもあり。夫木集に

あはせてやいむといふらんぬば玉の
　夢野の鹿の諸聲になく

おのが身に霜おく夢や見えつらん
　こゝろぼそげに鹿ぞなくなる

古事記垂仁天皇段に。問二其后一。曰見二異夢一從二沙本方一暴雨零來。急沾二吾面一。又錦色小蛇纏二繞我頸一。如レ此之夢是何表也云々。これは。皇后の兄沙本毘古の反逆によりて。天皇を刺殺し奉れとて。小刀を后にあたへたる故に。天皇の御夢にあらはれて。とひ給へればかくしあへずして。ありのまゝに奏し奉りしかば。沙本毘古を討ち亡ぼし給ひしなり。伊勢物語に。世心つける老母の誠ならぬ夢がたりしつるを。太郎次郎は情なくいらへてやみぬるを。三郎がよき御男ゐてこんとあはせたる事あり。宇治大納言物語に宇治殿の御夢に。大かうじ三御覽じたりけるを。夢ときあめ牛三得給はんと合せければ。あめうし三得給ふ云云。後にりうさの三位それをあしくあはせたりとて。是は三代の帝の關白になり給はんと合せければ。その如くなり給ひけるとなり。また。宇治拾遺に伴大

集に

小兒等草者勿刈八穗蓼乎穗積乃阿曾我脇草乎可禮

とあるを。加藤千蔭翁の略解に。腋下の毛の多く生えたるをいふとあるはたがへり。さては嗤の意うすし。脇草は脇臭にて。和名抄に胡臭。和岐久曾。人腋下臭如二葱豉之氣一。又。謂二之狐臭一。如二狐狸之氣一とある是なり。後世の物語文などには阿里加とあり。今は俗に和伎我といふ

非理法權天

師翁の家訓に。非は無理なり。理は道理なり。法は法式なり。權は權威なり。天は天道なり。非は理に勝つこと能はず。理は法にかつ事能はず。法は權に勝つ事能はず。權は天に勝つ事あたはずといはれしは。いめでたく尊きさとし言なれど。天といはれしは。いみじき誤なり。天は形象のみにて靈なし。靈なければ物いはず。物いはねば命令せず。命令せねば權に勝つ事あたはず。權にかつは神威のなす所なり。貞丈師翁は。享保二年に生れて。天明四年六十八歳にてうせ給ひ。宣長師翁は享保十五年に生れて。享和二年七十一歳にてうせ給へれば。大方は世を同じくしながら。互にその著述を見られざりしなり。貞丈翁も。宣長翁の書を見給ひなば。天道天命など空論はのたまふまじきなり。宣長翁は貞丈翁の書を。かつがつ見給ひし故に。古事記傳に貞丈翁の考を引き用ひ給へり

屠蘇に烏頭を加ふ

延喜典藥寮式に。屠蘇一劑治二惡氣溫疫一辟二邪氣一云々。本草綱目云。屠蘇酒陳延之小品云。此華陀方也。元旦飮レ之。辟二疫病一切不正之氣一。造法。赤朮。桂心。防風。菝葜。蜀椒。桔梗。大黃。烏頭。赤小豆。以二三角絳囊一盛レ之。除夜懸二井底一。元旦取出置二酒中一。煎數沸擧レ家東向。從レ少至レ大次第飮レ之。藥滓還二投井中一。歲飮二此水一。一世無レ病云々。四十年ばかりむかし。下總國海上郡銚子の郷に知る人ありて。行きて十日ばかりも所々遊覽せし頃。かの里人のいはく。去年の秋。江戸よりくすし某來りて。この郷に家かりて住み付きけるに。去年の暮に知音の所々へ屠蘇くばりせしに。其藥毒に犯されて。元日の朝悉くなやみうせたる人多ければ。其所に住ひがたくて。

推量の理屈だては。揣くうるさきものなり

圓位上人の杖

新古今集に

心なき身にもあはれはしられけり
　　鳴たつ澤の秋の夕ぐれ

とあるは。上人の家集にては。澤邊に鳴のたてる處の屏風の繪をよまれしよしなり。さるを相摸國淘綾郡に鳴立澤といふ處出來て。小庵を造り。西行庵と號けて。僧一人住持せり。その庵に西行上人の杖なりとて。女竹の徑一寸餘。長四尺餘の杖を藏めたり。その上下の節のみありて。中間には節なし。往來の人見る事なれば。しらぬ人なし。かゝる竹も世にはある物にや。王氏彙苑に。篔簹竹。在二建安一節長丈餘。また。木草綱目に。篔簹竹。一節近レ丈。漕確居類書に。篔簹竹生二水邊一。長數丈圍一尺五六寸。一節相去六七尺。當麻中將姫曼陀羅縁起に。出二庭前一所二一竹一爲レ軸。竹乃一夜之中所二生長一。一丈五尺無レ節。巻而爲レ軸。又。華夷通商考にも。咬嵧吧國及雲南土産の部等にも濮竹とて。一節の間四五尺あるよし見えたり。（我教子臣定なるもの云く。奥州松嶋ノクラ島に所生の竹二三尺造杖佳品なり）世にはまゝある物ならん

私の官位

平の義村が。私に三浦介と名のりしを。勅使下向の時には。荒次郎と名のれり。是勅許なき介なれば。位記口宣もなかりしなり。三浦は伊豆にて下國なれば介はなし。守は從六位下にて。掾は從八位下なれば。介はその間相當なるべし。とにもかくにも。その頃はみだりに犯さゞりしなり。また。三好丈岩は。從四位下に敍せられしを。おして私に從三位中納言と名のり。武田晴信は。從四位下大膳大夫なるを。私に法性院大僧正と名のれり。足利義詮は朝廷をさし置きて。私に諸士の官位を敍任せり。これらは朝廷をないがしろにしたる朝敵同前にて實に武道にあらず。いにしへ承平の頃。相馬小太郎平將門が。私にみづから新皇と名のり。大臣以下文武の百官を置きし事。古事談にあり。正應の頃。淺原八郎爲賴が。矢に太政大臣源爲賴と印付けたりし事。東鑑にあり。これらは。狂亂人にて。論のかぎりなり

腋草

穂積朝臣の腋臭を平群朝臣が嗤りてよめる歌。萬葉

云々。同巻三十七に。細川相模守清氏軍評定の條に。大和。河内。和泉。紀伊の國の官軍は跳立(かちだち)になりて。一面に楯をつきたて。楯のかげに鎗長刀の打物の衆を五六百人づゝそろへて云々。これらがやりといふ名目の始めて物に見えたるなり。其器は。神代よりある杵にて。ことものにあらず

單物　帷子

當世は。絹。木綿など裏なきを單物といひ。生絹。麻などの類を帷子といひて。著る時節も差別あり。さるべきことにあらず。すべて裏なき衣は皆單物なり。ひとへなるが故に片といひ。風にひらめく故にひらといへるにて同じものなり。浴衣をゆかたといへるも。湯帷子の義なり。頂上の領巾(ひれ)も甲冑の母衣も。軍器の旗も。魚の鰭(ひれ)も鬣もヒラの轉語にて同義の名なり。ヒラメクハタメクなる同言なり

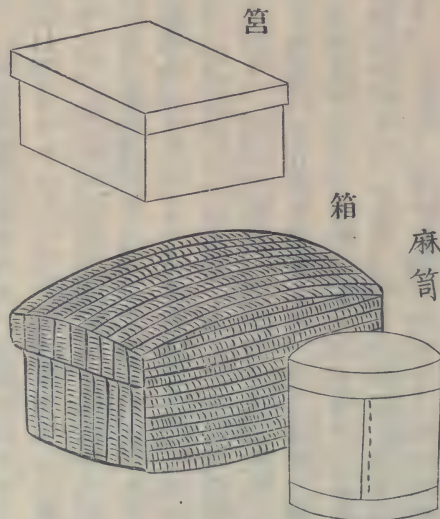
桶　箱

或人云く。桶と箱とは互に文字をあて違ひたるなり。桶は竹もてしむる物なれば。竹に從ふべし。箱は木もて造るなれば。木にしたがふべしとへり。これ字をのみしりて。其の器のもとをしらぬなまさかしき僻説なり。桶は麻を績み入る、器にて。麻笥(ヲケ)といふ檜の曲物なれば。竹の器にあらず。箱は木なるも。

桶大小種々あり木も竹も葛もくさくあり

筥

箱

麻笥

竹にてあみたるも。葛もて組みたるもありて。一樣ならず。古書。古畫にあまたあり。實をしらずして。

略きりャを約めたるなり

墨引薪

正月十五日。武家の門に松薪に墨にて。十二筋横に引きたるを出だしおくは。年中所用の御かま木の意なり。天武天皇四年正月戊申百寮諸人初位以上進レ薪とあるが始にて。雜令に。凡。文武官人毎年正月十五日。并進レ薪長七尺。以二二十株一爲二一檐一。また。延喜主殿寮式に。年中所用御薪湯湯殿料一百八十荷。御匣殿御料七十二荷。御沐料一百八十荷。御脚水料二百四十荷。御炊料七百八荷。儲料二百荷。中宮准之御贄料五荷。その外にも。江次第に年中所用御薪司並五畿內國司供進。また。儀式帳に十五日。禰宜內人等御竈木六十荷奉進などあり。年中所用の意もて十二筋墨引きして。十五日門の左右に置くなり。閏ある年には。十三筋引く御家もあり

まつらさよ姫の石になりたる

大伴狹手彥をから國へことむけにつかはされし事。書紀にあり。妾。佐用姫わかれを、しみて。ひれふりしこと萬葉集にも。かの國の風土記にもあり。夫をしたひて石となりし事は據なし。按ずるに。かの風土記に擧レ帔招。因以爲レ名とあるは。帔を擧けて振りし故に。其山帔振峯と號けしよしなり。爲レ名といふ二字を。爲レ石と見誤りて。慕夫石の故をつくりしなるべし

鎗

鎗は後世の物なりといへど。名目こそ後なれ。其器は神代よりある桙なり。時代のうつろひにしたがひて。便利にまかせ。制式つぎ／＼にかはりこそすれ。もとは神代にありし天のぬほこ。八千矛。嚴矛。八尋矛など同じ類なり。やりといへば別物のごとく思ふめれど。同物なり。むかひさまにつきやる故に。ほこをやりといへるなり。つるぎをたちといへるも斷ち切る故の名なり。やりといふ名目は。太平記が始なり。卷二十五の住吉合戰の條に。其次に一人。是も法師武者。たけ七尺あまりもあるらんと覺えたる。阿間了願と名のりて。唐綾威の鎧に小太刀はきて。柄の長さ一丈ばかりに見えたるやりを。馬のひらくびに引きそへて。すこしも擬議せず。かけ出でたり云々。同卷三十四に。蜷谷伊勢守あまりに深く長追ひして。馬に矢三筋たち。鎗にて二處つかれければ

給ひる位田にて。則。神領なり。一位は。現米二千石。二位は千五百石。三位は千二百五十石。四位は六百石。五位は三百石なり。折にふれて位階すゝみ給ふは。位田をまし給はん爲なり。後に封建となりて。神領御朱印にて定め給ふうへは。位田の加增なき故に。位階の昇進もなし。さる故に。大社舊社も。三位四位などのまゝにて止まり給ひしもあまたあり。さるを。近來は名もなき小社。また私に祭祀する神をみだりに正一位と稱するが。いと多し。僣上なることなり

一　筆

師翁の秋草追加に。書狀の發端に一筆とかく事は細川幽齋侯の書札抄に。一筆と相認め候事は。いそがしさに取りあへず。又申さずてかなはざる事を。いさゝか書きつけてつかはす。この一筆にて用の相とゝのふことをいふなり。おしたてゝつかはす書狀に一筆と相認め候はゝ。其詮なきよし申し侍る云々。貞丈曰。今世急度したる表向の狀には必。一筆と書く。是いにしへとはかはりたり云々。彥麿云。いそがしさに外の事をかゝず。たゞ。用の事のみ一筆かくよしのしるしなり。當世は數箇條の用向にても。始に一筆啓上とかゝぬはなし。また。急ぐ用もなく。たゞ。安否伺ふのみの無用の長文も。始に一筆とあり。當世一統のならはしとなりにたれば。俗事にふれて用ひざるは。中々にかたくなに異樣なれば。用向とゝのひかぬるものなり

蟇目鏑

蟇目は蝦蟇の目の形なりといふも。又鳴音蟇の聲に似て。十二調子にはづれたる音なれば。妖怪おそるといへるなどは。腹を抱きて笑ふに堪へず。蟇の鳴音に調子あるべからず。蟇目鏑も樂器にあらざれば。調子にかゝはらず。十二調子は。壹越。斷金。平調。勝絕。下無。雙調。鳧鐘。黃鐘。鸞鐘。盤涉。神仙。上無。この十二にて。音樂の法なり。妖怪退散の論には及ばざる事なり。蟇の一字に困じて。あらぬひがごとをつくり出だせり。蟇目は略語の假字にて。響目なり。天工開物佳兵篇に。弧矢章云。響箭。則。以二寸木一空レ中。錐レ眼爲レ竅。矢過招レ風。飛鳴。卽。莊子所レ謂嚆矢（カブラ）也。これ響目なり。鏑もかり字にて。名義は。神振箭なり。カミフリヤのミを

の日を音訓まじりに。ジヤウミと唱ふるは拙し

江戸人の勇氣

千早振神代のまゝにて勇氣おとろへざるは。江戸人のいきほひなり。いみじき火のあらびにもおもてもふらず。赤裸になりて水中にはせ入り防ぐありさま。武くいさましき事。いづれの國にも聞き及ばず。又。人とあらがふ時には。ありあふえもの打ちふりて。いさがふいきほひ。おもてむくべくもあらず。そはいにしへよりのならはしなり。既に萬葉集に雞がなく東男は出で向ひ。かへりみせずて勇みたる。武き軍士とねぎ給ひ云々とよめり。また。續日本紀神護景雲二年九月壬辰云々。兵士之設ニ機要ー。是待對レ敵臨レ難。不レ惜ニ生命ー。習レ戰奮レ勇。必。爭ニ先鋒ニ云云。又。同九年の宣命に曰く。東人は常にいへらく。額には箭は立つとも。背には箭は立てずといひて。君を一心をもて。守護(マモル)ものぞ云々。とのたまへり。その猛烈なる壯士の多きは。いづれの國にも聞き及ばず。賤きたとへながら。むかし下總國成田郷市川村に堀越重藏といへる俠客。江戸に出で、慶安四年辛卯。子男をうめり。これ初代市川團十郎なり。延寶三乙卯年五月。木挽町山村座にて。曾我五郎時致の役を廿五歳にて勤めたり。是荒事の始めにて。江戸人の心にかなへり。それより後は。荒事なき狂言は見る人なかりしなり。おのづから勇氣備はりたる國風なるが故なり

庚申狂歌

千蔭大人の別莊にて。庚申祭の夜。季鷹大人を招かれて。千蔭翁のよめる歌

　食物も女も好ける季鷹の
　　得ざる物こそ酒にしありけれ

とあるに。季鷹翁のかへしに

　耳はいと千蔭に見ゆれど蘆若の
　　江去舟とや遠ざかるらん

とよまれたり。元眞集に

　難波潟こげど小舟は蘆若の
　　江去程こそ久しかりけり

とあるをとられしなり

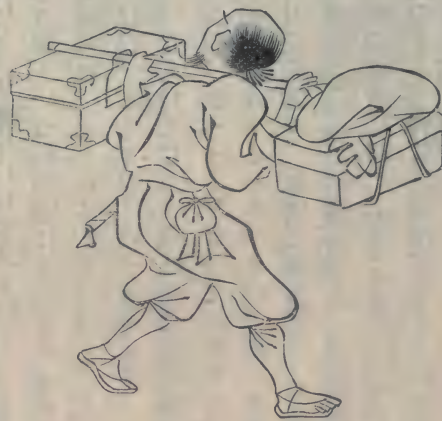
神位

いにしへ郡縣の頃は。國々の大社小社の神々へ位階を授け給ひしは。神の御位にはあらず。神社へつけ

此すりはたごは。旅人の衣服器財を入る、箱。あるひは組籠なり。空しく殼なれば。盜人たち早く外へ行き給へとなり。山のとねとは。即。盜人をさしていへり

梅津長者所藏畫卷

行使が簏旅籠持ちたる所

雛

今世俗の內裏雛といへるは。冠服の姿なる故におしはかりもて。內裡といへるにつきて。或は仲哀天皇。神功皇后として。男女と次第をたて。または。神功皇后。應神天皇として。女男と次第をたつるは。皆據もなき僻事なり。誰の姿といふことはなく。只。男女の姿なり。源氏紅葉賀卷に。紫の上。よき雛によき衣きせて。源氏君と號け給ひしは。其時にとりての事なり。當世少女のもてあそぶ紙人形。みづからつくりて姉樣と稱するが。即古の雛なり。同物語に。十にあまれる姫君はひゝなあそびせぬ由いひしも。今世の紙人形の事なり。いにしへも當世の紙人形の如く。常の物にて。三月には限らず。紫の上の雛あそびに。いぬきといへる少女が。雛の屋こぼちたるは。正月元日なり。さるを。三月初巳日に。身滌の祓あり。雛形の紙にて。身のはらへして。川へ流す故に。なでものとも。形代ともいふ。同物語東屋の卷に

見し人のかたしろならば身にそへて
戀ひしき瀨々の撫ものにせん

とよみしは。三月上の巳日の祓をよめるなり。そのなでものと。少女遊びの姉樣の雛と混じて。三月上の巳日の物となり。又。三月三日の重三と。上巳と混じて。ひとつになりたるなり。外戎にては魏晉の頃より混じたるよし宋書にあり。今は三日は巳日ならでも。上巳日といふがならはしなり。但ジャウシ

あり。鰹は上古よりありしかど。生にてはくはず。皆乾して堅くして食ひし故に。堅魚の名をおほせしなり。延喜式にあまたあるも。皆乾して堅きなり。鎌倉の頃。かつ〴〵生にてくふ人ありしさまなれど。今はもはら人より先に。初鰹食はんとあらそへり。上饌にこそ奉らね。下賤最上の美味となれり

神の御姿

神の御姿を畫くは。恐るべく愼むべきことなり。人の目には見え給はぬ故に。隱身といふを。略きて神とはいへるなり。天地の始に天津神たちは。獨神成りまして。御身を隱し給ひきとあるにて。御祖もなく。おのづからなり出で給ひ。其處にまします他神の御目にも見え給はざりし故なり。人の世となりては。いづれ神も其所にまし〳〵ながら。人のめに見え給はぬ故に。おしなべて神といへり。神は名のみにて見えねば。なしと思ふがおろかなり。たとへば簾の中より。主君の見給ふをしらず。廣庭にて下部が不敬のわざする如きものなり。まれ〳〵人にさとし給ふことありて。御姿あらはし給ふことあれば。或は老翁童女などの姿と見え。人は大蛇猛獸などに見えて。眞の御姿は見ることあたはず。但人代に及びて。高徳賢才の人。忠孝武勇の人など。一社の神となりたるは。存生の時の趣もて。畫んにあしきことはあらず。神代の神はいかにともかくべきやうなし

すり　はたご　こり

すりは街道の盜賊と思ひ。はたごは旅の宿をいひ。こりは物を入る、組籠なりといふは誤なり。和名抄に簏(スリ)。說文云。竹篋也。須利。篼(ハタゴ)。唐韻云。飼レ馬籠也。波太古。俗用二旅籠二字一とありて。今の世の兩掛挾箱。或は柳ごりといふ物の類なり。又。骨柳の字は附會にて行李の字なり。旅具にはあらず。人のことなり。欽明天皇記に。行李者百姓之所レ懸レ命とあり。左傳に行李注に使人也とあり。資暇集に。峕(シ)字說作レ李。峕古使字とあり。か、れば。行李にあらで。行使なるべし。さるを旅具の名とせしは。書言故事に行李人遠行。必。有二行嚢一也とあるより誤りしなり。兼盛集に旅人ゆく間に盜人にあひたり

旅人はすりもはたごもむなしきを
早くいましね山のとねたち

命令ありしことを聞き傳へて。かく墨にて染めて。若やぎて出陣したれば。手塚太郎光盛は。實盛を若武者と見て討ちとりしを。樋口次郎兼光をして。水にて洗はしめしかば。白髪あらはれたる由。是は人みせのかざりにあらず。忠なり。勇なり。智なり。信なり。義なり。うはべをかざる僞賢人と同年の談にあらず

花

いにしへは木にても草にても。今目のまへに花の咲きたるを見ながらよめるは。たゞ花とのみよみし歌。萬葉集にあまたあり。古今集の頃は。さくらをむねと花といへれど。中には「花の鏡となる水は云々。「流るゝ川を花と見て云々。「花ぞむかしの香に匂ひける。これらは梅を花とのみよめり。又。「花見つゝ人まつ時は云々。是は菊なり。「たなびく山の花のかげかも。これは桃さくら。藤。山吹。つゝじなどおしなべて花とのみよみしなり。後世にいたりては。花といへば。題も歌もさくらに限れり。いかにも打ちまかせて櫻を花とのみいはんに。憚るべきにはあらず。花てふ花の中にすぐれてめでたくたぐひなき花はさくらなり。かばかりすぐれたる花なき外戎は。國がらいやしき故なり。鶴林玉露に。洛陽人謂二牡丹一爲レ花。西都人謂二海棠一爲レ花。尊二貴之一也といへるは。事のかけたる國故なり。牡丹。海棠などこちたくいやしげにて。くらぶべきにあらず。たとへていはゞ。容貌美麗の女官の打ちとけたる姿と。厚化粧の俳優人の粧ひたる姿とのごとし

かつを

和名抄に。鰹。加豆乎。式文。用二堅魚二字一。大鮦也。大曰レ鮦。小曰レ鮵。鮦蠡魚也。これも皇朝に限りたる魚にて。外戎にはなし。中山傳信錄に佳蘇魚とあるは。加都乎を誤りて。他魚に號けしなるべし。今清國にて鯛魚といへるも。あらぬ魚なるべし。景行天皇五十三年八月。伊勢行幸し給ひ。それよりめぐりて。十月に上總國安房の浮島宮にいたり給ひけるに。御供なる磐鹿六雁命。角弭弓を以て。あまたの魚をとりし故に頑魚(カタクナウヲ)と號く。諺に堅魚といふ魚なりと。年中行事秘抄にあれど。記紀には鰹の事なし。書記に伊勢より上總へめぐり幸まし、ことはありて。白蛤を取りて。六雁命に膾をつくらしめ給ひしことのみ

さる事古事記にはなし。書紀には六十七年より。八十七年までは事なければ記されず。かにもかくにも。奈良以前にはなし。平安以後にわたりしこと。六帖に紀貫之

古郷をわかれて咲ける菊の花
たひらかにこそ匂ふべらなれ

このたひらかは。則。平安の都なり。奈良以前にわたりなば。萬葉にあるべきなり。後水尾天皇の

ならの葉のえらびにもれし菊の花
のこれる梅や恨やはある

とよみ給ひしは。萬葉集に菊花なきと。外戎の楚辭に梅のなきとをのたまひしなり。されど。今の菊は萬葉集の頃はいまだなかりしなり。梅は楚辭にあるべきをもれたるなり。もとよりなきとありて。もたれるといたく異なり

ながらへ

人の世にあるをながらへぬるよしは。長存の字。又。存命などの字をかく。その義なるやと問ふ人あり。答へて曰く。義はそのよしなり。言は。長經なり。ながらへながらふなど。ハヒフヘホ中のフヘにかよふ言にて。長經の義なれば。則。長存。存命などの字よろし。長存。存命などの字は義訓にて。言の意は。長く世にふる事なれば。長經の字の意にてぞありける

鬚髭を墨にて染む

輟耕錄に。中書丞相史忠武玉髭鬚已白。一朝忽盡黑。世皇見之驚問云。史秡都汝之鬚何乃更黑耶。對曰。臣用藥染之故也。上曰。欲何如。曰。臣覽鏡見髭鬚白。竊傷年且暮盡忠於陛下之日短矣。因染之。便玄而秡変心不異疇昔耳。上大喜云々。これ理屈だてをいはん爲の人みせのかざりなり。髭鬚白くとも。壯士におとらじと。忠勤せんは臣たる者の本意なるべきを。白髮を黑くぬりかくし。うはべをかざるは。好色の外はいらざることなり。さるわざしたりとて。老衰の壯健にかへるにもあらず。忠義心の益にもあらず。人おどろかしのみなり。齋藤實盛が。鬚髭を墨にて染めしは。木曾義仲の討手に向ふ時に。義仲諸軍に示して我幼少のときに。既に殺さるべきを。實盛が情にてのがれたれば。再生の大恩あり。必。討つべからず。鬚髭白き老武者こそ實盛なれと。

重言の略きぶり

師翁の玉勝間に。古今集の「月夜よし夜よしと人に告げやらば云々とあるは。月夜よし月夜よしとかさねて謠ふべきを。五七言のしらべにと、のへんとて。略きてかくは謠ひしなり。催馬樂の「あづまやのやまのあまりの雨そゝぎ云々も。あづまやのあづまやのとかさねて謠ふべきを。是も五七言にと、のへて。かく略きたるなり。和名抄に四阿（アヅマヤ）と雨下（マヤ）とわけて。擧げられつれど。この歌はそれとは異なるよしいはれしを。石原正明が隨筆に。月夜よし夜よしは。月もよし。夜もよしといふ義にて。あづまやのまやも。その如く。東屋の軒にも立ちぬれ。まやの軒にも立ちぬれて。しどけなきが謠の本色なりといひしは。歌の本意をよくも辨へざるべし。清少納言集に

わするなよなよといひしはくれ竹の
ふしをへだつる數にぞ有りける

とよみしも。忘るなよ。わするなよ。とかさねていふべきを。五七言にと、のへんとて。略きて。わするなよなよとよみしなり。外になよといふ物なし

菊

菊は神代より皇朝にありしかど。いやしげにてめづべき花にあらねば。歌にもよみし事なし。今も野山におのづから生ひ出づる。俗に野菊といふ物なり。神代紀に菊理姫といふ御名のあるは。菊を久々といひし證なり。そは花形括りよせたる如くなればなり。水干直垂などの括綴（くゝりとぢ）を菊とぢといへる同じことなり。名義と字音と。似たる故に。和名抄に菊四聲字苑云。菊擧竹反。本草註云。菊有二白菊紫菊黃菊一。和名加波良與毛木。一に云。可波良於波岐。日精草也とあるは。外戎の菊と混雜したるかきぶりなり。括りのうつりたる通言にて。字音と等しく聞ゆ。菊の字音は。擧竹反とも。居六反ともありて。全く等しくきこゆれと。クヽリ。クヽル。クヽレルなど活けば。活生の用言なり。字音は死物にて。うごくことあたはず。似よりても大に異なり。當時家々の庭に生ふしたつる種々の菊は。野山におのづから生ひ出づるとは異にて。今京以來の物なり。本朝通記に。仁德天皇七十三年。始自レ唐獻二菊種一とあるは。何を證にいへるかおぼつかなし。この天皇の御代に。

容顏一。河成取二一紙一。圖二其形體一。或人遂驗得とあり。源氏物語末摘花卷に。髮長き女をかき給ひて。鼻に紅をつけて見給ふに云々。是は常陸姫宮の似顏をかき給ひしなり。後世にいたりて。菱川師宣。西川祐信など名人なり。其のち勝川春章。鳥居清長。また近來歌麿。豐國などもよくかけり。當時は若き男女などの姿をかくに。肩をすくめ。肘を膺によせて。寒げに縮みたる姿にかけり。さる故に。衣冠の官人も。甲冑の武士も。年若く容顏よきをば。皆さる狀にかけり。寒げに縮みあがりて。身すぼらしく見ゆるがはやりものなり

箒木

坂上是則歌に

そのはらやふせやにおふる箒木の
ありとはみえてあはぬ君かな

此歌によりて。源氏箒木卷は作りたるなり。其原伏屋は。信濃の國にて。美濃の國界なり。遠くてみれば。箒をたてたる如く高く見え。近くよりて見れば。何の木ともわかず。さればありとは見えて。あはぬ由にいへり。我幼き頃。三河國矢矧の大橋の上よりみれば。西の方に大きなる箒木の如き木あり。里人の云く。彼は伊勢國朝熊山の木なり。といひ傳へたりとぞ。幼き頃に見聞きして。今に忘れず。いとよく晴れたる日ならでは見えず。街道行程三十餘里あり。むかし景行天皇の御代に。筑後の御木郷に大歷木(クヌギ)ありて。朝日には肥前の杵島をかくし。夕日には肥後の阿蘇山を隱し、よし書紀にあり。仁德天皇の御代に兎寸川の西に大木ありて。朝日には淡路島に及び。夕日には高安山を越ゆるよし古事記にあり。又。肥前佐賀郡にも。大樟樹ありて。朝日には杵島。蒲川山をおほひ。夕日には養父郡草橫山をおほひしよし風土記にあり。播磨國明石にも。井口に大楠ありて。朝日には淡路島をかくし。夕日には大倭島根をかくすとも風土記にあり。近江國栗太郡に大柞木(タラノギ)ありて。朝日には丹波國にさし。夕日には伊勢國にさすと今昔物語にあり。さる事なきにあらず。我若かりしころ。紀伊國熊野に大榎ありて。二またに諸木竹など數十株生ひ出でたるよし。紀の殿より御申し屆になりて。繪圖さへ出來たるを見て。人々あまねくしる所なり

山臥の姿となりて。大峯に入らんとするに。件の坊主の僧。義經を送りたるよしあり。これ住持みづから送りたるなり。衆徒に送らしめたるにあらず。然を當世は。法師はさらにもいはず。醫師。茶道。俳人。遊人。隱居に至るまで。剃髪の人は。悉く坊主といへり。甚しきは菰かぶりたる無宿をも。乞食坊主。宿なし坊主といへり。一坊の主にて宿なしの名もをかし

やよ

古今集壬生忠岑の長歌の中に云々。「これにそはれる私の老の數さへやよければ云々とあるやよは。いかなる義とも定かなる釋はなし。或はやよは弱きにて。年老いておとろへたることゝいひ。或は俗言のよけいといふ義なりなどいへれど聞こえがたし。故思ふに。やよは。彌多の義ならん。イヤの音おのづからオホのかしらにおひうつりて。ヨとなりしなり。オはヨにかよふべき音ならねど。連聲にひかされて。おのづからうつりたるなるべし。三月は彌生なるを。ヤヨヒといへると同じ格にて。オはヨにかよはねど。ヤオの反ヨなれば。おのづからうつりて。さはなりしならん

延齡はこのましきもの

高貴の御威勢にも。萬箱の金玉にも。ちから及ばざるは齡なり。我賤しく貧しといへども。高位大祿の貴人も。財寶充滿の富人も。親しくむつべるは。八十過ぎても病猶なく。すくよかなる故なり。命にまさる寶はあるべからず。極樂上品の臺をむねとする佛書にも。大智度論に。設滿二世界一寶。無レ有レ直二身命一とも。一切寶中人命第一。爲レ命求レ財。不二爲レ財求レ命とあり。吉田兼好法師が。人は四十にたらでしぬるこそめやすけれといひし舌のかはかぬ程に。命萬金よりも重しといひしこそ。眞心なれ。歌にこそ露のあだものとも。しにはやすしなどよめれ。實は長くもがなと思はぬ人はひとりもなし。されば。安心決定して。上品上生の位を手に取りたる如く思へる名僧知識も。病疾あれば。醫師を招ぎて藥を乞ひ。死をのがれんとするにあらずやこれ有情の本意なり

似顏繪

似顏繪は。いと古くよりあり。文德實錄に。百濟朝臣河成在二宮中一。令三或人喚二從者一。或人辭以レ未レ見二

しりたる百人一首の中なる女のよび名は
○伊勢は伊勢守繼蔭の女なり○右近は右近の少將季繩の女なり○大貳三位は大宰大貳成章の妻なり○赤染右衞門は赤染時用の女なり○小式部内侍は和泉式部の女なり○伊勢大輔は伊勢祭主輔親の女なり○淸少納言は淸原元輔の女なり○相摸は相模守公資の妻なり○周防内侍は周防守繼仲の女なり○紀伊は紀伊守重經の妹なり。
かゝる例あまたあるを思へば。內藏寮の頭。助。允。などの女か妻かのよび名なりけんとおもはるゝなり

聾

加藏千蔭翁の月次會日に。我若かりし時。季鷹。縣主と安田躬弦と三人にて行きけるに。何くれと物語りしける中に。千蔭翁のいはく。近頃は本居宣長こそ。金聾(カナツンボ)になりたれといはれしを。傍にて聞きて躬弦がいはく。宣長を假名聾とのたまふ千蔭先生は。眞名聾にやといひけれど。千蔭翁にはきこえず。人人は打ちたふれてわらひぬ。季鷹。縣主にもきこえぬこそをかしかりしか。又或やんごとなき君の御まへにて。人々物がたりしける時に。守(カウ)の殿のたまはく。近頃季鷹が狂歌に

我耳の遠くなりしは年をへて
　聞えぬ歌をよみしむくいか

とよみしは。いとおもしろしとのたまひければ。御まへに居たるくすし某の年老いたるが。さばかりの歌おのれもよみ侍るなり。さまでほめさせ給ふべきにあらずといへば。彼殿さらばよめとのたまふに。彼くすしがとりあへず

我耳の遠くなりしは年をへて
　きかぬくすりをもりしむくいか

といひければ。むらい(無禮)のつみをもとがめ給はずて。こよなう入興し給ひけり。斯くいふ我も今は耳遠し

坊主

坊主は。寺院の住持にて。一坊の主といふ義なり。その外の衆僧は。同宿といひて。坊主とはいはず。文治元年十一月廿二日。前伊豫守源義經吉野山の雪を凌ぎて。潛に多武峯に到着せしに。南院の內藤室の坊主十字坊といへる大惡僧義經を賞翫したるよし。東鑑にあり。これ住持を坊主といへるなり。また。同二年三月六日。大衆蜂起によりて。其所より

嘉定嘉祥として。仁明天皇より始まるといひ。また。大寶元年六月十六日宴を給ひしによりて。天武天皇より始まるなど。まち／＼にいへるは。みな推量の私にて取るにたらず

冬のなでしこ

上古よりあるなでしこは。野山におのづから生ひ出で丶。うす紅の花咲けり。夏の始に咲き初めて秋を經て。冬までも咲けり。萬葉集になでしこの花あまたあるはこれなり。古今集のころは。異國より種々傳へたるなり。もとよりのを。やまとなでしこといへり。庭につくりたつる異國なでしこは。早くかれはて。野山には自然生ひ出でしもとよりのは。いのち長きものなり。後撰集に十月ばかりに。常夏折りて。贈りて侍りければ

冬なれど君が垣根に咲きぬれば
　うべ常夏に戀ひしかりけり

また定家卿も

霜さゆるあしたのはらの冬がれに
　ひと花咲ける倭なでしこ

更科日記にも。秋の末にもろこしが原に。大和なでしこの。咲きたるをおかしがりし事あり。これはもとより皇朝にあるなでしこなり。後に異國より傳へしは。瞿麥とも。大蘭とも石竹とも。洛陽花とも數名あり

竉

古今集の作者の中に。女の名竉(ロウ/アナ)。また寵(チヨウ/メグム)。又襲(シフ/カサヌ)とも三處ばかりありて。異本まち／＼にてしれがたき名なり。さる故に。古人考へ得たる事をきかず。思ふに。この女の父か。夫か。兄か。内藏寮の頭。助。允。などの官の時に。内へ參りたる女にて。よび名を内藏といひしを。草書にて竉とかきしを寫しひがめて。上の三字のごとくなりしならん。この女の常陸國へまかりける時に。藤原公俊によみてつかはしける時の歌に

朝なげに見べき君としたのまねば
　思ひたちぬる草まくらなり

とある二句に公俊の名ありて。四句にさして行く所の常陸の國名あり。結句にみづからの名を入れしなるべし。すべて。女のよび名は。さらぬもあれど。大かたは父か夫かの官名をよばる丶が多し。小兒も

もしろきに取りなして。上天初時。衆倶相見面皆明白云々と。いはんための推說なり

霞　時雨

春の霞と。冬の時雨とは。江戸にては見る事なし。山多き國にては。春になりて山を望むに。うすく絹引きはへたらんごとく。山のたゞずまひ。木立など見えながら。定かにはあらぬが。うすみどりたちたり。さる故に。歌にも淺緑霞とはよめるなり。朝日夕日のうつろふ時は。うすむらさきだちて見ゆるなり。江戸にてはかすみても見えず。冬のしぐれも。山多きところにては。山のあひより雲たち出でゝ。俄に雨ふり出づるかたはしより。日影さして。雨雲はよそにめぐり行き。又跡よりくもり來て。雨ふりぬるが。やがて晴れ行くこと度々なり。ふりみふらずみ定めなき物なれば。歌にさるよしによめるなり。江戸にては十月にても時雨にはあらず。誠の長雨日數ふるなり

嘉定祝

六月嘉定の式は。重き事なり。さるを。庖丁書錄に。六月十六日嘉定あり。近世世俗に申し傳ふるは。室町家大樹のときに。六月納涼の遊の爲に。揚弓を射て。かけ物とし。負けたる者嘉定錢十六文を出だして。食物を買ひて。勝ちたる者をもてなすなり。嘉定は宋の寧宗の年號云々とあれど。師翁貞丈大人云く。室町家年中行事の書どもには見えずといはれたり。師翁は。京都將軍代々の近親なれば。舊記悉く所藏せらる。嘉定の實の傳は。元龜三年六月十六日。遠江國御方が原羽入八幡宮へ御參詣の節。社中にて表に嘉定通寶。裏に十六と。鑄たる錢を拾はせ給ひて。諸軍に示して。嘉定はよろこびを定むるなり。十六は當日なり。勝利の瑞なりとのたまふ。時にあひにあひて。大久保藤五郎六種の菓子獻上せんとて。御旅館へ持ち行きしを。御社參のよし聞きて。この所にて奉りしなり。益御歡ありしとなり。是正說なるべし。足利の遊興ごとき後世までの重き大禮とし給ふべきかは。藤五郎は足に鐵炮疵ありて。歩行なりがたき故に。御菓子司となりて。本白銀町の邊に地所給へり。大坂落城の後。嘉定は京都にて祝ひたまひ。八朔は江戸にて祝ひ給ひし御吉例なりしを。慶安三年より一度中絕したるを。またおこしたまへり。さるを。

りとなん。公はよくしろしめしつれど。中々に一寺の仕職がしらぬもをかし

壽の長短

垂仁天皇紀細注に。先皇御間城天皇。雖レ祭二祀神祇一。微細未レ探二其源根一。以粗留二於枝葉一。故其天皇短命也。是以。今汝御孫尊。悔二先皇之不レ及。而愼祭。則汝尊壽命延長。復天下太平矣云々。これ大國主神の。垂仁天皇に御さとしの託宣なり。此天皇は。古事記にては。百五十三歳にて。書紀にて百四十歳なり。御父崇神天皇は。古事記にては百六十八歳。書紀にては百二十歳なり。いづれにしても御父子ともに御長壽なるを。御父帝を短命とのたまひ。御子天皇を長壽とのたまひし事。心得がたし。思ふに。父帝は二百歳に及び給ふべきを。ちゞめ給ひ。御子の尊は。百歳にたらで。崩御し給ふべきを。のばし給ひしならん。神の御心は。はかられぬものなり。神慮のみしわざは。天皇の御ちからにも及ばせ給はぬものなり。既にこの後仲哀天皇。神の御諭を疑ひ嘲けり給ひし故に。神々いかり給ひて。汝帝はよざせる國を得給ふまじ。皇后の胎中にまします皇太子得給ふべし。汝帝は。此國に用なければ。早く黄泉に行幸し給へと。さとし給ふに。忽に崩御し給ひしよし。記にも紀にも顯然たり。又齊明天皇も神罰にて崩じ給へり

おもしろき

おもしろきといふは。見るものきく事につけて。心に深くいりてよろこばしく。うれしく思ふことにのみいへれど。さのみにてはあらず。うき事かなしき事にても。心にふかくしみて。忘れがたくたへがたき時にいへる詞なり。齊明天皇紀四年五月。皇孫建王八歳薨。今城谷上起レ殯而收云々。冬十月庚戌朔甲子。幸二紀温湯一。天皇憶二皇孫建王一。愴爾泣。乃口號曰

「耶麻古曳底于瀰倭柂留騰母於母之樓枳伊麻紀能
禹知播倭須羅庾麻自珥

この御歌は。大和より紀伊へ山をこえ。海わたりて。ゆけどもあはれになづかしくおもしろく思ふ。今城山の建王を葬りたる所は。忘れがたしとなり。すべておもしろきは。心にふかくしめぬれば。そのもの其かたちそのさまの。目前に見るがごとく。深くしみぬる故に面著の義なり。さるを。古語拾遺に。天石門ひらき給ふ所に。衆面皆明白也といふを。お

蘘荷　生薑

蘘荷をメウガといひ。生薑をセウガといへるは。俗の音便なるべし。和名抄に蘘荷。米加。薑。久禮乃波之加美とありて。メウガともセウガともなし。同じ形容なれば。蘘を米加といへるによりて。薑を兄香として。妹兄の義にかなへたるなるべし。いづれも香氣のある中に。わきて薑は。香氣深ければ。兄香といひしを。セウガと誤り。妹香をメウガと誤りしなるべし。皆音便より崩れたるなり

役行者

役小角。大和の葛城山に岩橋をかけんとて。諸の鬼神を仕ふ中に。一言主神は。形の醜を恥ぢて。晝はかくれて。夜々仕へ給ひし故に。小角いかりて。一言主を縛りたりといやしめおとしめしは。いとおほけなくかしこき妖言なり。さるを。岩はしの夜の契も絶えぬべしなど。歌にもよみ。かつらぎの神こそさかしうしおきたれと。物語文にもかきしは。俗說になづみたるなり。かしこくも一言主神は。雄略天皇葛城山に御狩の時に。一言主神顯身あらはし給ひて。御對面ありし事。御史に顯然たり。猪の怒りたるを踏み殺し給ひし強勇大力の天皇も。恐こくおもほして。奉り物など有りしなり。小角如きの及ぶべきゝはならず。小角は葛城上郡茆原村の土民の子にて。狐をつかひ。妖術を以て。人をたぶらかしゝ故に。韓國連廣足が言上によりて。天武天皇三年五月。伊豆國大島へ流罪せられたり

南無

南無は梵語にて。唐に翻譯して。歸命といふ義なり。悲華經に。決㆓定諸佛世尊名號㆒音聲也とあり。代醉に。釋氏稱㆓佛菩薩名號㆒皆。冠以㆓南無二字㆒とありて。佛號の首に冠らしむる二字なり。さるを。ある日蓮派の寺の住持。あるやんごとなき公に。南無妙法蓮華經の七字を書き給へと。願ひしかば。則。筆とり給ひて。妙法蓮華經の五字を書き給へり。住持いはく。願はくは。南無の二字を加へ給へと願ひしかば。公の曰く。南無の二字は。佛號の首にかくべき稱とこそおもへれ。書籍名目の首に書きし例。まろはいまだしらず。古書にさる例あらば。後學のために聞かまほしとのたまひしかば。住持はおもて赤くして。いそぎあわてゝすべりおり。にげかへりた

ふと。歌にもよめるなり。たゞ。ドウ〱とふく風の音のみならば。松に限るべからず。松風に限りて。琴の音にかよふは。リリリインのひゞきある故なり。チンチロリンとなくは。鈴虫にて。鈴の音に似たり。西川行幸。壬生忠岑の序に。山の端に月待虫うかゞひて。琴の音にあやまたる。また或時は野邊の鈴虫を聞きて。谷の水音にあらがはれ云々。とあるにてよくわかてり。これ眞の鈴虫。松虫の差別なり

五畜　六畜

皇朝にて五畜といへるは。牛。馬。犬。猿。雞にて。人の家に畜ひ置きて。人の用にあつれば。産死の穢も。人につぎてあり。されば。食ふは甚しき穢なり。外戎の六畜は。牛。馬。羊。犬。豕。雞なり。是は畜ひ置きて。次第に殺して。食料にあつるなり。同じ畜にても大に異なり。たとへば。皇朝の五畜は。下人の部屋に住めるがごとく。用あれば出で、仕へ。用なければやすらひをれり。外戎の六畜は。重罪人の囚獄に置かる、如く。遲くも速くも。刑伐に行はれんを待つがごとし

交　易

諸の外戎國は。他國の物を得ざれば。其國立ちがたき故に。萬里の波濤を凌ぎ。諸國へ舟をめぐらせり。皇朝八大洲の內。かれになきはこれにあり。これにすくなきはかれに多く。かたみにとりかはして。ことかくべきにあらねば。いやしき外戎と交易するに及ばざる事なり。皆。其なり出づる鳥獸虫魚草木砂石にいたるまで。居宅。器財。衣服。藥品。食料それ〲に備へ授け給へる神のみしわざなり。かくてことかくべきにあらず。さるを外戎より諸の疾病わたりこし故に。藥品もからわたりならでは。驗なしといへるは。條理違へり。病疾は。異國よりわたりても。人物は皇朝人の性なり。大同類聚方にも醫方也在㆓于我邦㆒也。自㆓神世㆒矣。神國之民。服㆓他邦劑㆒。而何應㆓其惠㆒乎。人應㆓其土地㆒。而禀氣之僻。其土人服㆓其土㆒。宜不㆑可㆑無㆑效也とあるをや。是を能く辨へて。近き頃。佐藤定方が奇魂といへるを著したる中に。海南と北陸とは。寒暖異なれば。病の異症なると。土地に生ひ出づる藥草の有無多少とを。よく辨へて記したり

し故に。夕ぐれには。人の往來も稀なるを。或農夫十二三なる女子を。酒かひにやりたるに。買ひてかへる道にて。かの狼に出合けり。狼は少女をくひたふさんと飛びかゝる。少女はのがれんとして。酒器持ちたる手を後ざまにさし出だして。にげんとす。雙方の勢にて。徳利といふもの。狼の口中に深くいりて。出でも入りもせず。狼はたけびくるひて死にたりけり。少女は。酒の器を狼にとられて。せんすべなくなき居たるを。所の者聞きつけて。家に送りしとなり。彼小兒と。此小女と。東西一對の奇談とやいふべからん。これも神のたすけならん

鈴虫　松虫

當時褐色にして髭長く。腹黄にして。チンチロリンとなくを松虫といへど。これいにしへの鈴虫なり。鈴ふる音のごとくきこゆればなり。又。色黒くして首ちひさく。尻大にして脊すぼみ。腹黄白色にしてリヽリンとなくを。鈴虫といへど。これ松虫なり。そは松風の音に似たる故の名なり。おのれ若かりし時。遠江國秋葉山にて。松枝にさるひゞきあるを聞きて。あやしく思ひ居たり。そは年のくれの事なり。其後三河國寶飯郡の。小江の松原を春の中頃にやあらん。夜深く通りつるに。松枝に笛の如き音あるをあやしみ。しばしたちとまりて。聞きしに。風の吹き來る音にまじりて聞こゆ。時にもより。品にもより。枝振にもより風の吹きまはしにもよりて。ままある事なるべし。さる故に。松風の琴の音にかよ

鈴虫松虫の形状

を改むる故に。國初といふ時節度々あり。皇朝は。かしこくも。天照大神御孫の彥穗の邇々岐の命に。此。國を授け給ひて。君王となし給ひしより。數萬歲を經て。今日只今もかはることなく。一日の如し。此後幾萬億年をふとも。天地のあらんかぎり御正統つくべからねば。國初といふは。神代のたゞ一度のみなり。賴朝卿以來の將軍も。私の尊號にあらず。朝廷より將軍職をも。官位をも給へるなり。外戎にては。私に國王となる。そは上に定りたる君王なき故なり

隅田川

武藏と下總との界の川を。隅田川とも。須多川ともいへるは。もとスミダなるを。音便にてスンダといひ。又。略きてスダといへるにて。同じ所なり。たとへばヤムゴトナキを。音便にてヤンゴトナキといひ。略きてヤゴトナキといふなど同じ意なり。この川の名。他國の名所を。江戶へ附會したるなりといへるは。中々なる非なり。萬葉集にある隅田川は。紀伊國なり。六帖にある隅田川は出羽の國なり。古今集にある隅田川は。武藏國と下總國との界なり。隅田川に限らず。國々に同じ地名あまたあれば。とかくいふべきにあらず。更科日記に定かならぬ記しぶりは。委しくしらずして書きたる故なり。但し庵崎。待乳山などは。いにしへよりありやなしや。いざ都鳥に事とはんと思へど。しることあたはじ

孩子虵を殺す

昔。我殿のしろしめし、信濃國水内郡富竹村の農民。夫婦共に。田畑に耕作の爲に出でんとて。二歲なる男子をつぐらといへる槀器にいれて。鴨居につり置きて出で行き。午時にかへりて見れば。小兒はこゝちよげにあそび居たり。おろしみれば。徑一寸ばかり。長四尺もやあらん蛇をつかみて。ふりまはし遊び居たり。蛇はとくに死にたるさまなり。思ふに人のみぬ間に小兒の血吸はんとて。柱より上り。鴨居よりつたひて。つぐらに入りつるを。何ごゝろなく。急所をつかみたるなり。首より三四寸下は。急所にて。うてば忽に死ぬるなり。小兒はさる事しらねど。全く產土神の守護し給ひしならんと。たふとくぞおもほゆる

小女猿をころす

是もむかししろしめし、。石見國那珂郡濱田の在にて。あしき猿ありて。狂ひありき。あまた人をなやめ

といへるが。今の通稱なり。おふけなく借上なる事なり。職員令に。大工一人。掌二城隍。舟檝。戎器。諸營作事一。少工二人。掌同二大工一とありて。太宰府に屬したる官人にて。修理職。內匠寮。木工寮などの屬官なり。されば。大工は。少工の上たる官人にて。匠夫の事にはあらず。又。左官はいづれの官舍にも。カミ。スケ。ジョウ。サグワンの四階はあるなり。其よし下に記せり。こゝなるは。同令に土工司正一人。佑二人。令史一人。泥部二十人とありて。サグワンハ官名なり。百官百司ことぐくあり。○神祇官は伯大少副大少佑大少史○八省は卿大少輔大少丞大少錄○諸職は大夫亮大少進大少屬○諸寮は頭助允屬○諸司は正スケハナシ佑令史○彈正臺は尹大少弼大少忠大少疏○使は長官次官判官主典○近衛は左右大將左右中少將左右將監左右將曹○衞府は左右督大少佐大少尉志○諸國は守介大少掾大少目○太宰府は帥大少貳大少監大少典いづれも四階は。皆備はりて。文字を私にかふる事あたはず。近き頃。輕き神職が。不相當の字をつくるは。皆私にて本官にはあらず

九年母

神代より日向の小門の橘。今もありて。いと大きくして。味の美なる事。橘柑中の最第一なり。後世にいたりて。密柑。柑子。金柑。柚。橙。枳殼などつぎ〴〵にわたり來ぬれど。上古の橘の片はしにも及ばず。そが中に九年母といへるは。垂仁天皇の御代に。田道間守といふ人を。常世の國につかはされて。時じくのかぐのこのみをとりよせ給ひしを。後世九年母といへる故は。御記の九十年春二月庚子朔。天皇命二田道間守一。遣二常世國一。令レ求二非時香菓一。今いふ橘これなりとありて。九十九年云々。明年春三月辛未朔壬午。田道間守至レ自二常世國一。則賚物也。非時香菓云々とある。九十年より九十九年の明年まで。十一年なるをつかはされし年と。かへり來りし年とを略きて。中九年なれば。九年母とはいふなるべし。母とはこの菓を乳柑といへれば。母と號けしならん。又。九年を久年ともかけるは。橙をば代々といへるに同じ祝言なるべし

國初

儒書より外は見し事なき偏屈なる學者は。時の將軍の御代始を國初とかけるは。いみじき誤なり。外戎にて。臣たる者が。君上を弑し。國家を奪ひ。國號

平人被風之圖

にくきもの

法師の酒に醉ひて。放蕩なる事いひちらしさわげるいとにくし。若き女の醉ひてたはふれたるは。わきてにくし。又。若き女の漢籍さへづり。唐樣文字書きて。ほこれるもにくし。年老いたる武士の長劔横たへ。肘はりて。いさかひこのましげにたけびありくいとにくし。年老いたる女の色めきて。くねりなまめくも又にくし。くすしの大酒大食にて。吐逆などして。腦むうとましくにくし。晝の蠅。夕ぐれの蚊。書齋の鼠。納戸の盜人。風烈しき時に。近きほとりの火の災いと〱にくし

白酒　黒酒

萬葉集十九に
天地與久萬代爾萬代爾都可倍麻都良牟黒酒白酒乎

この黒酒は。式によりて。常山の灰を入るとも。又胡麻粉を入るともいへり。白酒は常のすめる酒なりといへり。これら誤なり。常山灰。胡麻粉などいへるは。黒酒といふ名によりてのおしはかりなり。又。白酒は。常のすみさけなりといふも。せんかたなさのひがことなり。いにしへは荒稻。和稻といひて。荒稻は玄米にて。和稻は白米なり。舂きたるも舂かざるも。白くして黒くはあらねど。玄米白米といへる如く。玄米の酒は黒酒にて。白米の酒は白酒なり。常のすみ酒は。白酒といふべき故はなし。いにしへは皆濁酒にて。淸酒はなかりしなり。黒酒も白くして。黒くはあらねど。白酒に對して白からねば。黒酒といへる事。白米に對して。玄米といふに等し

大工　左官

匠丁をおしなべて大工といひ。壁塗師を皆がら左官

云二阿那律一指歸云。古之爪杖也。骨角竹木刻作二人手指爪一柄可二三尺許一或脊有レ痒。手所レ不レ到。用以搔レ爪。如二人之意一故曰二如意一とあり。脊のかゆき所に手のいたらぬを。これにてかけば。意のまゝなる故の名なれば。かゝるかたちにて後世孫の手といへるが。眞の如意にて。法師のもつ所の如意は。人みせのかざりにて僞物なり。外戎の麻姑の爪は。鳥爪の如くにて。又異なり

披　風

披風は。堂上方の略服にて。直衣に似て入襴あり。上帶なければ。風に披く故の名なり。袖も短く狹し。たゞうちくのみの御服なり。

さるを。近來下々にて。合羽に似て。襟の裝束なく。裾の方に紐なく。襟の後の方に涎掛のごとくなるを附けたるを。披風と號けて。剃髮總髮などの着る事あり。これ披風とは大に異にして。座敷合羽といふ物なり。近き頃は。總髮剃髮ならぬ月代頭の人にも著るあり。似つかはしからず。小女の着たるもにくし。年たけたる女の著たるは殊ににくし

堂上直衣之圖

名も。一節切の名義も失へり。むかし本郷の邊に。年老たる工匠。短笛の妙手にて。我若き頃聞きしことあり。かの一尺八寸の喧嘩道具とは。音律いたく異なり。其人うせて後は。吹く人ある事をきかず○古への短笛一名一節切。總一尺八分なり。彼の一尺八寸の喧嘩道具の尺八は。樂器にあらず。今は僧徒の器となりて。本寺さへ出來たり。當時普化僧の托鉢の勸進となれり

かまぼこ　かばやき

魚の肉をすりて。細き竹にぬりたるは。蠟燭のごとく見ゆる。これをかまぼこといふ。蒲の穂に似たる故なり。今は板につけたるを蒲ぼことといひて。實の蒲鉾をば竹輪といへり。名義を奪はれたるなり。又。蒲燒も鱣の口より尾まで。竹串を通して。鹽燒にしたるなり。今の魚田樂の類なり。さるを。今脊より開きて。竹串さしたるなれば。鎧の袖。草摺には似れど。蒲の穂には似もつかず。名義を失へれど。味は無雙の美味となれり。これはいにしへにも遙にまされり。わきて此の大江戸なるを極上品とせり

かまの穂

かまぼこ

かばやき

如意

法師のまさぐり物にすなる如意といふ物。佛前へも持ち出で。人に對面にももち。他へ出づるにも持ち行くなり。そのかたちか丶るさまなるもあれど。もとはさる物にはあるべからず。釋氏要覽云。如意梵

又ハ

とも云ふ。本草蘇恭云。紫草似蘭香。莖赤節青云々。時珍云。花紫根紫可以染衣。故名。これをゆかりの色といへるは。この草一もと生ひぬれば。三尺ばかりの間は。土の色紫になりて。そのほとりに生ふるは。他草悉く紫色をおびぬれば。古今集に

紫のひともとゆゑに武藏野の
草は皆がらあはれとぞ見る

とよみしも。其ゆゑなり。伊勢物語に

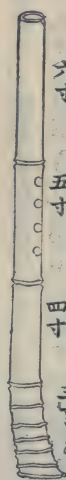
むらさきのいろこき時はめもはるに
野なる草木ぞわかれざりける

とあるは。皆がら紫を色おびたるをいへるなり。さる故に。紫をのみゆかりの色とはいふにやあらん。されば。源氏にもむさし野といへばかこたれぬとも露分けわぶる草のゆかりをとも。いかなる草の緣なるらんとも作りたるは。其故なり。世の人は。さる事も辨へずしらず。よみによみけり

尺八の笛

源氏末摘花の巻に。例の御あそびにあらず。大ひちりきさくはちの笛など。大ごゑを吹きあげつゝ。たいこをさへかうらんのもとにまろばしよせて。手づから打ちならし。あそびおはさうず云々とある。さくはちのふえは。和名抄音樂器部に。尺八律書樂圖云。尺八爲短笛。縦向吹者也とありて。大篳篥。尺八などは。公卿の器にあらず。地下樂人の器なり。たいこも地下樂人廣庭にてうつ物なるを。けうは例のと違ひて。公卿みづから大篳篥。尺八などふき。

短笛 三寸七分 七寸一分 節あまさず削りて

托鉢笛 六寸 五寸 四寸 三寸

大鼓をさへ。打ち給ひしなり。この尺八笛は。長さ一尺八分ありて。中に一節あり。ゆゑに尺八とも。ひとよぎりともいふ。むかし難波に雁が音文七といひし俠客あり。自然と尺八の妙手にて。世にめでられしゆゑに。手下の俠客ども。悉く學べり。後々は吹くことはさし置きて。いさかひの爲の便利にせんとて。一尺八寸にして。節をあまたにして。竹の根きはを切りて。一刀のかはりとす。かくては。短笛の

いひ。歌を和詩といへり。これ作者にかゝはらず。歌と詩とをもて。唐和とわけたるなり。この三くさをおしなべて。和詩といへり。さるを近き頃。むげに物學びせぬ神職書家などが。和詩と思ひてつくれるは。えもいはぬつたなき事にて。語格も。口調も。てにをはも。假名も更に辨へず。もとより歌にも詩にも遠くして。戯作文にもはるかにおとれる。禪學の未熟なると。心學の踏み迷ひたるとの類なり

ふるとし

年内立春の題にて。ふるとしとよむ人あり。いと心得たがへなり。春になりて。去年の事をふるとしとよむはよし。年内には年のうちとよむべきなり。古今集の發端に。ふる年に春立ちける日よめるとありて。歌は年の内に春は來にけり云々とあり。歌は年のくれによみたるなれば。年の内にとよみ。撰集に入れらるゝ時は。春の部の首なれば。ふる年に云々とかかれたり。是歌は。在原の元方にて。はし詞は。貫之大人なり。さて年の内といふも。年のくれのみにはあらず。正月より十二月までの間なり。同じ古今集に

ぬれつゝぞしひてをりつる年の内に
春はいくかもあらじとおもへば

とあるは。三月末の歌にて。歳暮にはあらず

鬼にたとふ

人を鬼にたとへていへるに三くさあり。ひとつは。たとへば。加藤清正侯を鬼上官といひ。服部正成主を鬼半藏といへるなどは。武勇するどく。强力なるなり。又ひとつは。容顔美麗の女の。心ざまあくまでかたましく。はらあしくして。人を憎みそねみ。憐の意なく。情しらぬを鬼といへり。また一つは力强く。心ざま惡からねど。生れ得て顔色赤く。目口大きく。齒嚙み出だして。おそろしげに見ゆるを鬼といふ。この三くさは鬼といふ名は同じくして。いたく異なれば。眞の鬼のかたちも定りたる事はあるべからず

ゆかりの色

紫色を。ゆかりの色といふべき故ある事なれば。源氏物語にも。紫上は藤壺の中宮の御姪の緣につくりたるなり。もと武藏野に。紫草とも。紫根ともいへる草あまたありしなり。紫草。一名鴉銜草。一名茈戻

も。恙なかりしは。箱根神靈の御守護なりし事。疑ひあるべからず

瘡　開

和泉式部が。瘡陰門といふ題にてよめる歌

筆もつにゆがみて物のかゝるゝは
これや難波のあしでなるらん

とよみしは。芦手と惡筆とにて。字音の惡筆を惡疾にかけてよみしならん。筆は碑密反にて。ヒツなり。疾は才栗切にて。シツなれば音たがへり。和泉式部は。さる辨へなきにはあらず。物の名なれば。せんすべなさのしわざなり。古今集はをさ〳〵誤なきを。物の名には芭蕉はばせうなるを。心ばせをはとよみ。後撰集には。紅梅はこうばいなるを。鶯の子をばいかにとよみ。蜻蛉日記に。岡はをかなるを。つゝじのおかしからましとよみ。その外にも又戀を木居といひ。四位を椎にいひかけ。のち〳〵は逢初を。藍染にいひかけなど。いとみだりがはしくなりにたり

次手にいふおかしをかし

蜻蛉日記のつひかけの物の名を證として。愛感のおかしを。嘲弄のをかしとひとつにせんとする人。ここにもかしこにもあまたあり。古言にくらき故にはあるべけれど。雅俗存亡を辨へぬ故なり。萬葉集なる牟迦志久と。續紀宣命なる於牟加志と。書紀竟宴歌なる於牟加志とあるなどは。愛感のおかしなり。又古事記に許志とありて。此者嘲咲也とも。仰レ天而咲ともあり。書紀には塢とのみもあり。その外。古く袁加志とも袁古ともあるは。皆嘲弄のをかしなり。愛感と嘲弄とは。うらうへのたがひこそあれ。いかでひとつものならん。後世にいたりては。雅言に愛感のおかしはあれど。嘲弄のをかしはうせたり。俗言嘲弄のをかしはあれど。愛感のおかしはうせたり。雅俗存亡といひしはこの事なり。さる故に混ひてひとつとなりしなり

和　詩

和詩といふ名目は。一にて其義三あり。ひとつは詩作して。人の許へ贈りたるに。其答の詩を和詩といへり。和は答ふる義なり。二は唐人の作詩を唐詩といひ。日本人の作詩を和詩といへり。これは。作者につきて。唐和とわけたるなり。三は詩をから歌と

ば。身の程々に隨ひて。媒妁の人を以て取り結び。親族一類かたらひ合せ。定まりたるうへにて。雙方の主君へ願ひぶみ奉り。御ゆるし蒙りて。吉日をえらび。親子兄弟。一族家門。皆禮服を著て參會し。酒宴歡樂して萬歳を謠ふは。子孫繁榮の基をおこす。男女交通の行ひ始の祝事なり。其後主君の仰言蒙りて。御前に酒肴を獻じて。禮服にて。婚姻の御禮申し上ぐるは。交通始すみたるよしの御禮なり。斯く表にあらはしながら。その行は。人の前にてすべき事にあらず。大祖二神の交通は。くみどにおこし給へり。くみどは。隱處なり。おこしは初發なり。然る故に。新婦を娶るは。新室を造る故に。新婦を新造といへり。よしや一室造らずとも。新婦を新造といへるは。古今通稱なり。されば。ひめはじめは。密事始の略稱なれば。編糅にも。姫にも。飛馬にもかゝはる事はあらず

武勇評論

元祿の頃。赤穂の義士敵家に亂入して。目ざす敵を間十次郎が。鎗もて突留めしを。武林只七かけつけて。大刀もて斬り伏せたり。さて互に首とらんとして。諍論に及び。既に傷及に及ばんとするときに。大石内藏助はからひにて。十次郎にとゞめをさゝせ。只七に首討たせたれば。雙方遺恨なかりしとなり。昔もさることあり。大江朝綱と。小野道風と。互に手書の評論して止まず。主上の御前にて。勝劣を決せんとて。持ち出でしに。勅して。朝綱の手書の道風に劣る事。たとへば。道風の學才の。朝綱に劣るがごとしとのたまひしゆゑに。雙方遺恨なかりし由。江談抄にあり。かれとこれと。古今文武。雅俗一對の美談なり

曾我のあだ討

新田義貞朝臣記云。曾我十郎五郎が。本望遂ぐるうへは。誠に高名至極なれば。聊その難なし。但。後輩是を學ぶべからず云々。若成人の後斯くのごとく。年を送らば。いかなる横死にも逢ひなば。長く本意を空くし。家の疵をも附くべし云々。とのたまへり。御理に似たれど。祐安殺されし時は。一万丸は五歳。箱王丸は三歳なれば。いかにもせんすべなかりしなり。十八年を經て。二十歳あまりになりて。本意をとげしなり。夫まで祐經の身にも。兄弟の身に

傍廂前篇

齋藤彦麿著

ひめはじめ

年毎の正月の始めにひめはじめといふ事。假名暦にあるを。いかなる事とも定かに記したる書もなければ。大方は。男女交通の始めとは思ふめれど。親子兄弟の中にては。つゝましさにさともえいはぬは。好色淫奔の心を恥づればなるべし。さる故に。小ざかしき人は。糄糅始めなりといへり。和名抄に糄糅比女とあるは。枕草紙に御衣糄糅とあるにて。衣につくる糊なり。今もひめのりといへる物なり。是資青記。海人藻芥などに誤りて。食物と思へり。よしや常の飯にしても。毎日三度つゝくへば。何ぞ其始をいふべき。こは(餅)いひ(飵)。かたかゆ(饘)。しるかゆ(粥)。の始もなし。酒の呑み初もなし。又飛馬始なりといへるは。別に馬乘初のあるに。心つかざるよりいひ出でたるなり。傳略抄に。ひめとは。駒の異名のよしいへることあれど誤なり。飛翔翥などの字は。鳥のうへにいへるなり。獸には。馳走駈などの字が當相なり。又。傳略抄に。すべて女の所作をいふとあるは。姫の字になづみたるなり。故師伊勢貞丈大人の云く。初春のひめはじめは。諸説まち／＼なれど。皆。とるにたらず。むかしより世俗のいひ來れる。男女交合の始なり。是子孫増長の大本にて。人間第一の大禮の根元なりといはれしは。比類なき卓論なり。そも／＼伊邪那岐。伊邪那美の二大神。はじめて男女交通し給ひしは。私の御慰事にあらず。高天原にて。天の御中主の神。高皇産靈神。神皇產靈神三大神の勅を承り給ひて。おのごろ島に八尋殿をたて。天の御柱をたてゝ禮儀嚴重に取り行ひ給ひしは。國々神々人々山海草木など生みなし給はん爲の。重き大禮にて。輕々しき戯れの慰事にあらず。是を始めにて。素盞嗚の大神の。奇稻田姫の命を娶りたまひ。彦穗の邇々岐の命の。木花咲耶姫の命を娶り給ひ。彦穗々出見の命の豐玉姫の命を娶り給ひしなど。御史を見てしるべきなり。今の世にても。中宮女御などの入內の式は。御記委しくあり。其外高貴の御方々の。御婚姻の式の結構美麗なる事。言語に述べがたし。下の下なるきざみにても。婚姻は一代一度の大禮なれ

傍廂後篇目錄終

傍廂後篇目錄終

傍廂後篇目錄

傍廂前編目錄終

傍廂前篇目錄

おのれいまだ若かりしころ始めての火の災に住どころやけぬれば河のべの濱町のほとりの蘆ぶきの屋にしばし住ひける頃かりそめに葦の假庵と號けつるが思ほえずひろごりてとほきさかひの人もしることゝなりにたればもとつ住かにかへりても猶かふべくもあらずそがまゝにさし置きつゝかたへにいさゝか立てそへしてふづくゑおく所として傍廂となん號けぬるかくていとまあるをり／＼にくさ／＼のあげつらひ書どもあらはしつる草稿の中よりいさゝかとり拾ひてたゞにかたびさしと名おほせつるがつぎ／＼につもり／＼て五十卷にもあまりぬるを又さらにこゝかしこぬきがきして木にゑらせたりえうなきたはわざとはしりながら猶いけらん世の老のこゝろなぐさにいたづらなるたは言書きつゞけぬるになんありける

嘉永六年の秋

八十六翁

齋藤彦麿

せらるゝものあれば。二度も三度も議して。其後又二ヶ月三ヶ月の日を待ちて救ふべき品あるか。又は天の助あらんかを見合せて。其後漸くにして斷じ給ふ。其日は太守寢食を安うし給はず。仁政を行ひ給ひしかば。後には法をば犯すものもなく。罪につく者もなかりきとぞ。まことにめでたき事なりけり

雨窗閑話　大尾

雨窗閑話跋

玆書。舊題曰二白川夜話一。傳以爲二　樂翁源公所一レ作。書肆名山閣。獲二之　朝士中山君一。將レ刻介レ余質二之桑名藩田内翁一。翁曰。公素無二此作一。世之所レ傳者。非也。然以レ余觀レ之。此書裒二輯近古事蹟一。而皆實踐之言。稗益匪レ尠。況於二論評評精一乎。夫書之有二論評一。猶三車之有二輪轄一也。輪轄密而車愈具矣。論評精而書益備矣。車而具焉。可二駕而行一矣。書而備焉。其可レ不二讀而法一焉哉。改題曰二雨窗閑話一。刻成謁二跋於一レ余。於レ是乎書。

嘉永庚戌孟冬　松代　畏堂　小林至靜識

濱松御在城の節。御側衆の内に茶宇の袴を着用いたせるものあり。神君御覽遊ばされて。其袴は何と云ふ物ぞと御尋あり。彼人御受に茶宇縞と申す由に候と申し上げければ。奢りたる事哉と御機嫌宜しからざるに因りて。其後着用仕らず。やゝ日數經て。神君先日の茶宇の袴いかゞ仕りたるかと御尋ありければ。破れて用ひられざるよし申し上ぐるによりて。然らば其破れたる切をくれよと上意あるにより。捧げ奉りぬ。御近習衆を召し集められ。此切は何といふ切ぞと御尋ありしに知りたる者なかりけり。其後本多作左衞門重次上京の節。是を上方へ遣はされしに。上方にも此切をしりたる者少くして。極めかねたりとぞ。かの袴を著たる人は。暫く迷惑の體にて引籠りありしが。漸々にして出勤しけるとなり

名君夜話幷仁心の事

一ある名君。近習の者を集めて。雨夜の徒然に宣ふは。其方共は。誰が大切なるかと問ひ給ふ。近習の衆詞を揃へて。君より外に大切なるものなしといふ。太守又何故左様に大切なるかと。今日恩顧を蒙り。祿賜はり。妻子等をはごくむ。其主恩いはん方なし。故に命をも奉るなりと答ふ。太守然らば。恩祿をあたふるに依りて忝きか。近習の者其通と答ふ。太守重ねて汝等に食祿を遣はすは。我力にてはなし。百姓共が骨折故にこそ。食祿もあたへ。我等に一命をも投げうつなれ。其筋を傳へ。其本をたゞしみよと仰せられき。此君甚孝心にましく〳〵て。御親君への御つとめ。言葉に斷えたり。常に宣ふには。輕きものは。平日親の傍を離るといふ事なき故。孝行もつとめやすく。親の側に居る事こそ浦山しけれ。我等諸侯の列にあれば。下ざまの如くにならざるこそ恨なれと宣ひき。いとあり難き事なり。此君家中末々迄の名前帳を。平日懷中し給ひ。閑暇の節。五日め六日めに誰々は久しくみうけざるが。替る事もなきかと尋ね給ひ。又は足輕中間迄の年齡を帳面に留め置き給ひ。何某は。當年いくつの老人なるが。達者なるかなど、問ひ給ひ。又病氣の樣子を問し召して。殊の外に案じ給ひ。人參烏目等を賜ふ。もし死刑に命

其場にて二百石を與へ給へり。また。半助幼少の時。江州彦根青龍寺にて。何やらん大法會ありて。門前に札を建つ。無緣の者は入るべからずとあり。半助子供の事なれば。押して寺内に入らんとするに。僧中出で、無緣の者入るまじといふ。半助笑ひて他人は女房にならぬかといひければ。寺僧閉口せりとぞ。此僧生涯此答話を忘れずして。終に大悟しけるとなり。井伊侯ある日。半助に戯れて。とふがらしは小さくても辛しと宣へば。喰ふ許に候と答へ申したりとかや。半助後に政事を預りて。江戸勤番に出でける時。半助と知音なる人。半助が方へ尋ね來たるに。我居間ことごとく板の間にして。只座する所一枚を敷けり。夜は小さき蒲團一つぎりにして。道具。家財。挾箱。一つにて仕舞ひ。尋ね來し人暫く物語に時移り。晝時分にもなりしかば。飯をたべてゆけよと。頓て膳を出だしける。さも黒き飯に青菜のはしらがしたる汁に。向には小さき赤鰯一疋を燒きて付けたる許なり。亭主久しぶりにて。汁と魚物とをくひたり。かへ給へとしひけり。扨中酒を出だすに。胡麻を擂り込みたる味噌を肴にして。客も亭主もよき程飲みて。酒を入れにけり。其上にて。亭主半助申しけるは。今日は御珍客故に。過分の馳走をいたし。我等も御蔭にて。よき相伴を仕り候とあり。客も興さめて。扨は今日のもてなしを。亭主にはよほど御氣をはらせられしにや。我らは平日もかやうなる品はたべ申さずといひければ。半助重ねて嗚呼の事をば宣ふ人なり。此上の馳走何かあるべき。若此上の饗應ありとも。それはもてなしとはいふべからず。奢といふ者なり。我等三十五萬石のしめくゝり致す役柄なれば。平日の行跡心入大切なり。あたら金銀を。いかに口あたりがよければとて。腹の中へ入れて。糞にして仕舞ふと云ふは。勿體なき事なり。是より上の食事をまゐる事。全くの奢の至りなり。向後止め給ふべし。我等平生は。半春の飯に香の物より外喰はず。以來を愼み給へと。意見しけるとなり

或人曰く。井上主計頭正就侯の物語給ふを。志賀瑞翁が若年の頃。聞き傳へし由にて。瑞翁よりまた聞きたりし由。はなしけるやうは。神君。

審して是を見付けて。早速目付中へ達しければ。頓て檢使を越されけるに。さもさはやかなる。鎗一筋。うつくしく拭ひたて丶。塀の庇下に。竹釘を打ち。掛け置きて。金紋の付きたる立派なる鎧櫃にもたれ。大小を帶して死にけり。目付役其鎧櫃を開き見けるに。はなやかなるおどしの鎧一領。軍用金として封じたる小判百兩あり。又垂木に澁紙包一つある故。引きときみるに。あたらしき上下一具。小袖袴等總べて勤の衣裳一式有り。腰物は。革柄にて。眞黑によごれたれども。身は氷のごとく研立(とぎたて)て。大和の來が作とやらん。百枚の折紙付の由。目付役とくと見改めて。其趣を主君へ逐一に達し申し丶かば。御感斜ならずして。たのみ寺に居ける子を召し給ひ。父の跡目相續申し付けられ。是迄の借金等悉く大守より返濟し給はりければ。殊の外ゆたかになりけり。其後森家津山にて斷絶の頃。人減しにて。かれが子孫も浪人けしるとぞ

岡本半助井茶宇の切の事

一井伊家の侍岡本半助は。世上に名高き男なり。半助幼年の頃。主人掃部頭侯。其家老庵原主稅助方へ振舞に行き給ふ事あり。半助兒小姓にて供をしたりけるが。其節世間一統に唐犬を飼ふ事。殊の外はやりけり。庵原方にも。君より賜ひたる唐犬一疋有りけるが。門の内に居て。大守來臨し給ふ時。わん／＼と吼えける。掃部侯御機嫌あしく。犬は主をよくしるものなり。此犬は主を忘れたり。其上耳も長く見苦しければ誰かある。あの犬の耳を切るべしと宣ひけるを。半助聞きもあへず。玄關に上り。釘に掛けてありける髮鋏を(馬の毛を鋏む具なり)取りて。太守の前へ差上げ。まづ御前より耳を遊されて御覽候へと申し上げしかば。掃部侯笑はせ給ひ。御氣色宜しかりきとぞ。又。此半助十五歲の時。掃部侯長野十郞左衛門と云ふ家老の方へ舞振に行き給ひし時。半助も供に參りける所。十郞左衛門方に扶持し置ける浪人有りけるが亂心して。人を殺して長屋へ取り籠り。諸人長屋の口に立ち居て騷動する時。半助振袖をきて。長屋の戶口に有りしが。人の袖の下をくゞりぬけて。長屋內へ飛び込み。彼浪人をしとめぬ。其手柄比類なし。井伊侯

ものあらば遣はすべしとて。悉く人に賜ひける。疊も琉球表の目の荒きに。縁をもとらで用ひられしなり。扨入部四五日めに。所の木綿屋にて木綿二反調ぜられ。小納戸の者を召して。此木綿。單衣に仕立度きまゝ。定紋を付けて。水淺黄に染めさすべし。我思ふ子細ある間。隨分當時はやりなる。町と在との紺屋へ一反づゝ遣はすべしと仰有りければ。奉畏て。其通にしたり。時にはやる所の紺屋なれば。人多く入り込みて。右の物染を見て。諸人大に仰天し。殿にはか樣なる麁末の品を召され候にや。是れを見ては。我々が着服大に奢の至りなり。嗚呼々々勿體なし〳〵とて。皆是を語り合ひ。吹聽して。自然に町在迄も奢を停止しけるとぞ。此家中にては。城普請有る時は。足輕共へ申し付けられて。是をいたすなり。故に堀をほり。石垣など築く事は。能く心得居たる事なり。ある洪水にて。石垣少し崩れ。其修覆を足輕共に申し付けられて。三百人許も打ち寄りて普請いたしける。筵を敷きて。其うへに刀を脱き置き。脇指一本にて働く事。古法なり。其最中へ太守見物に來給ひ。大勢の働をしばらく見分して。居給ひけるが。彼莚の際へずか〳〵と至り給ひ。脱き置きたる所の刀を手に取り。するりとぬき給ひたる所。さながら研立の樣子なりければ。太守御機嫌よく我男の刀は。皆よく研きてあるなりと。殊の外に悅ばせ給へりとかや。元より此家中武備の心懸厚く。下々迄も嚴重なる事なりしかば。今日此體を見て。いよ〳〵武を磨き。腰物など少しの錆にても。早速研きおけりとなり

或翁曰く。森家の侍に喜多見某と云ふ者あり。貧窮にして。難澁言語に絕せり。後には焚くべき物もなくして。家の柱。竹の簀子迄も折りくべて焚きける。妻も離別し。男子一人ありけるは。たのみ寺へ遣し置き。おのれひとりに成りて暮し居しが。困窮更に加はる事なし。後々は家宅雨もりて。疊もくさり。簀子は皆焚き仕舞ひければ。せん方盡きて竹の垂木をとゝのへ。生木を柱として。塀へさし掛けいたし。其中に住居せしが。門を閉ぢて人に逢はず。終に餓死に及びけり。近所の者は。久しく音のせざれば。不

謙信侯毘沙門并三淵大和守が事

一上杉謙信侯は。毘沙門を信仰ましく〳〵て。彼家の旗の印は。毘沙門の毘の字なり。盟約誓紙など有る時は。毘沙門堂へ打ち寄りて。上座へ謙信侯著座し給ひ。家老中一家中段々に居流るゝ事なり。或時隣國に一揆蜂起の沙汰有りて。間者を入るゝ事急なり。彼者に神文させんとするに。いつもの如く毘沙門の前にて。神文させんと云ふ。謙信侯曰く。事既に急なり。毘沙門堂へ連れて行けば。それだけ遲くなるなり。我前にて神文させよとなり。老臣等例に違ふとて遲々す。謙信笑ひて曰く。我あればこそ毘沙門も用ひらるれ。我なくば毘沙門も何かせん。我毘沙門を百度拜せば。毘沙門も我を五十度か三十度拜せらるべし。我を毘沙門と思ひて我前にて。神文させよとなり。諸臣納得して。彼者神文におよびけるとなり

一言語活達の氣象時にとりて發明なり。足利義政將軍茶を好み給ひ。或時三管領の家老を呼び給ふ事あり。茶席にのぞめる時。細川家の臣三淵大和守許一刀を帶せり。東山殿達て腰物を取るべしと御諚ありしに。彼者申すは。主人を持ち候者にて候へば。せめて一腰は御免下され候へと申しけるよし。誠に忠言とや云ふべき。金言とや申すべき

名君節儉并喜多見某が事

一ある名君。始めて入國ましく〳〵ける時。國に在りける役人夫々に命じ。壁をぬり直し。疊をかへ。腰張等きらびやかにいたし。泉水築山迄の花麗を盡くしけり。其日に至りしかば。太守機嫌よく入城ましく〳〵けるに。木綿布子に。同じ木綿鼠に染めたる紋付の單羽織。馬のりあけたるを召し給ひ。馬に打ち乘りて。城に入らせ給ふ。町在のもの。今日ぞ殿樣入部なるとて。見物山の如くなりしが。右の體を拜見して。肝をけしたりとぞ。太守入部の後幾程もなくして庭を潰し。築山を穿ちて水をたゝへ。是へ稻草を植えて田とし。自身世話有りて。百姓を呼びて農のいとなみをさせられ。民の艱難をしり。其年の豐作凶作を量り給へり。又。居間の腰張をへがし。松葉紙にて自身張り給へり。是まで前栽に植ゑられし樹木名草までも。望心の

ものあらば遣はすべしとて。悉く人に賜ひける。疊も琉球表の目の荒きに。縁をもとらで用ひられしなり。扨入部四五日めに。所の木綿屋にて木綿二反調せられ。小納戸の者を召して。此木綿。單衣に仕立度きまゝ。定紋を付けて。水淺黃に染めさすべし。我思ふ子細ある間。隨分當時はやりなる。町と在との紺屋へ一反づゝ遣はすべしと仰有りければ。奉畏て。其通にしたり。時にはやる所の紺屋なれば。人多く入り込みて。右の物染を見て。諸人大に仰天し。殿にはか樣なる麁末の品を召され候にや。是れを見ては。我々が着服大に奢の至りなり。嗚呼々々勿體なし／＼とて。皆是を語り合ひ。吹聽して。自然に町在近も奢を停止しけるとぞ。此家中にては。城普請有る時は。足輕共へ申し付けられて。是をいたすなり。故に堀をほり。石垣など築く事は。能く心得居たる事なり。ある洪水にて。石垣少し崩れ。其修覆を足輕共に申し付けられて。三百人許も打ち寄りて普請いたしける。筵を敷きて。其うへに刀を脫き置き。脇指一本にて働く事。古法なり。其最中へ太守見物に來給ひ。大勢の働をしばらく見分して。居給ひけるが。彼莚の際へずか／＼と至り給ひ。脫き置きたる所の刀を手に取り。するりとぬき給ひたる所。さながら研立の樣子なりければ。太守御機嫌よく我男の刀は。皆よく研きてあるなりと。殊の外に悅ばせ給へりとかや。元より此家中武備の心懸厚く。下々迄も嚴重なる事なりしかば。今日此體を見て。いよ／＼武を磨き。腰物など少しの錆にても。早速研きおけりとなり

或翁曰く。森家の侍に喜多見某と云ふ者あり。貧窮にして。難澁言語に絕せり。後には焚くべき物もなくして。家の柱。竹の簀子迄も折りくべて焚きける。妻も離別し。男子一人ありけるは。たのみ寺へ遣し置き。おのれひとりに成りて暮し居しが。困窮更に加はる事なし。後々は家宅雨もりて。疊もくさり。簀子は皆焚き仕舞ひければ。せん方盡きて竹の垂木をとゝのへ。生木を柱として。塀へさし掛けいたし。其中に住居せしが。門を閉ぢて人に逢はず。終に餓死に及びけり。近所の者は。久しく音のせざれば。不

謙信侯毘沙門并三淵大和守が事

一上杉謙信侯は。毘沙門を信仰まし〳〵て。彼家の旗の印は。毘沙門の毘の字なり。盟約誓紙など有る時は。毘沙門堂へ打ち寄りて。上座へ謙信侯著座し給ひ。家老中一家中段々に居流るゝ事なり。或時隣國に一揆蜂起の沙汰有りて。間者を入るゝ事急なり。彼者に神文させんとするに。いつもの如く毘沙門の前にて。神文させんと云ふ。謙信侯曰く。事既に急なり。毘沙門堂へ連れて行けば。それだけ遅くなるなり。我前にて神文させよとなり。老臣等例に違ふとて遅々す。謙信笑ひて曰く。我あればこそ毘沙門も用ひらるれ。我なくば毘沙門も何かせん。我毘沙門を百度拜せば。毘沙門も我を五十度か三十度拜せらるべし。我を毘沙門と思ひて我前にて。神文させよとなり。諸臣納得して。彼者神文におよびけるとなり

一言語活達の氣象時にとりて發明なり。足利義政將軍茶を好み給ひ。或時三管領の家老を呼び給ふ事あり。茶席にのぞめる時。細川家の臣三淵大和守許一刀を帯せり。東山殿達て腰物を取るべしと御諚ありしに。彼者申すは。主人を持ち候者にて候へば。せめて一腰は御免下され候へと申しけるよし。誠に忠言とや云ふべき。金言とや申すべき

名君節儉并喜多見某が事

一ある名君。始めて入國まし〳〵ける時。國に在りける役人夫々に命じ。壁をぬり直し。疊をかへ。腰張等きらびやかにいたし。泉水築山迄の花麗を盡くしけり。其日に至りしかば。太守機嫌よく入城まし〳〵けるに。木綿布子に。同じ木綿鼠に染めたる紋付の單羽織。馬のりあけたるを召し給ひ。馬に打ち乘りて。城に入らせ給ふ。町在のもの。今日ぞ殿樣入部なるとて。見物山の如くなりしが。右の體を拜見して。肝をけしたりとぞ。太守入部の後幾程もなくして庭を潰し。築山を穿ちて水をたゝへ。是へ稲草を植えて田とし。自身世話有りて。百姓を呼びて農のいとなみをさせられ。民の艱難をしり。其年の豊作凶作を量り給へり。又。居間の腰張をへがし。松葉紙にて自身張り給へり。是まで前栽に植ゑられし樹木名草までも。望心の

國府寺筍井島左近が事

一今は昔。播州姫路の太守たるひと。年々筍の生ふる時分。姫路の城下國府寺次郎左衞門といふ富家へ振舞にゆき給ふ事あり。かの國府寺は。由緒正しきものにて。太閤よりの御朱印頂戴す。境内に大藪有りて。年々筍出づる事夥し。其の太守を招請申す事先例なり。また。此藪へ入りて筍を盗むもの。必罰せらるゝ事律令なりとかや。ある時。筍の時分。太守の中間年十七八許なる若もの。ひそかに彼やぶに忍び入りて。筍を多く盗み取りけり。此事露顯に及び。吉岡某といふ家老のはからひにて。禁獄のうへ。彼者打首に致しけり。其節吉岡至りて出頭して。肩をならぶる者なし。こゝに其翌年夏。例の筍時分。國府寺次郎左衞門太守を招請し奉るによりて。吉岡もしたがひ行きけり。亭主次郎左衞門罷り出で、いつもの如く。藪の筍を御覽下されかしとて。先へたち案内す。太守見物ましまして。うしろを振返り。筍はいつもはゆるが。人はと仰せられて。涙をこぼし給ひければ。吉岡ぞつとしたるよし。下劣の小童の命一つといへど忘れ給はで。筍を見給ふにも。かれが死を、しませ給ふ。人君の思召いと有りがたし。凡是までは。大概此筍を盗む咎は。死刑に極まりしに。太守半句の謎を以て。其後は永代死刑をまぬかるやうに成りしこそ。德行とも申すべけれ

或人曰く。一言半句の事によりて。相違の有る事なり。島左近勝猛。大和の筒井順慶の家を浪人せし時に。困窮いふ許なし。和州吉野邊に近き親族有りて。しかも金銀澤山に持ちたり。然れども。生得吝嗇にして。中々人にかす事なし。左近度々無心を申し遣はせども。一向に取り合はず。此故に左近さまぐ\と思案して。辨舌達せる者を撰みて。彼者にいひ含め遣はすには。此程金子何程の入用に付き。無心申し度く候。尤强ひてとは不申候へども。親類の事故。其家の爲を申し入れ候。凡。金銀財寶を人に施すものは。子孫長久に繁昌して益榮え。施さぬ者は。災害必近きに來ると承り候と申し遣はしければ。元より大欲無雙の者なるに困りて。早速に金子調達しけるとぞ

らずして。皆行き過ぎける。扨殿の前へ出で給ひて。其禮義偏に君臣の如し。太守にも。彼是と御挨拶有りて。上座へすゝめ給ふといへども。いやいや勿體なし〳〵とて。始終手をつかへ。低頭して居給ひける。やゝ暫くして暇を告げ給ひ。歸館ありしが。其後は再來り給ふ事なし。惜いかな。この大國主將短命にして。人の慕ふ事甚し

或人曰。貞婦の操道を守る事。仰ぎ感ずべし。此母公ある時。側の女中に青く黄なる色の小袖を著たる有り。母公其のいろは何と云ふ色ぞと尋ねさせ給ひけるに。山まえ染とか申し侍る。しかし山まゐ染は誤のよし。實は山藍染のよしなり。みちのくの山藍と申す所より。染め出だす故とも。又は夏山の若葉の青々と。藍の如くなる故に。山藍染とも申すと承る。或は定家卿の「佐野の渡の雪の夕暮」の畫をかくに。馬に乘りて。右の袖をうち被ぎておはする樣にかく。是を山あゐの袖と申す事。畫家の傳授のよし。是はさのゝわたりの道せまきうへに。しかも雪降り積みたれば。袖はらふべき事も成りがたき程の。山の間ゆゑ。山あゐの袖と申すとも承り候。もとより古き事と見え。この色を定家卿の歌に

あはれしれ霜より霜にくちはてゝ
倶に古りにし山あゐの袖

と申す古き歌有るよし。承りおよび候と申しければ。御母公かさねて。その歌はそのみの兼ねて覺悟して居ることにやと尋ねたまへば。左樣にてはなし。さるとし。この御館に官仕いたし居り候瀧瀬とやらんに。承りはべりぬと申しければ。御母公大に感じたまひて。今ほどは。人の覺悟もわが覺悟にして申すこそ常とはなれゝ。歌物語よりその身の律義なるをこそ賞すれとて。綿絹を賜ひて。褒美たぐひなかりきとぞ。この女大切の用向などうけたまはり居る前夜は。粥。梅干。燒味噌より外。他のものを食はず。用心して。さて明日の用事をつとめける。貞實無二のものなりければ。御母公の口入によりて。ある歴々の侍のかたへ嫁し。仕合せを得たりとぞ。

食を共にすと承り及びぬ。遠慮なき間。打ちくつろぎ。我と共にたべられ申すべしとありしを。達て辭し申すといへども。聞き入れ給はず。役人の輩已む事を得ずして。太守の前にて辨當を開きけるに。佳肴珍味充滿せり。太守の辨當は。食籠に入れて香の物と燒味噌とのみなりければ。何れも大に痛み入り。額に汗して。面を得上げず。太守是を見給ひて。誰某は結構なる菜の物を設けたり。箸をかへして。我らにもちと分けてんやと。戯れ給ふ。座中大に迷惑し。是より段々辨當の奢はやみける由なり。又小家におはする所の御實母への孝心を盡くし給ふ事いふも更なり。然れども御母公の方より。終に大國主の屋敷へ來り給ふ事なし。是によりて老臣打ち寄り。評議の上。彼御實母を大國家の屋敷へ引き取り。知行千石を御臺所領として進じ奉らんとして。小家の屋敷へ行きて御實母に目見えして。右の由を申す所。御實母曰く。心ざしの程は嬉しけれども。太守の爲を思はれなば。必無用に致さるべし。其子細は我ら輕きもの、娘たる所。先君の恩寵を得て。剩男子をうみ得し事。勿體なく。其有難さ常に思ふに餘あり。然るに我子大國の家督を繼ぎ。大國の主將となる事。空おそろしき迄に辱しき思をなせり。然るを。今彼屋舖へゆきて。素姓つたなき老婆が。一所に住みて有るならば。太守おのづから我氣を請け得て。心ざし野鄙に落ち入り給はん事。絹の色々にそまる如くならん。されば。一家中一國の爲にもならず候へば。只此まゝに差し置き候へ。また千石の知行過分なり。我は當家に在りて。衣食とも乏しき事曾てなし。其千石の知行を分ちて。日比忠勤のものへ加增し給はゞいか程か歡び候はんと有りければ。老臣等も感涙を流しけるとぞ。其後一度大國家の屋敷へ來臨し給ふ事あり。始めての入來なれば。馳走殊に甚しく。家中の者共。門前へ盛砂。飾手桶など出だして有りけるを。御母公は屋敷の門前迄駕籠に乘り給ひしが。門前にて乘下し。女中二三人供につれ給ひ。裾小短にかゝげて。門番の下座して居けるを。丁寧に腰をかゞめて通り給ひける。屋敷内にては。大國家の侍中に逢ひ給ひても。餘り輕々しき故。先々にても。殿の御母公とは知

たへけるを。あへてとる事なかりしを。四五日もたちて。いづくよりともなく。樽肴にのし包み添へて。竈の前におきて歸りけり。察する所。彼の盜賊等かと覺ゆ。實に其道に至りては。鬼神をも感ぜしめ。たけき武士の心をもなぐさめ。男女の中をも和らぐ。はつかの一端とはいひながら。其感應深く思ふべし

賢女物語井山あゐ染の事

一　一萬石許取り給ふ諸侯の妾たりし人。男子を出生有りしかば。位を付けて貞正院殿とかや申して。小き館を經營し住み給ひぬ。こゝに又或大國主卒し給ひて。跡嗣ぐべきものなかりしに。此小身の諸侯と。深き因ありければ。國主方の家老眷族共打ち寄り。相談の上。彼小家の方へ申し入れ。男子を申し請けて。家を相續させんとて言ひ入れければ。不行跡にそだちし者なれば。大國の主將となりて。一國を治めん事覺束なし。幾重にも辭退に及び申すなり。大國の方にては。此君ならではと。ふかく思ひ居るうへに。往古同氏の家なれば。如何ありても乞ひうけばやと思ひ。老臣の面々詞を碎きて。數返申し入れけるに。漸く承知ありしかば。大に歡び。日を撰み。迎ひ取りぬ。扨彼の君小家よりして。大國の主となり給へば。定めて供廻り總體の美々しからんと。皆人思ひ居り。沙汰しけるに。曾て左樣の氣色なく。其家の古風を守り。格例を正し。公道なる事云ふばかりなし。平日召し給ふ所の衣服も。木綿或は紬のみにして。美服を用ひ給はず。隔日に役人共を召して。政務を談じ。公事訴訟理非殺伐を禁じ給ふ。たま〳〵死の罪にいたるものある時は。終日も食事し給はずして。顏色蕭然たり。月次の用日には。大書院に出座し給ひ。公事訴訟を聞き給ひて。理非判斷せらる。直に其場に於て。訴訟を聞し召しながら。御辨當を召し上がらる。是は少しにても。隙の入る時は。公事人。訴訟人。難儀せん事を察し給ひて。かくのごとし。扨辨當を披き給ふ時は。立會の役人。同座にて。一所に食し給ふ。始めて御出席ありし時。晝飯時分に成りしかば。いざや人々と共に。支度せんとありしに。何れも辭退に及びければ。大守曰く。ちつとも苦しからず。君臣心易き事。寢

し丶かば。夫感得し。呼び戻したりとなり。遠江國天龍川の邊に。老いたる賤の男。孫を失ひて。其翌年の七月于蘭盆と云ふに。彼孫が位牌へ靈供を備ふとて

　去年まで叱つた瓜を手向哉

此句を吟ずれば。恩愛の情涙も落つる許なり

　負ふた子に髮なぶらる丶暑さかな

園女が句なり。極暑の樣子察しやられ。實に女の句としらる。加賀の千代女が。夫に別れし時の句に

　起きてみつ寐てみつ幮のひろさ哉

是亦其場合の樣體思ひやらる丶なり。何事も上手に至れば。自然と妙あり。其角が句に

　夕立や田をみめぐりの神ならば

にて雨をふらし。不角が

　頼政がひろひ殘し丶椎もがな

にては位にす丶めり。其道の蘊奥に至りては。歌も句も。人情を和する所。各別の相違有るべからず

　某の人曰く。さりし年。總州邊にて。俳諧を好むひとり者の方へ。盗賊入りて。家内の器財悉く盗み取られたり。彼俳諧人を手嚴しく柱にくくり付けて。ちつとも動かさず。俳人のいふ樣は。我少しの望あり。今かくの有樣になれば。金銀財寶一つとして惜からず。しかし一つの願あり。笈の内に入れ置きたる。宗祇自筆の伊勢物語と。床の間に置きける末の松山の文臺をば。我にあたへ給へといひければ。賊將聞き届けて。さもあらげなく取り出だして投げやり。俳人の繩目をゆるして。盗賊どもは出で行きけるが。さるにても只今かれが乞ひたる。書物と文臺とは結構なるものにや。立ち歸りて奪ひとらんとて。戸外にた丶ずみ。内の容子を伺ひけるに。俳人は屈する色目もなく。燈かきたて。筆と紙とを手に持ちながら

　ぬす人も跡とざし行く夜寒かな

とくり返し〳〵。ひとり吟じゐけるに。盗賊等此句にめで丶大に感じ。今宵奪ひ取りたる道具どもを。悉く返しあたへ。か丶る無欲なる面白き人とはしらず。狼藉したりとて。金を多くあ

ければ。御感斜ならずして。彼侍に加增を賜はり。少人へは新知二百石とやらん與へ。小姓にして召し遣はれける。後年彼推擧したる侍。聊所存に叶はぬ事ありて。松江を立ち退きける。此時。彼敵討ちたるをのこも離散しけり。何も立ち去るべき子細はなし。されど我恩顧に成りたる侍立ち退きたる事なれば。己も離散したる事。義理甚深し。太守深く惜み給ひて。彼をめし歸され度き思召によりて。今一人の侍も本知にて歸參し。兩士共長久に忠勤を盡くして。永く好を結びけるとぞ

某の人曰く。劒を負ふといふ事。曲禮に見えたりとぞ。彼兩士のありさま。物語を聞くに。始終義理の深き事感ずるに堪へたり。惜い哉。かの兩士の姓名の知れざる事。此物語は。北村假水といふ者。享保の頃。人に語りけるを聞けるなりとて。我に物語する者あり。假水が親は長生にて。古き事ども多く覺え居て語りしよしなり

感情の發句幷盜人句を感ずる事

一先年江戸にて。乞食の頭たる車善七と。穢多頭團左衞門と爭論の事ありて。善七落度になりて。御成敗にあふべきを。いまだ幼少なれば。其家來七兵衞とかいへる者。主人に代り。討首にあふ。必死の忠義たぐひ有るべからず。かの辭世に

地獄にも木陰があるか夏の暮

匹夫下劣の身にては。其情をよくいひ叶へて奇特なり。されば。句はいづれも。歌の餘情に同じきなれば。感味すべき俳諧ども。あまたあり

早をと女やなく子のかたへうゑて行く

わかれても闇にみにくる螢つれ

此句どもを吟ずれば。親の子を思ふ情を思ひやらる

嘸さくら廓の內の菜種さへ

此句島原の遊女の作のよし。嘸と思ひやらる

すれ〲の中に花咲く木賊かな

此句は豐後國。ある片山里に貧しく暮して子獨もてる夫婦有りけるが。何やらん心に違ふ事ありて。をとこかの女房を離別しければ。女房悲しく思ひ。さま〲わびけれども。聞き入れざりければ。止む事を得ず。家を立ち出づる時。此句をいひ出だ

法を守る事また神妙なり

少年敵討并雲州の士詞の助太刀の事

一慶長年中の頃かとよ。播州姫路近邊へ雲州の侍にて。四五百石許とると覺しき侍旅行して。駕籠より出で。茶屋に腰を掛け。茶をたべて居る所へ。年の頃十四五歳程なる童走り來て。雲州の侍に申すは。某は親の敵をねらふ者に候處。只今此所にて見かけ候ゆゑ。討ち果たし候圖に候へども。敵は鎗を持たせ居り候故。手前も鎗にて勝負仕度く候間。近頃御無心ながら貴子御もたせある所の御道具。借用申し度く候なり。我等浪人の儀故。詮方なく候と申しければ。雲州の侍委細承知いたし候。御若年に候處感じ入り候。併右の敵討は。兼ねて御屆置かれ候かと尋ねければ浪人の曰く。兼ねて相屆け置き。今日此所にて勝負仕る事故。所の領主へも申し達し置き候。御氣遣下さるまじく候。侍曰く。しからば持鎗御用立たく候へども。主用にて旅行致し候へば。私の儘にも成りがたく。鎗は主人の爲の鎗にて候間。御用立申すまじ。去ながらうしろ立にはなり可ㇾ申候間。心強く思し召され候へといひければ。浪人大に悦び。とかくする内。敵も出で來れり。大身の鎗をさげ來り。たゞちに浪人に向ひて突きかくれば。浪人もこゝをせんどゝ働きけり。雲州の侍は挾箱に腰打ちかけて。これを見物する所。敵は大兵の手垂といひ。長ものゝ得道具なれば。浪士の方危く見えて。陰になりて見ゆれば。敵は陽に進みて付け入らんとする時。雲州の侍。其石突はと聲をかけゝれば。敵うしろへ振返りける所を。浪士飛び込みて切り殺しけり。然る處。敵の若黨共。彼少年に切りてかゝらんとしけるを。雲州の士。鎗の鞘をはづし。眼をあらゝげて。其方共は劍を負ふと云ふ者なり。引かずは相手に成るべしといひければ。忽靜まりけり。跡の事など。雲州の侍。念頃に世話して。彼浪士に向ひ。御手柄天晴なる事。感心いたし候。苦しからずば。我等主人へ御仕へ有るまじきか。某よきに推擧申べしと有りければ。少年答へて。段々の御厚志偏に御厚恩詞の助太刀にあり。返々辱き仕合に候。御取持に預り候はゞ。奉公申べしと有りければ。頓て松江へ同道して。主人へ其趣申し上げ

關白家の士に向ひて。彼是と申す者や有るべき。早々名乘りて丁寧を盡くし。下馬して通るべしとていひ止まず。蒲生家の侍の中さかしき者有りて。驛の役人を呼び。金子を出だすべき間。扱ひくれよ。我々私用にて旅行する故。別して喧嘩口論を好まず。たとひ過分の金銀を出だしてなりとも。内濟にいたし度きよし申しければ。驛の口利共。段々扱ひにかゝり。金子壹兩より廿兩に及べども。曾て聞き入るゝ事なく。いよ／＼逆立ちいひ募りければ。會津の衆十人許。悉く馬よりひらりと飛び下りて。何れも上著を一つづゝ脫ぎ捨てゝ。身輕になり。刀の柄に手をかけ。一樣に詞を揃へて申けるは。今迄は包み候ひしが。我々共は。奧州會津蒲生宰相家の者共なり。此度上方見物の暇を願ひて罷り登りて候。此所に於て不時の災難に逢ひ。迷惑ながら自己の旅中故。詞を下げて閉口に及ぶのみならず。さま／＼にあつかふといへども。御承知なき上は是非に及ばず。この上御挨拶申すべき詞もなく。絕體絕命の場所になりぬ。誠に止む事を得ざる仕合せなり。御立上り候へ。勝負仕るべしと云ひければ。豐臣家の侍。最初の詞には似もつかず。一言も答ふる事あたはで默然たり。其内に驛役人等が計ひにて。いつともなしに其場を拔けさせて。關白殿の侍は。間道を經て遁げ行きしかば。蒲生家の侍。今は何の益かあらんとて。又馬に打ち乘りて。上方のかたへ行きけるなり。彼蒲生家の侍は。年頃二十許を頭とし。皆若輩者にて。しかも小身の悴共のよしなり

某の人曰く。他邦へ至りて。君命を耻かしめずとは。是等の者をやいふべき。若輩なれども。其堪忍覺悟奇特千萬にて。勇猛また勝れたりといふべし。是併。氏郷侯平日武備の心懸厚く。物事綿密にして。掟嚴重なるが故なり。ことわりなるかな。佐々木六角家の屬下にて忠三郎と號し。江州日野にて僅の知行を領し。父右衞門大夫秀賢は。無雙の臆病人にて有りしを。氏卿侯家を起し給ひ。信長公の聟に成りて。秀吉公天下御治世後。勢州松坂十五萬石を賜はり。其後奧州會津若松すべて百五十萬石を下し賜はる。故に家中の敎令詳明なれば。下々までも。能く

亭主縫殿助の云ひけるは。愚妻儀も。御會に連り申し度き由申すに付き。如此しつらひて。翠簾の内に罷り在り候。あはれ御連中に加へられ給はれかしと申しける。程なく歌始りて。食事時分に至りしかば。年の頃四十計の女。さもけなげなるが。翠簾の外に手をつかへ。今日の御客來に饗應(もてなし)奉るべき品なし。如何はからひ申さんと有りしに。妻女とりあひず。短冊に歌を書きて出だされけり。折節春雨の降りければ

月さへも漏る宿なれば春雨の
ふるまふ物もなかりける哉

や、有りて。黒く燒きこがしたる餅を。反故につつみ。杉楊枝を添へて引かれきとぞ。

其の人のいはく。古風にして。其道に志深く。卽興の詠歌感ずるに餘あり。貧窮を屈佗せずして。風流に心を馳する事。又ありがたし。總じて。昔は歌の會に餅を出だして。勝劣の賞にあたへしによりて。歌賃といふとも。又內裡微々なりし頃。褐色の袴着たる男。小豆餅を箱に入れて。築地の邊を賣りありきけるに。女房達是を呼びて。褐々と言ひしより。餅をかちんといふともいへり。よしやそれは。ともあれかくもあれ。只。其會席の嚴密にて。風流を失はず。花奢を長ぜざる事。能々甘美すべしとぞ

蒲生家の士喧嘩并同家由緒の事

一蒲生飛驒守氏鄉侯の家士の中。十人許京都見物に會津より登り。尾州熱田まで至りぬ。時に秀次公の家中士。四五千石もとるらんと覺しきが。武具馬具いかめしく飾りたて。大道せましと來るに依りて。蒲生家の侍。少し道の側に添ひて乘りかけをはやめて通りけるに。秀次公の衆の鎗持の袖と。乘掛の馬子の袖と。少し障りけるを。其儘に行き過ぎけるに。豐臣家の衆。以の外立腹し。不禮至極なり。何方の家來なるぞと言ふに。蒲生家の侍直に馬より下りて。いんぎんに手をつかへ。拙者儀は。東國邊の者にて候。此度始めて上方へ登り。此所まで參りて候。何れにも不禮の筋これあり候はゞ。御許給はるべし。私用にて登り候事に候へば。主人の名は名乘がたく候と申す。豐臣家の侍聞きて大に怒りて。不屆至極なる事を申すものかな。當時

今源家の紋は笹を用ひ。平家は蝶を付くるなど。八島の繪に見ゆれども。是らは紋にてはあらず。其頃源平の家の合印なり。紋を用ふるも。信長公の瓜の紋など。大てい始のよし聞きぬ。其時は。皆紋形といふものを。木に彫り付け置きて。板木をおすやうに墨をつけて。三所五所など。其主々の物數奇次第に押しけり。今の紋よりは半分程もちひさし。黑き物へは胡粉にておす

某の人曰く。古風なる事尤殊勝にてしたはしく。さすがに古のしたはしく思はるゝなり。今世に殘れる所の古物ども。いづれも輕々しきもの多し定家の色紙などども。さりとはうつくしからぬ紙に書きたり。此色紙の事。元伊勢の國司北畠の什物にして。屛風一雙に有りけるを。花の下の宗匠宗祇勢州へ下りし頃。宗祇へ與へ給ひぬ。宗祇是を秘藏し置きけるが。火難にて片々燒失して。片々殘れり。其内にも。赤色紙の餘程紛失して。今僅廿四五枚ならでは殘らず。是世上にいふ小倉の色紙。百人一首の歌の內なり。其外にも高子の后の御衣。三州八橋無量寺といふ寺に有りし由。煤氣色にて地あらく見苦しき物とぞ。あるひは。名公名將の器財衣服多く傳ふといへども。一として花麗美艶なる事かつてなし。只。要用を専一にして。堅固なる事を好めり。質素を専にし儉約をおもとせしこと。まのあたりに思ひやられて。其古風感ずるに餘あり

小野木家妻女并かちんの事

一細川幽齋侯の和歌の門人に。小野木縫殿肋言鄕といふ人あり。丹州福智山の城主たり。關ヶ原の役に石田に一味して。則。細川の籠り給ひける。丹後田邊の寄手となる。此縫殿助始には。小身にて。年若の時よりして和歌を好めり。やゝ妻を設けんとするに。うたに志ある者を妻に定めんとて。品々求められけるに。其節吉田織部正妹歌に志厚きよし聞き及ばれ。媒して緣をむすばれける。縫殿助小身なる上に。貧窮いはんかたなし。或日和歌の會を催す。其連中は。小川土佐守。熊谷大膳亮。宇田下野守。木村宗八郎等なり。座定りて。かたへを見れば。翠簾の掛りたる所ありて。さも雲上めきたるさまなり。皆人不審におもはれけるに。

某の人曰く。孝子が物語誠にいはんかたなき事ども。其君たるや。其子たるや。其父たるや。鼎の足のごとく。道を守り。聖に叶ふ處。其本といへば。君の心よりしてこそ。老父が飲酒もやみ。悴が孝心も立ちたれ。其甘美なる事。味ひいふに絶えたり。有りがたき事にこそ

古代質素并小倉色紙の事

一むかし大猷公。御噺の衆とて。毎度登城して。居物語申し上げ。御夜話など申し上げられし。衆中十人あり。毛利甲斐守秀元侯丹羽五郎左衛門長重侯。蜂須賀蓬菴至鎮侯。林道春の類なり。此衆中登城の時。皆々屋舗より辨當參りけるに。鄰の間に寄合ひて。是を披き喰ひ給ふ。珍しき菜などある時は。互に取りかはして賞味し給ひけりとなり。毛利甲斐侯の辨當。菜に干鮭の有りければ。皆々是は結構なる菜なり。珍しとて。殊の外に賞味し給ひけりとなり。阿部對馬侯は。握り飯を紙に包みて。袂へ入れ御持參有りて。御中食の時は。是を召し上られ。其包たる紙に付きたる飯粒を拾ひてくひ。紙のしわをのばして。はなをかみ給ひし事杯有りしを。見たる者も有りとなん。最明寺時頼入道の母儀。障子を切り繼ぎて張り給ふ事。徒然草にみえたり。寬永の頃迄は。今の元結といふものなくて。紙を細くたち。こよりにして髮をゆふ。其節までは。老人は紙を引きさきて。其儘にしごきて。是にて髻を括り。其紙の先をもきらずとぞ。故に今古き繪草紙を見るに。其の如き髮つきのもの多し。古風なる事なり。若きものは。だてにとて。其しごきたる紙をわけめへはさみて置きなどしける。故に今も朝比奈などの畫は。其遺風を移すと覺ゆるなり。天文永祿の頃まで。其風儀間々遺れり。理なる哉。右大將賴朝卿。南都東大寺造營寄附金五十兩調達せんと有りしが。終にその金出來せずして。徒に成り行きける事。東鑑に見えたり。如斯の事なれば。中々花奢がましき事は少しもなく。天下の主將だに五十兩の金子調達する事あたはず。むなしく成りたり。其節の衣類紗綾縮緬といふ物は。名にのみ聞きて。見たる事なき者多し。皆布木綿の類ばかり。或は加賀より織り出だす所の絹を用ふ。紋といふものも。はるか後る出來ける由。

孝子寒氣のせつは。父が持ち出づる所の鋤鍬の柄。ひえんことをおもひやりて。ゐろりの火にてあぶりて。これをもたせ出だす。かく迄心をつくしゝが。老人若き時よりして冷酒をこのみ。毎日農作に出づる時。先冷酒を茶碗に三つづゝ飲み出づる事。一日もかく事なし。孝子是をいさめ度く思へども。是迄心にさかひたる事なければ。今更餘命もなき老父の心に違ひ。日頃の樂みをさまたげん事を思ひやりて。勞する事たぐひなし。孝子つら〳〵思ふには。此勞心中々我力に及はず。いざや神佛へ賴まんとて。毎朝氏神へ百度參を始めける。其殊勝さいはん方なし。やゝ日も立ちけるに。ある日老父いつもの農業より歸りて。泣然として。落涙する事あり。孝子其樣子ことなるを尋ねけるに。老父の曰く。さればの事よ。今日農作に往きたる所。勿體なき噺を聞きて。有難さに涙こぼるゝなり。殿樣には。平日御汁をも御あがり遊ばされず。ことごとく木綿の御衣服にて。繻袢まで白もめんの由。御肴も朔日。十五日。廿八日ばかり三度。かますの干物一枚御あがり遊ばさるゝ由。御近習の衆。御養生になるまじき由申し上げられしに。かく樣にして。下々の者をこやしてやりたしとの御意有りし旨をきゝ。誠に身にこたへ。骨に通りて有りがたく。覺えず涙を流して。其方に早くいひきかせ。我らも是迄の酒をやめ申さんとて。急ぎて歸りしなり。あゝ勿體なし〳〵とて。夫より一向に禁酒せりとぞ。此本多侯いまだ御幼少の頃。山へ遊びに行き給ひて歸るさに。ある所の庄屋方へ立ちよらせ給ひ。庭に莚をしかせ。其上にて田畑を見はらし。辨當をつかひ給ふ。所の庄屋。名主。組頭等も其傍に居れり。時に本多侯喰ひ給ふ處の飯一粒。土の上へ落ちけるをひろひあげ。いたゞきて是を食し給ふ。庄屋。名主。組頭どもゝ感歎を催しける。誠に明君とや云ふべき。依りて其配下の民百姓等富饒にして。靜謐はいふ許なし。ある時。樂翁侯本多侯にとひ給ふは。御領分の下民ことの外に潤ひ富める事。其聞え隱れなく候。如何の御仁政に因りてかと。御尋ね有りしに。本多侯御返答に。是は上一人の心に有るべき事に候と。仰せ有りきとぞ

軍をするには金が多く入るといふ。皆聞きて。其戯言ををかしがり。其金を以ていかゞすると問ふに。才六が曰く。まづ我軍法を聞き給へ。其多くの金を以て紀州に行き。紀州熊野にて蜂と蜜とを多く買ひ取り來て。人數にて持ち運び。樽などへ詰め置き。蜂は袋に入れ置きて。すはといはん時。大柄杓數千本にて。彼の蜜を汲みて敵へ打ち掛け袋の口を解きて。蜂を一時に放ちたらば。あまたの蜂むらがりてさし殺し。又はさゝれて痛む所を切りて入るならば。勝利を得ん事疑なしといへば。一座興に入りて。あごをかゝえけりとぞ

某の人曰く。僕が戲言をかしさ得もいはず。腹をかゝゆるにあり。是を以て思ふに。物みな勘辨なくしては成りがたし。僕が軍法に。先第一金を立てゝ。次に蜜と蜂とをいたせり。此三つの物をかれが戲言の道具立として。人の笑ひを招く。わづかの興を催すさへ。工夫勘辨と道具立となくては叶ひがたし。まして人たる道を行ふ。かならず工案なくては成りがたし。しかりとて餘り工案過ぎたるも。猶及ばざるが如し。器に水を盛りても。滿れば必あふれ。物喰ふにも。過ぐれば腹はりて苦し。あるもの、雜談に。一人の桶屋ありていふには。あはれ大風も吹けよかしと。かたはらのもの聞きて。大風をこのむは如何と尋ねければ。桶屋が曰く。大風ふく時は。砂石散亂して。往來の人の眼中に入らば。必盲人出來べし。然れば琴三味線屋繁昌して。猫を多く取りて皮を張るべし。さすれば。世上猫少くなり。鼠おのづからあれさわぎて。桶をかじりなん事案の内なり。其時に至りては。我等が商買の益となるべければ。大風を好むと答へけり。其まはり遠き事。いはん方なし。只工案分別もかぎりあるべし。程明道の杜のたぐひ。笑ふべきことならん

奥州泉領孝子幷名君行狀の事

一奥州泉の領主本多彈正少弼忠籌侯。領分の内に甚孝心の百姓あり。年頃四十餘父はもはや八十にちかし。其孝志。是までつひに父の氣にさかひし事なく。一圖に孝道をつくすことい ふべくもあらず。父もまた老年ながら。達者にて日々の農業を勤む。

眼を塞ぎ。顔をしかめ。涙をながして。御奉公〳〵と片息にて唱へ給ふ内。苦み少し輕く成りければ。眼を開き給ひて宣ふは。幽靈といふものは有るものか。なきものかと。側のもの申すは。隨分有るものにて候。逢ひたる者も多く候と申せば。然らば我ら幽靈と成りて。死にても君を守護し奉らんとて。卒去し給ひけるとぞ

某の人曰く。忠志無二の心。誠に此物語を聞く時は。袂をひたすに至れり。臣たる者。信綱侯の此時の答話を。平日胸にたくはへて有るならば。忠勤の欠くといふ事はあるまじ。しかはあれど。臨機應變にて。時勢に隨ひ。世上によく押し移る事有るべきにや。此程ある茶人の申すは。前栽の石燈籠へ火を燈す傳あり。闇の夜には。燈心三筋計入れて。火を細くす。月夜には。燈心七筋計入れ。火を太くするなりと。誠に此ことばは。よく今日の行事に用ふべきなり。赤穗の忠臣大石藏之介良雄は。平日の行狀。闇夜の燈心細きが如く。いざや主人の事に至りては。月夜の燈火の太きが如く。晴闇にて。其變ずる事甚奇なり。木村長門守が茶坊主にあたまをたゝかれて堪忍しけるを。臆病者といひふらしゝかど。難波の役に比類なき戰死して。名を擧ぐるに同じ。其場所にいたり。其氣の動く事。或は靜にし穩にし。猛くし勇ましくするなどの事。忠臣たりとも。其時の勢をしらずんば。深き淵に入りて。珠をとり得ざるに同じからん

進喜太郎が僕才六が事并桶屋物語の事

一元和初年の頃。幕府の御旗本に進喜太郎と云ふ人あり。瘡の療治をする事大名人なり。進が僕に才六と云ふ者あり。極めておどけものにて。狂言を好み。御旗本中の慰物にて。關ヶ原御陣に。左の腕を鐵砲にて打たれ。手叶ひがたく。用にたゝずといへども。主人喜太郎不便に思ひて。召し仕ひけり。後には膏藥を煉る事覺えて。金瘡の療治をするに妙なり。諸人可愛がり。所々へ賴まれて。殊の外はやりける。大坂御陣の時。皆々すゝめて手負の療治をいたさせよと連れて登り。わらじを作りて陣中へ賣り。或は手負の療治を請け取りていたす。はやる事比なし。ある時。才六例の狂言に。我々

か樣の事。專心得あるべき事なり。上樣御戲に。上意遊され候事は。何れにても戲れて御返答申し上げられよとなり。かの人信服して歸りける由。叉備前の池田武藏守利隆侯の家臣伴大膳といふ者あり。主人の寵愛を得て。出頭する事斜ならず。傍輩の者。是を羨みて。大膳に出頭すべき傳授を致し呉れよと望む。大膳眼を怒らして。其の心故に。寵愛をば得ざるなりと云ひて散々叱りしが。稍ありて面を和らげ申すは。勘氣を得る事を敎へよといふにてもなく。主人の氣に入らんと思ふ心が殊勝なれば。一口申して聞かすべし。近侍の輩上手に嘘をつくゆゑに叶はず。我は下手に嘘をつくが故。御意に叶へり。大名は正直なるものなれば。隨分不調法に見えすくやふに嘘をつくべし。上手のうそは。必佞曲なるものなりといひけるとぞ某の人曰く。曾呂利が與談。阿部侯及び大膳が人に示したる語。君に仕ふる者。よき心得になるべき事なり。或は邪曲姦佞才辨を以て。取り入り出頭する事。實に惡むべき事にあらずや。只太平の臣は心を正うし。身を直にして。媚び諂ふ事なく。時勢に應ずるこそ。聖人の法制にも叶ふべけれ。さもなき事にひぢをはり。我は顔に時めき出頭を鼻にかけ。人もなげにふるまふなど。和漢共盡すべからず

松平信綱侯幷大石良雄評の事

一松平伊豆守信綱侯。死ぬべき期に至り給ひて。御用の書付共悉く藥罐の中に入れ。子息甲斐守輝綱侯を呼び給ひて。我死なば此書付共を悉く燒きて。其灰を集め。かくの如く藥罐の中へ入れ。白き布切にて包み。紐を付けて首にかけ葬るべしとなり。其後悶絶し。苦痛有りしが。暫くありて眼を開き。近習の士を呼び念佛を唱ふれば。來世を助くるかと宣ふ。近習曰く。必往生疑なしと申し候と申せば。豆州侯又人は死ぬる時の煩惱忘怨にて。來世も其念を離れずと云ふは。誠かと問ひ給ふ。近習其如く申し候と返答すれば。豆州侯しからば。我は眼を塞ぎて。只御奉公〳〵と唱へて往生せん。年頃日頃御奉公を足らぬとのみ心に懸け居るなればとても事に。さきの世も此念を離れぬやうに願ふ事なりとの給へり。其内にまた病苦せめければ。

食ふと云ふ。飯の風味はどのやうなる物にかと問ふ。又答へて云く。斯と定りたる味はなけれども。只うまき物なりと。曾呂利また菓子はうまき物にかと。答へて曰く。うまくしてあまし。曾呂利。然らば飯は定まりたる風味もなければ。明日より飯をやめて。うまき甘き所の菓子許くひて居給ふべし。彼者聞きて。それは一向にならぬ事なりといふ。曾呂利大に笑ひて。されはの事なり。貴邊は菓子を以て君に進め。我は飯を以て君に進むる故に。いつまでも飽かるといふ事なく。甘きものは時宜によりてあしく。飯はいつにてもよき物なり。しかし何もうまき風味はなし。貴方は心に甘き所を以て。君の用ひ給はん所を期する故。大に了簡違へり。我は飯のさまでの風味もなき物なれども。退屈し給ふと云ふ氣遣なる事なきを事とす。春の寒きと秋の暑きと。年寄の健なると。君の寵愛とは。必久しからぬものなれば。其心を以て媚びず諂はずして。眞直に奉公し給ふべし。外に傳授もへちまもいらずと申しければ。彼侍も納得し。大に歡び歸りけるを。門口より呼び返し。かまへて飯の事を忘れ給ふな。菓子を喰はせて。虫をな出だし給ひそと申しければ。彼男腹を抱へて歸りけるとぞ。又御三代目將軍家。ある時櫓へ御上り遊ばされ、御小姓衆に仰せられけるは。誰ぞ此櫓の上より飛び候はゞ。褒美遣はすべしと仰せ出だされけるに。我飛ばんといふものなかりければ。御氣色損じて。阿部豐後守に承り申すべしとの上意なり。此故に。豐州侯の方へ行きて尋ねられける。に。豐州侯御申し有りしは。それは格別各方の不調法なり。左樣なる働のなきことやあるべき。かさねて御尋などあらん時。傘をさし候はゞ。心安く飛び申すべくと答へ申されよとなり。扨其後又々御櫓に上り給ひて。先日も申しゝ如く。此上より飛ぶ者あらば。何なりとも望む物をあたへんとの上意ありて。御戯れ遊ばされけるを御側衆。傘などさし候はゞ。飛び申すべくとありければ。將軍家御機嫌殊にうるはしくありきとぞ。かの御側衆後日に豐州侯の方へ禮ながら參られて。上意に叶ひし由申されけるに。豐州侯宣ふは。夫は一段の事なり。しかし以來とても。御身近に仕はれては

の會を催す。聖靈會の發句に

まさ〳〵と在すが如し魂祭季吟といふ句を吐き出だして。百韻既に半にも至る頃。季吟が悴の潮春。其時いまだ十歳にて傍に在りしが。小便に立ちけり。季吟が曰く。其方は何れにゆくかと。潮春小用に立つと答ふ。季吟曰く。我悴連歌を身に入れて。居たれをしたりといはんには。道に於て規摸なるべし。其儘そこにて小便をいたし候へと申しけるとぞ。是等雜談ながら。道に取りての心入れ。他事なき事感ずるに餘あり。林道春子幼少の時も。是に似たる事あり。千勝丸とか云ひて。家貧しく。其上父病屈してゐける折しも。ある方より鐘の銘を書き吳れよと賴み來る事あり。父は醫者にてありしかば。か樣なる事を作る事は。家業に似たれど。此程の病氣にて。むづかしく思ひ。等閑に打ち捨て置きけるを。度々催促申し來れるまゝ。千勝丸子心にもきのどくに思ひ。反故の裏へ件の鐘の銘を書きて。父に見せければ。是を見て大に驚き。且讃歎し。其文章華美にして。證意詳明なり。えもいはぬ面白き事なりとて感誦す。道春七歲の時の事なりとぞ。今に其反故のうらに書きたる鐘の銘は。林家にありと聞き及びぬ。又は道春父の服用する藥を煎じながら。火箸にて灰へ何やらん書きて居るゆゑ。父は是を見て。何を書きしにかと申しければ。鐘の銘の餘り遲くなり。度々催促申し來り。きのどくに存じ候故に。認めて見候と申しければ。父さらば。其うらに書きて見せよとて。反故を出だして。其うらに書かせて見る所。絕倫の事なれば。大に感稱すともいへり

曾呂利幷阿部侯伴大膳等が事

一臨機應變といふ事。治亂ともに第一入用にて。此働を知らずんばあるべからず。昔曾呂利。太閤の出頭たりし時。太閤の近習の輩。曾呂利へ尋ねて申すは。御邊。誠に君の思召に叶ひて類なし。いかゞしてかかくの如く御意には入るぞや。我等ども。御側に勤めて居れど。やゝもすれば御怒を蒙る事あり。此事貴方の傳授にあづからんといひければ。曾呂利曰く。毎日食をくひ給ふかと。答へて毎日

薩摩野郎の事并北村季吟子を叱る事

一寛永年中御上洛の節。諸侯方御供ありし中。薩摩中納言殿も御供奉なり。時に薩摩殿旅館水あしくして用ひがたきによりて。彼家中の下部野郎と號する者。毎日々々はる〴〵の所へ水を汲みに行く。ある時。例の野郎共桶に水汲み入れ。薩摩の旅館へ戻りがけ。最早館へ一町許にてありし時。年頃廿許の若もの走り來り。息を切りて申すは。只今跡の町にて喧嘩いたし。人を殺して立ち退くものあり。追手のかゝる身ながら。餘り咽の乾くなれば。其水一口たまはらんといひながら。卒爾に蓋を明けて。手して水を掬して呑みけり。野郎共これはと云ふ間もなく。過ぎ行きたり。扨野郎共其跡にて。十荷許の水を。其儘こぼして。又はる〴〵と一里餘の所へ汲みに戻る。道行く人いかにぞやと尋ぬれば。答へて曰く。人の呑みさしを主人には呑ませられずといひて。遠方の所を汲みに戻りし。其律義いはん方なし。實に信を守るといふべし

某の人曰く。薩摩の野郎實義なることといふ許なし。其德にいたれば。必其德あり。先年伊藤仁齋。京都堀川に出世の節。門人夥しく隨從す。其中に兩三輩。人柄惡しきもの有りて。様々の謀計をめぐらし。遊所芝居などへ出で行く。最早其謀計の術も盡きて。我親の此程病氣に取りむすび。おも〳〵しき様子なれば。見舞に參り度く候間。晩程御暇を賜はり候へと申せば。仁齋翁打ち聞きて。母儀の病氣とあらば。早速に行きて。樣子を伺ひ申さるべしと許しければ。彼もの僞り濟して大に歡び。いつもの遊所へ行き。沈醉して歸るに。最早夜も初更に近きに。仁齋は手燭を携へ袴を着し。威儀を正し。玄關へ出で、彼者の歸を待ち。いかにか。歸宅の遲きに因りて。殊の外案じ侍るなり。母儀にはいかがの様子にて有るか。段々快方にて有るかと尋ぬれば。彼者甚赤面して。迷惑に及びきとぞ。すべて仁齋翁が。平日の行狀其篤實なる事いふ計なし。故に其門下自然に恥ぢらひて。行跡を改めたりとぞ。人として。實なく信なきものは。顔有りて耳目なきに似たり。天和。貞享の頃。江州の北村季吟法印。花の本の宗匠となりて。連歌

向へ脊の高さ一丈計の大入道。両眼は鏡へ朱をさしたるが如き。妖物出で、。徳藏にむかひて。我姿や怨ろしからんといひければ。世を渡る外に。わけておそろしき事はなしと答へければ。彼大入道忽に消えうせ。波風も靜りければ。徳藏はからき命を助かりけりとぞ。徳藏後に此事を人に噺しければ。人皆奇異の思をなせり。或時徳藏北海乘りける時。風烈しく方角をもわかたず吹き付けしに。船中食物きれて飢渇に及べり。漸く新米の嚢四五束ありしを。潮にひたしかみしめて。口腹を潤し。命をつなぐ。同船のもの三四人ありしが。何れも聲をあげて泣き叫び。徳藏にいふは。か樣なる大風にて船を覆し。或は破船などせんとする時は。髻をはなち。帆柱をきる事と申すなれば。いざや其通にせんといふ。徳藏曰く。我は其事いやなり。船主と生れしうへは。只其職分を大切にして。外に心の動く事更になし。又。帆柱は船中肝心の道具にして。武士の腰の物の如し。凡侍たる者命が惜しきとて。腰の物を打ち捨つといふ事や有る。命は天命なり。風は天變なり。人力に及びがたし。また髻を拂ひ。出家に成りたりとも。などや佛神の歡び給はん。命惜みての仕方なし坊主と。決句笑はせ給はんか。我は戰場にて討死の覺悟なり。天の助あらば助かるべし。さなくば。此處にて死すとも本望なりとて。敢てたじろぐ氣色なし。其内に風靜り。波をさまりて。難なかりきとぞ

某の人曰く。桑名屋徳藏賤しき下郎たりといへども。その志のたくましく丈夫なる事。中々いはんかたなし。妖怪の者出現して。詞をかけし時。世渡の外におそろしき事なしといひしは。まことに名言といふべし。卽座の氣轉頓智のこたへ。すぐれたる所あり。次に北海にて難風のとき。徳藏が詞勇猛にして。本意を失はず。是を以て思ふに。みな人徳藏がごとく。わが職分のために命を捨つる事をもいとはで。天道にまかするところ。敎にかなへり。なかんづく。武士たるもの徳藏が心いれにてあらば。治亂ともに役にたゝんこと相違あらじ。かりそめのざれ物がたりのやうなれども。身にうけて心に思ふべきことなり。

に授兵を乞ひ奉り。歸路の節。番兵に見付けられ。河原にて傑にかけられし時。勝高三十八歳。辭世の歌に

我君の命にかはる玉の緒は
何かいとはんもの、ふの道

寶永の頃。駿州島田の出生に。かしく坊といふ者あり。狂歌を好み。俳諧をよくす。所々雲水して一所不住なり。多藝にして。人の好む所にしたがひ。琴。三味線。鼓。笛。太鼓何にてもなさずと云ふ事なし。彼の坊主富士をみる癖ありて。毎年二度づゝ駿河へ行く。其道すがら一錢の貯なし。喰物を乞ひ。錢を貰ひてゆく。島田の者共申すは。此所出生の地なれば。少しは外聞をも思ひて。乞食をばやめ申せよと有りしに。耳にもかけず。恥づる氣色もなし。其後府中寶臺院門の扉にもたれかかりて死せる乞食あり。皆人立ち寄りてみれば。傍に覺束なき短冊に。辭世と覺しくて。一首を書けり。其歌に

富士の雪とけてはもとの墨衣
かしくは筆の終なりけり

某の人曰く。細川侯は大名。强右衛門は侍。かしく坊は乞食なり。其位はたがへども。其志は皆一つにして。實に豪傑と云ふべし。まさかの時になりて。轉動するは衆人の常なり。或は天地の急變。水火の災。人間の生死。あわてゝ日頃の覺悟いづちへか失せぬる事多し。然れば眞實に其心を勵みなば。などか其期に至りて周章する事あらん。細川侯。强右衛門。かしく坊共に平生其心懸骨髓に入らずんば。其際に臨みて。かかる秀歌は出づまじ。時の變を思はんものは。かねて其事をはかるべし

桑名屋德藏が事并妖怪と答話の事

一或者の物語に。桑名屋德藏と云ふ者。名ある船乘の名人にて。所々難海共を乘りし事あり。此德藏申しけるは。月の晦日に出船する事。必斟酌すべしといへり。或時。德藏いづ方にか有りけん。只一人海上を乘り行きしに。俄に風かはり。逆波立ちて。黑雲覆ひかゝり。船を中有に卷きあぐるやうにて。肝魂も消え入るべきを。德藏もさすがしたたか者なれば。ちつとも動ぜずして。蹲踞ける。

某の人曰く。又右衛門が所行古風にして。武備を崩さゞる所尤賞すべし。扨又知行をわけて與ふる事。是も昔の一風にして殊勝なり。民と共に樂しむと云ふ心持にして。甚面白し。同じ福島の臣に。可兒才藏は。大功武邊の者にして。關が原の時。見事なる高名をし。其外一代の戰功をかぞふるにいとまあらず。笹を以て捺物(さしもの)とする故。笹の才藏と云ひ。生得徒者にて心輕々しく大祿を好まず。福島家より七百石を得たり。爰に才藏が郎等に。竹内文右衛門と云ふ者有り。いつにても知行を半分わけにすべしといふ約束にて勤め居る。正則よりの俸祿。七百石の內。三百五十石文右衛門に分ちあたふ。是も又右衛門が所行に似たり。扨才藏は。生得愛宕山を信仰して。我は愛宕の化現なりといひ。或は太郎坊は我なりなど丶云へり。人皆狂人かと思ふ。才藏常にいふは。必愛宕の縁日に死ぬべしと。果して六月廿四日に死せり。其前宵より經を讀誦し。呪を唱へ。身を清め。精進潔齋して。身に甲冑を帶し。弓矢を手にもち。牀几に腰をかけて。六月廿四日の夕方死去せり。今藝州吉田邊に才藏が石塔あり。心ある旅人は。馬より下り。水を手向け。花を捧げなどすとぞ。是は福島家浪人の子孫。此物語をしたり

細川侯和歌幷かしく坊の事

一慶長五年庚子九月。石田亂の時。細川幽齋入道藤孝侯は。居城丹州田邊に楯籠り給ふ。寄手大勢取卷きて。きびしくせむといへども。丈夫に持ちこたへて金石におなじ。于ㇾ時幽齋侯は。文武兩道の達人にして。和歌に志深く。古今の傳授を得給ひて叡感に預り。主上にもひとかたならず思し召されければ。此度の軍に幽齋の命を殞さん事をあはれみ。且古今傳授の斷絕せん事を惜み給ひて。　條殿を勅使として田邊へ遣はさる。勅使應對の場所へ。城外より鐵砲を打ち込みしに。三條殿と幽齋侯との間を玉通れり。幽齋侯とりあへず

こゝをさしてうつ鐵砲の
　玉きるは命にもかふべきや此道

鳥居强右衛門勝高は。奥平九八郎信昌侯の家士なり。參州長篠合戰の時。城中を忍び出で丶信長公

り。城の四面を打ち圍みて備を張り。もしもの事あらばと。其用意專なりしを。相違なく渡すべきに定まりて。日限極りしかば。諸侯方城中に入りて。それ〲の場所を請け取らる。此時。吉村又右衞門は。城門の番頭にて有りしが。松平越中守定綱侯。此城門を請け取り給ふに。又右衞門が英名兼ねて知り給ふがうへ。彼が所體さも大功の者と見えければ。被召抱度旨。御直に御意あり。又右衞門は仰難有奉存候へども。拙者儀は寸志の望も御座候へば。御奉公は仕りがたく。御免を蒙るべしと申すにより。定綱侯彌えたはしく思し召され。いかなる望にてあるか。いかさまにも此方の身に叶ふ事ならば。聞きてとらせんと有りければ。又右衞門の曰く。我等主人は五十萬石以上ならでは。なり不申と申す。越州侯曰く。それはいな事なり。然らば高知を望み申すにや。某小身たりとも。随分大祿にて召し抱へ申すべし。是迄の知行一萬石と聞き及ぶ。五千石にてはいかゞと仰せられたれば。又右衞門かぶりを振りて。いや〲それにては御相談出來がたく候。某が眷族譜代の者共多く候へば。彼等を扶持し申さねば成りがたく候。我身一つは少々の扶持合力を得候へば濟み候へども。身に付くもの共の不便に候まゝ。大祿を好み候と申しければ。越州侯則一萬石にて。吉村を召し抱へ給ふ。吉村を在所へ引きこさせ。夫より屋敷をたまひ。城内へ入れ。則。家老職に命ぜらる。時に吉村が眷族共追々あとより來るもの。其人數擧げてかぞへがたし。或ははげたる具足櫃を脊に負ひ。ふるつづらにちぎれ鎗を入れて。あら繩にてからげ。鎗杖を突きて來る者もあれば。柄糸のきれたるふる大小をさして來るものもあり。異形の者共。毎日毎日又右衞門が來りし日より入り來る事。中々二三萬石の家中にても及ぶまじき人數なり。越州侯の家中肝をけし。奇異の思をなす。是等は皆吉村が緣者。或は譜代の家來共にて。何れ由緒あるもの共故。廣島近在五七里の村々に差し置き。百姓などさせ。すはといはん時の役に立てんとて。少々づゝ扶持をあて行ひ置きたる者。吉村が跡を追ひ來ければ。吉村知行を割り付けして與へ。愛憐を加へきとなり

を鍬にてものし。蓑笠引きかぶりたるさま。さすが風流に有りて。深切さいはん方なく。そゞろに面白く興有りて。とかういはれざりしに。鱸の吸物は何事ぞや。總て茶は懇志を盡くすを以て第一とす。侘(わび)を以て風流とす。おのれ我子にてかゝる辨もなき事のあるべきか。不埒至極の者なりとて。散々に叱りければ。道安も大に迷惑し。さまざまに佗言して。漸に父の機嫌を直しけり。是よりして。道安茶道の心入。總て物數奇よくなりて。骨髓に入りきとぞ。古人の物語なり。是等よき戒なり。豐臣家のわり粥。道安が鱸の吸物。みな奢を停止し儉約を守る手本とならんか

吉村又右衞門幷可兒才藏が事

一吉村又右衞門は。元福島左衞門大夫正則侯に奉公して。一萬石を賜はり。元より武功勇猛。世に普く知る處なり。元和の晩年。正則御不審を蒙り。御勘氣を得たる時。在所藝州廣島にて。家中の者共籠城の用意あり。其者共には。福島丹波。小關石見。大崎玄蕃。松田下總。林長兵衞。吉村又右衞門。村上彥右衞門等なり。城内へ打ち寄り。評定す。丹波が曰く。主人正則の墨附到來して。城を渡すべき由。命せらるゝならば餘義なし。既に其沙汰もなきまゝ。いざや城を枕にせんと。威高(いだけだか)になりて申しけるを。皆尤なりと同じ武具を携へ。頻に籠城の支度なり。此時大崎玄蕃は柱にもたれかゝりて。居眠りゐる。吉村又右衞門は指先にて疊へ手習して在りけるを。丹波が曰く。大崎吉村御兩所は。思召いかんか。臆し給ふかと怒りければ。玄蕃申すはいらぬ事にて候。其樣なる事は。はやり不ㇾ申候。少の間御待ち候へ。頓て殿よりの下知狀參るべし。丹波殿は年寄りて。短氣に成り給ふかと云ひて取りあはず。又右衞門は。林長兵衞よといふ。其内正則自筆狀到來して。相違なく城を開きて渡すべし。違背あらば。我等爲に成るまじとの文言なり。城受取の面々は。松平宮内少輔忠雄侯。松平河波守忠鎭侯。堀尾山城守忠晴侯。京極修理亮高知侯。松平土佐守忠義侯。本多美濃守忠政侯。松平越中守定綱侯。同美濃守定房侯等な

(此時入道して常休といふ)に向ひて。和尙いらぬ僧の腕立おかれ

も舞臺の上にて。自餘の人々には目もかくまじき所。あやしの百姓らが。囁きあふを。きつと見咎めしこそ。流石名人なれ。それのみならず。樂屋まで呼び入れて底意なく。尋問せし事。其己が業の道を求むる端にして。いはんかたなし。世の人藝術に凝り執心し。其藝の奥義を得。或は妙所に至る。皆道執心たるが故なり。されども。藝術に執心する人は多けれども。人の人たる道に執心する人は稀なり。觀世が百姓にとくさの鎌の手を聞きたるが如く。賤の男賤の女たりとも。其道をきかん時には。妙所に至る事有るべし。おろそかに思ふべからずとなり

太閤割粥被二召上一并利久敎訓の事

一豐臣秀吉公紀州高野山へ詣うで給ひし時。御勝手へ御好有りて。割の粥を召し上られ度き由命せられし事あり。時に料理人ども數人打ち寄りて。早速製して奉りければ。秀吉大に御機嫌よく。高野には臼のなき所なるに。早速に出來たる事神妙なりとて。御氣色よろしかりき。其後御歸路の節。途中にて誰が申し上げしか。高野にて召し上られし割粥は。臼にて製したるにはなく候。御料理人。御賄方。御膳掛の者共。大勢にて爼板の上にてきざみ指し上げしなりと申しければ。秀吉公大に怒り給ひ。不屆至極の者ども哉。某は料理人共。臼を持たせ來りしものぞと心得て。用意の程を賞美したるに。案外なり。某が今の勢ならば。一粒づゝけづらせても自由なり。しかし左樣なる奢はせぬものなりとて。御叱りを蒙りきとぞ

某の人曰く。此物語は人のよき戒なり。人の君たる人。必。物の自由なりと知りて。其出來まじきをしらず。其心よりは自然と奢も長ずる物なり。昔利休が子の道安。雪降の日。茶會を催して。父の利休を申し入る。利休は道安が方へ行き。路次入りの時。前栽の方をみれば蓑を著。竹笠をかぶり。鍬をかたげ。畑に生ふる菜をほりて。家に入るをみれば道安なり。扠亭に入りて。茶も濟み料理出づ。利休もいつ〳〵より機嫌よく吸物椀の蓋を取りてみれば。鱸と若菜なり。利休氣色替りて申しけるは。先刻路次入りの時佇みて見居たる處。園へ出で、。雪中の菜

の百姓共は。さも思はぬやらん。何かひそ〳〵囁合てうけず顔なりけるを。觀世。舞ひながら此體をきつとみとがめ。扨。能も終りければ。木戸へ人を遣はし。かく〳〵したる衣類著たる百姓十人許。木戸を通らん時。必。留め置き申すべし。尋ぬる子細有りといひやりければ。程なく能濟みて。木戸を出でんとする時。かの百姓どもを差し留めけるゆゑ。何事かと大に驚きしを。觀世さわがぬやうに樂屋へ呼びて申しけるは。今日我等木賊刈を舞ふ。其出來たる事。凡。あるまじく思ふ心にて仕たりしかば。果して貴賤群集。おしなべて。感心の樣子にみえたるが中に。其方共は。さも思はぬ樣子にて。何やらん打ちひそみて。囁合たるはいかに。其さまふしぎに思ふによりて。子細を尋ね度く。木戸にて留めさせしなりと申しければ。百姓共申すは。我等事は。信州のその原と申す所の土民に候。今日木賊刈の能興行有るよし承り及び。我等も木賊かる者共なれば。なぐさみながら能とやらんを見物して。一生の噺の種にもせまほしく思ひて。今朝より芝居して見物する所。心なき賤の我々ども、感心して。面白く侍る。去りながら。只今遊ばされたる内。いで〳〵とくさからうよと申す所。鎌の御手我等が仕なれたるとは。聊替はりある故。申す事にて候といへば。觀世の曰く。それは。いと面白き見咎めやうなり。いかにして汝等はかるかと尋ねければ。されば。とくさはむかふへ一刀切りにかり申し候に。今遊ばされたるを拜見いたし候へば。同じ所を前の方へ二刀にて。御かりなされ候を見申して候。あれにてはとくさはかられ申すまじく候と云ひければ。觀世大に感心して。物とらせつゝ厚く賞して戾しぬ。その後。觀世江戸にて。とくさ刈をせし時。先年信州の百姓らが評判せしをまもり。向の方へとくさを刈りければ。其能の出來たる事。大かたならず。みな。目を驚すに至れりとぞ

某の人曰く。智者にも一失有り。愚者にも必一得あり。其道に入れば。其道を知る。信州その原はとくさの名所にて。かの百姓ら數年其とくさを刈りて。手練し居る事なれば。觀世に鎌の手の違ひたりと申しける事。尤殊勝なり。觀世

一向に用ひられず。我父ふかく是を歎き。壯年の時より大願心をはつし。藥師如來へ立願して。かなたこなたに井戸を堀りたる事。八十ヶ所に及ぶといへども。更によき水を求め得ず。最早勢力も勞れ。老年に及びて。漸く此所の井を堀りあて。終に其翌日果て申し候。其故に此井をば。五左衞門井戸と唱へて。今に親の名を唱へ來り候。是も最早四十年許にて候が。夫よりして。一村うちより。此姥に扶持を呉れ候ひて。此井の主になり。いと安樂に暮し申し候も。父のかげにて候。今日は。殿樣御通と承り候ゆゑ。井戸守の事に候へば。此所に罷り出で候と申したり。余この話をきゝて。大に感心し。當座の褒美をつかはし。且近習の面々へ向ひ。申しきかせしは。皆只今の物語を聞きしか。かれが親。一村の自由を達せんとて。辛苦萬勞して。八十餘の井を堀りて。終によき水を堀りあて。其翌日果てたりとかや。人君たるもの。かれが精心の半を以てせば。賢君名侯と稱すべし。かれは一村の助にせんとて。命を捨て、井を堀り。一國一家の主。此心を以て。家中始め町在の者。末々まで永久の爲を思はゞ。などか清水の井を堀りあてざらん。皆眞實に思ふ心なくして。只。おのれが爲のみにして。人の事を思ひはからず。彼親仁。既に命終るといへども。今に其名を井に呼び。老婆を扶持し。一村の者ども。此水のあらん限り。五左衞門が所業の忝き事を思ひ。いつ迄もかれが功の廣大にて。深厚なる事をいひ出だすべし。名は末代まで傳はり。人は一代にて朽つることとあり。我人しらぬはあらねど。行ふもの少し。五左衞門井戸の事をめいめい身に引きあてゝ心得べしと仰せられき

観世一代能の事幷木賊刈の事

一享保年中。観世太夫一世一代の勸進能を行ひ。京都の河原に舞臺を造り。棧敷を搆へ。芝居を興行す。見るものは蟻の如く。群集せり。初日か二日めかに。観世木賊刈を舞ふ。其面白き事見るもの感に堪へたり。爰にいかにも田舍めきたる百姓と覺しきもの。十人許連れ立ちて。能を見物して有りけるが。數千人の人數。悉く讃歎する中に。彼

様の障礙もなく波風たゝずして穏なり。色々時の風儀に移り。或は形風俗物數奇など。時の流行に隨ひなすものに正しきもの一人もなし。然れば人は大概其かたち物數奇となりとにて。心根も見ゆるものなれば。兼盛が「忍ぶれど色に出でにけり」の歌よきたとへなり。しのばんとすれども。其心の善惡は是非色にあらはれ。形に顯はるゝものなれば。其心得肝要なり。

一里塚始并五左衛門井戸の事

一御三代目　將軍家の御時。諸國旱して死する者數をしらず。別して往來の旅人。道をさりあへずして死せり。是に依りて土井大炊頭利勝侯。上意を經給ひ。往還筋道の左右へ松を植ゑしめ給ふ。大に旅行の助となれり。然れども行く先も〱皆松原のみにて。旅人の退屈せん事を思ひはかり。かさねて大炊頭殿御了簡にて。一里塚と云ふものを築き。一里づゝに拵へ置くならば。しかるべからん。されども。松はかの道端並松とまがひもすべき間。如何すべきと。上意を伺ひけるに。大炊頭申す所尤至極理にあたれり。一里塚には。餘の木を植ゑさせよと仰せ有りしを。大炊頭殿老年にて。耳遠くおはしければ。餘の木を榎木と聞き誤りて。榎木を植ゑしめらる。今に一里塚に榎木を植うるは。此故なりとぞ。

某の人曰く。是誠に不易長久の遠慮なり。今において往來の旅人歡ぶ事限なし。其並松の間をゆけば。夏は日をよけ。暑を凌ぎ。冬は風を除け散らして惱なし。其上一里塚といふもあれば。今一里〱と思ふ競ひ心の。一圖に此塚をたのしみに。道のはかどり。格別にして遠近をはかり行程の便にする事。天下の人大なる爲なり。是につき。或君の曰く。余が家を繼ぎて。領分のうち在々を巡見の時。金方村とかやいふ處の片隱に。うつしくき水湧き出づる井あり。余こゝに立ちよりて。その水を掬し見るに。其清き事いふ許なし。時に傍に六十餘の老婆うづくまりありけるを召して。此水は至りて清淨水なり。里には此水を遣ふにやと尋ねたりければ。老婆の曰く。凡此あたりの民家二百軒許。皆此水を遣ひ候。それにつき。物語の候。此村元來水あしき所にて。

本多流髪并家風の事

一世上に本多風と云ふ髪の結ひかたあり。是は昔。本多中務大輔忠勝侯家中の風儀を定め給ふとぞ。諸士より下々足輕中間迄も。髪を。前七分。後へ三分と厚さを定めて。紙をこよりに捻り。七つづつ巻きて髻を結ふなり。是を本多風といふとぞ。いま異様の髪なして。本多風と云ふは。大にあやまれり。今に忠勝侯の子孫は。是を慕ひ學ぶ中にも。本多彈正少弼殿家には。めんみつに是を守り。棒刀巻下緒とて。三尺許の長刀。少しもそりなきをくり形の上下へ下緒をきり〳〵と巻き留めて。是を帶し給ふ。著類は本多柿白裏なり（本多柿。差洗柿。郡山染とも云ふ。中頃本多大内記郡山に住居の時。多く世上へ染め出だす故。郡山染ともいふ）勿論裏表とも木綿にして。其仕立様は節出（ふしだ）し行短（ゆきみじか）といひて。丈を短くして。足の踝の出づる様にし。ゆきも短く。立ち振舞仕能きやうにとの仕立なり。腰物拵は。塗鮫。茶糸。無地。鍔。赤銅。目貫緣。同じく石目頭は。角の一文字巻懸鞘は。柚はだたゝき。甲斐の口黒下け緒なり。平日質素第一にして武役軍用を重んじ。美食を好まず。學問を勤むといへども。詩文章を禁ず。朝はとくよりおき。弓馬槍太刀に身をこらし。體をきたへ。寒暑に肌をさらすを以て業とし給ふなり。假初にも柔弱なる事を嫌ひ。潔白を表とす。御子息がた御元服までは。革柄大小。鞘は銅の胴かねを入れて。そこねぬやうにしてさゝせ給ふ。或時近習の者。鼠色の足袋をはきて。彈正殿前に出でたり。彈正殿御覽ありて。其足袋を御所望ありしに。彼者憚り多しとて。辭退す。苦しからずとて。無理に乞ひ給ひ。扨。其後屋鋪にて召し給ふ所の足袋は。鼠色になりにきとぞ。是何が故なれば。御儉約の思召より出でたり。是まではき給ふ白足袋は。よごれめ見えて。五日ともめし給ふ事能はず。此所を考辨し給ひて。近習の者の足袋を所望ありて。鼠色足袋にし給ひしかば。是より近習の者はいふに及ばず。家中一統鼠色になりて。總體にて大なる儉約となれりとぞ。儉約の申付なくして。自然と一遍に。儉約をなす事。尋常ならずとぞ。

某の人曰く。全體物事みなそれ〴〵に矩を定めざれば叶ひがたし。めい〳〵身の嗜も。本多家の風儀の如く格を立てゝ。嚴重にして有らば。様

など、思ふのみにして。或は恩祿加增を得ん事を樂しみ。子孫を繁昌させん事をおもひて働く故。雙方死を遂ぐる者稀なり。去る慶長五年。關が原合戰に立ちしもの、噺を聞くに。あはれうかりける此度の軍かな。なにしに武士に生れ來りしぞや。町人百姓にて有るならば。かゝるめにはあふまじきにと。世を恨み身をかこちて。此戰治まりなば。いかなる山家隱谷へも引き籠りて。世を安々と暮さんにと思ふ者多かりきと聞く。漸々大將の采配の動く段に。魂しつかりとすわりて死を一圖に決せりとなり。我等年若の時の合戰はさにはあらず。とにかくさしおきて。百人行けば。九十人まではと大方死す。其中にて手柄をふるひ。高名して生きて戾るは。傑出したる大剛の者なり。又は臆病者なり。たとひ生きて戾りても。飢ゑて食ふべきものもなく。妻子も兵火の爲に燒け死ぬるか。又は海川に身を投ぐるか。自害するか。行くへしれずかなどにて。家居は打ちこぼたれ。又は燒失して跡形もなく。親類友達も討たるゝもの多ければ。生きて戾りての樂み少し。たとひ恩賞をおこなはるゝにも。其田所のみにして。作るべき民家もなし。金銀腰の物など貰ひても。武具旗指物等の入用。下々の者へもわかちあたふれば。少も我身に付けて樂しむ事なし。故に早く死にて。たすかるを是と心得。いにしへの大將名士。佛法を尊み。經を書せられしは。此故と思ふなりと申しゝ由。彼老翁の父の噺なりとて。老人物語申しゝなり

某の人曰く。此事誠に肝心の事なり。今太平の代に生れあひて。亂をしらざるまゝ。其心得大に違ふ。たとひ今孤獨貧窮にして。せつなきものたりとも。亂世の人の安樂よりは。はるかにまさるべし。人はとかく其時々の調子に乘りて。榮燿に超過して。古を忘るゝものなれば。かの老翁が噺を思ひ。昔は如斯なる事なりしに。今我々身の安きは。勿體なしと云ふ事を顧み。かやうにして。天下を靜謐に治め給ひて。安樂にくらさしめ給ふこそ。有りがたけれとおもひ定めて。覺悟し居るならば。身のつゝしみの種ともなり。奢をおさへ。道を知らする一端ともならんか。

に人を遣ふもの。堀秀政。福島正則。武田信玄などの如く有りたきものなり。塵あくた迄も捨つべきにあらず。捨つるは易く。拾ふは難し。用に立つものは用ひ。用にたゝざるものは捨つる人情なれども。今この物語の如くに有りたき者なり

岩瀨の郡老人物語并戰國の時の事

一奥州岩瀨郡の內に。明和九年の頃。歲百三十一の老人。耳目行歩若者の如しとて。白河の城下へ連れ來て。綿銀子等賜ひしことあり。此翁元は最上殿の浪人にて。羽州の生なりしが。彼の家退轉して岩瀨郡へ引き移れり。（最上殿代々大身にて。數百年相續きて。羽州六十八萬石を領す。早世にて元和年中家斷絕す）ふるき事共さまぐ\尋ね給ひけるに。彼老人の曰く。大坂御陣の時。我等初陣にて。主人より佐竹殿へ見舞の使者を蒙り。始めて上方へ登り。佐竹の家士眞壁掃部介は。かねて心易きゆゑ。彼手へ加はり戰場の樣子をも見物し度由望みし所私には取計ひがたく。御主人へ申し上げねばなりがたしとて。其趣中將殿へ（義宣と號す）申す所。若者には奇特なり。働かせよと仰せければ。大に歡び。十二月の十九日鴫野の冬陣に出で、首一つ取りて。其後御和睦になり。歸國して。主人最上殿へ其由を申しゝかば。能くしたりとて。脇差一腰給はりぬ。其時はいまだ老人が親も存生にて。五十歲許なりしに。彼軍の樣子を物語して聞かせ申すは。親が申すは我々の父八十餘歲にて果てれらぬ。其人申されけるは。官軍の戰の時分。銘々に軍に立つもの、口くせには。かゝるせつなき浮世に生れいでゝ。何を樂しみに活きてあるべき。少しも早く死してたすからんと思ふもの計なり。此故に軍も手稠（きび）しく。働も今の人は及びも付かず。我等幼年の頃までは。少し其氣差殘り居しに。段々袋の口をしむるごとく。世の中靜謐になり。軍數も一つ減り。二つ減りして銘々命をかばひて。後を樂むやうになれり。近頃軍にたつ人ごとに申すは。家を出づる時。妻子を忘るといへり。此詞我等年若の時は知りたるものなし。いかにとなれば。不斷妻子を忘れ居る故。別に妻子を忘るゝ事。改めて有るべからず。然るに此ほどの軍は。首を取りては。主君の恩賞に預らん。高名してほまれを顯はさん

堀家の士泣面并武田家士大藏左衞門が事

一堀左衞門督秀政。始久太郎と號す。秀吉公の寵臣にて。越後にて五十五萬石を領す。秀吉公關八州を賜はんと。御内意ありきと云ふ。其内に。左衞門督二十八歲にて早世す。彼堀家の士に。きはめて泣きづらの男あり。平日兩眼より涙を流し。眉をひそめて。其いまはしき事いはんかたなし。秀政の近習等秀政に申して曰く。彼男の顏色。不吉千萬にて。見るもうるさし。早く御暇を給はれかし。世上にても笑ひ候と申しければ。秀政其事なり。しかし。法事か。弔使者に遣すには無類の者なり。大名の家には。色々の者を扶持するものぞとありしかば。近習の者口をつぐみたりとぞ。又。福島左衞門大夫正則老臣等皆支離なり。一老福島丹波は兎口なり。小關石見はちんば。吉村又右衞門はどもり。大崎玄蕃はがんちなれども。いづれも武道比類なき者どもにて。世上に名高し。正則かれらを奔走する事不レ斜。其外にもかたはにて。武邊の者多し。天文晚年の比。甲州の武田信玄。家來に何某の大藏左衞門といふ者ありけり。生得臆病至極の者にて。いつも合戰ごとには。癪をおこし。眼をまはして。つひに劍戟の中へ交り。血臭き事に逢ひたる事なし。信玄家臣等の申すは。當時戰國の中にて。一人たりとも武功の者を望む中に。彼大藏左衞門が臆病の至。武家扶持すべきものにあらず。早々暇を給ふべしと有りしに。信玄宣ふは彼者いたし方ありとて。信州戸石の合戰の時。勝れたる逸物の馬に大藏左衞門を鞍鐙にくゝり付け。血氣の若者大勢よりて。馬の尻をたゝき立てゝ。敵の中へ追ひ込みしが。馬はよく乘人の心をしるものなれば。大藏左衞門が元來臆病心に引かれて。中戻して味方の陣へ引き返す。かくの通りにし給へども直らぬ故。信玄思案のうへ。彼者家中の隱目付を申し付けて。都て惡事内密の事共。遠慮なく直に申し上ぐべし。若隱し置き露顯に及ばゝ。死罪に申し付くべき由命ぜられけり。大藏左衞門元來臆病者なれば。罪にあはん事をおそれて。明白に何事も聞き出だして。信玄の耳に入れしかば。大に用立ちけるとなり

某の人曰く。此段老人の噺にて聞き置けり。誠

便しかけてやらんとて。右の岩穴の上よりまへ引きまくり。用捨もなく小便をしかけたり。盗賊起き上りて見れば。童子二人岩の上にあり。盗賊曰く。汝等はいかなる鳴呼の者なれば。かくは大膽なるぞ。我年頃此所にて。人の物をはぎ取るなれども。おのれが樣なる魂のすわりたるもの見ず。是より先は道も遠し。里まで送りてとらせんとて。兩童の跡に付き行きしに。彼小便しかけたる童子。山姥の曲舞を謠ひてゆきけるに。一口三口にて。吃と文句に詰り聲ふるふ。跡より來る山賊大に笑ひて。さてこそばけの皮が顯はれたれ。おのれらが大膽は。直實の大膽に非ず。附氣質といふものなり。我跡より。付け來りしは。汝が氣象を見んとにあらず。今一人連なる童子が。心のをさまりたるを伺はんとて付け來たれり。天晴なる氣の落ち付きかなとほめたりとかや。かの山賊は。後に聞けば。由井正雪が反逆に組みしたる。加藤市郎右衞門とかや云ふもの、よしなり

某の人曰く。此もの語。本多侯の噺なりと。又右衞門が器量幼少の時よりかくのごとし。凡物に動ずるものは勿論取るにたらず。又性質に請け得ざる所の強氣を出だし。妖怪に近寄り。人を見出だしなどする事。元よりいましむる處にして。又右衞門が山賊に逢ひし時の事。手本に成すべき事なり。道をかへよといひたる所。臆したる樣には聞ゆれども左にあはらず。遠き慮といひつべし。かれらは匹夫の惡徒なり。何ぞ彼に出で合ふ事を好むべきや。君子は。危に不レ近とみえたり。連なる童子。小便を致しけるは。一旦は甚强氣に聞ゆれども。血氣の勇にて。一つも役に立たず。此故に。後に山姥の謠の時。行き詰り聲もふるへり。先んずる時は人を制し。後るゝ時は人に制せらると云ふ事。金言と云ひつべし。さればこそ。又右衞門後代まで。名をあげ。我妹聟因州の渡邊數馬。親の敵討つとき。助太刀して。伊賀の上野において。無雙の働きをなし。天下のほまれとなる事。頻伽鳥は卵の中より其聲諸鳥に勝るといふ事宜なるかな。能々思惟了簡して。又右衞門が幼年の時の事を。心に思ひ入れて勉むべし

長雪隱を遊ばされたるまゝ。御風を召さぬやうに。皆々心を付けて給り候へと云ひ捨て、宅に歸り。出來助を呼び出だし。段々清正の懇志の事ども申し聞かせしうへ。六十石に取り立て。近習に申し付けしかば。出來助もありがたき事。骨髓に徹し。是より彌忠勤を勵み。度々比類なき高名を顯はしけるとぞ

某の人曰く。此噺は江村老人と云ふ醫師。永祿年中の生にて。加藤清正。森美作守等に仕へ。京都にゐて。百歲の壽を保ち。寛文の頃死去せり。かれが物語のよし。先年聞き置けり。誠に人の君たるもの。人を見。人を仕ふ事。清正が如くしたきものなり。彼出來助は。加藤清正の直參にもあらず。庄林が下人にて。至りて輕きものなり。それが所作さへ。心を附けて見る事。尤名君の實慮嚴然言語に堪へたり。人の君としては。たとひ下々末葉の奴隷たりとも。凡に見るべきあらず。此段清正の事はいふに及ばず。庄林が退出の時。近習のものへ。挨拶其深切。言語の外にして。中々言葉にいはれず。君臣の間したしく心易き事。是にて思ひ量るべし

荒木又右衞門幼少の時の事
幷血氣勇者の事

一寛文年中。和州郡山城主本多大内記政勝君の家士。劍術の師範に荒木又右衞門といふ者あり。生得の英雄にて其術に達せり。幼少の時より藝に志厚く。專。切瑳琢磨せり。又右衞門十三四歲の時。同傍輩の子。同年頃なると連れ立ち。只兩人鳥籠を持ちて。山へはごをかけに行く。其日鳥少して。山深く入るに。日も黄昏に及びしまゝ。兩人とも山を出でんとするに。其邊は物騷の所なれば。道をかへてゆかんと又右衞門申しけるを。つれなる子は。大剛氣者にて。左樣なる所こそとほりて。面白ければ。いざさせ給へとて。先に立ちければ。岩之助（又右衞門が幼名）も跡に隨ひ行く。是より郡山城下へは。道三里許ありて。一向に人家なし。既に夜なれば。往來も絕え。月影ほのぐらき谷間。樹木茂りたる窟岩の中に。人のいびきする聲高らかに聞えたり。連なる子面白き事かな。かねて此邊には。山賊ありて。さまたげをなすよし聞き及ぶ。いざや。彼者に小

隼人介を呼ぶべしといはれける故。庄林へ使をたてらるゝに。もはや夜半過の事にてはあり。庄林も此程は。風邪にて平臥してありければ。とるものも取りあへず。亂髪にて登城しけるを。清正は。元來痔疾を煩ひて。長雪隱にてありしかば。いまだ。雪隱より出でもやり給はぬ所へ。隼人介參上仕れりと申す。清正雪隱の內より申されけるは。汝を呼び寄する事。別義にあらず。其方が家來。年のころ二十許の若者に。いつも茜の袖なしの單羽織を著たるあり。彼が名は何と申すかと尋ねられしかば。庄林答へて。出來助と申して。尾州の產にて候。生付沛芥の者にて。心もさかしく候故。草履取に申し付け候が。中々働あるものにて候と申す。其時。清正さればとよ。其事なり。いつぞや。川尻（肥後の內。熊本より三里程。清正領分なり）に芝居能あり。見物に行きし時。其方も供に召し連れしが。彼草履取の出來助が。小便をするをみるに。肌にまんちう（くさりの事なり）かたびらを著し。脚絆はくべき處を。臑當をしたり。今天下漸く治まりて。皆人平服になり。兵具の用意など。そこ〱なる事にてある中に。

かれが心懸。下郎には珍しき者なりと思ひしまゝにて。要用にかまけ。打ち忘れゐたる所。只今ふと此關所にておもひ出だし。かれが事を思ひやれば。中々尺寸の間も捨て置くべき事にあらず。かれらに褒美してこそ。武の本意なれと存じ詰めしより。熟思ふに。人の死生。世の治亂。身の盛衰。天地の變ははかりがたし。斯く思ひ居るうち。我死ぬるか。汝死ぬるか。彼死ぬるかならば。一人かけても。その志無にならん事。殘念千萬なりとふと思ふより。深更ながら。時。人をまたぬ理。延引すべきにあらざる故。呼び寄せたる事なり。早々歸りて。出來助に申し聞かせ。早速にとりたて遣すべし。しかし傍輩のそねみもあるなれば。高知は無用たるべし。其方家內の者も。嘸氣遣すべき間。早々歸るべし。乍去風邪と見ゆる間。酒を呑むべしとて。麥のひしほを肴として。酒をのませらる。庄林涙にむせかへり。とかうの返答もそこ〱にて。ありがたさ肝に銘じ。殿にも先御休み候へと申しければ。清正は帳臺へ入り給ひぬ。其跡にて。庄林近習の小姓等に。御前には。

かるまじ。我不器量不才はもとよりしれたる事なれば。何しに是をかくすべき。心易きものどもへも。又は他家の人々へも遠慮なくはなすべし。唐土にては。時の政の得失。役人の善惡邪正までも文に作り。歌に詠じなどすること。聞き及びたり。元よりかくす事あるは。おのれが心に僻事有る故の事なるべし。天の道に隨ひ。人の道を行ひて。直く正しくしてあるならば。などかあしざまに言ひ殘し。書きも殘すべき。我今邪曲なれば。家中一統に邪曲なり。正道なれば。皆正道なり。しかれば。只上一人の心にて。下萬人までも推し及ぼして屆くべき事。人の君たるもの、心にあるべし。我等事年若といひ諸事足らぬ某なれば。其方などは。老人の事。別して幼年より勤め居るなれば。以來他事なく叱り呉れ申すべしと命ありしかば。其もの聞きて。落涙をのごひもあへずとぞ。

加藤清正心入幷庄林家來出來助が事

一いにしへ戰國の折しも。諸士をいつくしみ愛せぬ人は稀なり。其中にも。福島左衞門大夫正則。加藤故肥後守清正など。殊の外家士をめぐまれき。蒲生氏鄕。宇喜田秀家などは。つらくあたられし故に。家中騷動起りなどし。其家を亂せり。秀吉公。羽柴筑前守時代に。家中の侍暇を願へば。暇乞を致さん。明朝。館へ出でられ候へとて呼ばれ。自身茶をたて、饗應し。其上にて。腰物を引き出させられ。何方へ行かれ候ても。思はしくなくば。また〳〵歸り來り候へ。いつにても抱へ可ㇾ進とて。懇に被ㇾ申て彼者暇を賜はりけるとぞ。扨。世上へ有り付きかねし者とて。二度立ち歸れば。本知を與へ。元の如く召仕はれしなり。是を學びて。藤堂和泉守高虎其通致されける。又加藤肥後守も。高虎の如く致されける。又清正肥後の國に在城の時。夜陰の事にてありしに。雪隱へ行かれ。小姓共二三人附き添ひ行きて。手水所に待ち居る。清正は。いつも厠へ入るに。不淨をにくみ。足の高さ一尺計の足駄をはきてはひられける。今宵は頻に足駄にてどん〳〵と踏みならし給ふ故に。小姓の者共。驚き戶外より窺ひ見るに。清正の曰く。さればの事よ。今急に思ひ出だしたる事あり。庄林

手にふれさせ給へる難有さよと申しければ。尚政も大に驚き且感じて。即登營して。委細の趣言上有りしかば。將軍にも御感不斜して佐川田を召されて。あつく物たまひて。大切にすべき由。信濃守へ上意有りきとぞ

某の侯仰に。此噺普く世に傳ふる所にして。其道の妙感に至ると云ふべし。能々我身にたくらべて。思ひ入れなば。何れの事にても。妙所に至らぬといふ事か有べき。佐川田は。歌を骨髓に入れて。あはれ秀逸をよみ出ださんと思ふ事眞實にして。其心入れ並々ならぬ故に。終に「朝な朝な」の名歌をよみ出だして。天下を感動せしめ。將軍の恩賞を蒙り。主人の外聞。おのれが名譽。いはん方なし。和歌の道にてだに。此のごとし。いはんや。今日聖人賢人の道を思ひ入りて行はんに。是非極上の位に至らぬといふ事や有るべき。むかし唐土に念佛の行者ありて。明暮念佛を申す事。いさゝか怠慢なし。時に。かねて鸚鵡の鳥を愛して。籠をかたはらに置き。明暮念佛して有りしに。彼あふむ死にける故。かねて寵愛の鳥なれば。土中に葬りて。丁寧を盡しけるに。其墳より青蓮花一もと生ひ出でたりとかや。心なき鳥類といへども。その妙なること得もいはず。まして人間の習。たふとき五體をそなへゐながら。それなりに死ぬといふは。殘念の事なり。人の人たる道をしりて。よく道を行ひ得たるならば。佐川田が「朝な〳〵」の歌の如く。規摸を得ん事うたがひあるべからず。たとひ素性いやしとてわざにかなひがたしなど云ひて。おのれぎりにゆるして置くまじ。太閤秀吉公元より卑賤なり。美濃齋藤道三は。西の京の庄九郎と云ふ油賣なり。しかれども天下を取り國家を取りては。歴々の家筋の人々の器量にも勝れたりとす。只。其所に至りては。素性賤しかたち見にくしなど、云ふ了簡さらにあるまじ。人を見下す事。元よりあるまじ。只。人を助け。己をかへりみて。心に篤と徹するやうに分別あるべしとなり。此噺の趣ども。ありがたき事なれば。心易き者へも噺し聞かせても苦しからずやと申したりしに。某の侯仰にちつともくるし

が。誠におまんの御方。以前を忘れ給はざる處。感じても猶餘り有り。なりあがる時は。必。昔の顔を段々立身出世して。昔は輕々しきものも。せぬが人情なり。それに引き替へ。太閤御夫婦思召の程はさらなり。誠にかゝる人にてあらずば。四海を治め給ふ位には至り給ふまじ。むかし明智日向守光秀。丹州福智山に在りて。父の三十三回忌を吊ひけるに。四十萬石の大名なれば。家老年寄奉行頭人等も。規式の裝束して。さも嚴重なる體なり。燒香は。一番に日向守。二番に左馬介。三番に次左衞門なり。時に次左衞門はるかにこなたの屏風の陰にて。脇差を取り。おづ〳〵這ひ出で、燒香す。事終り皆人怪しむ。光秀感じ云く。世にあらんもの。次左衞門がごとき心を忘るべからず。彼は我父の代には。明智近在の百姓なりしを。召し抱へて足輕にして。我代に成りてこそ。段々取立て今家老の其一人につらなり。明智の苗字を與ふるなれ。昔をわすれざる所の禮讓感ずるに堪へたりとて。日向守ことの外感じ申されし由。是等こそよき世の敎なれば。深く思ひ遠くはかりて。愼しむべきなりとぞ

佐川田喜六名歌并評論の事

一思ふ念力岩をも通すといふ諺うべなる哉。何にても。一心不亂に心ざして。とゞかぬといふ事なし。いにしへ永井信濃守尙政の家老佐川田喜六は。元越後中納言景勝の家臣木戶玄齋はじめ監物が兒性なり。信州の父右近大夫尙勝召し抱へて。家老とす。文武兩道の達者なり。和歌を好みて。名歌をば讀み出でんと心懸けゝるに。或時主人信濃守佐川田を呼びて申されけるは。今日登城いたしたる所。近代の名歌の由にて。禁裏より下し置かれし扇なりとて。今日　御所樣より賜はりぬ。汝は風流に志厚きに依りて見せんとて。佐川田に扇をわたし給へば。ひらき見るに

よし野山花まつ頃の朝な〳〵
　心にかゝる峯のしら雲

喜六淚を流して申しけるは。恐ながら此歌は愚詠にて御座候を。上方へさしのぼせ候。秀逸の由にて。御賞美にあづかり候を。勿體なくもか樣に御

うこぎをつみて賣りけるとぞ妻を離別して。後妻なければ難澁に及びける故。何とぞ。岩卷が方に居るおまんを。妻女に求め度くいひ入れけるに。おまんは早速に返事もせずして。先伊藤右近が方へ行き。相談に及びける。右近申すは。彼藤吉といふは。名高き發明なる者なれば。隨分相談して。末々の爲にも宜しかるべし。支度は我方にていたし遣はすべき問。夜着。ふとん。鏡。櫛。笄までも遣すべし。されども。知らるゝ通りの困窮なれば錢。金の世話は出來まじ。其方の伯父淺野彌兵衞へ參りて。借り申すべし。渠は勝手能く暮すなれば。恥かしくとも無心を申すべしとて淺野方へ遣し彌兵衞は鄕士なり。後淺野彈正大弼長政と云ふは此人なり金子一兩と。木綿一反。はな紙三折を貰ひて來れり。右近大に歡び夜着蒲團などせんだくいたし。其外。當分入用の道具ども取り揃へ。きくと申す下女に同道させ。日柄を撰び。藤吉が方へ遣し。婚姻いたさせけり。然るに。藤吉段々立身出世有りて。終に太閤秀吉公と仰がれましましける。折しも彼右近が事を思ひ出だされ。天下へ觸を廻して尋ねられけるに。右近は。所々に

隱れ忍び。名をかくし在りしが。困窮堪へがたく。うゑに及ぶによりて。甲州の加藤駿河守方へ。客分に來り居るよし聞し召れ。右近其時は。淸右衞門と改む夫婦共。大坂の城へ呼ばせ給ひ。御懇の御意を蒙り。昔の事共言ひ出だし給ひ。落涙を催され。繻子の夜着ふとんに。白銀五十枚。鶴の香合と云ふ名器を。簾中の手づから淸右衞門夫婦に下し給ふ。其時夫婦が側によりて。ごふくめ。木綿わた入の事なりことの外によごれたり。昔の禮に我等洗濯して參らすべし。脫ぎてゆかれよとて。別に着類をたまふ。淸右衞門夫婦。古綿入脫ぎ置きて。下されたる著類を著て退出しける。十日ほど有りて。先日のせんだく出來あがれりとて御城へ召され。御簾中直に下し給ひぬ。其後。淸右衞門に七百石たまひ。七手頭中村式部少輔組にし給ひ。大祿をも賜はんと有りしかども。淸右衞門望み申さずして。大坂落去の後。淸右衞門本多美濃守忠政へ。二百五十石にて有附き。今に相續して。太閤より拜領の品を什物となすとぞ

某の人いはく。此噺を近頃ある人より聞きたる

約の義。申付けたる處。門松の大なると。蠟燭の大なるとはいかにと御尋有りしに。佐渡守畏りて申す樣。か丶る御規式の事を。りつぱに仕らんとて。かねての儉約仕候なりと申し上げられしかば。御機嫌不斜とぞ。此佐渡守兩三年の御儉約中に。金銀米穀軍用等の手宛。澤山に拵へ置きしに。元和五年。天下困窮に及びし節。其貯にて。御救ひ下されし由。佐渡守が功。爰において顯れたり。天下の儉約は。天下の爲なり。國家の儉約は國家の爲なれば。別に餘計の湧き出づるにもあらざれば。たゞおのれが身を詰め。まさかの時に用に立てんとするは。儉約にしくはなし。能く此事心得べしとなり。しかれば。儉約は隨分心をちひさく持つをいふかと思へば。左にあらず。既に信長。かほどまで吝き大將なれども。人に國所など與へらる丶は。何とも思はれず。柴田勝家には。北國越後に柴田といふ所あれば。其方に宛て行ふに依りて。切り取りにせよとて。北陸道七箇國。七拾萬石をたまひ。瀧川左近將監一益は。八幡太郎義家が郎等。伴介兼が子孫なれば。關東をほしく思ふべしとて。上州をたまひ。關東八州の管領職をゆるさる。其外。明智光秀は日向國。羽柴秀吉は筑前國。川尻鎮吉は肥前國。佐々成政は陸奥國を賜はらんとて。日向守。筑前守。肥前守。陸前守などと號す。心の廣き事かくの如し。角力は遊興のものなれば。僅燒栗三つを以て褒美とし。天下を治めんと思ふ時には。不レ惜して大國を與ふ。實に物の差別。かくありたきものなりとぞ

太閤秀吉公奥方素性幷明智次左衛門が事

一太閤秀吉公の御簾中は。杉原入道といふ者の娘なり。彼杉原の娘。幼年の時は。おまんといひて。尾州にて。信長の家中奉公を勤め居る。杉原も信長の足輕なり。爰に又信長の馬廻に。伊藤右近といふもの有り。おまん出生の時より。此右近方にて世話いたし遣しける故。始終右近が世話にて。彼方こなたを勤め居けるが。信長の十八衆目付役の内。岩巻一若といふもの丶方に勤め居けるが。其頃。木下藤吉は。いまだ足輕にてうこぎ長屋といふ所に居れり。（表にうこぎ垣有りて。内に長屋あり。一間に仕切て。足輕住居する所なり。勤の隙々には）

雨窓閑話

著者不詳

織田信長公吝嗇并印陣打の事

一織田上總介信長公は。吝嗇第一の人なり。角力を好みてとらせらるゝに。三番勝する者へは。燒きたる栗三つづゝ。褒美にあたへ給ふ。至りてしはき事これにてしるべし。然れども其器量において は。中々凡人の及ぶ所にあらず。幼年の時。尾州淸須在所の寺へ手習に行かれけるに。相弟子の寺子共四五十人も有りけるが。五月五日の日は。休の事なれば。印地打を遊びとなす。此印地打は。古きたはむれにして。賴朝時代より有りとぞ。たとへば。其遊は。子供東西に立ちわかれ。石礫を以て打ち合ひ。勝負を爭ふ。五月五日を印地打の遊の日とす。印陣打とも書く雙方の手負死人多きに因りて。或は怨を含み。憤恨を夾むもの少からず。毎年毎年其戰大になりて。偏に劒を用ひざる軍におなじ。此故に。御三代目　將軍家の御時。寛永十一年印地打の儀嚴しく御制禁を仰せ出だされける。信長幼少の時は深く此遊を好みて。五月五日の日は。いつも御母公より紙筆墨のたぐひ。飯米三斗に。永樂錢一貫文づゝそへておこせられけるを。信長其錢をば子供にあたへ。印地打をさせらる。其鳥目をもらひたるものは。働拔群なり。扨又。高名により褒美として。恩賞の鳥目を與ふ。終に一錢も貯へずして。皆。子供らにわかち與へけり。其心入れの程。日頃の吝嗇とは格別にて。心有る者は。此童子末々は。名將となりなんとて。舌を卷きて、感じたりとかや。果して其ごとくなり。

某の人曰く。此噺を誠に銘々の身に引き競ぶべき事なり。今日の儉約。此心持にてする時は。間違ふこと有るまじ。信長名高き吝き人なれども。其人をして。其志を見るといふが如くにして。印地打に鳥目を吝まざる所。誠に感歎にたへたり。昔。神君御代に。駿河にて二三年の間。御儉約の事有りて。本多佐渡守正信命を蒙りて奉行しける。其年の門松。例より大にして。又正月三日御謠初の節。門ごとに燈す蠟燭。例年より格別又大なり。神君正信を召して。かねて儉

雨窓閑話目錄

雨窓閑話目錄終

雨窓閑話序

友人小林德方袖雨窓閑話一帙來示。且請小引。其書不知何人所著。而其話則時無古今。事無巨細。皆有評論。而其言公正。其意功實。以寓鑑戒。有裨益乎士人不爲少也。宋王文正有筆錄一焉。雑記舊聞。不擇巨細。立意正確。要歸鑑戒。後人以爲多裨益。夫文正正色立朝。維持風采。以爲天下之率。其德其業。赫奕一代。若夫筆錄者。固其緒餘耳。然亦有因此可以見其抱負之大者。則豈可以小著輕視之乎哉。今此書雖事有東西異。文有倭漢之別。然以其命意言之。其亦文正筆錄之亞乎。廼因其書以求其人。則其抱負之大或可推也。惜乎不記其姓名也。夫水有源而後有混々之流。故觀水者必於其瀾。此書也其或水之瀾乎。烏知其源之不遠大耶。乃書以爲序

嘉永四年孟夏　　屏浦居士河田興撰幷書

らをあらひてまちてをれと。いきほひ猛にさけびいへるは。わざをぎの家に親とすなる。市川のなにがしがこわ音をまねび出でたるなりけり。門もりのはうしぎうちまはるは亥になれるなるべし。かの女ばらおのがじゝさうぞき。帯ひきゆひ。もすそ鶴はぎにひきからげて。かたみに名をよびかはしつゝ。十餘人ばかりひとつらになりて。やどりへといそぐ。道すがら大きなる聲してうた謠ひ。聞も知らぬ物語しつゝゆくさま。つゆ。女しき所ぞなき。あるはいさかひはらだちて。人をのりつゝありく。そばあきなふをのこのになひたる箱に。風鈴といふ物ゆひつけて。風のまに／＼ゆりならしつゝゆくをよびとめて。たちながらくふめり。ひともり。ふたもり。さら／＼とくひて。口おしのごひつゝ。いざとて手ひきあひて。ゆく／＼聲ひとしくしぼりあげてうたふ

わがおもふ　なにがしどのは
などおそき　いとなみつくる
わらぐつの　いできあへぬか
かなどさせるか

歌さへこちなげにて。いときゝにくしや。そもいかなるひとのおちあふれて。かゝる身とはなりにたるならん。あやしうも。やうかはれる女のふるまひにぞありける。

都の手ぶり終

きて。かゝるわざもけふのけぶりたつるなりはひにて侍り。いとなみのさまたげなし給ひそとせいす。ことわりにやをれけん。おの〳〵とよみて右ひだりへわかれつゝゆく。その中に大どれたる聲して

もろこしの　虎てふ神は
ちさとなる　やぶさへはしる
などやこの　さうじひとへの
まゝならぬ　あはれわりなの
こゝろいられや

とうたひつゝゆく。又ひとりが

わがせこが　いざなひゆかば
いかならん　さとへもゆかな
ゐてゆかせ　かくしらませは
ちゝのみの　ちゝやいさめん
はゝそばの　母やなげかん
かにかくに　せんすべしらに
いきつくを　せながいへらく
あさどりの　あさたつがごと
ゐてゆかな　なにかものもふ
しかばかり　こゝろよわくて

よけくやはある

とうちゆがみたる聲を艶にきかせんとて。たかくひきくまぎらはしつゝうたふめり。市ちかきあたりなれば。めくら法師の笛吹きならしてお足まゐらんなどいひありく。あちつなしなどすしにつくりたるをもうりもてゆく。またこにやくをゆでゝみそつけたるを。鹽梅よしやなどよびて行くもあり。物さわがしけれど。さすがに夜に入りしけにや。川浪の音しづかにきこえ。岸の柳のそよとなびくさへうちくもりたる夜ながら。いとしるくしらる。市の中には橘などはうゑぬを。いつこにやどらんとか。ほとゝぎす。なきてわたる。されどきゝいるゝ人だになきぞあたらしき一聲なる。北ざまよりくるをのこあり。聲たかやかにうちあげつゝ。いまこそなのれ。某こそ平氏のつはもの。七兵衞のぞう景淸なれ。保童の君をかしづきたてまつり。なき君たちのむくいせんと。かたちをやつし隱ろへこしを。しげたゞがために見あらはされつる念なさよ。よし〳〵。さらば日をすごさずいくさをおこし。かまくらへおしよせ。かたきのやつばらみなごろしにせむぞ。汝重忠かし

すそたかくかゝげて小太刀さしたる男のにくい顔したるが。なにゝかきけん。馬つからしにとうめきて。すご〳〵歸りいぬるは。おもへる人にあはぬにやあらん。またやせさらばひて杖にすがりたる老法師の。わなゝく〳〵見めぐりありく。かくてもすぐさゞりけるよとおかし。古ばくちのうちほうけたるにやあらん。あかつきたる衣きて。みるのごとき帶にたのごひさしはさみ。木履はきたるが女のもとによりきて。うちさゝやぎていふ。此ごろ錢といふ物にゝくまれて。こしきも蜘のいにとぢ。引きかふべきふすまだになし。さるから日頃經れど來ずなりぬ。人のつてにきけば某殿のずさこそよがれせず來かよふなれ。つらつきをくらべ見むに。おのれいかでかれにおとらんやは。わ女。人わきして。錢あるかたに心よせて。人をはちふくこそにくけれ。といへば。くは何ごとをいふ。そこの身は草の原なる屍ぞ。からすのきてついばみちらすを。いかですまふべきといふ。男さないひそ。ましかめつる戀の奴の。いましもきてつかみかゝりなん。待ちてあれ。さこそこゝろもとなからめなどいひをり。又かたつかたには。

人たちこみてがや〳〵とさへづりいふ。こゝには女もなきを。いかにかくはつどふにかとおもふに。かくれの方より。たのごひにつらをかくしたる男の。はしりいできてたちこみたる人をおしわけつゝいでゆくを。人々見おくりて。しやつ。あめのしたのいろごのみよ。あたら男のかゝるものに身をはふらすことよ。ひるならましかばおもてをも見まし。あないさんなどそしりいふ。かの男はしらずがほつくりて。耳にもかけず。いづくへかこそ〳〵とにげて行きぬ。やがておくまりたる方より女いできて。かのあつまれる人をものしともせず。そこに立ちゐて猶人をよぶ。しはがれたるがすこしはな聲なるは。やまひつきたる女とぞしらるゝ。そこにある人。あなけしからず。まみくちつきは。あら海にすむわにのかほこそかゝれ。されど物おもひやすらん。鼻さへおほぞらをあふぎてをりなどいへば。うしろなる人。そやつ。よも女にはあらじ。文珠ぼさちのゝり物よなど。さま〴〵にくげなることいひしろふ。ぎうといへるものは。かの女ばらをゐてきて。かへさの道をもともなひゆくものとぞ。あまりにかしがましきにいで

ほどに日もくれぬ。いそぎ御堂にまうで、ねんごろにふしをがみておりつ。御くるわちかきわたりにては。この御佛を置き奉りては。藥研堀といふ所にたゝせおはす不動尊。さてはしろがねのまちにましまス觀世音。この三ところぞまゐりつどふ人もおほく。またうゑものなどあきなふ人も。共にひとしくおぼゆる。げにはるかなる野山の草木をひとつ所にあつめみむは。人の國にてはいともかたき事なるを何ごとにつけても。ことたらひぬる都のさまぞかたじけなきわざにはある

よたか

沖つ舟よるべさだめぬをうかれめとよび。家にありてまらうどをばまつをばくゞつとぞよびつけたる。これはさるたぐひにはさまかはりて。家にしもあらず。舟にしもあらず。たゞ大路のくま〴〵あやしき木のもとなどを尋ねもとめて。しばしのねやとはさだむるになむ。京なにはにはさうかといひ。あづまのかたにてはよたかとぞよぶなる。さるは。ひるはふし夜は行きて鳴くとかいへる。ふるきふみのこゝろもて。なづけそめたりけむ。日いるころよりよそほひこちたく物して。かしこへとていそぐ。むかしはもめんのくろきを衣としゝろきを帶となして。かしらをばたのごひにつゝみていでたちしを。今樣はさるまねびをもせず。常ざまの市人のめのごとく見まがへありく。わかきにはまれにて四十より五六十ばかりのふるおうなぞおほかる。みつはぐむまで老にける身をひきかくさんとにや。ひたひ髮のぬけ落ちたるをば墨をもてそめかくし。しろき髮をばくろきあぶらしたゝかにしてぬりかくしつ。されどえしもかくしおほせでしろきがはたらにまじり出でたる。みぐるしうきたなげなり。げに雪はかしらにつもりぬるさへ。あとつけまうき色ぞしたる。暮はてぬれば。例の所に立ちてゆきかふ人をよぶめり。つれなく過ぎ行く人もあり。またちかくよりきて。ひた〳〵とかほをまもりみるもあり。はじめよりこれをむねとおもふ人は。こゝかしこたちもとほらで。たゞちにはしりきて。奥ざまへいるを。やがて女もつゞきている。ふしどゝ見えし所はこもすだれかけたれば。ゆふづく夜のさだかならぬには。あらはにしも見えず。さるは。秋ならずとも。露けからましとおぼゆ。

けき御代とていさゝかの白なみだにたちわたらぬぞたふときや。橋より南ざまに折れゆけば。いづこの野山よりかもてきにけん。さま〴〵の木草數しらずならべおきてあきなふ。こゝらある中にも九日を待ちあへで咲き出でたるきくのはなうち見るより。老もわすれつべきこゝちぞする。また夏におくれて咲きいでたるも猶おほかり。くさのかう。きちかう。りうだむ。しをに。くたに。さうびなどいづれかまさりおとりやはある。されど昔より物の名にのみいひつけつゝ。そのさまをけせう(顯證)によみいでぬぞほいなき。かきかぞふれば七くさの花ぞことにみどころはおほき。藤ばかまのにほひ。たちあがりたるは。常ざまの花にも似ず。たが佩ものにやすらんといとゆかし。あるはふるえにさける萩の花。もとのこゝろはかうもあらまほしとおもはる。また朝がほをねごめにうつして。さかりひさしかれなどいはふも。とり〴〵におかし。たかやかにさきみだれたる女郎花を人々つどひつゝきそひ買ふ。あなかしがましとひとりゑみぞせらるゝ。姫ゆりなでしこなどは。人めきたる名なるを。いぬたで。ゑのこ草としもなづけたるはいかにおもひくだしたるにや。鳳仙花。鷄頭草などは名のみにしもあらず。かたちさへこの國の物ともおぼえず。そも秋このむ宮の御まへはいかなりけむ。遍昭が庭のつくりざまはいふにもたらじ。さがの大井のわたりは。いまだ行きいたらざればしらず。あたりちかき。むさしの、原といふとも。げにけおされつべき秋のいろなり。うしろの方に大なる松をねこじきたるが。さかしらに高砂の松と書きてさげたり。今日しもしらぬ人に引きとられて。たれをかもしる人にとおかし。そのほか竹かへひらきなどゝきは木のかぎりならべ置きたる。やう〳〵さま〴〵にていくそたびみめぐらふもあかぬこゝちす。又かたへにちひさきこをいろどり。それにくさ〴〵の蟲をいれてうる。いなごまろ。はた〳〵。まつむし。すゞむし。猶こゝらの蟲あめる。ひとしくきそひなく。すゞしもてはれる箱に。螢あまたあつめたるをみては。いろごのみの家のすさみもかゝりけむ。から國のなにがしが窓やいかなりしなどいふもあり。むしのしやしりにひのつきてと。のゝしりとほるはよからぬ人とこそおしはからるれ。とかくする

めてくひたりき。そはおのれぜにをかへおきつ。すか〱とおこしめせといふ〱。ねたる人をさへおこす。あすこそ物せめ。ねむたきにとわぶれど。えしもゆるさで。うちはたるもなさけなげなり。ほどなく無縁寺のかねきこゆるは。亥の時にや。おの〱うちやすみたりけん。おとせずなりぬ。つかれしひるのなごり。夜ひとよ大どれたる聲して。ねごと、かたみにの、しるもけうとく。例はあなかしかましと聞きつるかべの中なるきり〲すさへ。けおされたるにや。音たてぬやうなり。あくればあさげとくした、めて。おのがじ、こ、ろ〲にゆきわかるめり。げにいづれかさしてとおもふにも。旅ばかりあはれにおかしき物はまたあらじはや。もろこし人の詞に天地は旅のやどりなり。ゆきかふ月日はたびゞとのごとしといへり。されば生れにうまれたる人。たれかはとこしなへに此やどりにとゞまりをらん浮生は夢に似たり。ようなきたからに心をかけて。草まくらたびねのまどよりうかびたる。雲をのぞまんは。いと〱おろかなる心にこそと。その夜やどりし山ぶし法師の。うちひそみつ、かたりたるをき、て。ふかき心のゆゑよしはしらねど。げにとめさむるこ、ちこそせられしか

やくし堂　　靜

いづこも同じなどつゞけたりしは。かた山寺のかごかなる所にてこそよみためり。玉しける都のうちは。なべて所せう人のゆきかひにぎはしうて。秋とだにしらぬ人もたほかり。女どちはをりにあひたるいろのあやうすもの。おのかじゞすきご、ろにまかせてさうぞきつ、。男がたもいまやうのひとへ衣うるはしうきなし。扇とりて夕暮おそしと待ちとりつ、いでたつしもつかたはとりあへたるま、のゆかたびらに。帶しどけなげにひきむすび。老いたるわかきうちまじりて。道さりあへぬまでおしあひつ、ゆく。なにしにかうはとおもひめぐらすに鎧のわたりちかき所におはす。藥師佛をがまんとて行きつどふなりけり。人ごとにいさみ立ちて。そゞろにおもひなげなるおも、ちなれば。ありわづらふ人としも見えぬを。さる御佛たのみて何事のいのりするにかとおかし。こ、に海賊の橋といふあり。貫之に見せましかばわたりもはてずにげなましとおかし。されどしづ

き。此こがね。もと。むらをさのかしあたへつるにもあらぬを。しかばかりはらたちいふなるはいかなることにか。むらをさ。もしめぐみのこゝろあらば。隣の人をいさめて。もゝとせちとせすぎんまでも。なだらかに待ちてあれとこそいふべけれ。なき物つくなへとせめいへるは。あまごぜにむかひて。ふぐりいだせといはんにことならずと。かしらうちふりつゝつぶやく。たかどのゝかたに。がや／＼と人の聲するは。こゝの國人なるべし。三四人つどひて酒のみあそびて。いたくゑひやすゝみけん。からき聲しぼり出でゝうたふ。それがなかに。わかき男のたちあがり。扇とりてすゞりもじりまひをどる。そのうたは。かしこの國ぶりなりけり

酒をたうべつ　五さくのさけを
一合たうべて　ゑひいやましぬ

などうたふ。猶あかずや。皆立ちてまふ

盆の十三日に　舞人はそろひつ
稲のほよりも　いとよく揃ひつ

はうし(拍子)とるたがに。やとせのせと。うちはやしつゝ。手うつさまひなびたる物から。見しらぬめにはめづらしく。きよう有りておかし。こなたになみゐてゆふげくふ人は。しなのゝ國の人とか。大きなるまりにいひたかう盛りたる。さながら越のしら山ををしきのうへにうつしすゑたるやうなり。あつもの、汁ひとくちにすゝりてあはせの魚。かしらも骨ものこりなくゝひつくしつ。さていへらく。はらをそこなひて。日ごろになり侍る。こゝちあしければ。じねんにいひはむもうまくもあらず。今宵たゞまりにいつゝばかりをたうべぬ。かばかりにてはいとこゝろぼそしやとて。ふしめになりていふ。かゝる人のこゝろゆくばかりものせばいかばかりのいひをやくはまし。いとおそろし。へだてたる障子のあなたにをるは。衣手の常陸人なり。うちゆがみたる聲してさへづりいへるは。今晩な。いたくこうじにたり。なでふにもかでふにも。すねいたくて動くべうもあらず。うちそべりて聞えん。ゆるしめせとて。はしざまによりてふしつ。とばかり有りて。ついおきあがりて。めを大きになして。いかづちの落ちかゝるばかりの聲して。だいじをなんわすれにたる。某のすくにていこひしとき。うるまのいも各ふたつづゝもと

粟ひえなどをのみくひものとはすめり。さるを。よくしらげたるよねのいひ。けにもりてくふ。椎の葉にもるとよみしには。さまかはれる旅のやどりなり。奥まりたるかたにをるは。京人にや。ながき旅路にいろはくろみたれど。さすがにそのきはみえて。なだらかにもてなしつゝ。日記のやうなるものとうでゝよみなどす。旅はいもこそなどうちずしぬるもゆかしげなり。とのかたに。女どち七八人。老いたるわかきうちまじりて。足ひきながら入りきぬ。あるじいつこよりぞとゝへば。こよろぎの磯ちかきわたりよりといらふ。さらばみさかなとりにわかめかりあけてんとたつを。さる物はねぎ侍らず。玉だれの中はかしこし。人げとうくだにあらば。こもすだれなかにすゑ給ひてもと。うちわらひていふ。ゐなかびたれどさすがにつゝましうちしのびて。だみたる聲人にきかせじとにや。ことずくなにもてなしつゝ。さし出でたるたらひに足さしいれてあらふ。調度めく物はつゝみにつゝみて馬におはせつるを。ずさはこれにのりておくれきつ。何ごとにかあらん。おりざまに馬ひきたる男とあらそひてのゝしりさわぐ。わかき人はあきれて手まどひしつゝ。みなにげていりぬ。めのとにや。おとなしき女のいできて。ずさが手をとらへて。人わろし物ないひそとせいしておくざまへ率てゆく。都人のおもひはんもはづかし。たびの空にて。かゝる心はつかふものか。ようせずばかの男にうたれやせまし。あさましとて。くち〳〵ずさをあはかせむ。くちつきの男は。あしおもふさまに得て咲みまげて馬ひきてかへる。うしろでもにくしや。ひとまなるかたには。ひげおひこえてまふしつへたましき男。ひとりもろ手くみ。かしらうちかたむけて。かべにむかひをり。とはずがたりするをきけば。おのれもとより家とほくして。さきに隣なる主にこゝらのこがねかり出でたれど。たゞ朝霜のひにむかひたるやうに。時の間にうせにたり返すべき期もよくしりぬれど。もたらねばいかにせむ。みにひきじろひて。としごろを過しきぬ。きるを。たゞかの人の死にもやすると。はかなきあいなだのこたびむらをさのあつかひ物すとて。いたくおのれをせめさいなみて。ことしのほどに。此こがねのこりなく返しやりねといひおきてたるぞことわりな

に。くらかけの橋の左右は。なべて人やどす家たちつゞきて。いと〳〵にぎはゝしき所になむ。このあたり。むかしは海につゞける入江の沼なりとか。いまはさるおもかげだにのこらず。橋より北ざまを。ばくろのまちとよべり。そのかみは。ふりたる寺ならびありて。さびしき草のはらにして。橋の南は六本木とて。中つ世のうまやぢとぞ。今はこてまの三のまちとぞいふなる。元祿のころほひまでは。人やどす家ども。この三のまちにはづかに十ばかりありしを。おなじ六年といへるに。信濃國なる善光寺の御佛(みほとけ)をもてきたり奉りて。本所なる回向院にてをがませしに。世の中ゆすりて。これにまうづる人おほく。とほきゐなかのうばおきなまで數しらずつどひきて。このやどりにゐあまりつゝ。夜も大路にむしろ敷きてぞあかしける。この比よりかゝるなりはひするもの。やゝ數まさりて。つひにばくろの町のわたりまで仕みわたり。いとなみすることゝはなりぬ。いまの人。これをはたごやとよぶ。そもはたごとは。まぐさ入るゝかたみ。あるは旅ゆく人のもてるこなどの名なりけるを。いかなる故ありて。斯うはよびつけたる

にか。家ゐのさま。門ごとに。あるじの名をしるしつけたる札をかけ。あかり障子にも筆ぶとに。おなじことかきたり。すのこの下にときすてたるわらぐつ。うらなしなどいくらともなくかさなり。あるはやはぎの市もかうぞなどおぼゆ。あるじにや。しも男にや。町の辻にたゝずみ居りて。旅人の過ぐるを待ちつけて。やどりとり給ふやなどとひきく。しりたるやどり有り。かしこへなどいへど。なほ追ひきて。かしこはまひろけれど。人ゐこみて所せう侍り。わが家。さゝやかなれど。あひやどりの人もなし。たゝみ。よるの物も。みなきよらにしおきて侍るなど。さま〳〵にこしらへいふ。はじめはいなみぬる人も。すかしせめらるゝにしわびて。しぶ〳〵にかれに引かれつゝゆくもおかし。軒のはしに。すが笠たかくかけおきたるは。おくらかしたる友をまつまじるしとぞ見えし。これらは。みな伊勢の濱荻をりふせてたびねせむといでたちし。神まうでの人にぞありける。湯あびんとにや。はだかつるはぎにて。三四人ひきつれて。湯屋たづねさまよふもおかし。すべてあまざかる鄙人(ひなびと)にしあれば。家に有りては。

梢つたふさるまろ
餌落したるやまがら
すみの江のそりはし
松にはひたる藤波

猶こゝらあめり。さてながく引きはへたるつなの上を。傘さしてわたる。なかき紙の上をもわたるに。みな足ぶみをはうしにあはせてをどる。見る人あざみ興ぜざるはなし。ことはてぬれば。したゝかに大皷うちならして。もと見し人はかはりねとよぶ。やりどひとつあけて人いだすに。おしあひて出でもやられず。ほと〳〵しりなる人にあかゞりもふまれつべし。むかひなる川づらには。水にひたりて十餘人ばかり。聲そろへて何ごとにかあらん。高らかに唱ふ。こはおもきばうざを救はんとて。垢離(とり)といふことおこなひて。さがみの國なるあふり山の不動尊にねぎいのるなりけり。手ごとにわらしべをもちて川になげうつ。流るゝをよしとし。たゞよふをあしとすとなん。ことはてぬれば。おのがじゞ衣きさわぐに。猶若きものは。こなたかなたたゞよひ。かづぎいでゝ遊ぶも。いとあやふし。すべてこの橋の前うしろには。ひまもなくあきびとの家立ちこみて。大君きませとよばへる軒には。あはびさたをかきら〳〵しう。われもの申すといひたる家には。夏やせによきうなぎもありぬべし。あるは虎てふ神を木もてつくりすゑ。又あらたまを障子にゑがきて。とのくちに立てたるもあり。いからしとなのるものゝ家にさしむかひて。やれたる芭蕉を壁にゑがきたるは。つき〳〵しうみゆれど。おぼろといへる豆腐ひさぎて。あかしと名のりたるはいかにぞや。此ほか。もちひを幾世の名にことぶき。せんべを羽衣の松になぞらふなどとりいでゝ、かぞへいはんも。ことのはたるまじうぞおほゆる。かゝるあたりをへめぐらひて。ままと共にあそびさまよひしも。はや四十とせのむかしとぞなりにたる。げにとしつきのながれはやきは。この川の瀬におとらざること。夢のわたりのうきはしをわたりくらべし人はしるべきにこそ

ばくろのまち

大君は神にしませは。水鳥の。すだくみぬまを都となしつ」とはあがりたるよによみたりけん。げに野ゝ中ふるみちあらたまりて。いまぞ都とぞなはれる中

りよき子をもたせ給ひて。世のきこえめいぼくやおはすらんなどいへば。人また例のとよみわらふことかぎりなし。さてそこを出で、さまよひありくに。佐々木の家の幕じるしかとおもふばかりなる紋つけたる軒あり。藥ひさぐにや。長命帆ばしらなど。金字に。だみたるふだをかけたり。長命とは不死のくすりなるべし。ほばしらとは何ならん。もしくは風の藥をいへるなぞ〳〵にや。かゝるむづかしげなる藥さへ。そのこゝろえてかふ人のあればこそ。なりはひとなして世をわたるなめれ。といとおかし。又。人形をかしらより手足まであまたの糸もてつけて。うたひものにあはせて。いと引きあやどりつかふを。南京のあやづりとなづけて。むかしよりこゝにておこなふ。をさなきものは皆これに心よせつゝ。つどひよるめり。柳の橋のかたにそひて。ことにたかやかに假家つくりたるあり。京くだり某の大夫と。いかめしく旗に書きたり。これも。との方に繪をあまた書きてかゝげ置きつ。入りて見れば。袴をばぬきて上ばかりきたるもの三人ばかり。笛つゞみうちはやす。耳もとにいさゝか髻の髮のこして。かしらなごりなうそりすてたる翁の。おなじごと。上ばかりきたるが。見る人にむかひてざればみさへづりいふ。かの大夫。頭にはちまきといふもの。うしろざまにむすびて。手足みなあかき絹におしつゝみて。半臂のやうなる物著て出できたり。見る人にむかひて。ひざまつき拜して。さて太く長き竹の。三丈ばかりもやあらんとみるを。中にたてゝあるに。すら〳〵とのぼりて。竹のうらに身をとゞめて。扇とうでゝうちあふぎたるさま。いとやすげなり。竹は右ひだりになびきて。いまや落ちなんと見る人っこゝろをのゝきめくれてあやぶみおもふに。竹をひざにからみて居るさま。常の人の地に坐したらんごとし。さて或はたち。或はふし。あふぎてまひ。そばたちてをどる。そのさまひとかたならず。これにさま〳〵の名あり。かの翁。笛つゞみにあはせてゆびさしいふ。その曲の名は

だるま大師の坐禪のゆか

野中にたてたるひともと杉

からしゝの洞のいでいり

東　山　の　大　の　字

りて。この太刀をひきぬき。さま〴〵にうちふりて。とみに鞘にをさめなどす。ずさと見えたる男。これもたすきひきゆひて。これはいますこしみじかき刀をぬきて。ぬしとうちあふまねをす。さてかの人のいへるは。かゝる太刀うちのわざは。たゞもろびとのめをよろこばしめんわざなり。まこと。あが家のいとなみは。藥ひさぐわざにこそあれとて。さゝやかなる紙つゞみふたつとうでゝ。此ひとつは足とらずといひて。家に傳へたるらうやくなり。あだはら。あくたのやまひ。あるは。尻より口よりこくやまひ。舟やまひ。酒やまひ。いづれにもちひても。とみにしるしあり。又こなたなるは。齒をみがく藥なり。このくすり。むしかめばをいやし。口のうちのくさきかを除く。はをしろくせんことは。ことにすみやかなりなどいひつゝ。ぜにひとつを。かの藥もてみがくに。十日の月の雲間をいづるがごとてりかゞやきて見ゆ。みな人おのがじゞもとめつゝいぬ。こなたなる葭のかこひの中には。かたゐの頭巾きたるが。扇をえりのあたりにさして。上中しもの人のうへを。おもしろくまねびかたる。

うしろの方に。わかき女三四人ならびゐてかいひきうたふ。とばかりありてぜにもとむとて。ひきさし立ちて。ちひさきこを人のむなぢのあたりへもてきてふりうごかす。つれなしづくりて。錢もやらで出でゝゆく人あるを。かのかたゐ見て。權兵衞のそうきたなし。まさなうもうしろを見せ給ふか。馬かへされよ。をう〳〵とよぶに。皆ひとわらふ。さてかたみなるぜにかぞへ見て。あなうれし。もゝばかりあつまりて侍り。いみじき御惠になんなどいひて。かけたる錢ひとつとうでゝ。これ御覽ぜさせ給へ。なからばかりになりにたり。物をしみし給へる人の。かゝる物とうでゝたびぬ。これもて歸りていもじにあつらへなば。六七文のぜにやつひやさん。あなやうなしなどいひてとりかくしつ。さてもますかげもなききん達のみかげによりて。うゑずさむからず。世をいとなみ侍り。常もめこなるものををしへいさめていへらく。かならず殿ばらの御惠をあだになおもひそ。ひとへに親とたのみ奉れとこそいひつけ侍しか。ようおもへば。おのれが親ときこえ奉るからは。君たちの爲に。おのれは子にて侍り。さばか

の丹波の國なるおく山にてとらへつる。山あらしてふけものなり。世に稀有の物なり。前代未聞。又たぐひあらじ。家づとによき物語のたねぞ。見たらん後に。錢おこせねと聲かるゝばかりのゝしるさまは。むさゝびの大きなるをとらへて。斯う誇らしげにいふなりけり。その隣も。同じすぢなる假家つくりて。うすぎぬかつぎたる女子を。たかき所にすゑて。うしろには。しろきあをき紙をへだてゝはりたるあかり障子をたてつ。副ひ居たる男の。扇さかさまにとりて。まづしはぶきをさきにたてゝ見る人にむかひていへらく。此女子こそ。こしの國なにがしの村なる狩人の子なれ。殺生の罪の。子にむくい侍りて。斯うあやしき身とは生れにたり。さればとをがひとつ罪障のきえうせなんよすがともなれとて。こたびゐてきて。あまねく人々に見せ奉るなりとて。かのうすぎぬをとりのけつれば。げにいひにたがはず。顔より手足までひとつらにくろき毛おひつゞきて。目鼻のつきどころさへわかたず。熊女となづけつるもことわりにこそと。人々うちまもりあざむ。かゝるかたはにさへ生れにたるを。かゞやかしう人あつめて見することよ。かの女いかにわびしとやおもふらん。なが名はいはじとうちたはぶれていでぬ。むかひなる家は。ことに人おほくあつまりをり。こゝは女子を六七人あつめて。ふことといへぬ今様のうたひものをうたはす。こはあだ〲しき男女の。みそかごとせるがあらはれて。せんすべなくかたみに死なんと契りかたらひしことなどあるを。かゝるふし物にあやなしゝなり。此頃世の中ゆすりてもてあそび興ずれば。さてこゝにも。かうは設け出でたるなりけり。げによごもりたる人などのかうさまの事に耳馴れゆかば。じねんにあだなるすさみに心やひかれむ。女子にはきかすべきものともおぼえず。又たかきあぐらにのぼりゐて。文机のうへにそはうしぎのかたしを置き。ふるき世の軍物がたりをまねびいふ。まことにや。僞にや。おのがめに見しごとかたりなすもおかし。かたつかたに人あまたつどひたてる所あり。何ぞとよりてのぞけば。くろき筥ふたつならべ。これにおほきなる太刀ふたつをかけ置きつ。わかき男の裾ひきあげて襷ゆひたるが。たかあしだはきてついかさねのやうなる物。ふたつかさねたる上にの

船につみなどして。こしの國。みちのくのはてまでも、て行きて鬻きうり。それよりえぞが千島の遠き境にもゆきわたることゝぞきく。かゝるものは。もと。たづきなきわび人の。あしたゆふべのけぶりたてかねて。せんすべなきまゝ。たくはへたる衣とうでゝ。あしいくら。こがねいくらとておぎのりかりつるを。八月のほどに購ひえざれば。さだまれる事にて。ものかす人のこゝろにまかせて。かゝる所にはうりはたしぬることゝぞ。すべて新しきにくらぶれば。ふるものは價いやし。されどよろしき人の。これを求めかはんやは。かふもの。うしなひし人。ともにまたわび人なれば。かゝる市のにぎはしきこそ。世に貧しき人の絶えざるしるしなれとおもへば。例のもろき涙ほろ〳〵とこぼれいづるを。あしたの露にかこちなしつゝ。なく音かなしきちどりの橋をうちわたりて。かしこへいそぎぬ

両國の橋

大江戸より本所へわたしたる橋を両國の橋とぞよぶ。いにしへ。この川よりをちはしもつふさの國なりければ。しかなづけたりとあるひといひき。在五中將のとほくもきにけるかなとわび給ひしすみた川は。此かみつ瀬にして。浅草なる大ひさもこのながれよりとりあげ奉りけるとぞ。ふじのねはさらなり。ますかげはなしとよめるつくはの山も。手にとるばかり見ゆ。そこらゆきかふ舟のおほかるは。たゞ柳の葉をこきちらしたるがごとし。夏のころは。ことに舟あまたつどひて。いと竹の音。川波にひゞきあひておそろしきまで聞ゆ。げにひろき都の中にも。なぞらふべき所だになく。こよなうにぎはしきわたりになむ。川づらには。葭をあみてへだての垣となし。すのこだつ物あまたならべて。いこふ人ごとに茶をもてあきなふめり。又おなじつらなる假家つくりて。小弓の射場まうけていとなみとするものもあり。髪つがぬる家。舟かす家。もちひ。くだもの。酒うる軒など。所せきまでたちならびたり。すべて名高きあきびとの家々は。かぞへつくすべうもあらねば。うちおきていはず。此大路の中に。こもすだれかけ。假家つくりて。との方にあやしき繪をかきてかゝげたるあり。肩ぬきたる男の。とぐちに立ちて。口に手をあてゝ。聲たかくよばひいへるは。こ

都の手ぶり

石川雅望著

大江戸のうちに。とみざはといへるまちあり。朝市とかいひて。そこにあるあきびとのかぎり。つとめてより起きいでゝ。かどのとにむしろしき設けて。ふるき帶なえばめる衣など。いくらともなくつみならべてあきなふ。あけはなるゝころより。かしましきまで人つどひきたりて。おのが欲しとおもふ物はもとめつゝいぬ。あたらしげなるは。ふつになくて。くれなゐのうはしらめるもの。むらさきのはえおくれたるたぐひのみぞあめる。あるは解衣(ときぬ)の亂れたる。藤衣のまとほなる。しらぬひの筑紫のわた。河内女の手ぞめのいと。みちのくのしのぶずり。いせをの蛋のしほごろもなどさへこゝら見ゆ。そも山吹の花いろ衣。ぬしはたれとも問ひしるべき。又あさぎいろのもめんといふものに。花橘をそめつけたるも。こちなげにて。ことさらにむかしの袖の香なづかしともおぼえず。その中に。たもとゆたかなるから衣は。たがうれしきをつゝみたらむ。むねあひがたきほそ布は。ものおもふ人やきならしけん。麻衣の肩のまよひたるは。にひさきもりのけのころもならし。花田の帶のなか絶えたるは。石川のこまうどのときすてしなごりなるべし。うすもの、ひとへを見ては。すべり出でにしうつせみの心しらびをおもひ。綈袍のあつごえたるを見ては。さむきをあはれみし范叔がむかしもしのばる。縕袍のやぶれたるが。狐貉のかはぎぬの中にはまじはれど。とばり帳のあかつきたるには。むこの大君もにげめや。つかふべき法師のかくる袈裟にあまたどころひきやりしあとみゆるは。西寺の鼠のくひたるやらむ。琵琶の緒にはらわたゝゆといひけんこと。うちつけに亡き人の記念(かたみ)にやと。あいなき衣さへまじりてあり。また今様のゆかたびらに。藍もてさまざまのかたそめたるなど。ひとつづつにあげいはんもわづらはしければもらしつ。をのこの禮服とすなる物の中に。うへのきぬの袖を切りて。上下と名づけたるものあり。これにつぎて。ふみこみ。はちゝ。もゝひきなどいへるもの。あがりてのよ人は見もしらぬ物なるべし。かゝるくさぐさのふる物をあつめて。馬におはせ。

都の手ぶりのはしがき

赤駒のはらばふゆゐも都なしつゝ。こゝらの世々をへぬるまに〳〵。其手ぶりのうつりかはれる事なんさはなりける。此書は。石川雅望。そのてぶりをひとつふたつかいつけたるが。かくはなれるなり。其書ける事は。さとび事ながら。詞はみやびごとにとりなせり。そも〳〵。いにしへと今と。手ぶりのうつりもてゆくごとく。ことばもはたかはりゆくものなれば。今のことをいにしへぶりにかゝんは。いとかたきことにして。石上(いそのかみ)ふりにし書すら。よく見わたしてわがものとせざれば。かくはなしがたきわざぞかし。たはぶれごとかけるは。おもふこゝろありてなるべし。見むひと心あらなん。此はしにいさゝかゝいつけてよとなにがしがこふまゝにかくなむ。

橘　千　蔭

とある人ならば。醉はざる時も。よき將にてはあらざるべし

凡。酒の疾醉ふて前後をわすれ。身をわするゝは多けれど。大醉の上の事にて。尋常にはあらじ。疲勞してしばらくこれをもて氣を引きたてんとするは。大醉して前後をわするゝにも至らず。子反も中軍の大皷と心つかひの多きとに。しばらく勞をたすくる心なるを。敗軍になりし故。人も奇に云ひつたへ。書にも奇にかきしなるべし

一夜半ノ鐘　夜半ノ鐘のこと吳中のみにありと云ふ說もあり。また。夜あけの鐘を夜半と認めしなどいふもあり。あけて後に寺を見て。さては夜前聞きしは。あの寒山寺の鐘なりきといふ說もあり。李洞が月落長安半夜鐘といふを見れば。吳中のみにあらず。丘仲孚書をよむに。中宵の鐘を限とすといふも半夜なるべし。張繼が重泊楓橋詩にも。烏啼月落寒山寺支レ枕猶聞半夜鐘といふもありてさだかなるに。月落烏啼を。夜あけのけしきに見るゆゑに。色々の謬解もいでくるなるべし

筆のすさび 終

これらも悲しすぎたり。春の曙に命をのばへ。郭公を待ちていく夜もいねざりしなども。其の類にて。古人の上手にも此の類多けれども。余はこのまず

有明のつれなく見えし別より
　曉ばかり憂きものはなし

といふを古今第一とし。「秦時明月漢時關。萬里長征人未還」といふを唐絶の壓卷などいふは。眠たかし。近頃小澤蘆庵のみ此の意を知れりと見ゆること多かり。諸九といへる尼。夷講にて酒もりする處にて

客をつるいとは三筋やえびす講

といふほくしたりければ。一座興ありつれども。其のさま賤しければ。後悔したりとみづから語りき。かゝる體は俳諧の俗談平話といへるにさへいやしむを。近頃詩歌の人好みてこゝをせにして物するはいかにぞや

一機巧　備前岡山の表具師幸吉といふもの。一鳩をとらへて。其の身の輕重羽翼の長短を計り我が身のおもさをかけくらべて。自羽翼を製し。機を設けて胸前にて操り搏ちて飛行す。地より直に颺ることあたはず。屋上よりはうちていづ。ある夜郊外をかけり廻りて。一所野宴するを下し視て。もししれる人にやと近よりて見んとするに。地に近づけば風力よわくなりて。思はず落ちたりければ。その男女驚きさけびて遁れはしりけるあとに。酒肴さはに殘りたるを。幸吉あくまで飲みくひして。また飛びさらんとするに。地よりはたち颺りがたきゆゑ。羽翼ををさめて步して歸りける。後に此の事あらはれ市尹の廳によび出だされ。人のせぬ事をするは。なぐさみといへども一罪なりとて。兩翼をとりあげ。その住める巷を追放せられて。他の巷にうつしかへられける。一時の笑柄のみなりしかど。珍らしき事なればしるす寛政の前のことなり

一子反の酒疾　左傳の子反が酒をのむこと。かゝることは人間にあるまじき事なるべし。予も酒の疾ありて。いろ〳〵の變態をしれども。凡世に心のなき人はあらじ。子反醉はざればよき將にて。醉ふ時事を敗るは平生の事なるべし。陣に臨み敵に對しては。かゝることはあるべからず。かゝるこ

しこと。長崎夜話に見ゆ。近頃大坂にてアメリカ國の龜甲を見る。其の龜文こゝの物と大同小異なり。凹き所は金色にして。全體こゝの龜より丸くして遍ならず。これも德兵衞。婀媽港よりとり歸りしものなりといふ

一產醫可レ愼事　一老醫の話次に。鞆の浦の某難產にて。諸醫穩婆等みな死胎なりといふ。產婦も亦しかいふによりて。せめて母をたすけんとて。鍛工に命じて引き出だす具を造らしむ。具すでになりて引き出さんとする時に。俄に分娩して健なる男子なりき。今尙存在せり。又何某邑の何某の家に難產あり。是も諸老醫多くあつまり。死胎なりとて鉤をもて引き出だしゝに。產聲たかくくるしげに聞えて。死胎にはあらずして。鉤の創痕より。血したゝりてやまず。二日經て死したり。鞆の產はわれも與謀して引き出ださんとおもひたりきと語りぬ。かゝれば今の產醫妙術多しといへども。亦愼むべき所あるにや

一羞惡　文化三年三月妹なりけるたねが。京に行きしに。一日因幡藥師の戲場を見るに。一惡人出でゝ人を害するさま。あまりにゝくゝ見えければ。棧敷にをりたる一老人。舞臺へ飛び上り。其の役者を打ちたゝきしかば。頓て人々取り押へて。老人をつれ歸りけるを見たりといふ。おもへば虞初新志に其の事のごとき事あり。取りおさへたる人。あはれ戲なりといひければ。其の人若眞ならば我が刀に膏せんといひき。何地もおなじく善を好み惡をにくむの懿德の。おもはぬ處に發見すること。つねにあることなり

一詩歌の語　此の頃雨ふりつゞきて晴るゝ期も見えず。よりてふるき歌に

住吉の松の千歲もふるばかり
　久しくはれぬ五月雨の空

俳諧の發句に

さみだれやある夜ひそかに松の月

などいふを思ひ出でゝ。かくあまりにふりすぎ久しすぎたるも。興さめて見ゆるものなり。おもふついでにまた歌に

ながめじと思ひすてゝもとにかくに
　涙せきあへぬ秋のゆふぐれ

んといひ鹽河の官に侯と稱せらる、人あらんなどいふは笑ふべし。此の書の名字みな此の類なるに。これに人を當てんとするは。別に意ありや

一詩人の說　ある人。もと七才子の詩を悅びしが。此頃飜然として體を變じ。宋調を學ばんといふ。余云く。詩の妙處は宋を必とせず。明を必とせず。好處は明にも宋にもあり。魔處も亦然り。高靑邱。李何。李于鱗がごときは。東坡。放翁に見せても。拙とはいはざるべし。明人一時宋をそしる。流俗にも宋人才なしなどいふこと常言なれども。英雄人を欺く意多し。淸の王漁洋。古來七言律の上手をかぞへて。宋に陸放翁。明に崆峒。滄溟。二李などいふこそ。平心の詞なるべけれ。今平心にて見れば。宋にも明詩あり。明にも宋詩あり。これは自ら見てみづからしるべきにや

一栗の大樹　備後の安田といふ所に。栗のしだれ（末垂）たるあり。遠く見れば。垂絲櫻（しだれざくら）のごとし。高さは一丈許にて。はたはり二畝許もあり。栗毬多くつきて見事なりきとて。外姪淺右衞門此の頃圖して歸り示す

一詩語に白字を交ふる說　詩語限あれば。間に字を挿し入れてよく通ずるあり。孔子の有レ物必有レ則よりはじまり。程明道の詩を說くに。默掇して人を省悟せしむといふも其法なり。徠翁又これにしたがひて詩をときて語句の間に白字をまじふ。近頃の僧大典。むかし僧何某が箇法とてこと〴〵しくかきたるもをさなきや

一唐商の遺物　京富小路竹屋町のあたりやらんに。机。硯筥やうのもの數品もたる家あり。是はむかし唐山の人年々來り。店を開き物を賣り。歸る時は賣り殘し、貨物を。其の町内に預け置くを例とす一年かけて又來らず。十年を經し故。有司へ伺ひければ。其の貨は一町として預りおくべきよし命せられ。巡檢使のたびごとに點檢せられしこと。四十年前まではしかありしよし。今はいかゞなりしか。其の頃は京南都へ來り。店出しせし唐人はいくたりもありきとなり

一天竺德兵衞　德兵衞といふは高砂の商にて。外國を廻り。天竺にもゆきし故。綽號とす。天竺にて釋伽の居まし、寺に遊び。礎のみ殘りたるを見

既に源平と名づけたれば。源氏の事をもくはしくせんとて。大庭が早打一段に。東鑑をとり入れて。東國の軍を詳にせしなり。然れども本の早打の處をも其のまゝにおきたれば。二重になりしなどにても。源平盛衰記の後出なることあきらけし云々

一月を見る説　友人橋本吉兵衞。名は祥。來り語る。人の月見るに。人によりて大小あり。おのれは徑二三寸のまろき物と見しが。人によりて徑六七尺にも見ゆるあり。六寸許に見ゆるは。尋常の人の目なり。されば所謂ぬか星などは。おのれが目には見えさるべしといふ。人々皆試みし事にや。予ははじめてきゝね

一詩文名題　詩體明辯に云く。樂府題を命ずる名稱一ならず。蓋。自二琴曲之外一其放情長言雜にして方なきを歌といふ。步驟弛聘。疏にして不レ滯を行といふ。これを兼ぬるを歌といふ。行と述事本末先後序あり。以て其意を抽けるものを引といふ。高下長短委曲情を盡して以て。其の微を道ふ者を曲といふ。吁嗟慨嘆悲憂深思以其欝を伸ぶるものを吟といふ。其の辭を措の意に因るを詞といふ。其の篇命ずるの意に本づき篇といふ。發に發し唱といふ。條理あるを詞といふ。憤にして不怨を怨といふ。感じて言に發するを歎といふ。皆詩の變體にして。總べてこれを樂府と云ふ。歌行聲あり詞ある者。樂府に載する所の諸歌是なり。詞あり聲なき者あり。後人作る所の諸歌是なり。其の名多く樂と府と同じくして咏といふ。謠といひ哀といひ別といふ。則樂府のいまだあらざる所なり。蓋。事につきて篇に命ず。既に治めざる古題を襲がせて。聲調亦復相遠し。乃詩の三變也（以上漢語なりしを今是を和解す）かくの如くありといへども。後世になりては。搆思の時必しも何某らをわかたず。詩成りて後に題を命ずるのみ。擊壤集は古詩ことに吟と命ず

一詩文長短　饑蛟取渴虎五字にて。其の事の了然たるを賞す。然れども夜何如。其夜未レ央。二十五聲愁點長。仙人掌上玉芙蓉の如き。みじかきことを長くいひて味多し。是等は其の詩の體裁其の語の勢にもよりてみじかきを必とせざるなるべし

一鹽河侯　鹽河侯は水と魚とのたとへをいはん爲に。ふとおもひ付きたる名なるべし。魏ノ文侯なら

ども。吾が邦に文をよくする人もすくなく。かゝることはいかやうにいふても。人のうけると思ひて云ひ出だせるなるべし。或人傍にありて予が語を聞きて。もし此の人の文集をたづねば。記に論あるも。檄に論あるもあるべしといひき。いかゞあらんか。王安石よくかゝる説を出だして。酔白堂は韓白優劣論なりなどいひし事あり

一書札文字死活　書札の文字にも死活あり。たとへば一筆啓上仕候より。御無事御堅固云々。私宅無恙。時候御自愛。猶期後音云々は。何事もなきにも。書くもかゝざるもしれぬ程の事なり。其の間に。此間の寒氣は。弊鄉は海濱に氷を見。或は半月一月の旱なるに。よそには夕立すれども。こゝにはふらずなどいふはおなじ寒暄を叙ぶるにも。其の地の氣色もおもひやられて。書狀の文字も活するなり。月日の末に。此の書認めたる時は雨しきりにふり。時鳥二聲三聲おとづれぬなどかきたるは。いよ〳〵其の時其の人のすがたもおもはるゝ樣にておもしろし。長さ三尋あまりある書札にても死したるあり。三行四行の書にても活きたるあり。これらは書札にかぎらず。詩歌連俳にては心づくべきことなるべし

一平家物語。盛衰記　備中長尾村小野直吉よく書を讀む。其の子本太郎もまた其の意を繼ぐ。其の説に平家物語は盛衰記より前に出でし者なり。羅山先生の説に。葉室時長が作れる平家は。今の四十八卷の盛衰記なり。信濃前司行長が平家は。今の十二卷にて。それは盛衰記中より擇びぬきたるなりとあれども。二書ともに作者はさだかならず。時代は。鎌倉將軍藤氏二代の中に作れるなるべし。源中納言の靑侍の夢に。平家の方人したまへる嚴島明神を追ひたてゝ。八幡大菩薩の。日ごろ平家へあづけおき賜へる節刀を。賜はんと仰せければ。其の後は吾が孫にたび候へと。春日明神の仰せられしなどにても知るべし。藤原賴經關東下向なきさきに。いかでかゝやうの事書きも思ひもせん。盛衰記には入道將軍賴經の子にあたれりとさへあり。もし親王將軍の時ならば。天照大神又とりかへし賜ふなどあるべし。さて盛衰記は。其の後に平家物語と東鑑とをあはせ作りたるものと見ゆ

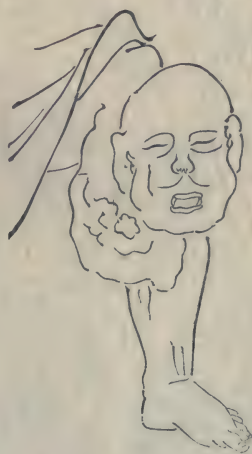
收る。只全腫不ㇾ消歩頗難し。故に溫泉に浴し。或は委中の絡を刺し血を瀉す。或應せず。醫者を轉換するも。亦數人。荏苒として幾歲月。其の腫却りて自ら增し。膝を圍み。腿を襲がせ。然して再び膿管數處を生じ。彼收まれば此に發し。前に比するに甚同じからず。只絕えて疼苦なく。今年に至りて瘡口一處に止る。卽先に骨を出すの孔旁なり。瘡口脹起哆開し。あたかも口を開くの狀のごとし。周圍淡紅く唇のごとく。微しく其の口に觸れば則血を噴る。亦痛疼なし。口上に二凹あり。瘡痕相對し。凹內に各皺紋あり。あだかも目を閉ぢ笑ひを含むの狀のごとし。眼の下に二の小孔あり。鼻の孔の下に向ふがごとし。兩旁に又各痕あり。痕の邊に各堆起し。耳朶のごとく其の面楕圓根膝蓋に基して。頭顱の狀をなす。且患ふる處惻々として動あり。呼吸のごとし。衣を揭げて一たび見れば。則言を欲する者に似たり。復約略人面を具するにあらず。强ひて人面をもつてこれを名づくるの類なり。而して脛の內廉腿股に連り。腫大にして斗のごとく。青筋縱橫遮絡。これを按ずるに緊ならず寛ならず。其の脈數にして力あり。飲食減せず。二便自可。斯症固よりこれを多骨疽に得たり。多骨疽の症。多くは遺毒に出づ。而して其の瘡勢所のごとくに至るものあり。只口內汚腐充塡緣なく。飴糖卽貝母も眉をあつめ口をひらくの功を奏することあたはず。文政己卯中元桂川甫賢國寧記

一赤壁賦韓文公廟碑說　徠翁の說に。文は體を識らんことを要す。東坡が赤壁は賦にあらず。韓文公の廟碑は碑にあらず。皆論なりといへり。予おもふに。赤壁は遊記を韻語にして賦と名づけたるにて論にはあらず。文中に論もあれども。夫は客のことばと自身の語にて一座の興なり。其の事を論ぜんとて。こゝに遊びたるにもあらざるべし。韓廟碑は賢人君子の事跡。天下後世の耳目にみち〳〵たることなれば。さらにいふに及ばず。夫ゆゑ自家の感慨をもこめてかきたるなり。其の文の體裁は。東坡もよく知りたれども。千篇一律になりては見る人も厭ひ。自身もおもしろからぬゆゑ。かくは物せしなり。徠翁も其の意はよく知りたれ

るあり。文は學ぶべし。僧として佛をそしるべからずと戒しめし文あり。予いまだ其の集を見ず西山翁の話なり 余この頃おもふに。歐陽公はじめて韓文をとなへ。やうく ふるき本をさがし出だし、よし見ゆ。智圓は公よりや、先輩なり。其の時僧徒まで稱せし韓文の。歐陽公の時稀なりしもいぶかし

一白樂天劉禹錫唱和の事　白樂天は。劉禹錫とも韓公ともよし。柳子厚も。韓とも柳ともよし。然るに柳と白との集に。そのうはさ少しもなし。唱和は勿論なり。劉は別して柳とは同黨の人にて。劉白唱和集にもあれば。白ともしたしき友なり。されどそのさだなきことはなかるべきに。いぶかしき事なり　西山翁話

一人面瘡の話　仙臺の人怪病の圖。並に。記事左に載す本文漢語を以てすといへども。今兒童の見やすからんために和解す。覽者これを察せよ

王父月池先生。嘗て余に語りて曰く。祖考華君の曰く。城東材木町に一商あり。年二十五六。膝下に一腫を生ず。逐漸にして大に瘡口泛く開き。膿口三兩處。其の位置略人面に像る。瘡口時ありて溢痛し。滿つるに紫糖を以てすれば。其の痛み暫く退く。少選ありて再び痛むこと初のごとし。夫。人面の瘡は。固より妄誕に渉る。然るにかくのごとき症人面瘡と做すも亦可ならん乎。盖。瘍科諸編を歷稽するに。瘡名極めて繁し。究竟するに。其の症一因に係りて發する所の部分。及び瘡の形狀を以て。其の名を別つに過ぎざるのみ。人面瘡のごときも亦是なり。今玆に己卯中元仙臺の一商客。門人に介して曰く。或人遠くより來りて治を請ふ。年三十五を加ふ。始十四歳のときにありて。左の脛上に腫を生ず。潰れて後膿をながして不竭。終に朽骨二三枚を出だす。四年を經て。瘡口漸く

の人唐に生れたらば。文は一時の選なるべけれども。儒學の見は異なるべし。たとひ奇說多くとも。今見るごとくにはあらざるべし。幸に日本に生れて。文字の竅をひらきたること多し。小疵を求めてそしるべからず

又徂徠先生の書に。如二濮議一宋儒聚レ訟雖二程朱二公一無レ有二明辯一今考二之儀禮一不レ須二多言一本自了々たりとあるよし。（文字人にきゝたる故たがひあらん）然るに歐陽公の儀を見れば。第一に儀禮をひき。詳細に辯せられたり。又清詩別裁に楊升庵が竄せられしを。程朱の正論といふ。これは嘉靖の事をいへども。なほ同事なれば清朝にても正論といふを見るべし。先生たまく〜わすれしにや

一唐土四百州　東坡上書に。毎州僱欠の吏卒五百人に下らず。天下を以て是をいへば。これ常に二十餘萬の虎狼散じて民間に在るあり云々。宋の天下。北に遼あり西に夏あり。雲南はもとよりすてたれば。幅員漢唐のごとくひろからず。このつもりにて二十萬は四百州にあたる。されば四百餘州といふは。宋の時のつもりにや。しかし一州に僱欠五百人といへる一州は。なにほどの戶數なるか。さも仰山なることなり。王安石虐政のあと、いへども。胥吏も戶數も格別の減少はなかるべし。されば唐山土地のつもりも思ひしらる（此の邦三十萬石の邦。民數大抵三十二萬人。これに五百人の胥吏を設けて。其の年中のつとむべきこと催促すべきことをつもりて見ば。大抵にあらるべし。其のうち里正里甲もとよりあるべき役人は。中冗官のうちにはかぞへぬなるべし）

國々もとより大小あれども。大抵一村に一人ありて。五百村に五百人なれば。一州五百人のつもりなり。勿論現今の一村千石の村に一人にてあるべし。或は二三百石の村あり。又三四千石の村もあり。大抵にいふべし

一詩の一二字に同母字を用ふ　詩の第一第二の句同母の字を用ふるをいむ。それ故起句に通韻傍韻を用ひたる多しといふ。然れども去年此日泊二辰州一衰柳蕭々客繫レ舟白髮天涯嘆二流落一今宵聽雨古宜州といふあり

一知己　知己を。おのれを知るといふは。不己知より出づるなるべし

一韓氏の文　孤山の智圓法師の閑居編に。徒弟多く韓文を信仰のあまりに。韓氏の文字に佛をそし

にて色すこし黒く肥えじしにて溫藉なる人がらなりき。一儒生の不義なる行ありしを見て絕交せしなど。威嚴のありて全德の人なり

一池沼　文衡山が濯足劍池ノ詩に。都將二雙足塵一濯向千年沼といふ句あり。池沼わかつことなきにや。此の類多し

一歌道評論　江戶の友人。長流。契沖以下の古體をよむ人の歌をあつめて一書をなす。或人見て。眞淵以後の人。中古の歌をそしる者多し。內々は何某公の歌の中にても。きこえぬありなど丶いひてそしるもあり。今其のそしられし人々の歌をかくあつめ見ば。此の集と孰れかまさらん。もし今の集まさらずば。そしりし人々心に慚ぢざらめやといひき。此の言はわれ人きゝて。みづから警しむべき事なり

近頃の歌といふものは。拘はること多くして。おもふ事もいひがたかりしを。長流以下の人々打ちやぶりしは言葉の道の大功なり。これより。女文字の文もよくする。人出づ。京に蒿蹊。江戶に春海など其の選と見えたり。蒿蹊春海みな男文字をもよくよむ人なり。春海予に逢ひしとき。昔の歌よみ人は多半儒生なり。古今集の撰者の官職にても見るべしなどかたりき。春海名山の詩をこひあつむとて。予に淺間岳の詩をつくらしむ。其後程なく身まかりぬときゝぬ。其詩いくばくかあつまりけん

同じ時。千蔭にもあひき。みな木村定重を介とす。定重俗稱俊藏といふ。與力衆なり。千蔭は隱居して總髮なり。顏色容貌さしも歌人と見えたり。耳しひて息女を傍におきて。彼此の言を通ず。春海は半髮にて頭大に下ほそりたる顏なり。一面舊知のごとく磊落の人なりき

蒿蹊は近江八幡の人。京に住す。小男にて剃髮す。音吐大によく談ず

一徂徠先生　或云ふ。徂來先生。一生楷字をかゝず。安澹泊に答ふる書に。楷書は得かゝず。性則然りなど丶見ゆ。此の人唐ずきにて。和習といふこともて人を誹られしこと多けれども。是も和習の一なり。唐山に生れたらば及第もなりがたく。學者の林にも入られざるべしと。余おもふに。此

近頃始りしよしなり。地は暖に。多く秋ふけて樹上に蟬なき樹木に蛬なく。蟾蜍は十月までもいで。蛙もなくたぐひ。他國に見なれぬ事多しとぞ。九州に蟾蜍をワクドウといふ。久留米の樺島勇七毎日酒をのむに蟾蜍のいで來るときを期とす。故に人皆樺島(かはしま)がワクドウ酒といふと云ふ

又肥後より豐後の竹田にゆくに。九重山(きうちやう)をこゆ。至高の所を上下すれども。路ひろくして。險阻なしといふ。筑後肥後の平地四五十里寸歩の上下なし。たゞみの上をゆくごとし。秋後鶴の多きこと。他國の鳥の如しといふ

一柳絮海腸　柳花柳絮と異なること同所に見ゆ。然れども花の後に絮となるなれば。絮を花といふも。詩などには妨なきにや。吉貝(きつばひ)の花を布となすといふも。絮を花といふなり。今俗に云ふ。海蛔(このわた)腸(わた)は。子にて腸(わた)にはあらず。然れども古人の詩に腸となしたれば。余また腸として作りたることあり。よく見れば異なり

一和漢合意　大阪なる人。妓を納れんとせし時。其の友播磨の瓢木とやらんいふの俳句に。「うちへいれな。やはり野で見よ。げんげ花」といふを贈りき。淸人もまたおなじことに。間花只合二間中看一一折歸來便不レ鮮といふ句あり。絕域同情を見るべし

一中山貞藏傳　佐渡人中山貞藏。名は惟楨字は子幹。其の地の瓦田(かわらだ)といふ處の豪農なり。はじめ鄕師に從ひて徠學をなし。論語集覽などを悅びしが。後に覺ることありて。朱子を信じて行事に心を用ひ。子幹が父は養子にて。其の家の血脉にあらざる故。血傳の人をいれて其の家を嗣がしめ。おのれは雁坂といふ處に隱居し。數年の後。京に來り住して敎授す。貞藏もと五兵衞といふ。其の名は嗣ぐ人に讓りて。後の名にあらたむ。其の雁坂といふ處に有りしは。嗣人の行事を試みたるなり。其の國にて一二と數へられし富をすてたるにて。其の後の行も知るべし。佐渡の家に。一室。妖怪ありとて人のゆかぬ處あり。貞藏試に二三夜寐しかども何事もなき故。其の後は人もおそれずなりしよし。余が貞藏の遺像の賛に。曾吹叔夜燭といひしはその事なり。凡その詩につくりたること一々その實事なり。今時めづらしき人なり。方面

一田道公碑　田道公の碑といふもの。贋作なりといふに。蛇の字を虵に作るは古體にあらずと。予曰。碑は贋作にてあらん。虵字はいにしへになしとて。これを以て決するはいかゞあらんか。情寶といふ字出處なしとて。近頃の儒者たち捜索して閑情偶奇より看出だし、事あり。これはちかく都氏文集にも見えたり。都氏は延喜以前の人なれば。ふるき文字にもなるべけれど。今時ありふれたる書に見えじ。凡。昔には多けれども。書中に殘ることの稀なるもあるべし。仁義禮智信とつゞきたる語。むかしになし。漢儒陰陽災異などより信をそへしなどいふ說あり。これもむかしの書多く存せざれば。ありても傳はらざるも知るべからず

一雖の字　五山僧徒詩會に。一人。雖の字を得て。一句に薄命小僧得㆑韻雖とつくりし事あり。魯堂先生。これを朝鮮の南秋月にかたられしに。秋月。朝鮮にも同じ事あり。詩人自㆑古韻無雖とつくりき。枕の一名を吟雖といふ外に。雖に熟字なしといひしよし。後に長慶集に。四雖吟あるを見たり。余この事を大坂にて子琴にかたりしが。其の後。子琴二律をよせて。吟雖を押したり。余それを和して。四雖を用ひし事あり。また其の後に。宋人既に四雖を押し、事を。佩文韻府にて見たり

一豐後山國川　豐後の日田より。豐前の中津へ十里ばかりみな峽中なり。川を山國川といふ。左右の峯巒樹石奇姿妙態をきはめて道も平らかなり。千里を遠しとせずして。往遊するも。所謂一來を枉げざるなりといふ　以下久太郎話

一薩州風土　薩摩の山は。多くは肥後の山の流尾にて高山なし。海門櫻島霧島のみ崛起して壯觀なりといふ。城下は富庶にして金銀多きよしに見ゆ。琉人多く入りこみ。人家往來すること土人のごとし。人少き家にては。琉人の子を抱かせ。其の間に水を汲みなどするをも見きといふ。琉僧は薩にて學問せざれば。國例。寺を持つことならずといふ。近頃は芝居も常にあり。上方問屋（かみがたとひや）といふ家五六あり。上方の歌妓百人ばかりもわかれ宿して。日夜出で、技を賣り。士人の家にも往來す。他處にておもひやりしに異なり。士人に容貌言語仕付方などいふ職ありて。風俗をたゞすこと。これも

容貌賢愚も母に肖たる人多し。周勃文帝を立つる母の賢なるをえらびしは妙なり

一四聲　むかしの人は。四聲をわかちて誦讀す。善道直貞博學にて。大學助陰陽頭などをつとむ。三傳三禮にくはしかりしが。此人四聲を辨せず。教授みな世俗踳訛の音を用ふるよし。日本後紀等に見ゆ。考安云。今。高野の學寮に。しやうよみとて。四聲をわかちて誦讀することあり。又其の祕教の中に。ヲコト點を用ふる者ありとぞ。彼處には古代の遺風存せるにや

一渡瀨氣候　奥州渡瀨といふは。梁川より。西北にあり。白石へいづる川の川上にて。出羽往來の地なり。渡瀨の半道ばかり南に。六月に寒く氷あり。石などの下は皆氷にて。樹は紅葉するものあり。冬はかへりて暖にて雪なし。仙臺領なり

一蜂馬を螫したる事　文政元年九月。讚州高松の東三里石塚といふ處の百姓嗣右衞門といふ者の馬を。馬士近所の岡に牧し。馬を叢祠の側の古墓につなぎて。おのれは草をからんとせし時。蜂多く出で、馬を螫す。馬士見てはしり行きて打ち拂へば。馬士にも數しらずあつまり螫す故。たへかねて馬をひきて歸りしに。馬人ともに大に腫れて。馬は二日を經て死す。馬を屠りて見るに。毛の間に蜂十四五くひつきて居たりしと。近所の人池戸村周藏といふもの。九月六日に吾が塾に來り。其の家をいづるまで。馬士は死せざりしが。とても治すまじきよしをかたる。予若き時備後府中の僧。大醉して山中に臥したるを。大蜂あつまり螫して死せしよし。畫史墨隨が語りし。其の後はじめて此の異をきゝぬ

一和習　大日本史に。朝廷の公事或は人の稱號地名等の類。みな用ひ來れる字にてかゝれたり。たとへば。歌あはせを歌合とかく類。此方の一故事になれること故。其の稱にしたがひたるなり。兵糧入れの詞も其類なり。世の文人といふ者。和習といふことをいやしき事におもひ。しひて雅にせんとおもふより。却りて和習になること多し。御馬屋かしを白馬津といひ。目黒を驪山といふ類みな和習なり。これらの吟味は。水府にはもとより精し

蜆多かりしが。今は少しも生せず。十里計も上流へのぼるといふ。瀬田の螢。いまは。大日山といふ處にうつりて多く。瀬田は尋常なり。この類の事。餘所にも多からん

又筑前古川村の近き岡に。昔より貝多く。日々石灰を焼き出だす。いく千駄といふことをしらず。海より五六里を隔でたる所なり。備中大島のみだけといふ。山の峯にけやきの大木あり。樹身一間計上に大穴ありて貝を生ず。人とり盡しても又生ず。貝は海にあるあらん。たひしやくと名づくる貝なりといふ

一奇樹　寛政の中頃。予京に有りしに。美濃よりからたち花（平地。木地金牛の類）十盆を駄し來りひさぐ。數日の中かひて來り集りてひさぐ。八百餘金を得て歸る。其の頃此のものはやりて。甚しきは三百金餘にあたる。數寸の盆栽なり。其の後紀州に蘭をう、ることはやり。是も大金を費す故。官より禁ぜられても。其の禁をきかず。はては官吏家々にふみこみ其根株を斷じたり。其の後石菖蒲（いはあやめ）はやりて。京の一醫一盆を十六金にて買ふを見る。近頃文化亥子丑の頃。牽牛花奇を爭ひ。佳種百品七十金にあたる。備中の人一方金（いちぶ）にて一種を求めしに。名種はこればかりにて買ふべきはなしとて。こぼれ種といふ。名もなき。數種を得てかへる。其の後江戸にも此のことはやりて。岡花亭その記をつくりて余に示す。文政のはじめなり。享和のころ。備中備前に文鳥を畜ふことはやり。これも一羽數十金にあたる。岡山藩よりいたく禁ぜられて。遂にやみぬ。芥川といふ書に。其の時の事を記せる中に。藝州廣島の上流にて。一僧佛具を川岸にあらひしが。一花の流れ來るを見れば。椿の奇種なり。其のまゝとりて挿み。三四年に奇花をひらく。城下の人日々に見に來り。川上に其の種ありやと尋ぬるに縦迹なし。さて奇異の花なりといひ傳へて。いよ〳〵來客多くなりぬ。ある人たはぶれに。貴僧の椿名花なりとて。國主より所望あるよしをかたりければ。其の日其の花を鉢植にして。其の夜亡命せしよしを載す。毛利家。廣島におはせし時なり。かゝる事をり〳〵にあることにや

一血氣之說　人の血氣母に受くること多きにや。

とあり。或は野にある燒土などの。たきさしの竹木をくはえ來りて。屋上におとすことあり。筑前には村落の近きあたりに巢をつくらんとするをば。かならず追ひちらせよと。胥吏より觸れ知らすることありと。竹田器甫が話なり

一野寺の歌　備後寶泉寺は野中にあり。或ときそれに會して保之か

松幾木山と見るまで生ひそひて
野中の寺ぞふりまさりける

とよみしを。歌よむ人見て。野寺はよみがたきものなりかはりには。たれ〳〵もよみ得ざらんといひける。末の句。年ふりにけるにてありしか。よくも覺えず

一舊習改めがたき事　予。江戶に在りし時。柴野先生に食卓と小榻四つをおくる人あり。八月十四日。その具にて。七寶羹を饗せんとて數人を招かる。其の夜雨降りて遠人は來らず。予と尾藤博士と主人とその榻に踞して對酌す。久くして主人勝手に入られしあとにて。尾藤予をかへりみ。主人の居ぬうちは。暫く下りて休息せばいかんといひて打ちわらはれしに。予もまた絕倒す。やがて主人いで來り其のよしをきゝ。實にも久しく馴れたることは改めがたく堪へがたき事あり。聖堂の釋菜に。一事を勤めてんと願ふ人あり。其の人老いたれば。事少なき役をなさしめしに。一器を持て久しく立ちてあるうち目眩して倒れし事あり。吾が邦の人は。坐にならうて立にならはず。今夜の下りて休息も宜なりとて。又互に笑ひてわかる。文化元年の事にて。今より十四年前なり。某先生久しく瘧を患へていえし後に。疲勞をやしなふこと數日。其の間にはやく髮そり。鬚きらんとのみおもひき。かくては淸人の辮髮も昔にかへらんこと難かるべしとかたらる。凡生來ならひしこと。遽に改めんこと皆此の類なるべし

一變革　筑前の川には。蜆貝次第に川上にのぼりて。山川の石川淸流にも生ず。實滿山は五十町計も上る山なれど。そこまでも多し。川と海とのさかひは今もあれども。海を遠くして。あり來し處は年々少くなりて。今なき處多し。文化のはじめ頃よりのことなり。玲藏すめる木屋瀨村。もとは

を屬せしに大典すこし赤面せられしよし。其座にありし人。大典はさる人にはあらず。そこにて赤面せしは。さすがに學者なりしといひけるとなり。

一川之説　備後横尾の鶴が橋は。もと鶴が渡とて舟わたしなり。其時の舟の櫓棹など。今の橋守の宅に殘れり。いつの頃の失火にか。燒失せりとなり。今は川水至りてあさく。やゝもすれば乾涸す。同じ川上。國分寺の西に。烏岩とて。高さ三間あまり柱のごとき立石ありて。烏。年毎に其うへに巣くふ。三十年前の川浚のとき。里の老人。昔の烏岩は。此あたりにありしとて。長き竹もて。沙中にさしもとむるに。竹にさはるものなかりしとぞ。川の埋れたること思ふべし。すべて。此川のみにあらず。山木つきて。川高くなり。左右の良田。汙邪になる事いひ傳ふることとなり。近頃は。田地の濕淫洪水の憂のみならず。井泉わくことたかく。水あしくなり。黄胖等の病。わづらふ人多くなりしやうに覺えらる。眼前の損益見えざれば。上たる人も。打ちすて給へるにや

一龜卜　龜卜は對州にのこりてあり。其法龜甲をうらより小刀にて穿ち。一寸程を薄くするを鑽龜といふ彼地にて。タフといふ木は。刺ある木なり。それを箸のやうにして。其先に火をつけ。彼薄らげし處を裏より灼き。表にひらき入たる紋出で來たるが灼龜といふ。其紋のさけやうを見て。吉凶を卜す其法は。或時吉田家より望まれしかども傳へず。甲は乾きたるを用ふ。生龜にあらず

一水野義風雨乞和歌　備前士人。水野三郎兵衞。名は義風。食祿千石。大將なり。和歌を好む。一年。大旱の時。義風が采地の百姓ねがひ出でけるに。主人。和歌に堪能にましませば。昔の小町か例に。雨乞の歌よみて給ひ候へと申しゝかば。義風さまゞゝ辭すれどもきかず。つひに一首をよみて與へければ。百姓よろこび歸りこれを。産神にそなへて祈りてぞしるしを得たりける。夫より今に至り六七十年。旱すれば必その歌を出だして祈るに。しるしなきことなしとかや。其の歌

世をめぐむ道し絶えずば民草の
田ごとにくだせ天の川水

一烏の巣より火出づる事　烏の巣より火出づるこ

巾着きりの盜の人の懷中をさがすを。傍より見たる人。其人に知らせなどすれば。後に盜必らず其知らせし人に害をなす。或は人多き處にて。密に小刀にて。股脇腹などを刺されて死ぬる人もあり。また。人家に盜いりたるを。隣家より助けなどすれば。これも後日に其家へ仇をなすとなり。されば。夫と知りても。しらぬ顔にたすけ。救ふことなし。よりて盜は公然として横行す。其地の人は。か丶ることをしれども。田舍よりたまさかに行きし人は。其心得あるべきにこそ

一盜を防ぐべき說　備後の鞆の祇園會に某屋といふ。小間物屋の前街に。人の群聚する中にて。盜の物をとらんとせしを。人に見付けられて。海濱へ引き出だして。海へ投せんとするを見て。店主人走り出で丶。其罪を詫びてすくひければ。會終りて後。一人つと入り來り。私は先日御たすけにあづかりし盜にて候。一命の御恩を謝し申さんとて。參り候といひしかば。主人も其本心のいまだ亡はざるを憐みて。酒のませて物がたりし。其意届けて。盜人を止めさせんとなり。盜も感泣して別れける。其ものがたりのうちに。凡。ぬす人のいるは。表の戸。裡門のあきたるを見て。心を生ずる事多し。人みな寐んとするとき。必らず門戸はとざせども。或はわかき男女のあそびありきなどに出で。頓て歸るべしとおもへど。とくにも歸らず。或は戸ざしすれども。眠ながらにして。かたくさしえずなどする事あり。戸ざしは。かならず主人おのれ自身すべきこと肝要なり。壁をうがちているぬす人。をどりこみなどば。此例にあらず。此用心は。また。格別なりといひて。返りしとなり

一僧大典　大典は僧伽の文章家なりし。柴博士と同じく洛にありて。一面もせられざりしが。或とき權門の席にて。はからず出であひて。大典聲をかけて。そなたは柴先生ならずや。始めて御目にか丶り候は。大幸に候へとて。近寄られければ。柴博士われ京に在りしこと。二十年計に候ひしに。上人とは。嵯峨の花の下。廣澤の月の前にも。見參らせ申すべきに。今日は。不思議の處にて。接見いたし候と申されしかば。同座の人々。一時目

、るふしぎ多かるべし

一柳に數種ある事　予が塾に柳三種あり。一は京の下河原に摘星樓とて。六如上人の房の庭にありし柳の枝をさせるなり。もと絮綿多かりしが。水土によればにや。今はすくなし。一は蘇州府の種とて。長崎の德見茂四郎より送り來る。一は蜀柳にて。荒木爲五郎より得たり。此柳は。西洞院風月入道殿。主上より賜はりしをわかちて平松宗致に給ふ。宗致備中松山人ゆゑ。故郷へもわかち植ゑたるなりといふ。荒木は松山人なり。予と善し（蜀柳は近頃枯れたり）

一雅事之説　凡。用事と雅事とかねざるは。眞の雅事にあらず。障子の腰に繪をかきたるは。はめかふるとき右よ左よとまよはず。又趣もありてよしといふ。この事萬事にわたるべし。何某公の領内の沮洳の地を堤して。湖となし給ふ。形勝もまさり。又。灌漑をたすく。この類世間に多かるべけれど。吾便宜に志す人は。人の不便をもはからず。雅事に志す人は。吾家の不利をも省みざる者多し。但。雅事のみにしてよきは。家を子弟に讓りて。隱居せし人と。僧とのみなり。膏腴の地をすて丶。柳櫻を植ゑたるのみはいかゞあらん。隱者といふものも。世わたりの業はなくてはかなはず。長沮桀溺も。耦耕するは世わたりなり。陶朱公があきなひも同じ。隱者といへば。風月のみにて。家のいとなみもなさゞる者とおもふは。世界もしらぬなるべし。孟子のいへる抱關擊柝も隱者なり。膠鬲が魚鹽も隱者なり。僧の托鉢乞食して。世をわたるよりして。みづからなす者をそしるは誣ふるなり

一盜入たる時可二心得一事　いつの頃にか。備中さいちこといふ所に。細見勘介といふものありける。ある夜盜の入らんとするを知りて。其腕をとらへて。格子へ引きこみ。其うちにて物に縛りつけて。扱刀をとり出だす。盜たまりえず。自身其かいなを斬りて逃けぬ（或は同類の盜きりたりといふ）其のち數月にして。又。盜また來り。勘介が寐入たるを刺し殺して去る。又。甚五郎といふ者（其所は忘れたり）盜を追ひかけいで。あやまちてつまづき倒れしかば。盜たち歸り。一刀刺して去る。是も死したり。其後大坂などの町中にて。

が。禁庭にて鶴の庖丁せし時に。上より物賜はりければ。笏のかはりに。懐中のたゝう紙をもて拜せしかば。一時の公卿。其故實に達したるを譽め給ひしとなり

一ナゲシ敷居　上はなげし。下はしきゐといふは。近世のことなり。一間ごとに。其間にたかきしきゐありしをなげしといふこと。源氏にも見え。また。義經記にも見ゆといふ。荒木爲五郎話

一裸形の國　數年前。藝州の人漂流して。一國にいたる。其國みな裸體にて。褌のみをまとふ。國の酋ときどき巡視するにあふに。王も后もみな裸體なり。芋多く生じて。土中に入れて煨（おきび）しくらふ。其葉を植ゑおけば。又。芋をなす。外に穀食することなし。この裸國へ。藝人大海中に難船せしを。蘭船きたりたすけて。この裸國へあづけおきて。翌年日本につれ來れるなり。かやうに漂流人を連れ來れば。日本人に限らず。しらぬ國人にても。褒美金を賜はる故なりといふ。武元景文其人に逢ひて。其話をきゝ。詩に作れり。今はわすれたり

一怪異　世に不思議なる事は。種々これあるものを。佛者は。怪異は。吾家の家業のごとく。儒者は。つとめてこれを排するを。これも亦家業のごとくおもふこと。常となりたり。伏義いまだ出でざる前に。釋迦未生の前も。天地はおなじことなるべし。いかでかくはわかれ異なる事になり來りしか。こゝを覺悟せる人。世にいくばくぞや。大德知識と指さゝれ。吾身も大悟徹底とおもへる人も。何某寺にもと水なかりしを。住吉大明神その開山とやらんを歸依して。水を獻じたまひしより。湧泉ありといふやうなることをもて。儒生にむかひても誇る者あり。また。ある儒生周易のしるしあることを奇か偶かといふ。辻占におなじといふもあり。皆。一笑の資といふべし

讃州金毘羅の町。文化丙子臘月に。十三四家燒失す。其前數日の間。所々に豆腐崑蒻等すてゝあり。天狗か狸のせしにやと。あやしみ居たりしが。のちにきけば。祈禱をする僧のいづくともなく來りて。近きあひだに火災あらん。是を遁れんには。金いくばくを捨てよ。豆腐こんにやくいくばくを捨てよなどゝいふによりたる事なりしと云ふ。世にか

ごし。つもりては病をなす。大杯にて。おのれが量だけ一度に飲むものは。酒の力。一時に出でつくす故に害なし。是は予が數十年見およびし人。皆然り。されども。量を過ごせば。大杯にて一度にのむの害は。小杯にてながくのみしにまさると見えたり

一詩歌語勢强弱　「あら海や佐渡に横たふ天の川」などいふ發句。興象は論なし。語つよくおもみありてたけたかく。今の人の句。語弱く輕く。格ひきく。僅十七字にても。その體のわかる丶こと。語勢自妙の妙處なり。詩歌は。さらに心つくべきにや。歌に

まつ人の麓の路やたえぬらん
軒端の杉に雪おもるなり

これらの意は。尋常なれども。語はおもくしてつよし。撰み出でば多かるべし。老杜が詩をよみて後に。後人の詩を見れば。いづれも弱く輕くおもはる丶うち。明の李空同のみ。杜が遺響ありといふ

一古文辭　揚誠齋詩話。如山谷猩々毛筆。平生幾兩屐。身後五車書。平生の二字論語に出づ。身後の二字。張翰云我をして身後の名あらしめん。幾兩屐は。阮孚が語。五車の書は。莊子の言。惠施此兩句の四處合し來るといひ。これらの句を妙なりとす。妙ならざるにあらざれども。詩は歌謠なり。必しも心を用ふべからず。同頁に四六に古語を丸にて出だし。一二字かへて取り用ひたるを妙とす。明の于鱗が。古文辭といふもの。古語と古語とを續けあはすること。これらより出でたるなるべし。當時の元美が輩。宋人の才なきをそしる。その肯綮をしらざるに似たり。北斗闌干南斗低などいふ句。陸放翁にあり。于鱗にも此類多かるべし。是ぬすみたるにあらざれども。其意念遠からざるを見るべし。今の人々。宋と明とは。事ごとに。雲泥のたがひあるやうに思ふはいかにぞや

一扇を笏のごとくもつ説　今の人。神を拜するに扇を笏のごとくもつことあり。曾我物語にあらためて禮をするとき。扇を笏にとりなほしてといふ詞あり。又。考安いふ。笏なきときは。たゝう紙を用ふること故實のよし。御厨子所預高橋若狭守

呉を亡さんとする時。張華山濤など。敵國外患なき時は。あやふきよしをいひ。呉をたておくを良策といさめしかども。用ひられずして。呉につゞきて。晉も滅びたり。是は利害を見て。いひしなれば。遠慮ふかしといふべし。國家は。仁義もて物したまへるなれば。雲泥の異はあれども。暗合せる處もあらん。予この說を持して。久しくいひ出でざりしを。十餘年前。賴千秋父子と。竹原に會せし時。歷史を論ずるによりて。いひ及ぼし、に。座上にてはいらへもせざりしが。數月の後。かれより書中に卓見なりとゆるし來れり

一大食會　いつのころか。備後福山に。大食會といふことをはじめしものあり。其社の人。皆夭折せり。ひとり陶三秀といふ醫者ありしが。これは。はやくさとりて。其社を辭して。六十餘までいきたり。予が若き頃。三秀が甚だ小食なるを見て。其よしを問ひしに。其社中。皆異病にて死し。おのれ減食して。まぬかれしといふ。其後。近村平野村に。また。この事はやりて。人多く異病をやみぬ。其社中に淸右衛門といふ若者あり。膂力も人にすぐれ。無病なりしが。ふと遺溺す。それよりしげくなりて。つひに坐上に溺するを覺えず。發狂して死したり。食うてすぐに。食傷はせざれども。つもり〳〵て不治の病となるなり。一日に五合の食は。吾邦の通制なり。是にて飛脚をもつとめ。軍にもいづるなり。されば人々心得べき事にこそ。軍行には一升。戰の日は二升のかては。其時々の事にて常にあらず

一大酒　備後中條村に。三藏といふ人あり。其家僕に酒を好むものあり。或日三藏其ものを見て。汝。酒いかほど飲みなば。飽くべきかと問ひしに。其もの生來貧しければ。心のまゝにたふべし。ことなし。大抵一升にては。たりなんといふ。さらばとて。一升飲ましめければ。忽にのみつくしぬ。こはめづらしき上戶なり。なほも飲めやと、へば。いよ〳〵悦ぶを見て。又。一升をあたへける。これも苦もなく飲みて。やがて臥したりけるが。其夜半に死にてけるとかや。外にもかゝる事三四度も聞きたり。是は三藏にきゝしまゝなり。すべて。酒は小杯にて。一日半日ものむは。覺えず量をす

滿足せざる人多し。されども。推究して論ずれば
こゝにとゞまるなり
一佛法八宗　近世佛家に。八宗をわかち。各々其
主領をたてられしは。良策なり。邦俗ものにまよ
ひやすき故に。此法なければ。末々天下一宗とな
りて。國家の變をなさんことはかられず。元龜天
正の事にてもしるし
一諸侯室家　諸侯妻子を具して。都下に住するこ
と。古今になき良圖なり。創業の人。功臣をうたが
ふこと。昔より多し。大國に封ぜられ。遠方には
なれ居るもの萬夫の雄。韓信がごとき。もとより
高祖のおそるゝ處なり。一旦の讒口。かりにも叛
逆のことをとかば。危ぶまざる人はあらじ。是を
都下に置きて。常々に相見るならば。讒もいりが
たく。疑も生じやすからず。されば。妻子とゝも
に都下におくは。國家の備のみにあらず。諸侯を
たもちやすんずる良策なり。但豐臣家の時は。都
下の住居にものなれずして。用度多く。領地疲弊
し。人心もあやぶみたりしかど。今の世はさもあ
らず

唐土は。幅員廣ければ。此法は。とても。行はれ
がたかるべし。殊に今の都。燕なれば。雲南省よ
りは。萬里にすぎ。往來一年も經べし。然れども。
成都あたりにて。任子を成長させ。そこにて妻子
をもたくはへ。子をそだてさせ。數年滯るうち。
北京へもゆきなどすることやすかるべし。廣東西
は杭州。秦隴は洛陽などゝさだめ。遠近によりて。
其法をたてなば。さばかりかたかるまじきにや。
其國主死して。任子必ず跡をつぎ。其子また其地
にのこりて。任子とならば。のちには。そこを家
とする心にもなりて。さのみはうれへざるべし。
其本國にも。また他國に儲の主人ありとしらば。
亂を防ぐの道も。また其中にあるべきにや
一國家良圖　今時の制。もとよりありける大國の
諸侯をもとのごとく立ておき給ひ。譜第の家をば。
大國にも封ぜられず。爵位もさばかりあがめたま
はざるは。國家謙讓の美事にしていふをまたず。
譜第の諸侯も。我より國。大に位の高き人多きゆ
ゑ。心ゆるぶ事なく。國家をいたゞく念ふかし。
此制も又いにしへなき所の。良圖なるべし。晉に

しむといふこと。おもひあはせておもしろし

一張良隱遁　唐土の三代以後は。有力の人天子となる故に。大臣疑はるゝ者多し。張良が赤松子に從ふを始めて。堂々たる李鄴侯陶隱居なども。其類なり。其言癡人と見ゆる計なること多けれども。其愚不可及の類なるべし

一諱字の說　諱に木火土金水を次第してつくること。いつの頃に始りしか。宋人ことに多し。張俊の子。名は拭。朱子の父は松。子は塾。在後に俊あり。その子餘多ありけれども。記せず。明の天子或は朱子の遠孫なりとて。代々の諱これに從がはれしといふ。これ王相の說にとるにはあらざることしるし。世遠くなり。扁傍によりて。誰はたれの兄弟。何某は。何某の子孫などいふをしるに便りあり。排行の稱呼すたれし後は。これ亦益あり。吾邦近世は俗薄くして。兄弟といへども貧なれば齒せられざる者あるにいたる。五行を必とせず。一門は。よくそれとしれる稱を用ひて。やゝ流弊をたむるにたよりすべきにこそ

一通稱之說　記事の文に。近代の人。諱しれざるは何某右衞門何某兵衞とかくべきは論なし。しかるを。文字俚なりとて。彌三郎を單に彌と稱し。又太郎を又。平右衞門を平とかきしあり。學びがてらに。一話を記するごときはいふにたらず。記錄史志の類ならば心あるべし。太郎次郎は。通用にそへて稱するなれば。はぶきてもよしとせば。彌又は親も三郎。子も三郎なれば。其子を彌三郎。又三郎などゝいふにて。彌も又も同じく。通用の稱なり。其人の名にはあらず。平右衞門。源兵衞は。もと平氏の右衞門。源氏の兵衞なり。さればこれも名とはいひがたし。今時稱謂みだれて。かゝるけぢめもなければ。せんかたなし。何某右衞門。何某兵衞とかくの外なし

一在名　庶人は。在名を名乘ることをゆるされず。然るを。姓を禁ずといふはしからず。源太郎。平二郎皆姓なり。誰も咎められし人なし。秩父。熊谷などは在名なり。これには禁あり。今座頭盲目に在名といふ格あるにてもしるべし

一韓公排佛　退之佛を排するに。遊手多くなりて。世わたりのかたくなるをいふ。世其說淺易なるを

睦びしごかや。此二事。一は西山拙齋。一は中山子幹二子の話なり。人の本性ものにふれて。覺えず發見することか丶る事世に多かるべし

一病源藥性之説　　近日醫師に病は。一氣の留滯より生ずといふはさもあらん。魚は。水に生じて。水に養はれ。人は氣に生じて。氣にやしなはるればなり。此説につゞきて。萬病一毒といふ者あり。これは通じがきにや。たとへば。胎毒結毒は。人にあり。魚毒菌毒は。物にあり。風毒。陰陽毒は氣にか丶る。これ皆毒とも云ふべし。打撲顛躓にてわづらひ。火傷。水溺にて死に至り。刀劍の傷よりして。命を殞し。過食にていたむは。抑何の毒なるか。米麥もと毒なけれども。多食より病をひき。挺刃もと毒なけれども。傷より患ふるなれば。毒といはんか。さらば。河豚鳥喙の類。其ものにたくはへし毒とは。一にあらず。病を生ずるものをさして。皆毒といはゞ。萬病一病といひても可なり。また藥に寒溫なしといふ説ありて。試に水をあげて。汝が性いかにと丶はゞ。水こたへて冷といはん。沸湯にしてとはゞ。熱といはんなどゝいへり。今試みに酒を擧げてとはゞ。溫といはんか。冷といはんか。大抵はやく人を驚かし。門戸をたてんとおもふ人は。必か丶ることある者なり。獨儒者のみにあらず。さりとて。其人愚昧なるにもあらず。亦信ずべきこともま丶あるべし。か丶る不稽の説ありとて。悉くもすつべからず。予香川氏の行餘醫言藥選などをよみて。その卓識に服せしことも多けれども。また踈漏の説もあり。後藤吉益等の書は。いまだ讀まざれども。佳説もあるべし。（大抵近時の人の書は。是非相半するものなれば。一概に信じがたし）病は。丙の字なりといふ説。輟耕錄に見えて妙なり。今ことく／＼く記せず。人は一氣の陽もて生存す。この陽常ならざれば病なり。强人さむくして振ふも。弱人の寒になやむも。皆。陽氣の變にて證に寒熱といふは。枝葉の論なり。療治にいたりて。或は溫。或は凉。或は發散し。或は收濇するは。療治の手段にて。こゝにいふをまたず

一節分に菓木をうつ事　　五島の俗。節分に童子きそひて。菓木をうちたゞき。來年は枝のたわむまでなれ／＼といふ。蜡後草木をむちうち。萌動せ

朱子の聖人も。通神明の功能をからんとて。心をこめて。食ひ給ふとおもへるよしにとりなして。そしる者あり。此説は。いつの頃かいひ出だしゝを。近頃。又。讀みかたしらずと失笑せる説もありて。そしる人の非は。世間皆しりたるならんと思ひしに。此頃見たる書に。猶其説あれば。ちなみにこゝにしるす。神は。詩に神を傷ましむといふときも。日本の大明神。八幡宮などいふごとき神とおもへるなり。書をよみて。かく解しなば。解せざる書多かるべし。あまりなる事なれば。くはしくはいふべくもあらず。本草などに。久服輕身すなどいへるは。必。鶴にのりて。飛行する類とおもふべからず。服食家の言混じて。さおもはるゝこともあれど。本草は。本草にてよみかたあるべし。これらは。一々辨駁するもをさなきことなめり

一盗人縊死をとゞめし事　或家に。盗宵より忍び入りてうかゞひ居けるに。夜ふけて。家内の人。みな寝ねて後。一女子ひとりおきゐて。髪ゆひけはひなどするあり。丑みついまはたのまれずと待ちわぶる者もあらんと思ふうち。さはなくて。硯を出だして。こま〴〵と一通の書をしたゝめ。さて梁に縄をかけて。自ら縊りて。前に飛ばんとするに臨みて。盗おぼえず聲をあげて。やよ人々おき給へといひつゝ。抱きとゞめたり。家内の人。其聲に驚きて。其ゆゑよしをとひければ。えさらぬことありてかくは物せしなりとて。只なきに啼きぬるを。さま〴〵とゝきなだめ。二人の人に守らせ。さて其とゞめたるは。如何なる人ぞと問へば盗なり。これもあからさまに其よしを述べければ。錢そこばくとらせてかへしたりとなり。又。人の妻をぬすみかよひし人あり。ある時。其妻の許に忍び居たるに。其妻。青赤龍子（とかげ）を膾に調して。酒をあたゝめて。本夫にすゝむ。本夫は。夢にも知らで。頓て喰はんとせしを。密夫覺えず。はしり出でゝ。其膾には毒あり。かまへてな食ひ給ひそと。おしとゞめければ。本夫はおどろきて。其人の忍び居たる事など問ひけるに。是もあからさまにしか〴〵のよしを答へしかば。其妻を追ひ出だし。密夫は。命の親なりと悦びて。兄弟の約をなして。

事におもひて失せにけるにやと。されど。命を捨つる程の事にもあらざるべきに。猶此人の奇事偉行。聞き及びし事もあれども。よくも覺えざれば錄せず

一鳥の群　寛政八九年の頃なりしか。嵯峨野に蠟觜鳥多く集り。木毎にむれゐること。一樹百二百羽にくだらず。山多く樹茂りたる處なれば。いづくを見ても。此鳥ならぬ所もなかりしかば。京より見に行く人多くて。茶酒の店などもこゝかしこに設くるほどの事なりしよし。六如上人より告げ知らせらる。其より四五年も後なりしか。吾鄕備後神邊に。うそ鳥多く來り。予が庭の樹竹軒ちかき枝まで。この鳥ならぬ處もなかりし。かの蠟觜鳥も。その年の前後に。常より多かりし事もなかりしとなり。予が鄕里のうそ鳥もしかり。山中雪ふりければ。鳥多く里に出づといへども。其歳わきて。雪多くもあらざりし。さらば。此鳥のみ多くもあらざるべきに

一武内宿禰小野小町之説　武内宿禰一人なれば。三百餘歲。遍鵲も一人なれば。二百餘年。小野小町も一人とは見えず。これらのこと。古書茫々として。論定すべからず。撰書の人疑を傳へ。聞くまゝに記したるなるべし。今其人の疎漏といふも誣ふるにちかし。たゞ聞のまゝに記しおかば。後の考もあるべしと思ひつゝ居る中に。蜉蝣の年もたもちがたく。任を後人に殘すこと多かるべし。前不ㇾ見二古人一。後不ㇾ見二來者一といふ詩。感ずるにあまりあり。かくいはゞ。古書は。用にたゝぬものとやいはん。されど。其中に一人の行のためにし。天下の治の爲にして。餘りあることは。卷軸にみてり。しかるを是をすてゝ。いたづらに字句の異同をのみ論ずるは末なり。至竟書籍は。學者談話の資とのみなるは。かなしき事ならずや

一不ㇾ撤ㇾ薑の語　不ㇾ撤ㇾ薑而食は。聖人のこのみ給へるものによるか。味の和にもよるか。又。能毒にもよるか。其故はしらざれども。論語には。聖人の行事を記して。其旨をいはざるは。不敏を避くるなり。朱註に能毒を書かれたるは。只。たしみ給へるのみにてもなきやといふ意を思はせがほに。本草の文を其まゝに引かれたるなるべし。夫を

氣はやきをのこなれば。事によりては。命を捨てんも計りがたし。吾は。是より追ひ付きて。事をはからん。汝はたれかれにも告げしらせよと。云ひつゝ出でゆけり。夫より人々にいひつぎて。追々にしたひゆくほどに。凡。同志の輩三十人許。夜道をいとはず。路程二十里餘り。彦九郎は。翌早く馳せつき。外も追々午時ばかりに追ひ付き集まりしが。一揆は。既にをさまりしかば。晩に打ち連れて。江戸へかへりし由。頼萬四郎其ころ江戸に在りて。くはしく其事を知りて。此輩亂世にあらば。一方をふりむけて。大功を立つべしと。時々かたりて嘆稱す。扨其地に偉人あるは。村吏などの惡むこと。いづかたも同じ事なるが。彦九郎が郷里はある御旗本の領地なり。其名主年寄などいふ者。いかに云ひいれしか。ある時領主の邸へ呼び寄せて。彦九郎は。百姓にて。平生長き大小を横たへ。家業を勤めず。書物のみ讀むは。不審の者とて。門側の一室におしこめて。數月の間。置かるゝに。懇意の朋友。酒肴を携へ。問ひ來るもの虛日なし。ある日　大府の一有司の邸に召されて。其方何故に諸國を遊行し。名ある人を尋ねゆくか。子細あるべし。一々申し上げよと。命せられければ。彦九郎亂世には。武者修行といふ事の候由承り候。今太平の御代に候へば。諸國に名ある人を捜し求めて。よき事を聞かんずるにて候。其よき事と申すも。忠孝の事より外にては候はずと申しければ。さらば。此書を講釋せよと。論語を一巻出だされけるに。彦九郎ちつとも臆せず。辨說あざやかに。講說し終りけるによりて。またもとの領主の邸にぞ下されける。かくて數日ありて。又。かの有司の邸に召されて。講釋させられて。次の間に人ありて。其說を書きとめらる。其後また數日ありて。召し出だされて。命ぜられけるは。其方事。苗字を名のり。大小を帶し。諸國遊歷する事。くるしからざる旨命ぜられける。また。年を經て。薩摩に遊びてかへるさ。久留米の何某が家に宿りて。腹切りて死にてけり。其故をしらず。或人の話に。村吏の誣ひし事を。何の尤めもなく免されしは。何某侯の當途の時なり。其後。かの侯職を辭したまひければ。其身も便なき

はじめしなりといふ。其人。鼻高く。目深く。口ひろく。たけたかし。總髪なり。此人備前の閑谷(しづたに)の學校に宿して。其學制規約などを尋ねしかば。教授の人。本一冊を出だして示し。其翌早くかの寢たる所にゆきて見れば。彦九郎は。なほ燈に對して。其本を寫し。既に半頁ばかり殘りたるを。やがて寫し終りぬ。凡。五十葉許の寫本なりしよしそれより播磨に赴き。姫路の北郊に相識の人ありて一宿す。翌日晩際にいとまを乞ひて出でんとするを。主人とゞめて。時は節季なり。日はくれかゝれば。明朝たゝれよといへども。但馬にゆきて。年内に京へ出でゝ。内侍所の御神樂を聞くに。日數限りあればとて。强ひて出でしが。扨其翌春。かの姫路北郊の百姓小罪ありて獄に入り。其赦され歸りて。獄中の事どもかたる中に。山賊と同じ獄に在りて。いろ〳〵の話しに。そこら多年山賊をなして。深山に夜を明して。おそろしき獸などにあひしか。又。天狗などいふ者を見しかと問ひしに。賊のいへるは。十餘年山に棲みて。一度もおそろしき者を見ず。唯一度これあり。去年何某

月何某夜。何某の山中にたゝずみつ人を待ちしに。大なる男一人出で來るを見て。吾等四人立ちふさがりて。酒錢を乞ひしに。其人大音にて。慮外者めと叱りて。傍に人なきがごとく。のか〳〵として過ぎ行きしかば。四人はおの〳〵尻もちつきて。暫く物もいはざりし。其聲の大きさ。山に響きてすさまじく。やゝありて。其人を見れば。半町許も行き過ぎて。跡を見かへりし眼。光りておそろしき事。限りなかりし。是こそ天狗などいふものにてもありつらめといひし。其賊の顏もおそろしげなりしと。此事を彼主人聞きて。月日を數へ。其時刻と。其地とを考ふるに。其人は必ず彦九郎ならん。かの山中を節季の夜半に。一人すぐる人外にはよもあらじと。舌を卷きしよし。彦九郎江戸に在りし時。新田のあたりに百姓一揆起りしと聞きて。取るものも取りあへず。急ぎ歸る。頃は未すぎ申の時許なりしが。相識人のもとに立ちよりて。其人の妻にしか〴〵と語りて出づ。其夫の歸るを待ちかねて。其よしをいふに。其夫驚きて。それは聞き捨てにならず。彦九郎は。正直にて。

其言もまたにくさげに聞え。臆病なるは。眼睛定まらず。人を惑はす事多しと云ひしよし。加藤清正も人の視がたきを苦み。相術を學ばれしとぞ。其心祟ぶべく。亦あはれむべし

一朝鮮人の說　四方の國。北狄より强きはなく。琉球より貧弱なるはなく。朝鮮より禮儀なるはなしと。書中に見えたれど。今時の朝鮮人。威儀なき事甚し。膳案をさゝげゆくに。半途にて。其中の嘉味をとり食ひ。又燭臺に立てたる蠟燭をぬすみ食ひ。或は。席上に尿し。坐側に唾きす。僕從など廳前に鼾睡するもあり。物しれる輩も。詩を人に送るに。號を書する類。あげて數へがたし。箕子の化も。年久しくて。かくなり下りしか。唐山の人これを禮儀なりといふもいぶかし

一備後三郎姓氏　備後三郎高德は。兒島三郎とも云ふ。兒島は。在名にて。姓は三宅なり。父備後守なりし故。備後三郎と稱す。佐々木盛綱に。兒島を賜はりし事ある故。其子孫ならんと推量して系圖などあつめし書に。近江源氏なりといふは。謬說なり

一忠僕伊平左平の事　伊平。左平が。忠義といふこと曲本に見え。いづれも烏有先生なりとおもひしに。備後の府志を脩むる時。六郡志といふ書に。本洲安那郡湯野村の人とある故。こゝかしこの古墓をさぐり尋ねたれどもしれず。此頃聞きしに。其西隣道上村に。伊平。左平が墓ありて。除地二十歩あり。今は。伊平が子孫のみありて。左平が田宅も。伊平が子孫に倂せたもつとぞ。其墓古塚にて。二三百年の後のものとは見えず。伊平。左平。は入江といふ家の家僕にて。入江は杉原の家族。藪路村の塢主なりとぞ

一高山彥九郎の傳　彥九郎は上野新田の人なり。余はたち許の時。來りて一宿す。其話中古より王道の衰へし事を嘆きて。甚しき時は。涕流をなす。歷代天子の御諱。山陵まで諳記して。一つも誤らず。亂世には。武者修行と云ひて。天下を周遊する者あり。今治世なれば。德義學業の人を尋ねありくも。少年の稽古なりとおもひて。六十餘國を遊觀せんと志し。一冬袷衣一つを着て。露宿して試みしに。風をもひかざりしによりて。出遊を

ん。備後の杉原盛重は。知行七千五百貫といひ傳ふるに。亂世に城五ヶ所もちて。それ〴〵に軍兵を籠め置きて。軍しても強かりしかば。一貫といふもの。右の二説より多かりしにや

一烏有先生　垂氷廣信は。烏有先生なり。垂氷といふ姓は。昔より聞かずといふ人あり。然れども。姓氏録に。垂見史は。彦狹島命之後。又垂氷公は。賀表眞雅命之後と見ゆ。北條士讓は。志摩の人なり。伊勢には。今なほ廣信の裔孫ありといふ。近頃。南方紀傳を見るに。京より伊勢を攻めし時。國司より垂氷烏屋尾方等を。岩田川。雲津川に遣はして。これを防ぎ。垂氷藤方に何某々々等の城を守らしむる事あり

一勇將文學の事　出羽米澤の人。神保甲作が話に。かの藩中に直江山城の訓點したる。唐本の兩漢書。前田慶二郎が。自。輯めたる圓機活法の如き書あり。大卷一本にて。軍中常に首にかけて往來せしものと見え。末卷には。自作の詩歌を錄せりとぞ。慶二郎が勇猛なる事は。野史にても多く見えたれど。かゝる事は。聞きも傳へず。すべて。野史の類。其勇猛をのみ傳へて。風流文字の事はもらすもの多し。謙信の詩に。露下二軍營一夜氣淸。數聲過雁月三更といへるもあり

一大西南畝　いつのことにや。大西南畝といへる醫人ありて。讃岐の高松侯に召し出だされ。十五口俸を賜ひけるに。藩例にて。禮廻りとて。老臣の家に歷拜する事あり。かれはそれをせず

千里ゆく末たのみある荒駒の
はむにはたらぬ露の下草

といふ歌をかき出だし、よし。不敬といへども。また。異人なり

一加藤淸正相法を學びし事　宋朝の美なければ。免るゝ事難しとのたまへるを。男色といふ說あれども。色には盛衰ありて。久しきを保ち難し。凡。人にやさしくて。愛すべき顏色あり。其人の物をそしりなどするは。さばかり人意に忤らざる者なり。又。にくさげなる顏色の人は。物を譽る話をしても人信ぜぬあり。是等より推して思ふべし。或法吏の話に。訴を聽くにその人の顏を見ず。美なるをのこは。必。其言やさしくきこえ。醜なるは。

府中に住す。水野侯入國の時に。景忠がことをたづねられしに。此もの大坂籠城の士なれば。咎あるべしとおもひけるにや。處の里正より既に死せしよしを僞り申しければ。勝成公歎息して。大坂城中にて二十四反の母衣をかけ。貫木を飛び越したるを。まのあたり見うけぬ。大力の精兵。當時名譽かくはしかりしものあはれ世にあらば。祿千石はをしからずとのたまひける。里正これを聞きて悔ゆれども。詮かたなかりし。檜崎は。同國久佐村二子城にありし。檜崎加賀守豊氏といふ人の後なり。豊氏正慶二年。足利より蘆田郡の地頭に補せらる

一大和小學　大和小學は。闇齋先生の著なり。其中に。禮は朱子の儀禮經傳通解に。黄勉齋の續をくはへ。其上に三禮を見るべし。春秋は四傳。扨通鑑綱目を見て。筆法をかたり。易は啓蒙本義を本とし。程易は別に見よ。樂は蔡季通の律呂新書など、あり。然るに。今の闇齋學をいふ人。一口に四書小學にて。何事もすむといひて。他書を讀まざるはいかなる。故ぞや。讀に前後緩急はあるべけれど。人のよむをも。このまぬやうに。見ゆるは。あやしむべし。こゝにはさとらざれども。かしこにて知り。東にて通ぜざるも。西にはとゞこほらざることあり。人の性質いろ〳〵あるゆゑに。聖賢もさま〴〵に教喩したまへり。これを大事と見定めて。其餘をすぶるは。浮屠の一宗を立つるに似たり。ひとつにてすむといはゞ。孝經にてもあまりあり。小學にても足らざることなし

一三國人傑　三國の人才。諸葛公第一は論なし。余。其亞を魯肅と斷ず。魏の強大と。吳主の才能とをはかり。二國力をあはせざれば。必魏のために亡されんを知り。荊州をばとらぬ心と見ゆ。其智。公瑾子明が上に出でたり。仲謀これを呂子明におよばず。みだりに。大言せる人なりといふは非なり

一知行貫ツモリの事　天正以前の知行千貫といふは。今の二千五百石に當ると。土佐の戸部助五郎良熙の説のよし。もと聞きし説には。永樂錢壹貫文。銀六拾匁にあたりて。米一石の直ひ六拾目と定めて。一貫は。即一石なりと。いづれか是なら

り。蠹弊はなはだ多く。大石より〳〵諫をいるれども用ひられず。閉門逼塞など。年に兩三度にくだらざりしに。國除せられけるを。國人はかへりて。其弊政のやまんことぞとおもひて悦びしとなり。小人用ひらるれば。君子退き。下の人其憂をうく。其鑑あきらかならずやと。大川良平の話なり。良平は。赤穂の人。其二三十歲の頃は。元錄の變の頃の人。幾年も存生して。其事を歷々といひしとぞ。西山翁話

一熊谷直實遁世　熊谷直實出家して。敦盛の菩提を吊ふといふこと。太宰德夫さへ實事と思ひ文にもかけり。僧圓識は。長門の人なり。其話に。大江廣元。袖日記といふもの長門にあり。直實一族と。田地の堺を爭ひ。訟に及びしに。直實口吃して。對決に負けて。其憤にたへず。出家すと見ゆと。又考安云。法然上人傳記に。法然上人月輪殿にて。經を講せしとき。供に候せし僧。次の間にて。欠伸す。月輪殿いまのあくびは。坂東聲なり。いかなる人ぞと問ひ給ふ。上人こたへて。これは聞し召も及ばれ候はん。熊谷二郎直實と申して。弓取の剛の者に候ひしが。鎌倉殿に恨ありて。遁世いたし申したるにて候と申さることあるよし。其後東鑑を見しに。かの事詳に載せたり。直實は。きはめてはらあしき人と見えておばむこの直光といふ者と。訟におよび。梶原平三が。直光に黨するを憤りて。訟の庭より逐電せしとなり

一兒敎　詩の工拙にかゝはらず。悦ぶべく。かなしむべき事にあたりて作れるもの杜子美諸將等の作。幹吏部の藍關。東坡の獄中。陸放翁の臨終。文天祥。方孝孺等の忠憤の作などをあつめ。小傳をそへて集となし。今の子弟の三體詩唐詩選等にかへて讀ましめば。人を導く便となるべし。人にかたれども。人是をせず。ひとり西山翁のみ。是がために岳武穆を吊する詩。たれかれがつくれるを數首抄出しておくらる。余病懶いまだなすことあたはず。考安も。吾邦の正史野史の中より。賢主。賢臣。烈士。貞女の詔勅。文章。詩歌を集めて。其時の事實を小序にかきて。一書となさまくおもふよし。語りしがいまにならざるや

一檜崎景忠　檜崎十兵衛尉景志といふ人。備後の

夫熟して後これを食ひ。糜してこれを咽む。安ぞ鮮且全を得んや。人の腹中。食を受くる所あり。また。何ぞ背よりして出づるを得んや。稗官小說。或は恠疾を載せて。未だ斯類の事あるを聞かず。是によりてこれを觀れば。世の奇恠非常を傳ふるもの。概して妄誕とすることを得ず。文助少して。我に備す。故に其事を詳にすることを得たりといふ。備中笠岡小寺清光記す

一珍書考　此頃。珍書考といふ書をよむ。彼書はやごとなき家の著述にて。珍書といへば。奇妙なることゝ思ひしが。さはなくて。俗說辨の類なるものにて。世俗のあやまれることを標出すれども。さして學者の用をなさず。日本と諸越と。同じことも多かるべき。皆。諸越の事より誤り傳へしなどいふ事を。決せし書なり。然れども　予が輩の書をよむこと。少き人には。大益あり。みな人よむべき書なり。蟬丸の事を證せしなど。かの延喜の朝にかゝることあるべしとも見えず。ことごく敷辨ずるにも及ばぬ事なれど。其引證は。一つの異聞なり。書よまぬわれらがごときは。よみてたすけを得る事多かるべし

一萱谷何某　河相周二が話に。赤穗義人のうち。萱谷何某。國除の後。備後三次にありしが。足跛耳聾にて。毎日いで、。魚を釣り遊ぶを。市童あつまり嘲笑す。かくて半歲ばかりにして。近隣に暇乞ひて出でしが。其後。三次の郊外二里ばかりにて。三次の人。他所より歸るに行き逢ひければ。聊の用によりて。故鄉へ歸るとて。いとま乞して過ぎし。其顏色常よりもゆゝしく。足も跛ならず。耳もよくきこゆと見ゆ。其人あやしみて。人に語りしが。後におもひあはすれば。復讐の前。さらぬ體にもてなし。居たるなるべし。考安云。かの萱谷三次に伯母のありて。其家に寓居せしが。毎日沈醉して。債償もおほかりしが。つねにつくなひがたくて。こまりたるを。伯母のともかうもして。つくなひつかはしけるが。其三次を去りし後に見れば。一々債家の名を錄し。錢を殘しおきたるとなり。考安外家に一老母あり。其父はよくその事を見聞せしよし

一亡國弊政　赤穗國除の前つかた。大野某政を執

十種編輯し給はんとて。古書畫。古器の類を捜し求め給ふ時に。此圖を見給ひて。小早川殿の故實に達し給ひし事を歎賞したまひしよし

一堀田筑州金言　麾下の士何某の町奉行になられし時。堀田筑前守殿の必らず相手にならぬやうにあれかしと申されしに。何某其時は。合點ゆかざりしが。訟を聽くにいたりて。始めて。心付きしといはれしとぞ。訟を聞くは公の事ながら。惡しとおもひ。むづかしとおもへば。必。其人を我が相手と思ふやうになる者なり。我詞するどくなれば。其人言を盡すことあたはず。必。かたきゝになりて。取りさばき平かならず。相手になるなど言れしは。金言なりと。子孫にもいひ置かれしとなり

一物は漫に棄つべからざる說　魚の骨はすてゝ。猫犬も喰はず。長門の人何某が家に。瀧川あり。そこにてさらすこと數月の後に。粉にして味噌にまじへくらふに。其味甚だ美なりと。圓識上人のかたられし。余が家には。瀧川なし。是を聞きて後に。一大壺を地に掘り入れて。すべて捨つべき魚骨を。其内に入れて。水をたゝへおき。時を以て。樹木の根にうづむるに。樹木の蕃茂する事常ならず。物はみだりに捨つることあるべからず。敗物とて用をなさゞるものなし

一家語の註　岡白駒が。孔子家語の註をつくりしは。太宰が同じ註をつくるよしをきゝて。其日より筆を起して。やがて彫刻す。其時。太宰が註は。いまだならざりしと。魯堂先生まのあたり見しまゝを。われにかたられし。四十年前の事なり。叢談にかきしは。其實にあらず

一奇病　此頃。友人小寺淸光がかける記事を見るに。其事奇なるに依りて。左にしるす

文政五年夏。本邑箕後巷文助といふ者癰を患ふ。六月二十四日。癰潰れて。二鰻魚あり。膿血に隨ひて出づ。癰亦稍く愈ゆ。其子。茂平異みて。これを語癖。以て文助に問ふに。曰信なり其長さ寸餘。尾ありて首なし。鱗鰭幷に全し。蓋。是嘗て此魚を好む。其沙礫多きを以て。皆。其頭を去る。然れども已に食せざること數月。今出でゝ。鮮且全きは何ぞや。予文介の言を聞き。益。其異を嘆ず。

一には。三句を昇平今若〆此に作る。伊達譜に見ゆ

一普源院畫賛　備前の普源院殿といふは。芳烈公の令嗣なり。ある時。許由の畫をもて。芳烈公に賛を乞ひ給ひければ

耳をあらふ心の水はきよけれど
流はくまじ世をめぐむ身は

とか、せ給ひしとぞ。此公の心うたにもしられたり

一後藤基次　後藤又兵衞。戰死すといふ。僞にて潜に落ち失せて。豊後日田の近側。山中村に住す。筑前の野村新右衞門といふは。又兵衞が聟なり。これにかたみに遣し、鎗などありとなり。又兵衞こ、に住みて。ひまをうかゞひしと見え。年を經しが。一日遠方に行く暇乞なりとて。村中の人を招ぎて。酒など飲ませて。人去りて後に。腹切りて死せしとぞ。大なる墓。今尚。その村の山中にあるよし。平岡玲藏の話なり

一源實朝大船を造りし說　鎌倉右大臣。もろこし何某和尚の後身なりとて。大なる舟を造らせて。渡唐せんとせられしに。其船あまりに。大なるによりて。海濱にうかばず。其事終にやみにけり。當時鎌倉も穩ならず。いかで。此狂謀をば。なし出だし給ふべき。今思ふ。其身。權臣に制せられて。やがて。害せられん勢の。朝夕に見はれし故に。いかにもして。北條を謀らんとせられしなるべし。果して。其謀のごとく。多勢を引き具して。船にうかびて。畿內。中國にもあれ。筑紫にもあれ。旗擧げし給はんに。味方せざる人あらんや。たとひ運つたなくして。討死し給ふとも。銀杏樹下の慘にはまさりなん。右大臣殿心なきにしもあらざるべし。周宣帝の宇文護を手刃せしは。格別の手段なり。和漢前後。希有の事なり

一韓廐　備後三原の城中に。韓廐といふものあり。小早川中納言殿の建てられしなり。是は。大將の居間ちかく。馬をつなぎて。大將つねに束帶。或は甲冑にて騎り試み。或は手づから。草かひなどする爲なり。さなければ。大將を見知らず馴れず。また。よそほひのかはりたるを見て。驚きなどして。事に臨みて。意のごとくならざる事ある故に。常にかく習はしむるなりとぞ。桑名少將公。集古

る。銃は矢挾間よりさし出だして。打つを見て。侯とびかゝりてもぎ取り給ひし事あり。かゝる事は。聞くもおそろし。清吉が主人は手負ひて。半途より歸りしなりとぞ。又。備後神邊に軍ありける時。一女豇豆を採りて歸るを見て。軍兵ども聲々に。其豇豆を澤山に採りてひたしものにしておけよ。やがて立ちよらんといふ。女はおそろしながら。其言のごとくにせしに。程なく多勢入り來りて。手ごとに取りくらひ。錢をあまた。投げ出だして歸りける。其家には。餘程德つきたるよし。今七日市といふ。巷の中程の南側の家なりといふ。杉原の時の事なるべし

又。同じ所に尾道屋といへる酒造家あり。其頃軍ある所を聞きて。遠方までも。酒を舟にて。運送しうりあるきけるが。いづれの酒造家も。皆。かくのごとくなりしが。尾道屋一とせ九州の軍に。酒あまた賣りて。利を得しかば。又の軍にも行かんとせし隣村に。中條といへる所の。寛水寺の住僧。占ひをよくして。此度の軍には。利なくして。怪我あるべしといひし故。ゆかざりしに。外の行きしものは。皆。損亡して返りしとぞ

又。同國の尾道に住屋といふ酒造家あり。大坂陣の時。酒をつみのぼりしに。とある道にて。塙團右衛門に行き逢ひしに。團右衛門初め浪人して。尾道にありし故に。住屋も時々出會せし事ありて。相識るによりて。馬上より聲をかけて。尾道に在りしときは。大に御世話に成りたり。無事にて日出たく候へと。いひ捨てゝ。鞭を揚げて行きしとなり。されば。戰なき時は。又ゆるやかなる事もあるにや

一伊達政宗　伊達中納言殿は。耶蘇の本國。阿媽港。呂宋などの國を。征伐せんの志のおはして。醉餘口號の作に

邪法迷レ邦唱不レ終。欲レ征二蠻國一未レ成レ功。
圖南鵬翼何時奮。久待扶搖萬里風。

かくはおほせしかど。事故しげくして。終に及ばざりしとぞ。又。此人の詩に

四十年前少壯時。功名聊復有二私期一。
老來不レ識干戈事。只把春風桃李巵。

馬上青年過。　還レ家白髮多。
殘軀天所レ縱。　不レ樂其如何。

業を失ふは。學問にはあらず。身修り。家齊ひては。いかで本業を失ふべき。此人は。當時學校を建て給ひし事もあるに。其時眞儒に遇ひ給はぬは。千歳の遺恨ならずや。詩文博識にふけりて。身をも家をも忘れて。亂世には國を喪ひ。治世には父母妻子を饑寒に至らしむる輩すくなからず。是等をのみ見給ひて。眞の儒學は。當時なかりし故に。かくはのたまひしなるべし。今時また。己が身をも反り視ず。聖言をも畏れずして。妄りに論孟の註を著はし。古賢の傳註を毀る者あり。聖賢の語と。己が身の行とを。くらべ見ばいかゞあらん

一大石良雄　大石内藏介。細川侯の邸に在りし時。茶坊主二人を附けて。其便用に供せらる。其明日は。切腹ときはまりし前夜に。内藏介後架にゆかれしに。彼の茶坊主一人は。手燭を持ち。一人は湯をとりて從ひしが。たがひに涙を流して。聲を呑みてかなしびければ。内藏介これを見て。何故にさは泣るゝにかと尋ねられしかば。二人答へて。吾等此ほど御傍にありて。御懇意をうけ申しゝに。明日は。御別れ申になり候ひぬ。御名殘惜く候て。覺えずかくはなげき候といひつゝ。又むせかへりて泣きければ。内藏介は。顔色もかはらず。こは吾覺悟にもなるべき事を。よくこそしらせたまひつれ。扨久しき間。御苦勞にあづかりし事。一方ならず。吾もなごりをしく候。何ぞかたみに參らせたく候へども。持ち來たりし物も候はねば。是は持ちふるしたるものなれどゝて。一人には。紙いれの嚢。一人には。腰さげの巾着を與へられけるを。その二人の家に。今に寶とし傳へたり。大石はかりそめにも。人のなづきしたしむ人なりしと。西依先生の話なり

一軍中艱難　軍中の艱難危殆は。いふことをまたず。水野侯（日向守勝成）西國におはしゝ時。宇土の城攻に從ひ給ひて。寄手既に堞下に逼りしに。後より呼はりて。それなるは。六左衞門樣（日向守はじめは六左衞門と稱す）にておはせずや。私は主人を見失ひ候へば。御供に召し連れくだされよといふ。侯其聲をはやくも聞きしりて。清吉なるか。はやく來れと仰せらる清吉悅び。侯に近づく時。忽ち。銃丸に中りて。仆

ことごとく見る事を得ざる故なるべし。或はきざして變じ。きざさずして。忽然と出來るもあるべし。故に人ことごとく是を見ず。見ても信ぜず。意とせざるにや。俗諺に人をそしらば。めしろをおけ。呼びにやるよりそしるがはやきのごとき。其人來らんとする機。既に此に應へて。おぼえず知らず。其人を思ひ出づるに因りて。誹謗の言も出だすなり。此等の事にても思ひ半に過ぎんか

一史類を讀むに可心得事　白石の說に。史類を讀むには。勝方負方といふ事を。看破せざれば。實事を思ひ取りがたしといへり。陸秀夫の舟中にて。大學を講ぜし。平家の舟中にて。除目を行はれし事など。後の世のわらひぐさなれど。衆心の動かざる爲にせし一策なるべし。さなきとて。舟中にて。軍の手配の外に。何のなすこともなければ。一將は降らんとし。士卒は逃れんとする。謀をなさんもはかるべからざればなり。玄旨公の嬰城の中にて。和歌を講じ給ひしも。別意にあらざるべし。されど。是をそしる人なきは。勝方なればなり

一楠公　楠公父子は。南朝の忠臣にあらず。吾國皇統の忠臣なり。尊氏謀反して。先。大塔宮を弑し奉りしより以後のしわざ。八幡太郎義家の子孫に。必。天下を取らしめんといはれしなどいふ言をこしらへし事を思ひ合するに。數箇度の敗衄なくば綸旨を申し下だす意を生ずることはなかるべし。尊氏初意のごとくならば。今日いかなる天下になりなんもはかるべからず。されば。北朝のたち給ひしは。楠公諸將の力による事あきらけし

一小早川黃門　小早川中納言殿。三原の館におはしける時。京の人來りて。此頃京わらんべの謠に「おもしろの春雨や。花のちらぬほどふれかし」とうたふよし語りければ。中納言殿感じ給ひて。夫はすべての物事に渡りて。ことわりある謠なり。いかばかりおもしろき物も。能き程といふ事ありて。茶や香や。おもしろくても。猿樂がおもしろくても。學問がおもしろくても。本業を喪はぬほどになすべき事なりと。仰せられし。いかにも〳〵。茶香猿樂の類は。さる事なれども。學問して本業を喪ふとおほせしは。本意違へり。學問は身を修め。家を齊へ。國天下を平治する道なれば。其本

荷蕢大人。接輿の類の。既に聖人に取られざるを見て。必しも名敎を信ぜざる旨を說き出だし。四人の者の如き嘲を解き。己が禮法を廢棄せしいひわけを上手にせしなるべし。其心は。阮亭稽庵にいくばくも異なる事なし

一道のうへに異說をなす事　或人の宋以後は。明淸亦吾士にも。洛閩の學を用ひらる、は。あやしき事なりといへり。今細論にはおよばず。聖人の道を行ふに。我身を脩むるを始として。實用を宗とし。意端を闢きて。疑はしき事なくせられし故なるべし。後世宋學を詆る人。前に洛閩の諸君子なくんば。己かの諸君子には及ばずとも。宋賢の如き學はいふべし。大事を窮めずして。訓詁文字の小事にてはやむべからず。余思ふに。宋以後の學者達は。洛閩の諸君子。既に道を明かにせられたれば。洛閩の諸君子にまかせて。置くこゝろなるべし。たま／＼道を論ずれば。道は本なき者なるを。聖人の造作し出だせるなりといふに至る。あまりに異を立つるにあらずや

一僞書　賓興の政すたれて。英俊の士。進取の道に遊說の外せんすべなく。聽用せられんことを求むるに急なるより。種々の虛說をなす。周公の吐握。伊尹寺人。瘠環百里奚の事のごとき。孟子これを辨せられずば。後世誰か其非を覺さん。みな。己が出進の道に恥づる事多き故に。人の謗を防ぐ爲に。こしらへたるべし。當時の勢と。人心ども思ふべし。漢興りて。挾書の律を廢し。獻書の道開かれしより。一書を出だす人は。名も利も。それに從ひしと見えて。さま／＼の僞書を作り著しゝなり大抵。孟。荀。老。莊。韓非。呂覽等の外は。眞物はまれなり。今の書を讀むもの。此二事をしらざれば。無用に力を費し。心を惑はす事多からん

一卜筮　卜筮の驗あるは。何を以てしれる事にかと問ふ人ありしに。或人のこたへに。嫌疑猶豫を決するに奇か偶かと。物を擲ちて占ふが如し。其應否は問ふに及ばぬ事なりと云ふ。余はしからずとて。中庸先知の事を援きていひし事ありしが。今おもふに。遠く書を引きて云ふをまたず。凡。天地人は一氣にて。此に呼べば。彼に應へ。感ずれば通ずる類にて。一つも驗なきはあらじ。內眼

幼少より。親の愛を恃みて。驕奢放肆にそだち。富めるとて。人にかしづかれ。位ありとて。人に諛はれて。何事も吾意のごとくなるより。一度意に忤ふ事あれば。俄にはらだち。顔色四體に見はれ。或は物へゆかんとおもひしに。さはりありてゆく事を得ざれば。庭の内をあるきまはりて。坐し得ざるあり。或はありあふ器物を庭に投げ柱に打ちつけて。碎くもあり。或は妄りに。人を罵り。また。妻子婢僕を打擲するもあり。甚しきは。刀をぬき。鎗をひらめかすもあり。或は一日に幾度となく。手をあらひて。人の物をば。皆けがらはしくおもふもありて。大抵。他人よりは。かほどの事は。堪忍もなるべきにと。思はるゝ事を。己が氣より心をおしたてゝ。自やめとゞまる事のならぬは。皆幼少よりの驕奢放肆にて。一種の氣質をやしなひたてゝ。所謂。肝癪もちとはなりたるなり。予。浩然章を講ずるに。此説をいひて。直を以て。養の反對とす

一過を餝る説　凡。吾がなしてよからぬと思ふ事も。不レ得レ已にせまられては。是をなし。また。なすべき事と思ふ事も。已む事を得ず迫られて。是をなさゞれば。人の笑ひ謗らんもはづかしく。また。吾心にも慊らずして。かの氣餒うる事多かるを。告子が心にならへるか。亦。小人の過を文(かざ)る類にて。人めをまぎらして。吾が羞愧をゆるめんとする歟。古人にもこれあるに似たり。司馬炎が。君を弑しても。何とやらん安からぬ所ありて阮籍。稽康等を至孝至愼などいひて。人の視聽をまぎらし。阮籍。稽康等も。亦佯狂して。莊老の道は。かくあるべし。必しも。名敎に拘らずと。人にも思はせんとせし類。王安石。張商英が類佛に佞して。聖人の敎を必とせざる意を示す。近時に阮亭。稽庵など號せる人あるも。辮髮髡頭を愧づる心。やるかたなく。是に托して。意氣を作すべし。三代以來。人物多し。德行事業に論なし。酒を嗜む人。詩文に長せし人。遊行を好む人。其人亦少からず。それをすてゝ。稽阮をしたふ心。さても度しがだきに似たり

一莊子　莊子は。身を危うする事を第一の恐とす。故に危難の地に臨まぬ事を主とせり。長沮。桀溺。

同じ心にやと

或人の言に。徂徠の敎にては。子弟放蕩になりやすくて。其親兄弟も。學問をする事を制するやうになり。今また。朱子學を爲すにも。珍しからぬによりて。少しはかはりし事をいはねば。おもしろくなきと思ひて。陸王の學を唱ふる人も。出來しなり。皆。時好に趨るにて。己が爲にするの學にはあらず。其心は。放蕩をゆるすも。格別の違ひはなしと。考安が來りて話し、

一學問行實　凡。大なる者を立つれば。小なる者は。夫に從ふ。學問の第一は。行實なり。其行を先として。聖經の歸趣を求め。時論に應じて。道を備り。異なるを闢くを勤むるは。學問の大處なり。宋賢の業是なり。今時の人。訓詁文字の異同を正すを事とするは。少なる者從ふなり。前に諸君子なくんば。老佛の盛にして。後の學者。これを闢くに暇あらざるべし。大處。既に明らかなれば。今時少處を。搜索するも可なり。されど。其行實を心とせざるは。今の人の目の着かざるか。抑。自棄して。小成に安んずるか。疑ふべきなり

一不弟を誡めし事　一弟ありて。其兄と同じく學問をなして。名望の兄にしかざるを恥ぢて。や、もすれば。人に對して。兄の短を云ふ。或人これを敎へていふ。足下と。令兄と。博學ひとしく。詩文ひとしく。手かきすることまで。何一つも令兄に劣りたる事なくて。名望令兄にしかざるは。德行のおよばざる故なり。若。足下令兄にかたんとおぼさば。今より心を改めて。德行を脩めなば。やがて令兄よりも。上に立ちなんこと必せりといひて。弟大に悅び。日夜言行を愼み。二年許を經て。二難の譽あるに至りしかば。弟の驕慢いつのまにかやみて。兄をそしる事なきのみならず。兄を敬ひつかへて。人の耳目を驚し、事あり。孟子齊梁の君に。王道を勸められしも。齊梁の君。若。よく孟子の言に從ひ。王者の德に同じくなりなば。周室をいかゞせられん。周王もまた。二國の君をいかゞなし給はん。孟子を讀むもの。此等の事をおもふべし

一肝癪もちの事　今の世に。肝癪もちといふ者。

嫌其地。この窟を見たる人も可有歟。先生へ御相談申上候。奥州南部蝦夷を望候地に。材木村といふあり。其村邊。山野海島に至る迄。皆材木のごとし。方四五寸ばかり。村民これを取りて。屋下の床に用ひ。或は橋に架し候。石質堅く。鐵に類し。又。奥州出羽の界に。小坂峠といふ所有之候。此山中材木石あり。山岨崩れ落ちかゝるを見れば。半倒れ掛りて。扇の骨を立つるごとし。長數丈なり。亦四五寸角なり。同州會津邊にも材木石あり。土人橋に作り。欄干に作り。皆。此石を用ふ。對馬にも木板石あり。長四尺許。廣四尺許。厚三四寸。土人橋となし。疊になす。天然の板石なり。此石重疊して。對馬一島をなすと申事に候。木の崎の石窟も。また。此等の類か。件の石邊竹の節のごとき者見え申候。圖を以て考ふるに。此節間の處より。欠落候者歟と被存候云々。此書によりておもふに。筑前にも一島。皆石にて。束ねたる。薪を積みたるがごときあり。内は洞穴にして。船出入す。福岡より西にて遠からず。備後の山野村といふに。面背平かにて。厚二寸餘にして。かんなにて削れるが如くなる石あり。庭の飛石などに宜しけれど。取り用ふる人少し

一徂徠學　　堤兵藏（京の人號は一雲）の話に朱子の學は。老人の子弟に敎ふるに。謹愼なる事のみをいひて。不善なる事は。必してはならぬ。よからぬ人とは。狎交るな。酒ものまぬがよし。大食もすなと。日夜にくりかへしていふがごとし。徂徠の敎は。老人の偏屈な事をいふごとくにもならぬ。年少き時は。酒も少しは。飲みてもよし。娼妓の席にも。時々は遊びてみねば。人情にも通せず。智もひらけぬといふが如し。それを當時は。おもしろき事におもひて。我も〳〵と。其說を演述したれども。近頃は。それ程に勸めずとも。わかき時は。放蕩には。なり易き者なれば。老人の深切にいはれし言は。すてられぬといふ所に。心のつきし人あれども。一度ゆるしゝ放蕩は。容易にひきかへし難し。畢竟するに。よからぬ處へは。ゆかぬがよきといふ人多しと。また。或人の云ふ。惡事を爲せば。地獄に墮つると云ふによりて。畏れし者を。惡事は。爲しても極樂に生るゝと云ふ敎あるも。

りなし。釋の害は。世の人皆知る所なればいはず。老の禮樂を舍て、。一道を開きしも一理あり。三代の禮樂も。年久しくなりて。末弊出できて。禮は皆虚文となり。人はます／＼狡猾になり下るによりて。かの無爲といふ事をいひ出だして。世を太古の淳朴にかへさんとせしにて。あしき心にもあらざれども。これより聖教をも。薄んずる人の出できて。人の心かへりてむかしにあらず。其言政に施して行はれず。遂に刑殺を用ひて。商鞅獄を聽きて。千里に血を流すに至る。其血。萬世の下。萬里の外まで。今猶をさまらず。されば。其これを始めて開きし人は。千古の大罪人ともいふべけれど。かくなりゆかんとは。おもひしにもあらざるべし

一孟子　孟子を時勢をしらぬ人なりとて。誹議する者あり。若。其誹議者の言のごとく。其時の人情に合はするやうに。種々の權謀を用ひなば。孟子も亦蘇張の徒ならん。孟子當時一策をも出ださず。正理をのみ。齊梁の君に對へ給ひしは。天理人義の極致にて。堯舜其時に生ずるも。これに過ぎたる事なし。彼の誹議する人を。其時出ださば。如何なる事を爲さんや。必。商鞅のごとくなるべし。明の王元美は。宋儒を惡みし人なれども。其言に我中庸を讀みて。孟子は子思の弟子なる事を知り。戰國策を讀みて。獨り孟子の賢者なる事を知るとあり。古人の論は。惡んでも其中に取ることありて。公論にちかき處も見ゆ。今の世の子弟の。己がこゝろのごとくに人を見て。古人を是非して。道に正すにもあらず。口にまかせて。いひ出だすは。かなしむべきにあらずや

一石材　白川藩士田井柳藏の書中に。但馬木の崎の温泉に石窟あり。栗山翁これに名づけて。玄武洞といふよし。其地に黒崎玄沖といふ老醫あり。此巖窟へ題名せんとて。先年寡君之書を。小生迄乞ひ來し間。さらば。何方へ題し。如何程にて宜しき歟。詩ぬ遣し候所。此圖を指越候。如此に候間。題すべき處無之候。此洞前の傍に。立石有之。此石にも鐫るべき歟と申來り候。如此之絶壁ゆゑ。洞中壁上。猶可題所も可有之と申遣候へども。決斷して未來申候。備後よりは。數十里隔り候へ共。

のあるも。氣質の變化と。天理の本然を疑ふの餘弊なるべし

一性惡之說　或人の云。性惡といひ。三品ありといふ者。人と爭はんとて。假にいふにはあらず。深く考へ。潛に思ひ定めたるなり。氣稟の甚濁りたる人は。いかほど深く考へても。善なる所は。見出すことあたはざる故に。天下の人。皆如此ならんとて。一に惡とは斷ぜしなり。三品も。又。是に同じと。此は深く識得せる人の說なるべし

一罪レ我者其惟春秋乎之話　聖人の語のたふとき事。今更いふもおろかなり。さるを學者は。よく知れども。童子の輩は。こゝに心つかざるべし。一日孟子を講じて。罪レ我者其惟春秋乎といふ處に至りて。おぼえず感淚を落しゝ事あり。此に人あらん。其家僕三人あるを。一人はあしく。一人はよし。一人はよき事もあり。また。あしき事もあらんに。あしきと知りたるは。出し黜け。よきと知りたるはとゞめ。よきもあしきも交れるは。惡は禁じ。善は勸むべし。是は何の法によりてか施すべき。己が心のまゝに。ものしなば。此の非は。彼の是となるべし。此に一定の權衡なければ。所謂毫釐千里にて。人間世界あやしき世界となるべし。幸に聖人の規矩準繩あればこそ。其裁斷も。多くはたがはざらめ。縱ひ私に物するも。右を顧み。左を慮りて。大なる違もなきは。聖人の恩澤ならずや

一欲レ無レ言の語　孔子の欲レ無レ言とのたまへるは。空言の人にいへる事。淺きをおぼしたまへるにや。易の爻にて。人事をさとし。春秋の事實にて。邪正をあかし給ふは。神とも妙ともいはんかたなし。われ人おろそかに。看過すまじきは論なし

天は物を生ずるを職とし。地は物を育するを職とし。聖人は物を成すを職とす。聖人は天地の生育のとゞかぬ所を輔相する者なれば。其恩の廣大なるは。言語の及ぶ處にあらず。此心を以て聖人の敎を視れば。其深遠不測の所を窺ふべし

一老子　老も。釋も。聖人の爲る所をするに心あれど。別に一道を開きしは。私意ある事をまぬかれず。末流に至りて。世の人の害をなす事。極ま

るところを知れば。同じきところ自明なれども。今時の人。同じき所に意を著くる人少し。人一事を行ふに。是より外によきしかたのなきを至善といふ。行の過ぐる事も。及ばざる事もなく。心の中に。一己の私なきを中といふ。仁は人なり。天は能く生じ。人は能く愛す。其理おなじ。愛は仁の見はれたるなり。されど。人は形氣の私によりて。其愛の理にあたらぬあり。譬へば父母よりも。妻子を愛し。兄弟よりも朋友を愛し。人よりも馬を愛するの類。また。其父母を愛する中にも。父母の心に順ふを孝とすれども。父母過ちあるを諫を奉らずして。其意に順ふも亦愛の理にあたらぬがごとし。義は。其愛の理にあたらぬを制して。理にあたるやうにするをいふ。されば。仁を成さんとするの具なり。禮は。愛を身に行ふに。其行ひを文にするなり。是も亦。仁をする具なり。智は。愛の理にあたるをも。行ひの文になるをも。其是非を分別するなり。是も亦仁を成さんとするの具なり。この三具を以て。愛する心も。行ひも。皆一様に理にあたらしむれば。仁なり。一人を成就するなり。三具は仁より出で、。仁を成就して。一となるなれば。仁義禮智合して。全仁なり。克レ己愼レ獨は。仁を養ふの術なり。中庸は。仁の成功なり。至善は。仁をするの標的なりと。此言淺易に說きしやうに聞ゆれ共。いろ／＼と深くいへば。却て惑ふ者ある故に。かくは云へるなり。すべて。魯堂の道を語らるゝは。かくのごとく。穿鑿に過ぎて。岐徑に迷ふを恐れしなり

一變化氣質　目は視。耳は聽。口は味を知る。天下の人皆同じ。目は横に。鼻は直。頭は圓く。是もまた人にかはる事なし。人の性も然り。視るに明あり。昏あり。聞に聰あり。聾あり。味をしるにも嗜好異なるあり。目に大小。鼻に高低。頭に長短あり。これ氣質なりかゝる事を爭ふ人多きはあやしむべしと。此話を考安にせしかば。かれも又云へるは。藥の溫涼は性なり。形色氣味は氣質なり。譬へば。桂枝の溫は。桂枝の性なり。是を粉にすれば。形も變じ。炒るときは色も變じ。氣も薄くなれども。これを嘗めて辛溫なるところは。變せざるなり。然るを。藥の性を云ふを。非とする醫人

實錄と見ゆる書にも。をり／＼奇話を挿み入れたるあり。續太平記にある堂上を海に沈め。其妻をとり。その妻尼になりて。後に夫に逢ひしこと。重編應仁記の雪たゝきのことの類。諸書に少からず。其内に實事もあるべけれど。據としがたし

一詩句　丹波人植木簡脩（名は文剛）がいふ。人と會して詩を作くるに。其坐の事か其人の事かより。趣向をたてざれば。數月前につくりてもよし。會集など。某月某日と戒ありてより。先つくりおき。持ち出でゝもよし。李于鱗が秋前一日。諸子と會せし詩など。城頭客辭蘆山月と云ふ句。會飲の語と見ゆれども。客の飲まぬ席もなく。月のなき夜飲もすくなければ。是もいづれの筵にても用ふべし。されば。三日五日前につくりたるも同じことなり云々。其言義ありといふべし。明にて名作といふ。高啓が百年父老見二衣冠一。また。如今江左是長安など。謝榛が黄金先賜霍嫖姚。また。春令原上草蕭々など。浮泛ならぬ處あり。これらにても佳なるを見るべし。さりとて。其座のこと。一々つくり出ださば。また混雜して。觀るにたらざる詩となるべし。劉禹錫が金陵懐古の事。隨園詩話にくはし。こゝに贅せず。又。ある詩話に詩佳なれば。春遊に秋の詩をつくり。道觀にて。佛寺の詩をなしても。苦しからじなどいひたるは。興のさめたることなり

一熊茄子をいむ事　熊は茄子をいむ。深山の人薪をこりにゆくに。かならず茄子を帶ぶことを見れば。熊必ずはしりさる。茄子。野にあるときは。熊膽小なり。茄子なき時は大なり。茄子を見せて。とりたる熊は。膽かならず小なりとぞ。又馬に恐る。猿は馬をころし。其猿は熊に制せらる。物性いかなればかくあるにか（高橋文亮話）

一道は一なり行ふにも亦二なしの條　魯堂先生の話の。いまに耳にとゞまりたる中にも。道の事を語られしに。道は一なり。行ふにも亦二なし。仁。義。禮。智。至善。中庸。克己。愼獨等人にはやく知らしめんため。とく入らしめん爲に。敎へたる名なり。人心は。一なり。豈數多の岐徑あらんや。其名に。本より工夫の着手する處より。成功をいふあれども。皆一に仁をするの術なり。其名の異な

別に腹にあり。形かくのごとし。奇といふべし。文化の末に。二年ばかりかくの如くにして。其後生せず。又。考安が話に。其ころの事なりし。備後田房に考安が外家あり。其家に冬。薪を多く買ひて。積みたりしが。其中に槲の半。朽ちたるに多く蜂あり。前の形の如くして。數箇珠數のごとく。一條の馬尾に蜂を貫きてあり。かくのごときもの數十條なりし。考安も一條に三四箇もつらぬきて。ありしをとりて歸り。紙につゝみおきしが。後には尾おのれときれはなれ。其つゝみたる紙を食ひけり。朽木に馬尾のかゝりたるが。化生したるにやといひし

一地中聲を發す　文政二年春三月。備後深津郡引野村。百姓仲介が宅の榎の根の地中に聲あり。人の呻吟のごとし。其家にては。常の人の息のごとくきこえ。三四町よそにては。餘程大きにきこゆ。よもすがら鳴りしは。三五日の間。前後二十日ばかりにて。晝は聲なし。夜もまた聞えぬ夜もあり。次第〳〵に諒濶になりて。終にやみぬ。今に至りて。凡二年になれども。かはりたる事もなしと。

松岡清記來り話す

一地名　武陵桃源の事を用ふ。其地に小桃源といふ處あるによるか。近日の人あまりにわけもなき地名を用ふるに懲りて。かりそめにも地名の文字によりて。其故事など引き用ふるを咲ふ。然れども。唐人かくのごとくなれば。中條といふ處ありて。中條の事を用ひ。牛首といふ所ありて。牛首の事を用ふるは。くるしき事にもあらざるべし

一曾我物語義經記　小野本太郎說に。曾我物語。義經記は。むかし物語の一變せしにて。其事により。いろ〳〵の事を演說したること。二三分その實事にて。七八分は虛飾なり。殊更兒女を悅ばしむるをむねとして。桑間濮上のあらぬことをとりそへて作り。和歌などをもつくりて。其間にはさみ入れたる事多しといふ。かゝること人物多き處にては勿論。看出す人もあり。またかたりつたへて。人も皆しるべし。草野孤居の人にはめづらしき見なり。凡。此類をしるしゝに。よく人のしりたる事も多からん。我も同じく草間孤居の人なれば。めづらしとおもひてしるすのみ。今按ずるに。

一小督局　　小督の局は。天子の寵姫にて。逃れかくれ給ふに。今のはたはりにてはしれがたき事あるべからず。まして月夜に箏ひき給ふをや。されば其頃は。嵯峨山まで家たちかさなりて。紛雑たづねがたきならん。木曾が狼藉のとき。御舟神泉苑をわたり給ふなどを見るに。これより西いかばかりか邸第市廛ならん。略。おもひ見るべし。然るに南郭が詩に。東村西落秋寂々。唯聞唧々草蟲鳴と作りしは。今のさまにしても。なほ荒涼にすぎたり。當時も負郭窮巷にてはあるべけれども。王公の別荘など多かりつらん。されば。二句は。詩地不肖ともいふべし。孔雀樓主人は。御史中丞を彈正少弼にしたしといへりしも。詩佳なれば。なほ。佳にせんとおもへるならん

一五岳　　登岱五十韻は。錢謙益が詩なり。清晨上二泰山一。下レ山未二昏黑一といふことを見れば。さばかりたかき山とは見えず。韻流の遊山見物もあり。遊憩もありて。所謂折かへしにはあらざるべし。又。五岳遊草諸記述などに。暑中の雪をいふものなし。されば。其高さ想ふべし。娥眉點蒼なども。五岳よりは高かるべし。されど。させる事はなしとなり

一異木　　讃州金毘羅より二十町許の處。某村に異樹あり。幹枝は桃にて。葉は櫻なり。花は梅なり。實もまた桃なりといふ

一石分娩　　豫州三津濱何某が家に盆石あり。それを裏座敷の違棚の上に置きしに。文政庚辰の大三十日に。一小石を產む。翌日見るに。傍にありて。其形。母石に少しもかはらず。白き筋などもあり〱と見えて。小なるのみ。正月中見る人市をなし、と。同國松山人。岸惠造が辛巳二月廿五日に語る

一カツテ　　近體の詩にカツテといふは。曾を用ひ。このといふは。此を用ひて。嘗。斯二字は。全く唐詩に見えずといふ人あり。夫を聞きて。心をつくるに。嘗も斯もあり。只。曾此より少きと見ゆ

一蜂　　赤石退藏來り話す。備前尺所村荳(こうしん)神祠の榎半朽ちて。蜂を生ず。其蜂の尾。樹を離れずして。多く死す。未だ死せざるを剪刀にてきりたれば。よろこび顏に飛び去る。常の蜂は。尾すなはち劍。

盗人土に手をつき。詫言して取りしものは。悉く返して去りけるが。其後一年ばかりすぎて。この盗人筑紫のかたより歸りぬとて。よき脇指一腰をもて來りて。過ぎし晝盗みしてゆるされし命の恩をむくいんといひしかば。主人汝が物をとらんとならば。其時其儘にてかへさんやと。叱りたれば。盗人涙をおとして。辭し去りぬとぞ。今かゝる御治世に生れて。水と火と盗との外は。おそるべきものなし。水は其きたること漸あれば。預め用心もなるべけれど。火と盗は不意にいづれば。人皆心得べきことなり

一火災の時心得べき事　備後福山安永の失火に何某といへる者。客と雙六うちて居たりしが。すは近火よと呼はるをきゝて。戸外に出づれば。火燼既に。面前に飛び來る。其内に馳せ入りて。先雙六盤を引きかゝへて。土藏の口に行き。さて思ひ見れば。帳面。錢箱などこれより大切なるものいくつもあり。雙六盤は燒くともまゝよとて。又。持ちかへりて。もとの處におきたりと。火後に此事を予に語りて。一笑しつ。かゝる時には。先第一に其家にて。大切の物何々。是は第一。是は第二と分別を定むべき事なりといひにき

江戸寛政の失火に。麻布の光明寺の後の岡にて。死せし者十餘人。其内一人土中に顔をいれて。息絶え居たりしを。引き出だして見れば。胸腹猶あたゝかなる故に。とかくものしたれば。蘇生せしとぞ。すべて。火烟に取りまかれたる時は。土に顔をあてゝをるべきよし。平井直藏が話なり

土藏はひきゝをよしとす。予が鄕。文化の失火は。大風にて。何も殘らず。唯。雪隱。湯殿のみ大屋の下風に殘りたる多し。伴蒿蹊が續畸人傳に失火のときの心得べき事をあぐ。皆。肝要の事にて。中にも土藏なきものは。急火にて財器を遠く出す間なき時は。塀をくづして。打ちおほひ置きて。逃れ去るべし。車長持といふもの用にたゝぬよし。考安がいふ。近所皆燒けたる時。はや土藏の戸を開きて。内を見るべし。かならず。大根を口にくはへて。それをかみながら内に入るべし。また。煙にまかれて卒絶したるに。大根の自然汁(しぼりしる)を口に灌ぐべし

を言ふ。余乃其圖を寫し。其言を記し。以て峨山の月江師の淸翫に贈る爾り。己卯八月。薩摩

梅隱有川貞熊

一六惑星の說　ちか頃。六惑星の說あり。この世界さへ渺々としてかぎりなく。また。あらたにいかなる國を見出ださんもはかりがたきに。空中世界もまた奇見なり。天文は。授時の外は。何事にか用あらん。無用の辨。不急の察。いづれかこれにしかん。聖人も死をしらずとのたまへば。又。それより遠きは論じ給はず。隱れたるを索むとのたまへるは。北溟の大鵬。十萬億土の佛の類。みな惑星の說などなるべし。余常陸に遊びし時。靑塚といふ所より。東洋の濱を過ぐるに。はてなき海を望みて。河伯亡羊の嘆のみならず。一詩を賦す

空中世界惑星光。自古談天總渺茫。
此去同倫知幾國。滄波萬里大東洋。

一盜を逐ふに心得べき事　備中吹屋村大塚理右衞門。名は宗俊は。銅山の事に達せし人なり。或夜ぬす人入りて。物ぬすみ出でんとするを。やよぬす人よと。大音上げて追ひかけしかば。盜人あはてゝ。盜みし物もおとし置きて逃れさりぬ。其聲におどろき家内のもの。皆々馳せ集りしとき。宗俊云。はじめ盜人入りて。我鼻息を伺ふこと。再度にして。爰かしこを搜し出だし。靜に荷物をととのへて出でんとす。其時。われ枕刀をぬきて。進み出でたるなり。始めは盜人の心專にして。勢もさかんなり。其時に向へば。或は怪我あらんもはかりがたし。彼心のまゝに仕課せて。今は氣勢もゆるみたるときに。進みかけしによりて。ぬすみし物もおとし置きしなりと語りければ。みな。感服せしとなり

同じ國何某村に。晝盜の入りしを。主人はるかに見て。棒を提け。其跡を追ひゆき。今市といふ町を過ぐるにも。聲をかけず。町を一町ばかりもすぎて。待てよ盜人。町を過ぐる時聲をかけなば。わかきものども棒ちぎり木にて。馳せ集り。汝を害せんも計りがたし。こゝにて呼びかけしは。汝をたすくる一計なり。盜みし物をこと〴〵く返さば。外に望みはなし。いかに〳〵と近よりしに。

を寄せて曰。江海之論。勝敗竟に如何。拙齋竹山極めて大敵と爲す。苟も舟を焚き。罌を破るに非ずんば。則これと周旋すべからず。是皆一時の戯話といへども。亦復。以て其豈弟切磋之樂を觀るに足る。文化七年春。我が公海防の命を奉ずるを以て。余相房の間に到り。其形勢を觀るに。二州縮束して。山岸に薄り。水面曲折狹くして且長し。復。江戶品川の望む所のごとくならず。因りて憶ふ昔年茶山中國江海の語を出だす。自語りて曰。是又墨水の末流。稍大なる而已。相房二州の港口に出づるに非ずんば。則何ぞ復海を以て。之を稱するを得んや。乃前論を補葺して。以てこれを先達に質さんと欲す。拙齋竹山已に木に就きて。茶山の說。獨伸を得たり。人事の變遷是に於ても。亦感ずるものあらん

一唐山漂流紀文　　御醫福井近江介。薩摩の人より得しとて。寫し示さる。左に錄す。唐山に漂流するもの多けれども。かゝる事に心をとむる人少し。此外にも尙おもしろき事多かるべし。此文。本漢字。いま和解して。是を錄す。閲者宜しく拙きを笑ふことなかれ

本藩の士稅所子長。古後士節。染川伊甫。祗役を小琉球に抵す。乙亥の秋八月。將に歸らんとす。洋中颶に遇ふ。漂流する事數十日。冬十月始めて唐山廣東省の碣石鎮に抵り。廣東より江南を經て。凡六月にして。浙江省の乍浦港に抵り。留滯五月にして。遂に日本に還るを得たり。其南雄州より南安府に赴く也。大庾嶺を經たり。時に孟春に屬し。梅花盛に開く。道の左に唐の賢相張九齡の墓あり。芳流㆓千石㆒の四字を碑表に題す。又。數步にして。張公の祠堂あり。遺像儼然。左の巖窟中に六祖大師の坐像を安す。神靈如㆑存側に泉あり。六祖清水といふ。磴道里餘にして。山頂に至る。關を得。門に扁するに。嶺南第一の四字を以てす。關を度て下る。左壁に梅嶺の二字を勒す。陟降竟日。眼の觸る所。悉く奇觀ならざるはなし。時に淸國嘉慶二十一年正月十一日也。實に本朝文化十三年丙子正月十一日たり。子長往々これを圖す。齎し歸り。以て示さる。士節。伊甫。又。由にこれ

いまかくなりたれば。蝦夷の「アツケシ」「ソウヤ」「エトロフ」「クナシリ」などいふ處も。ゆく〱はかくなるべきにこそ

一里程　我邦の一里は。西土の十里にあたること。彼方の書にてもしば〱見ゆれば。記事の文。或は詩にても。吾土の一里は。十里といひても通ずべきこと論なし。然れども。誦して響のよろしからぬ事もあるやうにおもはるれば。是を竹山先生に問ひしに。竹山の云へるは。周の時の書に。なほ夏正を用ふるもの多し。吾邦の里程。今の法に改りしは。何時の事か明ならざれども。奥羽の地は。猶。昔の里程にて計るとぞ。されば。官府へ奉る文書にもあらず。私に記するには。いづれにても然るべきならんと。これによりて。余が詩にも。百里を千里と用ひしなり

一山陽の海を江と稱する說　山陽の海は。所謂海枝なり。島嶼とりかこみて。湖泖に似たればとて。朝鮮人の詩に。湖と稱す。余は多く江と稱す。或人是を規して。江は岷山より出で、。其源に濫觴の目もあり。川の大なる者にて。其一流の名なり。これを冒して。此處の名とすべからずといふ。是は正理なり。然れども。水を皆江と稱す。既に浙江三江なども岷江にはあらず。それを單に江と稱せしも見ゆ。近頃査愼行が詩にも。小水も亦江と稱するの句あり。されば。山陽の海も。一帶千餘里にして。形よく似たれば。江と云ふとも可なるべし。水鹹(しははゆ)ければ。必。海といはゞ。岷江も潯陽以東は。淡水にあらず。江といひがたし。錢塘江も亦しかり。吾友廣瀨臺八。(名は典。字以寧。奥白川侯儒官)隨筆一則を寄せ示す。此頃余が說を憶ひて記せりとて。左に錄す。(此文もと漢文なるを。今幼稚の見易からんために。こゝに和解す)

余二十年前の夜。船に乘じて。竹原を發し。菅茶山に投ず。月明蒼々。遠近山色。隱映波穩にして。席の如く。其水深積といへども。亦空濶にして。涯際なきに至らず。以て其觀る所をもて。茶山に語る。茶山曰。中國之海。恐らくは海にあらず。江湖のみ。我此說を持して。以て西山拙齋。井中竹山と論ず。二子皆可とせず。今子獨我に左袒する者に似たり。因て掌を搏ちて大笑す。余が拙齋に寓するに當りて。また。書

名勝志に見ゆ。巨浸は海をも江をも湖をもいふなり。此は湖なり。周圍八十里にて。一名長河とも。海子ともいふとぞ。凡。雲南かゝるところすくなからず。永昌などは。又。西千餘里にありて。人物も多し。其外處々繁華の地あり。雲南省は。大都會なり。揚升庵も永昌に流され。終に七十餘にして。其地に沒せらる。其書を乞ふ人。娼婦歌妓などにたのみ。醉ひたる時を候ひて。かゞせたりといふ。雲南は邊僻にて。娼妓はいづれにかあるべきなど。思はるれど。此方の山陽南海などに比すれば。人才もさらにひらけたりと見ゆ。道路のうちにも。名ある橋多し。其橋の幅のひろさを見ても。往來の隙なきをおもふべし。されば。何處の果までも。年を逐ひて。人も多くなり。文物もひらくることとしるべし

一薩州甑島　薩摩の甑島といふは。其國を距ること。西へ二十里許の海中にあり。其邊僻いはんかたなくおもはるれど。文化中ある人。かしこに行きたるに。問ひて聞くに。上甑島は。村數六つありて。戸數千二百餘。其內鄉士三百ばかりありて。島の廣き東西二里許。南北二里半もあり。近邊に野島。二子島。辨慶島などいふ島四つあり。西南二里程に。下甑島あり。村數八つ。戸數二千餘。其內鄉士二百五十人許ありて。島のひろき東西二里許。南北五里餘ありて。又。唐島。由良島などいふ小島あり。上下甑島にて。貢入の歲額三千石許もあり。山も高きこと二町にすぎず。海の深さ二十尋以下なり。唐に對する方の山は。石多く樹木生せず。鳥獸草木もみなかはることなく。稻。麥を作る。綿は見えず。上甑島に里村。下甑島に濱市といひて町家もあり。神祠。佛寺もあり。女子は。三絃を彈く者ありとぞ。昇平の化。かゝる荒陬までにおよぶこと。かくの如くなるは。忝なき世の中なり。また。近江の僧。海量薩の鹿兒島にありし時。鬼界島より來りて。仕ふる人の老病にて歸鄉し。醫藥保養したきよしを乞ふを見て。かの島にも醫人ありや。老病を養ふべき閑雅のこともありやと尋ねしに。今は昔にかはりて。吳服屋などの商も。かしこに行きかよふよし聞えしとなり。俊寬僧都の流されしより。六百年許にて。

日。備中松山にも雹ふりて。一二村は。麥油菜みな、くなりしよし。京と同時なりしと云ふ。京の雹も。山科十村ほどは。田畑のもの。なにもなくなりしよしなり

一衝風人に傷くる事　文化丙子七月十日。清水の瀧の近所にて。一陣の衝風人を吹き倒し。大宮通四條下る處の。手傳ひ清兵衛といふもの、妻。そこにて倒れ。背に二箇處。股に二箇處。刀にて切りたるごとき創ありしに。衣類はきれず。筋骨にも痛なく。療治して。程なく癒えしが。其處此處に此事ありて。京中に十二三人も。此患にか、りし者ありしと。是も越後屋多兵衛が語りき

一潮州　韓文公の左遷ありし潮州といふ處は。極南の邊鄙にて。人も住みかぬる所ならんと思はるれど。近頃潮州の人の漂流して。奥州につき語りしに。祠廟は。文公の廟。寺は大顚の菴など。頗る壯麗なりとぞ。是を聞きても。させること、は思はざりしに。廣東名勝志に。黄景祥といふ人の記を抄するをみれば。城西に湖山といふ山あり。そこに浮瀾亭あり。其上より見れば。鰐渚其前を繞り。浮圖其上に矗かに。環顧すれば。平林疊巘。紛然として。狀を獻じ。俯瞰すれば。萬家鱗次一眄にあつまるといふ。されば。人居も稠密なるべし。又韓木といふものあり。文公の手植にて。名しれざれば。かくいふとぞ。其花の繁稀をもて。其土人の科第の盛衰を卜すとなり。人物の盛なるも亦おもふべし

一雲南省　雲南省は唐土十五省にて。最邊僻なれば。諸葛武侯も七擒七縱にて打ちおき。宋藝祖もわが土地にあらずとて。すてられたり。其地。鳥には孔雀。鸚鵡。秦吉了。獸には象も生ずる所にて邊僻といへども。また。事かはりたる事おもひやるべし。然るに。其臨安府は。雲南省より。また四百餘里の邊鄙なれば。其臨安に隷する通海縣といふは。又。邊鄙小邑なることしるべし。其縣令の廨舍より。南六十里に秀山といふ山あり。頂に湧金寺といふ寺あり。其記に。浮圖三つあり。湧金を勝とす。仰ぎて天光を射。俯して巨浸に臨む。城廓居室の壯麗なる。山林島嶼の蟠虬せる。晨鐘暮鼓。隱々として天上に在るかと疑ふ也と。雲南

一蠑山　松前の海中に牡蠣かさなりて。小き島をなしたるがありとぞ。唐土の書に所謂蠑山も是なるべし

一毒井　備中に新兵衞新開といふ處あり。七夕に井を渫へて。四人井中に死す。天明年中の事なり。其時。笠岡御代官竹島左膳といふ人の支配所なるゆゑ。訴へ出でしかば。夫は多くある事にて。檢視するにもおよばず。此藥を飲ましめ試みよ。程遠ければ。甦生することあるまじけれどとて。散藥を與へられしよし。其後また笠岡にて。七夕に二人死す。予其井を見しに。海に至りて近く。淺き井なりし。文化八年辛未。備後浦上村に井を堀りて。水出でざれば。火を燒きて。是をよぶとて。其灰燼をとりに入りしが。立所に死せり。翌年壬申八月。同國千田村に失火して。家の燒けたる。其灰燼井中に入りしを渫ふとて。一人井中にて死せしかば。夫を救はんとて。二人また死せり。其時井に臨みたる人。惡臭衝き來りて。少時も向ひ難く。顏をそむけて。死骸を引き揚げたりとぞ。凡。夏秋の間。井中に毒あり。井中に鳥羽を投ずるに。舞ひて下らざれば。かならず毒ありと聽雨紀談に見ゆ。或人のいへるは。桃燈に火をつけて井中へ下し。毒あれば火必きゆといふ。笠岡にて死せしのち。新開地は。井よろしからずとて。其邊の井を皆塡みたるよし

一蛇昇天之事　文化二年丁丑三月廿一日。京都雷電して。雹をふらす。大きさ桃梅の實のごとく。六寸許もつもりけると。藝州廣島友子映雪。二尼東寺へ參る途中にて。これにあひて。ある人家に逃れ避けしとぞ。廿三日に京を出でゝ歸るに。途中足の冷なることいふべからずと。歸路予を訪ひて語る。筑前侯此日伏見を發して。大阪に下り給ふに。枚方(ひらかた)にて。遙に雷聲を聞きたりしが。雨もふらざりしと。扈從せし月形梶原などの士。予に語る後にきけば。東六條善久寺といへる。一向宗の寺の妻女。此日頭痛すること甚だしく。髮際より小虫はひ出で、見るがうちに。小蛇となりしゆゑ。怖れて戶外へ掃き出だすに。忽ち黑雲下りて。其蛇を乘せて昇りしかば。頭痛はわする、ごとくに癒えしと。京都の人越後屋多兵衞が話なり。同

十里許はなれて。北へながく。はては海なり。西は山旦といふ。夷にちかく海をへだつ。西へゆきて。滿洲より役人の出張る處あり。常陸の人。間宮林藏其地まで行きて。清の役人に逢ふて歸りし記あり

一旱米穀を不レ傷事　明和庚寅の大旱に。宇治川を小兒かちわたりするほどに。水涸れしに平等院の上より鹿飛び迄。兩岸皆石にて。種々の形をなし。魚虫鳥獸の形。皆そなはると那波魯堂先生の記にあり。京より遊觀するもの多く。川中に處々茶酒の店など出だしてにぎはひしとぞ。前年七月頃。彗星を覽る。占者は洪水の兆なりといひしが。かへりて大旱にて。五月二十七八日雨ふり。六月閏六月七八月雨なく。天氣は日々陰り。夜は晴朗にて涼しく。六月のはじめに。白く丸き傘のごとくなる者初昏中天に見え。五六日の間漸々に北へゆきて消す。六月三日の夜。一星月中に入る。木星なりしや。火星なりしや。今よく記せず。七月に一夜赤氣北方に見え。暫時のうちにひろがりて天に彌る。明年辛卯も。又大旱なれども。旱は米に宜しとて。米價さまで高くもならざりし

余十五六歲の頃。前後豐年打ちつゞき。いづくまでもゆたかなりし。寅年大旱の後。滂雨しきりなりしより。世態人情も一變しぬと見ゆ。前年丑七月。彗星西方に見ゆ。一頃は伏して。また初更に見ゆ。十月頃より。西海。南海大水を主るなどと。人いひあへりし。其翌年寅五月廿八日の後。閏六月。七月。八月までも雨ふらず。此年水すくなき土地は。稻の穗出でざるも多かりしが。ならして豐年にて。山陽の米價五十目に過ぎず。其翌年も。また旱損なれども。米價はおなじく賤し。それより雨滂つゞきていやし。同月。淺間嶽やけぬけて。隣鄕に火石灰など降り。晝夜を辨ぜざること五六日。刀根川へ泥水押し出だして。人畜多く死す。此前年。薩摩の櫻島燒けぬけて。是も死亡多かりき

一鳥柱　伊豆の海中に鳥柱といふものあり。晴天に白き鳥。數千羽盤舞して。高く颺る。空は眼力の及ばざるに到る。大なる白き柱を海中に立てたるがごとし。八丈島より南にありとぞ

た。石も無盡底より根ざせしものありや。備後深津村の王子山も。地震なしといふは信にや

一普賢嶽燒出　寛政四年亥歳。肥前雲仙岳の傍。普賢嶽火もえて。太谷は僅のうちに山となる。終に城に及ばんことをおそれ。人民其難をさけんとするうち。四月一日泥水湧き出で、過半漂沒す。三郷はあともなくなり。其外。小き山いくつも出來たり。たま〳〵逃れ生きたる人も。其ときのことをおぼえず。あるひは湯の中をはしり遁れたるやうに覺えたるもあり。また。水中泥中。また火中を遁れたるやうに覺えたるもありとなり。其禍淺間に十倍す。地の沒したるは。肥後の方かへりて多かりしといふ

又。寛政の初。長崎の南の海中に。一里許のうち。潮一方へながれて。瀬をなし、處あり。彼方へ通ふ船人。數年あやしみ語りしが。後に雲泉嶽の變あり。山裂け崩れ。潮出で、邑里あまた蕩壞して。隔岸の肥後海濱まで漂盡す。此夜逃れ走りて。死をまぬかれし人熱湯の中を走るごとくなりしといひし。崩壞せしは。前山とて。雲泉の前なる山なり。はじめ火の燃え出でし時は。近傍の人。こゝかしこに逃れ避けしが。數月なにごともなき故。漸々立ち歸り。後は酒肴などもてのぼりて。遊覽せし人もありしとなり

一新島　櫻島の中に出で來し新島。いまは松杉も生じ。水も湧出すとて。島原の前にも新島出で來たり。日本書紀にも。伊豆の神島といへるもおなじく。地中の火脈の怒發せしと見えたり

一蝦夷　蝦夷は。大抵三角なる地にて。東西二百六七十里。シレトコ崎といふ處に。大なる石あり。是北端なり。北面百里許あり。西北角にソウヤと云ふ處あり。それより松前まで。二百里にたらず。地多くは山にて。大河も潮もあり。東面エリモといふところまでは。粟稗をつくり食す。其人させる異なることなし。それより奥は。魚鳥のみをくらふ。眉一文字につゞきて。鬚長く多し。東北にクナジリといふ一島あり。また。エトラフといふあり。其地の山。六月に扇の柄にて掘れば。砂底皆氷なりといふ。會津樋口平藏其邊まで行きし記あり。頗ぶる詳なり。カラフトは。ソウヤの西北二

須摩の月を賞する歌に

こよひしもいつくはあれど須摩明石
　淡路島山かゝる月かげ
つひの身のおもひ出ならん須摩の浦
　秋のもなかの有明の月

かくよみて。書中にいひ來りしに見れば。須摩は清光なりしとおもはる。參州岡崎昌光寺の萬空上人の書中に。無月のよしにて詩に

水霧山雲晩未レ収。風吹二過雨一入二林頭一。
嫦娥今夜難レ堪レ冷。付二與陰蟲一訴二暗愁一。

ときこえければ。雨ふりしなるべし。後に備前北方の友人より來書に。中秋初更まで陰り二更より曉まで快晴なりしに。岡山は。これに反すといふ。參州は百里。須摩は四十里。播州三十里にたらず。尻海は二十里。讃州は僅に十里許。岡山は十三里。岡山と北方の間九里なるに。かゝる陰晴のたがひあり。常年もかゝるべけれども。今年はじめて。心つきてしるすなり。其九月中旬。霞亭伊勢より歸りて。話しけるは。中秋京は陰翳ふかく。須摩の清光をかたりても。人信ぜぬばかりなりし。伊勢は風雨にて戸をひらき。窓をあくる人もなく。大和にて芳野は。殊に大風なりしと聞きしよし。其後筑前の月形七介來り話しゝは。其地は。近年稀なる大清光なりしとなり

一列宿　觜宿は。參宿のうちにありて。畢參觜とかぞふべきに。參の第二星を首とし數れば。畢觜參となると。乾隆二十年の頃の人の説あり。しかるを安井算哲が。貞享暦議に。既に道破せり。貞享は。康熙二十三年にあたると。備中大江の人。谷東平が話しゝ

一渾天之説　文化辛未八月。彗星北斗の下にあり。初昏西北に見え。曉東北にあらはる。漸々に天旋におくれて。十月十九日の夜は。牽牛の中星と一つになりて。芒ばかり見えたり。渾天の説を。常人は。疑ふもありしに。此星にて皆信ぜり

一地震せざる家　備後の山南村何某が家。地震に動かず。其家の下一面の大石なり。徂徠が峡中紀行に。石室の僧に地震の事を問ひけるに。近年の大地震にも。動かざりしと答へし事あり。されば火脉の力も。大石を動かすことあたはざるか。ま

末に大麻といふ處より。黒氣一帯幅一間あまり。長さ一里餘なる。東西へ靡き。久しくして。漸々に薄くなり。西方へさら／＼となだれ行く。其疾きこと風のごとくにして見えずなりたり。はじめは。紫に見え漸々黒くなりて。後は濃きこと墨のごとく。途中にて見たる人は。身のけたちしとかや。小兒は怖れて。家にはしり入りたり。其さま雲とも烟とも見えざりしと。其地の人。牧周藏名ハ昌。字ハ百穀より書簡にていひ來りぬ

一バタバタ　藝州廣島の邊に。バタバタといふ異物あり。夜中屋上或は庭際に聲ありて。ばた／＼と聞ゆる故に名とす。たとへば疊を杖にて打つ音に似たり。好事の人々。是を見あらはさんとて。そこに行きて見れば。七八間も彼方にきこえて。見窮むることあたはず。川下に六町目といふ町ありて。其邊最多く。他の町々城内にもあり。狐狸の所爲かといへども。それにもあらずといふ

一肥前國に火の降る事　肥前に火の降ることあり。夫を防ぐには。革のつきたる雪踏を以て扇ぎ逐へば。火外の家にうつるとなり。故に或は官に訟へて。今度の火災は。何某が屋上にふりかゝりしを。雪踏にて追ひし故に。吾屋に火つきたれば。新家を造作の費は。何某より辨ぜしめたまへと願ふの類ありとぞ

一中秋の月　中秋の月は。四海陰晴を同じくすといふは。東坡の説なりとて。五山の僧の對州に在番せしが。いづれの年か。京と陰晴殊なりしを見て。いぶかしく云ひたり。今年文化丙子中秋。予が郷の神邊は。快晴たりしに。讃州は。陰かりたりとて。友人の僧義立歌をよみ示しゝに

はるゝやと雲にむかへてこふ月の
丑みついまはたのまれぬかな

同夜。播州もくもれりとて。友人菅岱立が書中に詩を見せけるに

方開蕉土起家樓。工役紛囂厲仲秋。賴有佳期存閏月。從佗此夕少淸遊。

同夜。備前武元立平は尻海といふところに舟を泛べしに。天氣不快。尙。閏月は如何と。刮目すると。書中に云ひ來り。且。其詩に。西嶺夕霞魚尾赤。東洋雲氣鰲頭黒といふ句あり。北條霞亭此夜

筆のすさび

菅茶山著

一月蝕　文化丙申七月。既望の月蝕は。鏡に匣の蓋を覆ふごとく。東よりかゝり皆既におよびて。紫色に見えたり。余姪萬年（名は公壽。字は萬年。俗稱は長作）こゝろをつけて見しに。月中に一帶の黑氣起りて。また暗くなり。復する時。又。黑氣見えしが。これはそのまゝ剝（おち）たり。其黑氣は。月中のみにて。外には見えずといふ。乙亥十一月の月蝕皆既の時は。西南よりかゝりて。はじめは盤の中に。墨汁をこぼし入れたるごとく。たゞ黑くして。そことも見えわかず。傍なる星は爛々たり。丙午元日の日蝕皆既は。日色茶色に見えて。薄暮のごとく。雀など棲宿せり。寛保二年壬戌五月日蝕は。白晝烏黑にして。星宿爛々たり。さながら夜のごとくなりしと云ひ傳ふ。天學家も。日行至りて高く。月行至りて低き時は。暗きことは甚だしかるべし。されど。星の見えしは。いかゞありしにかといひし

一雷臍を取るといふ事　雷の臍をとるといひて。小兒などを警むるは。雷震のときは。俯伏するものは死せず。仰仆する者は。かならず死するによりてなり。失火の烟たちこめて。息をつぎがたき時は。土を舐れといふも。同じをしへなり

一豆小豆の降りたる事　文化乙亥の夏。長崎筑の前後の邊に。豆をふらせしよし。丹波には。竹に實のること多かりしとぞ。備後にもこれありし。思ふに。寛政の前二年。備後深津郡に。麥。菽。蕎麥などふりしことあり。夫を拾ひたる人。余に見せしに。眞のものによく似たりしが。其翌年は。大に餓ゑしなり。日本書紀等にも此事あり。其後かならず凶年なり。唐土の史類にも記するもの多し。天地の氣。常に變りて。異氣異物を胎孕するならん。丁亥の今年は豊なるが。明年はいかゞあるべきか。丙子四月十五日。豊前中津に。大小豆ふりて城下にては。夜行の傘に。はら／＼と音するほどなりしとなり。其二豆を傳へ來りて見しに。前年備後に降りしよりは。實して見えし。小豆は。色赤からざりし

一黑氣　文化丙子正月廿七日夜。讃州金毘羅山の

筆のすさび目錄 終

筆のすさび目錄

筆のすさび序

余甞謂漢人記事。隨聞隨錄。至若其虛實有無。則聽讀焉者各自評論之。邦人則不然。毎聞人談話。輙先置虛無二字於胸中。其可疑者。不問實與虛。臆斷不錄。是奇談異聞。所以不傳。豈東西人氣根。有强弱邪。將時世人情所使然也邪。但我茶山菅翁則不然。文化戊寅。余從山陽先師西遊。至神邊驛。始得謁翁。遂寓其塾三旬許。翁日夕飲酒。輙必呼余侍焉。酒間。問以異聞奇事。及國產。余亦偶問以其所著冬日影。翁咲曰。人心率貴遠賤近。喜新厭陳。近來重西洋學。而輕漢學。擩染之至。或以被髮侏離語爲至極。吾爲之懼而作也。今無用。付諸丙丁矣。一日與人某來。投謁曰。向者西遊。今也東還。一揖芝眉而歸。則吾願足矣。翁時年方七十。患疝。辭而不見。但命館於驛中。既入夜。某復來曰。先生有病。不可如何。願與塾中諸君。以詩會一餉時。何如。乃相共鬮韻談咲。頃之。翁手自提煙盤來坐。蔽火光。一問一答。不自覺膝之前席。某竟不知其爲翁也。一日翁謂余曰。吾子必以筆墨成名者。僕有三訣。授之否。余避席曰。敢請。乃曰。凡以文筆成業。勿以飲食費陰晷。唯調和酢與醬於小甕。投以甲州白梅。乾蘿菔等。至春月。或點以山椒芽焉。可以下酒。可以過飯。是一訣也。凡始遊之境。雖疲矣。勿乘輿。往々錯過奇景。是二訣也。凡以儒得名者。諸方必多寄詩文乞改正。正之有法。不可不知也。是三訣也。曰改正之方。如何。翁咲而不答。固請。竟不言。蓋欲使余思而得之也。此距今三十又九年。翁有世文政丁亥三十年矣。頃書肆某得翁隨筆四册。携來乞一言。嗚乎。小子何足以辯言翁書。而强匃不止。豈以余猶及識翁也歟。此著在翁。則所言挂林一枝。昆山片玉耳。而亦可以見其用心異常矣。因書此與之。或足以補隨筆之一則也耶。

安政丙辰重陽雨窓

後進　後藤　機

あはれびをこひたるやうなるは。うたのすがたなるべし

君ならでたれにか見せん梅花。色をも香をもしる人ぞしる

世中のうれしきも悲しきも。たゞ此うたにこそありけれ

埋木の花咲くこともなかりしに。みのなるはては。あはれなりけり

此うたをよみて。涙をながさぬ人は。いくらばかり有りなん

櫻花咲きにけらしも。足引の山のかひより見ゆるしら雲

花をよめるうたの第一なるべし

あさぼらけ有明の月と見るまでに。よしの丶里にふれる白雪

雪をよめるうたの第一なるべし

春霞たてるやいつこ。み吉野のよしの丶山に。雪はふりつ丶

山里のけしきをも。盛なる代には。かくぞよみける

わかのうらに　ほみちくれば。かたをなみ。あしべをさしてたづなきわたる

見るやうなり

花さかばつげんといひし山里のつかひはきたり。馬にくらおけ

きくやうなり

わたのはら漕ぎ出て見れば。ひさかたの雲井にまがふおきつしらなみ

後の世のうたには。これらをやよきうたといふべき

世々の人の月はながめしかたみぞとおもへばおもばぬる丶袖かな

いかにして袖ぬらすまではなきけん

和歌世話終

悦べる姿をよく詠める事は。おとろふる世の及ぶべきにもあらず。愚なるやうなるは。歌の言の葉なればなり

わがうへに露ぞ置くなる。天の河とわたる舟のかいのしづくか

仙人の歌なるべし

和田の原八十島かけて漕ぎ出でぬと。人にはつげよ海士の釣舟

橘正通がよめらんやうなり

我庵は都のたつみ。しかぞすむ。世をうち山と人はいふなり

喜撰はすめる世の逸民なりけん

梅の花それとも見えず。ひさかたの天ぎる雪のなべてふれゝば

心あてにおらばや折らんなどいへるうたは。詞の姿までを。うたの心のやうには。えよまずなりぬ

月夜よし夜よしと人につけやらば。こてふに似たり。またずしもあらず

かくあはきまじらひの心は。後の代にはよまずなりにたり。僞多き故にやあらん

春日野の飛火の野守出でゝ見よ。今いくかありて若菜つみてん

春日野の若菜つみにや。白妙の袖ふりはへて人の行くらん

いづれをかまさりおとりとかせん

梅花たが袖ふれしにほひぞと。春やむかしの月にとはばや

太伯を思ふにやあらん。伯夷をおもふにやあらん。花橘に。むかしの人の袖の香といへるも。陣につらなれるかしこき人をしたふなるべし。今はたゞ。近き人をなづかしむ事によめるは。識のくだれるゆゑなりかし

あはれともいふべき人はおもほえで。身のいたづらになりぬべきかな

つかさ位高き人にも。かゝる事の有りける

百敷やふるき軒端のしのぶにも。なほあまりある昔なりけり

臣下の歌なりせばと思はる

わぐらはにとふ人あらば。須磨のうらに。もしほたれつゝわぶとこたへよ

和歌世話

我背子がくべきよひなり。さゝがにの。くものふるまひかねてしるしも

君をも。せこと思ふは。をうなの心なりけり。男のなせるにやあらん。をしへのなせるにやあらん

白がねの目貫の太刀をさげはきて。ならの都をねるやたが子ぞ

人をほむるには。そのおやをとふなるは。くだりての今も。世の習はしなり。才も徳もつかさくらゐも。また。家のたからも。身なくてやはあらん。身は。いづくよりかいでけん。いたれることわりはつねのくちすさびに有りけり

龍田川紅葉みだれてながるめり。わたらばにしき中やたえなん

物のうるはしきに。きずつけてん事をおそるゝは。君子の心ばへなるべし

斑鳩や富の緒川のたえばこそ。わが大君の御名は忘れめ

民のかぞいろは。なき事をかなしび給ひし御うたのかへしなり

足引の山鳥の尾のしだりをの。なが〳〵し夜をひとりかもねん

世には。かゝる民も多からんと覺ゆ

ほの〴〵とあかしの浦の朝霧に。しまがくれゆく舟をしぞおもふ

古の人は。別を惜む心もかくばかりにこそ有りけめ

青海ばらふりさけ見れば。かすがなる三笠の山に出でし月かも

こゝらにて詠めるうたにはあらじかし

遠近のたづきもしらぬ山中に。おぼつかなくも。よぶこ鳥かな

古今集の歌の中には。これらをや。ことなる詞とはいふべき

百敷の大宮人はいとまあれや。さくらかざしてけふもくらしつ

いづれの御世の事をか詠みけん

うれしさを何につゝまむ唐衣。袂ゆたかにたてといはましを

世にいふは。新附にわかてるなり。諧第相傳の下人などいへるは。大きに用ひ違へるなり

一筑紫の八。あみといひて。ちいさき蝦のあるを。こうございといふ。糠蝦の字なるべし

一十二月の和名は。古吾邦にも建子の正朔を用ひたる時の名なるべし。正月を睦月といふは。子にても寅にても子細なし。二月を衣更着といふ事は。丑の月のさむさ。げにと思はる。仲春の名とはいひがたし。三月を彌生といふは。寅の月更に親し。四月を卯月といふは。卯の月なればなり。今の四月に卯の花さくなれど。それは。卯月に咲く花なるゆゑ。後に名づけたるなるべし。五月をさつきといふは。辰の月は種をおろし。午の月は苗をうゝ何れも同じ意なり。六月をみな月といふは。巳の月といふ事なり。のをなに通はしていへる。殊によしと覺ゆ。七月を文月といふは。申も午もいかなる故とも知りがたし。八月のはづきも。未酉ともに。まさり劣りさだめ難し。九月をなが月といふは。名越の祓をしたるのちなれば。神の心もなごめるなるべし。戌の月には。いかにして。名付けたるにか。十月を神無月といふ事。或は純陰の月といひ。或は神々の出雲に集り給ふといふ。皆心得がたき説なり。酉の月は五穀はじめて熟して。神にすゝむるなれば神嘗月の略言なるべし。十一月を霜月といふは。戌の月霜降なれば。よく叶ひて覺ゆ。十二月をしはすといふ。亥にても丑にても。其故をしらず。合せて考ふれば建子の。世の名をいはん。まされるやうなり

南留別志 終

るは。殊にひがみて覺ゆ。さらばまなといふ物のみたくあるなり

一玉ほこの道といへるは。大己貴命の廣矛をつきて大八洲をめぐりたまへるより起れる詞なるべし。古は道のしるしに矛をたてたりといふは僻事ならん。今の世には。それをばしらで。行基菩薩の道を開けるといふはいかにぞや。かれはたゞ。功德のために。橋梁をつくれるなるべし。是より前も。王化は大八洲に。あまねかりしを。道といふ物なくていかでかは御調物をばはこびけん

一儒者のかしらそりしは。惺窩よりはじまりて。僅に六七十年の間なり。元祿の比より皆むかしにかへりたれば。今の人は儒者のかしらそりしをしらぬ人も多し。醫者のかしらそるもかゝるためしなるべし。記錄したる物なければ。人々。昔よりの事と思ふあまりに。醫者はいそがはしきものなれば。かしらそるぞ便なる。閨門の内にも出入る事しきりなれば。ほうしなるぞよきなどいふなり。習俗は。人の心までをも移す物なりけり

一高泉の。異國より持ち來りし母の神主に。長金孺人神主と題せりと。高泉に從ひし僧のかたりし。亡者に戒名つくる事は。異國にもなき事なり。佛法にもなき事なり

一てうちんは吊灯なり。挑灯とかくは僻事なり。つるべも吊瓶なり

一石をわる物をげんのうといふ。殺生石をくだきたりといふ。僧の名とせるは謠つくりし人の滑稽なるべし。今の世になりては。宗派につらねて。まことにさ云ひしがあるやうなり。大幻法門とかやいふもまことなりけり

一癩病をかたゐといふ事は。山礪河帶の誓を。しやみれかたゐとよみあやまりて誓ひたるべし。人の神祇に罪せられて。うけたる病と傅會する人あり。かたゐ翁といふは。きたなき翁といふやうなり。されば。むかしよりいひし詞なるべし

一ほとゝぎすを。郭公といふ事は。郭亡といふ事のあるゆゑに。望帝の故事にまぎれたるなるべし。眞の郭公は暮春の比より。かつこうとなく鳥あるなり

一譜第といふは。世々官職ある家をいふなり。今の

の罪を犯したるをば。火の刑に行ふは。佛法の因果によく叶へれど。佛法には。世間法をたてず。佛法に似て。世間法をたてたるは耶蘇なるべし。天學を本とすればなり

一上總國に。日蓮宗の一種あり。寺も僧もなくて。土民のひそかにたつるなり。かたくなゝる事いはんかたなし。日蓮宗一向宗などのおこり出でたるはじめ。みなかゝるさまなるべし

一周防の國に。畜生谷といふ里あり。母子兄弟の間にて。婚姻をなすといふ。平家の餘類なるべし。敵をさけて。人の通はぬ所に隱れ居て。子孫を長じたらんは。おのづからに。一族の外に。婚姻すべき族なかるべければ。里のならはしとなりしなるべし

一吾邦は。女多く男すくなしといふ。さもありぬべし。女のうまるゝはおほく。男のうまるゝはすくなし。人の妻女の死にたるをきく事しば／＼なり。人別の帳といふ物を見れば。誠に女がちなり。されども。陽はすくなく。陰は多き物なれば。異國もかくあるべしと思はる。女すくなかりせば。世はみだるべきなり

一五百年以來茶あり。百年以來烟草あり。世はやうやくに事多くなりぬ。佛老も古はなきなり

一遠江國は。とほつあふみの國なり。今切の渡のきれざりし前は。湖なるべし。飛彈國。美濃國は。道の左りみぎりといふやうなり

一令を見れば。古の葬には。皷角を用ひたり。三代實錄には。方相の事あり。僧をば借らぬやうなり

一檢非違使の靭をかくるは。今の閉門なりといふ。贖をはたるかぎり。閉門させたるなるべし

一寛永通寶の行はれざる前は。錢に美惡ありて。多きにあたるあり。少きにあたるありけりと。祖母のかたりたまひし。明朝の法なるべし。永樂といふ事。收税の法となれゝば。彼國にまかせたる事あきらかなり

一古に三尺の劍といふは。今の二尺一寸五分なり。普通には。よきほどの手比なり。八握の劍も大かた同じほどなるべし

一明朝の一石は。吾邦の四斗六升ばかりなり。今の四斗俵といふ物も。是より起れるならん

一まなはかなゝり。かなはまなゝりと。神道者のいへ

厨子所。記錄所の類なるべし。兵家者流の輩の六十六箇國に。武者所三十三ありといへるは。圖を誤れるなるべし

一今の世に亂曲といふ物あり。宴曲。眞曲の類なるべし。謠に曲舞といふ物あるも。もとは宴曲眞曲の類に。前後をつくりくはへたるなるべし

一代官といふは。もとは國司などの名代なるべし。戰國になりて。文官をひだりにしたるより。今は輕き職となれり

一苗字といふ事は。室町家の比より起れり。鎌倉の代には。それ〱の住所にしたがひて。和田ともいひ。三浦とも稱し。朝比奈ともなのりしを。太平記の比より。あらぬ國に住みながら。仁木。細川。佐々木などいひたり。是よりして。おのづからに姓はかくれゆきたるなり

一日の神の天磐戸にこもりたまひしといふは。日食の事なり。諸神の神樂を奏せしといふは。日食を救ふわざなるべし

一今の世の物學びたる輩の。假名（けみやう）を字に用ふるあり。假名のやうなる事は。異國にもある事なり。世俗の稱呼にて。字にはあらず。吾邦の人は。字はなきなり。字つかんと思ふ人は。別につきたらんまされり

一爪をふりとかく事は。壺盧をとり違へたるにや。壺盧の唐音うるなり。うとふとの間をいふより。ふとかくなるべし。るもりゆといふやうなれば。りといふなるべし

一孝標が女のかきたる物の内に。武藏の國。たけしばといふ所あり。今の芝なるにや

一甲斐の國に。火ともしの翁を祠りて。わか宮天神と名づく。日本武尊のよみたまひし歌の下の句をつきたれば。和歌の宮といふなるべし。國津神ならねば。天神といふなるべし。今はあやまりて。八幡と天神とをまつれり。今のわたりに。山梨岡の明神あり。社の前に綿をかさねたるやうなる石あり。甲斐がねといふ石なりと祝のいひし。甲斐の嶺といふ事を。かひがねといふをしらで。甲斐の國の根本なりと心得て。傅會したるなり

一火あぶりといふ事は。からにもやまとにも。古はきかぬ事なり。耶蘇の法なるべしとおもはる。火

書を見せつ。宴曲集五卷。宴曲抄三卷。眞曲抄一卷。究百抄一卷。拾菓集二卷。拾菓抄一卷。別紙追加一卷。玉林苑二卷。總目錄を撰要目錄といふ。文保の比より應永の比までに。作りたる書なり。猿樂さかんになりて。此樣なる物もたえうせたるなるべし

一朝廷のを職といひ。武家のを役といふ事。是も異國より來れる詞なり。戰役といふ詞は。官吏へかけて。官人のつかさどりを職とし。吏のつかさどりを役とするなり

一能は。元の雜劇を擬して作れるなり。元僧の來り敎へたるなるべし。こればかりの事も。此國の人のみづからつくり出だせるわざにてはあらじかし

一とう〳〵たらりやらりろうといふは。樂の譜なるべし。陁羅尼なりといへるは。僻事ならん

一主殿はとのもりなり。掃部は階もりなり。主水はみづもり。轉じてもとりとなるなり。采女はうなゐめなるべし

一蝙蝠をかはほりといふは。蔨もりなるべし。やもり。ゐもりの意なるべし

一鼓をつゞみといへるは。都曇鼓といふ鼓あるよりおこれるなるべし

一隼人をはいとんとはぬるは。はいとんべを略したるなるべし

一黄蘗派の寺はからめきたれども。古に遠し。眞言。天台の寺には。和流多けれども。もと。唐朝より傳へたれば。古法の殘れることあり

一異國の書に。入道といへるは。道士になりたる多し。吾邦には專ら僧になりたるをいふ。法師もしかなり

一勾峡をまがりをとよむ。酒勾をさかわとよむ。まがるといふよりわといふなるべし

一ねこまを略して。ねこといふ。こまといふも略言なり

一地名に尾といふは。丘の字なり

一梶原平三が子を源太といふ。源氏の子をやしなへるにや。猪俣小平六も。小野氏なるを。平氏を冐せるはいかに。此比までは。今の世のみだりがはしきやうにはあらじ。かならずゆゑあるべし

一武者所といふは。官府の名なるべし。御書所。御

一十師連といふは。古の詞なるべし。いかに漢語を用ひたりけん

一大口といふものは。舞人の裝束に。大口袴といふ事。隋唐の樂志に見ゆ

一ことゝいふは。琴の音といふ事なり。かりがねは雁が音といふ事なり。久しくしては物名になりたれば。ことのね。雁金の聲ともいふなり。冬日之日。夏日之日といへるがごとし

一ことぶきといふは。祝することなり。壽命の事に思へるは。博士家のあやまりなり

一吾邦にて。太牢といへるは。大鹿。小鹿。猪なり

一今の世に。茶堂坊主。掃除坊主などといふ物のある事は。戰國の時に。軍兵。寺領を沒取し。僧徒をかすめ取りて。おのがつかひものとしたるなるべし。國初の比までも。僧の寺などをうしなひたるは。大名の家へ掃除坊主に出でたり。されども。女犯肉食をせず。おのれが部屋には。本尊をするおきて。ひそかに朝夕の勤行をもしたりと。外祖母の語りし。今に僧の罪を犯せるをば。徒罪の意にて。百日苦使すといふ事あり。是等やおこりなるべき

一胡琴敎錄といふ物に。如木といふ詞あり。じよぼくとよめり。今の俗にいたてんじんなどいへるごとき心にかよひて。裝束をこは／＼しくきなしたるていをいふなり。今の世にせうぼくなきといふ詞は。じよぼくならぬといふ事なるべし。小乏など、文字をつくりてかくは。僻事なるべし。胡琴敎錄には。太政入道などの事あり。鎌倉の比の書なるべし

一今の世に。寺に寺家といふものあり。無學の平僧なり。されども淸僧なり。三代實錄に。筑紫の觀音寺に。御使にゆきたるもの、。寺家の女にかよひてもたせたる子の。後に親戚の願ひて。筑前の籍貫に入りて。良家となりたる事あり。されば寺家といふもの。古もありと見ゆ。奴婢のやうなるものにて。寺につかふるなるべし。それが後には。髮をそりて。法師に似たるが。近き世になりて。淸僧になりたるなるべし。諸山。諸寺の妻帶の僧達も。百年以來多くは淸僧になりたるなり

一大内家の遺物なりとて。孝孺が持ち來て。郢曲の

まふ時に。姑射の山になずらへたるためしあるなるべし

一世俗に。鬼まん國といふ事をいへるは。鬼方をあやまれるなるべし

一咀をとことよむは。咀誓の字なればちかふといふあやまりなるべし。鬩をせめぐ。抑をそも〳〵といふ類も。博士家にて。つくりたる詞のやうなり

一罵をのるとよむは。呪罵といふ事あるより起りて。のろふ事なるべし。祝詞をのつと、いふ。中臣祓にのるといふは。のたまふ意なり。法をのりといふも。上よりのたまひたる事なればなり。古は神と人とわいだめなきゆゑ。祝も宣もかよへるなり。の、じるといふは。高聲にいふ事なり。神の祝詞も。上の仰せ事も。高聲にとなふるゆゑなるべし

一兄弟をおと、いといふは。おと、えといふ事なるべし

一笙の山口を。びやうしやうといふ。今の樂家にて。屏調又は評聲などかけるは。しらで文字をつけたるなり。凡上といふ事なり。乞の竹と也の竹には山口なし。乞は黄鐘。也は雙調なり。此二竹をかねにして。凡上の竹より山口をひらきて。それより段々に外の竹にも。山口をあくるときは。かね違はぬゆゑに。凡上と名づけたるなり。今の笙は形長くなりたるゆゑ。乞の竹にも山口をあけたるなり。乞の竹を長き限とし。也の竹をみじかきかぎりとして。乞のなかばを行の山口とし。乞と行とのなかを。凡の山口とす。凡のなかばを上の山口とし。凡と上とのなかばを十の山口とし。也の竹に吹きあはせてみるなり

一りちのしらべといふ事を。秋に用ふるは。五調の内。壹越の土用にあたるをのぞきて。のこりの四調にては。秋にあたる平調のみ律にて。外は皆呂なるゆゑなりといふは。あやまりなり。りちのしらべといふは。十二律の調といふ事なり。一切のもの、ねの。秋は殊にすみわたる心にて。秋にもちふるなるべし。呂といふ詞を歌にもちひざればなり

一長歌。短歌といふは。いにしへにうたをうたひたるさまの。ながきとみじかきとにていへるなり。句の數にはか、はらぬなるべし

一折角といふ詞は。郭林宗が巾の雨にあひて。角のひしげたるを。人々のまねて。わざと巾の角を折りたるより。何事もわざ〳〵とする事をいへるなり

一むかでといふ虫はもゝかでなるべし。かは箇なり。百日をもゝかといふも。もゝかのひといふ事を。日を略したるなり

一女房といふ事。女ばかりにかぎり。房の字をつけたりと思へば。源平軍物語といふ草子には。男ばう女ばうといふ事あり。部なるにや

一本朝といふは。吾邦といふ事なりと思ふは誤なり。千載集の序に。わがよの風俗とかきたるは。吾朝といふ事を。わか世とかきたるなり。古は義をあやまらざりし様なり

一四姓といふ事は。天竺にある事なり。源。平。藤。橘を四姓といひたるは。佛法を信ずるあまりに。何事も天竺の事をよしと思ひて。それに擬していへるなり。はては。かた田舎の人は。此四つより外は。姓はなしと思ひて。外の姓の人も。皆此四つの内にあらためたれば。今はまことに此四つより外はなきやうになりたり。安倍。伴。朝原。丸子。巨勢。高階。春日。滋野。滋岳。笠。苅田。葛城。葛井。御船。當麻。賀茂。家原。御輔。佐伯。都。布瑠。高丘。三原。三善。大原。粟田。田部。島田。田中。高橋。菅野。錦部。豊階。志紀。御室。布勢。秦。槻本。若安。早部。朝野。蕃良。六人部。都努。賀陽。五百木部。安濃。飛鳥戸。川上。石川。鵜養。吉野。猪甘。茨田。手島。坂合、丹羽。稲置。飯高。大坂。五百庵。波多。黒川。長谷部。川邊。蘇我。雀部。治田。櫻井。服部。岸田。平群。佐和良。坂本。日下部。阿毘古。春日部。三枚。稲木。土形。大石などの類は姓なりといふ事は。大かたはしらで。四姓の内になりたるおほかるべし

一跨をあとこゆるといふ。足迹のまたがりこゆるといふ意なるべし

一返閉といふは。陰陽師が。行幸の時にする事なり。軍法者の家に遍唄といふ事のあるは。これを誤りたるなるべし

一太上皇の御所を仙洞といふ事は。藐姑射の山といふより起る。本は嵯峨仁明の比ほひ。昆陽池。河陽院にて。文人をあづめ詩歌をたてまつらしめた

一今時。くがいといふ詞あり。公廨とかくなり。本は。國々の年貢米の内にて。京都にはこびのぼするを正稅といふ。其國に殘し置きて。守。介。椽。目等の國司どもが分け取りて。雜用にするを公廨といふ。職田は。全く私用に用ふるなり。公廨は。官府にての雜用にするなり。是よりして私ならぬおし出だしたる事を。公廨といふなるべし

一天神といふは。菅家にかぎらず。總じて國津神にあらざるをいふなり。國津神は鄉賢なり。天神は名官なり

一高坂彈正といふ者。高野に書狀あり。香坂彈正左衞門虎綱といへり。されば。甲陽軍鑑は他人の僞作なる事。いよ〳〵あきらかなり

一はうじといふは榜示なり。傍示とかくは誤なり

一被管を被官とかくは誤なり。支配したの事をいふなり。家らいの事にはあらず

一ざうがんは。鑲嵌なり

一どびやうしは。銅鈸子なり

一こりといふは。行李なり。旅の荷物をいふなり

一狐をやかんといふは。射干なり。狐に似て木にのぼる物なり

一ゐんことといふは。鸚哥の唐音なり。鸚鵡のちいさきをいふなり

一目代といふは。めだいといふ事にはあらず。さくわん代なり。判官代の如し

一預參といふを。あらかじめ參る心に用ふるは。僻事なり。まゐる人の數の内にいる心なり。延喜式など見るべし

一一番はひとかはりなり。ひとつがひとよむ事は。舞樂相撲より心得違ひたるなり

一露地といふは。やねふかぬ地をいふを。誤りて庭の事にしたるなり

一神主といふは。昔はその神の子孫を神主としたるなり。喪主などの心なり

一談議といふは。今いふ講釋の事なり

一さん〴〵といふ俗語は。物をいまふ人の死したりといふ事をいへるより。起れるなるべし

一猶子とは。をひの事なるを僧正などになる人の。公卿の子分になるをいふは。義はかよふ樣なれども。本文に違へり

石なり。一品も八百戸なり。二品は六百戸千二百石なり。三品は四百戸八百石なり。四品と正一位は。三百戸六百石なり。從一位は二百六十戸五百二十石なり。正二位は二百戸四百石なり。從二位は百七十戸三百四十石なり。正三位は百三十戸二百六十石なり。從三位は百戸二百石なり。此外に其戸に夫役をあて、使ふなり

一古の田地の高も。今にさまではかはるまじきに。式にのせたる肥後の國の正税。公廨。各四十萬束。國分寺料四萬七千八百八十七束。文殊會料。二千束。府官公廨三十五萬束。衞士料三萬五千七百九十五束。修理府官舍料一萬束。池溝四萬束。救急料十二萬束。俘囚料十七萬三千四百三十五束。合せて百五十七萬九千百十七束なり。米になほして。七萬八千九百五十五石八斗五升なり。是百石の場にて四石四斗納る積りなれば。百七十九萬四千四百五十一石餘なり。上總國は。百六萬千束。米にして。五萬三千五十石なり。右の積にて。百二十萬五千六百八十石餘なり。甲斐國は。五十三萬五千三百束。米にしては二萬六千七百六十五石。右の積りにしては。六十萬八千三百石餘なり。今の積りよりは大てい三倍せり。右の外に位田。職田。功田。賜田などの不税の田もあるべければ。むかしは殊の外に。田地多きやうなり。其道に明ならん人に。つもらせたき事なり

一大學寮の料。常陸國より五萬四千束。近江國より一萬束。丹後國より八百束。伊豫國より一萬束。備前國より一萬千束。越中國より一萬束。合せて九萬五千八百束。米にして。四千七百九十石なり。學生の料。上野國一萬束。陸奥國四千束。出羽國二千束。播磨國一萬五千束。合せて三萬千束。米にして。千五百五十石なり。何れも現米なるべし

一伊達家にては。糒を城に貯ふる事。古。陸奥國には。儲の糒といふ事ありし例の。今に殘りたるなり

一古に。弓矢取といふは。武士をいふなり。大將の事なりといふは。弓法をうづたかき事に思へる輩よりの。いひ出だしたるなるべし

一體矢とて。冥途の見やげに持ち行く物なりといふは。子路か纓を結べる心なるべし

おのづから。官位のやうに思はぬ事になりたるなるべし

一今の世に。國造といふものを。尊きものにいふは。僻事なり。古は。その國をひらきたる神を。其國の一の宮として祭り。其子孫を國造といひて。其神の祭をも司り。又國の政務をも司りたり。其後。百官をたてたりし時より。國司といふもの出來ては。國造の。國の政務にはかまはず。たゞ。祭ばかりを司るゆゑ。神となれるなり。國造をえらびて。郡司にする事。令に見ゆ。されば。國造より郡司になるを規模としたるなるべし。たゞ。家系のふるきなり

一今の番衆のやうなるもの。古もあり。およそ。官に職事官。長上官といふ事あり。職事官といふは。今の世に役人といふやうなるものなり。それ〳〵に司る役義あり。散位の人は。長上官なり。長く上するといふ事なり。上するとは。御番をする事なり。才伎。長上といふは。藝者の事なり。是も。つとむる役義なくて。番をするゆゑにいふなり

一君臣の事を主從といふは。郡縣の代の名なり。郡縣の代には天子より外に君はなきなり

一薩摩の防の津は。防人の守りし所なるべし

一勳位といふ事は。軍功によりて賜はる事なり。十二等あり。勳一等は。正三位の下。從三位の上に列す。次第に配當して。勳十二等は。從八位の下に列す。衣服は。庶人に同じく黃袍をきる。勳位の次第は。軍功によりて。功田を賜はる爲に設けたりと見ゆ。いかなる故にか。後世には。たえたるやうなり

一餘綾郡を。ゆるぎの郡とよむ事は。よろぎの轉せるなり。綾をろぎとよむは。りようのうのかなを朝鮮音にてぎとよむなり

一半匹を一端といふは誤なり。令に見えたるは。一端も一匹も同じ事なり。五丈二尺をいふなり。學生の束修は。布一端なり

一入唐といふ事は。昔の博士のいかゞ心得たがへたるにか。日本を夷にしたる詞なり

一封戸の一戸は。稻四十束を出だす。米にして二石なり。太政大臣は。三千戸六千石なり。左右大臣は。二千戸四千石なり。大納言は。八百戸千六百

一みかどは。みことの轉ぜる詞なるべし

一庄といふ物を。郡のやうにおもへるは誤なり。庄は庄園にて。私田にあるべし。公田にはあるまじ。私田の内にも。都に居たまへる。高官の人か。又は寺社の封戸なるべし。是を司る代官の樣なるものを庄司といふなり。されば。庄の名なき地もあるべし。何の國。何の郡。何の庄。何村と。かならずいふ事はあやまりなるべし。國郡鄕と次第する事本法なり。鄕の名は。和名類聚に出でたり

一闕所といふは。功田。賜田など持ちたる人の罪にあひて。ほろびて其田ぬしなくなりたるをいふなり。闕國といふは。國守の解任して。其國のあきたるをいふなり

一國司は。國守なるを。守護といふ事出來たる後は。公家より置きたる官人をいひたるなり。國守は。多くは京都にありながら。かけて其所務をとるまでにて。國務にかゝはぬ事になりたるゆゑ。國守と國司と名わかれたり

一からも日本も。古は玉をたからとせるに。後の世にはきえうせたるやうなり。大かたは。金銀をたからとせるより。玉はおのづからおされたるべし

一古に公田を耕す民を。良家とす。是則武士なり。正稅を一町の田より一石一斗づゝ出だして。外に傜役をつとむ。私田を耕すものは奴婢なり。耕す田の米は。殘らず主人のものとなる。おのれは口分田といふ物を持ちて。是よりは。稅をいださぬなり。良家の口分田は二段づゝなり。現米五石とる。是より。稅一斗一升出づるなり。奴婢の口分田はその三分一なり。現米一石六七斗なり。今の百姓は。此奴婢の類なり

一今の世に。六位以下をば。官位のやうに思はぬ事は。そのむかし。五位以上にばかり位田ありて。六位以下にはなし。後に國介など世官になりたれば。其職田も世祿になりぬ。守は京都にありて。介にて國務を取り行ふゆゑ。國衙にての雜用の料に定めたる。郡稻などは。介の心儘になりぬ。それより以下掾。目。郡司等も。皆世官になりぬ。其職田は。みな世祿となりぬ。かゝる人の目より見れば。京官の六位は。望ましからぬ物なり。おのれと位階は。さのみかはらで。富はおとるべければ。

守。大上國椽は。一町六段四十石。中國掾。大上國目は。一町二段三十石。中下國目は。一町二十五石なり。又位田といふ事あり。一品は。八十町二千石。正一位も同じ。從一位は。七十四町千八百五十石。二品正二位は。六十町千五百石。從二位五十四町千三百五十石。三品は。五十町千二百五十石。正三位は。四十町千石。從三位は。三十四町八百五十石。四品は。三十町七百五十石。正四位は。二十四町六百石。從四位ば。十二町五百石。正五位は。十二町三百石。從五位は。八町二百石。何れも現米の積りなり。令に見えたるは。右の通りなれども。式に文章博士の職田五町。筭博士の職田あるを見れば。何れの官にも。職田あるなるべし。此外に。祿といふ物。食封といふ物あり。太政大臣にて。正一位をかけたらんは。官位とも祿食封などくはへても。二萬俵にはいたらじ。國守などは。五位の位田をくはへて。僅に現米二百五十六十石なり。紀貫之が土佐守になりたる時。海賊にあはん事をおそれたる。さもあるべしと思はる。總じて郡縣の代は。からも日本も。臣下のゆたかならぬ事なり。かゝる事の樣にて。大八洲のよく治まりつるは。淡海公の制度の德なりとしるべし。延喜式にのせる供御の品々を見るに。恭儉のいたれる。異國にもあるまじきなり。賢愚は代々にことなれども。制度の力にて。仁儉の德をうしなはず。古法をよく守れるにて。おだやかにおさまれるなり

一うには。棘鬣なり。うにといふ訓は。海丹といふ事なるべし

一國々に日野といふ地名あり。烽を擧げたる所なるを。後に火の字忌みて。かき替へたるなるべし。火の國を。肥に改めたる類なるべし

一御成敗式目の第一條に。神社。第二條に佛寺の事をいへるは。令に。官位令。職員令の次に。神祇令。僧尼令を出だせるに本づけるなるべし

一ひるこに。蛭をかき。ひるめに日をかけるは。本義にはあらざるなり。ふたばしらながらひるといひて。子とめとにて。男女をわけたるまでなれば。元來は義おなじかるべし

なり。氏族の貴賤を分てるなり。同じき姓にても。朝臣をなのる家もあり。眞人をなのる家もあり。宿禰をなのり。連をなのる家もあるなり

一神代といふ事は。死したる人をば。神にまつりたれば。今は神にまつりたる人の代といふ事なるべし。神武帝の時にいへる詞なるべし

一或人の曰く。やしろに。社の字をかく事は。吾邦の神は。皆土地をしめたるゆゑなりといふ

一大日本國をきりて。大日の本國といふは。物わらひなる滑稽なり

一雀部。さゝいべとよむ。さゞきといふ事なり。さゞきは鷦鷯とかく。佐々木も是より出づ

一六歌仙といふ事は。古今の序に。六人を出だせるよりいへり。六に六をかさねて。三十六人にて。あなにえやの歌を傅會せるは。後の世の人の事を好めるなり。丈山が詩仙堂をつくれる。又物わらひなり。古は。六義ほど歌より詩にならひたるに。後の世は。又詩より歌にならふ。題も皆。歌のやうになるはいかにぞや。連歌あれば。聯句あり。歌合あれば詩合あり。百人一首あれば百人一詩あり。かく品々にまなびつくしぬれば。詩所もたつべくと覺ゆ

一波利采女巨旦大王は。朝鮮の故事なるにや、蘇民將來といふ。朝鮮に蘇姓あるなり

一牛頭天王は。神農なるべし

一御曹司は。冑子の誤なりといふは。かへりてあやまりなるべし。曹司君といふ事のあるなり

一一町の田よりは。米二十五石とる。此内。正税は一石一斗なり。位田職田は。税をいださず。二十五石をみなゝがら納むるなり。太政大臣の職田四十町千石なり。左右の大臣は。三十町七百五十石。大納言は。二十町五百石なり。太宰帥は。十町二百五十石。大貳は。六町百五十石。少貳は。四町百石。大監。少監。大判事は。二町五十石。大工。少判事。大典。防人正。主神。博士は。一町六段四十石。少典。陰陽師。醫師。少工。筭師。主船。主厨。防人佐は。一町四段三十五石。令史は。一町二十五石。史生は。六段十五石なり。大國守は。二町六段六十五石。上國守。大國介は。二町二段五十五石。中國守。上國介は。二町五十石。下國

惡魔を拂ひ遠ざくる文なり
一豐成のむすめを中將姫といふ。心得がたし。女の名に。官名をつくる事は。末の事なり
一しやくぢといふは。赤口神なりごむ日は五墓日なり。くゑ日は九會日なり。しやく日は赤口日なり
一伴系圖に。氏長者あり。藤氏。源氏にはかぎらぬ事なり
一三郎(さんろ)が笛とは。玄宗皇帝の事なり。いかに誤りてか。牧笛の事にはしたりけん
一文じやうは。文屋氏の太郎が。後に掾になりたるべし
一熊野を蓬萊といへるは。三の御山といふよりなるべし。熱田をいへるは。明神。揚貴妃となり給へるといふ俗說によりてなり
一八日。十二日を藥師の緣日といふは。やといふ訓の八に通ふと。十二神とによりてなり。外のも此類なるべし
一鳩を八幡の使者。猿を山王の使者といへるも。はちまんのは。さんわうのさをとりていへるなるべし。鹿を春日といふも。かもじなるべし

一悔。くゆるといふは音なり。吳音けなり。けはくゑなり。くゑんじへんぐゑのごとし
一こうじたりとは。困の字なり。田舍人はごちたりといふ
一くち惜きといふは。くちは屈なり
一葛。くず。かづら。かど、いふ。皆音なるべし
一藤原諸葛。藤原子房。藤原伊尹。相如など。皆。古人の名を慕へり。博雅三位も伯牙を慕へるなるべし
一紀貫之。小野好古。平國香などは。古書の文字にてつけり
一老人をじやうといふは。丈なるべし。尉とかくは誤れり。ばゝは婆々なり。あまは。梵語阿麿なり
一弓。鐵砲の頭を物頭といふを。學問だてする人の。者頭とかくは。僻事なり。物前。物わかれ。物ぎは。物ばやきなど。皆。武といふ事を。物といふなり。物部より出でたる詞なり
一博雅三位。行平中納言など、。名の下に官をいふ事。唐朝の例なり
一尸といふ事は。異國にはなき事なり。族といふ心

字の同じくて。うまれしやうの同じき人は。皆同じ名のりなり。名乘のおこなはれぬ世なればこそ。かくにてもまがひもなけれ。昔のごとく。姓と名乘とにて。世におこなはゞ。一萬の人のあつまりたる都にては。同名の人の四百も五百もあるべきなり

一世に。うまれしやうといふ事なり。京房が。姓をさだめたる術なり。故に納音といふ姓の字よし

一時の鐘のかずは。大玄經に出でたり

一魂のかずの事は列仙傳に出でたり

一かしこきよりかしこからんとならば色にかへよといふは。皇侃が義疏の說より。昔の博士がつけたる點なり

一坂田のきんときは。公節なり。物部の系圖にあり

一物部系圖の內に。他天動の大楯といふ物あり。盾人の作れる大楯といふ事を。あらぬ文字をつけたるなるべし

一阝。是をこさるへんといふ。阝。是をのぼりさるといふ。形につきていへるなり。此比。こざと。のぼりざと、いひかへたるは。かへりてあやしきなり

一絕句を。三行三字。律詩を五行三字にかくといふは。歌の懷紙の直似をして。五山の僧のしいだしたるなるべし

一吾邦のむかしは。一字平出と一字空までなり。明朝の法は。五字擡頭まであるなり

一今のむすび文は。鯉魚の形なるべし

一羯鼓の手に。らいといふ事あり。擂の字なり。家の譜には。來の字あり。音をかへたるなり

一十の指を。一波羅密といふ事は。眞言宗にて印相をむすぶに。十波羅密を十の指のひとつ〱に名づけたるより出でたり

一蜻蜓をとんぼうといふは。吾邦の名を秋津洲といふゆゑ。東方といふ事なるべし

一ちよくは鍾なり。さうは盞なり。朝鮮語なるべし

一五常樂。常の字をすみて唱ふ。され共。平家物語に。重衡の。われらが爲には。ごじやうらくといへるを見ればむかしは。濁りて唱へたるべし

一俗語に。七里けんばい。又けんばいをふるなど云ふ事あり。見敗とかく。見敗見敗といふ呪文あり

うゝるをわけぎといふ。かりて用ふるをかりぎといふ。きは一字なるゆゑ。ひともじといふ。上總國の民は。韮をふたもじといふなり

一ふるき物語には。いくさの陣といふ詞あり。陣の座などの陣に。わかたん爲なるべし

一源内。平内。藤内は内舍人なり。太郎作。五郎作は。さくわんなるべし

一からも日本も。狩には鹿をほんとするなり。かりといふ詞も。鹿によれるにや

一舞の詞にいはう。ぎはう。土佐房を三人の法師武者といへるは。心得がたし。いはうは伊北なるべし。きはうは議部なるべし。治部の唐名なり。されば。伊北は。苗字にて。議部は官なるべし。三人にてはなきなり

一御前は。女を稱する詞なり。伊勢三郎が。妻のねぶりたるを。おこすに。やごぜやごぜといひたり。や殿。矢田殿太平記に見ゆ。やはよぶ聲なり。今の世に盲女をごぜといふは。めくらごぜの上を略したるなり。ごぜんとはぬれば。大名の妻をも。家によりてえいはぬ事に覺ゆるは。何れの世よりの事なるにか

一童形は。行の字よし。僧家より出でたる詞なり

一吾邦には。車を牛に引かせたるは。六朝の制なり

一名乘を反すといふ事。何者のしはじめたる事なる。今の世には王公大人の定れる法のやうになれるは。上をまなべばなり。詞花集の比よりと聞ゆ。異國には。齊の明帝の。ことのほかに物をいまふ性にて。人の名をかへしたる事ありそれは。唐音にて。ひゞきのかよへるをにくめば。さもあるべし。此國にては。和訓にてよむなれば。かゝるさまだけもなし。唯占術の一つになりて。人のまどへるなり。韻鏡といふ物は。唐音を正すべき爲に作れる書なるを。うらかたの書のやうに覺ゆるは。おろかなる事のいたれるなり。韻鏡にのせたる字は。一音なる字多き中にて。近く聞きなれたる字を一つ出せる事なれば。その字の義にてのみ。吉凶をさだむべきやうなし。一音の字多き内には。あしき義の字もあるべけれども。とにかくに書面に見えたる字の義をのみとれるは。易の辭などのやうに心得たるにや。此故に今の世には。とほり

の裝束唐のやうにて。けごろもをきたりといふ。末摘花のかはぎぬも。古代の裝束なれば。けごろもなるべし。今の源氏繪は。皆後よりかきたる物にて。まことのすがたをうしなへるなるべし

一男の鬚そる事は。男風さかんになりて。眉作り。薄げしやうせし比よりの事なるべし

一襪をしたうづとよむ。したぐつといふ事なり。日本紀に。溟涬をくゞもりてと點をばつけながら。くうもりてとよむなり

一くれなゐは。呉藍なり

一福祿壽といふは。福星。祿星。壽星といふ事。星命の家にある事なるを。たれかひとつにして。かゝる形をつくりいでけん

一青苔如衣懸岩肩。白雲似帶達山腰。聲も合はず。韻もなし。「苔衣きたる岩ほはさもなくて。きぬ〳〵山の帶をするかな。」右の詩を評したる歌なり。謠作る人の滑稽なるべし

一能に神の形をよそほへるに。唐冠きせたるは。吾邦のむかしをつたへたるやうなり。末社の神のかうぶりたる物も。むかし。かゝる服のあるなるべし。聖徳太子の定め給へる十二冠はかゝる物なるにや

一日本紀の文もちくらなり。佛經の文もちくらなり。儒書に點つけてよむもちくらなり。世の學者。ちくらが沖にたゞよひて。からにもやまとにも。舟のつかぬは。是をや生死の苦海に流浪すとはいふべき

一如是我聞といふ事は。佛の遺戒にて。何れの經のはじめにも。是を置きて。阿難の親聞なる事をあらはすといへれども。翻譯の三藏が。漢語をしらぬゆゑ。梵語のまゝに翻したれば。かへりて阿難の親聞ならぬやうになりぬ

一天人が。天の羽衣をきたるといふは。道家の詞を用ひたり

一三線をさみせんといふは。三の字閉口音なるゆゑ。はねがなをみといへるを。世俗のしらで。味の字を加へたるなり

一昔の博士どもが。大唐とかきたるは。年號をたてたるに應ぜぬ事なり

一きは葱なり。根にてううるをねぎといふ。分けて

べし。新發意は菩薩戒をうけたるべし。宗門によりて。名のかはれるなるべし

一渟をぬとよめるは。沼といふ事なるべし

一書狀に不斜といふ詞。何に本づけるにか。いぶかし。法帖にいなやといへる事を。不耶とかけるをよみ兼ねて。義をあやまれるにや。狛の近家が見せたる幽蘭譜は。隋朝の書にて。書跡も千年ばかりのものと思はる。其内に斜臥中指といへる。斜の字を耶にかけり。邪と斜と通ひて。又邪と耶と通へるを。音の異なるをもわきまへず。皆通はしたるなるべし

一縡を事と通ずる事。古にある事なれども。後には通用せぬ事なるを。吾邦には多く用ひたり

一白氏文集に。匹如身後といふは。匹如すと下よりかへる事なるを。古の點には。匹如身をつゞけて。するすみとよめり。匹夫の意に見たるなるべし

一まみ穴といふ所は、古金ほりたる穴なり。まみはまぶの事なり。享保六年の比。黃金のやうなる砂いでたれども。いまだ。年のたらぬ金なりとて。ほらずなりぬ

一蟒をうはばみ。蝮をくちばみといふ。ばみはへみなり。へみはへびなり。うは、大なり。くちばみは。赤口黑口とて。二種あり。赤口ばみ。黑口ばみといふ事を略せるなるべし

一上總國の南の方は。人の詞かきくけこをえいはで。あいうえおといふ。坂倉といふ所を所のもの、。さあくらといひ。それより轉じて。さはくらといひたるゆゑ。後には文字をも。澤倉に。改めたり。か、る事國々に多かるべし

一蛭子尊のかたちを。ゑみたる顏ばせにかく事は。ゑびすをゑみじともいふより。繪かく人の心得て。かくはからへるなるべし

一周防國に。菅家の詞をはじめて造れるあり。それに繪像あり。鬚ことのほかにおひて。威嚴なる相のよし。孝孺かたりき。まことの御形なるべし

一應神天皇の御像に今の幞頭をきせ奉る事心得がたし。漢の代の冠なるべし。日本武尊。守屋なども。漢の衣冠なるべし。令の比より。今の幞頭を用ひしなるべし。され共。袍は花山院より以前はかはりあるべし。奈良に孝謙天皇の時の繪あるに。女

一めでたくは。愛すべきなり。かたじけなくは。かたんずるげもなきなり
一いざといふ詞。衣ほすてふなどのてふといふ詞。今も上總國にあり。いざをいちやといひ。てふをちふといふなり
一なでふこと丶は。何といふ事なり
一あんべいやうもないといふは。田舍詞なりとて。今は人のわらふなれど。源氏物語にあるなり
一さめ馬のさめは。驄馬なるべし
一釋迦牟尼佛を。にくるべとよむは。如來部なるべし
一瓊。にとよむ。赤玉と注せるゆゑなるべし
一越人をあだしびと丶よむ。心得がたし。あだし男は。あだなる男といふ事なり。越人をよめるは。敵人の義なるにや
一牛天神は。物部大人神社なるべし。大人をうしとよむ。日本紀に見ゆ
一酒は三獻なるべし。今はくこんともいふ
一水すめば魚すむ。水にごれば魚にぐる。詞も義もかよへり

一燧袋といふ物は。燧を帶ぶといふより起れる名なるべし。其比までは。烟草も鳥銃もあるまじければ。燧を。身をはなたず。持つべきやうなしと思はる
一大織冠より前は。天兒屋根の苗裔の。政とりたる事なきを。神と人とのちがひなど。こと〴〵しくいへるは。延喜。天曆の頃ほひに。博士どもの諛へるなるべし
一やなぐひは。矢の笈なるべし。上總の國に。あらぐひといふ所あり。新笈とかくなり
一鵠をこうといふは。鴻をあやまれるなるべし
一帶刀をたてはきとよむ。上總國の人は。たちはきといふなり。古き詞にもたちはきあり
一もの丶ふの八十氏といふは。物部の姓に。支別多くて。八十姓あるとなり。姓氏錄にのせたる見るべし。武士に。氏多き事をいふといへるは誤なり。古に武士といふ事はなきなり
一古は。俗人の入道したるに。沙彌といふあり。御成敗式目にあり。新發意といふあり。多田新發意。和田新發意などなり。沙彌は。沙彌戒をうけたる

るも誤なり

一りうわうを。ゆわうといふ。訛言なり。田舍の人。るすを。ゆすといふがごとし。しかるを。醫書などにても。ゆわうとよむ事心得がたし

一刀自は。負の字をわけたりといふ。曾我物語に。かたかひといふ女あり。是も負の字なるべし

一やなぎは。梁につくる木なり

一かうつけ。しもつけは。上毛野。下毛野。とかきて。本はかうつけの、國。下つけの、國なるを。後には毛の字を除きて。訓はのといふ事をのぞけり。二つながらあたらぬ事になれり

一閲。けみすとよむは。撿の字より出でたりけん。すといふはねがなをみとよむなり

一大鷦鷯尊と。菟道稚郎子と國をゆづりたまへるは。ありがたき御事なり。これによりて。自殺したまへるは。吾邦の人の心なるべし

一稚郎子。わきいらつことよむ。伊良古崎も郎子崎なるべし

一いなおほせ鳥といふは。農を課する鳥といふ事なり。負の字の義にあらず。布穀鳥なるべし

一喚子鳥は。子を呼ぶ鳥なり。漢語につけたる訓のやうなり。あらひと神は。現人神なり。人とあらはれたる神といふ事なれば。是も漢語につけたる訓なり

一宿禰。宿尼。少名同じ事なるべし。連は。村主といふ事なるべし

一桃花鳥。つきとよむ。鵇又鴾ともかく。とうともいふ。今の人はときといふ。田舍の人は。ときとうといふ

一ふつか。みか。よか。などのか文字は。箇なり。ふつかのひ。みかの日などいふ事を。日を略しつれば。日の字の訓をかといふやうなり

一はたち。みそぢ。よそぢなど。としをちといふなり。かへしなり。はたはふたの轉ぜるなり

一天のかぐ山は。山の名にあらず。山の高くて。空のかくるゝをいふなるべし

一山ごもり。大殿ごもり。妻もこもれり。われもこもれり。隱の字なるべし。こもりくのはつせといふ事あり

一女の文に書くかしくは。恐惶なり。惶根尊あり

皆官名なり。經師。鑄物師なども。官名なるべし

一延喜式にのせたる藥種を見れば。今の世の醫術に用ふる品にあらず。千金方。外臺祕要などの流なるべし。異國も宋朝より醫術一變したり

一礒をいそとよむ。磯なるべし。いそはいしなり。石上をいそのかみとよむなり。磯城。磯長などしといふは。いしといふ事なり

一土用といふは。土用事といふ事を略せるなり

一國司といふは。守。介。掾。目に皆いふ事なり

一太平記に細馬といふ事あり。よき馬をいふ。今に見ゆ

一ゑたを長吏といふ。張里の誤なるべし。ばくらうといふも。伯樂の誤なるべし

一脇指の寸は。一尺三寸を用ふる事。ふるき事なり。法曹至要抄に見ゆ。其比は。ふところざしにしたるなり

一荒木氏何某といふ人。御使に奥州に下りしに。其少し前に。光堂の佛の目にいれたる金を。人の盗みし事あるを。僉議するとて。秀衡が棺をあばきたり。棺五重ばかり。外の棺はぬりたり。内の棺一重は。桐の白木也。秀衡が死骸いけるが如し。年のほど五十餘。たけは中人の少しひき、なり。髮は三寸許おひたり。ひえからのやうなる物にて。棺をつめたり。五百年許なるに。形の損ぜざるは。此物の德にや。かたはらに。泉の三郎が棺。是はした、かなるしやれかうべひとつありけりとぞ。秀衡が棺の内より。まくら一ッ。太刀一ふり出だしおきて。國主の者ども。荒木何某に見せたるなり。荒木氏は。馬をよくのりたれば。それを習ふとて。若藤杢右衞門といふ人。奥州までしたがひ行きて見たりとて。茂卿が幼き時かたりき。枕はつねのく、り枕なり。ふさまでも。深紅なるが。手にてさはればでうのごとく。手につくとなん。太刀は二尺ばかり。つばはもかうのなりにて。三まいつばなり。柄はしんくの糸にてまきて。中ひしなり。さめに、しきをきせたり。柄かしらはひきとほしなりといふ。さびつきてぬけずとかたりき。奇怪の物語なり

一貝は子安がひなり。海螺をばいといへるは誤れるなり。貝をかひとよみて。一切の介虫の總名とす

を。元祿の頃よりきよくらいといふ。黒癩に通へるを嫌らひたるなるべし。孝經をけう〱といひしをも。此時分よりかうきやうと。人多くいへり

一降眞香は。雷をさくる物なり。雷にやかれて。身のくろくふすぶりたるに。是をたきたる烟にて。ふすぶれば。やがて白くなるなり。是をも同じ比より。護眞香といひならはせり。くだるといふには。雷のおつる心あるを忌めるなりけり

一秋風のふくにつけても。あなめ〱。おのとはいはじ。すゝぎおひたり。」猥褻なる歌なり

一みとのまくはひといふ詞。みとは。めをとなり。夫妻といふ事なり。まくはひといふ詞。今も田舎にて。めぐすといふなり

一田舍の女は。木綿のひとへなる物を。帶したる上にきるを禮服とす。古の小うちぎなどのゝこれるなるべし。又はちまきをするを禮儀とす。職人歌合などの繪にも。能の狂言にも。かゝるすがたあり。いやしき女の裝束なるべし。桂姫といふものも。かしらを布にて。幾重もまくといふなり

一後の世に。作りいでたる物は。名にてしらるゝなり。見臺も文臺なり。わきざしも刀なり

一藤原惠美押勝といへるは。姓を二つかさねたるなり。備前の王藤內。又安藤といふも同じ事なり。小河の系圖の內に。小河垣谷とかさねてなのるあり。苗字をかさねたるためし。昔はあるなり

一假名(けみよう)の文字にいへる。吉は橘なり。橘次。橘內。橘六あり。忠は中原なり。中三權守あり。金は金刺なり。甚は大神なり。禰津神平と系圖にあり。勘は菅原なり。鄕は大江なり。彌は小野なり。小河系圖に。六野太野左衞門といふあり。其子孫。今の世までも。代々彌の字をつく。清は清原なり。伴は大伴なり。才は齋部なり。惣は惟宗なり。幸は高階なり。喜は紀なり。長は長谷部なり。長兵衞宣連あり。此外は押してしるべし

一鬼一法眼は。紀一なるべし

一今時の女の名は。太平記のお妻始なり

一令に。陰陽師は從七位なり。呪禁師。針師。藥園師は。正八位なり。按摩師。箏師は從八位なり。書師。挑文師は大初位なり。染物師は小初位なり。

勸學院。橘氏は學舘院。源氏は淳和弉學の兩院を作り。其學政を。氏の長者が司りしなり

一鎌倉の時分までは。進士といふ事ありしにや。日蓮の事をかきたる物に。進士太郎といふ人の名あり。進士の子なるべし

一頼朝のふみは。多くは。かなぶみなり。今の時のふみのやうなる事は。室町頃よりはじまる。其前は。皆。庭訓などのやうなる詞なるゆゑ。文盲なる人は。えか丶で。かなぶみを用ひたるべし。

一能の狂言のふあくいくゐ。大和物語のまかぢ。源平軍物語の老竹。若竹。曾家物語のかたかい。淺草の觀音をとりあげし濱成竹成など。古はいやしきもの丶名は。大かたかくこそつきたらめと思はる。

一度牒といふ物も。鎌倉の比までありしなり

一二荒（ふたあら）を。補陀落（ふだら）とし。音にてよみて。にくわうといふを。日光とかき替へたるを見れば。ふるき事は。考へ得がたき事おほかるべし

一今の陰陽師などのする八卦のうらかたは。京房が法より出でたり

一唐をからとよむは。朝鮮のあたりに。加羅といふ國ありしなり。異國より。日本國王に賜ひし。都督軍事の官に。任那加羅など、かぞへていへり。はじめて。吾邦に通じたるゆゑ異國人の事を後には。みなからといへるなるべし

一兵馬といふは。古の官なり。令に見ゆ。東百官といへるは誤なり

一梅をうめ。馬をうまといふ。皆音なり。うは發聲なり。日本紀の内に。梅をめのかな。馬をまのかなに用ひたるも。此いはれなり

一乎ををの假名に用ふるは。唐音より來れるしるしなり

一葵丘をくゐきう。詐僞をさくゐ。源氏をくゑんじ。變化をへんぐゑといふやうなる事を。かへしにて讀みかへたるは。いづれの世よりの事なるにか。袍のひだをとりて。今の俗にいふ。りつはといふやうなる事をこのみ出でたる代なるべし

一遠侍といふは。古の次の遺制なり。常に。衣冠したる代には。か丶る物なくてはと思はる

一倅をせがれとよむ。周禮の國倅の字なるべし

一曲禮をこくらいとよむ事。古よりのよみくせなる

どなり。尺八變じて。一節切となる。物ずきのかはりめ。大かたはかくのごとし

一虎をとらといふ。羊をひつじといふ。此國になき物なれば。和名あるべきやうなし。とらは朝鮮語なりといふ。さもあるべし。ひつじも。異國の詞なるにや。象をきざといふは。舟に刻みめをつけて。おもさをしりたるよりいふといへるは。異國の古事なり。いぶかしき事なり。豹をなかつかみといふは。歌書にもいはず。むづかしき詞なり。何ものゝ作りいでたる事ならん

一蘭をらに。錢をせに。蟬をせみといふ。吾邦にある物なれども。和名なくて。漢語を用ひたり

一きく。きちかう。しをに。われもこう。皆漢語なり。れは助語にて。和木香といふ事にや

一いにしへに系圖をたからとするは。本領といふ事あるゆゑなり。今の系圖は。虚文なり

一姓ありて苗字なきは。京貫の人なり

一今の世には。苗字を姓とさだむべきなり。姓のしれぬ人あるゆゑなり

一仁をひとゝよみ。義をよしとよむ。人也宜也といふ訓にしたかへるなるべし

一禮をゐやとよむ。孝をゐやまひとよむ。恭をうや〱しとよむ。相通ずるやうなり。されども禮と孝との訓は。ありし詞とも覺えず

一つゝしむといふ詞は。つゝむといふ事なり。つちかねといふ事をいへる。心得がたし

一青牛不渡大洋海といへる。げにさる故にや。仙の字に訓なし。やまひといふは。しひてつけたるなり。たちぬはぬきぬきる人などいふ。あきらかなり

一いんでんといふ皮は。應帝亞といふ國よりいづ。ゐんでやとよむ。いにしへの印度なるべし

一舊事紀にのせたる國名は。百四十四あり。くには郡といふ事なり。其後。國の字に替へたるは。張大にする心なるべし。されども。國の字の意を誤りて。州の字の意とせり。異國にて。一統なき國と思へるは。國の字を用ひたる誤をしらで。文字につきて思へるなり

一古は。皆。進士より官人となれるゆゑ。己が氏人の内より。官人多く出でん事を願ひて。藤原氏は

毒箭も。草烏頭をすりて付くるなり。武備志に製法あり

一いはひの時。昆布の切様に。ひきまたといふ事あり。かへるのまたに。象るといふは心得がたし。匹またなるべし。二端の布をひとつにつらねて。両のはしよりまきて。おきたる形なり。夫婦をいはふなるべし

一古は。天子を皇といひて。宮を王といふに。今は王といへば。天子の事なりと思ふは。天然のことわりなるにや

一脾をよこし。腎をむらと。肺をふくふくしといふは。何に本つけるにか。膽をいといふは。胃を誤れるなり

一烽をとぶひといふは。飛報の心なるべし。野守の鏡といふは。烽を水にうつして。遠近の里數をしる法あるべし。水にうつして。遠近をしる事。算家の術なり

一追捕使といふ官。古は國々にあり。伴の系圖に。助兼參河國の追捕使となる事あり。さなくば頼朝も總追捕使といふ事はいひいづまじきなり

一芭蕉をはせをとかき。紀長谷雄を發昭とかくを見れば。蕭宵の韻の字を。古は。うのかなを用ひぬ事と見えたり。東の韻。陽唐の韻などは。はぬる音。喉にいるゆゑ。うのかなを用ひたるなるべし。肴豪の韻。尤の韻は。うのかな勿論なり

一成をしげとよむ事は。山のかさなるを。一成二成といふより出でたるなるべし。俊をとしとよむは。俊逸の義なるべし。質をかたといふは。質の字より誤れるにや。是等も。漢字を名につきて。後によみを付くるときにつけかねて。形の似たるにて。通はしたる事も有るべし

一和をかつとよむは。かつる意なるべし

一くだりての代に。つくり出でたる物は。名あたらぬなり。詞にいへば。わかるやうなれども。文字にかきては。差別なし。侍烏帽子。大小。かたな。わきざし。たち。大刀。なぎなた。ながかたな。こがたな。ちいさがたな。上下の類なり

一笙。笛。琵琶の類。吾邦に傳へたるは。唐朝の制なり。明朝の器よりは。形みな大きなり。書籍も。宋板の本は。本も大きにて。字の大きさも。錢ほ

一眞間の橋を繼橋といふ。繼をまゝとよむゆゑなるべし

一下總國の國府臺といふ所に。石槨あり。かたはらに車塚あり。法王の塚と。所のもの、いひ習はせるは。道鏡なるべし。甲斐國にも法王が嶽あり。法王の流され給ひて。此山にのぼり。都を望めるといふ。是も同人なるべし

一岸和田。岩和田。佐川田など地名にわだといふは。曲の字なるべし。海川のまかりめなり

一甲斐の國といふは。峽の字なるべし。兜岩とかけるは。鑿せるなるべし

一ふたつは。ひとつの音の轉ぜるなり。むつは。みつの轉ぜるなり。やつは。よつの轉ぜるなり。いつゝな、つは。いつれなにといふ事なり。こゝのつは。こ・ら。こゝたくのこゝなるべし。とをは。つゞの轉ぜるなり。つゞとは。こゝにいたりて。算をつゞめて。一にするなり

一山はやむ。川はかはるといふは。理學者の談なり。

一黑はくらきなり。赤はあかるきなり。白はしるきなり。青はあはきなり。黃は木なるべし

一今の書狀に。大慶。珍重といふ事のあるは。法帖の語なり

一小兒の糞器をまるといふ事は。日本紀に。いばりする事を。いばりまる。大便する事を。くそまるといふより出でたるなるべし

一今の世にめらうといふは。めのわらはを。はやく云ひたるなり。するといふは。候をはやくいひたるなり

一葵丘とかきて。きゝうとよむは。僻事なるべし。古は。くゐきうとよむなるべし。くゑんじへんぐゑなども。たゞかなのとほりによむなるべし

一序破急といへるは。樂より出でたる名なり。破は慢の聲の轉じたるなり

一あしをよしといひ。なしをありのみといふは。物いまふ人のいひかへたるなるべし

一しやうつきといふ文字を尋ぬる人あり。いさや。異國にも。雙忌。單忌といふ事あり

一毒をぶすといふは。附子なり。田舍にて。草烏頭をよばはり草といふ。瘧などにすりてのますれば。しばし絕え入るを。呼びもどすなり。蝦夷などの

の道のおくふかき事もしらねども。ひとつふたつ習ひたる事にておしもとむるに。いさゝかも違ふ事なし。愚なる身も。かくのごとし。まいて聖德の人の上にては。すたれたる古の禮樂も。おこさばおこるべきをや

一牙をきばとよむ事は。齒字をつゞけたるなるべし。足利の學校に藏せる易の點に。猪牙をゐのきとよめり。今の世俗にもさいふなり

一近家が見せたる。琴手法のうちに。文字のやうなる物の。すきて見ゆるをよみて見るに。催馬樂のやうなる物なり。催馬樂にてもなし。笛の手のつけたるを考ふれば。秋風樂なり。古はいづれの樂にも。かくあたらしく詞をつけたりと覺ゆ。茂卿がぬすみうかゞへるにあらざらましかば。其家の人もえしるまじ

一御門跡は。御門の跡なり。方料は御方料なり。公家の子どもによめとりたる時。其料を與へたるなるべし。武家の威勢にて。御の字を附けたれば。わけもなき詞となれり

一源氏物語を見れば。病に藥用ふる事はすくなくて。大かたは。祈禱をのみしたるやうなり。今も田舍のものは。かくのごとし。鬼を倘べる風俗の弊なるべし

一熊襲。えぞ。木曾。そは夷のことなるべし。紀の國は。木の國なり。木曾も。木の國も。材木の出づる所なり。えびす。えみじ。えぞ一語の轉せるなるべし

一南部よりさきは。蝦夷の地なるべし。外の濱といふも。日本の外といふ事なるべし

一おんたらしといふは。御執とかく。君の持ちたまへる弓といふ事なり。甲陽軍鑑に。梵語なりといふ。又。多羅葉の枝にて作るなどいふ。大きなる僻事なり

一ひやうは。すいはのかぶらといふは。穴なきかぶらと。穴ある鏑矢と。箭の飛び行く聲のかはりあるよりいへるなり。ひやうふつと射きるなどいへる語の類なり。兵破。水破。或は風破とかきなどする僻事なり

一箏のすがゝきは。しづかかきといふ事なり。はやがきに對せる名なり

ためにしおきたる事にか。いぶかし。文選などを兩點によみたるを學びて。宣賢朝臣などのはじめたる事にや。さなくとも兼倶が惟一といふ事をいひ出でたる後の事なるべし

一朝臣といふ事。もと朝廷の臣といふ事にて。漢語より出でたり。後に和訓をつくる時に。朝夕の意をかりて。あさおんの反にて。あそんとよみたるなり

一片假名のヌは。數の字なりと思ひしに。萬葉を見れば。爲の字の半體なり。爲便をすべとよめり。また。片假名に爪とかきたるあるなり

一けだしといふ詞。萬葉集にあり

一ならに。平城とかけるは。平をならす心にて。よめるなるべし

一そ字は。所の半體なるべし

一ゟ字を可字なりといふは。心得がたし。香字の半體なるべし。世の人。片假名のみを。半體と思へり。ひらがなにもあるべきなり。かなといふ物をつくりはじめを尋ぬるに。眞字を略してかきたるより。おのづからに出來れるなり。たゞ。今世の抄物かきとて。かける心なるべきを。昔の人のかなといふ物をつくらんとて。たくみてつくれるやうに思ふは。事の心にいたらぬなるべし

一嬰羽嬰商といふ事は。郢羽。郢商とかきたるまされり。體源抄にかくかきてあれば。古は是を用ひたるならん。郢人の引商刻羽より名づけたるなるべし

一今の筑紫箏の調は。一五三相生じて。四六は別の物なり。五音相生の次第。中絶えてふたつに分れたり。これをよしとする人は。五藏にかけたるところあるべしと思はる

一琵琶の風香調、返風香調のしらべ樣を。人に尋ねしに。しる人なかりしを。胡琴敎錄の中にて。其事をいひたる前後の文をかうかへて。かくなるべしと思ひける。後に體源抄を人にかりて見るに。我おしはかりたるに露も違はず。又古は樂の調と。歌の調と。六八にてあはせて。同音にはあらざるべしとおしはかりぬるも。五調の名。琵琶と。笛とおなじからぬを見て。いよ〳〵さおもひさだめぬ。東にむまれて。堂上のまじらひをせざれば。管絃

くたもてこよとかけり。あごとは乳母の事なり。上總國一宮といふ所は。あごなし御曹司の城なりといふ。千葉介が。乳母にうませたる子なり。なすとはうむと云事なり

一法勝寺の執行俊寛。吉野の執行岩菊丸あり。執行とは。寺務を執り行ふ僧の妻帶にて。子孫に傳へたるが。いまだ。童行なるもあるなるべし

一知をともとよむは。新知。舊知。知己。などの義なり。周をちかとよむは。周親の義なり。治をはるとよむは。墾の義なり。昌をまさとよむ事は。孔安國が昌言を注して。昌當也といへるより出でたり。光をみつとよむも。光充也より出でたり。孝をたかとよむも。孔安國が。孝經序に。孝者人之高行といふより出でたり

一一をかずとよむは。かたきなき心なるべし。二をつぐ。三をみつ。四をもろ。五をともとよむ。伍の字と通ずるゆゑなり

一羆をしぐまといふは。何ものゝつけたる訓ならん

一宅をやけといひ。家をやかといふ。音訓をならべたるためしもあるなり

一義絕といふは。夫婦。君臣にいふ詞なるを。父子に用ふるは。大きなる誤なり

一窈窕をにほびかとよむ事は。何に本づきたるにか。ゆほびかを說れるなるべし元喬云ひき

一君子をまめびとゝよめるは。伊勢物語に。本づきたれば。關雎にかぎりての事なるべし。外の處には用ひがたし

一關々は。聲の相和するなり。やはらぎなけるとは。義をあやまれるなり。なきかふるなどいふべし

一すめらぎもみかども同じことなり。皇帝の字にわけたるは。和語に文字つけんには。さもあるべし。漢語にかなつけんには。なづめるなるべし

一王をおほきみといふは。大君の義なれば。天子の事なるべし。葛城の王などは。漢語を用ひたる後の詞なるべし

一主水をもんどゝいひ。掃部もかもりといひたるは。むかしよりいひたるなるべし。民部をたみのつかさ。兵部をつはものゝつかさといふやうなるは。後につけたる訓なり。此やうなる類は。むかしもいはず。歌書にも用ひず。物語にもかゝず。何の

一つちとは神の事なり。つみともつちともいふなり。いかづち。かぐつち。くにのさづち。たけみかづち。わたつみ。やまつみの類なり

一晦をつごもりといふも。つもごりといふも妨なし。つごもりは月隱なり。こもりくの泊瀬などのこもりなり。つもごりは。月死なり。ついたちは。月立なり。もちづきは。みちづきなり

一えとは。兄弟なり

一日本紀は。漢文に和語をつけたる物なり。全き和語といふべからず。總じて官名などの和訓は。むかし。かくいひたるにはあらず。官名いできて後。あらたに和語をつくりたるなり

一一字訓傳は。わが邦の釋名なり。釋名は。古より傳はれる事にはあらず。劉熙が作れるなり。明の魏莊渠六書精蘊を作れり。異國にもかゝる事を好める人ありけり

一神社に地をさかひてこゝまでは。此神の氏子なりといふは神封の地なるべし。後には封戸なき神にも。そのまねをして。いへるはたれがゆるしたるにや。亂世には。人も神も心のまゝに地を領せるなるべし。されども。神いくさのなきはいかにぞや

一押領使といふ事を。俗にいふ押領といふ詞になして。其地を勅賜なくて。おして領せる人なりと解するは誤なり。さらば。何とて使の字をつけたる。奥羽軍記の和文には。陣頭とあるを。漢文には。押領使とあり。國々より。公役にて出づる軍兵をめしつれていづる頭の事なり。押の字の意は。かく見る事なり

一なんてんは。南天燭なり。田舍の人。なでんぢくといふ。又。らんてんといふ人あり。八種畫譜に。蘭天竹といへり。からもやまとも。らとなとは。通ふなるべし

一石榻をいしずりといふは。搨の字に誤れるなるべし

一御とは。女の稱なり。狂言に鬼のむすめをよびて。おごうといふ。今も奥州にていふなり

一うつくしや。べにゝもにたり。梅の花。あごがかほにもつけたくぞある」といふは。菅家のいときなき時。よみ給ひしといふ。職人歌合に。あごよう

なるべし。弱と若と通ずれども異國の書には。若の字はまれなり。宍は肉の古字なれ共。つねにはかゝぬ事なるに。此方にては。常用となれる類も思ひ合せぬ

一神道といふは。巫祝が神につかふる道なり。印相觀法をまじへたるは。佛法を加へたるなり。陰陽五行をいへるは。性理をまじへたるなり。神道すなはち王道なりといふは。道をしらぬものゝいへるなり。神道と王道とは。各別なる事なれども。王道は神道によせてたてたり。三代の古道をしらざる人は。此さかひはえしるまじきなり

一蝦夷は。國の名にあらず。人の種類なり。國栖。土蜘蛛。皆しかり。隼人といふも。種類なり

一阿蘇は。熊襲なるべし。肥後國球磨郡は。その舊墟なるべし。陸奥は。みちのおくなるに。後には。又陸の字につきて。むつの國ともいふ。文字につきて。名の轉ぜるも常の事なり

一檜垣の嫗が集に。くきのたんといへるは。くまの大貳なるべし

一職人歌合に。太凝菜(ところぶと)を賣る人のこゝろていとよぶといふ事あり。それより又ところてんとなれるなり

一物名も。漢語より來れるあり。促織をはたおりといへるは。はたるおるといふ事にて。漢語につけたる和名なり

一くれはとり。あやはとりは。くれはた織。あやはたおりなり。くれは呉なり。あやは漢なり。東漢なども。あづまのあやとよむ。文物國の意よりいふなるべし。服部も。はたおりといふ事なり

一かつうをは。供御に用ふる物なり。延喜式に見ゆ。兼好も。古書は見ざるにや

一なゝくさのかゆといふは。七種の穀を粥にするなり。七品の草といへるも。兼好と同じあやまちなり

一つぼねといふは。宿直(とのゐ)するもの、帶をもとかで。つぶねにする所なり

一梨壺。桐壺は。壼(こん)と壺(こ)ととりちがひたるなり

一こゝろなくを。けゝれなくといふは。甲斐國の鄉語なりといふ。いまも遠江國のものは九つをけゝねつといふと元喬いへり

ゞなるべし

一田中。大石。田口。三枝。山邊。巨勢。服部。石川。滋野などの類。苗字なれ共。姓なるべし。內藤。齋藤の類もあるなれば。別に姓を求むるは僻事なるべし

一伊勢物語は。うたの心を說きたる物なり。事のあるなしは。論ずべからず。抄物のやうなる事して。歌の心をとかんは。うたをしらぬ人のする事なり

一古今の序は。眞名の序をつくりて後に。それによそへて。かなの序をつくれるなり。文の體格かなの文章にあらず

一曾我物語。義經記は。つたなき物なれども。時代をいへば。太平記などよりは。前の物なり。室町家の代になりて。和文の體も一變せり

一題詠といふ事いできて。和歌はおとろへたり

一火の用心とよぶは。ひあやうしといふ事なり。本朝文粹に見ゆ。拍子木も火危木なり

一諷誦を請ふ文といふ事を。文粹に誤りて。うくる諷誦文と點をつけたり。それよりして。世の人。諷誦文といふ物なりと思へり。諷誦とは。讀經の事なり。僧に讀經をして給はれと請ふ意に。俗家より書てつかはす文なるを。請の字をうくるとよみ違へ。はては。又除きて。僧の作る事にしたるは。俗家文盲になりて。えつくらねば。僧を賴みて。作らせたるなるべし。今の世までも。諷誦かきたる布施のみを。談議師の物にするは。潤筆の意なるべし

一延喜帝を聖人なりといふは。天子を尊める詞なりといふ事をしらで。延喜の聖代とかきたる文を誤り會したるなるべし

一越殿樂の詞に。ふきといふ事をうたふは。古雅なる古いはんかたなし。詩經の詞も。是には過ぎじと思はる。丁芥。愓齋などが。詞を作りかへたるいやしさ。又いはんかたなし。聖人の道をしらぬ人は。かくもあさましき事をする物かな

一春は墾（はる）なり。秋は飽なり。夏はあつきなり。冬はひゆるなり。辛は輕なり。甘は重なり。酸は淸なり。苦は濁なり

一にほふといふに。匂の字をかく事は。音通ずれば。誤りて芸と匂とかき違ひたる本のありしを。昔の博士どもが。珍しき事に思ひて。誤りつたへたる

じ

一らいしやう籐といふは。頼政卿の弓の籐のやうを傳へたるなり。らいしやうは。頼政といふ事なり。深き道理も。ことなる子細もなき事なり

一大將を閫取といふ事は。古は。軍閫といふ事のありしを誤れるなり

一武內宿禰が。三百歳は。數代同名なるべし。三韓を威服すべき爲なり

一辨慶は。滑稽の男なり。むさし坊とつきたることは。辨の字をかたかなにてよめるなるべし

一けらいは。家隷なるべし

一らうとうは。若黨に對せる名なるべし。黨のもの、內にて。老いたると。わかきとわかてるにや

一武藏國にのみ。牧の長を別當と云ふ事令に見ゆ。秩父庄司別當。長井齋藤別當は。此職なるべし

一つくは山といふは。常磐山といふ事なり。松をよめるも。常磐の緣なり。ひたちを常陸とかくも。此山によれり。ひたちといふ名は。日高見の訛合なり。かみ合ひてきなり。き訛してちなり。東人の語なり。國名に文字と訓との別なるは。大和。近江。常陸なり

一水帳といふ物。村々にあり。御圖帳とかくべし。民部省圖帳といふ事あり

一過所とは。關の切手なり。關の切手持ちたる船を過所船といふより。今は其名ばかり殘れり

一上總は。かんつふさ。下總は。しもつふさなり。安房にも。ふさといふ字を用ふ。古の扶桑國なるべし。下野國に。くろはねといふ所あり。出羽には。はぐろの山あり。古の黑齒國なるにや

一上總國の內。本納といふ所あり。其側に。法目といふ村あり。本納に橘の祠あり。橘媛を祭れるなり。森の形。船に似たり。中に高き木ありて。檣にかたどる。今は折れうせたりときく。橘媛の乘り給へる船。此浦によせたりと。故老の云ひ傳ふるなり。本納は。帆丘なるべし。法目は。帆埋なるべし

一江戶。水戶。坂戶。りうど。つくど。今戶。花川戶など地名に多し。戶口によりての名なるべし

一大峯の後鬼。前鬼は。紀氏の人なるべし。鈴木といへるも。紀氏なるべし。鈴は。すゞの下道のす

て熊浦をこもかいとよむ。くまは。こもの轉せるなり。倭語のはじめは。漢語朝鮮語の轉せる多かるべし
一日本紀の點は。後世よりつけたる多し。申食國政大夫を。けくにのまつりごとまうすまうちぎみとよめるは。古なればとて。かくむづかしき官名はあらじ。大夫をまうちぎみといふは。まつりごつ君といふ事なるを。かさねたらんはきゝにくかるべし。たゞ。たいふとよみたるなるべし。太子を。みこ。すめみこなど、訓ずれども。皐子。王子と差別なし。是もたゞ。たいしといひたるなるべし。神功。應神より前にも。漢土の往來ありて。漢語も漢字も。とくに傳はりたりしなるべし
一やまと、いふは。山迹とかきて。和州の事なり。神武帝。和州に都したまひしより。大八州の總名となれり。大和といふは。もと大八州の總名なるを。帝都なれば。山迹の文字に用ひたり。そのはじめ。おのころじまといふ事を。異國にて。倭奴國と文字をつけたり。倭を和とかきかへたるは。美名を取れるなり。桓武帝より後は。帝都にもあらぬに大和の名を改めぬは誤なり。おのころじまを。淡路島なりといふも誤なり。おのころ島といふ心は。男子島といふ事なり。ろは。神ろぎ。神ろみ。山鳥のをろのか、みなどの類にて。助語なり。しきしまといふも。欽明帝の都の名を。大八州にかうぶらしめたるなり
一神功皇后は。呂后に似たる人なり。帝位につかざる事は。女帝をたつることは。神代よりの戒なるべし。守屋と。馬子が爭論は。此事なるべし。さなくば。神功の后にて。終り給へるやうやあるべき。日本紀は。女帝の世に作れば。此事を諱みかくしたるなり。天照大神を女帝といへるも。舊事記は。推古の時に作り。日本紀は。持統の世に作れば。子細あるべしと思はる。おのころ島を淡路島なりといへるも。皆ひと、ころにつとふやうなり
一政子の淫亂の迹傳はらぬは。廣元が諱みしなるべし。賴家。實朝。時政。義時。和田。秩父までも終をよくせざるは。しるせる外に子細あるべし。淫毒にあらざらましかば。か、るいはれなき事はあら

一吾邦は。冠婚喪祭の禮なし。あるに改めたらんは。備なるべし。なきに。定めたらんは。王者の師なるべし

一今の俗に用ふる位牌は。儒家の制なり。明の會典に。雲首の式あり。今の儒者は。家禮の法を守る。程朱の法にて。古禮にはあらざるなり。神主の制など。寒酸に過ぎたるゆゑ明には。用ひざるなり。まして。世祿の國には。用ひがたく覺ゆるなり

一壬生忠岑の墓に。銅板ありて。其文字にて。忠岑が墓といふ事知られたりとなん。墓誌石を用ひんよりは。簡便にて。しかも久しきにたふべし

一巡禮行人などのきたる物は。衰絰の遺制なり。父母の菩提のために。喪服の内に。観音大日を禮せるゆゑ。衰絰を着たりしが。後には。喪禮亡びて。観音大日を禮する服となれり。御ゆづりといふは。襁の字をよみ違へたるなるべし

一振鉾を。ゑんぶとよむは。𛀁とゑと形似たるゆゑよみ違へたるなり

一つは月の形なり。へは部の略字なり。ふるき抄物には。多く阝かくのごとくかけり。はねがなは。にの字なり。らに。せになどためし多し。はそ。者なり。總じて。假名の文字は。日本紀。萬葉集などに。古來用ひ來れるさだまりあり

一かたかなは。ひらがなより後につくりたる物なり。かたかなは吉備公。ひらがなは空海といへる心得がたし。片假名は。半體なり。ひらがなにも。へたうゝみは半體なり

一烏帽子は。弁の遺制なり。朝鮮より傳へたるなるべし。折風といふ事。朝鮮よりいへる名なり。詩經に。側弁といへるは。ひらを横にして。かぶりたるをいふ。今の烏帽子をかぶるやうなり

一中臣祓は。神代の詞なりといへるはさもあるべし。神代の詞は。漢語をまじへぬといふは心得がたし。母と子と犯せる罪といへり。犯すといふ詞は。犯姦の字より起ること明なり。黒身左男鹿をば。神道者ども字をつけかへて回護せり。いきのはだ、ち。しのはだ、ちといへるしも音なるをや

一くには郡なり。きみは君なり。みなみは南なり。にしは西なり。みとにとは發聲なり。日は火なり。月は土器なり。高坏。酒月もとなるべし。朝鮮に

よむも。かもをけりといふゆゑなり。又。杜をもりとよむも。社の字を誤れるなるべし。森の歌には。多くしめなはを讀めり

一てにをはといふ事は。歌書の詞にあらず。博士の家より出でたる詞なり。をことは點といふものは。論語に本づきて作り出だせり。論語は。王仁が將來したる故。諸事の元になれり。てにをはと云ひ習はせるはじめなり

一源氏物語に。五六のはらといへるは。發刺といへる琴の手なり。五六は。徽の名なり。はちとかき。破等とかきたる本あるは。琴すたれて後。しらぬ人のしたる事なり

一琵琶のてんじゆをてんじといふは。いやしき詞なりといふ人あり。かへりてあやまれるなり。轉軫とかくなり

一論議といふは。眞言。天台のなり。問答といふは。禪のなり。諸に。論議はふしありて。問對はふしなし。其はじめ。論議は。儒家の禮なり。釋尊の後にある事なり

一讀師のするは。今の世の講釋なり。講師のするは。今の世の論議なり。講釋の事を物よみといひ習はし。法華八講など。皆論議をするは。僧家に。古禮のこれるなり。異國にても。宋朝より。講の字を誤れり。吾邦の故實は。唐朝より傳へたれば。異國に勝る事もあるなり

一古の詞は。多く田舍に殘れり。都會の地には。時代のはやり詞といふ物。ひた物に出來て。ふるきは。みなかはりゆくに。田舍人は。かたくなにて。むかしをあらためぬなり。此比は。田舍人も。都に來りて。時の詞を習ひつゝ、ゆきて。田舍の詞もよきにかはりたりといふは。あしきにかはりたるなるべし

一かぶとの八幡座は。盔旗をさす所なり。何者か八幡座とはつけたりけん。かゝるくちのかしこさなり。今は大かた在五中將になりぬ

一業平天神といふは。成平といふ相撲取をまつれるなり。今は大かた在五中將になりぬ

一紫衣。香衣ゆるされたる僧を官したるといふは。文盲なる事なり。衣をゆるされたりとも。皆平僧なれども。尊めるは德をたうとぶなり。三連尊は儒家の敎なれども。僧家にのみ殘れり

古にはなかりしなり。神璽は。劒鏡の總名なり

一侍烏帽子。素襖といふ物は。古にはなき事なり。正盛が郎等をほういのものといへり。賴朝卿まなづるを落ちたまひし時。主從七人の烏帽子を折らせたるに。賴朝卿のばかりを誤りて。左折にをりたり。殘六人も折烏帽子きたりと見えたり。六位も侍なり。何とて無位のもの、かぶるのみを。侍烏帽子といふべき。くだりての世の詞と聞ゆ。今。冠つくるもの、家に。侍烏帽子にも。左折。右折のあるは。後に作れるなるべし

一曾我五郎が。元服したる所に。髮とりあげ。烏帽子きせと有りて。月額の沙汰なし。されども。西行法師は。月代の痕といふ事をかきたり。中剃の事なるにや

一軍陣に。螺をふくは角なり。角は。銅角とて。銅にても作り。又蠡角とて。ほらがひをも用ひしなり

一犬追物に。前後左右の騎射あり。古は半弓を用ひたるなり。賀茂の勅使は。履をはきながら馬にのる。古の鐙は。唐鐙なるべし。古の鞍。田舍に多し。くらつぼ廣く。前輪高く。唐鞍に似たる物なり。茂卿が幼き時。上總國の民家にて。多く見たり

一白張は。服の名なり。白丁は。人をいふなり

一平山の季繁が馬を目糟毛（メツキゲ）といふ。今。め白。め黑。め赤といふ地名あり。めぐろを妻驪とかくよしをいへれども。目驪とかく事正しかるべし。目驪。目駻。目驄。皆。名馬の名にて。其出でたる地に名づけたるなるべし。武藏野には。目がはりの馬を出せるにや

一わらはべのべかかうといふ事をするを。大鑑にはめかかうとかきたり。目をはだけて元興寺（けごぜ）をする心なるべし

一童名に。箱王。春王。鬼王などいへる。古は。三世王。五世王などの姓を賜はるは。多くは元服して賜はれるなるべし。童部の時は。いまだ。諸王なれば。何王と稱したるが。凡人の家にも移りたるならんと思はる

一社をこそとよむ事は。やしろをこそといひたるなるべし。姬古曾といふ神もあるなり。皂をけりと

一謀判とて。僞印の罪を重罪にするは。律に。謀反。皆。十惡の一つなり。謀反むほん。謀判をぼうはんと讀みわけたるを。文字をかきちがひ。義をもかきちがひて。十惡のうちといふより。重罪とはしたるなり。下手人を取るといふ事は。律に鬪毆罪をば。多くの相手の内にて。重手おはせたる人を。下手人と名付けて。疵つけるもの。死すれば其人を殺す事なるを。誤りて抵死する事にいへるなり

一花押を判といふは。判署といふ事のあるを取りちがひたるなり。判といふは。日をあけ置きて。後に書き加ふるをいふ。署は。今の名はんなり

一花押は。名を草にかきたるなり。花押の上には。姓をかく事なるを。今の世あやまりて。名乘をかくなり。庭訓など見るべし。今の世は。官人面々に私印を用ふ。官印なき故なり。古は官印あり。

一官府に一つならではなし。是を。月日の所におして。面々は花押なり。官の文書は。皆。物かき役のかく事にて。名乘ばかりを。面々に草にて。後にかくを花押といふなり

一入道したるもの丶。姓氏を名のる事は。なき事なり。入道は。僧なるゆゑ。官も僧官なり。國初の頃までは。醫師の苗字をのぞきたるなり。寛永の頃より苗字をいひいで。元祿の頃よりは。院號も苗字をつけて名のる。大かたは。玄關につめたる。文盲男に問ひつめられたるより。名乘初めたるなるべし。下部の鎗挾箱など持ちたるものも。昔は。つくばひ居たるを。元祿の頃より。皆立ちはだかりぬ。禮なき世には。下より禮を作り出で丶。上もそれに習ふぞ悲しき

一改易といふは。戸籍を改易するなり。遷徙罪の事なり。賊盜律の移郷といふより出でたり

一追放といふは。割據の世の事なり

一聟養子をして。家を相續せしむるは。頼朝卿より始まる。法家のゆるさゞる所なり

一かしらには。おどろの雪をいたゞけど。しもと見るにぞ身はひえにける」といふ歌は。笞杖の罪の事をいへり。笞杖は。荆楚にてつくるゆゑ。おどろといへるなるべし

一律。令。日本書紀に據れば。三種の神器といふ事は。

南留別志

荻生徂徠著

一名乘に純をすみ。茂をもちとよめるは音なり。朝をともとよむ事は。朝廷もおほやけと同じ意なりとて。公の字を用ひたるなるべし。公は公共の意にてともとよめるなり

一朝の字を。或はあさ。或はともとよむ事は。或は公武にてかはり。或は上下にて異なりとやらんいふは。僻事なるべし。義朝の子朝長あり。おき所上下ありともかはるまじ。公家。武家といふ事は。鎌倉以後の事なり

一義經記に。白拍子をかぞふるといふ事あり。總じて白拍子の詞は。物をかぞへならべてうたふ。水拍子に。昆明池。潁川。嚴陵瀨。筧の水。若水などつらねたるがごとし

一論語を圓珠經といへるは。五山の僧の云ひ習はしたるにやと思ひしに。曾我物語に見えたれば。博士の家の詞なるべし。圓珠の意は。皇侃が義疏の序に見えたり

一義經記に。清水にて。法華經をよみあひたるに。辨慶が甲の聲。義經の乙の聲といふ事あり。たゞ。聲の高低なりと思ひしに。其後ふるき讀經の譜を求め出たり。字ごとに律に叶へて。つけ物などもすべきやうに定め置きたる物なり。甲の音。乙の音とて二色あり。げにさらでは。滿堂の人の感に堪へかねたる事はあらじかし。此比までは。何事も風雅なる世なりけり

一ものゝふの剛臆といふ詞は。義家の奥州にて。甲乙の座を定めたるよりおこれり。甲乙人といふも是より出でたるなるべし。又樂に笛の平調を干といひて。笙のを乙と名づけたるも。干は甲の字の半體なり。三線のかん所も。此字ならん。物のこつといへる詞も。甲乙を合呼したるなり

一完をしゝと讀むは。宍の誤なり。肉の古字なり。辻は逵の草書なるべし

一おみ帶。おみ扇などいへる俗語は。はねがなをみとよみて。おんといふ事なり。陰陽師を。おんみうしとよむも。はねのひゞき。みに通ふなり

伊勢年中行事。櫻宮十七日神事。烏名子歌云。「阿古女乃曾天。也不禮天波牟陪里。於比仁也世牟。多須支仁也世牟。伊左世牟。多加乃乎仁世牟。この鷹の緒とは。和名抄には「韝。あしをとあり。日本紀には。「緡の字を用ひられたり。今の俗。いづれにもはしたなき物を。帶には短し。たすきには長しといふは。これらよりやいひなりけん。この歌は。俗諺の義とはたがひて。無益のものにせんより。おなじくは有用のものにせんといへる心ときこゆ

○手づゝ

手づゝといふ事は。手してするわざのはか〴〵しからぬをこそ。今はいふを。宇治拾遺。十四に「入道の君こそ。かゝる人はおかしきものがたりなどもするぞかし。人々わらひぬべからん物がたりし給へ。わらひてめをさまさんといひければ。入道おのれは口てづゝにて。人のわらひ給ふばかりの物がたりはえしはべらじとあり。「口てづゝといふ事。今よりはふるき世の詞ながら。いかにぞや聞ゆ。されどこれは手してする事の。手づゝなるが如く。口のはたらかぬを。形容していふ詞なるべし。俗に口不調法といふこれなり。古言には。形容の詞おほくて。今よりみれば。ことわりそむけるやうの事もあれど。今人は詞を理のまゝにいふを古人は人に思はすることをむねとするが故に。かゝる詞もあるなりけり。これらの詞は。うち見には必人あはむ(疎)べければ。ことわりおくなり

北邊隨筆終

べし。先達問答の意を釋せられざりければ。さかしらに。今おもひよれるすぢをいふなりかし

因云。先達問答の意を釋せられざりしは。かみつ世の言は。思ふが如くはいはぬならひなる事の。よにかくれたればなり。眞淵ぬし以來。わが御國言は。その意をふかく尋ぬべき事にあらずといはれけるより。その言。神のごと世にひゞきわたりて。いよ〳〵古に遠くなりにたり。おほよそ言靈の道わざと理をふかめんとていふにはあらず。人情におきて。やむことなき事にて。神書もゝはらこれをとき給ひしかのみならず。古書に徵する所も多ければなり。しかれども。大和物語の歌に「たましひはをかしき事もなかりけりよろづのものはからにぞありけるともあれば。たゞうはべにのみ人のめとまる事。はやくよりの弊にこそ

○讀書燈

古今祕苑云。「讀レ書須レ以二麻油一。無レ煙不レ損レ眼。但患二其易一レ乾。每二一解一入二桐油三兩一和レ之則難レ乾。又辟鼠耗以二鹽少許一。置二盞中一亦可。省油以二生姜一擦二盞邊一可レ不レ生二滓暈一。おほかた讀書せん人の眼を損せんは。志をむなしくすべき基なるべければ。はやく眼鏡をも用ふべく。かつこの燈法をもまねぶべくこそ

○雲宇途

伊勢國風土記。殘册之內。員辨郡餘卷云。「雲宇途郷(クモウヅノ)。公穀三百九十束三字田。假粟百九十八九三毛田。貢二竹梅桃櫻等及柴胡川芎等一。雲宇途川出二鮎鮒鯉鮠及菰苔等一洪河及二逆浪一則郷民浴レ水涉レ瀨防二急水一。千之一者及二溺死一とあり。この雲宇途。今は雲津といひつけたり。しかれども。かならず宇の字はもと音便にてそへていふにはあらざるべし。これらは必あるべき字もじを。今ははぶきていふを。前にしるせる「あとうがたり「しりうごとなどは。もとは。あとがたりしりごとなるべきを。音便にて。宇の字あるやうにいひならへるが。終に文字にさへかく事とはなりにたり。物名にまれ詞にまれ。くはしくめとどむれば。必あるべきもじのなくなり。必あるまじきもじのある事。これにかぎらずいとおほきことなり

○帶襻

なるべし。此阿多。もと咫か尺かふたつがうちの名にて。咫尺と熟する字なるが故に。咫とも尺ともかけるにこそ。されど。いまだしか訓じたる例は見及ばず。御鎮座傳記ニ云。「一面者。八百萬神等。以ニ石凝姥神ニ奉レ鑄ニ寳鏡一。是則崇ニ伊勢一大神宮也。一名。日像八咫鏡是也。八咫。古語八頭也。八頭花崎八葉形也。故名ニ八咫一也。中臺圓形座也。圓外日天八座とみゆ。此日天八座などは心ゆかねど。これをもて其形を思ふべし。予おもふに。この形をしも用ひ給へるは。八の數を表したるべし。わが大御國のいにしへは。言も物も。おほかた比喩にして。理よりとり出でたるはすくなし。これ上古をみるに肝要の心得なりかし

○貧窮問答

萬葉集。卷五に山上憶良朝臣。貧窮問答の歌あり。この歌。はじめの「風雜。雨布流欲乃。といふより「汝代者和多流といふまでは。問なり。「天地者。比呂之等伊倍杼といふより。「世間乃道といふ終までを。答なりとは。古來とき來れど。いかなる故にて。問となり答となるとも釋せられず。いとおぼつかなき事なり。されば思ふに。其問の方は。「和禮欲利母貧人乃。父母波飢寒良牟。妻子等波。乞氏泣良牟とあるをみれば。これは父母妻子もなき。孤獨の貧人のうへなり。答のかたには。「父母波。枕乃可多爾。妻子等波。足乃方爾。圍居而。憂吟とあるをみれば。これは父母妻子ある貧人のうへなり。されば孤獨なる貧人と。父母妻子ある貧人との問答にて。このふたすぢをむかへて問答としもせられたるは。大かた貧窮はいと／＼くるしき物なるがうちに。父母妻子あるとなきとをむかへておもへば。孤獨なるはくるしとはいひながら。たゞおのれのみ堪へなばさてありぬべし。父母妻子がくるしむらんをみんは。おのれひとりがくるしさには。いといたうまさるべしとの心をいふにて。所詮は。父母妻子のくるしむらんは。くるしきが中のくるしさなれば。あらかじめこれをわきまへて。さるくるしさに及ばざらんやうに。心を用ひよとの心をば。かくことならびて。自問自答とせられたるなり。さるは。たゞおのが心やりによまれたるにはあらじ。誰かはしらねど。かゝるあらましもなき人ありて。それをいさめんが爲によまれつるなる

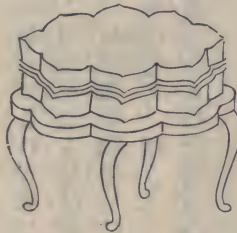
にあらず。其ありかの。そこともしられず。おぼつかなきさまをいふ詞なりとしるべし

○八花前鏡

類聚雑要抄に。古鏡の圖ありて。八花前(ヤツハナサキ)とあり。かの日神の御像鏡。八頭花埼(ヤタハナサキ)なるよし。委しく宣長ぬしが。古事記傳に云るさ

類聚雑要抄に出たる古鏡の圖

鏡裏に緒付様

鏡筥

れたるを見るべし。ことさらに鑄られたる形にはあらで。いにしへは常ありけるかたちなりしにこそ。義經記をみしに辨慶が。まことの修験者とあざむきおほせし時。女かたより引出物せし所に。此かたちなる鏡を出し、事みゆ。これらをもても。神鏡にかぎれる形にあらざる事しるべし。もし神鏡をはじめなりとせば。つねに其形を用ひん事。かしこきわざなるべきをや。雑要抄には「鏡裏緒付様。凡緒長五尺五寸。總三寸五分。料糸一両弘一寸二分。紐平緒定徑一尺。裏文鴛鴦唐草とみゆ。いづれもかゝる制にぞ。あるらし。古事記には「八尺(ヤタノ)

鏡臺に用鏡形

鏡(カヾミ)とあり神代巻には「八咫鏡(ヤタノカヾミ)とあり此咫尺は。御鏡のおほきさをいへるやうなれど。也多といふ名にあたれる字にはあらざるべし。神武紀に。「八咫烏(ヤタガラス)あり。古事紀上巻に「八田間大室(ヤタマノオホムロ)などあるにおなじく。也多は。八阿多にて。阿多は。其花前(ハナサキ)なるかたちをいふ

虛にしておもひうべきなり

因云。こゝに引きたる第二の歌に。まがきを。前垣とかゝれたるを思へば。まがきは。前垣の義にや。同集。卷十四に「久敞胡之爾云々とよめるに。「或本歌曰。「宇麻勢胡之云々。ともあるを思ふに。宇麻勢は。馬せきの義にて。馬屋に。馬のえ出でぬやうにゆひたる垣なり。ませといふ卽是なり。されば庭などに。つねゆふ垣も。その馬塞に似たるが故に。それをもと、して。まがきといふも。宇麻勢垣を略じたるにやともおぼし

○伯勞鳥之草具吉

萬葉集。卷ノ四「春日山。霞多奈引。情具久。照月夜爾。獨鴨念。また同卷「情八十一。所念可聞。春霞。輕引時二。事之通者。この具久とは。ふくむ心なりと。契冲あざり釋せられ。後學みな一定なり。これによりておもふに。古事記ノ上卷に。多邇具久あり。祝詞には。」谷蟆とかけり。萬葉集にも例あり。同集。卷ノ十に「春之在者。伯勞之草具吉。雖不所見。吾者見將遣。君之當婆。この草具吉。袖中抄に。草くゞりなりと釋せられたり。奥義抄には。草の莖をいふといへるはうけがたし。谷具久も。これに同じく。谷くゞりの義なりと。宣長ぬしはいへり。しかるに。潛は。下のくを濁る語なるに。上を濁り下を濁らざる事。をだしからず。すべて上につゞく語は。必濁る例なれば。上の具はさもあるべけれど。しからば下をも濁りて。具具といふべきを。下は清音の字を用ひられたるをや。さればこれは。くゞるの義にはあらで。かの情具久の具久なる事あきらかなり。具吉は。久をかよはせて體になせる詞なり。この故に谷具久は。蝦蟆の。谷にこもりをる物なるよりの名なるべし。草具吉は。伯勞鳥の。草にこもりをるをいふなるべし。かく心うる時は。ともに心もかなひ詞の條理。清濁の字も正しきをや。萬葉集。卷十九に「長歌上下略」喧霍公鳥。立久久等。羽觸爾知良須。藤浪乃云々と。あるは。上下ともに清音を用ひられたれども。下も清音の字を用ひたれば。これまた潛るにはあらざるべし。神代卷に。「溟涬を。くゝもると訓じたる。卽この具久の心なり。（みな人。これをば久具毛流とよみつけたれど。下をも濁るまじきなり。今俗に。くゝむなどいふは。すなはちこれなり。）萬葉集。卷九に「羽裹とよめるも同じ詞にて。くはしくいはゞ。たゞ含といふばかりの心

島下島といふ名も。宇治橋の上下なりし故の名にやと。かた〳〵より所ありておぼゆ

因云。橋本の西。葛葉の下に。上島下島といふ二村あり。うたがふらくは。いにしへ、山崎橋の上下にありけるか。山崎のわたりは。すべて豐太閤の時に。いたくかはりしかば。此の二村も。所はうつりて。名のみ傳はりたるにや

○詞の遠近

萬葉集。卷四。大伴家持。紀女郎におくられける歌五首あり「吾妹子之。屋戸乃籬乎。見爾往者。蓋從門將返却可聞「打妙爾。前垣乃酢堅。欲見。將行常云哉。君乎見爾許曾「板蓋之。黑木之屋根者。山近之。明日取而。持將參來「黑樹取。草毛刈乍。仕目利。勤和氣登。將譽十方不在登母一云。仕「野干玉能昨夜者令還。今夜左倍。吾乎還莫路之長手呼。この五首。第一の歌は。まがきをみにゆくになしふせてよまれたる。いとめでたきを。第二の歌。それをことわりて。まがきを見にとはいへど。まことは君を見にゆくなりとよまれし。いかなるをさなさぞや。籬を見にはあらじ。われを見にならんと。紀女郎の。思ひとりてこそめでたけれ。第一の歌ばかりにては。もし此情の通ずまじくやとあやぶまれける事。言をつかさどり給ふ神の靈の妙用をうたがふにて。中昔以後のてぶりともいふべし。これ第一第二の歌。此道の本意のありなし。詞のつけざま。近きと遠きとのけぢめを。おもひわくるに便ある歌なれば。よくめをとゞめて味ふべし。第三第四は。屋根のうへにのがれはてられしかばいとめでたし。第五はまた直言なり。大かた直言をえまぬかれざりし歌は。これよりふるき人にも。なほたま〳〵はありて。更に家持ぬしにかぎれる事にはあらねど。此京にちかき人は。おのづから其けぢめもみゆるなりけり。上古の人すら。十にひとつは直言をえまぬかれぬがまじるも。もと倒語はたやすからぬ道なるがうへに。人にとくその情を心得させまほしかりし時の自然なるべし。今人は。たゞ詞の情にちかくて。うちつけに心えらるゝをよしと思へれど。しからばいかでか。古人常に。詞を情にとほざけん。人をしてとく心得させんと思ふ心甚しき時は。おのづから詞は情に近つくべし。この第一第二の歌をもて。詞の遠近。いづれかめでたからんと。心を

などみえたる。をさ〳〵しといふ詞。古説紛々たり。予按ずるに。仁徳紀に。八田皇女をめしいれ給はんことを。皇后におほせられける大御歌に。「于磨臂苫能。多菟屢虚等太氏。于瑳由豆流。多曳磨菟餓務珥。奈羅陪氏毛餓望とよませ給へる。うさゆつるは。神功紀に。「時武内宿禰。令二三軍一令二推結一。因以令曰。各儲弦藏二髮中一云々。古事記。同條に「爾自二髮ノ中一採二出設弦一。一名云二宇佐由豆留一とあるこれなり。今かへ弦といふ。かの仁徳帝の御製は。八田皇女を。儲弦になずらへ給へるにて。「たゆまつがんにとは。もし弦の絕間あらば繼んにの心なり。此儲弦よりおもふに。字と乎は通音なれば。をさ〳〵しのをさはこれなるべし。主とする物にはあらねど。やがて其主物にもかはらぬばかりなるさまを。をさ〳〵しとはいふとおぼしきなり。萬葉集卷十四に「等夜乃野爾。乎佐藝禰良波里。乎佐乎左毛。禰奈敝古由惠爾。波伴爾許呂波要といふ歌あり。これ後世をさ〳〵といふ詞のおやにて。今いふ所の義もてみれば。いつこも〳〵よくかなふこゝちす。前にいへるがごとく。いづれも別に主とする物あるになして心うれば。其意明なるべきなり。

〇宇治橋

奇遊談といふものに。明和七年五月の比。旱して。井などもかれたりしに。よど川も舟かよひがたくなり。宇治よりの運送もたえければ。土人相議して。宇治川の。上島下島兩村の前を掘りけるに。二三尺ばかり底に。大石を敷きならべてありければ。そこはさし置きて。又一二丈ばかりかたへを掘りたりけるに。なほ同じごと。大石を敷きならべたりしかば。ちから及ばずしてやみぬ。いかなる世に。かゝる敷石はせしにかとあやしみあへりとみえたり。予按ずるに。今の豊後橋は。もはら大和にかよふ爲なれど。近き世にかけたる橋にて。むかしは。宇治橋よりやまとへはかよひしなり。しかるに。今の宇治橋は。東方により過ぎて。大和へのかよひぢには。いと不便なれは。古は。必。川下にこそありけめと。かねておもひ置きつるに。此奇遊談をみて。かの敷石は。いにしへの宇治橋の下にしけりし石なる事をしりぬ。大和へのかよひも。こゝにありてこそ宜しくもおぼゆれば。これうつなく。宇治橋の古跡なり。上

の密教に混じたる事。これにかぎらずいと多くみゆ。それはそれ。これはこれにてあらまほしくぞおぼゆるや

○さをとゝし

萬葉集。巻四に「前年之(ヲトヽシノ)。先年從(サキツトシヨリ)。至今年(コトシマデ)。戀跡奈何(コフレドナゾ)毛(モ)。妹爾相難(イモニアヒガタキ)。竹取物語には。「さをとゝしの。きさらぎの。とをかころに。なにはより舟にのりて云々。とあり。さをとゝしは。即さきのをとゝしといふをはぶける詞にて。「をとゝしの。さきつ年とよめるに同じ詞なり。今も。をとゝし。さをとゝしといふ。みなふるくいひける詞どもなりけり

○盃中蛇

晋書云「樂廣字彦輔。○常有ニ親客一。久濶不ニ復來一廣問ニ其故一答云。前在レ坐蒙レ賜レ酒。方レ飲忽見ニ盃中有レ蛇。意甚惡レ之。既飲而疾。于レ時河南聽事。壁上有ニ角弓一。漆畫作レ蛇廣意盃中蛇卽角弓影也。復置ニ酒於前處一謂レ客曰。盃中復有レ所レ見不。答曰。所レ見如レ初。廣乃告ニ其所以一客豁然意解。沈痾頓愈とあるに。いとよく似たる事あり。有馬良及といひしは。近世の名醫なり。あるやごとなき所に。物に汲みおきたりし水を。夜陰にのませ給ひしが。其あした。かの水を御覽じけるに。あかく小さき虫。おほくわきてありしかば。たちまち御はらいたみて。たへかたうし給ひしに。良及。丸劑をたてまつり。箱して。其虫のくだらんを試みさせ給へと申されしに。げに其言の如く。赤くちひさき虫。いと多く出でたりしを。御覽ぜさせたりければ。御はらすなはち愈えぬとぞ。そのたてまつられし丸劑。まことは赤き糸をきざみて。薬にまじへてたてまつられけりとなん。かの盃中の蛇とは事たがひたれど。其やまひのおこれるも愈たるも。かよひてぞおぼゆる

○乎佐乎佐

古今集。長歌に「とのべもる身の。みかきもり。をさ〳〵しくも。おもほえず。源氏物語。帚木巻に「よるひる。學問をもあそびをも。もろ共にして。をさ〳〵たちおくれず。又同巻に「つれ〴〵とふりくらして。しめやかなるよひの雨に。殿上にも。をさ〳〵人すくなにて云々。蜻蛉日記。巻一「例の人。いとかしこし。をさ〳〵しきやうにも聞えんこそよからめとて。さるべき人して。あるべきにか、せてやりつ

因云。同紀に。采女といふ姓あり。其おこる所。かならず采女の事にあづかれる姓なるべし

○七子鞘

古今六帖に「なゝつごのさやのくち〳〵つどひつゝわれをかたなにさしてゆくなりといふ歌あり。なゝつごとは神功紀に。「七枝刀（ナヽサヤノカタナ）といふものあり。七子は。刀のうへにいひ。七さやは。鞘のうへにいふにて同物なるべし。其かたちを思ふに。おやとする所ひと所ありて。それにおほくの子のつきて。股なしたる刀なるが故に。「なゝつ子とはいふなるべし。なゝつとはいへども。必七股あるにもかぎらざるべし。「七車「七日「七ばかりなどよめる。いつれもたゞ。數多かるを大かたにいへるたぐひなるべしとぞおぼしき。此歌の心は。世人くち〳〵にわが名をさす事よと。ひろくいひさわがるゝをなげきし心なり。同じ六帖に。「あふ事のかたなさしたるなゝつこのさやかに人の戀ひらるゝ哉。ともよめり。萬葉集。卷四に。「人事（ヒトコト）。繁哉君乎（シゲミヤキミヲ）。二鞘之（フタサヤノ）。家乎隔而（イヘヲヘダテヽ）。戀乍（コヒツヽ）將坐（ヲラム）。これは二股なる刀なるべしと。契沖あざりはいへり。また。古事記の歌に「もろさやとあるも。二鞘と同物なるべし。かみつよは。これにかぎらず。さま〴〵なる刀ありけらし。神書に「頭推之太刀（カブツチノタチ）あり。神武紀にもみえたり。かくいく股にもつくれる刀。其製みまほしきものなり

○金刀銀人

延喜式四時祭式大祓云。「金銀裝橫刀二口。金銀塗人像。各二枚。已上。東西文部所ㇾ預とありて。六月晦日の夕。文部。御階のもとにまゐりて。中臣の女に付す。天皇御息をかけ給ひて。これを賜ふよしみえたり。すなはち大祓の祝詞の奥につきたる。文部が詞のうちにも。「捧ニ銀人ニ請ㇾ除ニ禍災ㇾ。捧ニ金刀ㇾ。請ㇾ延ニ帝祚ㇾとみえたり。（銀人に金人をふくめ。金刀に銀刀をかねたるなるべしと。眞淵ぬし。祝詞考にいへり）これは神書に。速須佐之男命に千座置戸をおほせ給ふといふ事ある遺式なり。しかるに契沖阿闍梨。代匠記之中に。密教に。其人の息災增益等の法を修するに。其人の代りに。衣服を置く事あり。それには甚深の習ありて。衣服すなはち。其人なりとかけり。かの千座置戸は。この密教の意とはいたくたがひて。勝佐備をはらへんが爲なれば。さる修法のためにはあらず。其旨趣はこゝにときつくしがたし。されど今の世には。神道

めるは多かるをもて思へば。かの巻十八なる歌は。家持の歌にて。其頃は。詞もや、うつれる事。これにかぎらずおほかれば。ふるくは「としのはにとのみいひつけたるをば。しかよまれけるにやともおぼし（師輔公集に「はる〳〵ことに」といふ詞ありこの年のはごとにと同じいひざまなり）

○采女

續日本紀。文武帝。大寶二年四月壬子。令㆘命㆓筑紫七國及越後國㆒簡㆓點采女兵衞㆒貢㆖之。但陸奥國勿ㇾ貢云々。此兵衞などはさもありなん。女をば。遠き國々より貢かしめ給ひし事。心得がたき事なり。かれおもふに。何事も年經ては其はじめの意趣はうしなはれて。たゞ其儀其式のみ殘る事おほきならひなれば。此采女も。たゞさる御さだめとのみなりはてつらめど。其はじめを思へば。必故なくてはあるべからず。もし。其國々の歸順し奉れる信をたてしめんが爲に。采女はたてまつらしめ給ひ。おほやけも。これをもて。大御心を安くし給ひしにはあらじか。女は大かた。遠き國にはいてたつべきこゝちもなき物にて。其おやはらからうからも。遠く放ちてはやるべきそらもあるまじき物なれば。その國人の信をみたまはんがためには。げにこれにしくものあらざるべし。萬葉集に。葛城王の陸奥にくだられける時。歌よみたりし前采女は。かぎりはて、歸りたるか。又は罪ありてかへりたるか。それはしらねど。これをもてみれば。もとつ國にかへしもし給ひ。又代りて他の女をたてまつらしめもし給ひしなるべし。かたちよき聞えありて。獻らしめ給へし事ともおぼえず。たゞめしつかはれん爲ばかりならば。ゐなか人は。宮中にはふさはしからじ。かつ采女兵衞とならべられたるも。たゞならず。又貢の字も。よしありげにみゆれば。これらを思ひて。わが此杜撰をも察すべし。これとはいたくたがへる事なれども。王昭君を胡にあたへられしも。其情は。これになずらふべき事なり。この事まことのをしはかりにて。いとさかしらなる事ながら。もし今いふ所の故ならずば。必。別に旨趣ありげなる事なり。よゝの采女のうち。たま〳〵は幸せられたるもみゆれど。それは。まゐりてのうへの事にて采女の本意にはあらざるべし。今いふ所に混じおもふまじきなり。其外。位を授け。姓を給ひし事など。續日本紀等に。いと多くみゆ

たる後なる事しるし。かの中河の家のさま。目にみるか如く。さま〴〵しくかゝれたれば。かくたえたりし後とは。誰も思はじとてしるしおくなり。中河は。京極にありしとぞ。かつら川を。西川といふ。鴨川は東にありて。其中間なるが故の名なるべし。源氏物語。床夏ノ巻に「にし川よりたてまつれるあゆ。近き川の石ふしやうのもの。おまへにてゝうじてまゐらす。とある。この近き川とは。かも河の事なるべし

○せめて

せめてといふ詞。中昔までは。たゞ迫りてといふ心にのみ用ひたり。古今集に「いとせめて戀しき時はぬばたまのよるの衣をかへしてぞきる。其外。例ひくにいとまあらず。しかるに其後。今俗言にいふに同じきせめてをば。歌にもよむことゝなりぬ。げに事からによりては。いはまほしくおぼゆる時々もある詞なるを。いかでかいにしへ人は。此詞なくて事もかゝれざりしぞと心得がたくおぼえしに。萬葉集。巻二に「妹之家毛。續而見麻思乎。山跡有。大島嶺爾家母有猿尾といふ歌をみて。はじめておもひしりぬるは。この妹が家もといふ毛もじなり。これ即後世のせめての心なるなり。其故は。妹がかほのみまほしきが本意なれど。それかなはねば。せめて其家なりともつきて見ましをとの心なればなり。これによりて思へば。ふるくはありて。後世はなく。後世はありて。ふるくはなき詞ども多かるも。よくたづねなば。おもひよらぬ詞もて。其用をなしたる事。たがひにあるべしとぞおぼゆる。なほ精しくたづぬべきなり

○等之の波

としのはにといふ詞。萬葉集。巻十九「毎年爾。來喧毛能由惠といふ歌に。自注せられて。「毎年謂二之一等之乃波」とあり。しかるに。わが友隆璉。「としのはごとにとよめりけるをみて。同じわが友なる友助。しかもよむかとゝひしに。心得ずと答へたりしが。其後萬葉集。巻十八に「往更。年能波其登爾云々とよめるをみいでたりとて。友助予に告げたりき。さればもと「としのはごとにといふべきを。「年のはにとのみよみて。毎年の心に用ひたる物にや。または「年のはごとにとよめるはすくなく。「年のはにとよ

とも。また。史記韓非傳にも。衞の珍子瑕を。靈帝愛せられしに。其寵にほこり。君の車に乘り。くらひ餘し、。桃を。帝に獻れり。のち寵おとろへて。此二事を罪として。誅せられし事あり。わが御國にても。ふるくありける事にや。神樂歌に。「本大宮乃。知比左小舍人。手々仁也。手々仁也。王奈良婆。手々仁也。末玉奈羅婆。比留波手仁止里也。夜留波左禰天牟。天仁也。與留波左禰天牟。天仁也。また。拾遺集に。「山ぶしも野ぶしもかくてこゝろみつ今はとねりが閨ぞゆかしき。又同集に。「あまた見しとよのあかりのもろ人の君しも物を思はするかな。などある。みな男色なるべし

○冠幘之痕

三代實錄云。「或臨戒日纔下官符新剃頭髮初着袈裟。冠幘之痕。頭額猶存云々とみゆ。この冠幘之痕といふ事。いにしへは。冠に緒もなく。かつ今の如くかたく製したるものにあらねば。頭額にくひ入るべきものにあらず。されば逆上などする人は。冠下をば剃りなどしたりしが。法師になりて。頭髮を剃る時。其はやく剃りたりし冠下のあとの。きはたちてみゆるをいふなるべしとおもひつるよしを。原在明ぬしにかたれりけるに。古き書に。冠をぬき置きて寢たる人かきたるに。其冠下剃りたりしをみし事あれば。其冠幘の痕は。必しかなるべしとかたられき。其圖は。いつの比のものとはしらねど。もしこの冠幘之痕とあるも。剃りたる痕の事ならば。いとふるくせし事なるべし。鎌倉前後には。今のさまにひとしく剃れり。兜下の蒸さるかためなりといふ説も聞ゆれど。これによらば。冠下をそれりし遺風とこそおぼゆれ

○中河

中河は。源氏物語。空蟬卷に出でたる。人皆しれり。しかるに。安法々師集に。「なか川のたえたりけるあとをみて。「中川の水たえにけりすゑのよはあきをもまたでかれやしにけるとあり。この大德は。俗名を趁といひて。河原院源大納言昇卿の孫なり。兼澄集に「かはらの院に。あほうかもとにまかりしに云々。又。「河原のゐんに。あんほうはうにて云々。などみえたり。されば天暦天德などの頃には。はやたえたるなるべし。源氏物語か、れる比は。中河はたえに

何乃宇斯と同等のひがごとなるべし。又萬葉集。卷十八「多々佐爾毛。可爾母與己佐母。夜都故等曾。安禮波安利家流。奴之能等能度爾。とあるも。ぬしとは。詳をはぶけるにて。卷五の歌に同じとしるべし

○をとにの別

古今集。別部に「あふ坂にて人をわかれける時によめる「人をわかれける時によみける「をとは山のほとりにて。人をわかるとてよめる。などありて。人にとかけるはなし。これを思ふに。をとしもいふは。わかれまうき人ながら。やむことなくわかる丶情をおもはせて用ひたる脚結なり。同集同部に「しがの山越にて。いし井のもとにてものいひける人のわかれけるをりによめるとかけるは。其人のをしげもみえずわかれいにし心をのとはいふなり其歌には「あかでも人にわかれぬるかな。とよめるも。ひとへに其わかいにし人の情なさをおもふ心をみせて。にとよめるなれば。つねはをとのみかきて。にとか丶ぬはことわりなる事なり。されば。人の心もとめずわかる丶よしをいはゞ。にといふべし。わかれまうきを別る丶よしをいはゞ。をとかくべき事なりとぞおぼゆる。此外に。「こしへまかりける人によみてつかはしける「あつまのかたへまかりける人によみてつかはしける。などかけるは。今別に臨みて手をわかつ時の歌にはあらで。わかれんとするほど其人の家につかはせるが。または送りにはえゆかで。歌のみやりたるにもあるべし。古人脚結を用ひし精微おもふべし

○かはつるみ

宇治拾遺に「かはつるみといふ事あり。これは男色の事なるべし。かはとは。厠といふ名をおもふに。屎まる事をいふめれば。それよりうつして。尻の事に形容せるなるべし。つるむとは。今は禽獸などの交はるをいふに同じ。この本文。法師の話なれば。男色の名らしくおぼゆるなり。これを手銃のこと丶いふ人もあれど。さにはあらじ。ある所にひめらる丶男色の繪卷物にも。悉く法師の男色をかけるをや。男色の事。から國にもふるくありしなり。後漢書佞幸傳云「董賢字聖卿。哀帝立拜二黃門郎一。寵愛日甚。常與レ上同二臥起一。嘗晝寢。偏藉二上褏一。上欲レ起賢未レ覺。不二覺欲レ動レ賢乃斷レ褏而起。其恩愛至レ此云々。

へもじにもじの用。かばかりの別ある物なれば。さる事にまとはずして用ひわくべし

○賀理

何がりといふ詞。萬葉集にも多くよめり。其後もまた多し。文にも歌にも用ひたり。これは。それが許へといふ心なりとは。先達もみなとかれたれど。賀理といふ所謂はとかれたるをみず。おのれふと思ふに。これは之在（ガアリ）の阿のはぶかりたる詞なるべし。大かた經緯の伊緯は。用の詞を體にする義あり。いはゆゑひかるといふをひかりといひ。おもふといふをおもひといふがごとし。されば阿理とは。阿留を體にいへる詞にて。すなはち在處（アリカ）といふほどの義となるがゆゑに。「妹がりなどいふなり。妹が在處といふ心となるなり。伊勢物語に。「いますがりける。「いまそがりけるなどいふも。いますがありけるといふ心なれば。これらをも思ひ合はすべし。（此すもそも。濁るべからず。がは。いづれもにごりてよむべし）しかるに。後には「何のがりと用ひたるあり。蜻蛉日記に。兼家公「いつくともわかぬ心はそへたれどこたみはさきにみぬ人のがり。枕草紙にも「人のがりやりたるに云々。などみゆるこれなり。もと賀理の賀は。すなはち之の心なれば。乃我理とは必いふまじき理なり。ふるくは。何賀理とのみいひて。何乃賀利とはいはぬにてさとるべし。なほこれになづらふべき事あり。主（ヌシ）といふ詞。もと乃宇斯をつゞむれば。乃宇は奴となるがゆゑに。乃といはゞ。必宇斯といふべく。奴斯といはゞ。必乃もじは置くまじきよし。宣長ぬし。古事記傳。天之御中主神の下にくはしく說きおかれたり。げに神書をはじめ。乃といはざれば。必奴斯とあり。乃といへば。かならず宇斯とありて。其例正し。このうしの卓見といふべし。萬葉集。巻五に「陀我農斯能（アカヌシノ） 美多麻多麻比氏（ミタマタマヒテ）。とよめる歌をもて。この宣長ぬしが說うけがたしと。略解中に。千蔭ぬしはいはれたれど。これは。憶良朝臣が。大伴卿にしめされたる歌にて。「あが旅人ぬしのといふべき。其諱をはぶきてよまれたるなれば。後世。何のぬしと。諱をさしていふにはことなり。さればこれなほ例にたかはざるを。宣長ぬしが說を破せられしは。麁なりといふべし。かく後世。何乃奴斯とも。また何宇斯ともいふは誤なる事。宣長ぬしが發明にて決すべきなり。されば此何乃賀利といふ事。

○本のまゝ

誤字。衍文。あるひは錯亂。脫字などあるに。かたはらに。本のまゝとかく事。ふるくありける事なり。堤中納言物語に「ほんにもほんのまゝとありと見えたり

○うしろめたなき

堀川院御時百首に。國信「ふりかゝる雫に花やたぐふらんうしろめたなきよはの雨かな。辨乳母集に。「石上ふるの社をわするれ ばうしろめたなき三わの山かな。なほ例あり。此詞。ふるくはうしろめたき。又はうしろめたなどやうにのみいへるを。中季よりかくよみなりぬ。これは後方痛(ウシロヘイタキ)といふ伊をはぶきたるなれば。なもじくはゝるべき理なき事なり。すべて中頃よりは。かゝる事多ければ。心すべきなり。季吟ぬしが。枕草紙春曙抄に。「うしろべたきとあり。めとかくは。このへのうつりたるなり。いはゆる。射目。かんたちめなどこれなり。同書には。これにかきらず。かいまみを。「かいはみとあり。さる古本ありてかゝれたるなるべし。源兼澄集に。「かさきよりもりし玉水手もたゆくいはひし袖のうしろめたなさといふ歌。異本には「うしろめたさよとあり。これは。花山院の御代の頃の人なれば。中昔の末なり。さればこの異本のかた正しきにてやありけん。または。其頃よりあやまりそめしにや

○にとへの別

古今集に「僧正遍昭がもとに。奈良へまかりける時云々。とかける。このにもじへもじ。所によりては。いつれをかと置きわづらはるゝ脚結なり。此端作。このふたつを辨へんに究竟なり。もとには。所をすゑてさす心あり。へもじは。方角をたてゝさす心あり。されば僧正遍昭がもとにとは。其遍昭が在處をさしたるなり。奈良へとは。遍昭が在處の方角をさせるなり。これ遍昭が在處にいたらんの志にて。奈良の方へゆくとの心なり。よく思ひわくべし。にもじは。其例ひくに及ばず。へは。萬葉集に「いざ子どもやまとへはやく。古今集に「北へゆく雁ぞ鳴くなる。などよめるを。いふがひなき人は。には雅言。へは俗言のやうに思ひためり。げに今は。にといふべき所をもへとのみいふなり。かへりてゐなかには。へともにともつねいふは。古言の傳はれるなり。

へてあはざらましを。などよめるは。かみつ世のもちひざまにすこしはたかひたれど。猶さすがに法則はやぶられざりき。後世は。たゞ老といふ事を。老らくといふとや心えたりけん。委しくいはゞ。萬葉集に。よめるがごとく。用の詞としてよむべきを。中昔より。おいらくのなど。體になしてよめるは。はたらかせたるものなり。かくはたらかせて體の詞としけるより。うつりて。後世には。かくあやまれるなるべし。すべてはたらかせて用ふる事は。其人のちからにまかすべき事なれど。もとのすぢをふみたかへんは。轉用とはいふべからずかし。もと此詞。おいらくといふよりして。詞の條理にたがひゆきたるなりけり。これはおゆらくといはでは。らくに受くる所たゞしからぬなり。由といふを。伊にかよはせば。體の詞となること。經緯の常なり。されば思ふにかみつよの如く。おゆらくとのみよみつけてあらば。後世にても。かくまではあやまらじ。おいとよみけるより。つひにかく體の詞とはおもひはてぬるにこそといとくちをし。このあやまり。猶長能集にも。予が藏本二本あるがうちなり「もろともにこそさふらひしおいらくも人には見えずなりもてぞゆくと見えたり

因云。前に引きたる歌のかけし車とは。孝經注に。「七十致仕。懸二其所一レ仕之車一。とあるこれなり。續日本紀。卷三十一。光仁天皇寶龜元年九月。右大臣從二位兼中衛大將勳二等吉備朝臣眞備。上啓して骸骨を乞ふ。其詔報にいはく。「昨省二來表一。即知二告歸一聖忌未レ周。懸レ車何早云々とあるもこれなり

○灸

隆信集に。「かやうにいひかはすほどに。例ならぬ事ありて。やいとをなどしたるに。又この女も。ひるくふよしを聞きていひやりし。此女とは。宜秋門院丹後なり。此前に贈答のうた數首あり。こゝに略す「朝露のひるまはいつぞあきかぜによもぎのあともおもひみだれぬ。返し。「みだるらんよもぎのあとのくるしさに露のひるまもいつとしられず。ひるくふといふ事は。ものにも所々みえ。源氏物語に。「ごくねちのそうやくをぶくして。といひし博士のむすめをかける所にもあるは。人もよくしれる事なり。灸のことは。さしも草などよめるは多かれどよもぎとよめるはめづらしく。かつやいと、いふ名も。や、ふるくいへりし事。これにて思ふべし

いといやしげなれば。論ふにたらず。あやめとは。あやしめといふ略語なるべければ。とりすつべくもあらぬ詞なれど。この今樣におもひあはすれば。げにこの詞にもかぎらぬ事なるべし。堀川院御時百首に。隆源「軒ちかきはなたちばなのうつり香につゝまぬ袖も人ぞあやむるともみえたり

○柳の花

催馬樂大路「放保々知爾。曾比天乃保禮留。安乎也支加波名也。安乎也支加波名也。安乎也支加。之名比乎美禮波。伊末左加利名利。伊末左可利奈利也。柳のはなをよめる事。この歌より外にもなほあり。おほかた古人は。情のためには。何物となくつねによみて。其物のいうなる優ならぬにもよらず。げにおもひよせられなば。なにをかはよまざらん。後世は古人のよみおきたらん物ならではよまぬはいかにぞや。古人とても。其情によらざる物は。よみ殘されけん事いふもさらなり。この宇宙の間の物をば。いかでか古人もよみつくすべき。名所なども猶しかり。其をさなさをさとるべし。小堀遠州の。古器も。猶そのいにしへは新らしとをしへられたる。格言なりや

○老らく

承和二年三月十九日。於白川寶莊嚴院清輔朝臣六十九尙齒會をおこなはれし。其人々は。敦頼八十三 顯廣七十八成仲七十四永範七十一賴政六十九維光六十三 清輔朝臣をあはせて七叟なりき。おの／＼歌あり。垣下九人。これまた各歌あり。そが中に。太宰大貳。重家「おいらくのとしたか人のうちむれていとゞよはひをのぶるけふかも。皇后宮亮。季經「今さらにかけし車をひきつれてなゝのおいらく心をぞやる。學生。藤原尹範「おいらくの人のなみゐるこのもとはかしらの雪に花ぞまがへるなどよめる老らくといふ詞。いかに心えられけるにか。悉くあやまれり。もと老らくとは。らくは。みらく戀らくいへらくかたらくなどいふらくなるを。いとおぼつかなきよみざまなり。其時の七叟は。悉く歌に名だゝる人々なりしに。いかでかこれらをみすぐされけん。萬葉集に巻十三「天有哉。月日如。吾思有。公之日異。老落惜毛。かくよめるが此詞の正しきにて。古今集に「さくら花ちりかひくもれ老らくのこんといふなる道まがふがに。又「おいらくのこんとしりせば門さしてなしとこた

ん事かたくなりにたれ。されどこの爲世卿のをしへ。まづかくいひて。やう〳〵よみのぼらしめんとの事なるべけれど。たとひ初學たりとも其志を縮めしめば。終身長ぜる時なかるべし。から人も。「先入爲主とはいはずや。初學の人は。もとよりかくとりちゞめずとも。其わざの拙かるべき事いふも更なれば。たゞかゝけさやかにはいはずしてこそ導くべけれ。されば今かくいふは。此卿の。三卿のちからをわかちたまへりしを論ふにはあらず。あらはにかくときしめし給へるがくちをしければはり。爲家卿は。同じ井蛙抄に。「民部卿入道申されしは。歌をば一橋をわたるやうによむべし。左へも右へもおちぬやうに斟酌すべきなり。心のまゝによむべからず。「又被申しは。塔をくむやうによむ。塔は上よりくむ事なし。地盤よりくみあぐるやうに。下句よりよむなりと云々。かく心得てよみ給ひし。もはら歌をよみ損ずまじきかまへにて。これらひとへに。歌合の弊なる事しるきをや

○大巧

老子云。「大巧若レ拙。大辯若レ訥とあるをおもふに。かみつよの歌どもは。末の世よりみれば。詞つくりもいと拙きがごとし。しかれども。それ大巧なる事をしる人すくなし。これこそ古人もよみのこしつれ。かくこそ古人もよまざりつれなど思ふはひがことにて。これはよむべからず。かくはよむべからずとてこそ。古人はよまざりけめ。もし老子にわが上つよの歌をみせなば。これこそ大巧なれとはいはめとぞおぼゆる。壬二集に。「しぐれゆく空こそあらめさをしかの上毛の星もかつくもりつゝ。などやうの歌をば。後世巧なる歌といふは。この大巧にくらべてはいかゞあらん

○あやむる

西行上人御裳濯川歌合の中に。「あやめつゝ人しるとてもいかゞせんしのびはつべきたもとならねば。判云。しのびはつべきなどいへる末の句はいとをかし。はじめの五文字や。いかにぞ聞ゆらんとみえたり。古今著聞集に出せる今樣に。「心のうちにはしのべども色にいでけり。わが戀はものやおもふと。みる人の。あやめていかにと。とふまでに。といふ歌あり。すべてかうやうの今樣は。いとのちの世の物とおぼえて。

は其詞活きたり。活とは。言をつかさどり給ふ神の靈(ミタマ)をいかせばなり。死とは。其言靈をころせばなり。かの神武紀の妖氣といふも。たすくべき神靈の道を塞くより。おのづから妖氣にあたるべきをいふなりとしるべし。たとへば。古今集に「あふ坂のゆふつけ鳥もわがごとく人やこひしきねのみなくらん。とよめるは。鳥のなくを主とし。わかねになくを却りて客とせるなり。これを言靈のたすけは。きく人。これ必客は主ならんとおもひとるべしとの詞つくりなり。拾遺集に「うらやまし朝日にあたる白露をわがみと今はなすよしもがなどよめるは。人つらけれど。うらむべからねば。今はしなまほしと。おもはぬ方をいへるにて。これを言靈のたすけは。人あはれまんとの詞つくりなり。其代すらかくの如し。まして上つ世はいふも更なれば。今いひつくすべからず。わが御國言のそなはり。すべてかくのごとくなれば。律師のいさめんとおぼす所は。あらはにいさめ給ふな。すゝめむとおぼす所は。たゝちにすゝめ給ふなと。申し、かば。おもひかけざりし事よとて。はじめはうしろめだけなりしも。後には信せられて。脚結などもあげつらへるまゝに從はれき。死活の事は。古事記神書に。「於レ是阿遲志貴高日子根(アヂシキタカヒコネ)神。大怒曰。我者愛友故弔來耳。何吾比二穢死人一云而云々。と見えたるこれなり。この文義。くはしくは。神書にゆづりていはず。たゞ直言のつく所は。神靈のたすけたまはぬ所なりとしらば。思ひなかばに過ぎぬべきなり

○歌の教導

井蛙抄云「故宗匠云。爲世卿。俊成は。幽玄にて難レ及。定家は、義理ふかくして難レ學。たゞ民部卿入道體を可レ學之由。深相存也云々。この詞げにさる事なるべし。しかれども、おほかた志をすゑたる所まで至ることは。何の道にもまれなる物なり。しかれば。志は高からんがうへにも高かるべき事なるを。難レ及難レ學とをしへられなば。宗匠だにしかあらば。まして我等がおよびにあらずとぞおぼゆべき。しからば。俊成卿は。幽玄なりとしてねがはず。定家卿は義理ふかしとしてもとめずのみあらば。いつの世にか。兩卿のさかひにはいたらまし。さればこそ。よゝに其名聞えし人々も多かりけれど。かの兩卿の上にたゝ

書。世間爾多々也。篁讀云。无惡（サカナクバ）善（ヨカリナマシ）讀云々。天皇聞給天。篁所爲也（ガ）ト被レ仰天。蒙レ罪（トスル）之處篁申云。更不レ可レ作事也。才學之道。然者自今以後不レ可ニ絶申ニ云々。天皇尤以道理也（トシ玉フテ）。然者此文可レ讀被レ仰令レ書給とて。さま〴〵よみにくき事どもをあげられたり。此落書といふ物も。なほなぞ〳〵に似たるわざなれど。なぞ〳〵は。今俗にいふに同じかるべし小野宮右衞門督家歌合に「をのゝ宮の右衞門のかみのきむたちの物がたりよりいできたりけるなぞあはせ。左。あをきうすやうひとかされに書きて。松の枝につけたり。かくなん「我ことは云々。右は。紫のうすやうひとかされにかきて。樗の花につけたりしは。かくぞ「おくていれの云々。下略

○雪墜指

史記匈奴傳云。「會ニ冬ノ大寒雨雪一。卒之墮レ指者十二三一。於レ是冒頓佯敗走誘ニ漢兵ニ云々。こゝにても。北越の雪中に日を經たりしもの、。足くび腐れおちたるを。まのあたりみたりき。されど。さる寒地になれたる人は。さる事もなく。かつ其防もたくみなるべし。よそよりおもはんがごとくならば。ひと日もそこには住むものあるまじきなり。松前の人。京にのぼりたりしが。しはすの比。かの國にて。三四月ばかりの肌もちなりといひし。されど。かく暑寒順なる地にすめるをもよろこばぬ事。たゞわれひとりしかるにはあらじか

○詞の死活

洛東西光寺慈雲律師。淨土門に見解ありて。著述せられし册子を携へ來て。詞の當否をとはれける事ありき。おのれ淨土門の事はしらねば。其意趣をとひつゝ。詞をあげつらひけるに。ともすれば其詞律師の本意にそむきたりき。あまりにさる事たびかさなりゆゝに。律師いたくあやしまれければ。わが御國言は。から言にはたがひて。わがいはまほしとおもふ理を。人の察して思ひしるらんやうにのみいふならひなれば。そのてぶり。おのづから詞ごとにそなはりて。直言せんとすれば必落ちゐ難し。さればわがいはんと思ふすぢより外に詞をもとむれば。悉く所を得る物なる事。神武帝の御時より。此心得は定まりしなり。これを倒語といふ第一卷に引きおける。神武紀の。諷歌倒語これなりしかれども。此事よにかくれて千有餘年。いまはたゞわが御國言をば。直言にのみ用ふる事となりにたり。もとより詞は變化自在の物なるが故に。用ひなばいかにも用ひらるべけれど。直言は其詞死せり。倒語

われはたゝまし。輔親。「たらちめのおやにさきたつこゝろあらばさとの名さへはいますぞあらまし。などみゆれば。其頃よりいひはじめたる事なるべし。めおやといふ事も。ふるくはみえぬ名なり。いにしへは。おやとだにいへば。母にかぎれるを。めおやとしもいふは。古義を失へるなり。すべてかゝる事ども。其頃よりいと多し。用捨してみるべき事なり。蜻蛉日記にも。めおやとみゆ

○耳はさみ

源氏物語。はゝき木の巻に「耳はさみがちに。ひさうなき家とうじの云々。耳はさみがちとは。髪をば。耳のうしろにかきやりはさみて。かひ〴〵しきさまなりと。古來とき來れり。しかるに。其作者なる。式部が家集に「やよひ一日。かはらに出でたるに。かたはらなる車に。法師の。かみをかうぶりにて。はかせたちをるをにくみて。「はらへどのかみのかざりのみてぐらにうたてもまがふ耳はさみかな。とよめるあり。雅亮が装束抄に。（みつらをゆふことの條）「かみのすそをば。耳のうへよりこして。びんふくのうちにはさむべし。なほ末いでば。くびかみのうちにおしいるべし。兒をさなくてかみゝじかくば。べちにつけ髪といふもの。もとゆひたるうへにゆひつけてゆふなり。其かみなどをよくゆひて。おとしなどすまじきなりとあるは。かの法師のにおもひよそへらるゝ事なり。家刀自のは。まことの髪をいふなり。もしこれ女の髪にかぎりていふ詞ならば。法師のはかせたちをるをば。女の髪に比すべき理なし。しかれども。いづれも髪のうへにていひたれば。なほ髪のゆひさまにやあらん。心得がたし。今の俗。小耳にはさむといふは。きかでもよき事を聞きしりて。さかしらなるをいふは。是を本にてさかしがるよしを。耳はさみとはいふにや。かの法師。つけ髪をぞしけらし。その形容。後の考の爲にしるしおくなり。（永久四年百首に。加茂祭俊頼「引きつれてわたるけしきをきてみればいつきぞかみのかざりなりける。とあるは。この紫式部が集をならひてよまれたるなるべし）

○なぞ〳〵

實方中將集に。「小一條殿の。なぞ〳〵物がたりに。「かたずまけずの花のうへの露といひけるに。「すまひ草あはする人のなければや。又枕草紙に。「なぞ〳〵あはせしける所に云々などあり。又落書といふ事あり。江談抄云「嵯峨天皇之時。無惡善といふ落

さなわざぞかし。これとはたがへることの如くなれど。後拾遺集。哀傷に「小式部なくなりて。うまごどもの侍りけるをみてよみ侍りける。和泉式部。「止め置きてたれをあはれとおもふらんこはまさるらんこはまさりけりとよめるは小式部がなきたまのおもふらんをおもひやりて「こはまさるらんといひ。さて次の「こはまさりけりは和泉式部がみづからおもへる心をいへるなり親を思ふよりも。子を思ふ心はふかしといふ心なりと。古説あれども非なり。こはふたつながらこれを略けるにて。ともにうまごのうちをさしわけたるなり。すでに端作にも。「うまごどもとあれば。一人ならざる事志るし。親子の事にみば。端作の意にもたがふべく。またその情も淺薄なるべしかしもと小式部は。和泉式部がむすめなれば。まづおのが心をいひて。次に小式部が心をいふともことわりそむくべき事にはあらねど。人よりわれをさきとすまじき條理。詞におのづからそなはれるがゆゑなり。これまた。輕重やごとなきを思ふべし。もしこれをも「こはまさりけりこはまさるらんとよまば。何となく安からずおぼゆべし。輕重は。先後をみだるまじき詞の條理。これをもておもひ定むべきなり

○墮胎

源順集に「男の。ひとの國にまかるほどに。子をおろしける女のもとに。「たらちをのかへるほどをもしらずしていかですて丶しかりのかひ子ぞとあるをみれば。墮胎も。ふるくせし事なりけり。今も人しれず多くするなめり。いかなる心ぞや。子をころさでかなはぬ事あらば。おのれこそしなめとぞおぼゆるや。されど撰集抄に捨子に添たりし歌「身にまさる物なかりけりみどり子はやらんかたなくかなしけれどもとみえたり

因云この順朝臣が歌の。たらちをといふ事。いつの比よりか。か丶るあやまりはいできにけん。かみつ世には。たらちね。または。たらちし。これも。たらちれの誤かと。いふ說ありとのみ丶えたり。これは母にのみいふ詞なり。たらちは。令レ足の義にて。養育して成長せしむる恩をいふなれば。養育の恩は。父母ともにわたるべけれど。乳をあたへいたきはぐゝむは。みな母のわざなれば。母にかぎりていふなりと志るべし「たらちを「たらちめ。共にゆめ〳〵よむまじき事なり。この事。先達もくはしく辨じおかれたれどなほこの因にいふなり。又兼澄集に。「めをやにおくれはべりて。ほと丶ぎすを聞き侍りて。すけちかゞ家にて。歌二首ある其第二の歌に「しでの山みちしるべくはたらちめのをやのさきにぞ

心にくかりければ。來る人ごとにしめしけるに。皆かぎりなくみめでられしあまり。これが歌よみねとそゝのかされて。いとま〱かたぶきつれど。よみ得ずて。日頃へたるに。ふと末をぞひねりいでぬ。「こと國人のよりあへるごと。これなり。しかるに此本。いかにおもへども。おきかねたりしに。「そばの實といふ事。ふと思ひよられて。とさまかうさましつれど。しゝこらかして。「そば〱しくもみゆる哉。などは。さすがにくちをしければ。ある時わが友隆璉の來けるに。このわづらはしさをかたりいでゝ。「そばのみのあなそば〱しなどいはまほしけれど。中の五言の。いかにともせんすべなきよしいひけるに。「あなそば〱しそば〱しとかさねたらんはいかにといひければ。げにもとてやみぬ。しかるに。なぞやらんやすからずおぼゆるやうなりければ。なほ思ふに。いかなればかくかさぬるが心ゆかずはあるらん。いかで此ゆゑをしもわいためてんとおもふ〱。さきつ年。おのれよみける歌「夏まけし軒の下ぐさみづ〱しあなみづ〱し軒の下草。これを思ひくらぶるに。うたこそいふがひなけれ。これはかさねたる心もやすげなり。「あなそば〱しの方は。とにかくに安からずおぼゆるは。もと「そば〱しは輕く。「あなそば〱しはあなといふ詞そはりたるが重きに。其おもき方をさきにいひ。輕き方。かへりて後となれるがゆゑなりと。はじめておもひしりき。かろき方をまづいひて。さていひあかぬより又かさねておもき方をいはんこそ順ならめ。すべて古人。詞をかさねてよめるは紀。萬葉集をはじめ。かぞへもあへずみゆれど。二たびいふは。ひとたびにてむねあかざるが故にて。おのづから輕重順なり。しかるに。輕重順をみだりたるがゆゑに。何となく安からずおぼえしなりけりとはさとりぬ。詞の條理のわたくししがたき。今更うちをどろかれき。もとよりいたり深からん人は。かく輕重先後やことなき理は辨へたるべし。ひとへにおのれが心おそさより。やゝ後にこそおどろきさとりたりしが。さればこれは。わがたぐひならん人の爲にしるしおくなり。もとよりおのが歌をばみづからしるせる。いとをこなるわざなれど。歌のうへをいふにはあらず。たゞかく重ぬる詞に。輕重先後あることをあげつらはんとのを

こそ。神樂は。大かた歌の新古も混雜し。かつ内侍所ノ御神樂。淸暑堂ノ御神樂（大嘗會の御神樂なり）などうちまぢりたる物にて。催馬樂は。歌もめでたく純一なるなり。されば「さいばりに。の歌は。神樂にいれられたれど。其名は。催馬樂の方にのこりたるにぞあるべき。猶朝倉其駒などは。まのあたりくはゝりたる事しるく。朝倉は神樂ながら催馬樂拍子なるなど。すべて或はわかれ。或はくはゝりて。其數みだれたる物とみゆれば。かくはおもひよれりしなり。しかれども。もとより此道にくらき御杖なれば。なほ有職の人に問ふべし。おほかた催馬樂は。國風いと多くみゆれば。かの催馬といふ說もおこれるなるべし。前張は。假名にて幸榛(サキハリ)の義にこそ。左紀(サキ)を左以(サイ)といふは音便なり

○奥の國

檜垣女集に。「年などおいおとろへて。こゝちのみつねならず。くるしうおぼえて。なやましきに。あはれなどおもふべき子などいふものゆめになきに。なましぞく（生氏族）なる人を。子といひつけて。たのむやうなれど。まことの心ざしもなければ。たゞなるよりは。猶いひふるゝ事もあるに。おくの國にぞくだりにける。おくといふは。大隅薩摩の所なるべし。のぼりてと聞きて。かくいひやる。「消えぬべきいのちなれども露の身のおくなるまつをまつとこそふれとあり。筑紫人は。大隅薩摩のかたを。おくとぞいひけらし。げにさる事なり。おほかたは。陸奥をこそ奥とはいひならひたれ。されど。陸奥もゝと驛路の奥なるがゆゑの名なれば。東方よりいはゞ。薩摩のあたりは。奥といはむによしなきにはあらざるべし。おほかた陸奥をしもかく奥といひなりけんは。神武のみかど。筑紫よりやう〳〵東方をまつろへさせ給ひしがゆゑなれば。今も奥とだにいへば。陸奥のことゝなる。やごとなき事なり。道のしりといふは。國々前後とわかれてのち。其後の國をばすべていふ名にて。奥といふにはことなりとしるべし

○輕重先後

江府の畫家北馬ぬし。難波にゆゑありてくだられけるついで。はじめて蝸廬をとぶらはれける時。神職。儒生。法師。三人の。互にあひ背きてゐたるかたかゝれるを。こゝろざゝれき。其心ばへ。目もあやに

らまぬかれがたかるべし。此故に。志ありて。まことに歌よみえんとには。必無題にてよみしるべし。しかれども。無題にては。稽古にも荒涼におぼえ。かつ。世おしなべて題詠なれば。題によりてよみならはざらんは便なしともおもはん人は。題をえても。まづ題を得ぬこゝちとなりて。かの第一第二の次序をかまひてのみよむべし。されど。もとより次序をみだりたるわざなれば。一年に得べきいさをは。三とせよとせのゝちならではえらるまじきなり。近頃は。人々にこの次序のやんごとなきをとき示して。無題の歌をすゝめこゝろみしに。其上達いとすみやかなり。中にも。有題無題ふたやうによみてする人あり。その有題なるは初學の如く。無題なるは已達の如し。こゝをもて。いよ／＼次序のやむごとなきを知りぬ。おほかた中昔の人すら。題をえてよめるはなく。贈答。其外。情よりおこらぬはなければ。かへす／＼歌よみならはんには。無題にしく事あるべからず。この事。今おのれめざましくはじめていひ出でたらんやうに聞きなされて。世の批判をもりきかぬにしもあらねど。かみつよはもと無題なるがつねなるをいかゞはせん。志あらん人は。古歌に精神をうちいれて。さらに御杖がいひそめたる事にはあらざるを思ひゆるしてよ

○催馬樂

催馬樂といふ名の事。諸國より獻つる貢物おほする馬をもよほす心なりと。古記一定なれど。いとからめきて心よくもおぼえぬ名なり。されば思ふに。神樂に。大前張(オホサイハリ)とて八首小前張(コサイハリ)とて十一首あり。此大前張のうち。宮人由布志天前張の三首ばかり。宸筆本にはありて。其餘五首なし。小前張も。九首にて千歳早歌の二首は。雜歌のうちにのせ給へりとぞ。拾芥抄にみえたる。又體源抄に。朝倉は。もと筑前ノ國の風俗なりしを。延喜の御時。神樂に加へられたり。さればその時は。風俗拍子なりしとかや。同書に朝倉かへしとは。催馬樂拍子にうたふをいふともみえ。又其駒ももと風俗なりしを。神樂。の無下に尾なきやうなりとて。一條院の御時加へられしとも見えたり。これらを合せて思ふに。左以婆良(サイバラ)は。左以婆里(サイバリ)の里(リ)の良(ラ)にかよひたるにて。もとは大小前張の歌は。みな催馬樂なりしを。後に神樂にくはへられけるに

人のざえたかくひきゝにもよらず。つとめて得る事なり。つとむるも。ふかく心をつくすまでもなし。いかにもして。萬葉三代集を。心にとゞめてふたかへりばかりよむなり。此うちにざえたかき人はひとゝせ。さらぬ人は。三とせをふべきなりとぞ

○歌の次第

又云。歌を案ずるに。次第ある物なり。人々巧拙ともに次第なきにはあらず。つたなきは。次第やがてあしきなり。これはならひてなほすべし。古歌をみんに。まづいかやうにおもふ心より歌よまんとして。なに事をさきにとりいれたるぞとしるべきなり。かく次第をしりて後にも。歌のあしきは。程をしらぬ故なり。次第はたがはねど。よみもてゆくまゝに。詞をしらず物をしらぬにおほはれて。あしくはなるなりといへり。御杖云。げに古歌ども多くみたらん人は。さばかりの力はをのづからみゆめれど。かく次第をみしりたるにあらで。うはべをのみ記識せるなれば。口拍子の古歌に似るなり。まへにもいひしがごとく。これわがものになるとならぬとの差別にこそ

○題詠

題詠の事。亭子院。大井川行幸の時。貫之ぬしがかかれたる序の詞をとりて。人々歌よみたる。これを題のはじめといふべし。萬葉集中に「詠レ霞「詠レ花「詠レ鳥など題せられたるは。みな後より標したるにて。後世の如く。題をえて後よめる歌にはあらざる事。前にもあげつらへり。檜墻女集に「虎の皮のしりさやを題にて。ひごの守のよませしに。「うみべとてゆくみなとらのかはのしりさやけからぬは浪のにこせば。この外にも。同集に題といへるは。みな物名の事なり。其頃は。物名を題とぞいひけらし。されど。この女。肥後の國人なれば。そこにてのみしかいひしにやとおぼゆれど。名だかき歌よみなれば。證ともすべし。おのれわかゝりしより。世々のすがた。人々の風采をまねびて。歌よみ試みたるに。第一に情。第二に題。第三に歌となる。これかみつよの人の歌よめる次第なり。されば題を得て歌よまんは。第二が第一となるなれば。たとひ其えたる題は題にて。まづ情をさきにせんとすとも。第二第一と。次序みだれたる事。歌となりての、ちも。おのづか

はちもじの濁れる。次はしもじの濁れるなりと。よく聞ゆるは。げに筑紫は。みかとのもとつ御國なるしるしなるべし。和名抄に。諸國の郡名。鄕名などをかけるに。かんなづかひたがひたるあり。これはその國々の詞だみて。いひ失へるをみせたるなり。今の人も。都の詞ひなの詞かはれる故に。いふ所。みな和名抄の鄕名のたぐひになれり。かんなづかひは。京極黃門のさだめさせ給ひて後。其沙汰まち〳〵にして。おぼつかなかりしを。近き世。契冲がよくいひわきまへたるにより。はじめてこと定まれゝど。古より。理につきてもじを定められし事とのみ心得られけるにや。口角にわかつべき事とはいへる人なし。千慮の一失といふべし。またあ經のお。わ經のをををきたがひ來れるを。わきまへたる人なし。今。紀伊基肆のたぐひをもて。噲吹をおもひ。又もじあまり反切のよしを思ひ。かつ催馬樂の譜などにも。をこそとの、列のもじを引聲するに。乎々とはかかずして。於々とのみかきたるにて。はじめてこれをさだむ。後の人よくみ定めよ。御杖云。此おをの置所たがへる事も。また他家に同説ありとぞ。人の説をば。亡父かく書くべきやうなし。猶かのもじあまりの説なども。たゞものゝはしにかきつけ置きて。今まで世にしめさゞりしかば。亡父が説とは。しれる人のなきなりけり。木居を戀によせ。藍を逢によせたるは。もとより誤なれど。さすがに中古の人の誤りにて。古のおもかげありて。よせたる。これあゐ。みなゐなり。ゐは。かろく唇をうへの齒にあて、いふ。ひの輕音も。古は。今のやうにまたくいとは聞えずして唇を齒にあて、重くいひたるべければ。ゐをひにかよはせたるは。今の人のみだりがはしきにはいたくたがゐて。しかるべき事なり。さればよゝの先達も用ひられたり。これならずとも。ゐをひにはおして用ふるも。心にくかるべしといへり

御杖因云。これらの説によりて。げに假名づかひは。音をもてこそ定むべかりけれとさとりて。おのれわかゝりしより。經緯に心をいれて。思ひよれる事もあれど。こゝにはもらしつ

〇歌の四知

又云。歌はよつをしるべし。ひとつには「程をしる。ふたつには「よしあしをしる。みつには「ことわりをしる。よつには「道をしる。これなり。かく見しりたる人は。歌を。とくよまん。おそくよまん。あしくよまん。よくよまん。心に従ふなり。これは其

ともにうせたるがゆゑに。かんなづかひさいふ事いでき。さてのちは。口舌にわかちたる物なりといふ事をもしらぬやうになりて。かんなをつかふ時に。さだむるもじのやうに思へるがゆゑに。明魏は。さる歌くちの人におはしけれども。かんなづかひはいるまじきよしいはれたるは。なげくべき事なり。たとへば。今いくよろづよをへて。やわあの三音。もじはかはれども。こゑはうせで。あとなり。をよの二字もこゑうせたらん時も。明魏にしたがはゞ。いにしへをしたひことをさだめん人。なにゝよりてか言のこゝろをもわきまへまし。ことの源を極めずして。流に從ひて末におもむく人は。明魏がひがことをいひ出すべし。よくしらずばあるべからず。此みつをうしなへるのみならず。こゑの輕重をうしなへる事多きによりて。いよ〳〵假名づかひの事しげくなれり。輕重とは。はひふへほ。のわゐうゑをにまがふ事なり。（御杖云。はひふへほをわゐうゑをの如くいふは。いはゆる清濁音也）これらさへ。いにしへはさだかに口舌にわかちたるを。となへうしなひて後は。かんなにてさだむること、はなりにたり。いにしへ神樂催馬樂などをうたふが如くに。「こひは。子火と聞えて。こゐとはいはず。「あふも。安婦ときこえて。おうとはきこえざるべし。これらのまどひなかりけるゆゑに。いにしへは。いふがひなきわらはべ。もじかゝぬ女などの。口にまかせてよみたる歌も。かんなのたがひたる事はなかりき。今はいうそく（有職）の人だに。かんなづかひをまねび極めざれば。たがふ事の多きは。口にならはずして。書にならふが故なり。枕草紙に。「えぬたきといふ人の名あり。かゝる名の。今のよにありて名のりたらば。えは。いづれの。えぞと。とひ聞きて後ならでは。かんなにも。女もじにはかゝるまじきを。その比は。やすらかに口にきこえたれば。疑なかりしなり。今の世の人の名に。治右衞門あり。次右衞門あり。京人はたゞ同じやうによぶ故に。したしからぬ人は。消息などにもさだめかねて。次郎の次をつきたる人に。治郎の治をかき。治右衞門に次右衞門とかき違へてやれども。その人も。こと人が名ともあやしまず。みづから次治など定めてかきたるを。みしりたる人。はじめて。疑なくなる事。煩らはしくも。荒凉にもおぼゆるを。筑紫人は。よく口にわけて。治

をかりて用ふる事となりて。松をまつ。竹をたけとかく。みなかんななり。かんなとは。かりなといふにて。いにしへは。文字を。なといへればなり。天武紀に。「新字を。にひなとよめるが如し。されど。かんなとのみいへばまぎるゝ事あり。此故に今約束して。いつゝのしなをさだむ。ひとつには「まな。ふたつには。「かんな。みつには「かたかんな。よつには「女もじ。いつゝには「借字なり。「まなとは。松竹などかくをいふ。「かんなとは。草書または。眞行にて。摩津多介などかけるをいふ。今の萬葉假名といふ物これなり。「かたかんなとは。マツ タケなどかくをいふなり。「女もじとは。今いふいろはかんななり。これも草書よりはじまりたれば。すなはち第二のかんななれども。今おしなべて用ふるいろは歌の文字のやうに。全く草書にもよらぬやうなるをいふなり。「借字とは。萬葉集に。「長雲鴨(ナガクモガモ)「見貌石(カホシ)「馬聲(イ)蜂音(ア)などかけるたぐひをいふなり。おほよそ。予が著述のうちには。みな約束をもちふといへり

○音の存亡

又云。あがりての世には。人の聲五十ありけらし。其後ふたつはやう／＼うせて。あめつちの歌のころは。四十八になりぬ。それが又ひとつうせたる世に。いろはの歌はいで來り。いろは歌四十七のうちに。今はよつうせて。四十四のみぞある。かくの如く。音のうせゆくに從ひて。かんなづかひといふ事いできにたり。かんな女もじなどは。いふがひなき女わらはべまでも。心得やすく用ひやすからんが爲に設けたるを。今は。かんなかく事だに。ならひあることのやうになりたるは。口にいふ所みだりがはしくなりて。かんなもじさだめたる世とたがひたればなり。世うつりゆかば。四十四のうち。又ぞうせなん。かくうせゆく事。こともじにはあらず。あ經。や經。わ經。（五十韻をば。亡父經緯といへり）このみつの十五音のうちなり。今は。あ經はみな殘り。や經には。いえうせて三音あり。わ經には。わのみのこりて。ゐうゑを皆うせたり。いろはの歌の時。や經のいうせて。ゐふたつになり。わ經のうせて。あ經のうひとつになり。や經のえ。うせて。あ經のえ。わ經のゑふたつになり。合せて三もじうしなはれたるも。世すでにくだりたればなり。今はまた。いろは歌の。ゐゑを

當道よにのこさるべきは。貴老ならではと存候間。常縁が形見と御覺あるべく候云々。これは東野州拾唾のはじめにみえたり。このをおの假名のたがひはさもあるべし。すつのかなまでとあるは。濁音のすつの事なるべし。たとひ濁りたるすつなりとも。證本をまたずして。誤はあきらかなるべきを。かくかゝれたる事。あやまりとはしるきも。證本をえざれば。みだりに私すべからずとおもはれけるにこそと思へば。いともいとも殊勝なるこゝろざしなり。されど契冲法師。和字正濫抄をつくりてのちこそあれ。假名の事。いまだひらけざりし世のさま。おもひやらるゝ事なり

○毒水

五雜俎云「養生論曰。二月行レ路。勿レ飲ニ陰池流泉一。令ニ人發レ瘧。此不レ可レ不レ知也とあり。かの高野山に毒水ありといふも。さる深山の流水なれば。もしこの養生論のごとき事ありけるより。いひなりたるにや

○からげ緒

續古事談に。「神璽寶劒。神の代より傳りて。御門の御まもりにて。更にあけぬる事なし。冷泉院。うつし心おはしましければにや。しるしのはこのからげ緒をときてあけんとし給ひければ。箱より白雲のたちのぼりけり。おそれてすて給ひたりければ。紀氏の内侍。もとのごとくからげけりとあり。さきつ年。遷宮をろがみける時。長官の捧げられしを。かしこみ／＼もをろがみたりしに。檜にぞあるらし。かどおしまげたるやうなるがうへを。苧繩だちたる物して。十文字にからげられたり。そのごとくからげてやあるらん。いとかう／＼しき事なり。江談抄に。「故。小野宮右大臣語云。冷泉院御在位之時。大入道殿。道兼 忽有ニ參内意一。仍俄單騎馳參。尋ニ御在所於女房一云々。御ニ夜御殿一。只今令三解ニ開御璽結緒一給者。乍レ驚排レ闥參入。如ニ女房言一解ニ筥緒一給之間也。因奪取如レ本結レ之云々とあるをみれば。續古事談とは。大同小異なり。いづれか實ならん。それはしらねど。江談抄は。まさしからんかとぞをぼゆる

○字の五品

亡父云。吾國のいにしへは。神ひじりももじをつくらせ給はざりければ。今の世まで。もろこしの文字

「ものにぞありけるを。」「ものにざりけるとか、れたるは。後にもあり。この反切の事。他家にも此說ありとぞ。その先後をいふ人もきこゆれど。すべて篤志の人は。そのたもひいたる所符合する事。めづらしからずかし

○手習

亡父また云。なには津あさかやまの後は。あめつちほしそらといふことを。手ならふ人のはじめとしけるにや。もじの數四十八なり。順が集。また加茂保憲女集等に。あめつちの歌はみえたり。かのふた歌は。おなじもじかさなりてもあり。もれたるもじもあれば。天地の歌は。其後にぞいできたるらんとたぼし。えもじふたつあるは。あたてのえ。やたてのえなり。其頃は。其音わかれてぞありけらし。今わらはべのまづならふ。いろはの歌は。空海のつくられたるよし。たくみにはよみたれど。天地よりはひともじすくなきは。其音ひとつうしなはれたる後なりとしるければ。あめつちよりは。また後なる事あきらかなり。詞の心も。無常をのべたれば。なには津あさか山をならはせたる心とはたがへり。今もあめつちを用ひまほしきことなり。天地も。末つかたには。よみときがたき事ありといへり

○鷸蚌

戰國策云「趙且伐レ燕。蘇代爲二燕將一謂二趙惠王一曰。今川蚌方出曝。而鷸啄二其肉一。蚌合而拑二其喙一。鷸曰。今日不レ雨明日不レ雨。即見二蚌晡一。蚌亦謂レ鷸曰。今日不レ出。明日不レ出。必見二死鷸一。漁者來奪二貝與一レ鳥去。」とあるが如く。總べてあらそふは。この鷸蚌のたぐひなる事多きものなり。此故にわが大御國ぶり。もはら人のきそひなからしめ給ふをや。たとひ君子なりといふあらそひなりとも。なほ爭ひはまぬかれざるべし

○假名遣

東野州常緣が。宗祇法師におくれる消息の中に。「拾遺後撰。愚老書寫之本。先年御所望之樣に候間。是は奇特之事にて候。證本を寫し留め。校合度々の時に。をおすつのかなまで。本のごとく直し祕藏仕候。箱の內を御覽候へ歌一首書きつけ。常緣が一世不隨（可賦）身由存置候へども。貴老へ與奪候。古今集傳受候時。門弟隨一と定申之上。其以來彌御執心無比類事候。

つ世の遺れる儀なるべしと。身にしみてかしこくかたじけなくぞおぼえし。其神寳どもの中に。かならず後にくはへられしなるべしとおぼゆるは。御硯の類なり。神寳の數は。くはしく延喜式に見えたり 神書のうちにみえざる物は。後に加へられたるしるしと心得べし。これ神寳は。御さとし物なりといふ傳うせて。たゞ大御神の御調度ぞと心得たる世に事たらはぬはかしこしとて加へられけらし。今は事はたらひたりとも。大御神はいかにみそなはすらんとぞおぼゆるや。なほ諸社の神幸の時。神寳どもをあらはにもちわたるも。みなこの古物わたしに同じく。諸人にひろくしめさむが爲なるべしかし

○反切

亡父云。おほよそ歌に。もじあまりて。いつもじが六もじになり。七もじが八もじ九もじにもなるは。つねの事なり。それにはかならず反切の字あるべきなり。反切とはあいうえおの字ありて。こと文字をうくるをいふなり。たとへば

此二音ツヽマリテぬトナルなりコレヲ反切ト云下準之

六もじ　としのうちに　反切　ぬ　としぬちに

あふなあふな　反切　な　あふなふな

月やあらぬ　反切　や　月やらぬ

七もじ　さもあらばあれ　反切　ま　さまらばれ

これらはつゞまりて。五もじになるなり。又「わぎも子が「戀すちふ 御杖云。「てふは。かみつよには「とふ「ちふとのみあり。「といふをつゞむれば。「ちふなり。「とふといふは。いをはぶけるなり。しかるに後世にては。「てふとのみかけるは。「とふのとを。てにかよはせたるにや。「又假名に「ちふとかけるが。ちは。てに似たれば。誤りはじめたるにやなどは。 いにしへより。反切のまゝに。たゞちにかきたれば。それらは。文字あまりなる事を。人しらぬなり

八もじ　ことしとやいはむ　反切　い　ことしといはん

舟をしぞ思ふ　反切　ぞ　舟をしぞもふ

またずしもあらず　反切　ま　またずしまらず

九もじ　と思ひかく思ひ　反切　こ　と　ともひかこもひ

これらは。つゞまりて七もじになる。「門させりてへ「ながしちふ夜はなどは。反切してかゝねば。もじあまりなりとぞ

御杖因云。萬葉集に。「於毛布(オモフ)を「毛布(モフ)とかゝれたる所おほし。又神樂。木綿志天(ユフシデ)に。「毛侶穗仁(モロホニ)左禮(サレ)波(バ)とあるも。「もろほにしあればの反切のまゝをかゝれたるなり。又「あさなあさなを。「あさなさな。

讀二合其品一大物忌父等。改二計尺幅之長短一也。御上使。造宮兩御奉行所。於二件殿之東方一御拜見也。これは此たびあらたに奉られし神寶どもなり。さばかりいつかしきすめら大御神の御寶なるを。この齋王侯殿。戶もなき屋のあらはなる所にてぞ行はれける。人みなたちかゝりて。たちながらみるを。制しなどもせられざりき。これだにいとあやしくおぼえつるに。遷宮の翌日。古物わたしとて。古殿より新殿へ。ふるき神寶どもをうつし奉らるゝを拜みしに。昇殿の禰宜。古殿の内より。神寶一種づゝを捧げて階をくだるを。權禰宜。階下にまちとりて。（いつれも衣冠なり）またさゝげて。新殿までの道をねりつゝ。新殿の階下にて。また昇殿の禰宜たまはりて。殿内に納むるなりけり。殿内には。から櫃にをさめたらんを。一種づゝとりいでゝ。たゞひとくさづゝはこぶも心得がたく。かつその運ぶほど。其上を覆ひなどもせず。鳥などのけがさむも計り難く。さらでもおのづから塵埃はかゝるべきを。さる防なきもあやしくぞありける。もしさるかしこみあらば。辛櫃ながらこそうつし奉るべけれとおぼえしかば。神職の人に問ひしに。この

讀合古物渡。ともに其儀はまさしき古傳なるよしかたられき。こゝに。おのれかねておもひおけりし事に叶へるを知りぬ。わが大御國。もと文字なく。物をもて御さとしとし給へる事。神書中の諸物みなこれなり。神武紀に「天表。また同紀に「表物。また崇神紀に「表などもかゝれたり。されば伊勢にかぎらず。諸社に神寶とて必あるは。其神の御調度にはあらで。御敎の義をふくめたる御さとし物なるべしとおもひおけり。さるは。神樂歌に採物。弓「四方山乃。万保里爾多乃牟。梓弓。加美乃多加良爾。今志川留加奈。同。鉾「四方山乃。人乃万保里爾。爲流保古乎。神乃美前爾。以波比川留加奈などあるにしるければなり。太刀弓は。神書のうちに所々みえ。生太刀。生弓矢とさへあり。されば。この讀合の。あらはなる所にしも點檢せられ。古物わたしの。一種づゝもちはこばるゝも。神寶おの〳〵敎旨をふくめられたる物なるが故に。わざとこれをしめし給はむがため。前日後日。兩度まで。この神事は行はるゝなりとはしられき。これみよともいはで。おのづから人のみつべきやうにかまへられたるさへ。かみ

魏晋より傳はりたる千文をもて韻を次きて。今世流布せる千字文とはなしたるなり。京師に。近藤齋宮といひし人。號芙蓉山人 義之がかける千文の雙鉤せるを所藏せられしを見たりし人あり。韻などもなくて。たゞ千字を書きたる物なりきとぞ。予も芙蓉山人はしたしかりけれど。弱冠の頃なりしかば。みざりき。よに傳へもたる人もあるべし。たつねてみるべし。されば。應神帝の御時。王仁が獻れりしは。今世流布の千字文にはあらで。魏晋の世にありし千文なる事疑なし。こゝをもてみれば。かの常山子が說。くはしからぬ所あるにや。今さばかりの大家の說を論破せん事。いとなか〳〵なるわざなれど。古事記の說謬れり。とたしかにかゝれたるによりて。此筆餘を見たらん人は。必。わが國史を謬とせんがうしろめだきに。えもだしはてぬなり。もと千字文を。論語にならべて獻れる事。ひとつは經書なれば。ふみもこそあれ。いとふさはしからぬ事なるが故に。ようせずば。筆餘の說を信ずる人もあるべし。されど上にひける三書の語どもを考ふるに。ことぐ〳〵く書のうへの事なれば。かの和邇師がもち來れるも。文學のためにたてまつれるにはあらで。鍾繇か義之か。さならでも。その頃は能書多かりし時なれば。手本にとて。くはへて獻れるなるべしとぞおぼしき。しかる時は。論語に加へて獻れるも。ゆくりなからずこそ。この淸人汪氏か纂輯は。常山子が在世にはいまだ舶來せずして。みられざりしにもあるべし。その餘の書はいかでか見られざりけん。不審なる事なり。返す〳〵芙蓉山人が所藏せられし千文は。いとも〳〵心にくしかし

○福原都

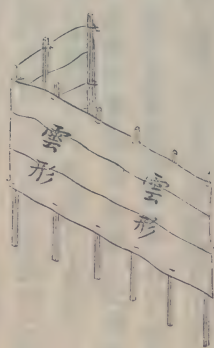
藤親盛家集に「福原に都うつり侍りし時。月おもしろき夜。濱にいでゝよめる。「鹽かぜにうらさえわたる秋の月ふるき都の人にみせばやとあるをみれば。その世のさま。人の心など。思ひやられてあはれなり

○讀合古物渡

伊勢兩宮。遷宮の前。讀合とゝなへて。神寶どもを目錄にあはせて。點檢せらるゝ事あり。正遷宮行事記云「讀合行事。九月朔日。祭主。宮司。十員神主。各束帯 權禰宜。各衣冠 大物忌父等各布衣 本宮神拜之後。參二集于齋王侯殿一。于レ時作所代。權禰宜一人。行事官。各束帯 於二件殿內一。有二御韓櫃一。取二出御裝束御神財一。任二記文一。令三

陽。紫川途阻。江山遐險。兼爲石勒逼逐驅馳。又逢暑雨所載典籍。從茲靡爛。千字文幾將湮沒。晉末宋元皇帝。恐其絶滅。勅遂令右將軍王羲之繕寫其文。用爲教授。但文勢不次。音韻不屬。及其獎導頗以爲難。至梁武帝受命。令員外散騎侍郎周興嗣推其理爲之次韻。中略然。王羲之本。有餘文傳通世。俗以爲法軌。蕭王乃令周興嗣次韻正之焉。云々又同書のをはりに云「昔梁武帝。使侍中周興嗣次韻。少兩句。故以語助足之也。晉武帝。承魏之後始在路州城。大夫鍾繇。造得此文上天子。帝愛不離其手。晉被宋文帝逐。移向丹陽避難。其千字文在車中。路逢雨。車漏濕千字文。行至丹陽藏書筐中。晉治天下得十五帝。共一百五十年。被宋文皇帝劉裕。承位治天下。開晉帝書庫中。見此千字文。雨亂損失其次第。使右將軍王羲之次韻。不得。宋帝治天下凡六十年。齊承位治丹陽。亦無入次得。齊七帝治三十年。梁武帝承位。乃命周興嗣次韻得千字文也ともみえ。また。明仁和郎瑛仁寶著。七修類稿卷廿五。辨證類千字文條云。「玉溪清話云。梁武帝。得鍾繇破碑愛其書。命周興嗣次韻成文。或云。武帝欲學書。命殷鐵石選二王千文召周興嗣次韻。二説不同。然皆武帝時事也。似當以前説爲是。舊聞。詹仲和云。在蘇常其家見唐刻千字文一帙。儼然鍾繇筆法。但子昂後跋以爲東坡書不知何也。余又以淳化帖上千文。亦類鍾繇其王著。因海鹹河淡等字以爲章草。誤指漢章帝之書。則米南宮黃長睿辯之明矣。云々また。千字文註。清人。汪嘯尹先生が纂輯云。「按梁史。興嗣字思纂。陳郡項人。上以王羲之書千字。使興嗣次韻。爲文奏之。稱善加賜金帛。太平廣記云。梁武帝。教諸王書。令殷鐵石於大王書中搨一千字。不重者毎字片紙。雜碎無序。帝召興嗣謂曰。卿有才思。爲我韻之。興嗣一夕編綴進上。鬢髮皆白。賞賜甚厚。など見えたり。常山子は。梁武帝の時。周興嗣がはじめてつくれる物の如くか、れたれど。以上引く所の書。其説異同ありといへども。鍾繇義之などがかける千文。魏晉の間にはやくありける物なる事あきらかなり。梁武帝の時。周興嗣に命ぜられしは。新につくられたるにはあらで。かの鍾繇義之等がかける千文の序なきが故に。次韻せしめられしにて。即

はかきけん。近きよのしわざにはあらざるべきを。思ひよる人もなかりけんぞくちをしき。又は思ひよれりし人もありつれど。さる式になりて傳はりし事

外宮にもちひらるる
幕の雲形の圖

なれば。え改めずてありけるにもあるべし。大かた神前の事はいとかしこけれど。これらは。繪たるべき事必定ならんとおぼゆれば。いとあらためまほしき事なりかし。勘仲記云「正應元年七月廿四日丁未晴。參レ院奏ニ外宮御裝束用途事一。中略 今日祭物奉レ獻ニ神宮ニ了。行ニ伊勢豐受太神宮假殿遷宮事ニ所。奉レ送ニ雲形布船代一。山口木本鎭地後。鎭祭物等事。合。雲形紺布。捌殿。中略 右件。雲形祭物等。任レ請送奉如レ件。正應元年七月廿四日。右官掌。中原國有。左史生。紀業弘。左少史。中原景範云々。これらおもふべし

○千字文

古事記。中卷。應神帝御卷に。又科下賜百濟國若有ニ賢人一者貢上上故受レ命以貢ニ上人名和邇師一。即論語十卷。千字文一卷。幷十一卷。付ニ是人一貢進云々とみゆ。しかるに。備前國なる湯淺氏が 元禎號常山 常山樓筆餘に。「古事記に。王仁。論語千字文を獻ずとみえたり。これ異國の文字日本に來れる其始なりと世にいふなり。しかれども。千字文は。梁の周興嗣撰せしなり。應神天皇十六年。王仁吾邦に來りしなり。其年は。晋武帝大康六年なり。晋南渡し。宋興り。宋亡びて齊の代となり。齊亡びて。梁武帝立つ。百九十年以後に。千字文は撰びしなり。古事記の説謬れり。」とみゆ。此説さる事のごとくはみゆれど。注千字文の序を。梁大夫内司馬李暹がかけるに。「鍾繇千字文書。如下雲鵠遊ニ飛天一群鴻戲中海人間茂蜜。實亦難レ遇。王羲之書。字勢雄如下龍躍ニ淵門一虎臥中風閣上故歴代寶レ之傳以爲レ訓。藏ニ諸祕府一。逮ニ于永嘉年一。失レ據遷ニ移丹

返しは。女の歌なるべし。いかなる女にあらん。この宿もせにとよめるは。後世もはぢぬひかごとなりかし。猶はなはだしくしては。にもじなくて。「野もせ「庭もせとばかりもよめり。にもじは必あるべき詞なり。はたらかせては。のといはむは子細なかるべし

○蛩々距蹷

わが大御國の御てぶりは。貴賤賢愚。たがひに用ふべき所をもて持ちあはするを要とす。神書もはらこれをとけり。今つまびらかにいふにいとまあらず。貴を貴とし賤を賤とし。賢を賢とし愚を愚とする時は。世に無用の物多くなりぬべきなり。もとより。無用の物ならば。天地これを生ずべからず。世に無用なるが如くみゆる物は。畢竟そのもちあはすべき所をしらざるが故なるべし。荘子に。「蛩々負距蹷」といふ事あり。ふたつともに獸の名なり。蛩々は。よくあるく獸なり。距蹷は。足なくて甘き草ある所をよくしれる獸なり。この故に。蛩々は。距蹷を負ひあるきて。甘き草ある所を告げさせむとす。距蹷は。蛩々にあるかせ。甘草のある所にいたりて。おのれくらはんとするよしみえ。又唐の亂に壯者は皆逃れ去りて。盲と蹇の。にぐる事あたはざりしに。二人相はかりて。盲は。蹇を負ひて。蹇は。道をおしへてにげたりし。よく似たる事なり。貴賤賢愚をもちあはする事。この蛩々距蹷。盲蹇のごとくならば。世にすたる物はあるまじきなり。わが大御國ぶりのとほじろさ。これをあぢはゝば。おもひ半にぞ過ぎぬべき。おほよそ人心。一方によるを常とす。此故に。賢を賢とし。愚を愚とする事は易く。賢愚を持ちあはせん事はかたし。しかれども。此難きを得たりし人は。必大業をなせり。古人の事迹どもをも思ひ合はすべし

○雲形

いにし文化六年己巳九月。伊勢に。遷宮をろがみに降りけるに。その儀式ども。ふかく思ひあたらるゝ事ども多かりき。その時社頭にひきわたされし幕をみしに。おほきなる文字して。雲形といふ二文字をかゝれたり。おもふに。これそのもとは。繪して雲の形をかきたりけんを。その式を記錄しおくとて。雲形とかき置きたりしが誤りて。其文字をば幕にかき傳へけるなるべし。いつの世よりか。しか文字に

一名。蛬。和名。木里木里須とあり。しかるに。蔡。邕月令章句に。「蟋蟀虫名。俗謂二之蜻蛚一とあれば。蜻蛚蟋蟀は同物なるべし。和名抄に文字集略云。蜻蛚。精列二音。和名。古保呂木とあるを。後はたゞきりぎりすといふ名のみありて。こほろぎとは歌にもよまぬは。上世にはこほろぎといひしが。きり〴〵とのみいふ事となりぬるにやと。千蔭ぬしが萬葉集略解。巻十。詠蟋蟀といふ歌の下にくはしくいはれたり。これは春海ぬしが考とぞ。雜藝。宇波良古支に 上略「以名古萬呂波。拍子宇川。支利支利須波。鉦鼓宇川とあるをみれば。この歌は。はやこほろぎといふ名うせたる世によめるにや。又神樂歌に。蛬とかき。歌には「蟋蟀とかけるは。猶こほろぎとよむべくや

○うま

亡父著述せし挿頭抄に。「あづま路のうまや〳〵といふ歌を引きて。「うまを。「いまにかよはせたる例をあげたり。基俊朝臣が家集をみしに。「みちのくの。守のもとよりの朝臣。馬えさせんといひて。任や、はてがたになりぬれど。おとせざりしかば。「あらたま年のいつとせまちわびぬわがよもしらずうまはたのまじ

○おろしの風

元良親王御集に。「うらみつゝなげきのかたき山ならばおろしの風のはやくわすれぬ。といふ歌あり。此おろしの風といふ事。ものにもみぬ詞なり。山おろしといふべきを。山の字を上によみとり給へればなるべし。むかし人は。かくかゝはらぬ詞ども多し。畢竟自在の詞づかひぞかし

○野もせの類

「野もせに「庭もせに「里もせに「濱もせに「道もせに「宿もせに「國もせになど。さま〴〵よめる。皆そこも狹きばかりにといふ心なり。しかるを。いふがひなき人は。たゞ「野に「庭になどいふ心ばかりによめる歌もみゆめり。されど。大江匡衡集をみしに「十月の月のあかきに。女と物がたりしてゐたる。まだくもらずながら。しぐれのあらゝかにしたれば。「月影をかくながらにてしぐるればおつる紅葉の色にぬる袖。といひ侍る返事に。「月ももりしぐれもそゝぐ宿もせになにしか袖をまづぬらしつるといふ此

の廣葉にかくろへて。このもかのもになく蟬の聲。などあり。此ころには。さる義論もなかりしにこそ。時代のさまこれにても思ふべきなり

〇詞の斟酌

後世のをしへに。これはよむべからず。それは用ふべからずといふ事おほし。そのおこれる所。皆。歌合の弊なり。判者となる人は。みな其世の大家なれば。その論を信ずるはやことなきわざにはあれど。左右をたて、勝負を競ふうへにこそあれ。つねよむ歌に。なにかはさる事あるべき。つゝかななども。その濫觴は猶同じかるべし。しかれども。たゞ「おもふとのみいふべきを。おもふかなとよみ。「ほとゝぎすとのみいふべきをほとゝぎすかなとよみ。「雪ふるとのみいふべきを。雪はふりつゝとよみ。「おどろかるとのみいふべきを。おどろかれつゝなどよむ類いふがひなききはには。なきにしもあらねば。さもあるべき事ながら。かゝる事は。この二つにもかきらず。「こゝちすとのみいふべきを。こゝちこそすれ。「春きにけりとのみいふべきを。春ぞきにけるとよむ類。猶いと多きをや。こゝをもておもへば。斟酌すべき詞も。先達の制しおかれざりけるは。しかも思はず。先達の制とだにいへば。深くも思はで用ひぬはともに親切なる物まねびとはいふべからずこそ

〇松虫。鈴虫。蛬

亡父成章云。松むし。鈴むしは。今の人は。鈴虫を松虫といひ。まつ虫を鈴むしといへり。たゞ此比。女わらはべなどのいひたがへたるにこそあるらめと思ふに。元和の比。玄圃といふもの、書きたるものに。（雛屋玄圃とて。俳諧に名ある人なり。手なども。いとめでたかりしなり。）松虫。鈴虫は。名をかへごとにしたるが。百番のうたひつくりたる比までは。むかしのまゝにいひたるにや。たれまつむしのねはりん〳〵としてといへりと書きたり。これによりてみれば。かくいひたがへたる事も。年久しき事とぞおぼゆる。猶りん〳〵となくは。松虫。ちり〳〵となくは。鈴虫とさだむべし。蛬は。今のいとゝといふものなり。（御杖云。涙速人は。このいとゝをば。いとちといふ。とのちにかよへるなるべし）床にいり。かべにのぼる。霜夜に聲よわるなど。いとゞなる事疑なし。つゝりさせとなくを。いとゝにいひつけたるにて思ふべし

滋野井殿御家藏の虫盡の歌合の繪口（此下は。紙破れてうしなはれたり）

御杖因云。和名抄に。「兼名苑云。蟋蟀。悉率二音。

どは。前句をうけてつくるに。よしなからんことはつくまじければ。大抵つくべきやう。その教ありとぞ。その濫觴を思ふに。袋草紙に。清輔朝臣。躑躅夾ゝ路といふ題にこのもかのもといふ事をよみたるに。範兼。顯廣なと。筑波山にこそあれ。平地にこのもかのもとは。よむべからずと難ぜられけるに。躬恒が假名序に。あまの河に。かさゝぎのよりはの橋をわたして。このもかのもにかよふとかきたるやうに覺悟すと答へられしかば。勝になりぬ。そのゝち中院右府。入道九條大相國など。この事御沙汰ありて。面目を得られきとかゝれたるをみるに。その頃は。歌合にかぎらず。かゝる類おほかりき。これらの風俗のつたはりて。よしなからん事はいふまじきことゝなり。終に連歌にもおよびけるなるべし。頓阿法師が集にみゆる連歌すら。さる事とは見えず。ましてそれよりいにしへをや。袋草紙に「連歌本末只任ゝ意詠ゝ之とみえたるぞ。眞面目なるべき。撰集などに。連歌といふは。みな本末ばかりにて。數句連續なるはなきなり。歌よりも。いにしへは堪能多かりしを。やう〳〵むかしに劣りゆくをば。むかし人は勝れ。今の世の人は及ばずとこそ。誰も〳〵思ひたるらめ。己思ふに。更にさる昔今のけぢめあるにはあらず。たゞ教導のなすわざにて。おほかた人の才を閉づるゆゑに。むかし人にはおとりゆくぞかし。たとへば。枝をためおけば。雲をも凌ぐべき松も。さながら老ゆるが如し。さきつ年。わが同僚。水練にかしこきあり。いはく。水練を教ふるには。首筋をとらへて。水の中にその首をさし入れ。その息の堪へざるを限にて引きあけ。いく度もかくすれば。やう〳〵息をつむる事ながくなりぬべし。息だにながくなり得れば。死せざる事必せるを。みづから決心するが故に。いかなる水中にいりても。身體の自在は。おのづからなりといへり。げに水練の要術なるべし。なにの道とても。かゝる要處をもてみちびかば。十年の効一年になりぬべし。今かくいふ事。規矩準繩をやぶれとにはあらず。たゞ要處のみをおしへて。人の才を閉づる事なく。今人をして古人におとらしめざる樣にあらまほしさになり。さればかの連歌のさだめも。もと連歌者流のとがにはあらずかし　このもかのもの詞。永久四年百首のうちに。蛙。俊頼。時しもあれみなぶち川を朝ゆけばこのもかのもにかはづなくなり。又。蟬。兼昌。なつ山のなら

陰。左右の手足とかぞへられ。なほ大宜都比賣の御身にかぞへられしも。八の數なるぞかし。この二弊は。ふかくかへりみるべき事なり

○七夕

亡父成章云。たなばたは星の名なり。七夕は。なぬかのゆふべなり。たなばたを七夕とかくべからず。萬葉集にも。「なぬかのよひとよめり。俗に。七夕をたなばたとよむ事。そのいはれをしらずとぞ

○ゆづ

狹衣に「雪やけに足もはれて。なやましうおぼさるれば。ゆでつくろひなどして。あるきなどもし給はず云々。今は霜やけとのみいふは。これよりうつれるにや。又この雪やけ今もいふ所あるにやあらん。湯して足をあたゝむるを。「ゆでつくろひといへるも。今は菜などをこそさはいふなれ。菜をゆづといふは。今のみにあらず。ふるくいひける事なり。催馬樂。大芹「おほせりは。くにのさたもの。小芹こそ。ゆでゝもうまし云々とよめり。されば此狹衣のは。もと菜をゆづといふより。轉用せるなるべし。新撰字鏡。火部云「煠。瀹鬲。同士洽徒牒二反。以レ菜入ニ涌湯一。曰レ煠。煑也。奈由豆ともみえたり

○柚の漬樣

御杖が八世の祖紹務。坐右劄記のうちに。片桐石見殿柚の漬やう。七月時分の青き柚を。木よりとりたてを。上々古酒一升に。鹽三合いれ。からかね鍋にて。七分に煎じ。一夜其まゝ置き候へば。からかねの氣出で申し候。此汁へ。柚二十ばかり。葉をつけて。二十共小口きりにてつぼへ入れ。口をはり包み。水涼しき所に置き申し候。つかひ申し候前日より。水につけ鹽出だし置き申し候なりとあり。もとは世々。足利將軍につかへたりしが。此紹務は。大和大納言秀長卿に仕へたりし。秀長卿御沒落の、ち。浪士となりて京にすみける程。ゆゑありて。その男紹味より。筑後柳川につかへぬ。されば此事。紹務やまとに仕官のうち。石見殿に親炙して聞きたりし事なるべし

○連歌

連歌のことは。をのれえしらぬすぢなれば。さかしらにいふべき事にはあらねど。連歌を嗜める人のかたりつるは。己達のうへは子細たけれど。初學のほ

世にかさなりにたれば。かばかりの事は。人皆よく心得わきたれど。歌は良選資基ばかりの歌よみは。よにありがたし。この失ありて歌よくよむと。失なくして歌よくもあらぬとは。いづれをかまされりといはん。袋草紙は。歌よみのつねにみる物なれば。これらの事を。いかに見。いかに思ふらんとて。驚かしおくなり。これ歌のうへのみにあらず。おほかた人の得失亦かくの如し。失小にして得大ならば。失はとがむるにたらざるべし失大にして。得小ならんに混せなば。有用の人も遂に世にかくれなんかし

○美許登

おほよそ國學に弊ふたつあり。ひとつは。からまねびもはらにて。眞を失ふなり。ふたつは。からいみもはらにて。眞を失ふなり。からごのみに。眞を失ふとは。たとへば。神代卷に「至尊曰レ尊。自餘曰レ命と自注したまへる類なり。「美許登とは。御言の義にて。尊命などの別あることにはあらぬをや。神書に古事記上卷「天神諸命以。詔二伊邪那岐命。伊邪那美命二柱神一修二理固成是多陀用幣流之國一云々とあるをはじめて。みな命の字を用ひられたる。これ卽御言の義なればなり。されば美許登とは。天神の御言のまに〳〵。もの仰せらる、よしをいふた、へとおぼし。此二神。前には神とた、へ。こ、より命と稱へられたるにおもふべし。これをば本として。神功紀に。「宰の字を。「美許登母智と訓ぜられたるなど。思ひ合すべし。上野國多胡郡の碑は。和銅四年の物なり。それに左大臣正二位石上朝臣麻呂をば。「石上尊とかき。右大臣正二位藤原不比等を。「藤原尊とかけり。これら。かの舍人皇子の自注うけがたき所以にして。もと訓を末とし。字にか、はらざる事をさとるべき證ぞかし。又。からいみに眞を失ふとは。神書に。「八の字を多くもちひたまへるを。から國にて。八卦をはじめ。八元。八愷などの類おほく。八の數を貴ぶが故に。それに類するをいみて。八は彌の伊のはぶかりたるなりとする類これなり。たとひから國にて八をたふとぶにもあれ。それに類するにもあれ。か、はるはなか〳〵なるべし。神書の八は。なほ伊夜の義にはあらずして。八の數をいふに疑なき事。同書。大八島の數をほじめ。迦具土神の御身になりませる山津見。伊邪那美命の御身なる雷神など。「頭。胸。腹

ねなり。左右の手を一文字にのべたる長さを。ひとひろとはいふなり。萬葉集卷五に「綿毛奈伎。布可多衣乃。美留乃其等。和々氣佐我禮流。可可布能美肩爾打懸云々とよみたる可々布といふ事。袖中抄には。「か、ふは。つゞれの中にも。ます〳〵やれて。手にもとられぬをいふなるべし。又云。「世話に。きり〳〵すつつりさせ。か、はひろはむとなく。といへりともあり。」宣長ぬしは。新撰字鏡に。「幓。先列反。殘帛也。也不禮可々不とあるこれなりといへり。これによりておもふに。此長歌。もと貧窮問答なればかた〴〵此歌により所もあれば。「さけは。」裂にて。「かゞみは。「か、ひを。みにかよはせていへるにやともおぼし。されども。末句の「ひろやたらぬといふにうちあはせては。なほこれにはあらじかとぞおぼゆる。續日本紀。延喜式等に。「絁の字を用ひられたり。その餘の諸書にも多くみえたり。字彙に「絁。中之切。音詩。說文云。粗緒也。一曰繒屬。廣韻云。繒似レ布などみゆれば。あしききぬなり

〇紫式部見解

源氏物語は。むねとは。女のうへをあげつらへる物ながら。男のうへも。なほ思はぬにはあらざるべし。すべて。草子地ととなふる所々は。式部が見解をみつべき詞なり。されば此物語をみんには。草子地の詞をふかくあぢはひ。心をとゞめて。式部が此物語かきたる主意を知るべし。いはゞ草子地をもて一部をく、りたる物なれば。その中間なる詞花に。めをうばゝるまじきなり

〇歌の得失

袋草紙に。良暹法師。「宿ちかくしばしながなけほと、ぎすけふのあやめのねにもくらべよ。これ長鳴の心によみたれば。懷圓嘲哢して。ほと、鳴きはじめて。きすとなかむにやといひき。また良暹。江州より上洛の時。會坂にしぐれにあひて。石門にたちいりて。かしこくぬれずと人にいひしを。懷圓咲ひて。それは石の廉にて侍る。不二知給一歟不便云々といひき。又近藏人君意馬「鷄冠木をば。紅葉と存じて。於二或所一もみぢのもみぢとよみて被レ咲。また能登大夫資基。「耆ぼしつめといふ事をよみて被二皷動一など。かうやうの失をさま〴〵あげられたり。むげにいふがひなききは、しらず。今の世には。先達の發明ども。

かけるを。草書して。「きゝぬ」とかけるが。後にかくなれるなり。から人も。「死罪死罪を。「死々罪々とかき。これを草書して。「死ゝ罪ゝなどかけるが多し。「はろ〴〵」といふことを。日本紀に。「波々魯々爾とかき。「もそろ〳〵に」といふ事を。出雲風土記に。「毛々曾々呂々。「こをろ〳〵を。古事記に。「許々袁々呂々とかけるも。同じ事なり。「浦々山々など。眞名にかゝむには。「浦〳〵山〳〵などはかくまじきなり。又行つまりて。下に。「浦とかき。上へあげて。「ゝなどかくべからず。もし。しか下につまりたらん時は。上にも。「浦とかくべしとぞ傭書家などのかけるものには。此あやまり多き事なり

○學問

荀子勸學篇に「小人之學也。入二乎耳一出二乎口一。口耳之間則四寸耳。曷以美二七尺之軀一哉云々。目に見たるも亦しかり。すべて見聞きたる事。さながらもちひたらんは。いまだ我物とはいふべからず。美味の物とても。かまずしてくらはむに。その味いかでか美ならん。たゞ一言も。よくかみくだきて。わが物としおきてさてのちこそもちふべけれ

○散木

後頼朝臣の家集を。散木奇歌集と名づけられたり。此散木とは無用なる木の事なり。莊子にみえたり。これによりて。謙遜して名づけられしなり。いはゆる散位。散人など。皆この心なり散事といふことも紀中にみゆ

○あしぎぬ

後撰集に。「あしぎぬはさげかゝみてぞ人はきるひろやたらぬと思ふなるべし。といふ歌あり。あしぎぬは。よからぬきぬを云ふ。さげかゝみてとは。手をさげ屈みての心なるべし。ひろとは。左右の手をのべては。尋にたらずと思ふがゆゑに。手をさげかゞみて。人の着るといふ心なるべし。あしぎぬは。幅もせばければなり。催馬樂。總角に「安介萬支也。止宇止宇。比呂波可利也。止宇止宇。左可利天禰太禮止毛。萬呂比安比介利止宇止宇。加與利安比介利。止宇止宇。とあるも。一尋ばかり引きさがりて寢たるをいふ。其外。古事記に「八尋殿」各隨二己身之尋長一云々。「一尋和邇などいひ。六帖に。「ちひろの舟ともよみ。其外。海。また竹などを。千尋とよむ事つ

そうぞくを男にかつくると等類にて。いづれも〳〵。いと心ふかきわざなり。なほ。法師にすら。女のさ

永久の頃の繪巻物
にみえたる圖也
この手にもてるは
ふみなり

狹衣にかつけもの
たびたる人のうち
かつきてかへりた
るさまを所々かゝ
れたり

うぞくをかつけられしなり。佛名には綿をかつけらる、例なり

○手もすま

手もすまにといふ詞。萬葉集巻八。「戯奴(ワケ)（變云和記）之爲(タイ)。吾手母須麻爾(ワガテモスマニ)。春野爾(ハルノヌニ)。拔流芽花(ヌケルツバナ)曾。御食而肥座(メシテコエマセ)。また同巻に。「手母須麻爾(テモスマニ)。殖之茅子(ウエシハギ)爾也(ニヤ)。還者(カヘリテハ)。雖見不飽(ミレドモアカズ)。情將盡(コヽロツクサン)とあるをはじめにて。のちにも多くよむ詞なり。宣長ぬしは。須麻は數(シバ)のうつれるにやといはれたり。なほ思ふに。古事記神書に。「八尺勾(ヤサカノマガ)璁之五百津之美須麻流之珠(タマノイホツノミスマルノタマ)とあるを。神代巻には。御統とか、せたまへり。この須麻流は。統るといふに同じ語にて。星の昴といふを。須麻流星といふもまた同じ。されば。手もすまにとは。手してするわざのあつまれる貌なれば。卽。手のたえまおかず。其わざをなす心なり。數(シバ)といふも。もとはこの須麻と同義の詞なるべければ。宣長ぬしが說に事たりぬる事なれど。須麻流は。やがて同詞なれば。こゝに補ひおくなり

○夢現

亡父成章云。いねてみるは夢なり。さめてみる所はうつゝなり。今。いふがひなきものゝ。夢にもあらずさめてもあらぬを。うつゝといふは。夢かうつゝかなどいふ詞を。大かたに心得たるなるべしといへり。げに。俗言にいふ所をもて。古言をあやまる事すくなからずかし

○重點

亡父成章。又云。重點は。かんなには「きぬ〳〵。「あふな〳〵。如此かくべし。いにしへ。「きゝぬゝと

云々。この左注に。「右。神龜四年正月。數王子及諸臣子等。集ニ於春日野一而作ニ打毬之樂一。其日。忽天陰雨雷電。此時。宮中無ニ侍從及侍衛一。勅行ニ刑罰一。散ニ禁於授刀寮一。而妄不レ得レ出ニ道路一。于レ時。悒憤卽作ニ斯歌一とある。この散禁とは。令義解云。「凡禁囚死罪枷杻。婦女及流罪以下去レ杻其罪散禁とみえたり。これ他行を禁ぜらる丶を。散禁といふなり。前年。わが伯父淇園。禮記講ぜしを聞きしに。「散齋七日。致齋三日といふ事ある。此散の字の義は。耳目口鼻に各心をおき。嗜欲を糺してゆくを云ふ。されば心を散にして。ものいみする義なり。アソコ丶と譯する字なりといへり。致齋は別のわざするにあらず。散齋してのうへにみがきをかくる事なりとぞ。これは。祭統の語にて。祭のうへのものいみをいふなれど。散の字の心は同じかるべし。續日本紀卷八。養老五年正月甲戌の詔に。上略「自今以去。若有ニ風雨雷震之異一。各存ニ極言忠正之志一とあり。神龜四年までは。終に六年なるに。此詔をそむかれたりける故に。かく散禁はかうぶられたりけるにこそ

○纏頭

「ごぜんにはかつけものし。御うまそひ。ざうしきには。腰ざしせさせ云々と宇都保物語にみゆ。この腰ざしとは。腰にさして歸るべく。絁布(アシギヌ)など。巻きたるながらとらするをいふにや。必。それにもかぎるまじけれど。下ざまなるものにとらする物をいふにて。かづけものといふは。一等かろきなるべし。かつけものとは。頭にかつきてまかりいでぬべき心なるべし。いつの頃よりか。そのこにはをのこの衣をかつくる事とは成りにけん。むかしは。かつけ物とだにいへば。必。女のさうぞくなりき。をのこに。女の裝束をかつけられし事。わが御國ぶりみつべき所なり。あらはにいはんはなが〳〵なれば。今。その意味はこ丶にもらしつ。かの小松内府の源仲綱に。傾城のもとへ乘りてかよへとて。馬をたまひしその意味女の

永久の頃の繪卷物にみえたるかつけ物の圖

きぞかし。おほよそ。急なるとは。思慮計較を用ふべきいとまなき事をいふ。緩はこれが反なり。すべて緩をいふは。急の別なり。急をいふは。緩の別にて。たがひにてらして。緩急を示すなりとしるべし。よくおもひわくべき事なり

○助字のたぐひ

すべて。助字。やすめ字。發語などいふ事。先達の注書どもにみゆる。常のことなり。しかれども。たすくるも。助くべきゆゑありてこそ助けめ。やすむるも。やすむべき故ありてこそやすめ、。發すも。おこすべきゆゑありてこそおこさめ。或はたすけ。或はたすけず。或はやすめ。或はやすめず。或はおこし。或はおこさずやはあるべき。さるべき故をもとかずして。たゞ。助字。やすめ字。發語などいひてやみなんは。くちをしきわざならずや。後學いうそくの人も。猶これをことわるなく。たゞ先蹤をふみて。さてのみやみたるは。所詮は。遁辭とやいふべからん。しか。たすけたすけず。やすめやすめず。おこしおこさぬは。必その別をばよくわきまへずば。おそらくは。たすくべきをたすけず。たすくまじきをたすけ。やすむべきをやすめず。やすむまじきをやすめ。おこすべきをおこさず。おこすまじきをおこすあやまり。必まじるべきをや

○詞の延約

先達の注書に。詞の延約ふたつをいはれたり。たとへば。「かへらふは。かへるを延べたるなり。「けらく（此反。かへるは。）は。けるを延べたるなりなどいふこれなり。（かへらふの約。けるは。けらくの約なりとの心なるべけれど。らふらくなどは。別に義ある詞なれば。延約をもていふまじき事なり。くはしくは。こゝにいはず）歌はおほかた。もじの數もさだまれる物なるが故に。やごとなくのべつゞめたるなども。たまたまはあるべけれど。延約も。なほ皆義ある事なるを。おもふまゝに。延約をもてとかば。詞の大旨をうしなふべし。反切なども。やごとなき法あるを。しひてもとめば。必しひごといでくべきぞかし。しひごとも。かれこそしひごとしつれと。人にあざけられむは。たゞおのれひとりがうへなればさてありぬべし。後學をまどはする罪。さりがたかるべきをや

○散禁

萬葉集卷六。「四年（神龜なり）丁卯春正月。勅二諸王諸臣子等一。散二禁於授刀寮一時歌一首幷短歌　「眞葛延春日之山者（マクヅハフカスガノヤマハ）

と更におぼゆゑは。すなほにして才略などもなきものは。世祿とし。才ありて事にさときものは。ほど〲に業をあたへて。世祿の者とせずとぞ。このぬし。漢籍をひろくみたりし人なりしかば。もし。この韓非子が語を思はれつるにや。東坡詩に。「人皆養レ子望二聰明一。我被三聰明誤二一生一。惟願孩子愚且魯。無實無難列二公卿一とつくれり。實事を經たる人は。此さかひをばよくしれりき。げにわが大御國にも。この淵にしづめりしは。かぞへもあへずかし。しかれども。才略あるとなきとは。まのあたり。事の遲速あるが故に。世みなこの韓非子が心をしらぬぞ。いと心ぐるしきや

○鶴脛

うつぼ物語に。「むかし。うちの院に。つるはぎはたかにて。家にゐつゝ。ふみのみゆるかぎりはまもらへて。よるは螢をあつめて。學問をし侍りし時に。こゝち常におもしろくたのもしく。おもふ事なくはべりし云々。これは書生の。學問に心もはらにて。容體などに心なきさまをば。鶴脛裸とはかゝれたるなり。又。同じ物語に。「かいねりのこうちぎ。すきはりうちき給ひて。つるはぎにて。いとちひさくおかしげなる琵琶をかきいだきて云々とあるは。童女のさまなり。いづれも。衣のすそみじかくて。脛の出でたるを云ふ。又。拾遺集に。「かも河を鶴はぎにてもわたるかなとあるは。衣みじかきにはあらで。裾をまくりあげたるを云ふ。詞はもちふるにしたがひて。かく自在なるものなる事。これひとつにてもおもふべし。これ皆。詞のうへの自在にはあらず。うへはたゞひとつにて。うちの自在なるぞかし

○詞の緩急

おほよそ。「これを。こといひ。「それを。そといひ。「たれを。たといひ。「かれを。かといふたぐひ猶多し。「これといふは。事がらの緩きなり。こといふは急なるなり。みな緩急のたがひめなり。たとへば。萬葉集巻三に。「如聞。眞貴久。奇母。神左備居賀。許禮能水島とよめる歌。「許禮能は。「許能に同じとのみ心えては全からず。眞淵ぬしが。注書どもに。「これはといふべき所をも。すべて。「こはとのみかゝれたり。そが中には。かなへりとみゆる所もあれど。緩くてあるべき所も多し。大家の詞には。世に醉ふ人おほ

くつくりたるを。このかつらにまとひてたてたり。かかつらなければあをきいとよし。このこゝろは。かぶりのまへのすぢのもとゝ。うしろのかつらむすびたる所にたつといふ人あり。ひかげ。かた〳〵に八すぢもあり。こゝろ〳〵なりとみゆ。これらはまさしく。心葉とは。そのをり枝の名なるをや。おほかた人に物贈る時。風情をあらせてする事常なれど。此装束抄をみれば。おくり物にかぎらず。風情にしつる事とおぼし。今民間に。上巳。端午。重陽等のおくり物に。桃。菖蒲。菊などをりそふるは。この心葉のなごりなるべし

源氏物語。総角の巻に。「中の君。くみなどしはて給ひて。心葉などは。えこそおもひよりはべられど。せめて聞えたまへば云々。又。相如集に。「かう二位の大将どのゝさふらひの人々。さみしがりて。すけゆきかげあきらがもとにいひやりたれば。すけゆきからものゝくだものゝなかに。ぜに。ふたついれて。「ともしきをたが心葉と人とはゞいさしら菊の露となたつや。又源太府集に。「内大臣どのに。折櫃にとりをいれて。梅のはなさしてまゐらせたりしかば。「うぐひすやぬきすてゝけんきゞすさへいつよりきるぞうめのはな笠などあるをもおもひあはすべし。

○雲のかへし

雲のかへしとは。雨のはるゝ時にふく風をいふ。かへすとは。西北の方より。東南のかたに雲を吹きやるを云ふ。雲。西北にゆけば。かならず雨ふる。その反をおもふべし。袋草紙云。「後拾遺にもれたる究竟の歌とて。堀川右府。「春雨にぬれてたづねむ山ざくら雲のかへしのあらしもぞふく。常にはかく雲のかへしとのみいふを。更科日記に。「雨ふりくらいたる夜。雲かへる風。はげしう打ち吹きてともかけり宇治拾遺巻三に。「こちのかへしの風とよめるは。西風の事をいへり

○一升瓶

世継物語に。「ひとりして。ふたりが物をばもつべきぞ。ひとますがめに。ふたますいるやといふ云々。今俗に一升いる袋には一升といふは。これがもとなるべし。かめといふは。酒などいるゝうへにていふにこそ。後世。袋といふは。米などのうへにいふがたがへり

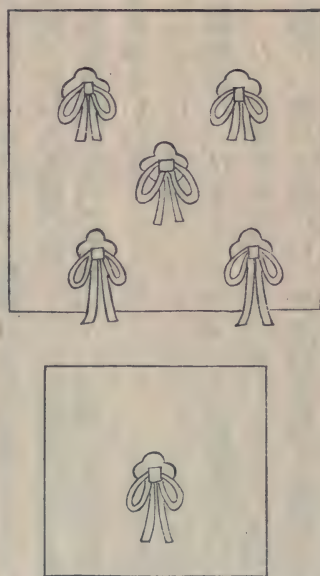
○君の淵

韓非子曰。「勢重者人君淵也。簡公失㆓之於田成㆒。晋公失㆓之六卿㆒。おのれしたしき家。いまだ創業より八十年ばかり。其さかえたぐひなし。そのさだめおかれし家の掟ども。こと〴〵くいたり深きが中に。こ

かぎり。「心づくしは。木間にかぎれるやうに心得るも。皆古人のあとをふむなり。古人のあとをふまむは。やむことなき事なれど。古人とても。いひもらせる事あらんは。勿論なるを。しかのみ心えたるは。愚なるにちかゝるべしかし

○心葉

心葉とは。風情のために。つくり花のえだなどを。ものにつくるをいふ。類聚雜要抄に。心葉の圖ありて。「心葉二枚。甲乙料。象眼靑村濃二倍方九寸。銀銅薄。梅花之上。上卷付之。上卷手長二寸。末垂五寸。壺共之上置之。梅花三倍とあり。これは壺のふたなり。されど壺にもかぎらず。同抄。筥にも心葉はみゆ。この圖は。板にてつくりて。上に大なるは五所。小なるは一所。くみ緒のむすべるをつけたり。今案ずるに。もと此板をば心葉といふにはあらじ。その板のうへに。をり枝などをつくるをいふ名なりしが。つひに。その板をも心葉とはいひなりぬるにこそとおぼしきなり。源氏物語に。「えんにすきたるぢんの筥に。おなじき心葉のさまなど。いと今めかし云々とあるは。此板を心葉といへるなるべし。榮花物語に。「筥ひとよろひに。たきものいれてつかはす。心葉。梅の枝なりとあり。又。雅亮裝束抄といふ物に。「かぶりに。ひかげといふものを。左右のみゝのうへにさげたり。かぶりのこじのもとに。ひかげのかつらといふ物をゆひて。しろきいとのはしなどほとからくみなるして。あげまきになをむすびさげて。かたく

類聚雜要抄心葉圖

に四すぢつゝ。かぶりのつのをはさめて。まへにふたすぢ。うしろにふたすぢ。左右にさげたるなり。この糸かざる所に。こゝろはとて。うめの枝のちひさ

ふりくらし丶雨なればなり。又「二日。雨風やまず。よもすがら神佛をいのるとあるは。書にはわたらねばなり。この二例のけぢめをおもふべし。後撰集に不知讀人「よもすがらぬれてわびつるから衣あふ坂山に道まどひして。千載集に。後悳「よもすがら物思ふ比は明けやらで閨のひまさへつれなかりけりなどよめるは。書には必けぢめあるべき事の。しかあらぬをなげきて。もとはいへるなり。然るを。後世になりては。草根集に。正徹か家集なり「よもすがらをだまきならでくり返ししづやの小菅うたふ聲哉。一人三臣に。雅俊「よもすがら嵐もよきてはらふなよ月にさはらぬ花のしら雪などあるは。神樂。月ともに。ひるとのけぢめあるべき物にもあらねば。ももじ詮なし。されば。物がら事がらによる詞なりとしるべし。萬葉集。巻十三。長歌上下略「赤根刺晝者終爾野干玉之夜者須柄爾(アカチサスヒルハシミラニヌバタマノヨルハスガラニ)云々。古今集にもと「よるはすがらに夢にみえつゝともあり　かくはとよめるにむかへてもおもひうべし

○猿滑

いま世に猿すべりといふ木は。百日紅といふ。これをば。猿なめりとぞいひけらし。夫木集に。猿滑。「あし引の山のかけぢの猿なめりすべらかにてもよをわたらばや　為家　とみゆ。しかれども。此末句。「すべらかにてもとあるは。「さるすべりすべらかとつゞくべき語勢とおぼゆれば。滑といふ字は。もと義をもてかきたりしを。萬葉集に。「常滑(トコナメ)などかけるたぐひに見て。後人さかしらに。なめりと書きあやまれるにやとおぼし

○葉守神

枕草紙に。「かしは木いとおかし。葉守の神のますらんも。いとかしこしとある。これは拾遺集に。「かしは木に葉守の神のましけるをしらでぞをりしたゝりなさるなといふ歌よりいふなるべし。其後にも。新古今集に。雨中木繁。基俊。「玉がしはしげりにけりな五月雨に葉守の神のしめはふるまでともみえたり。葉もりの神といふ神は。神書にみえず。これは。かしは木の葉のおちぬがゆゑに。葉を守りたまひておとし給はぬ神のおはしますらんとていふなるべし。されど。かしは木にかぎれるは心えがたし。たゞいひならへるにしたがふなるべし。おほかた。かうやうの類おほき事なり。「このもかのもは。つくばねに

「いさゝめにときまつまにぞひはへぬる心ばせをば人にみえつゝとあり。これは。芭蕉一種ならず。さゝまつひばばせをは。四くさを物名とせるなり

○稱譽

水鏡。平城天皇の條に。「同二年十月廿二日に。弘法大師。もろこしよりかへり給へりき。同書。桓武天皇の條に。廿三年五月十二日。弘法大師。生年卅一と申しゝに。唐へわたりたまひき。七月に。傳教大師。おなじくわたりたまへりきとみゆ。そのまへに。傳教大師には。入唐の宣旨をくだされたりし事あり。因によりてこゝに記しつ東寺の佛法。これよりつたはりしなり。この大師。あらはに權者とふるまひたりき。御手。ならびなくかゝせたまひしかば。もろこしにても。御殿の壁ふたま侍るなるに。義之といひし手かきの。ものをかきたりけるが。年ひさしくなりて。くづれけにれば。又あらためられて後。大師に書き給へともろこしの帝申したまひければ。いつゝの筆を。御口。左右の御あし手にとりて。かべにとびつきて。一度にいつくだりになんかき給ひけるとあり。これ必虚談にはあるまじけれど。あまりにほめ過ぐせば。なか〳〵なることもある物なり。蓮如上人の御筆草とて。草の根の細きをよせて。筆の如くしなして。ものかゝせたまへりしとか。それは。筆のともしき國なりしかば。おぼしつきて。さる事もしたまひつらめ。この上人の御とくにて。その地にかぎりて。此草はおふるなりといふに。近き頃。角鹿。氣比神社の神職。石束ぬし。そのあたりに見得たりとて贈られつる。よく筆に代れり。かの御筆草はこれなるべし。稱譽も。程を過ぐれば。かへりて其德をそこなふ事もあるべし。いはゆる蛇足ならんかし

石束ぬしに得たるを。今こゝに圖す。本草綱目穀之部に。「藺草とあり。西土にもあるなるべし。こゝにては筆草。また。弘法むぎともいふとぞ。越前。越中にいと多くあり。又。長門。出雲などにもあり

○夜もすがら

よもすがらといふ詞。後世には。いたく心得あやまれり。それは。此詞を誤れるにはあらで。もゝじに麁なるなり。事がらによりて。終日こそあらめ。夜さへ終夜。さあるべしやと思ふ時。「よもすがらとはいふべきなり。土佐日記に。前日。「ひとひ。雨やまずとあり「廿八日。よもすがら。雨もやまず。けさもとあるは。その終日

〇子持鳥

古今六帖に。「夏のよの子もちがらすのさがぞかしよふかくなきて君をやりつるとよめるをみれば。よるなく鶴のみならず。鳥とても夜はねぶたがるべきを。なきて飛ぶは。子を思ふ道のやむことなきしるし。萬葉集卷の五。山上憶良朝臣が。長歌に。「世人之貴慕。七種之。寶毛我波。何爲。和我中能。產禮出有。白玉之。吾子古日者下略これは。男子古日をうしなはれける時の歌なり。又土佐日記に。愛女を土佐にてうしなはれし歎を。かへすぐゝかゝれたり。この大人たちの心のうち。からすすらとおもへば。いとゞおもひやらるかし

〇眞理

ある人のかたりき。筥などつくるに。おほよそ堅き木は。やはらかなる糊ならではよくつかず。やはらかなる木は。かたき糊してつけざればよくつかずとぞ。世のことわりは。凡庸のおもふには。かならずたかふ所ある事。いと多かるべし。おのれらがはかなきうへは。とてもかくてもありぬべし。天の下をまつりごち。國ををさめ給ふきはゝ。おほかたの理は理にて。かゝる眞理をさとりて。ことはりし給はゞ。事はすくなくて。功は大なるべし。おのれ年比。これらにつけておもひよれる事どもゝあれど。ことわりつよき世なれば。たゞ口つぐみてぞやみなんかし。菅家萬葉集の歌に。「かぎりなくふかきおもひをしのぶれば身をころすにもおとらざりけり

〇泊瀬寺

信明集に。「ばせを葉佛名なり長谷寺やけたる比「世の中のたのみどころにせしものをばせをはかくややかむと思ひしとあるをみれば。その頃やけしなるべし。元亨釋書。卷廿八云「長谷寺者。比丘道明。沙彌德道乃法道仙人也戮力建中略有沙彌德達。養老四年移置峯頭。蓮欲彫造而無由。朝暮向木悲泣禮拜。時藤房前。奉勅與官租辨之。神龜四年成屈行基僧正落慶云々とあり。信明朝臣は。おなじ集に。「亭子院うせさせ給ひつる御ふくにて。「こぞの春枝にてをりし藤のはな衣にきむとおもひけむやは。とあれば。宇多帝より。延喜帝の御時にかゝれる人なり。その時代おもふべし

因云。芭蕉を物名にてよめる歌は。古今集にも。

皮やぶれたりければ。いとふくつけゝれど。おのれ一期のおもひ出に。皮またきにて。いま一曲をと乞ひけるに。安永心よからぬおもゝちして。そこはなにを業とし給ふぞと問ふ。大雅答へて。繪をかき侍るといふ。安永のいへらく。さは。そこは。繪はいと拙かるべしといふに。大雅おもへらく。一道に達しぬれば。よろづのいたりも深きならひなれど。これは瞽者なるを。いかでか繪事はしるべきと。なまかたはらいたけれど。いかなれば。おのれ繪の拙きを知り給ふぞといふに。安永わらひて。いま裏皮やぶれたる三絃にてひきたるを。あかずおぼす。そのきさまにて。繪の拙さはしるきなり。すべて三絃は。右に撥をもてれば。右手にてひく事いふも更なれど。左手に精神なくては。妙處にはいたるべからず。いまわが左手の精神。そこの耳に入らぬをもて推すに。繪事もまた。筆は右手にもちてかくいふもさらなれど。おそらくは。左手に精神あらじとおもふが故なりといひき。大雅いといたく。感服懺悔して。ふかく恩を謝してかへりて後。繪にふかく心やいりたりけん遂に世に鳴るばかり一家をおこされたりき。これひとへに。安永撿校が恩にて。やがてわが繪の師なりと。常に自いはれきと。大雅にうるはしかりし。本間某これをかたられき。はかなきわざといへども。いたりをきはめたるきは、。人の耳目のおよばぬ所にすら精神はみちたり。此物がたり。もはらわが御國ぶりの要を得たり。ものいはむにも。うちふるまはむにも。文か、むにも歌よまむにも。たゞ耳目のおよぶをのみかぎりと心得なば。かの安永檢校にわらはれんかし

○おぼつかな

堀川院御時百首に。霞。公實。「春がすみしかまの海をこめつればおぼつかなしやあまのつり舟。このおぼつかなしといふ詞。今の俗言にいふこゝちす。いにしへは。「おほろか「おぼゝしなどいふ詞とおなじく。何事にもあれ。とりとめなきほどの心にて。おほくは不審なるよしをいひつけたる詞なり。この公實朝臣が歌は。芭蕉翁がはいかいの發句に「鐙より船頭醉ふておぼつかなといへるに似たり。これは。もとより。俗語のまゝを用ひたるなれば子細なし。歌には心すべき事なり

なりけり。又。宇治拾遺。卷十三に。「かぶりせさすとて。よりて馬ぞひのいはく。おちたまふすなはち。かぶりをたてまつらでなどかくよしなしごとはおほせらる、ぞととひければ云々などみゆ。これらの例を思ふに。「すなはちといふ詞は。漢字のもちひさまとは。置き樣かはれる思ふべし

○物語ぶみの詞

宇都保物語は。時代作者ともに詳ならねど。源氏物語繪合の卷に。「竹とりのおきなに。うつぼのとしかげの卷をあはせてと。古物語に列せられたり。げにおほかたの事がらも。詞づかひなども。ふるめきたり。かの四町など。宇都保物語をまなばれたる所もみゆ。されども。うつぼ物語も源氏物語も。詞はふるきもあり。また。俗語のまゝをかゝれたるもまじり。なほ。字音をさながら用ひられたる詞なども多きぞかし。狹衣は。紫式部がむすめ。大貳三位の作なれば。源氏物語とは。いさゝかのおくれなるを。「法師たてら。などいふ詞さへみえたり。宣長ぬし。すでに源氏物語のことはあげつらはれき。げに御國の文章純粹なるものは。祝詞宣命なり。しかれども。これのうち宣命は。字音ながら用ひられたる所々うちまじれり。用捨あるべし。されば文章は。たゞ祝詞宣命のごとく。かくべきことなりとはいへども。かく新古雅俗をえ心わきてのちは。いかにも／＼かくべきぞかし。たとへば。「かなといふ脚結は。中昔よりいで來てかみつよにては「かもとのみよめり。（疑のかもなも。ひとつに。かもとよむ事。かみつよの例なり）かく心得てのちは。「かもとよむべく。「かなもよむべきがごとし。大かた後世の文章は。中頃のすがたを學ぶやうなれど。所詮は眞名ぶみを。假名にうつしたる物のごとし。いにしへに照して。こゝろをもちふべきなり

○ものゝ上手

大雅堂といひし人。近頃書畫をもて鳴れり。わかゝりし時。三絃をこのめるあまり。その頃の妙手なりし。安永檢校といふ瞽者のちか隣に。わざと卜居して。日々に人々にをしふるを聞きて。心をやられき。ある時。安永が家にいたりて。かく殊更に近隣に卜居したるよしを告げて。一曲をのぞむ。安永その志の懇なるを感じて。やがてかたはらにありし三絃をさぐりとりて。ひきてきかせき。然るに。その三絃。裏

給申文に。藤原良清望ニ揚名介一とありて。山城權介に任ぜらる。愚老も先年執筆の自給に。この申文を献じて。常陸權介に任じ侍りき。後に思へはべれば。常陸國は。豫を守にいたり。他國の介に任ずべかりけり。但。難にてはなかるべしとあり。園大曆。卷六下。貞和二年「廿四日天晴。右相重被レ談ニ除目事一。揚名介名字聊存旨候者也。比興候。黄門二合云々。昨日委細貴報散蒙候畢。除書一本進覧候。抑平納言二合事。事成文無御存候けり。無念候。任府返上申文相副任頗一失候歟。但。參議二合猶邂逅例勘出了。如何。揚名府候き。與ニ申文一姓相違。已難書候歟。然而邂逅申文折留候條無念候間。乍存許任了。他事獨可レ承ニ紕繆一候也とも。又「揚名介事。尤珍重存候。さては御申文候哉。爲ニ後勘一一本被ニ注下一候者恐悦候云々。又「揚名申文。無念之由。雖申入候。依ニ勅許一書出了。於名字者頗存旨候。比興候などみゆ。同卷六上に。「山城權介藤原良清臣基臨時申とあるは此事なり。臣基公は。右府にて。この除目執事なり。まへに右相とあるこれなり即。源語秘訣にみえたるも。此良清が事なり。これらも考へあはすべし

○訓と字の先後

論語に「繪事後レ素とあるをば。「しろきをのちにすとよみ來れど。語意ときがたし。わが伯父淇園。「しろきよりのちなりとよませられき。げにさる事なり。すべて漢土の書を訓讀せむに。よく心してよまずば。かうやうの事多かるべし。わづらはしと思はゞ。直讀せむ方。なか〳〵まさるべし。されど直讀のみしては。文義心得がたきによりて。人皆訓讀はするなりけり。おほかたの訓は。もとわが御國言にて。それをかりて漢字をよむ事なるを。いふがひなき人は。漢字の訓の如く心えたる多し。いはゆる。「けだし「あだかも「もはら「またく「すなはち「はなはだなどは。ことにわが御國言とはおもはずかし。かつて。漢字の訓にはあらず。萬葉集中。いづれもおほくよめれば。訓は先にして。字はのちなり。ゆめ〳〵この前後をわするまじきなり。されば漢籍をよまむには。まづわが御國言をわきまへざれば。かの後素のたぐひおほかるべし

因云。この「けだし「あだかもの類は。引くにおよばず。「すなはちといふ詞。古今六帖に。「春たゝん。すなはちことに君が爲千とせつむべきわが菜

つけたるあり。さだまれる事はなき物なりとぞ。これをつけもの、風流とも。又たゞ風流ともいふなり。いかなる故にてつくといふ事になく。たゞ風流にしそめしことの。ならひのやうになりぬるなるべし。かく何の故ともしられぬことなるが故に。のちより

文永加茂祭放免かつけものしたる圖

角倉家古寫本の平家物語には法便とかけり放免の音をとりてかける假字なり

はさまぐの理をつけて。事ありがほにいひなすなりけり。續世繼物語。巻四に。「宇治行幸ありて。皇后宮。ひきつゞきていらせたまひし。うるはしき行路のやうには侍らで。皆かりぎぬにふりうなどして云々。これは。高陽院の御事なり。これを見れば。

かうやうの供奉にはせざりし事なるべし

かうやうの事。ことぐしげにいふ事。源氏物語の揚名介のたぐひなりとぞおぼゆる。後成恩寺殿。源語秘訣に。清愼公記云。康保四年七月廿二日。宰相中將來言二雜事一云々。入レ夜之後。右少將爲光朝臣來曰。明日除目。一昨。右大將與二藤大納言一議定し候由傳承云々。除名關白。早可レ被二停止一者也。今案。冷泉天皇は。民部卿元方が怨靈によりて。狂亂におはしましける時。外戚の人々。九條殿一族官位昇進等事を議定せしかば。小野宮殿。此時關白にありながら。見所し給ひし故に。述懐し侍りて。揚名關白はやくやめらるべしと記せられ侍り。揚名二字は。諸國介にかぎるべからず。故に。揚名の關白と清愼公はのたまへり。又揚名掾。揚名目ともいへり。揚名はたゞ名ばかりといふ心なり。たとへば。其官になりたれども。職掌もなく。得分もなきをいへり。或抄に。揚名介は。不給以載符とみえたり。官符を給はる程にては。國へ下りて。吏務をしるべきゆゑなり。寛弘二年除目。藤原維光望二揚名介一申文にて。常陸權介に任ぜらる。近比。貞和二年二月除目執筆。後普光園攝政自

ひなききはこそあらめ。世にその名しられたる人すら。このあやまりはみゆめり

○最負

道三國手のたはれ歌とて。人のかたりつる。「醫者はたゞ下手も上手もなかりけり。ひいき〱に時のしあはせとなん。げに志あらむ人は。必いきどほるべき世のさまなりかし。ひいきといふに。最負の字を俗にもちふ。此字。文選西京賦に。「巨靈最負とみえて。注作力貌とも。また有力貌ともいへり。よくかなひたる文字にこそ。尺素往來に。「奉行若耽二賄賂一屬託一令レ最二負一方一者。太以不當也ともみゆ

○放免 附揚名介

野荒問答云。荒井勘解由 問 野宮前黄門定基卿 答「つれ〲草の。三箇の大事とやらん。世間に申しふらし候。かの草紙に。放免のつけものと候を。こと〲しく秘說ありと申しなし候。これは。俳諧師の貞德と申すもの申し出だしたる由聞及候。天台の空假中を以て。其說をなす由に候。一笑に候。貞德は。官家の故事にならはず候ゆゑ。放免と申すものを不知候て。申し出でたる事と存候。此事。平家物語にも。見え申し候。文覺流されの卷に。伊豆の國へゐてまかるに。放免兩三人をぞつけられける。これらが申しけるは。廳の下部のならひ。か樣の事につきてこそ。おのづからえこも候へと有之候。此文段。よき放免の注に候。撿非違使廳の下部を放免と申し候なりとみえたり。何事にも。事ありげにいひなして。口傳などいふ事に。おもひの外にたやすき事。これにかぎらず。いと多きものなり。その口授口傳など、いふ事をたづぬるに。おほくはあらぬ理どもをもてつけて。ゆゑありげにのみいふなるべし。放免の事。三代實錄。卷十六に。貞觀十一年七月「五日辛酉。讚岐國捕獲海賊。男二人。女二人。勅男依レ法行レ之。女時從二放免一と見え。續日本紀などにも。罪人をゆるさるゝを。放免原免など。あまた所みえたり。されば もと罪ある者を放ち免さるゝ事にて。その放免せられしものどもを。撿非違使廳の下部となしてつかはるゝをもて。やがて放免といふこそ。廳にしもこれを屬せらるゝは。向後をつゝしましむべきが爲なるべし。つけものとはその時々。おもひよれるまゝにつけたりし物なり。古き繪卷物どもを見るに。思もよらぬ物どもを

事も。すぐれたらんをあしとにはあらねど。すぐれたるばかり。おとりたる所あらむは。すぐれたる事なからん人と。なほ同等なるべきなり。天暦のみかどの勅判。まことにかしこしとも。かしこくぞおぼゆるなり

○山田之曾富騰

古今集に。「足引の山田のそほづおのれさへわれをほしといふうれはしきこと。壬二集に。「秋のたにたてしそほづのすがたまで霜にまよへる冬の山ざと。此山田のそほづ。もと神の御名にて。山田のそほどなるを。杼を豆にかよはせたるなり。古事記神書に。「故顯二白其少名毘古那神一所謂久延毘古者。於レ今者。山田之曾富騰者也。此神者。足雖レ不レ行。盡知二天下之事一神也とあるこれなり。後世にては。案山子の事の如くいふは附會にて。もとは。此曾富騰の神の御像を作りてまつりたりけるが。おのづから案山子の如くなるより。心えあやまれるなるべし。田にしも祭るべき御たまあらん事。神書のうへにはみえざる事なり。強に田の爲にまつりたるにはあらで。盡知二天下之事一といふ御たまのかしこさに。農家村落などに祭りたるが。案山子に混じたるにやあらん。添水などいふ説は。もとよりよしなき事なり。なほ。後撰集。戀四に。「足曳の山田のそほづうちわびて獨かへるのねをぞなきつる。夫木集に。信實「かり小田にたてるそほづはかひもなしいたづらならば門まもりせよなどもみゆ

○古言簡約

古今集。春下に。「仁和の中將のみやす所の家に歌合せむとしける時によみけるとあるを。たゞおほよそに見ば。歌合しける時によみけるとかける心なりとおぼゆべし。これは歌合の催ありて。その歌合はやみけれど。そのれうによみたりし歌なりとの心なり。後の世人の書きざまとは簡約なるけぢめ思ふべし

○文の詞

文をかくに。心うべき事あり。「まかる「たうべ「はべるなどの詞なり。これら。撰集の詞書に。つねかゝれたるは。撰集は。もと奏覽の爲にかける詞なればなり。されば物語ぶみなどにも人にものいひ答ふる時。または消息などにこそ「はべる「まかるなどはかゝれたれ。よくおもひわくべき事なり。いふが

事。おほかた詞の緊要なるを。後世は。もちひざまいたくかはれり。萬葉集巻五。山上憶良ぬしが長歌に「神代欲理。云傳介良久。虚見津。倭國者。皇神能。伊都久志吉國。言靈能。佐吉播布國等。加多利繼伊比都賀比計理。今世能。人母許等期等。目前爾。見在。知在(下略)とよまれたるをみれば。天平年間などは。世に言靈の事。そのしるしをも見。その必然あるべき理をもしりたりとみゆれば。詞もおのづから。そのかまへそなはれり。中昔よりのちは。詠物のためとなれるなれば。詞もおのづから。そのかまへなるなり。されば詠物によまむ歌はさらなり。此道の本意かなへむとすれば。おのづから詞のふるきが便よきなり。これによりて。おのれよむ歌の。おのづから上つ世ぶりなるがおほきは。なほ上つ世にひがめる名はのがれがたけれど。その意味一端にあらねば。おぼろげにはことわりつくしがたし。たゞしるべき人こそしらめとぞ

○道風書朝綱才

江談抄云。「天暦御時。野道風與江朝綱。常成手書相論之時。兩人議曰給主上御判互可決勝劣云々。仍申請御判之處。「主上被仰云。朝綱之書劣於道風事。譬如道風劣朝綱之才云々。道風朝綱が勝劣の事。古今集序に。「人まろは。赤人が上にたゝむ事かたく。赤人は。人まろが下にたゝむ事かたくなんありけるとあるに似たる事なり。おほかた人は。瑕なき珠ならんは。いとめでたかるべけれど。この二人が爭。互に劣れる所ある事を。自わきまへざればなり。わが大御國ぶりのとほじろき。人おほかた勝れる所あれば。必劣れる所あり。おとれる所あれば。必まされる所ある事。心は淨く。身穢しくて。その淨穢を具したる事。やむごとなきことなるが故に。或はまされば。或はおとり。或は劣れば。或は勝るを。相讓らひてかたみにあらそふ事なきを要とする。これ神典の大規範なるなり。聖賢のうへといへども。なほいはゞいふ所あるべし。まして庸人をや。おのれまされりとして。劣れる所ある事をしらねば。必人とあらそひやむまじきなり。道風。朝綱。たゞ書のうへの諍論なれば。いはゞはかなき事がらなりとはいへども。たとひ。はかなき伎藝のうへたりとも。あらそふを風俗とするは。卽干戈の源たるべし。何

づめの一格なり。かへりづめは。後撰集に。「みぬ人のかたみがてらはをらざりき身になづらへる花にしあらねばなどの類なり。たゞ終の一句よりかへるもあり。初一句へかへるもありて。一定ならぬが中に。かへりづめの如くにしてかへらず。上を補ひて。終一句を添へたるがあるは別格なり。たとへば。萬葉。集巻六。我屋戸之梅咲有跡告遣者來云似有散去十方吉などこれなり。おもひまがふまじきなり。後世にては。すべて歌の格いとせばくなりにたり。廣からでは。不自在なる事ならずや。されどねがひてするわざにはあらず。皆。歌がらによりて。やむ事をえぬ事なりとしるべし（かへりづめも。もとかへすにはあらず。事の急なるをば。さきにいひ。緩きをば後にいふが。おのづからかへるすがたとはなるなり。事の緩急。先後すべからぬ事。歌にも文にも。その例おほきをおもふべし）

○詞の時代

おほよそ歌の姿。世々に移りたるを。亡父これを六運にわかてり。挿頭抄のはしがきにくはしくみえたり。（亡父か著述の書なり）此六運に。自創の體をくはへて。七體七百首をよめるを。さきに刊行しおけり。（亡父か詠なり）これらを見て。よゝのすがたを思ふべし。世に歌よむ人々。おのおの見識もあり。好む所もありて。あるは。上つ世。あるは中昔。あるは中ごろ。あるは近昔。あるはをとつ世。あるは今の世とひがめる。やごとなき事にはあれども。これ。（六運の名なり）大かた歌は。體を定め置きてよむ時は。必心を枉ぐる所いでくべし。おもひのすぢにしたがひて。歌となりいづるは。おのづからなるものなれば。姿も自然なるべきなり。されば六運と定められたるは。大かたのすがたにて。上つ世の人にも。中昔中季の體なるもあり。中昔の人にも。かみつ世近昔の體なるもかたみにあるべし。疑ふべからず。しかれども。詞はよゝに差別あるものなれば。詞の時代をわきまふる事肝要たるべし。もし。上つ世の體なるに。中頃の詞まじり。をとつ世の體なるに。上つ世の詞まじりなどしたらむは。髪白き女のあこめを着。はふ子に冠きせたらんが如くなるべし。詞の時代とは。たとへば「もとな」「よしゑやし」などは上つ世にかぎれり。「べらなり」「かななどは。中昔よりおこれるが如く。此類いひつくすべからず。そが中に六運にわたる詞もあり。そのわたりわたらぬ詞をば。よく明らめて用ふべきなり。されども。言は。もと情をうつす事を主とする物なる

わが大御國言の肝要なることわり。前にもいへるが如し。されば。いひてよからずおもふ事あらんに。いさゝかにても用あらむ詞をおかば。猶いへるにひとしくなりぬべく。然りとて。うつたへにいはざれば。句の數たらねば。わざと無用の詞をおくなり。此ゆゑに。上古に。冠をおかれたる所は。必いひてよからずと思はれたる心のこもりてあるべければ。その無用なるが。かへりて有用の詞にもいたくまさるわざなり。かみつよの人は。御國言のすぢをばよく辨へられたるが故に。よせ歌も冠もいと多かり。後世にては。かゝる必得もつたはらざりけらし。やう〳〵冠すくなくなりもてゆきて。たま〳〵冠をおく時は。「から衣。きる。たつなど。その緣語を多くおかでは。冠はもちふまじき事にさへなれり。これひとへに。その歌に無用なる詞なるが故に。うしろめたくおぼゆればなり。まして冠は。緣語多きをよしといふ敎さへいできにたるをや。もと。かく無用の詞をおくは。必用の詞のいふべからぬ時。その必用の詞にかへたる物なりとしらば。あやぶみなかるべし。後世人は。すべて理をいひふするがゆゑに。もとより。冠はかばかりの妙用あるものともおもはぬ。ことわりなる事なり。おほよそ。詞の。いふべくいふべからぬ時あるをしれらん人ぞ。冠辭の必用なる佳境はおぼえんかし

○加賀智

酸漿は。神書に。「赤加賀智(アカカガチ)といへり。これ古名なり。和名抄云。「兼名苑云。酸漿一名洛神珠和名保々豆木とあり。保々豆木とは。いつの頃よりかいひなりけむ。源氏物語野分卷に。「ほゝづきとかいふめるやうにふくらかにて。「かみのかゝれるひま〳〵。うつくしうおぼゆとみえたり。枕草紙にも。「おほきにてよき物。ほゝづき云々。又榮花物語八に。「御色しろくうるはしう。ほゝづきなどを。ふきふくらめてするたらんやうにぞみえさせ給ふなどみゆ

○よみづめの一格

古今集に。「あふみよりあさたちくればうねの野にたづぞ鳴くなる明けぬこの夜はといふ歌。よみづめをかやうによめる格。萬葉集に例多し。和泉式部集に。「われならぬ人もさぞみん長月の有明の月にしるしあはれはとあるも同じ格なり。これは。畢竟かへり

○養禽獸

枕草紙に。命婦のおもと、名づけし寵愛の猫をば。おきなまろといふ犬のとらむとせしかば。「このおきなまろ。うちてうじて。いぬ島につかはせ云々とあり。犬島は備前にあり。此島に流しつかはせとの心なり。すべて。犬猫猿のたぐひをこのみて。その寵。人にすら超ゆる事よに多し。中にも犬は。ぬす人などの入らむを吠ゆるいさをあるが故に飼ひ。また獵の用にも養ふ。さる事なり。雄略紀云「身狹村主青。將二吳所レ獻二鵞一到二於筑紫一。是鵞爲二水間君犬一所二嚙死一。別本云。是鵞。爲筑紫嶺縣主泥麻呂犬所嚙死 由レ是。水間君恐怖憂愁不レ能二自默一。獻二鴻十隻與二養レ鳥人一請二以贖レ罪。天皇許焉とあるは。獵のためにやかひけん。門もる爲にや養ひけむ。げにさるいさをはめでたけれど。みしらぬまらうどなどをさへ吠ゆるを。其まらうどの。いとひいとはぬをもおもはで。あるじのこゝちよげなる。いとあさまし。まして何の用なき獸などを愛して。人の忌むをばかへりて興じたりし人。古も聞ゆかし。或は。その寵より人とあらがひのいでくるなど。いと多き事なり。左傳。閔公二年冬十二月。狄人伐レ衛。衛懿公好レ鶴。有乘レ軒者。軒大夫車 將レ戰國人受レ甲者。皆曰使レ鶴。鶴實有二祿位一。余焉能戰。これらをも思へあはすべし。それもたゞ。このむばかりにて。事に害だになくば。何をか養はざらんとぞおぼゆる

○冠辭

冠はよにいふ枕詞なり たゞ。歌に優艶をあらむとて用ひたる物と。皆人おもへり。つらつらおもふに。冠は。所詮よせのみじかきなり。よせとは。よにいふ序歌なり。亡父つれによせ歌といひつけたり よせ歌に二種あり。よせ。うちよせ。これなり。たとへば、萬葉集。巻十二。「舊衣著楢乃山爾鳴鳥之間無時無吾戀良苦者。今の本。戀衣とあるは誤なり。眞淵ぬし。冠辭考に。くはしく辨ぜられたり かうやうなるを。よせ歌といふ。同集巻十八。「道邊乃五柴原能何時毛何時毛人之將縦言乎思將待。これらをばうちよせといふ。その心をよせたると。たゞ。詞のうへをよせたるとのけぢめなり。この二種。冠にもあり。たとへば「くれなゐのにほへるなどはよせのすぢなり。「時津風ふけひなどはうちよせのすぢなるもておもふべし。この二種いづれも。所詮はその歌に用なき詞を。わざともとめ出で、おくなり。そのゆゑは。おほかた。人におもはするやうにのみいふ事。

ぶるなる歌繪ともおぼえず。これらや蘆手といふ物ならん。されど猶。歌繪といふもの、ごとくもおもはるれば。たしかにはいひがたし。歌のもじをば。葦の葉のやうにかきなせるをば。蘆手とはいひけむと。おしはからるれば。この圖はこゝろにくゝこそ

○雨衣

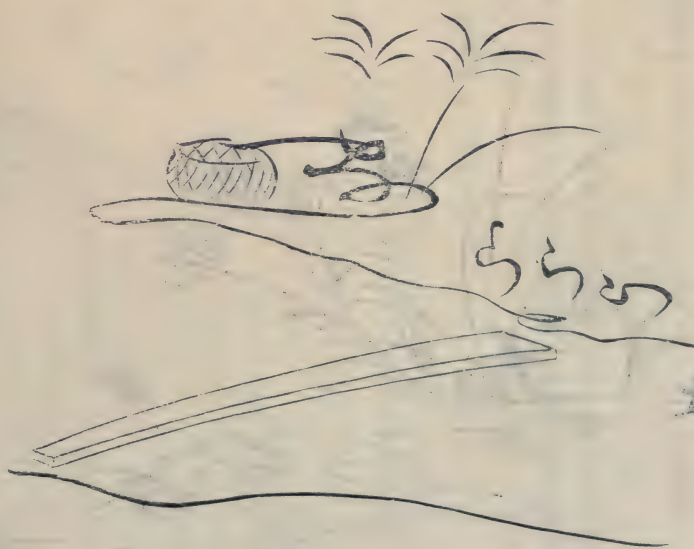
敏達紀云「是日無レ雲風雨。大連被二雨衣一云々。この雨衣といふは。油衣にやあらん。和名抄云。「雨衣。唐式云。三品以上。若遇レ雨聽下著二雨衣氈帽一至中殿門前上。雨衣。和名。阿萬岐沼。今案。一云。油衣。隋書云。煬帝遇雨。左右進油衣是。とみえたり。「左傳云。「成子衣レ製杖レ矛云々。注云。製雨衣なりとあり。製といふもの。いかなる制にかあらん。後撰集に。「ふる雪のみのしろ衣うちきつ、春きにけりとおどろかれぬるとよめるは。蓑代衣の心なるべし。これも又。其制つたはれるにや。しらず。文永加茂祭。また。年中行事等の繪卷物に。手に持ちたるもの。雨衣なりといへば。その圖をこゝに載す

文永加茂祭圖のうちにみゆ

此人もちたる物雨衣なり

年中行事のうちにみゆ

手にもちたる物上に同じ

のたまへば。皆こゝろぐ〳〵にいとむべかめりとはみゆれ。又同巻に。「あしてのさうしどもぞ。こゝろぐ〳〵にはかなうおかしき。宰相中將のは。水のいきほひゆたかにかきなし。そゝげたる蘆のおひざまなど。なにはの浦にかよひて。こなたかなたゆきまじりて。いたうすみたる所あり。またいといかめしう引きかへて。もゝやう。いしなどのたゝずまひ。好みかきたまへるひらもあめり。めもおよばずこれはいとまいりぬべきものかなと。けうじめで給ふとみゆ。尺素往來に。一條禪閤の御作とぞ「假山水。海樣。河樣。泉樣。遣水樣。巖井樣。細谷川樣。枯山水樣。山形。野形。洲濱形。蘆手形等云々とあるをみるに。今の歌繪のごとき物にはあらじとぞおぼゆる。又中務集に。「れいけいでんの女御。中宮にたてまつれ給ふひいなの裳に。あしてにて。「しら波にそひてぞ秋は立ちぬらしみぎはのあしもそよといはなんとあるは。いかなる書きざまなりしにか。これらはいと後なれど。なほそのかきざまの傳はりたりける世にて。かくかゝれしにこそあらめ。藤貞幹ぬしが所藏なりし。永曆元年。四月二日。司農少卿伊行のかゝれたる蘆手をみしにひた

蘆などの枯れ臥したるにそへていふなりとあれど。たのもしくもおぼえずこそ。續世繼物語卷八に。「天王寺へまうで給ひけるに。（由）なにはを過ぎ給ふとて。「夕ぐれになにはわたりをみわたせばたゞ薄墨のあしてなりけりとなん聞えし。異ところのゆうべののぞみよりも。なにはのあしてとみえむ。げにと聞えはべり。かへる雁のうす墨。夕ぐれのあしてになりたるも。やさしく聞えはべり云々。園大暦に。「平緒（文章手）とあるは。いかなるあやをくみたりしにかあらん。拾玉集に。（慈鎮和尚）「ゆふまぐれなにはわたりをゆくかりやあしてのうへにかけるたまづさとある歌を思ふに。蘆手のうへにかけるとあるは。雁字をこと物とせられたる事しるし。もし。世にいふあしての如くならば。やがて蘆手とこそよまるべけれ。この歌などは。いとこゝろにくきよみざまなり。その比には。なほ蘆手のかきざま傳はりけるにや。壬二集に。あはぢ島なにはをかけてみわたせば波のいろはのあしてなりけりとあるは。かの繪をまじへたる物のやうなれど。蘆手歌繪はことわざなればこそ。源氏物語。梅がえの卷に。「あして歌繪を。おもひ〳〵にかけと

ども見えて。耳ふりたつといふ事は。馬にのみいへるを。「さをしかにかへたるは。いかなるさがなわざぞや。かのから國にて。鹿をば馬といひけんうらうへにこそとをかし。しかるに。かく改めたるは。いつの比とはしらねど。いとひさしき事とおぼえて。い實方中將集に。「六月ばらへに。あるや(本ノマヽ)かきのまへをわたれば「さをしかのみゝふりたてゝきこしめせといふ人あれば。いとゝく。「おもとををかすつみはあらじなどあれば。いよ〱その改めたりし人おぼつかなくこそ

○蘆手

あして歌繪など。ふるくみゆる此蘆手の事。堀川院御時の百首に。「あしてくむしづが垣ねのほとゝぎすなけどもなれる聲はやつれずとあるは。蘆もて垣にくみたるをいふにて。あしてとしもいふは。萬葉集に。麻をば。「麻手とよめるたぐひなるべし。さてこのあしてといふもの、かきざまたしかならず。世に繪をまじへてかくぞ。蘆手といふ人もあれど。それは歌繪にて。蘆手にはあらざるべし。塵添壒嚢抄。卷五に。「和泉式部。無雙の好色なりけるに。ゐのこの夜。御歌ありけるに。態と心をあはせられければ。瘡開といふ名を式部とりあて、。「筆もつひゆがみて物のかゝるゝはこれやなにはのあしてなるらんとよめり。あしてとは。字にて繪をなすと注せるものあり。又。葦手ともかくなり。或は木の節。或は雲のはづれなどをゆがめるまゝに。字の似合たるを以てかくぞ。

藤貞幹所藏蘆手圖

のこを人のおこせたるに。「いくつづゝいくつかさねてたのまゝしかりの此世のひとの心よ。後にかうやうにみえたるなどは。まことの雁の子なり。仁徳紀なるは。必故ありて記されたる倒語なるべし。これ古書のつねなり。雁の子うめる事。もと君も臣も。歌をもて問答し給ふばかりの事がらにあらざるをおもふべし

○箏の音

箏は。久しくひかざれば。音の入りてよく鳴らぬものなり。宇都保物語に「音もしらますといへるは。久しくひかねど。音のいらぬをいふなり。しかれば。ひさしくひかで音のいるは。常の事とおもひつるに。しからず。その器のすぐれざる故なりとはしりぬ

○探題

題をさぐりて歌よむ事も。いとふるくせしことなり。後撰集雜に。「左大臣の家にて。かれこれ題をさぐりて。歌よみはべりけるに。露といふもじを得はべりてとみえたり。宇都保物語に「だいたまはせて。たんゐたまはるとあるは。探韵にて。詩をつくるに。韵字を探るを云ふなり。檜垣女集などに。題とあるは。みな物名なり。數多かれば。ひくにいとまあらず。その集をみるべし

○大祓祝詞

大祓祝詞のをはり「さをしかのやつの御耳をふりたてゝ云々といふを。眞淵ぬし。祝詞考に。細しくことわられたるが如く。延喜式にあるを正しとすべし。しか改めたるは誰にかあらむ。古言を心得ぬものゝしわざとおぼし。其ゆゑをおもふに。もとかの祝詞は。六月大祓にのみよむべきものなるを。つねに神前にてよまむには。「今年六月晦日云々とあるがわりなさに。改めたるにこそ。紫式部日記に「けんざといふかぎりは。のこりなくまゐりつどひ。三世の佛も。いかに聞き給ふらんと思ひやらる。陰陽師とて。世にあるかぎりめしあつめて。八百萬の神も。耳ふりたてぬはあらじとみえ聞ゆとあるは。本文に「高天原爾耳振立聞物止。馬牽立氏とあるを心得て。かくかゝれたるなるべし。出雲國造。神賀詞云上下略「白御馬能。前足爪。後足爪。踏立事波大宮能。内外御柱乎。上津石根爾踏堅米。下津石根爾。踏凝之。振立流事波。耳能彌高爾。天下平所知食左牟事志乃多米云々な

はく。汝とわれとが中に。子すでにいできたり。われ汝をわするべからず。つねに來てねよといひしかば。そのゝちきたりてねはべりき。さて。きつねとは申しそめしなり。その妻は。もゝの花ぞめの裳をなんきてはべりし。其生みたりし子をば。きつとぞ申しゝ。力つよくて。はしる事とぶ鳥の如くはべりきとみえたり。これらをはじめとやいふべからん。きつねといふ名義は。いとおぼつかなき事なり。されど。もの〻名義を。かうやうに牽强していふ事。竹取物語などに多し。いにしへ人の手段なるべし

〇夜光之璧

よる光る玉といふ事。萬葉集卷三。旅人卿讃酒歌のなかに。「夜光玉跡言十方酒飲而情乎遣爾豈若目八目一云八方とみゆ。史記。八十三。魯仲連。鄒陽傳云。「臣聞。明月之珠。夜光之璧。以闇投人於道路。人無不按劒相眄者。何則。無因而至前也。又同書。田敬仲完世家。齊威王二十四年。與魏王會田於郊。魏王問曰。王亦有寶乎。威王曰。無有。梁王曰。若寡人國小也。尙有徑寸之珠照車前後各十二乘者十枚。奈何以萬乘之國而無寶乎云々。これらよりいふなるべし。源氏物語松風卷にも。「わが君は。いとも〳〵うつくしげに。よるひかりけむ玉のこゝちしてとみゆ

〇雁の子

仁德紀。五十年春三月壬辰朔丙申。河內人奏言。於茨田堤雁產之。即日遣使令視。曰既實也。天皇。於是歌以問武內宿禰曰。多莽者破區。宇和能阿曾。儺虛曾破。豫能等保臂等。儺虛曾波區珥能那餓臂等。阿耆豆辭莽。椰莽等能區珥々。箇利古武等。儺波企箇輸椰。武內宿禰答歌曰。夜輸瀰始之。和我於朋枳瀰波。于陪儺于陪儺。和例烏斗波輸儺阿企豆辭摩。椰莽等能倶珥々。箇利古武等。和例破枳箇儒とあり。わが大御國に。雁の子うめるは。この御時をはじめとす。閑院大將家集に「かりの子を。とをたてまつりたまへれば。北の方。重明親王女「かりの子にうらみをさへぞかさねつるいとゞつらさの數をみすればとみえたり。此大將は。藤朝光なり。天曆五年にうまれ。長德元年三月廿日にうせたまへりとぞ。關白太政大臣兼通公四男。御母は。三品兵部卿有明親王御女。從二位能子なり。又和泉式部が家集にも。「かり

みえたるは。集飲に事ありける故なるべし。されど。その制禁も。永くは行はれざりしとおぼし。人のこのむ所は。やむ事なき物にこそ

○好奇

萬葉集巻四「不相思人乎思者大寺之餓鬼之後爾額衝如契沖法師のいへらく。この歌は。心をえて詞をみるべからずとて。孟子に「説レ詩者。不二以レ文害一レ辭。不二以レ辭害一レ志。以レ意逆レ志是爲レ得レ之云々とある語を引きて。大かた歌を見るにも肝要なりといへり。げにかゝることをのみこのまむはよしなきわざなれど。情のために辭をもとめむには。何物をかとり出でざらむ。何事をかよみ出でざらむ。詞をいたはりいたはらぬけぢめをいふは。歌の本意をうしなひて後の事なり。此阿闍梨の説。さる事なれど。さすがに後世のいひざまなりや。上古の歌ども。奇をこのめるにはあらず。唯靈をかしこむよりのわざなりとしるべし。靈をかしこむとは。倒語には。必神の靈ましくて。人の志を幸ひ助けたまふが故なり。これ即。言代主神の靈なり。眞言には神御たまをしづめ給はず。おほかた言靈は。直言のうへにはあづからぬ事なりとしるべし。くはしくは。予が眞言辨にいへり

○狐人の子をうむ

狐の。人の子をうみたる事は。時々きく事なり。水鏡。欽明天皇の條に。「野干をきつねと申し侍りしことのおこりは。美濃國にはべりし人。かほよきめをもとむとて。物へまかりしに。野中に女あひはべりにき。此男かたらひよりて。わが妻になりなむやといひき。此女。いかにものたまはむにしたがふべしといひしかば。あひぐして。家にかへりてすむ程に。をのこ子一人うみてき。かくて年月をすぐすに。家にある犬。十二月十五日に子をうみてき。その犬の子。すこしおとなびて此妻の女を見るたびごとに吠えしかばかの妻の女。いみじく懾ちて男にこれうちころしてよといひしかどもをうとの男きかざりき。この妻の女。よねしらぐる女どもに物くはせむとて。からうすの屋に入りにき。その時。この犬はしり來て。妻の女をくはむとす。此妻の女おどろきおそれて。え堪へずして野干になりて。まがきのうへにのぼりてをり。男これを見てあさましとおもひながら。い

但近來。清暑堂御神樂に。或人めづらしき事せむとて。葛城といふ秘藏の歌をうたひけるに。其歌はゞかるべき事あるを。あしくうたひたりけるとて。ときの人そしりけるやう。のがるゝ所なかりけり。めづらしき事はかぎりある事にはせであるべきにこそとみえたり

○鷄の雄

雄略紀云「於レ是新羅王乃知二高麗僞守一。遣レ使馳二告國人一曰。人殺二家內所レ養鷄之雄者一。國人知レ意盡殺二國內所レ有高麗人一。かく。いへるもきけるも。ともに新羅人なれど。わが言靈のたすくる國。言靈の幸ふ國に。常にまゐりかよひけむしるしにて。さすがに言さへぐ國つ人には。いとめでたき事なりかし

○嗜酒

大伴旅人卿。讚酒歌數首。萬葉集卷三にみゆ。白樂天は。「不レ忘レ酒曰二故鄕一といへり。さけをこのむ事。和漢その人おほし。おのれ若きより酒をえのまねば。いまだその佳趣をしらず。李白は。おのれと月と酒とを三友とせり。李白われをみば。何をか友とはすらんと笑ふべしかし。然れども。是を好まざる者は彼を好み。彼を好まざる者は是を好む。かれ萬物ゆづらひて用あらずといふ事なし。續世繼物語に（巻六）宗輔公。蜂を好みて飼ひ給ひし事みえ。（十訓抄にもありて。其功ありし事みえたり）堤中納言物語には。かは虫このむ姫君をさへかけり（かはむしは。毛虫とつれいふ虫の事なり。和名抄に云「烏毛虫。蛓名苑に云。髯虫。一名烏毛虫。和名。加波無之と見えたるこれなり）おのれこのまざれば。必。人のこのむをあざけるはいかにぞや

因云。芭蕉翁が「朝がほにわれはめしくふ男かなといふ俳諧の發句あり。此こゝろは。おのれ酒えのまぬ不興さを歎きがほにて。まことは。必過酒の人をいさめたる句なるべしとおもふよしを。わが友有國にかたりけるに。その翁が消息をあつめたる物の中に。門人其角に贈られける消息。飲酒の一枚起請といふ物をかきて。その奥に。「因て一句とて此句ありとて。其の消息をもち來て。予が說を信ぜられし。其角は。いといたきさけこのみなりしとぞ。萬葉集卷八。坂上郞女が歌に「官爾毛縱賜有今夜耳將飮酒可毛散許須奈由米とある左注に。「右。酒者。官禁制偁。京中閭里不レ得二集宴一。但親々一二飮樂聽許者。緣レ此知人作二此發句二焉と

謙首にさへおよべり。おほかた判者は。その世に秀でたる人たちなれば。おのづから。そのあげつらひをば。人々信受し。いひ傳へて。法則とすめれば。概するに後世の歌は。天徳歌合をおやともいふべしかし。おほかた。よき歌の惡きにはあらず。あしき歌のよきにはあらねど。歌はもと巧拙にとゞまるべき物にはあらず。たゞ彼我の情をかよはすを要とす。そが中に。よく直言をのがれたると。直言をのがれえざるとのけぢめはあるべし。さるは。詞をつくる淺深なり。後世いふ所の巧拙に混じおもふまじきなり

西行上人。御裳濯川歌合。俊成卿の判詞に「亭子のみかどの御時よりぞ。しろしおかれたれど。ある時は勝負をつけられず。ある時は勝負をつけられながら。判の詞はしろされず云々。予がもたる寛平歌合。勝負の事なし。さる本もありしにや。しからば寛平をはじめといふべきにや。萬葉集に。防人等が歌を載せたるに。拙劣なるは不載とみゆるは。巧拙をいふ本ながら。勝負には同じからず。されどさすがに奈良の末なるしるしぞかし

〇草の汁

堤中納言物語に「たとう紙に。草のしるしてとて歌ありいま繪の具に。草の汁とてあるも。もとはまことの草の汁なりしが。色によりて。古名を傳へたるなるべし

〇疊の緣

おなじ物語に「錦はし。かうらいはし。うげん。紫はしの疊。それはべらずば。布べりさしたらんやれ疊にてまれ貸し給へ。たまえに苅るまこもにまれ。あふ事かた野の原にある。すがごもにまれ。たゞあらんをかしたまへ云々。この書きざまをみれば。布なるをのみ。へりといへるは。賤しき疊をばへりとはいひけんとおぼゆれど。枕草紙に。「うげんべりの疊ともみえたり。しかればそれにもかぎるべからねど。延喜式等みな端の字を用ひられたれば。へりといへるは後にて。ふるくは。はしといへるにこそ。式。其外江次第。また雲圖抄。類聚雜要など。いづれも端の字を用ひられたり。そが中に。式の勘解由に。「紺布端茜六枚云々とあるは。いま民間にも用ふるに同じ。又。園大曆廿三上。「便宜所懸二伊豫簾一敷二鈍色緣疊等一云々とみゆれど。この上文には「疊端ともかゝせたまへり

〇めづらしき事

おほよそめづらしきをこのむ事。人情の常ながら殘夜抄に。「清暑堂御神樂の御遊は。みかぐら終りて後にあり。これも樂催馬樂呂律。これらにかはらず。

ことしばかりとて。宮のへのうへのはしらひたりけるけしきをみて。しりうごとにと（本ノマヽ）みえ。「枕草紙にもしりうごと、あり。此ふたつの詞。ともに。俗に陰口といふ心なり。あともしりも同じ心なればなり。いたくへだゝりたる世にはあらねど。「あとうがたりはふるく。「しりうごとは後にや。源氏物語若菜上にも。「しりうごちとみえたり。此うもじは。皆音便のまゝをかくにて。もとは「あとがたり「しりごと、いふべき事なり。されど。かくいひなりたる事は。かくいはでは。あらぬ事のごとくきこゆるならひ。此詞にかぎらず。いと多きものなりかし

○讀書の心得

千五百番歌合。顯昭法橋か判詞に云「歌合の歌には。物語の歌は。本歌にも出だし。證歌にも用ふまじと申しけれど。源氏。世繼。伊勢。大和とて。歌よみのみるべきふみとうけ給はる云々。げに。見たるふみどもの詞。さながらは用ひずとも。おのづから底力とはなりぬべし。後世ぶりをよむ人は。ちかき世の歌集などをのみみて。ふるき物は。手だにふれぬは。用ひられぬものをみむは。無益のわざなりと心えたるが故なるべし。さるは。其見たらん物を。さながらもちひばこそあらめ。ひがみたりといふべし。わが御國の物はさらなり。漢籍とても。みてあしからむやは。おほかた。書見むには。物にまれ詞にまれ。さながら用ひむはくちをしきわざなり。たとひさながらもちふとも。おのが物としてもちひたると。その詞に役せられたるとは。おのづから其けぢめぞあるべき。されば。今用ひむとする時よりも。書見る時まづわが物としおかむ事肝要にて。書みむ心得。これにしく事あるまじきなり

○歌の巧拙

後世の歌よみは。專。歌の巧拙を爭ふ事を宗とす。上つ代には。歌の巧拙をいふ事。絶えて物にゝみえぬことなり。されば所詮は。のちの世の歌は。歌合のなごりなりとぞおぼゆる。しかれども。歌合も。寛平后宮の歌合などは。菊合。根合。繪合などの類にて。人々の歌をつどへたるまでにして。左右をわけて。勝劣をあげつらひ。くさ〴〵判ぜし事などはなかりしなり。天德の歌合。はじめて判歌ありて。それより巧拙の判さかりになりもてゆきて。つひに。獨詁

○小侍従

大宮の小侍従は。のち。かしらおろして。内山にこもりけるよし。おなじ朝臣の集に見えたり「大宮小侍従。内にまゐりてさぶらふほどに。道心おこしてあまになりて。やはたの内山にまゐりてこもりぬと聞きて。かくともつげぬよしなど申して。おくに書きつけてつかはせる「君はさはあまよの月か雲井よりひとにしられて山へいりぬる。返し。小侍従「すむかひもなくて雲井に有明の月はなにとかいひもしられむとみえたり。をのこも女も。かゝるたぐひ。おほくはおもふ事とげがたくて。よをうらめるよりおこせる道心なるべしかし。續世繼物語巻十「やはたなる所に。宮てらのつかさなる。僧都ときこえし。小侍従とかいふおやにやあらんとあれば。内山にてしもになりけるにこそ

○しのぶずり

しのぶもちずりとは。忍草もてすりたるをいふ名なり新千載集離別又敦忠集に「打ちつけに思ひやいづとふる里のしのぶ草してすれるなりけりとよめるがごとく。しのぶ草もてすりたるは。いづくとなく。しのぶ摺とはいひけんを。「みちのくのしのぶもちずりとよめるより。しのぶずりは。陸奥よりいづと先達もいはれしより。人皆これを信ぜり今陸奥より志のぶずりとていづる物あるは。後のさがなわざなりこれもたしかにはあらじ。續日本紀巻八養老二年五月「割二常陸國之石城。標葉。行方。宇太。亘理。菊多六郡一。置二石城國一。白河。石背。會津。安積。信夫五郡置二石背國一云々拾芥抄云。「陸奥卅六郡。白河。磐瀬。會津。耶麻。安積。安達。信夫下略されば。みちのくとは。しのぶの冠におかれたるにて。もちずりといふまでにかゝれることにはあらずとしるべし。地名をかうぶりに用ひたる類は。「高砂の尾上これなり。播磨國に。高砂といふ所ありて。そこに。をのへといふ所あるがゆゑに。高砂のとはおきたるにて。おほかたの山のをのへをば。なべて「高砂のをのへとよみつけたる。同じ例なり。高砂は。山のおほ名なりなどいふは。しのぶずりを。陸奥よりいづといへるに同日の論なるべし

○あとうがたり。しりうごと

後撰集に「あとうがたりといふ事あり。實方中將集に「ためたふの辨なかよりが。いつにたえそめし年。

べし。祓の事。いまはたゞ。その儀のみのこりて。實をうしなひつれば。なか〳〵。塵をはらふは實あゑぞ心ぐるしき。菅をしもとりもちひられつるは。菅のゆゑあるにはあらず。古事記神書に「故是以。其速須佐之男命。宮可二造作一之地求二出雲國一。爾到二坐須賀地一而詔之。吾來二此地一我御心須賀須賀斯とは宣長ぬし古事記傳に。すが〳〵しの義といはれたる心にて。その心をさとしのために。菅をしもとりもちひられしものなり。

〇木津川

今は。木津川といふを。いにしへは。巨津川とぞとなへけん。刑部卿頼輔朝臣の集に「こつがはより。舟にてならへまかるに。路中になりぬらんやと申すを。舟さすもの丶。すぎぬと申せば。なにをしるしにていふとはれて。このひむがしのかたにみゆる杉の木は。丈六堂のまへなる社の杉にてはべれば。それをしるしにて申す也といふを聞きて「やまとなるみわの山ぞとおもひしにいづこも杉ぞしるしなりけるとあり。此朝臣は。清輔朝臣の尙齒會おこなはれし時の人數にて。すなはちおなじ集中に。そのよし端作ありて「花にあかで老いぬる身こそあはれなれ今いくとせか春にあふべき」「花見るもくるしかりけり青柳のいとよりよわき老のちからはといふ二首あり。家集奥に自跋ありて。「壽永元年六月廿八日とあれば。壽永の比までは存生の人とみゆ。「三位したるのちのあした。左大將のもとより申し遣しける「つひにかくみつのくらゐにのぼりけりふたつのしなもうたがひぞなき。返し「な丶そぢにみつのしなにぞのぼりぬるふたつの位おもひかけてんとみえ。自跋に。從三位とあるを思ふに。尙齒會のひとりなりしもうべなり。これをもて時代を思ふべし

〇崇德帝讃州遷座

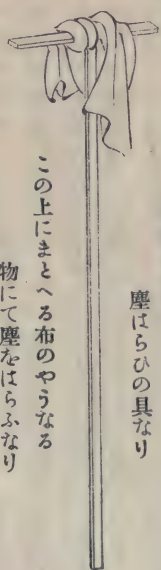
おなじ頼輔朝臣集に「崇德院。さぬぎへくだらせたまひての秋。ひむかし山にこもりゐたる比。山おろしの風身にしみて物あはれなるに。鹿のこゑをき丶て「いとゞしくうき身にしみてかなしきは鹿のねおくる秋の山かぜとみゆ。院も。めざましきふしもおはしましつらめど。かく主上をたしなめたてまつれるもの丶。末ひさしきは。いにしへ今。なきならひかなとぞ

に「かた野の少將などもみえたり。かぐや姫は。竹取物語なるべし。か丶る物語の。世に傳はらぬが多き。いとくちをしきことなり。からもりは。伊勢集に「からもりが道たづねわびてふせるをとこ「八重とづる道は草にもまどふらしぬるたまにだにあふとみえねばと見え。また。宇都保物語。樓上に「からもりが宿をみむとて玉鉾にめをつけむこそかたは人なれどもみゆれば。その比よりも。ふるくもてはやせる物とおぼし。苔衣。さよ衣。とりかへばや。松浦宮物語などいふものども亡父あつめおきたるを傳へもたり。それが中に。松浦宮物語は。奥書に「貞觀三年四月十八日。そめどの丶西の對にてかき終りぬ。花非レ花霧非レ霧。夜半來天明去。來如二春夢一幾時。去似二朝雲一無二覓處一。これも。まことの事なり。さばかり傾城の色にあはじとて。あだなる心なき人は。何事に。か丶る事はいひおきたまひけるぞと心えがたく。唐にはさる霧のさぶらふかとあれば。いとふるきものなり。これら。まさかに世にはありて。人もてはやさず。名ありて實なき物。實ありて名なきもの。いづれをか心にくしとせむ

○栗飯

栗飯は。はやくよりしつる物とおぼし。うつほ物語に「ちかう見れば。火を山のごとくおこして。おほいなるかなへたい。くりを手ごとにやきて。かゆに煮させ云々

○さいはらひ

今俗。さいはらいといひて。絹紙などをさきて。小竹にゆひつけ。塵をはらふ具とす。この名。神樂歌にみゆ「奈可止美乃古須水平佐紀波良比伊能利志古登波云々これよりいふ名なり。中臣のまをす大祓の祝詞の中に「天津菅曾乎。本苅斷末苅切氐。八針爾取辟氐云々とありて。菅をさきて。祓の具とせられしものなるをまねびて。塵をはらふ具とはなしけるなる

古き繪巻物にみえたる塵はらひの具なり

この上にまとへる布のやうなる物にて塵をはらふなり

御の字ばかりを。於无とはよむまじき事なるを。美とはいはずして。於无とのみ。今の俗はいふなり。されば此歌は。於保美毛の心なりとしるべし。川牟とは。鼠のくふ事を云ふ。介左は袈裟なり保宇之は法師なり。之は師なり。くはしくは。神樂催馬樂燈にいへり。延喜式玄蕃云天皇即位則講説仁王般若經條下「講師法服上下略裳一腰三丈四尺讀師法服上下略裳一腰などみゆ。雅亮裝束抄にらいふくのやう云々の下に圖ありて。そこにいふ。「これは裳なり。たゝみやう。からのものていなり。こしつきをして。しもはみどり色のけんもんさなり。かみに白きけんもんさきるをりは。本ノマヽこしたひきまはして。まへにひきちがへてゆひて。うしろにつけたるを〻。かたより引きこして。さへなかをにゆふべしとあり

雅亮裝束抄のうちに圖したる裳

○猿樂

東鑑。建久五年「參ニ猿樂ー小法師。中太。參施レ藝。上下解レ頤云々。江次第。標注に「散更猿樂也とあり。いかなるわざをしつるにかあらん。上下解頤とあれば。今の世の狂言といふ物のごときわざにや。されど今は。能といふ方をば。かへりて猿樂とはとなふるなり。物語ぶみどもに。「さるがう「さるがうことなどいふは。これなるべし。宇治拾遺には。伶人の中より舞ひたるよりみゆ。もと能狂言といふ名も。田樂よりおこれる事とおぼしく。文安田樂能記といふものに。「次刀玉。玉阿今阿兩人勤レ之次能藝一番。熱田のしゆんかう門の能ニ番。如沙汰の能などみえ人數をあげたる名の下に。たれ能。たれ狂言などみえたり庭の能以後。於會所舞音曲御見聞。福若丸は。御庭の砌に候す。自除は在ニ廣庇ー裝束をば着して居ながら詞をいひかはして。表レ能之形。此風情亦有レ興。狂言相交之兩三番。松阿勤レ之云々など見えたり

○古物語

源氏物語。蓬生の巻に「からもり。はこやのとし。かぐやひめの物がたりの。ゑにかきたるをぞ。とき〴〵のまさぐりものにし給ふ云々。なほ。同じ物語

源氏物語。末摘花卷に「いくそたび君がしゞまにまけぬらむものないひそといはぬたのみに。といふ歌のしゞまとは。無言の行の事なりとぞ。定賴中納言家集をみしに「母うへのほかにわたりたまひて。人にものいはぬおこなひにて。ひさしく對面したまはで。かへり給ひて。けふなんいとまあきたるときこえたまひけるに。いそぎまゐり給ひけるに云々とある。これ。やがて。このしゞまのことならんとおぼわき

○おぼろげ

おぼろげといふ詞のもとは。萬葉集卷六に「丈夫之去跡云道曾凡可爾念西行勿丈夫之伴とよめる。この凡可なるべし。かみつよには。おぼろげとよめるはみえず。後世にはおぼろかとはたえてよまずなりぬ。たゞ可の計にかよひたるにて。いかでかく新古の別とはなりぬらん。後世にては。保もじ計もじ。必濁りてよむなり。もと凡は。大凡の心なれば。保もじも清みてよむべく。可もじも亦清音たるべきこと、覺ゆれど。古事記。神書に「此鉤者。淤煩鉤。須々鉤。貧鉤。宇流鉤云而。於後手賜とある。この淤煩は。すなはち凡のこゝろなれば。凡可も。後世の如く。保もじはなほ濁音にてぞよめりけむ。（煩の字は。獨音の字なり）可はかならず清むべきなり。朧の字をおぼろとよむより。おぼろげは朧なる義なりと心うるは。本末たがへり。かみつよに「おほに「おぼゝし「おほかた「おほよそなど。さまぐ\によめるも。皆この凡可の義にて。とりとむべき方なきほどの心なり。詞には。かく本末のたがひて心えらるゝ事おほきぞかし

○几帳尺

几帳尺といふをは。東大寺にもちふるは。今の曲尺なりと。ある人のかたりし。それはいにしへ。几帳にのみもちひたれば。しかいふにや

○御の字の訓

催馬樂老鼠「爾之天良乃。爾之天良乃。於伊禰須美和加禰須美。於无毛川牟川。介左川牟川。介左川牟川。保宇之仁万宇左无。之爾万宇世。保宇之爾万宇左牟。之爾万宇世。この於无毛とは。大御裳なるべし。裳は。法師のつくる物なれば。あがめて於无とはいへるなり。於无は。もと大御のつゞまれるにて。

后の御事。さばかり深くおもひしみたまひつるを。御兄達のいたく制し給ひし。それみそか事をにくみたまへるゆゑにしもあらで。后にたてまつりたまひし始末。御兄たちの御心がまへのほどもおもひやられて。かたはらいたき事どもなれば。かの皇子の御うへもおしはからるゝなり。その餘のすき事ども。かつあらぬ事どもを。かきまじへたるは。もはら。此主意をあらはにせんとの爲なりとしらば。全篇うたがひなかるべしかし。此物語を見て。中將の心のうちをおもひばなみだもさしぐまるゝなり。この外。源氏物語は。もはら。その世の人の褒貶にて。その得失を論らひたる物なるを。すきがたりにかきまぎらしたるなり。（紫式部日記のうちに。當時の女房たちの名をつられて評したる所あり。それを照らして思ふべし）落凹物語は。もはら繼母のさがをいましめたるなど。故なくしてかける物はあるまじきを。御國言の眞理をわきまへざれば。たゞうはべの詞華にめを奪はれて。つひに。作者の主意をむなしくすべし。心をもちふべき事なり。土佐日記は。「男もすなると。女の所爲にかきなし。をはりに。「とくやりてんとかゝれたる。日記は大かた。のちの思ひ出のためなるを。とくやりてんとはかくまじき事なりと。わが同僚晁木のいへる。此說。紀氏が肺肝なるべし。そのかみ。罪をかしある人を。流しつかはされける國にしも任ぜられたるを。ふかくはぢいきどほられしよりの所爲なる事。くはしくは予が此日記燈にいへり。かへすゞ。古書はおろかにみまじきなり

〇阿々志夜胡志夜

おなじ晁木がいへらく。古事記。神武の御卷に。兄宇迦斯を討ちたまひし時の歌「宇陀能多加紀爾志藝和那版留（中略）亞々志夜胡志夜。此者伊基能布曾。阿々志夜胡志夜。此者嘲咲者也とある。このをはりの詞。先達も辯じかねられたり。しかるに。おのれらが本藩にて。（筑後國柳河）あつしよこつしよとつねいふ詞あり。これなるべし。此詞は。あら笑止やなどいふべからん時にいふよしなれば。いとよく。こゝにかなひて聞ゆといへり。神武天皇。もと笠紫よりおこらせたまひしかば。笠紫の方言は。かならずふる言の傳はりたるべければ。うたがひなく。これなるべしとぞおぼゆる（亞は要の誤にやあらん）

〇しゞま

みならず。すぐよかなる人は。つまはぢきをさへすめり。しかれども。ひとわたりみればこそあれ。ふかき心ありてかける物とおぼしきなり。その故は。三代實錄に「體貌閑麗。放縱不レ拘。略無二才學一。善作二和歌一」とみえたる。此無は。有の誤ならんといふ說ありと。眞淵ぬし。古意中にかゝれたり。げに。略無といふ事もことわりなく。なほ「貞觀十四年五月十七日。勅遣二正五位下右馬頭在原朝臣業平一向二鴻臚館一勞二問渤海客一」ともみえたれば。かならず有の字なるべし（予又案ずるに。有無の二字。其字形似たるにもあられば。有の字の誤とも一定しがたくや。されば佛經に。有學無學といふ事つれにありて。有學とは。なほ學に遺漏あるをいひ。無學とは。志學すでに遺漏なきをいへば。この心にて無才學とかゝれたるにや。志かれば略の字も穩なるべし。されど。才の字あるは心よからねば。ただ戯れに志るしおくなり）かく。はか〴〵しき人がらなるを。この物語にてみれば。ならびなき淫夫とのみ見ゆ。されば三代實錄を。この物語に照らしておもふに。もと此中將。もしおほやけの事にをらしめ給はゞ。いとめでたくもおはすべきを。志成らざるべき世のさまをうとみて。身をはふらされけんが。いといとほしさに。この物語はかきけるなるべしとおぼし。此物語の中に「むかし。男ありけり。身はいやしながら。母なんみこなりけるとみえたるは。伊豆內親王（桓武帝皇女）の御子にて。阿保親王は御父なり。（くはしく三代實錄に見ゆ）されば。いかなるつかさ位をもえたまふべきに。さもあらざりしさへ。さま〴〵おもひやらるゝ事おほかり。もと。在中將の志をおもふに。惟喬親王。文德帝の第一の皇子にまし〳〵ながら。大御位にもつかせ給はず。貞觀十四年七月。四品彈正尹惟喬親王。寢レ疾頓出家爲二沙門一（三代實錄）とみゆ（惟仁太子と。御位をあらそひまゐきといふは。後世の附言なり）これ御みづからも。ふかく憤りおはしましきとみえて。封戶をさへ三たび辭し給ひし事。三代實錄にみゆるにしるし。小野にすみたまひし時。まゐられたりしくだり「やゝひさしくさぶらひて。いにしへのことなど聞えけり「なく〳〵來にけるなどあるを思ふに。此皇子をば。御位につけ奉らまほしくおぼしたりし事明らかなり。しかるに。執政家のはからひにや。惟仁親王。太子にたゝせ給ひしかば。ふかくそのはからひのおほやけならざるをいきどほりて。終に身をはぶらかしたまへるなるべし。しかれども。此事。おほやけにもはゞかりあれど。二條后の御事によりて。世をうとみたまひしやうに。かきまぎらしたるものなり。この

しかれば。夏月人をさすは。呰子なるべし　此少將とは。中宮權大夫忠宗の兄。播磨介忠兼なり。おやのおほいとのとは。京極師實公なり

○常夏

家經朝臣。和歌序云「鍾愛抽二衆草一。故曰二撫子一。艶狀共二千年一。故曰二常夏一。」なでしこ。とこなつのけぢめ。この說つまびらかなるかな。後世にては。常夏とだにいへば。瞿麥の一名なりと心うれど。春さく花のひさしくさくを。とこなつにさくといふ事めづらしからずかし。萬葉集卷十七に「多知夜麻爾布里於家流由伎乎登己奈都爾見禮等母安受可加武賀良奈良之とあるは。雪のひさしく消えぬをいへり。これをもてもおもふべし

○一絃琴

ちかき世に。須磨琴といひて。一絃の琴。世にちりぼへり。好事の人の。さる名をつけて。つくり出でたる物なるべし。行平卿の云々をもて出據とするなど。わらふに堪へたる事なり。日本後紀卷八に延曆十八年七月「是月。有下一人乘二小船一漂中着參河國上。以レ布覆レ背。有二特鼻一。不レ着レ袴。左肩着二紺布一。形似二袈裟一。年可レ廿。身長五尺五分。耳長三寸餘。言語不レ通。不レ知二何國人一。大唐人等見レ之。僉曰二崑崙人一。後頗習二中國語一。自謂二天竺人一。常彈二一絃琴一。歌聲哀楚。閱二其資物一有レ如二草實一。謂二之綿種一。依二其願一令レ住二川原寺一。即賣二隨身物一。立二屋西埓外路邊一。令二窮人休息一焉。後遷住二近江國一。」これ一絃琴の出所にて。これに擬してつくれる物にこそ。神僧傳隱峯傳「獨絃琴子爲レ君彈。松柏長青不レ怯レ寒。金礦相二知性自別一。任向二君前一試取看」とある獨絃琴。即これなるべし。天竺人といへる事。より所ありておぼゆ。されば一絃琴はもと天竺の製なりとはおしはかられぬ

○伊勢物語

伊勢物語は。くさ〴〵說もあれど。うひかうぶりをはじめとし。終焉の歌ををはりとしたる。そのあはひには。くはゝりたる事どもゝあれど。在五中將の一生涯を記せる物とはしるし。秋成ぬしが。よしやあしやといふ物に。源氏物語。總角卷に「在五が物がたりとみえ。狹衣に「在五が日記とあるをもて。この物語の事なるべしといはれたり。その事迹。春日のさとなるはらからをはじめ。中將のすき事をのみしるされたれば。たゞ中將のすきがたりとみるの

知。歇後鄭五爲二宰相一とみづからいへりとぞ。唐は。わが大御國。いとしたしくせられし時なれば。その風俗をさへつたへけるにや。かみつよとても。歇後はなほありといへども。その比よりのちは。ことにいと多くなれりけり 古今集に「つのくにのなにはおもはず山城のとはにあひみむことをのみこそ。實方中將集に「天の戸をわがためとてはさゝれどもあやしくあかぬこいちのみしてなどの類。あげてかぞふべからず

〇有注の歌

有注の歌といふ事あり。題はえながら。その題意より外に。必よまでかなはぬ事ある時。それをよめば題意うすく聞ゆべきが故に。さやうの歌は。人の。ふとみむに。心えがたかるべければ。これをば有注の歌といひて。短冊などにかくに。歌の終の所に。有注の二字をかくなり。右傍にかき。左傍にかくは兩家の別なりと。ある宗匠のかたり給ひし。いとおかしきわざなり。されど歌道の本意をうしなひて。詩の詠物のごとくなりぬるが故に。かく有注の歌といふ事もいできしなり。萬葉集中に。詠花詠鳥など題をおかれたる歌ども。おほくは相聞なり。そのひとつをいはゞ。萬葉集卷七「古爾有險人母如吾等架彌和乃檜原爾挿頭折兼「往川之過去人之手不折者裏觸立三和之檜原者。この二首詠レ葉とあり。はじめなるは。詠物ともいはゞいふべし。されどなほ。いにしへ人の。かざしかざゝぬけぢめ。何のゆゑにかたづねられけん。あやしむべし。次なるは。もとより。檜原がうらぶれん事あるべくもあらぬ事ならずや。こゝをもて。おしはからば。これ男女の贈答なる事あきらかなるべし。これにかぎらず。かの集中には。題ありながら。題にそむける歌どもいと多し。卷三讃レ酒歌十三首が中に。かへりて。酒をおとしめたる歌もあるをおもふべし。されば有注の事。かみつよのてぶりをしれらん眼には蛇足にして。さる歌も。猶うたがはしくはみゆまじきをや

〇蚊子侍從

續世繼物語。卷五に花の山「をとうとの中納言宗忠の。かむたちめになり給ひて後。おやのおほいとの大將を奉りて。少將にはじめてなし申し給ひけるとかや」その少將の子に。光家とか聞え給ひけるを。大臣殿の御子にし給ひて。殿上し給へりける。侍從におはしけるをば。かのこ侍從とぞ人は申しける。親はかくれて。子のあらはれたるにとりしなるべし」云々。

北野聖廟御立
童舞諸圖
法然上人
繪傳之內

節のかざしにて。これとはことなり。江次第卷八相撲召仰「次一番。自注云。左先出。着二葵華一取二劔衣一置二北圓坐一進二立櫻樹下一。次右出。着二瓠華一次々番。負方先進之。云々「勝方。葵瓠等華並劔衣等。稱二背物一令レ具二於次番一。葵瓠華等落時。雖二勝方一風吹入二於階下一者不レ取レ之。不二吹入一時。相撲長一人。進取レ之。最手不レ依二前番勝負一。付レ華並執二劔表一云々。裏書云「葵瓠華造花也とある是なり。これ。何のゆゑありて。葵瓠のはなをかざすらん。葵はしらず。ひさご花は。この束髮於額にもとづきてにやあらん。古事記上卷に「即解二御髮一纏二御美豆羅一而。乃於二左右御美豆羅一於二御鬘一亦於二左右御手一。各纏二八尺勾璁之五百津之美須麻流之珠一云々みづらの事は上にいへり。鬘とは。いかなるをいふにか。和名抄云「釋名云髮音被和名加都良髮少者所三以被二助其髮一也。俗用二鬘字一非也。鬘者花鬘見二伽羅具一など考ふべし

〇世をしりそめの神

世をしりそめの神といふ事。躬恒集にみゆ「かくわぶる人はむかしもありきやと世をしりそめの神にとはゞやとよめるこれなり。これは。古事記神書にていはゞ。天之御中主神をさせるにや。または。豊葦原國をはじめてしらせたまへる邇々藝命を申すにや「神代卷にていはゞ。國常立尊を申すべし。いづれともさだめがたけれど。いづれの神にまれ。いとおかしきいひざまなりかし

〇歌後

わが大御國言にも。いひさしたるやうの調多し。から國にて。これを歇後の詞といふ。晩唐の比。ことにさかりなりき。晩唐の鄭五といひし人。すぐれて歇後を好めり。この人宰相になりし時。「時之事可レ

法隆寺聖德太子御像縮圖

ひさご花は。ひとつにゆひたりし事あきらかなるを。世に傳はらぬは。かへすぐ〵おぼつかなき事なり。おのれか、るすぢにくらければ。まづこの疑を殘しおくなり。なほ。いうそくの人にとひあきらむべし。今童形に。唐輪といふは。いにしへのあげまきの。頭上にひきあがりたるなり。

右舍人皇子の自注なる分の字にあはせておもへば。この太子の御像。御成長ましく〵ける御髮は。かへりてひとつにあげたるは。先後たがへるこゝちす。萬葉集卷十一に「肥人額髮結染木綿染心我忘哉(コマビトノヒタヒガミユヘルソメユフノソメシコヽロハワレワスレメヤ)とあるぞ。すこし心にく、おぼゆる(肥人。古點には。こまびとゝあり。志からば。狛の誤にや。千蔭ぬしが略解には。うまびとゝよまれたり。予おもふよしもあれど。萬葉集燈にゆづりてこゝに略す)うつぼ物語に「今ふたつには。おほんぐしのてうどする。ひたひよりはじめ。さいしもとゆひおほんぐしどもなど云々。此ひたひとは。和名抄に「蔽髮釋名云蔽髮(和名比太飛)蔽二髮前一爲レ飾也とあるは。額につくるかざりにて。髮のゆひ横にはあらず。しかるに。宇都保物語(内侍のかみ)に「みなすまひのしやうぞくし。ひさご花かざしなど。いとめづらかなる事どもしつ、云々。とあるのみ。ひさご花の名はあれど。これは。相撲の

な。緒のむすびやうの事にのみあげまきといへり。また實方朝臣家集に「ある女にふみやりたるかへりごとに。あげまきをむすびておこせたれば「ひろばかりさがりてまろとまろねせむそのあげまきのしるしありやと。とあるも緒の事なり。緒のむすびやうに似たるより。みづらゆへるさまを。あげまきといふにや。また髮が本にて。緒のむすびざまをばしかいふにや。先後はしらず。髮のゆひざまより。つひにはさる童をば。やがてあげまきといひなりにたり。此角子をば。童形の髮のゆひざまなりとは。人みなしりて。その角子よりまへに。ひさご花にしたりし事は。はやくうせぬるにや。されど。舍人皇子自注し給ひて。「今亦然之とか、せたまへれば。その比は猶しかありしにこそ。此下に出だせる圖の中に。聖德太子の御像。みづらゆひたるは。後の童形に同じければ。疑なけれど。それより猶若くおはしまし、御像の傳はらねば。ひさご花のゆひざましりがたし。よにも。童とだにいへばあげまきなるは。いかでひさご花の傳はらざりけん。ことに。かの崇峻紀なるは。卽此太子の御事なるをや。分の字をもてみるに。

法隆寺聖德太子御像縮圖

れば此朝臣も。なほ風祝の心にてよまれけるにや。信濃なる云々としもよまれしは。かの資基がいさををを奪はれたるがごとし。しかれども。俗說なりといはれしは。風の羽振に附會せるならんとおもはれける故にもあるべし。その時。風祝にはあらず。羽振といふことのあるより。附會せるなりとさとされざりしは。すこしおとなしからねど。それも。そのかみは。羽振の義ともおもひよらで。後に思ひえられけるより。ふとよまれしにもあるべし。かうやうの事は。その人がらにもよるべき事なりかし

○ひさご花

崇峻紀云「是時厩戸皇子束髮於額云々注云「古俗。年少兒。十五六間。束二髮於額一。十七八間。分爲二角子一。今亦然之。このひさご花あげまきのふたつがうち。あげまきは。其名。のちにも多くみゆれど。ひさご花の事。たしかなる例をみず。あげまきは。催馬樂に。總角「安介萬支也止宇々々比呂波可利也止宇々々左加利天禰太禮止毛云々。神樂歌に。總角「總角乎和左田爾也里天也云々。などみゆるは。いはゆる角子にて。みづらゆひたる童形の事なるべし。雅亮裝束抄に。わらは殿上のくだりに次て。みづらのゆひやうあり「まづ。とき櫛にて。ちごのかみをときまはして。ひらかうがいにて。わけめのすぢより。うなじをわけくだして。まづ。右のかみを。かみねにしてゆひて。左のかみをよくけづりて。あぶらわたつけ。なでなどして。もとゞりをとるやうに。けづりよせて云々。この詞。かの「分爲二角子一」とあるによくかなへるをおもふべし。台記。天永四年正月朔日。主上御元服篇云「先取二左方婆沙形幷總角等一入二第三懸子一云々山槐記治承四年四月廿二日甲辰。今上皇帝。於紫宸殿卽レ位。御禮服悉着御。或時奉レ取二之御髮上所一也。有レ付二髮一夾形總角云々。下に出だせる圖どもをみあはすべし。源氏物語。總角卷に「あげまきにながき契をむすびこめ同じ心によりもあはなむとあるは。八宮の小祥忌に。名香のいとをむすべるをいふなり　名香の裏樣の事。予がもたる裝束の事かきたる古本にくはしくみえたり。たゞしこのくみは。やがてつゝみものゝかさなりたるかずに。いくすぢもあるべきなり。ながくばっさがりたる所になな。かうなをむすぶなりとみゆ。あげまきは。今いふ華鬘結の事なり。同じ心とよみたるは。古今集に「おなじ心にいざむすびてんとよめるによられたるなるべし。から國にて。同心結といふ。すなはちこれなるべし　雅亮裝束抄にも「からくみなるして。あげまきになをむすびさげて云々ともみえたり。これらみ

そこをのがれむが爲に。ねばとはよむなり。されどよしなくていふにはあらず。相見ていまだ時だにも。かはらねば。ひさしとは思ふまじき理なるにといふ心をおもはせて。ねばとはよむなりけり。これこの阿闍梨の。此詞をしもわきまへられざりけるにはあらず。御國言をば。からごとのなみにおもはれけるがゆゑなりかし。萬葉集卷八に「霜雪毛未過者不思爾春日里爾梅花見都とあるはねばといひぬにとさへよめり。めづらしき例なり

○梧桐

齊民要術曰「梧桐山石間生者爲ニ樂器一則鳴。これ必さることわりなるべしとおぼゆるは今のよにも。弓につくる竹は嵯峨におふるをのみもちふるたぐひ多し。そこなるこそ。よにすぐれたれと。もとよりしらむやは。しかしりたらん人の心もちひこそ。いとおもひやらるれ

○若なすび。若瓜

藤義孝家集に「修理のかみこれたゞ。わかなすび。わかうりおこせたり云々。かゝるたぐひの物。わかきほどをめでしをおもふに。人のこゝろは。むかしも今もかはらざりけり。されど麥の藁して船つくるがごとき。ふくつけき(貪)心は。いにしへには。あらざりけり

○風のはふり

散木集に俊頼朝臣の家集なり「しなのなる岐蘇路のさくらさきにけり風のはふりにすきまあらずなどある。この風のはふりといふ事。信濃に。風祝といふ物ありといへり袋草子にみゆ。この下に引きたりおもふに。萬葉集卷二。人麻呂が長歌に上下略「朝羽振風社依米夕羽振浪社來縁云々とある羽振は。鳥の羽振より出でたる詞にて。溢るゝ義なり。古今集中にも「身はすてつ心をだにもはふらさじとよめるこれなり。かの風のはふりは。朝羽振風とよまれたるに同じく。風祝にはあらで。風の羽振の心なりとおぼしきなり。かく心うれば。この歌も子細なかるべし。袋草子に。能登大夫資基。諏訪の社に風祝ありて。春の始より。百日の間尊重すれば。風しづかにて。農業さはりなしといふ事を。俊頼朝臣にかたりて。歌によまむとおもふよしをいひしに。無下の俗説なり。よむべからずといひて。のち此歌をよまれければ。尤腹黑事歟とあり。しか

にうとはか、れけん。小式部が心のうちに。定賴黃門のこゑを聞きしりめで、。おもはずンといひたりしは。音はありながら。關白殿下にはゞかりたるなり。さればンは。未發既發の間のこゑにて。口をひらけば。やがて字となる事。この書きざまにておもふべきなり。この考を。わが伯父なりし洪園にかたりたりけるにンは漢土にも文字はなきにや。爾雅に。臍輪とて。◎か、る字あるは。ンの字なりといはれき

○子もちひじり

狹衣卷二に「唐國の中將。子もちひじりといふ事あり。これらは。かの「もろこしのよし野とよめるたぐひにて。世にあるまじき事を。わざといふなり。わが大御國言は。すべてこなたよりことわるやうにはいはで。聞く人のおもひとるべくいふを。むねとするがゆゑに。むかし人は。かくみやびたる詞どもは。多かりけり。のちの世心もてみれば。むかしの詞どもは。あやしき事おほかるは。もはら此けぢめあればなり（袋草紙に「遍昭云。法師の子は。法師なるぞよきとて。推テ令レ剃レ頭ヲ云々とあるは。遍昭僧正。在俗の時の子なり。この子もちひじりにおもひまがふまじきなり）

○ねばといふ脚結

かみつよに。ねばといふ脚結おほし。すべて。ぬにといふ心に用ひられたり。代匠記に。萬葉集卷四「奉見而未時太爾不更者如年月所念君といふ歌の注に「秋たちていくかもあらねばこのねぬる朝げの風は袂すゞしも（此歌を。後撰集には。すでに「あらぬにとなほしてのせられたり）「秋田かるかりほもいまだこぼたねば雁がね寒し霜もおきぬがに「さねそめていまだもあらねば白たへの帶こふべしや戀もつきねば「秋山のこのはもいまだもみぢねばけさふく風は霜もおきぬべく「卷向のひばらもいまだくもらねば小松が原に淡雪ぞふる「うの花もいまださかねば郭公さほの山べを來なきとよもす。これらを引きて。末のよのあさましきは。この詞などのかなへらんとを。いかに案ずれども。えわきまへはべらぬなりと。契沖あざりはかきおかれたり。この阿闍梨より後の注者も。たゞぬにの心なりといへるばかりにて。辯じおかれたることも見えず。先達のおぼめかれたる事を。わきまへがほならんは。なかなかなるわざなれど。此詞「いまだ時だにかわらぬにとよむ時は。われよりことわるわざとなるが故に。

かくそこの語までもつたはれゝば。踈からざりし國なりけんとおぼし（夫木集「われといへばさもあらぬ戀をなしへ　おきて野守もみえずくちのやかた尾　如覺）といふ歌。かの百濟の名ながらによめり

○經緯

經緯（五十韻をいふ。亡父つれにがくいはせたるなり）の本は。悉曇家には阿字也。おのれおもふに。五十のこゝろ。みな口をひらきて後きこゆ。口を閉ぢながらこゝろあるはンなり。此ンのこゝろ。さながら口をひらけば。はじめてなり出づるこゝろは宇なり。こゝをもてみれば。他域の言はしらず。わが大御國にしては。五十のこゝろの本は宇なる事疑なし。（すべて。風土にしたがひて。同じからざる物なる事。いふも更なれば。音とても。猶他域にたがふ事がならずあるべし。うたがふべからず）かくいふ所以は。わが大御國言。すべて下に宇緯の音を踏みたるは。詞の正しきなり。たとへば。おもふといふ詞。布をふみたるが本にて。この布の。おもはぬ　おもひ　おもへ　おもほゆ　などかよふは變通なり。また。みるといふ詞。見らく　みればなどかよふが如く。すべて詞といふ詞。このさだめならぬはなし。これをあはせておもへば。いよいよ宇の音は。諸音の本源たるべしとはおぼしきなり。此ンといふこゝろ。音はありて文字なきが故に。牟遍美など。音便にしたがひて假り用ひられたり。所謂蟬丹波　難波など。脚結の良牟　計牟などのごとし。萬葉集卷一「三輪山平然毛隱賀雲谷裳情有南畝可苦佐布倍思哉（ミワヤマヲシカモカクスカクモダニモコヽロアラナンウクサフベシヤ）といふ歌の。畝は。一本に。武につくれり。字形の似たるが故に誤れるなるべし。あやしむべからず。宇治拾遺卷三「今はむかし。小式部内侍に。定頼中納言ものいひわたりけり。それに又。ときの關白かよひたまひけり。つぼねに入りてふし給ひたりけるを。しらざりけるにや。中納言より來てたゝきけるを。つぼねの人。かくとやいひだりけむ。沓をはきて行きけるが。すこしあゆみのきて。經をはたとうちあげてよみたりけり。二こゑばかりまでは。小式部内侍。きと耳をたつるやうにしければ。この入りてふしたまへる人。あやしとおぼしける程に。すこしこゑ遠うなるやうにて。四こゑ五こゑばかり。ゆきもやらでよみたりける時。うといひて。うしろざまにこそふしかへりたれ。このいりふし給へる人。さばかりたへがたう。はづかしかりし事こそなかりしかと。のちにのたまひけるとかや」とある。此うといひてといふ宇は。ンたるべけれど。文字なきが故

でたき事もあるべければ。ひたみちには思ひ、がむまじき事なり

○脚結のをもじ

をといふは脚結の事。（脚結とは。世にいふてにをはの事なり。亡父がくいはせたるなり）亡父成章いへらく。酒はのむために釀み。ふみはみむためにつくれる物なるが故に。酒をのみ。書をみるとはいふべからず。もし。目しひたる人のふみをよみ。やまひある人のさけをのまば。必をもじはおくべしといへり。古今集雜下「かぜふけばおきつしら浪たつた山といふ歌の左注に。（上下略）「よふくるまで琴をかきならしつゝうちなげきて云々このをもじは。琴ひくべき機嫌ならぬに。心ならずひくさまをおもはせられたる也。もと琴はひくべき爲につくれる物なれば。かゝらむ時こそ。をとはいふべけれ。又いと後の世の歌なれども。（新古今公衡）「かりくらしかた野の眞柴をりしきてよどの川瀨の月をみるかなとよめるをもじ。家にかへりてのちみるべき月を。おもほえず。かた野にて見つるかなとの心をおもはせてなり。脚結はすべて。をもじにかぎらず。いづれも。かゝる心えある物なり。おろかにすまじき事。このひとつにてもしるべし

○くだかけ。はし鷹

伊勢物語「よもあけばきつにはめなむくだかけのまだきになきてせなをやりつる。このくだかけは。百濟鷄の略にて。もと百濟よりわたり來たりける故にやあらん。かゝるたぐひ。「高麗錦「新羅斧など。萬葉集中いと多し。はし鷹といふ名も。もし其はじめ。波斯國よりわたり來ける鳥なりけんか。鷹のおほ名のごとくなれるにやあらん。鷹のわが大御國にはじめて捕ひけるは。仁德紀に「百濟俗號ニ此鳥ー曰ニ倶知ー（是今時の鷹なり）とあるこれなり。百濟にては。倶知といふめれど。其名はこゝには傳はらず。もとこの鳥。種類多き物なれば。はし鷹もその一種の名にや。それはしらず。宇都保物語に。俊蔭が。波斯國にいたれるよしをもかかれたれば。たよりなきにしもあらぬがゆゑに。さかしらにおもひよせられしなり。江談抄に云。「波斯國語。一（サ）、（ア）二（止ア）三（マ）加四（ナムハ）五（利摩）六（ナム）七（兎九）八（亥美罪）九（左伊美罪）十（沙羅盧）廿（止ア盧）卅（肥汲不盧）百（七々夢止）千（七々佐雨）以上誤字もありとみゆれど。おのれもたる本。享祿中の寫本をみしにも。なほ。かくのごとし。波斯は。

○仁德帝御製

新古今集に。「たかきやにのぼりてみればけぶりたつ云々といふ歌をば。仁德天皇の御製とせられしより。世みな。そのあやまりをつたへたり。これはまさしく。日本紀竟宴歌に「得二仁德天皇一」とて。時平公の歌なり。契沖阿闍梨が代匠記に。御製とかきおかれし後。これをみいでゝ。うち歎かれしと。似閑ぬしが書き入れにみえたり。さる博覽すら。かゝる事ありけるをや。近江天皇の。「あきの田のかりほの庵の云々の歌も。たしかに所見はなけれど。同日の論なるべし。おほかた。此二首ともに。その御世〳〵の歌のすがたにはあらずかし

○御國言

古事記垂仁の御卷に。品牟都和氣命の御事をば。「是ノ御子。八拳鬚至二心前一眞事登波受。中略物言如レ思。爾而勿二言事一」この詞。うちみには心えがたき詞なり。勿レ言といはゞ。物言如レ思とはいふべからず。物言如レ思といはゞ。勿レ言とはいふべからぬことわりなり。されば思ふに。思ふが如く物いふは。眞言にあらねば。さる物いひは。物いふにあらずとの心なり。これをば啞のごとく心うるは。いとをさなきわざならずや。萬葉集中。「言佐敝久」と韓言をよめるは。日本紀に「韓語言」といふにおなじく。きく人の情をさふるいひざまをいふにて。この眞言の反なりとしるべし。此けぢめをよくわきまへずば。かみつ世の言どもはとき得まじく。ましておのがいはむ言をや。ゆめ〳〵。わが大御國言を韓語言に混ずまじき事なり

○淺黄櫻

長明。四季物語といふものに。「御社のあたり。みあれ山の櫻は。あさ黄なるもありて云々とあり。今の世。淺黄櫻といふ物。これなるべし。これよりふるきものにはいまだみおよばず。されど。この四季物語うけがたきものなれば。かへりて後にや

○良馬

欽明紀。七年秋七月。川原民直宮紀伊國漁者。贄を負せたる草馬の子を。良馬と相して。買ひて養ひけるに。果してよき馬なりしといふ事あり。和名抄云。「牝馬一名騲馬上音草和名米萬」とあれば。草は騲にて。牝馬の事なり。されば良馬は。牝牡によらぬ事なるべし。おほかた。人のおもひよらざる方に。思ひの外にめ

らぶみにも。さるたぐひはいと多かりとぞいはれし。この書の事は。なにはの雅嘉ぬしが。群書一覽に。くはしくのせられたるを見るべし

〇神書

神書一卷は。神代卷。古事記。上卷もと。後にいできたる物にて。はじめに冠らせて。上卷としたまへる物とおぼしきなり。かくおぼゆる故は。神書中の歌のすがた。神武の御卷なる歌にくらぶれば。かへりてふるくもみえねばなり。いづれの御世にとも。たしかにはいふべからねど。もし。雄略帝の御世の頃にやいできつらん。神書。八千矛神の御歌のをはりに「許登能如多理碁登母許遠婆とありて。そのつゞきの御歌。をはりごとに此詞あり。中卷より末には。雄略の御卷にしも。此詞。をはりにある歌あればなり。されど。その雄略の御卷なるも。神書の歌をまねびたりともいふべけれど。歌はかへりて。その御世のすら。ふるくみゆるぞかし。この帝に。天照大御神の御をしへありしかば。驚き悟り給ひて。豐宇介大神を。丹波國吉佐宮より。今の伊勢の山田原にまつらせたまひし事。世記にみゆ。もと内外宮は。具足せざれば。わが御敎のことわりは盡きざるを。この帝の御代にしもそなはりたれば。いとゞおもひよせらるゝなりけり。おほかた。物のはじめにある物は。後より冠らせたる事おほし。ことぐくいふにいとまあらず。

〇訓讀

好古小錄と云ふものに。藤貞幹著「日本紀。古來は。全篇訓讀の書にあらず。故に建久年中の本。及。桃華の御本。皆ヲコト點をつくるのみ。されば。日本紀の假名と稱するは。私記等の訓なり。今の印本のごとく。悉。訓讀せしにはあらず。悉訓讀をなすは。日本紀を讀む爲につくりし假名本を釋日本紀云。假名日本紀。元慶說云。爲讀此書。私所注出也。作者未詳眞名の日本紀に。幷べて書き入れて。よましめしが傳はれる物ならんとみゆ。もと。からぶみがきにかきたまひし物なる事。これらの說にもあきらかなり。これによりておもふに。萬葉集の端作なども。しひて訓讀せむはなかくなるべし。しかれども。日本紀も。御國言をからもじもてあて給へる所もあるべき事。古事記に。御國言のまゝにかゝれたる所々多きに思ふべし。一概にも心うまじきなり

はいふべき事なり。欽明帝。磯城島金刺宮に。あめのしたしろしめしつとあれば。磯城もと。磯城島ともいふなるべし。やまと島と。萬葉集中におほくよめり。此帝の大宮はいと後なれば。その御世をさしたるにはあらじとぞおぼゆる

因云。倭姫命世記は。世に信せぬものなり。その信せぬゆゑは。「天皇卽位。廿三年己未二月。倭姫命。召集於宮人及物部八十氏等宣久。神主部物忌等。諸聞。吾久代。大神託宣摩志萬志支。心神則天地之本基。身體則五行之化生奈利。肆元々入元初本本任本心與。神垂以祈禱爲先。冥加以正直爲本利。夫尊天事地。崇神敬宗。則不絶宗廟。經綸天業。又屏佛法息。奉再拜神祇禮。云々これらの詞あるが故也。予おもふに。この天皇卽位廿三年以下。卷尾までは。後人の加へたる物なる事しるきは。こゝより上の文氣は。かみつよのすがたにて。此以下のごとくあさましき事なし。ことに鎭坐の神名どもをつらねたるも心ゆかず。まして其奥に。「神代下云などある。後人の所爲疑なき證なり。又はじめの程も。後人のそへたるにこそとおぼしきは。卷首の「天地開闢之初といふより「治天下八十三萬六千卅二年といふまでなり。その故は「神寶日出之時「爲月爲日永懸不落。或爲神爲皇。常以無窮など。また「此時天地淸淨止。諸法如影像利奈。淸淨無假穢。取說不可得須。皆從因生業止世利。諄解世利など心ゆかねばなり。かの「天皇卽位云々よりまへにも。後人の註したるが本文になりたりとおぼしき所々あり。いはゆる「御間城入彥云々の條の終に「是今踐祚之日。所獻神璽鏡劔是也。謂名内侍所也などこれなり。かゝる所々はみゆれども。此中間の文氣は。後人の所爲の及びがたき所あるがうへに。雄略帝の御時。豐宇介大神を。丹波國よりむかへまつられし事。第二回に。吉佐宮にまつられ。第三回に。伊豆加志本宮に祭られける時。豐宇介大神は。この宮にのこしまつられたりしが故なる事。此世記なかりせば。なにゝよりてか。丹波國よりむかへましゝ故をしらん。此故に予は。「神日本磐余彥天皇云々より以下。「造伊勢兩宮焉といふまでをば。信ずべしとはおぼゆるなり。此こと人にかたりしに。か

北邊隨筆

富士谷御杖著

○志貴島の道

志貴島の道といふ事。古よりたしかにことわられたるものをみず。もと磯城は。崇神天皇の大宮所の名にて。其御紀に「三年秋九月。遷都於磯城。是謂瑞籬宮」とみえたる是なり。かれ思ふに。同紀に「六年。百姓流離。或有背叛。其勢難以徳治之。是以晨興夕惕。請罪神祇先是。天照大神和大國魂二神。並祭於天皇大殿之内。然畏其神勢。共住不安。故以天照大神。託豐鍬入姫命。祭於倭笠縫邑。仍立磯堅城神籬。（神籬此云比莽呂岐）亦以日本大國魂神。託渟名城入姫命祭。然渟名城入姫。髮落體瘦而不能祭。かく天照大神を。宮外にまつらせ給ひしより。垂仁天皇二十六年に。今の伊勢國五十鈴川上にまつらせたまひしまで。國々所々にうつしまつられ。あるひは一年にもおよばず。或は二年四年におよべる所もありて。遷座十九度におよべる事。くはしく倭姫命世記にみえたり。その御像鏡は。すなはち、八尺勾瓊。鏡。草那藝劔と神書に見えたる。そのひとつにて。この三くさは。わが御教の表物なり。されば神武天皇より開化天皇まで。九御代の間は。同殿共牀なりしといふは。わが御教を。宮中にひめさせ給ひし程をいふなり。崇神天皇の御時。倭の笠縫邑に。はじめてまつらせたまひしは。わが御をしへを。宮外にひろくせさせ給ひしをいふなり。難以徳治之がゆゑに。この御教をば天下にしらせて。百姓流離を治めたまはむがために。宮外にまつらせ給ひしなれば。此御代にしも。始めて此御をしへある事をば。人みなしりぬるが故に。志貴島の道とはいふなりけり。さればもとこれ。神道をさしていふ名なれど。（神道といふ名は。孝徳紀にはじめてみえたり）後世にては。たゞ歌道の名のごとくなれるもことわり。わが御教の要とするは。言語なればなり。もと歌道は。神道にそなはれるものなる事。神武帝の御紀に「以諷歌倒語掃蕩妖氣倒語之用始起乎茲」とあるをおもふべし。その別をいはゞ。倒語は。人に近きあはひの用なり。諷歌は人に遠きあはひの用なり。（近けれど遠きになし。遠けれど近になして。用ふるもつれなり。これは。時に隨ふことなり）この故に。諷歌倒語ともに。おしこめて志貴島の道と

北邊隨筆目錄終

北邊隨筆目錄

北邊隨筆序

朝志保乃。本里江由。與世來流木積波毛。月爾日耳異邇。安里曾浪。以夜志九斯久宇呉奈比都良九。横山乃如菟豆母利氏。取曾祁牟爾。機貫阿倍受。燒宇氐牟耳。火鑽多倍儒邢毛安留。乏志伎毳。左夫斯貴鴨。綿津見乃宇豆能美手爾所纏珠。以蘇我九里。可賀與比欲里世婆。未通女等賀。伊奈陀支耳毛伎勢。宇末臂苫能。宇麻良邇奴玖羅牟行相裳將見乎。伊勢海。阿胡禰乃浦。可毛度九。澳津島廻尙。洲爾居類舟能沙文良敝杼。以々豆々許々毛々。千江乃浦爾斯安禮婆。白珠乃。五百箇栖都度比。青玉能。瑞枝乃瑰篋珠守等我。家止古路告禮。以豆九麻藝氏可。以加奈留利目黥婆。手能末賀比。足乃躓邢九。水底比可屢。美豆乃眞珠波將拾毛乃叙登。眞許止不賀泥。安伎羅牟流我年

文化十三年丙子三月　　御　杖

とあり。僧尼の外に常の人髭髮をそることなかりしに。髻の處を少しのこし。組みて長くたれて。牛の尾の如くなるを辮髮と云ふ。これ中華の風俗の大變なり。我が國も昔は中華の如く。僧尼の外に髮そることなし。中華の大變は。近世に韃靼のヱビス國を奪ひて。天下の人悉く其の國の風俗にして頭髮をそりたり。是その始りなり。いつの比よりか。日本の武士の中に月代とて。頂の髮をそりしに。のちは鬢をもそりなどし。額に角をたて頭髮をも半過ぎて頂の邊までそりおとし。髻をば指のふとさにして。其の末を剪りすてゝ。鶴の尾などの如くなり。公家の人はいまだ髮をばそらねども。是も武家をまなびて鬢をそれり。武家も昔は烏帽子直垂を着たりしに。今はそれともやみぬれば。只月しろをさらして少しの髮をうしろに束ねたるさま。昔の大わらはには似もやらず。何と名付けんやうもなし。韃靼のヱビスは鬢をのこせるに。此方の人は鬢をさへそり落しぬれば。斷髮の風俗かれよりも甚しと云ふべし。近き比は。又うしろの髻の內をもそりては。いよ〳〵髮をすくなくし。然かのみならず。女も髮の多く長きをきらひて。頭髮の中を丸くそりて髻を細くし。髮の末を剪りて短うす。是大に昔にかはれる。惡風俗なり。もし此のまゝにて年をへば。いつとなく。女は今の男の如くにもなり。男は全く法師にもなるべからんとぞおもはるゝ。さもあらば韃靼のヱビスよりも。見苦しかるべし。風俗の移り易はるも人力に非らず。これ時の運なり。されば古の聖人。たゞ此の事を慮りたまひ。よき風俗を永久にたもつべき術をもうけおきたまへり。其の術は何ぞと云ふに。正樂を行ひて、淫樂を禁ずるに在り。これ國家を治むる政の要務なり

獨　語　終

璃。三線などをば近付けぬ類あり。士君子反りてよき樂しみをしらず。ひたすら淨瑠璃。三線を好みてはれやかなる所にて。おめず憚からず。賤しき所作をして人の玩となる。薄祿の士のみに非らず。諸侯貴人にもこの類多しときけり。これをも冠と履と處をかふと云ふべし。是のみに非らず。今の諸侯貴人の道を往くさま。昔にくらぶれば殊の外にをこがまし。少の所領にて從者の數もさのみに多からぬを。廣く長く並べつゞけて人の妨となるをかへりみず。臂をふり。足をふみならしていかめしくあたりをはらふ。見るもうるさく片腹いたく覺ゆ。傍若無人これに過ぐることやある。凡。君子は溫恭にして。萬。穩便なることそたふとけれ。萬人通行すべき都の大路を。何ぞわれ獨の道と思ひていかめしくふるまふべき。反す〴〵も愚なる心なり。諸侯すらなほ然なり。まして夫より下つかた。少しの祿を食みて十廿人の從者めしぐする計の人は。いよ〳〵分限をしりて。身のほどよりもひき下げて。よろづ穩便なるべしと思ふに。さはなくて今ひときはをこがましく。我より上に又人も無きやうに。道をふたぎて往くさま。見苦しとも云ふばかりなし。此の風俗も。我が幼けなかりし時に思ひ比ぶれば。けやけくめざましく見ゆ。都は昔は諸侯貴人も多くは恭敬にして禮をつゞしみ。賤しき者にも耻ぢてはしたなきふるまひをせず。君たる人も臣下に禮厚くし。ことばつかひ迄も恭しかりきと。我が父語れり。今は大方。此の風もなくなりぬ。又昔は士君子の婚娶に財幣を求むることなかりしに。今は一郡をも領するほどの人だに。財幣を求むることになりぬれば。下ざまの人は云ふにや及ぶ。世の治れること久しきによりて。人皆佚樂して。近比は。有祿の士より上つかた國郡の主まで。殊の外貧困して。凡商賈を賴みて內外のことをいとなむ故に。位ある人も。商賈を恐れ敬ふこと甚しければ。商賈は是に乘じて士大夫をも輕しめあなどる。是も昔にかはれる風俗なり。かくばかりの貧困にても。外に出で、知らぬ者の中にては。をこがましきふるまひするををかしとも思はれず。中華の人。往古は男も女も髮そることなし。五刑に及ばぬほどの輕き罪の者をば。髡刑とて頭髮をそりけり。佛法渡りてより。男女髮を剃りて僧尼となるこ

ふ。越前國より粉紙にて元結紙と云ふものを造り出だし。海内の婦女みな是を用ふ。夫より絹にて卷く事もやみぬと。我が父正しく是を見て語り聞かせたり。今の人聞きては信とせず。凡男女の髮かたち。我等が見及びてよりこの方も幾かはりかしつらん。今は昔のかたものこらず。昔の婦人は。髮多く長きをたけにあまるなど云ひて譽めしに。近比は髮少く短きをよしとする風俗になりて。髮多き女は髻の內を。或はきり或は剃りて少くする。此の風俗は京の婦女より移り來れり。此のことに限らず。都べて男女の風俗。詞づかひ。物の名まで。近比は京に似たること多し。京は公家の外。工匠商左のみなれば。人の心柔懦にて利にかしこく。江戸は武家の都なれば。あづまうどの心粗暴にて利にうとし。然るに三十年この方は。江戸の人。京の風俗を學ぶ故に。武士の心も昔にかはれり。唯京の婦女の。昔より豪衣するのみこそ。いまだ江戸にうつらね。江戸の婦女の外に出づるに。昔はきまゝとて黑き絹にて頭面をつゝみ。目ばかりをあらはしけるが。其の後綿にて頭面をつゝみしは。我が二十あまり。寶永の比までしかなりき。今はちひさき綿を頭上にいたゞきたるのみにて。面をば打ちさらし。はれやかなる顏にて道を往くさま。おもはゆげにも見えず。男は面をあらはすべきものなるに。此の頃は。あみがさの肩の上までかゝるをかぶるはめづらしからず。冑の如くなる帽子をかぶりて面をかくすもあり。常の頭巾に覆面の如くなる物をつゞり付けて。目ばかりをあらはして道をゆくもあり。昔の女の如し。人目をしのぶ者の多くなりたるにや。また此の比の男は小袖の裏を紅にし。或は紅のはだ絹を袖口ながにして。腕を纒ふばかりにひらめかす者多く見ゆ。女はかへりて縹の白き裏などきるめり。此等は男女所を易ふと云ふべし。又昔は士君子こそ。學問し歌よみ詩を作り連歌し。或は管絃を玩び。すこし下れる品なれども。琵琶を彈じて平家物語し。筑紫箏。幸若の舞など習ひて樂しみあへりけれ。三線を鳴らし淨瑠璃を語ることは唯市井の賤しきものゝみなりき。それだに大方。人にかくしてしのび／＼に習ひしぞかし。今は工人商の中にて。やゝ富めるものは。學問し詩歌管絃を玩び。少し下れる品なれども猿樂などを習ひて樂しみとして。淨瑠

時にはあはずして。猛虎も鼠となり。寶劍も鐵（ナタ）となることをいきとほる。かくて。此の世の治まれること久しきに依りて。上より下まで心ゆるみて。ひたすら歡樂のみをいとなむ故に。舊きことはをかしからずなりて。新しきことをめづらしともてはやすほどに。人の詞。身のさまより始めて衣服器物屋づくりまで。昔にかはりぬれば。まして人間種々の儀式。遊宴の樂など。新しきことども年々に出來て。舊きことはいつとなくすたれはつ。大方舊きことにはよきこと多く。新きことにはよきことすくなし。風俗の移りかはること目前に歴々然たり。其の中に昔と今と寒暑の如くかはれるさへあやしとみるに。冠を履にはき。履を冠にきるやうなる事あるこそ不思議なれ。つく〲と百年この方の風俗を思ひくらぶるに。餘所のことをばおいて。江戸の人の風俗こそ殊に昔にかはりたれ。我が親しき者の中に。慶長元和の比生れたるもの男にも女にも有りて。寛永の比を年の盛に經たりと云ふに男は。冬韋のうちかけ。革の袴を美服とし。女は紫の革の襪子をはくを能きけはひとせりと云ふ。其の襪子は我が幼き時までも殘りて有りしなり。婦女の帶は金襴を美麗の限とし。黑地に梅櫻松を所々に織り付けて。是を鉢の木の帶と名付けて珍重しけり。廣さ僅に鯨尺二寸ばかり。紙を心として綿など入るゝことなし。四月より八月まで。婦女の禮服に。綿にて廣さ鯨尺の八分ばかりなるを後に結びてたるゝをつけ帶と云ふ。今のつけ帶は昔の常の帶よりも廣く今の人に昔のことを語れば。そらごとゝ思ひてつゆ信とせず。此等は我がまのあたりみたりし事にて詐に非らず。舊きこと知りたる人あらば尋ね問ふべし。都べて男女の衣服。昔は極めて質素なりき。男子も女子も十四五歳までは長き袖をきるに。昔は鯨尺の一尺七八寸を極とせしに。貞享の比より二尺計になり。それより漸くます〲長くなりて。近比は二尺四五寸になりぬとみゆ。婦女の帶も貞享元祿の比より漸く廣くなりて。今は鯨尺にて八九寸におよべり。綿を心として褥の如し。男の肩衣と云ふ物。昔は麻の幅鯨尺の八寸計なりしに。貞享元祿の比より幅一尺に及べり。寛永の比迄は婦女細き麻縄にて髮を束ねて。其の上を黑き絹にて卷きしに。其の後麻縄をやめて紙にてゆ

なきするもあり。賤者のみかくあるに非らず。士君子の品よき人にも此類多し。人の風俗の日々に惡しくなりくだること宜なり。又異國にては。士農工商の正しきわざをして世を渡る者を平民と云ひ。戯子の類をば都べて樂人と名付けて平民の數にいれず。人の外なる者とし。種類を分けて殊の外にいやしめきらふことと。我が國の穢多の如し。されば平民の貧しき者も。子を樂人となすことを得ず。樂人より。平民に入ることも叶はず。平民と樂人と婚姻を通せず。皆國家の大禁なり。是を犯せば刑罰あり。平民と樂人と種を混ぜしむまじき爲なり。我が國にても。野良役者はもと穢多の部類に定めおかるれども。世の人彼が技藝を愛する心より。彼等を近づくることを恥とせず。彼らは家富みて都の內によき住居し。美服をきるのみならず。伶俐にて歌よみ詩作り學問する者さへありときけば。增して世間のあらゆること何か昧からん。何かつたなからん。人の機嫌を知り。人の心に入ること極めてかしこければ。常の人。是におひてはかけずけおさるとなり。されぱいつとなく。彼のともがらに泣き付きて。士君子にもまじはれば。賤しき者と知りながら。士君子も得いやしめず。をはりには都の內に宅地もとめて。あきなひなどして平民となるも多し。諸侯にめされて奉祿たまはり士となるもあり。心ある人。是れを見聞きては長大息すべし。國家の法禁ゆるき故に非人を以て人類に混ずる。誠に痛ましき世のありさまなり。遠き昔は云ふに及ばず百年の前まではか丶ることはなかりきとふるき人云ひはべりき

我が父は寬永の中比に生れて。八十八歲にて享保の中比に終り。大猷院殿　嚴有院殿の御世を歷て。其の時のことを常に語りつれば。我が幼きより聞きて耳に熟せり。我は延寶の終の年に生れ。常憲院殿の御世よりこの方は正しく此の身に歷つれば。童稚の時より是迄五十餘年のことをば目に見たり。父の語り聞かせつると。我がまのあたり見つる事々を思ひつゞくれば。百年の世變歷々として目の前に在るが如し。人と物語するついでには。昔の事ども云ひ出だして。或は笑ひ或は嘆き。且はをさまれる御世に生れて。干戈の苦しみをしらず。安くいね靜におきて。嘯き歌ひて明し暮すことを悅び。かつ事ありし

漢土にて俳優と云ふは。今我が國の狂言師なり。戯言を云ひて人をわらはするを俳と云ふ。優は則狂言師なり。俳優侏儒と云ふは人の身のたけ短きを侏儒と云ふ。たけ短きものはものまねしてまひをどるによき故に俳優はおほく侏儒なり。昔。春秋の世に。魯の定公と齊の景公と夾谷と云ふ所に會盟せられしに。孔子魯の大司寇の官にて。定公の爲に相となりて行き給ふ。會所にて宴饗のついでに。齊の方より俳優侏儒を出だして。戯舞をなさしめしかば。孔子是を咎め給ひて。先王の法に匹夫諸侯をまどはすをば。其の罪殺すべしとて。左右の司馬に命じてきらしめ給へり。聖人のいましめ。後世かゞみずんばあるべからず。優旃優孟など云ひし者。皆此たぐひなり。唐の代には。梨園の樂工と云ふ者即俳優なり。宋元の代より雜劇と云ふことあり。則俳優の所作なり。雜劇は全く此方の今の狂言なり。戯子と云ふ者此方の野良役者なり。雜劇の所を勾欄と云ひ。亦戯塲とも云ふ。此方のしばゐなり。雜劇の觀る所を棚屋と云ふ。此方の棧敷なり。今の猿樂も。もと中華の雜劇を學びたりとみゆ。中華の雜劇には國家の法禁ありて。男女淫奔などのたぐひ何にても。世の風俗に害あることをなさしめで。唯忠臣孝子義夫節婦などの風俗を勵ますべきことをなさしむ。若。この掟に背くものあれば。刑罪を加ふ。是國家の政なり。今我が國には此の禁制なき故に。かりそめの戯にも。男女の色に耽り慾をほしいまゝにし。或は淫奔して身を失ひ家を亡ぼしたる者のことを學びて。ひたすら淫佚を勸むるわざをなすよしなり。男女の少きものは云ふに及ばず。年たけたるものも。是を見て面白きことの限と思ひ。妻子をひきぐして。しば〳〵戯場に遊ぶほどに。幼き者も是を見て。昔よりは早く智惠つきて。よからぬ道にかしこくなり。ものいひ立ふるまひより。姿かたち身のよそほひ。衣服調度まで。こと〴〵く野良役者を學びて。かりそめに寄り合ひて物語するにも。戯場のをかしかりしことを云ひ。野良役者の名を指して。それはかくあり。誰はとありと云ひて。己が心によしと思ふをほめ。惡しと思ふをそしれば。人々すききらひありて。互にあらそふほどに。後には怒を起して。女などはいきまきてすゝり詞あらく顔打ちあかめ。

に非らず。遠國のいなかにも。其の所の風ありて一節かはりたることさまぐ〵なり。其の中に江戸の淨瑠璃は。本より武家の好みに合はせたる故に。詞も節もいさめるやうにてつよみあり。京難波の淨瑠璃は聲哀しくふるひてよわげ多し。さりながら元祿より以前は。何方の淨瑠璃も皆昔物語なりしほどに。詞がらさのみいやしからざりき。其の後はたゞ今の世の新しきことを語り出だせる故に。詞甚いやしくなりぬれば聲も節もつれていやしくなり淺ましくなれり。されども土地の風俗同じからねば。江戸の人。京難波の淨瑠璃を聞きては。頭をそむけ耳を掩ひて。聞くべきことにもせざりしに。寶永の比。京より一中と云ふ淨瑠璃師來りて。京の淨瑠璃を弘めしより。江戸の人。や、是をよろこびあへりしに。享保の初に。又難波より竹本と云ふ淨瑠璃師來りて。難波の淨瑠璃を弘む。是より江戸の人。貴きも賤しきも難波の淨瑠璃を好みあへりしに。其の後又都路と云ふ淨瑠璃師難波より來りて。悲しき聲にていやしき諺の淺ましくとりみだしたることどもを語り出だすほどに。江戸の人。又是に移りて興じもてはやすこと限なし。下ざまの人は云ふに及ばず。諸侯貴人。雲の上なるやんごとなき人々も。ひたすら。是を好みて。歲の初にも。吉事ありて目出度をりから壽きあへる座敷にも。哀に悲しき聲にてうれはしきことどもを語りつゞくるを。をかしと聞きていまはしともおもはず。日を暮し夜を明してあかずきくめり。淨瑠璃師。目くら法師などの語るを聞くだに淺ましとみるに。士君子のさもいやしからぬ人どもの此一ふしを習ひてはれやかなる所にてはぢ顏もなく聲打ちあけて語るものありとかや。此の比に及びては。江戸の人ひとへに京難波の淨瑠璃をのみ悅びて。江戸の淨瑠璃をば。また聞くべき物ともせず。世の風俗は民の好惡に從ひて移り易はるものなれども。三十年の內に。江戸の人のすきゝらひ。寒暑の如くに易はれるは他の故に非らず。これ全く淫樂の力なり。雅樂の風俗を善くするよりも。淫樂の風俗を惡しくする。其しるし。尤速なり。和漢古今の風俗の中に。今の三線。淨瑠璃ほどの淫聲。又有るべしともおもはれず。世の末とは云ひながら。淺ましく悲しき風俗ならずや。

ち拍子を取るのみなり。詞は定まりたる數ありて。皆昔物語を演べたり。新しきことをば作り出ださず。士大夫の中に玩びても淫佚を進むる恐なし。寛文延寶の頃までは。諸侯貴人の宴饗にも是を用ひて心をなぐさめ。酒を進めけるに。元祿の比より猿樂さかんになりて。幸若の舞。世にすたれたり。說經と云ふ者は。もと法師の中に。本說經師と云ふ者有りて。佛法の尊きことゞもを詞に綴り。浮世の無常の哀に悲しき昔物語を演じ。善惡因果のむくいあることゞもを物語に作りて。是にふしを付けて哀なるやうに語りしなり。鉦鼓をならして拍子取り。世の婦女に聞かせて惡を戒しめ善を勸めて。菩提心を起さしめんとするなり。昔より法師の說法に因果物語するたぐひなり。其の物語は俗說に任せて慥ならぬ事も多けれども。詞は昔の詞にて。賤しき俗語をまじへたる中に。やさしきことも少からず。其の上幸若の舞の詞の如く。昔より定まれる數ありて。いつも古きことのみを語りて。今の世の新しきことを作り出ださず。其の聲も只悲しき聲のみなれば。婦女これをきゝては。そゞろ涙を流して泣くばかりにて淨瑠璃の如く

淫聲には非らず。三線ありてよりこのかたは。三線を合はする故に鉦鼓を打つよりも。少しうきたつやうなれども。甚しき淫聲には非らず。云はゞ哀みて傷ると云ふ聲なり。淨瑠璃に比ぶれば少しまされる方ならん目くら法師，妓女などのうたふ歌も。寛文延寶の比までは長歌らうさいなど云ふ曲ありて。俗調ながら詞やさしくふしもゆるやかに。いとしをらしきことども多かり。かりそめのそゞろ歌も。小倉吉野など云ふは詞やさしくてよき人の前にてうたひてもきゝにくからず。昔の今樣にも少しにたるべきか。俗中の雅とも云ふべき物なり。三線も是に合はする時は。調子ひくゝ手も間どほにて。聞く者耳にかしましからず。筑紫箏にも近きやうにて。いやしげすくなし。今は目くら法師も昔の曲をば聊しらず。調子高くかしましきことのみを習うて。三線はいつもかくの如くなる物ぞと思へり。うたふ歌も。只さわがしく賤しくかしましきのみにて。昔のやうなるやさしきことは露ばかりもきこえず。我等が一生の中五十年の間に。俗樂さへかくいやしくなり下れるはそもいかなることぞや。淨瑠璃は江戸京難波のみ

、じる。是皆自然なり。人としては聲を出だして湮鬱を宣ぶるわざなくてはあられぬゆゑなり。されば人。は何にても。少し聲を立つるわざををり〳〵なさでかなはぬは天性なり。悦ぶと悲むこと樂むことに付けてそれ〴〵に聲を立つるはやむことをえざるわざなり。賤者の力わざにても。聲を立て、はげむは常の習なり。それを其まゝ捨て置きぬれば。必鄙俗になりもてゆきて。はては淫聲のけしからぬことになるを。古の聖人あらかじめしろしめして。樂と云ふことを作りおきてうたひまひ。絲竹鼓の拍子にて心をなぐさめ。湮鬱とてうもれたる心氣を宣揚發越せしめ給ふ。異國の事は姑く置きて。我國の古に催馬樂と云ふは馬子(マゴ)の馬を逐ふにうたふ歌なるを取りあげて。是を絲竹に合せて朝廷の神事にも御遊にも用ひらる。是我が國のうたひもの、始なりとかや。貫之が土佐の日記にかけるふな人の歌に「春の野にてぞねをばなく。わかすゝきにて。手をきる〳〵つんだる菜を。おやゝまほるらん。しうとめやくふらん。かへらや。よんべのうなゐもがな。せにこはんそらことをして。おぎのりわざをして。錢ももてこず。おのれだにこずと云へるが如き。昔は賤しき者の歌も。詞やさしくきゝにくからず。それより後は朗詠ありて雲の上人の樂なり。又其の後今樣と云ふこと起りて。さかもりなどの興を催しけるに。是もいつとなくとなへ失せて今の世には跡かたもなくなれり。白拍子の歌の詞は。平家物語などに少しのこれり。是も詞やさしくきゝにくからず。琵琶法師の平家物語は。天台の聲明のふしを移して生佛と云ふめくら法師のおのが生れつきの聲にて語りはじめたりといふ。今の世まで傳れり。詞は本より平家物語なれば云ふに及ばず。ふしも昔の習なればきゝにくからず。琵琶を合はすれば。其の聲も淫ならず。玩ぶ人に損なし。鎌倉の時の田樂にはいかなるうたひもの、ありけん。今知れる者無し。夫より下りては猿樂なり。近き世に幸若の舞と云ふもの。室町の末とかや。桃井氏の子孫に比叡の山の兒にて。幸若麿と云ふものまひ始めけると云ひ傳ふ。琵琶法師の物語に似たる處もあり。猿樂のうたひに似たる處もあり。何にもあれ。少しも淫聲なきものなり。舞とはいへど。起ちてまふことはなく。たゞ扇にて手を打

又は世の無情をしらするなど。はかなくかなしきことをうたひまひてたはむるゝを忌はしともおもはず。只笛鼓にてはやしたてゝまひかなづるを目出度ことゝのみ思ひて。いまはしきに心つかざるはおろかなる事なり。湊の撿校と云ひし目くら法師。雅樂をこのみしが。常に此のことを云ひて笑ひあへり。又武家の貴人。猿樂のうたひものをならひて一節をうたふまではせめての事なり。其の所作を學びて猿樂師と打ちまじりて色々のわざをなしてまひかなで。ものするは有るべきことゝもおもはれず。異國にて。後唐の莊宗と云ひし天子。俳優を好みて。みづから其の所作をなして。たのしまれしが。ほどなく天下を失はれしこと五代史に見えたり。俳優は今の世の狂言なり。士君子の恥づべきことなり。昔平相國の白拍子を好まれしも。妓王。妓女。佛など云ふ白拍子を召してまはせしのみなり。宮女などにこれを。習はせたるにあらず。鎌倉の相撲入道が田樂を好みしも。みづから其所作を習ひたるに非らず。今の世にはやんごとなき人も猿樂を好むほどにては。自ら其の所作をなして樂しみとす。昔の人に異なり。風俗の下れる。悲しき世のありさまなり。前代舊事本記と云ふ書は大成經とも云ふ。近き頃世のしれもの有りて。聖德太子の舊事本記の名を竊みて僞作せるなり。近世に出來たれることどもを皆古よりあるさまに書きなせり。其の中に猿樂も神代に猿女と云ふ者より始まり。聖德太子の時三十六番の猿樂あり。白翁黑翁といふものあり。指打の鼓二つあり。兄鼓弟鼓と云ふなど。あらぬことをかきしるせり。大なる誤にて。世を誣ふると云ふこと是なり。かやうの書を見て。猿樂は往古より此の國にあることぞとおもふは大なる惑なり。南都の春日の祭に。いつの比よりか猿樂をなし。內裏にて近き世には猿樂を御覽あるはいかなる故ならん。賤しき東人は得しらぬことなり。世に古を好む人まれなる故に。かやうのことにも心づかず。流俗にしたがひてすぢなきことをもよしと思ひて。其のまゝに打ち過ぐるなるべし

人生れて赤子の時は啼きて聲を出だす。二三歳より聲を上げて呼吸す。四五歳より人をしへざれどもいつとなく歌謠をまなびてかた言なる童謠をとなへの

の前にてもいやしからず。婦女の中にてもあそびても。淫奔をすゝむるまでの害もなし。三線をひきて淨瑠璃をかたるにくらぶれば遙にまされり。俗中にて絃歌のもてあそび。昔は唯これのみなりしと云ふに。今は貴人も是を好まねば。增して賤者は。其のかたはらにゐてもきかんともせず。江戸の內を終日ありきても。箏の音をつひにきかず。只三線の音のみ街にみちてかまびすし。されば目くら法師にも。瞽女にも箏ひくもの。今は百人に一人なり。風俗の衰へて賤しくなる。凡此の類なり

猿樂と云ふことは玄惠法師が書けると云ふ庭訓往來にみえたれば。鎌倉の北條家の時より有りしと見ゆれども。如何なる戲なりしと云ふこと詳ならず。今の世の猿樂は。室町の時より始まれりとかや。竹田の八郎秦嘉勝と云ふ者。此の戲をなしはじめけると云ふ。嘉勝は今の猿樂師の今春太夫が先祖なり。室町の公方鹿苑院殿より。武家にて天下を治め給ふに。古より有り來れる。公家の禮樂を捨て、別に禮樂を作らる。禮は今川左京大夫氏頼。小笠原兵庫助長秀。伊勢武藏守滿忠三人命をうけてこれを議定す。樂は卽猿樂なり。それよりこのかた今の世に至るまで。是を武家の禮樂として敢て改めず。武家の禮皆此の國の俗禮なり。猿樂は俗樂なり。猿樂の音は。怒る聲なり。皷うつ者の。口を張りてさけぶも怒るさまなり。孔子の仰せられし北鄙殺伐の聲と云ふもの是ならん。今の武士こはゞりたる衣服を着て道をゆくに。臂腿を露はし。肩張り臂を掉りて。いかめしくふるまふによくかなへる俗樂なり。但。猿樂には淫聲なき故に。人の心をとらかさず。是のみ他の俗樂に勝れり。然れども猿樂には。死せる者の幽靈あらはれて。僧にあひて吊をうけ。罪業を滅し。佛果を得ることを多く作れり。幽靈にあらざれどもおほかた佛道を宗とする趣なり。故に世のはかなきことをしめして。人に菩提を進むる心なきは少し。是を作れる人多くは佛者なる故なり。武家に猿樂を玩ぶは常の事にて。さもあるべきが。吉事の宴饗にこれを用ふること心得難し。酒をすゝむるに付きて。其の詞の其の事にかなへる一節をうたふは。賓主の情をのぶるわざなれば。中華の古人。詩を賦せしに類すべし。猿樂をなせば。幽靈の現はれて吊をうくるさま。

人の風俗を思ひ出だして。今の世のありさまをみれば衣冠せる人の側にて。赤裸なる人をみるが如し。五十年の間にかくばかり變化あるはいかなることぞや。全く是淫樂のなす所なり。三線。淨瑠璃はもとより淫聲にて。百年このかたの物なれども。貞享の頃まで。三線も今の如く煩手にあらず。淨瑠璃も。皆昔物語にて詞やさしかりしに。其の後此の藝に上手あまた出來て。我おとらじと巧をきそふほどに。さまざまの妙曲を作り出だして人の聽を悅ばしむ。淨瑠璃も。俗に近き鄙俚猥褻なることをかたるほどに。今に至りては詞きはめていやしく。淫聲いやまさりて。少しも心ある人はきくに忍び難くて。耳を掩ふ。是を面白く思ひてたのしむ。淺ましき世の風俗なり。昔なきかやうのこと出できたれるは。誠に國家の大なる病なり。除かずばあるべからず。たとひ遽に禁止せずとも。三線淨瑠璃をば非人の所作に定めて座敷に上らぬ者とせば。士君子は。おのづからこれを翫ばざるべし。これ風俗を正しくする一つの道なり。胡弓と云ふ物は。三線のたぐひなれども。其のわざ殊にいやしげなる故にや。好む人少く。たゞ目くら法師非人の所作にてやみぬれば。風俗を敗るほどの事なし。箏はもと樂器にて。管絃にのみ入りしに。いつの頃よりありけん。一二百年の昔。公家の人筑紫に流されて。配所のつれづれに箏の手をひきかへて煩手にし。雅樂の越天樂の歌を延ばして節を長うして。是に箏を合せてひかれしを。筑後國善導寺の僧。其の曲を習ひ傳へて世に弘めしより。筑紫箏と名付けて世の玩びとなれりとかや。其の後八橋の檢校と云ふ目くら法師。此曲をならひて殊に上手なりしかば。越天樂の歌のふきと云ふも草の名と云ふ歌を本として。色々の歌を誰人にか作らせたくみに名付けて。さまざまの曲折をなしけるより。彌世に行れて貴賤の玩びとなれりときけり。雅樂には手のこまかなること無く。一度に六つの絃をかきならすを。筑紫箏には一つ二つの絃をならし。ひく手こまかに繁き故に。世俗の耳に面白く聞く。本樂器なれども繁手に彈じ。諷聲など云ふことをすれば。雅樂も淫聲を出だす事琴瑟と云へども然なり。越天樂の歌は雅音なるを。のべて筑紫箏の歌となせば淫聲なり。然れども歌の詞猶やさしくて。父子兄弟の中にても聽きにくからず。位ある人

中古より。白拍子。今樣など云ふものありしかども。白拍子は。今の大頭の舞その名殘ならんと思ふ。妓舞なれども。古風猶殘れり。今樣は亡びにたれど一つ二つ殘りて。人のうたふを聞くに。古雅のおもむき。今の世にはたとふべき物なし。此の外に淫樂と云ふべきもの有りしことをきかず。されば俗説に云ふ。三河の國矢作の宿の長者の女。淨瑠璃が。侍婢を集めて。管絃せしは。賤者も外のもてあそび物なかりし故に雅樂を奏して。つれ〴〵をなくさめけるなり。また平重衡とらはれて關東に下りし時。旅寓のつれ〴〵をなぐさめんとて。駿河國手越の妓女千壽を進めしに。重衡琵琶をひかれしかば。千壽箏をひきて。五常樂。皇麞。廻忽などを奏せしと云ふ。上りし世の風俗と云ひながら。いとやさしくたふときことにあらずや。今の世には。諸侯貴人やんごとなき雲の上人も雅樂を。玩びたまふことなく。筑紫箏をだに好み給はず。たゞ三線淨瑠璃を玩び給ひ。賤しき妓女を宮中へ召して歌舞をなさしむるのみならず。あまたの女優を畜ひおきて。夜となく晝となくあらぬ戯をなさしめて。これを樂しみ給ふたぐひを多く聞けり。淺ましとも云ふばかりなし。樂記に鄭聲をはなてりとあり。鄭衛の音は亂世の音なり。桑間濮上の音は亡國の音なりと云へるは。淫樂に世をみだり。國を亡ぼす道理あることを云へるなり。今の世の妓樂。三線。淨瑠璃は。古の鄭衛桑間濮上の淫聲にも過ぎなんとぞ思ふ。昔かやうの俗樂なかりし故に。矢作の宿の長者の女。手越の遊女までも雅樂を習ひしれり。今は色々の俗樂ある故に。やんごとなき人々もこれを好みて雅樂を習ふことなし。雅樂は俗に遠く。淫樂は俗に近きゆゑなり。孝經に。風を移し俗をかふるは。樂よりよきはなしと云へり。惡しき風俗をうつしかへて善くするは雅樂の功なり。善き風俗をうつしかへて惡くするは淫樂の力なり。雅樂にて風俗を善くするは其の効おそく。淫樂にて風俗をあしくするは其の効早し。されば。たとひ雅樂世に行はれても。淫樂を禁ぜざれば。雅樂すたれやすし。孔子の鄭聲を放てとの給ひしは此の故なり。今の世には。雅樂たえてなくして淫樂のみ盛なる故に。士民の風俗。年をおひてあしくなり下ること。走る馬のけはしき坂を下るが如し。貞享より元祿の初までの。

璃を唱へしより。江戸の人。是を面白きことゝ思ひて興じけるに。享保の初に。また難波の淨瑠璃師來りて。かなたなる俗調を弘めしほどに。江戸の人いよく〱是を好みて。江戸の舊き淨瑠璃を捨てゝ。ひたすらに。京難波の淨瑠璃を習ふ。賤者のみに非らず。士大夫諸侯迄も是を好みて一節を學ぶ人あり。是に至りて。昔物語を捨てゝ。たゞ今の世の賤者の淫奔せし事を語る。其の詞の鄙俚猥褻なること云ふばかりなし。士太夫の聞くべきことにあらざるは云ふに及ばず。親子兄弟なみ居たる所にては。面をそむけて耳をおほふべき事なり。されば。此の淨瑠璃盛に行はれてよりこの方。江戸の男女淫奔すること數を知らず。元文の年に及びては。士太夫の族は云ふに及ばず。貴き官人の中にも。人の女に通じ。或は妻をぬすまれ。親族の中にて姦通するたぐひ。いくらと云ふ數を知らず。是まさしく淫樂の禍なり。三線も。寛文延寶の頃までは調子ひくゝ。ひく手もまばらにて。筑紫箏に類せり。うたふ歌も。詞やさしくふしもゆるやかにて。俗調と云ひながら。いやしげすくなかりき。近頃は調子高く。ひく手も甚せはしくこまかになり。うたふうたも。詞いやしく拍子つゞまりて。いそがはしさ云ふばかりなし。婬聲の至極人の心をやぶること是に過ぐるものなし。凡雅樂は。拍子まどうにて。絲竹ともに手を使ふことまばらなり。雅樂とは正樂を云ふ。淫樂は。煩手とて手を繁くす。今の三線。牧笛。尺八。一節斷。皆煩手なり。中にも三線の煩手。たとふべき物なし。箏は雅樂の器なるが。筑紫箏になりて。俗樂に落ちぬれども。其の聲もと雅音なる故に。いたく人心をとらかさず。今人雅樂を學ぶこと能はずとも。せめて筑紫箏を玩ばゞ、猶少しよかるべし。牧笛。尺八。一節斷は俗樂にて煩手なれども。三線の如くの淫聲にあらず。凡俗樂のあらゆる樂器の中に。三線程の淫聲なし。古の鄭聲は。如何なる聲にて有りけん。孔子の鄭聲を放てとのたまひしは。雅樂を妨げ風俗をやぶる故なり。世に。雅樂有りても。鄭衞の淫聲を禁せざれば雅樂は行はれ難し。今の世には雅樂絕えてなくして。淫樂のみ盛に行はるれば。風俗の衰敗すること甚速なり。我が國の古を考ふるに。朝廷より民間に至るまで。雅樂のみにて淫樂なかりしとみゆ。

難し。さしよりて其の人に問ひなじれば俳諧は古今集にみえて。和歌の一體なる由を口に藉き。唐の大和の故きことを引きて其の道をたふとくす。然れども其の句を書き付けたるをみれば。何やらんえも云はぬことをえも知れぬ文字にてしるして。ものしれる趣なり。凡俳諧の草紙きはめて。すぢなきものなり。俳諧師と云ふもの極めて賤しきものにて。諸侯貴人の翫びものになる故に。やんごとなき人々に狎れ近づきて。さま〴〵のよからぬことをすゝめまゐらする類世に多し。士君子の友とすべき者に非らず。心あらん人はきびしく禁ずべきことなり。近きころは諸侯貴人も多くこれを好むことになれり。よからぬ風俗なり。いまだ俳諧を好む人によき人をきかず今の世に淫樂多き中に。絲竹の屬は三線。うたふ物のたぐひには淨瑠璃に過ぐる淫聲なし。三線は琉球國の樂器なるを。慶長のころとやらん。此の國に傳へしと云ふ。昔晋阮咸が造りし樂器を阮咸と云ふ。此の國に傳へて昔は翫びけるにや。延喜式に載せたり。今の三線は。阮咸の遺制なりと云ふはいかゞあらん。阮咸はいかなる制にてか有りけん。今の三線は甚しき淫聲なり。其の作り。琵琶に似たるやうにて。琵琶に比ぶれば形甚いやしく。是を彈ずるさまも。極めてみぐるし。此の聲纔に發すれば。俄に人の淫心を引起して。放僻邪侈に至らしむ。其の害云ふばかりなし。士君子の假にも聞くべき物に非ず。

淨瑠璃と云ふ物。三線と同じ頃に始まれりと聞ゆ。小野氏の女。三河國矢作の宿の長者の娘淨瑠璃と云ひし者のことを。十二段の昔物語に作りしを。其の頃の目くら法師これにふしを付けて語り出だし、とかや。後の人是にならひて。色々の昔物語を彼の體に造りて玩ぶ。もと淨瑠璃がことを演ぜしより始まれり。故に都べて其の名を淨瑠璃と云ふ。三線の聲よく是に叶ふ故に。淨瑠璃に必三線をあはせて。世俗の上なき玩びとなれり。然るに寛文延寶の比迄の淨瑠璃は。皆昔物語を演ぜし故に。詞やさしく綴りなして。あはれにをかしきことも多かり。淫聲と云ひながら。忠臣孝子義士節婦のことを云へれば。愚なる小人女子も是を聞きて感じあへり。元祿の比より。稍ます〳〵俗に近くなりて。淫靡の聲多し。寶永の頃。京の淨瑠璃師。江戸に來りて鄙俚猥褻なる淨瑠

わらは。げすまでも俳諧と云ふことを知りて。笠附して褒美とらんとするほどに。詞いよ〳〵いやしくなれり。寳永の頃より。冠の五文字を三つ出だして。三つの冠に。各七文字五文字を附けさせて勝負を分くることあり。是を三笠附と云ふ。是いよ〳〵博奕に近し。其の後五文字の冠をも出ださず。下の七文字を五文字の詞をもやめて。たゝ數の文字に對して外より此の數をはかりて札をいれて。其數のあたれるを勝として金銀をとらすることになりぬ。こゝに至りては。正しく博奕なれども。本の名を存して。猶三笠附といふ。この三笠附盛になりて。賤しき者は云ふに及ばず。士君子もこれをなして。とくつかんとするほどに。徳はつかずしておほくの財を費し。身を失ひ家を亡す者數をしらず。此の事上にきこえて。享保の初よりきびしく三笠附を禁ぜらる。其の後。禁を犯して刑罰にあふ者あれども。今に至るまで猶たえずと聞ゆ。和歌の流。其末變じて博奕となるべしとは。住吉。玉津島の神も。いかでかしろしめさん。淺ましく悲しきは。俳諧のわざはひならずや。凡。昔より戲によみたる歌。又時の人を嘲り笑ひたる狂歌のたぐひ。古き物語草紙に記しおきたるは。みな俳諧なり。然れども。古き狂歌は詞いやしからず。きたなきことを云はず。父子兄弟の中にても唱ふるに。聊もさはることなし。近き世に。江戸の醫師卜養と云ひし者。狂歌にたくみなりしも。世の諺のなれたることゞもを戲に云ひかなへて。をかしきこと多きのみにて。詞いやしからず。やさしきすがたなれば其の品下らず。猶。俳諧歌のたぐひなるべきか。此頃の俳諧と云ふ物にはまさるべし。寳永五年の春。京都火災にて内裏炎上し。公卿殿上人の第宅。のこりすくなく焼けうせたりしに。清水谷の大納言實業卿。風早の參議公長卿も火にあひて。此彼にげまどひ給ひけるが。二人道にて行きあはれしに。實業卿「風早と聞くもおそろしけふの火や」との給ひければ。公長卿とりあへず「清水谷とてやけものこらず」と答へ給ひしとかや。これらをこそ眞の俳諧と云ふべけれ。和歌の道衰へたれども。公家の人々には。猶かやうのやさしき戲あり。此のころの俳諧と云ふものは。さのみわらひ興ずるほどのをかしきことを云はず。連歌の詞に似て連歌にも非ず。意趣いかにとも知り

「弓はり月の入るにまかせてと申されしなど。是連歌なり。此のことと上代よりありしかども連歌とは云はず。後の世に至りて。上の句下の句をいくらも連ねて長く云ひ述ぶることになりて。連歌と云ふ名出來れり。中華に聯句と云ふことありて。五言の句を一人二句つゝ作り。人あまたにて數十百句も連ぬるなり。此の國の連歌は。彼の聯句に倣へる物とみゆ。連歌は和歌の類なる故に。歌人も是をきらはず。後に及びて連歌師と云ふ者出來て。さま〴〵の式法を立てゝ。遂に世の翫となれり。近き世に及びて。又別に俳諧と云ふこと出來て賤しきたはれ事をつゞりて。連歌の如く長く連ねて翫とするは俳諧の連歌なりその初。連歌師の輩。連歌の句にたはむれごとの連歌には云ひ難きほどのことども。一句二句つらねてわらひ興じたるを。其の後。俳諧師と云ふ者出來て是を専にすることになれり。貞德。宗因。芭蕉翁など云ふ者是なり。されど貞德等が時の俳諧は。戯ごとをゝかしく云ひなして。うち聞くもの殘らずこらへず笑ひ興ずるのみなり。芭蕉翁までは。猶其の體なりき。其れより下りては。ひたすらをかしきことを云はんとて。下部の者までもうち聞きて悦ぶやうなることを云ふ故に。極めて賤しきことをきらはず。親子兄弟の中にて云ひがたく。聞きにくきことをも云ひ出す。俳諧の中にても。至りて下れる品なり。然れども五十年の前は。たゞ歌仙とて三十六句を連ね。或は五十韻百韻とて連歌の如く連ねて。宗匠の點を乞ひて優劣を爭ひあへるのみなりしに。元祿の初の頃より前句附けと云ふこと起れり。其の法宗匠より下の句を一句出だして。多くの人に上の句を附けさせて。點に第一第二の品を命じて。甲乙の次第に從ひて賞を行ふ。其の賞は。或は布帛或は器物など。そこばくの直なる物を出だす。布帛器物に望なきものは。其の直なる金銀をとる。此の賞をえんとて。貴賤となく我も〳〵と句を附けて。日々に點錢を費す。是則博奕の類なり。この事盛に行はれて。世の俗人。皆是を好むほどに。下の句に上の句を付くるも猶むづかしとて。宗匠より。上の句初の五文字を出だして。次の七文字五文字を諸人につけさすることになれり。是を冠附とも笠附とも云ふ。かくいやしきわざになりぬれば。下部の

させることも無き人の作れる竹の筒。竹の篦などを。百金にも買ひて。世に珍らしき物と思ふは。大なる惑なり。近世に。茶の道を弘めし人は。利休宗旦等が外には。片桐石見守貞昌。小堀遠江守政一なり。此の人々は　貴賤異なれども。皆聖賢に非らず。常の人なるに。今の茶人。必此の人々のしわざを學びて。是は利休が法。是は遠州の法。是は石州の法とて。禮法を守る如く。一向に堅く守りて少しもたがはじとす。かたはらいたきことなり。今にてもあれ。世に勢ある人。茶を玩び。先輩にかはりて新きわざをし出ださんに。くみする人數多ありて。是彼にて其のしわざを學びてせば。やがて一流となるべし。是。茶の道に一定の法無き故なり。我も平生茶をたしむ故に。人の許にて美膳などくひたる後に。上品の抹茶を濃く點して出だされば。口にかなひて甚快し。但。それも廣き座敷にて。食ひものを心にまかせてくひ。酒も人にくませてのみ。點心もよく食ひて。茶をも新しき茶碗にて。つかふるもの、點じたるを。人々別なる茶碗にてのむはよし。今の茶の道は。きはめていとはしきわざなり。茶を貯ふるは。此方の磁器にもさるべきものあり。さもなくば。棗の形なる漆器よし。銀器錫器もよし。茶を抄ふには銀の茶匙を用ふべし。茶碗はいかにも新しきを用ふる。潔く快し

俳諧は和歌の一體なり。古今集に見えたり。史記の滑稽傳の注に。姚察が説を載せて滑稽は俳諧の如しと云へり。俳諧はたはむれごとを云ひて人を悦ばせ。人の心にかなふを云ふなり。古今集には。俳諧の俳の字を誹に作れり。誹の字は謗の字と連ねて。誹謗はそしる義なるを。俳の字にかへて用ふること如何なる故と云ふことを知らず。誹の字と俳の字と。音も義も大に異なるを。通はし用ふる事字書にみえず。恐くは。古今集の集誤ならん。古今集に載せたる誹諧の歌は。たゞ常の歌の如くにて。詞少し常にかはれるのみなり。かりそめに見れば。たゞ常の歌とみゆ。委く學ばされば。俳諧の姿を知ること難し。連歌と云ふこと。中古より始りて末の世に盛なり。其本は三十一字の歌を二つに分けて。二人してとなふるなり。たとへば。近衞院の御前にて宇治の左大臣「郭公名をも雲井にあぐるかなとのたまひしに。賴政

茶の具に至るまで。必堅緻にて。美麗なることを好み給へり。今の世の茶人の如くに非ず。東山殿の調度とて。今に傳はれるを見るべし。近き世の茶人は。利休居士を祖師とす。利休は。獨身の禪門にて。貧賤なるが。草の庵のせまき内にて。茶を樂めるを。當時の諸侯。富貴の樂にあきて。利休が貧賤寒酸の樂をしたひ。大厦高堂をさけて。一間なる所をしつらひ。其内にて。手づから茶を點じて人に飮ませて樂めるなり。もと獨身の禪門の貧くやつ〳〵しき者の樂をまなびたる故に。一間の作より始めて。諸の器に至る迄。皆あら〳〵しき物を用ふ。食物も美膳をきらひて。淡泊なる物を好む。凡。茶人のなすわざ。こと〴〵く貧賤なるものゝまなびなり。されども富貴なる人は。貧賤なる者をまなびて。樂とするもいはれあり。元より貧賤なる者。何ぞ更に貧賤のわざを學びて樂むことあらん。今の世に富貴なる人。己が好む心より。貧賤なる者を。茶に請ずるは。心得ぬことなり。凡。萬の器の中に。舊くて善き物は樂器なり。昔の上手のつくりて。多の年を歴たるは。必。妙なる聲出でゝ。あやしきこともある故に。樂器は。少しも舊きを寶とす。樂器の外は。大方。何の器も舊きは。新しきにしくことなし。中につきて。飮食の器は。いかにも新を悦ぶこと。誰も同じ心なり。茶具の中にて。釜ばかりこそ舊を用ふべけれ。茶碗はいかにも新を用ふべき物なるに。幾年を經たりとも知れず。何人の口の垢やらん染みてけがれたる。しかもか。け損じたるを。つくろひてけがらはしとも思はず用ふるは。そもいかなる心ぞや。昔。夜光の璧と云ひし玉は。夜車十二乘を照しける故に。世に稀なる寶とて。十五の城にかへけり。明月の珠と云ふは。夜をてらすこと。明月の如くなりしとかや。かやうのすぐれたる德あるものをば。寶としておほくのあたひにかへたるは。さもあるべきことなり。古書。古墨蹟などを寶とするも。其書畫のたくみの。世に勝れたる處を玩び。且は今の人の其わざを學ぶ者の。法則となるをたふとむ故に。力ある人は。金錢をゝしまず。其替を出たして。是を求む。うつけたることに非らず。今の世の茶をもてあそぶ人は。何の珍しきこともなく。すぐれたる德もなき。常の磁器を。千金萬金に買ひ取りて。上もなき寶と思ひ。

子の骨迄も。風にたへぬばかりにほそくす。或はまろくゆがみたる柱を皮ながら用ひなどして。ものずきをかしとて興ず。物食ふ折敷も。足の高きを嫌ひて。平をしきを用ふ。すべて。茶人の物ずきと云ふは。萬。何事も貧くやつ〳〵しきさまを學びたる物なり。茶の道の起を尋ぬるに。漢土にては。南北朝の比より茶を飮むこと始まれりと云ふ。唐の代に至りて。世に盛に行はる。盧仝陸羽はなはだ是を好めり。盧仝。は茶の歌を作り。陸羽は。茶經をあらはせり。其時の茶は。熱湯に瀹し。或は煎ず。或は細末となすを抹茶と云ふ。熱湯に點じて飮む。是れ今の茶人の用ふる茶なり。或は細末の茶を丸となすを。團茶と云ふ。是も熱湯に點じて飮む。點茶には。茶筅を用ふること。今の人のするわざの如し。陸羽等が茶を煎じ。或は瀹すには。水を撰ぶこと甚し。詳なることは。茶經に見えたり。陸羽等が茶をもてあそびしありさまは。今の世の茶人に似たり。陸羽が同時に。常伯熊と云ふ人も。茶を嗜みて。茶の道にくはしかりけり。李季卿と云ふ人。丞相李適之が子にて。その身も。御史太夫の官なりしが。天子の使をうけ給はりて。江南の方に往き。臨懷縣と云ふ處にて。旅館に着せしに。或人。常伯熊が茶の道に達せることを云ひしかば。やがて。伯熊を旅館に請じて。茶を行はせけり。其時伯熊黃なる衣に。黃黑き紗の帽子を着。手に茶器を持ち。口に茶の名を唱へ。懇に用意して。法の如く茶を煎ず。側にて見るもの。目を拭ひて。奇異の思をなせり。茶にへければ。季卿二盃す、りてやみぬ。夫れより江外と云ふ所に至りて又。陸羽を請じて。茶を行はせけるに。陸羽野服をきて。茶具を先に立て、往きける。其の作法悉く。伯熊に全じ。季卿茶をば飮みけれども。此人どものしわざをみて。賤しきこと、思ひければ。從者に命じて。錢三十文を陸羽にあたへしむ。陸羽大にはぢくやみて。是より茶を翫ぶ事を止めて。毀茶論を著しけりとかや。我國にては。鎌倉の時。五山の禪僧。異國より茶を持ちきたりて弘めしが。世の人さのみ。もてはやすこともなかりしに。室町の公方。義政。是を好み給ひ。朝暮に是を翫び。東山の慈照院の銀閣にて。茶の會しば〳〵なり。しかれども。義政は天性。奢侈を好み給ひし故に。茶を玩ばる、にも。茶堂より

歌の妙なり。天地を動かし。鬼神を感せしむること。此境にあり。今の歌はしからず

近き世に。人のもてあそぶ茶の道こそ。いと心得ぬことなれ。器は。古きをもとむるにあらず。只。新らしきをすと。尚書に云へるに。今の茶人は。幾年を經たりともしれぬ。舊き茶碗の汚穢不淨にして。しかもかけ損じたるを。うるしなどにて。繕ひて用ふ。けがらはしさ云ふばかりなし。朝鮮國の人の。常に用ふる唾壺の舊きを求めて。抹茶を貯へて。是を茶入と云ふ。是もけがらはしき竹篦を撓めて匙として。茶を抄ふ。是を茶抄と云ふ。人に茶を飲ますするには先つかこひとて。一間なる狹き所に集りて。食ひ物も人によそはすることなく。手らもりくひ。酒も自らくみ飲みて。其器をも。手ら洗ひ拭ひて撤す。點心くひて。後に出て、口そゝきて入る。主(アルジ)自ら茶を點じ。客人に奉れば。一の茶碗に點じたる茶を上座の人。少し飲みて。次の人に傳ふ。三人にても。五人にても。次第に飲みて。末座の人殘りなく飲みて其茶碗を上座に授く上座の人取りて。子細に見て。珍器なることを譽めて。又。次座の人に傳ふ。、次座の人も。子細に見て。次第に傳へて。末座に至る。末座の人見をはりて。主にかへし。客人一同に謝詞をいだして頓首す。次に茶碗の袋をこひ見。次に茶入を見。次に茶入の袋を見。次に茶抄をみる。見るべきほどの珍器にあらざれども。請ひてみるを禮とす。爐に炭をおくも子細ありと云へば。主の炭をおくをば。客入さしよりて見て。是をほむ。瓶に花をさせばほむ。大方。何事も主のすることを見て譽めずと云ふことなし。諂の至と云ふべし。かこひのつくりは。傳へ聞く。維摩居士が。方丈の室よりも。今少しせばくして。小き窓をあけたるのみなれば。白晝にもくらく。夏は甚あつし。客人の出入る口は。狗竇の如くにて。くゞりはらばひしていれば。息こもりて。冬もたへがたし。飲み食ふ物も。人の口に好み惡む物あるに。主のいかに心づかひせりとも。口にかなはぬ物を。必。のこさずくはんとするもくるし。させることもなき器を珍らしげに譽むるも。そら恥かし。又。物ずきとて。家作より。諸の調度に至るまで。常にかはりて。珍らしくやさしきことをばすれども。茶人の家居は。必。杜なども細く。障

すつることはあるまじきなり。陽春雪白の曲は。和する者少し。知音の士にあらざれば。これを賞することなし。今の人は。只。下里巴人の曲をうたひて。和する者のおほきをほまれとする故なり。我先師徂來先生云はく。異國と我國と。風俗大に異なる中に。唯。詩と歌との道ばかり。詞の異なるのみにて。其趣全く同じ。人情同じき故なり。又云。和歌は。人丸。赤人の外。在原の業平を上手と云ふべし。伊勢物語にのせたる歌。絶妙なる多し。「月やあらぬの歌。を見るに。何等の感慨ぞや。「つひにゆくの歌は。古今の辭世の絶唱なり。惟高の皇子をとふらひまゐらせて。「わすれては夢かとぞ思ふとよまれしは。歌のすぐれたるのみに非ず。節義の心詞の外にあふるゝかとぞ云はれし。毛詩に。蕭々馬鳴。悠々旆旌と云ふは。軍中の靜なる狀に云へり。馬の嘶くをきゝ旌の風にひらめくを見るのみにて。他は云ふべき事なき處を。此の兩句にて云ひ盡せり。楚辭に。嫋々兮秋風洞庭波兮木葉下と云へるは秋風そよ〳〵と吹く時。洞庭湖に波たち湖邊の木葉。はら〳〵と落つると云へるのみにて。外にめつらしきこともむづかしきこともなし。然れども。此兩句を吟味すれば。洞庭の秋の氣色。今も目前にあらはるゝやうに思はる。又。王孫遊兮不歸。春草生兮萋々と云へるは。人をなつかしむ心限なき感慨なり。此等は。皆。詩の佳境にて。和歌も亦此意なり。古の好き歌と云ふは。一度聞けば。則耳にとまりて忘れず。其意も人の解說をまたずして知らる。かりそめに吟ずる時は。さのみをかしきことなきやうに。諷詠玩味すれば。限なき興致あり。いまの人の歌は。詞むつかしくて。再三聞きても。耳を過ぐれば則わする。人の解說を聞きても。其意通じがたし。歌の好惡。是にても知るべし。古人の詩は。必。實境に對し。事實ありて。實興より出つる故に。其意皆實なり後世の詩は。題を設けて作る故に。其意多く虛僞なり。是を無病呻吟と云ふ。呻吟はをめくなり。和歌も古の人は。皆。實意にてよめり。後世は。題を設けてよむ故に。多くは。虛僞の詞なり。「しら〴〵しゝらけたる夜の月のかげに。雪ふみわけて梅の花をると云ふ歌こそ。いと面白けれ。實境に對してよめる歌は。皆此の如く。纔にとなへ出だせば。則其時のこと想像せらる。和

玩味諷詠し。古歌に引きくらべて。其の似たると似ざるとの處を思量せば。何ぞよしあしのみえわかざる事あらん。此の如くにして。歌數多くよまば。其の中に一首二首。古人におとらぬ歌などか無からん。身の一生にすぐれたる歌。一二首ありて。人にも稱せられなば不朽に足りぬべし。喜撰法師が。我が庵はの歌にて。名を千載に遺したるを見るべし。さりながら。當時の人にしられん事を求めず。よみたるほどの歌を書き記して。知りたる人ひとりふたりも遺しおきたらんに。當時はとりはやす人なくとも。百年の後に。貫之。躬恒なる人あらば。必とりあくべきなり。凡。人の德行も。才藝も。當時には知る人なくて。身の後に。世上の論定まりて。信ずる人も。譽むる人もある者なり。然るを己が一生の內に知られんとする故に。きたなき心起りて。大事をあやまる。これ。其の志の高からぬなり。昔。虞仲翔は。天下一二人。我を知る人あらば。恨みざるに足れりと云ひ。老子は。我を知る者まれなれば。我たふとしと云へり。此の位にたてらば。ほまれを當時に求むる心やみぬべし。和歌の道のみにかぎらず。萬の事。皆これに同じ。われ詩の道を以て推して。歌の道を知れること此の如し。詩は。異國の詞なり。歌は我が國の詞なり。詩にくらぶれば。甚やすきことなり。學びやうのあしきと。志を立つることの高からぬとにて。古のしづ山がつにも及ばぬは。いと口惜しきことならずや。吾が友服部子遷は。和歌の道を知りて後に詩を學び。詩の道を悟り。遂に上手の名を得たり。されば。今公家の人々に。我が輩の云ふ詩の道をとき聞かせたく思ふなり。此の道を聞きて。悟を開き。我輩の詩を學ぶ如くに。和歌を學び給はゞ。必。古人に及ぶべし。さもあらば。多の人の中に。傑出の人。なとが出來ざらん。今公家の人々。和歌の道を古にかへすべき事を思はずして。五百年來。定家卿の敎を守りて。道の衰へ往くことを知らず。至りてなげかはしきことなり。今の士庶人。我此說を信受して。詩を學ぶ道を以て。和歌を學び。一己の精力にて。歌道を悟り。上代の歌に似るばかりの歌を讀みおきたらんに。身の後に知音ありて。必。取りあぐべし。其時。此の歌は。師範なく。公家の人に學ばず。自力にて讀みたりとして。卑しめ

氣運の然らしむる所か。悲しきことなり。凡。我が國の歌は。定家卿より衰へたりと思ふ。爲家卿は又定家卿よりもおとられたるよし。然るを。其の後の人。京極家の敎を尊信して。今の世迄も。堅く守り。金科玉條と心得るは。口惜しきこと。歌道の一大厄と云ふべし。今の人歌をよむほどにては。必。公家の中の名家なる人を師として學ぶ。是大なる誤なり。古より總じて。位高き人に。物の上手はなきものにて。上手はいつも賤しき者に出來るなり。歌の道にても。人丸。赤人は貴人に非ず。古今集を撰びたる人々も。友則一人大内記にて。五位の官人なり。貫之は。又其の下とみゆ。躬恒は甲斐の目。忠岑は右衞門の府生なれば。皆。地下の賤しき者どもなり。此の輩皆歌道に達せし故に。撰集の勅を受けたり。歌の盛なりし時だに。高位の人には。達者稀なり。況や。今の世。歌道衰微の時に。公家の高位の人に。何として上手あるべき。我に眼なきが故に。公家の名家にて。歌所と定められたる人をば。必。上手ぞとおもひて。其の添削批判を受くるは。淺敷事なり。然れども。名利は悲しき物にて。ほまれを得て當時にうらんとおもふより公家の名家の稱美を。世にほこらんと計るなり。愚思ふに。歌道は。師に付きて。學ぶには及ぶまじ。但。和歌の書は。傳授なくては讀みがたき物なれば。其の事心得たる人に從ひて。書をばよみ習ふべし。既に書を讀み習ひたる上は。萬葉集より三代集迄をくりかへし。千遍讀みなば。大方諳んずべし詞をそらんじて。朝夕諷詠すれば。自然に風調をも悟るなり。其の間に古人諸家の歌學の書をよまば法をも知るべし。其の上にては。花を見。月に對し。人情興感の事ある時は。自然に三十一字をつらね出だすべし。是。眞の和歌にて。上代の人の歌は。皆。此の境に至りてよみ出だしたるものなり。上代の人は。自然の風俗にて。歌をよむ故に。師に學びたる人はなし。されば。賤夫賤女も。皆能く歌をよむ。後世は風俗うつりかはり。人の詞も古に及ばぬ故に。今の人は必三代集より。上つかたの歌を。數千首そらんじたる上にも。好き歌をばよみうかべて。さて讀みたる歌も。必。人にみすべしとにもあらず。まして公家の人々に見せて。稱美を得て。名譽を求むべきにあらず。我が心にて。幾度も

も。人の詞は時世につれて。かはる故に。詩も歌も時世に從ひて。風體かはるなり。されば詩も歌も世のすゑになりて。昔におとるは。風體のかはりにて。風體のかはるはその詞のかはるなり。此の理を覺悟して。能く古にさかのぼりて。古の風體を考へ。古の詞を取り用ふれば。今の人にても。古の人に異ならぬやうになるなり。詩の道此の如し。此の理を以ておしはかれば。和歌の道も亦かくの如くなるべし。我和歌を學ばねども。詩の道を以て考ふるに。今の世に居て。古におとらぬ歌をよみ出だすべきことは。さのみ難にあらず。詩をみる眼にて。歌をみれば。歌の位も姿も明に見えわくなり。萬葉集の歌は。風雅より漢魏の古詩迄を兼ねて。稍。盛唐の詩をはらめるものなり。古今集の歌は。正しく盛唐の詩なり。後撰拾遺の二集は。盛唐に初唐の詩をまじへたるものなり。後拾遺より新古今までは。中唐晩唐の詩に。宋の詩をまじへたるものなり。新勅撰より下つ方は。云ふに足らず。和漢の時代を考ふるに。我が國元正。聖武。孝謙の御宇。正しく唐の玄宗の開元天寶の時にあたるに。其比阿部の仲麿。吉備公の如き人。入唐して盛唐の禮樂文章を學びてかへり。我が國に弘めし故に。我が國の歌も。自然に唐詩の風體に似たり。仲麿が明州にて。讀みたりと云ふ。あをうなばらの歌は。盛唐の詩の佳境にて。李太白が峨眉山月の詩と同格なるべし。定家卿あまのはらと改められしは口惜し。桓武。平城。嵯峨の時に及びて。唐の大暦以後。中唐の世にあたりて。唐詩は。格調少し下りぬれども。我國の歌は。猶さかりなり。白樂天が詩は。唐詩の極惡道なるを。白氏文集我が國に行はれて。菅相丞甚これを好み給ひけるとかや。夫より公家の人々。皆。樂天が詩を面白き事と思ひて。其の風調を和歌に移されしほどに。其の後の歌は。三代集の體を失へり。又源平の亂の時。異國は。宋の代にて。程氏朱氏の道學興り。詩の道衰ふ。我が國にも。俊成。定家の歌道おこなはれて。萬葉集。古今集の風體衰へたり。俊成卿。天台の佛法を學びて。一心三觀の理を歌道の極意とせられたり。其の子定家も亦其の家訓を受けられし故にや。よみ出ださる、歌。皆。理屈にてくだ／＼しきこと多かり。異國も。我が國も同時に。詩歌の道衰へたるは。誠に

獨語

太宰春臺著

云ひたきことを云はぬは。腹脹る、わざなりと。昔の人の云へりしは誠なり。さればとて。思ふと云ふべき人にあはねば得云はず。云はねば。今も腹脹るめれば。只そらむきて獨ごちて。腹をすかすより外のことなし。世に和歌を好む人多けれども。和歌の道を知れる人こそなけれ。三十一字を連ぬる人は多けれども。萬葉集。古今集に入るべき程の歌をよみ出だす人を。未きかず。我が父母共に和歌を好みし故に。八九歳の比より。三十一字をつらぬる術を知り。十歳ばかりより。十二三迄にこしをれの歌。凡三四百首もよみたり。師もなく。友もなければ。歌よみたればとて。人にみすることもなく。書き付けて藏しおきたるのみなり。其の時の心に。歌はよみうべきものとのみおもへり。十四五歳の時。始めて詩と云ふ物を學びて。稍七言絶句などを綴るすべをしれり。其時。愚心ひそかに思惟せしは。和歌を學びて。縦ひ上手になりたりとも。公家の人々を超ゆることなるまじければ。いつも公家の下にかゞみなんも口をし。詩は。公家の政をうくまじければ。上手にだになりなば。公家をも弟子にすべし。此道におきては。天下におそるゝ所あるまじ。いざ歌よむことをやめて。詩作ることを習はゞやと思ひ定めて。書き付けおきたる和歌の反故を悉く焚きすてゝ。一首ものこしとゞめず。夫より詩を好みて。ひたすらに學習し。二十年を經て。漸く詩の道を明めたり。天性不才なる故に。上手には得ならねども。詩の道を覺悟したることは。誰にもまけまじとぞ思ふ。此の道を以て考ふれば。和歌の道も明に知らる。凡。唐土と我が國と風俗同じからずと云へども。詩と歌との道ばかりは。其の道理全く同じ。其の子細は。異國もわが國も。古も今も。人情は異ならざるに。詩も歌も。心の聲にて。性情を吟詠することなれば。唐と大和と。詞のかはるのみにて。性情を吟詠することは。少しもかはることなし。詩と歌と。其のおもむきの同じきは。此の故なり。然るに。異國も我國

以上

百家説林正編上卷

目録

百家說林

正編上

百家說林

正編上